

栃木県埋蔵文化財調査報告第 360 集

東谷・中島地区遺跡群 14

—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

権現山遺跡南部・磯岡遺跡

(SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区) (SG9 区)

(第 1 分冊)

2013. 3

栃木県教育委員会
財)とちぎ未来づくり財団

とう や なかじま
東谷・中島地区遺跡群 14

—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

ごんげんやま いそおか
権現山遺跡南部・磯岡遺跡

(SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区) (SG9 区)

(第1分冊)

2013. 3

栃木県教育委員会
(財)とちぎ未来づくり財団

序

東谷・中島地区遺跡群は、栃木県の中央部、宇都宮市南部から上三川町北部に位置しています。この地域は、なだらかに広がる低台地と肥沃な沖積地に恵まれているため、杉村遺跡・立野遺跡・西刑部西原遺跡・砂田遺跡などの原始・古代の集落跡と、東谷古墳群・中島笹塚古墳群・磯岡北古墳群・琴平塚古墳群をはじめとする多くの古墳群が所在します。

このたび、独立行政法人都市再生機構による土地地区画整理事業に先立ち、事業地区内に所在する12遺跡の取り扱いについて、関係機関と協議の上、平成6年度から記録保存を目的とした発掘調査を行ってきました。

このうち、権現山遺跡及び磯岡遺跡の発掘調査では、古墳時代の集落跡や権力者の居館跡が発見され、遺跡周辺に所在する古墳築造の背景を考える上で貴重な発見となりました。さらに、集落跡や居館跡などから見つかった特殊な須恵器、陶質土器や鍛冶遺構は貴重な出土例といえるものです。

本報告書は、権現山遺跡及び磯岡遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。本書が、県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助となるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただきました。独立行政法人都市再生機構、宇都宮市教育委員会、上三川町教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成25年3月

栃木県教育委員会

教育長 古澤 利通

総目次

(第1分冊)

序

目次・検索表・例言

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

第2節 調査の方法

第3節 調査の経過

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

第2節 歴史的環境

第3章 調査区の配置と標準土層

第1節 磯岡遺跡における調査区の配置と概要

第3節 権現山遺跡・磯岡遺跡と周辺の土層

第2節 権現山遺跡における調査区の配置と概要

第4章 権現山遺跡各調査区の縄文時代遺物

第1節 縄文時代遺構外出土遺物の追加報告

第2節 東谷・中島地区遺跡群発掘調査に係る石器石材鑑定
- 権現山遺跡 -

第5章 権現山遺跡 SG10 区

第1節 縄文時代の竪穴建物跡

第12節 古墳時代の低地遺物包含層

第21節 中世の上坑

第2節 縄文時代の上坑

第13節 古墳時代の柱穴状上坑

第22節 遺構外出土の中世遺物

第3節 弥生時代の上坑

第14節 古墳時代の遺構外遺物

第23節 中世～近世の溝状遺構

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

第15節 平安時代の竪穴建物跡

第24節 近世の溝状遺構

第5節 古墳時代の竪穴掘治遺構

第16節 平安時代の上坑

第25節 近世の上坑

第6節 古墳時代の鉄屑遺物

第17節 古代の道路跡

第26節 時期不明の掘立柱建物跡

第7節 古墳時代の区画外部の溝状遺構

第18節 中世の井戸

第27節 時期不明の井戸

第8節 古墳時代の溝状遺構

第19節 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 で出土した曲物桶の材質と付着物

第28節 時期不明の溝状遺構

第9節 古墳時代の井戸

第20節 中世の柱穴状上坑と中央部・北部柱穴部

第29節 時期不明の柱穴状上坑

第10節 古墳時代の円筒形上坑

第30節 時期不明の上坑

第11節 古墳時代の上坑

第31節 時期・性格不明の遺構

(第2分冊)

第6章 権現山遺跡 SG2 区

第1節 古墳時代の上坑

第3節 時期不明の溝・集石遺構

第2節 古墳時代の自然流路および周辺遺物

第4節 時期不明の上坑

第7章 権現山遺跡南部 SG2 区・SG10 区・SG15 区周辺の古環境

第1節 分析結果の概要と考古学的評価

第3節 権現山遺跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区の植物珪酸体分析

第2節 権現山遺跡 SG2 区・SG10 区・SG15 区のテフラ分析

第4節 権現山遺跡 SG2 区・SG15 区の花粉分析

第8章 権現山遺跡 SG5 区

第1節 古墳時代の居館（貯宅）関連施設

第7節 古墳時代の上坑

第13節 中世～近世の溝状遺構

第2節 古墳時代遺構とテフラとの関係

第8節 低地部の古墳時代遺物包含層

第14節 時期不明の掘立柱建物跡

第3節 古墳時代の竪穴建物跡

第9節 遺構外出土の古墳時代遺物

第15節 時期不明の欄列

第4節 古墳時代の遺物集中地点（祭祀遺構）

第10節 権現山遺跡 SG5 区低地部の指標テフラと古環境

第16節 時期不明の溝状遺構

第5節 古墳時代の性格不明遺構

第11節 平安時代の上坑

第17節 時期不明の井戸

第6節 古墳時代の溝

第12節 中世～近世の上坑

第18節 時期不明の上坑

第19節 時期不明の柱穴状上坑

第9章 権現山遺跡 SG9 区

第1節 古墳時代の上坑

第3節 時期不明の溝

第5節 低地植積の調査

第2節 時期・性格不明の遺構

第4節 時期不明の上坑

第6節 西区の遺構外出土遺物

第10章 権現山遺跡 SG15 区

第1節 古墳時代以降の自然流路

第2節 時期不明の上坑

第3節 時期不明の溝

第11章 磯岡遺跡 SG9 区

第1節 古墳時代の竪穴建物跡

第3節 時期不明の礎土集中地点

第2節 時期不明の溝状遺構

第4節 時期不明の上坑

第12章 まとめ

第1節 縄文・弥生時代

第3節 奈良・平安時代

第5節 近世

第2節 古墳時代

第4節 中世

参考文献・写真図版

第 11 節	古墳時代の土坑	348
第 12 節	古墳時代の低地遺物包含層	362
第 13 節	古墳時代の柱穴状土坑	366
第 14 節	古墳時代の遺構外遺物	368
第 15 節	平安時代の竪穴建物跡	370
第 16 節	平安時代の土坑	372
第 17 節	古代の道路跡	373
第 18 節	中世の井戸	374
第 19 節	権現山遺跡 SG10 区 SE-569 で出土した曲物桶の材質と付着物 パリノ・サーヴェイ株式会社	383
第 20 節	中世の柱穴状土坑と中央部・北部柱穴群	387
第 21 節	中世の土坑	395
第 22 節	遺構外出土の中世遺物	396
第 23 節	中世～近世の溝状遺構	397
第 24 節	近世の溝状遺構	398
第 25 節	近世の土坑	405
第 26 節	時期不明の掘立柱建物跡	407
第 27 節	時期不明の井戸	409
第 28 節	時期不明の溝状遺構	412
第 29 節	時期不明の柱穴状土坑	420
第 30 節	時期不明の土坑	427
第 31 節	時期・性格不明の遺構	441

挿図目次

第1図	東谷・中島地区位置図(1/10万).....	2	第71図	榑見山道跡 SG10区 SI-40 (1) 遺構.....	154
第2図	東谷・中島地区道跡群遺跡位置図.....	4	第72図	榑見山道跡 SG10区 SI-40 (2) 遺物.....	155
第3図	道跡の位置(1/60万).....	10	第73図	榑見山道跡 SG10区 SI-45 (1) 遺構.....	157
第4図	周辺地形分類図(1/10万).....	11	第74図	榑見山道跡 SG10区 SI-45 (2) 遺物.....	158
第5図	周辺の道跡分布図.....	14	第75図	榑見山道跡 SG10区 SI-47 (1) 遺構.....	160
第6図	磯岡遺跡・榑見山道跡とその周辺(1/10,000).....	18	第76図	榑見山道跡 SG10区 SI-47 (2) 遺物.....	162
第7図	東谷・中島地区道跡群之概観・榑見山・百目鬼道跡(1/10,000).....	19	第77図	榑見山道跡 SG10区 SI-48 遺構・遺物.....	164
第8図	磯岡遺跡・榑見山道跡および周辺道跡(1/2,500).....	29-30	第78図	榑見山道跡 SG10区 SI-49 遺構・遺物.....	165
第9図	榑見山道跡南部・磯岡遺跡の標準1層.....	32	第79図	榑見山道跡 SG10区 SI-50 (1) 遺構.....	167
第10図	榑見山道跡 縄文時代の遺構外出土遺物.....	35	第80図	榑見山道跡 SG10区 SI-50 (2) 遺構.....	168
第11図	榑見山道跡 SG10区 全体図(1/600).....	41-42	第81図	榑見山道跡 SG10区 SI-50 (3) 遺構.....	169
第12図	榑見山道跡 SG10区 北半部拡大図(1/400・等高線主曲線20m).....	44	第82図	榑見山道跡 SG10区 SI-50 (4) 遺物.....	171
第13図	榑見山道跡 SG10区 南半部拡大図(1/400・等高線主曲線20m).....	45	第83図	榑見山道跡 SG10区 SI-50 (5) 遺物.....	174
第14図	榑見山道跡 SG10区 SI-63 (1) 遺構・遺物.....	46	第84図	榑見山道跡 SG10区 SI-50 (6) 遺物.....	176
第15図	榑見山道跡 SG10区 SI-63 (2) 遺物.....	47	第85図	榑見山道跡 SG10区 SI-51a 遺構・遺物.....	177
第16図	榑見山道跡 SG10区 縄文時代の土坑 (1) SK 219・265・307・443 遺構・遺物.....	50	第86図	榑見山道跡 SG10区 SI-51b-c 遺構・遺物.....	179
第17図	榑見山道跡 SG10区 縄文時代の土坑 (2) SK 697・698 遺構・遺物.....	51	第87図	榑見山道跡 SG10区 SI-53 遺構・遺物.....	182
第18図	榑見山道跡 SG10区 SK 544 遺構・遺物.....	52	第88図	榑見山道跡 SG10区 SI-55 (1) 遺構.....	184
第19図	榑見山道跡 SG10区 SI 2 (1) 遺構.....	54	第89図	榑見山道跡 SG10区 SI-55 (2) 遺構.....	185
第20図	榑見山道跡 SG10区 SI 2 (2) 遺物.....	55	第90図	榑見山道跡 SG10区 SI-56 遺構・遺物.....	187
第21図	榑見山道跡 SG10区 SI 6 (1) 遺構.....	58	第91図	榑見山道跡 SG10区 SI-57 遺構・遺物.....	188
第22図	榑見山道跡 SG10区 SI 6 (2) 遺物.....	60	第92図	榑見山道跡 SG10区 SI-58 遺構・遺物.....	190
第23図	榑見山道跡 SG10区 SI 6 (3) 遺物.....	62	第93図	榑見山道跡 SG10区 SI-59 (1) 遺構.....	192
第24図	榑見山道跡 SG10区 SI 9 遺構・遺物.....	64	第94図	榑見山道跡 SG10区 SI-59 (2) 遺物.....	193
第25図	榑見山道跡 SG10区 SI-10 (1) 遺構・遺物.....	66	第95図	榑見山道跡 SG10区 SI-60 (1) 遺構.....	195
第26図	榑見山道跡 SG10区 SI-10 (2) 遺物.....	68	第96図	榑見山道跡 SG10区 SI-60 (2) 遺物.....	196
第27図	榑見山道跡 SG10区 SI-12 遺構・遺物.....	70	第97図	榑見山道跡 SG10区 SI-61 (1) 遺構.....	198
第28図	榑見山道跡 SG10区 SI-13 遺構・遺物.....	72	第98図	榑見山道跡 SG10区 SI-61 (2) 遺物.....	199
第29図	榑見山道跡 SG10区 SI-14 遺構・遺物.....	73	第99図	榑見山道跡 SG10区 SI-64a (1) 遺構.....	202
第30図	榑見山道跡 SG10区 SI-15 遺構・遺物.....	75	第100図	榑見山道跡 SG10区 SI-64a (2) 遺物.....	204
第31図	榑見山道跡 SG10区 SI 16 (1) 遺物.....	78	第101図	榑見山道跡 SG10区 SI-64a (3) 遺物.....	207
第32図	榑見山道跡 SG10区 SI 16 (2) 遺物.....	80	第102図	榑見山道跡 SG10区 SI-64b (1) 遺構.....	208
第33図	榑見山道跡 SG10区 SI 16 (3) 遺物.....	83	第103図	榑見山道跡 SG10区 SI-64b (2) 遺物.....	209
第34図	榑見山道跡 SG10区 SI-18a+b-c (1) 遺構.....	84	第104図	榑見山道跡 SG10区 SI-65 (1) 遺構.....	210
第35図	榑見山道跡 SG10区 SI-18a+b-c (2) arc 期遺物.....	85	第105図	榑見山道跡 SG10区 SI-65 (2) 遺物.....	211
第36図	榑見山道跡 SG10区 SI-19a+b (1) 遺構.....	88	第106図	榑見山道跡 SG10区 SI-66 (1) 遺構・遺物.....	216
第37図	榑見山道跡 SG10区 SI-19a+b (2) 遺物.....	89	第107図	榑見山道跡 SG10区 SI-66 (2) 遺物.....	215
第38図	榑見山道跡 SG10区 SI 20 (1) 遺構.....	92	第108図	榑見山道跡 SG10区 SI-67 遺構・遺物.....	218
第39図	榑見山道跡 SG10区 SI 20 (2) 遺物.....	94	第109図	榑見山道跡 SG10区 SI-69 遺構・遺物.....	221
第40図	榑見山道跡 SG10区 SI-21a+b (1) 遺構.....	96	第110図	榑見山道跡 SG10区 SI-70 (1) 遺構.....	223
第41図	榑見山道跡 SG10区 SI-21a+b (2) a 期遺物.....	98	第111図	榑見山道跡 SG10区 SI-70 (2) 遺物.....	224
第42図	榑見山道跡 SG10区 SI 22 (1) 遺構.....	100	第112図	榑見山道跡 SG10区 SI-72 (1) 遺構・遺物.....	227
第43図	榑見山道跡 SG10区 SI 22 (2) 遺物.....	101	第113図	榑見山道跡 SG10区 SI-72 (2) 遺物.....	228
第44図	榑見山道跡 SG10区 SI 23 (1) 遺構.....	103	第114図	榑見山道跡 SG10区 SI-73 遺構・遺物.....	231
第45図	榑見山道跡 SG10区 SI 23 (2) 遺物.....	104	第115図	榑見山道跡 SG10区 SI-74 (1) 遺構.....	233
第46図	榑見山道跡 SG10区 SI 23 (3) 遺物.....	106	第116図	榑見山道跡 SG10区 SI-74 (2) 遺物.....	234
第47図	榑見山道跡 SG10区 SI 23 (4) 遺物.....	109	第117図	榑見山道跡 SG10区 SI-75 遺構・遺物.....	237
第48図	榑見山道跡 SG10区 SI 23 (5) 遺物.....	110	第118図	榑見山道跡 SG10区 SI-76 遺構・遺物.....	239
第49図	榑見山道跡 SG10区 SI 24 遺構・遺物.....	111	第119図	榑見山道跡 SG10区 SI-78 (1) 遺構.....	240
第50図	榑見山道跡 SG10区 SI 25 (1) 遺構.....	113	第120図	榑見山道跡 SG10区 SI-78 (2) 遺物.....	241
第51図	榑見山道跡 SG10区 SI 25 (2) 遺物.....	114	第121図	榑見山道跡 SG10区 SI-79 遺構・遺物.....	243
第52図	榑見山道跡 SG10区 SI 25 (3) 遺物.....	115	第122図	榑見山道跡 SG10区 SI-80 遺構・遺物.....	245
第53図	榑見山道跡 SG10区 SI 25 (4) 遺物.....	116	第123図	榑見山道跡 SG10区 SI-81 遺構・遺物.....	247
第54図	榑見山道跡 SG10区 SI 28 (1) 遺構.....	123	第124図	榑見山道跡 SG10区 SI-82 遺構・遺物.....	249
第55図	榑見山道跡 SG10区 SI 28 (2) 遺物.....	124	第125図	榑見山道跡 SG10区 SI-83 遺構・遺物.....	250
第56図	榑見山道跡 SG10区 SI 30 (1) 遺構.....	126	第126図	榑見山道跡 SG10区 SI-84 遺構・遺物.....	252
第57図	榑見山道跡 SG10区 SI 30 (2) 遺物.....	127	第127図	榑見山道跡 SG10区 SI-85 (1) 遺構.....	254
第58図	榑見山道跡 SG10区 SI 32 (1) 遺物.....	130	第128図	榑見山道跡 SG10区 SI-85 (2) 遺物.....	255
第59図	榑見山道跡 SG10区 SI 32 (2) 遺物.....	131	第129図	榑見山道跡 SG10区 SI-86 (1) 遺構.....	257
第60図	榑見山道跡 SG10区 SI-33 遺構・遺物.....	133	第130図	榑見山道跡 SG10区 SI-86 (2) 遺物.....	258
第61図	榑見山道跡 SG10区 SI-34a+b-c (1) 遺構.....	135	第131図	榑見山道跡 SG10区 SI-87 遺構・遺物.....	260
第62図	榑見山道跡 SG10区 SI-34a+b-c (2) 遺物.....	137	第132図	榑見山道跡 SG10区 SI-88 (1) 遺構・遺物.....	262
第63図	榑見山道跡 SG10区 SI-34a+b-c (3) a 期遺物.....	139	第133図	榑見山道跡 SG10区 SI-88 (2) 遺物.....	263
第64図	榑見山道跡 SG10区 SI-34a+b-c (4) arc 期遺物.....	140	第134図	榑見山道跡 SG10区 SI-89a+b (1) 遺構.....	266
第65図	榑見山道跡 SG10区 SI-34a+b-c (5) 遺構.....	141	第135図	榑見山道跡 SG10区 SI-89a+b (2) 遺物.....	267
第66図	榑見山道跡 SG10区 SI 35 遺構・遺物.....	147	第136図	榑見山道跡 SG10区 SI-101 (1) 遺構.....	270
第67図	榑見山道跡 SG10区 SI 37 (1) 遺構.....	148	第137図	榑見山道跡 SG10区 SI-101 (2) 遺物.....	271
第68図	榑見山道跡 SG10区 SI 37 (2) 遺物.....	149	第138図	榑見山道跡 SG10区 SI-104 遺構・遺物.....	274
第69図	榑見山道跡 SG10区 SI-38 遺構・遺物.....	151	第139図	榑見山道跡 SG10区 SI-105 遺構・遺物.....	275
第70図	榑見山道跡 SG10区 SI-39 遺構・遺物.....	152	第140図	榑見山道跡 SG10区 SI-106 遺構・遺物.....	277
			第141図	榑見山道跡 SG10区 SI-108 遺構・遺物.....	279
			第142図	榑見山道跡 SG10区 SI-110 (1) 遺構.....	281
			第143図	榑見山道跡 SG10区 SI-110 (2) 遺物.....	282
			第144図	榑見山道跡 SG10区 SI-110 (3) 遺物.....	283
			第145図	榑見山道跡 SG10区 SI-111 (1) 遺構.....	286

第146頁	樺見山遺跡 SG10区 SI-111 (2) 遺物	287	第192頁	樺見山遺跡 SG10区 SI-90 遺構・遺物	371
第147頁	樺見山遺跡 SG10区 SI-113a 遺構・遺物	289	第193頁	樺見山遺跡 SG10区 SK 235 遺構・遺物	372
第148頁	樺見山遺跡 SG10区 SI-113b 遺構	290	第194頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-250a-b 遺構	373
第149頁	樺見山遺跡 SG10区 SI-114 遺構・遺物	291	第195頁	樺見山遺跡 SG10区 SE-232 遺構・遺物	375
第150頁	樺見山遺跡 SG10区 SI-115 遺構	293	第196頁	樺見山遺跡 SG10区 SE-237 遺構・遺物	377
第151頁	樺見山遺跡 SG10区 SI-36 (1) 遺構・遺物	295	第197頁	樺見山遺跡 SG10区 SE-252 遺構・遺物	377
第152頁	樺見山遺跡 SG10区 SI-36 (2) 遺物	300	第198頁	樺見山遺跡 SG10区 SE-344 遺構・遺物	379
第153頁	樺見山遺跡南部の鉄土遺物(追加報告分)	301	第199頁	樺見山遺跡 SG10区 SE-377 遺構・遺物	379
第154頁	樺見山遺跡の放射化分析・自然科学生試料 (SG10区 SI-33-36-71)	304	第200頁	樺見山遺跡 SG10区 SI-569 遺構・遺物	381
第155頁	GON 2 鉄製品の光学顕微鏡観察像 (a), (b) 及び EPMA 解析像 (c)	305	第201頁	樺見山遺跡 SG10区 SE-569 面物種の底版・側壁・ 補遺材の組織	384
第156頁	GON 5 銅形鋳造物の光学顕微鏡観察像 (a) 及び EPMA 解析像 (b)	306	第202頁	樺見山遺跡 SG10区 SE-569 面物種底版の溝痕	386
第157頁	GON 7 銅形鋳造像 (a), (b) 及び EPMA 解析像 (c), (d)	307	第203頁	樺見山遺跡 SG10区 北部柱穴溝 P-565 ~ 693	389
第158頁	GON 9 鉄製品の光学顕微鏡観察像 (a) 及び EPMA 解析像 (b)	308	第204頁	樺見山遺跡 SG10区 中央部柱穴溝 (1) P-300 ~ 469	390
第159頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-43 (1) 遺構	312	第205頁	樺見山遺跡 SG10区 中央部柱穴溝 (2) P-270 ~ 468	391
第160頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-43 (2) 遺物	314	第206頁	樺見山遺跡 SG10区 中世の柱穴状土坑 (1) 遺構	392
第161頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-221 遺構・遺物	316	第207頁	樺見山遺跡 SG10区 中世の柱穴状土坑 (2) 遺構	394
第162頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-41-42 (1) 遺構	318	第208頁	樺見山遺跡 SG10区 中世の柱穴状土坑 (3) 遺構	394
第163頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-41-42 (2) 遺物	320	第209頁	樺見山遺跡 SG10区 SK 92-251 遺構・遺物	395
第164頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-41-42 (3) 遺物	324	第210頁	樺見山遺跡 SG10区 中世の溝堀外出土遺物	396
第165頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-304a 遺構・遺物 SD-304b (1) 北平部遺構	327	第211頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-201a・201b・204・263 (1) SD-263 平面図	397
第166頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-304b (2) 南平部遺構	328	第212頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-263 遺構	398
第167頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-304b (3) 遺物	330	第213頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-201a・201b・204・263 (2) 平面図	399
第168頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-304b (4) 古墳後期の遺物	332	第214頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-201a・201b・204・263 (3) 断面図	400
第169頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-305 遺構	332	第215頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-201a・204 遺物	401
第170頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-319 遺構・遺物	333	第216頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-503 (1) 平面図	403
第171頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-509 遺構	334	第217頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-503 (2) 断面図	404
第172頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-527 (1) 遺構	335	第218頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-503 (3) 遺物	405
第173頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-527 (2) 遺物	337	第219頁	樺見山遺跡 SG10区 SK 71 遺構・遺物	406
第174頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-533・534・535 遺構 SD-535 遺物	339	第220頁	樺見山遺跡 SG10区 SB-603 遺構	407
第175頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-540 遺構	341	第221頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の井戸 (1) SE-236・316・345 遺構 SE-345 遺物	408
第176頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-594 遺構・遺物	342	第222頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の井戸 (2) SE-352 遺構・遺物 SE-455 遺構	411
第177頁	樺見山遺跡 SG10区 SD-696・711 遺構 SD-821 遺構・遺物	344	第223頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の溝状遺構 (1) 平面図	413
第178頁	樺見山遺跡 SG10区 SE-552 遺構	345	第224頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の溝状遺構 (2) 断面図	414
第179頁	樺見山遺跡 SG10区 古墳時代の円筒形土坑 (1) 遺構	346	第225頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の溝状遺構 (3) 遺物	417
第180頁	樺見山遺跡 SG10区 古墳時代の円筒形土坑 (2) 遺物	347	第226頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の柱穴状土坑 (1) 遺構	421
第181頁	樺見山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑 (1) 遺構	349	第227頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の柱穴状土坑 (2) 遺構	423
第182頁	樺見山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑 (2) 遺構	350	第228頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の柱穴状土坑 (3) 遺構	425
第183頁	樺見山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑 (3) 遺構	351	第229頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の土坑 (1) 遺構	428
第184頁	樺見山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑 (4) 遺物	354	第230頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の土坑 (2) 遺構	429
第185頁	樺見山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑 (5) 遺物	357	第231頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の土坑 (3) 遺構	430
第186頁	樺見山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑 (6) 遺物	359	第232頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の土坑 (4) 遺構	432
第187頁	樺見山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑 (7) 遺物	361	第233頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の土坑 (5) 遺構	434
第188頁	樺見山遺跡 SG10区 古墳時代の低地遺物包含層 調査区と SK-901 ~ 910	363	第234頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の土坑 (6) 遺構	436
第189頁	樺見山遺跡 SG10区 古墳時代の低地遺物包含層 遺物	364	第235頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の土坑 (7) 遺構	437
第190頁	樺見山遺跡 SG10区 古墳時代の柱穴状土坑 遺構・ 遺物	367	第236頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の土坑 (8) 遺構	438
第191頁	樺見山遺跡 SG10区 古墳時代の遺構外出土遺物	369	第237頁	樺見山遺跡 SG10区 時期不明の土坑 (9) 遺物	439
			第238頁	樺見山遺跡 SG10区 SX-218 遺構 SX-308 遺構・ 遺物	441

表 目 次

第1表	東谷・中島地区遺跡群遺跡一覧表	5	第15表	樺見山遺跡 SG10区 SI-10 出土遺物	67 ~ 69
第2表	東谷・中島地区周辺の遺跡	15	第16表	樺見山遺跡 SG10区 SI-12 出土遺物	71
第3表	樺見山遺跡各地区の縄文時代の遺物	36	第17表	樺見山遺跡 SG10区 SI-13 出土遺物	72
第4表	「東谷・中島地区遺跡群」10 規模、縄文・弥生 時代の遺構外出土石器の石質	38	第18表	樺見山遺跡 SG10区 SI-14 出土遺物	74
第5表	縄文晩期住居 SG10区 SI-63 出土石器の石質	38	第19表	樺見山遺跡 SG10区 SI-15 出土遺物	76~77
第6表	「東谷・中島地区遺跡群」14 規模、縄文時代遺構外 出土石器の石質	38	第20表	樺見山遺跡 SG10区 SI-16 出土遺物	79 ~ 83
第7表	弥生時代後半の土坑 SG10区 SK-544 出土石器の 石質	38	第21表	樺見山遺跡 SG10区 SI-18a 出土遺物	86
第8表	時代・出土場所別の部類別石材組成	39	第22表	樺見山遺跡 SG10区 SI-18c 出土遺物	86~87
第9表	樺見山遺跡 SG10区 SI-63 出土遺物	48	第23表	樺見山遺跡 SG10区 SI-19a-b 出土遺物	90-91
第10表	樺見山遺跡 SG10区 縄文時代の土坑	51	第24表	樺見山遺跡 SG10区 SI-20 出土遺物	93 ~ 95
第11表	樺見山遺跡 SG10区 SK-544 出土遺物	52	第25表	樺見山遺跡 SG10区 SI-21a 出土遺物	98-99
第12表	樺見山遺跡 SG10区 SI-2 出土遺物	55 ~ 57	第26表	樺見山遺跡 SG10区 SI-22 出土遺物	101-102
第13表	樺見山遺跡 SG10区 SI-6 出土遺物	59 ~ 63	第27表	樺見山遺跡 SG10区 SI-25 出土遺物	105 ~ 110
第14表	樺見山遺跡 SG10区 SI-9 出土遺物	64-65	第28表	樺見山遺跡 SG10区 SI-24 出土遺物	112
			第29表	樺見山遺跡 SG10区 SI-25 出土遺物	117 ~ 122
			第30表	樺見山遺跡 SG10区 SI-28 出土遺物	124-125
			第31表	樺見山遺跡 SG10区 SI-30 出土遺物	128-129

第32表	権現山遺跡SG10区 SI 32 出土遺物	131-132
第33表	権現山遺跡SG10区 SI 33 出土遺物	134
第34表	権現山遺跡SG10区 SI 34a 出土遺物	142 ~ 146
第35表	権現山遺跡SG10区 SI 34c 出土遺物	146
第36表	権現山遺跡SG10区 SI 35 出土遺物	147
第37表	権現山遺跡SG10区 SI 37 出土遺物	150
第38表	権現山遺跡SG10区 SI 38 出土遺物	151
第39表	権現山遺跡SG10区 SI 39 出土遺物	153
第40表	権現山遺跡SG10区 SI 40 出土遺物	156
第41表	権現山遺跡SG10区 SI 45 出土遺物	159
第42表	権現山遺跡SG10区 SI 47 出土遺物	161 ~ 163
第43表	権現山遺跡SG10区 SI 48 出土遺物	164
第44表	権現山遺跡SG10区 SI 49 出土遺物	166
第45表	権現山遺跡SG10区 SI 50 出土遺物	170 ~ 176
第46表	権現山遺跡SG10区 SI 51a 出土遺物	178
第47表	権現山遺跡SG10区 SI 51b 出土遺物	179
第48表	権現山遺跡SG10区 SI 53 出土遺物	181 ~ 183
第49表	権現山遺跡SG10区 SI 55 出土遺物	185-186
第50表	権現山遺跡SG10区 SI 56 出土遺物	187
第51表	権現山遺跡SG10区 SI 57 出土遺物	189
第52表	権現山遺跡SG10区 SI 58 出土遺物	191
第53表	権現山遺跡SG10区 SI 59	193-194
第54表	権現山遺跡SG10区 SI 60 出土遺物	197-198
第55表	権現山遺跡SG10区 SI 61 出土遺物	200-201
第56表	権現山遺跡SG10区 SI 64a 出土遺物	203 ~ 207
第57表	権現山遺跡SG10区 SI 64b 出土遺物	209
第58表	権現山遺跡SG10区 SI 65 出土遺物	210 ~ 212
第59表	権現山遺跡SG10区 SI 66 出土遺物	214 ~ 217
第60表	権現山遺跡SG10区 SI 67 出土遺物	219-220
第61表	権現山遺跡SG10区 SI 69 出土遺物	222
第62表	権現山遺跡SG10区 SI 69 出土遺物	225
第63表	権現山遺跡SG10区 SI 72 出土遺物	226 ~ 229
第64表	権現山遺跡SG10区 SI 73 出土遺物	230 ~ 232
第65表	権現山遺跡SG10区 SI 74 出土遺物	235
第66表	権現山遺跡SG10区 SI 75 出土遺物	236 ~ 238
第67表	権現山遺跡SG10区 SI 76 出土遺物	239
第68表	権現山遺跡SG10区 SI 78 出土遺物	242
第69表	権現山遺跡SG10区 SI 79 出土遺物	244
第70表	権現山遺跡SG10区 SI 80 出土遺物	245
第71表	権現山遺跡SG10区 SI 81 出土遺物	246 ~ 248
第72表	権現山遺跡SG10区 SI 82 出土遺物	248-249
第73表	権現山遺跡SG10区 SI 83 出土遺物	251
第74表	権現山遺跡SG10区 SI 84 出土遺物	253
第75表	権現山遺跡SG10区 SI 85 出土遺物	255-256
第76表	権現山遺跡SG10区 SI 86 出土遺物	257 ~ 259
第77表	権現山遺跡SG10区 SI 87 出土遺物	261
第78表	権現山遺跡SG10区 SI 88 出土遺物	264-265
第79表	権現山遺跡SG10区 SI 89a・b 出土遺物	268-269
第80表	権現山遺跡SG10区 SI 101 出土遺物	272-273
第81表	権現山遺跡SG10区 SI 104 出土遺物	275
第82表	権現山遺跡SG10区 SI 105 出土遺物	276
第83表	権現山遺跡SG10区 SI 106 出土遺物	278-279
第84表	権現山遺跡SG10区 SI 108 出土遺物	280
第85表	権現山遺跡SG10区 SI 110 出土遺物	284-285
第86表	権現山遺跡SG10区 SI 111 出土遺物	287-288
第87表	権現山遺跡SG10区 SI 113a 出土遺物	290
第88表	権現山遺跡SG10区 SI 114 出土遺物	292
第89表	権現山遺跡SG10区 SI 36 床面採取土と鍛造銅片・ 粒状滓の量	294
第90表	権現山遺跡SG10区 SI 36 出土遺物	296 ~ 299
第91表	分析試料一覽	303
第92表	中性子照射条件及びγ線測定条件	304
第93表	測定に使用した核子一タ	304
第94表	中性子放射分析の結果	309
第95表	標準鉄鉱石における分析値と文献値との比較	310
第96表	権現山遺跡SG10区 SD 43 出土遺物	311 ~ 315
第97表	権現山遺跡SG10区 SD 21 出土遺物	317
第98表	権現山遺跡SG10区 SD 21-42 出土遺物	319 ~ 325
第99表	権現山遺跡SG10区 SD 304a 出土遺物	327
第100表	権現山遺跡SG10区 SD 304b 出土遺物	329 ~ 332
第101表	権現山遺跡SG10区 SD 319 出土遺物	333
第102表	権現山遺跡SG10区 SD 527 出土遺物	336 ~ 338
第103表	権現山遺跡SG10区 SD 535 出土遺物	340
第104表	権現山遺跡SG10区 SD 594 出土遺物	341-342
第105表	権現山遺跡SG10区 SD 821 出土遺物	344
第106表	権現山遺跡SG10区 古墳時代の円筒形土坑	345-346
第107表	権現山遺跡SG10区 古墳時代の円筒形土坑 出土遺物	347-348
第108表	権現山遺跡SG10区 古墳時代の土坑	351 ~ 353
第109表	権現山遺跡SG10区 古墳時代の土坑 出土遺物	353 ~ 361
第110表	権現山遺跡SG10区 古墳時代の低地遺物包含層 出土遺物	362 ~ 365
第111表	権現山遺跡SG10区 古墳時代の柱穴状土坑 P-322 出土遺物	366
第112表	権現山遺跡SG10区 古墳時代の柱穴状土坑	367
第113表	権現山遺跡SG10区 古墳時代の遺構外出土遺物	368 ~ 370
第114表	権現山遺跡SG10区 SI 90 出土遺物	371
第115表	権現山遺跡SG10区 SK 235 出土遺物	373
第116表	権現山遺跡SG10区 SE 232 出土遺物	374 ~ 376
第117表	権現山遺跡SG10区 SE 237 出土遺物	376
第118表	権現山遺跡SG10区 SE 252 出土遺物	378
第119表	権現山遺跡SG10区 SE 344 出土遺物	378
第120表	権現山遺跡SG10区 SE 377 出土遺物	380
第121表	権現山遺跡SG10区 SE 569 出土遺物	382-383
第122表	権現山遺跡SG10区 SE 569 分析対象資料一覽	383
第123表	権現山遺跡SG10区 SE 569 鑿研所定結果	385
第124表	権現山遺跡SG10区 中世の柱穴状土坑	387 ~ 393
第125表	権現山遺跡SG10区 中世の柱穴状土坑 出土遺物	393
第126表	権現山遺跡SG10区 SK 92 出土遺物	395
第127表	権現山遺跡SG10区 中世の遺構外出土遺物	396
第128表	権現山遺跡SG10区 SD 263 出土遺物	398
第129表	権現山遺跡SG10区 SD 201a 出土遺物	401
第130表	権現山遺跡SG10区 SD 204 出土遺物	402
第131表	権現山遺跡SG10区 SD 503 出土遺物	405
第132表	権現山遺跡SG10区 SK 71 出土遺物	406
第133表	権現山遺跡SG10区 SE 345 出土遺物	410
第134表	権現山遺跡SG10区 SE 352 出土遺物	410
第135表	権現山遺跡SG10区 SD 224 出土遺物	412
第136表	権現山遺跡SG10区 SD 506 出土遺物	415
第137表	権現山遺跡SG10区 SD 510 出土遺物	416
第138表	権現山遺跡SG10区 SD 521a 出土遺物	416
第139表	権現山遺跡SG10区 SD 814 出土遺物	418
第140表	権現山遺跡SG10区 時期不明の柱穴状土坑	420 ~ 426
第141表	権現山遺跡SG10区 時期不明の土坑	427 ~ 438
第142表	権現山遺跡SG10区 時期不明の土坑 出土遺物	439-440
第143表	権現山遺跡SG10区 SX 308 出土遺物	442

権現山遺跡南部 遺構一覧・検索表 (第1分冊)

権現山遺跡 SG10 区

縄文時代の型穴建物跡

グリッド	規模 (m)	方位関係	火焔	付属施設	距離(ページ)
SK 63	20.10, 21.10	北東・南西 3.88 × 高さ 2.85	SK.304 より古	伊 1 (南)	43 ~ 49

縄文時代の土坑 6 基 (SK.219・265・307・443・697・699) は第 10 表 (p.51) を参照。

弥生時代の土坑

グリッド	形状	方位関係	規模 (m)	深さ (m)	距離(ページ)
SK.544	22.0-19.0	円形	SK.543 より古	直径 1.82 × 埋没 1.66	0.34 52

古墳時代の型穴建物跡

グリッド	規模 (m)	方位関係	火焔	付属施設	距離(ページ)
SI.2	17.17-18	東西 7.04 × 南北 6.92	SK.210 → SI.2 → SD.41+42	伊 1 (南東)	SI.2 53 ~ 57
SI.6	17.17	東西 5.36 × 南北 5.50	SI.80b → SI.80a → SI.30 → SI.6	カマド 1 (北)	前庭穴 2 57 ~ 63
SI.9	17.17, 18.17	東西 3.40 × 南北 4.62		不明	前庭穴 17 63 ~ 65
SI.10	18.17	東西 4.56 × 南北 4.77	SK.11 → SI.88 → SK.211 → SI.10 → SI.352	カマド 1 (北)	前庭穴 1 65 ~ 69
SI.12	18.17	東西 (推定) 4.76 × 南北 4.68	SI.12 → SK.229 → SK.228 SD.201a より古	カマド 1 (北)	69 ~ 71
SI.13	17.16+17	東西 (推定) 6.30 × 南北 5.69	SI.65-SD.201a より古	不明	前庭穴 1 71 ~ 72
SI.14	18.16+17	東西 4.62 × 南北 4.50	SI.16 より新	カマド 1 (北)	前庭穴 1 73 ~ 74
SI.15	18.16+17	東西 2.28 ~ 2.30 × 南北 2.50 ~ 2.54	SI.16 より新	カマド 1 (北)	前庭穴 1 75 ~ 77
SI.16	18.17	東西 5.82 × 南北 6.04	SI.14-15-SD.201a より古	伊 2 (北)	前庭穴 2 77 ~ 83
SI.18a	18.16	東西 5.25 × 南北 5.80	SI.18a → SI.18b → SI.18a → SI.4 → SI.21b → SI.21a	不明	前庭穴 1 ~ 2 84 ~ 86
SI.18b	同上	一辺 4.70m 前後	同上	不明	前庭穴 1 ~ 2 84 ~ 86
SI.18c	同上	一辺 3.9 ~ 4.0m 前後	同上	不明	前庭穴 1 84 ~ 87
SI.18d	17.16, 18.16	東西 6.68 × 南北 7.16	SK.94-95-456-P.445 より古, P.409+470 → SI.18b → SI.18a → SI.20 → SI.21b → SI.21a	伊 1 (北)	前庭穴 1 87 ~ 91
SI.18e	同上	同上	同上	伊 2 (南)	前庭穴 1 87 ~ 91
SI.20	18.16	東西 5.24 × 南北 4.96	SK.286 より新 SI.19b → SI.19a → SI.20 → SI.21b → SI.21a	カマド 1 (南)	前庭穴 1 92 ~ 95
SI.21a	18.16	(推定) 東西 5.86 × 南北 5.90	SI.18a → SI.18b → SI.18a → SI.4 → SI.21b → SI.21a, SI.19b → SI.19a → SI.20 → SI.21b → SI.21a	カマド 1 (北)	前庭穴 1 96 ~ 99
SI.21b	同上	同上	同上		前庭穴 1 96 ~ 98
SI.22	18.16	東西 4.62 × 南北 4.78	SI.105 より新, SI.21a+b と P.406 より古	カマド 1 (北)	前庭穴 1 99 ~ 102
SI.23	18.16, 18.17	東西 6.05 × 南北 6.04	SI.25 → SI.24 → SI.23 → SI.90 → SI.236, SI.105 → SI.29 → SI.90, P.325-326+330-331 より新	カマド 1 (北)	前庭穴 1 102 ~ 110
SI.24	18.16, 19.16	東西 4.58 × 南北 (推) 2.26	SI.25 → SI.24 → SI.23 → SI.60 → SK.236	カマド 1 (北)	111 ~ 112
SI.25	18.16, 19.16+17	東西 7.40 × 南北 7.26	SD.283 より古, SI.25 → SI.28 → SI.38, SI.25 → SI.24 → SI.23 → SI.90 → SK.236	伊 1 (中央)	前庭穴 1, 入土施設 112 ~ 122
SI.28	19.17	東西 5.48 × 南北 5.27	SI.25 → SI.28 → SK.911	カマド 1 (南)	前庭穴 1 122 ~ 125
SI.30	17.17	東西 7.00 × 南北 7.02	SI.80b → SI.80a → SI.30 → SI.6 → SK.235, SK.212+228 より古	伊 1 (中央)	前庭穴 1, 入土施設 125 ~ 129
SI.32	18.18	東西 (推定) 4.50 × 南北 4.58	SI.33 → SI.32 → SD.204, SK.215 より古	カマド 1 (南)	前庭穴 1 130 ~ 132
SI.33	18.18	東西 7.38 × 南北 7.22	SI.32-34+34b-SD.204+SK.316 より古	伊 2 (北)	前庭穴 1, 入土施設 132 ~ 134

SG5 区と重複する SI.4 は第 2 分冊の SG5 区 SI.4 を参照。

S34a	19-17-18	東西 7.14 × 南北 7.44	S101 → S34c → S134h → S34a → SD 263 → SD 201a+b → SK 214, 31 3より新	カマド 1 (北)	新蔵穴 1, 人土施設	134 ~ 146
S34b	同上	同上	同上	カマド 1 (北)	新蔵穴 1, 人土施設	134 ~ 141
S34c	同上	(予定) 東西 5.70 × 南北 5.70	同上	カマド 1 (北)	新蔵穴 1, 人土施設	134 ~ 146
S35	19-17, 20-17	東西 4.21 × 南北 4.22	SD 263 より古	カマド 1 (北)		146 ~ 147
S37	19-16-17	東西 4.68 × 南北 4.62	S1 38 → S1 37 → P 323 → SD 283	カマド 1 (北)	新蔵穴 1	148 ~ 150
S38	18-16, 19-16	東西 (予定) 6.00 × 南北 6.00	S1 25 → S1 38 → S1 37, SD 283-SK 439 より古	不明	新蔵穴 1	151 ~ 152
S39	19-17	東西 4.31 × 南北 4.27	SK 209 より古	カマド 1 (北)	新蔵穴 1, 人土施設	152 ~ 153
S40	19-17	東西 5.56 × 南北 5.96	SK 219 → SK 220 → S1 40 → SD 201a	カマド 1 (北)	新蔵穴 1 ~ 27, 人土施設	153 ~ 155
S45	20-17	東西 5.34 × 南北 6.00	S1 48 → S1 45 → SK 243, SK 92-SK 271 より古	カマド 1 (北)	新蔵穴 1	157 ~ 159
S47	18-17, 19-17	東西 6.36 × 南北 6.08	SK 339-P 335 より新, S1 47 → SK 276 → SK 92 → SK 264, S1 101 → S1 47 → SD 263 → SD 201a	不明	新蔵穴 1	160 ~ 163
S48	20-17	東西 5.12 × 南北 5.08	S1 48 → S1 45 → SK 243, P 303 → S1 48 → P 302	炉 1 (北)	新蔵穴 1, 人土施設	163 ~ 164
S49	20-17	東西 4.32 × 南北 4.00	S1 49 → SK 242 → P 245-246, S1 49 → SK 241 → SK 232, S1 49 → P 257-258	不明		165 ~ 166
S50	20-17, 21-17	東西 8.60 × 南北 8.72	SD 224 より古	炉 6 (南東 5-中東 1)	新蔵穴 1	166 ~ 176
S51a	19-18	(予定) 東西 5.80 × 南北 7.10	S1 51c → S1 51b → S1 51a, S1 52-104-P 430-437 より新, SK 308-SK 345-P 429-432-433 より古	不明	新蔵穴 1	176 ~ 178
S51b	同上	東西 4.90 × 南北 5.16	同上	不明	新蔵穴 1	178 ~ 180
S51c	同上	正確な規模は不明	P 436-437 → S1 51c → P 429-431-432-433-SK 308	不明	新蔵穴 1	179 ~ 180
S53	19-18	東西 4.10 × 南北 4.16	SK 443 → SK 265 → S1 53 → P 407-468, S1 53 → P 441-442	炉 1 (北北東)		181 ~ 183
S55	19-18	東西 4.36 × 南北 5.20	SD 204 より古	炉 1 (南)	新蔵穴 1	183 ~ 186
S56	19-20	東西 4.92 × 南北 4.73	SK 287 より古	不明	新蔵穴 1	186 ~ 187
S57	20-19	東西 4.08 × 南北 4.36	同上	炉 1 (北)	新蔵穴 1, 人土施設	187 ~ 189
S58	20-18	東西 (予定) 2.90 × 南北 4.92	P 375-379-383-403-404 より古	カマド 1 (北)	新蔵穴 1	190 ~ 191
S59	20-18-19	東西 (予定) 6.20 × 南北 5.96	S1 59 → SK 301 → SK 300, S1 59 → SK 288-289 → SD 201a	カマド 1 (北)	新蔵穴 1	191 ~ 194
S60	20-17, 21-17	東西 7.08 × 南北 7.46	SD 224 より古	炉 1 (南東)	新蔵穴 1, 人土施設	194 ~ 198
S61	21-18	東西 5.94 × 南北 6.00	S1 61 → SD 304b → P 407	炉 1 (北)	新蔵穴 1, 人土施設	198 ~ 201
S64a	21-17-18, 22-17-18	東西 9.24 × 南北 9.32	SD 304a-304b-SD 503-SK 511 → P 515-548 より古, S1 60b より新	炉 1 (中東)	新蔵穴 1	201 ~ 207
S64b	同上	東西 8.10 × 南北 8.38	S1 64a-SD 304a-304b-SD 503 より古	不明	新蔵穴 1	207 ~ 209
S65	22-17	(原) 東西 5.06 × 南北 5.52	S1 65 → SD 503-SK 517	カマド 1 (北)		209 ~ 212
S66	22-17	東西 6.78 × 南北 4.54	SD 304a-304b-SD 503-SK 523-524-530-537 より古, S1 66 → SK 524 → SK 523	不明	新蔵穴 1, 人土施設	212 ~ 217
S67	22-17	東西 5.40 × 南北 5.24	SD 503 より古	不明	新蔵穴 1, 人土施設	217 ~ 220
S69	23-17	東西 5.60 × 南北 5.60	SK 68-P 574-P 580 より古	カマド 2 (南)		220 ~ 222
S70	23-17	東西 5.20 × 南北 5.32	P 584-587-588-589-593 より古	カマド 1 (南)	新蔵穴 1	222 ~ 225
S72	22-18, 23-18	東西 5.78 × 南北 5.48	SK 582-583 より古	カマド 1 (南)	新蔵穴 1 (東山土居), 人土施設	226 ~ 229
S73	22-18	東西 5.26 × 南北 5.26		カマド 1 (南)	新蔵穴 1, 人土施設	230 ~ 232
S74	22-18-19	東西 4.02 × 南北 3.90	S1 113b → S1 113a → S1 74	カマド 1 (南)	新蔵穴 1, 人土施設	232 ~ 235
S75	22-19, 23-19	東西 5.78 × 南北 6.14	SD 503-SK 545-P 579 より古	不明	新蔵穴 1 (東山土居)	236 ~ 238
S76	21-19	東西 3.94 × 南北 3.28	SD 503-508-SK 519 より古	不明	人土施設	238 ~ 239
S78	23-18-19	東西 4.66 × 南北 5.34	S1 79 より新	カマド 1 (北)	新蔵穴 1	239 ~ 242
S79	23-18-19	東西 4.17 × 南北 3.78	S1 78 より古, P 702 より古?	炉 1 (南)		243 ~ 244
S80	23-18-19, 24-18-19	東西 3.48 × 南北 3.82	SK 555 より古	炉 1 (南)	新蔵穴 1	244 ~ 245
S81	23-19	東西 4.46 × 南北 4.57	SD 503-SK 613 より古	カマド 1 (北)	人土施設	246 ~ 248
S82	23-19	東西 (原) 3.60 × 南北 3.62		不明		248 ~ 249
S83	23-19, 24-19	東西 3.76 × 南北 4.91	S1 115 と SK 671-674 より新	カマド 1 (南)		250 ~ 251
S84	24-19	東西 5.26 × 南北 4.52	SD 503 より古	不明	新蔵穴 1	251 ~ 253
S85	17-16	東西 4.29 × 南北 4.52	S1 13 より新	カマド 1 (北)	新蔵穴 1, 人土施設	253 ~ 256
S86	24-19	東西 4.94 × 南北 3.60	SD 503-SK 564 より古	炉 2 (南東)	新蔵穴 3	256 ~ 259

S1 36は古墳時代の登久瀬治遺構（次項）を参照。

SI 87	16-18	東西3.52×南北3.15		カマド1 (北)		260～261
SI 88	18-17	東西5.92×南北4.28	SK 11→SI 88→SK 211→ SI 10→SK 352、SD 205より古	炉1 (北)	西蔵穴1	261～265
SI 89a	17-17	東西5.70×南北5.94	SI 89a→SI 89b→SI 30→ SI 6、SI 89b→SI 89a→SI 30 →SK 235	炉1 (北)	西蔵穴2、入土施設	265～269
SI 89b	同上	(推定) 東西4.70×南北4.40	同上	炉1 (北)	西蔵穴1	265～269
SI 101	19-17-18	(推定) 東西6.90×南北6.50	SI 101→SI 34a→SI 34b→ SI 34a、SI 101→SI 47→ SD 203→SD 201a→SK 214	不明	西蔵穴1	270～273
SI 104	19-18	東西 (内) 3.14×南北4.48	SI 104→SI 51c→SI 51b→ SI 51a→P 428*429→SK 345→ SK 308、SK 328-329より古	不明	西蔵穴2	273～275
SI 105	18-16-17	東西4.20×南北 (内) 2.46	SI 105→SI 22→P 406 (7)、 SI 105→SI 23→SI 90→ SK 236	不明	西蔵穴1	275～276
SI 106	20-17-18	東西6.84×南北5.00	SI 110→SK 355→SK 405→ P 409→413より古	炉1 (中央)	西蔵穴1	276～279
SI 108	20-18	東西4.08×南北3.30	P 465-466→SI 108→SI 110→ SK 347→P 425	炉1 (中央)	西蔵穴2	279～280
SI 110	20-18、21-18	(推定) 東西8.80×南北9.00	P 465-466→SI 108→SI 110→ SK 347→P 425、P 414→418より古	不明	西蔵穴1 (掘出状況1)	280～285
SI 111	18-18-19	東西4.11×南北3.44		炉1 (北)	西蔵穴2、入土施設	285～288
SI 113a	22-18-19	東西2.61×南北2.78	SI 113a→SI 113b→SI 74、 SI 113b→SI 113a→SK 662→ 563-682、P 700-701より古	不明	西蔵穴1	288～290
SI 113b	同上	東西5.02×南北4.96	同上、P 700-701と同日不明	不明	西蔵穴1	290～291
SI 114	23-18-19	東西3.98×南北3.09	SK 683より新	不明		291～293
SI 115	23-19、24-19	東西3.64×南北3.99	SK 83より古	不明		293

SG5区と重複するSI-100は第2分冊のSG5区SI-100を参照。

古墳時代の惣穴遺構

グラッド	規模 (m)	重複関係	方向	付随施設	記載ページ
SI 26	20-17	(内) 東西2.38×南北4.35	不明		294～300

古墳時代の居館外郭の溝状遺構

グラッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	記載ページ	
SD 43	16-16-17	SI 100→SD 43→SD 44	1.70～2.50	0.10～0.45	SG5区に連続 北沼津の内郭	311～315
SD 221	16-17、16-18	SD 41-42より古	0.92～1.48	0.10～0.58	北沼津の外郭	315～317

古墳時代の溝状遺構

グラッド	重複関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	記載ページ	
SD 41+42	16-17-18、17-18、 18-18	SI 2-SD 221→SK 210-216→ SD 42→SD 41→SD 201a→ 201b-204	0.20～3.20	0.10～0.60	SG5区 SD 41-42に連続	317～325
SD 304a	20→23-17～20	SI 64a+64b+66→SD 304a→ SD 304b、SK 526→SD 304a→ SD 304b→SK 525-566	0.80～1.18	0.33～0.49	掘り直してSD 304bになる	326～327
SD 304b	同上	SI 63→SI 61+64a+64b+66→ SD 304b→SD 304a-501-503、 SK 526→SD 304a→SD 304b→ SK 525-566	0.50～1.50	0.10～0.30	SD 304aから掘り直す SD 305と同時存在か	326～332
SD 305	20-19		0.42～0.64	0.03～0.10	SD 304bと同時存在か	332
SD 319	19-18	SD 204+263より古	1.17～1.70	0.13～0.20	SK 372との関係が不明	333
SD 509	20-20、21-19-20		0.34～0.59	0.04～0.12		334
SD 527	21-19～24-20	SK 697-699→SD 527→ SD 535-540-696-711→SD 503	0.70～1.40	0.20～0.50		334～338
SD 533	21-19		0.26～0.37	0.04～0.05		338
SD 534	21.5-19.5		0.41～0.92	0.06～0.46		339～340
SD 535	21-19	SD 527より新	1.70～2.80	0.32～0.54		339～340
SD 540	22-19	SD 527→SD 533-540	0.55～2.10	0.08～0.41		340～341
SD 594	22-19-20		1.00～3.40	0.12～0.51		341～342
SD 696	23-20	SD 527より新	0.45～0.74	0.25～0.41		343～344
SD 711	23.5-20.0	SK 697→SD 527→SD 711	0.10～0.47	0.29～0.44		343～344
SD 821	19-20		0.99～1.60	0.16～0.20		343～344

SG5区と連続するSD-44は第2分冊のSG5区SD-44を参照。

古墳時代の井戸跡

グリッド	形状	発掘関係	口径 (m)	深さ (m)	掲載ページ	
SK 552	24.0 19.5	平型五角形	SK 552→SK 553a→SK 553b	直径 0.92×短径 0.67	1.10	345

古墳時代の円筒形土坑 9 基 (SK 210・216・217・550・551・561・571・621・674) は第 106 表 (p.345～346) を参照。

古墳時代の土坑 46 基 (SK 11・29・46・91・94・95・207・208・211・220・222・233・261a・261b・266・274・275・286・292・293・339・343・346・430・449・456・543・553a・553b・570・600・683・801・803・819・820a・820b・901～904・906・908～911) は第 108 表 (p.351～353) を参照。

古墳時代の柱穴状土坑 17 基 (P 303・314・315・322・325・326・330・331・335・436・437・464～466・469・470・472) は第 112 表 (p.367) を参照。

平安時代の竪穴建物跡

グリッド	規模 (m)	発掘関係	式名	付加施設	掲載ページ
SK 90	18.10・17	東西 4.8×南北 3.20	SK 105→SK 23→SK 90→SK 236	カマド 1 (北)	370～371

平安時代の土坑

グリッド	形状	発掘関係	規模 (m)	深さ (m)	掲載ページ	
SK 235	17.5 17.5	長方形	SK 89a→SK 30→SK 235	直径 (測定) 2.40×短径 0.54	0.30～0.38	372～373

古代の道路跡 (推定東山道側溝)

グリッド	発掘関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ	
SD 250a	21-15	SD 250a→SD 250b	0.96～1.12	0.16～0.21	推定東山道側溝	373～374
SD 250b	同上	同上	0.56～0.62	0.30～0.43	同上	373～374

中世の井戸跡

グリッド	形状	発掘関係	口径 (m)	深さ (m)	掲載ページ	
SK 232	20.0 17.0・17.5	円形	SK 49 より新	直径 2.73×短径 2.52	3.18	374～375
SK 237	18.5 17.0	円形	SK 353 より新	直径 2.65×短径 2.27	3.16	376～377
SK 232	19.5 18.5	円形	直径 1.76×短径 1.70	2.36	376～378	
SK 344	20.0 18.0	平型円形	SK 308 より古	直径 1.82×短径 1.70	2.40	378～379
SK 377	21.0 18.0	柳形	直径 2.96×短径 2.24	3.35	378～380	
SK 569	22.0 18.0	柳形	直径 2.74×短径 2.35	3.15	380～387	

中世の柱穴状土坑 82 基 (P 425・565・574・575・577・578・580・584・587～591・593・602・622～629・633a～633d・635a・635b・636～638・640・641・642a～642d・643・644・646・647a・647b・648a～648c・649～655・658・659・660a～660c・661～672・676～679・681・687～693) は第 124 表 (p.387～393) を参照。

中世の土坑

グリッド	形状	発掘関係	規模 (m)	深さ (m)	掲載ページ	
SK 92	19 17	平型形	SK 45・47・SK 40・276→SK 92・251→SK 264・297→SD 263	直径 0.50×短径 0.30	0.15～0.20	395～396
SK 251	19 17	平型形	SK 92 に付属 (90°回転)	直径 3.00×短径 1.94	0.23	395～396

中世～近世の溝状遺構

グリッド	発掘関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ	
SD 263	19 17, 19 18	SK 339→SK 47→SD 263, SK 346→348→351→SD 319→P 324・472→SK 387→397・344→SD 263→SD 201a→SK 214	0.70～1.40	0.12～0.24	SK 372 との開口部不明 SK 321 と P 291・320 より新しい溝状遺構あり	397～400

近世の溝状遺構

グリッド	発掘関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	掲載ページ	
SD 201a	16～21 17～21	SK 12・13・16・40・47・59・101→SD 201a, SK 209・202・343・SD 41・42→SK 62→SD 263→SK 1・289・289→SD 201a→SK 202・214	0.29～2.10	0.14～0.60	SD 204 と連携	398～402
SD 201b	同上	SK 207→SD 201b→SD 201a	0.68～0.90	0.09～0.15	同上	398～402
SD 204	18～21 17～21	SK 32・33→SD 41・42・304a・304b・319 より新	0.60～2.60	0.10～0.30		399～402
SD 503	21～25 17～20	SK 64a・64b・65・66・67・75・76・81・84・86→SD 304a・304b→527・SK 531・561・570→600→SD 595・SK 598・610・618→SD 503→SK 502・513・612→P 704・709	0.40～3.00	0.25～0.47		403～405

近世の土坑

	グリッド	形状	発掘関係	距離 (m)	深さ (m)	記載ページ
SK71	22-18	平盤型/円	SD500より新	長径 5.67 × 短径 5.05	0.62	405 ~ 406

時期不明の竪立柱建物跡

	グリッド	形状	発掘関係	長さ	幅	記載ページ
SK603	23-18	長方形	SK604より新	軒行 4 間 (17.06 ~ 7.20m)	竪行 3 間 (15.52m)	407 ~ 409

時期不明の井戸跡

	グリッド	形状	発掘関係	口径 (m)	深さ (m)	記載ページ
SE236	18.5-17.0	円形	SE105 → SE23 → SE90 → SE236	1.48	2.83	408 ~ 409
SE316	18.5-18.0	円形	SE33より新	直径 0.52 × 口径 0.47	1.20	408 ~ 409
SE345	19.5-18.5	円形	SE104 + SE51a → SE345	直径 1.66 × 口径 1.14	2.97	408 ~ 410
SE352	18.5-17.5	円形	SE10より新	直径 0.98 × 口径 0.92	2.66	410 ~ 411
SE455	20.5-20.0	円形		直径 1.05 × 口径 1.03	2.12	410 ~ 411

時期不明の溝状遺構

	グリッド	発掘関係	幅 (m)	深さ (m)	その他	記載ページ
SD205	18-17	SE88 → SD205 → SK5	0.42 ~ 0.60	0.09 ~ 0.16	近郊のSD201aと関連?	412 ~ 414
SD224	21-17-18	SE50-60より新	0.36 ~ 0.54	0.05 ~ 0.14		412 ~ 414/417
SD283	18-16, 19-16-17	SE23 → SE38 → SE37 → P.323 → SD283	0.44 ~ 0.74	0.03 ~ 0.15		412 ~ 415
SD505	21-19	SD506 → SD505 → SD503	0.26 ~ 0.39	0.04 ~ 0.10		413 ~ 415
SD506	21-18+19, 20-19	SD506 → SD505 → SD503	0.34 ~ 0.76	0.05 ~ 0.17		413 ~ 415/417
SD508	21-19	SE76 → SD508 → SD503	0.34 ~ 0.80	0.02 ~ 0.09	SD541+542と関連?	413 ~ 415
SD510	20-19-20	SD204と重複	0.26 ~ 0.45	0.03 ~ 0.12	古墳時代のSD508と関連?	413 ~ 417
SD518	21-19	SE76 → SD518 → SK519	0.32 ~ 0.59	0.04 ~ 0.16		413 ~ 414/416
SD521a	21-20	SD521b → SD521a	0.28 ~ 0.54	0.28	SD522と関連?	413 ~ 414/418 ~ 417
SD521b	同上	同上	1.30以上	0.30		413 ~ 414/418 ~ 417
SD522	21-20	SD535と重複	0.40 ~ 0.44	0.03 ~ 0.10	SD521aと関連?	413 ~ 414/418 ~ 417
SD541	21-19		0.25 ~ 0.29	0.02 ~ 0.05	SD508と関連?	413 ~ 414/417
SD542	21-19		0.58 ~ 0.99	0.16 ~ 0.23	SD508と関連?	413 ~ 414/417
SD560	22-18	SK71より古	0.19 ~ 0.58	0.08 ~ 0.13	SD686と関連?	413 ~ 414/417 ~ 418
SD686	22-18	SK572と重複	0.46 ~ 0.58	0.03 ~ 0.06	SD560と関連?	413 ~ 414/418
SD814	19-20	SD823と重複	1.10 ~ 1.74	0.12 ~ 0.15		413 ~ 414/417 ~ 418
SD815	19-19, 20-19-20		0.42 ~ 0.69	0.04 ~ 0.16	古墳時代のSD41+42と関連?	413 ~ 414+ 418 ~ 419
SD816	18-19, 19-20		0.28 ~ 0.63	0.14 ~ 0.30	SD818と重複?	413 ~ 414/419
SD817	17-19		0.18 ~ 0.43	0.02 ~ 0.10	SD818+826と関連?	413 ~ 414/419
SD818	17-19	SK813より古, SK819と重複	0.25 ~ 0.52	0.06 ~ 0.19	SD816+817+826と関連?	413 ~ 414/419
SD823	19-20	SD814と重複	0.36 ~ 0.41	0.08		413 ~ 414/419 ~ 420
SD826	17-19		0.52 ~ 0.58	0.02 ~ 0.09	SD817+818と関連?	413 ~ 414/420

時期不明の柱穴状土坑 132 基 (P.240-244 ~ 249-255 ~ 260-268 ~ 270-285-291-296-302-309 ~ 313-320-323-324-332 ~ 334-340-356 ~ 370-375-376-378 ~ 392-394 ~ 401-406-407-409 ~ 418-420 ~ 422-428-429-431 ~ 433-440 ~ 442-445-453-458 ~ 463-467-468-515-548・549-579-607 ~ 611-617-618-695-700 ~ 702-704 ~ 710-805) は第 140 表 (p.420 ~ 426) を参照。

時期不明の土坑 142 基 (SK-1-5-68-77-202-203-209-212 ~ 215-223-225-226-228 ~ 231-234-238-239-241 ~ 243-253-254-262-264-267・271 ~ 273-276 ~ 278-287 ~ 290-294-297 ~ 301-306-317-318-321-327 ~ 329-336 ~ 338-341-347 ~ 349-351-353 ~ 355-372-393-405-408・435-447-450 ~ 452-454-457-502-511 ~ 514-517-519-523 ~ 526-528-532-536-537-545-554-555-557 ~ 559-562 ~ 564-566 ~ 568-572・576-581 ~ 583-585-592-595 ~ 597-604 ~ 606-612 ~ 616-619-620-630 ~ 632-639-656-657-673-675-680-682-685-694-804-806-808・810 ~ 813-822) は第 141 表 (p.427 ~ 438) を参照。

時期・性格不明の遺構 (SX 218 は焼土, SX 308 は類瓦の可能性が高い・振り込み)

	グリッド	形状	発掘関係	距離 (m)	深さ・厚さ (m)	記載ページ
SX218	19.0-17.0			径 0.17 × 0.24	厚さ 0.02	441
SX308	19-18, 20-18	長機円形	SE51+SE104+SK436+SE344+P.438より新	東西 4.36 × 南北 7.94	深さ 0.20 ~ 0.30	441 ~ 442

例 言

1. 本書は、独立行政法人都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴い発掘調査を実施した東谷・中島地区遺跡群の内、権現山遺跡のSG2区・SG5区・SG9区・SG10区・SG15区（宇都宮市東谷町字立野・字杉村、同市砂田町字吉原・字原田および河内郡上三川町大字磯岡字西谷に所在）と、磯岡遺跡SG9区（河内郡上三川町大字磯岡字西谷所在）の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、栃木県教育委員会事務局文化財課の指導のもと、財団法人とちぎ未来づくり財団が独立行政法人都市再生機構と受託契約を締結し、埋蔵文化財センターが実施している。区画整理事業地内各遺跡の発掘調査は平成6年度（1994年度）から平成19年度（2007年度）まで実施した。

各遺跡周辺の確認調査は、平成6・7年度（1994・1995年度）に実施した。権現山遺跡の本調査は、平成7年度（1995年度）にSG2区、平成8年度にSG1区、平成9年度に2区、平成10年度に3区とSG5区、平成11年度に4区とSG9区・SG10区、平成12年度にSG15区の調査を実施した。磯岡遺跡SG9区の本調査は、権現山遺跡SG9区と一緒に平成11年度（1999年度）に実施した。また、平成17～24年度に、上記各地区の整理事業を実施した。

今回の報告書では磯岡遺跡SG9区と権現山遺跡南半部（SG2区・SG5区・SG9区・SG10区・SG15区）を報告する。権現山遺跡の北部は『東谷・中島地区遺跡群10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』（2010）で報告し、各地区の旧石器～弥生時代遺物もそこで掲載した。磯岡遺跡は、SG9区以外を『東谷・中島地区遺跡群No.1 磯岡遺跡（1区）』（1999）と『東谷・中島地区遺跡群6 磯岡遺跡（2～7区）』（2005）で報告済みである。

3. 東谷・中島地区遺跡群の発掘調査は以下の担当者により実施した。

平成6年度 菅谷 豊、塚本師也、塚原孝一

平成7年度 中山晋、稲木実、関口正明、増山孝之、山本訓志、塚原孝一、安永真一、藤田直也

平成8年度 中山晋、稲木実、増山孝之、山本訓志、塚原孝一、石川幸弘、藤田直也

平成9年度 初山孝行、小島昭寿、増山孝之、山本訓志、塚原孝一、石川幸弘、高野瑞枝、藤田直也

平成10年度 初山孝行、松本敏、名越侍郎、岡部正晴、小島昭寿、増山孝之、山本訓志、中村享史、塚原孝一、内山敏行、石川幸弘、高野瑞枝、柿沼利幸、藤田直也、大島美智子、田中裕子

平成11年度 田代隆、松本敏、名越侍郎、岡部正晴、小島昭寿、後藤信祐、中村享史、塚原孝一、内山敏行、高野瑞枝、柿沼利幸、上原康子、藤田直也、大島美智子、田中裕子、（発掘補助員）佐藤 齊

平成12年度 田代隆、名越侍郎、江頭進、中村享史、内山敏行、上原康子、藤田直也、矢野里織、（発掘補助員）佐藤 齊、田崎真理

平成13年度 田代隆、江頭進、中村享史、内山敏行、谷中隆、江原英、藤田直也、矢野里織、（発掘補助員）田崎真理

平成14年度 田代隆、江頭進、馬場秀典、中村享史、内山敏行、谷中隆、藤田直也、矢野里織、（発掘補助員）田崎真理

平成15年度 田代隆、小出功一、馬場秀典、中村享史、内山敏行、谷中隆、今平昌子、塚田浩久、（発掘補助員）岡田圭、田崎真理

平成16年度 田代隆、津野仁、小出功一、馬場秀典、内山敏行、谷中隆、今平昌子、（発掘補助員）田崎真理

平成17年度 田代隆、津野仁、小出功一、馬場秀典、内山敏行、谷中隆、今平昌子、

(発掘補助員) 田村雅樹

平成 18 年度 田代隆、津野仁、篠原浩恵、内山敏行、谷中隆、中山真理、(発掘補助員)津野田陽介

平成 19 年度 後藤信祐、大瀧貴史、石田善成、内山敏行、谷中隆、今平昌子、宮田宣浩、峰崎武昭、田村雅樹、(発掘補助員)津野田陽介

平成 20 年度 後藤信祐、内山敏行、今平昌子、亀田幸久

平成 21 年度 塚原孝一、内山敏行、今平昌子、亀田幸久

平成 22 年度 内山敏行、今平昌子、亀田幸久、藤田直也

平成 23 年度 内山敏行、今平昌子、亀田幸久

平成 24 年度 初山孝行、内山敏行、中村享史、亀田幸久

4. 各調査区の発掘調査は以下の担当者により実施した。

平成 7 年度(権現山遺跡 SG2 区) 関口正明・藤田直也

平成 10 年度(権現山遺跡 SG5 区) 山本訓志・石川幸弘・高野瑞枝・柿沼利幸・大島美智子・田中裕子

平成 11 年度(権現山遺跡 SG9 区) 後藤信祐・松本敏・塚原孝一・大島美智子

平成 11 年度(磯岡遺跡 SG9 区) 後藤信祐・松本敏・塚原孝一・大島美智子

平成 11 年度(権現山遺跡 SG10 区) 内山敏行・柿沼利幸・田中裕子・佐藤 斉

平成 12 年度(権現山遺跡 SG15 区) 江頭進・名越侍郎

5. 本文の執筆は後藤信祐・塚原孝一・谷中隆・内山敏行、編集は内山敏行が行った。第 1 章第 1・2 節と第 2 章第 1 節は、既刊の報告書 13 冊(『東谷・中島地区遺跡群』1～13)の記述をもとに、権現山遺跡・磯岡遺跡にかかわる部分等を加除修正した。これ以外の執筆分担は、遺構が後藤・谷中・塚原・内山、遺物は谷中・内山、まどめは内山が担当した。鍛冶関連遺物の記述は六澤義夫氏(たたら研究会)の御指導をいただいた。自然科学分析結果は平井昭司氏(東京都市大学名誉教授)・株式会社古環境研究所およびバリノ・サーヴェイ株式会社による。

6. 鍛冶関連遺物の分類と観察を六澤義夫氏、鍛冶関連遺物の中性子放射化分析を平井昭司氏、古環境関係の自然科学分析を株式会社古環境研究所、縄文時代石器石材鑑定を石岡智武氏(バリノ・サーヴェイ株式会社)、中世井戸出土桶の樹種同定をバリノ・サーヴェイ株式会社、この桶の保存処理を東都文化財研究所、基準点測量・航空写真撮影・航空写真測量と遺跡周辺全体図デジタルトレースを中央航業株式会社、SG5 区と SG10 区航空写真のデジタル接合作業を株式会社パスコにそれぞれ委託した。

7. 遺構写真は各調査担当者が、遺物写真は内山が撮影した。遺物の X 線写真は車塚哲久、航空写真は中央航業株式会社が撮影した。

8. 発掘調査から報告書作成まで、次の諸機関及び諸氏に御協力、御指導を頂いた。記して謝意を表したい。都市再生機構栃木開発事務所、宇都宮市教育委員会、上三川町教育委員会

金武重・朴升圭・趙成元・亀田修一・齋藤瑞徳・田中清美・橋本博文(五十音順、敬称略)

9. 各地区の調査成果は、栃木県教育委員会『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』20 平成 8 年度(1996)～『同年報』23 平成 11 年度(1999)、『埋蔵文化財センター年報』第 7 号(平成 9 年度)～第 10 号(平成 12 年度版)、宇都宮市教育委員会文化課『宇都宮市文化財年報』第 13 号[平成 8 年度]～第 16 号[平成 11 年度]で一部概要が公表されているが、本書をもって正報告とする。

10. 本報告書名は遺跡名ではなく、業務名である。

11. 本遺跡の遺物・図面・写真等は財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが保管している。

12. 発掘調査(確認調査・本調査)には次の方々のお力を得た。

会沢嘉明、青木良人、青柳 茂、阿久津正代子、阿久津フミ、阿久津昌子、鮎澤賢三、新井みや子、荒井光美、飯田国松、石井けい子、石川晶子、石川東司、石川てる子、石崎富美子、石崎幸子、石塚洋太郎、石渡ヨシ

イ、磯崎恵子、石濱ふみ子、伊東祐子、稲垣 節、稲川洋子、稲葉るみ子、猪瀬岩夫、今井光子、入江キイ、入江文子、入江タカ子、入江 徹、入江つや子、入江通子、岩本文子、上野久子、白井ツヤ、榎本健夫、大垣カツ、大垣一子、太田勝雄、太田リエ子、大塚サガ、大塚三代子、大塚サダ、岡田紀子、岡田イセ、岡田 満、小澤一雄、尾島サキ、片山重子、加藤マツエ、川島利子、川島 昭、川畑忠久、木村昭絵、工藤英子、黒川法子、毛塚雪子、郷間和子、小島清子、小高真理子、小林マス、小林ミツエ、齋藤みつ、齋藤幸子、齋藤近由、坂井原弓子、坂入廣子、坂入厚子、坂本キミ子、笹崎剛夫、佐藤武尚、佐藤ヨシ、佐藤つや子、佐藤ミサ子、下谷文男、篠原信子、柴タミ子、清水タネ、椎貝フヂエ、椎貝祥子、白井チセ子、杉山 巧、鈴木恒正、鈴木ヨシ子、高木ハマ、高嶋緞子、高嶋勝征、高嶋典子、高嶋ミヨ子、高嶋キヨノ、高島秀子、高嶋一平、高田滋子、高野ヨシ子、高橋平次、高橋松男、高橋洋子、高秀ハツエ、高松美和子、高松米子、高山シツ江、田崎真理、田崎照明、田崎信夫、田仲静男、田仲ヤス、田仲コト、田中征子、対馬順子、鶴見世及、寺内千代子、寺内 樹、寺内キヌ、寺内ミツエ、寺内キイ、寺内千代子、豊田孝子、直井房一、直井清之、中山伸子、野口忠士郎、野口コウ、野崎久美子、野澤 守、野沢トミ、野沢トシ、野沢伸嘉、野澤 充、野沢トシ、橋本フヂ、畠山 弘、馬場キワ、林 孝行、伴 三千子、平井克美、平井待子、平石キヨノ、広田愛子、深澤光一、福田ツヤ、福田林蔵、福田純子、藤原美枝、古谷安司、細野重信、本田 衛、本牧キン、増淵キミ、増淵皓三、増淵三男、増淵フミ、増淵正弘、増山晃広、真分フキ、宮本スミエ、宮本俊明、宮本恒雄、室井ケン、茂垣 栄、李保美枝、望月スズイ、百瀬洋子、森田幸江、谷田部キヨ子、柳田加子、柳田悦子、梁崎ヨシ、山崎洋子、山崎千代子、吉沢千代、吉田みつえ、渡辺洋子、渡辺四郎、渡辺フミ。

13. 整理・報告書作成作業には次の方々の御協力を得た。

天野崇弘・荒川(篠原)知美・石下泰枝・石田静枝・石瀬有希子・出井百合子・伊藤恵美子・市川貴子・稲葉順子・沖田有孝・太田由美・生内千春・尾見 愛・蒲生光子・川瀬晶子・齋藤久美子・篠原彰子・芝田恵美・菅野路子・鈴木実花・角田(飯塚)織絵・関 和美・高橋(赤荻)久美子・高松美和子・田崎 望・鶴見里子・斗沢史子・豊原あき子・中山(田崎)真理・根本明美・野沢茂子・比嘉睦美・福田春美・藤原真弓・松崎和子・松本恵子・丸茂智子・本橋敬子・茂呂由実・横田通子・米野裕子・和田恵美・渡辺都

14. 遺跡・遺構・遺物の記載方針は下記のとおりである。

(遺跡)

公共座標 各調査区の全体図には、国土調査法による平面直角座標第 IX 系の座標値を記入した。日本測地系による座標値の他に、2002 年 4 月から使用されている世界測地系の座標値もあわせて表示した。緯度・経度の表示は世界測地系による。

遺跡略号 権現山遺跡南部各地区と磯岡遺跡 SG9 区の略号は、調査区周辺を代表する小字名に対応して UT-SG (宇都宮市・杉村) を用いた。権現山遺跡北部では UT-GN (宇都宮市・権現山) の略号を用いた地区もある。

権現山遺跡各地区の略号は UT-GN-II (権現山遺跡 2 区)、UT-GN-III (権現山遺跡 3 区)、UT-GN-IV (権現山遺跡 4 区)、UT-SG- I (権現山遺跡 SG1 区)、UT-SG-II (権現山遺跡 SG2 区)、UT-SG- V (権現山遺跡 SG5 区)、UT-SG-IX (権現山遺跡 SG9 区)、UT-SG- X (権現山遺跡 SG10 区)、UT-SG-XV (権現山遺跡 SG15 区) である。

磯岡遺跡 SG9 区の略号は UT-SG-IX である。権現山遺跡 SG9 区と一括して調査したので、同一の略号を

遺跡名・地区名新旧対応表

報告書掲載遺跡名	遺跡略号 (登録調査時点の旧遺跡名)	報告書・参考事項
権現山遺跡 2 区	UT-GN-II (権現山遺跡 II)	『東谷・中島地区遺跡群 10』
権現山遺跡 3 区	UT-GN-III (権現山遺跡 III 区)	『東谷・中島地区遺跡群 10』
権現山遺跡 4 区	UT-GN-IV (権現山遺跡 IV 区)	『東谷・中島地区遺跡群 10』
権現山遺跡 SG1 区	UT-SG- I (杉村遺跡 I)	『東谷・中島地区遺跡群 10』 ※杉村遺跡 SG1 区と一緒に調査し略号も同じ
権現山遺跡 SG2 区	UT-SG-II (杉村遺跡 II)	本書
権現山遺跡 SG5 区	UT-SG- V (杉村遺跡 V)	本書
権現山遺跡 SG9 区	UT-SG-IX (杉村遺跡 IX 区)	本書 ※磯岡遺跡 SG9 区と一緒に調査し略号も同じ
権現山遺跡 SG10 区	UT-SG- X (杉村遺跡 X 区)	本書
権現山遺跡 SG15 区	UT-SG-XV (杉村遺跡 XV 区)	本書
磯岡遺跡 SG9 区	UT-SG-IX (杉村遺跡 IX 区)	本書 ※権現山遺跡 SG9 区と一緒に調査し略号も同じ

使用している。現地調査時名称の「杉村遺跡 IX 区 東区」が磯岡遺跡 SG9 区に相当する。

東谷・中島地区の確認調査を実施した部分の略号は UT-TN（宇都宮市・東谷・中島地区）で、権現山遺跡南部および磯岡遺跡 SG9 区の確認調査出土遺物には UT-TN-SG（宇都宮市・東谷・中島地区・杉村）と注記した。

発掘調査時には、地区番号をローマ数字（I 区～X 区）で表記した。また、「杉村遺跡 V」以前と「権現山遺跡 II」以前は「区」の文字が付いていない。本書では「アラビア数字+区」（1 区～15 区）に統一した。

〔遺構〕

遺構名 略号は、竪穴建物跡を SI、溝状遺構を SD、土坑を SK、柵列を SA、掘立柱建物跡を SB、井戸を SE、その他（周溝遺構・集石遺構・道路状遺構・遺物出土地点）を SX とした。土坑は SK で、柱穴状土坑は略号を P とした場合もある。原則として現地調査時の遺構番号を使用し、遺構の性格認定に伴って記号を変更した場合はある（例：旧名称 SG10 区 SK-428 → SG10 区 P-428）。また、以下の遺構は、現地で使用した旧番号から変更・統一を行った。（ ）内が旧遺構名である。

SG2 区 SX-47 (← SG2 区 C 区石積)	SG10 区 SI-51b (← SG10 区 SI-109 新期)
SG5 区 SI-4 の掘出ピット (← SG5 区 SK-48)	SG10 区 SI-51c (← SG10 区 SI-109 古期)
SG5 区 SD-44 の東部 (← SG5 区 SI-102 に連続する北東部)	SG10 区 SI-51b の南東主柱穴 P4 (← SG10 区 SK-438)
SG9 区 SX-54 (← SG9 区 SK-54・55・56)	SG10 区 SI-51c の北東主柱穴 P1 (← SG10 区 SK-430)
SG10 区 SI-18 の貯蔵穴 (← SG10 区 SK-295)	SG10 区 SK-94・95 (← SG10 区 SI-94・95 貯蔵穴)
SG10 区 SI-19a・b の一部 (← SG10 区 SI-93・96)	SG10 区 SI-105 の主柱穴 P1～P4 (← SG10 区 SK-279・280・281・282)
SG10 区 SI-21 掘方の一部 (← SG10 区 SK-284)	SG10 区 SI-113a (← SG10 区 SI-113)
SG10 区 SI-34a (← SG10 区 SI-103)	SG10 区 SI-113b (← SG10 区 SI-116)
SG10 区 SI-38 の貯蔵穴 (← SG10 区 SK-434)	SG10 区 SK-286 (← SG10 区 SI-97 の一部)
SG10 区 SI-47 の貯蔵穴 (← SG10 区 S-98)	SG15 区 流路 1・流路 2 (← SG15 区旧河道 A・旧河道 B)
SG10 区 SI-51b・c (← SG10 区 SI-109)	磯岡遺跡 SG9 区 SI-49 の付属施設 (← SG9 区 SK-45・46・51)
SG10 区 SI-64b (← SG10 区 SI-112)	
SG10 区 SI-75 の掘出ピット (← SG10 区 SK-586)	
SG10 区 SI-51a (← SG10 区 SI-51)	

縮尺 遺構図の縮尺は、竪穴建物跡を 1/80、カマドを 1/40、掘立柱建物跡・遺物集中地点・井戸を 1/80（古墳時代井戸は 1/40）で示した。SG2 区の集石遺構は 1/20、流路跡は平面図 1/200 である。土坑は、小形土坑や遺物の多い場合が 1/40 で、それ以外の土坑および柱穴状土坑が 1/80。柵列と柱穴群は 1/80 または 1/100 で方形柵列全体図が 1/300。その他の遺構は、各図中にスケールで示した。

土層・柱穴等の番号 遺構内外の土層や、竪穴建物跡・掘立柱建物跡に伴う柱穴・土坑などに対して現地で与えた P1・P2・P3…などの番号は、整理作業時に番号を変更しないように心がけた。一部においてやむをえず整理・変更したものがある。

方位 図示した方位は、小縮尺の地形図（第 1 図）が真北、他の図は座標北（平面直角座標第 IX 系の X 軸方向）である。遺構の主軸方位は座標北に対する振れを示す。竪穴建物跡の主軸方位は、縦横 2 軸のうち、入口施設を通る方の軸で示し、入口が不明の場合は竪穴の長軸方向で示した。

標高 断面図基準線の値は海拔標高で、水系記号または縮尺の脇に示した。

〔遺物〕

計測値 「口」「頸」「底」はそれぞれの径、「高」は器高、「大」は最大径、「復」は復原値、「残」は残存値、「推」は推定値を表す。

縮尺 遺物図の縮尺は、次のとおりである。土師器・須恵器・中近世土器は 1/4、土師質小皿（かわらけ）・土製品・焼粘土塊・石製品・鍛冶関連遺物は 1/2 または 1/4、鉄製品と玉類は 1/2、小形の玉は 1/1。石器

類は編物石・自然礫・金床石を1/8（金床石剥片は1/4）、縄文時代土器・土製品と礫器・スタンプ形石器・石斧・磨石を1/4、スクレイパー・石鏃を2/3とした。これらは原則で、例外もある。

破片の拓影図 縄文土器は外面・断面または外面・内面・断面、土師器・須恵器などは内面・断面・外面の順序で配置した。

器質 須恵器は断面を黒塗り、金属製品は斜線、その他の遺物は白抜きにして示した。

器面調整と施釉 古墳時代以降の土器は、ナデの範囲を破線、ケズリの範囲を実線、ケズリ方向を矢印、漆仕上げと施釉の範囲を一点鎖線で示した。

色調 農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1967『新版 標準土色帖』の18版（1996）により表示する。土器・土製品は焼成当時の色調に近い部分で観察し、黒斑や二次的なス・オコゲ・被熱変色・塗彩は別の特徴として扱う。

胎土 混和材の多少を基準に、「粗い／やや粗い／やや緻密／緻密」とする。

・混和材の種類：径0.2mm未満は「微粒」、0.2～0.5mmは「細粒」、0.5～2.0mmは「粗粒」、2.0mm以上は「礫」とする。

・混和材の色は「灰色・白・黒・赤・褐色・透明」とする。透明と白の中間的なものは「半透明」とした。雲母は「白」・「黒」または「金色」とする。

焼成 「硬質／やや硬質／やや軟質／軟質」とする。特別に示す必要がある場合は「良好」などと記す。

不掲載遺物の出土量 各遺構から出土した遺物のうち、実測図を掲載しなかった破片の数と重量を計量して記述した。別時代の遺物は除外したが、同時代で異なる時期の混入遺物は除外していない。

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

宇都宮テクノポリス計画は、「高度な技術を持つ産業の集積、産・学・官の共同研究と技術交流による頭脳ネットワークの形成、そして自然と都市機能が調和した快適な生活環境づくり」を目標に栃木県が昭和58年7月に栃木新時代創造計画で開発計画を策定し、翌年5月に高度技術工業集積地開発促進法（テクノポリス法）に基づき通商産業省（当時）の開発計画の承認を受けた。

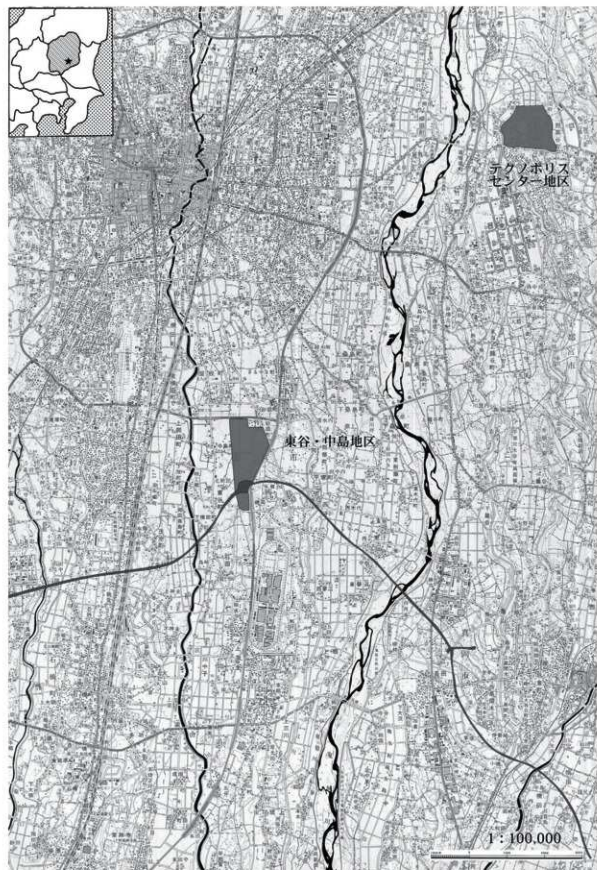
この計画を受け、昭和60年度より県企画部と県教育委員会（以下「県教委」という）は開発区域内遺跡の取り扱いについて協議を開始した。平成元年度には栃木県と宇都宮市が住宅・都市整備公団（以下「公団」という）に開発の要請を行った。公団はこれを了承し、平成2年度より開発区域の用地取得に入った。

公団が事業主体となるテクノポリス計画は、宇都宮テクノポリスセンター土地区画整理事業と東谷・中島土地区画整理事業の2地区である。前者事業区域は、宇都宮市野高谷町・刈沼町・板戸町にまたがる地区（以下「センター地区」という）の177.2haに及び、「住宅」を核に県工業技術センター、産業支援施設、商業施設、民間研究施設、小・中学校などを整備したニュータウン計画で、テクノポリスが目指す「産・学・住・遊」の拠点整備をも担う。後者事業区域は、宇都宮市東谷町・中島町・砂田町・平塚町・屋板町・上横田町・西刑部町と上三川町磯岡・西汗にまたがる地区（以下「東谷・中島地区」という）の137.5haに及び、北関東自動車道路や新4号国道などの広域交通網と結び付いた利便性を生かし流通業務施設や先端技術、高度技術産業の研究所・工場などの整備を図ることにある。

平成2年7月には公団から県教委へ事業区域内の埋蔵文化財の有無について照会がなされた。県教委は、東谷・中島地区について「周知されている遺跡6か所と遺跡の可能性がある区域を含め、約90haの確認調査が必要」と回答した。その後、開発と埋蔵文化財調査のスケジュールを調整する協議が継続された。

平成6年8月、埋蔵文化財保護と開発事業の円滑な推進を図るため、県教委・宇都宮市・公団・埋蔵文化財センターの四者が事業区域内の分布調査を実施した。その結果、センター地区では周知の遺跡8か所・面積267,000㎡、試掘が必要な地点7か所・面積95,500㎡、東谷・中島地区では周知の遺跡12か所・面積490,400㎡、試掘が必要な地点8か所・面積340,600㎡であった。この結果を基に発掘調査を開始する協議が行われ、同年9月1日付けで県教委の調整のもと、公団と（財）栃木県文化振興事業団は「東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」の受託契約を締結し、確認調査を開始した。平成7年4月からは、周知の遺跡の本調査と確認調査を継続中である。センター地区については、平成7年9月1日付けで公団と（財）栃木県文化振興事業団が「宇都宮テクノポリスセンター地区埋蔵文化財発掘調査」の受託契約を締結し、確認調査を開始した。翌年からは、調査規模の拡大に伴い宇都宮市が同地区の発掘調査を担当している。

平成8年12月には東谷・中島地区、翌年4月にはセンター地区の区画整理事業が建設大臣の認可を受け、開発事業が開始された。公団・県文化財課・宇都宮市・埋文センターは、年数回の綿密な協議を重ねつつ開発事業計画に沿った発掘調査を行っている。なお、開発事業は平成11年から都市基盤整備公団、平成16年7月からは都市再生機構に継承された。（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センターは外郭団体の統合再編により平成12年度から（財）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター、平成23年度から（財）とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターとして業務を継承している。



第1図 東谷・中島地区位置図 (1/10万)

第2節 調査の方法

独立行政法人都市再生機構（旧住宅・都市整備公団および都市基盤整備公団）による東谷・中島土地区画整理事業の事業区域は、東西約1.0km、南北約2.5kmの137.5haに及ぶ。

調査対象地区は、周辺の遺跡範囲及び平成6年8月に県教育委員会事務局文化課（現文化財課）が事業予定地を踏査した成果に基づいて決定された。この結果、10地区12遺跡、調査対象面積831,000㎡が把握された。対象面積が膨大なため、これらの遺跡範囲の確定及び調査事業量の把握が急務とされた。よって、住宅・都市整備公団による用地取得の完了した部分より確認調査を実施し、その結果に基づき概ね公団の示す調査優先地区について順次本調査を行った。確認調査の結果によっては遺構外とされる地区もあり、随時本調査地区より除外した。また、平成9年には発掘調査の進展に伴い調査対象地区の見直しを行った。この結果、調査対象地区は確認調査により遺跡外とした地区も含め10地区12遺跡、896,800㎡となった。さらに2006（平成18）年度に面積の見直しがなされ、総面積887,600㎡となった。

確認調査

本調査に先行する確認調査は、遺跡範囲を確定して遺構全体量を把握することを目的とした。調査にあたっては調査対象範囲内にトレンチを設け、概ねローム層上面まで掘削することにより遺構・遺物の有無、また、その遺存状況の把握に努めた。調査対象面積に対するトレンチ総面積は5～10%を目安とした。

グリッド設定 調査対象地区の南西外を原点（ $X=0, Y=0$ ）とする局地座標を定めた。原点は、日本測地系による平面直角座標第IX系 $X=52,800, Y=6,400$ （世界測地系では $X=53154.1623, Y=6107.0425$ ）の位置である。この座標は調査対象地区全体を覆い、20m単位に南から北へ $X=0 \sim 130$ 、西から東へ $Y=0 \sim 60$ と展開する。また、20m×20mの一グリッドをその南西隅の座標値で呼ぶ。一グリッド内の細分は小数点以下の座標値を用い、同様の方法で行う。以上のグリッドは、本調査時においても踏襲した。

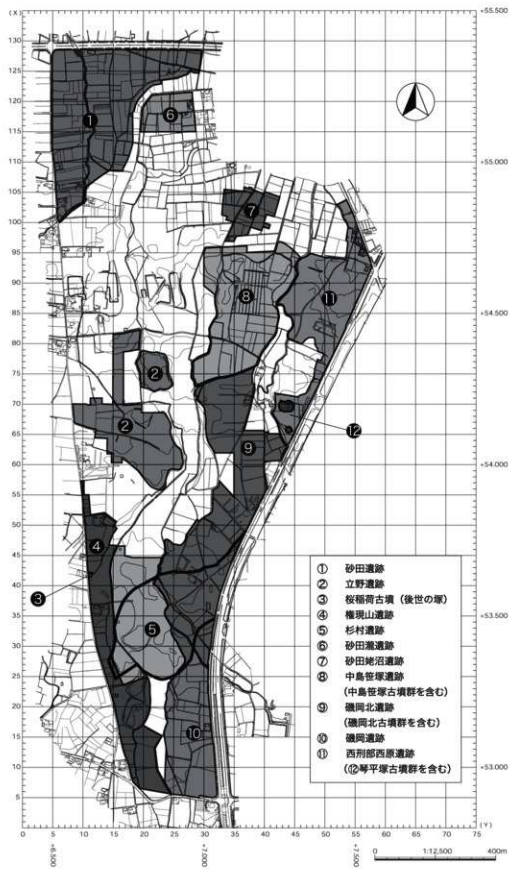
トレンチの設定 トレンチは幅約2mで、グリッドラインの北側に沿って、20ないし40mに一本の割合で東西方向に設けることを基本とした。これは、地形が概ね南北に伸びる低地部とその東西の低台地部により形成されていることによる。記号TXにX軸の座標値を添えてトレンチの名称とし、必要に応じてY軸の座標値（ $Y=0 \sim 60$ ）を添える。なお、対象地区の微地形の相違等状況の変化によっては柔軟に対応した。

トレンチの発掘 重機を用い、精査の後、図面と写真による記録を行い、遺物を取り上げた。また、必要に応じ、一部遺構の精査、自然科学分析を実施した地区もある。権現山SG2区北東部・SG10区北側と東側・SG15区周辺では、1994年度確認調査トレンチの土層試料でテフラ検出と古環境復原のための分析を行った（第7章）。

本調査

公団の示す地区とその優先順位に従って実施した。これは公団の用地取得状況と工事展開に従ったものである。よって、調査時にはこれを10地区12遺跡における調査地区とし、遺跡名に算用数字を付して調査地区名とした。2000（平成12）年度までは算用数字ではなくローマ数字（I区、II区、III区…）を使用していたが、この報告書ではすべて算用数字を用いる。遺構の管理は各調査区で行い、種別によらず原則として通し番号とした。遺物は出土遺構単位で管理し、種別によらず通し番号とした。

現地調査は、重機による表土除去、基準航設定、遺構確認、各遺構精査、航空写真撮影・測量、遺物洗浄、必要に応じ自然科学分析等の手順で概ね実施した。調査方法は担当者間で統一を図り、図面・写真等の等質な記録作成に努めた。表土除去、基準点測量、航空写真撮影・測量等は外部委託して効率化を図った。遺構が少ない権現山遺跡SG2区・SG15区および遺構がない権現山遺跡3区以外は、各地区の航空写真を撮影し、調査区の遺構配置と等高線を図化した。



第2図 東谷・中島地区遺跡群遺跡位置図

第1表 東谷・中島地区遺跡群遺跡一覧表

No.	遺跡名	略号	所在地	面積 (m ²)	時代・種別	調査前の状況
1	砂田遺跡	UT-SN	宇都宮市砂田町字籠、同市 屋敷町字赤沢・字赤沢向、 同市中島町字上里木地	145,200	旧石器剥片、縄文時代陥穴、 古墳～平安集落、方形周溝、 近世墓、近世以降の築室	田畑等
2	立野遺跡	UT-TT	宇都宮市東谷町字立野、 同市中島町字小鷺谷田	122,800	縄文・古墳時代と中世の集落、 弥生時代土坑、終末期方墳、 奈良時代整穴建物、近世の溝	田畑・林
4	権現山遺跡 (3枚稲倉古墳を含む)	UT-GN UT-SG	宇都宮市東谷町字立野・ 字杉村・字下原、 同市砂田町字古原・字原田、 上三川町磯岡字西谷	92,000	古墳時代集落・築込田館、 縄文・平安時代築込建物、 奈良・平安時代の推定東山道、 中世集落、旧石器(尖頭器)	畑地等
5	杉村遺跡	UT-SG UT-GN	宇都宮市砂田町字原田地 上三川町磯岡字コムナセゴ	22,000	縄文～古墳・奈良時代集落、 中世集落	田畑・林等
6	砂田籠遺跡	UT-ST	宇都宮市砂田町字籠	60,000	縄文土器・中近世集落	田畑等
7	砂田籠沼遺跡	UT-SU	宇都宮市砂田町字籠沼	16,400	古墳～平安時代集落 中世の井戸・溝・土坑	田等
8	中島世界塚遺跡 (中島世界塚古墳群を含む)	UT-NK	宇都宮市砂田町 字世界塚・古原・姥沼	91,100	旧石器剥片、縄文土坑、弥生 土器、古墳群(16基と土器類、 古墳～奈良時代と中世の集落)	畑・林
9	磯岡北遺跡 (磯岡北古墳群を含む)	UT-SG	宇都宮市砂田町字世界塚、 上三川町磯岡字世界塚、 同町磯岡字コムナセゴ	128,100	縄文～奈良時代・中世集落、 古墳群(10基と土器類等)、 奈良・平安時代の推定東山道	田等
10	磯岡遺跡	KM-IS	上三川町磯岡字中原、 同町磯岡字屋敷西浦	72,000	縄文～平安時代集落、 弥生時代土坑	田畑等
11	西刑部西原遺跡 (12等平塚古墳群を含む)	UT-NS	宇都宮市平塚町西原、 同市西刑部町西原、 上三川町西汁字西赤庭	138,000	縄文時代陥穴、旧石器・古墳～ 平安時代集落、古墳群(14基、 奈良・平安時代の推定東山道)	田畑等

・4・9・10の各遺跡は5枚稲倉遺跡とは別遺跡だが、現地調査時に「杉村遺跡」(UT-SG)の名称や略号を用いた部分がある。
・確認調査の略号は UT-IN とし、本遺跡群内における位置はトレンチ及びグリッド番号で示した。

第3節 調査の経過

【確認調査】平成6・7年度(1994・1995年度)

関係各機関との協議、事務処理、調査方針の策定を経て、本書で報告する権現山遺跡南部と磯岡遺跡の確認調査を1994～95(平成6・7)年度に実施した。作業の手順は前節の通りである。基本的には重機によるトレンチ発掘を先行させ、トレンチ内精査、次いで遺構確認状況等の写真撮影、実測等記録の順序で行った。

1994(平成6)年度には、1995年2月28日から3月末まで、磯岡遺跡の台地上および低地で確認調査を行った。権現山遺跡SG2区・SG15区およびその北側に続く低地にはTX11～TX23を設定し、Hr-FA、As-BおよびAs-Cテフラ層を含む低地堆積層や土器片などを確認した。古墳時代のAs-C・Hr-FAと古代のAs-Bテフラがごく薄い層として認められる部分が多い。水田遺構などは確認されなかった。

1995(平成7)年度には、1996年1月8日から2月14日まで、権現山SG5区・SG9区・SG10区と磯岡遺跡SG9区の確認調査を行った。権現山SG5区に試掘トレンチTX11～TX16、権現山SG10区北半部に試掘トレンチTX22～TX24、権現山SG9区の中央区に試掘トレンチTX6～TX8、磯岡SG9区に試掘トレンチTX7、磯岡SG9区の南北隣接地に試掘トレンチTX6～TX10を設定して、遺構の有無や密度を確認した。

以上のうち、権現山遺跡SG2区からSG15区にかけて(12-21、13-21、14-20グリッド)とSG10区周辺(16-19、18-22グリッド)では、低地堆積土層に対するテフラ検出分析とプラント・オパール分析を実施し、うち2地点では花粉分析も実施した(第7章)。

【本調査】平成8～10年度(1995～2000年度)

磯岡遺跡全体では、県調査区(区画整理分と高速道路分)に町調査区を合計するとこれまでに46,620m²の調査を実施している。そのうち磯岡遺跡SG9区は600m²の調査を実施した小地区である。また、権現山遺跡は2・3・4・SG1・SG2・SG5・SG9・SG10・SG15区の9地区に分けて合計71,900m²の調査を実施し

第1章 調査の経緯

た。これらのうち、本書で報告する権現山遺跡南部（SG2区・SG5区・SG9区・SG10区・SG15区）と磯岡遺跡SG9区の本調査実施経過を以下に示す。

【権現山遺跡南部】

以下に示す各調査区の地名と番地は、開発以前のものを示した。区画整理終了後は、SG5区西半部とSG10区西端部は宇都宮市東谷町地内の都市計画道路（無番地）になり、それ以外の権現山遺跡南部は栃木県河内郡上三川町大字磯岡 421-1 番地に変更されて大形商業施設およびその敷地・駐車場になっている。

権現山遺跡 SG2 区 上三川町大字磯岡字西谷 407-1・407-2・408-1・408-2・408-5・409-1・409-2・410-1 7,000㎡ 溝1条、土坑51基、集石遺構1基、自然流路7条

平成7年度（1995年12月4日～1996年3月18日）

調査担当者：関口正明・藤田直也

1994（平成6）年度の確認調査で設定した3本の試掘トレンチ（TX11～TX13）を、12月4日から5日まで重機で再掘削した。続いて、12月6日と7日にはTX9とTX10を新規設定して掘り下げた。各トレンチの土層堆積状況を観察した後に、12月11～14日にA区とB区の表土除去、1月8～17日にC～F区の表土除去を重機で行なった。各小地区ごとに直線状の攪乱溝（後世の暗渠）を掘り下げ、また必要に応じてサブトレンチも設けて、12世紀初頭に降下したAs-Bテフラと、古墳後期初頭に降下したHr-FAテフラの降下面を断面で確認した。テフラ層を参考にして古墳時代水田遺構の確認を目指したが、水田は認められなかった。群馬県域のように厚いテフラは降下しないので、耕作地ではすぐに攪乱されることが予想できる。したがって、Hr-FAの薄層が残るSG2区は水田に利用しなかったと考えられる。各小地区で認められた旧流路跡7箇所と、F区の中洲状微高地にある土坑群を調査した。3月18日にはSG2区的全景写真を撮影して現地作業を終了し、航空写真撮影は実施しなかった。区画整理の造成工事に伴う仮設の調整池として使用することが決定していたので、調査区の埋め戻しは行わなかった。現地調査時には小字西谷（にしや）を参考にして「西谷遺跡」（略号KM-NS）の呼称も使用し、調査終了後に「杉村遺跡II」（略号UT-SG-II）と呼び変え、最終的には遺跡名称を「権現山遺跡SG2区」（略号UT-SG-II）と決定した。

権現山遺跡 SG5 区 宇都宮市東谷町字杉村 912-1・912-2、東谷町字下原 7・8・9・10 7,000㎡

竪穴住居跡37棟、掘立柱建物跡3棟、柵列遺構2箇所（居館柵1+その他の柵1）、溝12条（居館外郭溝2+その他の溝10）、井戸4基、土坑119基（円筒形土坑3基を含む）、柱穴状土坑74基、遺物集積遺構1基、性格不明遺構1基

平成9年度（1998年2月6日～1998年3月19日）

平成10年度（1998年4月20日～9月7日、1999年2月18日～1999年3月26日）

調査担当者：山本訓志・石川幸弘・高野瑞枝・柿沼利幸・大島美智子・田中裕子

重機で表土を除去した後に、98年2月10日から26日まで遺構確認作業、2月27日から遺構調査を行った。99年度は4月20日から作業を始めた。航空写真撮影は98年7月27・28日の両日に実施した。27日には方形柵列遺構だけに白線を入れた状態、翌日には全遺構に白線を入れた状態でそれぞれ撮影した。7月28日の撮影は立野遺跡3区を撮影するヘリコプターで権現山遺跡を同時に撮ったものである。航空写真測量も同時に実施したが、撮影時に水没していた低地調査区の等高線は記入できなかった。98年8月22日には、方形柵列遺構SA-151、竪穴建物SI-18・100・116・137、SD-43・44、祭祀遺構SX-118を中心として現地説明会を実施した。98年9月8日から99年2月15日（金曜日）までは調査を休止して砂田姥沼遺跡1区の調査に移動した。99年2月18日から権現山SG5区を再開して、夏に水没していた低地部の土坑群を中心に台地上の一部遺構も調査し、3月26日に終了した。補足作業として、99年4月15日に低地調査区の等高線を平板測量で追加記入して、4月27・28日にはSG10区表土除去の重機で低地部土層観察ベルトの表土を除去して土坑群を追加調査した。

権現山遺跡 SG9 区 上三川町大字磯岡字西谷 406-1・406-3・407-1・407-2・408-1・408-5・409-1・409-2 4,800㎡ 溝5条、道路状遺構1箇所、土坑21基

平成11年度(1999年12月24日～2000年3月24日)

調査担当者：後藤信祐・松本敏・塚原孝一・大島美智子

磯岡遺跡 SG9 区の西側に隣接する調査区である。現地調査時には磯岡遺跡 SG9 区と権現山遺跡 SG9 区をまとめて「杉村遺跡 IX 区」として実施した。「杉村遺跡 IX 区」の名称で調査を実施した 5,400㎡のうち、調査時に「中央区」・「西区」と呼称した中央以西の 4,800㎡が権現山遺跡 SG9 区である。

12月24・27日と2000(平成12)年1月6～14日に表土を重機で除去して、1月24・25日に遺構確認作業を行い、1月26日から土坑群の調査を始めた。南東部に隣接する磯岡 SG9 区と一緒に、2月24日に航空写真を撮影した。2月28日には低地と微高地の土層やテフラを確認するための断ち割りトレンチを重機で掘り、3月3日から22日までトレンチの土層断面図を作成した。東にある磯岡遺跡 5 区を撮影する機会が3月9日にあり、権現山 SG9 区に断ち割りトレンチを設定した状況の航空写真を再度撮影した。3月7日から中央区東南部の低地を掘り下げて3月23日に低地部の等高線図を作成し3月24日に低地部の全景写真を撮影して、調査を終了した。

権現山遺跡 SG10 区 宇都宮市東谷町字杉村 911-1・911-2・912-1・913～915・916-1・916-2、同市砂田町字原田 434-2 13,400㎡ 竪穴建物跡 88 棟(他に SG5 区とまたがる竪穴建物 2 棟)、掘立柱建物跡 1 棟、井戸 12 基、溝 48 条、土坑 208 基、円筒形土坑 9 基、柱穴状土坑 231 基、焼土 1。

平成11年度(1999年4月23日～2000年3月24日)

調査担当者：内山敏行・柿沼利幸・田中裕子・佐藤 齊

調査前は山林で、伐採終了後の抜根作業に4月2日から6日まで立ち会って遺物を回収した。現地表で確認できる溝痕跡 SD-201・204 の北・西・南辺を通る土手を設定した後に、4月23日から5月26日まで重機で表土を除去した。4月27日から遺構確認、5月14日に南端から遺構調査を開始した。6月30日に大雨で SG10 区と SG5 区のほぼ全体が水没した。これは、北関東自動車道の盛土の開口部から雨水が SG10 区に集中流入したことが原因だが、低地から僅かに高い低台地に立地する遺跡群であることをよく示す「水害」であった。6月8・9日には都賀町合戦場小学校、12月9日に宇都宮南高校、2月7日に宇都宮東 YMCA の体験学習を受け入れ、10月15日には埋蔵文化財センター職員研修で見学を行った。10月28日に SG10 区南半部調査途中の垂直写真を、砂田遺跡 6 区を撮影する飛行機から撮影している。2000年3月2日に白線を入れて SG10 区全体の航空写真を撮影後、竪穴建物の貼床除去や低地包含層の調査などを行った。手作業で底まで調査した SE-316・552 以外の井戸 10 本は、3月6・7日に重機で底部まで断ち割り調査を行い、最下層は土壌水洗も実施して遺物を回収した。現地調査を3月24日に終了した。その後、遺物水洗、井戸出土製品略測、鍛冶遺構床面採取土水洗・磁選作業を実施した。

権現山遺跡 SG15 区 上三川町大字磯岡字西谷 410-1・410-2・410-3 900㎡ 土坑 7 基、溝 2 条、自然流路 2 条

平成12年度(2001年2月28日～2001年3月23日)

調査担当者：江頭進・名越侍郎

2000年2月28日から3月2日まで、調査予定地にあった土山を重機で除去・運搬し、3月5日から3月9日まで表土除去を行った。通常より少し深いレベルまで表土を除去してしまった点に、少し問題もあった。3月9日には重機による排土の土山成形作業と並行して遺構確認作業と確認写真撮影を開始した。3月12日(月曜日)から3月21日まで調査区壁面の土層観察・分層作業、グリッド杭設定、遺構調査、断面図作成・撮影を行い、3月22日に遺構完掘写真を撮影して遺構平面図・調査区全体図を作成した。3月23日午後には撤収作業を行い、調査を終了した。遺構が少なかったため、航空写真は撮影しなかった。SG15 区

第1章 調査の経緯

の調査結果からみて、SG15区周辺は遺構遺物の密度が低いと判断されたので、SG15区の南北隣接地は発掘調査が必要ない地区として扱うことになった。東谷・中島土地区画整理事業地内における権現山遺跡の発掘調査はこのSG15区(調査時名称「杉村遺跡XV区」)で終了した。この後における「杉村XVI区」から「杉村XVIII区」までの調査は、北方にある磯岡北古墳群のSG16区～SG18区に該当する。

【磯岡遺跡西部】

今回報告するSG9区は磯岡遺跡の西端部である。区画整理前は大字磯岡413・414番地で、区画整理後は北半部が大字磯岡421-1番地に統合されて大形商業施設の敷地になり、南半部は県道真岡雀宮線と一体化した都市計画道路の北半部になっている。

磯岡遺跡SG9区 上三川町大字磯岡字西谷413・414 600㎡ 竪穴住居跡2棟、溝2条、土坑5基、焼土集中1箇所

平成11年度(1999年12月24日～2000年3月24日)

調査担当者：後藤信祐・松本敏・塚原孝一・大島美智子

権現山遺跡SG9区と隣接する調査区で、現地調査は権現山遺跡SG9区と一緒に「杉村遺跡IX区」として実施した。「杉村遺跡IX区」の名称で調査を実施した5,400㎡のうち、調査時に「東区」と呼称した東半部600㎡が磯岡遺跡SG9区である。調査の経緯は上述した権現山遺跡SG9区と同様である。竪穴建物跡2棟(建て替えた一棟)以外は少数の土坑と溝だけなので、磯岡遺跡SG9区部分の調査を2000年2月8日にはほぼ終えて、残る期間は権現山遺跡SG9区の調査を主に実施した。西に隣接する権現山遺跡SG9区と一緒に、2月24日に航空写真を撮影した。東に隣接する磯岡遺跡5区の撮影時(3月9日)にも、航空写真を再度撮影した。

第2章 遺跡の環境

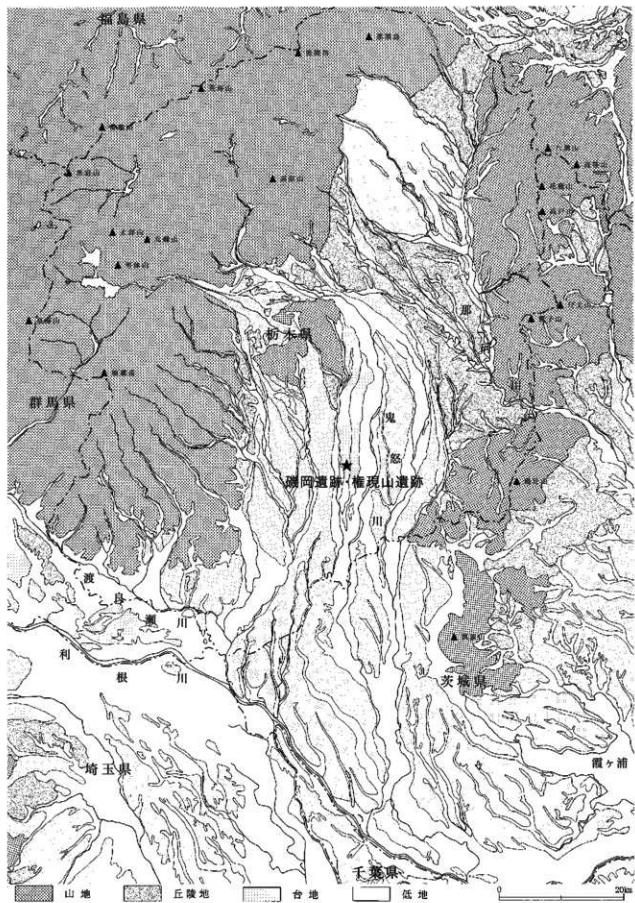
第1節 地理的環境

位置 東谷・中島地区遺跡群は栃木県域の南東部、宇都宮市と河内郡上三川町に跨り、宇都宮市街地から南南東へ約7km、上三川町の中心地から北へ約5kmに位置する。東へ約5kmに鬼怒川、西へ約1.5kmに田川がそれぞれ南流する。周辺は起伏の少ない田圃地帯が広がっており、各遺跡の発掘調査前の状況は水田、畑地、平地林が主で、一部に宅地が見られた。一方、本遺跡群は、東側が国道4号バイパス（新4号国道）、西側は旧上三川街道、南側は県道雀宮・真岡線、北側は宇都宮環状線に接する。また、地区内に北関東自動車道路の宇都宮・上三川インターチェンジが位置し、交通の要衝としてその重要度を高めつつある。こうした利便性と相まって、近年、本地域は流通業務施設や商業施設等の進出と市街地化が進行している。杉村遺跡と権現山遺跡は、東谷・中島土地区画整理地区（完成後の名称は「インターパーク宇都宮南」）の南西部に位置する。

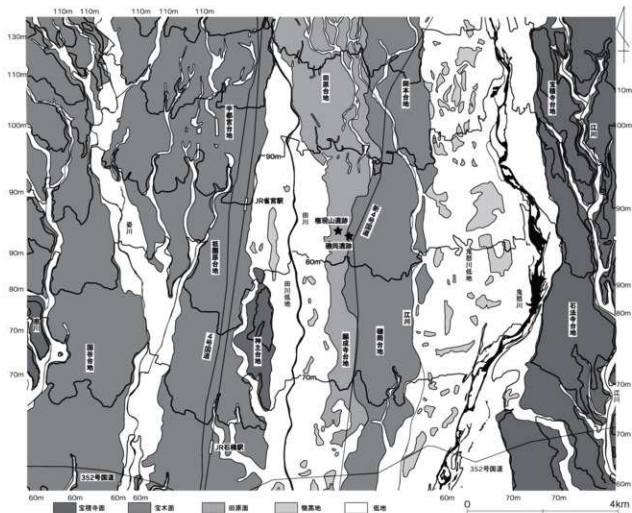
現況 磯岡遺跡は河内郡上三川町大字磯岡字中原および字屋敷西浦に所在し、南西の一部は大字磯岡字西谷に及ぶ。磯岡遺跡の中心部を5区で代表させると、北緯36度28分52秒・東経139度54分26秒に所在する（世界測地系）。南流する小川の開析谷の東に面する標高79.4～81.2mの低台地に立地する。この開析谷は、すぐ北にある微高地（杉村遺跡）の西側が「西谷田」、東側が「中島谷田」と呼ばれ（*1）、磯岡遺跡付近で両方の谷がひとつに合流する。今回報告するSG9区は磯岡遺跡の西縁部で、北緯36度29分49秒・東経139度54分26秒、磯岡遺跡で最も低い開析谷に降りる途中の標高79.4m地点である。磯岡遺跡SG9区の面積は600㎡。報告済みの県調査1～7区（37,110㎡）と北関東自動車道調査区（2,700㎡）と上三川町教育委員会1・2次調査区（6,210㎡）を加えると合計46,620㎡が調査されている。調査前の状況はSG9区が水田、他は台地上が主に畑地（一部は土木工用重機の集積所）であった。

権現山遺跡は宇都宮市東谷町および砂田町に所在し、ほぼ中央部に相当するSG1区で代表させると、世界測地系で北緯36度29分01秒・東経139度54分17秒に所在する。上記の「西谷田」と呼ばれる小川の開析谷に面し、主にその西側の台地上に立地する。ただし権現山遺跡の南東部（SG2区・SG9区・SG15区など）は、上記の「西谷田」と「中島谷田」が合流した低地部にある。一方、権現山遺跡の西半部（北関東自動車道調査区など）は、「赤沢川」や「川田用水」が南流する開析谷に面している。権現山遺跡の範囲はおおよそ東西250～400m×南北800mで推定総面積は約26万㎡あり、そのうち東谷・中島地区内では71,900㎡の発掘調査を実施した。今回報告する権現山遺跡南部（SG2区・SG5区・SG9区・SG10区・SG15区）の合計面積は33,100㎡である。調査前の状況は主に畑地と水田で、SG10区周辺は山林であった。山林であった部分も、後世に開墾などの土地利用を経ていると思われる。

地形の分類 栃木県は関東地方の北部に位置し、東と南を茨城県、西を群馬県、北を福島県と境を接している。栃木県域の地形は、大きく見ると、東部山地、中央部平地、西部山地に分けられる。東部山地は八溝、鷲子、鶴足などの山塊からなる八溝山地、西部山地は那須、高原、日光、足尾などの山塊からなる下野山地と足尾山地である。東西の山地は南北に連なっており、両者に挟まれるように中央部平地が広がる（阿久津1981）。本遺跡は中央部平地に位置する。中央部平地は関東平野の北縁をなし、山地から南北に延びる丘陵とそれに平行するように延びる台地と低地・河川からなる。これらの台地と低地・河川は、東から鬼怒川低地（鬼怒川）、岡本・磯岡台地（宝木段丘面＝中段段丘面）、田原・願成寺台地（田原段丘面＝下位段丘面）、田川低地（田川）、神主台地（宝積寺段丘面＝上位段丘面）、宇都宮・祇園原台地（宝木段丘面＝中段段丘面）と分類されている。



第3図 遺跡の位置 (1/60万)



第4図 周辺地形分類図 (1/10万)

田原・願成寺台地 権現山・杉村両遺跡を含む東谷・中島地区遺跡群の大半の遺跡(砂田・立野・磯岡・磯岡北・中島笹塚・砂田姥沼遺跡等)と、その周辺の関連遺跡群(東谷古墳群の東半部や上石田遺跡・砂田東遺跡)は、田原・願成寺台地の上に立地する(第5～7図)。この台地は、中央部低地の中央に南北に連なり、鬼怒川低地(鬼怒川)と田川低地(田川)に挟まれている。宇都宮市北部の今里町～北東部の上田原町～宇都宮市市街地東部の砂田町・東谷町～河内郡上三川町願成寺・上蒲生周辺にかけての台地であり、全長は約33km、東西の幅は2.0～2.5km、標高は170m～68mである。台地の北から南への傾斜は平均すると4.2/1000mであり、田川低地との比高は1～2mほどである。台地内部には、小河川によって形成された細かな開析低地が発達している。東側にある一段高い岡本・磯岡台地とは約2mの比高があるが、両地形面の差は南に行くほど不明瞭となる。

田原・願成寺台地の台地表層部は、田原段丘礫層を最も新しい田原ロームが0.5～2mの厚さで覆っており、南に行くほど薄くなっている。田原ロームの鍵層である七本桜軽石層(Nt-S)と今市軽石層(Nt-D)は日光の男体山から噴出した火山灰(ともに1.4～1.5万年cal BP)で、栃木県北部に分布する。宇都宮市街地北方付近ではやや薄くなり、これ以南では本遺跡群のようにローム層中に軽石が点在する程度となる。田原ロームの下には、砂質土・砂層の厚い堆積が認められる。

田川低地 東谷・中島地区遺跡群の西方には田川低地が広がり、その微高地上には東谷古墳群の西半部や百目鬼遺跡・東谷北浦遺跡が位置している(第7図)。田原・願成寺台地と田川低地との境には、南流する赤沢川(井川)がある。田川低地は、宇都宮市域の北から宇都宮市街地を通過して南へ延び、田原・願成寺

第2章 遺跡の環境

台地の西側に幅 1.5～2 km にわたって分布する。この低地は、現在水田となっている田川の旧河道とされる部分と、それより 1.0～1.5 m ほど上位で現在は集落が分布する自然堤防などの微高地とに識別することが可能である。低地や微高地の形成時期などを決める資料は得られていないが、およそ 2 万年前以降に田川の営力によりできたものと推定されている。

岡本・磯岡台地 田原・願成寺台地の東側には岡本・磯岡台地が広がり、東谷・中島地区遺跡群の東端部にある西刑部西原遺跡および琴平塚古墳群や、東側にある西赤堀遺跡などが所在する。田原・願成寺台地と岡本・磯岡台地との境には、南流する無名瀬川（*2）がある。岡本・磯岡台地は、宇都宮市白沢・岡本～宇都宮市平出・猿山～上三川町磯岡・日産自動車用地～下野市三王山周辺の南北に長い台地である。全長約 35 km、東西幅 1.5～2.5 km、標高 162.5～54 m である。台地の北から南への傾斜は 4.5/1000～1/1000 で南ほど緩傾斜となる。鬼怒川低地との比高は、白沢付近で約 15 m あり明瞭だが、南へ行くほど緩斜面状を呈する。台地表層部は宝木段丘礫層を田原ロームと宝木ロームが厚さ 5～10 m 程で覆っている。厚さは南に行くほど薄くなる。台地内部は、小河川によって形成された細かな開析低地が発達している。

*1 「にしやだ」および「なかじまやだ」の通称は、宇都宮市砂田町在住の福田林藏氏（1930 年生）からの御教示による。漢字表記は推定である。

*2 「むなせがわ」の漢字表記は、開発前の 10,000 分の 1 地形図による（上三川町役場 1981 年作成）。「武名瀬川」や「田川用水」とも表記・呼称されている。砂田遺跡を南北に縦断する川も「九十九瀬川」と書いて「むなせがわ」と読んでいるが、「無名瀬川」とは違う川であり、南流して田川に合流する。

参考文献

- 栃木県企画部土地対策課 1984『土地分類基本調査 壬生』
経済企画庁総合開発局国土調査課 1960『土地分類基本調査 地形・表層地質・土壌調査 宇都宮』
上三川町史編さん委員会 1979『上三川町史』資料編 原始・古代・中世 上三川町
宇都宮市史編さん委員会 1979『宇都宮市史』第一巻 原始・古代編 宇都宮市
阿久津純 1981『自然と環境 栃木県史編さん委員会編『栃木県史』通史編1 原始・古代一 栃木県 pp.11-36.

第2節 歴史的環境

東谷・中島地区周辺の遺跡は塚原（1999）の第2章第2節が網羅し、各時代・各遺跡の評価は塚原（1999）と中村（2004）、古墳については秋元（2003）が詳しい。これらを参考に資料を追捕し、権現山・磯岡両遺跡（110・164）で遺構遺物が出土した時期の歴史環境を述べる。両遺跡周辺の遺跡分布を第5～7図に示す。

旧石器時代 権現山遺跡では北部のSG1区で古墳時代竪穴に水晶製尖頭器が混入していた（内山編2010, p.68）。本来の出土層は不明だが、本遺跡の標準土層Ⅱ～Ⅳ層間に包含されていたことが想定され、Nt-S（七本桜軽石）とNt-I（今市軽石）の示す1.4～1.5万年 cal BP頃から、As-YP（浅間板鼻黄色軽石）の示す1.5～1.65万年 cal BP頃に相当する可能性がある。権現山遺跡西半の北関東自動車道調査A区でAs-YP層相当の遺物集中地点が2箇所ある（谷中他2001）。磯岡遺跡は2.3.6区に尖頭器がある（津野2005, p.24）。

東谷・中島地区付近は、宝木段丘面に立地する西刑部西原遺跡（146）を除くと、最上位の田原ローム層だけが載る低段丘に相当するため、旧石器時代後半の遺跡が若干見られる程度である。磯岡北遺跡の宇都宮市調査B区で安山岩の剥片4点（153:勝見2005, p.37）、砂田遺跡5区（103:津野・篠原・今平2007, p.22）で尖頭器と黒曜石剥片1点、中島笹塚遺跡3区・7区（150:内山2008, p.95）で黒色安山岩剥片がある。西刑部西原遺跡（146）は3区の遺物集中地点4箇所と礫群4箇所から黒曜石・珪質頁岩の尖頭器・搔器・削器などが出土し（亀田2012）、同遺跡2区にも黒色安山岩の剥片が1点ある（中村2004, p.169）。東側の西赤堀遺跡（161）では尖頭器と搔器を主体とする遺物集中地点がNt-I直下に6箇所と（安藤編1996）、出土層不明の珪質頁岩の縦長剥片が1点ある（亀田2007）。鳥田遺跡（178）では石器集中地点が暗色帯上に1箇所（秋元他1991）と暗色帯相当に2箇所（江原他2007）あり、ともにナイフ形石器が出土している。

縄文時代草創期～早期 磯岡遺跡3区には爪形文土器がある（津野2005）。権現山遺跡には草創期の遺物がない。権現山遺跡南部のSG10区にある縄文時代の陥穴状土坑3基は草創期～早期の遺構を含むかもしれないが、詳しい時期がわからない（本書第5章第2節）。1.4～1.5万年 cal BPに降下した今市・七本桜軽石を混入する陥穴状土坑や土坑が、中島笹塚遺跡3・5・7区（150:内山2008）、磯岡北遺跡SG16区SK-20（153:内山2006）、西刑部西原遺跡5～7・10・E区（146:亀田2012・白崎2010）、砂田遺跡3・10・12・13・16区（103:藤田・田代2002, p.205; 今平2012, p.24）、立野遺跡5・8区（108:内山2005, pp.66.710）にある。田川西岸では殿山遺跡（85:大川他1995）に溝型土坑を含む時期不詳の陥穴状土坑が3基ある。南方の鳥田遺跡に爪形文土器（178:江原他2004・2007）、北方の立野遺跡A区に多縄文系土器があり（亀田2008）、琴平塚古墳群（中村2004）・磯岡北遺跡SG12区（内山2007）・砂田姥沼遺跡C区（白崎他2008）に有茎尖頭器がある。

縄文時代早期 権現山遺跡では摺系文系（井草・大丸・夏島式土器と擦痕文土器）、沈線文系（三戸式・田戸下層式・田戸上層式・流出原式）、条痕文系土器や早期末の縄文条痕土器（内山編2010, pp.70-76）、スタンプ形石器・礫器（本書第4章）が出土した。SG10区の縄文時代土坑SK-265・307にも早期土器片がある（第5章第2節）。磯岡遺跡は1区で井草式以降の摺系文系土器と野島式土器が少量（塚原1999, p.41）、5区に夏島式土器が1片ある（津野2005, p.22）。

東谷・中島地区では、摺系文期の遺物が目立つ。北側にある立野遺跡5区（108）に摺系文系土器・黒曜石製円形搔器・石鏃未成品を含む遺物集中地点があり、摺系文系・条痕文系土器の包含層や、摺系文系土器片を出土した陥穴状土坑もみられる（内山2005, pp.33-53.63.67）。杉村遺跡（111）は、北関東自動車道調査区で稲荷原式土器・スタンプ形石器と住居又は土坑1基、沈線文（主に田戸下層式）・条痕文



第5図 周辺の遺跡分布図

第2表 東谷・中島地区周辺の遺跡

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	本村遺跡	66	藤飛内遺跡	129	菟山東原遺跡
2	關南1丁目遺跡	67	大曲遺跡	130	柿木坂遺跡・柿木坂古墳群
3	ガンセンター東遺跡	68	木田遺跡	131	東原古墳群
4	西原塚遺跡	69	多功遺跡	132	西原中塚
5	並松遺跡	70	上大塚兵内遺跡	133	さるやま城遺跡・さるやま城古墳群
6	雷電山遺跡	71	長持塚古墳	134	菟山遺跡
7	江曾島北原遺跡	72	藤助山北遺跡	135	瑞穂野団地遺跡
8	期道遺跡	73	愛宕塚東遺跡	136	根本西台古墳群
9	江曾島北原南遺跡	74,76	茂原古墳群	137	桑島古墳群
10	おしめ込遺跡	74	茂原権現山古墳	138	飯塚古墳
11	大塚林遺跡	75	茂原大日塚古墳	139	藤塚遺跡
12	城南3丁目遺跡	76	茂原愛宕塚古墳	140	南原古墳
13	城南3丁目南遺跡	77	小高遺跡	141	上横田A遺跡
14	宮の内遺跡	78	江曲遺跡	142	成瀬寺北遺跡
15	塚山北遺跡	79	上神上・茂原遺跡	143	大岡古遺跡(小岡原遺跡)
16	北谷原遺跡	80	茂原城跡	144	成瀬寺遺跡
17	塚山古墳群	80	茂原向原遺跡	145	西原部古屋原遺跡・西原部古屋原古墳群
	塚山古墳(1号墳)	81	後志部遺跡	146	西原部西原遺跡
	塚山古墳(2号墳)	82	神土古墳群	147	大塚高塚群
	塚山古墳(3号墳)		上神上茂原神社古墳(神土1号墳)	148	中道遺跡
18	一向寺院(付近)遺跡		上神上孤塚古墳(神土5号墳)	149	飯口遺跡
19	若松原遺跡		後志部古墳(神土7号墳)	150	中島甲塚遺跡(中島塚塚古墳群を含む)
20	一軒塚遺跡(中原遺跡)		下原古墳(神土20号墳)	151	後山塚遺跡
21	旭ヶ丘団地遺跡	83	向原遺跡	152	古屋原高塚群
22	西原北遺跡	84	向原南遺跡	153	磯岡北遺跡(磯岡北古墳群を含む)
23	留西遺跡	85	殿山遺跡	154	塚平塚古墳群
24	十里木古墳	86	薄舟遺跡	155	西沼遺跡
25	留西南遺跡	87	台内手遺跡	156	平塚原相平遺跡
26	若松原南遺跡	88	大山祇神社古墳	157	不動堂遺跡
27	綾女塚古墳	89	芋内遺跡	158	内野遺跡
28	雀宮東遺跡	90	上石田遺跡	159	下小岡原遺跡
29	雀の宮西丁目遺跡	91	石田跡	160	東谷北遺跡群
30	雀宮駅東遺跡	92	上蒲生の古墳群	161	西赤塚遺跡・西赤塚古墳群
31	大谷田遺跡		十三塚古墳(上蒲生1号墳)	162	南浦遺跡
32	牛塚東遺跡	93	後志部東遺跡	163	高島園跡・高島園跡群
33	雀宮牛塚古墳	94	前内遺跡	164	磯岡園跡
34	三子塚北遺跡	95	梁跡跡	165	磯岡・西汗の古墳群
35	針ヶ谷三子塚古墳	96	大塚神社古墳群		屋敷直浦愛宕塚古墳(磯岡・西汗3号墳)
36	大塚原遺跡	97	下塚元塚遺跡	166	西赤塚遺跡
37	塚の原遺跡	98	下塚大塚古墳	167	磯岡日遺跡
38	宇都宮磯岡南遺跡	99	東川田城	168	西赤塚孤塚古墳(磯岡・西汗2号墳)
39	赤上山遺跡	100	菅谷遺跡	169	西赤塚南遺跡
40	多功神塚古墳群	101	赤沼遺跡	170	西田遺跡
41	富士見団地北遺跡	102	下桑島西原古墳群	171	西林ノ内遺跡
42	岡田山遺跡	103	砂田遺跡	172	上郷の古墳群
43	茂原北原遺跡	104	砂田東遺跡		愛宕神社古墳(上郷1号古墳)
44	石川坪遺跡	105	砂田南遺跡		世塚古墳(上郷2号墳)
45	富士見向山遺跡	106	砂田姥沼遺跡		上郷籠塚古墳(上郷3号墳)
46	明ノ内遺跡	107	赤沢高塚群		長塚古墳(上郷D3号墳)
47	西の前遺跡	108	立野遺跡		しらみ塚古墳(上郷4号墳)
48	上原遺跡	109	飯橋岡古墳(古墳ではなく後世の塚)		上郷26・27号墳
49	前畑遺跡	110	藤見山遺跡	173	仏沼遺跡
50	西下谷田遺跡(北原東遺跡)	111	杉村遺跡	174	瀬成寺遺跡
51	下古山北原古墳	112,118	東谷古墳群	175	上浦生遺跡
52	北原遺跡	112	藤見山遺跡B区(原古墳群)	176	大野遺跡
53	大木遺跡	113	車塚古墳群	177	西原遺跡
54	一本松遺跡	114	藤塚塚古墳群	178	島田遺跡
55	若林北遺跡	115	松の塚古墳	179	上三川地区の古墳群
56	上ノ原遺跡	116	双子塚古墳		八龍塚古墳(上三川1号墳)
57	若林南遺跡	117	世塚古墳	180	上三川園跡
58	久山遺跡	118	鶴塚古墳	181	大野遺跡
59	谷池北遺跡	119	新谷谷遺跡	182	石井遺跡
60	谷池遺跡	120	三日月神社古墳	183	高尾神社古墳
61	東浦遺跡	121	三日月神社南古墳群	184	桑島遺跡
62	大山古墳群	122	ツケ塚遺跡	185	根本遺跡
	五社神社遺跡(大山1号墳)	123	久部茂岡古墳	186	高尾神社古墳(西木代1号墳)
	大山籠塚古墳(大山9号墳)	124	久部北台古墳群	187	五十伏遺跡
	新出古墳(大山13号墳)		久部愛宕塚古墳(1号墳)	188	中瀬跡
	長塚古墳(大山D20号墳)	125	追金伝遺跡	189	上郷遺跡
63	新出遺跡	126	石井久保田古墳群	190	五塚遺跡
64	稲荷城遺跡	127	大久保白山遺跡	191	百日鬼遺跡
65	桃塚遺跡	128	天王山遺跡		

系土器があり（藤田・安藤 2000, pp.31-34,38）、GN1 区にも条痕文系土器と片刃石器が少量ある（内山編 2010）。砂田遺跡（103）の既報告資料では、1区で鶴方島台式、2区で燃糸文（夏島式）・沈線文・条痕文系（藤田・田代 2002, pp.20,165-169）、4区から6区にかけて燃糸文系土器1片と礫器少量（津野・篠原・今平 2007, p.22）がある。磯岡北遺跡（153）のSG17区（内山 2006）や宇都宮市調査B区（勝見 2005, pp.19,38）に燃糸文系土器（井草式）・スタンプ形石器・礫器が若干まとまって見られる。中島笹塚遺跡（150）では燃糸文系（井草式・大丸式・天矢場式）がやや目立ち、沈線文系（三戸式・田戸下層式）・条痕文系（鶴方島台式を含む）土器と、田戸下層式期の土坑1基がある。砂田姥沼遺跡では井草Ⅱ式・大丸式土器が出土した（106：藤田 2011, p.32）。西荆部西原遺跡（146）には井草・夏島・天矢場式と押型文土器（亀田 2012）、同遺跡宇都宮市調査A区に夏島式が1片ある（土生・宮田他 2007b, p.31）。

田川の東岸地域では、瑞穂野団地遺跡南調査区（135：岩上他 1978, p.58）・仏沼遺跡（173：倉田編 1971, pp.88-91）・島田遺跡に燃糸文系土器が見られる。島田遺跡には沈線文系・条痕文系土器もある（178：江原他 2007, p.21）。西赤堀遺跡には夏島式土器が少量あり、時期不明だが埋土のしまりが強い陥穴状土坑が1基調査されている（161：亀田 2007, pp.21-23）。

田川の西岸地域では、西下谷田遺跡（50：板橋編 2003, p.388）・薄市遺跡（86：秋元 1988, p.32）に井草式土器、宮の内遺跡（14：田代 1996, p.180）のB遺跡で燃糸文系土器・スタンプ形石器および鶴ヶ島台式土器、茂原向原遺跡（80：安永 2001, p.347）と神主古墳群の後志部古墳（82：石部他 1998, p.74）で条痕文系土器、殿山遺跡（85：大川他 1995, p.20）で燃糸文・条痕文系土器がある。文殊山遺跡（53のすぐ南西：今平 1999, p.107）と上神主・茂原遺跡（79：安永 2001, p.76）の両遺跡で燃糸文・沈線文・条痕文系土器が少量出土している。上神主・茂原遺跡の燃糸文系土器は浅間神社古墳（82）の調査でも出土した（石部他 1994）。このほか、木田遺跡（68：前澤 1979）にも早期の遺物があるという。

縄文時代前期 権現山遺跡では黒浜式期の土坑が北部のSG1区に1基、遺構外に黒浜、諸磯 a・b、浮島・興津式と前期末の土器があり（内山編 2010, pp.74,77,333）、前期末～中期初頭の結節縄文を施す土器片が南部でSG10区の縄文時代土坑SK-307と時期不明土坑SK-272にある（本書）。開析谷の対岸にある磯岡遺跡では諸磯 a～c・浮島式と前期末～中期初頭の土器がある（津野 2005, pp.23,289）。東谷・中島地区周辺では、縄文前期の遺跡は少ない。砂田姥沼遺跡に黒浜式および前期末？の土器片（106：藤田 2011, p.32）、中島笹塚遺跡には羽状縄文系・浮島式・諸磯 b式と前期末～中期初めの土器がある（内山 2008, p.422）。浮島式（？）が砂田遺跡6区に1片（津野・篠原・今平 2007, p.22）、西荆部西原遺跡では羽状縄文系と諸磯・浮島式系土器（亀田 2012）、同遺跡A区にも諸磯式がある（土生・宮田他 2007b, p.31）。田川の東岸域では、仏沼遺跡に羽状縄文系土器がごく少量（173：倉田編 1971, pp.88-91）、島田遺跡に羽状縄文系・諸磯 b・浮島式が少量ある（178：江原他 2007, p.22）。

田川の西岸では、殿山遺跡（85：大川他 1995, pp.19-20）に羽状縄文系・諸磯 a・b・浮島・興津式が見られる。神主古墳群（82）の後志部古墳（石部他 1998, p.74）で興津式、天狗原遺跡に諸磯 a式が少量ある（36：神野 1994, pp.51,55）。

縄文時代中期 権現山遺跡では五領ヶ台式、阿玉台Ⅰ～Ⅳ式、加曾利 EⅠ～EⅡ式土器が出土した（内山編 2010, pp.77-83）。磯岡遺跡では1区（塚原 1999, p.37）に阿玉台式期の竪穴1棟、2～7区（津野 2005, pp.24,289）に阿玉台Ⅰb～加曾利Ⅱ式土器がある。

東谷・中島地区は大半が低台地上なので、中期の資料は少ない。北側の立野遺跡（108）では5区に加曾利 E式期の土坑が2基ある（内山 2005, pp.62-63）。開析谷を挟んだ東側では、磯岡北遺跡（153）北部のSG17区に阿玉台式期の竪穴1棟と遺物集積地点1箇所、SG12・SG17区に前期末～中期初頭と加曾利 E式土器が極少量あり（内山 2006, p.39）。同遺跡南部のSG13区でも阿玉台～加曾利 E式土器が少量ある（藤田 2003, p.152）。中島笹塚遺跡で加曾利 EⅠ式期の竪穴1棟と前期末～中期初頭・阿玉台・加曾利 EⅠ・

EIII～称名寺式(内山2008, p.422)、砂田姥沼遺跡で阿玉台式(106:藤田2011, p.32)が少量ある。無名瀬川東岸では西刑部西原遺跡に阿玉台1b式・IV式と加曾利E式(亀田2012)、同遺跡に重複する琴平塚古墳群(154)でも加曾利EII式が少量ある(中村2004, p.171)。

田川の東岸域では、上三川町の市街地付近に中期遺跡群が見られる。鳥田遺跡で阿玉台1b～加曾利EII式期の竪穴建物28棟と袋状土坑を含む土坑277基が調査された(178:江原他2004-2007)。鳥田遺跡の一部かと思われる東館遺跡や、その北方の大野遺跡(176)でも中期後半の遺物が知られる(倉田編1971, pp.116-118)。上三川城跡(180)でも加曾利EII式期の土坑が10数基確認されている(江原他2006, p.157)。宇都宮市域では柿木坂遺跡(130:大関1992)で加曾利E2式期の遺物が報告・検討されている。

田川西岸では、西川田川の谷周辺に遺跡群がある(名取他1996)。石川坪遺跡(44:宇都宮市2003, p.20;同2004, p.13)で阿玉台式期中心の竪穴と袋状土坑群、二軒屋遺跡(20:五十嵐1981;名取他1994)で加曾利EII式期の竪穴と袋状土坑がある。旭ヶ丘団地(21:名取他1998, pp.94-102)・兵庫塚A地点(山崎1970)・二軒屋西(田代1968, pp.11,24)は同一遺跡と思われ、阿玉台～加曾利E式土器や10基の袋状土坑が知られる。その南の台地や、赤土山(39)・富士見団地北(41)遺跡にも中期の遺物がある(名取他1996, pp.38-42,52-56)。

縄文時代後期 権現山遺跡では堀之内1・2式、加曾利B式、曾谷式、後期安行式土器が出土した(内山編2010, p.84)。SG10区の時期不明土坑SK-532にも堀之内式土器片がある(本書)。磯岡遺跡には後期初頭～堀之内1式の土器がある(津野2005, p.24)。

後期の遺跡は少ない。北側にある杉村遺跡GN1区には安行2式が少量ある(内山編2010, p.36)。立野遺跡(108)の4・5区で堀之内1式期の土坑各1基と後期土器片が少量ある(内山2005, p.733)。開析谷の東側では、磯岡北遺跡(153)の宇都宮市調査B区で堀之内式(勝見2005, p.38)、SG17区で称名寺・堀之内・加曾利B式(内山2006, p.39)が出土し、SG13区に堀之内～加曾利B式期の土坑と遺物集中区がある(藤田2003, pp.144-156)。中島笹塚遺跡(150)には加曾利EIII～称名寺式が少量ある(内山2008, p.422)。

田川東岸では、西赤堀遺跡(161)で称名寺式期の竪穴住居跡が1棟調査されている(亀田2007, pp.20-21)。仏沼遺跡(173:倉田編1971, pp.88-92)に綱取系および堀之内1式土器が見られる。また、粕内遺跡(94:前澤1979)にも後期の遺物があるという。田川西岸では、天狗原遺跡に堀之内2式が少量あり(36:神野1994, pp.51,55)、兵庫塚3丁目(名取他1996, pp.40-47)・石川坪(44:渡辺他1993・下野考研1993)・駒山(85:大川他1995)の各遺跡に後～晩期の遺物がある。

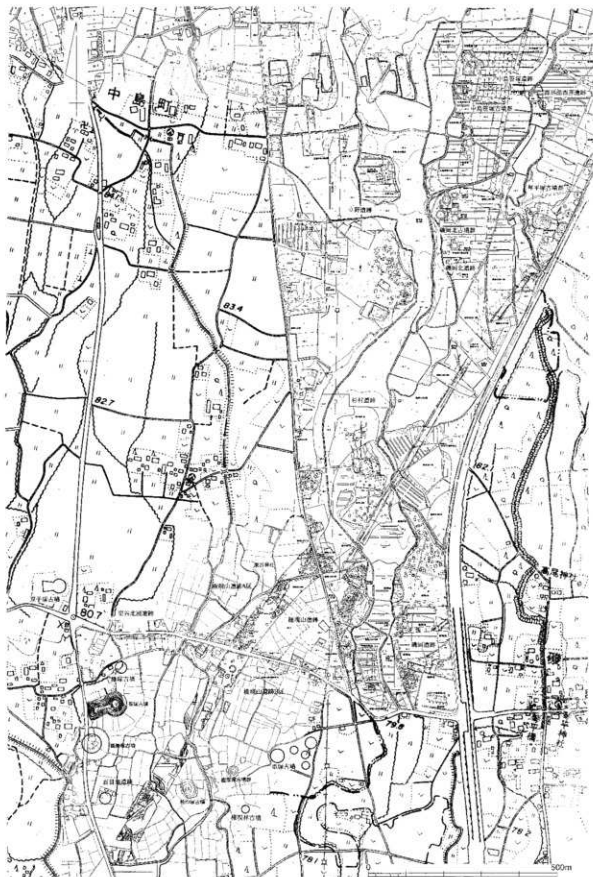
縄文時代晩期 権現山遺跡南部のSG10区に大洞C2式期の竪穴SI-63があり(本書第5章第1節)、遺構外遺物に大洞B-C・C2・A式土器が少量ある(内山編2010, p.87)。磯岡3・6区には晩期前～中葉の大洞系土器(津野2005, p.24)がある。

東谷・中島地区では、北方の立野遺跡(108)に晩期土器が少量ある(内山2005, pp.57-58)。開析谷の東側では、磯岡北遺跡SG17区に大洞C2式と晩期安行式(153:内山2006)、中島笹塚遺跡に晩期中葉の大洞C2式など(内山2008, p.422)がそれぞれ少量ある。田川東岸域では大野遺跡に大洞C1式があるが、資料は少ない(176:倉田編1971, p.116)。田川西岸では著名な石川坪遺跡(44:渡辺他1993・下野考研1993)の他、薄市遺跡(86:秋元1988)や神主古墳群(82)の後志部古墳に大洞A式(石部他1998, p.74)、北側の後志部遺跡(81:鈴木1991)に大洞A'式がある。

弥生時代中期 権現山遺跡南部のSG10区に弥生中期後半のSK-544がある(本書第5章第3節)。権現山遺跡SG5区の遺構外遺物に弥生前期後葉～中期前葉の大洞系土器と条痕文系深鉢形裏が目立つ。中期中葉(出流原型)～後葉の土器も権現山遺跡各地区にあり、在来の重四角文・貼付口縁・燃系文の他に、中部高地型柳描文や東北南部系平行沈線文も少量ある(内山編2010)。磯岡遺跡では中期後半の土坑2基と土



第6図 磯岡遺跡・権現山遺跡とその周辺(1/10,000)



第7図 東谷・中島地区遺跡群と碓岡・権現山・百目鬼遺跡(1/10,000)

器が5区にある(津野 2005, pp.26,289)。

東谷・中島地区周辺で弥生中期の遺構・遺物は希薄である。北方の立野遺跡(108)では4区と1区に中期後半およびその可能性のある土坑があり、他区でも少量の遺物が出土した。開析谷の東対岸にある磯岡北遺跡の北関東自動車道路調査区に中期後半の竪穴建物1棟と土坑2基がある。中島笹塚遺跡では条痕・燃系・縄文や充填縄文の破片が少量ある。燃系文の土器は、立野4区(内山 2005, pp.631-637)、磯岡1区SK-96(164:塚原編 1999)、磯岡北遺跡北関東自動車道路調査区3号土坑(153:藤田・安藤編 2000, pp.325-338)、仏沼遺跡の土坑2基(173:倉田編 1971, pp.94-95)にある。

田川の西岸では、弥生中期前半の土坑が殿山遺跡(85:大川他 1995)、中期後半の住居と土坑各1基が西下谷田遺跡(50:今平 2006)、上神主・茂原遺跡に中期後半の土坑1基と中期後半および後期の土器片がある(79:安永 2001, p.81)。薄市遺跡(86:秋元 1988, p.35)と本村遺跡(1:富川 2004, pp.50-54)で多く出土した弥生土器にも中期の資料を含む。権現山北遺跡(72:大島編 1979, pp.152,156)に燃系文を用いる土器がある。愛宕塚東遺跡にも中期後半の土器があるという(73:今平 2008)。

弥生時代後期 権現山遺跡では弥生後期の二軒屋式少量と樽式1片の他、アメリカ式石畿もあるが中期か後期か決めることは難しい(内山編 2010, pp.96,98)。磯岡遺跡では附加条1種で施文する破片が5区に少量ある(津野 2005, p.26)。

後期には、田川流域全体で遺跡数がやや増加する。田川東岸にある東谷・中島地区周辺では、北方の杉村遺跡に弥生後期二軒屋式期の土坑が1基ある(内山編 2010, p.36)。磯岡北遺跡SG17区で出土したような幅広く有茎畿(153:内山 2006, p.45)を弥生後期と考える意見がある(海老原 2004, p.14)。砂田姥沼遺跡3区では、古墳前期のSI-5などから後期弥生土器が出土した(106:藤田 2011, pp.37,195)。中島笹塚遺跡(150:内山 2008, pp.106,310)や、権現山遺跡の西に隣接する百目鬼遺跡(191:谷中・大島編 2001)と東谷北浦遺跡(篠原・亀田 2009)では、遺構が未確認だが後期土器が一定数あり、集落を形成していたと考えられる。北東の瑞穂野田遺跡南地区に二軒屋式期の竪穴建物跡が2棟ある(135:岩上他 1978)。

上記の遺跡以外では弥生後期の資料は希薄である。北方の立野遺跡(108:内山 2005)は約61,000㎡を調査したが、弥生後期土器は立野5区の1片だけであった。砂田遺跡(103)も調査面積17万㎡に対して、弥生土器は数片しかない(『東谷・中島地区遺跡群』15掲載予定)。

遺跡は田川西岸地域で目立つ。西川田川と兵庫川の谷周辺にある二軒屋遺跡(20:寺内他 1939a)や天狗原遺跡(36:神野 1994)が代表的である。「東河田遺跡」(名取他 1998, pp.78-79)として戦前から知られる本村遺跡(1:富川 2004 および水野・柏崎他 2007)の竪穴19棟と、殿山遺跡(85:大川他 1995)を中心とする上ノ原遺跡から向原南遺跡の範囲(56・84:大川他 1992)の竪穴21棟が、比較的大きな集落群である。大山遺跡にも後期の土坑がある(58:秋元編 1988)。また、古墳前期の項で触れる西下谷田遺跡の竪穴建物中9棟から樽式・十王台式・吉ヶ谷式など、大日塚古墳墳丘下竪穴建物や愛宕塚古墳下層で樽式系などの弥生後期土器も出土した。

古墳時代前期 前期の遺物は磯岡遺跡にはない。権現山遺跡南部の低地・微高地に少量みられ、SG9区南東部低地にS字状口縁壺破片、SG2区流路2に二重口縁壺破片、SG2区遺構外のD区出土遺物に高杯と台付壺の破片がある。二重口縁壺の頸部は長く、台付壺はヘラナデ調整する前期後葉のものである。

田川東岸の東谷・中島地区周辺では、本格的な古墳時代集落は中期前葉に現れる。それまでは小規模な集落が点在する。東谷・中島地区の北部にある砂田姥沼遺跡2区SI-1と3区SI-5が前期の竪穴建物である(106:藤田 2011)。周辺地域には西割部古屋原遺跡SI-02(145:清水 2002)、砂田東遺跡B区SI-12・13(104:中山 1996)がある。田川東岸の低台地では、箱内遺跡(94)と五丁免遺跡(187)に前期の遺物がある(前沢 1979)。前期末～中期初めの建物は、杉村遺跡北関東自動車道路調査区の60・69・70号住居跡(藤田・

安藤 2000, p.410)、北側の立野遺跡 5区 SI-14 (108:内山 2005, pp.122-123,739) および砂田姥沼遺跡 1区 SI-7・12 (106:藤田 2011)、西方の東谷北浦遺跡 SI-139 (160:篠原・亀田 2009) がある。

前期古墳と同じく前期の集落も田川西岸の茂原地域に多い。大日塚・愛宕塚古墳下層 (75・76:久保編 1990)・愛宕塚東 (73:名取他 1998, pp.87-89)・西下谷田 (50:今平 2006) の各遺跡に前期前半の集落が見られる。権現山北遺跡で前期後葉の竪穴 1棟 (72:大島編 1979)、上ノ原遺跡で竪穴 6棟 (56:大川他 1992)、殿山遺跡で 1棟 (85:大川他 1995, p.230) が報告されている。田川西岸に面する台地では、木田遺跡 (68:栃木県教委 1988, p.77) に前期の竪穴建物がある。やや西方にある西川田川の開析谷では、天狗原遺跡 (36:神野 1994) に竪穴 3棟、留西遺跡 (23:宇都宮市 1983, p.317) と留西南遺跡 (25:名取他 1996, p.31) に前期の遺物がある。

前期～中期初頭の古墳 田川東岸では、前期古墳が小規模で数も少ない。最初に現れるのは小形方墳で、西刑部古屋原 2・4号墳 (145:辺長 10～14m、清水 2002) や上郷 26・27号墳 (172の西部:辺長 11～14m、秋元 2000) である。中島笹塚 7・8号墳も中期初頭の小型方墳と思われる (150:辺長 7.1～12.6m、内山 2008)。この他、権現山遺跡 B区 (112) の土壇墓 2基が前期末～中期初頭である (谷中他 2001, III-p.284)。

東谷・中島地区から田川をはさんだ対岸 (西岸) では、有力な首長墳が築かれる。前方後方墳 3基を含む茂原古墳群がよく知られている (久保編 1990・今平 2009)。大日塚古墳 (75:墳長 35.8m・箱式木棺・素文鏡 1面)・愛宕塚古墳 (76:墳長 50m・舟形木棺・S字文または重圏文鏡)・権現山古墳 (74:墳長 63m) の 3基で、大形化している権現山古墳が最後に築かれたと推定されている。小形墳としては、牛塚東遺跡で辺長 11m と 6m の方墳 (32:今平 1993)、北原東遺跡に辺長 13.0 × 11.8m の方墳 (50の南端部:安永 2001)、殿山遺跡に「方形周溝墓」2基 (85:大川他 1995, p.7) がある。上神主浅間神社古墳 (82の北端) は墳径 53～54m で、茂原古墳群に続いて方墳から円墳に転換した中期初頭頃の首長墳である (石部・秋元編 1994)。茂原周辺地域以外では、城南 3丁目遺跡 2号墳が方墳の可能性もある (12:今平 1996)。

古墳時代中期の集落 古墳中期集落は周辺に数多い。田川東側地域では、上述した前期末～中期初頭の集落 (砂田姥沼 1区・立野 5区・杉村・東谷北浦) の次段階から、東谷・中島地区周辺に多数の中期集落が見られる。東谷北浦遺跡 (160) の SD-77・87 が中期初頭の溝で、東谷古墳群の初期首長墳と推定される笹塚古墳 (117) のすぐ東北にある。東谷古墳群と周辺遺跡群の形成が中期初頭に東谷北浦遺跡から始まってきたことを示すものかもしれない。周辺遺跡群の中核である権現山遺跡は、豪族居館 (首長居宅) と考えられる施設を SG1区 と SG5区 に含み、周辺の竪穴建物も高密度で (4区・SG5区・SG10区・北関東自動車道 A区)、遺物の質・量も豊富である (内山編 2010, 橋本他 2011・2012)。

周辺の中期集落群は権現山遺跡と同時に、または少し遅れて現れる。その例は、砂田 4・6区 (津野他 2007) と 10・12・13区 (今平 2012)、立野 5・6区周辺 (後述)、杉村 (藤田他 2000・内山編 2010)、磯岡 (塚原 1999・藤田他 2000・高野他 2004・津野 2005・栗田 2005 および本書)、砂田姥沼 1区 (藤田 2011)、西刑部西原 3区 (とちぎ理文 2001, pp.39-40) の諸遺跡がある (103,106,108,111,146,164)。北方の砂田東遺跡 (104:中山 1996)、東方の成願寺遺跡 (144:篠原編 2000)、南方の願成寺遺跡や大野遺跡 (174・176:倉田編 1971) も、東谷・中島地区の諸遺跡と時期をそろえるように形成される。

権現山遺跡の北側では、開析谷を挟んで西側集落の立野遺跡と、東側墓域の中期群集墳が対応して営まれる。立野遺跡 (108) の 5区・6区・宇都宮市調査 A地区周辺で調査した 91 棟の古墳時代竪穴建物は、約半数の 44 棟が中期で、磯岡北古墳群 (153) と中島笹塚古墳群 (150) に先行する中期中葉に 13 棟、中島笹塚古墳群の前半期および磯岡北古墳群に対応する中期後葉に 9 棟が確認されている。磯岡北古墳群の造営停止後、中島笹塚古墳群の後半期に対応する中期末は立野 5・6区周辺の竪穴建物が最も多い時期で、

3区の単独建物を含めて21棟ある(内山2005, pp.735-742; 水野他2005, p.35)。このうち2棟はそれぞれ辺長14.5mと12mで(宇都宮市調査A地区SI-2・3)、古墳時代を通じて最大級の竪穴建物である。

開析谷の東側でも、少数の集落が形成される。磯岡北遺跡(153)では、磯岡北古墳群の造営前・造営後の竪穴建物6棟がSG17区(内山2006)・SG11区(藤田2003)と宇都宮市調査A・B区(勝見2005)にある。中島笹塚遺跡(150)でも5区に中期(中葉?)の竪穴建物1棟と円筒形土坑3基がある。

田川西岸では、塚山古墳群(17)を中心とする兵庫川・西川田川の谷に大集落が現れる。北若松原遺跡は塚山古墳群とほぼ同じころの集落で、竪穴24棟が調査された(16:宇都宮市1992, p.38; 1994, p.30)。中原(二軒屋)遺跡も同様と思われ(20:寺内他1939b)、若松原(19)・西原北(22:名取他1996, p.36)の両遺跡と一連の大集落であろう。若松原遺跡周辺と北若松原遺跡では石製模造品が豊富で、白玉生産を示す未成品も多数採集され(名取他1998, pp.108-133)、塚山古墳群と対応する拠点集落の手工業生産地区と見てよい。北方の雷電山遺跡にはTK-23~47型式期の特異な長方形竪穴建物群がある(6:今平1994)。

また、田川西岸で前期の中核地域だった神主台地の茂原周辺にも大集落がある。殿山遺跡(85:大川他1995)では、首長居宅と見られる辺長50mの方形区画溝の周囲で調査した447棟の竪穴建物の大半が中~後期で、陶質土器(定森1999)・初期須恵器・鍛冶遺構や、凝灰岩切石の竈焚口枠(水野他2005, p.36)などを伴う。権現山北遺跡(72)では中期前~中葉の竪穴8棟と中期末葉の1棟を調査した。ここでは権現山4区・立野5区等と同様の円筒形土坑群が、遺物からみて中期の集落に伴うらしい(大島編1979, pp.132-145)。薄市遺跡でも中期の竪穴建物が2棟調査されている(86:秋元1988, pp.43-50)。

中期古墳 田川東岸では、栃木県中央部を代表する中期古墳群の東谷古墳群が、東谷・中島地区のすぐ西側に造られる(橋本・谷中2001)。双子塚(墳長73m)・笹塚(105m:小森1979, 秋元・今平1998, 宇都宮市教育委員会2012, 今平2012)の前方後円墳2基と、鶴舞塚(径53m:梁木1984)・松の塚(48m:谷中他2001)・権現塚(30m)・車塚(35m)の大形円墳が北西から南東へ順に立地し、おおよそこの順序で築かれた可能性がある(112-118)。東谷地域における中期後半の首長墳は単輪のない大形円墳になる。田川東岸で埴輪を持つ中期後葉の前方後円墳は墳長40mの八龍塚古墳がある(179:秋元1989)。中期群集墳としては東谷古墳群の東半部に含まれる円墳群(112:谷中他2001)と、磯岡北古墳群(153:内山2006)・中島笹塚古墳群(150:内山2008)・西荆部古屋原1,3,5,6,7号墳(145:墳径14~28m:清水2002)がある。磯岡北と中島笹塚の古墳群は、立野遺跡5・6区周辺の集落に対応する墓域と推定される(第7図)。中島笹塚2・10号墳と磯岡北3号墳でそれぞれ円墳から小形倭鏡を1面ずつ出土している点は(とちぎ理文2005b)、次に述べる田川西岸の状況と同様である。

田川西岸では、東岸の東谷笹塚古墳群に続いて塚山古墳群が現れる(17:宇都宮大1995・2003)。また、雀宮牛塚古墳が豊富な副葬品を持つ(33:大和久1969)。塚山(墳長98.3m)→塚山西(63.1m)→雀宮牛塚(56.7m)・塚山南古墳(58.0m)の順で、TK-216~23型式期に築かれた可能性が高い。塚山西・南古墳並行期に、本村遺跡(1:富川2004)の2号墳(径24m・乳文鏡1面・銀書文線刻埴輪他)、城南3丁目遺跡(12:今平1996)の1号墳(径12.9m・木棺2基・乳文鏡1面)など、副葬品がやや豊富な中小古墳がつくれる。

古墳時代後期・終末期の集落 古墳時代終末期後半(7世紀後半)には、古墳中~後期以来の中心的集落遺跡が衰退する。権現山遺跡と、その北側の立野遺跡5・6区周辺(108:内山2005, p.742)の古墳時代集落は終末期前半(8段階=7世紀前半)、杉村遺跡も終末期後半(9段階=7世紀後半)までで衰退する。中期集落の項で上述した周辺各遺跡も、多くが同様な状況を示す。磯岡遺跡5区(津野2005)は奈良時代以後に続くが、規模が縮小する。

それに代わって、砂田遺跡(103:藤田他2002・中山他2005・津野他2007)と、東側の岡本台地上にある西荆部西原(146:白崎2010)・西赤堀(161:安藤1996)・瑞穂野団地(135:岩上他1978)・

大開台（143：杉浦 2001）の各遺跡が中心的な集落になってゆく。また、後期から出現する集落も見られる。中期群集墳が形成された中島笹塚・磯岡北遺跡では、墓域が消滅する後期以降に集落が現れる（150・153）。部分的な調査で後～終末期集落が知られている中島笹塚遺跡 1・3・7区（内山 2008）および砂田姥沼遺跡 1～3区（藤田 2011）と A・B・D・E区（土生他 2007b・小野他 2007・水野他 2008a・小野他 2008）は、終末期に遺構数が増加した後、奈良時代に小規模化して続く可能性がある。磯岡北遺跡は、宇都宮市調査 B区（勝見 2005）と SG3区・SG11区（藤田 2003）に終末期の建物が見られる。

田川の西岸地域でも同様な状況がある。神主台地の中核的集落として中期から続く殿山遺跡（85）は、後期には向原遺跡（83：大川・三輪 2000）や向原南遺跡（84：大川・吉岡他 1992）も加わり、終末期前半まで継続する。権現山北遺跡（72）も後期後半までは集落がみられる。殿山遺跡 KT-100などを最後として、終末期後半にはこれらの集落群が消滅し、南側の薄市遺跡（86：秋元編 1988）と北側の西下谷田遺跡（50：板橋編 2003, 2006；今平 2008）に移る。西下谷田遺跡は竪穴建物 86 棟と掘立柱建物 45 棟の他に門を持つ 150×108m の板塀区画施設を含み、河内評家かと考えられている（板橋 2007）。

中期後半における田川西岸地域の中心であった塚山古墳群周辺の集落は、未調査で不明な部分が多いが、若松原南遺跡に竪穴建物がある（26：宇都宮市 2008・2009a）。弥生後期・古墳前期の項でも触れた天狗原遺跡（36）では、古墳後期の竪穴建物や、立野 5区と同様の円筒形土坑・円形周溝遺構がある。関道遺跡（8：赤石澤 1988）や、古墳・奈良時代建物が 15 棟調査された雀宮東浦遺跡（28：宇都宮市 2009b, p.24）は古墳後期から奈良時代まで続く可能性もある。

後期・終末期古墳 田川東岸の後期前半では、琴平塚 1号墳が最大の古墳である（154：長 52m・二重周溝、中村 2004）。ただし中期末の可能性もある。笹塚古墳以降の東谷・中島地区周辺でしばらく途絶えていた前方後円墳と輪軸樹立がここで再開する。他に、墳長 31m のしらみ塚古墳がある（172の西部：秋元 2000）。田川西岸の後期前半では、墳長 48.8m の上神主孤塚古墳が最大である（82の北西部：石部・秋元編 1995）。琴平塚 1号・上神主孤塚・しらみ塚は、いずれも前方部が短い帆立貝形前方後円墳である。琴平塚 1号墳を中心として後期前半から群集墳が形成される（中村 2004）。下桑島原古墳群（102：今平他 2002）では後期前半の円墳 2基と後期後半の墳長 35m の前方後円墳 1基（140：南原古墳）が知られ、周溝内の木直植葬・竪穴式小石室や、古墳外の土壇墓も見られる点が琴平塚古墳群と同様な時期・群構成である。

後期後半に古墳が増えて群集墳が盛行し、その中に前方後円墳が所在する（中村 2004, p.190）。田川東岸では墳長 68m の上郷孤塚古墳が最大である（172の東端：前澤 1979, p.414）。東谷・中島地区では琴平塚 3・5号墳（長 25.0m と 23.7m）がある。周辺に長 50.5m の久部愛宕塚（124：梁木他 1995）、47m の下栗本郷山（133に所在：里見 1989）、32～38m の根本西台 1・2・5号墳（136：水野他 2008b・c）、38.5m の飯塚古墳（138：斎藤他 2003）、30～40m の西側部古屋原 8号墳（152：清水 2002）、42m の西赤堀 1号墳と 27m の同 2号墳（161：安藤編 1996）、39m の西赤堀孤塚（168：大川・水野他 1987、中山・井他 2005）、36m の高尾神社古墳（183：内山 1998, 2000）などがある。墳長 36m の屋敷東浦愛宕塚古墳（165：前澤 1979, p.398）も後期後半と推定される。径 43.5m の大形円墳である下栗大塚古墳は終末期と想定される（98：宇都宮市 1996, pp.2-3）。後～終末期群集墳は成願寺（144：篠原編 2000）・西赤堀（161：安藤 1996）再遺跡にあり、方墳を含む。また、単独所在の小形方墳が立野遺跡 5区と砂田姥沼遺跡 1区にある（108：内山 2005, 106：藤田 2011）。

田川西岸では、推定長 45m 以上の本村 3号（1の北部：水野他 2007）、40～50m の綾女塚（27：秋元・飯田他 1998）、30～40m 前後の針ヶ谷二子塚（35：宇都宮市 1990）、43m の大山孤塚（62の南端：前澤 1979）、47.4m の後志部（82の中央：石部他 1998）が後期後半の前方後円墳である。墳形不明の十里木古墳（24：宇都宮市 1998, p.16）は切石石室で 7世紀初葉とされる（秋元・飯田他 1998、

pp.114,128)。市街地化していない地域では、これら首長墳の周囲に群集墳を確認できる（1本村古墳群・62大山古墳群・82神主古墳群）。また、円墳だけの古墳群もみられる（50西下谷田古墳群：今平2008）。

奈良・平安時代 権現山遺跡南部のSG10区SD-250a・bから北東の杉村・磯岡北・杉村北・西刑部西原遺跡へ続く古代道路状遺構は東山道と推定されている（藤田・安藤2000, 藤田2003, 亀田1999, 本書第5章第17節）。この道路状遺構以外は古代の遺構・遺物が少ない。

磯岡遺跡では1区と5区に8～9世紀代の竪穴・掘立柱建物が少数あり、漆紙文書の具注曆（塚原編1999, pp.442-445）と円面硯・獸脚・鉄鉢形土器（津野2005, p.103,112,117,294）が注目される。権現山遺跡周辺では、少数または単独で奈良時代以降の建物が見られる。権現山遺跡南部のSG10区に9世紀代の1棟（本書第5章第15節）、北部のSG1区に古代の溝が1条ある（内山編2010, p.442）。杉村遺跡（111）では、GN1区に1棟（内山編2010, p.57）と北関東自動車道調査区に2棟（藤田・安藤2000）の奈良時代前葉の竪穴建物がある。北側にある立野遺跡（108）でも古代の遺構が希薄で、5区に奈良時代末頃の単独建物がある。立野遺跡では4・7・8区の大溝と、その溝に降りる2区の通路遺構が注意される（内山2005, pp.748-749）。東に隣接する磯岡北SG3・SG4区でもそれぞれ単独の竪穴建物がある（153：藤田2003, pp.167-172,177-179）。磯岡北遺跡の各古墳や中世溝にも7世紀末～奈良時代の須恵器が少量混入していた（内山2006）。中島笹塚遺跡では1区で古墳終末期～奈良時代の集落、8区で奈良時代の溝を通する道路状遺構を調査した（150：内山2008）。砂田姥沼遺跡では1区に奈良時代、3区に平安時代前半の建物が1棟ある（106：藤田2011）。

東側の高位台地上に大規模な古代の集落・猿山（134：川原他1981；常川他1978）・瑞穂野団地（135：岩上他1978；水野他2008b）・大岡台（143：杉浦2001）・西刑部西原3区とE区（146：とちぎ理文2001, 白崎2010）・西赤堀（161：前澤1976・安藤1996・亀田2007）・島田（津野田2010）の各遺跡がある。遺跡の立地が総じて東へ進むことが指摘されている（橋本2002, p.13）。

東谷・中島地区遺跡群の多くが立地する田原低台地では、砂田遺跡が最も大規模である（103：芹澤1993, 藤田・田代2002, 中山・青木他2005, 津野・篠原・今平2007, 今平2012）。8世紀代に掘立柱建物の比率が高い集落である。砂田3区SI-97に「中嶋」の墨書土器があり、『倭名抄』の郷名に見られない「中島」の地名が9世紀から現代まで続くことを示した（藤田他前掲）。同遺跡5区の墨書土器から9世紀中～後葉に「大麻」部集団等が居住したと解釈されている（津野他前掲, p.687）。砂田24区（津野他前掲）と22・36・37区（『東谷・中島地区遺跡群』15掲載予定）とA地区（中山・青木他2005）では、旧河道に降りてゆく古墳後期と平安時代の水場遺構がある。

田川西岸台地にある上神主・茂原遺跡（79：秋元・保坂1999；深谷他2003）は、西下谷田遺跡を引き継いで7世紀後葉に成立する。推定東山道に取り付く位置にあり、奈良時代の河内郡家政庁と、人名瓦を伴う瓦葺倉を含む正倉群と考えられている。また、多功遺跡（69：秋元他1997）も河内郡衙と推定されている。これらに伴う瓦が東谷・中島地区の西刑部西原遺跡に持ち込まれている。

中世 権現山遺跡北部のSG1区では不整形の区画溝内に13世紀後半～14世紀前半を中心とする竪穴遺構2・土坑2・井戸1が認められた。権現山南部のSG10区では柱穴群・土坑・井戸がある（本書第5章第18～21節）。すぐ北側の立野遺跡（108）では、5区に方形区画溝・8区に方形竪穴遺構1基（内山2005）、宇都宮市調査A地区に方形竪穴遺構群（水野他2005）がある。

台地の東端から西端まで、古墳群の周溝をも連結・利用しながら伸びる13世紀ころの長い溝が、磯岡北古墳群の北端部に認められる（磯岡北遺跡SG12・SG16～17区）。常滑産陶器・青磁碗・かわらけが見られ、磯岡北古墳群周辺を中世に利用していたようである。集落に関わる遺構としては方形竪穴があり、磯岡北遺跡SG3区で1基（153：藤田2003, p.173）と、同じく磯岡北遺跡の一部に含まれる「杉村北遺跡」（亀田1999）で2基が確認され、後者では井戸が隣接している。

東谷・中島地区の周辺は、鎌倉・室町時代において宇都宮氏および芳賀氏の支配下にあったことが知られている。小規模な城館として刑部城（186の北東1km）・桑島城（184）・高島館（163）がある。また北方には石井城（182）・さるやま城（133：宇都宮市2005b・2009ab）があり、これらの分布から、中世から鬼怒川低地の開発が本格的に行われたものと考えられている（橋本2002, p.19）。大関台遺跡（143）では長辺80mの方形区画溝を戦時の臨時拠点と考える意見がある（杉浦2001, p.386）。権現山遺跡SG1区や立野遺跡5区の方形区画溝はこれより少し小規模で溝も浅いので、大関台遺跡と同様な性格を考えてよいかどうかは不詳である。

近世 権現山遺跡南部にある大規模な方形区画溝SG10区SD-201ab・204と不整形のSD-503が近世の区画溝と考えられる。近世から近代とみられる大形の方形区画溝は砂田遺跡に多い（津野他2007・今平2012）。砂田尾沼遺跡にも類似した方形溝がある（藤田2011, pp.104-105）。

〔第2章第2節 参考文献〕

- 赤石澤亮 1988『関道遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第25集 宇都宮市教育委員会
- 秋元陽光編 1988『薄市遺跡・大山遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第7集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 秋元陽光編 1989『八龍塚古墳』上三川町埋蔵文化財調査報告第8集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 秋元陽光・川田均・江原英 1991『島田遺跡』II 上三川町埋蔵文化財調査報告第9集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 秋元陽光編 2000『上三川町の古墳』I 上三川町埋蔵文化財調査報告第21集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 秋元陽光 2003『上三川町における古墳の素描-古墳から見た古墳時代集団の抽出』『栃木の考古学』塩野夫先生古稀記念論文『栃木の考古学』刊行会 宇都宮, pp.225-238.
- 秋元陽光・飯田光央・藤原真理 1998『綾女塚古墳の課題』『栃木県考古学会誌』第19集 栃木県考古学会 宇都宮, pp.109-133.
- 秋元陽光・大橋泰夫 1988『栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向』『栃木県考古学会誌』第9集 栃木県考古学会 宇都宮, pp.7-40.
- 秋元陽光・君島利行・諏訪問伸・藤田典夫・植木茂雄 1985『大町遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第5集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 秋元陽光・今平利幸 1998『宇都宮市東谷塚古墳出土の遺物』『峰考古』第13号 宇都宮大学考古研究会 宇都宮, pp.41-64.
- 秋元陽光・保坂知子・及川真紀 1997『多功遺跡』III 上三川町埋蔵文化財調査報告第16集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 秋元陽光・保坂知子 1999『上神主・茂原遺跡』I 上三川町埋蔵文化財調査報告第19集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 安藤美保編 1996『西赤堀遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第178集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
- 五十嵐利勝 1979『権現山北遺跡採集の石器について』『権現山北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第5集 宇都宮市教育委員会, pp.177-182.
- 五十嵐利勝 1981『宇都宮市二軒屋遺跡発掘調査報告』『下野考古学』2 下野考古学研究会 宇都宮, pp.1-140.
- 石部正志・秋元陽光編 1994『上神主浅間神社古墳・多功大塚山古墳』上三川町埋蔵文化財調査報告第12集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 石部正志・秋元陽光編 1995『上神主孤塚古墳』上三川町埋蔵文化財調査報告第13集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 石部正志・秋元陽光・飯田光央編 1998『後志部古墳』上三川町埋蔵文化財調査報告第17集 上三川町教育委員

- 会（栃木県河内郡）
- 板橋正幸編 2003『西下谷田遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第273集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 板橋正幸編 2006『西下谷田遺跡II』栃木県埋蔵文化財調査報告第297集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 板橋正幸 2007『県内の郡内複数宮衙について-古代下野国河内郡を中心として-』『上神主・茂原官衙遺跡の諸問題』栃木県考古学会 宇都宮, pp.51-64.
- 岩上照昭・石橋知明編 1978『宇都宮市瑞穂野田遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第4集 宇都宮市教育委員会
- 内山敏行 1998『宇都宮市上桑島町 高尾神社古墳発掘調査報告（1）』『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』20 平成8年度（1996） 栃木県埋蔵文化財調査報告第217集 栃木県教育委員会, pp.117-137.
- 内山敏行 2000『宇都宮市上桑島町 高尾神社古墳発掘調査報告（2）』『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』22 平成10年度（1998） 栃木県埋蔵文化財調査報告第233集 栃木県教育委員会, pp.97-121.
- 内山敏行 2005『東谷・中島地区遺跡群5 立野遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第290集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 内山敏行 2006『東谷・中島地区遺跡群7 磯岡北古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第299集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 内山敏行 2008『東谷・中島地区遺跡群9 中島塚古墳群・中島塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第311集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 内山敏行編 2010『東谷・中島地区遺跡群10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第331集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 宇都宮市教育委員会社会教育課編 1983『宇都宮の遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第10集
- 宇都宮市教育委員会文化課 1990～2009a『宇都宮市文化財年報』第6号〔平成元年度～第24号〔平成19年度〕
- 宇都宮市教育委員会文化課 2009b『宇都宮市文化財年報』第25号〔平成20年度〕
- 宇都宮市教育委員会（とちぎやま歴史体験館）2012『笹塚古墳とその時代-下毛野の成立を考える-』とちぎやま歴史体験館第14回企画展
- 宇都宮大学考古学研究会 1995『塚山古墳外形確認調査報告』『峰考古』第9号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮, pp.1-108.
- 宇都宮大学考古学研究会 2003『塚山古墳 塚山南古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第48集 宇都宮市教育委員会
- 江原美奈子・深谷昇 2004『島田遺跡』III 縄文時代編 I 上三川町埋蔵文化財調査報告第28集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 江原美奈子・深谷昇 2005『島田遺跡』IV 縄文時代編

第2章 遺跡の環境

- 2 上三川町埋蔵文化財調査報告第31集 上三川町教育委員会(栃木県河内部)
江原美奈子・深谷昇 2006『鳥田遺跡』V 縄文時代編3
3 上三川町埋蔵文化財調査報告第33集 上三川町教育委員会(栃木県河内部)
江原美奈子・深谷昇 2007『鳥田遺跡』VI 旧石器時代・遺物包含層編 2004『アムリ方石遺跡とその周辺』『唐澤考古』第23号 唐澤考古会 佐野 pp.1-16.
大川清・水野船範・矢野淳一 1987『栃木県上三川町西赤塚塚原古墳』上三川町教育委員会(栃木県河内部)
大川清・三輪孝幸 2000『向原遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第22集 上三川町教育委員会(栃木県河内部)
大川清・吉岡秀範・三輪孝幸・中島雄一 1992『栃木県上三川町上ノ原・向原南遺跡』日本漢業史研究所報告第43冊 馬頭(栃木県那須郡)
大川清・吉岡秀範・三輪孝幸・中島雄一 1995『栃木県上三川町 殿山遺跡1』日本漢業史研究所報告第46冊 馬頭(栃木県那須郡)
大島和子編 1979『権現山北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第5集 宇都宮市教育委員会
大関利一の1992『宇都宮市柿木坂遺跡の加曽利E式土器』『栃木県考古学会誌』14 宇都宮 pp.93-100.
大和久遠平 1969『窪宮牛塚古墳』宇都宮市教育委員会(1984年『牛塚古墳』として再版)
小野麻人・大塚生(東京航業研究所編)2007『砂田姥沼遺跡 B区』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第64集 宇都宮市教育委員会
小野麻人・林邦雄・佐々木藤雄(東京航業研究所編)2008『砂田姥沼遺跡 E区』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第70集 宇都宮市教育委員会
勝見一品(埋蔵文化財発掘調査支援協同組合編)2005『磯岡北遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第53集 宇都宮市教育委員会
亀田幸久 1999『杉村北遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第221集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
亀田幸久 2007『西赤塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第304集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生誕学習文化財団
亀田幸久 2008『宇都宮市立野遺跡の縄文草創期土器について』『唐澤考古』27 唐澤考古会 佐野 pp.29-32.
亀田幸久 2012『東谷・中島地区遺跡群 12 西刑部西原遺跡(旧石器・縄文・弥生時代編)』栃木県埋蔵文化財調査報告書第354集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ来未づくり財団
川原由典・中山晋 1981『猿山遺跡 付久部台古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第38集 栃木県教育委員会
神野安伸 1994『天狗原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第34集 宇都宮市教育委員会
久保三編 1990『茂原古墳群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第28集 宇都宮市教育委員会
倉田芳郎編 1971『栃木土産遺跡』先史7 駒沢大学考古学研究会 東京
栗田広行 2005『磯岡遺跡第2次調査報告』上三川町埋蔵文化財調査報告第32集 上三川町教育委員会(栃木県河内部)
小森哲也 1979『宇都宮市塚原古墳出土の内陶輪軸の年代的位置づけ』『考古』第2号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮 pp.60-83.
今平利幸 1993『牛塚東遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第32集 宇都宮市教育委員会
今平利幸 1994『雷電山遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第35集 宇都宮市教育委員会
今平利幸 1996『城南3丁目遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第39集 宇都宮市教育委員会
今平利幸 2006『西下谷田遺跡-弥生・古墳時代前期編-』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第56集 宇都宮市教育委員会
今平利幸 2007『西下谷田遺跡-古代編I-』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第57集 宇都宮市教育委員会

- 今平利幸 2008『西下谷田遺跡-古代編II-』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第65集 宇都宮市教育委員会
今平利幸 2009『大日塚古墳 旧配水塔撤去に伴う発掘調査』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第72集 宇都宮市教育委員会
今平利幸 2012『塚塚古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第78集 宇都宮市教育委員会
今平昌子 1999『一本松遺跡・珠山遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第230集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
今平昌子 2012『東谷・中島地区遺跡群 13 砂田遺跡(10・12・13・16・27区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第355集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ来未づくり財団
今平利幸・栗木誠 2002『下桑島西原古墳群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第30集 宇都宮市教育委員会
斎藤恒夫・鈴木宣孝・栃木さや・大塚伸子 2003『宇都宮市飯塚古墳測量調査報告』『考古』第14号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮 pp.1-10.
定森秀夫 1999『陶瓦土器から見た東日本と朝鮮』『青丘学術論集』第15集 韓国文化研究振興財団 東京 pp.5-93.
里見英司・八木原誠・清水秀和 1989『宇都宮市下栗町本郷山古墳墳丘測量調査報告』『考古』第7号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮 pp.57-66.
篠原浩志編 2000『成瀬寺遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第239集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
篠原浩一・亀田幸久 2009『権現山遺跡・東谷北浦遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第318集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生誕学習文化財団
清水正幸 2002『西刑部古屋原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第46集 宇都宮市教育委員会
下野考古学研究会 1993『石川坪遺跡』『下野考古』19 宇都宮
白崎隆隆(埋蔵文化財発掘調査支援協同組合編)2008『砂田姥沼遺跡 C区』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第62集 宇都宮市教育委員会
白崎隆隆(埋蔵文化財発掘調査支援協同組合編)2010『西刑部西原遺跡 E区』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第76集 宇都宮市教育委員会
杉浦昭博編 2001『大間台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第251集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生誕学習文化財団
鈴木正博 1991『栃木『先史土器』研究の課題』『古代』第91号 早稲田大学考古学 東京 pp.133-171.
芹澤清八 1993『砂田A遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第132集 栃木県教育委員会
芹澤清八 2003『大曲北遺跡出土尖頭器の再評価』『栃木県考古学会誌』24 栃木県考古学 宇都宮 pp.5-20.
高野浩之・戸部孝一・深谷昇・平岡和夫 2004『磯岡遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第29集 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第29集 山武考古学研究所
田代 寛 1968『林木遺跡の袋状土壘』塩谷郷土史館研究報告第2集 氏家(栃木県塩谷郡)
田代己佳 1996『宮の内A遺跡・宮の内B遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第175集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
塚原孝一編 1999『東谷・中島地区遺跡群 No.1 磯岡遺跡(1区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第229集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
常川秀夫・山野井清人 1978『猿山A遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第24集(原本は第20集と記載) 栃木県教育委員会
津野仁 2005『東谷・中島地区遺跡群6 磯岡遺跡(2~7区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第292集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生誕学習文化財団
津野仁・篠原浩志・今平昌子 2007『東谷・中島地区遺跡群 8 砂田遺跡(4~6・18・19・23・24区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第305集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生誕学習文化財団
津野田隆介 2010『鳥田遺跡』VII 古墳-歴史時代編1(IV~V次調査) 上三川町埋蔵文化財調査報告第35集 上三

- 川町教育委員会(栃木県河内郡)
寺内武夫・篠崎浩之助 1939a『下野中原遺跡調査概報-第一回』『考古学』10-10 東京考古学会, pp.514-527.
寺内武夫・篠崎浩之助 1939b『下野中原遺跡調査概報-第二回』『考古学』10-11 東京考古学会, pp.537-555.
栃木県教育委員会事務局文化課 1988『栃木県埋蔵文化財保護行政年報(昭和62年度)』栃木県埋蔵文化財調査報告第99集.
栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997『埋蔵文化財センター年報』第7号(平成9年度).
栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999『埋蔵文化財センター年報』第9号(平成11年度).
栃木県立なす嵐土記の丘資料館 1999『栃木の遺跡』第7回企画展図録 小川(栃木県那須郡) p.45
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2000『埋蔵文化財センター年報』第10号(平成12年度版).
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2001『埋蔵文化財センター年報』第11号(平成13年度版).
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2002『埋蔵文化財センター年報』第12号(平成14年度版).
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2003『埋蔵文化財センター年報』第13号(平成15年度版).
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2004『埋蔵文化財センター年報』第14号(平成16年度版).
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2005a『埋蔵文化財センター年報』第15号(平成17年度版).
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2005b『中島塚遺跡と磯岡北遺跡』『栃木県埋蔵文化財センターだより』やまかいどう No.39 栃木県教育委員会, p.5.
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2006a『埋蔵文化財センター年報』第16号(平成18年度版).
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2006b『砂田姥遺跡3区』『栃木県埋蔵文化財センターだより』やまかいどう No.41 栃木県教育委員会, p.5.
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2007『埋蔵文化財センター年報』第17号(平成19年度版).
富川 努 2004『本村遺跡(弥生・古墳編)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第49集. 宇都宮市教育委員会.
中村亨史 2004『東谷・中島地区遺跡群4 琴平塚古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告書第283集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
中山 晋 1996『砂田東遺跡・上横田A遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第176集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団.
中山晋也・井 博幸・三輪孝幸(日本窯業史研究所編) 2005『西赤塚古墳群2次調査報告』上三川町埋蔵文化財調査報告書第30集 上三川町教育委員会.
中山晋也・青木健二・倉田有子(日本窯業史研究所編) 2005『砂田遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第54集 宇都宮市教育委員会.
名取昌昭・武藤健三・五十嵐利勝 1994『宇都宮市二軒屋遺跡第二次調査報告』『下野考古学』21 下野考古学研究会 宇都宮, pp.1-146.
名取昌昭・武藤健三・五十嵐利勝 1996『雀宮周辺の分布調査6』『下野考古学』24 下野考古学研究会 宇都宮, pp.1-60.
名取昌昭・武藤健三・五十嵐利勝 1998『雀宮周辺の分布調査 補足編』『下野考古学』26 宇都宮.
橋本澄朗・谷中隆 2001『東谷古墳群』と権現山遺跡・百日鬼遺跡』『権現山遺跡・百日鬼遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第257集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
橋本澄朗 2002『大谷酒屋仏造像の歴史的背景について』『研究紀要』10 (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター, pp.1-20.
橋本博文・齋藤瑞穂ほか 2011『権現山遺跡測量・発掘調査報告』『新潟大学考古学研究室調査研究報告』11 新潟大学人文学部 新潟, pp.1-37.
橋本博文・齋藤瑞穂ほか 2012『権現山遺跡測量・発掘調査報告2』『新潟大学考古学研究室調査研究報告』12 新潟大学人文学部 新潟, pp.1-65.
土生朗治・越智徹 富川努 2008『中島塚遺跡(A区)』

- 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第63集 山武考古学研究所 宇都宮市教育委員会.
土生朗治・宮田和男・越智徹・大塚雅之(山武考古学研究所編) 2007a『西南部原遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第59集 宇都宮市教育委員会.
土生朗治・宮田和男・越智徹・大塚雅之(山武考古学研究所編) 2007b『砂田姥遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第60集 宇都宮市教育委員会.
深谷昇・梁木誠・田嶋清彦 2003『上神主・茂原官衙遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告書第27集・宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第47集 上三川町教育委員会・宇都宮市教育委員会.
藤田直也 2003『東谷・中島地区遺跡群3 推定東山間連地区』栃木県埋蔵文化財調査報告書第274集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
藤田直也 2011『東谷・中島地区遺跡群11 砂田姥遺跡・砂田瀧遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第337集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
藤田直也・田代隆 2002『東谷・中島地区遺跡群2 砂田遺跡(1区・2区・3区)』栃木県埋蔵文化財調査報告書第265集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
藤田典夫・安藤保隆 2000(杉村・磯岡・磯岡北) 栃木県埋蔵文化財調査報告書第241集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団.
前澤勝政 1976『西赤塚遺跡』上三川町教育委員会(栃木県河内郡).
前澤勝政 1979『原始・古代編』上三川町史編さん委員会編『上三川町史』資料編・原始・古代・中世・上三川町(栃木県河内郡).
増淵純子・薬島佐知子 1985『宇都宮市茂原町愛宕塚東遺跡採集の弥生土器』『考古学』第5号 宇都宮大学考古学研究会, pp.15-21.
水野順敏・河野一也・栗田欣行(日本窯業史研究所編) 2005『立野遺跡(A地区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第55集 宇都宮市教育委員会.
水野順敏・柏崎広伸・井 博幸・三辻利一・三輪孝幸(日本窯業史研究所編) 2007『本村古墳群・本村遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第58集 宇都宮市教育委員会.
水野順敏・柏崎広伸(日本窯業史研究所編) 2008a『砂田姥遺跡(D区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第67集 宇都宮市教育委員会.
水野順敏・柏崎広伸 2008b『みずほの台遺跡群(根本西台古墳群第2次・磯野野田地区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第68集 宇都宮市教育委員会.
水野順敏・柏崎広伸 2008c『みずほの台遺跡群II(根本西台古墳群第3次・西南部原遺跡)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第69集 宇都宮市教育委員会.
森嶋秀一 2004『204・上三川町・宇都宮市上神主・茂原官衙遺跡出土の大型尖頭器』『Aesculus』No.22 Aesculus同人(栃木県石器時代研究会) 宇都宮, pp.1-3.
安永真一 2001『上神主・茂原 茂原向原 北原東』栃木県埋蔵文化財調査報告書第256集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
谷中隆・大島美智子編 2001『権現山遺跡・百日鬼遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第257集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団.
梁木誠 1984『鶴舞塚古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第13集 宇都宮市教育委員会.
梁木誠・今平利幸 1995『久保愛宕塚古墳・谷口古墳・磯崎山古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第37集 宇都宮市教育委員会.
山崎芳家 1970『宇都宮市兵庫塚A地点・B地点および針ヶ谷遺跡について』『足跡』2 宇都宮学園高等学校地理・歴史研究会 宇都宮, pp.22-26.
渡辺邦夫・上野修一 1993『宇都宮市石川坪遺跡出土の石製品』『Aesculus』19 Aesculus同人 宇都宮, pp.15-16.

第3章 調査区の配置と標準土層

第1節 権現山遺跡における調査区の配置と概要

調査区と遺構 権現山遺跡は、東谷・中島土地区画整理事業対象地区の南西部にあり、地区外の南側および南西側まで広がる。遺跡の中心は「西谷田」の開析谷よりも西側の低台地上にあり、標高 79.7 ～ 83.0m で北部ほど標高が高い。低地からの比高は、大きいところでも 1.0 ～ 1.5m 前後。遺跡の南東部は、「西谷田」より東側にある標高 79.0 ～ 79.4m の低地および微高地まで及ぶ (SG2 区・SG9 区・SG15 区)。

権現山遺跡北部 (2 ～ 4 区と SG1 区) および同遺跡南部 (SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区) の調査で認められた遺構の種類と数は、下記のとおりである。『東谷・中島地区遺跡群 10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』(内山編 2010) 刊行時には、権現山遺跡南部 (SG2・SG5・SG9・SG10・SG15 区) が整理作業の途上であったため、その後の整理作業によって南部の遺構数に変動が生じている。権現山遺跡 SG9 区のすぐ東側に所在する磯岡遺跡 SG9 区 (古墳時代の竪穴建物跡 2、時期不明の溝 2・土坑 2) は、権現山 SG9 区と同時に発掘調査を実施したが、実際は磯岡遺跡の一部であることから、下記の権現山 SG9 区の遺構数は磯岡 SG9 区を除外して集計している。また、下記の各遺構のうち権現山 SG1 区の古代道路遺構は、杉村遺跡 SG1 区や磯岡北遺跡の道路状遺構と一連の遺構で、『東谷・中島地区遺跡群 3』(藤田 2003) で報告済みである。

(権現山遺跡北部)

権現山 2 区…古墳時代の竪穴建物跡 6 棟 (3 棟の建替)・掘立柱建物跡 4・柱穴状土坑 3・遺物集中地点 1 / 中世の井戸 1 / 近世の溝 4 / 時期不明の掘立柱建物跡 1・井戸 3・溝 9・土坑 103

権現山 3 区…遺構なし

権現山 4 区…古墳時代の竪穴建物跡 41・掘立柱建物跡 2・方形周溝遺構 1・溝 1・柱穴状土坑 1・土坑 52 (土坑 21・円筒形土坑 31) / 時期不明の掘立柱建物跡 3・井戸 2・溝 1・土坑 28・柱穴状土坑 7

権現山 SG1 区…縄文時代の土坑 1 / 古墳時代の竪穴建物跡 37 (鍛冶遺構 1 を含む)・土坑 25 (土壇墓 71・土坑 6・円筒形土坑 18)・居館跡 1 (外郭溝 1・堀 1・柵列 1・掘立柱建物 1・不明遺構 1・柱穴状土坑 61) / 古代の道路遺構 1 / 古代の溝 1 / 中世の竪穴遺構 2・井戸 1・溝 2・土坑 2 / 時期不明の集積遺構 1・井戸 2・溝 4・土坑 59・柱穴状土坑 114

(権現山遺跡南部)

権現山 SG2 区…古墳時代の土坑 2 / 時期不明の溝 1・土坑 49・集石遺構 1 / 自然流路 7

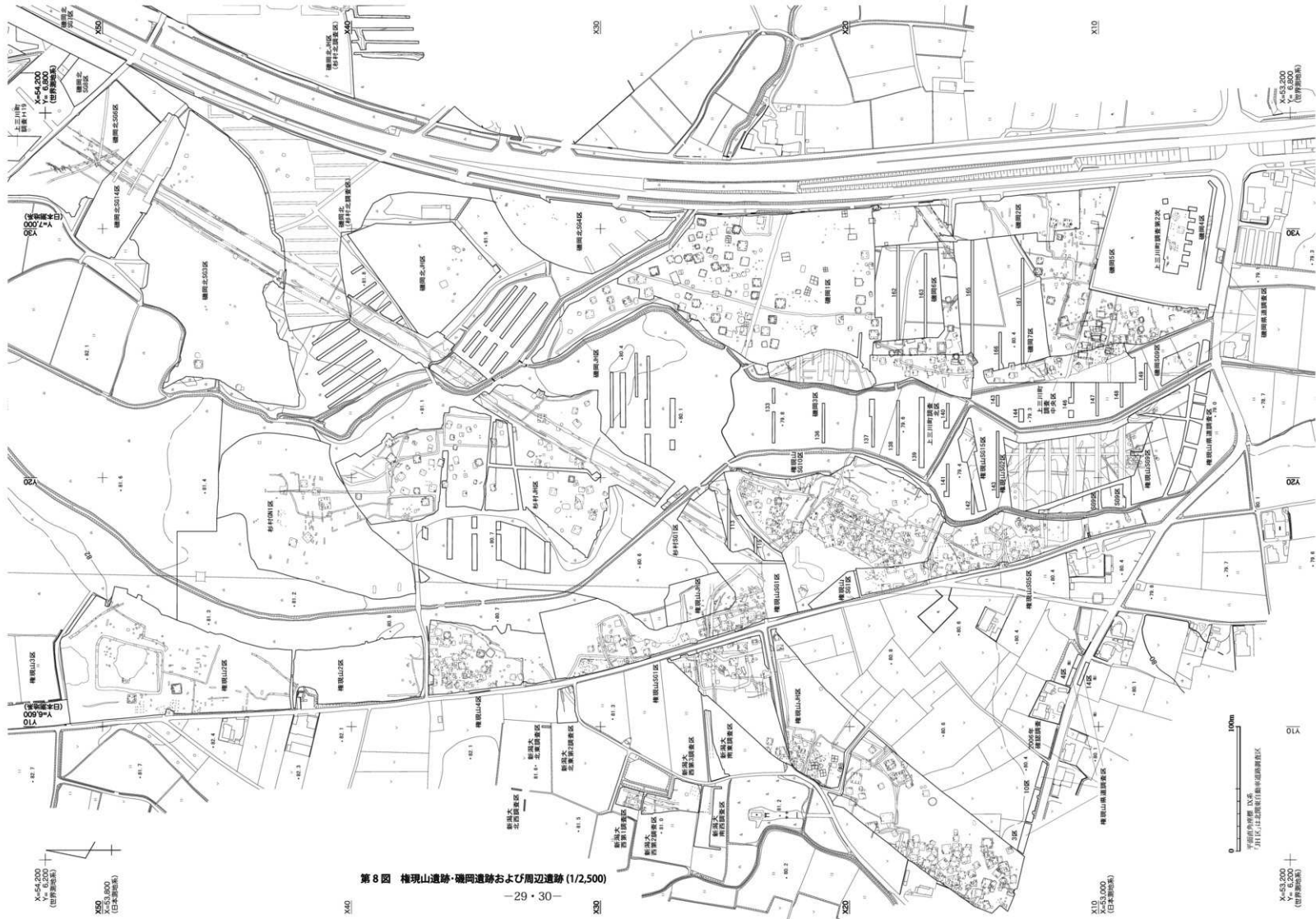
権現山 SG5 区…古墳時代の竪穴建物跡 37・居館跡 1 [柵列 1・居館外郭溝 2 (北辺は SG5 区 SD-43 に連続)]・溝 4・遺物集中地点 1・土坑 71 (土坑 68+ 円筒形土坑 3)・不整形遺構 1 / 平安時代の土坑 1 / 中世～近世の土坑 1・溝 3 / 時期不明の掘立柱建物跡 3・柵列 1・井戸 4・溝 3・土坑 46・柱穴状土坑 74

権現山 SG9 区…古墳時代の土坑 1 / 時期不明の道路状遺構 (7) 1・溝 5・土坑 20

権現山 SG10 区…縄文時代の竪穴建物跡 1・土坑 6 / 弥生時代の土坑 1 / 古墳時代の竪穴建物跡 86 (鍛冶遺構 1 を含む、SG5 区に続く建物 2 棟を除く)・井戸 1・溝 17・居館外郭溝 2 (西溝は SG5 区 SD-43 に連続)・土坑 55 (土坑 46+ 円筒形土坑 9)・柱穴状土坑 17 / 平安時代の竪穴建物跡 1・土坑 1 / 古代の道路側溝 2 / 中世の井戸 6・土坑 2・柱穴状土坑 82 / 中～近世の溝 1 / 近世の土坑 1・溝 4 / 時期不明の掘立柱建物跡 1・井戸 5・溝 22・焼土 1・土坑 142・柱穴状土坑 132

権現山 SG15 区…時期不明の溝 2・土坑 7 / 古墳時代以降の自然流路 2

以上の権現山遺跡の 9 地区の遺構を、時代・種別ごとに集計すると次のとおりである。上記のように、前回報告時 (『東谷・中島地区遺跡群 10』) の集計値は、その後の整理作業によって遺跡南半部の遺構数が変動している。また、権現山 SG9 区の遺構数からは磯岡 SG9 区を除外している。



第8図 榎原山遺跡・磯間遺跡および周辺遺跡 (1/2,500)

X=43,200
Y=6,200
(北緯東経)

X=43,200
Y=6,200
(北緯東経)

X=44,200
Y=6,200
(北緯東経)

X=44,200
Y=6,200
(北緯東経)

X=43,200
Y=6,200
(北緯東経)

X=43,200
Y=6,200
(北緯東経)

X=43,200
Y=6,200
(北緯東経)

X=43,200
Y=6,200
(北緯東経)

0 100m
 水平方向の距離は、
 1:1で縮尺した距離を示す。

縄文時代：竪穴住居1、土坑7

弥生時代：土坑1

古墳時代集落跡：竪穴建物206（鍛冶遺構2を含む）・掘立柱建物跡6・方形周溝遺構1・溝22・柱穴状土坑21・土坑206（土壇墓?1・円筒形土坑を含む）・遺物集中地点2・不整形遺構1・井戸1

古墳時代居館跡：2箇所（外郭溝3・塀1・柵列2・掘立柱建物1・不明遺構1・柱穴状土坑61）

奈良～平安時代：溝1・道路遺構1・道路側溝2

平安時代：竪穴建物1、土坑2

中世：竪穴遺構2・井戸8・溝2・土坑4

中～近世：溝4・土坑1

近世：溝4・土坑1

近現代：溝2

時代不明：竪穴遺構1、掘立柱建物8、井戸16、溝47、土坑459、柱穴状土坑428、焼土2、柵列1、通路状遺構(?)1、集礎遺構1、集石遺構1、

自然地形：自然流路9

このうち、今回報告する南半部だけの遺構数は、巻末の「報告書抄録」に示したとおり竪穴住居跡124棟、土坑681基、掘立柱建物跡15棟、井戸25基、溝87条等である。

隣接する調査区 権現山遺跡の西部は、北関東自動車道建設と県道拡幅に伴って発掘調査が実施されている。権現山遺跡県道調査区では古墳中期の竪穴建物6棟から、土師器・須恵器や直弧文のある紡錘車等が出土した（篠原・亀田2009）。北関東自動車道の権現山A区では旧石器時代遺物集中地点1箇所・古墳中期～終末期の竪穴建物跡160棟・中世の可能性のある方形竪穴1棟と地下式坑1基、同じく権現山B区では古墳中期の円墳10基・土壇墓2基と中～後期の竪穴建物跡16棟などが調査された（谷中・大島編2001）。B区は主に墓域で、東谷古墳群の東半部である。また、権現山遺跡北部居館の西半を主対象として、新潟大学考古学研究室が自主調査（学術発掘）を行った調査区では、居館外郭の溝（堀）・柱穴と、古墳時代の竪穴建物跡3・時期不明の掘立柱建物跡1・土坑が確認されている（橋本・齋藤ほか2011・2012）。

権現山遺跡の西縁を赤沢川が画している。この小川をはさんだすぐ西側には、標高80mの微高地があり、東谷古墳群の西半部と、百目鬼遺跡、東谷北浦遺跡が立地している。百目鬼遺跡では古墳中期の竪穴建物跡53棟と大形円墳の周溝（松の塚古墳）が北関東自動車道調査区で確認された（谷中・大島編2001）。東谷北浦遺跡では笹塚古墳北側にある古墳前期末～中期の竪穴住居13軒や溝が知られ、笹塚古墳と双子塚古墳の間では円墳も調査されている（篠原・亀田2009）。

権現山遺跡の北側には、少し間をあけて同じ台地上に立野遺跡5区・8区・4区などがある（内山2005）。立野遺跡5区は縄文早・中・後期と弥生中期(?)の土坑、古墳前期末～終末期と奈良時代の竪穴建物跡、中世の集石土坑、中・近世の溝などが確認された遺跡で、古墳中期32棟・後期39棟・時期不明1棟・奈良時代末1棟の竪穴建物跡がある。立野遺跡4区・8区では縄文後期と弥生中期の土坑、古代の溝、中～近世の方形竪穴遺構1棟、時期不明の掘立柱建物跡1棟と柱穴群などが含まれる。

第2節 磯岡遺跡における調査区の配置と概要

調査区と遺構 磯岡遺跡は、東谷・中島土地区画整理事業対象地区の南東部にあり、地区外の南側および東側まで広がる。遺跡の中心は「中島谷田」の開析谷よりも東側の台地上にあり、標高80.0m前後で北部ほど標高が高い。西側低地部（標高79.0～79.2m）からの比高は1.0m前後。遺跡の南西部は、「中島谷田」より東側にある標高79.4mの台地西縁にも及び、ここがSG9区に該当する。

第3章 調査区の配置と標準土層



第9図 榎現山遺跡南部・磯岡遺跡の標準土層

磯岡遺跡1～7区とSG9区および上三川町教育委員会第1・2次調査区で認められた遺構の種類と数は、次のとおりである(塚原1999・高野他2004・津野2005・栗田2005)。ただし、権現山遺跡SG9区のすぐ東に隣接する磯岡遺跡SG9区(古墳時代の竪穴建物跡2、時期不明の溝2・土坑2)は、権現山SG9区と同時に「杉村遺跡IX区」の地区名で一括して発掘調査を実施したが、実際は「杉村遺跡IX区」の東半部だけが磯岡遺跡に含まれることから、下記の磯岡SG9区の遺構数は権現山SG9区を除外して集計している。

1区 縄文時代の竪穴住居跡1・土坑4/弥生時代の土坑2/古墳時代の竪穴建物跡65(建替・拡張を含めて76)・土坑11・井戸1/平安時代の竪穴建物跡2

2～7区 弥生時代の土坑2/古墳時代の竪穴建物跡63・掘立柱建物跡1・土坑25・性格不明遺構1/奈良時代の竪穴建物跡3・掘立柱建物跡2・土坑2・溝1・道路状遺構1/平安時代の竪穴建物跡5・掘立柱建物跡9・井戸2・土坑1・道路状遺構1/時期不明の竪穴建物跡7・掘立柱建物跡7・土坑189・溝51

SG9区 古墳時代の竪穴建物跡2/時期不明の溝2・土坑5・焼土集中1

北関東自動車道調査区 古墳時代の竪穴建物跡9/時期不明の溝4

県道省宮真岡線拡幅部調査区 古墳時代の竪穴建物跡1

上三川町第1次北区と中央区 古墳時代の竪穴建物跡24(2～7区調査と同一の8棟を含む)/奈良時代の竪穴建物跡1/平安時代の竪穴建物跡1・掘立柱建物跡1/時期不明の竪穴建物跡10・掘立柱建物跡3・土坑30・小ピット57・溝9

上三川町第2次調査区 古墳時代の竪穴建物跡4/時期不明(古墳～平安時代)の竪穴建物跡1棟/奈良時代の竪穴建物跡1棟/土坑12・風倒木痕2・小ピット17

以上の磯岡遺跡の各地区の遺構を、時代・種別ごとに集計すると次のとおりである。

縄文時代：竪穴住居1、土坑4

弥生時代：土坑4

古墳時代：竪穴建物160

奈良時代：竪穴建物4、掘立柱建物跡2、土坑2、溝1、道路状遺構1

平安時代：竪穴建物8、掘立柱建物跡9、井戸2、土坑1、道路状遺構1

時期不明：竪穴建物18、掘立柱建物跡10、土坑236、小ピット74、溝64、焼土集中1

第3節 権現山遺跡・磯岡遺跡と周辺の土層

台地部の土層 権現山遺跡のうち西半部の台地上に立地する2・3・4・SG1・SG5・SG10区では、台地上で地山の最も深い部分までを把握できたSG10区の標準土層記号を準用して、I層からV層までに区分できる(第9図上段)。SG10区にある中世の井戸SE-569で確認した地山の標準土層を図上段左に示す。I層が表土、III層とIV層がローム層、V層が礫層である。

V層(礫層)は明瞭な水成堆積層である。鹿沼軽石層(Ag-KP 4.5万年cal BP)は、層としては確認できず、砂礫層群であるV層を構成するラミナ(葉層)の中に鹿沼軽石粒が混在してみられる。

IV層(ハードローム)は砂粒を含むので、水の影響も受けながら更新統最上部の田原ロームが堆積したことがわかる。IV層の形成開始期を示す情報は、権現山遺跡の北に隣接する立野遺跡5区と、権現山遺跡西半の北関東自動車道調査区で、ローム層最下部から浅間大窪沢軽石(As-Ok1,未較正年代で1.7万年BP)や浅間板鼻黄色軽石(As-YP,1.5-1.65万年cal BP)が検出されている(古環境研究所2001・2005b)。権現山遺跡SG1区の旧石器時代の尖頭器も、ローム層形成年代の一時期を示す。ただしこの尖頭器が本来含まれていた層は不明で、古墳時代の竪穴建物の混入遺物である(『東谷・中島地区遺跡群』10, p.68)。

七本板軽石(Nt-S)と今市軽石(Nt-I)は1.4-1.5万年cal BPの男体火山起源のテフラである。東谷・中

島地区周辺では、層を形成せず粒・塊状で認められ、II層からIII層を中心として、その上下(黒色腐植層)の最下部からハードローム層の最上部まで)に散在している。権現山遺跡SG10区ではI層最下部にNi-SとNi-Iが認められたが、西側の北関東自動車道A区ではII層中にある(谷中・大島編2001)。人為的な土地利用の影響も含め、I層(腐植)の形成つまり土壌化の進行状況によってこのような差が生じたと推定される。立野遺跡5区ではハードローム最上部にもNi-S・Ni-Iがあり、同じ東谷・中島地域でも差がある。

低地部の土層(第9図下段) 低地と微高地で地山ローム層がほとんどない権現山SG2・SG9・SG15区と、台地から低地への移行部(権現山2・4・SG1区東端と磯岡遺跡SG9区)では、統一した土層名を付与できない。4区低地トレンチ(古環境研究所2010b, p.324)とSG9区断ち割りトレンチ(第383図)では、古墳前期の浅川C軽石(As-C)と後期初頭の榛名ニッ岳渋川テフラ(Hr-FA)を確認した。さらに、権現山SG2区の北東部低地13-21グリッドでは1108年に降下した浅間B軽石(As-B)も認められた(第241図)。

Hr-FAは肉眼でよく観察できる場合が多い。第9図下段では、4区低地トレンチ12層、SG9区断ち割りトレンチBの4'層下面、SG2区VII層中位に降下している。層として確認できない場合も、白色テフラ粒集中部がHr-FA層準を示す可能性が高い。なお、古墳後期初頭のHr-FAと後期中葉のHr-FP(榛名ニッ岳伊香保テフラ)は、層相や火山ガラス屈折率から識別しにくい場合がある(今平2012, p.71)。東谷・中島地区周辺で確認される榛名火山のテフラは、テフラの分布(古環境研究所2000, p.379)および考古学的遺構・遺物との関係(古環境研究所他2005b, p.495)から判断すると、古墳後期初頭のHr-FAと考えられる。

As-Cは、Hr-FAに比べると観察しにくい場合が多いが、権現山SG2区13-21グリッドでは最大厚2cmの層として認められた(第9図下段・第257図)。第9図下段の権現山4区低地トレンチ14層(『東谷・中島地区遺跡群』10, pp.320.322)、権現山SG9区断ち割りトレンチBの5層(第383図)のAs-Cはテフラ層としては確認できないが、白色テフラ粒を肉眼でも認めることができる。

遺構・遺物との関係 台地上では、II層(ローム漸移層)で弥生・古墳時代以後の遺構を確認できた。縄文時代前半期の遺構や包含層は、ソフトローム層(権現山遺跡III層)まで掘り下げないと遺構確認が難しい場合がある。権現山遺跡SG10区の縄文時代土坑SK-697・699は、上部を破壊する古墳時代溝SD-527の法面を確認した。中島塚塚3区、磯岡北遺跡(磯岡北古墳群)SG17区、立野5区などでも同様な状況がある。低地部では、古墳時代テフラの降灰層準で古墳時代遺構を確認できることになる。遺構プランよりも先に、遺構覆土上の窪地に堆積した白灰色テフラの集中部を確認できる場合がある。ただし、権現山遺跡南部の低地部では、古墳時代の土坑と自然流路を確認できたが、水田遺構は確認されなかった。

(第3節註) ※第○集=栃木県埋蔵文化財調査報告第○集
古環境研究所1999『栃木県、磯岡遺跡1区の自然科学分析』『東谷・中島地区遺跡群No.1 磯岡遺跡(1区)』第220集 pp.409-411。

古環境研究所2000『テフラ分析』『杉村・磯岡・磯岡北』第241集 pp.377-384。
古環境研究所2001『権現山遺跡・百日鬼遺跡の土層とテフラ』『権現山遺跡・百日鬼遺跡』第257集 本文編III pp.250-258。

古環境研究所2003『杉村遺跡SG1区、磯岡北SG3・SG6・SG11区、西側部西原遺跡2区の自然科学分析 第1節 土層とテフラ』『東谷・中島地区遺跡群3 推定東山道関連地区』第274集 pp.235-251。

古環境研究所2004『栃木県西側部西原遺跡の土層とテフラ』『東谷・中島地区遺跡群4 琴平塚古墳群』第283集 pp.197-203。

古環境研究所2005a/b『立野遺跡5区竪穴建物跡の古墳時代火山灰』『立野遺跡5区の指標テフラと古環境』『東谷・中島地区遺跡群5 立野遺跡』第290集 pp.389-390, 495-500。

古環境研究所2005c/d『磯岡遺跡の自然科学分析 1. 磯岡遺跡のテフラ分析』『磯岡遺跡の自然科学分析 1. 磯岡遺跡の土層とテフラ』『東谷・中島地区遺跡群6 磯岡遺跡(2～7区)』第292集 pp.302-305, 309-313。

古環境研究所2007『砂田遺跡の自然科学分析 1. 土層とテフラ』『東谷・中島地区遺跡群8 砂田遺跡(4～6・18・19・23・24区)』第305集 pp.748-753。

古環境研究所2008a/b『栃木県東谷・中島地区(中島塚遺跡6区)における火山灰分析』『栃木県東谷・中島地区(中島塚遺跡7区・8区)における火山灰分析』『東谷・中島地区遺跡群9 中島塚古墳群・中島塚遺跡群』第311集 pp.368-373, 375-380。

古環境研究所2010a/b/c『権現山遺跡2区と杉村遺跡GN1区のアフラ分析』『権現山遺跡4区の埋没谷と井戸跡SE-72における土層とテフラ』『権現山遺跡SG1区における土層とテフラ』『東谷・中島地区遺跡群10 権現山遺跡北群・杉村遺跡』第331集 pp.161-164, 322-324, 471-475。

古環境研究所2011『砂田姥遺跡2区・3区の火山灰分析』『東谷・中島地区遺跡群11 砂田姥遺跡・砂田遺跡』第337集 pp.228-233。

今平利幸2012『世界古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第78集 宇都宮市教育委員会 pp.68.71。

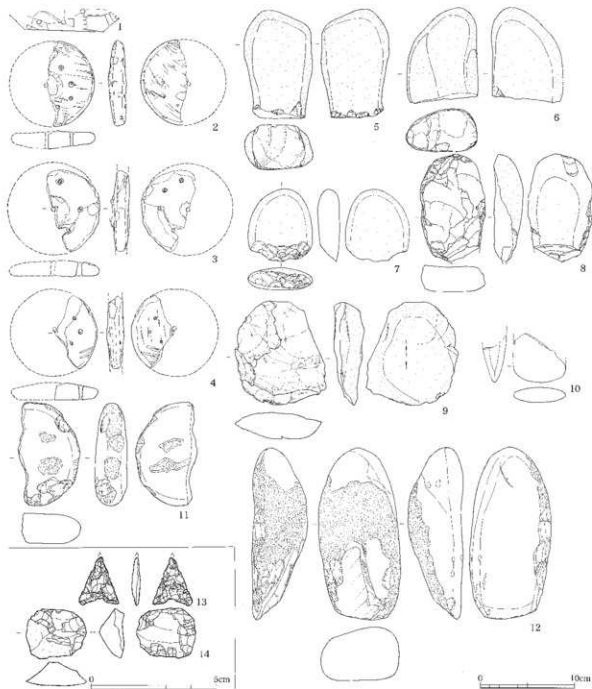
パリン、サーヴェイ株式会社2012『西側部西原遺跡3区の理化学分析報告』『東谷・中島地区遺跡群12 西側部西原遺跡(旧石器・縄文・弥生時代編)』第354集 pp.97-103。

谷中隆・大島美智子編2001『権現山遺跡・百日鬼遺跡』第257集 本文編 1 pp.28.34。

第4章 権現山遺跡各調査区の縄文時代遺物

第1節 縄文時代遺構外出土遺物の追加報告

権現山遺跡の各調査区で縄文時代遺構以外から出土した縄文時代遺物は、権現山遺跡北部の報告書である『東谷・中島地区遺跡群』10に、南部の各調査区出土遺物もまとめて報告した。その後の整理作業にともなって、権現山遺跡南部の古墳時代遺構出土品と遺構外出土遺物に少量の縄文時代遺物が確認されたので、ここで追加報告をおこなう。



第10図 権現山遺跡 縄文時代の遺構外出土遺物

第3表 権現山遺跡各地区の縄文時代遺物

番号 種類 器種	大きさ (縦×横)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態 注記
1 縄文土器 深鉢	高 残 2.2 底 残 8.4	外底面は円周方向に割って凹状にする。外面胴部下端ナメヘラケズリ。内面口コブ。側面に外周側から回転穿孔した補修孔が2箇所ある。 [注記] UT-SG5 SI-61 両面発見	7.5YR/6/4 に近い黄や 白灰～磁石多、白～灰色調や や多、やや硬質	SG5区16の古墳時代Ⅱ Ⅰ期 14号 注記は5階層
2 有孔円盤形 土製品	長 残 8.9 幅 残 5.0 厚 残 1.8 底 残 62.4	表面面ともナメテ、同一方向に走る繊維状物質の圧痕が残る。表面は細く、 丸孔1個(径4.3mm)～2mm程のやや太いものもある。中央に1孔あり、表面に割傷痕 あり。周囲に1孔があり、残元すは8孔と同等。孔は表面からの穿孔で、 丸孔は長径約3mm、裏面約2mm。中央の孔もほぼ同径か、わずかに大きい。 底は規定される。	2.5Y/4/1 黄灰 やや硬質 白磁粒少、赤磁粒 多砂粒微量	SG5区16の試掘調査トレン チ中でSI-8-9・10付近 1/2層 UT-SG-TX16-16 SI
3 有孔円盤形 土製品	縦残 9.8 幅 残 8.6 幅 残 5.0 厚 残 1.9 底 残 62.8	中央孔(径3.63mm)を中心に、貫通する孔3個(径3.5～4.3mm)、貫通しな い丸孔1個(径4.3mm)がある。同心円状に並ぶとすれば、全体で6～8個の孔 が規定できる。表面中央には割傷痕がある。中央の孔を通る左側の欠面に は黒色物質が付着し、欠削後も使用していたとも推測される。表面面はかな り粗く、磁石反応がある。	5YR/6/6 橙 やや硬質 白磁粒少、白磁～ 粗粒と赤磁粒微量	SG5区16の古墳時代Ⅱ 1/2 Ⅱ期残存 UT-SG-V SI-1021
4 円筒状 土製品	縦残 9.2 幅 残 7.6 幅 残 4.3 厚 残 1.7 底 残 40.5	中央に1孔(径不明)、同心円状に3孔(表2.7～4.2、裏2.9～2.6mm)あり、 孔径から、表面から穿孔したと見られる。孔間隔から、全周で8孔が規定で きる。上には新しい欠削だが、左下の欠面には黒色物質が付着し、欠削後 も使用したとも推測される。表面面、側面はナメ、表面面にはミガケ状の浅い 凹線と、磁石反応がある。	5YR/6/6 橙 やや硬質 白磁粒少 やや硬質	SG5区16の古墳時代Ⅱ 1/2 Ⅱ期残存 UT-SG-V SI-1022
5 スタンプ形 石	縦 11.4 幅 7.2 × 4.9 厚 残 66.9	断面が正方形の棒状河原石を素材とする。下面は1回の割削のままで、 割削面を中心に割削と磨削が認められる。他に加工痕等はない。SI-20出土で、 古墳時代に編物石等として使った可能性あり。	7.5YR/2 灰オリーブ 輝石石灰岩(新第三紀)	SG5区16の古墳時代Ⅱ 完形 UT-SG-V SI-20 42
6 スタンプ形 石	縦 9.5 幅 7.5 × 4.5 厚 90.48	断面が正方形の棒状河原石を素材とする。下面は1回の割削はほぼそのまま、 割削面は粗く、表面磨削はわずか。他に加工痕はない。SI-20出土で、古墳時 代に編物石等として使った可能性あり。	2.5Y/6/3 に近い黄 輝石石灰岩(新第三紀)	SG5区16の古墳時代Ⅱ 完形 UT-SG-V SI-20 37
7 石器 磯石	長 7.6 幅 6.7 × 2.3 厚 15.7	扁平な自然磨の一面に片面側から連続する割削を行う。対面角は50～60度 程度。対面割削の縁がわずかに磨耗突角。	5Y7/1 灰白 石英含有かんらん石輝石石灰 岩(新第三紀)	SG5区16の試掘調査 完形 UT-SG-V TK15
8 石器 磯石	長 残 11.3 幅 6.8 厚 3.1 底 残 293.6	右側の左側の表面を素材として、左側の面を節理に沿って平坦に割った後に外面 加工する。節理の両側の右辺と下辺を左辺角の鋭い割削にする。下辺は尖り、 節理に平行し、使用による破損がもたれない。左辺は少し割削を行っている が、刃部にはならない。	10B/C/3 暗青灰 砂岩(古墳)	SG1区16の古墳時代Ⅱ 完形 UT-SG-I SI-18 21
9 石器 磯石	長 10.8 幅 9.2 厚 9.8	大形の割削。表面は割削で、腹面には左縁からの割削が2枚あり、 使用によると見られる割削がある。重量378.4g。	7.5Y/2 灰オリーブ 砂岩(古墳)	SG5区16の古墳時代Ⅱ 完形 UT-SG-V SI-20 30
10 石器 磨石	長 残 5.1 幅 5.5 厚 残 2.5	腹面にやや不明な割削痕を持ち、縦断面には表裏対称、圓と平の対面に細か い割削痕が少し見られるので磨石とも見られるが、あまり確実でない。重量 60.9g。	5Y7/4/1 灰オリーブ 輝石石灰岩(新第三紀)	SG1区16の古墳時代Ⅱ 丸底部磨 UT-SG-I SI-32 新第三紀土
11 石器 磨石	長 10.7 幅 6.9 厚 3.4 底 残 311.3	縦穴・線状な石灰岩の河原石を素材とする。磨石として使用した時点で、左 側が欠削していたと見られる。表面面とも磨削付面まで研削し、両縁には割削 で入れ替える。磨削による凹みは裏・裏とも2ヶ所ずつ確認できる。 縦穴縁の中心付近が表裏とも最もよく研削され、元素 部の磨石として使用したものを、欠削後再生したと想定される。	7.5Y7/1 灰白 輝石石灰岩(新第三紀)	SG5区16の古墳時代Ⅱ 完形 UT-SG-V SI-21 29
12 石器 磨石	長 18.0 幅 8.6 厚 5.9 底 残 1153.8	片面が扁平で片面が高の自然磨の両側面を割削後に磨削形成。対面は、扁 平面面は自然磨のままで、中央の面は節理に沿った割削面の高い部分を磨削す るが、凸部を除去しきれないで加工を中絶している。対面が割削と磨削する ので表面面はよく磨削した完成品。研削は認められないが、石材は磨削加工 と共通する。	5Y6/2 灰オリーブ 砂岩(古墳)	SG10区190-180のグ リッド存在の古墳時代 Ⅱ期 完形 UT-SG-X SD130 9
13 石器 磨石	長 残 18.80 幅 15.75 厚 3.40	使用による欠削が小さく欠削している。左側の面の方が厚み(丸縁)を持つ。 円野道線5区目の窪谷部および中央地点にある早期の形や石材が共通する。 現存重量0.59g。	N1.5/0 黒 黒炭石	4区 先端部欠 UT-GN-IV
14 スタンプ バー	長 1.92 幅 2.32 厚 0.95	小形でおそらく縦長の薄片を素材として、薄片部部の付点付面を削り取って いる。腹面のおおよそ全周と背面の前半面に小さな割削を行って刃部を作る。	N1.5/0 黒 白色磁粒がやや目立つ黒炭石	SG5区16の古墳時代Ⅱ 完形 UT-SG-V SI-6

1は補修孔のある深鉢底部である。3と4は古墳時代の竪穴建物SG5区SI-10に混入して2点出土した有孔円盤形土製品で、胎土・焼成も同様だが、孔径が違うので別個体である。2も同種で、16-16グリッドで試掘トレンチTX16から出土した。TX16が16-16グリッドでSG5区SI-10の上部を掘り下げているので、これもSG5区SI-10周辺で出土している。これら3例は円周状に孔を配列する特徴がある。通常は小孔を直線状に配列し、中央孔が他孔よりも一回り大きいことが多い。大洞C2式期の建物跡SG10区SI-63の有孔円盤形土製品(第14図)が晩期の粗製土器と同じく砂粒を多く含むのに比べると、SG5区16の3点は胎土がずっと精良で、むしろ土師器や晩期の精製土器に近い。有孔円盤形土製品は大洞C1～C2式期に見られる遺物で、SG5区出土例のように比較的精良な胎土が目立つ。

縄文早期のスタンプ形石器(5・6)は前回報告した石器中には認められなかった器種で、磯石(9)とともにSG5区で古墳時代Ⅱ期SI-20に混入して出土した。すぐ南側の古墳時代Ⅱ期SI-21に磨石がある(11)。SG5区SI-21・22には撫糸文・条痕文土器が少量混入している(前回報告書の第36図6・36、第37図123)。他の磯石2点は、7がSG5区16の試掘トレンチ、8が古墳時代Ⅱ期SG1区SI-18で出土した。

12は磨製石斧に使う石材を用いて、敲打して作った石斧。節理面に沿った割れ面と段が刃部の上方にあり、それを除去しようとして敲いている。通常であれば磨製石斧の未完成品とされるものだが、使用して刃部が剥離しているのが石斧（製品）として扱った。SG10区中央部で古墳時代溝SD-319に混入して出土した。SG10区SD-319では条痕文系土器（前報告書の第37図113・121・122）があり、それと近接するSG10区SI-34には縹系文系・沈線文系・条痕文系土器（前報告書の第36～37図26・70・114）と浮島式・興津式（同じく第38図163・168・169）がある。10は磨製石斧の刃部破片。13は権現山4区の遺構外で採集した黒曜石製の鎌で、使用して先端が小さく欠損している。立野遺跡5区の包含層および遺物集中地点にある早期の石鎌に形や石材が共通する（『東谷・中島地区遺跡群』5）。14は古墳時代竪穴SG5区SI-6で出土したチャート製スクレイパー。

この他に、時期不明の遺構にも少量の縄文時代遺物がある。SG10区の時期不明土坑SK-272・532で縄文土器片が出土した（次章の第237図）。SG10区SK-272は横位の結節縄文を施す前期末～中期初めの胴部片、SK-532では後期堀之内式がある。SK-272は覆土が硬いので、縄文時代土坑の可能性も皆無ではない。SG2区の時期不明土坑SK-5でもスクレイパーが1点ある（第6章の第255図）。

石器石材は、次節に掲載するバリノ・サーヴェイ（石岡智武氏）の観察による岩石学的な名称を示した。安山岩が細かく分類されている。「頁岩（古期）」（8・9など）は、考古学で通常用いる岩石分類では「ホルンフェルス」と認定しているものである。また、「砂岩（古期）」（12など）は、考古学では「硬砂岩」と認定することが多い。縄文・弥生時代の遺構外出土遺物として『東谷・中島地区遺跡群10』に掲載した石器についても、この機会に岩石学的な観察を依頼し、その結果を第4表に示した。「頁岩（古期）」は考古学で呼称する「ホルンフェルス」に相当し、「頁岩（新第三紀）」は考古学でいう「珪質頁岩」や「頁岩」に相当する。

第2節 東谷・中島地区遺跡群発掘調査に係る石器石材鑑定-権現山遺跡-

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに 東谷・中島土地画整理事業に伴う権現山遺跡の発掘調査では、古墳時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが多数検出され、土師器、須恵器などの土器、石製祭具などの遺物が出土している。この他には、縄文時代および弥生時代の石器類なども出土している。

今回は、縄文時代および弥生時代の石器類を対象として肉眼による石材鑑定を行い、石質に関する資料を作成するとともに、石材の産地について可能な限り検討した。以下にその結果を報告する。

1. 試料 鑑定試料は、財団法人とちぎ生涯学習文化財埋蔵文化財センター（2010）『東谷・中島地区遺跡群10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』掲載の、縄文・弥生時代の遺構外出土石器52点および本報告書掲載のSG10区、SG1区、SG5区などの住居跡および遺構外より出土した縄文・弥生時代の石器21点の計73点である。器種別の点数は、石鎌13点、石匙1点、スクレイパー2点、石核1点、石核2点、石皿3点、石斧1点、片刃石器3点、打製石斧8点、打製土掘具（石鎌）1点、剥片10点、磨製石斧1点、磨石7点、スタンプ形石器2点、敲石1点、礫器14点、被熱礫2点および自然石1点である。

2. 分析方法 当社技師1名が平成24年3月19日に埋蔵文化財センターに赴き、肉眼による石材の鑑定を行った。

石材鑑定では、野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付した。鑑定は、五十嵐（2006）に示される分類基準を参考にして行なった。個々の石材のより正確な岩石名は、薄片作製観察、X線回折試験、全岩化学組成分析等を併用することにより調べることができるが、今回は肉眼鑑定のみに留めるため、鑑定された岩石名は概観的な岩石名であることに留意された。

3. 結果 肉眼による石質の鑑定結果を、第4表～第7表に示す。表に基づき、時代、出土場所および器

第4章 権現山遺跡各調査区の縄文時代遺物

第4表 『東谷・中島地区遺跡群』10 掲載、縄文・弥生時代の遺構外出土石器の石質

図号	地区名	器種	石質	備考	図番号	地区名	器種	石質	備考
45 図 1	SG10 区	石鏃	頁岩		46 図 27	SG10 区	削片	無珪酸質輝石安山岩	
45 図 2	SG10 区	石鏃	チャート						第四紀、黒色で無珪酸ガラス質安山岩に近い岩相を呈する。表面は粗い。黒質。
45 図 3	SG5 区	石鏃	チャート		46 図 28	SG5 区	石核	流紋岩	流紋質輝石安山岩?
45 図 4	SG10 区	石鏃	チャート		46 図 29	SG5 区	礫器 (削片素材)	頁岩	古期
45 図 5	SG10 区	石鏃	チャート	珪質頁岩質	46 図 30	SG5 区	礫器 (削片素材)	無珪酸質輝石安山岩	第四紀
45 図 6	SG10 区	石鏃	チャート		46 図 31	SG10 区	礫器 (削片素材)	頁岩	古期
45 図 7	SG1 区	石鏃	チャート		47 図 32	2 区	礫器	頁岩	古期
45 図 8	SG5 区	石鏃	流紋質輝石安山岩	流紋輝石?	47 図 33	SG2 区	礫器	頁岩	古期
45 図 9	SG1 区	石鏃	頁岩	古期	47 図 34	SG10 区	礫器	頁岩	古期
45 図 10	4 区	石鏃	チャート	珪質頁岩質	47 図 35	SG2 区	礫器	葦青石ホルンフェルス	
45 図 11	SG1 区	石鏃	チャート		47 図 36	SG10 区	礫器	頁岩	古期
45 図 12	4 区	石鏃	玉髓		47 図 37	SG5 区	礫器	葦青石ホルンフェルス	
45 図 13	SG5 区	石鏃	チャート		47 図 38	SG1 区	礫器	輝石安山岩	第四紀
45 図 14	SG10 区	片打石鏃	頁岩	古期、無珪酸質	47 図 39	SG10 区	礫器	葦青石ホルンフェルス	
45 図 15	SG10 区	片打石鏃	葦青石ホルンフェルス		48 図 40	SG9 区	打製石斧	砂岩	古期
45 図 16	SG5 区	スクレイパー	頁岩		48 図 41	SG2 区	打製石斧	輝石安山岩	第四紀
45 図 17	SG2 区	スクレイパー	チャート		48 図 42	SG1 区	打製石斧	葦青石ホルンフェルス	
45 図 18	4 区	スクレイパー	流紋岩	透明感があり、やや緑色の調が入る。	48 図 43	SG5 区	打製石斧	頁岩 (古期)	
					48 図 44	SG10 区	打製石斧	輝石安山岩	第四紀
45 図 19	2 区	石鏃	頁岩		48 図 45	SG5 区	打製石斧	葦青石ホルンフェルス	
46 図 20	SG10 区	削片	無珪酸質輝石安山岩	第四紀	49 図 46	SG10 区	打製石斧	輝石安山岩	第四紀
46 図 21	SG10 区	削片	葦青石ホルンフェルス		49 図 47	SG2 区	打製石斧	輝石安山岩	第四紀
46 図 22	SG5 区	削片	輝石安山岩		49 図 48	SG 調査区	礫石	多孔質輝石安山岩	第四紀
					49 図 49	SG 調査区	礫石	多孔質輝石安山岩	
					49 図 50	SG10 区	礫石	多孔質安山岩	第四紀
46 図 23	SG1 区	削片	チャート		49 図 51	SG10 区	礫石	輝石安山岩	第四紀、安山質の無珪酸質輝石?
46 図 24	SG1 区	削片	頁岩	古期	49 図 52	SG1 区	石鏃	多孔質輝石安山岩	第四紀
46 図 25	4 区	削片	頁岩	古期	12 図 1	45 軒 CN1 区	片打石鏃	輝石安山岩	
46 図 26	4 区	削片	頁岩						

第5表 縄文晩期住居 SG10 区 SI-63 出土石器の石質

報告番号	器種	石質	備考
一	割片	玉髓	
15 図 13	石鏃	多孔質安山岩	第四紀
15 図 14	石鏃	多孔質輝石安山岩	第四紀
15 図 15	磨石	輝石安山岩	第四紀
15 図 16	磨石	多孔質かんらん石輝石安山岩	第四紀
15 図 17	巖石	黒雲母流紋岩	
15 図 18	視熱礫	多孔質安山岩	第四紀
15 図 19	視熱礫	輝石安山岩	第四紀
15 図 20	石核	頁岩	古期
15 図 21-1	剥片	珪化流紋岩	玉髓質
15 図 21-2	石核	珪化流紋岩	玉髓質
15 図 22	自然石	多孔質安山岩	第四紀

種別に集計した石材組成を第8表に示す。

鑑定された石質は、半深成岩類の間緑斑岩1点、火山岩類の流紋岩1点、黒雲母流紋岩1点、輝石安山岩7点、輝石安山岩(第四紀)6点、無珪酸質輝石安山岩1点、緻密質輝石安山岩(第四紀)2点、多孔質安山岩3点、多孔質安山岩(第四紀)2点、多孔質輝石安山岩2点、多孔質輝石安山岩(第四紀)1点、石英含有かんらん石輝石安山岩1点および多孔質かんらん石輝石安山岩1点、火山砕屑岩類の流紋岩質凝灰岩1点、堆積岩類の砂岩(古期)3点、頁岩(古期)14点、頁岩4点およびチャート11点、変成岩類の葦青石ホルンフェルス7点、変質岩類の珪化流紋岩2点、および鉱物の玉髓2点である。鑑定に際しては、堆積岩類について、岩相から堅硬緻密質で中生界～古第三系に由来すると判断されるものは「古期」と付し、火山岩類について未変質で火山ガラスが残存する新鮮な岩相のものには「第四紀」と付記した。

対象試料数が少ないため、器種別の石材組成の傾向を把握することは難しいが、石鏃にチャートを多用する傾向や、打製石斧、礫器、剥片に安山岩類、頁岩、葦青石ホルンフェルスなどが、また多孔質安山岩類

第6表 『東谷・中島地区遺跡群』14 掲載、縄文時代遺構外出土石器の石質

報告番号	器種	石質	備考
10 図 5	SG5 区	スタンプ形石鏃	輝石安山岩
10 図 6	SG5 区	スタンプ形石鏃	輝石安山岩
10 図 7	SG5 区	礫器	石英含有かんらん石輝石安山岩
10 図 8	SG1 区	礫器	頁岩
10 図 9	SG5 区	礫器	頁岩
10 図 10	SG1 区	磨製石斧	閃緑斑岩
10 図 11	SG5 区	磨石	輝石安山岩
10 図 12	SG10 区	石斧	砂岩

第7表 弥生中期後半の土坑 SG10 区 SK-544 出土石器の石質

報告番号	器種	石質	備考
18 図 5	打製土淵貝(石鏃)	砂岩	古期

第8表 時代・出土場所別の器種別石材組成

石 質	時代・出土場所																			合計			
	縄文・弥生時代遺跡群 ⁴⁾										縄文時代遺跡群 ⁴⁾					縄文晩期の住居跡 ⁴⁾					東谷中層 集落跡 ⁴⁾		
	麻	花崗 閃石 片麻岩	スレート ¹⁾	花崗 閃石 片麻岩	花崗 閃石 片麻岩	花崗 閃石 片麻岩	花崗 閃石 片麻岩	花崗 閃石 片麻岩	花崗 閃石 片麻岩	花崗 閃石 片麻岩	花崗 閃石 片麻岩	花崗 閃石 片麻岩	花崗 閃石 片麻岩	花崗 閃石 片麻岩	花崗 閃石 片麻岩	花崗 閃石 片麻岩	花崗 閃石 片麻岩	花崗 閃石 片麻岩	花崗 閃石 片麻岩				
平塚系石類																					1		
大石山系																					1		
流紋岩																					1		
黒雲母流紋岩																					1		
輝石斑岩																					1		
輝石斑岩(第四紀)																					7		
無磁質閃石岩																					6		
無磁質輝石斑岩(第四紀)																					1		
多孔質斑岩																					2		
多孔質斑岩(第四紀)																					2		
多孔質輝石斑岩																					2		
多孔質輝石斑岩(第四紀)																					2		
石英質輝石斑岩(第四紀)																					1		
石英質輝石斑岩(第四紀)																					1		
多孔質輝石斑岩(第四紀)																					1		
大石山系石類																					1		
流紋岩質輝石岩																					1		
燧石(占拠)																					1		
砂岩(占拠)																					3		
頁岩(占拠)																					14		
頁岩																					4		
チャート																					11		
電鍍岩類																					7		
電鍍岩類																					7		
電鍍岩類																					2		
結晶																					2		
基岩																					2		
合計	13	1	2	6	3	1	8	1	4	8	3	1	2	1	1	3	2	2	2	1	2	1	7

4) 東谷・中島地区遺跡群 10 権現山遺跡(北東部・石川遺跡) 調査データ 4) 東谷・中島地区遺跡群 14 権現山遺跡(北東部・流紋岩) 調査データ

が石皿や磨石に使用されるなど、一部の器種では石材利用の傾向が認められる(第8表)。

4. 考察 権現山遺跡は宇都宮市南東部に位置し、周辺には後期更新世から完新世の段丘堆積物が広く分布している。本遺跡の東方には大谷川の鬼怒川が南流し、西方には田川が鬼怒川とほぼ平行して流れる。周辺の段丘堆積物からは、これらの河川に由来する礫が採取できるものと考えられ、それらの礫は在地性の石材とみることができる。したがって、出土石材の在地、非在地について検討するには、鬼怒川および田川の水系に分布する地質の把握が重要となる。

鬼怒川は栃木県と福島県の県境の下野山地を水源とし、水系には多様な地質が分布する。鬼怒川流域の地質については、山本ほか(2000)の20万分の1地質図幅「日光」や、須藤ほか(1991)の20万分の1地質図幅「宇都宮」に概略が記されている。鬼怒川上流域における基盤岩はジュラ系の付加複合体とされる足尾帯であり、硬質の砂岩、頁岩、チャートなどから構成される。足尾帯は後期白亜紀～古第三紀の花崗岩類に貫かれており、鬼怒川支流の大谷川上流においては花崗岩類と同時代の奥日光流紋岩類と呼ばれる流紋岩-デイサイト質火砕岩に覆われている。鬼怒川本流の中～上流域においては、足尾帯および花崗岩類はさらに前期中新世～鮮新世のデイサイト-流紋岩質火砕岩や、玄武岩、安山岩、デイサイト-流紋岩の溶岩などによって覆われている。花崗岩類および前期中新世～鮮新世のデイサイト-流紋岩質火砕岩には、中新世の流紋岩およびデイサイト-流紋岩岩脈が各所に貫入している。上流域にはさらに第四紀火山も数多く分布し、男体火山、女峰赤羅火山などの日光火山群や、高原火山といった玄武岩、安山岩、デイサイトの溶岩・火砕岩などを主要な構成岩石とする火山が点在している。

一方、田川は、日光市今市周辺に水源を持ち、流域には新第三系の火砕岩類、溶岩などが広く分布している。その岩相は流紋岩-デイサイト質火砕岩、玄武岩、安山岩、デイサイト-流紋岩の溶岩などであり、宇都宮市周辺においては、大谷石の石材で有名な中期中新世の大谷層が分布している。このほか、流紋岩-デイサイト質火砕岩類を主体とする奥日光流紋岩類なども小規模に随伴する。

出土石器において最も頻繁に使用される石材は、火山岩類である(第8表)。火山岩類は、新第三紀または第四紀の地質に由来すると推定されるものが主体であり、安山岩類を主とし、流紋岩類を僅かに伴う。火山岩類は、鬼怒川や田川流域の代表的な岩種であり、本遺跡周辺地域の段丘礫や河床礫などから容易に採取できる在地性石材とみることができる。

堆積岩類も使用頻度の高い石材であり、チャート、砂岩(古期)、頁岩(古期)といった石材は、古期堆積岩類の岩相を示す。これらの石材は足尾帯に由来するものと考えられ、足尾帯が広く分布する、足尾山地や鬼怒川最上流部の帝釈山の東～南側地域に起源をもつ石材と考えられる。頁岩(古期)と岩相が類似する変成岩類の葦青石ホルンフェルスについても、同様に足尾帯に由来する石材とみることができる。葦青石ホルンフェルスは、頁岩などの泥質堆積岩が花崗岩質マグマなどの貫入により熱変成を受けた岩石であり、頁岩と関連性のある石材と捉えられる。このような足尾帯に由来する石材についても、火山岩類と同様に本遺跡周辺において容易に入手できたものと考えられる。

吉川ほか(2010)によると、本遺跡周辺の段丘堆積物は、宝木段丘堆積物、田原段丘堆積物および最低位段丘堆積物に分けられている。これらの段丘堆積物における円礫層の岩種は、流紋岩、安山岩、砂岩、頁岩、チャートとされており、最大粒径は宝木段丘堆積物において20cm以上、田原段丘堆積物および最低位段丘堆積物において15～20cmとなっている。今回鑑定試料とした石器に使用される上記の主要石材は、吉川ほか(2010)に示される段丘堆積物中の礫種と調和的である。また、礫径についても、十分な大きさのものが採取できるものと考えられる。

在地性と判断される石材としては、この他に火山砕屑岩類の流紋岩質凝灰岩、変質岩類の珪化流紋岩などが挙げられる。これらは、鬼怒川または田川流域に分布する新第三系の地質に起源する石材と推測され、希少石材ではないことから、河床礫や段丘礫などから入手されたものと考えられる。

上記の在地性石材に対し、異地性の可能性がある石材は、半深成岩類の閃緑斑岩、堆積岩類の頁岩(古期以外)、鉱物の玉髄である。これらは、鬼怒川の河床礫においても入手できる可能性はあるが、その地質分布は小さいため、本遺跡近隣の河川の河床礫にはほとんど見つけることはできないと考えられる。閃緑斑岩は、ドレライトに近い岩相を示し、磨製石斧として1点だけ出土している。閃緑斑岩の産地を特定することは難しいが、流通性のあるドレライトの磨製石斧と同様に、遠方からの搬入品の可能性も指摘される。玉髄については、剥片試料において母岩の流紋岩が付着する状況が認められており、流紋岩の分布域より採取された可能性がある。鬼怒川の上流域には流紋岩の分布が各所に認められており、これらに伴って産する鉱物と推測されるが、採取地については不明である。鑑定された頁岩は、足尾帯に由来する古期頁岩が主体となっているものの、石鏃、石匙、スクレイパーなどには均質で貝殻状の断面を示す中新統の頁岩とみられるものが確認される。鬼怒川や田川の流域には、このような岩相を示す頁岩の広い分布は知られていないため、中～上流域の小規模に産する頁岩分布域の近傍より採取されたものと推測される。

鬼怒川や田川流域の地質背景をもとに、石材の由来について検討した結果、上記の通りほとんどの石材は鬼怒川や田川流域の地質と整合することが明らかとなった。一方、異地性と推測される石材も列挙できたが、産地の詳細は不明である。主要石材については、本遺跡近傍の鬼怒川や田川における実際の河床礫との石材組成の比較が重要と思われるが、異地性とみられる石材についても鬼怒川、田川の河床礫において採取できるかどうかをまず確認することが課題である。

引用文献

五十嵐俊雄, 2006, 考古資料の岩石学, バリノ・サーヴェイ株式会社, 194p.
須藤定久・牧本 博・秦 光男・宇野沢 昭・滝沢文教・坂本 亨・駒沢正夫・広島俊男, 1991, 20万分の1地質図「宇都宮」, 地質調査所。
とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター, 2010, 東谷・中島地区遺跡群 10 権現山遺跡北部(2～4区・SG1区)・

杉村遺跡(GN1区), 栃木県埋蔵文化財調査報告 第331集, 栃木県教育委員会, 331p.
山元孝広・滝沢文教・高橋 浩・久保和也・駒沢正夫・広島俊男・須藤定久, 2000, 20万分の1地質図幅「日光」, 地質調査所。
吉川敏之・山元孝広・中江 潤, 2010, 宇都宮地域の地質, 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 産業技術総合研究所地質調査総合センター, 79p.



第11図 榎現山遺跡SG10区 全体図 (1/600・等高線主曲線20cm)

第5章 権現山遺跡 SG10 区

権現山遺跡 SG10 区は、宇都宮市東谷町字杉村 911-1・911-2・912-1・913～915・916-1・916-2、同市砂田町字原田 434-2 に所在し、北緯 36° 28' 58"、東経 139° 54' 21"（世界測地系）である。権現山遺跡の中心部と考えられる中期の居館 2 基（SG1 区と SG5 区）に挟まれた遺構集中地区である。「西谷田」の低地を東側に望む低台地の東端に立地し、調査前の現況地形が台地部標高 80.4～81.3m、東側低地部（標高 79.5～79.9m）との比高が約 0.9～1.4m、SG10 区の範囲は南北長 180m×東西幅 50～120m で、調査面積は 13,400m²。SG10 区の南西は SG5 区の遺構密集地区へ続き、北西側は SG1 区へ続く。ただし、SG10 区西部から南（SG5 区北端）と北（SG1 区南端）に続く部分は、地山ロームまでおよぶ土取で攪乱され、遺構の大半が消滅している。SG10 区北側の杉村遺跡 SG1 区は古代道路（推定東山道）調査区である。さらにその北方には、杉村遺跡北関東自動車道調査区の古墳時代集落が立地する微高地がある。

第1節 縄文時代の竪穴建物跡

SG10 区 SI-63（第 14・15 図、写真図版 69・171・172）

【位置】 SG10 区中央部の 20-19 および 21-19 グリッドにあり、古墳時代の SD-304 に切られる。他に縄文晩期の遺構はない。縄文時代遺構外出土の晩期粗製土器がごく少量あり（『東谷・中島地区遺跡群』10, p.87）、SI-63 に関わる縄文晩期集落の遺物が周辺の古墳時代遺構 SD-304・SI-59 に流入したものであろう。縄文晩期集落関係の遺構が他にあったとしても、古墳時代や中世の開発で消滅したことが推定される。

【規模と形状】 不整形の建物跡で、主軸方位は GN-36°-E（P1 を通る北東-南西方向の対称軸）。規模は 3.88m（北東-南西方向）×3.86m（南東-北西方向）、残存壁高は 8～17cm。柱穴は P1 だけを確認し、深さ 20cm、底面形状から推定した柱径は 15～20cm である。壁際などをよく探索したが、他の柱穴は認められなかった。入口施設・壁溝・貼床はない。

【炉】 南寄りにあり、東西 85×南北 74cm、深さ 16～21cm でかなり深い。炉土器を埋めるために深いのではなく、炉底面が非常に良く焼けていたのでこの穴自体が炉だと考えられる。炉の東側は、長さ 115cm の範囲が床面から 4～6cm の深さでくぼみ（炉 4 層）、その上面付近に薄く貼り付くように炭粒を多く含む。炉の図に記入した土器片は、周囲の竪穴床面と同様のレベルで、炉覆土上面付近に多い。炉覆土中位（断面図の 2 層中位）にある土器片が最も深い位置で、覆土下位や炉底面には土器片がない。炉の周囲に焼土が多く、炉内中央の 3 層に焼土が最も多い。

【覆土】 大半が暗褐色土で、中央上部に黒褐色土が入るので、自然埋没の可能性がある。テフラ粒などはない。重複する SD-304 と一緒に柱穴 P1 を掘り上げてしまったので、P1 内の覆土の状況が不明である。

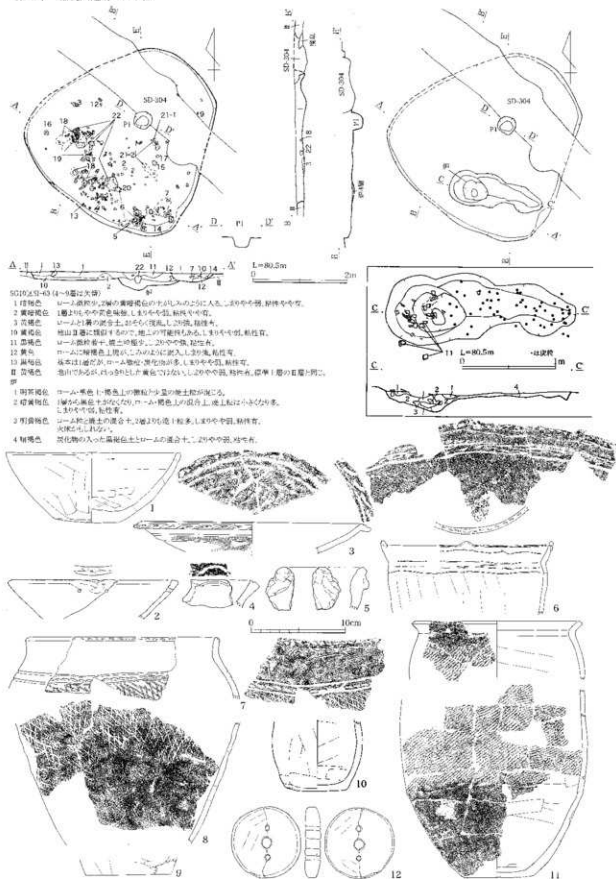
【遺物出土状況】 南西側の約半分に遺物が多い。炉の上方に大形の多孔質安山岩の自然石があり、被熱して割れたと見られる破片に接合できた（写真図版 172-22）。

この大形自然石は上半が床面レベルより上にあり、下半が炉覆土に入り込む。断面図 A-A' は大形自然石の縁辺を切るラインで図化しているので、この石を縦長の形に描いている。炉東側の炭分布範囲には土器類が少ない。21-1・2 と同一母岩の玉髓質小剥片・破片は、この炭化物集中部から採取したポリ袋 1 枚分の土を 1.2mm メッシュで水洗選別して検出した。

【出土遺物】 2 は口縁部に小突起と補修孔がある浅鉢。3 は、広げた口縁部上面に文様を持つ大洞 C1 式の浅鉢で、他の遺物よりも古いので周辺遺構から流入したと考えるのが自然だが、C1 式期の遺構・遺物は周辺に認められていない。口縁上面に小突起を持つ文粗製深鉢（6）は大洞 C2 式で、網目状燃糸文の 7 は壺形に近いので C2 式でも新相である。8 と 11 の胴部下位は無文。C2 式期と考えられる 3 孔の円盤状土製品

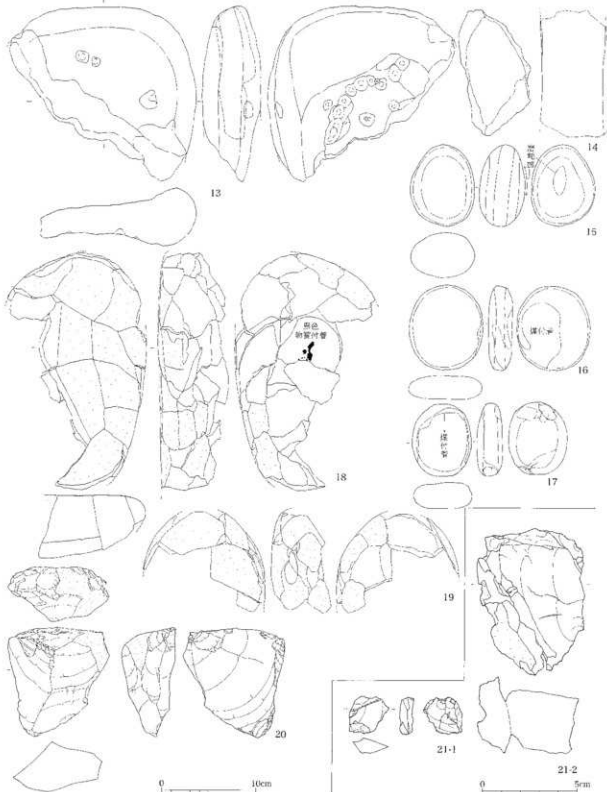


第5章 権現山遺跡 SG10 区



第14図 権現山遺跡 SG10 区 SI-63 (1) 遺構・遺物

(12)は小型品である。有孔円盤形土製品は宇都宮市刈沼遺跡や小山市寺野東遺跡(環状盛土遺構)に例があり、市原市西広貝塚など千葉県域にも多い。SG5区の古墳時代遺構混入遺物および遺構外出土縄文時代遺物にも、同種の有孔円盤形土製品が3点ある(第10図2~4)。



第15図 権現山遺跡SG10区SI-63(2)遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

石器は石皿兼多孔石・磨石・敲石がある。剥片および石核類では、乳白色の玉髓質の石核1点(21-2)・小剥片5点(21-1他)・碎片少量と、チャートの微細剥片1点がある。玉髓質の小剥片と石核は同一母岩で、石器製作時の調整剥片と残核が残され、完成した石器は持ち出されたのであろう。18と19は被熱破損した自然礫。この2点よりも大きな多孔質安山岩の自然石も1点あり、やはり被熱破損している(長径35×短径30×厚さ18cm、写真図版172-22)。石器石材は、パリノ・サーヴェイ(石岡智武氏)の観察による岩石学的な名称である。「頁岩(古期)」(20)は、考古学で通常用いる岩石分類では「ホルンフェルス」と認定しているものである。

第9表 権現山遺跡 SG10 区 SI-63 出土遺物

番号 種類 形状	大きさ 単位・型	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 縄文土器 浅鉢	口 18.1 高 7.4 底 6.9	外面底に1方向のヘラクスズり痕の面状。外面体部は縦へ斜位のヘラクスズり・調整痕状。内面は底部に多方向と体部に縦へ斜位のヘラナデ。口縁部ヨコナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや粗い・白・灰色粒・細粒多。黒・透明細粒やや多 やや軟質	中央部・西部直上6~7cmで接合 口1/3周、底11/12周 70, 71, 73, 85
2 縄文土器 浅鉢	口 復17.5 高 残4.1	内外面は無文で内面を丁寧に磨く。口縁端部に小突起を持ち、その厚さは3.4~3.6mm。	外-7.5YR6/6 粗 内-2.5Y8/4 に近い黄 やや粗い・白・灰色・透 明粒・細粒やや多 やや軟質	中央部南東直上と中砥 直上が接合 口1/6周 75, 78, 86, 87, 8 11
3 縄文土器 精製浅鉢	口 復23.0 高 残3.2 最大 復25.0	外面は口縁部が水平に外へ張り出し、胴部上端に沈線2本で上下を区画したように、外面に彫り足した粘土堆または粘土紐をそのまま残している。完成した土器ではなく、製作途中の粘土が焼成されてしまったものとも考えられる。内面は口縁部に沈線を1周回してから、その外縁から口縁端部へ向けて「し」字の加沈沈線を描く。内外面が磨滅減失で文様や調整が不明瞭。	10YR7/6 明黄褐色 やや軟質 外-10YR7/4 に近い黄褐色 内-10YR6/2 黄灰 やや粗い・白・灰色粒・細粒多。透明粗粒と黒細粒少。金色雲母細片やや多。硬質	北西側直上 口1/4周 11
4 縄文土器 精製浅鉢	口 復20~30 高 残2.9	口縁端部が広く厚くなり、端部に沈線が面状または蛇行状の文様を入れる。外面体部は磨耗して調整不明で、内面は磨滅の2次片。	外-10YR7/4 に近い黄褐色 内-10YR6/2 黄灰 やや粗い・白・灰色粒・細粒多。透明粗粒と黒細粒少。金色雲母細片やや多。硬質	北上面直上 口1/18周 北上面土
5 縄文土器 深鉢か 深杯か		内外面ともに磨滅シミナデ。口縁部にヨコナデを行わない。断面図に示したように、外面に彫り足した粘土堆または粘土紐をそのまま残している。完成した土器ではなく、製作途中の粘土が焼成されてしまったものとも考えられる。口縁部は黄色に着色される。	外-2.5Y6/2 灰黄 内-2.5Y4/1 黄灰 やや粗い・白・灰色粒・細粒多。透明粗粒と赤・黒細粒少 やや軟質	南部直上6cm 口1/18周 14
6 縄文土器 深鉢	口 18.1 高 残7.5	非常に磨いた。口縁部上面に長さ5mm程度の加沈沈線を行う。また、4単位の小突起を持ち、そのうち3箇所が残存する。口縁部外面は磨いた粘土堆を彫り付けて、そのうち2箇所が残り、またその間に焼成する。透明粗粒を残している。胴部はやや粗い工具で2本の筋線をついて、その間に磨滅の痕跡を彫る。頸部ヘラクスズリ。内面は縦割ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。外面胴部が磨滅して赤色化する。	外-7.5YR7/6 粗 やや粗い・白・灰色粒・細粒多。透明粗粒と赤・黒細粒少 やや軟質	南部直上3~8cmで接合 口2/3周、側面合 6, 13, 18
7 縄文土器 深鉢	口 復19.8 高 残6.6	口縁端部には右側から伸ばした透明粗粒。胴部は平行沈線間に連続斜突を彫る。調整は工具を深く入れた左から右へ向くように動かす。胴部には段差を彫った薪架体で胴口状態を示す。内面はナデで、口縁部と胴部にヨコヘラナデが平。	外-5Y3/1 オリーブ黒 内-2.5Y8/3 に近い黄 粗い・白・透明細粒少 やや軟質	南部直上9cm 口1/6周 3
8 縄文土器 深鉢	口 復12.8	1段目の縄を巻いた薪架体で残存部の上面に縦目状状態を示す。残存部下平の面は下方へ傾いたタケヘラクスズリ。内面に磨いたナメヘラナデ。	外-7.5YR6/6 粗 内-7.5YR7/6 粗 やや粗い・白・灰色粒と白・ 黒細粒多。黒・透明細粒と金色 雲母細片少 やや軟質	周辺部および南部の高土 中 第1/3周 異状法土、南表土
9 縄文土器 深鉢	口 復1.8 底 復9.0	外底面は無調整で外周だけに斜いヘラクスズリ。外面側下周ナメヘラクスズリ。内面ヨコシミナデ。外面に假が少量付着。	外-7.5YR7/4 に近い黄 粗い・白・透明細粒と黒 多 軟質	北東側直上 底1/6周 107
10 縄文土器 深鉢	高 復7.7 底 6.7 最大 復9.5	外面底部に1方向のヘラクスズり後ヘラナデ。外面体部に斜位と下端に磨滅の面状。内面は底部に多方向ヘラクスズリ。体部に横へ斜位のヘラナデ。外面全体が黄色に被熱赤化している。	外-7.5YR7/4 に近い黄 粗い・白・灰色粒と黒細 多。透明粗粒と黒細粒と 透明粗粒と赤と黒細粒少 やや軟質	南西直上1~11cmで接合 或全周 2.5, 6, 8, 9, 13, 18, 22, 20, 97, 113
11 縄文土器 深鉢	口 復20.3 高 復23.3 底 7.6	外面胴部中位以上に2段1.8横細粒の縄文。外面口縁部ヨコナデ。胴部下平ナメヘラクスズリ。外底面多方向ヘラクスズリ。内面ナメヘラクスズリ。明確な調整痕・磨滅痕はない。 [注記]長径16, 17, 20, 24, 29~31, 33, 35, 36, 38~41, 46, 48, 49, 53, 59, 115, 116, 118, 119, 128, 81, 81-3, 81-5, 81-6, 81-8, 81-10, 48-4	外-7.5YR7/4 に近い黄 粗い・白・灰色粒と黒細 多。透明粗粒と黒細粒と 透明粗粒と赤と黒細粒少 やや軟質	中砥直上1~1cmと南部直 上1/12周、底3/4周 注記は左欄
12 土製品 形 丸石	長径 7.4 短径 7.3 厚 1.6 重 90.3	縦割面に穿孔され、中央に1孔(径10.4mm)。胴部に径5.6mmと4.0mmの各2孔がある。穿孔孔の内面は粘土または灰は入れない。両面と側面に丁寧に調整される。	10YR7/6 明黄褐色 やや粗い・白・灰色・透明 粗粒と透明細粒やや多 軟質	中央北東直上3cm 成形 12
13 石皿 石磨 石	長 残18.5 幅 残19.8 厚 残6.1 重 残1409	左側の面を使用し、中央が縦く凹む。外側の側面に夾層を持ち、加工した可能性もあるが石材が多孔質なので加工痕は不詳。右側の面は中央が凹む形状として使用せず。多孔石として用いられている。中央の凹は側面、その内面の磨滅は断面面。	N3/0 暗灰 多孔質安山岩(湖相成)	南西側直上6cm 厚1/2厚 40
14 石皿 石磨 石	長 残13.3 幅 残7.7 厚 残7.3	残した面が使用面で、ほとんど磨まないで中央の平坦な部位。表面も多少凹む。わずかに面状の夾層を持つ。全周は断面で、縦割面に10×6cm程度の假が付着。残存重量815g。	N6/0 灰 多孔質輝石安山岩(湖相成)	南東部直上3.5cm 一部成形 1
15 石皿 磨石	長 8.6 幅 6.6 厚 4.8	自然の円盤をそのまま使用。片面の中央部が少し磨耗している。他にも使用した面跡は見られえないが不明瞭。被熱破損や付着物は見られない。重量292.4g。	N5/0 灰 輝石安山岩(湖相成)	中央北東直上3cm 成形 98

16 石器 石厚	長 8.9 幅 7.7 厚 2.5	幅1cm程の側面を持ち、両面との間に稜線が強く認められる。非常に多孔質なので、磨耗面や稜線は不明。図示した範囲に暗灰色の物質が薄く付着し、おそろく黄と認められる。重量 253.0g。	N5/50 灰 多孔質かんらん石輝石安山岩 (第四紀)	西部床土 2m 層 69
17 石器 破石	長 7.6 幅 6.2 厚 2.7	右図に示した面の右上と左下に鋭行・稜線あり。左図に示した面を中心として稜が明確に付着する。破付面以外は焼熟して薄褐色に変色する。重量 178.5g。	2.5YR7/0.5 明赤灰 黒雲母流紋岩 (新第三紀)	中央部床土 3cm 層 99
18 被熱燻 厚	長 残 24.9 幅 残 14.8 厚 残 7.5 重 残 2154	燻れした大きな自然燻。右図の面は焼熟して褐色～赤灰色になり、左図の面は非常に薄く稜が付着する。熱によって表面が剥離し、中心部まで割れて2～8cm大の石片に分断され、石片が失われた部分も多いと見られる。破面に黒色付着物が付く部分が1箇所ある。10と同一類体の可能性あり。 [注記] 32, 41, 50, 52, 54, 55, 57, 61, 63, 66, 67, 79, 121～123	2.5YR7/0.5 明赤灰 多孔質安山岩 (第四紀)	南西部床土～床土 11 cmと西部・南東部・中央 部・南部の床土が接合 剥離・破損多 注記5左欄
19 被熱燻 厚	長 残 10.4 幅 残 12.9 厚 6.4 重 残 448	燻れした自然燻。右図の面と外側面は焼熟して褐色～赤灰色になり、左図の面は薄く稜が付着する。熱によって表面が剥離し、中心部まで割れて3～8cm大の石片に分断され、石片が失われた部分も多いと見られる。18と同一類体の可能性あり。	2.5YR7/0.5 明赤灰 輝石安山岩 (第四紀)	西部床土～床土 10cm が接合 剥離・破損多 63, 66, 67, 123?
20 石器 石核	長 11.5 幅 10.7 厚 5.7	右図の面は強い打撃で初期に剥離している。この大きな割片に対して、左図の各割断面をその後に剥離している。重量 619.9g。	N5/50 灰 頁岩 (古期)	南西部床土 11cm 層 72
21-1 石器 割片	長 1.95 幅 2.1 厚 0.8	白地に細い黒色の線が入る小割片。同一母岩の石核 1点と小割片 5点、砕片少量があり、そのうち小破片 1点を同化した。重量 2.3g。	N9.5/YR0 白 玉髄質珪化流紋岩	完形 101
21-2 石器 石核	長 7.7 幅 5.6 厚 5.0 重 140.3	白地に細い黒色の線が入る石材。同一母岩でこの石核から剥離した可能性のある小割片 5点と砕片少量がある。図の左半は自然面に近く不規則な形状をなし、早い段階に剥離・除去した部分を接合した。	N9.5/YR0 白 玉髄質珪化流紋岩	完形 93, 101, 105
22 自然石	長 35 幅 30 厚 18 重 未計測	自然石で、焼熟赤色は明確ではないが、おそろく焼熟によって剥離が進行している。接合できないが同一母岩と見られる破片も 22片 (1254g) あり。実測図は作成せず。写真だけを掲載する。 [注記] 27, 42, 44, 56, 58, 64, 65, 67, 68, 74, 80, 83, 84, 114, 125, 130, 南東 A トレ、南北 トレ、周辺表土、北西カクラン	N5/50 灰 多孔質安山岩 (第四紀)	中央～南西部の床土上 ～床土 7cm 約 1/2 欠 注記5左欄

第2節 縄文時代の土坑 (第16・17図、写真図版 69・70・170)

縄文時代と考えられる土坑は、SG10区で6基を調査した。各土坑の詳細は第10表にまとめた。

SK-219は陥穴状土坑で、上部を切る古墳後期のSI-40貼床下で確認した。SI-40に切られるレベルの少し下で、上部が外側へ開いていたと思われる状況がある(断面図の1層・2層部分)。覆土4層は混じり物がないソフトロームで、現地所見では地山を掘りすぎた可能性も考えているが、5層(黒褐色土)との関係からみて地山ではないと考えられる。遺物は1片だけが2層で出土した。外面無文で内面の砂粒が擦痕状に少し動いた痕があり、内面黒色処理の可能性がある(外面は10YR7/4にぶい黄褐色、内面は10YR6/2灰黄褐色)。縄文早期の燃系文系土器と判断した。

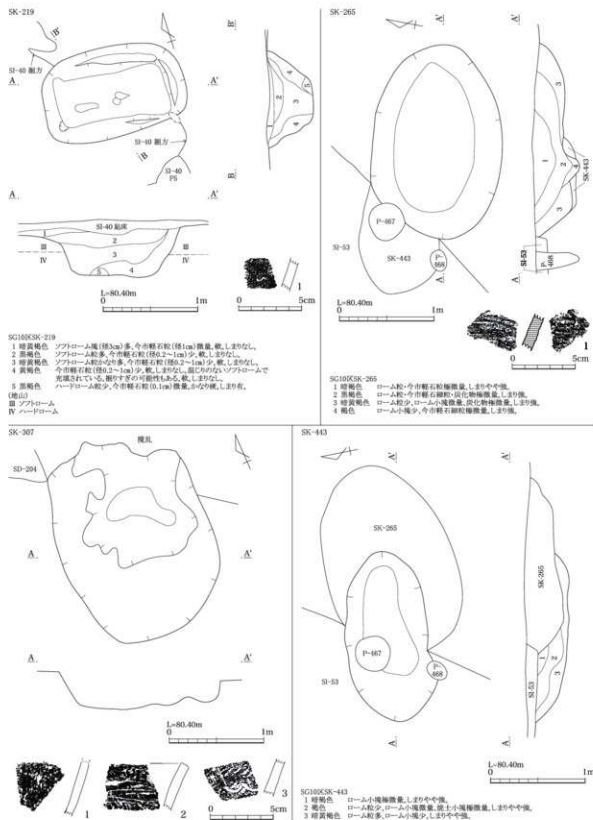
SK-265と443は重複する土坑で、土層が類似するので同一遺構かもしれないが、調査時の所見によると別々の土坑として扱っている。SK-265の遺物は1片だけある。内外面にやや浅い条痕を施し、縦織と白・透明粗～細粒の多い縄文早期土器で、外面は5YR7/6の橙色、内面は2.5YR8/3の淡黄色。SK-443に伴う遺物はない。SK-443を切る時期不明のP-467内にはSI-53の土器破片が落ち込んでいた。

SK-307の遺物3片はすべて縄文土器だが、早期燃系文系・沈線文系と前期末～中期初めの結節縄文を施す土器が各1片で、時期にまとまりがない。1は縦位の縄文または燃系文が非常に浅く、白・透明礫が多く硬質で、にぶい黄褐色(10YR3/3)。2は外面を斜め方向に削った後に横位の細沈線を多く描き、内面が擦痕状で白礫～細粒と黒・透明粗～細粒が多く硬質で、外面はにぶい黄褐色(10YR7/4)、内面は灰色(5Y5/1)。3は上下2箇所に結節があるLRの縄を横位に施し、白・透明粗～細粒と金色雲母細片が多く、黒細粒も少量含み硬質で、にぶい褐色(7.5YR5/4)。

SK-697とSK-699は陥穴状土坑で、2基が並んでいるようにも見られる。SK-697は中期の阿玉台Ⅲ式と中期後半(阿玉台Ⅲ～加曾利E式)の破片が各1点と、図示以外に無文の1片がある。阿玉台Ⅲ式の1は右及び下方向に進む爪形文が縦位隆帯の脇にあり、隆帯上に斜位の刻み、地文にごく浅い無節縄文(?)があり、白・透明粗～細粒が多く、黒細粒と金色雲母細片を少し含み硬質で、「SK-697付近」の遺構確認面で出土した。2は2段RL縦位施文で、内面は縦方向に削った後に磨く。白・赤粗～細粒が多く、黒・透

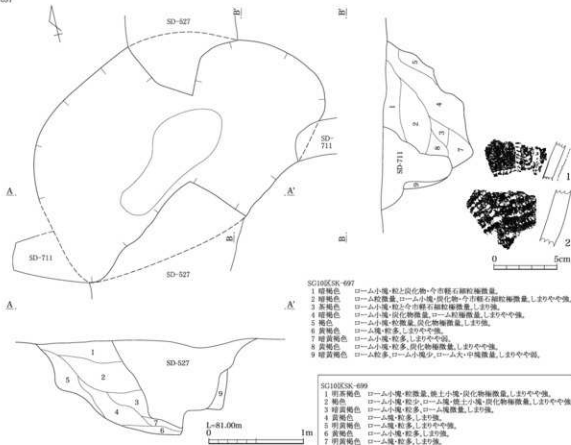
第5章 権現山遺跡 SG10 区

明細粒と黒雲母細片も含み硬質で、にぶい赤褐色（5YR5/4）。SK-699 には遺物が無い。



第16図 権現山遺跡 SG10 区 縄文時代の土坑 (1) SK-219・265・307・443 遺構・遺物

SK-697



第17図 権現山遺跡 SG10区 縄文時代の土坑 (2) SK-697-699 遺構・遺物

第10表 権現山遺跡 SG10区 縄文時代の土坑

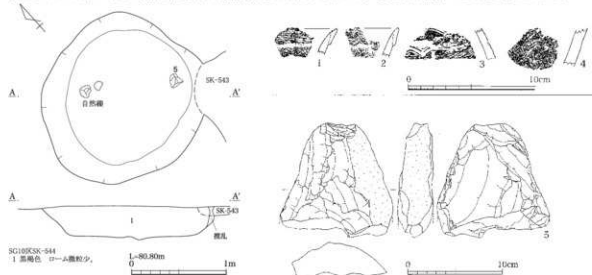
遺構名	グリッド	平面形	形状	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	中塊	覆土
SK-219	19.0-17.0	隅丸長方形	SI-40より古	1.54	0.98	0.62	N 90	E 自然埋没
古墳前期のSK-40に上部を切られる。SK-220の延長するが埋没しない。竈穴状土坑で縄文早期の可能性がある。柱状のものを含んでいるようだが埋没が周囲の壁面にある。土坑底面は117×48cmの長方形。底部中央にある3箇所の窪みは底面から深さ3～6cmで浅い。遺物は縄文の標系文系土器深溝部1片のみ。								
SK-265	19.5-18.0	相円形	SK-443→SK-265→SI-53→P-467-P-468	2.06	1.36	0.50	N 78	E 自然埋没
縄文時代のSK-443を切る。SK-443と土層が類似し、同一遺構かもしれない。古墳中期のSK-53と時期不明のP-467に切られる。遺物は早期弥生文系土器1片の他に3cm大の中塊1点のみ。								
SK-307	20.0-19.5	不整形	SD-204より古?	2.20	1.60	0.40	N 55	E
底面に凹みがある。舟楫並縁がへら4箇所に始まる位置にある。近世のSD-204に切られると考えられるが、垂直断面に縦溝の本の鋭角があり不明。土層断面同し。遺物は早期標系文系・早期段縁文系・前期末・中期前期の基礎層文を備える縄文土器計が各1片ずつあり、時期にまじりがない。								
SK-443	19.5-18.0	相円形	SI-53-SK-265-P-467-468より古	1.80	0.88	0.46	N 86	W 自然埋没
古墳中期のSI-53、縄文早期のSK-265、時期不明のP-467-468に切られる。SK-265と土層が類似し、同一遺構かもしれない。遺物はない。SK-443出土と取り上げられた土器器縁は、P-467から出たもので、SI-53からP-467に渡した土器器縁と考えられる。								
SK-697	23.5-20.0-24.0-20.0	相円形	SD-527とSD-711より古	3.22	2.20	1.00	N 48	E
古墳中期後葉のSD-527とSD-711に切られる。竈穴状土坑。SK-699と並ぶものかもしれない。示した半截竹管支管および縄文土器文系1片の他に、文様不明の1片がある。遺物がこの土坑に伴うかどうかは不明。								
SK-699	24.0-20.0、24.5-20.0	不整形	SD-527より古	2.20	0.86	1.23	N 21	W
古墳中期後葉のSD-527に切られる。竈穴状土坑。SK-697と並ぶものかもしれない。遺物なし。								

第3節 弥生時代の土坑

弥生時代の遺構は、SK-544 だけを調査した。この他に、後世の遺構から少量ずつ出土した SG10 区の弥生時代遺物を、権現山遺跡全地区の弥生時代遺物とともに前回報告書に掲載した（『東谷・中島地区遺跡群』10, pp.88-97）。以下の（ ）内は前回報告の土器分類を示す。SG10 区では、中期後半の土器として波状文・山形文などを描く破片（5 群）が中央部～西部の SI-64・106 と SD-304、重四角文（6 群 1 類）が北東部の SI-74、縹系文・条線文を地文にするもの（7 群 1 類・3 類）が中央部東半の SD-527・821 と遺構外にある。中期後半でも東北南部系の平行沈線土器（8 群 1・2 類）は北東部に多く（SI-81 と SD-503・527）、中央西部の SI-106 にもある。弥生後期土器（10 群）が南西部の SI-30 と北西部遺構外にある。他に、縄文や縹系文の破片（9 群 1・2 類）が出土した。

SG10 区 SK-544（第 18 図、写真図版 70・170）

SG10 区北部の 22.0-19.0 グリッドにある。土層断面図では重複関係が明確でないが、整理作業時点で、古墳中期の SK-543 に切られると判断した。円形で南北 166 × 東西 182cm、残存する深さは 34cm。埋土は単層で、混入物が少ないので自然埋没かもしれない。テフラの層や粒は見られない。遺物は覆土中から 6 片出土したうち、文様のある 4 片を図示した。他に、底面直上から 9cm までのレベルで、礫が 3 点出土した。貼付口縁に縹系文（1 段 L?）を施す頸口縁部小片が 2 点ある（1・2）。3 本以上の平行線で上下 2 段の山形文を肩部に描く壺片は胴部が 1 段 L (?) の縹系文（3）。縄文のある壺片は上半に煤、下半に被熱が見られる（4）。各土器の混和材は、白または灰色粗粒と白・黒・透明細粒が目立つ。1 と 3 はにぶい・橙色（7.5YR6/4）、2 はにぶい・褐色（10YR5/3）、4 は橙色（5YR6/6）。また、折れた打製土掘具（石鎌）の基部が 1 点ある（5）。この石器の石材は、バリノ・サーヴェイ（石岡智武氏）の観察による岩石学的な名称では「砂岩（古期）」であるが、考古学で通常用いる岩石分類では砂岩が変成したホルンフェルスと認定しているものである。図示しなかった礫のうち 1 点は、全面が被熱赤化した礫片であった。弥生中期後半の土坑と考えられる。



第 18 図 権現山遺跡 SG10 区 SK-544 遺構・遺物

第 11 表 権現山遺跡 SG10 区 SK-544 出土遺物（1～4 は本文中で説明）

番号 種類 図号	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または混材)	出土状態 残存状態 付記
5 打製 土掘具 (石鎌)	長 残 12.1 幅 残 11.9 厚 3.9 重 残 516.9	自然面を背面に広く残す。表面は大きく剥離した後に外周を背面側から加工する。図の上端はこれと逆に背面側を加工する。石材が非常に硬いので、着柄の磨滅痕等は不明。図の下端が大きく破損して観察したと考えられる。	N6-/0 灰 砂岩(古期) 起面の緻密で硬質なホルンフェルス	残上 9cm 下部欠 1

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

SG10区では古墳時代中期・後期の竪穴建物跡86棟を調査した(古墳中期の鍛冶遺構1棟を含む)。この他に、SG5区とSG10区の境界にある建物2棟(SI-4とSI-100)がある。

SG10区 SI-2 (第19・20図、写真図版71・189)

【位置】 SG10区南部、東側低地に面する台地平坦面縁辺部の17-17・18グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は北にSI-89a・89b・30がある。時期不明のSK-454とSK-1が北と西に近接する。南東隅で、古墳中期の円筒形土坑SK-210→SI-2→古墳後期のSD-41・42の順に重複する(断面図C-C'の右端部)。中央西寄り覆土が時期不明のSK-203に切られる(断面図B-B')。北辺の一部が攪乱され、床に達しない攪乱が覆土中にある。

【規模と形状】 方形の建物跡で主軸方位はGN-9°-W。東西7.04×南北6.92m、残存壁高は最小24cm(南部)～最大46cm(北部)。主柱穴は4本で、柱間は東西約4m(南側3.96～北側4.04m)×南北約3.6m(東側3.58～西側3.60m)。床面からの深さは、北側が深く(P1=45cm, P2=47cm)、南側が浅い(P3=35cm, P4=39cm)。床面から深さ16cmのP6は、貼床除去後に掘方底面で確認した。入口施設は南側中央が想定されるが、ピットなどの遺構はない。

貯蔵穴P5は南東隅にあり、東西86×南北85×深さ45cm。貯蔵穴の周囲に幅約60cm・高さ2～7cmの土手状盛土がめぐる。覆土は竪穴部と同種で自然埋没している。間仕切溝は4本ある。北壁際に2本(D1・D2)、西壁際に1本(D3)、南壁際に1本(D4)の計4本がある。北部東半のD1は床面で認識できず貼床除去後に掘方底面で確認し、それ以外は床面で確認できた。D3は主柱穴P2に付随し、D1の南端はP6につながる。規模はD1が幅32×深さ9cm、D2が幅25×深さ8cm、D3が幅26×深さ9cm、D4が幅41×深さ15cm。北部西半にあるD2は平行する2本が作り替えられているのかもしれないが、土層横断面を確認していないため、詳細は不明である。掘方は外周部が内周部よりも7～15cm深い。

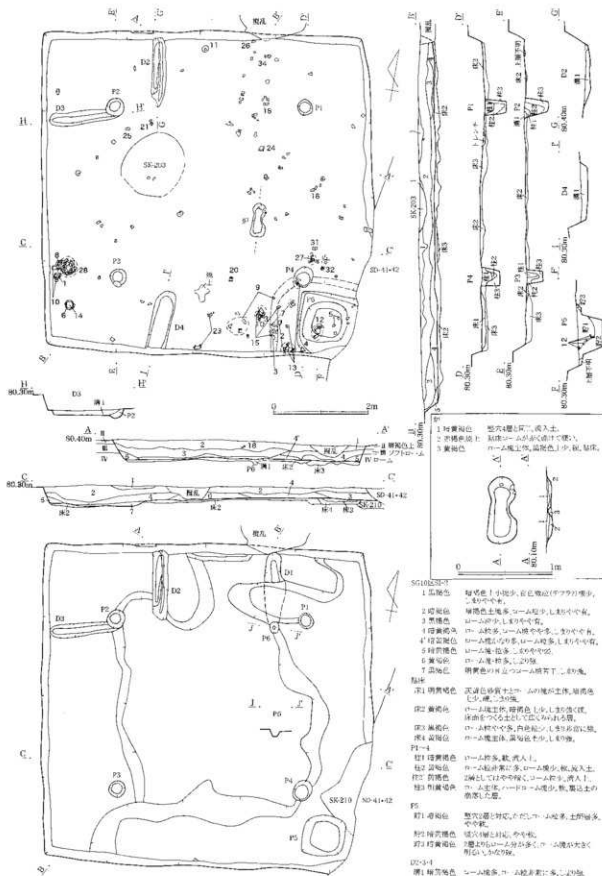
【穴】 中央から南東に寄った位置にある。南北70×東西28～30cmの「8」または「B」字形である。浅い穴が2基つながったように、中央部が浅くて貼床土の焼け方が弱い。

【覆土】 自然埋没状で、テフラの可能性のある白色粒を最上層に含む。南部にある焼土は床面から数cm浮いている。

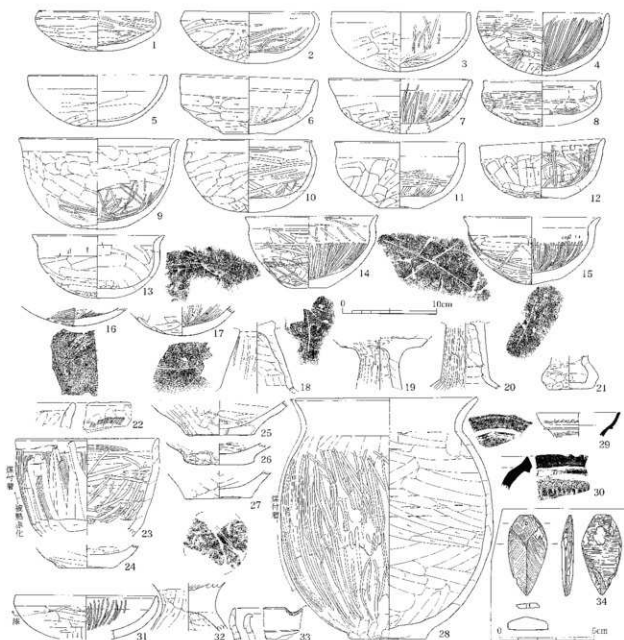
【遺物出土状況】 遺物は建物全体から出土し、特に集中部はない。床面直上から出土するものはわずかで、多くは床面から浮いた位置で出土する。被熱痕や煤付着の見られる土器が、器種に関わらず多い。南西部では甕(28)の周囲に、残存度の高い正位の杯(1・6・8・14)と割れた杯(10)があり、6の上に14が重ねられていた。

【出土遺物】 大きめの内斜口縁杯(9～15)と、初期の深い模倣杯(1～5)が主体である。14と15は体部に「×」と底部に「」を、17は底部に「」を描く。「×」の類例はSI-45にある。16は研磨具に転用している。21は小形粗製土器の小形壺。27は木葉底かもしれない。28は炉で煮炊きした状況の煤が付く甕。甕(29)は口径が小さく端面が水平なTK-208型式。須恵器甕(30)はSI-10の破片に類似する。石製模倣品の剣形品はSG10区ではSI-73・101、古墳時代溝SD-527、後世の溝SD-201・506、遺構外出土古墳時代遺物にある。また、SG5区の剣形品はSI-8などにある。図示以外の土師器合計2,087片・12,306gの内訳は、杯790片・2,879g、高杯335片・2,166g、鉢22片・235g、小形壺45片・410g、壺甕類878片・6,442g、小形土器17片・175g。

漆仕上げの杯(31)・内面を炭素吸着処理するやや大形の高杯(32)・片口鉢(33)は、古墳後期の混入遺物。片口付鉢はSG5区SD-41に類例がある。



第19図 権現山遺跡 SG10区 SI-2(1)遺構



第20図 権現山遺跡SG10区 SI-2(2) 遺物

第12表 権現山遺跡SG10区 SI-2 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ mm・g	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 保存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.4 高 4.1 最大 13.2 重 151.9	外面の口～体部端に削り筋あり。外面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキおよび体部に横位と底部に多方向のヘラケズリ。内面は底部ヘラナデ後に縦なら1方向ヘラミガキ。上半部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。	2.5YR6/8 體 やや粗い 白・赤相～細粒中 やや硬質	南西側器床土 10cm ほぼ完成。口 11/12 間 4, 6
2 土師器 杯	口 径 13.6 高 5.6 最大 径 14.6	強く内傾する口縁部の端に面を持つ。外面は口縁部ヨコナデ後に体部を横位のヘラナデとヘラケズリ。底部多方向ヘラケズリ。内面は体部ヘラナデ後にメヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。	5YR6/8 體 やや硬質 白・黒・赤・透明 細粒少 やや硬質	南西器床土 6～13cm 口 1/3 間 27, 34, 西南 1～3 割
3 土師器 杯	口 径 14～15 高 6.3	小片なので復原図は参考程度。薄い。外面は口縁部ヨコナデ、体部に横位と底部に多方向のヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。上下に横位と底部に多方向のヘラミガキ。外面底付近に覆付着。	5YR6/7 體 やや硬質 白～細粒中 やや硬質	南西器床土 10cm 口 1/12 間 21, 31, 東南 1～2 割
4 土師器 杯	口 13.6 高 6.7 重 283.6	底面が薄い。外面は口縁部ヨコナデ後に密なヨコヘラミガキ。体～底部ヘラケズリ後に縦なら密なヘラミガキ。内面は密な放射状ヘラミガキ。	2.5YR5/8 明赤系 やや硬質 白～細粒中 灰色調と赤・黒細粒少 やや硬質	南西側器床土 12cm。東 南面と野穴穴 P5 の各 1 片も組合 ほぼ完成。口 11/12 間 35, 西南 1～3 割、P5、 東南 3 割

第5章 権現山道跡 SG10 区

5 土師器 杯	口 復14.8 高 5.5	全体が圓い。外面は体部に横位と底部に多方向のヘラケズリ。内面は体部にナデ。内外面口縁部にヨコナデ。	5YR6/6 橙 縞多 白・透明縞～細粒～ 少や中硬質 赤・赤・灰色細粒少 や中硬質	野成穴P5 底上～底上 6cm 口1/8周 41, 42, P5
6 土師器 杯	口 14.3 高 6.3 底 5.4	外面は口縁部ヨコナデ後、口縁部下位と体部にヨコヘラケズリ。底部多方向ヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後に放射状ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。	5YR5/8 明赤褐 や中硬質 黒・透明縞～細粒 や中多、白・赤縞～細粒少 や中硬質	南西面底上5cm。正位で 2枚収めた1面の杯 口3/4周。底全周 1. 東中、西面3層
7 土師器 杯	口 復14.9 高 5.7	口縁部内面が少し内彎する。外面は体部上下ナデ後、下部に横位と底部に方向のヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデと体部ナデの後に放射状のヘラミガキ。	5YR6/6 橙 や中硬質 赤縞～細粒～細砂 少・橙・橙型得粒微量 や中硬質	南東部底上4～9cm。 南西部の5片も接合 口1/2周 25, 28, 29, 西面1～ 3層。東面1～2層
8 土師器 杯	口 12.4 高 4.8 底 4.4 重 残12.8 重 残19.50	底部が丸く厚い。頸部内面に少し絞れあり。外面は体部に横位のヘラナデ後、ミガキと裏面に1～2方向のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面は体部ヘラナデ後、体部下位に多方向と中に横方向のヘラミガキ。	5YR6/8 橙 や中硬質 赤縞と黒縞粒少 や中多、白・透明縞～細粒少 や中硬質	南西面底上11cm 口11/12周。体全周 3
9 土師器 杯	口 復17.0 高 9.6	外面は不明瞭なナデ後、主に下位にナメヘラミガキ。内面はヨコヘラナデ後、下部に多方向にヘラミガキ。内外面口縁部にヨコナデ。	5YR5/4 に近い 白縞～細粒や中多、黒・透明 縞粒と灰色細少 や中硬質	南東部底上10～18cm。 南西部の2片も接合 口1/3周 16, 17, 18, 23, 西 面1～3層。東面1～ 2層
10 土師器 杯	口 13.1 高 7.7 底大 14.0	口～体部端の縁が内面で明瞭。外面～底部に多方向と体部に斜位のナデ後、内外面の口～体部にヨコナデ。内面の体～底部に多方向と口縁部に横位のナデナデ。外表面部に橙のナデ。 注記 15, 6, 20, 26, 33, 西面1～3層	5YR6/6 橙 や中硬質 赤縞～細粒～細砂 や中多、赤縞と透明縞粒少 や中硬質	南西面底上10～12cm。 南西部底上～床 口1/2周 口7/12周 注記 左履
11 土師器 杯	口 13.7 高 7.0 底 4.3	底部に厚みがあり、外底面はヘラケズリして上底状。外面は口縁部ヨコナデ後、口縁部上位に斜位のヘラケズリ。内面は体部の下位に放射状と中に横位のヘラミガキ。内面の上位は体部表面で調整不明。	5YR6/6 橙 や中硬質 赤縞～細粒や中少 白・黒・透明縞粒と白濁少 や中硬質	北東部の床7cm 口1/2周。底全周 80
12 土師器 杯	口 13.2 高 6.2 底 5.0 重 残294.7	厚く重い。外面はナデで平底状。外面体部は上平に横位と下平に横位のヘラケズリ。内面体部は横～斜位にヘラケズリした後に多方向のヘラミガキ。	10YR7/4 に近い 黄褐色 や中硬質 黒・透明縞～細粒 や中少、白・赤縞～細粒少 や中硬質	野成穴P5 底上～底上 46cm 口5/6周。底全周 35, 37, 38, 39
13 土師器 杯	口 復14.0 高 6.7	内面の体部をヨコヘラナデ後、外底面を削って丸底に上げる。内面は体部ナデ後に底部を1方向ヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。外面に広く埋存痕。	5YR5/6 明赤褐 や中硬質 白・透明縞～細粒 多、赤・黒縞粒と灰色少 や中硬質	南東部底上9～13cm。 南西部の4片も接合 口1/3周。底全周 26, 32, 34, 西面1～ 3層
14 土師器 杯	口 14.5 高 7.1 重 残325.7	外面は体部に横～斜位のナデ。下部に斜位ヘラミガキ。口縁部内外面ヨコナデ。内面は口縁部以下に放射状ヘラミガキ。外面の側面に「×」と底部に「一」の焼成痕同列あり。外面全体に埋存痕。	5YR5/6 明赤褐 や中硬質 白・透明縞粒や中 少、赤・黒縞粒少 や中硬質	南東部底上5cm。正位 で2枚収めた1面の杯 口5/6周。体全周 1. 東中
15 土師器 杯	口 14.0 高 7.7 底 3.8	やや狭い平底面に沈痾1本あり。外面は体部ナデ後に口縁部ヨコナデと体部上底ヘラケズリを行い、全体を磨く。外面に焼した焼成面の刷毛「一」あり。内面全体と外面口縁部にヨコナデ。内面は下平に放射状と、上部に横～斜位のヘラミガキ。 注記 12, 20, 21, 24, 30, 50, 西面1～3層。東面、東面1～2層、東面3層	5YR5/6 明赤褐 や中硬質 白・透明縞粒や中 多、赤・黒縞粒少 や中硬質	南東部底上2～12cm。 南西部も底面も赤 口5/12周。底7/12周 注記 左履
16 土師器 杯 (研磨具 転用)	高 残1.9	外面は断面多方向ヘラミガキ。焼成後に平行刷毛状のキズがあるので、研磨具に転用したと考えられる。内面はヘラナデ後に密な放射状ヘラミガキ。	2YR5/8 明赤褐 や中硬質 白・黒・透明縞 少 や中硬質	東部底上13cm 54
17 土師器 杯	高 残3.0	丸底で外面底部は多方向ヘラケズリの後に焼成面の刷毛「一」あり。内面は密な放射状ヘラミガキと炭灰吸吸の色変化あり。 注記 Aベルト葉4層。南東Aトレンチ。東北1～3層。東北、Bベルト上履及	5YR5/6 明赤 や中硬質 白縞粒や中多、黒・ 透明縞粒少 硬質	北に北東部 注記 左履
18 土師器 高杯	高 残7.4	薄手で、内面の仕上げナデが比較的に丁寧。外面は磨耗しているがタテヘラケズリとみられる。内面に縁を持って唇が閉る。	10YR6/4 に近い 黄褐色 や中硬質 白・赤縞～細粒や 中多、黒・透明縞粒少 軟質	北東部底上5cm 唇上全周、下部1/6 周 113
19 土師器 高杯	高 残5.7	脚口上部部から1.5cm下で最も細くなる。外面は脚口上部と杯底部にタテヘラケズリ後、杯底部外周と杯底部をヨコヘラナデ。外面脚口下部と杯底部にタテヘラケズリまたはミガキ。内面は杯底部に放射状のヘラケズリ後ヘラミガキ。脚口内面は粘土積み上げ痕を残し、磨かなデ。	10YR7/3 に近い 黄褐色 や中硬質 白・透明縞～細粒 や中多、透明・赤縞粒少 や中硬質	脚口1/2周、杯底1/6 周 西中1～2層
20 土師器 高杯	高 6.7	薄く丁寧。外面は横位のヘラケズリ後ヘラミガキ。内面脚口下部は、倒U状で反時計回りに輸入砥痕を残す。全体にやや丁寧なナデ。	5YR6/6 橙 や中硬質 白縞粒多、白縞粒 と黒・透明縞粒少 硬質	南部底上17cm 脚口全周 22
21 土師器 小形器	高 残3.6 底 4.4 底大 6.2	粗製の小型土器。外面は体部を磨いたナデ後に残らなヨコヘラミガキ。体部下端ヨコヘラケズリ。外底面はナデで平底にする。内面は縦なヨコナデナデ。	5YR7/4 に近い 黄褐色 や中硬質 白・赤縞～細粒多 黒縞粒と黒・透明縞粒少 や中硬質	北西部底上17cm 体～体部全周 75
22 土師器 鉢	口 復18～20 高 残3.6	小片2点しかないので口径は推考。外面は体部に斜位のハケマまたはナデナデ。内面体部に縦なヨコナデ。内外面の口縁部に縦なヨコナデ。	5YR7/6 橙 や中硬質 白・黒・透明縞～ 細粒と白・赤縞粒少 や中硬質	東北部4層と中東部 4層で各1片出土 110
23 土師器 鉢	口 復15.1 高 残10.3	口縁部は内面に強い縁を持ち外へ折れる。外面は体部ハケマ～口縁部ヨコナデ～体部タテヘラナデ～下位ヨコヘラケズリ。内面は口縁部と体部下位にヨコヘラ後、体部上位にヨコヘラナデと口縁部にヨコナデして、多方向の縦なヘラミガキ。外面の下半部が焼熱赤化し、上半部は黄褐色が明瞭。	10YR7/4 に近い 黄褐色 縞多 白・赤縞～細粒少 や中硬質	南西面底上11～12cm。 南部底上21cmと東南部 1～2層の各1片も接合 口5/12周。口～体部全周 15, 13, 動量1～2層
24 土師器 鉢?	高 残2.5 底 5.8	外底面は少し上底状でナデ。外面体部ナメナデ。内面底部は多方向のナデナデ。	10YR7/4 に近い 黄褐色 や中硬質 赤縞～細粒と白・黒・透明縞 粒少 軟質	中央部底上5cm 底全周 90

25 土師器 大形甕	高底 径3.7 履7.4	外底面はヘラナデ後に外周をナメヘラケズリして鋭く突出する。胴部は外面がヘラナデで多少丸みがあり、内面は横～斜位の1帯なナデ。	2.5Y6/4 にぶい黄 やや暗赤 透明・白・赤黒～ 細粒やや多、黒細粒少 破片	北西側床土11.2m 底5/12履 74
26 土師器 甕		外底面はヘラナデ後に外周をナメヘラケズリし、やや丸みを帯びる。胴部 外面と底～胴部内面は横なナデ。内面に薄いツグ痕あり。	10Y8/7 4 にぶい黄褐色 粗い・白・灰色粒～細粒やや 多、赤・透明粒～細粒少 破片	北西側床土21m 底1/3履 102
27 土師器 甕	高底 径2.8 履7.1	外面胴部に横なヘラナデ。外底面は木炭痕の可能性があるので不明。内面は ヘラナデ。	7.5Y8/5 4 にぶい黄 やや暗赤 透明・白・赤細粒多、黒・ 透明細粒少・やや赤	南西側床土2m 底1/3履 50、南東Cトレンチ
28 土師器 甕	口19.2 高25.6 底8.1 履大22.2 重 履2059	外面は胴部タナデで多少テヘラミガキ。外底面は外側に粘土を貼ってナデ。 内面は胴部ナメヘラナデで、中位の積み上げ俵状部付近にナメヘラケズ リ。内外面の口～胴部にヨコナデ。胴部下部を除く外面に縦筋。内面の汚 れは不明。	2.5Y3/6 明赤黒 粗い・白・赤黒～細粒多、灰 色粒～細粒と黒・透明細粒少 やや破片	南西側床土9mで横割 してつられて出た。南 西部と西南部2～3層 の境目も接合 ほぼ完了 口11/12履。底全埋 2、東南、西南2～3層
29 須恵器 甕	口履9.6 高履2.6	口縁端面はごくわずかに内傾するが、ほぼ水平な面。外面の口～胴部境に明 瞭な突縁あり。3～4箇の土具で口縁部と頸部に垂直波状文。頸部は2回以 上施文しているので波状文が重なりうる。施文時のロクロは左回転（反時計回 り）。内面には自然釉が多く、黄灰色と暗褐色にやや汚く見える。	5Y4/1 灰 やや暗赤 半透明細～細粒少 破片	西中央部 口1/4履 西C1～3層
30 須恵器 甕	口履約40 高履3.3	口外側面をクロコナデの後、5箇所または6箇の土具で垂直波状文。ロクロナデ 時も波状文施文時も、同じくロクロ左回転（反時計回り）。黄灰色に変色した 自然釉が外面に付着。	N5/0 灰 やや暗赤 白・透明粒～細粒 多 破片	南東部 口1/24履 南東Cトレンチ
31 土師器 鉢	口履約15 高履4.7	小片のため履面等は参考程度。外面体部ナデ後に口縁ヨコナデ。底部多方向 な体部縦位のツグケズリ。内面ヨコナデ後に放射状ヘラミガキ。内面全面と 外面上位に塗り上げナデ。古墳後期の遺物が入る。	10Y8/7 4 にぶい黄褐色 やや暗赤 透明・白・赤細粒～ 細粒やや多、やや赤	南西部床土4cm 口1/8履 49
32 土師器 高杯	脚柱径 5.6	外面は胴部タナデ後に杯体部を斜くナデ。杯内面は多方向の密な垂 ラミガキと炭素吸着の黒色処理。胴内面はヨコヘラナデ。古墳後期後半の遺 物が入る。	10Y8/7 4 にぶい黄褐色 やや暗赤 白粒～細粒多、透 明粒～細粒と白粒・赤和灰少 やや破片	南西部床土15cm 脚柱全埋 46
33 土師器 鉢	口径15～20 高履3.7	SG5区SD-41の41(実形)とよく似ている。外面の口～体部境に浅い段あり。 片口の注口部を横断面に作り出した鉢の口縁部。内外面ともにヨコナデ。古 墳後期の遺物が入る。	10Y8/5 3 にぶい黄褐色 やや暗赤 赤黒～細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや破片	南東部 口1/12履 南東Cトレンチ
34 石製遺品 明石瓦	長41.9 幅20.9 厚6.4 重7.0	形制上程の約前縁を各所に少しずつ残す。背面には三叉状の稜を持ち、上部部 以外の空面に縦3mm以下の細溝を持つ。背面の3辺と縦面にはほぼ1方向(部分 的には2方向)の磨削痕。側面には下部を斜～斜方向、上部を斜～斜方向に研 磨する。図示した背面から後面側へ1箇所穿孔し、後面側に穿孔跡を生じて いる。穿孔径1.55mm、斜孔径1.35mm。	3B1 7/1 青黒 褐色 磨削で軟質な滑石 やや破片	北東側脚床土15cm 完形 100

SG10区 SI-4 (第2分冊の第283図、写真図版22)

SG5区 SI-4 と同一の建物跡である。SG10区内では遺構の東半部がほとんど残っていないので、すべてSG5区で報告する。

SG10区 SI-6 (第21～23図、写真図版71・72・174・189・190)

[位置] SG10区南部、東側低地に面する台地平坦面縁辺部の17-17グリッド。同じく古墳中期の遺構は西にSI-14とSI-85がある。北に近接する時期不明のSK-234とは重複しない。北東部で古墳中期のSI-30・89a・89bを切り、SI-89b→(拡張)→SI-89a→SI-30→SI-6の順序になる。

[規模と形状] 方形で中軸はN-7°-E、東西5.36×南北5.50m。残存壁高は18cm(南西部)～38cm(北部)。南西隅と南東隅にある段差は拡張部かもしれないが、内側にある周溝を埋め戻した状況がないので確実でない。地山の柔らかい部分を掘りすぎて生じた段差の可能性も否定できない。この竪穴は東西壁の上部を掘りすぎた部分もあると記録され、土層の識別が困難だったとみられる。掘方底面は小さな凹凸があり、ローム塊・粒の多い土で全体を貼床する。床面からの深さは中央部が浅く、周辺部が深い傾向を持つ。

主柱穴は4本(P1～P4)。P1とP4には柱痕(柱1層・柱4層)があり、P1の土層は抜き取った可能性を示す。東柱穴東側と西柱穴西側に床面を約20cmの一段浅い掘形を持つ(柱3層)。柱間は東西間2.16～2.20m、南北間2.46～2.54m。深さはP1=53cm、P2=57cm、P3=52cm、P4=42cmで、P4が浅い。

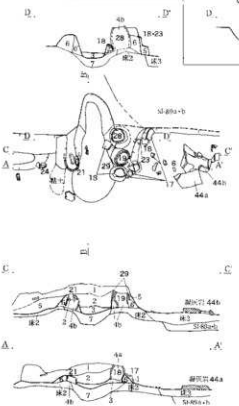
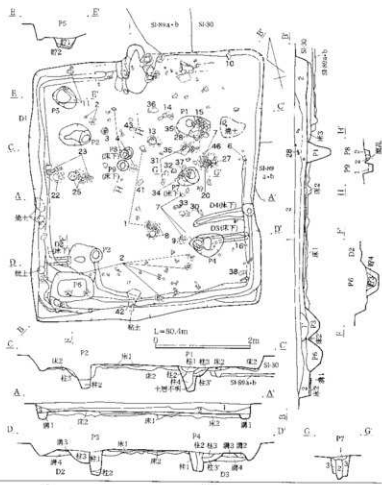
中央部のP7・8・9は貼床下の掘方底で確認し、埋め戻した旧柱穴の可能性がある。P7は径47×36×床面から深さ53cm、P8は径24cm・床面から深さ21cm、P9は径28×22×床面から深さ26cm。

壁溝D1は、SI-30・89a・89bの上に重複する北東部では、平面および土層断面観察で壁溝の存在を明確にできなかったが、それ以外の部分を全周する。間仕切り溝は西壁際でD2、東壁際でD3・D4の計3本を掘方底面で確認した。床面からの深さはD2が8cm、D3・D4が17～18cm。主柱穴に付随する位置に

第5章 権現山遺跡 SG10 区

ある D2 と D3 の覆土は主柱穴覆土に切られる（断面図 D-D'）。近接している D3・D4 は時期差があるとも見られるが、D4 の土層を確認していないため詳細は不明である。

- SI-6(SI-6)
- 1 柱礎色 白色粘土質のやま、ローム粒少、砂、少量。
 - 1' 柱礎色 1層以下の中層に厚く、白色粘りや砂、砂、少量。
 - 2 柱礎色 白土層、砂や中多、白色粘り、砂、少量。
 - 3 柱礎色 海中に埋上層の中多。
 - 3' 柱礎色 ハート型、土層に厚く、土層、黒褐色土少、土層に埋込みは多い。
 - 3'' 柱礎色 ローム粒、中多、黒褐色土や中多、中多、ローム粒、砂や中多、中多、下に埋込みは多いので、黒褐色土少。
- SI-4
- 1 柱礎色 ローム粒、小粒や中多、中多、柱礎部分。
 - 2 柱礎色 ローム粒、小粒や中多、中多、埋込みの土層に及ぶ中多の多層した土層(中多)。
 - 3 柱礎色 ローム粒、小粒や中多、中多、埋込みの土層。
 - 3' 柱礎色 ローム粒、小粒や中多、中多、埋込みの土層。
 - 3'' 柱礎色 ローム粒、小粒や中多、中多、埋込みの土層。
 - 3''' 柱礎色 ローム粒、小粒や中多、中多、埋込みの土層。
- SI-1
- 1 柱礎色 赤褐色土層や中多、ハート型、ローム粒、砂、少量。
 - 2 柱礎色 ローム粒、砂、少量。
 - 3 柱礎色 ローム粒、砂、少量、ハート型、ローム粒、赤褐色土や中多、砂。
- SI-9
- 1 柱礎色 ローム土層、ハート型、ローム粒、赤褐色土層、砂。
 - 2 柱礎色 ハート型、赤褐色土層や中多、砂。
- 赤褐色土層
- 1 柱礎色 ローム土層、赤褐色土層、少量。
 - 2 柱礎色 ローム土層、赤褐色土層、少量。
 - 3 柱礎色 ローム土層、赤褐色土層、少量。
 - 4 柱礎色 ローム土層、赤褐色土層、少量。



- カマツ
- 1 柱礎色 赤褐色土層や中多、ローム粒、小粒や中多、中多、埋込みの土層に及ぶ中多の多層した土層(中多)。
 - 2 柱礎色 赤褐色土層や中多、ローム粒、小粒や中多、中多、埋込みの土層に及ぶ中多の多層した土層(中多)。
 - 3 柱礎色 赤褐色土層や中多、ローム粒、小粒や中多、中多、埋込みの土層に及ぶ中多の多層した土層(中多)。
 - 4 柱礎色 赤褐色土層や中多、ローム粒、小粒や中多、中多、埋込みの土層に及ぶ中多の多層した土層(中多)。
 - 5 柱礎色 赤褐色土層や中多、ローム粒、小粒や中多、中多、埋込みの土層に及ぶ中多の多層した土層(中多)。
 - 6 柱礎色 赤褐色土層や中多、ローム粒、小粒や中多、中多、埋込みの土層に及ぶ中多の多層した土層(中多)。
 - 7 柱礎色 赤褐色土層や中多、ローム粒、小粒や中多、中多、埋込みの土層に及ぶ中多の多層した土層(中多)。
 - 8 柱礎色 赤褐色土層や中多、ローム粒、小粒や中多、中多、埋込みの土層に及ぶ中多の多層した土層(中多)。

第 21 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-6(1) 遺構

貯蔵穴は2箇所、作り替えた可能性もある。北西貯蔵穴P5は不整楕円で底面が東へ少し傾く。南西貯蔵穴P6はほぼ平底の長方形。P5・P6は壁が直線的で、自然埋没状。P5は52×40×深さ21cm、P6は88×64×深さ40cm。SG10区ではSI-16・18・19・40・86・89a・104・108・111に複数貯蔵穴がある。SG10区SI-89a・104や磯岡遺跡SG9区SI-49のように作り替えて複数になったともみられる。SG5区ではSI-11などに複数貯蔵穴がある。貼床土の硬化部(床1層)は断面で確認し、平面範囲は不明確である。

【カマド】北壁際中央にある。両袖幅91cm、煙道先端から東袖先端まで80cm。カマド袖の下部を掘方掘削時に少し高く掘り残す。東袖に土師器甕18・19と甕28・29を倒立し、北から2つめの29の中に19を入れる。西袖にも21を倒立する。火床面は構築当初の面と、整地土(3層)でかさ上げした面がある。袖が西へ流出したカマド5層が壁溝を埋めている。天井材と推定される軟質凝灰岩(44)が折れて東側床面で出土した。2点の破面を接合できないが、本来は合計重量5kg程度と同じ石だったと推定できる。外した天井石に亀裂があり再使用できないので廃棄したのであろう。片端部だけは出土しなかった。

【覆土】覆土は自然埋没状で、テフラの可能性もある白色粒を含み、上層に多い。南壁際にある粘土は、北部が床面に接し、南部が溝埋土上に載る。西壁際3層中・南西部1層中・北東部2層中に焼土がある。

【遺物出土状況】建物跡全体で出土するが、中央部から南西のP3付近が希薄である。南壁際は遺物点数は多いものの、小破片主体の土器片ばかりである。北東部で床からやや浮いたレベルを中心として遺物が多く、同じ範囲に礫も多い(33～41)。床面の遺物は少ない。カマド構築材の土師器はカマドの項で説明した。

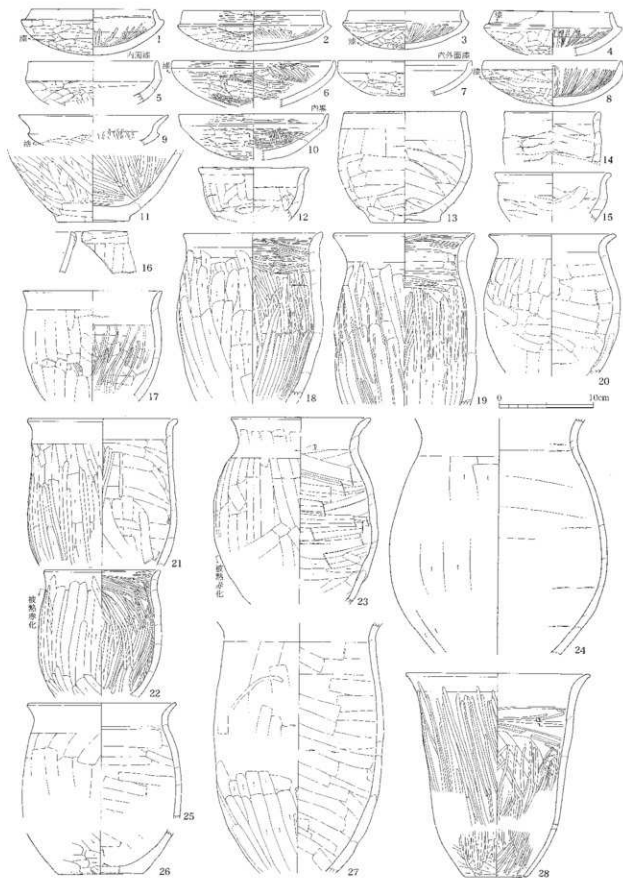
【出土遺物】極めて多い。土師器杯は身模倣形(1～5)と半球形(6～8)が主体で漆仕上げが多いが、10は内面炭素吸着。2の口縁部上端を不規則にナデるのは補修痕の可能性もある。補修痕のある土師器はSG10区SI-22・23・25・33・87・111と時期不明のSK-243、焼成前亀裂はSG10区SI-19aの高杯・SI-34aの杯・高杯・SI-36の杯にある。SG5区SI-20の大形甕、SG5区SI-21の壺、SG2区流路2の鉢、磯岡遺跡SG9区SI-49aの杯も補修の可能性を持つ。内傾形(13)・貼付口縁(16)・粗製(12・14・15)の鉢がある。内面をよく磨く小形甕が目立ち、18と19が類似している。土製丸玉・勾玉がある(45・46)。SI-60にも土製勾玉破片(?)がある。図示以外の土師器合計1,863片・11,802gの内訳は、杯582片・3,181g、鉢13片・525g、高杯46片・538g、小形甕4片・51g、甕壺類1,195片・6,893g、甕6片・244g、小形土器17片・370g。古墳中期後葉ころの土師器もあり、重複するSI-30・89から混入したものであろう。

鉄関連遺物では、ごく小さな鍛冶滓が2点出土した(47・48)。重複するSI-30(中期)や、西側のSI-14(後期)でも鉄滓・炉壁が少し出土している。

第13表 梅山遺跡SG10区SI-6 出土遺物

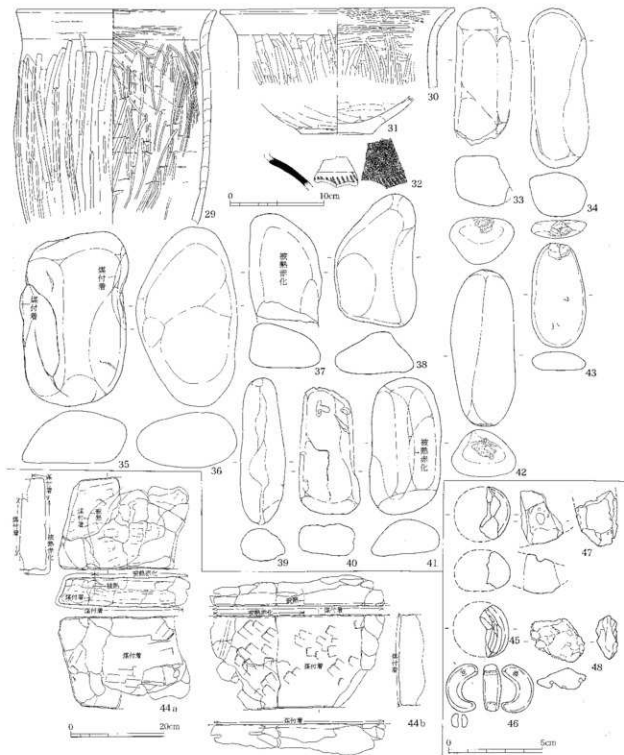
番号 種類 器種	大きさ mm・g	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.1 高 4.8 最大 14.9	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ヘラケズリ後に上半をヨコナデし、体部に放射状と口縁部に横位一糸のヘラミガキ。内面全面と外面中位以上に漆仕上げ。	5YR6/8 透明 褐色 磨 細密 白～黒粒 多、白・灰色粒～細粒少 やや硬質	中央部北寄りと南寄りの1片が接合 口～体3/4埋 60、120
2 土師器 杯	口 復15.2 高 3.7 最大 16.2	外面は体部に横位と底部に1～2方向のヘラケズリ後、体部に縦ならへラミガキ。内面体部はナメヘラケズリ後に放射状または放射状のヘラミガキ。内外面口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。口縁部上端外面に縦なナデがあり、焼成前に補修した痕かもしれない。漆仕上げは見られない。112、127、41、49、52、53、122、128、商業之壺	5YR6/8 磨 やや密 白細粒と黒・透明 粗～細粒少 やや硬質	南部床土22cmと北西部 床土2～3cm、南東部 1片も接合 口1/6埋、体5/12埋 注記なし
3 土師器 杯	口 11.9 高 4.1 最大 13.2 重 残230.0	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面はヨコナデ後、体部に放射状ヘラミガキ。外面上半と内面全面に漆仕上げ。	5YR6/8 磨 やや密 黒粒～細粒多、透 明・白粒～細粒少 やや硬質	北面上15cm 口11/12埋、体全埋 123
4 土師器 杯	口 12.4 高 残4.7 最大 14.4	外面は体部ナデ後に底部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ。内面は体部中位以上にヨコナデ後、体部に放射状ヘラミガキ。外面口縁部と内面に漆仕上げ。	5YR5/6 明赤色 細密 白・黒粒やや多、白・赤・灰色粒～細粒と透明面 少 やや硬質	中央～北西部床土3～ 10cm 口1/2埋、体3/4埋 93、122、124、126
5 土師器 杯	口 復13.6 高 残4.5	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデで、体部へラミガキしている可能性もあるが不確定。内面漆仕上げ。	5YR5/6 明赤色 やや粗い 赤粒～黒粒多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	北東部床土17cmと北部 各1片が接合 口1/3埋 110、ペルト北2層
6 土師器 杯	口 復17.0 高 残4.9	外面は口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。体部ヨコヘラケズリ後に斜位横位ヘラミガキ。内面は体部ヘラケズリ後に横～斜位ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。内面全面と外面口縁部に漆仕上げ。	5YR6/8 磨 細密 白細粒と赤・黒粒～細 粒やや少、白粒少 硬質	東壁床土4cm 口1/6埋 164B

第5章 権現山遺跡 SG10区



第22図 権現山遺跡 SG10区 SI-6(2) 遺物

7	土師器 杯	口 復14.0 高 残3.8	外面は1口部までヨコナデ後に体部ヨコヘラズリ。内面はヨコナデ。残存する内外全面に塗仕上げ。	10Y88/3 灰青釉 縹赤・白・赤・透明細粒黒 敷	中央東～南東床上5～ 55cm 口1～2周 56, 65, 78, 81
8	土師器 大甕	口 14.6 高 4.8 最大 14.9	外面は上半部ヨコナデ後半多方向ヘラズリ、口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後に密な放射状ヘラミガキ。内面全面と外面上半部に塗仕上げ。	10Y87/6 明赤釉 やや粗い・黒・透明粗～細粒 多、白～細粒少 やや硬質	中央部直上2～3cm、 南東の1片も接合 口5/6周、体11/12周 67, 68, 南東
9	土師器 杯	口 復15.8 高 残3.2	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラズリで、体部上端の縁が鋭い。内面はヨコナデ後に体部を放射状ヘラミガキ。内面全面と外面上半部に塗仕上げ。	10Y88/2 灰白 釉・透明粗粒やや多、白・ 赤～細粒少	南東床上10cm 口1/4周 65
10	土師器 大甕	口 復15.6 高 残4.7	残存口縁が少ないので復原形・断面は参考値。外面は体部ヨコヘラズリ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は体部に多方向の密なヘラミガキ、口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面に放射状の黒色処理。	10Y86/4 に赤い青釉 やや粗明 透明粗粒と白・黒 口1/24周、体1/3周 53.30 No.55	南東床上14cm 口1/24周、体1/3周 53.30 No.55
11	土師器 鉢	高 残7.1 底 7.8 最大 復18.0	底面は円板状に突出し、外底面は多方向ヘラズリややや上げ直。外面側部はナメヘラズリ後に一部ヘラナデ。内面は底面に多方向と側面に斜位の密なヘラミガキ。	10Y86/4 に赤い青釉 やや粗い 白・赤粗～細粒多 黒・灰色・透明粗粒やや多 硬質	北東床上16～19cm 胴下平1/3周、底全周 129, 130, 131
12	土師器 鉢	高 残11.6 高 残5.6	体部内外面は非常に細なスリナデで、粘土層積み残を残す。特に内面は凸凹が著しい。口縁部内外面にヨコナデ。	10Y87/6 縹赤粗～細粒多、白粗～細粒少 やや硬質	北東部 口～体1/3周 北東2層
13	土師器 小形甕	口 復12.4 高 11.8 底 7.4 最大 14.1	外底面は円板状に突出した後に中央が凹み、多方向ナデ。外面体部は縦～横位の不規則なナデ。内面体部は斜～横位のヘラズリとヘラナデ。口縁部内外面にヨコナデ。	10Y87/4 に赤い青釉 やや粗い 白・灰色・透明粗 ～細粒やや多、白・灰色釉 粗粒少 敷	中央東部床上11cmで正 色 口1/4周、底全周 115
14	土師器 大甕	口 復10.0 高 残4.9 最大 復10.4	体部内外面はやや粗なナデで、粘土層積み残を残す。特に外面によく残っている。口縁部内外面にヨコナデ。	7.5Y86/4 に灰白 やや粗明 赤粗～細粒多、白・ 黒・透明粗粒少	中央東床上15cmとカマ 下北東部の1片が接合 口～体1/4周 114, 北東
15	土師器 小形甕	口 復12.0 高 残5.3	外面は体部を滑らかにナデで、縦横積が残る。口～胴部内外面ヨコナデの後に内面体部ナデ。	5Y86/6 縹 やや粗い 赤粗～細粒多、白・ 透明粗～細粒と黒粗粒少 や や硬質	北東床上17cm 口1/4周 108
16	土師器 小形甕	口 復20～30 高 残11.5	口縁部内面が強く内彎する。外面はやや粗なタテヘラズリ後に口縁部を粘土層付けしてヨコナデ。内面はヨコナデ。	7.5Y87/6 縹 粗粒と黒・透明粗～細粒と黒 粗粒少 硬質	黒部西側床上4cm 口1/12周 61
17	土師器 小形甕	口 復14.6 高 残11.5	外面側部はタテヘラズリで部分的にタテヘラズリ。ヨコヘラズリに見える部分もあるが、ヘラズリ後に生じた水平線の可能性がある。内面側部は斜～横位のヘラミガキで、内外面口縁部ヨコナデ。側部外面がやや粗熱赤化する。 [注記] 2, 5, 6, 7, 南東1層, 北西2層	2.5Y85/6 明赤粗 粒・白・赤・灰色粗粒やや多 白・黒・透明粗粒やや多 やや硬質	カマ下東部直上～床 上11cm、北西部の1片 も接合 口1/6周、胴1/3周 注記は左欄
18	土師器 小形甕	口 14.8 高 残17.6 最大 15.4	口縁部の外反が弱い。外面は口～胴部ヨコナデ後に、胴上平と下平を上と下方向ヘラズリ。内面は側部に縦位のヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。	5Y86/6 縹 やや粗い 白粗粒多、赤・透 明粗～細粒と黒粗粒やや多 やや硬質	カマ下東部横積床、惣 持層上に倒立 中央部直上11cm、胴下平1/2 周上, 10, 18
19	土師器 小形甕	口 14.9 高 18.1 最大 15.0	外面は口～胴部ヨコナデ後に側～胴部をタテヘラズリしてから、口縁部を再度ヨコナデ。胴部ナメヘラミガキ。内面は側部に縦位に横位のヘラズリ後ヘラミガキ。口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外面のミガキははやや粗熱。18を参照。	2.5Y85/8 明赤粗 粒・灰色粗粒と白・黒・ 赤粗～細粒多、透明粗～細粒 少 やや硬質	カマ下東部横積床、29 の脇の内側に倒立 中央部直上11cm、胴下平1/2 周上, 10, 18
20	土師器 小形甕	口 復13.4 高 残14.9 最大 復14.3	外面胴部下位タテナデ後に、胴部中位の縁積み上げ体部内外面を斜位ヘラナズリ。胴部上位の外面に縦位と内面に横位のヘラナズリ。口～胴部の内外面をヨコナデ。焼熱赤化は見られず。焼成時の黒煙を外面に染み付く。	10Y87/3 に赤い青釉 やや粗い 赤・透明粗～細粒 やや多、白・黒粗粒少	中央東部床上17cm、 北東部の2片も接合 口1/12周、胴5/12周、 胴1/2周 85, 北東上層
21	土師器 小形甕	口 15.8 高 残15.6	口縁部が強く外反。外面は側部タテヘラズリ後タテヘラミガキ。内面は側部ナメヘラズリ後、部分的にタテヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ。	7.5Y86/6 縹 やや粗い 白粗粒多、赤粗～ 細粒と黒・透明粗粒少	カマ下西部横積床、床 直上に倒立 口11/12周 19, 北西中層
22	土師器 小形甕	口 12.4 高 残13.4 最大 13.1	口縁部は志人町東定形13cmの楕円形。外面は口縁部ヨコナデ後、胴部縦～横位と下部に斜位のヘラズリ。内面は側部に縦～斜位の口縁部に横位の密なヘラミガキ。外面側部が焼熱赤化。	10Y86/4 に赤い青釉 やや粗い 赤粗～細粒と白粗 粒やや多、黒・透明粗～細粒 少 やや硬質	中央部直上7cm、カマ 下西の2片も接合 口5/6周、胴5/12周 12, 99
23	土師器 小形甕	口 復14.6 高 残19.6 最大 復17.4	外面はタテヘラズリ後、口～胴部をヨコナデ後にヘラナズリ上端を滑す。外面中位は斜位ヘラズリ後、胴部上平と下平を上と下方向ヘラズリして、上半部は横位ヨコヘラズリ状のヘラナズリ調整が顕著まで及んで内面口～胴部ヨコナデ。外面胴部下位が焼熱赤化し、内面側～胴部が滑らかに塗る。 [注記] 1, 4, 5, 6, 9, 99, 北東部1層, 北西2層	7.5Y86/6 縹 やや粗い 白・灰色・透明粗 ～細粒多、白・灰色粗粒と赤・ 黒粗粒少 やや硬質	中央部直上1～9cm、 中央部直上11cm、北東部 に各1片、胴1/2周、胴3/4周 注記は左欄
24	土師器 大甕	口 復25.1 最大 復23.0	外面側部タテヘラズリ後、内面側部ヨコヘラズリ。内外面側部ヨコナデ。内外外面が強く焼熱赤化するが焼熱、調整が不鮮明。	7.5Y87/6 縹 粗粒と黒・透明粗～細粒やや多 硬質	カマ下東部横積床、床 直上に倒立 胴1/2周、胴全周 16
25	土師器 大甕	口 15.8 高 残12.3 最大 16.8	胴が薄い。側部は外面に縦～斜位ヘラナズリ。内面にヨコヘラナズリ。口縁部内外面にヨコナデ。下平とと思われる土層があるが接合できない。	10Y86/3 に赤い青釉 やや粗い 白・透明粗～細粒 と赤・黒・透明粗粒やや多 やや硬質	中央部直上1～4cm、 胴位で出土 口5/6周、胴～胴上平 全周 97, 98
26	土師器 大甕	高 残4.8 底 復8.2	外底面は1方向のヘラズリで少し上げ直。外面側部に横～斜位ヘラズリ。内面側部に縦～斜位ヘラナズリ。側部外面がやや粗熱する。側部断面も少しあるが底部の比喩がない。 [注記] 101, 112, 北東1層, アトレ北, アトレ北上西	2.5Y86/3 に赤い青釉 粗粒・透明粗～細粒多、白粗 粒少 やや硬質	中央部直上12～16cm、 北東部の2片も接合 胴部1/4周、胴1/4周 注記は左欄
27	土師器 大甕	高 残26.5	残存下部から高さ8cmの所に横積み上げ体部があり、外面はその付近より上側がタテヘラズリ。下部がタテヘラズリ。内面は縦～斜位ヘラナズリ。内外外面口～胴部にヨコナデ。外面胴部下位が強く焼熱赤化する。	10Y87/3 に赤い青釉 やや粗い 白・透明粗～細粒 やや多、黒・灰色粗粒少 やや硬質	中央東部床上19cm、北 東部の2片も接合 胴部1/4周、胴1/4周 84, 北東1層
28	土師器 大甕	口 復19.5 高 復21.4 底 復6.2	外面は下位ナメヘラズリ。中位タテヘラズリ。口縁部ヨコナデの後に全体をタテヘラズリ。内面は側部ナメヘラズリと口縁部ヨコナデの後に全体を斜位と上平と下平を上と下方向ヘラズリして、下半部は縦位は焼熱赤化している。胴部下位に接合できない部分があるので復原断面は推定。	5Y86/6 縹 やや粗い 白・灰色・透明粗 ～細粒やや多、黒粗～細粒少 やや硬質	北東部床上17～23cm 口1/3周、体1/4周 97, 106, 107, 110, 110, 南東, アトレ北, 北東1層 北東2層, アトレ北上 層



第23図 権現山遺跡 SG10 区 SI-6(3) 遺物

29 土師器 甕	口 径 21.1 高 残 22.8	外面は口縁部ヨコナデ後に胴部に縦位のへらケズリと直らなへらミガキ。内面は胴部ナナメヘラナデと口縁部ヨコナデの後、胴部縦位、胴部斜位、口縁部縦位のへらミガキ。惣焼部の割合焼熟直化。 [注記]17, 17A, 北西1層、南東1層	10Y36/4 中や微密 粒中や赤、赤・透明則～細粒少 中や破質	に ぶ い 黄 緑 白則～縦位と果割 の小型器を中に入れて 直直上に傾立。北西部と 南東部の各1片も接合 口 1/2 周。頸 2/3 周 直直は左側 南東部径上 8～12mm 口 14.6 63, 64
30 土師器 甕	口 径 24.8 高 残 8.5	外面は口縁部ヨコナデ後に胴部を縦位のへらケズリ後へらミガキ。内面は胴部ヨコヘラナデまたはヨコヘラズリと口縁部ヨコナデの後、胴部に縦位と口縁部に横位の密なへらミガキ。	10Y36/4 緻密 高則～細粒中や少、白 黒則～細粒少 中や破質	

31 土師器 大甕	高 残4.1 底 7.5	西底面はナデ面に軽く削って、少し凹面状。外面側面はナメナメド、内面底面はココヘナデ。被熱痕やコガは見られない。 [注記]133, Aベルト北東米, K北東, Aト北北, 北東1層, Aベルト北2層, 北東2層, 北西3層	10Y87/3 に赤い黄褐色や赤や白・灰色・透明細砂や砂質 砂質	中央東寄り9cm, 北西部の1片も接合底2/3層 注記は5層
32 埴土器 蓋	径 20～30	底面に黒銅粒を多量にコロボコ回転(時計回り)で散布する。外面に薄黒色の自然釉が薄く付着する。	5Y72 灰白 緑褐色 黒銅粒と白微粉少 硬質	中央東上11cm 径11/2周 89
33 石器 編物石	長 残14.5 幅 残9.1 厚 5.6	縦長い自然の河原石をそのまま利用。周で右半部の縁辺が崩れてしまっている。被熱・加工痕や付着物は見られない。現存重量749.2g。	N7/0 灰白 やや細粒で硬質な花崗岩	中央東寄り床土6cm 一部欠 150
34 石器 編物石	長 16.8 幅 6.3 厚 5.2	縦長い自然の河原石をそのまま利用。被熱・加工痕や付着物は見られない。	7.5Y/2 灰オリーブ 細密で硬質な流紋岩	中央東寄り床土5cm 完形 148
35 石器 編物石	長 17.8 幅 11.5 厚 6.2	周の下面が平坦になる自然の河原石。全面が強く被熱赤化し、両側縁付近に炭が付着する。加工痕は見られない。現存重量1755g。	10Y86/4 に赤い黄褐色 細密で硬質な石英閃岩	中央北東寄り床土17cm 完形 141
36 石器 編物石	長 18.7 幅 10.7 厚 6.9	自然の河原石をそのまま利用。被熱・加工痕や付着物は見られない。重量1580g。	2.5Y/2 灰黄 細密で硬質な流紋岩	中央北寄り床土14cm 完形 154
37 石器 編物石	長 残11.1 幅 7.7 厚 4.1	自然の河原石。全面がかなり被熱して赤色化した後に周の下部が折損している。加工痕や付着物は見られない。現存重量623.7g。	10Y85/3 に赤い黄褐色 細密で硬質な流紋岩	中央東寄り床土13cm 一部欠 147
38 石器 編物石	長 14.0 幅 8.7 厚 5.3	自然の河原石。被熱・加工痕や付着物は見られない。重量718.6g。	2.5Y/2 灰黄 細密で硬質な石英閃岩	南東隅床直土 完形 137
39 石器 編物石	長 15.4 幅 4.7 厚 3.6	縦長い自然の河原石をそのまま利用。被熱・加工痕や付着物は見られない。重量331.3g。	2.5Y7/4 浅黄 細密で硬質なホルンフェルス	P4 上面土8cm 完形 P4 上面より上8cm
40 石器 編物石	長 13.4 幅 6.5 厚 3.5	縦長で断面が隅丸長方形の自然の河原石をそのまま利用。被熱・加工痕や付着物は見られない。縁辺や表面がやや粗粒気味の現状で現存重量489.1g。	10Y6/1 灰 粗粒の長石礫品が目立つやや軟質な砂岩	中央北東寄りの床土6cm 完形 140
41 石器 編物石	長 14.1 幅 7.4 厚 3.8	縦長い自然の河原石をそのまま利用。全面の多くが強く被熱して赤色化している。加工痕や付着物は見られない。現存重量692.5g。	10Y86/4 に赤い黄褐色 やや粗い砂岩	中央床土9cm 完形 149
42 石器 編物石	長 16.4 幅 6.7 厚 4.8	縦長い自然の河原石をそのまま利用。両端に縁打あり。重量693.6g。	2.5Y/3 に赤い黄褐色 細密で硬質な安山岩	南西隅床土18cm 完形 155
43 石器 編物石	長 10.9 幅 5.7 厚 1.9	平面楕円形で板状の自然礫をそのまま利用。片方の端部の両面に縁打による刻線がある。重量106.4g。	5Y6/1 灰 細密で硬質なホルンフェルス	中央北寄り床土6cm 完形 142
44a カマド 編物石 [土器材]	長 残25.3 幅 19.4 厚 6.4	平面形で一端が少し斜行する四角形で、断面は長方形の板状石材。各面を加工して平坦にする。加工痕は少し認められるが不明瞭。一方の平面と側面が被熱赤化し、他の面は炭が付着する。もう1片と同一個体の可能性が高い。	10Y88/2 灰白 細密 細粒で軟質な凝灰岩	カマド東床直土 一部欠 9
44b カマド 編物石 [土器材]	長 残36.4 幅 19.6 厚 6.5 重 残2128	断面が長方形の板状石材。各面を平坦に加工し、加工痕は少し認められるが不明瞭。両側の平面は全体に炭が付着し、反対の面はすべて被熱。1側面が被熱赤化する。もう1片と同一個体の可能性が高い。	10Y87/2 に赤い黄褐色 やや粗粒で軟質な凝灰岩	カマド東床直土 一部欠P4 9
45 土師器 土製瓦	径 残2.5 高 残2.2 重 残4.88	全面ナデ調整後、裏面に円筒方向のミガキ。穿孔部分は残っていない。捺土上げは見られない。	5Y8/6 明褐色 緑褐色 白・黒・透明細砂少 やや硬質	西部 5/12 埋 8ト西
46 土師器 土製瓦	長 2.5 幅 0.9 厚 0.9	ナデ調整後におそらく左側の面から焼成前に穿孔し、左側の面で径2.1cm、右側の面で1.9cm。表面全面が褐色(10Y84/1)で、捺土上げしている可能性がある。重量2.72g。	2.5Y4/1 黄灰 緑褐色 白・透明細砂少 やや硬質	中央東寄り床直土 完形 100
47 輪形銅治 洋(小)	長 残2.9 幅 残2.2 厚 残17.6	上下面と下手側の側面が生きている小型の輪形銅治洋の肩部小破片。淨質は緑褐色で表面は青瓦りしている。下面には灰色に被熱した伊土が固着する。銅治閉造物構成No.6。	青灰色 暗灰色 磁石度 5 メタル値 なし	銅面3面
48 輪形銅治 洋(小)	長 2.2 幅 2.8 厚 1.1	厚さ0mm程度の扁平な極小の輪形銅治洋破片。側面が点々と小蝕面となっており、上面は木炭灰を多量に半流動状の面となる。淨内部の気孔が目立つ。銅治閉造物構成No.62。	灰 明褐色 色 オリーブ黒色 磁石度 2 メタル値 なし	ほぼ完形

SG10区 SI-9 (第24図、写真図版72・73・190)

【位置】SG10区南部、東側低地に面する台地平坦面縁辺の17-17、18-17グリッド所在。同じく古墳時代の建物は北にSI-88、南にSI-30、西にSI-16がある。重複する遺構はない。

【規模と形状】南北軸の長方形で、中軸線はN-4°-W。東西3.40×南北4.62mで、壁は直線的に外傾し、壁残存高は最大で20cm。掘形の深さは床から2～8cmで、北壁側の約1mの範囲で掘形底が5～6cm深くなる。暗褐色土で貼床し、床は平坦で傾斜しない。

南東隅にある貯蔵穴P1は、床面ではわからず、貼床を除去した後に掘方底面で確認した。浅く小さな円形ではあるが、一応貯蔵穴と判断した。貼床で埋め戻されていたという所見があり、古い時代の貯蔵穴と考えることができる。貯蔵穴の内部と上面付近で出土した土器片(1)が接合している。P1は径38cm、床面から約の深さ13cm。

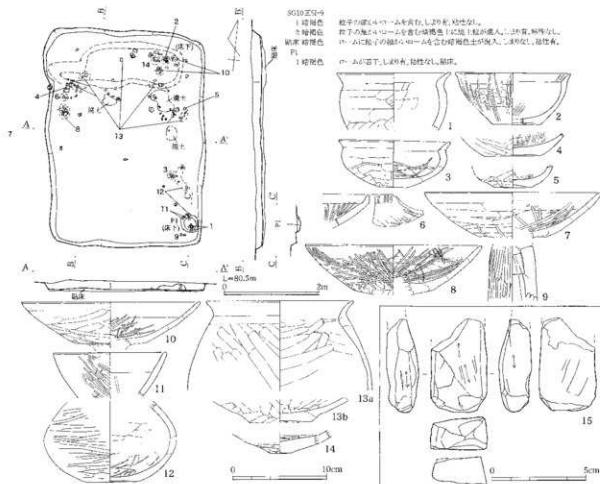
【火処】認められない。

【覆土】覆土は中央東部の3層を除き大半が単層。北半で3箇所に焼土があり、その下面レベルは床面から

5～9cm 浮いている。

〔遺物出土状況〕遺物は堅穴北半と東部に多く、中央から南西部にはほとんどない。4 は床から 3cm 上方にあるが、他の遺物は 10cm 前後浮いている。南東隅部で貼床除去後に確認した貯蔵穴 P1 の内部と、P1 上方の床面レベル付近で出土した土師器杯片が接合した (1)。貯蔵穴を埋め戻した土に入った遺物であろう。

〔出土遺物〕1 は外面に煤が付く深い椀形杯。浅い椀形杯 (2・3) があり、内面を磨く杯や、初期の摸倣杯 (6) も含む点は、中期後葉まで下がる要素である。図化以外に上げ底状の土師器杯底部が 2 片ある。13 はよく被熱している小形甕。13・14 の裏は破片が多いが接合できない。遺物量は少ない。図示以外の土師器合計 464 片・3,327g は小片ばかりで、その内訳は杯 65 片・247g、高杯 65 片・528g、鉢 2 片・27g、小形壺 17 片・153g、壺甕類 315 片・2,372g。表面が剥落した土器が目立ち、被熱または埋没環境の影響によると思われる。



第 24 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-9 遺構・遺物

第 14 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-9 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・胎成 (または素材)	出土状況 現在状態 注記
1 土師器 杯	口 径 12.0 高 残 5.9	外面は体部ナデと下位ナメヘラズリ。内面は体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面全体に煤が付着し、外面体部が強く被熱赤化する。	5YR/2 灰白 顔料 赤・黒點～細粒と白・ 透明細粒少 軟質	P1 直上 1m と P1 上方 の床面レベルの各 1 片 が接合 口 1 片 遺物 2、P1-4
2 土師器 杯	口 径 12.2 高 5.4 底 4.9	外面は多方向ヘラズリで凹底状。外面は口～体部ヨコナデと体部ヨコヘラズリの後にチチヘラミガキ。内面は磨耗・剥離して調整が不明瞭だが、口縁部と体部に縦～斜位ヘラミガキ。	5YR/6 橙 軟い 赤點～細粒多、白・黒 透明細粒少 やや軟質	北東部床土 14cm 口 1/3 弱、底全周 5、北東
3 土師器 杯	口 径 11.7 高 5.0 底 3.1	外面は平底ナデ。外面体部ナデ後に下位ヨコヘラズリ。中位に部分的なヨコヘラミガキ。内面体部ナデ後に横～斜位ヘラミガキ。内外面口～体部ヨコナデ。内面に炭化物または煤の汚れあり。	2.5YR/5.8 明黄褐色 やや軟質 赤點～細粒多、白・ 黒細粒少 やや軟質	南東部床土 13cm 口 7/2 弱、底全周 32、南東、南東 A トレ

4 土師器 杯	高 残 2.4 底 残 5.8 最大 残 10.8	外底面は凹状でヘラケズリ後ナデ。外面はナメヘラナデで少し光沢のあるミガキ面に仕上げ。内面はヘラケズリまたはナデの後にタテハラミガキ。外面は凹状で黒色物質が付着し、復かどうかは不詳。	5YR4/3 に深い赤褐色 赤黒～細粒やや多 白・黒・透明細粒少 やや硬質	北西内床土 8cm 口 1/6 貫 52
5 土師器 杯	高 残 2.4 底 残 3.8	外底面は凹状で、外面はヘラケズリ。外面はナメヘラナデ後、下部部をヨコヘラケズリ。内面は剥減して不明瞭だが、ヘラミガキの痕跡が残る。	10YR7/4 に深い黄褐色 白・黒・赤黒～細 粒少 硬質	南東部床土 8cm 底 3/4 貫 26, 南東
6 土師器 杯	口 残 16～18 高 残 3.3	外面は体部ナメヘラケズリ後ナメヘラミガキ。内面はヨコナデで口～体部に浅い浅窪を持ち、体部に放射状ハラミガキ。	2.5Y7/4 浅黄 やや暗赤 白・黒・透明細粒少 やや硬質	北西内床土 8cm 口 1/6 貫 60, 北西
7 土師器 高杯	口 残 18.6 高 残 4.8	外底面は放射状のややゆるヘラケズリ。体部外面に横粒と内面に横および斜位のハラナデ後、口縁部に内外ヨコナデ。外面下位と内面中～下位にやや粗らかなヘラミガキ。	5YR6/8 橙 暗赤 赤黒～細粒と白・黒 透明細粒少 軟質	中央内床土 15cm 口 1/6 貫 63
8 土師器 高杯	口 残 18.4 高 残 5.2	外底面は放射状ヘラケズリ。内底面に多方向ヘラナデ。内外面の体部に横～斜位ヘラナデ。口縁部にヨコナデ。体部にナメヘラミガキ。	10YR7/4 に深い黄褐色 赤黒～細粒と黒・透明 細粒少 やや硬質	中央内床土 15cm 口 1/4 貫 61
9 土師器 高杯	高 残 5.8	外面はなめらかなヘラミガキ。内面は粘土の輪積み状を現し、縦なタナナデ。	10R5/8 赤 やや暗赤 白・黒・透明細粒少 やや硬質	北東部床土 12cm、焼土より下部 即柱立層 41
10 土師器 高杯	口 残 19.0 高 残 4.7	外面の杯底面は放射状ヘラケズリ後に外側部ヨコヘラナデ。外面の杯体部はナメヘラケズリ後に上半部ナメヘラナデと口縁部ヨコナデ。内面は杯体部ナメヘラナデと口縁部ヨコナデの後に多方向のヘラミガキ。	10YR7/4 に深い黄褐色 やや暗赤 白・灰色粗粒多。 赤・黒・透明細粒少 やや硬質	北東部床土 13～15cm。 北東部の1片も接合 口 1/6 貫、杯底 5/12 貫 6, 10, 30, 北東
11 土師器 小形甕	口 残 11.7 高 残 4.7	外面は体部ナデと口縁部ヨコナデの後にナメヘラミガキ。内面ヨコナデ後タテハラミガキ。内面は約縁と横溝が浅しいため調整が不明瞭。	7.5YR6/8 橙 暗赤 赤・黒黒～細粒と白 透明細粒少 軟質	P1 内と P1 上(床土) 12cm 口 5/12 貫 37, P1, P1
12 土師器 小形甕	高 残 8.5 底 残 4.9 最大 残 14.2	外底面は多方向のヘラケズリ後ヘラミガキで面く凹凸、外面は体部下位に横～斜位ヘラケズリと上位にヨコヘラナデの後、体部中にヨコヘラミガキ。内面は体部下位に多方向ヘラナデ、体部下位に横位のナメまたはヘラナデ。	7.5YR7/6 橙 暗赤 赤・透明細粒少 やや硬質	南東部床土 7～12cm。 北西で 1 片出土 1/6 貫、底全周 30, 35, 北西
13 土師器 小形甕	口 残 15.5 高 残 12.1 底 残 6.4	破片が不足して製部を復元できない。外底面は多方向ヘラケズリで少し上げ底状。内外面は製部に横～斜位のヘラナデ後、口～強部にヨコナデ。外面全周に浅く横溝が浅く残る。 注記 127, 44, 49, 51, 55, 56, 57, 北東, 北東 B トレ, 北西	5YR7/6 橙 やや暗赤 白・灰色粗～細粒多 黒・透明細粒少 やや硬質	北西内床土 8～18cm。 北西部にも破片あり 口 1/3 貫、底 5/6 貫 注記は左欄
14 土師器 甕	高 残 2.4 底 残 2.1	外底面には木炭層の可能性のある圧痕が残る。底面の外側側の制部下位をヨコヘラケズリして、底面の彫理が非常に小さくなるように削り込んでいる。内面は円筒方向のハラナデおよび一部ヘラケズリ。外面側が粗粒赤土。	10YR6/4 に深い黄褐色 やや暗赤 透明細粒少 白・黒黒～細粒少 やや硬質	北東部床土 13cm 底全周 2
15 石器 砥石	長 残 4.9 幅 残 3.0 厚 残 23.9	縦長い砥石で、両の上部が薄くなった部分で割れて破面している。片側の平面と、両側の側面を砥面に利用して平面に磨耗する。裏側の平面は砥面ではなく、切削加工時の集塵が残り残る。	2.5Y8/3 淡黄 細砂で軟質な流紋岩質灰岩	北東部 床土 底 2 貫

SG10 区 SI-10 (第 25・26 図、写真図版 73・173・190)

【位置】SG10 区南部、東側低地に面する台地平坦面縁辺部の 18-17 グリッド。同じく古墳後期の建物は北と北東に SI-12 と SI-32 があり、南に古墳中期の SK-11 や SI-9 がある。SK-11 → SI-88 → SK-211 → SI-10 → SE-352 の順に重複する。中央部以南で古墳中期の SI-88 を切り、中央から東壁際中央付近が古墳中～後期の SK-211 を切る。北西隅が時期不明の井戸 SE-352 (中世?) に切られる。

【規模と形状】南半は SI-88 と重複するため壁と床を平面的に確認できなかった。土層断面で確認した床面と壁から、ほぼ方形と見られる。東西 4.56 × 南北 4.77m、中軸線は N-0° 30' E。壁は直線的に外傾し、最大残存壁高は北東隅で 35cm。床面はほぼ平坦で南部がやや低い。先行する SI-88・SK-211 より床面が少し高い。本建物の覆土・貼床が SI-88・SK-211 の覆土と区別しにくいために重複部で SI-10 の床を捉えられず、SE-352 にも切られるので、北半約 1/3 の範囲のみで床面を観察できた。重複部で SI-10 の床面をうまく捉えられなかったので、南北方向の断面で SI-10 床面がかなり南へ傾斜する状況にはやや疑問が残る。掘方は北部で明瞭である (10 層)。南部は先行する SI-88 埋土に掘り込んだ土を固めたか、それに暗褐色土を混ぜて貼床したとみられたが、貼床や掘方を SI-88 埋土から明確に区別・認識できなかった。

主柱は 4 本で、北側の P1・P2 は床面で確認した。深さは P1=34cm、P2=43cm。南側の P3・P4 は SI-10 床面で確認できず、SI-88 の床まで掘り下げてから確認した。P3 と P1、P4 と P2 の底面レベルがそれぞれほぼ同じなので、床面からの深さも同様か、または南部の床面が少し低い分だけ P3・P4 がやや浅いと推定される。柱間寸法は東西 2.22～2.36m で北側がやや広く、南北 2.40～2.52m で西側がやや広い。建物内北東部、P1 西側の床面で確認した P6 は径 36 × 深さ 31cm である。

南東隅にある貯蔵穴 P5 は、本竪穴の床面下にある SI-88 床面で確認した (現地調査時の名称は P9 で、整理作業時に P5 に変更)。東西軸の長方形で 83 × 62cm、本建物床面からの深さは推定 19cm。P5 覆土は竪穴覆土 2 層と同質なので、竪穴廃絶後に一緒に埋没したことがわかる。

【カマド】北壁際中央にある。両袖幅96cm、煙道先端から袖先端まで121cm。燃焼部の竪穴貼床(12層)を切って東西42×南北53cmの円形に掘り、焼土が混じらない9～11層で埋め戻して火床を作った後に、灰色と暗褐色を混ぜた4層で袖を作る。カマドの西側では断面図に貼床土(12層)が記録されていないが、3層の下部に貼床土があったことが推定される。焼土の多い5～7層が火床堆積土と内壁崩落土である。

【覆土】自然埋没で、白色テフラ粒は確認していない。上層の9a層はローム粒を含まない。南部の9b層は先行するSI-88埋土1層と似た黒味の強い土。北部の9c層はローム粒が多くなる。9b層と9c層の境界は漸移的で、現地で作成した南北断面図B-B'の原因は9b層と9c層を区別しないで同一層としている。

【遺物出土状況】遺物は比較的多い。壁際には少なく、中央部西半に集中し、多くは床面からかなり浮いている。下部の遺物出土状況を拡大図に示した(アイウエの範囲)。自然礫が多く、北西柱穴P2の南側で床土17cmのレベルにある長33×幅11×厚さ13cmの礫が最も大きい。先行するSK-211や、新しいSE-352の遺物として取り上げられた中にもSI-10からの混入品を含み、接合できたものもある。裏(11)や壺(6)のうち少数の破片が、先行するSK-211の遺物として取り上げられているが、本来はSI-10の遺物である。

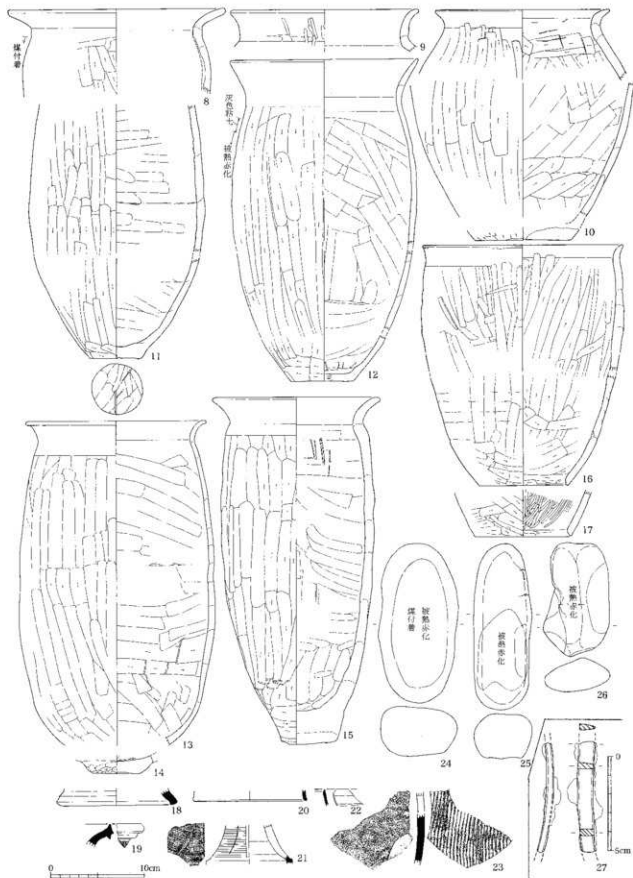
【出土遺物】壺・甕・甗類の中では長胴甗が多く、甗も目立つ。杯類は口縁部が短くて内面を磨かない。6は外面下半が被熱する中形甗。7は丁寧に調整した大形甗。10の甗はやや薄く、口頸部が小さい点がやや異形。11は木葉痕をナデ消したことがわかる。15は被熱使用痕が不明確な甗。図化した遺物以外は小破片ばかりである。図示以外の土師器および焼粘土塊合計719片・5.136gの内訳は、杯262片・1.776g、高杯100片・629g、小形壺6片・75g、壺甗類348片・2.644g、小形土器1片・5g、焼粘土塊2点・7g。

礫が多く、大きさや形は様々で、被熱赤化や煤が認められる礫もある。このうち長方形礫の一部を編物石と判断したが、出土状況ではなく形状から選んだもので、自然礫との区別は不明瞭である。図示した遺物以外に、白色軟質の凝灰岩小破片1点(53×37×18mm)がある。

古墳中期の土師器高杯・杯・鉢が多く、外面赤彩の壺も1片あって、重複するSI-88などから混入した可能性が高い。古墳中期の混入須恵器は甗(19)・口端に段を残す蓋杯(20・22)・高杯(21)と、同一個体らしい甗胴部16片がある(23)。23と同一個体とみられる甗片はSI-12に7片、SI-23・30・40・47・50とSK-46とSD-41・42に各1片、平安時代のSI-90に1片混入していた。19はSI-2の破片に似る。

第15表 権現山遺跡SG10区 SI-10 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・装成 (または素材)	出土状態 残存状況 注記
1 土師器 杯	口 復14.0 高 残3.0 最大 復14.8	外面体部コハラケズリ。外面口縁部と内面にココナデ。外面の上位に漆仕上げが残る。	7.5Y88/6 浅褐色 白・灰色～黒粒と赤粒散り 黒・透明細粒少 中や軟質	床土上～床土22cm 口15/12周 55, 155, 180
2 土師器 杯	口 復14.9 高 残3.4	外面体部コハラケズリ。内外面口縁部ココナデと内面口縁部にナメナデ。内面体部は磨削しているため調整不明。内外面の残存漆を漆仕上げ。	7.5Y87/3 黒 中や軟質 透明細粒～黒粒と白・黒細粒少 中や硬質	北西床土4cm 口1/4周 2, 北西
3 土師器 杯	口 復15.6 高 残3.2 最大 復16.0	縁に近い。外面は上半部ナデで粘土積み上げ痕を残し、下半部コハラケズリ。外面口縁部と内面全面ココナデ。外上平と内面に漆仕上げ。	10Y87/4 に近い黄褐色 細粒 白・透明細粒～黒粒少 中や軟質	北西床土28cm 口1/4周 114, 北西
4 土師器 杯	口 復14～15 高 残3.3 最大 復15～ 16	体部に外面横～斜位ヘラケズリと内面ヘラナデの後、外面口縁部と内面全体をココナデ。漆仕上げは見られない。被熱により全体が少しオレンジ～ピンク色。	2.5Y87/4 淡赤褐色 細粒 白・灰色粒散りと黒・透明細粒少 中や硬質	北東部 口1/6周 北東, 北東Bトレ
5 土師器 小形土器	高 残2.3 底 4.6	外面はユビオサエおよびナデ。素材粘土の接合面も残る。内面は横～斜位のヘラナデ。	7.5Y86/4 に近い黄褐色 細粒 白・透明細粒と黒・透明細粒少 中や軟質	南西床土36cm 底3/4周 9, 95
6 土師器 壺	口 13.5 高 19.8 底 残7.2 最大 16.5	外面は平底でナデかケズリ。外面は体部ヘラケズリ後や中深らにヘラミガキ。内面体部ナデ後、中位以上に斜位と縦面外理に横位ヘラミガキ。内面口縁部ココナデ後、内面横～斜位の赤なヘラミガキ。外面下半～底面に被熱赤化。中位から上縁まで少量の磨削付。	7.5Y86/6 橙 粗い 白・灰色粒～黒粒散り 灰色粒と赤・透明細粒中や多 黒細粒少 軟質	南西床土29cm。北西の3片と北東の1片も縁口口2/3周。第5層102, 北西, 北東Bトレ, SI-88北西
7 土師器 大形甗	口 復24.0 高 残19.8 底 残7.2 最大 復26.4	口縁部は内面上端をかすかに上げ突縁にし、口縁面には浅い凹縁を1本人にする。胴部外面ナメナデ後、中～下位にナメナデや中平。胴部外面をココナデとタナヘラミガキ後、胴部ココハラミガキ。内面は胴部ココハラケズリ。口～胴部ココナデ。 [注記]53, 55, 57, 59, 60, 62, 63, 65, 67, 68, 70, 71, 74, 87, 91, 93, 94, 97, 99, 107, 109, 110, 115, 131, 140, 178, 北西, 南西, 北東, 北東Bトレ, SE, 西, 北西	10Y87/6 黄褐色 粗い 白・透明細粒と白・黒・透明細粒少 中や軟質	床土10～38cm 口1/4周, 第3/4周 注記は左欄
8 土師器 甗	口 復22.9 高 残9.1	外面胴部タナケズリ後、胴部少し縁なナデと内外面口縁部にココナデ。内面胴部は磨削して調整不明。外面胴部に僅少磨削付。	10Y86/4 に近い黄褐色 中や硬質 白～黒粒と灰色 透明細粒～黒粒多。赤・黒粗粒少 中や軟質	中央床土30cm 口1/8周, 第1/4周 79



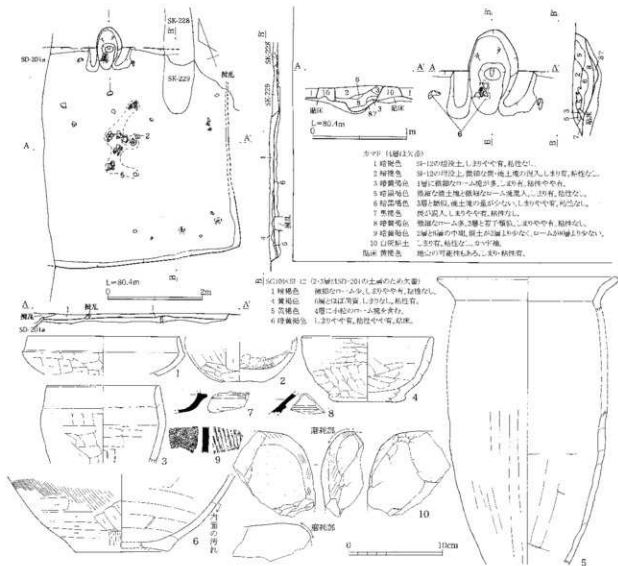
第26図 権現山遺跡 SG10区 SI-10(2) 遺物

9 土師器 土師器	口 復19.8 高 残5.4	口一頭部の内外面ヨコナデ後、外面に疎らなタテヘラミガキ。平底の底部が1片あるが、同一個体と推定せず図示を省略した。	7.5YR6/6 橙 やや暗黒 白濁粒やや多、赤・黒・透明細粒少 やや軟質	南西 口1/10周、頸1/6周、底1/4周 南西
10 土師器 土師器	口 復18.3	口縁部・胴部・底部の破片があるが接合できない。外面はヘラズリで平滑。内外面の口一頭部ヨコナデ後、外面胴部少ヘラズリ。内面は胴部少ヘラズリで、胴下部と底部の少し厚い部分をヘラズリ。外面胴部に黒熱痕が少量あり。	2.5YR6/3 に近い黄 やや暗黒 白・透明細粒少、赤・黒・黒熱粒少 やや軟質	床直上→床土30cm 口3/4周、頸1/6周 注記は左欄
11 土師器 土師器	高 残26.2 底 5.4 最大 復18.5	外底面に本扉面直線の穴を穿ちテマリ。外面胴部上下タテヘラズリ、下部全体が黒熱化。口一頭部ヨコナデ。内面はヨコヘラズリ。存在する外面は黒熱化不明。 注記128、52、79、80、129、132、136、142、149、北東、北東Bトレ、SK.211の1～5	7.5YR6/6 橙 粗い 白・灰色細粒・細粒多、赤・黒粒・細粒やや多 やや軟質	床直上→床土30cm 頸1/4周、底全周 注記は左欄
12 土師器 土師器	口 復19.8 高 35.0 底 6.5	11・中下位部接合できず断面は不定。外面胴部上端縁部と全体縁部のヘラズリ。内面は胴下ヨコナデとヨコヘラズリ後に中位に凸を成形し胴部ヘラズリ。内外面の口一頭部ヨコナデ。外面胴部に灰色粘土層。それより下位が焼熟。内面使用痕は不明。 注記200、22、23、24、25、26、27、31、32、33、36、57、58、75、77、152、865、北東、北東Bトレ、北西、南見、南東	7.5YR6/6 橙 粗い 白・透明細粒・細粒多、赤・黒・灰色細粒・細粒少 やや軟質	床土6～22cm 口5/12周、底1/2周 注記は左欄
13 土師器 土師器	口 復19.0 高 残34.3 最大 復20.6	外面は胴中位ヨコナデ後タテヘラズリ。内面は胴下位を線にナメヘラズリ。中位以上ヨコヘラズリ。胴下位の厚くなった部分をヨコヘラズリ。内外面の口一頭部ヨコナデ。外面中位に少し厚みが付くが不明瞭。 注記112、20、31、40、76、80、81、85、107、165、178、北西、北東、北東Bトレ	7.5YR6/4 に近い橙 粗い 白・黒熱粒多、赤・黒・透明細粒やや多 やや軟質	床土14→32cm 口1/6周、頸1/2周、 頸1/4周 注記は左欄
14 土師器 土師器	高 残20.0 底 4.8	突出する外底縁は鋭なナデで、中央部が少し凹む。外面胴部上端ナメヘラズリ。内面多方向ヘラズリ。	2.5Y2/2 暗灰黄 やや暗い 白・灰色細粒・細粒多、赤熱粒と黒・透明細粒少硬質	新設式底面 底2/3周 161
15 土師器 土師器	口 37.6 高 37.6 底 5.2～5.6	外面は上端部に横に斜に胴部に縦のヘラズリ。外底面はナデで小さな凸面状。内面は底面少ナデと胴部ヨコヘラズリ。内外面の口一頭部ヨコナデ。偶然に出現した痕が不明。 注記110、54、72、84、88、89、90、96、109、111、175、北西、南西、北東Bトレ	5YR6/6 橙 粗い 白・黒熱粒と白熱粒と白・灰色細粒多 やや軟質	床土10→36cm ほぼ平坦 口17/12周、底全周 注記は左欄
16 土師器 土師器	口 復21.1 底 25.0 底 9.3 最大 復21.9	外面口縁部ヨコナデ後胴部タテナデ。胴下ヨコヘラズリ。内面口縁部ヨコナデ後、胴部に縦一斜位と胴下部に横のヘラズリ。孔端面もヨコヘラズリ。内面のケズリが少し残りを待つ。 注記126、121、130、143、147、148、175、177、179、北東、北西、南見、南見、SK.211、SK.211の6	2.5YR6/8 橙 やや暗黒 白熱粒・細粒と黒熱粒多、白・透明細粒少 やや軟質	床直上→床土19cm 口1/8周、底1/2周 注記は左欄
17 土師器 土師器	高 残4.9 底 復10.2	外面斜位はナメヘラズリ。内面胴部は鋭なナメヘラミガキ。孔端面はヨコヘラズリ。	7.5YR6/4 に近い橙 やや暗黒 黒・透明細粒やや少、白・灰色細粒少 硬質	南西床土32cm 底1/6周 498
18 須恵器 須恵器 器形不明	高 残1.9 底 11.5 最大 復12.6	肩台痕または右台輪の跡台部の可能性あり。胴端部内面が、胴部から明瞭に凹んで彫り跡。外面に黒色の自然熱が薄く残る。破面は赤灰色。	N5/0 灰 やや暗黒 白熱粒微量 硬質	内面床土17cm 頸部1/9周 41
19 土師器 土師器	高 残2.5	外面の口縁部より少し下に断面三角の突縁1個。胴部はカキメの後に6面以上の工具で磨削成形状。焼成時の口ロ口は左回転(反時計回り)。外面に黒色の自然熱が薄く残る。破面は赤灰色。	5Y4/1 灰 やや暗黒 白熱粒少 硬質	北西部 口縁部片 北西
20 土師器 杯蓋	口 復12.0 高 残1.2	内外面の口一頭部。口縁部内面に浅い溝あり。外面に自然熱が分る。灰白色に汚く残色する。古墳中期末の遺物がSI-12やSK-11・211 等から認められる。	2.5Y7/1 灰白 やや暗黒 白熱粒少 硬質	北西部 口1/8周 105
21 土師器 高杯	高 残4.3	外面カキメ後に斜位のへらつき縦線1本あり。四方透窓で、45°方向の2孔が1部分ずつ残る。内外面に黒色の自然熱が薄く残る。古墳中期の遺物が認められる。	10Y3/1 オリーブ黒 やや暗黒 白熱粒・細粒少 硬質	南西床土16cm 頸1/4周 105
22 須恵器 杯	高 残1.7	内外面の口一頭部。口縁部内面に浅い溝あり。破面は赤灰色。古墳中期末の遺物がSI-12やSK-11・211 等から認められる。	5Y4/1 灰 やや暗黒 白・透明細粒少 硬質	北東部 口1/24周 北東
23 土師器 土師器		同一個体と思われる16片のうち最大1片を片開示。外面は本目直交の平行線形を帯びた甲殻を使い、木目があまり浮き出ないで履子状にはならぬ。内面は当縁部を削り滑して無文。破面はわずかに赤灰色。古墳中期の遺物が認められる。SI-12のりと同じ個体の可能性あり。	10Y5/1 灰 白熱粒・細粒少 硬質	床直上→床土31cm 胴部片 1.13、41、46、122、158、166、北西、北東、北東Bトレ
24 土師器 輪形石	長 16.7 幅 8.2	自然の河原石をそのまま利用。全面が焼熟赤化して履も付着する。加工痕は見られない。重量1098.3g。	10YR6/4 に近い黄 石炭質品がやや白く流紋状	中央床土12cm 完形 29
25 土師器 輪形石	長 17.4 幅 6.1	自然の河原石をそのまま利用。同示した面が焼熟赤化する。加工面は見られない。重量876.5g。	5Y6/2 灰よりチヤ 流紋岩または石英	内面床土2cm 完形 37
26 土師器 輪形石	長 11.9 幅 6.9 厚 3.7	中央部がびくびく自然の河原石をそのまま利用。表面全体が焼熟赤化していて、同示した面の中輪縁上が最も明瞭に焼熟している。反対面の焼熟は弱い。	10Y5/1 灰 石炭質	内面床土14cm 完形 30
27 土師器 不明	長 5.8cm 厚 3.2～ 3.6cm 幅 8.9cm	輪がほぼ正方形で、片端の一部分は断面が長方形。もう一方の面では1個縁が薄くなるので、断面が長三角形に近づく。これが片部であれば、刀子の基部破片と考えることができるが不確実。現存重量7.8g。	10Y5/1 灰 石炭質	内面床土17cm 完形 157

SG10区 SI-12 (第27図、写真図版73・74)

【位置】SG10区南部、東側低地に面する台地縁辺の18-17グリッド。古墳後期の建物は南にSI-10、北東にSI-32・34、北西にSI-40がある。時期不明のSK-228・229によりSI-12→SK-229→SK-228の順序で切られる。西壁全体が近世のSD-201aに切られる。北東隅は抜根で掘乱されている。

【規模と形状】西壁が明確ではないが方形と推定され、中輪縁はN-16°E。南北長4.68m、東西長は残存4.02mで、カマドが北壁中央と仮定すると東西の推定長は4.76m。壁は直線的に外傾し、残存高8～12cm。床



第27図 権現山遺跡 SG10 区 SI-12 遺構・遺物

は平坦で傾斜しない。全体を貼床し、南北断面の南半部は黄褐色土(5層)で少し高く貼った可能性もあるが、ややしまりが無いので、人為的な床面の高まりかどうかはよくわからない。柱穴は認められない。

【カマド】西壁が不明なため北壁中央から東西に偏るのか不明確だが、ほぼ中央にあると推定する。両袖幅190cm、煙道先端から袖先端まで187cm。貼床土で掘形を埋め戻してから構築するが、貼床土と地山ローム土の区別が不明瞭であった。袖は灰白色粘土(10層)で、調査を実施した7月下旬には乾燥して粘性がなく、よく締まっていた。煙道は北壁から87cm突出してゆるく上がる。カマド平面図で東西断面と南北断面の交点付近にある石は、遺構確認面の直上にあった自然礫で、断面図には記入されていない。

【覆土】約10cm程度残る。貼床(6層)および貼床の可能性のある5層を除くと、単層で埋没している。

【遺物出土状況】遺物は少ないが、覆土が10cmほどの厚さしか残っていないため出土レベルは床面に近い。建物全体から散漫な状態で出土し、中央付近にやや多い。被熱使用痕があるハケ調整球胴裏(6)の底部がカマド内と西側で出土し、接合した。中央部で長胴裏(5)、南部で杯(1)が出土した。

【出土遺物】1は大形で口縁も高いが、ミガキを省略するので後期末頃であろう。甕(5)は金色に発色する雲母片が多く、茨城県域からの搬入品。雲母片を含む土師器はSG5区ではSI-24の高杯、SG10区ではSI-12・21a・22・23・47・59・72・73・74・81・85・114にあり、権現山遺跡北部の2区に多く、他地区に

第16表 権現山遺跡 SG10区 SI-12 出土遺物

番号 種類 説明	大きさ mm 'φ	特 徴	色調 胎土・胎成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復16.0 高 残4.2 最大 復17.2	外面は体部上平子ナデ。下平ヨコヘラズリ。外面口縁部と内面全面にヨコナデ。内面は全体が黒色。漆仕上げは見られない。	2.5YR3/3 淡黄 やや暗黒 白・透明釉～細粒 やや多。灰色細粒と黒細粒少 やや硬質	南東床土8～10cmと南東の4片が組合 口1/3周 165、17、南東
2 土師器 鉢	高 残4.8 底 4.8	外底面に多方向。外面体部に斜位のヘラズリ。内面は底面に多方向と体部に横～斜位のヘラミナリ。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや暗黒 白・赤・透明釉～ 細粒やや多。黒細粒少 やや硬質	中央床土1.2cm 底全周 7
3 土師器 鉢	口 復11.7 高 残8.2	外面の口～体部端に縦くびれあり。外面体部ナデ後に一部ナメヘラズリ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや暗黒 赤・黒細粒～細粒と 白・透明釉少 やや硬質	口1/6周
4 土師器 粗面鉢	口 復13.8 高 6.9 底 復6.7	底面円盤の上に5段の粗面を有して、外底面と体部内外面にやや硬なナデ調物。粗面は裏を覆い、特に外周が目立つ。	2.5Y4/1 黄灰 やや暗黒 白細粒多。赤粒～ 細粒と黒・透明釉少	南東床土7cm 口1/24周、底1/4周 13、14
5 土師器 甕	口 復19.2 高 残20.1	口縁部と胴部は接合できない。底面も小片2点で復原・提示できない。胴部内外面タテヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部も胴部も薄い。[注記]6、19、北西、南西、南東、カマド一枚、SK 229	5YR3/3 に近い赤黒 粗い 白・透明釉～細粒と黒 多。金色雲母～細粒多。黒 粒～細粒少 やや硬質	中央床土3～4cmが 接合口1/2周、胴1/4周、 底1/6周 注記は省略
6 土師器 鉢	高 残8.0 底 残9.6	外面はナメヘラ後製胴部を横～斜位ヘラズリ。外底面は多方向ヘラズリで平坦。内面はヨコヘラナデ。外面の全体が黒褐色化し、内面は従って高さ5cmまでの範囲にコゲ面付着。	2.5YR6/3 暗 黄や暗い 白 質・透明釉～細粒少。白粒と 赤細粒少 やや硬質	カマド西端床土4cmと方 舟下床土17cmが接合 底5/12周
7 須恵器 杯身	最大 復約12	外外面ヨコヘラナデ。底面外面に回転ヘラズリ。	N5/0 灰 緑褐色 白細粒少 硬質	体1/12周 南東8トシ
8 土師器 高杯		杯体部外面下に2段を持ち、下段の上下と上段が残っている。内外面ヨコヘラナデ。	N5/0 灰 緑褐色 白細粒少 硬質	南西
9 須恵器 甕		同一個体と思われる小片7点のうち1片を提示。外面は本目直交の平行溝を彫った甲殻を使い、本目がほとんど浮き出ないのが特徴で状にはならない。内面は当質を磨り滑して無文。破面はわずかに暗褐色。SI-10の23と同個体の可能性あり。	N6/0 暗 灰 緑褐色 白粒～細粒少 硬質	南東
10 石器 砥石	長 残8.6 幅 残7.0 厚 残3.9	自然の円盤。外周部の割面を使用。用途は不明だが、かなり平滑に磨削されている。平面部の部分は使用していない。大部分が約輪・破損し、反対面を使用していたかどうかは不明。重量377.6g。	2.5C/5/1 オリーブ灰 緑褐色で硬質なホルンフェルス	西部床土5cm 破片5

も若干ある(『東谷・中島地区遺跡群』10, p.550)。図示以外の土師器合計235片・1.988gの内訳は、杯117片・627g、高杯31片・210g、鉢14片・176g、小形壺1片・6g、壺甕類70片・934g、甕2片・35g。

SI-10の23と同一個体の可能性がある古墳中期の甕片が7点混入し、1片を示した(9)。径が小さいと見られる須恵器杯身(7)も古墳中期末の混入品かもしれない。ホルンフェルスの砥石(10)はSG10区SI-12・13・18c・19a・25・34a・55・59・65・80・84・86・101、SG5区SI-7などに例がある。また、権現山遺跡北部(SG1区SI-17・4区SI-15他)や立野遺跡5区(SI-7他)などの周辺集落にもある。

SG10区 SI-13 (第28図、写真図版74・190)

[位置] SG10区南部の17-16・17グリッド。古墳後期の建物は北東にSI-15がある。古墳後期のSI-85に西部を切られ、近世のSD-201a・bに南東隅を切られる。

[規模と形状] 西端部形状は不明だが、東西軸の長方形と推定される。東西推定長約6.3m、南北長5.69m。中軸線はN-7°-W。壁残存高は、最もよく残る北東部で7～10cmあるが、南壁の西部では2cmだけになり、西部では掘方まで削平されて消滅する。4本の主柱穴P1～P4の柱間は南北方向が2.30mでほぼ一定している。東西の柱間は、北側が広く2.98m、南側が少し狭く2.92m。南東柱穴P4がやや深くは15cm。南東の他主柱穴P1～P3は床面から深さ40～46cm。柱痕からみて推定柱径は10～17cm。南壁中央にある貯蔵穴P5は東西130×南北106×深さ28cmの楕円形で、貯蔵穴底面がわずかに北へ傾斜する。貯蔵穴は自然埋没で、古墳後期初頭に降下したHr-FAテフラと見られる白色粒子・白色塊が上層に多い。

掘形の深さは床から4～10cmで、北東と南東の隅部は12～19cmまで一段と深くなる。北西と南西の隅部も掘形が深くなっていたかどうかは、西部がひどく削平されているのでよくわからない。

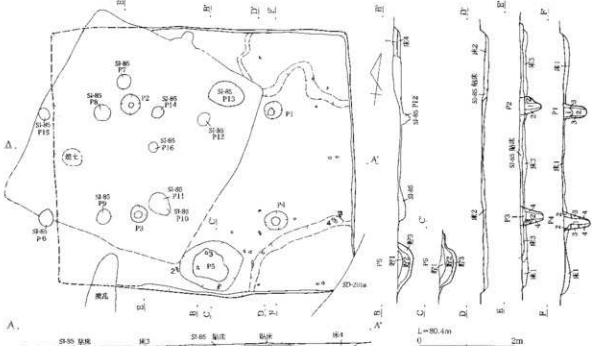
[火処] 不明である。北壁と東壁にカマドが認められないので、炬を持っていた可能性がある。西壁付近の床面に焼土が少しまとまってみられたが、位置が偏っているのでこれを炬と考えることは難しい。

[覆土] 竪穴の覆土は10cmほどしか残っていない。貼床またはその可能性が高い層を除くと、単層で埋没している。古墳後期初頭に降下したHr-FAテフラかとみられる白色粒子を、貯蔵穴と同様に多く含む。

第5章 権現山遺跡 SG10区

〔遺物出土状況〕 覆土が薄いため、出土遺物は床面に近い。特に集中箇所はないが、南東部にやや多い。

〔出土遺物〕 1は口縁部がないため不明確だが、深身の初期模倣杯と思われる。2は小破片でSI-13に伴うかどうか不詳。ホルンフェルスの砥石(4)は、SG10区SI-12などにある。遺物は少ない。図示以外の土師器合計155片・1.204gの内訳は、杯60片・284g、高杯7片・42g、鉢7片・110g、小形壺6片・25g、壺・甕類73片・723g、甕1片・6g、小形土器1片・14g(他に須恵器壺1片・9g)。土師器裏片が多いが図示できるものはない。図示以外に須恵器壺小片が1片あり、古墳終末期頃の混入品の可能性がある。



- SG10区 SI-13
- 1 赤褐色 シロコ・ムシロ・PA白色粘土多量、数十粒程度、しじりや中砂。
 - 2 黄褐色 コム小砂・粘土多量、コム中砂程度、しじりや中砂。
 - 3 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
 - 4 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
 - 5 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
 - 6 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
 - 7 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
 - 8 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
 - 9 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
 - 10 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。

- P1 1 赤褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
- 2 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
- 3 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
- 4 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
- 5 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
- 6 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
- 7 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
- 8 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
- 9 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。
- 10 黄褐色 コム小砂・粘土多量、しじりや中砂。

第28図 権現山遺跡 SG10区 SI-13 遺構・遺物

第17表 権現山遺跡 SG10区 SI-13 出土遺物

番号 種別 形状	大きさ 形状	特徴	色調 胎土・施成 (または素材)	出土状態 保存状態 注記
1 土師器 杯	高 残 4.5 最大 残 15.8	外面は体部にナデ後ヨコヘラナデ、底部にヨコヘラケズリ。内面は断なヨコヘラミガキ半後に断らなタテヘラミガキ。 [注記] 6、SI 85 A-A' 面一括	7.5YR 5/4 に近い明褐色 赤銅粒ややや多、白・黒・透明顔料少 やや破損	南部残 1.6m と SI 85 に 記入した 2 片が接合 体 1 (3 面 注記は左側)
2 土師器 杯	口 覆 14 高 残 3.5	内面底部の横が明顔、体部は外面ナデ後ヨコヘラケズリ。内面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	7.5YR 7/6 暗 やや破損 黒銅粒ややや少、白・赤・透明 顔料少 やや破損	北東部 口 1/2 残 北東部
3 土師器 小形土器	口 覆 9.5 高 残 6.9 最大 6.4	外面で体部より口縁部が少し薄い。外底面と外面体部に断なナデの溝、体部ナデメハラケズリ。内面底部は断なヘラナデ。内面は断なナデで粘土指組み面を残す。内外面口縁部にやや断なヨコナデ。	5YR 5/8 明赤黒 やや破損 白銅・黒銅粒ややや多、黒銅・黒 粒と透明顔料少 やや破損	P5 内底上 10cm 口 1/2 残、底 5/12 残 5、一括貯蔵穴
4 石器 砥石	長 12.8 幅 4.0 厚 1.4	両面を主に長軸方向によく使用して平削に磨耗し、薄くなっている。両面隅もそれと同様地使用して平削に磨耗している。右側の面の上部には微状に磨く部分が多量とまる。重量 98.7g。	2.5Y7/3 浅黄 炭灰粘土の砂・黒粒で破損 なホルンフェルス	北東部残上 2cm 完形 10

SG10区 SI-14 (第29図、写真図版74・75・174・190)

【位置】SG10区南部の18-16・17グリッド。同じく古墳後期の建物は北にSI-15・20、南にSI-85がある。古墳中期のSI-16を切る。



第29図 権現山遺跡 SG10区 SI-14 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10区

【規模と形状】東西4.62×南北4.50mの正方形で、中軸線はN-3°E。中央から南西寄りで掘方底が鳥状に一段高く（床面下1～2cm）、それ以外でやや深い（床面下5～8cm）。床下にSI-16埋土がある北東部は貼床が黒くてロームが少なく、やや厚い。カマド部の掘方が他より深い状況は認められなかった。

主柱穴4本は、P2が少し北西に外れた位置で（P2-P3の柱間だけが他より長く2.30m）、他の柱間は2.10～2.15m。北東柱穴P1は床面で確認できず、床下で確認した。床面からの深さはP1=38cm、P2=40cm、P3=22cm、P4=39cmで、南西柱穴P3が他より浅い。南東柱穴P4の南西にある浅い柱穴P6は床面からの深さ17cm。北西隅の貯蔵穴P5は径54cm・深さ27cmの円形で、底面はやや凹凸を持ち中央が深い。

【カマド】北壁のほぼ中央にある。竪穴の掘方を埋めた貼床の上に白色粘土で袖を作る。焚口から燃焼部にかけて火床面のレベルが約10cm低くなり、煙道部分は竪穴の北壁を30～35cm掘り込んで突出する。煙道部分の平面形は調査時の記録に不備があったらしく、復元形を破線で記入してある。

【覆土】単層で、1層中の白色軽石粒は古墳時代フラの可能性がある。貯蔵穴覆土は自然埋没状。

【遺物出土状況】カマド内とカマド東側にやや多く、それ以外は少量ずつ各所で出土した。カマド東側で床から少し浮いている1/3周長の壺破片はカマド焚口部の破片と接合し、同一個体の接合できない破片が南東部や貯蔵穴覆土にある（7）。大形の杯が伏せた状態で貯蔵穴覆土中にある（1）。

【出土遺物】1は非常に大形の杯で口径20cmを越える。2は密に磨いて内面炭素吸着の跡。長胴梨形の小形土器は珍しい（4）。5は須恵器のようにシャープなヨコナデを口縁部に施す甎。8は古墳中期のSI-16出土破片と接合し、古墳中期の混入品か。遺物は少なく、長胴壺・大形甎・鉢が主体である。図示以外の土器器合計290片・2,347gの内訳は、杯139片・623g、高杯21片・289g、小形壺4片・27g、壺類125片・1,399g、小形土器1片・9g。古墳中期後葉ころかと思われる土師器碗形杯・高杯・壺・甎などが一定量含まれ、重複するSI-16などから混入した遺物と見られる。鉄関連遺物では、ごく小さな鍛冶用鋳が1点出土した。東側のSI-6・30でも鉄滓や灰壁が少し出土している。研壁片はSI-30出土例と質感が似る。

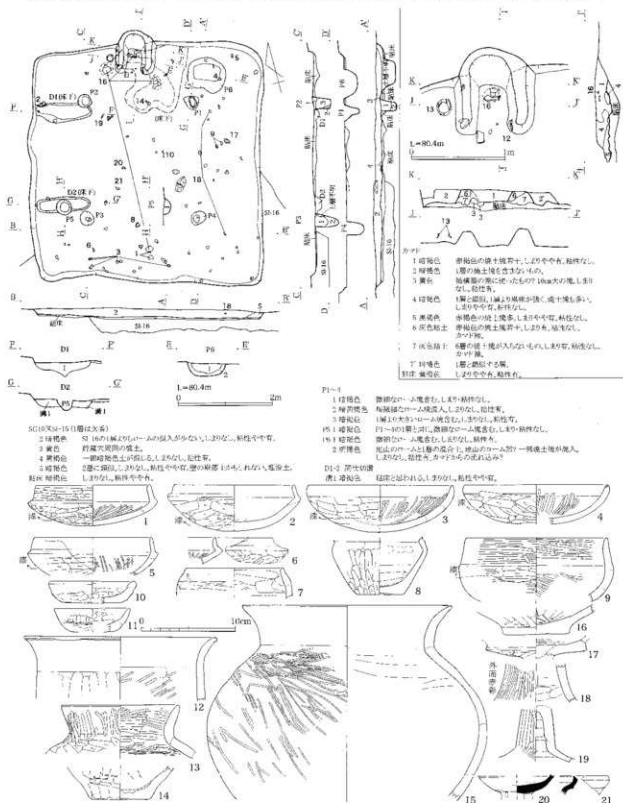
第18表 権現山遺跡 SG10区 SI-14 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (単位: ㎝)	特 徴	色調 胎土・底成 (または染材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 大形杯	口 20.6 高 8.4 最大 21.1	外面は口縁部ヨコナデと底部に2～3方向の後、体部に横位のヘラケズリ。内面は体部ナデと口縁部ヨコナデ後、放散状ヘラミガキ。外面口縁部と内面に塗上げ。	10YR7/4 にふい黄褐色 やや強い 白・黒・透明相～ 細粒多 中や軟質	貯蔵穴底上25cm 口2/3周 1
2 土師器 鉢	口 復 13.2 高 残 6.0	外面は口～頸部ヨコナデ後、体部をヨコヘラケズリの後密なヨコヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデ後、口縁部と体部にヨコヘラミガキ。内面は炭素吸着による黒色処理。	10YR6/4 にふい黄褐色 やや強相 白～黒粒と赤・ 黒・透明相少 硬質	南東部底上3cm、南東に 5破片あり 口1/2周 10、南東
3 土師器 鉢	口 復 12.6 高 5.9 底 6.2	中や厚手で重い。外面と外面体部はナデで、粘土結核みねを中や多。内面は口縁部ヨコヘラミガキ。内外面体部ヨコナデ。塗上げは見られない。	10YR7/6 明黄褐色 やや強相 白・黒粒～細粒と 赤・透明相少 中や軟質	カマド火床土7cm 口1/4周 41, 48
4 土師器 小形土器	口 復 3.9 底 5.6 高 2.0 最大 4.5	長胴梨形。頸以下はおそらく手捏ねで成形し、口縁部だけ粘土結を1段絡んで作る。外面は縦なヘラケズリで凹み底状にする。外面口～頸部を縦ナデ後、側部タテヘラケズリ。内面は胴部を1段な曲ナデの後、口～頸部を斜くヨコヘラミガキ。	10YR6/3 にふい黄褐色 やや強い 白・黒粒～細粒と 赤・透明相少 中や軟質	南西床土4cm 口1/12周 頸部以下完存 4
5 土師器 甎	口 復 23.8 高 2.8	外面は頸部から胴部約1.6cmの段を持って厚くなる。内外面ともに1率なヨコナデで上縁部は凹線状になる。残存部にミガキは見られない。	7.5YR6/6 暗赤色～細粒中や多、白・ 赤・透明相少 硬質	北東部底上3cmとカマド 煙道 口1/3周 25, 45, カマド一括
6 土師器 甎		外面胴部はタテヘラケズリで、下位を向け内側から中位を上向きにする。胴下縁の孔縁部はヨコヘラケズリ後ナデ。内面胴部は密な中や軟質ヘラミガキの後、中位に胴部～側部の中やタテヘラミガキ。	5YR5/6 明赤色 やや強相 赤粒と白細粒多、 白・透明相少 中や軟質	カマド内5～13cm 底1/2周 37, 40, 43, 48, 49, 北西、南西、カマド一括
7 土師器 甎	口 復 15.2 高 残 23.0 底 6.0 最大 16.2	胴部破片はあるが、胴部下縁が接合できない。外面底面に1方向または多方向ヘラケズリ。胴部外面は下縁部に横位と、それ以外に縦位のヘラケズリ。胴内面ヨコヘラミガキ。口縁部内外面ヨコナデ。外面下半が焼熱赤化。注記記、14, 33, 34, 47, 南西、北西、カマド一括	2.5YR7/6 橙 やや強い 黒相～細粒多、白・ 赤・透明相少 中や軟質	カマド内周縁上4～8 cm、貯蔵穴底上23cm、 南東部底上6cm 口1/4周、頸上1/3周、 底5/12周 注記は左欄
8 土師器 高杯	高 残 10.3	脚1端は独立状態で反時計回りに巻き上げ。脚1端と杯底部の接合面は水平。外面胴部タテナデ。杯底部ヨコナデと部分的ヨコヘラケズリ。杯体部下縁ナデヘラケズリ。脚内面ユビサエと軽いタテナデ。杯内面は多方向ヘラケズリ。注記記、14, 33, 34, 47, 南西、北西、カマド一括	10YR7/4 にふい黄褐色 やや強相 赤・灰色粗粒と白・ 白・透明相少 中や軟質	南西部、SI-16東部の1 片が接合 脚柱中央、杯底1/4周 5, 6, SI-16東
9 研削 (磁器?) または 焼熱粘土 器	長 2.7 幅 4.9 厚 2.9 最大 18.4	黒色からすすんだ赤褐色に焼熱した鍛冶師の研削破片。左寄りの縁部は灰色の部分とす。すんだ赤褐色の焼熱部分が混在する。胎土は砂を混じえているもので、上手側側面の一部は発泡して粉末状の鍛冶用鋳が固着する。この鍛冶用鋳の存在により単なる焼熱粘土器とは異なることがわかる。鍛冶用遺物関連品33。	5YR5/7 明赤色 やや強い 中や軟質 磁器層1 ミタカ層 なし	破片?

SG10区SI-15 (第30図、写真図版75・190)

【位置】SG10区南部の18-16-17グリッド。古墳後期の建物は南西にSI-13がある。古墳中期のSI-16を切る。

【規模と形状】東西5.04×南北5.18mの僅かに南北に長い方形で、中軸線はN-15'-E。残存壁高は4～



第30図 権現山遺跡SG10区SI-15遺構・遺物

16cmで、北西部の壁がやや深く残る。南半部の下層にSI-16がある部分では、貼床土が黒くてロームが少なく、壁や床面を確認しにくい箇所もあった。

主柱穴P1～P4の配置は竪穴平面形と同じく僅かに南北に長い方形で、柱間は東西方向が2.28～2.30m、南北方向が2.50～2.54m。南西柱穴P3だけが深く（床面から53cm）、P1・P2・P4は浅い（34～36cm）。南東柱穴P4は下層のSI-16に掘り込まれているので、SI-16を調査してからようやくその位置を確認できた。南西主柱穴P3の西側の床面で確認したP5は深さ20cmの浅い柱穴で、床下で確認した間仕切溝D2を切っていると判断される。P5の上層で土師器が2片出土した。P5は後世の柱穴の疑いもある。

西側の主柱穴2本に連結する間仕切溝2本は、どちらも貼床と同質の土で埋め戻されていて、貼床除去後に確認した。長114～118cm×幅27～42cm、床面からの深さ15～20cm。北壁の東部にある貯蔵穴P6は東西軸の隅丸方形で、東西82×南北74×床面から深さ33cm。貯蔵穴の周囲を取り巻くように、黄色土で盛土を造らしていた（断面図A-A'の3層）。ただし平面図にはこの盛土の形状が記録されていない。P6の覆土は自然埋没で、カマドに関わる焼土が最下層に西側から流入している（E-E'の2層）。貼床は数cm程度の浅いもので、掘方底面に顕著な凹凸は少ない。下層にSI-16がある部分では掘方形状を記録できなかった（D-D'）。

【カマド】北壁中央より少し西寄りにある。規模は長92×幅84cm。竪穴の掘方が緩く窪み部分を、厚さ約10cmの貼床土で平坦に埋め戻した上に、主に灰色粘土で両袖を作る。西袖は黄色土塊や焼土混じり暗褐色土も併用している。煙道は北壁を幅71×奥行25cmの半円形に掘り込み、かなり緩く上がってゆく。カマド西側の床面には胴下半を欠いた土師器甕を正位においてあり、転用器台と考えられる。

【覆土】自然埋没で、壁間に暗黄褐色土が流入している以外は、暗褐色土の単層。

【遺物出土状況】南部にやや多い傾向がある。通例と異なり、貯蔵穴周辺に遺物が少ない。13は肩部で破損した壺の口～頸部を上向きに置いた状態なので、器台に転用した可能性が高い。ただし、床面レベルから少し浮いて出土した（断面図J-J'）。カマド東袖の先端では裏口縁部1片が下向きで出土した（12）。

【出土遺物】土師器杯の多くが漆仕上げ。8は肩部の張った鉢。20は後期前半の3方透の須恵器高杯で、杯底部の丸みやや強く、脚上端がまだ完全に細くなっていない。14は非常に顕著に被熱している甕底部。

古墳中期の混入遺物も見られる（17は杯部有段状、18は外面赤彩、19は屈折脚の高杯）。図示以外の土師器および焼粘土塊合計528片・3.888gの内訳は、杯224片・1.020g、高杯24片・223g、鉢4片・78g、小形壺1片・11g、壺裏類272片・2.534g、小形土器1片・11g、焼粘土塊2点・11g。

第19表 権現山遺跡 SG10 区 SI-15 出土遺物

番号 種類	大きさ 形状	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.1 高 4.4 最大 13.5	外面は底部に2方向と体部に横位のヘラズリ、外面上部は横はナデのままで削り残す。口縁部は内外面ヨコナデ後に外面ヨコヘラミガキ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。外面の底部は外と内面に漆仕上げ。	2.5Y7/3 浅黄 やや磁質 白・黒粗～細粒やや多、赤・透明粗～細粒少 やや磁質	北面出土。SI-16にも破片が散入。 口3/4周、体11/12周北、南西へルト。 SI-16の1B、2D、北西
2 土師器 杯	口 12.7 高 4.8 最大 14.1 重 残 2590	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラズリ、外面口縁部と内面口～体部ヨコナデ。内面底部に多方向ナデ。外面中位以上と内面に削り漆仕上げ。	5Y8/5 橙 磁質 白・黒・赤細粒少 やや磁質	北西部出土3cm（間仕切溝底上22cm） 口11/12周、体全周68
3 土師器 杯	口 覆 15.2 高 5.0 最大 覆 15.4	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラズリ。外面口縁部と内面にヨコナデ後、内面体部に放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面に漆仕上げ。（注記）61、Cトヘ西、北西、SI-16の5、23、北西	10Y8/4 に近い黄橙 やや磁質 黒粗～細粒やや多、白・透明粗～細粒少 やや磁質	南甲即成上12cm、SI-16に破片が散入。 口1/4周 注記は左欄
4 土師器 杯	口 覆 15.0 高 4.2 最大 覆 15.4	外面は口縁部ヨコナデ後、体部ヨコヘラズリ。内面はヨコナデ後にやや密な放射状ヘラミガキ。外面口縁部と内面に漆仕上げ。	5Y8/5 明赤橙 やや粗い 黒粗～細粒多、白・透明粗～細粒やや多 やや磁質	貯蔵穴直上。北東部の2片も接合 口1/2周 21、北東、貯蔵穴
5 土師器 杯	口 覆 12.3 高 残 4.0 最大 覆 13.7	外面体部はヨコヘラズリで、体部上端に粘土結核のみナデを残す。外面口縁部と内面ヨコナデ後、内面体部にやや粗い放射状ヘラミガキ。外面の口～体部中位と内面に漆仕上げ。	7.5Y8/6 橙 やや磁質 赤粗～細粒と白・黒細粒少 やや磁質	北東即成上9cm 口1～体1/6周 19
6 土師器 杯	口 覆 13～14 高 残 2.8 最大 覆 13～16	外面体部ナメヘラズリ。外面口縁部と内面をヨコナデ後、内面体部に密な放射状ヘラミガキ。漆仕上げは現状では見られない。	5Y8/6 橙 やや磁質 赤粗～細粒と白・黒・透明粗粒少 破質	南内即成上12cm 口1/5周 63

7 土師器 鉢	口 復10.2 高 残3.3	口縁部は不明瞭な内傾斜面。内外面はやや顕なヨコナデで、粘土組織のみが少し異なる。	7.5YR6/4 に近い暗 やや暗い。赤黒・黒粒やや多。 白粒・細粒少。硬質	口1/4 周 Aトレ
8 土師器 鉢大	高 残6.1 底 4.8 最大 復10.0	外底面は軽いヘラナデで少し上げ状。外面頸・肩部ヨコナデ。体部タテヘラナデ。内面体部ヨコヘラナデ、肩部ユビオサエ、頸部ヨコナデ。	5Y7R/8 暗 やや暗部。赤黒・黒粒多。白・ 黒・透明細粒少	中央部床土4cmと南端部の各1/4分組合せ 成入れ。肩1/6周、 底1/6周、 54、南東
9 土師器 鉢	口 復14.8 土師器 鉢大 復16.2	外面の口〜体部端に明瞭な段あり。内外面の口縁部をヨコナデ後、ヨコヘラミガキ。外面体部ヨコヘラズリ後にヨコヘラミガキ。内面体部ヨコナデ後にナメヘラミガキ。外面上半と内面に漆仕上げ。	2.5Y7/3 灰黄 緑黄 黒粒やや多。白・灰 色・透明細粒少	北東部床土9cmと中央東 部床土3cmが組合 口1/6周、 底1/4周 19、31、北東
10 土師器 小形土器	高 8.8 底 2.3 最大 復6.1 最大 復9.2	雑な組織のみが多少の手で平らな成形の可能性あり。外底面は多方向ナデで、緩く突出する。外面体部は雑なナデとユビオサエで、粘土成形の凹凸を多く残す。外面口縁部と内面に雑なナデ。	10YR5/4 に近い黄緑 やや暗部。白・黒粒多。 赤黒・黒粒と黒細粒少 硬質	中央部床土6cm 口1/12周、 底5/12周 29
11 土師器 小形土器	口 復8.0 高 残2.5	体部は1段だけの粘土を底部に1層入で成形する。外底面は多方向ナデ。外面体部は雑なナデとユビオサエで、組織のみを残す。外面口縁部ヨコナデ。内面は斜〜傾位の雑なナデ。	5YR5/4 に近い赤黒 やや暗い。赤黒粒と白細粒 やや多。やや硬質	北西部 口1/8周、 体1/3周 北西
12 土師器 皿	口 復20.3 高 残5.8	外面側部タテヘラナデ後、内外面口縁部ヨコナデ。内面側部はヨコヘラナデ(内)の後にナメヘラミガキ。	10YR8/6 黄粉 やや暗い。白・黒粒・黒粒 やや多。灰色・透明明〜細粒少 やや硬質	カマド東部床土4cm と北西部の1片が組合 北西部床土4cmにも2片 あり 底1/3周 5、カマド8、北西
13 土師器 皿	口 12.4 高 残5.7	内外面の口〜頸部ヨコナデ後に外面肩部をヘラズリ。外面口縁部はタテヘラミガキで、特に肩く部分が多い。内面はヨコヘラミガキで、特に肩部は密に削いている。「肩ト平な欠いた縁を土向にして取組に置く。転用部は「うろ」とど東側面にコメントがあり、肩部の組織も上げ縁を削り出した面を上向きにして置いてあったので、転用部として用いたことが推定される。	5YR5/6 明赤黒 やや暗い。赤・白粒・細粒多。 白粒・黒・透明明〜細粒やや 多。やや硬質	カマド西床土4cmと正位 口全周 カマド1、北西
14 土師器 皿	高 残3.5 底 6.2	外面は底部と側部上縁にヘラナデ。側部はタテヘラズリ。内面はナメヘラナデ。残存部分の全体が強く被焼して、内面の面が割離・破損している。	10YR5/2 灰黄黒 やや暗い。白細粒やや多。黒・ 透明細粒少。やや硬質	中央部床土4cm 底7/12周 15
15 土師器 大形皿	口 復22.2 高 残20.5 最大 復29.6	外面側部はヘラナデ後に横〜斜位ヘラミガキで、上半部は密になる。内外面の口〜頸部ヨコナデ。内面側部はヨコナデまたはヨコナデで、特に下部はど器面が荒れて調整が不詳。側部外面の約1/3に大黒痕あり。	10YR6/3 に近い黄緑 やや暗い。白・黒粒・黒粒 やや多。白粒と赤黒粒と透明明 〜細粒少 やや硬質	カマド付近床土4〜6 cmとカマド床土19cm と南西部床土6cmが組合 口1/18周、 側1/3周、 側1/2周、 5、16、53、カマド6
16 土師器 大形皿	高 残3.1 底 7.0	平底で突出する外底面を2方向程度のヘラズリ。外面側部に横位と斜位のヘラナデ。内面側部は放射方向および円周方向のヘラナデ。内面底部の面は黒色。	7.5YR6/4 に近い暗 やや暗部。白・黒粒やや少。 赤・透明細粒少 やや硬質	底2/3周
17 土師器 高杯	高 残2.3 杯底 10.6	頸部上部は粘土塊成形。杯部は有段状。杯底部外面ナメナデ。杯体部外面ヨコナデ。内面杯底部は斜放射状のヘラミガキ。古墳中期中〜後葉の遺物が認められる。	5YR6/8 暗 やや暗い。透明明〜細粒多。 白・黒細粒やや多。白粒と 赤粒少。やや軟質	東部床土6〜11cmが組合 杯底3/4周 25、32、43
18 土師器 高杯	高 残4.1	外面タテヘラミガキ後赤黒。内面は上部ヨコヘラズリ、下部ヨコナデまたはヨコヘラナデ。古墳中期の遺物が認められる。	10YR5/6 赤 やや暗部。白・黒細粒と灰色・ 透明明〜細粒少 やや硬質	北西部床土3cm 肩1/6周 9
19 土師器 高杯	高 残5.9 最大 復8.0	頸柱部に縦位と頸部面に斜位の密なヘラミガキ。頸柱部内面はおそらく細粒いへろを入れてヨコヘラナデ。頸部内面ヨコナデ。古墳中期中後の遺物が認められる。	5Y7R/6 暗 緑黄 白・黒・透明細粒少 やや硬質	中央部床土1cm 頸柱全周 13
20 須恵器 高杯	高 残2.1 最大 復7.9	外面の杯底部は回転ヘラズリと推定できるが、黄色い発色の自然釉が外面を覆うので、ヘラズリの範囲や方向は不明。杯内面はロクロナデ。頸部接合後、頸外面に3方向の透窓を開けている。	N5/7 灰 やや暗い。白粒粒やや多 硬質	中央部内面床土1cm 杯底3/4周、 頸土全周 12
21 須恵器 皿	口 20〜30	外面の口縁部より少し下方に明瞭な突縁1条あり。口縁端部は外傾する明瞭な斜面。	N5/10 灰 やや暗部。白・透明明〜細粒 少。硬質	北東部 口1/36周 北東

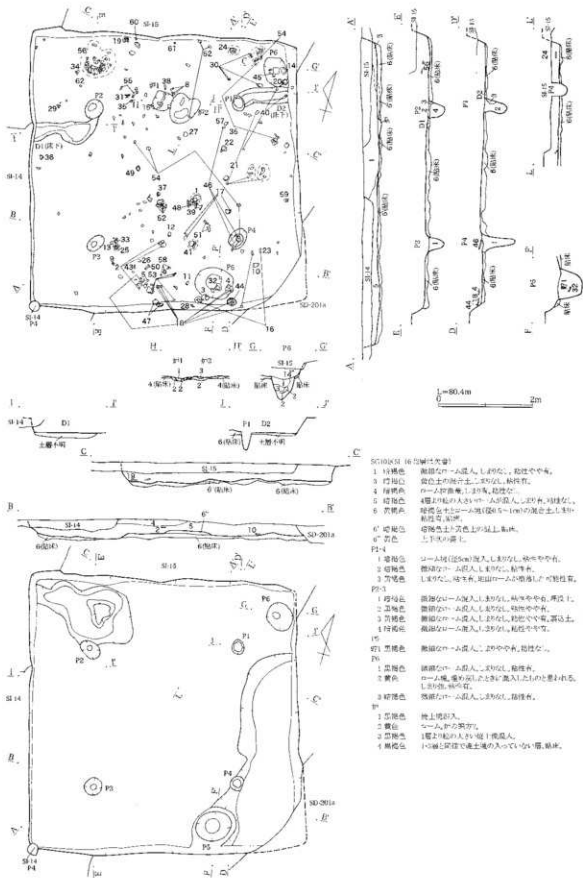
SG10区 SI-16 (第31〜33図、写真図版76・190・191)

【位置】SG10区南部の18-17グリッド。古墳中期の建物は西にSI-19、南東にSI-30がある。古墳後期のSI-14・15と近世のSD-201aに切られる。

【規模と形状】東西5.82×南北6.04mの正方形で、中軸線はN-15°-W。残存壁高は12〜32cm。掘方は床面から深さ4〜12cmで、周囲よりも北西部は4〜9cmほど深く、南東部は1〜6cmほど深い。

主柱穴は4本で、東西に少し長い方形に配置し、柱間は南北2.90m×東西3.10mでほぼ一定している。床面からの深さはP1=46cm、P2=49cm、P3=54cm、P4=74cmでP4だけが深い。北側の主柱穴P1とP2に付随するように間仕切溝があり、壁際まで繋がる。2箇所ともに床床除去後に確認した。断面「U」字状で、平均幅35cm・床面から深さ4〜6cmだが、北西部の間仕切溝は最大幅47cm・深さ10cmの部分もある。

貯蔵穴は2箇所ある。北東にあるP6は埋め戻した旧期貯蔵穴で、南東にあるP5が新期貯蔵穴と考えられる。どちらも底面は丸みがあり、壁面は緩く外へ開く。P5は楕円形で径78×64×深さ41cm、覆土は単層で土師器高杯などが流入している。P6は径62×49×深さ47cmの少し角張った楕円形で、10cm大のローム塊を含む覆土で埋め戻した土の中にも土師器破片が少量混入し、埋め戻した上面には土師器杯(14・20)や土師器破片が数点ある。貯蔵穴が複数ある建物跡は、SG10区ではSI-6などがある。



第31図 権現山遺跡 SG10 区 SI-16 (1) 遺構

【炉】北側主柱穴の中間で東西に並んで地床炉が2基ある。両者の前後関係は明らかに出来なかったが、貯蔵穴が2時期あることと関係するのであろうか。西側の炉1は床を少し深く掘って37×46×深さ9cm。東側の炉2は58×66×深さ5cmで、覆土の上部に焼土塊があるのて床面レベルで火を焚いたのかもしれない。西側の炉1の上面付近に自然礫が1点ある。

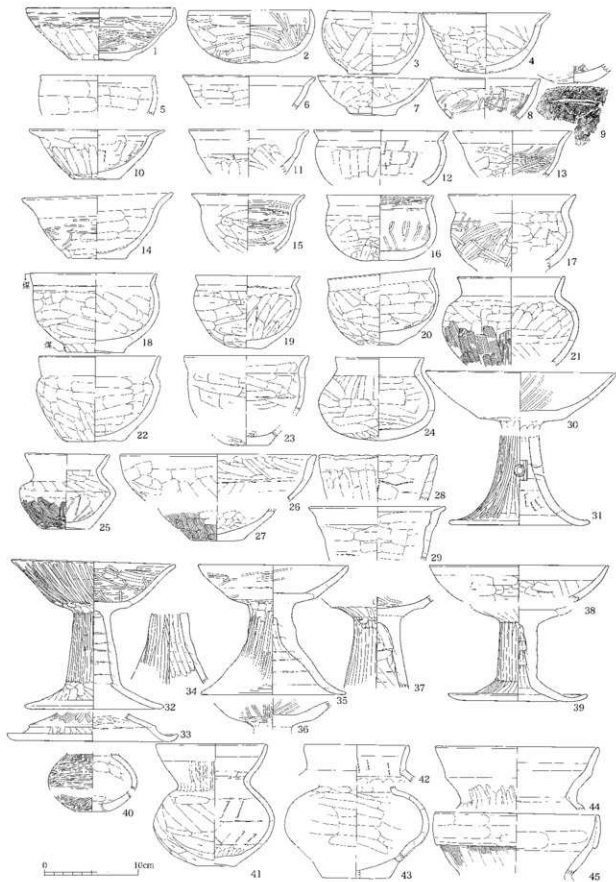
【覆土】自然埋没状である。白色テフラ粒などは認められない。

【遺物出土状況】全域に多いが、西壁付近では遺物が少ない。二重口緑釉(46)は、破片の多くがSI-16の床面とP4内の上半にあるが、東方にあるSI-30の床面から10数cm浮いた状態で接合する破片が出土した。中形の貼付口緑釉(45)はSI-15に2片が流入している。54は破片が広くみられ、南東主柱穴の埋土中にも1片ある。北西部で床から少し土層に残存度の高い甕(56)がある。

【出土遺物】外面に煤の付いた土師器が目立つ。口縁が外に開く椀形杯が多い。1は内外面の横位ヘラミガキが特徴で、SG5区SD-227の7に似る。7は平底の粗製杯。31は脚部に孔を持つ高杯で、SG10区SI-25などに例がある。40は精製品の小形壺。44と46は二重口緑。貼付口縁の壺(45)はSG5区SI-100などに例がある。56は外面上半に吹きこぼれ痕跡が残る。凸面底の甕(57)は本道跡SG5区SI-5・29やSG10区SI-16・50・53にあり、周辺では成願寺遺跡16号住居跡(篠原他2000)や立野遺跡5区SI-21(内山2005)などにも見られる。また、実底状の甕がSG10区SI-88にある。軽石質の砥石が北壁際で3片出土し、1点を図示した(60)。軽石質の砥石は、SG10区SI-64aとSG5区SD-101にある。本道跡北部のSG1区SI-7(『東谷・中島地区遺跡群』10)や、立野5区SI-29・中島笹塚6区SI-34などにもある(『東谷・中島地区遺跡群』5・9)。図示以外の土師器合計814片・6.646gの内訳は、杯484片・2.438g、高杯66片・820g、鉢3片・33g、小形壺12片・126g、壺壺類241片・3.229g。

第20表 権現山遺跡SG10区SI-16出土遺物

番号 種別	大きさ (mm)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状況 注記
土師器 杯	口 復15.6 高 5.5 底 6.2 重 残209.4	口縁部内外面に強い煤を持つて直立型に上がる。外底面は多方向ヘラケズリ、外側面下部チヘナナデ。口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底部に多方向のヘラケズリ後ミガキ。体部ナメヘラナデと口縁部ヨコナデ後に口へ体部ヨコヘラミガキ。	7.5YR7/6 橙 やや暗赤・赤黒 赤・透明～緑少 やや軟質	中央部床土2～6cm ほぼ完成 口全周。底全周 成。102、103
2 土師器 杯	口 12.8 高 5.5 最大 13.4 重 残235.8	外面は全体をやや強にナデた後に口縁部ヨコナデ。口縁部と体部に線ならびヨコヘラミガキ。内面は体部ナメナデと口縁部ヨコナデの後に体部をナメナメヘラミガキ。体部外面に5×10cm大の黒痕あり。 [注記]107、137、南東、貼付(北東～南東)	2.5YR7/3 黄褐色 粗い・白・灰土層と白・赤・黒 黒～緑少 やや軟質	南部床土14～23cmと 南東部5片が接合 口3/4周。底全周 [注記]は左欄
3 土師器 杯	口 9.7 高 6.6 底 5.2 最大 10.7	外底面は2～3方向のヘラケズリ後ナデ。外面は底部に斜へ横位ナデ。内面体部に土として横位のナデ。内外面口縁部ヨコナデ。残存重量192.9g。	5YR6/8 橙 やや暗赤・赤黒 赤～透明～緑少 やや軟質	PS16高杯跡床土8cm ほぼ完成 口11/12周。底全周 122
4 土師器 杯	口 13.5 高 6.4	内面の口へ体部境に強い煤あり。外底面と体部ト位は内周方向のヘラケズリでやや凸面状。外面体部に斜へ横位ナデと内面体部に斜位ヘラケズリの後、内外面口縁部ヨコナデ。外面に8cm大の黒痕あり。	5YR6/8 橙 やや暗赤・赤黒 赤～透明～緑少 やや軟質	PS内では3片が接合 口7/12周。底全周 119直。119斜。119直 119斜。119直。PS1期
5 土師器 杯	口 復12.0 高 残4.2 最大 復12.5	頸部の縦面は外面で前く、内部では明瞭。内外面ともに滑らかなため調整が不明瞭。内外面の体部をナデ後、口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや暗い・白・透明 赤～透明～緑少 やや軟質	南部床土15cmでPS1期 南東部で5片 119直。119斜。119直 34、南東
6 土師器 杯	口 復14.0 高 残3.5	内面口へ体部境に強い煤あり。外面は体部にヨコヘラナデまたはヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は調整が著しいため調整が不明瞭。	2.5YR5/8 暗赤褐色 やや暗赤・白・赤・透明 赤～透明～緑少 やや軟質	北西部・東部・内部で 出土 口1/5周 北西・東・西
7 土師器 杯	口 復11.6 高 4.1 底 4.9	粗製の杯。外面は体部ナメナデ後に口縁部ヨコナデ。外底面は比較的平で、2方向程度のヘラケズリ。内面はやや強な多方向ヘラケズリで、口縁部ヨコナデより後直す可能性あり。	7.5YR6/4 に近い橙 やや暗い・赤黒～緑少 白・黒～赤～透明～緑少 硬質	南西部4片と東部1片が 接合 口1/72周。底3/4周 南西、一括(東)
8 土師器 杯	口 復11.6 高 残4.4	薄く軽い。外面体部ナデ後にやや弱ったナメナメヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部ヨコヘラナデ後、主に放射状と一部に横位のヘラミガキ。内外面口縁部に煤が多少付着。	2.5YR2/2 黄褐色 やや暗赤・白・透明 赤～黒 赤・黒・灰褐色 やや軟質	北部床土17～18cm 口2/3周 21、22
9 土師器 杯	高 残2.0 底 3.0	外底面は内周方向のヘラケズリで少し上げ底状にして、焼成前に深く強い線刻を2本刻く。体部外面に横へ横位ヘラケズリ。内面は底部を1方向のヘラケズリ後に多方向のやや強いヘラミガキ。	7.5YR6/6 橙 やや暗赤・白・赤・透明 赤～緑少 やや軟質	南西部床土11cmと南東部 11cmの間に各1片が 接合 底全周
10 土師器 杯	口 復14.3 高 5.2 底 4.8	内面口へ体部境に強い煤あり。外底面は1方向ナデ。外面体部ナメナデ後に口縁部ヨコナデと口縁部ヨコナデ。内面体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。外面土上に煤が多少付着。 [注記]113、PS1、PS1層、一括(東)	2.5YR5/4 に近い、暗 赤～透明 赤～透明～緑多、黒・赤・透明 赤～透明～緑少 やや軟質	南西部床土1.4cmとPS1底上、 東部の1片が接合 口1/4周。底1/2周。底全周 成。102、103
11 土師器 杯	口 復12.6 高 残4.8	内面の口へ体部境に強い煤あり。外面体部はナデで細く煤を残す。内面体部はナデとヨコヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR7/8 橙 やや暗赤・赤・透明 赤～透明～緑少 やや軟質	南西部床土1.4cm 口5/12周 114

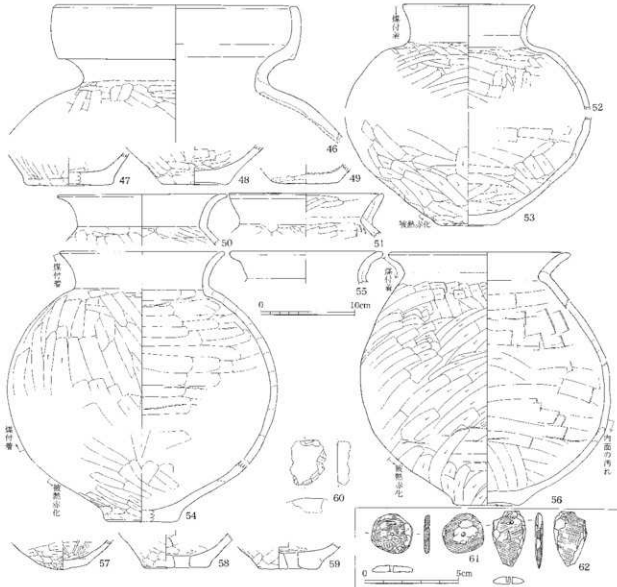


第32図 権現山遺跡 SG10区 SI-16(2) 遺物

12	土師器 杯	口 復14.1 高 残 5.4	外面は外面タテヘラナデ、内面にやや窪んだヨコヘラナデ。外面の口一辺部と内面口縁部にヨコナデ。外面体部に少量の保留存。	7.5Y8/4 に近い橙 やや暗い 赤黒多、白・黒・赤・透明細粒少 やや硬質	南面径上 20cm、南東径 各部に各1片 口1/6周、胴1/4周 98、99、南東、東 面、西、北、北西 口1/6周
13	土師器 杯	口 高 12.6 高 残 4.9	内面の口一辺部に深い凹みあり。内外面口縁部ヨコナデ。外面体部にヨコヘラナデ。内面体部に赤なヨコヘラミガキ。	10Y8/7 明赤黄 暗黒 白黒多・赤・透明細粒少 やや硬質	南面径上 11cm 82
14	土師器 杯	口 15.8 高 6.2 ~ 7.1 底 6.0 重 残 295	外底面は平底でナデ調整。外面体部ナデと口縁部ヨコナデ後、上半部にヨコヘラミガキ。内面は体部ナデと口縁部ヨコナデ。内底面は底面が現状に剥離する。外底面径上 8cmの凹みあり。外面上位に少量の保留存。	7.5Y8/7 橙 やや暗黒 白黒一細粒少 やや硬質	P9 底上で正位 口5/6周、体1/6周 41
15	土師器 杯	口 高 11.9 高 残 6.1	外面は体部の上位にナデと下位に横一斜位ヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面は体部ナメヘラズリ後にヨコヘラミガキ。 [注記] A16、Aトシ、東、SI-15南西、SI-15-16Cトシ西	5Y8/6 橙 やや暗黒 赤黒一細粒や多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	中央北寄り径上 14cm、 東の1片も残存、SI-15 にも遺人 口1/8周、胴1/4周 [注記]は左面
16	土師器 杯	口 11.2 高 7.0 最大 11.7 重 残 235.5	頸部は外面に横溝を持つが、外面は縦く反転する。外面は底部に1方向と体部下位に横方向のヘラズリ。外面胴部ナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内面は最大11.7周、体部に縦位。口縁部に密な横位のヘラミガキ。外底面に6cm大の凹みありの凹みあり。 [注記] I12、I23、P5-1、P5-3	10Y8/8 赤黒 やや暗黒 白黒一細粒多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	南面径上 3 ~ 14cmと P5 底上 19 ~ 48cmが報告 口5/6周、体3/4周、 底全周 [注記]は左面
17	土師器 杯	口 高 13.5 高 残 8.2	外面体部はナデまたはヘラナデの後に斜一横位ヘラミガキ。内面体部はヨコヘラナデで、頸部はやや強い横位ヨコナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面全体に窪みややや窪みがある。	5Y8/6 橙 やや暗黒 赤黒一細粒や多、白・黒・透明細粒少 硬質	南面径上 2cm 口5/12周 104
18	土師器 杯	口 13.3 高 8.3 底 6.2 重 残 319	外面頸部に横溝が若干残存。外底面は丁寧なナデで仕上げ状。内外面ともに体部ヨコナデ、口一辺部ヨコナデ。外表面一辺部の全体に窪みや明らかな窪み。外底面は窪みややや赤褐色。 [注記] I14、I29、I30、I39、P5-1周、P5-2、南東	10Y8/7/3 に近い黄緑 やや暗黒 白・黒・透明細粒少 やや硬質	南面径上 4.8cmが報告 口3/4周、体部は正位 周 [注記]は左面
19	土師器 杯	口 10.9 高 7.7 底 3.4 最大 11.2	薄く軽い。外底面はナデで平底。外面胴部ナデ後に体部ヨコヘラズリ。内面体部ナメヘラズリ後に下半部を縦一斜位ヘラズリ。内外面の口一辺部をヨコナデ。残存重量 171.2g。	10Y8/7/3 に近い黄緑 やや暗黒 白・黒・透明細粒少 硬質	北西面径上 6cm 口3/4周、底全周 6、北西
20	土師器 杯	口 11.3 高 7.5 底 4.1 重 残 237.2	体部が深い。外底面は円筒状の窪んだヘラズリで仕上げ状。外面は体部ナデ後に下位をナメヘラズリ。内面は底部多方向ヘラナデ。体部ナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内外面全体が黒色化している。	10Y8/7/4 に近い黄緑 やや暗黒 白・赤・透明細粒や多、黒・灰・赤・透明細粒少 硬質	北東面径上 5cmで正位 は正位 口11/12周、底全周 45
21	土師器 杯	口 11.2 高 残 9.3 最大 14.3	やや厚くて重い。外面体部上平ナデと下平タテハケ。内面体部は斜一横位ナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面上位に窪みや付着する。欠損している底面は内面に横溝が浅く付着している可能性がある。 [注記] I32、54、55、57、I39、東、1号、一括(東)	5Y8/8 明赤黒 やや暗黒 白・灰・赤黒一細粒や多、赤・黒・透明細粒少 やや硬質	東部径上 3 ~ 18cmが報告 口5/6周、胴2/3周 [注記]は左面
22	土師器 杯	口 高 12.8 高 9.0 底 6.2 最大 13.1	外底面は多方向ヘラズリの後に1方向ナデ。外底面は斜一横位ヘラナデと内面体部にナデの後に、内外面口縁部ヨコナデ。外面は不規則な縦横位が全体に見られる。	10Y8/8/4 淡黄緑 やや暗黒 白・赤・灰・赤黒一細粒多、灰色黒と黒・透明細粒少 やや硬質	中央南寄り径上 7cm 口1/4周、体1/2周、 底全周 59、
23	土師器 杯	口 復13.0 高 残 7.8 底 4.2	体部下位を捨てた。外底面は多方向ヘラズリ。外面体部ナメヘラズリ。内面は底部多方向の窪んだヘラズリ。体部にナメヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。	5Y8/6 明赤黒 やや暗黒 白・赤・透明細粒多、赤・黒・透明細粒少 硬質	南面径上 3cm 口1/3周、底3/4周 112、南東、北西
24	土師器 杯	口 9.2 高 9.8 最大 12.2	外面胴部ナデナデ。外底面は多方向と体部に横位のヘラズリ後、体部ヨコヘラナデ。内面体部ヨコヘラナデと同部ナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内外面口縁部に窪みや少量の保留存。	5Y8/6 明赤黒 やや暗黒 赤・赤黒一細粒や多、白・黒・透明細粒少 やや硬質	北東面径上 8cm 口7/12周、体部は正位 周 29
25	土師器 杯	口 高 9.0 高 7.8 底 4.9 最大 10.1	頸部の角度が場所により異なる。外底面は多方向のヘラズリと浅いハケメでやや下底状にする。外面胴部ナメナデと体部ヨコナデ。下位に浅いタテハケ。下腹に浅いヨコハケ。内面は底部にヨコヘラナデ。胴部ナメナデ。内外面口縁部ヨコナデ。27と同工法。	10Y8/7/4 に近い黄緑 やや暗黒 赤黒一細粒や多、白・黒・灰・赤・透明細粒少 やや硬質	南西面径上 3cm 口1/8周、胴7/12周、 底全周 80
26	土師器 杯	口 復 20.6 高 残 4.5	口縁部が厚くて歪みあり。全体の作りがやや軟。外面体部はやや窪んだデ。外面口縁部と内面を横一斜位のナデ。	7.5Y8/4 に近い橙 やや暗い 白・赤黒一細粒や多、透明細粒少 硬質	南面径上 17cm 口1/5周 145、南東
27	土師器 杯	高 残 3.5 底 5.4	外底面は多方向のヘラズリで深い凹みあり。外面体部はやや浅いタテハケ。内面は多方向ナデで底面中央が最も深く凹む。25と同工法。	7.5Y8/7 橙 やや暗黒 白黒一細粒や多、黒・灰・赤・透明細粒少 硬質	中央部径上 6cm 145、南東
28	土師器 粗粒杯	口 復 6.2 高 残 4.7	外面は体部にタテナデで、粘土層積み面をよく残す。内面はヨコヘラナデで、粘土層積み面を平ら削り残す。内外面の口縁部はヨコナデ。	10Y8/7/3 に近い黄緑 やや暗黒 白・赤・透明細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	南面径上 8cmと南東 口2片が報告 口1/3周、口体1/3周 124、南東
29	土師器 粗粒杯	口 高 14.4 高 残 5.7	体部外面はユビオサエで粘土層積み上げ面を少し残す。体部内面はやや丁寧なナデ。口縁部内外面ヨコナデ。	2.5Y8/3 淡黄 やや暗黒 白・赤・透明細粒一細粒少 やや硬質	北西面径上 17cm 口1/12周、体1/6周 69
30	土師器 高杯	口 復 20.2 高 残 6.2	外面は体部の傾度で調整不明。杯底部に放射状と頸部に縦位のヘラズリまたはヘラナデ。上部も削滅して不明瞭だが、杯体部にナメヘラミガキの痕跡あり。	5Y8/6 橙 やや暗黒 赤黒一細粒や多、白・黒・透明細粒少 軟質	北東面径上 1.2m x 21cm 口5/12周、杯底1/2周 95、38、40、41
31	土師器 高杯	高 残 9.4 脚部 復 14.9	内面は縦溝面を残し、上部ユビナデと下部ヨコヘラナデ。内外面の脚部ヨコナデ。外表面タテハケナデ。後成前に2方向に穿孔し、対面の孔は同径ししたもので10mm位ある。孔縁部はヘラズリナデ。	7.5Y8/5/4 に近い黄 やや暗黒 赤・赤黒一細粒と赤黒一細粒少 やや硬質	中央部径上 17cm 脚部全周、脚部1/36周 59
32	土師器 高杯	口 17.5 高 16.9 脚部 14.6	頸部柱は倒立状態で平均径回りに巻き積みする。外面の杯底部と頸部下位に放射状のウケケリ後ナデと脚部ヨコナデ。外底面は多方向ヘラズリ後タテヘラミガキ。杯部は口縁部ヨコナデ後に外面ナメヘラミガキ。内面は横一斜位ヘラミガキ。	7.5Y8/7 橙 やや暗黒 黒・透明細粒と白・透明細粒少 やや硬質	P5 底上 19cmで斜位 口全周、脚部2/3周 55、56、1、南東
33	土師器 高杯	高 残 3.0 脚部 復 18.0	脚部外面に3面削の段差を作る。外面はヨコナデ後に横一斜位ヘラミガキ。内面はヨコナデで、積み上げ止まりがある段状部にはナメナデ。内面全体に窪みや付着する。	10Y8/7/4 に近い黄緑 やや暗黒 白・赤黒一細粒と白・透明細粒少 やや硬質	南西面径上 10cm、南東 部に7片あり 脚部1/5周、81、南東
34	土師器 高杯	高 残 7.4	外面は赤なタテヘラミガキ。内面は倒立状態で反時計回りに巻き積み面を少し残し、下部はヨコナデ。上部は特殊な器具によるタテナデ。	7.5Y8/6 橙 やや暗黒 白・赤黒一細粒や多、赤・透明細粒少 硬質	北西面径上 12cm 脚部全周 2

第5章 権現山遺跡 SG10 区

35 土師器 高杯	口 復 15.8 高 13.8 脚脛 15.2	外面は杯部にヨコヘラミガキ。杯底部に放射状のヘラナデ(ヘラケズリ)で、脚部にタテヘラケズリ後タテヘラミガキ。底部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。脚内面には横状並で反時計回りの巻き絡み痕を現し、ユビオサエと底部ヨコナデ。杯内面は上側にヨコヘラミガキが幅がわずかに残り、下は調整不明。	5YR5/8 明赤褐 やや緑っぽい 白・赤黒～緑黒と黒・透明細粒少 やや破質	底部径 20cm。北東隅径 15cmの1片も接合口1.5cm。杯底1/2周。脚全周。底2/3周。31。	
36 土師器 高杯	高 残 2.9	外面は杯底部に放射状のヘラナデ後、外周をヨコヘラケズリして杯体部分にタテヘラミガキ。内面は杯底部に多方向のヘラケズリ後ヘラミガキ。杯底部はナデ後にナメヘラミガキ。	5YR6/6 橙 やや緑っぽい 赤黒～緑粒多、白細粒少 やや破質	内径開口径 8cm。杯底径 11.6cm。脚 3/4 周 77	
37 土師器 高杯	高 残 10.0	脚柱部の巻き絡み方は不詳。外面は杯体部分ナデ後タテヘラミガキ。杯底面放射状のヘラケズリ。脚柱部タテヘラミガキ。内面杯底部に多方向ヘラミガキ。内面脚柱部ナメナデ。	5YR6/6 橙 緑っぽい 白・透明細粒と赤黒～細粒少	中央部径上17cmと南東部径上20cmの間に杯底径1.8cm。杯底1/2周。脚全周。底2/3周。31。	
38 土師器 高杯	口 復 18.8 高 残 3.9	外面にヨコヘラミガキと内面にやや複雑なナメナデの後、内外面口縁部ヨコナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや緑っぽい 白・赤黒～緑黒と黒・透明細粒少 やや破質	北部径 15cm 口1/6周 20	
39 土師器 高杯	高 残 9.6 脚脛 復 14.6	外面は杯底部に放射状のナデ。脚柱～底部にタテヘラケズリ後タテヘラミガキ。杯内面は底部に多方向ナデ。脚柱部内面は紋り目状の痕を多く残す。脚柱部内外面ヨコナデ。	5YR7/6 橙 やや緑っぽい 白・赤・黒・透明細粒～細粒やや少 やや破質	中央南東部径上4cmで横伏。北東・北西・東の各1片も接合。脚柱全周。脚脛1/6周。101。北東、北西、東	
40 土師器 小形壺	底 復 3.7 最大 復 9.4	横線を作り、外底面は凹み状。外面肩部分ナデ後、外面全体合体外底面に1丁で穿たれたヘラミガキ。内面は体部ナメヘラナデ。肩部ユビオサエ。	10YR6/3 に近い黄褐色 やや緑っぽい 灰色細粒と白・黒・透明細粒少 やや破質	10YR6/3 に近い黄褐色 やや緑っぽい 白・赤・黒・透明細粒と白・黒・透明細粒少 やや破質	中央部径上1.4cmで横伏。北東・北西・東の1片も接合。脚柱全周。脚脛1/6周。101。北東、北西、東
41 土師器 小形壺	口 11.8 高 13.0 底 復 3.9	外底面は少し狭るようなヘラケズリで、凹み状にした後、斜にナデ。外面は体部にナメヘラミガキの後、上半部ナメヘラナデ。内面は杯底部に1方向ナデ。脚部にヨコおよびタテヘラミガキ。肩部は外面に縦位と内面に横位のヘラケズリ。口縁部内外面ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緑っぽい 赤・白細粒～細粒多、赤・黒細粒少 やや破質	南部径上16cm 口1/12周。体全周 100	
42 土師器 短頸壺	口 復 10.9 高 3.9	内外面の肩部ユビオサエと頸部ヨコヘラナデ。内面口縁部と外面口～肩部ヨコナデ。	7.5YR4/2 灰青 やや緑っぽい 赤・白細粒～細粒やや少、黒・透明細粒～細粒少 破質	南東部 口1/6周。肩1/4周	
43 土師器 壺	高 残 9.9 最大 復 14.4	底部破片が小さく体部に接合できないので、体部の高さは想定。外底面は1片だけヘラナデ。体部は内外面ともにナメヘラナデ。 [注記1144, 南, 東, 南一(東), A, D, L, 北西, 南東1層]	7.5YR7/3 に近い橙 やや緑っぽい 赤・白細粒～細粒やや少、黒・透明細粒～細粒と灰色細粒少 やや破質	南部径上17cm。東部4片と南東部1片が接合口。北西にも6片あり。頸1/3周。注記は左欄	
44 土師器 壺	口 17.3 高 残 6.6	口縁部はごく鋭く受口口にする。内外面の口～肩部ナメナデ後、外面製成部に縦位のやや強いヘラナデが、頸部の途中まで反入している部分がある(頸の外表面)。	5YR6/6 橙 やや緑っぽい 白・黒・透明細粒～細粒と赤黒～細粒少 やや破質	南東部径上3cm 口～頸全周 121	
45 土師器 壺	口 復 17.4 高 6.5 最大 復 17.6	頸部下端で欠損する。外面は頸部ナメヘラ後後にナメナデ。その後には内面を1丁目にしてヨコナデ。内面口1丁上ヨコナデし、口縁部はかすかに内面を1丁する。	7.5YR7/4 に近い橙 やや緑っぽい 白・透明細粒多、白細粒～細粒少 やや破質	内径上5cm。SI-15に2片混入。口1/2周。SI-14, 15, 16, 17, SI-15, 34, 北東	
46 土師器 大形壺	口 復 25.9 高 残 14.3	外面肩部分ナメナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。内面頸部は顔面が割れて調整不明。胴が8片あるが、復原・図示できない。 [注記 JS-16 33, 116, SI-30 42, 128, 東 16層, 南西 2層]	5YR6/8 橙 やや緑っぽい 黒・透明細粒～細粒多、白・灰色細粒～細粒少 やや破質	南東部径直上。北東部にも1片。SI-30の北西面上16cm。胴破れ底上径16cm。頸径は7.7cm。口1/3周。胴5/12周。注記は左欄	
47 土師器 大形壺	高 残 4.2 底 6.7 最大 復 14.4	外底面は多方向ヘラケズリでやや上げ底。外面下端部ナデと胴部タテヘラナデ。内面多方向ヘラナデ。	7.5YR6/6 橙 やや緑っぽい 白・透明細粒～細粒多、黒・透明細粒～細粒少 やや破質	南東部径直上24cm 底全周 129	
48 土師器 大形壺 または壺	高 残 3.4 底 復 8.4	外底面は多方向に斜にヘラケズリする。外面頸部ナメヘラナデ(一部ケズリ)。内面底部多方向ヘラナデ。蒸熱は見られない。	7.5YR7/8 黄褐色 やや緑っぽい 白・透明細粒～細粒多、赤・黒細粒少 やや破質	中央南東部径直上3cm 底1/3周 102	
49 土師器 大形壺	高 残 1.9 底 7.0 最大 復 9.5	外底面は多方向ヘラケズリで丸みを付つ。外面頸部下端にやや複雑なナデ。内面は割落して調整不明。	7.5YR6/6 橙 やや緑っぽい 白細粒～細粒やや少、黒・透明細粒少 やや破質	中央径上16cm 底全周 74	
50 土師器 壺	口 復 17.8 高 残 5.3	外面肩部分ナメナデ後、口縁部ヨコナデ。内面は肩部に軽いナメヘラ(台)後ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/4 に近い橙 やや緑っぽい 白・赤・透明細粒～細粒やや少、黒細粒少 破質	南部径上19cm 口1/6周。肩 1/4周 132	
51 土師器 壺	口 復 16.1 高 残 4.7	内外面の肩部分ナメヘラナデ。外面は口縁部ヨコナデで、外面上端を狭い幅で少し狭くナデ。内面は口縁部ナメナデ。	7.5YR7/6 橙 やや緑っぽい 白・赤黒～細粒やや少、黒・透明細粒少 やや破質	南東部径上4cm 口1/12周。肩1/3周 151	
52 土師器 壺	口 復 14.0 高 残 11.1	外面は肩部分ヨコナデ。内面は肩部分ナメナデ後に少しタテヘラケズリ。内外面の口～頸部ヨコナデ。外面全面に縦位の痕。	2.5YR3/3 に近い黄褐色 やや緑っぽい 白・黒・灰色～半透明細粒～細粒やや少 やや破質	中央南東部径直上2cm 口1/2周。肩1/3周 92, 東	
53 土師器 壺	高 残 11.5 底 6.2 最大 復 26.0	外底面は多方向ヘラケズリで幅広い内面。内外面ともに斜に横位ヘラナデ後、横伏し片状の厚くなった部分でなめらってナメヘラケズリ。外面の底部とその周辺が横伏赤土。胴部に僅か少量付着。 [注記 J24, 27, 28, 126, 129, 南東, 北東, 北西]	7.5YR4/4 黄 緑っぽい 白・赤・灰色細粒～細粒多、黒・透明細粒～細粒多 やや破質	南部と唇部の径上24～31cmが接合。北東部径上12～13cmの北西面に小片あり。胴下平1/3周。底3/4周。注記は左欄	
54 土師器 壺	口 復 17.4 高 残 28.3 底 復 7.4 最大 28.6	外底面は横な多方向ヘラケズリ。外面製成は縦～斜位のヘラナデ後ヘラケズリ。内面は底部多方向ナデ。頸部ヨコヘラナデ。肩部は時計回りの縦絡み痕を現しながらユビオサエ。口～頸部の内外面にユビナデ。外面の下位～底部が蒸熱し、中位以上に縦位の痕。 [注記 J32, 33, 40, 72, 73, 90, 105, 116, 東一, 北西]	10YR7/4 に近い黄褐色 やや緑っぽい 白・黒・灰色細粒～細粒やや少、赤・透明細粒～細粒少 やや破質	注記は左欄 1丁上径直上1.5cm。中央部径上10～14cm。南東土柱穴径上66cm。SI-14・15にも混入。口～頸1/3周。底5/12周。注記は左欄	
55 土師器 壺	口 復 16.1 高 残 3.6	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面は顔面が薄く剥落している。	5YR6/8 橙 やや緑っぽい 赤黒～細粒多、白・黒細粒～細粒と透明細粒少 やや少 やや破質	北西径上11～26cm 口5/12周。頸3/4周 11, 13	



第33図 権現山遺跡 SG10区 SI-16(3) 遺物

56 土師器 甕	口 径 19.2 高 26.5 底 6.8 最大 26.3	外底面は1方向へラケズリで凹み状。外面胴部はヘラナデ後にナメヘラケズリ。内面は底部に多方向胴部に傾位のヘラナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。外面は胴下位～底部が強く焼熟し、それより上方は窯が付着して口～胴部には吹きこぼれた流れの痕が見える。内面は下位にコウ釉が付着。 [注記]SI-16 4、5、SI-14 15、131、東、Aトシ、南西、一拵(東)	10YR3/1 黒褐色 粗粒。白塵～細粒多、赤・黒・透明細粒少 やや軟質	北西部床土14cm、中央北寄りや東部に小片あり 口1/2周、胴7/12周、底全周 注記は左欄
57 土師器 甕	高 残 3.0	外底面は多方向へラケズリで凸面状にする。外面胴部にヨコヘラケズリ。内面は底部中央を凹ませようとする少し強いヘラナデと、体部に傾位ナデ後タテヘラナデ。焼熟痕の有無は不詳。	10YR3/2 灰黄褐色 やや粗い。白・灰色塵～粗粒多、赤・透明細粒～粗粒と黒塵粒少 硬質	北東部床土13cm 底全周 32
58 土師器 小形甕	高 残 3.9 底 残 3.8	底面の一孔は、孔端面を斜ナデ。外底面は1拵なナデ、外面の体部はナメヘラナデ。内面底面は多方向ヘラナデ。孔径1.6～1.8cm。	10YR7/4 に灰・黒塵粗粒 やや粗い。白塵～粗粒多、赤・黒粒～粗粒少やや硬質	南部床土28cm 底1/2周 131
59 土師器 小形甕	高 残 2.8 底 6.2	底面の一孔は内面側から棒状工具で穿孔し、中心からずれている。外底面はナデ。外面体部はナメナデ。内面底面は多方向ヘラナデ。孔径1.2～1.4cm。	10YR8/3 浅黄褐色 粗粒 白・透明細粒少 やや硬質	東部床土25cm 底全周 108
60 石 石 石	長 残 4.6 幅 残 3.4 厚 残 1.6	極めて多孔質で、いわゆる「軽石」状の石材。水には浮かない。図示面の中央部を使用したと見られる。石材が粗いので磨削痕は不明。図示面の裏側と外周全体が破面。接合できない3片が出土したうち、最も大きな1片を掲示した。重量17.5g。	5Y4/1 灰 多孔質安山岩の磨削 やや軟質	北中央部階床土10cm 1面だけ残存 7
61 石製模造品 石孔円板	長 2.13 幅 1.99 厚 0.36	両面はそれぞれほぼ1方向に研削。側面全周は斜位に研削する。特に左側の面は外周寄りに切削痕が見える。孔径は約1.85～1.70cm、孔径1.55～1.70cm。石の両面に穿孔跡を広く生じる。重量2.7g。	N3/0 硝灰 磨削で擦痕の発達した磨石片質	北西部床直土 完形 26
62 石製模造品 刺形石	長 2.9 幅 1.69 厚 0.41 重 2.7	2孔中1孔は貫通しない。背面は2方向、側面は1方向に研削。背面に筋はない。側面は傾位にやや近い傾位に研削し、胴部だけは傾位研削。全周に切削痕を残す。約孔・約孔とも1.50～1.55mmで、途中まで穿孔して隣に開け直し、表面に穿孔跡を生じる。	10Y3/1 オリーブ黒 磨削で擦痕の発達した磨石片質	北西部床直土 完形 3

の北東にあるP8(床面から深さ15cm)は、a～b期のどの時期に伴うかよくわからない。ab期貯蔵穴P5のすぐ南にある柱穴はSI-21に伴うと考えられる(SI-21のP7)。

SG10区SI-18a(第34・35図、写真図版76・191)

【規模と形状】a期は、北壁・東壁と柱穴・貯蔵穴だけを確認した。残存規模は南北5.34m以上×東西4.20m以上で、主柱穴と壁の距離からみると、南北5.8m×東西5.2m前後の規模を推定できる。

a期の主柱穴は4本で、東西に少し長い方形に配置し、柱間は南北2.86m×東西2.75mでほぼ一定している。床面からの深さは北東柱穴P1aと北西柱穴P2aが39cmと42cmで、南西のP3aは浅く(26cm)、南東のP4a・bが深い(62cm)。P4a・bはSI-18のa期とb期の両方に用いた柱穴であろう。南東主柱穴P4はb期と同じ位置で、他の3本を北～西方向に移動してb期からa期の建物へ拡張している。床面からの深さはP1a=44cm、P2a=46cm、P3a=38cm、P4ab=68cm。

a・b期の共用とみられる貯蔵穴P5は東西77×南北70×床面から深さ49cmで、調査開始時名称は「SK-295」としたが、SI-18のa・b期貯蔵穴と判明した。位置から見てc期貯蔵穴と考えられるP6は、a期竪穴と一連の土層で自然埋没した堆積状況なので、c期からa期まで開口していたことも考えられる。その場合、a・b期には貯蔵穴を2基使っていたことになる。SG10区ではSI-6などが複数貯蔵穴を持つ。

【火処】残存していない。遺物からみて古墳中期の建物なので、炬を持っていた可能性がある。

【覆土】遺構の残りが浅いので、1～2層程度を確認しただけである。新时期貯蔵穴P5の土層に含む白色軽石粒は、古墳時代テフラの可能性もある。6層は、貯蔵穴P5・P6よりも古い層であるように図化・記録されているので、6層も貼床の可能性があろう。

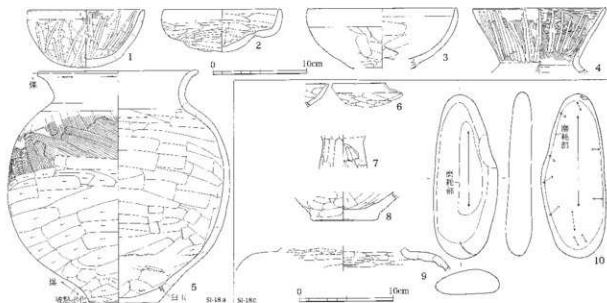
【遺物出土状況】a・b期の貯蔵穴P5内に完形の土師器甕がある。P5の北方にも遺物が少しまとまる。

【出土遺物】1～5がSI-18aの遺物である。杯は深身のもので、2も本来は深いとみられるが乾燥時に変形した器をそのまま焼成した不良品。5は甕の底付近に滑石製白玉1点があり、土器成形時の粘土中に混ざったものである。SG10区SI-30などに滑石製の玉がある。図示以外の土師器合計119片・970gの内訳は、杯37片・191g、高杯5片・66g、壺甕類77片・713g。

SG10区SI-18b(第34図、写真図版76)

【位置】SG10区SI-18aと同じ。

【規模と形状】b期の規模は、主柱穴から壁までの距離を1.1m程度と仮定すると、一辺4.7m前後が想定さ



第35図 権現山遺跡SG10区SI-18a・b・c(2)a-c期遺物

第21表 権現山遺跡 SG10 区 SI-18a 出土遺物

番号 種類 種類	大きさ 約・型	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高杯	口 径 12.2 高 6.1	体～底部の境は内外ともに不明確。外面は底部に1方向と体部に斜～横位のナデナデ、口縁部コナデと体部ナメハラミガキ。内面は横～斜位のナデナデと一部にハケメ後、底部に多方向と体部に横位のヘラミガキ。 [注記] 11、5 付添出土、カマド近辺	25YR5/8 褐色 やや軟質 白・黒粒～細粒 やや軟質 やや硬質	南東部床土4～10cmが 接合 口～体1/2周、底5/6周 注記は左欄
2 土師器 高杯	口 径 12.2 最大 12.7	全体の仕上げが粗く、底部は多少で突出した丸底。本底はより深い形を製作したが、中位部分が段状に垂れ下がり、補正できなかったと見られる。外面は体部ナデナデに口縁部コナデと体部上蓋コナデ。内面は体部が土ナデで、口縁部はやや雑なコナデ。 [注記] 図185、8、9、5付添、8付添、図21カマド、カマド近辺	25YR6/8 赭 やや軟質 赤・黒粒～細粒と 白細粒少 やや軟質	南東部床土7～10cm、 SI-21 掘入の2片も接合 口～体3/4周、 注記は左欄
3 土師器 土師杯	口 径 15.6 高 残 6.4	残存部が少ないので復原性は参考程度。外底面は緩い凸面状で、縁なナデまたはヘラナデ。外面体部ナデ、内面体部ナメハラナデ。内外面口縁部コナデ。	10YR7/6 明褐色 やや軟質 赤粒～細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや軟質	口1/8周、底1/4周 SI-18 一括
4 土師器 小形壺	口 径 14.0 高 残 7.0	外面前面は残存部がわずかで、ハケ後ヘラミガキの可能性あり。頸部は外面タテハケ・内面ナメハケ後、口縁部をコナデするが、内面側ではごく弱い。内外面にやや密なタテハラミガキ。	10YR7/4 に近い黄褐色 軟質 赤・黒・透明細粒～細粒 と白細粒少 硬質	南東部床土2cm 口1/6周、頸1/4周 SI-21 4
5 土師器 甕	口 径 17.0 高 24.6 底 7.1 最大 23.3	外面前面はほぼ1方向ヘラナデ。外面前面に浅いイケと頸下付ナデ後、胴部は色コナデナデ。内面は胴下付に繋ぎ上げ体止面を視し全体をコナデする。内外面の口～頸部コナデ。断面面に記入した位置に滑石製玉が1点。他底前上蓋和または埋入(径約4mm、高さ約3mm)。外面底部が強く焼熟し、口～頸部は窯が多く残る。	10YR7/4 に近い黄褐色 軟質 透明細粒～細粒多、 白・黒・赤粒～細粒少 やや軟質	西側階床土11cmで斜 位ぼり 口11/12周、底全周 SI-295 2

れる。b期の遺構は、主柱穴4本と、北東主柱穴P1bの東にある間仕切溝を確認した。貯蔵穴と南東柱穴P4はa期と同じ場所を用いたと考えられる。柱間は南北2.50×東西2.45mであるが、北西柱穴P2bだけは少し内側にある(P1b-P2b間が東西2.20m)。P1bの東側に附随する間仕切溝D1は長93×幅19×深さ3～6cmで、a期には埋め戻されていた可能性が高いが、a期床面でプランを確認できた。この溝の東端がa期の壁近くまで伸びているので、b期の東壁はa期とほぼ同じ位置、つまり東側柱穴から1.1～1.2mほど東側にあつたと推定できる。床面からの深さはP1b=36cm、P2b=61cm、P3b=58cm、P4b=68cm。

[火処] 残存していない。 [出土遺物] b期の遺物はない。

SG10 区 SI-18c (第34・35図、写真図版76・77)

[位置] SG10 区 SI-18a と同じ。

[規模と形状] b期へ拡張する前の、最も規模が小さい時期の建物である。c期の規模は、主柱穴から壁までの距離を1.0m程度と仮定すると、一辺3.9～4.0m前後が想定される。c期遺構は、主柱穴4本・東側補助柱穴1本(P7)・東側柱穴P4cとP7の東にある間仕切溝各1本(D2とD3)・貯蔵穴1箇所(P6)を確認した。柱間は南北1.90×東西2.03mである。P4cの東側に附随する間仕切溝D3は長73×幅12～18×深さ4～5cm、P7の東側に附随する間仕切溝D2は長94×幅20×深さ6cmで、貼床除去後を確認した。これらの溝の東端がa期の壁近くまで伸びているので、c期の東壁もa期とほぼ同じ位置、つまり東側柱穴から1.0mほど東側にあつたと推定できる。位置からみてc期貯蔵穴と考えられるP6は東西65×南北63×床面から深さ45cm。ただし、貯蔵穴P6がa期竅穴と一連の土層で自然埋没しているという所見を重視した場合は、c期からa・b期まで開口していた(つまりa・b期には貯蔵穴を2基使っていた)ことも考えられる。床面からの深さはP1c=34cm、P2c=38cm、P3c=33cm、P4c=46cm、P7=25cm。

[火処] 残存していない。

[遺物および出土状況] c期貯蔵穴であるP6に遺物が少量ある。6～10がSI-18cの遺物である。7は胎土に混和した植物繊維の圧痕や炭化物が残る。8は底面もふくむ外面全面に煤が付く。10は緻密で硬質なホルンフェルスの砥石で、SG10 区ではSI-12などに例がある。図示以外の土師器合計17片・214gの内訳は、杯5片・15g、高杯4片・52g、壺甕類8片・147g。

第22表 権現山遺跡 SG10 区 SI-18c 出土遺物

番号 種類 種類	大きさ 約・型	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
6 土師器 高杯	口 径 16～20 高 残 2.5	口縁部が溝くちあんでいるので正確な径を復原できない。外面杯体部ナメハラナデ後に内外面に口縁部コナデ。内面杯体部ナメハラナデ。	5YR7/4 に近い黄褐色 やや軟質 赤粒～細粒多、白・ 黒・透明細粒～細粒少 やや軟質	東側階床内 口1/8～1/12周 SI-18 貯蔵穴一括

7 土師器 高杯	高 残 3.5	外面は上部タテナゲ後、その少し下方をタテヘラナゲ。胴は倒立して成形し、内面を斜射状のユビナゲ後に2段目を積み上げて鍔なナメナゲ。胎土に混和した植物質の土層や炭化物がよく残る。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤黒～黒粒やや多 白・黒・透明細～黒粒と植物 繊維少 硬質	竪穴蔵穴内 胴柱1/2周 SI-18貯蔵穴一括
8 土師器 甕	高 残 3.1 底 7.1 最大 11.0	円筒状に突出した外面は主に1方向のヘラケズリ、外面胴部ナメナゲ。内面底部はおおむね斜射状のヘラケズリ。底面を含む外面全体に多量の炭が付着。	10YR7/4 赤い黄褐色 やや粗い 白・黒粒～黒粒と 赤・透明細少 やや硬質	竪穴蔵穴内 底上10cm 底全面 6
9 土師器 大甕 残片(覆)	高 残 2.5 最大 12.7	外面は胴部ヨコヘラナゲ後、頸部ヨコユビナゲ。内面はヨコユビナゲで、胴部に粘土層を残す。組織は上から見て時計回り方向に巻き上げる。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや粗密 白・黒粒～黒粒と 赤・透明細少 やや硬質	竪穴蔵穴内 胴1/4周、胴1/6周 SI-18貯蔵穴一括
10 石器 砥石	長 17.2 幅 6.8 厚 2.6	縦長くて扁平な自然の河原石をそのまま利用、両示した磨面がかなり平坦に磨耗し、ごく弱い光沢を生じている。右側の面のはうがより平坦で、使用していた磨面も広い。	7.5Y5/2 灰オリーブ 5GY3/3(緑灰色)の硝あり 非常に粗密で硬質なホルンフェ ルス	竪穴蔵穴内 底上16cm 完全形 7

SG10区 SI-19a・b (第36・37図、写真図版77・192)

【位置】 SG10区南部の17-16および18-16グリッド。同じく古墳中期の建物は北にSI-18(a・b・c)、東にSI-16がある。古墳後期のSI-20、古墳時代のSK-94・95・456および時期不明のP-445に切られる。古墳時代のP-469・470を西壁付近で切る。古墳中期のSI-19(b→a)→後期のSI-20→SI-21の順に重複する。

【遺構名の対応】 現地調査時にはSI-19と呼称した遺構で、旧期をSI-19b、新期をSI-19aに整理・改称した。調査時名称の「SI-93・96」と「SK-117・444」をSI-19の一部として吸収・統合した。旧期(SI-19b)の貯蔵穴P7は調査時名称が「SK-117」、SI-19a・19bの柱穴P2は調査時名称が「SK-444」、SI-19南半の床面がやや高い部分(入口施設の盛土部?)は調査時名称が「SI-93」、炉3の調査時名称は「SI-96」である。

【規模と形状】 炉が3基、貯蔵穴が2基あるので、2時期の建て替えを推定した。ただし、柱穴の建て替えは認められない。炉3箇所のうち、被熱礫2点が残されていた炉3を最新期(SI-19a)の炉と考えた。

建物はわずかに南北に長い形で南北7.16m×東西6.68m。南北方向の中軸線はa期・b期ともにN-7°-W。残存壁高は最大23～26cmで、北西部では低い(7cm)。南西隅は二段状に凹凸されていて、建替を反映する可能性もあるが確定ではなく、外側の段は調査時に誤って掘りすぎた疑いも残る。貼床はローム塊を主体とする黄褐色土である。

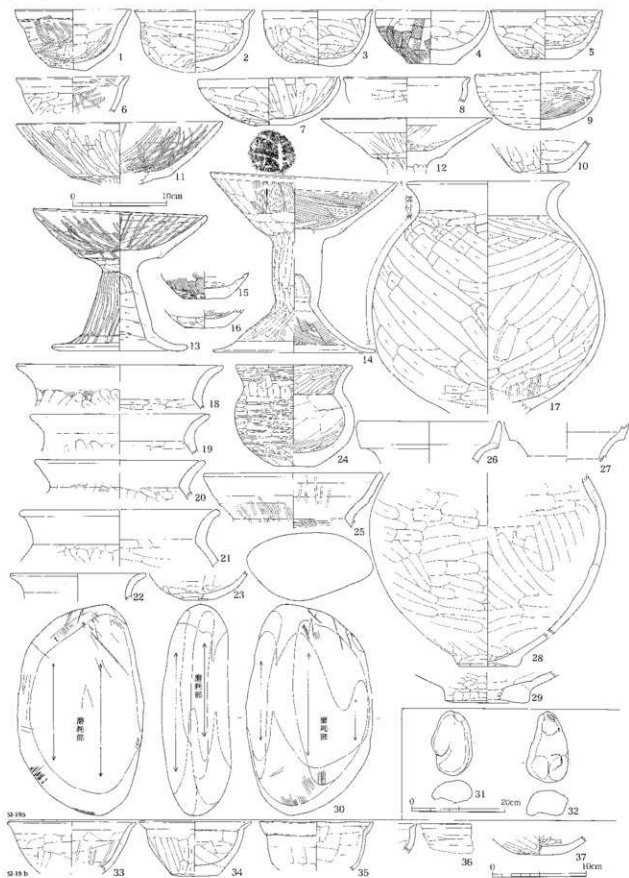
主柱穴はP1～P4で、床面からの深さは約60cm(58～64cm)。南北の柱間は3.54mで、東西の柱間は3.62m(南側)～3.84m(北側)。南西柱穴P3の東側に補助柱穴P6があり、床面からの深さは32cm。確実な壁溝はないが、床面から深さ9～10cmの溝D1を、北西壁から南へ約20cm離れた位置で貼床除去後に確認した。拡張前の周溝を埋め戻したのかもしれないが、ごく一部だけなのではっきりしない。間仕切溝はD2・D3の2箇所、幅13～15cm・床面から深さ6～10cm。北西柱穴P2の北側で貼床除去後に確認した間仕切溝D2の南部では掘方底よりも溝が浅くなるので、掘方底に附属する溝ではなくて床面から掘った溝と考えられる。南西柱穴P3の西側では間仕切溝D3を床面で確認した。

【貯蔵穴】 新旧の2時期と考えられる2箇所の貯蔵穴がある。南東隅にある新期(SI-19a)の貯蔵穴P5は東西109×南北97×深さ32～42cmで、竪穴部と一緒に自然埋没する(貯1層～貯4層)。西へ75cmのところにある旧期(SI-19b)の貯蔵穴P7は東西52×南北46×深さ25cmで、覆土上半部の記録はないが、覆土下半は自然埋没状の堆積である。貯蔵穴が複数ある建物跡は、SG10区ではSI-6などがある。

【炉】 3箇所ある。東側にある炉1(長51×幅47×深さ9cm)と、そのすぐ西にある炉2(長48×幅44×深さ6cm)が、先行するb期1と想定されるが、確証はない。北側にある炉3(長54×幅39×深さ3cm)には被熱礫が2点残されていたので、これを新期(a期)の炉と想定することもできる。

【覆土】 自然埋没である。新期のSI-19a貯蔵穴P5が竪穴部と一緒に自然埋没した状況がよくわかる(断面B-B')。別の建物が重複している可能性が調査時に考えられた土層があるが(旧名称SI-93・94)、独立した竪穴や柱穴が認められないのでSI-19の覆土に統合して扱った。「SI-93」はSI-19南半の確認面がやや高い部分である(1'層および1''層)。

【遺物出土状況】 新期のSI-19aに伴う遺物は建物全域にあり、残存度の高い遺物は南東隅の貯蔵穴P5東側に最も多い。倒立した完形の土師器甕(17)がほぼ床面にある(東西断面A-A')。旧期(SI-19b)の貯蔵穴



第37図 権現山遺跡SG10区 SI-19a-b(2) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

【出土遺物】内斜口縁の椀形杯が多い。7は初期模倣杯の可能性があり、木葉痕を残す。14は仕上げが難な高杯で、杯底部に生じた亀裂を補修はせず、仕上げ調整をやめた不良品かもしれない。補修痕のある土師器はSG10区 SI-6などにある。13は脚が少し短い。25～27のような受口状の壺は、SG10区 SI-19a・25・50・64a・66・80・88・101と中世井戸 SE-569 混入品、SG5区ではSD-227などにある。SG10区 SD-43の壺も弱い受口状だが、種類が少し異なる。20・27・28は被熱痕や煤が不規則である。図示以外の土師器合計404片・4,484gの内訳は、杯218片・1,224g、高杯13片・213g、小形壺13片・134g、壺蓋類158片・2,902g、甗2片・11g、30は緻密・硬質なホルンフェルスの砥石で、SG10区 SI-12などに例がある。

SG10区 SI-19b 出土遺物 (第37図33～37)

竪穴部や柱穴はSG10区 SI-19aと同様で、貯蔵穴と炉が複数あることからb期を認定した。遺構の詳細はSG10区 SI-19a・SI-19bの項で説明した。旧期(b期)のSI-19bに伴う遺物は、b期の貯蔵穴P7から出土した。内斜口縁の椀形杯は、SI-19aと同様にやや開いた形である。35は貼付口縁の杯。図示以外の土師器合計39片・375gの内訳は、杯5片・13g、高杯3片・46g、壺蓋類31片・316g。

第23表 権現山遺跡 SG10 区 SI-19a・b 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ H・D・形	特 徴	色調 胎土・顔料 (または素材)	出土状況 発見状態 注記
SI-19a 出土遺物				
1 土師器 杯	口 12.2 高 6.2 底 4.9 重 2.18g	外面は体部ナデ後に体部下端ヨコヘラズリ。外底面は多方向ヘラズリ。内面は体部ヨコヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内外面の体部に不規則でやや縮むヘラミガキがある。	7.5YR7/6 橙 やや黄緑 白・黒・透明黒 細粒やや多。白・灰色塵少 やや軟質	南東部床土4cm ほぼ完形 口全周、底全周 37
2 土師器 杯	口 12.5 高 6.6 底 4.9 重 2.621g	外面体部はナメヘラナデで、底面はヘラズリ。肩付近に線ならぬコホラミガキ。内面体部にヨコヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。外面体部のほとんどが黒。外底面は割断痕を留めていて、焼成時に割がされた可能性が高い。	10YR8/4 浅黄緑 赤・黒相-細粒少 やや軟質	貯蔵穴上23cm 口1/2体全周 27
3 土師器 高杯	口 11.6 高 5.8 底 4.6	外面は口縁部ヨコナデと体部ナデ後に下部ナメヘラズリ。外底面は上1方向のヘラズリで、肩に残して高くなった部分も見られる。内面は体部ヘラナデと口縁部ヨコナデの後に、底面に多方向と体部に斜位のヘラズリがある。	5YR6/8 橙 細密 白細粒やや少、灰色塵 少 白・黒相-細粒少 硬質	南東部床土11cm 口3/4周、底5/6周 29
4 土師器 杯	口 11.8 高 5.7 底 4.8	外面は体部ナデ後に浅いタテハケ。外底面はナデ。内面は体部ヘラナデ後にナデ。内外面口縁部ヨコナデ。残存重量201.0g。	10YR7/4 に近い黄緑 細密 赤相-白・黒・ 透明黒粒少 やや軟質	貯蔵穴上30cm ほぼ完形 口全周、底全周 25
5 土師器 杯	口 11.8 高 5.1 底 5.5 重 2.190g	底が厚くてやや重。外面は体部ナデと口縁部ヨコナデの後に体部ナメヘラズリ。体部下端ナメヘラズリ。外底面1方向ヘラズリ。内面は口縁部ヨコナデと口縁部放射状ヘラズリと体部を横-斜位のヘラズリ。	5YR6/6 橙 やや粗い 白相-細粒やや少 赤・黒・透明黒-細粒少 硬質	貯蔵穴上12cm ほぼ完形 口11/12周、底全周 24
6 土師器 杯	口 12.0 高 5.8 底 3.8	内外面口縁部ヨコナデ後に外面体部ヨコヘラズリ。内面の体部に多方向と口縁部に横位のヘラミガキ。	5YR6/8 橙 やや黄緑 白・透明黒-細粒 やや少 赤・黒相-細粒少 やや軟質	貯蔵穴上高い部分 (旧称 SI-93) 口1/2体1/4周 SI-19-93一括
7 土師器 杯	口 14.9 高 4.9 底 4.2 最大 15.0	外面は本葉の裏面圧痕。外面は口縁部ヨコナデ後に体部下段ヘラズリと上段ヘラナデ。内面は口縁部ヨコナデ後に体部多方向と体部斜位のヘラズリ。重さ224.5g。	10R5/6 赤 やや黄緑 白細粒多。白濁と 黒・透明黒-細粒少 硬質	貯蔵穴上12cm 完形 26
8 土師器 杯	口 13.3 高 5.8 底 2.8	外面口縁部と内面をヨコナデ。外面体部はヨコヘラズリの可能性あり。表面が磨耗して裏面形状が不明確。ミガキの有無は不明。	10R5/4 赤黒 やや黄緑 赤相-細粒やや少 白・黒・透明黒粒少 軟質	口1/4周 SI-19一括
9 土師器 杯	口 13.3 高 6.1 底 3.5	外底面はおおそくヘラズリで凹み状。内外面口縁部ヨコナデ後に外面体部ヨコヘラズリ。内面は下位に斜位状と中位・横位のヘラミガキ。底面は口縁部まで外面全体に横く磨耗がある。	2.5YR6/8 橙 やや粗い 灰 白色の土 白・黒相-細粒と赤 相粒少 やや軟質	床土15cm(51)貯蔵 穴の上方10cm 口1/4周、底全周16
10 土師器 高杯	高 5.3 底 5.3	外底面は1方向ヘラズリで中央が少し凹む。外面体部タテヘラズリ。内面は底面に1方向(向)と体部に横位のヘラナデ。	7.5YR6/4 に近い黄 粗い 白濁と赤・白相-細粒 少 やや軟質	床1/3周 SI-19一括
11 土師器 高杯	口 21.8 高 6.6	外面は口縁部ヨコナデ後、杯底部と杯体部に放射状および斜位状のヘラズリ。内面は体部ナデと口縁部ヨコナデ後、交差する斜位のヘラミガキ。	5YR6/8 橙 細密 白・赤相粒少 やや軟質	中央部寄り床土6cm 口1/2周 41
12 土師器 高杯	口 18.0 高 5.5	外面はタテヘラズリ後に杯部下端ヨコヘラズリ。内面は杯体部ナメヘラズリと下部ヨコナデ後タテヘラミガキ。杯底は外面体部と杯体部はヨコナデと見られるが、両面がわずかなので不明確。 注記 図19.35、42、一拵、胎床中	7.5YR6/4 に近い黄 粗い 赤相-細粒やや多 白・灰色塵-細粒と黒相粒多 やや軟質	中央部寄り床土上。南 東部床土4cmにとも 1片あり 口1/36周。杯底全周 注記は左欄
13 土師器 高杯	口 18.4 高 14.5 脚長 14.4 重 7380g	杯底-脚を黄褐色土で成形後、杯体部を橙褐色の強い土で製作。外面脚部柱土ナデと脚部ヨコナデ後タテヘラミガキ。杯底は外面体部と杯体部はヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。杯体部斜位ヘラミガキ。杯内面は斜位状ナデ後に口縁部ヨコナデ。杯体部タテヘラミガキ。脚部内面は上端をタテナデ後に脚部柱土を積み上げてタテヘラズリ。脚部ヨコナデ。	10YR7/4 に近い黄緑 粗い 赤相-細粒やや多 白・灰色塵-細粒と黒相粒多 やや軟質	南東部床土3cm 口11/12周。脚柱全周、 脚部1/2周 36
14 土師器 高杯	口 19.9 高 18.4 脚長 17.2 重 8370g	外面はナデ後に脚柱-脚部部をタテヘラナデし、杯部と脚部部にはナデ調整。面のタテヘラズリが少しある。脚内面は横-斜位ハタメで、杯底面には1方向の磨きが入っているが、ここに生じている焼成前の亀裂は補修した様子がない。脚内面は斜位状で中実柱状部の上へ反時計回りで巻き積み上げてナメヘラ。口縁部と脚端の内外面はヨコナデがやや軟質で、杯部平面部の赤みが修正されていない。	10YR7/3 に近い黄緑 粗い 赤相-細粒やや多 白・黒と黒・灰色・透明 黒-細粒少 硬質	南東部床土直上で横位 口1/2周全周、脚部 1/2周 32

15 土師器 小形壺?	高 残2.8 底 復4.0	外底面は1方向ヘラケズリ後にナデ、外面体部ナメハケ後に体部下端コホナデ。内面はやや雑なナデ。	7.5Y87/4 にごい・黒粒 やや暗黒 白・赤黒・暗黒 やや多、黒・透明期～暗粒と白 輝少 やや破質	底1/2周 SI-19一括
16 土師器 鉢	高 残1.9 底 4.4	外底面はおそろケズリの後にナデ、外面体部下端コホケラズリ。内面底面はコホヘラナデ後に多方向のやや雑なヘラミガキ。	10Y87/3 にごい・黒粒 やや暗黒 白粒～暗粒やや多、 赤・黒・透明期～暗粒少 やや破質	南東部底上11cm 底1/2周 10
17 土師器 鉢	口 17.2 高 残2.45 肩天 24.5 重 残205	外面は頸部に斜位と下端に横位ヘラケズリ後、頸下端ナデと口縁部コホナデ。内面はナメハケナデ(一部ヘラケズリ)後、頸下端ナデと口縁部コホナデ。内面底面は多方向ヘラナデと雑なナデ。外面下位が少し雑熟し、中位から口縁部まで多く付着する。	10Y87/4 にごい・黒粒 やや暗黒 白・灰色輝～暗粒 やや多、黒・透明期～暗粒少 破質	南部底面上位位で出土 口～胴下平反存 15
18 土師器 甕	口 復22.0 高 残4.7	胴部が薄い。外面は頸部ハケ調整後に口縁部をコホナデしてから頸部ナメヘラケズリ。内面は口縁部コホナデ後に胴部コホケラズリ。	2.5Y85/8 明赤 やや暗、透明期～暗粒と白・ 黒暗粒多、赤・灰色粒～暗粒 少 破質	南東部底直上 口1/24周、頸1/4周 33
19 土師器 甕	口 復19.0 高 残4.3	外面は口～頸部コホナデ後に頸部以下をタテヘラナデ。内面は胴部コホナデ後に口縁部コホナデ。	5Y86/8 暗 やや暗黒 赤・黒暗粒やや多、白・透明 期～暗粒少 破質	南東部底上16cm 口1/6周、頸1/3周 21
20 土師器 甕	口 復18.0 高 4.3	胴部の外面にナメハケと内面にユビナデ後、内外面の口縁部にコホナデ。内外面に不規則な焼熟痕と腐が見られ、腐熟した後に焼熟した可能性がある。	5Y86/8 暗 白・黒・透明期 暗粒少 破質	南東部底上14cm 口1/8周、頸1/6周 28
21 土師器 甕	口 復21.2 高 6.2	外面胴部タテナデと内面胴部ナメヘラナデの後に、内外口～頸部コホナデ。	5Y86/6 暗 やや暗黒 白・黒・透明期～暗粒やや多、 灰色粒～暗粒少 破質	中央底直上15cm 口1/8周、頸1/6周 40
22 土師器 小形壺	口 復14.4 高 残2.7	口縁部内外面にコホナデ。	2.5Y4/1 黄灰 やや暗黒 赤黒～暗粒多、白 粒～暗粒と黒・透明期～暗粒少 破質	口1/6周 SI-19一括
23 土師器 小形壺	高 残3.1 底 復3.0	外底面はおそろケラケズリ後ナデで上底状。内外面に丁寧なコホヘラナデ。	7.5Y86/4 にごい・黒 やや暗黒 白・赤・黒暗粒 やや多、赤暗粒少 破質	南東部底上7cm 底1/3周 44
24 土師器 甕	口 12.3 高 10.5 底 4.2 肩天 12.6 重 残611.0	厚く重い。外底面は1方向ヘラケズリ、外面は胴部タテヘラケズリと体部直下ヘラケズリ後ナデナデ、口縁部コホナデ。胴部と底面以外の外面にやや雑なコホヘラミガキ。内面は体部に斜位のヘラナデおよびヘラケズリ後、下平～底面にナメハケミガキ。口～胴部の内面にコホナデ後、胴～斜位ヘラミガキ。	7.5Y87/6 暗 やや暗黒 白・黒・透明期～ 暗粒多、白・灰色粒～暗粒と赤 暗粒少 破質	南東部底 口5/6周、体～底全周 70
25 土師器 甕	口 復18.5 高 残5.9	口縁部中位で外面に深い凹線を持ち、内面は弱く凹線に割れる。外面は胴部から口縁部までヘラミガキなし。口縁部上平は焼熟してミガキが不明。内面は胴部以下にコホナデ、口縁部はコホナデ後にタテヘラミガキをするが、下平部は焼熟してミガキが不明。	10Y87/4 にごい・黒粒 やや暗黒 赤黒～暗粒と黒・ 透明期～暗粒少 破質	北東部(底上14～6cm) 口1/12周、頸1/6周 58
26 土師器 甕	口 復14.7 高 残4.8	傾斜立ち上がる口縁部外面の下位が弱く凹む。内外面ともにコホナデ。	5Y86/6 暗 やや暗黒 赤・透明期～暗粒やや多、白・ 黒暗粒少 破質	北東部底上4cm 口1/4周 64、一括
27 土師器 甕	高 残4.2	内外面の胴部から口縁部までコホナデ。口縁部外面は強く凹む。現存する上端よりも口縁部は更に長く伸びると思われる。内外面に不規則な腐が付着する。	10Y86/4 にごい・黒粒 やや暗黒 黒・透明期～暗粒 やや少、白・赤・灰色粒～暗 粒少 破質	南東部底直上3cm 底1/6周 54
28 土師器 甕	高 残20.4 底 5.8	突出する上底状で、外底面は外縁を横位、中央を1～2方向ヘラケズリ。外面は胴部から横位ヘラナデと部分のヘラケズリ。外面下位は斜位ヘラナデ。外面は胴部下位が縦位、それ以外は横位のヘラナデ。割れた後に外面が焼熟した腐片が少しあり、腐が外面に付着。 1注記SI-19 30, 50, 65, 69, 南東一括、一括、SI-20 南東一括、SI-93一括	5Y86/6 暗 やや暗黒 白・灰色粒～暗粒 多、赤・黒・透明期～暗粒少 やや破質	中央底上12～13cmと 64、一括、8～10cm、南 東部1片も焼熟 胴部1/4周、底全周 SI-15は54周
29 土師器 大直器	高 残3.3 底 8.9	片板状に突出する底面は中凹み状で中央部に1方向ナデ後、外縁を円筒状のナデ。胴部下位をユビオサエ後に雑なコホナデ。胴部タテナデ。内面はナデと思われるが、胴部が割れて不明。7cmの黒帯が外面に残り、焼熟しているとも見られる。胴部には少し腐もあるが接合できない。	10Y87/4 にごい・黒粒 やや暗黒 黒・透明期～暗粒 やや多、白粒～暗粒少 破質	中央部直上床土19cm 底全周 SI-19 14、一括、腹中 1、SI-93一括
30 石製 碇石	長 22.3 幅 13.4 厚 7.3 重 3144	縦長で断面が扇形形の自然石をそのまま利用。中央部の上下面から両側面にかけたの全周が平削に磨耗する。石による磨耗する範囲を限定した。主に長軸方向に磨耗していると思われるが、石が硬いので推察は不明。	10R62/1 青黒 緻密で硬質な本邦ノルフェルス 石	南東部底上6cm 底全周 67
31 土師器 甕	長 13.4 幅 8.3 厚 4.6	自然磨で、加工・使用痕は見られない。全面がよく焼熟赤化している。磨削したと思われる面もよく焼熟する。重量614.2g	10Y85/1 灰灰 石炭芽石	片面の約1/2が磨削 11片?
32 土師器 甕	長 14.6 幅 8.7 厚 4.8	自然磨で、加工・使用痕は見られない。全面がよく焼熟赤化している。重量824.8g	2.5Y5/1 黄灰 石炭芽石	完形 21片?
SI-19b 土土遺物				
33 土師器 杯	口 復13.6 高 残5.3	体部外面と内面に斜～横位ヘラナデ後、内外面口縁部コホナデ。体部内面に残るタテヘラミガキ。 1注記SI-19 一括、SI-93 一括、SI-117 上平分	5Y87/6 暗 やや暗黒 赤黒～暗粒多、白 粒～暗粒と黒・透明期～暗粒少 破質	野殿穴内上平の4片と 地点不明の3片が接合 口1/3周 注記5は54周
34 土師器 杯	口 復11.8 高 5.8 底 4.8	底部が厚くて体部が薄い。外底面は縦い凸面でも多方向ナデ。外面口縁部にコホナデ後、外面体部タテヘラケズリ。内面は体部に斜～横位ヘラナデ後、口縁部コホナデ。	7.5Y87/4 にごい・黒 やや暗黒 赤黒～暗粒多、白 黒・透明期～暗粒やや少、 赤暗粒少 破質	野殿穴内底直上1.5cm 口1/8周、底全周 SI-117.5、6周
35 土師器 杯	口 復12.0 高 残5.3	非常に薄くて軽い。口縁部に赤みあり。外面体部は下位コホナデと中位タテナデ後に上位から口縁部(胴部)付帯にかけてややコホナデ。内面は体部コホヘラナデと口縁部コホナデ。外面全体に腐が多く付着する。	10Y87/4 にごい・黒粒 やや暗黒 白・赤粒～暗粒 やや少、黒・透明期～暗粒少 やや破質	野殿穴内上平の3片が 接合 口1/4周、頸1/4周 SI-117 上平分
36 土師器 杯	口 復12～15 高 残3.1	薄く軽い。内外面ともに口縁部コホナデ後、体部をコホヘラナデ。	10R6/8 赤黒 やや暗黒 赤黒～暗粒やや少、 白・黒・透明期～暗粒少 やや破質	野殿穴内上平 やや暗黒 赤黒～暗粒やや少、 白・黒・透明期～暗粒少 やや破質 SI-117 上平分
37 土師器 杯	高 残1.9 底 復4.8 肩天 復10.1	外底面は多方向ヘラケズリで縦やや凸面状。外面体部はナメナデ。内面はコホヘラナデ後にやや雑なタテヘラミガキ。	10R5/6 赤 やや暗黒 白・透明期～暗粒 やや多、白粒と黒・灰色粒～ 暗粒少 破質	野殿穴内上平 底1/3周 SI-117 上平分

SG10 区 SI-20 (第 38・39 図、写真図版 77・78・192・193)

【位置】SG10 区南部の 18-16 グリッド。同じく古墳後期の建物は北に SI-21a・21b・22、東に SI-14・15 がある。東・北・南にある SI-16・18・19 は古墳中期。

【重複関係】SI-20 が古墳時代の SK-286 の上部を切り、SK-286 の上を SI-20 の貼床が覆う。古墳中期の SI-19a・19b→後期の SI-20→後期の SI-21a・21b の順に重複する。現地調査時には SI-21→SI-20 の順を考えたが、出土遺物の特徴を考慮して順序を訂正した。SI-20 北西上部を SI-21 が切穿する重複部は厚さ 3cm 程しか残っていないので、重複関係を断面 (G-G') で確認できなかった。SI-20 の北部中央を切る不整形な落ち込みは SI-21 の掘方南東部が深くなる部分と推定され、SI-21 が SI-20 より新しい証拠といえる。SI-21 掘方は、調査時には時期不明の土坑「SK-284」として扱い、整理作業時に「SI-21 掘方」に名称変更した。

【規模と形状】長方形で南北 4.96m × 東西 5.24m。南北方向の中軸は N-21°-W (東西軸は N-69°-E)。

主柱穴は P1 ~ P4 の 4 本で、柱間は南北 2.50m × 東西 2.36m。P1 ~ P3 は床面から深さ 40 ~ 46cm で、P4 だけは 65cm で少し深い。P2 の柱痕からみて推定柱径は 16 ~ 18cm。北西部で西壁近くにある補助柱穴 P6 は床面から深さ 40cm。中央部の南寄りにある補助柱穴 P7 (床面から深さ 67cm) は、先行する



第 38 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-20 (1) 遺構

SI-19の覆土を切る柱穴で、SI-20に伴う可能性があると判断して整理作業時にP7と命名した。

残存壁高はカマド付近が最も高く27cm、北東隅が18cm、西壁は2～8cm。貼床は厚さ4～6cm。南側主柱穴の東西にある間仕切溝は溝幅18～24cm・床面から深さ8～14cmで、貼床除去後に確認したが、貼床で覆われていたわけではない(断面図F-F')。P3西側の間仕切溝D1はSI-19の炉3を切るのでF-F'の溝3層に焼土が混じる。北東隅の貯蔵穴P5は98×72×床面から深さ40cmで、自然埋没状の覆土に焼土が少し混じる(P5の3層)。南部で下層にSI-19がある部分の掘方がやや深い(断面図G-G')の床4層)。

【カマド】両袖幅97cm、煙道先端から袖先端まで88cm(南袖先端の裏を含め99cm)。ローム塊主体の9層(貼床またはカマド整地土)上に、焼土塊を含む灰色粘土の5層で袖を作る。不規則に被熱した土師器裏13が南袖先端に正立する。北袖先端に立てた大形の河原石30が南へ倒れる。両袖先端に立てた裏17と構築材の上に長脚裏12を掛けて焚口を補強したと見られる。焚口より少し奥で出土した裏15や焼粘土塊17も構築材かもしれないが、破片量が不足し断定できない。焚口手前にある自然石29もカマド構築材の可能性はある。煙道は東壁を外側へ50cm掘り込み、先端がやや急に上がる。煙道最上層に甎14の大破片が入る。

【覆土】竪穴の残りが浅いので、大半が単層である。東部にある2層からみて自然埋没の可能性はある。

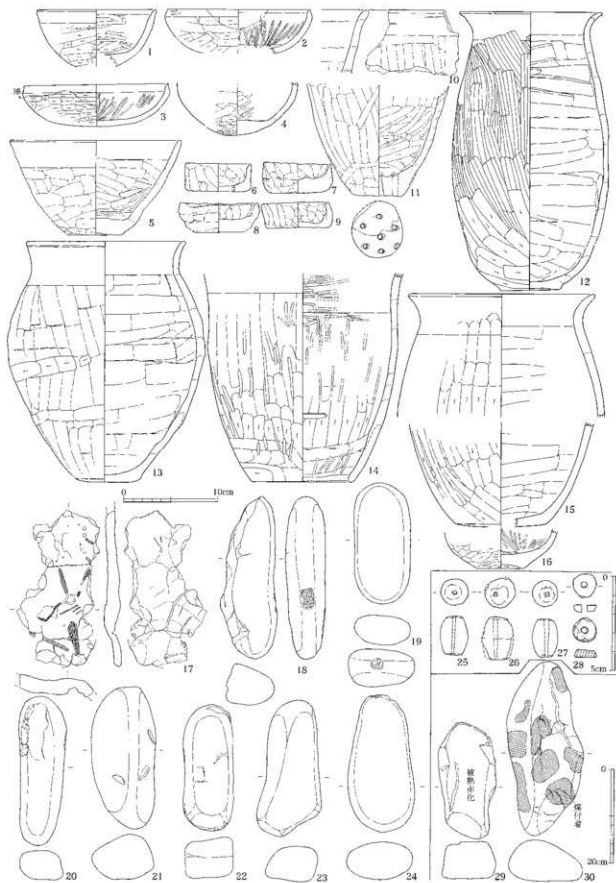
【遺物出土状況】カマド内の出土状況はカマドの項で述べた。カマドの西側には被熱礫(29)、南側に鉢(5)がある。カマド以外では北東部と南部に若干の遺物がある。小形土器がカマド付近に6・7・9と南西部に7があり、土玉(霰玉)3点と白玉1点もカマド北袖付近で出土した(25～28)。

【出土遺物】杯類は主に漆仕上げ。大形でも小形でもない中形甎で多孔を持つ11は10と同一個体の可能性が高い。多孔甎はSG10区SI-32、本遺跡北部のSG1区SI-40、西部の北関東道路調査A区SI-004・012・269・493・504とB区SI-101にもある。裏は長脚化が進み始めた形状。12と13は不規則に被熱し、出土状況からみても焚口の構築材とみられる。15も底部に煤が薄く着くなど不規則な使用痕からみてカマド構築材の疑いがあるが、破片が少ないので確定ではない。16は古墳中期末ころの遺物が混入。

大形板状の焼粘土塊17は片面に植物圧痕を残す。編物石18・19に敲打痕がある。土製霰玉はA区SI-138(谷中・大島編2001)や中島笹塚7区I-5(内山他2008)にあり、埋木製霰玉がSG10区SI-78にある。粘板岩製白玉(28)はSG10区SI-20・30・37・40・70、SG5区ではSI-6他にある。また、滑石製白玉はSG10区SI-30などにある。遺物はやや多い。裏・甎が主体で、杯・鉢・小形土器・焼粘土塊などが少量ある。図示以外の土師器および焼粘土塊合計261片・2,497gの内訳は、杯鉢類76片・625g、小形甎6片・51g、壺甎類140片・1,116g、甎34片・644g、小形土器3片・26g、焼粘土塊2点・35g。

第24表 椋山遺跡SG10区SI-20出土遺物

番号 種類 説明	大きさ cm・g	特 徴	色調 胎土・磁成 (または素材)	出土状況 発見状況 注記
1 土師器 杯	口 径12.6 高 残5.8	底部が厚く外面が丸くて内面が平坦。外面は体部上位にナデと積み上げ面を残し、中～ト底をココヘラケズリ。外底面はおそらく多方向ヘラケズリ。内面はヘラナデ後に口縁部にヨコナデ、底部に多方向と体部に横～斜位のヘラミガキ。内面に暗褐色の付着物が少し見られ、漆仕上げをしている可能性もある。	7.5YR7/2 暗 やや粗い 白・赤紅～暗緑多 白～赤紅・透明顆粒少 や中硬質	南西隅床土5cm 口1/12間、底1/4間 41A
2 土師器 杯	口 径15.0 高 残4.7 最大 径15.5	口縁部内面の線痕は弱い。外面は口縁部がヨコナデでごく一部にココヘラミガキ。外表面部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面はヨコナデ後に放射状ヘラミガキ。内外面の口縁部に暗褐色の付着物が薄く見られ、漆仕上げの可能性もある。	10YR5/2 に赤～黄緑 やや粗い 白・黒點～暗緑 や少、透明顆粒少 や中硬質	カマド北袖床土 口1/4間 36、カマド一筋
3 土師器 杯	口 径15.2 高 4.4 最大 径15.5	外面の口～体部間に横あり。内面の口縁部は少し長い内傾面。外面の口縁部は1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面はヨコナデ後に放射状ヘラミガキ。内面全面と外面口縁部に漆仕上げ。	10YR4/2 に赤～黄緑 やや粗い 白・黒點多、灰 色・透明顆粒少 硬質	南部床土2cmと中央床土 口1/4間土6cmが 接合 口1/4間 8、23、55
4 土師器 鉢	高 残5.8	底部は厚く、外面が丸くて内面が平坦。外面は体部ナデの後に多方向ヘラケズリ。内面は底部に1方向と体部に斜位のヘラケズリ。内面全体が同系を覗きして黒色。	7.5YR5/6 暗 やや粗い 白～暗緑と黒 緑や多、赤紅粒と透明顆粒 少 硬質	南西隅の床土上 底全面 15、16
5 土師器 鉢	口 径18.0 高 10.0 底 5.8	口縁部は歪んでいて17×19cmの楕円形。外底面は雑なナデでわずかに中央が凹む。外表面部はタナナデ→ココナデ→ト端部にココヘラケズリ。内表面部は中～雑なタナヘラケズリ。内外面の口縁部ヨコナデ。内面底部は1方向のみナデ系に外表面部をココヘラミガキ。外面は付込は黒黒で、内面は薄く褐色に変色している。	7.5YR7/6 暗 やや粗い 白・赤紅～暗緑と 黒・透明顆粒少 や中硬質	カマド南床土15cm 口1/2間、底3/4間、 底5/12間 57、カマド一筋
6 土師器 小形土器	口 径6.8 高 2.9 最大 径1.9	粘土組織が粗く確認できない。外底面は平坦にナデる。外表面部ナデ。内面体部と底部は雑なタナナデで、指先で引きずり上げるようにして成形・調整している。	7.5YR6/6 暗 やや粗い 白・赤紅粒少 や中硬質	カマド付近 口1/2間、底3/4間 カマド一筋

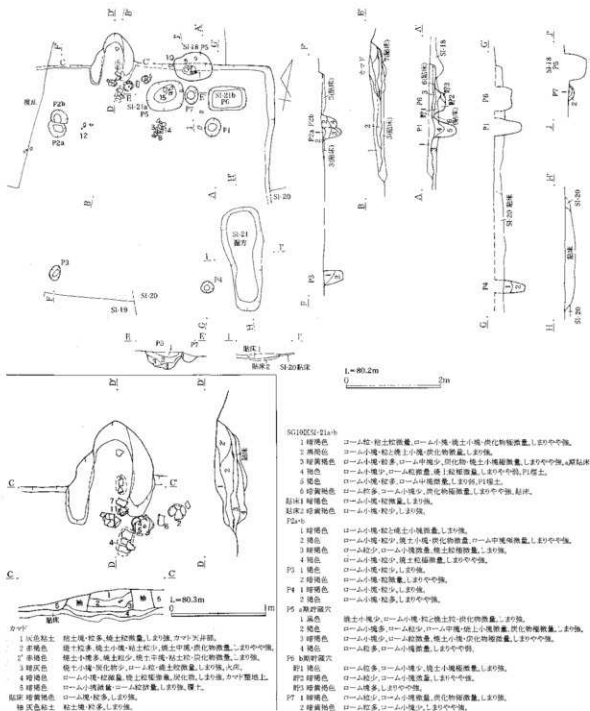


第39図 権現山遺跡 SG10区 SI-20(2) 遺物

7 土器土層 小形土器	口 7.1 底 3.0~3.3 重 118.5	底部の底に1段だけ粘土層をのせて、内面底部の土を斜射方向の筒先で引ずるようになり成形・調整している。外面は内面より少し丁寧にナデている。外面は平坦になる。	5Y8/6 緑 やや強い 白粉・黒粉多、白 粉と赤粉・黒粉少 やや軟質	南内面床土 4cm 完形 2
8 土器土層 小形土器	口 高 8.4 底 高 3.0 底 底 5.2 底 底 8.6	土判形ではないので断面は参考。粘土層積み1層は不明確だが、粘土層の合わせ目には残見できる。外面はナデで、少し丸味を持つ面になる。体部外面はやや滑らかな。内面底部～体部は筒先で放射状に引きずり出すような非直に線なナデ。	10Y8/2 緑・灰黄 やや強い 赤粉・黒粉と白粉 粉やや多、黒粉少 やや軟質	南東部 口1/8周、底1/3周 南東一括
9 土器土層 小形土器	口 7.0 底 高 2.6 底 底 6.4 底 底 7.3	底部の上におそらく1段だけ粘土層をのせて成形する。外面は平坦にナデる。内面は筒先で引ずるような線なナデで底部に多方向にナデる。重量 86.6g。	7.5Y8/7 白 やや強い 白粉と赤・黒粉 微量 硬質	カマド内床土 8cmで正位 完形 64
10 土器土層 大形土器	口 底 18~24 高 底 6.8	11と同一個体の可能性が高い。外面製部タテヘナナデと内面製部タテナデの後に内外面両部ココナデ。内面全体に黒褐色物質が付着する。	10Y8/3 に赤・灰黄 緑赤 明～暗緑少やや軟質	カマド内床土 5～6cm、 南東部にも1片 口1/12周 注記は左欄
11 土器土層 大形土器	高 底 12.2 底 底 5.1	10と同一個体の可能性が高い。底部が厚く重い。外面は上部に縦位と下部に斜～横位のヘナナデ。内面は上部に縦～斜位のヘナナデ後に下位にナメヘナナデ。底面は外面に線なナデと内面に線なヘナナデ後、丸棒状工具で7割の孔を開ける。	5Y8/6 緑 やや強い 赤粉・黒粉やや多、 白・黒・透明黒粉少 やや軟質	南東床土上～7cmとカマ ド内床土 5～6cm付合 成 全周 20, 21, 南東一括
12 土器土層 大形土器	口 15.0 高 底 29.3 底 底 6.2	外面底部近く中央部分がナデで、外周が2方向程度のヘラケズリ。外面は上から下へ浅い斜ナデ後に側下位をヘラケズリ。断面の下半部は側面をヨコナデと斜ナデの両部をヨコナデ。外面は側面の約半周が丸味。カマド焚口の構築材と考えられる。現存重量 1,529g。	7.5Y8/7 白 やや強い 白・透明黒～黒粉 多、灰色粉と黒粉少 やや軟質	焚口の床直上で横位 口2/3周、側全周 47
13 土器土層 大形土器	口 14.8 高 底 25.4 底 底 5.6 底 底 20.8	外面に線なナデと丸ヘナナデ。製部は外面に縦位と内面に横位のヘナナデと、斜ナデと下位の横位1/2部を厚くしている部分の外面をヨコナデと、ヨコナデナデ、口～側面内外面ヨコナデ。製部中心～下位の約半周が丸味を認める。	5Y8/3 灰 やや強い 白・透明黒～黒粉 多、赤粉・黒粉少 やや軟質	カマド南端先頭床土上 正位 口～側面中心位、底1/2 周 46
14 土器土層 大形土器	高 底 22.0 底 底 10.5	内外面製部をタテヘナナデ。製部下位は積み上げ体止理が厚い部分の内外面をタテナデナデナリ。側下位もナデとヨコナデナリ。断面の下半部は丸味を認める。外面は側面、断面内面に赤なヨコヘナナデナリ。内外面の広い範囲に黒粉あり。	2.5Y7/4 浅黄 やや強い 白・透明黒～黒粉 多、黒粉少 やや軟質	煙道直上 25cm 側1/6周、側1/2周、 底3/4周、カマド一括 40, カマド一括
15 土器土層 大形土器	口 底 19.4 高 底 23.5 底 底 7.0	破片が不足し、断面の位を推定できない。外面は外周に丸味がかなり濃く、外周製部はタテナデ後にヘナナデ調整で、ヘラケズリは上半と下半で逆方向。内面は製部ヨコナデナリ。内外面の口～一部はヨコナデ。下半部～底面の内面全体に斜～縦熱痕と少量の炭が見られる。カマド構築材に有用した可能性もある。	10Y8/7 緑 やや強い 灰黄～黒粉と黒 粉少や多、白粉と赤・ 灰黒粉少 やや軟質	カマド火床土 1.7cm 口1/9周、側1/6周、 底1/4周 39, カマド一括
16 土器土層 杯	高 底 4.2 底 底 5.0 底 底 11.9	外面面におおむね3方向にヘラケズリで凹底状にする。外面体部ナメヘナナデ。内面は上部に斜射状と底部に多方向(内)のヘラミガキ。古墳中期末頃の遺物が混入。	10Y8/7/4 に赤・灰黄 やや強い 白・透明黒と白 粉・黒粉・黒粉少 やや軟質	南内面製部床土 全周 11
17 須賀土塊	長 底 16.4 幅 底 8.7 厚 底 2.9 重 底 219.8	左側の縁は単葉植物の葉か葉の厚層が散在する。右側の縁は素手で繰り返し押ししたような凹凸が全体に見られる。草等を存在した面の手で押しつけた成形した大形の破片状土塊で、隅の縁が破損しているが、同一個体だが破損を含んだ破片が3片あり、隅孔した分だけ重さは163.6g。	10Y8/2 灰黄 やや強い 赤粉・黒粉やや多、 白・黒粉少 やや軟質	南内面床土 17cm 全周の大半の破片 39, カマド一括
18 石器 扁石	長 底 17.0 幅 底 5.9 厚 底 4.5	細長い自然磨きそのまま利用。縦位に片側面が丸味を認めているので人為的な加工ではない。側面に斜～縦熱痕の線が縦方向に認められる。焼痕はない。残存重量 514.6g。	2.5Y8/3 灰黄 やや強い 硬質な流紋岩	南内面床土 2cm 完形 1
19 石器 扁石	長 底 12.7 幅 底 5.9 厚 底 3.0	扁平な自然磨きそのまま利用。加工・使用・焼熱痕は認められない。表面に暗褐色の付着物がわずかに見られ、片方の面にだけ付く傾向がある。重量 305.9g。	2.5Y7/4 浅黄 やや多量炭質で硬質の安山 石	南内面製部床土 4cm 完形 7
20 石器 扁石	長 底 15.6 幅 底 5.1 厚 底 3.5	細長い棒状の自然磨きそのまま利用。両側した面の左上が5mm厚くなる。左右側面の上部に小さな割傷が1箇所ずつ見られる。焼熱痕や使用痕は見られない。重量 405.9g。	2.5Y8/2 灰黄 緑赤で硬質な流紋岩	南内面製部床土 完形 5
21 石器 扁石	長 底 14.9 幅 底 6.7 厚 底 4.6	細長い棒状の自然磨きそのまま利用。加工・使用・焼熱痕は見られない。重量 676.6g。	2.5Y6/3 灰黄 硬質な石高砂岩	南内面製部床土 完形 6
22 石器 扁石	長 底 13.3 幅 底 5.3 厚 底 4.4	細長く側面が内形の自然磨きそのまま利用。加工・使用・焼熱痕は見られない。断面図に記入した破面で縦位に2つ割れているが、縦行破は認められない。重量 520.2g。	5Y6/3 オリーブ黄 緑赤で硬質な流紋岩	南内面製部床土。縦に 割れた2片が接合 完形 3, 4
23 石器 扁石	長 底 14.0 幅 底 6.8 厚 底 4.2	細長くやややや扁平な自然磨きそのまま利用。加工・使用・焼熱痕はない。重量 539.9g。	2.5G6/7/1 明オリーブ灰 緑赤で硬質な砂岩	南内面製部床土 1cm 完形 10
24 石器 扁石	長 底 14.5 幅 底 7.0 厚 底 4.1	扁平な自然磨きそのまま利用。一端の小口に少し縁が残り、加工痕や焼熱痕は見られない。重量 570.6g。	2.5G6/1 オリーブ灰 緑赤で硬質な砂岩	南内面製部床土 3cm 完形 12
25 土器土層 大形土器	長 底 19.5 幅 底 15.0 厚 底 3.2	両小口の平明面は明瞭で、側面の中央にはほとんど縁を持たない。成形時の粘土の層も少し残るが、全体を丁寧なナデで仕上げている。横成面に縦～丸棒で丸味を認めるが、横成面ともに1.55～1.65cmで一定している。現状では漆等は見られない。	2.5Y6/1 黄灰 明～暗緑少、赤粉微量 やや軟質	カマド北袖付近床土上 完形 42
26 土器土層 大形土器	長 底 22.4cm 幅 底 16.9cm 厚 底 3.2	両小口の対面に下半分が縦。両小口は丸味を持ち、ナデがやや軟。側面2丁厚なナデで、側面中央の縁は不明瞭で弱い。横成面に丸棒で穿孔し、玉の中側に対し孔がやや斜交。孔径1.3～2.0cmで、横の上側が大きい。表面がやや暗褐色だが、漆等は認められない。	2.5Y4/1 黄灰 明～暗緑 やや軟質	カマド北袖付近床土上 一部欠 43
27 土器土層 大形土器	長 底 20.1cm 幅 底 14.4cm 厚 底 3.1	両小口の平明面は明瞭で、側面の中央にはほとんど縁を持たない。全体を丁寧なナデで仕上げている。横成面に縦～丸棒で穿孔し、孔径は1.90～2.75cmで一定している。現状では漆等は見られない。	2.5Y4/1 黄灰 明～暗緑少 やや軟質	カマド北袖付近床土上 完形 44
28 石器 白玉石	長 底 11.75～ 12.15cm 幅 底 4.10cm 厚 底 0.7	両面に石片の跡理に沿った表面のままで研削する。側面は穿孔とはほぼ同じ方向で少し斜位の研削痕。孔径は両面ともに3.4～3.8cmで一定し、穿孔孔は一定し、穿孔後に分別して白玉を製作したものと見られる。	7.5Y4/1 灰 緑赤で軟質な粘粉岩	カマド北袖付近床土上 完形 45
29 カマド 土器土層 大形土器	長 底 22.7 幅 底 11.3 厚 底 3.0	自然の磨きそのまま利用。全面が焼熱赤化し、隅の右上部が割傷を被った後も赤に赤化している。加工・使用痕は見られない。重量 355.2g。	5Y8/2 灰黄 緑赤で硬質な石高砂岩	カマド内床直上 ほぼ正位 63
30 カマド 土器土層 大形土器	長 底 36.5 幅 底 15.5 厚 底 8.7	カマド焚口を構築する。両側した面を中心として全面の各部分に炭が付着する。明確な焼熱赤化部は見られない。重量 6150.0g。	2.5Y6/1 黄灰 やや軟質の安山石	カマド内床直上 ほぼ正位 48

SG10区 SI-21a・21b (第40・41図、写真図版78)

【位置】SG10区南部の18-16グリッド。同じく古墳後期の建物は南にSI-20、東にSI-22がある。北にある古墳中期のSI-18a・18b・18cを切る。古墳中期のSI-19a・19b→後期のSI-20→SI-21b→SI-21aの順に重複する。現地調査時にはSI-21→SI-20という構築順を考えたが、SI-21は南部が削平されてSI-20と重複する土層が僅かなため、出土遺物の特徴も考慮して、順序を訂正した。西側は南北方向の長方形掘乱坑に切られる。古墳後期前葉のSG5区SI-4の東端を古墳後期末のSG10区SI-21が切ると推定される。ただし、西側に連続するSG5区の調査では10区SI-21a・21bの西端部分は確認されず、SG5区SI-4が隣接してい



第40図 権現山遺跡SG10区 SI-21a・b(1) 遺構

る。SG5区SI-4の東半部の柱穴や壁は、SG10区SI-21の調査では確認されていない。南方にあるSK-94は、SI-21a・bとほぼ同時期の遺物を出土している。

【遺構名の対応】 調査時に「SI-21」と呼称し、整理作業時にSI-21a・21bに改称した。SI-21bが古期、SI-21aが新期である。SI-21bの貯蔵穴P6は、調査時の旧名称「S-99」である。SI-21南東部の長方形掘方は、調査時に時期不明土坑「SK-284」とし、整理作業時に「SI-21掘方」に改称した（断面図H-H'とI-I'）。

【規模と形状】 方形の建物跡で中央から北東部が残る。北東主柱穴P1から北壁・東壁までの距離が1.30mであることを参考にすると、復元推定値は東西5.86×南北5.90m。竪穴の残存長は東西5.40m×南北3.10mで、主軸方位はGN-10°-W。残存壁高は北東隅部で最大15cm。南半部は削平されてほとんど残らず、南壁も不明である。

中央部から東部は掘方の底面が周囲より6cmほど高い。掘方の南東部は長方形の落ち込み状で、先行するSI-20の北部を切る（南北222×東西84×床面からの深さ22cm、断面図H-H'およびI-I'）。新期（SI-21a）の貼床である3層はローム小塊の多い暗黄褐色土で、旧期（SI-21b）の貯蔵穴P6の上を覆う。旧期貼床である6層はローム粒の多い暗黄褐色土で、旧期貯蔵穴P6の周囲で認められた（断面図A-A'）。

主柱穴は4本あり、底面標高が79.40～79.51mなので、床面（79.95m）からの深さは44～55cmと推定される。北西柱穴P2は2時期あるように見え、北側の一段浅いP2b（床面から深さ33cm）が旧期（SI-21b）の柱穴底面を示しているのかもしれない。北側のP2bと南側のP2aが一連の土層で埋没しているため、新期（a期）の柱を抜く時に旧期（b期）の柱穴埋土と一緒に壊したとも考えられる。主柱穴の配置は東西3.26×南北3.30mで、北西柱穴P2aは少し南にあるのでP2a-P3間が少し狭い（3.10m）。新旧貯蔵穴（P5とP6）の間にある浅い柱穴P7は、北側のSI-18調査時に確認した柱穴であるが、SI-21に伴う可能性が高い（床面から深さ17cm、断面図J-J'）。入口施設は不明。

貯蔵穴は北東部に2基あり、西側が最終期のa期貯蔵穴P5で、東側が埋め戻されていたb期貯蔵穴P6である。a期貯蔵穴P5は東西80×南北68×深さ33cm。b期貯蔵穴P6は南北51×東西80×深さ24cm。周溝や間仕切溝はない。南方にある古墳時代のSK-94は同時期の遺物を出土しているため、これをSI-21a・bの掘出ピットと考える余地もあるが、SK-94は方形でなく円形なので可能性は低い。

【カマド・覆土】 最終期であるa期のカマドと覆土の状況が残されていると考えられるので、SI-21aの遺構として次項で説明する。

【出土遺物】 SG10区SI-21a・21bのそれぞれについて次項で説明する。

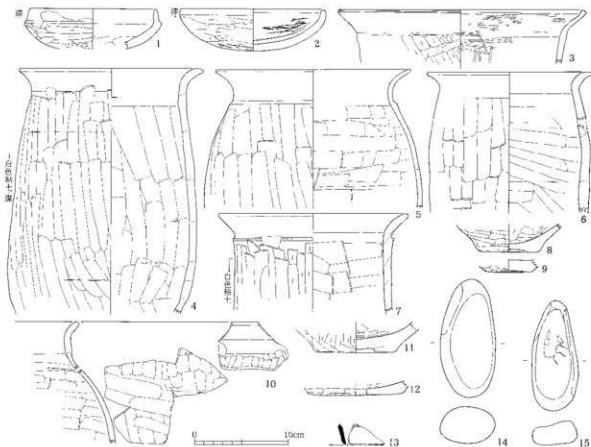
SG10区SI-21a（第40・41図、写真図版78）

【規模と形状】 竪穴部の規模・形状は、前項で説明したSG10区SI-21a・21bに共通すると考えられる。

【カマド】 北壁中央にある。両袖幅94cm、煙道先端から袖先端まで109cm。貼床の上に整地土を載せ（4層）、その上に灰色粘土で造った袖は、壁の北側を掘り込んだ掘方内まで80～100cmほど北へ続く。天井部を反映する1層が最上層に残る。東袖先端に倒立した土師器甕4はカマド構築材の可能性が高いが、別個体の土師器甕5の破片と一緒にされているので、二次的に移動・改変されているか、または破片を組み合わせて使用したのかもしれない。

【覆土】 竪穴の残りが浅いため大半が単層で、カマド南側にだけ焼土混じりの2層がある。テフラの層や粒などは認められない。

【遺物出土状況】 新期貯蔵穴P5の底から5～30cm浮いて土師器片が出土した。その南側でも、床面～床上6cmの範囲内で土師器片がまとまる。カマド内とその南東部に土師器甕類が多い。4の甕は東袖先端付近に倒立したと考えられ、全周が残っていないので、5の破片を組み合わせた可能性もある。カマドの東方には完形の杯が正位で床から4cm浮いている（2）。1は先行するSI-18の貯蔵穴（調査時名称SK-295）で出土したが、SI-18貯蔵穴上部をSI-21aが切るので、SI-21aの床面または貼床中の遺物と見られる。



第41図 権現山遺跡 SG10 区 Si-21a-b (2) a期遺物

【出土遺物】2は内面に焼成後の引っ掻き傷と見られる浅い沈線がある。5は微量の雲母を含むので搬入品の可能性がある。雲母を含む土師器はSG10区ではSI-12などにあり、権現山遺跡北部にある2区に多く、他地区にも若干ある（『東谷・中島地区遺跡群10』p.550）。4は煤・白色粘土・被熱痕がかなり不規則に見られ、カマド構築材的な痕である。7も白色粘土が残る。3は口縁端が三角になる独特な甗。須恵器杯(?)は混入の可能性が高い(13)。遺物は少なめで、割合は土師器甗が圧倒的に多い。図示以外の土師器合計225片・2.788gの内訳は、杯113片・828g、小形壺1片・17g、壺甗類102片・1.752g、甗9片・191g。古墳中期中～後葉の土師器椀形杯などを備かに含み、重複するSI-18などからの混入であろう。

SG10 区 Si-21b (第40図、写真図版78)

【規模と形状】竪六部の規模や形状はSi-21aとほぼ同様と推測される。北東隅部でSi-21aの貼床下に埋め戻された旧期(b期)の貯蔵穴P6がSi-21bの遺構である(東西80×南北51×深さ24cm)。この旧貯蔵穴P6の周囲にSi-21bの貼床(6層)が認められる。Si-21aの項で述べたように、北西主柱穴P2の北半部であるP2bが他の主柱穴よりも浅いので(床面から深さ33cm)、Si-21bの柱穴がSi-21aよりも浅かったことが推定される。

【遺物および出土状況】Si-21bに伴う旧期貯蔵穴P6から出土した土師器壺甗類5片・52gだけがあるが、図示できる遺物はない。

第25表 権現山遺跡 SG10 区 Si-21a 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ [cm]・型	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 13.4 高 4.3 最大 14.5	外面体部上部に狭くナガを施し、それより下をヨコハケツクリ、内面下位ナガ、内面上位～外面口縁部にヨコナガ、内面全面と外面口縁部に直仕上げ。	7S3774 に近い 中や細粒 白・黒・透明細粒 と灰色微少 中や軟質	SI-18a/bの貯蔵穴上方でSi-21aの床面～貼床付近 口1/4留、体1/3留 SK-295-1

2 土師器 杯	口 15.0 高 4.5 最大径 15.4 重 259.4	内外面とも磨耗して調整が不明。外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。外面口縁部から内面中位までヨコナデ。内面全面と外面上位に漆住上げ。内面体部には焼成後のうけつき傷と見られる浅い沈陥が不規則に漆住傷跡がある。内面凹み突出した。	10YR7/2 に赤い黄緑 や中粗い 白・黒・透明微粒少 微質	カマド南床上4cmで位置 完了 23
3 土師器 瓶	口 径 25.6 高 径 5.7 最大径 26.6	内外面とも薄い。口縁部内外面が断面三角形形状で、端面は浅く凹む。外面頸部に浅く凹みあり。口縁部内外面ヨコナデ後、外面頸部はタテヘラケズリ。内面は頸部に縦位と口縁部に横位の密なヘラミガキ。	10YR7/4 に赤い黄緑 や中粗い 白・黒・透明微粒多、白・黒微粒少 やや軟質	中央部直上7cmとカマド 南床上3cmの接合 口1/6 周 13、22
4 土師器 甕	口 径 19.4 高 径 26.0 最大径 19.8	内外面の口縁部をヨコナデ。外面頸部は上から下へタテヘラケズリの後にタテヘラケズリ。内面頸部はタテヘラケズリ。外面全面と白色粘土を施すか付着し、また焼熟赤七部が口縁部～残存下部の全域に広く見られる。 [注記]26、27、カマド一括、カマド近辺	10R5/6 赤 や中粗い 白・赤・灰色・透明微粒と黒微粒多 やや軟質	カマド東側の南方6cm [頸口]直上28cm(鏡片 3点)、鏡口縁部から 口～頸1/4 周、肩2/3 周 注記は左欄
5 土師器 甕	口 径 21.4 高 径 14.8	頸部が薄い。外面頸部は下から上へタテヘラケズリの後にタテヘラケズリ。内面頸部はヨコヘラケズリ。内外面の口～頸部にヨコナデ。 [注記]26、瓶一括、カマド近辺	5YR6/6 橙 や中粗い 白・黒・灰色～ 細粒多、白色透明～細粒と 透明微粒微質 やや軟質	カマド東端先端の東方 床土6cmで倒伏(片貼床 出土)の3片も接合 口1/36 周、肩一肩1/3 周 注記は左欄
6 土師器 甕	口 径 17.4 高 径 14.9	胴上部の縁点がわずかなで頸部破片の積きかやや不明。外面は頸部に縦位のヘラケズリ後ヘラケズリ。内面頸部は斜～縦位ヘラケズリ。内外面の口～頸部をヨコナデ。外面頸部が少し焼熟赤化。	7.5YR7/6 橙 や中粗い 灰色～細粒多、 白・透明微粒～細粒と黒微粒少 やや軟質	カマド南東の床土18cm 口1/6 周、胴土1/4 周 24、カマド近辺
7 土師器 甕	口 径 19.9 高 径 10.7	外面の頸部に強い段があり、頸部は下方へ向かって少し開き微。外面は口縁部ヨコナデ後に胴部タテヘラケズリ。頸部のケズリはやや強いヘラケズリと見える。内面は頸部ヨコヘラケズリ。口～頸部ヨコナデ。外面肩部にも白色粘土が付着する。	5YR6/8 橙 や中粗い 灰色～細粒多、白・ 透明微粒～細粒やや多、黒微粒少 硬質	床土5cmと頸口直上 口接合 口～頸5/12 周 28、33
8 土師器 甕	高 径 3.0 底 径 6.6	外底面は外周に粘土を敷ってヘラケズリし、中央が凹む。外面頸部ヨコヘラケズリ。内面底面は上に放射状の深いヘラケズリ。	10YR8/4 に赤い黄緑 や中粗い 赤・灰色～白と 透明微粒やや少、黒微粒少 硬質	中央部直上6cm 胴直上1～2 周 10
9 土師器 甕	高 径 1.3 底 径 4.8	外底面は中央部が少し上げ状態でナデ。外面胴下端はヨコヘラケズリ。内底面は1方向のやや横位ヘラケズリ。	10YR8/3 に赤い黄緑 や中粗い 白・黒・透明微 粒と白・赤微粒少 硬質	カマド付近 底3/4 周 カマド近辺
10 土師器 大形甕	口 径 28～32 高 径 24～28 最大径 径 12.8	大形甕としては薄い。胴部が直立微。内外面の口～頸部ヨコナデ後に内外面の頸部ヘラケズリ。外面肩部のタテヘラケズリと内面肩～頸部のヨコヘラケズリは、砂粒が動くようなケズリに近い調整。頸部外面に10cm以上の黒痕あり。 [注記]19-21、4、カマド近辺、カマド一括、SK-295 2、一括	7.5YR6/6 橙 や中粗い 灰色～細粒多、白・ 透明微粒と赤～ 細粒やや多、白・黒微粒少 やや軟質	北壁直上12cm、カマド 近辺、SI-18a-bの貯蔵 穴が3人 口1/30 周、胴1/12 周 注記は左欄
11 土師器 大形甕	高 径 3.3 底 径 8.6	外底面は外周に粘土を敷ってヘラケズリし、中央が凹む。外面はタテヘラケズリ。内面底面は多方向ナデ。底面内面の一部に赤色の焼けた粘土が付着する。	10YR8/3 浅黄緑 やや粗い 灰色～細粒やや多、白・黒・ 透明微粒少 硬質	カマド内床直上で直径 底2/3 周 29
12 土師器 大形甕	高 径 1.5 底 径 10.0	外底面は薄い円板状に張り出し、外周を中心として円周方向のヘラケズリ。外面胴下端はやや雑なナデ。内面底面は円周方向のナデ。	10YR8/3 浅黄緑 やや粗い 灰色～細粒やや多、透明微 粒少、赤・黒微粒少 やや軟質	北西面直上5cmが接合 底2/3 周 18、19
13 須恵器 杯蓋	口 径 約 12 径 約 14 高 径 2.2	頸部に強い段、内面口縁部面に斜面を持つ。上下部にて無蓋杯の可能性もある。口から回転方向は口縁部を上に向けた状態で左回転(反時計回り)。外面に白色の自然釉あり。古墳中継末～後期前平の遺物が混入。	N4/ 灰 や中粗い 白・透明～細粒 微質	口1/12 周
14 石器 編物石	長 12.4 幅 5.8 厚 4.1	縦長い自然礫をそのまま利用。加工・使用・焼熟痕は見られない。重量441.5g。	N7/ 灰白 やや多孔質で緻密な安山石	中央部直上3cm 完了 14
15 石器 編物石	長 11.6 幅 4.9 厚 3.1	縦長い自然礫をそのまま利用。手前側に同の中央部で緩く反るような形状。加工・使用・焼熟痕は見られない。重量225.4g。	7.5Y7/2 灰白 緻密な硬質な石英質	a貯蔵穴直上 完了 7

SG10区 SI-22 (第42・43図、写真図版78・193)

【位置】SG10区南部の18-16グリッド。同じく古墳後期の遺構は北にSI-23、東にSI-20、南にSI-15がある。古墳中期のSI-105を切り、後期のSI-21(21a・21b)に切られる。時期不明のP-406に東壁を切られると推定される。平安時代のSI-90とは近接するが重複しない。南東隅が攪乱されている。

【規模と形状】方形の建物跡。東西4.62×南北4.78m。主軸方位はGN-2°-E。壁は東側がよく残り、残存壁高は最大20cmで、南西部では残りが悪く4～9cm。ローム小塊・粒を主体とする土で全体を数cmの厚さで貼床している。

主柱穴は4本で、柱間は東西2.12×南北1.94～2.12m。床面からの深さは、北側の2本が深く(50cm)、南側の2本が浅い(31～35cm)。南西のP3では柱径10～14cmの柱痕状土層が見られる。入口施設と考えられるP6は径23×31cm、床面からの深さ36cm。

北東隅にある貯蔵穴P5は東西61×南北52×深さ33cmで、貼床と同じローム質の土手状高まり(幅21～42cm・高さ2～7cm)で南～西側を囲まれている。貯蔵穴の埋土は自然流入層で、西側のカマドから流れてきたと推定される焼土を含む。南壁側だけで確認した壁溝は幅12～18cm・深さ4～7cm。間仕切溝は認められない。

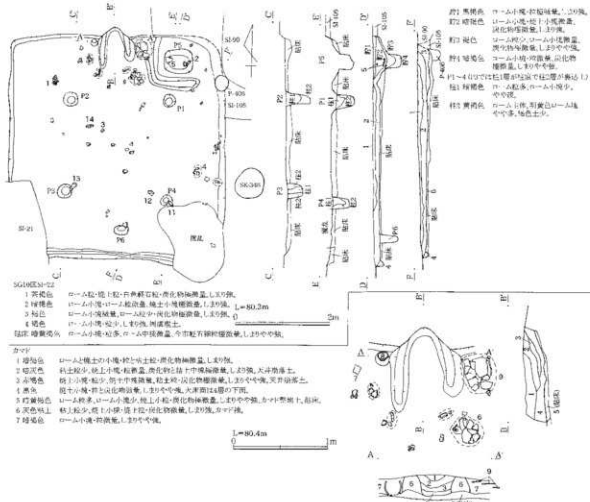
【カマド】北壁のほぼ中央で、わずかに西に寄る位置にある。両袖幅77cm、煙道先端から袖先端まで

89cm。カマド下部は竪穴の掘方が周囲より4~7cm高く、その上を竪穴貼床と同じ土で平坦に整地した面に、灰色粘土で両袖を作る。煙道は北壁を約40cm北側へ掘り、両袖基部の粘土がその中に入る。

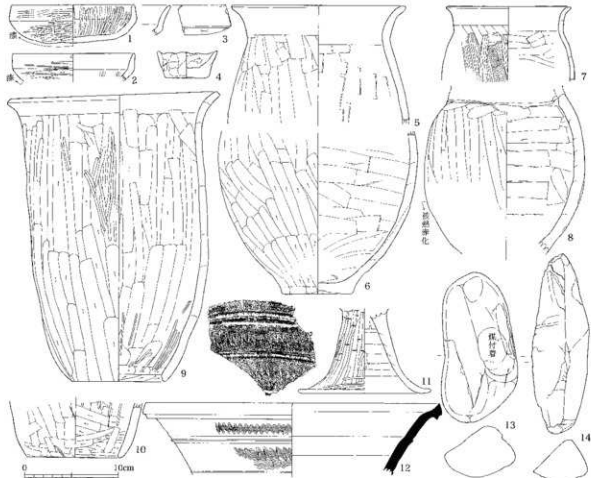
〔覆土〕自然埋没状で、最上層に白色軽石粒を含む。

〔遺物出土状況〕遺物はカマド周辺に多い。カマドの西側に正立する小形甕(8)は、底部がなく、頸の破損面が磨耗しているので小形甕などを載せる転用器台であろう。カマドの南側と東側では甕(6)と甕(9)が倒れている。貯蔵穴内の甕片(5)は、6と同一個体の上部破片(?)がカマド側から流入したように見える。

〔出土遺物〕1・2は早い時期の漆仕上げ杯。カマドの南東で出土した6と貯蔵穴の5は胎土が類似し、同一個体の可能性もある。7は薄い小形甕。9は焼成前に胴部外面の亀裂を粘土貼り付け・ミガキ調整で補修している可能性がある。補修痕のある土師器は、SG10区ではSI-6にある。遺物量ははややく、土師器長胴甕が主体で、壺片少量と杯・高杯がわずかにあるが、重複するSI-105など周辺の遺構から混入した古墳中期の遺物もかなり含んでいると考えられる。図示以外の土師器合計623片・5.015gの内訳は、杯357片・2.170g、高杯12片・109g、壺壺類253片・2.726g、甕1片・10g。土師器高杯(11)と波状文がやや雑な須臾器甕(12)は古墳中期後葉の遺物で、重複するSI-105などから混入したのかもかもしれない。



第42図 権現山遺跡 SG10区 SI-22(1)遺構



第43図 権現山遺跡 SG10区 SI-22 (2) 遺物

第26表 権現山遺跡 SG10区 SI-22 出土遺物

番号 種類	大きさ cm・g	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復12.9 高 4.2 最大 復13.8	外面は口縁部ヨコナデと体部ヨコヘラズリの後にヨコヘラミガキ。底部に多方向ヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後、全面に放射状ヘラミガキ。内面全面とおおむね外面にも塗布上げ。	10YR7/3 に赤・黄褐色 やや暗赤 赤相～細粒やや中 やや硬質	北西部直床直上 口1/4周、床1/3周 41、一掛セクシオン
2 土師器 杯	口 復12.8 高 残 2.9	外面は体部ヨコヘラズリと口縁部ヨコナデの後にヨコヘラミガキ。内面は磨滅しているが、体部に少し残る状況からみて放射状ヘラミガキの可能性あり。内外面塗布上げ。	7.5YR6/4 に赤い層 やや暗赤 赤相～細粒と透明 細砂少 やや硬質	新築内直床上1.8m 口1/5周 22
3 土師器 杯	口 復14~16 高 残3.2	内外面口縁部ヨコナデと外面体部ヨコヘラズリ。内外面ともに磨滅しているのミガキの有無が不明。現状では塗布上げは認められない。	10YR7/6 明黄褐色 やや暗赤 赤・透明細粒やや中 少。白・黒細粒少 やや硬質	中央床直上3cm 口1/12周 37
4 土師器 小形土器	口 6.4 高 残2.7 ～2.9 底 4.0	底部のみに粘土層を一段積んで成形。外底面はナデ。内外面体部にユビオサ工風の細かい凹点あり。現存重量 51.7g。	7.5YR6/4 に赤い層 やや暗赤 白・赤相～細粒と 黒・透明細粒少 やや硬質	中央床直上7cm ほぼ正円 口2/3周 7
5 土師器 甕	口 復18.3 高 残12.5	胴部は外面タテヘラナデ。内面ヨコヘラナデ。内外面で工具が残り。外面は非常に広く不明瞭なハケメとみなすこともできるような調整である。内外面の口～頸部にヨコナデ。内面口縁部と外面前部に8～9cm以上の黒皮あり。外面の肩が暗褐色に汚れ、薄い炭もみれなし。6と同一個体の可能性あり。	10YR6/4 に赤い黄褐色 やや暗赤 白・透明細粒～細粒 少。黒細粒少 やや硬質	新築内直床上31cm 口1/3周、床5/12周 23
6 土師器 甕	高 残17.1 底 7.4 最大 復21.1	胴部下位に積み上げ休止部あり。外面は上半部タテヘラナデ後に下半部タテヘラケズリ。胴部下端ナデ。外底面に1方向または多方向のヘラケズリ。内面は胴部下位をナメヘラナデ後に、中位以上を成形してヨコヘラナデ。胴部下位が焼熱しているが、範囲はあまり明確ではない。5と同一個体の可能性あり。	10YR7/4 に赤い黄褐色 やや暗赤 白・透明細粒～細粒 少。黒細粒少 やや硬質	カマド直床直上1～14cm が接合 胴1/3周。底全周 44、51
7 土師器 甕	口 復13.2 高 残7.9	薄く、胴部が一層厚いから口縁部が更に外反する。外面は頸～胴部にナメヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。胴部にやや不明瞭なタテヘラ。内面は胴部に横～斜位ヘラナデ後、口～頸部ヨコナデ。	5YR5/6 明赤色 やや暗赤 白・灰色層～細粒 と黒・透明細粒多。黒細 粒と白相～細粒少 やや硬質	カマド直床直上 口1/6周 56、一掛セクA 区
8 土師器 小形甕	口 12.4 高 残16.9	外面は胴部タテヘラケズリ後に頸部ナデ。内面はヨコヘラナデ。頸部以上を全周し、その後面は少し磨滅している。この上に小形盤や小形甕を載せる器付として用いた可能性が高い。底部はやや斜位に破損して、このままではまっすぐ立てることができない。床面の凹みに合わせて置くことで直立させていたものと考えられる。胴下位の外面が焼熱赤化して、表面が著しく剥落している。	10YR7/4 に赤い黄褐色 やや暗赤 白・灰色層～細粒 と黒・透明細粒多。金色 雲母少 やや軟質	カマド直床直上で正 直全周。頸直火 57

第5章 権現山遺跡 SG10 区

9 土師器 敷	口 22.4 高 30.3 底 10.0 重 20.59	外面腹部タテヘラズリ後に内外内口縁部ヨコナデ。内面は腹部タテヘラズリ後にヘラナデ。胴下位ヨコヘラズリ後に少しタテヘラミガキ。上面に焼した腹部上下外面に2～3mmの粘土を帯ってヘラミガキしている。焼成前に生じた亀裂を補修しているかもしれない。外面の約半面に黒炭あり。	7.5YR6/6 橙 やや肌い。白・赤黒～細粒多 黒・灰色・透明肌～細粒 やや多 やや硬質	カマド東側床土4cmで 横位 口1/2周、胴～底全周 42
10 土師器 敷	高 残 5.8 底 復 9.8	外面は主に縦位のヘラナデ。内面はヨコヘラズリ後にナメヘラナデ。残存する土層底よりも上方はタテヘラナデ後タテヘラミガキと思われる。	5YR6/8 橙 やや肌密 赤黒～細粒やや多 白・灰色・透明肌～細粒と黒 細粒少 やや硬質	P4 内底上7cm 底1/3周 1. P4
11 土師器 高杯	高 残 9.0 脚縁 復 14.0	外面は脚柱部に縦位と横位に横位のヘラミガキ。ヘラを止めた知照状の跡跡がよく残る。内面は脚柱部ヨコナデと腹部ヨコナデ。古墳中層の遺物が混入。	7.5YR6/0 橙 やや肌密 白・透明細粒やや多 赤・黒黒～細粒少 やや硬質	南東床土7cm 中位全周、胴1/12周 2
12 灰土器 皿	口 復 31.0 高 残 7.5	断面が低い三角形の突縁で脚部を3段以上区画後、6～8箇工段で右から左へ漸次状況を変えて、残存する3段の内面中は上下2段に急変し、上の段より下の段を後で黒く、ロクロナデ調整時と後文書発掘時のロクロ回転方向は同じ。古墳中層の遺物が混入。	N5/0 灰 やや肌密 白～細粒少 硬質	南東部床土2cm 口1/2周 3
13 石器 編物石	長 15.7 幅 7.5 厚 5.1	断面が低い自然礫をそのまま利用。円形した範囲に暗灰色の煤(石)が薄く付着する。加工・使用痕や被熱痕は見られない。重量816.5g。	7.5Y5/1 灰 細密で硬質なホルンフェルス (石灰結晶)	南西床土5cm 定形 35
14 石器 編物石	長 18.8 幅 5.8 厚 4.6	断面に沿って縦に長く割れた自然礫をそのまま利用。隅の左半部が割れぬ。加工・使用・被熱痕や付着物は見られない。重量537.5g。	7.5Y5/2 灰オリーブ 細密で硬質な緑色の大山岩	中央部床直土 定形 38

SG10 区 SI-23 (第44～48図、写真図版79・193・194)

【位置】 SG10 区南部の 18-16 および 18-17 グリッド。同じく古墳後期の SI-22 が南にある。SI-25 → SI-24 → SI-23 → SI-90 → SE-236、および SI-105 → SI-23 → SI-90 の順に重複する。この重複関係と出土遺物から、古墳中期 (SI-25 と SI-105) → 後期 (前葉の SI-24 → 中葉の SI-23) → 平安時代の SI-90 → 時期不明の井戸 SE-236 の順が考えられる。古墳時代の柱状土坑 P-325・326・330・331 を切る。この 4 基の柱状土坑は SI-23 貼床下で確認し、P-326・331 の上方には SI-23 の遺物も存在するので、SI-23 より古い柱状土坑と考えられる。古墳時代の可能性が高い P-314・315 も重複するが、この 2 基は SI-23 の貼床に覆われていた確認がなく、SI-23 との新旧が不明である。

【規模と形状】 方形の建物跡で、主軸方位は GN-16° 30' -E。東西 6.05 × 南北 6.04m、残存壁高は最大 26cm。掘方は床面から深さ 4 ～ 10cm で、ローム主体の暗黄褐色土で全体を貼床している。

主柱穴は 4 本と推定されるが、南東柱穴は確認できなかったため SI-90 に破壊されたことが推定される。柱配置は方形で、柱間は東西 3.26 × 南北 3.12cm。北東柱穴 P1 は北側の貯蔵穴があるので、少し南にずれた位置にあるらしい。床面からの深さは P1=51cm、P2=56cm、P3=64cm で、P3 に続く少し浅い部分は P3 北が深さ 36cm、P3 東が 34cm。P3 の状況からみて、柱を建て替えた可能性がある。

北東隅にある貯蔵穴 P4 は東西 93 × 南北 97 × 深さ 38cm で、北～西側を土手状の盛土が囲む (幅 26 ～ 44cm、床面から高さ 4 ～ 8cm)。中央から西部にかけて貼床下で確認した溝 D1 は間仕切溝の可能性もある。D1 の東端は SK-314 との前後関係が不詳で、溝の長さ 70cm 以上 × 幅 36cm、床面からの深さ 10 ～ 11cm (掘方底から深さ 2 ～ 3cm)。

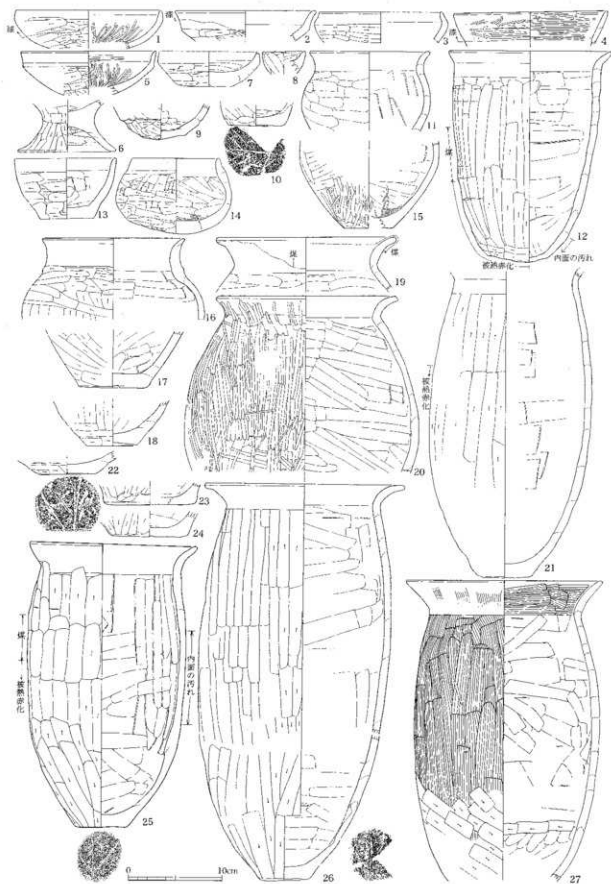
【カマド】 北壁中央にある。東西両袖の先端に土師器甕 21 と 27 を倒立する (カマド平面図および竪断面図 E-E')。焚口の天井に架け渡していた土師器甕 26 は落下し、西袖先端の甕 21 も胴部下半が折れて焚口付近に落ちていた (カマド下層遺物図)。掛口には 2 個の土師器甕をかける。カマドに掛けた甕 2 個のうち、西側の甕は復原・図示できなかった (断面図 I-I')。東側の甕はやや小さく片側が被熱している (25)。両袖幅 105cm、煙道先端から袖先端まで 96cm (袖先端の土師器甕も加えると約 110cm)。貼床土および整地土層の上に灰色粘土で造った両袖の基部が、北壁から外へ 55 ～ 64cm 張り出した掘方の中に入り、煙道の先端は急に上がる。

【覆土】 自然埋没と思われる。テフラ粒などは認められない。

【遺物出土状況】 遺物は多く、特に貯蔵穴付近とカマド内およびカマド南側に集中する。カマドの遺物出土状況はカマドの項で説明した。大形壺 (30) は接合できない上半部と下半部が貯蔵穴で出土した。粗製小形土器 4 点のうち 7 がカマド焚口付近で出土し、カマド以外の各所で 8 ～ 10 が出土した。

【出土遺物】 14 と 15 は焼成前の亀裂を内面のミガキで補修した可能性がある。補修痕のある土師器は、

第5章 権現山遺跡 SG10 区



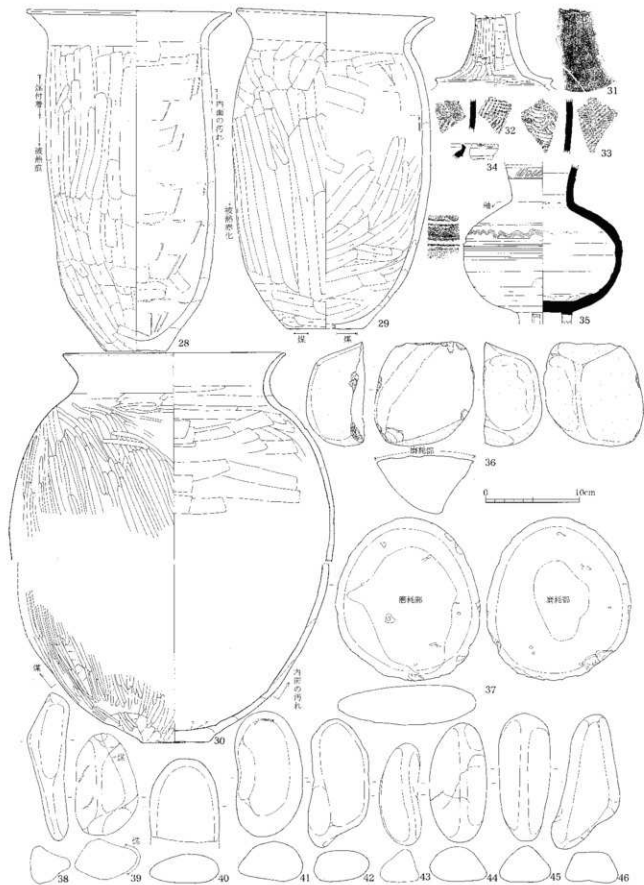
第45図 権現山遺跡 SG10 区 SI-23 (2) 遺物

にやや類似した破片が、中世のSE-377に1片ある。石が多量に出土し、編物石および特徴のある石を图示した。編物石が非常に多い。台石・葎石・砥石も少量ある。

遺物は極めて多く、土師器甕が主体で、杯類がやや少なく、高杯・鉢・小形土器・甕は少ない。图示以外の土師器および焼粘土塊合計1,567片・13,836gの内訳は、杯673片・3,738g、高杯51片・582g、小形壺2片・26g、壺甕類830片・9,320g、小形土器10片・166g、焼粘土塊1点・4g。固化した以外の土師器甕壺類は底部が7点あり、そのうち長胴甕は2～3点で、他は球胴状と思われた。他に須恵器甕胴部1点(18g)があるが、これはSI-10他で出土している須恵器甕と同一個体の破片が混入したものである。31のように古墳中期の遺物もあり、SI-25とSI-105から混入したとみられる。

第27表 権現山遺跡 SG10区 SI-23 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (高×径)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 15.3 高 4.1 最大 復 15.7	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラズリ。内面はおそらくヘラナデ後にヨコナデし、主に放射状のヘラミガキ。	10YR3/2 黒褐色 やや暗黒 白・黒胎土～細粒多、 白・黒胎土 少 やや破片	北東部 口1/6周、 北東一括
2 土師器 杯	口 復 14.8 高 3.3	口縁部端が鋭く反折する。外面は口縁部ヨコナデ後、体部ヨコヘラズリ。内面ヨコナデ。外面上位と内面に仕上り。	7.5YR8/4 浅黄緑 やや暗黒 黒・灰色胎土～細粒 やや多、白・赤・透明細粒少 やや破片	南東部 口1/36周、体1/6周 北東
3 土師器 杯	口 復 13.0 高 3.3 最大 復 14.1	外面は体部ナデ後ヨコヘラズリ。口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。内外面の下位に黒色物質(腐方)が付着する。現状で仕上りは見られない。	10YR3/2 浅黄緑 やや暗黒 白・赤・灰色胎土～ 細粒と黒・透明細粒少 やや破片	北東部 口1/5周 北東
4 土師器 杯	口 復 16.0 高 3.7	外面は口縁部ヨコナデと中位にヨコヘラズリ後に横～斜位ヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラズリ。外面中位以上と内面に仕上り。	7.5YR4/2 灰褐色 やや暗黒 白・黒胎土～細粒多、 透明細粒少 やや破片	カマド内床土1cm 口1/6周 167
5 土師器 杯	口 復 14.3 高 4.6	残存片数が少ないので復原性は参考値。外面は口縁部ヨコナデ後底部1方向(7)と体部を横位のヘラズリ。内面は体部に放射状と口縁部に横位のヘラミガキ。内面に炭素残骸の黒色処理。	5YR6/6 緑 やや暗黒 白・黒胎土～細粒多、 透明細粒～細粒やや多、赤胎土 少 やや破片	中央北寄りカマド付近 床土15cm 口1/12周、体1/8周 115
6 土師器 高杯	高 5.5 脚部 10.4	外面は脚部部を上方向にタテヘラズリ後、脚部を下方向にタテヘラズリ。脚部内面は平坦なヘラナデ(7)で、炭素残骸による黒色処理。脚部内面は上部に円筒方向のヘラナデ。底部にヨコナデ。	7.5YR6/4 二色～暗 やや暗黒 白・赤胎土～細粒 多、黒・赤・透明細粒少 破片	カマド内床土13cm 脚部2/3周、脚柱全周 108
7 土師器 小形土器	口 復 10.2 高 3.7 最大 復 5.6 最大 復 10.8	厚く薄い。底部も鋭く歪んで成形した可能性があり。外底部中央が凹み、外側へ傾斜する。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR6/8 緑 やや暗黒 白・赤胎土～細粒多、 黒・赤・透明細粒少 やや破片	カマド内床土1cm 体1/6周、底2/3周 165
8 土師器 小形土器	口 復 4.5 高 3.4	組織みがなく、手捏ね成形と思われる。底部は厚い。内外面ともにユネナデ。	10R5/6 赤 鉄質 赤胎土～細粒少 やや破片	北西部 口5/12周 底1 151
9 土師器 小形土器	口 復 2.8 高 4.5	外面は積み上げ面を残す体部ナデの後、体部下位と床面に粗いヘラズリ。内面は円筒方向の鋭なヘラナデ。	10YR7/7 明黄緑 やや暗黒 白・赤胎土と黒・ 透明細粒少 やや破片	南西部2片、北東部1 片 底3/4周 西側、北東
10 土師器 小形土器	高 復 2.2 底 6.4	外表面はカシラと見られる木の葉の裏面外面。外面体部はナメメナデとユネナデ。内面はやや鋭な円筒方向のヘラナデ。内面は炭素を吸着させて黒色処理。	10YR6/2 浅黄緑 やや暗黒 白・透明細粒～細粒 と黒胎土少 やや破片	新設穴内 底1/2周 158、北東
11 土師器 小形甕	口 12.7 高 8.5 最大 13.5	外面は表面が覆れて観察が不明瞭で、胴部は横位のヘラズリまたはヘラナデ。内面胴部ヨコヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。黒炭や腐方は見られない。	7.5YR6/4 二色～暗 やや暗黒 赤胎土～細粒少 やや多、透明細粒少 やや破片	北西部18～20cmで 接合 口3/4周、胴土全周 41、47、50
12 土師器 小形甕	口 17.3 高 22.1 底 6.2 最大 19.9	外面は胴部タテヘラズリ後、外底面に1方向と斜下側面に横位のヘラズリ。内面は多方向と胴部に横位のヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内外面下位が鋭く歪んで中に腐方がある。火に焼いた跡が黒褐色が深い。内面下位にコナデ面あり。	10YR6/6 明黄緑 粗い 灰色胎土多、白・赤・透 明細粒～細粒やや多、赤胎土 少 やや破片	南西部底土12cm 口1/2周、底3/4周、 体全周 151
13 土師器 鉢	口 10.8 高 6.4 底 5.6	外表面は多方向ヘラズリ。外表面は上部4と斜下位ヨコヘラズリ。内面体部はやや鋭なヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	10YR6/4 二色～黄緑 やや暗黒 白胎土～細粒と赤・ 黒胎土少 破片	新設穴内 口1/18周、底全周 74
14 土師器 鉢	口 9.2 高 8.0 底 12.2 重 351.0	胎土に厚みがあり、底部が不定定。外面胴部にごく密い腐方あり。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラズリ。内面は下部に円筒方向、上半に斜位にヘラズリ。内面は口縁部にヨコナデ。断面に示した亀裂が底部の約1/3周に生じて、それを覆うために内面を焼成範囲にヘラミガキをしている。外面は縦線ミガキ面があり、外面の平坦と内面全体が炭素を吸着している。黒色、炭質的に行った可能性が高い。	10YR8/4 浅黄緑 鉄質 赤胎土と黒・透明細粒 少 やや破片	新設穴内 底1/3周 144
15 土師器 甕	口 復 15.0 高 8.7	胴部～肩周の外面が少し厚い。内外面の口縁部ヨコナデ後に胴部を外面ヨコヘラズリと内面ヨコヘラズリ。胴部外面はヨコヘラズリ以前のタテヘラズリが主に上から見られる。	10YR6/6 明黄緑 粗い 白・黒胎土～細粒少 やや多、透明細粒少 破片	南内床土12cm 口5/12周、胴1/4周 151
17 土師器 甕	高 6.1 底 7.2	外表面は外周に上方と斜下で高さ差を醸成、やや鋭なナデ。外面胴部ナメヘラズリ。内面底部ナデと胴部ナメヘラズリ。内外全面灰色だが、腐方や炭質は少ない。	5YR3/4 オリーブ やや暗黒 白・透明細粒～細粒 多、白胎土と黒胎土少 やや破片	カマド内床土1.5cmと北 東部1.12mで接合 底2/3周 111、127
18 土師器 甕	高 復 4.8 底 5.3	外表面は1方向のヘラズリ後に鋭なナデで凹み状。外面はタテヘラズリで中に腐方をヨコヘラズリ。内面はヘラナデが見られるが、磨けて不明瞭。外面が炭質している可能性もあるが不確か。	2.5YR6/8 緑 粗い 赤胎土多、灰色・透 明細粒と白・黒・赤胎土少 破片	新設穴内床土5cm 底3/4周 149、北東

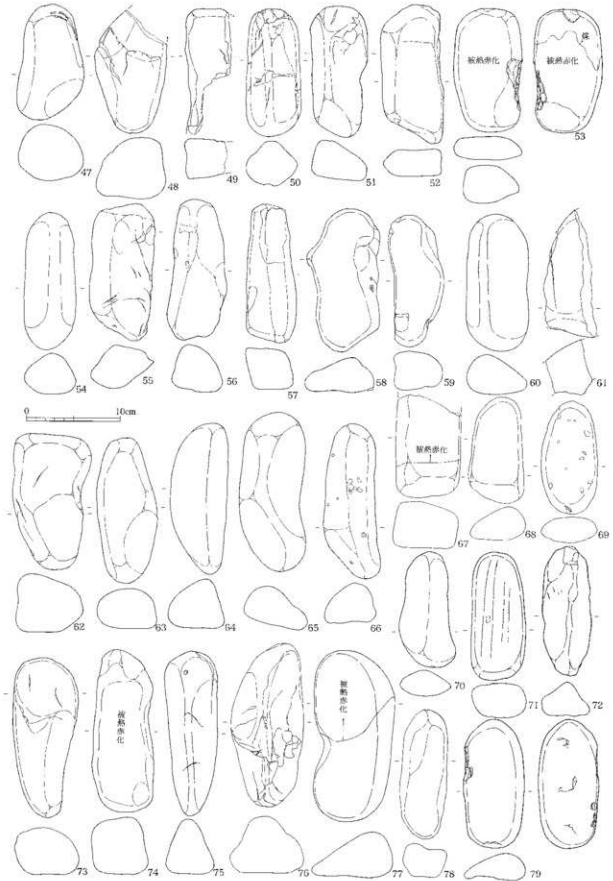


第46図 権現山遺跡SG10区SI-23(3)遺物

19 土師器 甕	口 復 18.9 高 残 5.9	胴部内外面ヨコヘラズナデ、口-頸部ヨコナデ。口縁部の外面と内面上部に 段が付着する。 [注記] 1、25、27、28、北西、K、北東	Y5Y25/4 にぶい、明 やや暗赤 白・黒・透明焼 やや少 やや軟質	高内面径上12cmと中央 ヨコナデ上2～6cmが 重合 口14段、頸1/2周 注記は左欄
20 土師器 土師甕	口 19.2 高 復 18.7 最大 底 24.8	外面は胴部に頸位(部分的に頸位)のヘラズナデ調整と口縁部にヨコナデの後 、密なタテヘラミガキ。内面は胴部ヨコヘラズナデ後に口縁部ヨコナデ、外 面胴部に10cm大以上の黒が残る。火にかけて使った痕は見られない。 [注記] 102、110、112、114、121、K、北西、18.5-17.0出土	Y5Y27/6 緑 調整 白・黒・透明焼 やや多、灰色焼と黒調整少 口針状物焼 やや軟質	中央北寄り床土11～ 20cm、カマドと此部 の各3片も重合 口5/6周、頸一周全周 注記は左欄
21 土師器 土師甕	口 復 32.6 底 4.7 最大 底 16.0	胴部内面タテヘラズナデと内面ヨコナデの間に頸部外面(おそく内面 も)ヨコナデ、胴下下から底部の外面は焼熱で器面が多孔ボロに剥落して調整 不明。 [注記] 164 165 169 K	Y2Y30/8 緑 やや粗い、灰色・透明焼一 細粒と白黒一細粒多、赤・黒黒 一細粒少 硬質	カマド内面部に頸位 (床土上1床土11cm)、 底部はカマド架脚部に 重合 頸全12周、胴下一底 面全周 注記は左欄
22 土師器 甕	高 残 2.3 底 復 6.0	外底面は本部の裏面に面少くして2回付く。外面側下端ヨコヘラズナデ、 内面はナデまたはヘラズナデ。	10Y36/2 灰黄緑 粗い、白・灰色焼一粗粒多、 白・黒黒一細粒少やや軟質	北東部床直上 成全周 145
23 土師器 甕	高 残 2.4 底 復 9.8	外底面はやや密な調整とナデ。外面側下端タテヘラズナデ。内面はヘラズナ デ調整が少し多。胴上位内面に薄く凹み、外面に段が付着。中位以下の外 面は大きく丸面がもたれない。	Y5Y25/4 にぶい、明 やや粗い、白・灰色・透明 一細粒多、赤黒焼一細粒少 硬質	北東部 成1/3周 北東一隅
24 土師器 甕	底 7.8	外底面は雑なナデ。外面側面はやや雑なナメヘラズナデ。内面は底部に多 方向と胴部に横一斜位のヘラズナデ。調整は見られない。	10Y37/4 にぶい、明 やや暗赤 透明焼一細粒多、 黒調整と白黒一細粒やや多 軟質	カマド南床土15cm 成5/6周 109
25 土師器 甕	口 復 17.6 高 30.0 底 4.4 最大 底 19.430	外底面は広く不明確な本底焼。外面口縁部ヨコナデ後に胴部を上方向、胴下 部を下方向へヘラズナデ。内面は下部を多方向と上部を主に東方向のヘラズナ デ後に口縁部ヨコナデ。外面の赤化部は片側が広く、外底面まで赤化する 。内面の片方は両側で薄い。	Y2Y7/3 浅黄 粗い、白・透明焼一細粒と黒 黒一細粒多、赤・灰色粗粒少 やや軟質	カマド内床上25cm 口2/3周、胴全周 162, K
26 土師器 甕	口 復 21.2 高 41.9 底 復 5.4	外底面は不明確な本底焼。外面タテヘラズナデと内面ヨコヘラズナデ、内 面口縁部ヨコナデ。外面側面全体が焼熱するが、元々赤色の土質なので焼 色が不明確。	Y5Y26/6 明赤黒 やや粗い、白・灰色焼一細粒多、 黒・透明焼と3cm以下の赤 黒一細粒やや多、金色帯付粗 一細片少軟質	カマド内径1.1mで頸位 、器口及片端焼付 口7/12周、底3/4周、 頸全周 165, K
27 土師器 甕	口 20.6 高 31.7	外面はタテヘラミガキと胴下付ナメヘラズナデと口縁部ヨコナデ。内面は胴下 位のやや粗い部分とナデヘラズナデ、中位以下は横一斜位ヘラズナデ。口縁 部内面はヨコナデ後に斜くヨコナデ。外面側下部分の扁った位置が焼熱する。	Y5Y26/6 青 やや粗い、白・黒黒一細粒と 透明焼多、灰色粗粒少 やや軟質	カマド南端部に頸位 口全周、胴1～中位全 周 163, K
28 土師器 甕	口 21.0 高 36.0 底 6.4	外底面は斜いヘラズナデ。外面側面は下平にタテヘラズナデ。上平にタテヘラズ ナデを本に行う。内面側面は斜い。内外面口縁部をヨコナデし、古墳 口縁部が少し多。胴上位内面に薄く凹み、外面に段が付着。中位以下の外 面が焼熱する。残存重量 2052.7g。	Y5Y28/6 浅黄緑 粗い、白黒一細粒多、白・ 灰色焼と黒・透明焼一細粒少 軟質	野崎穴東側床上5cm 口1/2周、胴全周、成 全周 149, 野崎穴周辺
29 土師器 甕	口 20.9 高 33.5 底 6.0 重 残 2208.	外底面は多方向ヘラズナデで薄く仕上げ。外面側面上平ナデ後に中位以下 タテヘラズナデ。下端ヨコヘラズナデ。内面側面は斜い。調整はヘラズナデ調整 と下位の横み上げ付止部をヘラズナデで薄くする。内外面口縁部ヨコナデ。底 部外面で調整に相当が付く。外面下平の調整は不明確。 [注記] 149、159、160、161、北東、調整一括	10Y37/4 にぶい、明 やや粗い、白・透明焼一細 粒多、灰色粗粒と黒調整少 やや軟質	カマド東側部上1底 上15cm、野崎穴東側 に1片あり 口全周、成全周、胴下 平1/5左 注記は左欄
30 土師器 大甕	口 復 23.3 高 推測 40 底 7.3 最大 33.9	外面は胴部ヘラズナデヘラズナデの後に横一斜位ヘラミガキ。外底面はヘラズ ナデ。内面はヨコナデナデだが下平部は剥落して不詳。内外面口縁部ヨコ ナデ。上平と下平の接点がなく、下平だけ外面の腹と内面の片が付くので、 下平の破面を割り挿入で気密化に利用した可能性がある。	10Y37/6 明黄緑 粗い、白・黒調整や多、灰 色焼多赤黒粗粒少 やや軟質	上平は野崎穴東上 8～31cm 口全周、成全周 154、159、野崎穴周辺
31 土師器 高杯	高 残 7.4	脚板近くに突縁を持つ。外面は雑なタテヘラミガキで、先が当たった細 線状の面が目立つ。内面はヨコナデ(少し)とヨコヘラズナデ(大半)。古墳 中位の遺物で、S25から戻入した可能性あり。	Y2Y35/8 明赤黒 やや暗赤 白・黒黒一細粒や多、黒・ 透明焼調整 硬質	中央北寄り成上9cm 脚板1/4周、脚板1/4周 68、北西
32 土師器 甕	高 残 3.5	外面は本日平の溝を彫った明赤帯で平行明赤。内面は当耳縁をうっすらと 残し、その上に凹転をむねむい。頸位のキガキを残す。	Y5Y4/1 灰 やや暗赤 白練と白細粒焼 やや軟質	北西部 胴部 北西
34 土師器 甕	口 復 16～22	口縁部外外面に突縁を持つ。口縁部先端を上に向り折れた縁が鮮明。調整 が薄いのて大きな調整ではない。	N5/10 白 やや暗赤 白・灰色焼一細 粒少 硬質	口縁部片
33 土師器 甕	高 残 5.8	外面は斜位の平行明赤の外側にキガキ。内面は同心円文当耳縁で、円の上方 に進行する。破面はぶい・赤黒色(Y5Y25/4)。	N4/10 灰 やや粗い、白・灰色焼一細粒多 やや軟質	北西部 胴部 北西
35 土師器 脚付圓蓋	高 復 16.9 最大 16.7 重 残 1153.0	胴部下位と肩の内面に積み上げ筋あり。体部口縁部ナデ後に外面底部を斜 タテヘラズナデで調整し、2方向に長方向の透窓を開ける。肩部は本 部の凹転面に波長の長い横溝状突起。その凹転は底部のナデと逆方向。胴中 位の外面は浅くキガキあり。肩部凹転の調整は低い調整になる。内面は底部 が多方向ナデと上平の内面になる。胴外面に斜色の凸縁。	Y5Y/1 灰 調整 白練一細粒多 硬質	中央北寄り床土15cm ほぼ反周 70
36 土師器 石瓦	長 10.8 幅 10.3 厚 6.1	自然焼成調整部分別したが、自然に割れた破片を使用。広い破面を対象物に 当てて磨削し、高い部分がかなり平滑に磨削。頸縁部の小割縁も磨削時の衝 突痕と思われる。焼熱はない。重量 841.0g。	Y2Y7/2 浅黄 やや暗赤の調整品も改め調整 を安山岩	中央北寄り床土15cm 形状 86
37 土師器 石瓦	長 17.1 幅 15.3 厚 4.1	扁平な自然焼成をそのまま利用。左側面の中央部が明確に磨削する。右側面は それほど不明確な磨削はなく、磨削も狭い。縁部の小割縁は自然なものである はなく、使用時に磨削が生じてもとのと考えられる。重量 1212.4g。	Y5Y/2 灰赤ブ やや粗い、白・灰色焼一細粒多 やや軟質	野崎穴付近床上10cm 形状 139
38 土師器 扁石	長 15.5 幅 11.1 厚 4.5	断面が三角形の縁は自然焼成をそのまま利用。加工・使用・焼熱痕は見られ ない。扁石として自然焼成。重量 279.0g。	Y2Y7/3 浅黄 調整で破面を浅黄緑	野崎穴付近(因に記入な し) 形状 154
39 土師器 扁石	長 10.7 幅 6.6 厚 4.4	自然焼成をそのまま利用。加工・使用・焼熱痕は見られない。片側の調整は中 心として表面に段が付着する。重量 382.2g。	Y2Y6/1 黄灰 調整で破面を黄灰	野崎穴付近床上15cm 形状 141
40 土師器 扁石	長 8.8 幅 7.3 厚 3.0	扁平な自然焼成割れたもの。扁石として考えるには疑問もある。表面が非常に 強く焼熱しているが、その範囲も赤化の程度は不明確。残存重量 284.4g。	Y2Y6/2 浅黄 調整で破面を浅黄緑	野崎穴付近床上7cm 局部欠 138
41 土師器 扁石	長 13.1 幅 13.0 厚 4.3	片方の調整が550g程度の自然焼成をそのまま利用。加工・使用・焼熱痕は見 られない。重量 550.0g。	Y2Y6/4 にぶい、明 調整で破面をディザイト	中央北寄り床土12cm 形状 94

第5章 権現山遺跡 SG10区

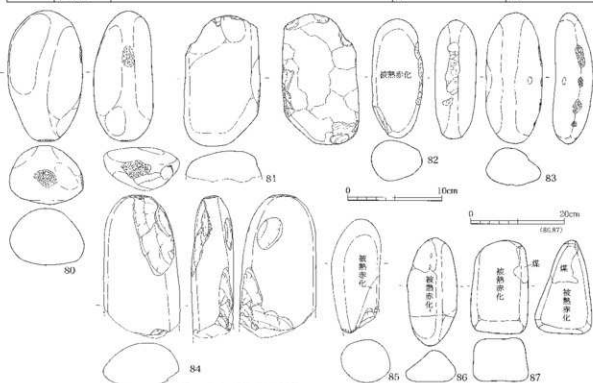
42	長 13.4 石源 幅 6.5 編物石 厚 3.4	自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。重量 424.4g。	5V7/3 浅黄 やや粗粒で硬質な角閃石母岩	中央北寄り床土 17cm 完形 72
43	長 10.7 石源 幅 4.4 編物石 厚 3.9	断面が楕円三角形で棒状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。編物石としては小形で軽い。重量 201.5g。	5Y6/1 灰 細密で硬質な流紋岩	中央床土 6cm 完形 33
44	長 12.5 石源 幅 6.1 編物石 厚 3.6	片面に丸縁を持つ棒状の自然礫をそのまま利用。中央部の亀裂が両面にわたるほど広く生じているが、崩壊や使用・被熱風は見られない。重量 382.4g。	2Y5/2/2 黄灰 石炭質がやや目立つ硬質な流紋岩	中央西寄り床土 19cm 完形 31
45	長 13.4 石源 幅 5.4 編物石 厚 4.0	断面が楕円三角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。重量 383.0g。	10Y8/4 浅黄褐色 石炭質がやや目立つ硬質な流紋岩	北西床土 14cm 完形 73
46	長 14.1 石源 幅 7.3 編物石 厚 3.4	断面が方形の扁平な自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。重量 431.2g。	5V7/2 灰白 やや粗粒で硬質な流紋岩	中央北寄り床土 9cm 完形 88
47	長 11.9 石源 幅 6.9 編物石? 厚 5.9	自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。丸縁が揃って丸縁が平行しない知りないので、編物石と考えるには疑問もある。重量 699.4g。	2S7/3 浅黄 やや粗粒で硬質なサイト	中央北寄り床土 14cm 完形 76
48	長 残 12.7 石源 幅 残 7.6 編物石? 厚 6.4	自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。不整形で分厚く、編物石と考えるには疑問もある。重量 723.9g。	2Y5/2 灰黄 細密で硬質な流紋岩	南西床土 8cm 崩壊欠 7
49	長 13.2 石源 幅 残 4.9 編物石 厚 残 4.7	断面が長方形の自然礫をそのまま利用。残っている範囲に加工・使用・被熱風は見られない。重量 339.0g。	2S7/1 灰白 やや粗粒で硬質な母岩	中央北寄りコマ下付床土 1.6cm 約 1/2 欠 116
50	長 13.4 石源 幅 5.8 編物石 厚 4.9	断面が楕円方形または楕円形状の細長い自然礫を利用。加工・使用・被熱風は見られない。両端から少し削れているのは人為的な使用痕ではないと思われ。重量 469.7g。	2Y5/3 にぶい黄 褐色の目立つ流紋岩または礫岩	南西穴付床土 10cm はばり厚 両端部少し削れる 140
51	長 13.8 石源 幅 6.0 編物石 厚 4.5	断面が三角形の自然礫をそのまま利用。両の右側縁部から裏面側にかけての部分がかげられ形。加工・使用・被熱風は見られない。重量 469.1g。	2Y4/2 黄灰黄 チャート起源の細密で硬質なホルンフェルス	中央北寄り床土 9cm 完形 90
52	長 14.6 石源 幅 6.6 編物石 厚 3.0	断面が長方形のやや強い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。重量 479.0g。	5B4/1 暗黄褐色 チャート起源の細密で硬質なホルンフェルス	中央北寄り床土 8cm 完形 89
53	長 12.0 石源 幅 7.2 編物石 厚 4.0	塊の上部がやや強い自然礫。ほぼ全面が被熱風。右側の面には腐付層も残る。先端と側面に割れが見られる。重量 452.4g。	5Y5/1 灰 細密で硬質な安山岩	F3 北西床土 17cm 完形 4
54	長 14.3 石源 幅 5.5 編物石 厚 4.3	断面が三角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。重量 476.2g。	10Y8/4 にぶい黄褐色 細密で非形な自然礫岩	中央北寄り床土 12cm 完形 105
55	長 14.4 石源 幅 6.6 編物石 厚 4.5	断面が不整四角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。重量 665.8g。	N6/0 灰 ホルンフェルス	北東東側床土上 完形 146
56	長 14.7 石源 幅 6.3 編物石 厚 5.4	断面が三角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。重量 558.9g。	2Y5/2 灰黄 細密の目立つ流紋岩または礫岩	中央北寄り床土 14cm 完形 84
57	長 残 14.0 石源 幅 残 5.3 編物石 厚 4.7	断面が方形の自然礫をそのまま利用。縦に2つに割れているが接合できる。加工・使用・被熱風は見られない。現存重量 529.8g。	2Y5/3 にぶい黄 褐色で硬質な流紋岩	中央北寄り床土 5cmの2 片が接合 完形 12, 13
58	長 15.1 石源 幅 7.7 編物石 厚 3.7	両示した面に丸縁が強い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。重量 547.3g。	7Y5/1 灰 表層起源の細密で硬質なホルンフェルス	コマ下付床土 12cm 完形 107
59	長 13.8 石源 幅 5.9 編物石 厚 4.6	断面が不整四角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。重量 489.1g。	2Y5/2 灰黄 細密で硬質な流紋岩	中央北寄り床土 11cm 完形 92
60	長 14.3 石源 幅 6.6 編物石 厚 4.4	断面が三角形に近い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。重量 626.2g。	2S7/2 灰黄 やや多孔質気味で硬質なサイト	南西穴付床土 12cm 完形 148
61	長 13.3 石源 幅 5.6 編物石? 厚 5.7	両の左右両側縁が折れた様。両示した面には自然面が、両の反対面にはくぼみ面が残っている。このような割れた様を編物石として使ったかどうかは疑問が残る。加工・使用・被熱風は見られない。重量 395.5g。	7Y5/1 灰 やや粗粒で硬質な石炭質母岩	北西床土 13cm 完形 71
62	長 14.2 石源 幅 8.3 編物石 厚 6.2	両示した面の反対面が比較的平坦になる自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。編物石としてはかなり重い。重量 1106.0g。	2S6/5/1 オリーブ 灰 粗密で硬質なホルンフェルス	中央北寄りコマ下付床土 15cm 完形 117
63	長 15.2 石源 幅 6.3 編物石 厚 4.6	断面が楕円形で棒状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。重量 612.1g。	7Y5/1 灰 多角質で硬質な安山岩	北西床土 12cm 完形 117
64	長 15.8 石源 幅 6.0 編物石 厚 5.2	断面が三角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。重量 650.0g。	5V6/2 灰オリーブ 細密でやや硬質なサイト	コマ下付床土 17cm 完形 118
65	長 16.6 石源 幅 6.9 編物石 厚 4.9	平面形・側面ともに中央部で少し曲がる形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。重量 774.9g。	2Y5/2 灰黄 やや多孔質気味で硬質な安山岩	中央床土 12cm 完形 63
66	長 16.0 石源 幅 5.6 編物石 厚 5.3	断面が平坦状に近い自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。重量 469.6g。	2Y5/1 黄灰 接層岩の多い硬質な流紋岩または礫岩	中央北寄り床土 12cm 完形 66
67	長 残 10.7 石源 幅 残 6.9 編物石? 厚 4.8	断面が四角形で棒状の自然礫。編物石と考えると疑問もある。両上部分の全周が割れて被熱風化している。上端は欠失していて、この断面には被熱風化がない。現存重量 668.4g。	2Y5/2 灰黄 粗密で硬質な安山岩	中央北寄りコマ下付床土 8cm 崩壊欠 95
68	長 11.1 石源 幅 5.8 編物石 厚 3.7	棒状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。編物石としては小形。重量 331.3g。	10Y8/4 にぶい黄褐色 やや多孔質で硬質な流紋岩	中央北寄り床土 7cm 完形 14
69	長 11.8 石源 幅 6.0 編物石 厚 2.8	塊・棒状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。編物石としては軽い。重量 250.4g。	5V7/1 灰白 多孔質気味で硬質な安山岩	南西穴付床土 13cm 完形 126
70	長 12.0 石源 幅 6.0 編物石 厚 3.1	扁平な自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱風は見られない。編物石としては軽い。重量 240.0g。	5V7/2 灰白 細密で硬質な石炭質母岩	中央東寄り床土 7cm 完形 20
71	長 13.4 石源 幅 5.7 編物石 厚 3.5	断面が長方形気味の自然礫をそのまま利用。素材の岩石に由来する立方形の浅い凹みか両面に現れ、人為的な加工ではない。使用痕や被熱風は見られない。重量 485.3g。	5Y6/1 灰 安山岩	南西床土 11cm 完形 24



第47図 権現山遺跡 SG10区 SI-23(4) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10区

72 石函 脇物石	長 13.6 幅 5.1 厚 4.4	断面が三角形の自然産を利用。頂の上半部で表面両側が欠けているが、人為的な敲打による剥離ではない可能性のほうが高い。他には使用・焼熟痕は見られない。残存重量348.4g。	10YR7/6 明黄褐色 非常に緻密で硬質な流紋岩	中央床土12cm 層部C 61
73 石函 脇物石	長 16.7 幅 6.8 厚 5.0	断面が頂の上部で平円状、下部で台形状の自然産をそのまま利用。加工・使用・焼熟痕は見られない。残存重量722.3g。	2.5Y7/2 浅黄 やや多孔質気味で硬質なデイスサイト	南西床土8cm 完形 7
74 石函 脇物石	長 17.0 幅 6.7 厚 6.8	断面が四角形で頂の右側が少しくびれ、手前縁が薄くなる自然産をそのまま利用。加工・使用痕は見られない。全面が強く焼熟して赤色化している。重畳1053.3g。	5YR4/6 赤褐色 緻密で硬質な流紋岩	かま下付返床土11cm 完形 106
75 石函 脇物石	長 17.2 幅 5.5 厚 5.8	断面が三角形で、両端より頂の中央部が高い自然産をそのまま利用。加工・使用・焼熟痕は見られない。重量664.3g。	10YR6/4 に近い黄褐色 緻密で硬質な流紋岩	例に記入なし。野塚穴床土149下の石と推定。重量153
76 石函 脇物石	長 17.2 幅 7.7 厚 6.0	断面が不整三角形の自然産をそのまま利用。加工・使用・焼熟痕は見られない。重量966.1g。	5Y6/2 灰やクレープ 緻密で硬質なデイスサイト	北西床土55cm 完形 55
77 石函 脇物石	長 18.0 幅 8.5 厚 4.9	断面が楕丸二重辺三角形で、頂の右側縁が厚い自然産をそのまま利用。頂と頂面の約1/2～1/3がよく焼熟して赤色化している。加工・使用痕は見られない。重量944.5g。	2.5Y7/4 浅黄 緻密で硬質な流紋岩	北西床土22cm 完形 57
78 石函 脇物石	長 13.7 幅 4.9 厚 3.7	断面が内部の自然産をそのまま利用。加工・使用・焼熟痕は見られない。重量381.0g。	10Y7/1 灰白 やや緻密(少し多孔質気味)で硬質な流紋岩	中央北寄り床土12cm 完形 93
79 石函 脇物石	長 13.5 幅 6.4 厚 2.8	薄い不整形な自然産を利用。一側縁の表面に剥離あり。これ以外の加工・使用・焼熟痕は見られない。重量355.9g。	5Y6/1 灰 緻密で硬質な安山岩	中央北寄り床土5cm 完形 57
80 石函 脇物石	長 13.7 幅 7.9 厚 6.2	厚手で尖味のある自然産を利用。頂示した下面中央と右側縁上部に敲打痕が残っている。加工・焼熟痕は見られない。重量942.9g。	7.5Y7/1 灰白 多孔質気味で硬質な安山岩	中央北寄り床土8cm 完形 64
81 石函 脇物石	長 13.5 幅 7.9 厚 3.1 (最大3.5)	片面に尖味を持ち、反対面は古い時期の割れ面になっている扁平な自然産を利用。外縁の頂面に剥離と敲打痕が見られる。焼熟痕は見られない。かなり扁平で輪が広いので、脇物石として使った可能性は低い。重量324.9g。	2.5Y6/1 黄灰 緻密で比較硬質な安山岩	北西部床土15cm 完形 39
82 石函 脇物石	長 12.5 幅 5.3 厚 4.2	断面が楕円形状の自然産をそのまま利用。頂示した頂縁に凹みがあり。表面全体が焼熟して赤色化している。重量394.0g。	10YR6/3 に近い黄褐色 やや多孔質気味で硬質な流紋岩	中央北寄りかま下付返床土15cm 完形 120 39
83 石函 脇物石	長 13.8 幅 5.9 厚 4.2	両端より中央部が少し薄くなる自然産を利用。頂の右側縁で4箇所に敲打痕が見られる。この他に加工・焼熟痕は見られない。重量457.4g。	5Y6/1 灰 緻密で硬質な安山岩	中央北寄り床土13cm 完形 83
84 石函 脇物石	長 狭 14.9 幅 8.0 厚 4.4	断面楕円形の自然産の先端と側縁に敲打痕と、それによって生じた剥離も見られる。頂と端が折面している形のまま使用したともみられる。下部の剥離は折面に生じたのであろう。重量805.9g。	2.5Y7/3 浅黄 緻密で硬質な安山岩	中央北寄り床土14cm 層部C 91
85 石函 脇物石	長 狭 11.5 幅 5.2 厚 4.4	断面門字形の自然産。一部頂に折れた破損面。その破面は軽く敲打して縁がよけ、また頂部に剥離が生じている。これらの破面や剥離面とその周辺が焼熟して明瞭に赤色化している。残存重量376.7g。	10Y7/6 明黄褐色 緻密で硬質な石英斑岩	中央床土12cm 完形 32
86 石函 脇物石	長 22.5 幅 10.5 厚 7.0	断面が三角形の自然産。全周ともに約2/3の範囲が強く焼熟して赤色化している。加工・使用痕は見られない。支脚に使った可能性もある。重量2001.9g。	2.5Y6/3 に近い黄 やや粗粒で硬質な石英斑岩	南西床土15cm 完形 10
87 石函 脇物石	長 19.5 幅 12.0 厚 12.0	断面が長方形で、片縁が薄くなる形の自然産。全面が焼熟赤化し、一部に僅か凹凸する。かま下縁部材とも考えられる。重量4200.0g。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや多孔質気味で硬質な安山岩	かま下内床土10cm 完形 172



第48図 権現山遺跡 SG10区 SI-23 (5) 遺物

SG10区 SI-24 (第49図、写真図版79・194)

【位置】 SG10区南部の18-16および19-16グリッドにある。同じく古墳後期のSI-22が南にある。北に古墳中期のSI-28が近接する。古墳中期SI-25→後期後葉SI-24→後期末葉SI-23→平安時代SI-90→時期不明SE-236の順に重複する。古墳時代と推定される柱穴状土坑P-314・315・325・326・330・331と重複する位置にあるが、SI-24との前後関係は、後期末のSI-23が重複しているために不明である。

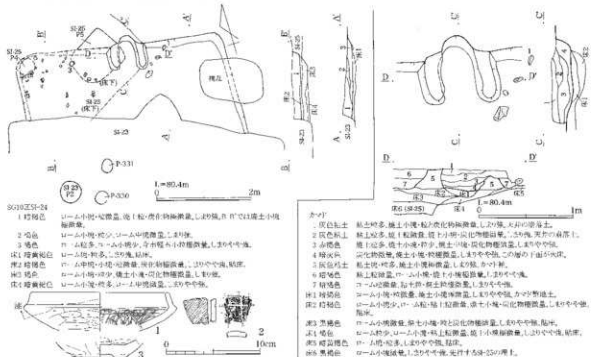
【規模と形状】 方形と推定され、主軸方位はGN-6°・E。東西長4.58m、南北の残存長2.26m、残存壁高6cm(東部)～16cm(北西部)。床面に柱穴がないとも考えられるが、北東部の掘乱坑、先行するSI-25の貯蔵穴、後行するSI-23貯蔵穴などが重なるので柱穴を確認できなかったのかもしれない。貼床の厚さは4～16cmで、場所により異なる。入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝は、残存部には見られない。

【カマド】 北壁中央にある。SI-25跡地の窪みを厚めの床2～5層で整地後、カマド西端を作る。西袖下層はSI-25貯蔵穴P5の窪地があるので貼床が厚い(断面D-D')。両袖幅83cm、煙道先端から袖先端まで73cm。袖粘土や、カマド下部の床1～4層にも焼土小塊を僅かに含むので、作り替えたことを想定できる。火床面に3・4層が堆積後、天井が崩れた1・2層が載る。燃焼部埋土に焼土・遺物が少ない。

【覆土】 断面A-A'を見ると自然埋没状態で、1層にカマドから流出した焼土粒を含むこともその可能性を支持する。時期が接近するSI-23に切られるが、そのためにSI-24を人為的に埋め戻していることは、残存する埋土に関しては考えにくい。古墳時代テフラの可能性のある白色粒などは認められない。覆土3層中の今市軽石は、縄文草創期に降下したテフラの粒が地山から流入したものである。

【遺物および出土状況】 遺物は少なめで、北西部にやや多い。先行するSI-25からの混入品が多い。図示した以外でSI-24に伴うと考えられる遺物は少量の土師器杯で、他に土師器壺もあると思われるが明確に混入品と識別できない。高杯7片はSI-25からの混入であろう。図示以外の土師器合計187片・1.141gの内訳は、杯96片・347g、高杯7片・30g、鉢4片・46g、小形壺17片・112g、甕壺類63片・606g。

土師器杯(1)は口縁端や体部が磨耗している。この土師器杯がSI-24に伴うと考えれば、SI-24を切るSI-23との時期差は短い。2はSI-25から混入した疑いもある杯で、外面に格子状の刻線がある。3は製作時に胴部が変形したまま焼成した甕。



第49図 権現山遺跡SG10区 SI-24 遺構・遺物

第28表 権現山遺跡 SG10 区 SI-24 出土遺物

番号 種類 種類	大きさ 寸法・型	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師 杯	口 径 14.6 高 残 4.1 最大 径 16.1	外面は口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデ後に体部を装束状ヘラミガキ。体部上位に側面を空けたヨコヘラミガキ。外面上半と内面全体に漆仕上げ。	7.5YR6/0 青 やや磁漉 黒・透明釉～細粒 多。白磁粒少 やや磁漉	カマド裏側貯蔵床土 8cm 口～体 1/2 周 1
2 土師 杯 7	高 残 2.8	外面にヘラケズリ。内面に密なヘラミガキ。焼成後に外面に指状の刻痕をむすろく金属の工具で入れている。胴の上辺と左右両側は斜割に割って別れた面。	10YR7/4 に近い黄緑 磁漉 白磁粒と褐色粒～細粒少 やや磁漉	体部片一部 一括
3 土師 壺	高 残 2.2 底 5.7	外面は外周に粘土線を彫り付け。中央が凹む。外面胴部ナナメナデ。内面は底部に横な1方向ナデ。胴下縁に内周方向のナデ。胴部下縁が成形時に歪んで変形した部分あり。	7.5YR6/4 に近い黄 やや磁漉 白・赤粒～細粒多 灰色粒～細粒やや多 やや磁漉	北西部貯蔵床直上 底全埋 13

SG10 区 SI-25 (第 50～53 図、写真図版 79・80・194・195)

【位置】 SG10 区南部の 18-16 および 19-16・17 グリッドにある。同じく古墳中期の SI-18 と SI-105 が南にある。古墳中期の建物同士で SI-25→SI-28・SI-38 の重複関係が推定される(ただし、各重複状況の断面図は作成されていない)。南側では、古墳中期 SI-25→後期後葉 SI-24→後期末葉 SI-23→平安時代 SI-90→時期不明 SE-236 の順に重複する。時期不明の溝 SD-283 に切られる。P1 の南東にある径 25cm の小穴(旧名称 SK-423)は攪乱と判明して欠番になり、この小穴の遺物は SI-25 からの混入品として扱った。

【規模と形状】 方形の建物跡で主軸方位は GN-31°-W。東西 7.40×南北 7.26m、残存壁高は 8～22cm。主柱穴は 4 本の方形配置で、柱穴の方位は堅穴主軸よりも 5°ほど東に触れる (GN-26°-W)。柱間は東西 3.56m (南側)～3.75m (北側)、南北 3.46m (東側)～3.54m (西側)で、北西主柱穴 P2 が少し外側に出る。床面から柱穴底までの深さは P1=47cm、P2=52cm、P3=64cm、P4=66cm。南西主柱穴 P3 の北側にある P7 は床面から深さ 22cm (断面図 G-G')。南東主柱穴 P4 の南側にある P8 は貼土除去後に確認した柱穴で、深さは床面から 29cm (掘方から 15cm)。

貯蔵穴 P5 は南東隅にあり、東西 104×南北 92×深さ 27cm。入口ピットの可能性がある P6 は床面から深さ 32cm。そのすぐ南にある入口施設は、東西 258cm 以上×南北 142cm の範囲が床面より 2～6cm 低くなる。入口部が低い点は SI-60 に似る。貯蔵穴 P5 の北側と西側を幅約 60cm・高さ 4～7cm の土手状盛土が囲み、P8 の北側では入口施設のある西方へ少し伸びる。この盛土は、ロームに似た明黄色土の硬い塊を貼り、幅が広いので土手状というより面的な盛土である。壁溝・間仕切溝はない。

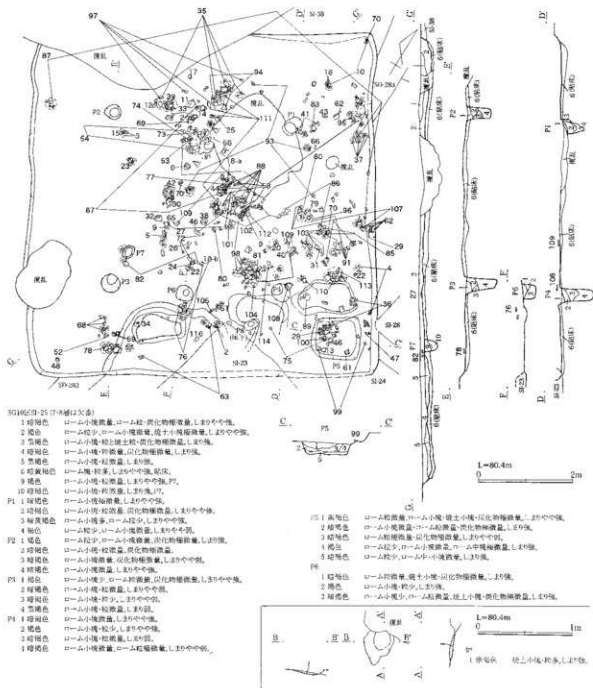
【炉】 堅穴中央から少し北西に寄った位置にあり、北端が攪乱されている。長径残存 68cm×短径 63cm、床面からの深さ 5～10cm で北東部が深い。焼土の塊・粒で埋まっている。

【覆土】 自然埋没と思われる。テフラの層や粒は認められない。貯蔵穴 P5 の覆土も自然埋没である。

【遺物出土状況】 貯蔵穴底から少し浮いて残存度の高い高杯脚 (61) や杯 (7・13・28) があり、最下層上面付近に多い (断面 C-C')。貯蔵穴北側にも遺物が多く、109・62 のように東壁側の高い位置に大破片があるので、東側から廃棄あるいは流入したものを含む。南西部でも床から少し浮いた遺物群があり、内面を上に向けて割れ広がった状態の高杯杯部がある (76・78 など)。中央部では大攪乱坑の南と北西で床から少し浮いた遺物が多い。重複する古墳後期の建物 SI-23 で出土した中期の高杯は、SI-25 から混入した疑いがある。遺構間接合遺物としては、SI-25 床付近出土品 (SI-25-36) が SI-66 上層の破片 (SI-66-27) と接合した。SI-25 の遺物破片が、北へ 65m 離れた SI-66 の上層に廃棄または流入したのであろう。

【出土遺物】 出土遺物は非常に多く、SG10 区の遺構中でも最多クラスである。図示以外の土師器合計 1,335 片・12,280g の内訳は、杯 403 片・2,338g、高杯 568 片・4,432g、小形壺 60 片・656g、壺蓋類 304 片・4,854g。

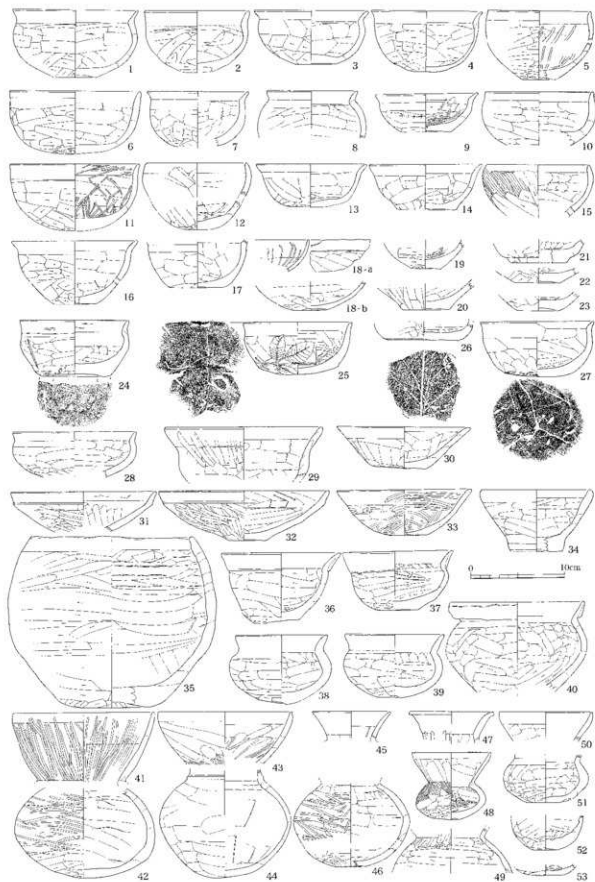
図示以外の杯は内斜口縁椀形杯が多い。9・14・24・26・27 は体部下外面のケズリを省いたために底部が大きい杯。25 の体～底部と 26・27 の底面に木葉痕を残す。高杯・鉢・小形壺もやや多い。40 は貼付口縁の鉢。44 は小形壺の頸部に突帯を持つ。杯部内外面をよく磨く高杯が多く、少し短脚化した高杯も含む。



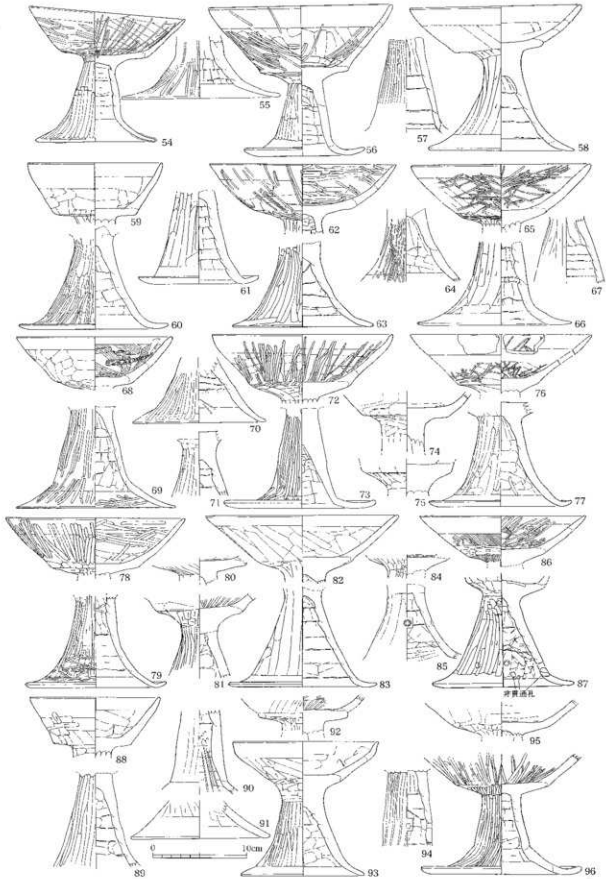
第50図 権現山遺跡SG10区SI-25(1)遺構

脚に貫通孔や非貫通孔を持つ高杯が3点ある(85・87・94)。非貫通孔はSG5区SI-5・15・116と、北関東自動車道調査A区SI-080・139・遺構外(谷中・大島2001,pp.178,211,436)、杉村遺跡北関東道27・70号住居(藤田・安藤2000)にある。貫通孔はSG10区ではSI-16とSK-346・SK-903や低地古墳時代遺物包含層にあり、SG5区SI-5、権現山遺跡北部のSG1区居館周辺複乱、北関東自動車道調査A区SI-081・229・326にもある。

壺表類は割合としてはやや少なめで、貼付口縁や二重口縁・受口状口縁など異形のものが目立つ。36と37は類似した鉢で、36はSI-66との遺構間接合品。97・108は頸部外面に接合痕を残す。107と109は凹底状の小形甕。110は外面の偏った位置にヘラミガキを施すが、補修痕などは明らかでない。111は壺

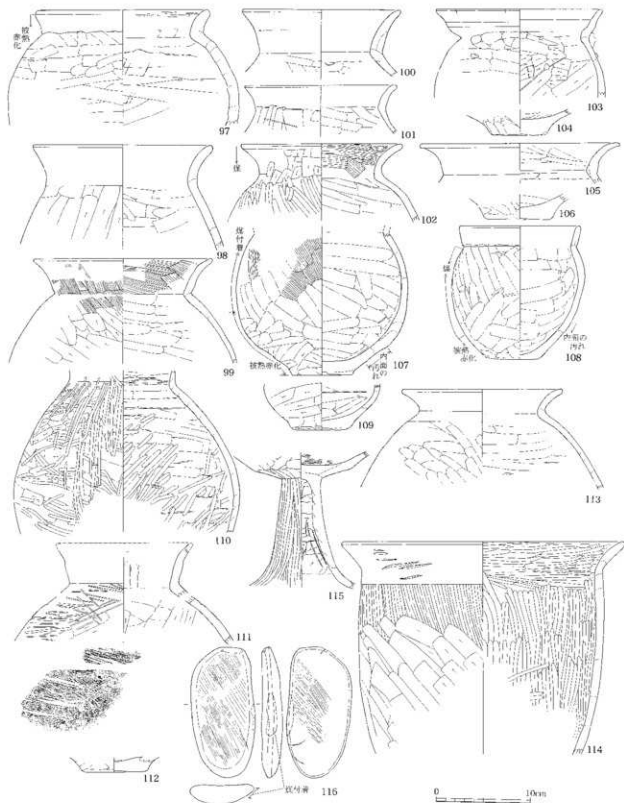


第51図 権現山遺跡 SG10区 SI-25(2) 遺物



第52図 権現山遺跡 SG10区 SI-25(3) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第53図 権現山遺跡 SG10 区 SI-25 (4) 遺物

の肩部外面を研磨具に転用したと思われる焼成後の平行刻線がある。97の丸い甕と35の大形鉢は厚さ・胎土・調整がよく似ている。貼付口縁の鉢(36・37・40)は、古墳時代土坑SK-261bにもある。

補修痕跡のある土器が目立つ。9は焼成前に生じた亀裂をミガキで補修したが、内面の亀裂を消しきれ

なかった不良品の杯。54は脚部部内外面と杯底部内面の亀裂を粘土やヘラミガキで補修している。103はS字形(受口状)口縁部が成形時に外へ開き始めたので粘土塊を貼り付けて支え、口縁部ヨコナデも不十分なまま焼成した不良品の甕。受口状口縁の壺はSG10区SI-19aなどにある。補修痕のある土師器は、SG10区ではSI-6などにある。補修痕以外に、焼成剥離(2)や木葉痕の消し忘れ(26・27)も不良品として評価できるかもしれない。25は側面～底面に3枚の木葉痕を最後に押しつけた杯で、製作者が自家消費用に作ったことを想像させる。116は非常に硬質なホルンフェルス製の砥石で、SG10区SI-12などに例がある。長脚化した高杯(115)やハケ調整大形甕(114)は、SI-24などから混入した古墳後期の遺物と考えられる。

第29表 権現山遺跡SG10区SI-25出土遺物

番号 種類	大きさ [cm・g]	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復13.3 高 7.1 底 復4.5	薄く軽い。外底面はナデ字上げて凹底状。外面は体部上位ナデ後に中～下位ヘラケズリ。口～頸部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。外面の電圧線が部分的に付着する。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや強い 赤黒～黒粒多、白・黒 透明～黒粒少 中や破質	北東脚部直上～直上14cm 口1/2周、底1/8周 注記は左欄
2 土師器 杯	口 復11.2 高 復5.5	外面は口縁部ヨコナデ後に体部を横～斜位ヘラケズリ。内面は体部に丁寧な横～斜位ナデの後、口縁部ヨコナデ。外底面の剥離部は、胎土中に埋め込んでいた草木植物の部分が削がれているので、焼成時に生じた亀裂から確認したものが生じた。内外面の体部が同一位に進行し、ほぼ同時に完成。	7.5YR6/4 に近い黄褐色 やや強い 赤黒～黒粒と白・黒・透明～黒粒少	北西直上5～7cmと南東直上7cmで接合 口1/8周、体1/6周 口1/3、2/6、南面～北
3 土師器 杯	口 復12.0 高 5.7 底 4.2	外底面は1方向ヘラケズリではぼやけた。外面体部は上ナデ後に下ヘラケズリ。内面底部に1方向と体部に横位のナデ。内外面の口縁部はヨコナデ。	5YR6/8 緑 やや強い 白・赤黒～黒粒多、黒・透明～黒粒少 やや軟質	中央部直直上の2片が接合 口1/4周、底全周 約、50
4 土師器 杯	口 復11.7 高 6.4	非常に薄く軽い。外面は体部上位ナデ後に中位以下ヘラケズリ。内面は底部に1方向、体部を横～斜位のヘラケズリ。内外面の口縁部はヨコナデ。注記138、259、371、一様。胎土、東中上面	10YR6/4 に近い黄褐色 やや強い 赤・灰色、透明～黒粒と白～黒粒少 やや破質	北東直上1～南西直上1～直上6cmと中央上面に6枚片あり 口1/2周、脚2/3周 注記は左欄
5 土師器 杯	口 復11.0 高 復7.3 底 復3.5 最大 復11.4	外底面は1方向ヘラケズリで凹底状。外面体部は上ナデ後に中位以下をヨコナデナデし、口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコナデ後に口縁部ヨコナデと体部ナメヘラケズリ。外面体部に焼成時の大きな黒痕がある。	2.5YR7/8 緑 やや強い 赤黒～黒粒多、白・黒・透明～黒粒少 やや軟質	中央部直上10cm 口1/6周、底1/3周、 底2/3周 82、A・A・キンド
6 土師器 杯	口 13.9 高 6.7 重 復224.6	底部がやや厚く、体部下位が薄い。外面は口縁部ヨコナデ後に底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部ヨコナデと底部1方向ヘラケズリの後に口縁部ヨコナデ。内面のヘラミガキは現状では認められない。11と類似。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや強い 赤・透明～黒粒多、白・黒・透明～黒粒少 やや軟質	中央部直上3cm 口2/3周 48
7 土師器 杯	口 復10.6 高 復5.8	外面は体部上位ナデと下ヘラケズリの後に口～頸部ヨコナデ。内面は体部に横位と底部に1方向のヘラケズリ後に口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/8 黄褐色 やや強い 黒粒～黒粒多、白・赤・透明～黒粒少 軟質	新成沢直上6cm 口1/6周、脚1/3周 382
8 土師器 杯	口 復9.6 高 復5.0 最大 復11.4	外面は口～頸部ヨコナデ、頸部ヨコナデナデ。外面下平はヘラケズリかナデ字であるが、磨滅して不明確。内面は体部ヨコナデナデ、口縁部ヨコナデ。	2.5Y3.5 暗黄褐色 やや強い 白・透明～黒粒少 やや多、白濁と赤・黒粒少 やや破質	東部中央上面 口1/6周、脚1/4周 東中上面
9 土師器 杯	口 10.0 高 4.6 底 5.2 重 復139.5	底部内外面はほぼ1方向の密なミガキで、焼成前に底部内面に生じた亀裂を補修している。結果として内面の亀裂を窺うことができていないが、外面まで貫通することは回遊できている。体部外面ナデと内面ヨコナデの後に口縁部内外ヨコナデ。	5YR6/8 緑 やや強い 赤黒～黒粒多、黒・透明～黒粒と白粒少 やや軟質	中央直上2cm 口11/12周、底～全周 357
10 土師器 杯	口 復11.5 高 復5.7 最大 復11.9	外面が凹底状で内面は平底状。内外面体部ヨコナデナデ。内面底部に1方向か多方向のヘラケズリ。内外面の口縁部をヨコナデし、体部との境に強い線を付す。	7.5YR8/4 黄褐色 やや強い 白濁～黒粒と赤・黒粒少 やや軟質	北部中央直上21cmと北東脚部直上15cmが接合 口1/12周、体1/4周 174、368
11 土師器 杯	口 13.8 高 7.1 重 復300.4	下部が厚い。内外面の口～体部間にはほとんど線を付たす。口縁が高く外反する。外面は口縁部ヨコナデ後に、底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部ヨコナデ後に口縁部をヨコナデ。内面の体部に横～斜位と口縁部に横位のヘラミガキ。6と類似。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや強い 赤黒～黒粒多、白・黒・透明～黒粒少 やや破質	北西直上8cmで横位 口11/12周、体全周 20
12 土師器 杯	口 復10.2 高 復6.8	口縁部破片と底部破片の接点がないので器高は推定。外面は口縁部ヨコナデ後にヘラケズリ。底部多方向ヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。	5YR6/8 緑 やや強い 赤黒～黒粒と白・黒・透明～黒粒少 硬質	北西直上2～8cm 口1/6周、底全周 16、24
13 土師器 杯	口 復11.7 高 4.6 底 6.0	薄く軽い。外面面は多方向ヘラケズリ。外面は体部に横～斜位ナデ。口～頸部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	2.5YR7/8 緑 やや強い 赤黒～黒粒少 やや軟質	新成沢直上14cm 口1/6周、底5/12周 377
14 土師器 杯	口 12.0 高 4.8 底 6.1 重 復148.9	頸部の線が内面で特に明瞭。外底面は多方向へラケズリの後に横なナデで、残れて貼り付いた砥石上方が外面部で自立す。外面は体部上部で磨滅。その上部は横位のヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部はヨコナデ。	10R6/8 赤褐色 やや強い 白・黒・赤黒～黒粒多、透明～黒粒少 やや破質	北西直上8cm 口1/6周、体全周 16
15 土師器 杯	口 復10.8 高 復5.5 底 復11.8	外面は口縁部ヨコナデ後に体部を非常に浅いナメヘラケズリ。下部をナメヘラケズリ。内面は下部ナメヘラケズリ後に上部をナメ調整し、口縁部ヨコナデ。外面の磨り跡に後成時の黒痕あり。	5YR6/6 緑 やや強い 白・赤・透明～黒粒少	中央部直直上10cm 口5/12周 約、西一様
16 土師器 杯	口 復 8.4 高 6.7 底 4.3	体～底面破片の接点がないので器高は推定。外面面はナデではぼやけた。外面体部ヨコナデナデ。内面は底部多方向ヘラケズリ。体部ヨコナデナデ。内外面の口縁部はヨコナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや強い 赤黒粒やや多、白・黒・赤黒粒少 中や破質	北部直上20～21cm 口1/36周、底1/3周 173、175
17 土師器 杯	高 復4.9 底 復5.9	頸部内面で明瞭に外へ折れる。外面は体部ナデ後に体部下端ヨコナデナデ。外底面は1方向ヘラケズリ。頸部ヨコナデ。内面は体部を横～斜位ヘラケズリ後に頸部ヨコナデ。	5YR6/6 緑 やや強い 白・黒・赤黒粒と白・透明～黒粒少 中や破質	北西脚部直上13cm 底1/3周 5

第5章 権現山遺跡 SG10区

18a-b土師器	口 復 12~14 高 3.5 底 4~5	口縁部は1片だけで、往を出すには残存度が小さく、体部との接点もない。非常に薄く軽い。外面は多方向ヘラケズリで凹状。内面体部ナメナメ後には上部を横へ斜位へラケズリ、口縁部ヨコナテ。内面体部ナメナメ後には口縁部ヨコナテと疎らなタテハミナテ。	25YR6/8 橙 やや暗褐色 白釉~黒粒少、透明黒粒微量	南西段上3~10cm 口1/8周、底5/6 94、117、156、328 やや破損
19土師器	高 残 3.1 底 3.0	外面は多方向ヘラケズリでわずかに凹状。表面体部ヨコヘラケズリ。内面底部は多方向ヘラケズリの後に向方ヘラケズリ。	5YR5/6 明赤褐色 やや暗褐色 赤粒多、白・黒・透明黒粒少 破損	遺構上面 4~6周 上面
20土師器	高 残 3.2 底 4.8	外面は中央少し削りつて凹状にする。外面体部タテヘラケズリ。内面底部は多方向ヘラケズリ。外面の大半が凹成時の黒染。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや暗赤 赤・透明黒粒と白黒粒やや多、白釉と黒粒少 中や破損	中央東部床土17cm 底2/3周 272
21土師器	高 残 2.4 底 復 5.8	外面底部が凹状約6mm突出する。外面は斜位ナデで、5×3cmの楕円柱皿口も見られる。外面体部ナメ。内面底部は多方向の中や破損ナテ。	25YR2/2 灰白 やや暗褐色 白・透明黒粒やや少、赤黒粒と黒粒少 破損	南東壁付柱土1.7m 底5/12周 260
22土師器	高 残 1.7 底 4.8	外面は多方向ヘラケズリで凹状。外面体部下端ヨコヘラケズリ。内面底部は多方向ヘラケズリ。	10YR4/1 灰赤 やや暗褐色 白・透明黒粒多、赤・透明黒粒少 破損	中央南部床土5cm 底全周 89
23土師器	高 残 2.1 底 4.2 最大 寛 8.6	外面は門間方向のヘラケズリで凹状。外面体部は横へ斜位ヘラケズリ。内面底部は門間方向のヘラケズリ。外面に不規則な黒熟赤化と保存が見られる。	5YR6/6 橙 粗い 赤黒~黒粒多、黒・透明黒粒やや多、黒粒粒と白黒粒少 中や破損	中央西部床土1cm 底全周 51
24土師器	口 復 11.6 高 5.9 底 5.0	外面は中央の穴(口)後に外壁を築くことで全周をナメテ整理し、乾燥時に発生した草木植物の灰が表面に堆積した後に口~内面体部ナメナメ後には口~内面体部ナメナメで、縦位の不規則な凹み、体部下位の不規則な突起、口縁部の平行知脚状他など、製作時の不手際がそのまま残る。内面は底部に多方向と体部に横位の縦なヘラケズリの後に口~内面体部ナメ。焼成時に内外全面が黒染色化している。	25YR4/1 黄赤 やや暗褐色 白・透明黒粒やや多、赤・黒粒少 破損	南西壁付口内1.6m 口1/8周、底7/12周 90
25土師器	口 復 11.4 高 5.5 底 8.1	外面の体一底間部に高さ2~3mmの段がある。外面は凸面形で、大きな水皿痕が付いている。タテの斜位ナデでほとんど消している。外面体部ナメナメ後には口縁部をヨコナテ。その後改めて体部から底部にまたがるように3枚の木蓋とそれを行付た枝の痕を押している。内面は底部に1~2方向に体部に斜位のヘラケズリ後に口縁部ヨコナテ。20~27と同工品。	25YR6/8 橙 やや暗褐色 白・透明黒粒やや多、赤黒粒と黒粒少 破損	北西土13cm 口1/3周、底7/12周 13
26土師器	高 残 2.0 底 7.6	外面の体一底間部に高さ2mmの段がある。外面には木の黄褐色土層が変えて2回付き、カンワの痕と思われる。外面体部ナメ。内面は底部に1方向のヘラケズリ。体部に横へ斜位ヘラケズリ。25・27と同工品。	10YR6/4 に近い黄褐色 粗い 白・赤黒~黒粒多、白・黒と黒、灰色、透明黒粒~黒粒やや多 中や破損	中央西部床土7cm 底2/3周 101
27土師器	口 11.9 高 5.8 底 8.1	外面の体一底間部に高さ1mm程の浅い段。外底は凸面形でケズリを行わず、2~3回程の方向を変えて木蓋痕面がみられ、7×3mmの縦断面の横行凹みが見られる。外面は平口ヨコナテ後に体部ナメナメ。口縁部は赤黒ラシに割って黒色のヘラケズリの後、口~内面体部ナメ。南西部出土破片は縦位に黒染色(5Y2/1)、25~26と同工品。	5Y2/1 黒 やや暗褐色 白・赤黒~黒粒多、白・黒と黒粒少 中や破損	南西土4cmと中央床土7cmと北西土1cm 口1/2周、底1/2周 73、109、A4東、北東土上
28土師器	口 復 13.0 高 残 4.8	外面は体部に1箇所ナメナメ後に口~内面体部ナメナメと体部下位ナメヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナテ後に体部ヨコヘラケズリ。内外面に数cm以上の黒染がある。	7.5YR7/6 橙 やや暗褐色 白・黒・透明黒粒やや多、白釉と黒粒少 破損	新蔵/成土4~9cmの2 片が成土1/3周 386、395
29土師器	口 復 16.6 高 残 5.5	全体の調整が拙。外面は下平を横へ斜位ナデの後に中平を横へ斜位のヘラケズリで調整して凹凸が生じ、口縁部ヨコナテ。内面は下部をナメナメナメナメに中位上を積み上げてヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナテ。	10YR6/0 明赤褐色 やや暗い 赤黒粒と白黒粒と白・黒・灰色、透明黒粒と黒粒やや少 中や破損	北東部床土23cmと 北東部土層が接合 口1/3周 223、北東土一基
30土師器	口 14.1 高 4.3 底 5.8	外面は体部多方向ヘラケズリで凹凸を持つ。外面は体部にまじって縦位のナデの後、体部下端に縦位のヘラケズリまたはヘラケズリ。内面は体部ナメナメヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナテ。	10YR8/6 黄褐色 やや暗い 白・黒・透明黒粒~黒粒やや多、白黒粒少 軟質	中央西部床土4cm 口2/3周、底全周 58
31土師器	口 復 15.4 高 残 4.2	外面は体部に中や破損ナメナメヘラケズリ後、口縁部ヨコナテ。内面は体部ナメナメヘラケズリ。口縁部にヨコヘラケズリヨコナテ。32と同工品。	5YR6/8 橙 やや暗い 赤黒~黒粒多、白・黒・透明黒粒~黒粒少 中や破損	中央東部床土6cm 口1/7周 208
32土師器	口 復 18.0 高 5.3 底 3.6	外面は体部多方向ヘラケズリでわずかに凹状。外面は体部に中や破損ナメナメナメ後、内面は底部に多方向と体部・口縁部に横へ斜位のヘラケズリ後、口縁部を軽くヨコナテする。ヨコナテ以前にヘラケズリした凹凸がよく残っている。31と同工品。	5YR6/8 橙 やや暗い 赤黒~黒粒多、白・黒・透明黒粒~黒粒少 中や破損	中央西部床土5cm、掘及 内面の2片も接合 口1/3周、底3/4周 67、一基、掘及西
33土師器	口 復 14.2 高 4.8 底 3.4	薄く軽い。外面はヘラケズリによりわずかに凹状。外面は体部ナメナメ後に口縁部ヨコナテ。内面は底部に多方向と体部に斜位のヘラケズリ。接合できた3片中の1片だけは縦位に黒染している。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや暗い 赤黒~黒粒多、透明黒粒と白・黒・赤黒粒やや多 中や破損	北西土13~10cm 口5/12周、底1/3周 27、29、30
34土師器	口 復 11.4 高 6.5 底 5.6 最大 寛 12.0	口縁部と底部が削い。外面底部が凹状状に突出して底部は多方向ナデで中央が少し凹凸。外面は体部ナメナメ後に口縁部ヨコナテ。内面は体部ヨコヘラケズリ後に口縁部ヨコナテ。内面の底部だけが黒く剥落し、底部を築くような形状が部分的に可能性がある。	7.5YR5/4 に近い黄褐色 やや暗い 赤黒~黒粒多、白・透明黒粒と黒粒少 中や破損	北東床土7cmで横位 口5/5周、底1/3周 331、一基、A-A'断面 破損
35土師器	口 復 17.0 高 18.0 底 7.0 最大 22.0	外面は体部多方向ヘラケズリで、上げ状の可能性がある。外面体部ヨコヘラケズリ、内面体部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナテ。口縁部は水平・凹状に削り取られておらず、少し波打っている。体部から底部にかけて、かなかなり削り取っている。	7.5YR7/6 橙 やや暗い 赤黒~黒粒と白黒粒と白・黒・赤黒粒~黒粒少 中や破損	北西土1~12cm 口1/2周、底1/3周 1.2、4、9、22、36、37、166、A4西
36土師器	高 残 12.5 高 残 7.2 底 4.8	下部は厚く中や破損。内面は体部ナメナメ後に口縁部ヨコヘラケズリ。外底は多方向ヘラケズリ。口縁部外面に粘土層を付けて貼付口縁にした。内外面ヨコナテ。内面は体部ナメナメと底部に多方向のヘラケズリ。37と同工品。S125出土破片(口1/2周、底5/12周)とS66出土破片(口1/3周、底1/12周)が接合。 [注記] S125 297、388、東コーナー、貯蔵穴一基、SL66Aベルト土層1層	5YR5/6 明赤褐色 やや暗い 赤黒~黒粒多、白・黒・透明黒粒~黒粒少 中や破損	S25の南東段床土1cmと S25の東部床土9cm、S1 66の東部平間部土1層出土破片と接合 口5/5周、底1/2周 注記は北西
37土師器	口 11.5 高 6.2 底 4.0 重 159.9	底部がやや厚い。外面はナデで、ごくわずかに凹凸。外面底部ナメナメ後に口縁部を粘土層で貼付口縁状にして、体部下位ヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリを施し行うだけで住上へラケズリしていない。内外面の口縁部にヨコナテ。外面の約1/3周が黒染。36と同工品。	5YR6/6 橙 やや暗い 赤黒~黒粒と白黒粒多、黒・透明黒粒少 中や破損	北東部東部床土1~7cm 口2/3周、底全周 188、100、364、366、397、A4西
38土師器	口 復 9.7 高 7.1 底 3.0 最大 10.7	やや厚く重い。外面は1方向ヘラケズリで凹状にした。口縁部に斜位のナデで削り取っている。口~内面体部ナメナメ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は下部ヨコヘラケズリ。胴部ヨコナテ。口縁部ヨコナテ。内面の大半は黒染状。39と同工品。重量 241.9g。	25YR6/8 橙 やや暗い 赤黒~黒粒多、白・黒粒少 中や破損	中央東部土直上位置 やや厚い 赤黒~黒粒多、白・黒 105

39	口 10.3 高 6.7 最大 10.4	下部がやや厚く、外表面は多方向へラウズリで凹底状。外面上半部と口縁部ヨコナデの間に体部下平コウヘラズリ。内面体部ヨコナデと前部ユビオサエの間に口縁部ヨコナデ。38と同工法。現存重量218.1g。	5Y8/8 明赤釉 粗い 赤釉・黒釉多、白釉・ 黒釉と黒・透明黒釉少 やや軟質	北東面上 2cm 口2/3部。体全周 25
40	口 14.2 高 残9.5 最大 14.8	縁が強く外へ折れて口縁部外面に厚い粘土層を帯り、口縁下半部が内側に折れる。外面は体部に縦～斜位ナデの間に口縁部を帯り付けてヨコナデ。内面は下部に1方向へラウズリ後に、体部1位にやや凹みの残るナデとユビオサエ、口縁部ヨコナデ。	5Y8/4 淡緑 やや軟質 赤釉～黒釉と白 黒釉やや多、黒釉～黒釉と透明 黒釉少 やや軟質	中央東面床土 2cm 口1/5部。体全周 271、一括
41	口 復14.9 高 残7.4 小形遊	外面は上部に横位のナデの間に口縁部をヨコナデし、全体をタテヘラミガキ。内面は頸部ヨコナデと口縁部ヨコナデの間に、全体をタテヘラミガキ。外面は縁部に深が広く付着する。	2.5Y7/4 浅黄 やや軟質 赤・黒釉～黒釉と 白黒釉少	北東面上 9～10cmが接合 口1/3部。体 2/3部 195、201
42	高 残9.5 最大 14.7	外面は上部に多方向より縦方向のヘラウズリと、横み上げ粘土層付近にヨコヘラズリ。中位以下はナデ後にヨコヘラミガキ。内面は中位以下ヨコヘラズリ。前部ヨコナデ。	10Y8/3 比赤・黒釉 やや軟質 赤釉～黒釉や多、白・ 黒釉～黒釉や多、透明黒釉少 やや硬質	中央東面床土 4cm 体3/4部。体全周 59、63、一括
43	口 復14.0 高 残5.4	外面は頸部下位ナメナメ後に中位ナメナメ、口縁部ヨコナデ。内面は頸部ナメナメ後位にナメヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	5Y8/8 緑 やや軟質 赤釉～黒釉多、白 黒釉～黒釉と黒・透明黒釉少 やや硬質	北東面上 6cmと北東面積 上の各2片が接合 口1/4部 194、北上面一括
44	高 残11.4 最大 13.8	外面は頸部に厚皮を帯りてヨコナデ。体部に横位と底部に多方向のヘラウズリで頸部には強い突起を持つ。内面は体部ヨコナデ。前部は粘土結核を帯り内面に付く。頸部ヨコナデ。外面はごく少量の現が見られる。 [注記]147、148、149、151、161、162、359、360、361、一括	7.5Y8/8 緑 粗い、白釉～黒釉多、白・赤・ 透明黒と赤・黒釉少	中央東面上 床土 5cmで 接合 口1/5部。体 割1/2部 注記は左欄
45	口 復8.1 高 残2.9 小形遊	外面は頸部ナメナメの後に、口～頸部まで広くヨコナデ。内面は頸部ヨコヘラズリの後に、口～頸部まで広くヨコナデ。 ※注記の○は頸部を、おそろく「19.○」14.○のようラッドナ	10Y8/3 比赤・黒釉 やや軟質 白・赤釉～黒釉と 黒釉少 やや軟質	X19ラツ以北 口1/4部 19○(左欄注記)
46	口 復8.4 高 残3.4 最大 残12.2	外表面は凹面を下ナメナメ。外面体部下平コウヘラズリと上半ヨコヘラズリとの間に横～斜位へラミガキ。内面は下半ヨコヘラズリ。上半ヨコナデ。 [注記]103、114、356、379、SD-283 D E間一括	2.5Y8/5 明赤釉 やや軟質 赤釉～黒釉多、白・ 黒・透明黒少	中央床土 2～4cmで野 成穴内 6cm、SD-283 区 4片も接合 割上半全周、底1/2部 注記は左欄
47	口 復9.0 高 残3.4 小形遊	外面は口縁部上頸部ヨコナデ後に頸部タテヘラミガキ。内面は頸部ユビオサエ後位口縁部ヨコナデ。口縁部縁部が肥厚するように外反する。	7.5Y8/6 緑 やや粗い、赤・黒釉～黒釉や 少、白・透明黒少	東面頸部床土 2cm 口5/12部、野成穴内 37.2、野成穴一括
48	口 復8.1 高 残7.1 最大 2.0	外表面はやや軟くナデで凹底状にする。外面頸部タテヘラミガキ後に体部ナデ一部に厚いヨコヘラズリ。下部にヨコヘラズリ。頸部ナメナメ。内面は底部に厚い方向のヘラウズリ後、体部をヨコヘラミガキ調整して上部が深く凹み付く。外面は縁部をより深を帯り、頸内面にナメヘラミガキ。内外面の口縁部はヨコナデ。	5Y8/4 比赤・黒釉 やや軟質 白・黒釉や多、赤・ 透明黒や多、透明黒や少 硬質	南面上 3cmで正位 口縁部は横位中 口1/4部。底～底全周 347、西面床土15cm
49	高 残4.6 土面跡 小形遊	平底の頸部厚皮があるが、接合できる体部下平な部分なく同一個体と断定できないので明示しない。外面は頸部ヨコヘラウズリ後に頸部の上下をタテヘラウズリし、深く削り上げている。内面は頸部ヨコナデと粘土結核を帯りして厚に削し、頸部の底を下をヨコヘラズリ。内外の頸部表面が濃褐色で着色しているようにも見えるが、塗る色が濃く、これが頸部表面も同様になっているので、着色ではなく他物質の付着を考慮され、頸部は顔面も含めて着色に近く、黒熟している可能性もある。	2.5Y8/5 明赤釉 やや軟質 赤釉～黒釉と白・ 黒・透明黒少 やや硬質	中央東面床土15cm、 東面やSD-283区人もも 帯り 頸3/4部、底3/4部 248、B-B'1一括、東 一括、A-A'部、SD-283 D E間一括
50	口 復9.7 高 残3.2	外面は頸部ナメナメ後に口縁部ヨコナデ。内面はヨコナデで、口縁部が内彎する。	2.5Y7/3 浅黄 やや軟質 白黒釉多、赤黒釉と 黒・透明黒少 軟質	北東面上 口1/4部 北東上面一括
51	高 残5.0 最大 8.9	外面は頸部と底面にナデ。体部下平にヨコヘラウズリ。頸部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラウズリ。頸部ヨコナデ。外面に小量現皮あり。内面は全面が剥落を帯りて黒色。外面にごく少量の厚皮付。	5Y8/4 淡緑 粗い、赤釉～黒釉多、白・ 黒釉～黒釉と透明黒少 やや硬質	東面頸部上 割～底全周 311
52	高 残3.7 最大 7.4	外表面はナデ上げで凹底状。外面体部ヨコヘラウズリ。内面は底部に横なユビオサエの間に、体部を横み上げて横なナデ。外面の約半分が厚皮。	5Y8/6 緑 やや軟質 赤釉～黒釉や多、 黒釉～黒釉と白・透明黒少 やや硬質	南面上 6cm 底全周 340、北東上面一括
53	高 残1.2 土面跡 小形遊?	外面はやや軟く多方向へラウズリ。内面は多方向ヨコナデで、底の当たった縁部が直つ。	5Y8/6 緑 やや軟質 白・赤黒釉や少、黒・透明 黒少 やや硬質	中央内面床土上 底全周 363
54	口 16.5 高 13.5 最大 12.7 重 残445.5	外面は頸部タテヘラミガキ。体下部タテヘラウズリ後に頸部ナメヘラミガキ。体下部は頸部ナメナメと上部ヘラウズリ。口縁部ヨコナデの後に横～斜位ヘラミガキ。体下部は頸部ナメナメと上部ヘラウズリ。体上部にナメナメの間に放射状ヘラミガキ。内面底部は横位に生じた長さ4cmの電装をヘラミガキで横刺しているが、大きな凹みが見られている。頸部は内外共に生じた電装に粘土層を帯りて横刺した凹み4箇所あり、こちらの層厚はよくごまかしている(断面図と外面図を参照)。	2.5Y8/5 明赤釉 やや軟質 赤釉～黒釉多、白・ 灰色・透明黒と黒黒少 やや軟質	北東面上 10cm、床土 4 cmの1片も接合 口1/5部。頸部全周、 野成穴内 2部、野成穴 野成穴2/3部 33、46、A-A'西
55	高 残6.1 脚跡 復 16.8	外面はおそろくナメナメと頸部ヨコナデの間にタテヘラミガキ。内面は粘土結核み上げ層をよく復して横なユビオサエを帯り、頸部ヨコナデ。	7.5Y8/7 緑 やや軟質 赤釉～黒釉多、黒 黒釉や多、白・透明黒少 やや軟質	割全周、脚跡1/36周 中央内周
56	口 19.5 高 15.8 最大 12.7 重 残679.8	外面は縁部～頸部タテヘラミガキ。体外周ヨコヘラウズリ。頸部ヨコナデ。体部ナメナメナデと口縁部ヨコナデ後に体外周側へラミガキ。体内面は体部ナメナメと口縁部ヨコナデの間にナメヘラミガキ。頸内面は頸部ヨコナデ後に頸部ヨコナデ。	7.5Y8/6 浅黄 やや軟質 灰色濃と白～黒 黒や多、赤黒釉と透明 黒少 やや硬質	北東面上 2cm 口11/12部、頸部全周、 野成穴内、野成穴 野成穴2/3部
57	高 残10.0	外面はタテヘラミガキで、上部は横位で調整不揃い。内面は上部部に斜り目の厚皮が多く、それ以下は粘土積み上げ層を残したままユビオサエ。頸部が横断して外へ凹く部分はほとんど欠損しているが、頸部と違う灰白色(7.5Y8/7)の土を帯り。	7.5Y8/7 緑 やや軟質 赤釉～黒釉や多、 白・黒・透明黒少	野成穴の4片と東面の 2片が接合 頸部1/2周 野成穴、東コーナー
58	口 18.3 高 15.3 脚跡 15.5	外面は頸部と体部に縦～斜位ヘラウズリ。体部ナメナメナデまたはヘラウズリ。内面は口縁部と体部に横～斜位ヨコナデ。体部ナメナメナデ。頸部は粘土積み上げ層を残す程度削りユビオサエ。ヘラミガキをした可能性もあるが、全面がかなり剥落しているのではっきりしない。 [注記]135、136、140、142、146、150、155、158、184、286、353、355、365、一括、東コーナー、中央内周、A-A'近辺、S1-24.20	5Y8/7 緑 やや粗い、赤釉と白・赤黒釉多 軟質	北東面上 2cm・中央東面 床土 2cm・北東床土 4cm・南面上 5cmが接 合、S124の個人も一部 一部欠 注記は左欄

第5章 権現山道跡 SG10区

59	土師窯 高杯	口 径 14.3 高 径 6.5	外面は脚上部位と杯底部にタテヘラケズリ。杯底部に斜位と横位のヘラナデ。内面は杯底に多方向に杯底部に横位のヘラナデ。内外面の口縁部にヨココナデ。88と同工品。	5Y8r/6 釉 やや粗い。赤釉～細粒多。白 漆～細粒やや多。黒・透明 釉粒少。やや破質	南東床上 6cm 口 11.6 周、杯底 1/3 周 344、346
60	土師窯 高杯	高 径 10.9 脚底 径 15.8	外面はタテヘラケズリ後に脚部ヨコナデ。全体をタテヘラミガキ。内面は口縁部と杯底に中位に横位のナデ。脚部ヨコナデ。	5Y8r/6 明赤釉 やや粗密 やや赤黒 赤・透明細粒多。赤・黒 透明細粒少。やや破質	北東床上 5cm 脚柱全周、脚底 1/3 周 231
61	土師窯 高杯	高 径 9.7 脚底 径 12.7	外面はタテヘラケズリ後に脚部ヨコナデ。内面は倒立状態で反時計回りに積み上げた粘土土を斜位と横位のナデのみで接合のままだし。脚部だけヨコナデ。	10Y8r/3 浅黄釉 やや粗密 白・赤釉～赤黒～細粒やや多。黒・透明細粒少。やや破質	北東床上 7cm で横位 脚柱全周、脚底 7/12 周 331
62	土師窯 高杯	口 径 19.8 高 径 7.3	外面脚部タテヘラケズリ。杯底部タテヘラケズリ後ナメヘラミガキ。杯底のヘラナデと口縁部と下部タテヘラミガキ。内面ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ後上部 1 方向と杯底部～斜位のヘラミガキ。脚内面口縁部と下部タテヘラケズリ後、上部は脚部を積み上げる。 [注記]1192、216、221、219、220、222。北東上面一括	7.5Y8r/6 釉 透明細粒 赤黒～細粒と白・黒 やや破質	北東床上 5～29cm の 7 片と北東上面の 8 片が 接合 口 3/4 周、杯底 2/3 周 注記は左欄
63	土師窯 高杯	高 径 9.0 脚底 径 14.7	外面は倒立状態でタテヘラミガキを密に行い、もう一度製をヨコナデする部分も見られる。内面は倒立した状態で反時計回りに積み上げた粘土土をよく残す程度の斜位ヨコナデと杯底ヨコナデ。	5Y8r/6 釉 やや粗い。赤釉～細粒やや多。 白・黒・透明細粒少 やや破質	南東床上 4～13cm 脚柱全周、脚底 1/3 周 318、334、南東一括
64	土師窯 高杯	高 径 7.8	倒立状態で成形し、時計回りに粘土土を焼んでいるのかもしれないが不確定。内面は上部タテヘラケズリと杯底部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。内面は口縁部ナデと下部ヨコヘラナデの後に脚部ヨコナデ。	5Y8r/6 釉 赤・黒釉～細粒やや多。白・透明細粒少 やや破質	北上面と北東上面で接 合 脚柱全周、下位 1/4 周 北上面一括。北東上面 一括
65	土師窯 高杯	口 径 19.1 高 径 6.6	外面は脚上部位と杯底部に斜位と杯底部に横位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。杯内面は口縁部と杯底に横位のヘラミガキ。内面は杯底部を密にタテヘラミガキ。脚内面は口縁部と杯底に横位のヘラミガキ。脚内面は口縁部と杯底に横位のヘラミガキ。脚内面は口縁部と杯底に横位のヘラミガキ。 [注記]178、中央奥面一括 A.A. 東	5Y8r/6 釉 やや粗い。赤釉～細粒やや多。 白・黒・透明細粒少 やや破質	中央東床上 7cm の 1 片 赤・黒・透明の 3 片が 接合 口 1/8 周、杯底全周 注記は左欄
66	土師窯 高杯	高 径 8.8 脚底 径 16.3	外面は上部タテヘラケズリ後に脚部ヨコナデ。内面は倒立状態でおそらく反時計回りに積み上げた粘土土を斜位と横位のナデのみで接合のままだし。脚部だけヨコナデ。 [注記]202。北東上面一括。中央奥面、SD-283 D-E 面一括	7.5Y8r/6 釉 やや粗い。赤釉～細粒多。透 明細粒と黒細粒少 やや破質	北東上面 3 片と床土 9 cm。床土と SD-283 の 1 片も接合 脚底 1/8 周、脚柱 1/3 周 注記は左欄
67	土師窯 高杯	高 径 7.0	高さ 3cm の遮形台を作った内面をタテヘラミガキした後に、倒立状態で 7～10cm の粘土土を焼くために積み上げた粘土土をそのままだしに焼く。外面はタテヘラケズリ。外面の約半周は焼成時の黒染。	7.5Y8r/6 釉 赤・透明細粒～細粒 やや多。白～赤黒と赤黒細 粒少。やや破質	中央床上 3cm と北西上 面 3cm で接合 脚 5/6 周 32、147、A.A. 西
68	土師窯 高杯	口 径 16.4 高 径 5.6	杯底面に放射状ケズリ。その外側にヨコヘラケズリ。杯外部面に横～口縁部ナデ。杯内面は口縁部と杯底に横位のヘラミガキ。内面は口縁部と杯底に横位のヘラミガキ。 [注記]192、98、104。東中上面、一括 A.A.	10Y8r/4 に近い黄緑 やや粗い。赤黒～細粒やや多。 白・黒細粒と透明細粒少 やや破質	南西側床上 4～12cm 口 2/3 周、口～杯 3/4 周、杯底全周 341、342、343
69	土師窯 高杯	高 径 10.8 脚底 径 16.9	外面はナデ後に脚部ヨコナデ。全体をタテヘラミガキ。脚内面は粘土土をよく残すヨコナデと杯底ナデで調整し、脚部にヨコナデと杯底をナメヘラミガキ。	2.5Y8r/7 8 釉 やや粗密 白・赤・透明細粒 やや多。白・赤黒と赤黒細粒 少。やや破質	中央東床上 3cm、東部の 1 片も接合 脚柱全周、脚底 1/2 周 やや破質
70	土師窯 高杯	高 径 6.9 脚底 径 13.9	外面は脚部ナデと杯底ヨコナデの後に、脚全体を密にタテヘラミガキ。内面は上部に横位のナデ。倒立状態で反時計回りに積み上げた粘土土を斜位と横位のナデのみで接合のままだし。脚部だけヨコナデ。	5Y8r/6 赤黒 やや粗密 白・透明細粒やや多。 赤黒と白・赤黒細粒少 破質	中央西より床土上と中 東部の床土上 11cm が接 合 脚 1/2 周 57、251、中央奥見
71	土師窯 高杯	高 径 6.7	外面タテヘラケズリ。上縁部にヨコヘラナデ。内面は倒立状態で反時計回りに積み上げた粘土土をよく残し、斜位ヨコナデ。	5Y8r/4 に近い赤黒 透明細粒 赤黒～細粒と白・黒・ 透明細粒少 破質	北東側床上 4cm 脚柱全周 369
72	土師窯 高杯	口 径 19.1 高 径 7.3	外面は杯底部ナデと杯底～脚部タテヘラケズリの後に口縁部ヨコナデと杯底のヘラミガキ。内面は杯底部ナデと口縁部ヨコナデの後に杯底部に横位と縦位の多方向のヘラミガキ。 [注記]192、98、104。東中上面、一括 A.A.	5Y8r/6 釉 やや粗い。白漆～細粒やや多。 赤黒と黒細粒少 破質	東中央上面の 3 片に南 東上 3～4cm の 2 片が 接合 口 5/12 周、杯底 5/6 周 注記は左欄
73	土師窯 高杯	高 径 10.6 脚底 径 16.0	外面は脚柱ナデと杯底ヨコナデの後に全体をタテヘラミガキ。内面は脚部ヨコナデの後に脚柱ヨコヘラケズリ。	5Y8r/6 明赤釉 やや粗密 白漆～細粒やや多。 赤・黒細粒と透明細粒少 破質	北西側床上 2cm 脚柱全周、脚底 1/6 周 38、一括 A.A.
74	土師窯 高杯	高 径 6.5	脚内面の中央は径 12cm。脚部タテヘラケズリ後ヨコナデ。杯底部外面ヨコヘラケズリ。杯底部外面ヨコヘラケズリ。杯内面は杯底に 1 方向と杯底部に横位のヘラミガキ。脚内面は口縁部と杯底に横位のヘラミガキ。 [注記]144。中央奥面、A.A. 中上上面、一括 A.A.、一括	5Y8r/6 釉 赤黒～赤黒～細粒多。 白・黒・透明細粒少 やや破質	中央東床上 杯底 3/4 周 注記は左欄
75	土師窯 高杯	高 径 2.7 最大 径 9.7	外面は脚上部位ヨコナデと杯底～杯底部タテヘラケズリ。内面杯底は多方向ナデ。 [現在杯底] 杯底 7/12 周 [注記]306、394。新焼穴一括	7.5Y8r/4 に近い やや粗密 白・赤黒～細粒 やや多。黒・透明細粒少 破質	南東床上 3cm、南東側 床上 7cm、新焼穴の各 1 片が接合 残存表面～注記左欄
76	土師窯 高杯	口 径 約 19 高 径 約 6	外面は杯底部に斜位と杯底部に横位のヘラナデ。杯底部にナメヘラミガキ。内面は横～斜位のヘラナデ後に横～斜位のヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後に内面ナメヘラミガキ。内面は口縁部と杯底に横位のヘラミガキ。 [注記]192、98、104。東中上面、一括 A.A.	2.5Y8r/6 明赤釉 やや粗密 白漆～細粒と黒・ 透明細粒少 破質	南東床上 3～14cm 口 1/12 周、杯底 11/12 周 95、327
77	土師窯 高杯	高 径 10.5 脚底 径 15.1	脚内面はおそらくタテヘラケズリの後にタテヘラナデ。外面杯底部もタテヘラケズリ。脚内面は口縁部と杯底に横位のヘラミガキ。内面は口縁部と杯底に横位のヘラミガキ。 [注記]192、98、104。東中上面、一括 A.A.	2.5Y8r/6 釉 やや粗い。赤黒細粒と白細粒 赤・黒・透明細粒少 破質	中央東床上 杯底 1/4 周 152
78	土師窯 高杯	口 径 18.9 高 径 6.3	杯底部外面ナデナデと下部脚部ナデの後に杯底部タテヘラケズリと外面ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。杯底部外面に密なタテヘラミガキ。杯内面口縁部と杯底ヨコナデの後に上縁部に横位のヘラミガキ。	7.5Y8r/6 釉 やや粗い。白漆～細粒と赤・ 黒・透明細粒～細粒やや多 やや破質	北西側床上 2cm 口 3/12 周、杯底全周 372
79	土師窯 高杯	高 径 9.7 脚底 径 14.8	外面は下部タテヘラケズリと上部タテヘラケズリと脚部ヨコナデの後に、タテヘラミガキと下位にヨコヘラミガキ。内面は倒立状態で反時計回りに積み上げて焼いた後に、中位ヨコヘラケズリと杯底ヨコナデ。	7.5Y8r/6 赤黒 赤黒～細粒やや多。白・黒・透明細粒少 破質	中央東より床土 1.8cm 脚柱全周、脚底 1/3 周 230
80	土師窯 高杯	高 径 3.2	脚内面は倒立中央状態で。外面は脚部にタテヘラナデ。杯底部に横～斜位ヘラナデ。杯内面は杯底部と杯底にヨコヘラナデ。脚内面ヨコナデ。	5Y8r/6 釉 やや粗密 白・赤・透明 細粒～細粒少 破質	中央東床上 杯底 2/3 周 106

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

81 土師器 高杯	高 残 8.9	外面杯底部タテハラズリ、脚柱部タテハラミガキ、外面体部下端ナデ。杯部内面に多方向と体部内面に縦位のハラミガキ。脚柱部内面コナデ。	7.5Y87/6 橙 やや粗い 赤黒～細粒多、 白・黒・灰色粗～細粒と透明 細粒少 やや軟質	南東床土 7cm、S123 遺 人の1片と後合 杯体部1/6周、脚土平 1/3周、S35、S23 南東 床土
82 土師器 高杯	口 復 20.3 高 残 7.1	外面は脚柱部タテハラズリ後に杯底部外周コハラズリ、杯体部内外面ナメハラナデと内面底部1方向ハラナデ。口縁部ヨコナデ。脚内面上端コナデ。	5Y86/6 橙 やや粗い 赤黒～細粒多、 白・黒・透明粗～細粒やや多 やや軟質	南中央床土1～5cm 口5/12周、杯底全周 85、93
83 土師器 高杯	高 残 10.8 脚底 復 15.5	外面は磨滅して不明確で、タテハラズリまたはタテハラナデの後に杯底部コナデと想定できる。外面ハラミガキの有無は不明。内面は倒伏状態で反対向きに粘土層を積み上げて軽くなす。内面も脚柱はコナデと想定される。	7.5Y86/6 橙 粗い 赤黒～細粒多、白・黒 粗～細粒少 やや軟質	北東床土12cm 脚底1/2周、脚底1/8 周 192
84 土師器 高杯	高 残 1.9	外面脚柱～杯底部タテハラズリ。内面杯底部は多方向の密なハラミガキ。	10Y83/3 に灰・黄緑 やや軟質 赤黒～細粒と透明 細粒多、白・黒粗粒少 硬質	北上面 杯底2/3周 北上面一括
85 土師器 高杯	高 残 8.1	外面中位に貫通しない径7mm・深さ2mmの孔を持つ。外面は磨滅しているが、タテハラズリまたはタテハラナデ。内面は倒伏状態で反対向きに粘土層を積み上げて軽くなす。上部コナデオサエ、中部ナメハラズリ、下部コハラズリ。	10Y85/6 黄緑 やや粗い 赤黒～細粒多、 白・黒・透明粗粒少 硬質	中央東寄り床土6～13 cm 脚柱全周 246、250
86 土師器 高杯	口 復 17.4 高 残 5.1	外面杯底部タテハラ。内外面の杯体部ナメハラと口縁部ヨコナデ。外面下縁ヨコハラズリ。内面の杯底部は多方向と体部に斜位のハラミガキ。 [注記]292、234、247、一括A.A'東	2.5Y85/8 明赤黄 粗い 赤・黒粗～細粒多、 白・黒粗・赤・黒粗・透明粗 粒少 硬質	北東床土9cmと中央東寄り 5～7cmの接合 ～細粒と黒・透明粗 粒少 注記は左欄
87 土師器 高杯	高 残 11.7 脚底 復 14.8	脚外周はタテハラズリで、杯底面にはタテハラナデ。脚内面は倒伏状態で主に反対向きに積み上げてコナデオサエ。脚下部には向かい合う位置に1孔ずつ、計2孔の孔が貫通している。これ以外に内面隅の位置にある非貫通孔2孔。脚部は内面から判別し、外面には少しだけ先筒が通している。 [注記]155、189、226、北一統、A.A'東ナ	5Y86/8 赤粗 粗い 赤黒～細粒多、黒 粗～細粒と透明粗粒少、白粗 粒～細粒多 やや軟質	中央内筒直上6cm北東 床土 黒粗土1～床土5cmの接合 脚土上一部穴、脚土下 1/2周 注記は左欄
88 土師器 高杯	口 13.8 高 残 6.5	外面は脚柱上段と杯底面に横位。杯体部に斜位のハラナデ。内面は杯底～上部にヨコハラズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面にはナデ後に部分的なヨコハラズリを行う。内面の変色から見て、横倒しの状態で二次焼成したと見られる。50と同一品。 [注記]125、138、139、141、143、150、160、中央東	7.5Y87/6 橙 粗い 赤黒～細粒多、白 粗～細粒と黒・透明粗粒少 やや軟質	中央東直上床土7cm 口5/6周、幅11/12周 注記は左欄
89 土師器 高杯	高 残 9.8	外面はタテハラミガキ。内面は上部に横～斜位コナデ。中位以下は粗粒多を現したままのコナデオサエ。 [注記]293、SD 283 D-E間一括	5Y85/6 明赤粗 やや粗い 白・黒・透明粗粒 多、赤黒～細粒少 硬質	南東床土2m、SD 283 東床土3片も接合 脚柱全周、下部3/4周 注記は左欄
90 土師器 高杯	高 残 8.8	外面は脚柱部タテハラナデまたはハラズリと見られるが、磨滅して不詳。内面は上部コナデオサエ。中位以下ハラズリで、底部ヨコナデ。内面に倒伏状態3本を焼成内面に入る。	7.5Y87/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒 やや軟質 赤・黒・透明粗粒少	北東上 面 北東上 面
91 土師器 高杯	高 残 4.1 底 復 14.6	外面に縦～斜位ハラズリと内面にナメハラナデの後に、内外面の杯底部コナデ。 [注記]76、229、250、253、255、265	5Y86/8 橙 やや粗い 赤黒～細粒と白粗 粒多、黒・透明粗粒少 硬質	南内床土6cmの1片と 中央南寄り床土2～13 cmの5片が接合 脚底5/2周 注記は左欄
92 土師器 高杯	高 残 4.2	外面杯底部と脚柱部にタテハラズリ。杯体部下端の垂直面をヨコナデし、それより上の傾斜部はナメハラズリ。杯部内面は下部に放射状と上部に斜位のハラミガキ。	5Y85/6 明赤粗 やや粗い 白・灰色粗～細粒 多、赤粗粒と黒・透明粗粒少 硬質	北東上 面 体1/12周、杯底全周 北東上上面一括
93 土師器 高杯	口 復 15.4 高 14.1 脚底 復 13.0	外面は脚柱部に縦位と脚柱間に横位のハラナデ。杯底外周にヨコハラズリ。杯体部に斜位のハラズリとハラナデ。内外面の口縁部と脚柱部にヨコナデ。内面杯部に多方向ハラナデ。内面脚柱に粘土層を残すようなコナデオサエ。 [注記]163、168、204、211、一括、北東	2.5Y87/8 橙 やや粗い 赤粗粒多、白・黒・ 透明粗粒少 やや軟質	中央東直上、北西床土6 cmと北東床土7～8cm の破片が接合 口1/3周、脚底1/6周 注記は左欄
94 土師器 高杯	高 残 8.0	脚部外面にタテハラミガキ。内面は上部にわずかな傾り日状の層を覆う。倒伏状態で反対向きに粘土層を積み上げてコナデオサエ。壁成面に厚約5mmの戸孔を丸棒状工具で開け、反対側に戸孔があったかどうかは、残りが少ないので不詳。3方向に孔を打っていた可能性は低い。	5Y86/8 橙 やや粗い 赤黒～細粒多、 黒 やや軟質 赤黒～細粒少 軟質	中央床土5cm 脚柱全周 145、一括A.A'
95 土師器 高杯	高 残 3.8	外面は杯底部コナデまたはナデ。杯底部タテハラズリ。脚内面上端ナデ。杯内面はヨコハラナデカナデと見られるが、磨滅して詳細不明。	5Y86/8 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒 やや軟質 赤・黒・透明粗粒少 やや軟質	北東床土8cm、北東上 面出土の2片と接合 杯底1/3周 北東上上面一括
96 土師器 高杯	高 残 12.8 脚底 復 17.0	外面は脚柱部コナデ後、杯部から脚部まで全体に密なハラミガキ。杯内面は下部にかなり密なタテハラミガキ。脚部内面は上部に粘土層を積み上げ、傾斜を残してコナデオサエ。底部コナデの後に中位にヨコハラズリ。 [注記]229、北東上上面一括、北上面一括	7.5Y86/6 橙 やや粗い 白～細粒やや多、 黒・透明粗粒少 やや軟質	北～北東上上面出土の8 片に中央床土8cmの1 片が接合 体1/4周、杯底全周、 脚底1/4周 注記は左欄
97 土師器 甕	口 復 18.4 高 残 12.3	肩下で外面は傾斜部に後合痕を残す。内面の傾斜にやや強いヨコハラナデ。内面傾斜部ヨコハラナデ後、内外面の口部～頸部ヨコナデ。内面口縁部上半はヨコハラミガキの可能性あり。外面全体が焼熟赤化。	7.5Y87/6 橙 やや粗い 白・赤粗～細粒多、 黒粗粒少 硬質	中央東直上3～9cm 口～肩1/3周 11、21、22、68、167、 一括、瓶尻西
98 土師器 甕	口 18.9 高 残 11.0	外面傾部タテハラズリ。内面傾部ヨコハラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面傾部がやや焼熟赤化している可能性あり。 [注記]117、282、284、285、一括、中央一括、南東一括、一括A.A'東、北東上上面、脚土面	10Y86/3 に灰・黄緑 やや粗い 白・透明粗粒多、 白粗粒と黒粗粒多、 やや軟質	南東部床土8～23cmで 接合。中央部と東部で も6片が接合 口7/12周、肩1/2周 注記は左欄
99 土師器 甕	口 復 18.8 高 残 11.1	外面は傾部上段ハケ後下部ハラズリ。口縁部ナメハラ後上下部コナデ。内面は傾部ヨコハラズリ。口縁部ヨコハラ。口縁部外面に僅か少量、部分斜に見られる。 [注記]299、376、新緑穴一括、S124 14、24、34、一括	10Y86/4 に灰・黄緑 やや粗い 透明粗粒と灰色粗 粒やや多、白粗粒と赤粗粒少 硬質	南東部床直上と新緑穴 底土23cmで接合。S124 の遺人灰5片 口1/2周、肩1/4周 注記は左欄
100 土師器 甕	口 復 16.6 高 残 7.0	傾部外面ナメハラナデ。内面ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。 [現存状態]口1/12周、肩1/4周 [注記]381、新緑穴、東上上面一括	7.5Y87/6 橙 細密 赤粗～細粒やや多、白 粗粒少 硬質	新緑穴内底14cm、東 中央上面の1片も接合 現存状態・注記は左欄

第5章 権現山遺跡 SG10 区

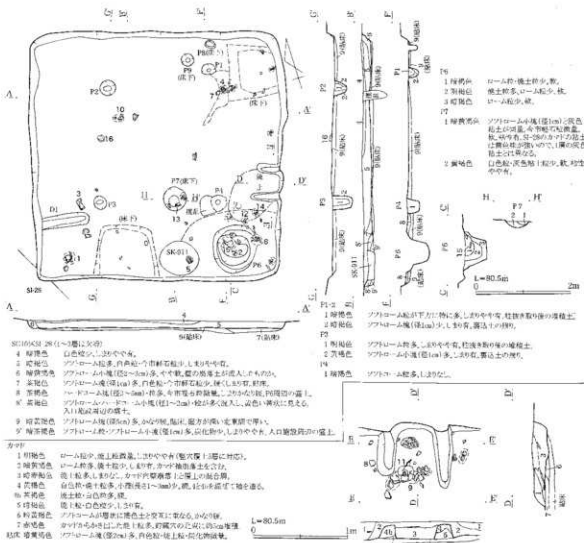
101 土師器 甕	口 復 16.0 高 残 5.2	外面は胴-頸部タテヘラナド。内面は肩部に横-斜位ヘラナド。内外面の口縁部にヨコナド。	7.5YR6/6 橙 やや暗い・白・黒・透明細粒 やや多・白緑と白・赤細粒少 やや硬質	中央床土 4cm 口-胴 1/3 周 115
102 土師器 甕	口 16.9 高 残 8.4	外面は肩部に横位ヘラナド。口-頸部ヨコナド後にタテヘラナド。内面はヨコナドナド。口縁部上下に浅いヨコナドハク。外面の口縁部以下に縦が有る。 [注記] 110, 133, 235, 一拵, 東一拵	2.5Y7/4 淡黄 やや暗い・白・黒・透明細粒 少・白緑細粒 やや硬質	中央床土上→床土 4cmで 接合 口全周, 胴上下 1/2 周 注記は左欄
103 土師器 甕	口 復 17.5 高 残 9.1 最大 復 18.0	筒状で突出する平底の中央が少し凹み、外面をヘラナド。外面胴部-肩部ナド。内面は胴部ヨコナド。外面は縦に付いた浅いヨコナドが平らで、筒状に成る前の形状が生きている。胴部ヨコナド。内面ナドとヘラナドナド。口縁部内外面ヨコナド。	7.5YR6/6 橙 やや暗い・白・赤細-細粒少 やや多・黒・灰・透明細粒少 軟質	南東床土 3 ~ 11cm 口 7/12 周, 胴 2/3 周 238, 240, 241, 242, 243, 245, 249, 267, 268
104 土師器 甕	高 残 2.8 底 残 5.5	円筒状で突出する平底の中央が少し凹み、外面をヘラナド。外面胴部-肩部ナド。内面は胴部ヨコナド。外面は縦に付いた浅いヨコナドが平らで、筒状に成る前の形状が生きている。胴部ヨコナド。内面ナドとヘラナドナド。口縁部内外面ヨコナド。	7.5YR6/6 橙 やや暗い・白・透明細粒多 硬質	南東床土 2.2cmと SD- 283 並入片が接合 底全周 注記は左欄
105 土師器 甕	口 復 21.0 高 残 4.3	外面は口-頸部ヨコナド。内面は胴部ヨコナド。口縁部ヨコナド後に肩部を横-斜位ナド。	10YR5/3 に近い黄褐色 やや暗い・白粗-細粒多・白 緑少 硬質	南東床土 1.0cm 口 1/8 周, 胴 1/8 周 313
106 土師器 甕	高 残 2.7 底 7.0	外底面はおおむね多方向ヘラナドの後にナド。外面胴部は斜位のナドまたはタテナドの後にタテヘラナド。内面は胴部に横位ナド。外面は縦に付いた浅いヨコナドが平らで、筒状に成る前の形状が生きている。胴部ヨコナド。内面ナドとヘラナドナド。口縁部内外面ヨコナド。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや暗い・黒・透明粗-細粒 多・白粗-細粒少 軟質	東中央の遺構土上面 底全周 中央土上面一拵
107 土師器 小形甕	高 残 15.0 底 6.4 最大 18.1	外底面は筒状で突出する平底の中央が少し凹み、外面をヘラナド。外面胴部-肩部ナド。内面は胴部ヨコナド。外面は縦に付いた浅いヨコナドが平らで、筒状に成る前の形状が生きている。胴部ヨコナド。内面ナドとヘラナドナド。口縁部内外面ヨコナド。	7.5YR6/4 に近い黄褐色 やや暗い・赤粗-細粒多・白 灰・透明粗-細粒と黒細粒少 軟質	中央床土 2 ~ 7cmと東 部床土上→床土 8cmで接 合 1/3 周, 底全周 復 154, 217, 232, 233, 257, 266, 一拵, 東一拵
108 土師器 小形甕	口 復 12.8 高 14.1 底 残 5.4 最大 13.8	外面は筒状で突出する平底の中央が少し凹み、外面をヘラナド。外面胴部-肩部ナド。内面は胴部ヨコナド。外面は縦に付いた浅いヨコナドが平らで、筒状に成る前の形状が生きている。胴部ヨコナド。内面ナドとヘラナドナド。口縁部内外面ヨコナド。	10YR5/3 赤褐色 やや暗い・白粗-細粒やや多 灰褐色と黒・透明粗-細粒少 軟質	南東床土 4cm 口 1/3 周, 胴 1/2 周, 底 1/4 周 289
109 土師器 小形甕	高 残 4.9 底 5.6	外底面は中央部 1 方向ナドの後に、粘土を粘りつけて多方向に外周部を円筒状にヘラナドする。外面胴部は下端ヨコナドナド後に上側を上ヘラナド。内面はヨコナドナド。明確な縦線・使用痕は見られない。	7.5YR7/6 赤褐色 やや暗い・赤粗-細粒多・白粗- 細粒と黒・透明粗-細粒少 やや硬質	中央東部床土 3cm 底全周 237
110 土師器 甕	高 残 17.3 最大 23.7	外面は胴部に斜位のヘラナドとヘラナド後にヘラミガキ。肩部はヨコナドまたはタテナドの後にタテヘラミガキ。内面は胴部にヨコナドとナドナドナド。口縁部ヨコナド。外面は縦に付いた浅いヨコナドが平らで、筒状に成る前の形状が生きている。胴部ヨコナド。内面ナドとヘラナドナド。口縁部内外面ヨコナド。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや暗い・白粗-細粒少 黒・灰・透明細粒少 やや硬質	南東床土 3 ~ 15cm。 東中央の遺構土上面にも 1 片あり 胴全周, 胴中位 1/2 周 263, 291, 東中土上面一 拵, 8~6 拵一拵
111 土師器 甕	口 復 14.4 高 残 10.8 最大 復 23.0	外面は胴部ナドヘラナド。内面は胴部ナドナドナドナド。口縁部ヨコナド。外面は縦に付いた浅いヨコナドが平らで、筒状に成る前の形状が生きている。胴部ヨコナド。内面ナドとヘラナドナド。口縁部内外面ヨコナド。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや暗い・赤粗-細粒少・白・ 黒・赤・透明細粒少 やや軟質	北西土 1.0 ~ 9cmで接合 口全周 胴-胴 1/6 周 2, 10, 14, 113
112 土師器 甕	高 残 1.5 底 6.8	円筒状で突出する平底の底面はナドで、中央が少し凹む。外面胴部-肩部ナド。内面は胴部ヨコナド。外面は縦に付いた浅いヨコナドが平らで、筒状に成る前の形状が生きている。	7.5YR7/6 橙 やや暗い・赤粗-細粒多・白 灰・透明細粒少 軟質	中央床土 7cm 口全周 124
113 土師器 大形甕	口 復 17.0 高 残 10.3	胴部が薄い。外面は胴部ナドナドナド。口-頸部ヨコナド。内面は胴部ヨコナド。口縁部ヨコナド。内面は胴部ヨコナド。外面は縦に付いた浅いヨコナドが平らで、筒状に成る前の形状が生きている。胴部ヨコナド。内面ナドとヘラナドナド。口縁部内外面ヨコナド。	10YR6/3 に近い黄褐色 やや暗い・白・黒・灰・透 明細粒と白粗-細粒少 やや硬質	東中央土面の 10 片と南 東床土 1.5cm の 1 片が接 合 1/6 周, 胴 5/12 周 注記は左欄
114 土師器 甕	口 復 30.0 高 残 22.3	外面は胴部上下に浅く靱いタテハクの後に中位以下をナドナドヘラナド。内外面の口縁部をヨコナド。外面口縁部に付いた浅い靱いヨコナドが平らで、筒状に成る前の形状が生きている。胴部ヨコナド。内面は胴部に横位の密なヨコナド。古墳後期の器入遺物。 [注記] 270, 271, 288, 中一拵, 東中土上面一拵	2.5Y7/4 淡黄 赤細粒・白・黒・透明粗- 細粒と赤細粒少 やや硬質	南東床土 9 ~ 22cm, 東 中央土上面にも 17 片。 口-胴 上下 1/2 周 注記は左欄
115 土師器 高杯	高 残 14.4	外面は胴部タテヘラミガキ。杯体-胴部は斜位ヘラナド。杯内面は斜位ヘラミガキ。胴内面は上部がナドとユビオサエ。下部がナドナドヘラミガキ。口縁部ヨコナド。内面に筒状に成る前の靱い縦線 3 本。内面ヘラナドの工具で細く、古墳後期の遺物が混入。	7.5YR7/6 橙 やや暗い 赤粗-細粒多・黒・透明粗- 細粒少 軟質	北西土 6 ~ 7cm の 3 片と不同の 2 片が接合 胴全周 2, 8, 靱灰西, 一拵 A/A
116 砥石 磨石	高 13.7 幅 6.6 厚 2.0	片面が平坦に近く、反対面中央が靱い靱灰自然石をそのまま利用。両面を縦面に使う。非常に硬いので磨痕は不明瞭で浅い。全体の表面が近く靱く焼けた赤褐色。現示した表面を中に縦が少し有る。重量 305.7g	2.5Y5/3 黄褐色 非常に靱く硬質と赤細粒 フェルス	北西部土 18cm 完形 330

SG10 区 SI-28 (第 54・55 図, 写真図版 80・19)

【位置】 SG10 区南部の 19-17 グリッドにある。同じく古墳中期の建物は西に SI-38、南に SI-105 がある。古墳中期の建物同士で SI-25 → SI-28 の重複関係が推定されるが、SI-25 との重複状況を示す断面図は記録されていない。SI-28 と時期が近い古墳中期末の土坑 SK-911 が入口部分の貼床層を切る（現地調査時に SI-28 の入口施設「P5」と考えられた土坑を、整理作業時点で「SK-911」と改称した）。

【規模と形状】 方形の建物跡で主軸方位は CN-14°-E。東西 5.48 × 南北 5.27m、残存壁高 9 ~ 18cm。

主柱穴は 4 本で、床面からの深さは北東の P1 が浅くて南西の P3 が深く、P1=20cm、P2=27cm、P3=40cm、P4=26cm。柱間は南北が 2.42m（西側）～ 2.79m（東側）、東西が 2.48m（南側）～ 2.19m（北側）。北東に離れる P1 は主柱穴かどうか疑問もある。P2・P3 の抜き取り痕と裏込土からみて柱径は 12 ~ 15cm。貼床除去後に小穴 P7 ~ P9 を確認した。P7 の覆土に粘土とソフトローム小塊が多い（断面 H-H'）。P7 が径 49 × 床面から深さ 19cm、P8 は径 24 × 16 × 深さ 19cm、P9 は径 27 × 深さ 9cm。



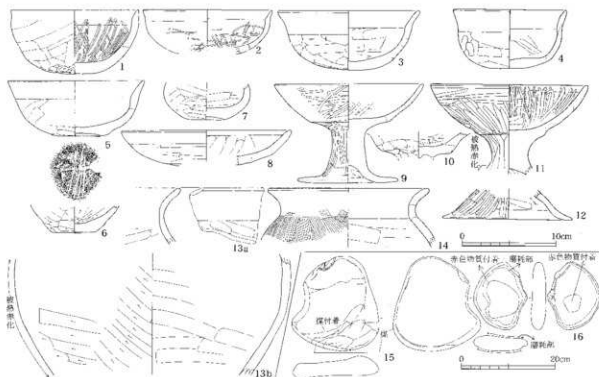
第54図 権現山遺跡 SG10区 SI-28(1)遺構

入口は南壁側の西部で東西112~133cm×南北100cm・深さ約10cmの隅丸台形の範囲が窪む。この窪みは、床面での形や土層断面図ではなく、掘方底面に達した窪みの範囲が図化されているだけである。

入口部の東側を切る古墳中期末のSK-911上をSI-28の7層が覆うので、SI-28とSK-911の時期差は少ない。調査時にはSK-911とSI-28の人工施設「P5」と考え、その可能性も残る。南東部の貯蔵穴P6は東西94×南北101cm、周囲盛土面から深さ42~50cm。P6の流入土上・中層にカマドの焼土粒が混じる。P6から入口付近は床から2~5cm高くロームで盛土する(断面B-B'とF-F'の8・8'・9'層)。壁溝はない。南西柱穴P3の西で貼床除去後に確認した間仕切溝D1は幅24~27cm、床面から深さ7~14cm。

掘方は、北東隅部の東西105×南北94~120cmの範囲が床面から15cm(周囲の掘方底より2~7cm)まで深くなる。また、P1の南側とP4の周辺では掘方底が周囲より3~7cm高い。掘方掘削後に暗黄褐色のソフトローム(9層)で貼床している。南東部の貼床土はやや異質である(8層)。

[カマド] 東壁の南部にあり、煙道は東壁からほとんど突出しない。両袖幅80cm、煙道先端から袖先端まで67cm。ソフトロームに焼土・白色粘土を混ぜた土で両袖を作る。燃焼部~煙道間の火床面上5~10cm(断面E-E'で覆土2・3層の境)と、南西側の床上3~6cmに、カマド構架材の被熱した灰白色粘土塊が落ち込んでいる。カマド内で逆位になって出土した高杯(11)は杯部が完形で脚が被熱しているため、支脚



第55図 権現山遺跡 SG10区 SI-28 (2) 遺物

に転用したものかもしれない。ただし、出土位置は火床面よりも7cm上方である。

【覆土】自然埋没状で、上～中層に含む白色粒子は古墳後期初頭に降下したHr-FAテフラの可能性が高い。

【遺物出土状況】南壁付近から貯蔵穴とカマド周辺に多い。南西部の杯(1)は床上1cmで上を向く。北東柱穴P1の南東(床上7～12cm)や、北東隅(床面～床上2cm)にも少し土師器片がある。西半部で7～14cm大の自然礫が床上7～11cmにあり、石皿(16)も含む。カマドの遺物の状況は上述した。

【出土遺物】北西にあるSI-38と時期が近く、東壁にカマドを持つSI-28のほうが少し新しいと考えられる。5は杯底を研磨具に転用したと見られる平行刻線がある。高杯はよく磨く9・11・12と、仕上げナデを省いた10がある。8は中期末の一般的な高杯と胎土が異なり、後期の混入遺物かもしれない。

遺物量は比較的多く、杯が主体で高杯・壺・甕も一定量あり、小形壺は少ない。図示以外の土師器および焼粘土塊合計162片・1,427gの内訳は、杯58片・349g、高杯21片・128g、鉢1片・13g、小形壺20片・117g、壺・甕類58片・796g、焼粘土塊4点・24g。図化した以外の土師器では、鉢形および潰れた半球状の杯があり、壺・甕類は小破片ばかりで底部が2個体分ある。

第30表 権現山遺跡 SG10区 SI-28 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (単位・形)	特 徴	色調 胎土・構成 (または素材)	出土位置 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 13.5 高 6.7	厚く重い。外面は体部ナメヘラナデ後に底部を1方向ヘラズリで丸底にするが、底面中央が小さく凹んでいる。内面体部ヘラナデ後に内外面の口縁部をヨコナデし、内面体部に放射状ヘラミガキ。外面全体が黒色化している。	10YR6/3 赤・黄褐色 やや硬質 灰色粗粒と白粒～ 細粒と黒・透明粗粒少 破片	南西隅床上1cmで正位 口1/4周、底全周 55
2 土師器 杯	口 径 13.6 高 残 4.7	外面体部は磨滅で不明瞭だが、ヘラズリ後に主に横位のヘラミガキ。内面体部はナデまたはヘラナデの後に縦・横位ヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。	2.5Y5/8 明赤褐色 硬質 赤粒～細粒やや多、 黒・黒細粒少 中破片	貯蔵穴底上3.7cm 口5/32周 25、貯、南東
3 土師器 杯	口 径 14.8 高 残 6.2	体一底部境の境が内面では明瞭で外面では弱い。外底面は多方向ヘラズリで丸底状。外面体部ナデ後に口縁部ヨコナデ。内面体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。外面ヨコ一体系部に少量の痕あり。	5YR6/8 赭 やや硬質 赤・灰色粗粒と 黒・黒、透明粗粒少 やや破片	南西床上12cm 口1/4周、底全周 52
4 土師器 杯	口 径 12.0 高 6.2	口一体系境の境が内面では明瞭で外面では弱い。外面は体部に横～縦位と底部に1方向のナデ、口縁部ヨコナデ。内面は磨滅して調整不詳で、体部はヨコヘラナデしている可能性がある。	5YR7/8 赭 やや硬質 白・黒粒～細粒 やや多、透明粗粒少 破片	北東床上7cmで正位 口2/3周 40

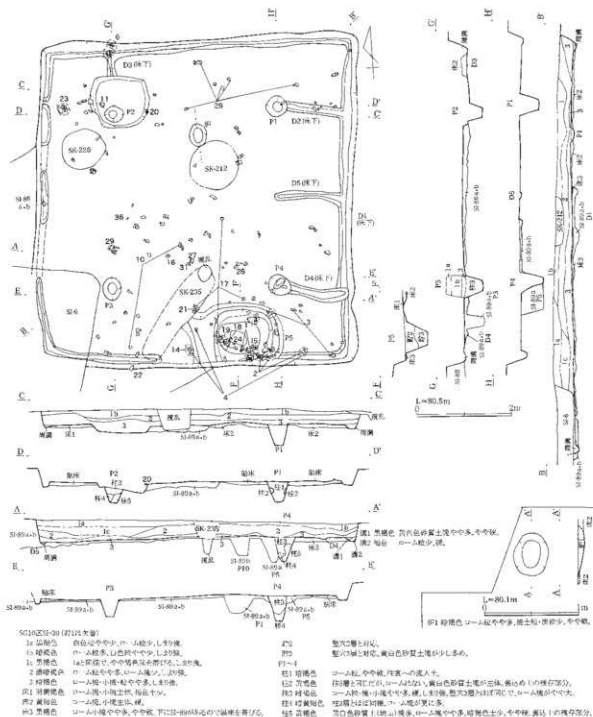
5 土師器 杯	口 径14.3 高 残 4.5	口～体部境の境が内面で明確で外面では弱い。外底面はナデ後に外唇部ヘラナデで凹底状。外面体部ナデ後に口縁部ヨコナデ。内面は磨滅して調整不明。外底面に凹底後の平行刻線あり。研磨面に転用したと考えられる。	5Y86/8 磨 やや磨滅 赤黒粒やや多 黒・透明黒粒 やや多	P5内底上2cmと南西隅 床1.4mの境合 口1/2周。体3/4周。 底全周 37.5、貯 39
6 土師器 鉢	高 残 2.9 底 残 4.6	外底面はほぼ1方向ヘラナデで平底。外面体部はヘラナデ後に下部部をヨコヘラナズリ。内面は底部に多方向と体部に縦位のヘラナズリ。	2.5Y7/6 明磨面 やや粗い 赤黒・黒粒多 白・灰色粒と黒黒・黒粒少 やや多	南東隅床土4.4m 底2/3周 29
7 土師器 小砂器	口 径 3.9 底 残 0.2	外底面はおそろく削って凹ませた後に、主に内側方向のヘラナズリ。外面体部は丁字部ナデヨコヘラナデで平削りに仕上げた。内面は底部に多方向と体部に縦位のヘラナズリ。	10Y87/4 に近い黒粒 明磨面 透明黒・黒粒少 やや粗い 赤黒・黒粒少 やや多	北東床土9cm 床1/4周。底全周 39
8 土師器 高杯?	口 径 17.9 高 残 3.7	浅く、体～底部間の外面に段がある。高杯の可能性はある。外底面1方向ヘラナズリ。外面体部ヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面は体部ナデナデ後に口縁部ヨコナデ。	10Y87/3 に近い黒粒 やや粗い 黒黒粒多、赤・透明 黒粒と白黒粒少 やや多	カマド北側床土4mの 南西隅2片と境合 口1/6周 16、A.A.東、南西
9 土師器 高杯	口 径 15.7 高 10.4 脚部 残 10.5	外面は杯底部に横位、杯体部と脚部に縦位のナデ後、口縁部と脚部部ヨコナデ。杯体部にヨコヘラミガキ。脚部～底部にタテヘラミガキ。杯内面はナデ後に体部を多方向、体部を斜位にヘラミガキ。脚部内面はナデ後に底部ヨコナデ。杯下部内面は磨滅して調整不明。	5Y86/5 磨 やや粗い 白・黒・赤黒・黒 粒と灰色粒少 やや多	カマド北側床土1～ 3cmの境合 脚部全周 脚部1/4周 2、6
10 土師器 高杯	高 残 2.5	外面杯底面はやや磨滅ナデで粘土積み上げ痕をよく残す。外面杯体部ナデ。内面は杯底面に多方向と体部に横位のヘラナズリ。	5Y86/6 磨 赤黒粒多、白・ 黒・透明黒粒 やや多 やや多	北東隅床土上と中央西 隅床土1.9mの境合 杯底3/4周 47、49
11 土師器 高杯	口 径 16.6 高 残 9.4	外面は杯体部ナデ後に脚柱部までタテヘラミガキ。口縁部に狭いヨコナデの後にヨコヘラミガキ。内面はヘラナデと口縁部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。脚下部の磨滅している付近は磨滅止化する。	2.5Y8/3 に近い黒 粒 白・黒・透明黒 粒 白・黒と灰色粒少 やや多	カマド大床土7cmで底位 杯～脚柱全周 1
12 土師器 高杯	高 残 3.2 脚部 残 13.6	外面は杯体部ヨコナデ後に脚部タテヘラミガキ。内面は脚部ヘラナデ後に脚部ヨコナデ。	2.5Y87/8 磨 やや粗い 白・黒・透明黒 粒多、白・灰色粒少 やや多	南西床土3cmとカマド 内および大床土5cmが境合 脚2/3周。脚1/4周 5、32、8
13 土師器 甕	口 径約 20 高 口残 5.9 脚残 12.8 最大 底 29.2	脚部と頸部の間に破片が不足して接合できない。脚部は外面ナメヘラナズリおよびナデ後に削りヘラナズリ。内面ヨコヘラナズリ。胴内外面ナデ後に口～胴部をヨコナデ。胴部外面が磨滅止化する。全体が磨滅して調整が不明。 [注記] 3、4、8、9、10、12、20、24、33、65、67、貯東南面、貯東南面、貯北、南西、灰炭、A-A	10Y87/3 に近い黒粒 粗い 白・黒・透明黒・黒粒 多、灰色粒と赤黒粒少 やや多	カマド北側床土上2～ 6cmとP7底土3cmが境 合。脚残の内や頸辺に も多数の破片あり 口1/4周。脚1/3周 注記は左欄
14 土師器 甕	口 径 16.9 高 残 6.2	外面は7本/㎡の縦一帯位ヘラナデ後に口～胴部ヨコナデ。内面は胴部ヨコヘラナズリ。口～胴部ヨコナデ。 [注記] 24、貯東床土、南東、19.0・17.0、土表	10Y86/3 に近い黒粒 粗い 黒粒・黒粒多、白粒 ・黒粒やや多、透明黒粒少 やや多	貯東大東床土上～床土 1cm 口1/4周 注記は左欄
15 石器 台石	長 19.8 幅 18.3 厚 4.2 重 1907	扁平な自然産。右隅の角は平直で、台石としてこの面を使用した可能性がある。削し、確実な使用痕は不明。左隅の面の下部がやや厚く、両面に多少の厚着が残る。この部分と上端が磨滅しているのは人為的かどうか不明。	N6-9 灰 褐色な安山岩	貯東大東床土上26～28 cmの2片が境合 完形 27A、27B
16 石器 石皿	長 14.2 幅 11.3 厚 3.2 重 518.3	扁平な円盤をそのまま利用。側面が割れた部分もあるが、人為的加工ではない。両面の平坦面が縦線とも磨滅し、その中央部に明水褐色。白Y85.0の付着物が多少残り、殺菌のようにも見える。	5Y6/1 灰 多孔でやや磨滅した安山岩	中央内側床土8cm 注記は左欄

SG10区 SI-30 (第56・57図、写真図版81・174・195)

【位置】 SG10区南部の台地東縁辺の17-17グリッド。同じく古墳中期の建物は南にSI-2、北にSI-9、北西にSI-16がある。古墳中期のSI-89a・bを切る。SI-89b→(拡張)→SI-89a→SI-30→SI-6の順序で重複し、後期のSI-6と、平安時代のSK-235と時期不明のSK-212・226に切られる。旧名称SI-7・SI-8はSI-30の覆土1層の一部で、旧名称SK-227はSI-30の北西主柱P2周囲に附属する窪みと判明したために、SI-7・SI-8およびSK-227は欠番となった。SI-30の遺物には「SI-7」や「SI-89」と注記したものが含まれている。

【規模と形状】 方形で、主軸方位はGN²-E。東西7.0×南北7.02m、残存壁高は23～44cm。主柱穴は4本で、柱間は南北に長く東西3.48×南北3.70m。P1・2・4の残存裏込土からみて柱径は12～18cmほどで、床面からの深さはP1=45cm、P2=41cm(周囲の凹みから37cm)、P3=36cm、P4=54cmで、P4が少し深い。北西柱穴P2の周辺が隅丸方形に東西124×南北110×深さ10～15cmの規模でくぼむ。この範囲は貼床を切って掘り込まれ、竪穴部分と一連の同じ土で埋没していた(断面図C-C'とD-D')。

入口施設と考えられる土手状盛土(床面から高さ3～5cm)が貯蔵穴P5の西側で半円形に巡っていたと考えられるが、SK-235に破壊された部分よりも西側では確認できなかった。貯蔵穴P5は南壁の東部にあり、東西86×南北68×深さ49cmで、土手状盛土(幅25～60cm・高さ3～9cm)が周囲を巡る。土手状盛土から一段落ち込む上部を含めたP5の規模は東西126×南北106×深さ63cm。P5の底面は地山中の黄白色粘質土中にあり、軟らかいので調査時に底面を数cm掘りすぎてしまっている。壁溝D1は幅15～20cmで貼床除去後に確認し、床面からの深さは2～9cm。東側に3本と北西部に1本ある間仕切溝D2～D5も貼床除去後に確認したもので、幅15～26cm、床面からの深さ7～9cm。東側中央のD5以外は



第56図 権現山遺跡 SG10区 SI-30 (P1) 遺構

主柱穴 P1・P2・P4 を通る線上にあり、P1・P4 と連結している。

掘形底面や柱穴底面の地山は、ローム層よりも下にある非常に硬い黄色砂質土である。貯蔵穴 P5 だけは柱穴底よりも底面が深く、地山の粘土層中にある。

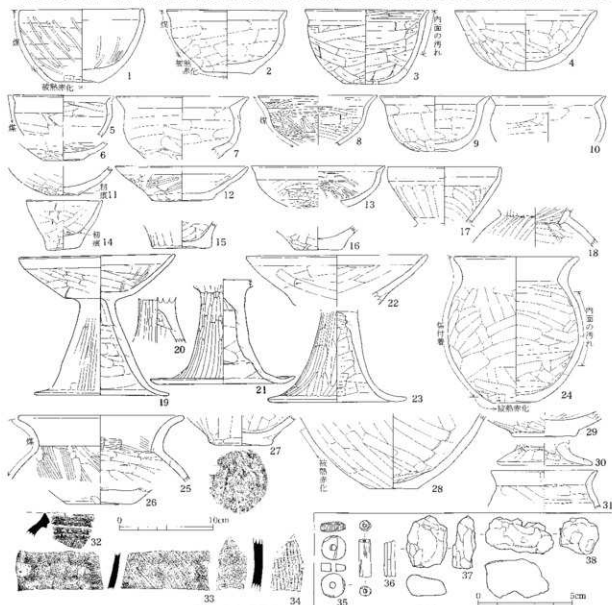
【炉】中央北部にあり、南北 45 × 東西 36 × 床面から深さ 2 ~ 4cm。底面中央部 ~ 南半部が被熱していた。

【覆土】覆土は自然埋没と思われる。1層の各層 (1a ~ 1c 層) にテフラと思われる白色粒子をやや少量含む。

【遺物出土状況】貯蔵穴周辺に多い。貯蔵穴埋土上部に西から流れ込んだ状態で高杯 (19) と小形甕 (24) がある。残存度の大きい椀形杯 (1 ~ 4) も貯蔵穴周辺の遺棄品であろう。SI-16 床面で出土した大形二重

口縁歪 (SI-16 の 46) に接合する破片が、SI-30 の床上 10 数 cm にある。両遺構の時期が近く、SI-30 が SI-16 より少し古い可能性を示す。重複する平安時代土坑 SK-235 に係わる 9 世紀代の土師器杯や須恵器甕 (33) も混入している。新治窯産の平安時代須恵器平底甕片 (SK-235 と同一個体) が SI-30 の竪穴西部覆土下位にもあるので、SK-235 以外の平安時代遺構が SI-30 覆土中に掘り込まれていた可能性もある。

【出土遺物】 外面に不規則な煤が付着する碗形杯が見られる (1・2・3・5・8)。稲稈痕がある土師器 (11・14) は、SG10 区では SI-50 の杯などにも見られる。17 のように白色針状物質 (骨針) を含む土師器は搬入品で、SG10 区 SI-23 などにもある。18 は焼成や頸部接合方法が通常の小形甕と異質で、やはり搬入品かもしれない。高杯の脚部上端を逆凹字形に作るものが見られる (19～21)。24 は外面によくスガが付く小形甕。25 の他にもハケ調整甕の破片が見られた。27 は底部木葉痕の大半を削って消している。重複する SI-89a・b と同じく古墳中期中葉の遺物が見られ、SI-89 からの混入品も含まれているであろう。短脚高杯 (30) や小形甕 (31) は古墳後～終末期の混入品。古墳時代須恵器は、外面平行叩き・内面無文の甕胴部破片が数片ある (34)。34 と同一個体とみられる須恵器甕片は SI-10・12 などに混入している。混入した平安時代の須恵器甕 (33) と同一個体の破片は、重複する平安時代土坑 SK-235 や中世の SE-252 など複数の遺構から出土した。



第 57 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-30 (2) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

遺物は多いが小破片主体で、接合できたものは少ない。図示以外の土師器は椀形杯が口縁部で約16個体(内斜口縁12・半球状4)、高杯が杯底部で3個体、小形壺3～4個体(中形品1・小形品2～3)、鉢が底部で2個体、甕が底部で約10個体、貼付口縁壺3個体、貼付口縁甕4～5個体。図示以外の土師器と焼粘土塊合計3,029片・20,677gの内訳は、杯1,544片・7,233g、高杯214片・1,807g、壺甕類1,258片・11,467g、甕11片・139g、焼粘土塊3点・31g。不掲載の須恵器は口縁部小片1点・1gがある。

鉄関連遺物は、鍛冶炉伊壁(38)と極小の椀形鍛冶滓(37)が各1点ある。重複するSI-6や西側のSI-14にも鉄滓・伊壁が少しある。伊壁片はSI-14出土例に質感が似る。重複する時期不明土坑SK-226の滑石製有孔円板はSI-30から混入した可能性がある。両面穿孔の滑石製管玉はよく磨かれて黒味が強い(36)。北方の砂田遺跡4区工房跡(津野・篠原・今平2007)にある両面穿孔管玉は研磨が粗い未成品なので36より灰色に見える。権現山遺跡南部ではSG10区SI-81に碧玉製管玉がある。粘板岩製白玉(35)はSG10区SI-20などにあり、SG10区SI-18の甕胎土物とSI-30・36・69(現物消失)・81に滑石製白玉がある。

第31表 権現山遺跡 SG10 区 SI-30 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ 径・高・重	特 徴	色調 胎土・焼成 (主要土質)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.1 高 7.6 底 4.4 重 残 270.2	外底面はヘラズリで凹状になる。外面は体部横ヘラナデと下端口コヘラズリと口縁部ヨコナデの後に斜ならなナメハラミガキ。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデの後にタテハラミガキ。外面は中位以上に甕が付着し、口位～底部は焼硬化した可能性があるが、内面には煮吹きに用いた煎粉が付着しない。	7.5YR8/6 灰黄褐色 やや粗粒・白・赤・黒・透明細粒少 やや硬質	新設穴底上15～43cmで接合 口5/6留、底全周 11, 13, 17
2 土師器 杯	口 12.6 高 6.6 底 4.8 重 残 212.3	外底は口～頸部にヨコナデの後、底面に多方向の口と体部に横位のヘラナデ。内面は体部に口コヘラズリ、口縁部にヨコナデ。外面上半に甕が付着。外面下半と外底面は淡赤色(2.5YR7/4)で、焼熱している可能性がある。	5YR6/8 橙 やや粗粒・白・赤黒～細粒 やや多・黒・透明細粒少 やや硬質	南東部中央1mと新設穴底上4～15cmが接合 はほぼ完全 口11/12留、底全周 4, 7, 10
3 土師器 杯	口 13.1 高 7.8 底 5.8	外底面は多方向ヘラズリ。外面は体部ナデと口縁部ヨコナデの後に体部を横～斜位ヘラズリ。内面は体部ヨコヘラズリ後に口コヘラズリと口縁部ヨコヘラミガキ。外面全体に不規則な甕が付着する。内面上半の汚れも口縁部よりも少くもない。	2.5YR5/6 明赤 やや粗粒・白～細粒多 やや多・黒・透明細粒少 硬質	南東部中央3～6cmと新設穴底上2mが接合 口1/2留、底1/3留 注記は左欄
4 土師器 杯	口 復 14.9 高 6.0	口～体部端の内面に斜位～横位。外面体部に横～斜位ナデと口縁部ヨコナデ。内面体部にナメハラミガキ後、口縁部ヨコナデ。 [注記] 5, 25, 29, 東南3留、P5西1-2留	5YR7/6 橙 やや粗粒・白・赤黒～細粒 やや多・灰赤粗粒と黒・透明細粒少 やや硬質	西部中央の2留 口1/4留 東中2留
5 土師器 杯	口 復 10.8 高 残 4.4	内外面の体部にヨコヘラズリ後、口縁部ヨコナデ。内面のヘラナデは頸部がやや窪んで浅い湾を生じている。内面の残存部全体に甕が付着する。	5YR7/6 橙 やや粗粒・白～細粒やや少 赤・黒・透明細粒少 やや硬質	西部中央の2留 口1/4留 東中2留
6 土師器 杯	高 残 1.9 底 4.1	外底面は反時計回りのヘラズリでわずかに凹状。体部の内外面をヨコヘラズリ。外面にご少量の甕が付着。	10YR7/4 灰赤 やや粗粒・白・灰赤粗～細粒 と赤・黒・透明細粒少 硬質	高東部の覆瓦中1と1留中底3/4留 南東1留、Cトシ東部瓦 破片
7 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 6.7	口～頸部は体部よりも明るい色の粘土で成形する。全体の仕上げが窪んで底部分が厚い。外面は体部ナデ後に下端部をヘラズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラズリ、口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗粒・赤黒～細粒やや多 白・黒・透明細粒少 やや硬質	中央西側 口1/6留、底1/4留 中西1a留
8 土師器 杯	口 復 12.4 高 残 5.3	内外面ともに体部ヨコヘラズリと口縁部ヨコナデ。外面は体部に横～斜位と口縁部に横位の密ならなミガキ。内面口縁部もヨコヘラミガキの可能性あり。外面全体に不規則な甕が付着する。	10R/6 赤橙 やや粗粒・白・黒・透明細粒少 やや硬質	西部中央 口1/6留、底1/4留 東中1b留
9 土師器 杯	口 復 11.6 高 5.8 底 3.8	外底面は中央を挟むように分つて凹状にし、外周部をナデ。外面は体部に斜位と頸部に横位のヘラズリ。体部下端ナメハラズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラズリ、口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/8 黄橙 やや粗粒・白・赤黒～細粒多 赤・透明細粒少 軟質	中央西側2片と北西部1片 口1/4留、底3/4留 中西1a留、Dベルト西1b留、西アブケ1
10 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 4.9 最大 復 12.1	外面は体部上端ナデ中に中位以下をヨコヘラズリ、口～頸部ヨコナデ。内面は体部ナデ、口縁部ヨコナデ。 [注記] 176, 141, 中内1留、Aトシ中南	2.5YR6/4 灰赤 やや粗粒・赤粗粒と黒・透明細粒少 やや硬質	中央床1.1mと西側埋戻床1.5m、中央南部と西部に各1片 口1/4留、底2/3留 底全周
11 土師器 杯	高 残 3.1 底 3.3	外底面は反時計回りのヘラズリで凹状。外面体部ヨコヘラズリ後に体部を横～斜位ヘラズリ。内面は甕製して調整不順。外面体部に細粒煎粉が1箇所ある。	5YR4/6 赤褐 やや粗粒・赤粗粒多・灰 色調と赤粗粒と黒粗粒少 やや硬質	北西側床1.33m 底全周 125, 西2-2留
12 土師器 杯	口 14.0 高 3.7 底 6.5 重 残 157.9	外底面は多方向ヘラズリ。外面体部に斜位のヘラナデとヘラミガキ。内面は体部ヨコヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや粗粒・赤粗粒多・白～細粒と赤・黒・透明細粒少 やや硬質	南西床土17cm 口5/6留、底全周 126, 東北
13 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 4.3	口～体部端の残は内面で明瞭。外面は体部ナデと口縁部ヨコナデの後に体部ヨコヘラズリ。内面は体部にナデまたは口縁部ヨコナデの後に体部を横～斜位ヘラズリ。	2.5YR6/6 橙 やや粗粒・白粗粒多・赤粗粒と黒・透明細粒少・硬質	西部中央 口1/9留 上層・透明細粒少・硬質
14 土師器 小形土器	口 復 8.1 高 5.2 底 2.4	内～底部に薄く体部を積み上げる。底部近くの内面に細粒煎粉あり。内外の底面に多方向、体部に横～斜位のナデ。 [注記] 29, P3下、東南3留、SI-15東西ベルト	2.5YR6/8 橙 やや粗粒・赤粗粒と黒粗粒 やや多・白・透明細粒少 硬質	南部床1.1mと南西1柱 ア。SI-15の小片と接合 口1/6留、底全周 注記は左欄

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

15	高 残 2.8 土師器 鉢	底面がやや突出し、外面中央がユビオリエで少し凹む。外面の外面を多方向ナメ、外面部タチナデ、内面ナメナメナデ。熱熱面はなく、外側に焼成跡の黒皮を残す。	7.5Y8/6 土 灰 やや暗黒 白・赤黒・黒粒と 黒・透明細粒少 やや破質	野塚式底上 75cm 底全周 14
16	高 残 2.5 土師器 鉢	外面体部と外底面を多方向ナメ。内面は斜線と垂直の高に調整が不明で、ヘラミガキの可能性もある。	7.5Y8/7 土 灰 やや暗黒 白・赤黒・黒粒 と透明細粒少 やや破質	中央底上 1cm、3層の1 片が結合 底 1/2 厚 77、重中 3 層
17	口 残 11.9 土師器 小形壺	頸部に外面タチナデと内面ナメナメナデの後に口縁部内外面と頸下縁外面をヨコナデ、外面口縁部下縁の隅に鋭起する。やや破れて斜り。	5Y8/6 土 灰 やや暗黒 透明細粒・黒粒と 白色粘状物やや多、赤・黒 粒少 やや破質	野塚式底上 18cmと中央 底上 5cmと前後層 1 ～ 2 層、SK-23に 2 片 置入 口 1/3 厚、頸 3/4 厚 口は左縁
18	高 残 4.3 土師器 小形壺	外面は頸部に斜位と頸部に横位の密なへつミガキ。内面は頸部下縁から体部に少し入ら込むようにして接合する。内面頸部ココナデ後に絞りに。内面頸下縁に密なナメヘラミガキ。	7.5Y8/5 土 灰 白・黒・赤・透明細粒 少 破質	野塚式底 33cm 重 1/6 厚 頸 21
19	口 16.6 土師器 高杯	杯部外面はヘラナデ後に口縁部ヨコナデで、ヘラミガキの有無は確認して不明。頸部外面部ヨコナデ後に頸全体をタテヘラミガキ。頸部内面は縦・横・斜位のナデ後に頸部ヨコナデ、杯部内面はヨコヘラナデの後にタチヘラミガキ。	5Y8/6 土 灰 やや暗黒 赤黒粒やや多、 白・黒・透明細粒少 やや破質	野塚式底上 42cmで斜め 下向き ほぼ水平 口 11/12 厚 頸部 1/2 厚 23
20	高 残 4.8 土師器 高杯	頸柱上縁は中央がやや凸形で、そこへ傾斜状態で反時計回りに粘土を積みこんで成する。外面は杯底部タテヘラミガキ。内面は上縁が粘土の敷を残りしたままで、それより下縁は斜りタチナデ。	5Y8/6 土 灰 明赤黒 やや暗黒・赤黒・多、P2 透明細粒と黒粒少 破質	P2 周辺の凹み内底上 11cm 頸柱全周 SK-27 口 1
21	高 残 11.0 土師器 高杯	頸柱上縁は中央がやや凸形で、そこへ傾斜状態で反時計回りに粘土を積みこんで成する。外面は杯底部タテヘラミガキと頸柱部タテヘラミガキ。内面は放散状の密なへつミガキ。頸内面は横位のナデとヘラナデの後に基部をヨコナデ。	2.5Y8/4 黄 灰 細赤 赤黒・黒粒と白・黒 粒少 破質	中央底底上 11cm 頸柱全周、頸部 1/12 厚 28
22	口 残 19.1 土師器 高杯	内外面ともにナメヘラミガキ後、口縁部ヨコナデ。全体が磨減して調整が不明瞭で、ヘラミガキの有無ははっきりしない。	5Y8/6 土 灰 釉 水鉄粒と白黒粒多、白硬・粗 粒と黒・透明細粒少 破質	内面南内端底上 7cm 口 1/4 厚
23	高 残 9.6 土師器 高杯	杯部外面は上側に反時計回りに粘土を積みこんで成する。外面はタテヘラミガキと頸部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。内面は基部ヨコナデヨコナデ。	7.5Y8/6 土 灰 やや暗黒 白・黒・赤黒・黒 粒少 破質	北内端底上 17cm 頸柱全周、頸部 1/3 厚 133
24	口 13.1 土師器 小形壺	外底面は上へつミガキ後、外面部はナメヘラミガキ後に体部下縁部ヨコナデ、口へ傾斜にヨコナデ。内面は上に横位の粗いへつミガキ後に、頸部下縁の厚たたと見られる付着をヨコヘラミガキ。外底面が熱熱赤化、最大 14.2 重 残 61.2	5Y8/6 土 灰 明赤黒 やや暗黒・白硬・白・赤黒・ 黒粒やや多、黒粒少 やや破質	野塚式底上 33～40cm で上向き斜位 ほぼ水平
25	口 残 17.4 土師器 甕	外面肩筋は重 5cmのナメヘラミガキ後に間隔を空けたナメヘラミガキ。内面は口縁部におおむねナメヘラミガキの後に斜位ヘラナデ。内面頸部ヨコナデ後に口縁部内外面をヨコナデ。外面に僅かに付着する。	2.5Y8/6 土 灰 やや暗黒・白硬・黒粒多、 黒・透明細粒やや多 破質	東縁下半部から東側へ 続く腹中、口 1/4 厚、頸 1/3 厚 D 東縁上
26	高 残 1.8 土師器 甕	外底面は中央が少し凹み、外周部に斜りタチ。外面頸部下縁は縦おむね横位のナデ。内面底部に多方向ナデ。	10Y8/5 土 灰 白・赤黒・黒粒と透明細 粒やや多、赤黒粒と透明細 粒少 破質	南東底上 28cm 口は一部欠 82
27	高 残 3.2 土師器 鉢	円板状に突出した外底面は中央が少し凹む。外周部を多方向ヘラミガキ。内面は中央より少し外側にながれ残っている。外周部上縁はナメヘラミガキ。木製蓋は多方向・斜位に斜りたむねのヘラナデ。	7.5Y8/6 土 灰 やや暗黒・白硬・黒粒多、赤 黒粒と黒粒少 破質	中央底面底上 4cm 底全周 78
28	高 残 7.9 土師器 鉢	外底面は上側のヘラナデで、外面頸部ナメヘラミガキ。内面は底部に多方向と斜位に斜位のヘラナデ。外面頸下平い・底面が熱熱し、内面底中央に少しコブがある。	5Y8/4 土 灰 白・赤黒・黒粒と 白・透明細粒少 やや多、黒粒少 やや破質	北内端中央から北東直上 上へ底上 12cm 頸 5/12 厚、底 7/8 厚 口は左縁
29	高 残 2.7 土師器 大形壺	円板状に突出する外底面を多方向ヘラミガキ。外面頸部下縁はナメヘラミガキで、突出した円板状底面の輪面にへつが当たる。内面底部はおおむね斜位状のヘラミガキ。	10Y8/6 土 灰 やや暗黒 灰色・透明細粒と 白・透明細粒少 破質	南内底上 28cm 底全周 62
30	高 残 2.4 土師器 高杯	外面は頸部にヨコナデ後、頸柱部にタテヘラミガキ。タテヘラミガキ時に頸部も斜り横位にヘラナデまたはミガキを行う。内面は頸部ヨコナデ後に頸柱部ナメヘラミガキ。外面の頸柱部と内面の頸部外縁部が黒熱赤化で、漆仕上りの可能性が高い。古墳後縁部上縁に粘土面下の遺物が置入。	10Y8/7 土 灰 やや暗黒 白・赤黒・黒粒と 白・透明細粒少 やや破質	西部中央の 1b 層 頸部 2/3 厚 西中 1b 層、西中フタ土
31	口 残 11.3 土師器 小形壺	外面は頸部ナメヘラミガキ後に口縁部ヨコナデ。内面は同部ナデと口縁部ヨコナデ。古墳時代前期の遺物が置入。	10Y8/7 土 灰 明黄赤 やや暗黒・黒・透明細粒と 白・黒粒少 少や破質	中央底上 1cm 口 1/4 厚 79
32	口 約 40 土師器 白土	口縁部外外面に 2 条の段がある。上縁は尖り気味。外面頸部下縁は白土の塊、5cm以上の高で断面に向かって右から左へ傾斜状状況。外面全体に黒色の粘状物が付く。	5Y5/7 土 灰 やや暗黒 白・平透明細・黒 粒少 破質	西部中央 口 1/18 厚 西中フタ土
33	高 残 4.0 須恵器 甕	外面は白土の薄層を貼った明赤で平行叩き。内面は当貝磁を磨り消して無文。無文当貝を使った可能性もある。底面と表面面の色調には差がない。3片出土した同一個体断面のうち 2 片が接合したものを示した。	5Y4/1 灰 やや暗黒・白硬・黒粒やや多、 赤・黒色焼出粒少 破質	南部の 1a と 1b 層 頸部 3 片 Aト上層、Aト下層上層、 西中 1a 層
34	高 残 5.6 須恵器 甕	外面は白土の薄層を貼った明赤で平行叩き。内面は当貝磁を磨り消して無文。SK-10-12-23 出土土片と同一個体の可能性あり。	5Y5/1 灰 やや暗黒 白・平透明細・黒 粒少 破質	2.5C/4 1 層オリーブ灰 磁器で軟質な粘状物
35	製 12.29 土師器 品	陶の表面は黒色の剥離面が浅い段になって残り、穿孔剥離を生じている。裏面は彫理に沿って分割した折れ面で、裏面に窪んだ後に分割した可能性が高い。断面は穿孔と同じ方向の粗い網模様。孔径 2.47～2.69mm、重量 0.93g。	5Y2/1 土 灰 明赤黒 やや暗黒 軟質な滑石片岩	中央底底上 19cm 底全周 70
36	長 1.89 土師器 瓶	断面が楕円形で、片方の小口が長軸に対し斜に斜交する。両面から穿孔し、孔径は両側で 1.83mm、下側で 1.79mm。断面は長軸方向に細く研削し、研削面はより粗くなっている。穴発生している。両小口面は多方向に研削して研削の光沢を授け、直径 1.14g。	5Y2/1 土 灰 明赤黒 やや暗黒 軟質な滑石片岩	中央底底上 19cm 底全周 70
37	高 残 2.8 土師器 小形壺	長さ 1cm程度の極小の輪形断面の輪部が破片。側部は全周が破面で、破面は全周にわたって露出する。下面がわずかに輪形となる。断面関連遺物構成 No.65。	青 明赤色 緑 暗赤色 磁 褐色度 4 メタム色 なし	全周が破面
38	長 2.0 土師器 小形壺	SK-14 出土の管とはほぼ同一の貫通を持つ輪形が明赤黒。熱熱は強く、全体が灰白色となっている。上面左側の平面面には薄皮状の珪が貼り付いており、断面の明赤破片であることがわかる。断面関連遺物構成 No.64。	赤 暗赤色 緑 明赤色 磁 褐色度 1 メタム色 なし	小破片

SG10区 SI-32 (第58・59図、写真図版81・82・196)

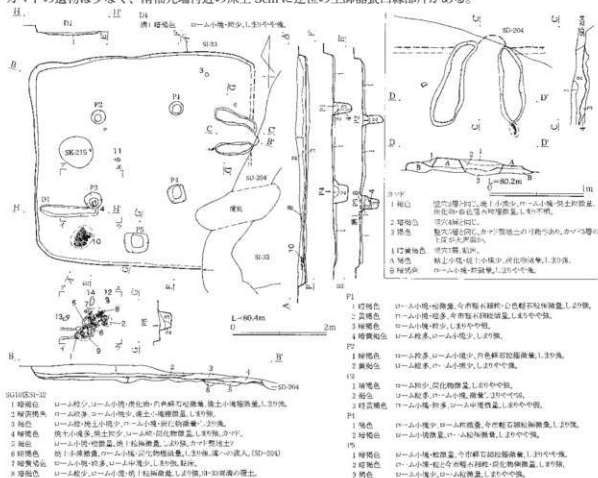
[位置]SG10区南部の18-18グリッド。同じく古墳後期の建物は西にSI-10・12、北にSI-34(a～c期)がある。古墳中期のSI-33を切り、近世のSD-204に東辺を切られる。時期不明のSK-215はSI-32の貼床に覆われていないので、SI-32を切ると考えられる。

[規模と形状] 方形で、SI-33の上部に掘りこむ東壁を明確に確認出来ない。主軸はGN-1^a-W。東西推定長約4.5m、南北4.58m、残存壁高は最小2cm(南東部)～最大21cm(北西部)。主柱穴4本は床面から深さ33～44cm、北東柱穴P1の柱径は10～12cm。柱間は南北1.78m、東西1.66m(北側)～1.75m(南側)。南壁中央付近にある貯蔵穴P5は東西52×南北41×深さ25cm。入口施設は不明で、貯蔵穴P5付近にあったことを類例から想定できる。壁溝はない。南西柱穴P3の西にある間仕切溝D1は幅19～24cm・深さ2～3cm。貼床はローム主体の暗褐色土だが、カマド付近では少し異なる(カマドB層)。

[カマド] 東壁北部にある。SI-33覆土に掘り込み、SD-204に切られるため、東壁や煙道先端が不明確である。暗褐色のカマドB層上に粘土やロームを含むA層で袖を作る。袖幅104cm、焚口から煙道までの推定長約100cm。火床に整六部貼床(カマド4層)がなく、貼床除去後に褐色の3層で整地したと思われる。

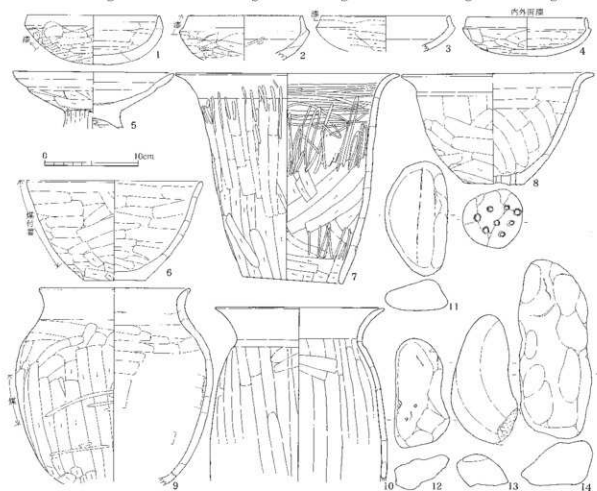
[覆土] 自然埋没状態で、カマドのある東からの流入層に焼土、最上層に白色軽石粒を含む。柱穴覆土に軽石を含み、縄文草創期の七本椀軽石(白色)と今市軽石(橙色)が地上部から流入した可能性がある。

[遺物出土状況] 南西部では床から6～7cm上に土師器裏(10)がある。その北で床上10cm付近に土師器裏・大形甕・多孔小形甕(7～9)があり、その周囲にも土師器がまとまっている。南西柱穴P4内の杯は、やや斜位の上向きで入っていた(断面図E-E'の4)。編物石(11～14)は床上8～12cmのレベルで出土した。カマドの遺物は少なく、南袖先端付近の床上3cmに逆位の土師器裏口縁部片がある。



第58図 権現山遺跡SG10区 SI-32(1)遺構

【出土遺物】 体部が深い後期中頃の漆仕上げ模倣杯を、あまり磨かない点が異例で（1～4）、4だけが薄くて異質である。外傾口縁の高杯は内面を磨いて黒色処理する例が多いが、5にはない。多孔小形甕と鉢（6・8）の胎土・調整がよく似る。多孔甕はSG10区SI-20等にある。図示以外の破片は少ない。図示以外の土師器合計102片・531gの内訳は、杯17片・64g、高杯1片・9g、壺甕類81片・440g、甕3片・18g。



第59図 権現山遺跡 SG10区 SI-32 (2) 遺物

第32表 権現山遺跡 SG10区 SI-32 出土遺物

番号 種類 器	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 寛14.0 高 5.2	体部が厚く重い。外面体部は上平ナデ後に下平ヨコヘラケズリ。内面体部ヨコヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。外面の上位と内面に漆仕上げ。	5YR6/6 赭・黒塗 赤黒胎・少赤、白濁～細粒と 黒・透明細砂・やや硬質	南西床土4～12cm 口5/12周 2, 3, 10
2 土師器 杯	口 寛11.8 高 残4.7 最大 13.6	外面は体部上位に膝ナナデ後、下位をヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面はヨコナデでヘラミガキ調整も見られるが、ごく一部だけである。外面上1位と内面全体に漆仕上げ。	5YR6/6 赭 黒塗 赤黒胎と白濁～細粒と 黒細砂 少 やや硬質	南西床土4cm 口1/4周、体1/2周 9
3 土師器 杯	口 寛13.4 高 残3.7 最大 14.6	体部外面は磨減して小窪だが、おそらくヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面にヨコナデおよび漆仕上げ。	7.5YR7/4 に赤・粉 少や粗い 白・灰色練～粗粒 と白・黒細砂 少 やや硬質	北東床土9cm 口1/6周 19
4 土師器 杯	口 12.1 高 4.5 最大 13.6	薄く軽い。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。外面口縁部と内面口～体部ヨコナデ。内面底部は多方向ナデ。内外面の全体を漆仕上げ。	5YR6/6 赭 少や硬質 白濁～微粒と微砂 粒微塵 やや硬質	P3内底土15cm 口1/2周、底全周 20
5 土師器 高杯	口 16.9 高 残6.1	外面は口縁部ヨコナデ後に体部に横位と脚柱部に縦位のヘラケズリ。内面はヨコナデで、杯体部内面は磨減して不明瞭だがミガキは付いていないと考えられる。脚内面は幅の狭い多方向ヘラケズリ。現状では黒色処理や漆仕上げは認められない。	7.5YR5/3 に赤・黒 少や硬質 赤・透明細砂～粗粒 多、白・灰色練～粗粒 と白・黒細砂 少 やや硬質	南西床土7cmで正位 口全周、口～脚上端全 周 4
6 土師器 鉢	口 18.5 高 10.6 底 6.5 重 569.7	外面は斜～横位ナデ後に下位ヨコヘラケズリ。外底面はほぼ1方向のヘラケズリ。内面はヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ。外面上～中位に傷が付着。破片を除く外面が少し黒化した可能性もあるが、内面も同様の色調になる部分がある。磨成に生じたものかもしれない。	10YR5/4 に赤・黄黒 少や粗い 白・灰色練～粗粒 少や多、透明粗粒と白・黒 細砂 硬質	南西床直土 口2/3周、底全周 7, 11, 12
7 土師器 甕	口 23.5 高 21.8 底 残10.5	外面下平タテヘラケズリ。上平タテヘラケズリ後に口縁ヨコナデと稜なタテヘラミガキ。内面胴部ヘラナデ後に胴中位と下端部が厚かった部分を磨る。上部胴位と中位以下縦位のヘラミガキ。内面を削った部分に砂が露出し磨きにくく、ほとんど磨かない。	10YR6/6 明黄黒 少や粗い 白濁～細粒と透明 粗粒多、白濁と赤黒～細粒と 黒細砂 少 やや硬質	南西床直土～床土10cm 口3/4周、底5/6周 7, 8, 11, 1A

第5章 権現山遺跡 SG10 区

8 土師器 小形甕	口 20.2 高 11.6 底 6.2 重 59.5g	外面の頸部に強い凹みあり。外面体部ナデ後に下位ヨコヘラケズリと口縁部コナデ。外底面は1方向ヘラケズリ後に径5～6mmの丸棒を通して多孔を穿孔する。内面は体部ナデヘラナデの後に口縁部コナデ。	10Y86/4 に近い黄緑 やや暗い、白・黒・赤靨～細 粒多、白・赤・灰色露少 やや軟質	南西床面上～床土10cm 口2/3周、底 11/12周 7、11、北
9 土師器 甕	口 径 16.0 高 径 20.7 最大 径 20.9	外面は短頸部ナデ後に中位以下をタテヘラケズリし、口～頸部コナデ。内面は胴部コヘラナデ後に口～頸部コナデ。外面の胴部中に僅か付着する。下部の焼熱面は残存する平周の破片内では認められない。	10Y85/3 に近い黄緑 やや暗い、白・灰色・透明塵～細 粒と赤靨多、黒靨粒少 やや軟質	南西床面上、床土9～ 11cmにも小破片あり 口7/2周、胴1/2周 6、7、10、11、12
10 土師器 甕	口 径 18.0 高 径 18.2 最大 径 18.8	胴部および口縁部がやや凹み。胴部内外面はヘラナデを主に施した後に塗しているが、その節部や腕部は不明。底部は小片化して復原できない。	10Y86/4 に近い黄緑 やや暗い、白靨多、白粗粒 と黒・透明粗粒少 やや軟質	南西床面上7cm、北東床 土1.8cmの1片も破片 口5/2周、胴1/4周 1、18
11 石器 編物石	長 11.9 幅 6.6 厚 3.3	両示した面と反対側の面が平坦な自然磨。やや短く、側縁もあまり平行していないので編物石と考えよいかどうか疑問もある。加工・使用・焼熱面は見えない。重量 34.3g。	2.5Y87/4 浅黄 細面で破片な面状石	中央西部床土11cm 完形
12 石器 編物石	長 11.4 幅 5.8 厚 4.0	中央で平面形がくびれて、縦方向にもここで少し曲がった形になる自然磨をそのまま利用。加工・使用面は見られない。全体が暗赤色化しているのので、長く焼熱したものと考えられる。重量 292.3g。	7.5Y84/2 灰赤 細面で破片な面状石	南西床土5cm 完形 14
13 石器 編物石	長 13.2 幅 6.6 厚 3.5	自然磨をそのまま利用。両の反対面は磨耗が進んだ古い割れ面で、両示した面の右より欠損面がやや露出している。加工・使用・焼熱面は見られない。重量 340.4g。	10Y86/6 明黄緑 細面で破片な面状石	南西床土12cm 完形 5
14 石器 編物石	長 18.2 幅 7.8 厚 5.2	両示した面に凹凸が多く、反対面は比較的平坦になる自然磨の縦長い面をそのまま利用。加工・使用・焼熱面は見られない。重量 1032.7g。	2.5Y6/3 に近い黄 緑面が目立つ破片な石英珪岩	南西床土8cm 完形 13

SG10 区 SI-33 (第 60 図、写真図版 82・83・196)

【位置】 SG10 区南部の 18-18 グリッドにある。同じく古墳中期の建物には西に SI-88・101 がある。古墳後期の SI-32・34a・34b と、近世の SD-204 に切られる。また、時期不明の SE-316 に切られる。SI-33 の南東隅は低地へ向かう傾斜面の上部で、水分の多い黒色土中に掘り込まれていたので床面の把握が困難であり、竪穴南東隅と貯蔵穴南半は明確に遺構を確認できなかった。

【規模と形状】 方形の建物跡で、主軸方位は GN-10°-W。規模は東西 7.38 × 南北 7.22m。北壁がよく残り、残存する最大壁高は 28cm。南壁から南東隅部は、低地に向かって地山が低くなるので壁の残りが悪い。

柱穴はすべて貼床除去後に確認した。主柱穴は 4 本で、柱間は東西 4.53m (南側) ～ 4.62m (北側)、南北 4.58m (西側) ～ 4.67m (東側)。床面 (標高 79.93m 前後) からの深さは P1・P2・P3 がほぼ同様に 27～29cm。南東柱穴 P4 は南東部の床面レベル (標高 79.82m) から 42cm で特に深い (断面図 E-E')。P4 周辺の掘方底 (他よりも低く標高 79.64m) から P4 底までの深さは 24cm である。柱痕や裏込土は残っていないが、柱穴形状から推測して柱径は 20cm 以下と考えられる。

入口施設と考えられる P5 は床面から深さ約 20cm。南東隅の貯蔵穴 P6 は東西 128 × 南北推定 96cm、推定床面レベルから深さ 42cm。P6 周辺に破線で示した凹凸は、床面ではなく、7・8 層 (貼床?) を除去した下部の掘方に認められた。北部主柱穴間にある補助柱穴 P7 は上部を SD-204 に少し切られ、床面レベルから深さ 10cm。貼床除去後に確認した補助柱穴は北端に P8 と P9 があり、床面からの深さは P8 が 11cm、P9 が 12cm。P9 は断面図 B-B' をみると貼床 (5 層) に覆われるようだが、床面にある穴を調査時に確認できなかったとも見られる。壁溝 D1 は幅 16 × 24cm・深さ 2 ～ 10cm で、床面が不明瞭な南東部以外で確認した。南西主柱穴 P3 の南にある間仕切溝 D2 は幅 8 ～ 12cm、床面から深さ 5 ～ 6cm。

床面はやや傾斜があり、南側が低い。貼床は北側に残り、ソフトロームが主体である (5・6 層)。東側から南側にある 7～9 層も床面レベルより下位であり、ハードローム塊の多い 9 層は貼床の可能性もある。7・8 層は低湿地にみられる水分の多い土質なので貼床と考えよいかどうか不明確で、低地斜面部にある遺構南東部が流出した後に 7・8 層が再流入した可能性も調査時に考えられている。

【炉】 中央の北部で確認した。南側のが 1 を調査した後に、貼床土を除去する過程で北側のが 2 が確認されたので、が 2 → が 1 の時期差を想定できる。が 1 は瓢箪形で、細長い磯が北端にある (12)。が 1 は南北長 75cm、東西幅 50cm (南半) および 36cm (北半) で、深さ 8 ～ 10cm。が 2 は 40 × 29 × 深さ 10 ～ 14cm で、西部に深さ 4cm ほどの小穴がある。

【覆土】 低地へ向かう斜面にあり、南部では竪穴覆土がほとんど残っていない。北壁側の堆積状況から自然埋没と思われる。竪穴および貯蔵穴 P6 の覆土各層や上述の貼床層(?) に、テフラの可能性のある白色粒や、地山から混入した縄文草創期の今市軽石粒を含む。

第5章 権現山遺跡 SG10 区

〔遺物出土状況〕遺物は少なく、覆土が残っている北半部で主に出土した。北東隅に高杯（脚付椀）が倒れている（9）。南半部の遺物を出土した7層は、粘土土の可能性が高い（断面図A-A'とB-B'）。

〔出土遺物〕覆土の残りが悪いので遺物も少なめである。1は初期の模倣杯で、本遺跡北部のSG1区SI-12・13や2区SX-94に例がある（『東谷・中島地区遺跡群』10）。9は杯部が碗形の高杯（脚付椀）で、立野遺跡5区SI-67の類例よりも脚が短縮化している（『同上』5）。この土器は内面の亀裂をヘラミガキで補修したが、結局大きなヒビが現れた不良品土師器。補修痕のある土師器はSG10区SI-6などにある。図示以外の土師器合計181片・1.971gの内訳は、杯44片・144g、高杯28片・473g、鉢6片・70g、小形壺5片・29g、壺・壺類98片・1.255gで、高杯が目立つ。

第33表 権現山遺跡 SG10 区 SI-33 出土遺物

番号 種類 器	大きさ (cm・g)	特 徴	色面 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高杯	口 径 14.5 高 4.3 底 径 5.8 最大 径 15.1	薄く軽い。外底面はヘラナデで凹成状。外面体面はナデの可能性が高いが残りが悪いので不明確。内外面口縁部にヨコナデ。内面体面は裏面に割れ目として詳細不明。	10R6/8 赤釉 やや磁質 白・黒敷粒少 やや磁質	中央床1.7mと南東床直上と貯蔵直上1.4mが 重合 口1/4層 21, 22, 23, 34貯穴
2 土師器 杯	口 径 9.2 高 残 3.7 最大 径 9.6	外面は口縁部にヨコナデ。体部にナメナデ。内面は体部ナメヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内外口縁部と外面に少量の灰が付着。	7.5YR/3/3 暗褐色 やや磁質 白釉・磁粒やや多 透明磁粒少 やや磁質	床面付近 口1/6層 灰7キーン
3 土師器 杯	高 残 1.9 底 径 3.2	外底面は多方向ヘラナデ。外面体面はヨコヘラナデ。内面は多方向ヘラナデで、割れ目があるので詳細は不明。底径が大きいので杯ではある可能性もある。	10YR/4/2 灰黄赤 やや磁質 白釉・磁粒多 赤・灰色・透明磁粒少 やや磁質	床面付近 底全面 灰7キーン
4 土師器 高杯	口 径 15.6 高 残 4.4	外面はタテヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。杯体部→口縁部にタテヘラナデ。内面は杯体部ナデ後に口縁部ヨコナデ。杯体部→口縁部にナメヘラミガキ。	10YR/7/4 に近い黄赤 やや磁質 赤磁粒と白・黒粒 ・磁粒と透明磁粒少 やや磁質	北東1・2層 口1/6層 北東1・2層。北東1
5 土師器 高杯	高 残 7.0	外面は多方向ヘラミガキで、ヘラ先の当たった面が目立つ。内面は脚柱土上端を磨いたナデで、粘土土を3段階積み上げて軽くナデ。灰部をヨコナデする。	10YR/7/4 に近い黄赤 やや磁質 赤磁粒と黒磁粒やや多 少。白・赤磁粒少 磁質	中央北東床土2m 脚中台26号 16
6 土師器 高杯	高 残 8.1	外面はナデ後にタテヘラミガキ。脚柱土上端を磨いた状態で反時計回りに粘土土を積み上げる。内面には絞った縦位の灰が目立つ。	7.5YR/8/4 黄灰赤 やや磁質 黒磁粒やや少 白・赤磁粒少 磁質	北東床直上 脚柱全周 14
7 土師器 高杯	高 残 7.1	外面はタテヘラナデ後にタテヘラミガキ。内面は倒立状態で反時計回りに積み上げた粘土土を残す程度の軽いナデで、脚上端部だけはやや磁質ナデ。	5YR/6/6 暗 やや磁質 白・黒・透明磁粒 やや少 磁質	中央床1.3m 脚柱全周 19
8 土師器 高杯	高 残 8.3	外面の杯底部ヨコヘラナデ。脚柱土上端を磨いた状態で反時計回りに積み上げた粘土土をそのまま残し、脚上端を絞った面が目立つ。	7.5YR/6/6 暗 やや磁質 透明磁粒多 赤磁粒と白・黒 粒・透明磁粒少 やや磁質	北西床1.4m 脚3/4層 28, 29
9 土師器 高杯 〔脚付椀〕	口 径 16.6 高 17.1 脚面 14.5 重 残 654.7	外面は脚柱部タテヘラナデ後に脚部ヨコナデの後に脚部タテヘラミガキ。外面杯底部ナデ後に杯体部ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。杯内面は杯体部ナデ。口縁部ヨコナデ。焼成後に杯底面に割れ目が生じたため、亀裂を多量にナメヘラミガキを行っている。脚内面は4段の輪組み面と絞った縦位が目立つ。脚柱部内面はヨコヘラナデ後に脚部ヨコナデ。	5YR/7/4 に近い黄赤 やや磁質 白・赤粒・磁粒やや少。黒・透明磁粒少 磁質	北東隅床土2～4cm 口→脚柱完存、脚部2/3層 1
10 土師器 小形壺	高 残 3.0	外面は脚部ヨコヘラナデ後に残るナメヘラミガキ。脚部内外面ヨコナデ。内面脚部にやや斜なナデの後、底部下縁を合わせる。	2.5YR/5/6 明赤黄 やや磁質 白釉・磁粒多 黒・透明磁粒少 磁質	北東床土1/4層 北西1・2層
11 土師器 壺	口 径 20.7 高 残 5.9	外面は脚部ヨコナデ後にナメヘラミガキを施し、口縁部ヨコナデ。ハケタは粗く不明確。内面は脚部に横→斜位ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。	2.5YR/6/8 暗 やや磁質 白磁粒多、赤・ 黒・透明磁粒少 やや磁質	北東床土1.2～4cm 口1/4層 4, 5, 北東
12 壺	長 12.1 径 6.9 厚 3.9	開示した面が中高で、反対面が扁平気味で自然態。全面が均等にやや黄褐色でピンク色に変色している。加工・使用面は見られない。重量 401.5g。	10YR/6/2 灰黄赤 多孔質で硬質安山岩質	伊1内床直上 完形 33

SG10 区 SI-34a・34b・34c (第61～65図、写真図版83～86・173・174・196・197)

〔位置と関係〕SG10区南部の19・17・18グリッド。同じく古墳後期の遺構は北にSI-47、西にSI-40、南にSI-12・32がある。SI-34c→34b→34aという3時期の変遷が考えられる竪穴建物跡である。SI-34aと34bは、柱穴の建て替えから認識できる。SI-34cは一回り小さな規模で、b期に拡張するよりも前の建物である。以下、拡張後のSI-34aと34bを説明してから、拡張前のSI-34cを説明する。

〔重複関係〕北部でSI-101（古墳中期）→SI-34c/34b/34a（古墳後期・拡張建替3期）→SD-263（中～近世）→SD-201（近世）→SK-214（時期不明）の順に重複している。北東部にある古墳時代中期のSD-319および時期不明のSK-372と重複していた可能性もあるが、SD-263に切られているため、SI-34a・34bとSD-319・SK-372との重複関係は不明である。南東部の隅で古墳中期のSI-33を切る。

【遺構名の対応】現地調査時には「SI-103」・「SI-34」・「SI-34B」という3つの建物を確認し、整理作業時にそれぞれ「SI-34a・b・c」に改称した。「SI-103」が一回り小形の建物跡である可能性を調査時には考えたが、カマドの位置や遺物接合関係からみて、SI-34bとはほぼ同じ規模で柱穴位置を外側へ移動した大形建物SI-34aであることが判明した。

SG10 区 SI-34a・34b (第61～65図、写真図版83～86・173・174・196・197)

【規模と形状】方形の建物跡。最終的なa期竪穴(SI-34a)の規模は、東西7.14×南北7.44m、壁の残存する高さは5～9cm。b期建物はa期より僅かに小さい可能性もあるが、b期とa期は床面レベルが同じで、竪穴壁や貼床範囲を拡張した確実な痕跡はない。柱間はb期からa期へ南北方向に約40cm広げるので、竪穴部もa期に少し拡張した可能性は残る。南壁から北へ36cmほどの位置で掘方底面にある段が、b期南壁の位置を反映しているのかもしれない(断面図B-B')。主軸方位はa期・b期ともにGN-19°Eで、a期とb期の柱穴方位がほぼ同じである。

a期とb期の主柱穴はそれぞれ4本で、柱配置は方形である。柱間はa期が東西長4.24m、南北長は4.38m(東側)～4.36m(西側)。b期の柱間は東西長4.24m、南北長3.95m(西側)～4.05m(東側)。a期は柱痕径14cm(P3a)～25cm(P1a)で、床面からの深さは北東のP1aと南西のP3aが深く(57～58cm)、北西のP2aと南東のP4aが浅い(42～43cm)。b期の柱痕は残っていない。床面からの深さは北東のP1bが深く(54cm)、北西のP2bが浅く(38cm)、南西のP3bと南東のP4bは44～45cm。

南壁近くにあるa期の入口ピットP5aは径65cm・床面から深さ20cmの楕円形で、周囲が浅く広がる。この北側にあるb期の入口ピットP5bは床面から深さ29cm。入口ピットP5bとP5cの二時期分が東西に並び、位置から判断してP5bがSI-34b、P5cがSI-34cに伴うと考えた。土層断面をみると、P5bがb期貼床の上面に開口していたことがわかる(断面図F-F')ただし、現地調査時の所見では、P5bとP5cの前後が逆転する可能性も考えられている。

中央部の南東で不規則な位置にあるP7新とP7旧は重複する2時期の柱穴で、a期とb期に伴うとも考えられる。床面からの深さはP7新が25cm、P7旧が11cm。北東部にあるP8(a・b)は、北東方向へ斜めに掘られた穴または柱穴で、床面から深さ44cm。位置の規則性があまり認められないので北東に隣接する時期不明のSK-372と係わる遺構の可能性もあるが、上部の覆土(断面図C-C')にはないので、SI-34aを切る遺構ではない。P8がSI-34a・34bに伴うと判断しておく。

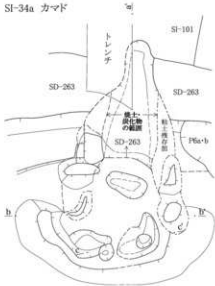
北東隅にあるa期・b期の貯蔵穴P6(a・b)は、東西86×南北75×床面から深さ23cmの隅丸方形で、北西側にある段は土層断面から見て埋め戻していたものとも考えられる。P6(a・b)の南側には東西87×南北83cm・高さ2～4cmのソフトローム質の盛土がある(断面図H-H')。

床面は平坦である。東壁側の南部にある東西90×南北110cm×高さ4～5cmの方形高まりは、南半部が地山ロームを掘り残して、北半部はソフトローム質を盛って作られていた(断面図U-U')。この上面には径28×深さ23cmのP10がある。P10の土層断面図は作成されていないが、P11と同様の埋土が堆積していたと記録されている。c期の貯蔵穴P6cを埋め戻した上にある盛土は、軟弱な埋め戻し部分を補強するためのものと考えられた(断面図H-H')の3・4層とH')。壁溝D1が東辺南部と南辺にある(幅15～20cm、床面からの深さ5～7cm)。

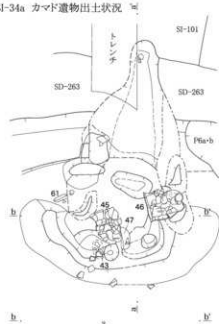
貼床は、c期建物から四周を拡張した後にc期竪穴を埋め戻して薄く覆うb期貼床が認められる(床1b層～床2b層)。床面は標高80.0～80.1m付近にあり、c期床面より約10cm高い。貼床下の掘方は、北西部のP9が床下土坑状になる(186×144×床面から深さ33cm、断面図C-C')の床6層と床7層)。また、南西部の南壁側が少し高くなっている。

【カマド】最終段階の建物(SI-34a)に伴うa期のカマドを調査した。現地調査時には「SI-103」のカマドとして調査されている。煙道部が壁外北方へ80cm伸び、煙道西半はトレンチで壊されている。燃焼部が

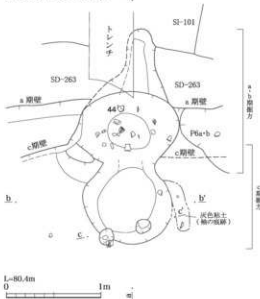
SI-34a カマド



SI-34a カマド遺物出土状況



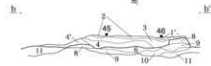
SI-34a・b・c カマド脇方



カマド

a・b・c (7層は欠番)

- 1 暗赤褐色 焼土較多、焼土塊(径0.5~1cm)・炭化物少、しまり有、1層下面が窪道。
- 1' 褐色 アフトローム較少、しまりなし。
- 2 褐色 灰色粘土・焼土較少、炭化物が層的に広がっている、しまりなし。
- 3 淡赤褐色 灰色粘土・焼土較少、すつきり、炭化物少、粘性有。
- 4 暗褐色 焼土塊(径1cm)多、灰色粘土・焼土(径1~2cm)・炭化物少、軟。下面は土床面と思われる。
- 4' 褐色 アフトローム較少、しまりなし。
- 5 褐色 灰色粘土・焼土較多、炭化物少、しまりやや有。
- 6 暗褐色粘土 炭質の粘土層、焼土較多、粘性有。
- 7 灰色粘土 カマド脇・カマドの粘土、粘性有。
- 8 暗褐色 アフトローム層(径1~3cm)・粘土・炭化物多、しまりやや有。
- 9 暗褐色 焼土粒・炭化物微量、しまり有、古い時期のカマドの粘土と思われる。
- 10 暗褐色粘土 焼土粒・炭化物多、アフトローム層(径1~5cm)少、しまり有、回んだところに充填した焼土。
- 11 暗黄褐色 アフトローム較多、アフトローム層(径1~5cm)少、しまり有、回んだところに充填した焼土。



カマド脇方

a・b・c

7層は欠番

1 褐色

アフトローム較少、砂質塊、炭化物微量、しまり有、旧カマドに関連する焼土層立石等の痕跡が有。



a 期カマド南側の遺物出土状況 (上層)



a 期カマド南側の遺物出土状況 (下層)



第 62 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-34a・b・c (2) 遺構

ら煙道にかけての中央部を東西方向の溝 SD-263 で破壊され、SD-263 の底面付近に東西両袖の粘土残存部や煙道床の炭・焼土痕跡が残るので、袖の平面形は把握できた。袖の東西幅は 130cm。カマド焚口付近の床面には、東西 200 × 南北 80cm の範囲が半環状盛土の高まりをなしている。この盛土中には焼土や炭も含まれるので、カマド操業開始後に追加して盛り上げたか、あるいは旧時期のカマドの残材を使って構築したものである（カマド 5・6・9・10 層）。a 期カマド残存部の上側では、全形のわかる土師器甕 2 個が横に倒れて潰れていた（45・46）。46 が完形の長胴甕で、西側の 45 も本来は全周が残っていた甕の、出土時の上面側およそ半周が失われたものと思われる。カマド掘方はひょうたん形に連なる 2 箇所の窪み状である。北半部が SI-34a のカマド掘方で（南北 80 × 東西 115 × 床面から深さ 17cm）、南半部は SI-34c のカマド掘形を反映していると考えられる。掘方の上にカマドを構築した土中にも一定量の土師器片が混入していた。

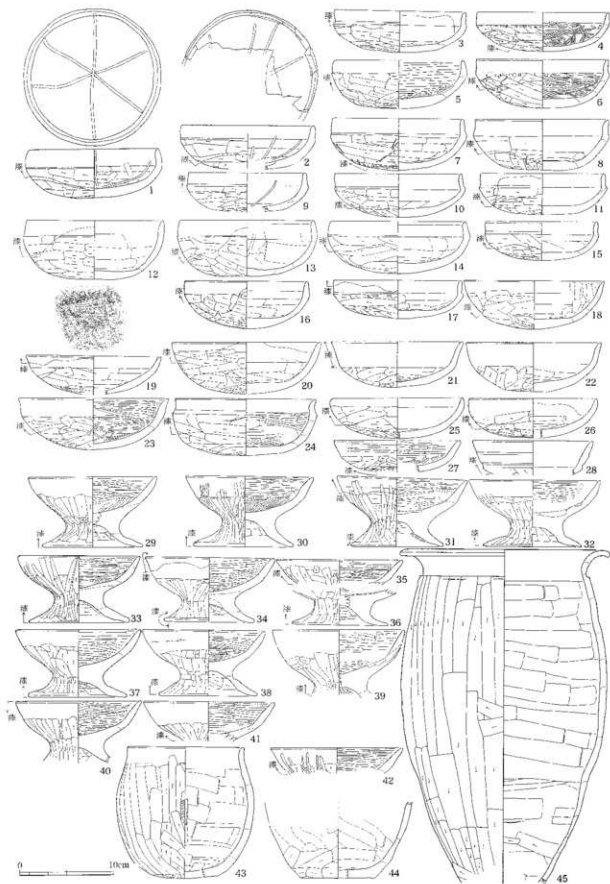
【覆土】最終期である SI-34a の覆土は自然埋没状で、2 層に白色粒・焼土粒・炭化物を少し含む。

【遺物出土状況】 堅穴部の遺物のうち、a 期・b 期の床面レベルをほぼ標高 80.1m として、これよりも上位の遺物を SI-34a、下位の遺物は SI-34c に伴うものとして扱った。SI-34a のカマド南側に土師器が集中している。カマドの遺物出土状況はカマドの項で説明した。a 期建物中央部の床直上～床上 9cm に土師器高杯がまとまっている（29～34・37・38）。a 期の入口ピット P5a では北端部に耳環（69）、中央部に石（59）がある（断面図 Q-Q'）。b 期から a 期まで使われた貯蔵穴 P6a・b の上部に上向きの土師器杯が 3 点ある（4・6・7）。SI-34b に伴うことが確定できる遺物はほとんどなく、P3b で出土した土師器杯 1 片と甕 1 片だけで、これも古墳中期の混入遺物の可能性が高い。

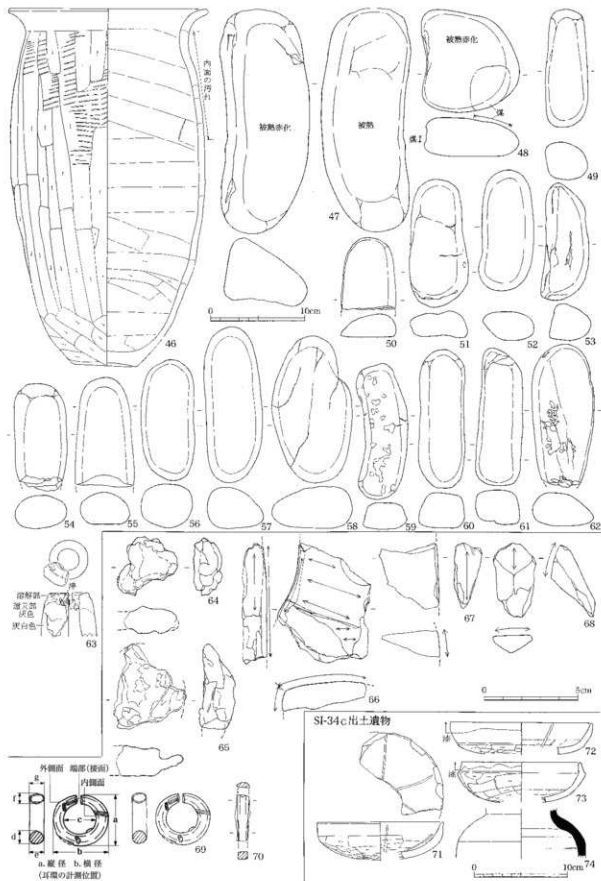
【SI-34a 出土遺物】 杯は大半が漆仕上げで、6 は漆仕上げと内面炭素吸着を両方行う。1・2・9 はごくまばらな放射状ミガキで内面に「米」字状などを描く杯で、SI-34c にも 2 点あり（71・72）、SI-40 にも類似がある。4 と 25 はごく微量の金色雲母を含む。雲母片を含む土師器は SG10 区では SI-12 などにある。同工品の深い杯が 3 個ある（12・13・14）。静止糸切り離した土師器杯（12）は、古墳後期後葉の新郷遺跡 SI-264 や磯岡遺跡例（内山編 1998・塚原編 1999）、後期末の西統橋遺跡 SI03（海老原・津野 2002）が古い。中島笹塚 7 区 SI-5 の杯（『東谷・中島地区遺跡群』9, p.430）や瑞穂野団地遺跡北 25 号住居址の甕（岩上他 1978, pp.44,117）など古墳終末期にも例がある。有段口縁杯（28、田中 1991）は群馬・埼玉地域域の土師器で、周辺では立野遺跡・中島笹塚遺跡で少数出土している。同工品の漆仕上げ短脚土師器高杯が 14 個ある（29～42）。25・26・39 の底部の亀裂は、焼成前の乾燥時に生じていた可能性が高い。不良品の土師器は SG10 区 SI-6 などにある。土師器甕は口径と胴径がほぼ同じか、口径が僅かに大きい。図示以外の土師器および焼粘土塊合計 1,032 片・8.231g の内訳は、杯 349 片・2.013g、高杯 135 片・1.435g、小形壺 1 片・3g、壺甕類 552 片・4.741g、甕 1 片・14g、小形土器 1 片・6g、焼粘土塊 5 点・19g で、杯・高杯・鉢が極めて多い。重複する SI-101 から混入した可能性のある古墳中期の遺物が少しある。

専用羽口破片（63）は、『東谷・中島地区遺跡群』10 で権現山遺跡の鍛冶関連遺物全体を報告後に確認したため、同書 pp.490-498 に掲載されていない。椀形鍛冶滓の小片が 2 点出土し、建物規模や遺物量に対して少ないので周辺から流入したとみられる（64・65）。SI-34a と同じ後期の遺構では西側の SI-40 に専用羽口片がある。また、南側の SI-6・14 と東側の SD-41・42 に鉄滓や炉壁があり、南側の SI-30（中期）、北側の SI-36（中期の鍛冶遺構）や SK-77・317（時期不明）でも出土している。66 は SG10 区 SI-12 などのホルンフェルス製砥石に比べるとやや硬さに欠け、粘板岩に近い。耳環（69）は、本遺跡北部の SG1 区 SK-128 や、中島笹塚 7 区 SI-5、砂田 5 区 SI-110、琴平塚 2 号墳・5 号墳にある（『東谷・中島地区遺跡群』4・8・9・10）。また、銅剣が砂田 3 区 SI-186 や中島笹塚 3 区 SI-305 にある（『前掲書』2・9）。70 は鐵身関部が退化した鉄鎌（長頭鎌）の可能性が高い。

【SI-34b 出土遺物】 P3b で 2 片だけ出土したが、古墳中期の混入遺物の可能性が高いので図示していない。土師器合計 2 片・52g の内訳は、杯 1 片・37g、壺甕類 1 片・15g である。



第63図 権現山遺跡 SG10区 SI-34a・b・c(3) a期遺物



第64図 権現山遺跡SG10区 SI-34a・b・c(4) a・c期遺物

SG10 区 SI-34c (第 61・62・64・65 図、写真図版 83～86)

[重複関係] SI-34a・34b の貼床下で確認した、拡張前の建物。調査時には「SI-34B」と呼称し、整理作業時に「SI-34c」に改称した。北側の SI-101 (古墳中期) → SI-34c → 拡張した SI-34b → 34a の順になる。

[規模と形状] 方形の建物跡で主軸方位は GN-23° E。東西・南北ともに約 5.7m の大きさで推定され、残存する深さは約 10cm (第 65 図)。

c 期の主柱穴は 4 本で方形に配置し、柱間は東西 3.36～3.45m、南北 3.04～3.12m。c 期床面からの深さは北東の P1 が 59cm、北西の P2 が 61cm、南西の P3 が 50cm、南東の P4 が 61cm。柱径を反映する土層の径は 12cm (P2c)～21cm (P1c)。柱穴の上を b 期貼床で覆われる。

c 期の入口ピット P5c は c 期床面から深さ 21cm で、貼床で埋め戻されていた (第 61 図 F-F')。P5 は東西に並んで二期期分があり、東側の P5b が SI-34b、西側の P5c が SI-34c に伴うと考えた。ただし、現地調査時には P5b と P5c の前後が逆転する可能性も考えられている。P5 の北にある 3 個の小穴 P12～P14 も c 期に伴う (径 13～18cm、床面から深さ 10～14cm)。P12 の埋土は c 期貼床である床 8 層に似るが、軟らかい点が異なり、c 期に開口していた穴と現地調査時に判断されている。P13・P14 の覆土は不明。

c 期貯蔵穴は北東隅の P6c で、東西 98×南北 70×床面からの深さ 20cm。b 期貼床で上を埋め、その上に a 期の盛土層 (第 65 図 H-H' の 3・4 層、第 61 図 I-I') や、カマド袖粘土 (H-H' の 1b 層) が載る。南西主柱穴 P3c の西にある間仕切溝 D2 は c 期床面で確認した幅 16～20cm×長さ 62cm の小溝。c 期掘方を埋め戻す c 期貼床はソフトロームおよび地山ローム層下で採れる砂質土を用いる (床 3・8・9 層)。D-D' の中央やや東側で、地山ハードロームを掘り残した不自然な高まりが掘方底面に認められた。

[カマド] a 期のカマドは掘方だけが残っている。b 期カマドを除去した下部のカマド掘方はひょうたん形で、そのうち南半の円形部分が c 期カマド掘方と推定される。東西 98×南北 82cm で、c 期床面からの深さは 9cm。この円形掘方の東側には東袖痕跡の灰色粘土が認められ、本来は東西の袖幅が 60～70cm であったと考えられる。

[覆土] c 期の堅穴は、上に拡張した b 期建物を造るために、b 期の貼床土で埋め戻されている。

[遺物出土状況] c 期貯蔵穴で出土した遺物 (72) に加えて、堅穴部で b 期床面レベル (標高約 80.1m) よりも下位で出土したと計測されている遺物を、SI-34c に伴うものとして扱った。

[出土遺物] 杯類は主に漆仕上げである。浅い内堀口縁杯 (72) や、半球形杯 (71) の内面に、ごくまばらな放射状ミガキで「米」字状などを描く。同様な例は SI-34a などにある。図示以外の土師器合計 132 片・1.792g の内訳は、杯 54 片・573g、高杯 22 片・239g、壺類 56 片・980g。

第 34 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-34a 出土遺物

番号 器種 器種	大きさ (mm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態 記録
1 土師器 杯	口 13.7 高 5.2 最大 14.6 重 残 294.7	外面の口一休部端に浅い段あり。外面は口縁部ヨコナデ後、底部は多方向に横位のヘラケズリ。内面は底部に 1 方向と体部に横位のナデ、口縁部ヨコナデ。内面に交差する 3 本のヘラミガキあり。外面上平と内面全体に漆仕上げ。	10YR7/4 濃い黄褐色 やや粗い。黒粒～黒粒多。赤・灰色・透明細～粗粒少 やや硬質	中央床土 5cm はは完部 13.5/6 層 SI-103 100
2 土師器 杯	口 径 14.0 高 残 4.6	外面の口一休部端に浅い段あり。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に 1 方向または多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部に横位のナデ、口縁部ヨコナデ。内面に残るヘラミガキあり。外面上平と内面全体に漆仕上げ。	7.5YR7/6 暗 やや粗い。黒粒～黒粒やや多。赤・灰色・透明細～粗粒少 やや硬質	中央床土 5～9cm 口 1/3 層、体 1/2 層 SI-103 129、130、正 東区 1-2 層、D プロック 2 層
3 土師器 杯	口 13.7 高 4.4 最大 14.0	外面の口一休部端に明瞭な段。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体一底部がナデおよび浅い横物に痕を少し残し、口縁部ヨコナデ。内外面口縁部に漆仕上げ。内面体部では漆仕上げの痕が不明。1 注記 図 34-SD263 上面、SI-103 47、52、55、B プロック 2 層、AA ベルト西 2 層、B 面南 1 層	2.5YR6/8 暗 赤・灰色粗～粗粒少 やや少、白・黒・透明粗粒少 やや硬質	中央床土 4～6cm、SD 263 遺入の 1 片も接合 口 1/2 層 注記は左欄
4 土師器 杯	口 13.8 高 4.1 最大 14.1 重 2.19.8	外面の口一休部端に段あり。外面体部上位に粘土接合面を残す様なナデ後に口縁部ヨコナデ。底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内面はおそらくヘラナデ後に底部に多方向と体部に横位のヘラミガキ。内外面を漆仕上げする痕が、外面底部は漆が剥がれ状で露出。	7.5YR7/4 にぶい。濁 やや硬質 白・赤・灰色粗～ 粗粒少。黒・黒・透明粗粒少。 赤色雲母鱗片極少 硬質	貯蔵穴土 2.22cm で正位 完了 SI-103 39
5 土師器 杯	口 13.5 高 5.1 最大 14.1 重 残 234.3	外面の口一休部端に浅い段あり。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に 1 方向と口一休部部に横位の赤ヘラミガキ。外面中位以上と内面全体に漆仕上げ。	7.5YR8/8 黄褐色 やや硬質 赤・黒粗～粗粒少 やや少、白・透明粗粒少 やや硬質	中央床土 5～11cm 口 7/8 層、底全層 SI-103 104、108、138、148、 正東区 1-2 層

6 土師器 杯	口 14.0 高 5.1 最大 14.2 重 276.7	外面は体部上位に粘土積み上げ痕を残す跡ナデ。口縁部ヨコナデ。底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後。底部に多方向と体部に横位のヘラミガキ。外面上下に漆仕上げ。内面全面に漆仕上げと磁系吸着面両方向ナデ。	5Y7R7/8 橙 やや暗い 赤・灰色粗～細粒 やや多。白・黒・透明細砂少 やや破損	新築穴直上20cmで正位 完形 SI-103 40
7 土師器 杯	口 13.8 高 5.5 最大 14.5 重 現284.1	外面内口一体環境に段取あり。外面は口縁部ヨコナデ後。底部に多方向。体部に横位のヘラケズリ。内面は体部ヨコナデ後。口縁部ヨコナデ。内面全体と底部以外の外面全体を漆仕上げ。	7.5Y7R7/4 灰青 やや暗い 赤黒～細粒と白・黒・透明細砂少 やや破損	新築穴直上14cmで正位 ほぼ完形口11/12周 SI-103 41
8 土師器 杯	口 14.2 高 5.3 最大 14.4	内面形状はやや平底突味。外面は口縁部ヨコナデ後。底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部上位に漆仕上げ痕を残す。体部上下に口縁部ヨコナデ。外面上下に漆仕上げ痕を残す。内面はほとんど平焼していないが、本来は内面まで漆仕上げされていたと考えられる。	5Y7R6/8 橙 やや暗い 赤・灰色粗～細粒 やや多。白・黒・透明細砂少 やや破損	中央穴上6～8cm 口1/2周。体7/12周 SI-34-SD-263, SI-103 54, 55
9 土師器 杯	口 復12.4 高 現4.1 最大 復12.0	外面は口縁部ヨコナデ後。底部1方向と体部横位のヘラケズリ。内面口一体部ヨコナデ後。体～底部に非常に緩な放射状ヘラミガキで、「葉」字状等を描く可能性が高い。外面上下と内面に漆仕上げ。	5Y7R6/8 橙 やや暗い 赤黒～細粒やや少。白・赤黒～細砂少 やや破損	中央穴上1cm 口1/6周 SI-103 32
10 土師器 杯	口 13.4 高 4.5 最大 13.8	深く削い。外面は口縁部ヨコナデ後。底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に1方向ナデ。口一体部ヨコナデ。外面上下と内面全体に漆仕上げ。【注記】SI-103 55, 63, 144, 145, Bプロック2層, A-A'層上下西2層, B-B'南端1層	10Y7R7/6 明肉色 やや暗い 赤・灰色粗～細粒 やや多。白・黒・透明細砂少 やや破損	中央穴上4～6cm 口1/4周 注記は左欄
11 土師器 杯	口 13.2 高 4.3 最大 13.6	外面は口縁部ヨコナデ後。底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に多方向のナデまたはヘラケズリ。口一体部にヨコナデ。外面の口縁部または体部以上と内面全面に漆仕上げ。	5Y7R6/8 橙 やや暗い 赤・赤黒～細粒と白・黒・透明細砂少 やや破損	中央穴上5～6cm, SD. 263 表3片が接合 口11/2周。体7/12周 SI-34-SD-263 上面, SI-103 50, 56, 146
12 土師器 杯	口 14.4 高 6.3 最大 現275.1	外底部中央は静止垂直り離し痕の可能性あり。外面口縁部ヨコナデ後に体部ヨコナケズリ。内面の体～底部ヨコナケズリ後に口縁部ヨコナデ。外面上下と内面全体を漆仕上げ。12-13-14は同土。	7.5Y7R7/6 赤・黒 粗～細粒やや少。白・黒・透明細砂少 やや破損	中央穴上1～5cm 口1/6周 口11/2周。体7/12周 75, 78, 141, 148, 北東区1・2層
13 土師器 杯	口 14.1 高 5.9 最大 14.7 重 現311.4	外面の口一体環境に段取あり。外面は口縁部ヨコナデ後に底部をおおむね1方向。体部に横位のヘラケズリ。内面は体部ヨコナケズリ後に口縁部ヨコナデ。外面全面と内面全体を漆仕上げ。12-13-14は同土。	7.5Y7R7/6 橙 やや暗い 赤粗～細粒やや少。白・黒・透明細砂少 やや破損	中央穴上1～4cm 口11/12周。体5/6周 SI-34-SD-263 上面, SI-103 57-61・中央1層
14 土師器 杯	口 14.2 高 5.5 最大 14.0 重 現311.4	外面の口一体環境に段取あり。外面は口縁部ヨコナデ後に底部に多方向。体部に横位のヘラケズリ。内面は体部ヨコナケズリ後に口縁部ヨコナデ。外面中位以上と内面全体を漆仕上げ。12-13-14は同土。	10Y7R7/3 淡青緑 粗～細粒 赤黒～細粒と白・黒 粗砂少 やや破損	中央穴上6～7cm 口1/6周。体7/12周 SI-103 118, 121, Dプロ ック2層
15 土師器 杯	口 復11.9 高 4.1 最大 12.0	外面は口縁部ヨコナデ後。底部に多方向と体部に斜～横位のヘラケズリ。内面は体部上位に漆仕上げのナデまたはヘラケズリ。口一体部上位にヨコナデ。外面上下と内面に漆仕上げ。	10Y7R7/4 灰青 やや暗い 赤・灰色粗粒と白・黒・透明細砂少 やや破損	SD-263 上面 口1/6周。体1/3周 SI-34-SD-263 上面
16 土師器 杯	口 12.9 高 5.1 最大 13.2	底部が深い。外面は口縁部ヨコナデ後。底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部ヨコナケズリ。口縁部ヨコナデ。外面上下と内面全面に漆仕上げ。【注記】SI-103 116, 117, 120, 125, Dプロック2層, 北東区1・2層	5Y7R7/6 橙 やや暗い 赤・灰色粗～細粒 多。黒・透明細砂少 やや破損	中央穴上5～8cm 口1/6周 注記は左欄
17 土師器 杯	口 13.4 高 4.1 最大 13.7 重 現168.5	深く削い。外面は口縁部ヨコナデ後。底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。外面全面と内面全体を漆仕上げ。	10Y7R7/4 灰青 やや暗い 赤・灰色粗～細粒 やや多。白・黒・透明細砂少 やや破損	中央穴上6cm ほぼ正位 SI-103 107
18 土師器 杯	口 復14.8 高 現5.1	内面形状はやや平底突味。外面は口縁部ヨコナデ後。底部に1方向。体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に多方向ナデ。口縁部から体部までに幅広くヨコナデ。内面体部斜上内面側からナデ部分もある。外面の上段と内面全体を漆仕上げ。	5Y7R7/6 橙 粗～細粒 赤・灰色粗～細粒やや少 白・黒・透明細砂少 やや破損	中央穴上4～7cm 口1/2周 SI-7102 67, 70, 74, 145, 151, 152
19 土師器 杯	口 復14.3 高 現4.1	やや削い。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコナケズリ。内面は体部ヨコナケズリ後に口縁部ヨコナデ。外面口縁部と内面に漆仕上げ。	2.5Y7S/5 明肉色 やや暗い 白・黒・赤黒～細粒多。白濁と透明細砂少 やや破損	新築穴直上20cm 口1/2周 SI-103 42
20 土師器 杯	口 復15.7 高 現5.4	内面形状はやや平底突味。外面は口縁部ヨコナデ後。底部を主に1方向。体部を横位にヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリまたはヘラミガキの口縁部ヨコナデ。内外面の口縁部に漆仕上げが有り。体～底部では不明。	5Y7R6/8 橙 やや暗い 赤・灰色粗～細粒 やや少。白・透明細砂少 破損	中央穴上4～6cm 口11/2周。体7/12周 SI-103 79, 81
21 土師器 杯	口 復13.9 高 現4.9	外面は口縁部ヨコナデ後に体～底部を多方向ヘラケズリ。内面は体～底部ヨコナケズリ。口縁部ヨコナデ。縦的な漆仕上げは認められない。22と類似している。【注記】SI-34 Bセクション, SI-103 82, 95, 96, 99, 113, Dプロック2層	10Y7R6/4 灰青 やや暗い 赤・黒・灰色粗～細粒やや少。白・透明細砂少 やや破損	中央穴直上～床下4cm 口～底1/2周 注記は左欄
22 土師器 杯	口 復14.3 高 5.2	外面は体部上位に粘土ナデ。口縁部ヨコナデ。中位から底部にかけて多方向ヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。漆仕上げは認められない。21と類似している。【注記】SI-103 104, 105, 109, 110, 138, 140, Dプロック2層	7.5Y7R6/4 灰青 やや暗い 白・赤・灰色粗～細粒多。透明細粒と黒粗砂少 やや破損	中央穴上5～8cm 口1/2周 注記は左欄
23 土師器 杯	口 15.7 高 5.5	外面は口縁部ヨコナデ後。底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部ナデ後多方向ヘラミガキ。土師部ヨコナデ後ヨコナミガキ。外面上下と内面全体を漆仕上げ。【注記】SI-34-SD-263 上面, SI-103 51, 53, 54, 62, A-A'層東3層, B-B'南端1層	10Y7R6/4 灰青 やや暗い 赤・黒粗～細粒と白・黒・透明細砂少 やや破損	中央穴上4～8cm 口1/2周 注記は左欄
24 土師器 杯	口 14.8 高 6.1 最大 15.3 重 現323.8	外面は体部上位に粘土ナデで粘土積み上げ痕を残し。口縁部ヨコナデ。底部にはほぼ1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体～底部ナデと口縁部ヨコナデ後にはほぼ全面に漆仕上げ痕を残す。外上下と内面全体を漆仕上げ。	7.5Y7R6/4 灰青 やや暗い 灰色粗粒やや多。赤・黒粗粒と白・黒・透明細砂少 やや破損	中央穴上5～8cm 口～体11/12周 SI-103 69, 71, 72, 73, 145, C プロック2層
25 土師器 杯	口 13.9 高 4.4 最大 14.1 重 現211.4	外面は口縁部ヨコナデ後に体～底部に1方向。体部を横位にヘラケズリ。内面口縁部から体部まで広くヨコナデ。外面上下と内面全体に漆仕上げ。底部内口一体部を貫通する電線は、乾燥時か焼成時に生じた可能性がある(断面図記入)。	5Y7R6/8 橙 やや暗い 赤・灰色粗～細粒と白・黒・透明細砂少。金色霞母陶片極少 やや破損	中央穴上3～7cm ほぼ正位口11/12周 SI-103 86, 87, 88, 120, 122, 北東区1・2層
26 土師器 杯	口 13.6 高 4.2 最大 220.5	外面は口縁部ヨコナデ後。底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内外面の口縁部に漆仕上げ。内面体部上位は段取跡が見られない。底部に内外面を貫通する電線は乾燥時か焼成時に生じた可能性がある(断面図記入)。【注記】SI-103 38, 方マド周壁, SD-263 4	7.5Y7R7/6 橙 やや暗い 赤粗～細粒。灰色粗粒と白・黒・透明細砂少 やや破損	中央穴上3～11cmで正位 SI-263 裏面の1片も接合 完形 注記は左欄

第5章 権現山遊路 SG10 区

27	口 復 13.4 土 高 残 3.3	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に1方向、体部に横位のヘラミガシ、口縁部ヨコヘラミガシ。内面は体部に多方向、口縁部は横位の密なヘラミガシ。残存部の内外面全体に塗仕上り。	75YR5/3 灰白・明 やや暗黒 白相・黒相と黒 粒やや多。灰色・透明細・細 粒少 軟質	中央床土 5cm 口116 厚 SI-103 27
28	口 復 12.7 土 高 残 3.6	外面は口縁部2段状で、下方の段はやや凹面に近い。体部ヨコヘラミガシ。内面ヨコナデ。残存する内外面に塗仕上り。接合できない3片から戻し戻したため、口縁がやや不連続。	2.5Y7/2 灰黄 細黒 黒・透明細粒やや少 白・灰色細粒少 軟質	北東床土 6cm 口114 厚 SI-34-SD-263 1上面、SI 34 3、B-B 面
29	口 復 13.5 土 高 残 7.4 脚 覆 10.5	外面は口縁部ヨコナデ後に体部を上へヘラミガシ。外面脚部ヨコナデ後脚部をトヘラミガシ。内面は体部底面に1方向または多方向ヘラミガシ。体部底面にヨコナデ。脚部内面ヨコナデ後に脚部ヨコヘラミガシ。外面全体と体部内面に塗仕上り。内外面の口縁部で最も黒く塗られている。 [注記] IS-34-SD-263 上面、SI-103 44, 45, 56, 146, 147、Aブロック2層、Dブロック2層、B-B、B-B 南端1層	75YR7/4 灰白・黄 緑赤 赤・透明細粒少 軟質	中央床土 4～6cm、SD-263 底土・破片と接合 口113 厚、脚土・脚土 3/4 厚 注記は左欄
30	口 13.4 土 高 7.4 脚 覆 29.31	外面は口縁部ヨコナデ後に体部を上へヘラミガシし、口縁部タテヘラミガシ。外面脚部をトヘラミガシして脚部をヨコナデ。内面は体部底面に1方向、体部底面に横位のヘラミガシ。脚部内面ヨコナデ後に脚部ヨコヘラミガシ。脚部内面に塗仕上り。内外面の口縁部で最も黒く塗られている。 [注記] IS-103 103, 110, 112, D2ブロック2層、Dブロック2層、北東区12層	75YR7/6 暗 緑赤 赤・黒・透明細・細粒 少 やや軟質	中央床土 5～8cm、北 東区の1片も接合 口134 厚、脚土全周、 脚部1/2厚 注記は左欄
31	口 13.8 土 高 7.3 脚 覆 復 9.8	外面は口縁部ヨコナデ後に体部を上へヘラミガシ。脚部をトヘラミガシし、内面は体部底面に1方向、体部底面に横位のヘラミガシ。脚部内面ヨコナデ後に脚部ヨコヘラミガシ。脚部内面に塗仕上り。内外面の口縁部で最も黒く塗られている。 [注記] IS-34-SD-263 上面、SI-103 75, 76, 77, 78, 83, 84, 85, 130, 140, Dブロック2層	5YR6/6 暗 緑赤 赤・黒・透明細粒と白 赤粒少 やや軟質	中央床土 4～9cm 口112 厚、脚土全周、 脚部1/2厚 SI-103 127, 128, 131, 140, D ブロック2層
32	口 13.8 土 高 7.1 脚 覆 10.2	外面は口縁部ヨコナデと体部タテヘラミガシ後に体部を上へ、脚部をトヘラミガシ。内面は体部底面に1方向または多方向、体部底面に横位のヘラミガシ。脚部内面ヨコナデ後に脚部ヨコヘラミガシ。外面全体と体部内面に塗仕上り。 [注記] IS-34 B 北東区北下P1脚道、SI-103 75, 76, 77, 78, 83, 84, 85, 130, 140, Dブロック2層	10YR7/4 灰白・黄 緑赤 赤・黒相・黒粒やや少 白・透明細粒少 軟質	中央床土 4～9cm、P1 脚道の1片も接合 口712 厚、脚土全周 脚部2/3厚 注記は左欄
33	口 12.8 土 高 7.0 脚 覆 10.8 重 残 271.7	外面は口縁部ヨコナデと体部タテヘラミガシ後に体部を上へヘラミガシ。脚部ヨコナデ後に脚部をトヘラミガシ。内面は体部底面に多方向、体部底面に横位のヘラミガシ。脚部内面ヨコナデ後に脚部ヨコヘラミガシ。外面全体と体部内面に塗仕上り。内外面の口縁部で最も黒く塗られている。 [注記] IS-103 123, 124, 125, 126, 139, Dブロック2層、北東区12層	75YR7/6 暗 緑赤 赤相・黒粒やや少 白・黒細粒少 軟質	中央床土 5～7cm、北 東部の小片と接合 口5 6厚、脚部2/3厚 脚土全周 注記は左欄
34	口 13.5 土 高 6.9 脚 覆 9.5 重 残 299.3	外面は口縁部ヨコナデ後に体部を上へヘラミガシ。脚部はトヘラミガシ後に脚部をヨコナデし、脚部が更なる箇所もある。内面は体部底面に1方向、体部底面に横位のヘラミガシ。脚部内面は中央部をユビナデ後に脚部をヨコナデ。脚部および体部内面に塗仕上り。 [注記] IS-103 101, 102, Dブロック2層、北東区12層	10YR7/4 灰白・黄 緑赤 赤・黒相・黒粒やや少 白・透明細粒少 軟質	中央床土 7cm、北東部の 3片も接合 口2 4厚、脚土・脚部 1/2厚 注記は左欄
35	口 復 13.4 土 高 残 2.6	外面は体部タテナデと口縁部ヨコナデの後に体部タテヘラミガシ。内面は体部底面に横位のヨコヘラミガシ。内外面の残存部全体に塗仕上り。	10YR7/2 灰白・黄 緑赤 赤相・黒相と白・赤 ・透明細粒少 軟質	中央床土上床土 2cm 口113 厚 SI-103 82, 89, 90
36	高 残 3.8 脚 覆 復 10.1	外面は体部を上へヘラミガシ。脚部ヨコナデ後に脚部をトヘラミガシ。内面は体部底面にヘラミガシ。脚部内面ヨコナデ後に脚部ヨコヘラミガシ。外面全体と体部内面に塗仕上り。 [注記] IS-34-SD-263 上面、SI-103 B-B 南端1層	75YR7/6 暗 緑赤 赤・黒相・黒粒やや少、黒 ・透明細粒少 軟質	中央床土 263 混 入破片と接合 脚土3/4厚、脚部1/12 厚 注記は左欄
37	口 復 13.2 土 高 残 7.1 脚 覆 10.1	外面脚部タテヘラミガシ後に口縁部ヨコナデ、体部を上へヘラミガシ。内面脚部ヨコナデ後に外面脚部タテヘラミガシ。内面脚部ヨコヘラミガシ。内面体部底面に1方向または多方向、体部底面に横位のヘラミガシ。外面全体と体部内面に塗仕上り。 [注記] IS-34-SD-263 上面、SI-103, SI-103 47, 49, 50, 55, 56, 143, Aブロック2層, A-A'北東2層	75YR7/6 暗 緑赤 赤相・黒相・細粒と 透明細粒少 やや軟質	中央床土 3～6cm、SD-263 底土・破片と接合 口2/3厚、脚土2/3厚 注記は左欄
38	口 12.9 土 高 7.0 脚 覆 10.3 重 残 326.9	外面は口縁部ヨコナデ後に体部を上へヘラミガシ。内面は体部底面に多方向、体部底面に横位のヘラミガシ。脚部内面ヨコナデ後に脚部ヨコヘラミガシ。外面全体と体部内面に塗仕上り。 [注記] IS-103 95, 94, 114, 119, 北東区12層、Dブロック2層	10YR8/4 灰黄 緑赤 赤相・細粒と黒相 やや少、白・透明細粒少 軟質	中央床土上床土 8cmに 北東の1片も接合 口・脚土全周、脚部5/6 厚 注記は左欄
39	口 復 14.0 土 高 残 6.6	外面は口縁部ヨコナデ、体部を上へ、脚部をトヘラミガシ。内面は体部底面に中央に1方向、体部底面に横位のヘラミガシ。脚部内面タテヘラミガシ。内外面口縁部に塗が残り、おそらく林部外周から体部内外面まで塗仕上りを行ったと思われる。発掘時が完成時に生じたと思われる亀裂が脚部柱部に連続して見られる。	75YR6/4 灰白・暗 緑赤 赤・黒・透明細・細粒 少 軟質	南西側床土 10cm 口113 厚、脚部5/6 厚 SI-34 48
40	口 13.2 土 高 残 6.5	外面は口縁部ヨコナデ後に体部を上へ、脚部をトヘラミガシ。内面は体部底面に1方向または多方向、体部底面に横位のヘラミガシ。脚部内面はナメタテ後にトヘラミガシ。外面全体と体部内面に塗仕上り。内外面の口縁部で最も黒く塗られている。 [注記] IS-34-SD-263 上面、SI-34-SD-263 上面、SI-34 南西区1層	5YR6/6 暗 緑赤 赤相と黒相・細粒と 透明細粒少 軟質	中央床土 12cm、SD-263 混入の破片と接合 口2/3厚、脚土全周 注記は左欄
41	口 13.9 土 高 残 4.2	外面は口縁部ヨコナデ後に体部を上へヘラミガシ。内面は体部底面に多方向、体部底面に横位のミガシ。残存する内外面に塗仕上り。 [注記] IS-34-SD-263 上面、SI-103 43, B-B 南端1層	5YR6/6 暗 緑赤 赤・黒相・黒粒やや少 白・透明細粒少 軟質	中央床土 3cm 口13/4 厚 注記は左欄
42	口 14.0 土 高 残 2.8	外面は口縁部ヨコナデ後に体部を上へヘラミガシ。口へ体部に残るタテヘラミガシ。内面は口縁部と体部にヨコヘラミガシ。内外面の残存部全体に塗仕上り。	10YR8/3 灰黄 緑赤 赤相・細粒と白・赤 ・透明細粒少 軟質	中央床土 2～4cm 口1/2 厚 SI-103 91, 97, 113
43	口 復 12.3 土 高 残 13.5 脚 覆 14.5	外面は口縁部ヨコナデ後に体部タテヘラミガシで、断面が縦・横に割れたたてに平行線状の段になる箇所もある。外底面は上1方向のヘラミガシで縦・横に面状にする。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラミガシ。内外面の口縁部にヨコナデ。被熱・使用痕は見られない。 [注記] IS-34 C 中床、床下P1脚道、SI-103 7, 8, 9, 10, 11, 14, 26, B-A'北東2層, A-A'中内, A-A'北東脚道、中央区1層	5YR6/6 暗 緑赤 赤相・黒相と白・赤 ・透明細・細粒多 黒・透明細・細粒やや少 軟質	カマケ床土 12～16 cm 口1/3 厚、底2/3厚 注記は左欄
44	高 残 8.1 底 復 7.8	外面は多方向ヘラミガシ。外面脚部は縦位および斜位のナデ後に脚部トナメヘラミガシ。脚部下底ヨコヘラミガシ。内面は底部に1方向と体部底面に横位のヘラミガシ。外縁が熱処理しているかもしれないが不明。 [注記] IS-34 C 中床、SI-103 159, 164, 165	5YR6/6 暗 赤相 白・灰色相・細粒多 赤相と透明細・細粒少 硬質	カマケ床土上床土 8cm 底1/2厚 注記は左欄

45	口 縦222 土跡高 35.3	外面頂部の段が明確。外面側部タテヘラケズリ後に傾。口縁部ココナデ。内面側部ココナデで、側部下位にナメヘラケズリやココラケズリも見られる。内面は側部ココナデ。焼熟・使用痕や灰は痕存部には認められない。 [注] 高さ 103.14 ~ 1.30。カマド内	7.5YR6/6 粗 粗い・白・赤・透明則一細粒多 孔質灰味で硬質な安山岩 や砂質	カマド内床直上→床下 17cm 口5/12直。側1/3直 注は左欄
46	口 21.1 土跡高 37.6 底 6.4 厚 2735g	外表面は1四方のヘラケズリでやや凹底。外側は上唇と下唇をそれぞれ平行方向と平行方向へラケズリし、外面は表面が硬く凹に向けている。下平行縁状の段を生じる。内面は側部ココラケズリ後に下唇の積み上げ体上部をココラケズリ。内面は口縁部ココナデ。内面の側部は傾けられる。外面の焼熟痕や灰は不明。	5YR6/9 粗 粗い・白・赤一細粒多。灰は 色濃く黒・透明則一細粒やや 多 や砂質	カマド内床直上12 ~ 18cm と敷床上面3 ~ 6cm 口は平形 口5/10。底全厚 SI-103.2.1 ~ 2.35。カマ ド内
47	口 縦23.7 土跡高 9.5 厚 6.9	断面が楕円三角形の長い自然礫。全面が強く焼熟や硬化している。加工・使用痕は見られない。重量 2390g。	2.5Y/1 黄灰 緻密で硬質な石炭質岩	中央床直上3cm 完形 SI-103.17
48	口 縦10.8 土跡高 10.6 厚 4.9	厚さ3 ~ 5cmの扁平な自然礫で、両の先端がやや湾い。全面が焼熟して褐色になり、両手に傷が付着する。加工痕は見られない。重量 7339g。	2.5Y6/3 に近い黄 多孔隙灰味で硬質な安山岩	敷床直上 完形 SI-34.16
49	口 縦12.4 土跡高 4.6 厚 4.3	断面が平型な楕円四角形の自然礫をそのまま利用。両側縁の中央がわずかに凹削している可能性もあるが不明。その他には加工・使用・焼熟痕は見られない。重量 256.2g。	2.5Y6/2 黄灰 多孔隙で硬質な安山岩	北東床直上8cm 完形 SI-34.4
50	口 縦7.5 土跡高 5.7 厚 2.4	指示した面の反対面がかなり扁平で、その面に小さな凹みが多く見られる。両の下端が折損する。この他には加工・使用・焼熟痕は見られない。現存重量 167.6g。	5Y5/1 灰 多孔隙で硬質な安山岩(溶岩)	西寄り南側床直上 一部欠 SI-34.21
51	口 縦13.5 土跡高 6.3 厚 3.6	断面が長方形で、上下両端よりも中央部が少し薄い自然礫をそのまま利用。加工・使用・焼熟痕は見られない。重量 373.4g。	5Y7/2 灰白 緻密で硬質な石炭質岩	南東床直上 完形 SI-34.46
52	口 縦12.7 土跡高 6.0 厚 3.2	断面の左側縁が少しくぼき自然礫をそのまま利用。両側縁の中央がわずかに凹削している可能性もあるが不明。その他には加工・使用・焼熟痕は見られない。重量 362.2g。	2.5Y6/3 に近い黄 多孔隙で硬質な安山岩	北東床直上8cm 完形 SI-34.13
53	口 縦12.3 土跡高 5.2 厚 4.6	両の左側が平面になるような断面D字形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・焼熟痕は見られない。重量 344.5g。	2.5Y6/3 黄灰 緻密で硬質な安山岩	北東床直上6cm 完形 SI-34.12
54	口 縦11.2 土跡高 5.5 厚 3.8	断面が楕円形で縁状の自然礫をそのまま利用。両の下端が折損する。この他には加工・使用・焼熟痕は見られない。現存重量 354.1g。	10YR6/4 に近い黄橙 緻密で硬質な安山岩	a 附建物南壁付直 一部欠 SI-34.11
55	口 縦11.5 土跡高 6.3 厚 3.5 重 321.0	指示した面に灰味を帯び、反対面がやや平坦になる形の自然礫をそのまま利用。両の下端が折損し、その破面の傾は少し湾削している。加工・使用痕はない。全体が強く焼熟している可能性もあるが不明。指示した面と下縁の破面に黒色の付着物がやや残存する。	10YR7/4 に近い黄橙 緻密で硬質な安山岩	南東床直上4cm 下端欠 SI-34.19
56	口 縦12.7 土跡高 5.7 厚 4.7	両辺が平らになるような楕円方形の断面。細長く幅・厚さとともに中央部がやや小さくなる自然礫をそのまま利用。加工・使用・焼熟痕は見られない。重量 496.5g。	10YR6/4 に近い黄橙 緻密で硬質な安山岩	南側中央床直上2cm 完形 SI-34.25
57	口 縦16.3 土跡高 6.1 厚 4.5	細長く重心の凹の下寄りである自然礫をそのまま利用。加工・使用・焼熟痕はない。両の両側面に擦痕があるが、発掘調査時の物と考えられる。重量 632.3g。	N5B5 灰 多孔隙で硬質な安山岩	南側中央床直上 完形 SI-34.51
58	口 縦15.3 土跡高 8.5 厚 5.0	やや扁平状。横断面でわかるように片方の側縁がやや凹い自然礫をそのまま利用。加工・使用・焼熟痕はない。重量 722.9g。	2.5Y6/3 に近い黄 多孔隙で硬質な安山岩	南西床直上7cm 完形 SI-34.45
59	口 縦14.3 土跡高 5.4 厚 3.0	断面が長方形または凹形で、平面部が緩く曲がる自然礫をそのまま利用。両に記入した浅い凹みが多いが、人為的な加工ではない。両の反対面にはこのような凹みがなく、むしろ中央部がかなり平坦である。加工・使用・焼熟痕は見られない。重量 306.9g。	N7/1 灰白 緻密で硬質な安山岩	南側中央床直上4cm 完形 SI-34.77
60	口 縦14.6 土跡高 4.9 厚 3.7	断面が楕円四角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・焼熟痕は見られない。重量 475.9g。	10YR7/2 に近い黄橙 緻密で硬質な石炭質岩	中央床直上5cm 完形 SI-103.25
61	口 縦14.5 土跡高 5.0 厚 4.9	断面が楕円四角形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・焼熟痕は見られない。重量 560.2g。	5Y7/3 浅黄 緻密で硬質な安山岩	中央床直上10cm 完形 SI-103.5
62	口 縦15.1 土跡高 6.7 厚 3.7	長方形の自然礫で、全面が強く焼熟して褐色になる。下縁の中心部と、指示した面の中央 ~ 下部でかなり割れが感じられて、焼熟以外に打加わっている可能性もある。現存重量 539.9g。	10YR7/2 に近い黄橙 やや硬質で硬質な安山岩	南側中央床直上 下端欠 SI-34.22
63	口 縦2.6 土跡高 2.2 重 23.1	先端部の1/4前後が折れる以外はすべて破面。粘土接着面または積み上げ板が残る。現存する凹面が小さいので破面は多少推定、使用角度も不明。左側縁は直線して暗緑灰色 ~ 灰色がわずかに残り、裏側の浮きで外面に付着する。身厚は1.3 ~ 1.6mm。磨削面産物構成6%なし。	10YR7/4 に近い黄橙 やや粗い・透明則一細粒やや 多。少細粒少 今や硬質 硬磁石 2 メタ石 未測定	南西 1/4直 SI-34.南西1区直
64	口 縦3.1 土跡高 3.2 厚 1.5 重 9.3	もう1点の残存と似た厚さ1.4cm程度の極小の極形磨治部直前破片。右側部は直線して暗緑灰色 ~ 灰色がわずかに残り、裏側の浮きで外面に付着する。磨削面産物構成6%なし。	表 に近い黄橙粗 粒 硬磁石 1 メタ石 未測定	a 附建物の入口ピット直 上直上12cm 破面直上 SI-34.73
65	口 縦3.8 土跡高 1.9 厚 1.2 重 27.3	側部3面が破面になった極小の極形磨治部の中核部から側部破片。上面は浅く凹み、下面は直線となる。右側部が部分的に裏面灰味で採集時に原料投入が2回に分かれている可能性を持つ。浮質はほぼ磨面破面に残るは気孔が散在する。磨削面産物構成6%なし。	青 明褐色 地 暗赤灰色 硬磁石 3 メタ石 未測定	a 附建物床直上13cm 破面直上 SI-103.24
66	口 縦6.3 土跡高 5.0 厚 1.3 重 48.6	指示した面を破面として使用して平型な凹面状になる。この面に捺している平面の上部も弱く磨削するが、元の凹凸をまだ残し、砥面と呼ぶにはやや疑問が残るものである。	5Y7/2 灰白 粘粉状起部の緻密で硬質なホ ルフェルス	D 直下 2.4cm直 SI-34.D 直下
67	口 縦3.4 土跡高 3.1 厚 1.5	指示した面がやや平削し、砥面と考えられる。両の上部寄りにわずかな破面を残す。この面以外はすべて破面。現存重量 112.2g。	10YR6/3 に近い黄橙 粗粒一細粒でやや硬質な安山岩	カマド直上 1面直下 SI-103.方マド直下
68	口 縦3.8 土跡高 2.2 厚 1.5	大平が砥面。砥面が鋭い稜面に残り、平削し磨削している。現存重量 11.4g。	5Y8/1 灰白 緻密・細粒でやや硬質な安山岩	カマド側部西側平削面直上 イン付直の敷床直 1面直下 SI-103.3 坪床下

第5章 権現山遺跡 SG10 区

60 製鉄品 耳環	縦 26.6mm 横 28.5mm 重 残 11.3	環の断面は表面方向に少し楕円形。環の下側に被覆材の彩色を確認できる部分があるので銅鍍鍍装製。鍍板の表面に鍍金を集めているかどうかは不明。環の端部で鍍板を処理している方法は、鍍跡が多いので確認できない。環した面に有線が残り、両上下部には非常に細かい織物が4×1.5mmの範囲に残留している。これは被覆材なので土中で付着した疑いがある。計測値は、a26.6、b28.5、c16.6、d6.17、e7.18、f5.34、g7.51(単位:mm)。	P5(南)の底面上 表面1/8 第4層 SI-34 94
70 鉄製品 鉄線?	長 残 2.4 重 残 1.7 (跡を含む)	比類のない線身から頸部にかけての破片かと思われる。頸部は幅5.9×厚2.4mmの長方形。線身は幅6.2×厚2.8mmの片丸断面。両切刃部であった可能性も残る。線身頸部を持たずに頸部から方部へ鋭く形状。	東西「ベルトA」の中央部 上層 両端欠損 SI-34 上層A' 中央

第35表 権現山遺跡 SG10 区 SI-34c 出土遺物

番号 種類 土器	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・造成 (または素材)	出土状態 現存状態 注記
71 土師器 杯	口 径 13.3 高 残 4.0	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は体部にナデまたはヨコヘラナデ。口縁部にヨコナデ。内面に「水」字状または「米」字状等の線らな放射状ヘラミガキを装飾的に行っていたと考えられる。漆仕上げは見られない。	7.5YR/6/4 にぶい黄褐色 やや緻密 赤・黒粒～細粒少 やや多。灰色・透明粗粒と白磁 粒少 中や硬質	北東c 期床直上 口1/4 層 SI-103 37
72 土師器 杯	口 径 14.9 高 残 3.3	外面は丸く内側し。外面は口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラケズリ。内面は口縁部にヨコナデ。口縁部にヨコナデ。内面にヘラミガキが1本だけ残存し、「十」字状または「米」字状等の線らな放射状ヘラミガキを装飾的に行っていたと考えられる。外面口縁部と内面に漆仕上げ。	7.5YR/7.8 黄褐色 中や緻密 黒細粒少や少。赤・透明粗粒～細粒少 中や硬質	c 期前遺穴直上 4cm 口1/8 層、床1/4 層 SI-34 31
73 土師器 杯	口 径 12.5 高 残 4.3 最大 径 13.5	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は下位ヨコヘラナデに中位と口縁部をヨコナデ。外面口縁部と内面全面を漆仕上げ。	5YR7/6 橙 中や粗い 黒細粒～細粒多。赤・灰色粗粒～細粒少 白磁粒少 中や硬質	北東部c 期床直上 口5/12 層 SI-103 35
74 須恵器 壺	高 残 5.2 最大 径 13.7	内外面ロケロナデ。ロケロは左回転(反時計回り)。胴部内面に粘土細積み上げ痕を少し残す。	10YR5/1 灰 緻密 白磁粒少 硬質	北西c 期床直上 6cm 第1/6 層、第1/8 層 SI-34 55

SG10 区 SI-35 (第66図、写真図版86)

【位置】 SG10 区中央部西端付近の 19-17 と 20-17 グリッドにある。同じく古墳後期の遺構は、南に SI-37・39 がある。中～近世の溝 SD-263 に南西部を切られる。時期不明の P-291 との重複部が SD-263 に切られているため、SI-35 と P-291 の新旧は不明である。建物の西部と東壁部は現代の掘削で壊され、西掘乱坑には木根や草、東掘乱坑には現代のゴミが入っていた。

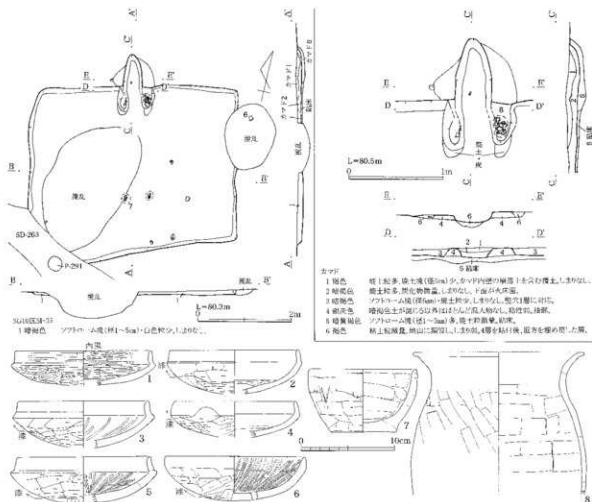
【規模と形状】 長方形の建物跡で主軸方位は GN-12°-W。東西 4.21 × 南北 4.22m。壁が最もよく残る北東～東部では残存壁高 13cm で、西壁は残りが悪く 4～5cm。主柱穴・入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝は認められなかった。ソフトローム主体の土で厚さ 5cm 程度の貼床を行うことがカマドの上層断面で記録されている。カマド以外の竪穴部でも貼床を除去して掘方まで調査を行ったが、カマド部以外の竪穴上層断面では貼床の厚さが図化されていない。

【カマド】 北壁中央から僅かに東へ寄った位置にあり、残りは悪い。両袖幅 78cm。煙道先端から袖先端まで 119cm。北壁より北側の竪穴外へ飛び出す浅く広いカマド掘方に、両袖の北半部を入れるように灰色粘土で袖を造り(カマド 4 層)、粘土の周囲は掘削した排土で掘方を充填する(カマド 6 層)。このようなカマドの構築法は SI-40 と類似している。カマド袖は覆土と区別することが難しかった。両袖の先端部には焼土と炭がまともに見られた。東袖の残存上面には土師器甕(8)の破片がまともと載る。

【覆土】 単層で、自然埋没と思われる。テフラと思われる白色粒を少量含むが、古墳時代のテフラかどうかは確実ではない。

【遺物出土状況】 遺物が少ないのは、竪穴の残りが浅いことにもよると思われる。結果として床面に比較的近いレベルで遺物が出土している。カマドの東西両袖と煙道に遺物が少しある。東袖にある土師器甕(8)が遺棄品であろう。

【出土遺物】 遺物は少量の土師器で、須恵器はない。土師器は杯類が個体数・破片数ともに多く、鉢・甕・小形土器などが少し混じる。土師器杯は身模倣形の杯が多く、半球形の杯も含む。これらの杯類は漆仕上げでやや粗いヘラミガキを行うものが主体で、古墳後期後葉と考えられる。1は漆仕上げではなく、炭素吸着の黒色処理。図示以外の土師器合計 55 片・560gの内訳は、杯 28 片・206g、高杯 2 片・29g、鉢 9 片・122g、甕甕類 16 片・203g。



第 66 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-35 遺構・建物

第 36 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-35 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ cm・g	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 14.4 高 残 3.6 最大 復 15.2	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。口~体部ヨコヘラミガキ。内面は底部に1方向と口~体部に横位の細なヘラミガキ。 [注記] 南西1脚、腹見中、SD-263.3、6	2.5Y8/4 淡黄 やや暗黒 白粉と黒・透明細粒少 やや硬質	南西1脚、SD-263底上 2~5cmの破片も接合 口1/4周、体1/3周 注記は左欄
2 土師器 杯	口 復 13.6 高 残 4.6 最大 復 14.2	外面は体部上位ナデ後に口縁部ヨコナデ、体~底部ヨコヘラケズリ。内面は体部に多方向ヘラナデ後、口~体部ヨコナデ。内面は底面後縁の角色層。	10Y8/3 に赤・黄緑 やや暗黒 白粉~細粒と黒・透明細粒少 やや硬質	東側腹見 口5/12周 東腹見
3 土師器 杯	口 復 13.8 高 残 4.9 最大 復 15.0	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に1方向(口と体部に横位のヘラケズリ)。内面はヨコナデ後、体部に放射状のやや密なヘラミガキ。外面上平と内面全体を塗上り。	10Y8/3 に赤・黄緑 やや暗黒 黒・透明細粒多、黒細粒と白粉~細粒少 やや硬質	口5/12周 東腹見
4 土師器 杯	口 復 12.6 高 残 3.7	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部ヨコヘラナデ、口~体部ヨコナデ。外面は口縁部と内面全体に塗上り。	10Y8/7 黄粉 やや暗黒 黒・赤色粗粒やや多、赤細粒少 やや硬質	腹見中 口1/4周、体1/3周 腹見中
5 土師器 杯	口 復 13.9 高 残 4.9 最大 15.4	体部がやや厚く重い。外面は口縁部ヨコナデ後、底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部上平と口縁部にヨコナデ後、体部に放射状ヘラミガキ。外面の体部以外と内面に塗上り。	10Y8/7 4 に赤・黄粉 やや暗黒 黒細粒多、白・透明細粒~細粒少 硬質	表腹 口1/4周、体7/12周 表腹
6 土師器 杯	口 復 14.7 高 残 4.7 最大 15.0	厚く重い。外面は体部上位ナデ後に口縁部ヨコナデ、底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は体部に横~斜位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面全体に放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面全体に塗上り。外面底部に黒炭がある。底面の塗の層は不明。	7.5Y8/3 に赤・黄粉 やや暗黒 白・黒・赤・透明細粒多、赤細粒少 やや硬質	北東腹見上11cmとSD-263底上2cm 口1/3周、体5/12周 9、表腹、東腹見、SD-263.17
7 土師器 粗脚鉢	口 復 11.2 高 6.6 底 6.8 最大 復 11.4	外底面は本草類または草本類物の圧痕が何れか付いているかもしれないが、ほとんどナデされている。外面内面は口~体部ヘラナデで粘土層も1層を有し、口縁部にヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。	10Y8/6.4 に赤・黄粉 やや暗黒 白・黒・赤・透明細粒~細粒少 やや硬質	中央径上3~6cm、方 マヤ内縁に1片 口1/3周、底5/6周 5、7、11、Bセク1脚、 南東1脚
8 土師器 甕	口 復 18.0 高 残 15.1 最大 復 18.4	薄く軽い。外面は胴部ナメハラナデ後に口~頸部ヨコナデ。内面は胴部ヨコナデ後に口~頸部ヨコナデ。胴部内面は強く焼熱しているが、あまり円筒には赤化していない。	7.5Y8/6.4 に赤・黄粉 やや暗黒 白細粒多、白細粒と透明細粒~細粒と黒細粒少 硬質	カマド東縁上5cm、カマド西縁上2cmと腹口部 各1片出土 口~胴1/6周 1、2、13

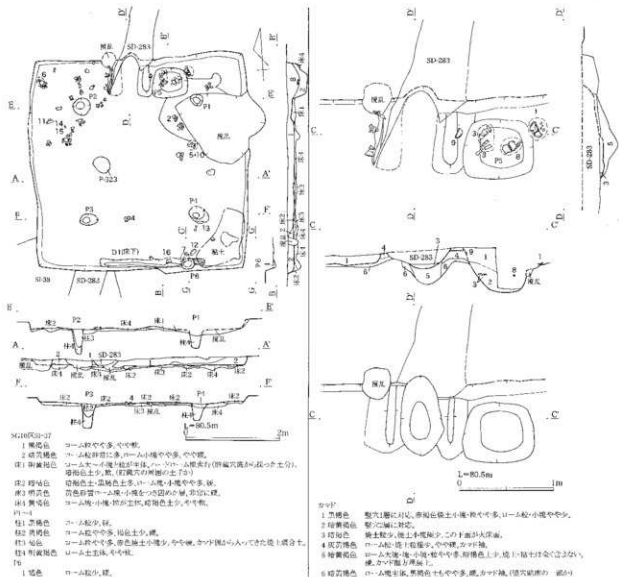
SG10区 SI-36 → 本章第5節(古墳時代の竪穴鍛冶遺構)を参照

SG10区 SI-37 (第67・68図、写真図版87・197)

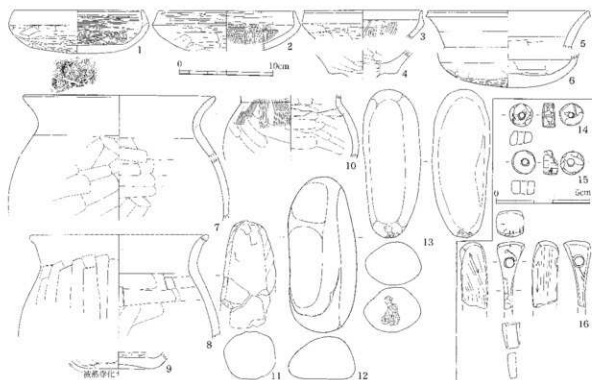
[位置] SG10区南部西端付近の19・16・17グリッドにある。同じく古墳後期の遺構は、北にSI-35・南にSI-39がある。古墳中期のSI-38を切り、時期不明の溝SD-283に中央部を切られる。SI-37の床面で確認した時期不明のP-323もSD-283に上部を切られる。SI-37にP-323が伴うと考えるのは位置・形状が不自然なので、P-323がSI-37よりも新しく、SI-37→P-323→SD-283の順になる可能性がある。北東部に抜根痕の擾乱があり、貯蔵穴P5の南東部付近まで根痕が及ぶ。

[規模と形状] 方形で主軸方位はGN-2°-E。東西4.68×南北4.62m、壁の残存高は11～17cm。主柱穴は4本で、東西柱間は南側が2.34m、北側が2.48m。南北柱間は2.40m。柱穴底面形状からみて推定柱径は12～16cm前後。床面からの深さは東側柱穴が浅く(P1=41cm、P4=37cm)、西側柱穴が深い(P2=53cm、P3=49cm)。P3は地山の黄色砂混じりローム層を掘り抜いて、さらに下層の黄灰色砂質土中に底面を持つ。南壁際の東部にあるP6は径15cm・深さ7cmの浅いくぼみで、柱穴と呼ぶには浅すぎるものである。

貯蔵穴P5は北東部でカマドのすぐ東側にあり、東西76×南北65×深さ31cm。貯蔵穴P5の南側で床



第67図 権現山遺跡 SG10区 SI-37 (1) 遺構



第68図 権現山遺跡 SG10 区 SI-37 (2) 遺物

面が少し高いので、貯蔵穴周囲を囲む高まりの痕かもしれないが（断面 B-B'）、P5 の南東側に木根痕の擾乱が及んでいるので、平面的には明らかにできない。壁溝 D1 は南壁際の中央部にあり、長 2.26m・幅 15～19cm で、床面では認識できず貼床除去後に確認した。竪穴の掘方は床面より下へ 2～8cm ほどの深さがあり、ローム塊主体の貼床土で埋め戻している。入口施設や間仕切溝はない。

【カマド】北壁中央の少し西寄りにある。東袖が貯蔵穴に接している点が珍しい。両袖幅 108cm で、煙道は SD-283 で破壊されて長さなどが不明である。地山ソフトロームを少し高く掘り残した上に貼床と一連の暗黄褐色土（カマド 6 層）を貼ってから、灰黄褐色粘土の 4 層で両袖を作り、5 層でカマド掘方中央部を埋め戻している。5 層を除去した掘方（カマド図下側）で、西袖基部や燃焼部の形状を、SD-283 で破壊された現況よりもよく把握できる。袖基部から先端までの長さは西袖が 130cm、東袖が 144cm。東西両袖残存部を覆うカマド 1 層中に土師器片が少し残っていた。

【覆土】自然埋没と思われる、テフラの層や粒などは含まない。貯蔵穴内（断面図 B-B' と C-C'）や P4 上部（断面図 F-F'）も、竪穴部と同種の層で自然埋没している。南東隅では東西 105 × 南北 120cm の範囲で厚さ 3～7cm の粘土が床面直上に広がり、その中央部は径 30～35cm の範囲で粘土がみられない。

【遺物出土状況】北西部と北東部に遺物が多い。北東部の擾乱坑に落ち込んだ遺物に大きな破片がある。カマドは SD-283 に破壊されているためか遺物が少ない。貯蔵穴 P5 内に裏上半部がある（8）。貯蔵穴に落ち込みそうな位置で内面を上向きにした杯破片が P5 東側にある（1）。土製支脚はカマド内ではなく北西部の床面で出土した（11）。南東部に石・礫がやや目立つ。南東主柱穴 P4 の北方で床上 3cm のレベルに径 16 × 14 × 厚さ 5cm・重量 1.6kg の平たい石がある。南東主柱穴 P4 の上部が南側に広がる部分に入れた細長い礫は扁物石または敲石で（13）、その上面が床レベルに見えていた。

【出土遺物】杯類はミガキが多くて炭素吸着または黒色気味のものが目立ち、漆仕上げの杯がない。1 は木葉底。7 は白色針状物質を含む搬入品の裏。白色針状物質を含む土師器は SG10 区 SI-23 などにある。土製支脚（11）は SG5 区 SI-9 にもある。有孔砥石（16）の出土例は SG10 区の前時代溝 SD-41・42 と SG5 区の前時代遺物包含層にあり、粘板岩製白玉（14・15）は SG10 区 SI-20 などにある。有孔砥石は、周

第5章 権現山遺跡 SG10 区

辺では権現山遺跡 A 区 SI-018,038,063,273 と B 区 SI-052 と百目鬼遺跡 SI-580 (谷中・大島 2001)、杉村遺跡 25 号住 (藤田・安藤 2000)、中島笹塚遺跡 (2 号墳と 1 区 SI-3: 内山 2008)、立野遺跡 (5 区 SI-61・64: 内山 2005)、砂田遺跡 6 区 (SI-324 と表採品: 津野・篠原・今平 2007)、島田遺跡 V 次 SI-33 (津野田 2010) などにある。周辺地域以外では、鹿沼市青龍潭遺跡 3 区 SI-37 (津野 2009)、足利市田島特舟遺跡 519・521 号住居跡で最近の報告例がある (篠原・藤田 2011)。また、穿孔が貫通しない砥石は本遺跡北部の 4 区 SI-17・31 にある (内山 2010)。遺物は少なめで、甕が多く、中形の壺も一定量がある。杯は数個体分があり、ほとんどが身模倣形の杯で、外面の稜線がやや不明瞭なものが目立つ。外面の稜が明確で最大径 15cm を越える身模倣形杯もあるので、中期末よりも後期初頭の可能性がある。図示以外の土師器および焼粘土塊合計 275 片・2.679g の内訳は、杯 44 片・241g、甕 48 類 230 片・2,424g、焼粘土塊 1 点・14g。

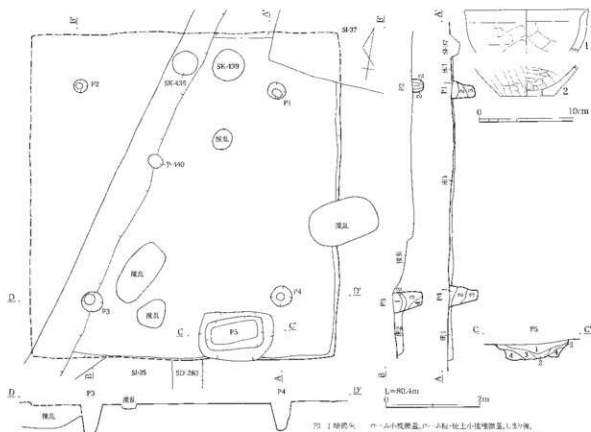
第 37 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-37 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 筋土・産成 (または表材)	出土状況 残存状態 位置
1 土師器 杯	口 径 13.6 高 4.6 最大 径 14.8	外底面はカンワの葉の裏面と思われる木炭痕を残す。口縁部ヨコナデ後、底部外周から体部までをヨコヘラズリ。内面は底部に多方向、体部は斜一線・縦線・口縁部に彩色のヘラミガシ。内外面に造仕上げを施している可能性もあるが不確実。外面全体の黒色味が強い。	7.5YR6/4 に近い暗褐色 白・赤黒・黒粒と黒・透明細粒少	北東床土 1cm、掘見直上 1 片 口 1 径 1/2 周 1、10
2 土師器 杯	口 径 14.3 高 4.2 最大 径 15.6	外面は体部ヨコヘラズリ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガシ。内面は体部に放射状、体部上段と口縁部に縦位のヘラミガシ。内外面全体が炭素を吸って黒色。	10Y2/1 黒 やや暗褐色 透明黒・黒粒と白細粒少 中や軟質	南東床直上 口 1.8 周、体 1/6 周 8
3 土師器 杯	口 径 2.4 高 3.1	外面は体部ナデ、その下部をヨコヘラズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ナデまたはヘラナデ後にタテヘラミガシ、口縁部ヨコナデ。口縁部は強く外反する部分と外反しない部分が見られる。表面は近い褐色で、内外面は黒色。	5Y3/1 オリーブ黒 やや暗い、白粒・黒粒やや多、黒・透明細粒少	野塚穴直上 20cm 口 1/6 周 5
4 土師器 高杯	高 2.9	推測しているため詳細不明だが、外面はナメヘラナデまたはヘラズリと思われる。内面はナメナデ。	7.5YR6/8 暗褐色 白・黒細粒中や少、赤・透明細粒少 軟質	中央東部床直上 特産 1/3 周 21
5 土師器 壺	口 径 17.0 高 3.8 最大 径 17.4	外面は丁寧なヨコナデで、頸部中段と口縁部下位が少し突出気味。内面は頸部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ。	10YR7/4 に近い黄褐色 白・灰色粒 透明細粒多、白・灰色粒・黒粒と黒細粒少	中央東部床土 4cm 口 1/6 周 12
6 土師器 壺	高 3.6	底部が厚く重い。外底面を 1 方向ヘラズリ後に外面体部ヨコヘラズリ。内面は口内方向のヘラズリ。残存部分には造仕上げが認められる。	7.5YR5/4 に近い暗褐色 白・白・灰色・黒粒と黒細粒少 中や軟質	北西床直上～床土 2cm が接合、北東・南東・小鏡片 口 1/2 周 1
7 土師器 甕	口 径 20.3 高 12.9 最大 径 23.5	外面は頸部ナメヘラズリ、口～頸部ヨコナデ。頸～胴部の境にごく短い段あり。内面は体部ナデと胴部に横位のヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。注記付。13, 17, 18、南西床	7.5YR6/6 暗褐色 白・灰色・透明黒・黒粒と黒細粒少、白色針状物質極少 中や軟質	北西床直上と北部の各 1 片と南西部床面の 2 片 口 1/2 周、南西区 1 注記は左欄
8 土師器 甕	高 11.0	外面は口～頸部ヨコナデ後に頸～胴部タテヘラナデ。内面は頸部ヨコヘラズリ、口～頸部ヨコナデ。	10YR7/6 明褐色 暗い、白・透明黒・黒粒多、赤黒・黒粒と黒細粒少 軟質	野塚穴直上 15cm と西部床直上 頸 5/12 周 2、31、SD 283
9 土師器 甕	高 1.8 底 7.0	外底面はおそらくヘラズリで凹状にしているが、表面が剥れてツラリの状況が不明。外面胴部タテヘラズリ。内面は底面を 1 方向ヘラズリ。外周縁は口内方向のナデ。外面全体が炭素赤化している。	2.5YR6/8 暗褐色 白・白・灰色・透明黒・黒粒多、赤黒・黒粒と黒細粒少 中や軟質	野塚穴直上 20cm 底 7/12 周 5
10 土師器 小形甕	高 6.8 最大 径 14.2	外面は体部ナデ後に胴部タテヘラ。胴部までおそろくハケを施して、ヨコナデで滑している。内面は体部ナデと胴部に横位を横にし、頸部ヨコナデ。外面体部に 6cm 以上の黒染あり。	10YR7/4 に近い黄褐色 白・赤黒・黒粒中や多、灰色と黒・透明細粒少 中や軟質	北東床土 4cm と北東隅の各 1 片が接合 頸 1/4 周、頸 1/2 周 12、北東壁及び 32
11 土師器 支脚 土製品	長 11.3 幅 5.5 厚 5.6 重 250.2	断面は不規則形で、表面は縦および斜位のナデ調整。上端部のナデは粗雑。全体が炭素しているが、それほど顕著ではない。現状の下端面が磨削されているので、本来の下端面を留めているかどうか不明。	10YR7/4 に近い黄褐色 白・赤黒・黒粒と白細粒少 軟質	北西床直上 口 1/2 周 2
12 土師器 編物石	長 16.3 幅 7.0 厚 4.7	図示した面が甲高で丸味を持ち、反対面が平甲な自然磨をそのまま利用。加工・使用・焼熟痕は見られない。重量 819.7g。	7.5YR7/1 灰褐色 磨滅で硬質な安山岩	南西部床直上 方形 52
13 土師器 編物石 または 砥石	長 15.5 幅 6.0 厚 4.5	棒状で断面が楕円形の自然磨をそのまま利用。下端部に図示した磨材痕がある。その他には加工・使用・焼熟痕は見られない。重量 657.6g。	2.5Y7/1 灰白 硬質で少し多孔質気味な安山岩	P4 開口部直上 4cm 方形 51
14 石製燗道具 白玉	径 12.3～ 12.5mm 厚 7.6mm 重 1.4	上下面は粘板岩の磨理に沿って磨っただけで磨削していない。側面は穿孔と同じ方向(横方向)に軽い磨理面を残し、それ以前の切附磨もかなり残す。左側の面で孔径 3.3～3.4mm、右側の面で孔径 3.2～3.3mm。	2.5G/Y4/1 明オリーブ灰 磨滅で軟質な粘板岩	北西床直上 ほぼ方形 30
15 石製燗道具 白玉	径 12.1～ 12.5mm 厚 7.2mm 重 1.5	上下面は粘板岩の磨理に沿って磨った上で、右側の面は不規則な斜めの割れ目も残し磨削していない。側面は穿孔と同じ方向(横方向)に軽い磨理面を残し、切附磨を残す部分はごく少ない。左側の面で孔径 3.5mm、右側の面で孔径 3.3mm。	2.5G/Y4/1 明オリーブ灰 磨滅で軟質な粘板岩	北西床直上 ほぼ圆形 30
16 土師器 砥石	長 3.5 幅 1.4 厚 1.4 重 6.0	左側の面から穿孔して左側の面に穿孔割縁を穿じ、初孔径 5.5～5.8mm、終孔径 4.8～5.1mm。本来の表裏面よりもう側面のほうをよく使用して非常に薄くなり、穿孔に後遺したところまで残っている。上端は使用していない。	5Y7/2 灰白 磨滅で軟質な黄緑岩	南西部 胴部欠 18 7 片

SG10区 SI-38 (第69図、写真図版88)

【位置】SG10区南部の西端付近である18-16および19-16グリッドにあり、東端は18-17および19-17グリッドに少し出る。重機による現代の土探りで西側が破壊されている。

古墳中期の建物SI-25より新しいと推定される。ただし、重複状況の断面記録がない。古墳後期のSI-37に北東隅部を、時期不明のSD-283に東部覆土上層を切られる。北部のSK-435・439は、SI-38の貯蔵穴の可能性も調査時に考えたが、別の土坑と判断した。古墳時代のSK-439は中期後葉のSI-38より遺物がわずかに古く見えるが、SI-38の貼床除去前にSK-439を確認できたので、SK-439が新しいと判断した。SI-38にSK-439が伴う可能性も残る。SI-38と時期不明のSK-435の重複関係は不明で、SK-435の方が新しいとも思える。SI-38の西部を破壊した攪乱面にSK-435の下部が残る。時期不明のP-440とSI-38の新旧は不明。南東隅の貯蔵穴P5は調査時に「SK-434」と呼称したが、SI-38の貯蔵穴と判明した。



SG10区 SI-38

- 1 1 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。
 2 2 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。
 3 3 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。
 4 4 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。
 5 5 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。
 6 6 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。
 7 7 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。
 8 8 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。

- 1 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。
 2 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。
 3 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。
 4 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。
 5 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。
 6 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。
 7 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。
 8 緑褐色 土ムス小塊・砂多、土中少量、土中。

第69図 権現山遺跡SG10区 SI-38 遺構・遺物

第38表 権現山遺跡SG10区 SI-38 出土遺物

番号 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径約13 高 径4.5	残存破片が小さいので復原性は参考程度。内外面の体部をナメメダの後に口縁部ヨコナデ。	7.5YR8/4 淡黄緑 や冷緑密 赤釉～細粒多、白 質・高厚細粒少 や冷緑密	P5内 口1/8周 SK-434一拵
2 土師器 杯	高 径3.2 底 径5.6	薄いので杯としたが、大きな平底なので鉢か小形壺かもしれない。平底面は多方向ヘラナデ。外面体部タナデ。内面体部は横一斜位ナデ。	2.5YR5/6 明赤 や冷緑密 白釉～細粒と粗 細粒少 や冷緑密	南東部上面 底1/3周 南東上面

[規模と形状] 方形で主軸方位 GN-10°-W、南北長 6.90m、西壁は消滅したが推定東西長 6.6m。残存壁高はわずかで、東壁と北壁で 2～6cm、南壁で 4cm。主柱穴 4 本は東西柱間 4.05（南側）～4.18m（北側）、南北柱間 4.28（東側）～4.52m（西側）。底面形からみて柱径 20cm 以下で、床面から P1=49cm、P2=48cm、P3=55cm、P4=59cm の深さ。P3 の東 1m の穴は入口施設ではなく攪乱と判断した（径 57×68×床から深さ 31cm）。南東部の貯蔵穴 P5 は東西 155×南北 103×深さ 37cm。調査時は P5 を SK-434 と呼称したが、調査時から SI-38 の貯蔵穴である可能性を考えていた。壁溝・間仕切溝はない。

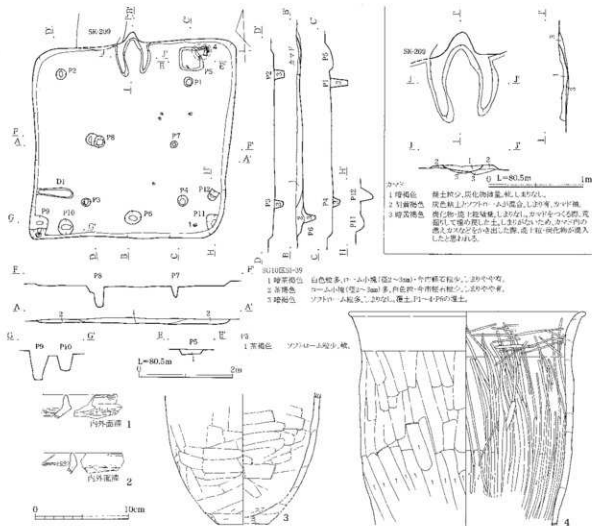
[火処] 不明である。西半部の土採りでかが消滅したことが想定される。

[覆土] 貼床土がかろうじて残る程度で、覆土はほとんどない。貯蔵穴 P5 は自然埋没状に堆積する。

[遺物および出土状況] 竅穴の残りが悪いので遺物はごく少ない。遺構上面出土の遺物（2）も床面に近い遺物と言える。また、貯蔵穴内遺物がある（1）。東にある古墳中期後葉の SI-28 のほうが、カマドを持つことからみても少し新しいと考えられる。図示以外の土器器合計 78 片・416g の内訳は、杯 25 片・87g、高杯 20 片・120g、小形壺 19 片・91g、壺甕類 14 片・118g。

SG10 区 SI-39（第 70 図、写真図版 88）

[位置] SG10 区南西部の台地平坦面、19-17 グリッド所在。同じく古墳後期の SI-37・40 が北西と南西に近接する。南と西には中期の SI-28・38 がある。時期不明の SK-209 に北西部を切られる。



第 70 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-39 遺構・遺物

第39表 権現山遺跡 SG10 区 SI-39 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ H×φ	特 徴	色調 胎土・装成 (または素材)	出土状況 保存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12~14 高 残 2.5 最大 復 13 ~ 15	外面は口縁部ヨコナデ後に上部をヨコヘラミガキ、体部ヨコヘラズリ、内面はヨコナデ後に体部上位をヨコヘラミガキ。残存する内外面全体に漆仕上り。	10YR4/2 灰青地 縹赤、白、赤・透 明細粒少 破片	南東部床土 9cm 口 1/18 割
2 土師器 杯	口 復 14~16 高 残 2.3 最大 復 15 ~ 17	外面は体部上位に横へ削付ヘラナデ、口縁部ヨコナデ後に上部をヨコヘラミガキ、内面はヨコナデ後、体部上位にヨコヘラミガキ。残存する内外面全体に漆仕上り。	10YR3/1 黒褐色 縹・黒・透明細粒少 破片	口 1/12 割 2層
3 土師器 甕	高 残 13.7 底 復 5.4	外面は胴中部タテヘラナデと胴下部ヨコヘラナデ、胴下部ヨコヘラズリ、外底面はおそらく内面方向ヘラズリ、内面は底部に多方向と胴部に横位のヘラナデで、底から上へ9cm付近の内面にはナメナデ。	7.5YR6/8 橙 やや粗い 白・透明細粒 と黒細粒少、白濁微塵 散在	中央底上 7cm、北西の1 片も脱合 割 1/4 割、底 1/6 割 5、Bセク北、北西1割
4 土師器 甕	口 復 24.8 高 残 22.8	外面は上位ヘラナデ後に口縁部ヨコナデと下位タテヘラズリ、内面は下位タテヘラズリと上位ヘラナデ(?)の後に口縁部をヨコナデし、胴部に横位の後に胴部に横位のヘラミガキ。	10YR7/4 に赤い黄粉 やや粗い 白・赤・透明細 粒多、白・灰色調と赤黒 細粒少、やや散在	北東部上 2cmと南東部上 9cmが接合 口 5/12 割 1、2、SK-209 1層

【規模と形状】 方形で、わずかに東西に長い。南北の中軸線は N-5°-E。2本の棟持柱を結ぶ東西方向の中軸線は N-86°-W である。規模は南北 4.27m、東西 4.31m。壁は外傾し、残存高は西壁で 2~5cm、東壁で 9~11cm。床は平坦で傾斜しない。掘方・貼床は認められない。

主柱穴は計 6本で、棟持柱の可能性がある P7・8と、周囲のやや浅い P1~P4 である。南西柱穴 P3 が少し内側にいる。西棟持柱 P8 の西面にある深さ 19cm の浅い段は柱の抜き取り穴と判断した。現地調査時の所見によると、P1~P4 と P7 も柱を抜き取った可能性がある。南北の柱間は 2.55m (東側)~2.75m (西側)、東西の柱間は 2.06m (南側)~2.70m (北側)、棟持柱 P7 と P8 の柱間は 1.56m。深さは P1=37cm、P2=24cm、P3=22cm、P4=21cm、東棟柱 P7=25cm、西棟柱 P8=43cm。補助柱穴 4本は、南東の 2本が浅く (P11=7cm、P12=28cm)、南西の 2本が深い (P9=56cm、P10=37cm)。

入口ピット P6 は南壁近くの中央にあり、径 29×35×深さ 27cm。南西部にある間仕切溝 D1 は幅 13~17cm、床面から深さ 10cm。北東部にある貯蔵穴 P5 は上面・底面ともに長方形で南北 48×東西 51cm、床面から深さ 9cm で非常に浅くて壁が外傾し、貯蔵穴覆土は単層である (断面図 E-E)。

【カマド】 北壁中央にある。竪穴そのものが浅いので、カマドの残りが悪い。両袖幅 74cm、焚口から煙道までの長さ 83cm。3層で整地した上に 2層で袖部を作る。3層にも灰・焼土粒が混入するので、現地調査時の所見では燃烧部の清掃などで 3層をかき回したと推定している。または、カマドを作り替えたとも考えられる。煙道の掘方は北壁を「V」字状に掘り、煙道の斜面にも 3層を入れるので、確認面の位置で完成時の煙道が掘方よりも 12cm 短くなる。煙道の傾斜は緩い。燃烧部内には 1層が堆積する。

【覆土】 上下 2層の自然埋没状で、両方の層にテフラの可能性のある白色粒を含み、縄文草創期に降下した今市軽石粒も地山から流入している。

【遺物出土状況】 遺物は主に東半で出土した。北東部では、貯蔵穴の上面で土師器甕がつかれている (4)。

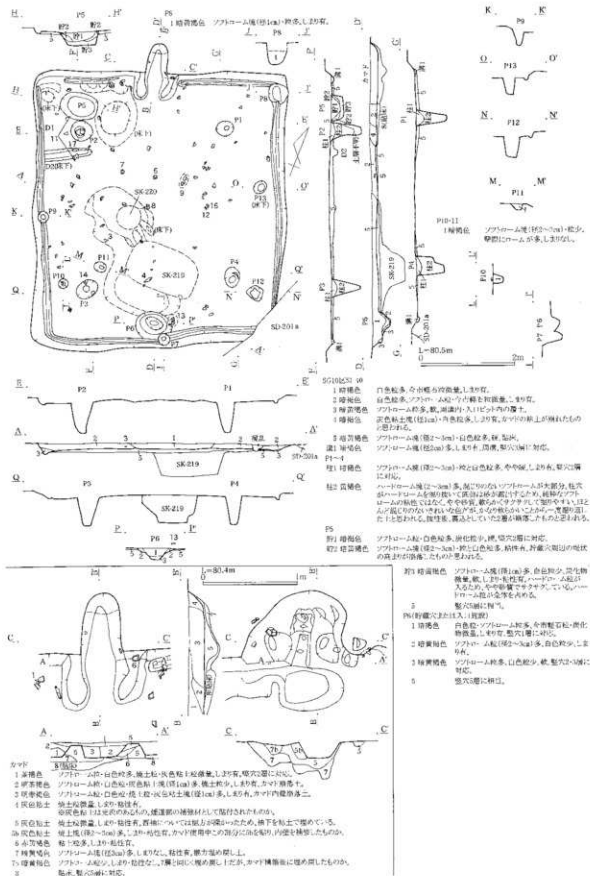
【出土遺物】 甕は長胴気味である (3)。遺物は少なく、土師器の甕・甕が主体である。土師器杯は身模倣形 (1) と半球形 (2) がある。身模倣形の杯 (1) はミガキ調整と漆仕上げを行い、口縁部外面を磨く破片があり、復元径は不明である。胴部が長い甕の形状や、身模倣形杯の口縁部長や、内外面を磨く杯からみて古墳後期中頃と思われる。図示以外の土師器合計 47片・366g の内訳は、杯 5片・30g、壺・甕類 42片・336g。

SG10 区 SI-40 (第 71・72 図、写真図版 88・89・174・198)

【位置】 SG10 区南部の 19-17 グリッドにある。同じく古墳後期の遺構は北西に SI-39、東に SI-34 がある。縄文時代の SK-219 と古墳時代の SK-220 を切り、南東隅を近世の SD-201a に切られる。SK-219 と SK-220 は SI-40 の貼床除去後に確認した。

【規模と形状】 方形の建物跡で主軸方位は GN-21°-W。東西 5.56×南北 5.96m、残存壁高は 7~15cm で、北東部と南西部で壁がよく残る。主柱穴は 4本で、柱間は東西 3.08m、南北 3.20m (東側)~3.30m (西

第5章 権現山遺跡SG10区



第71図 権現山遺跡SG10区 SI-40(1) 遺構

側)。柱穴底面形から推定した柱径は10～15cm程で、床面からの深さはP1が64cm、P2～P4が52～53cm。柱穴底面は地山ハードロームを掘り抜いて、その下の砂層に達している。

貯蔵穴P5は北西隅にあり、東西79×南北57×深さ26cm。貯蔵穴または入口施設と考えられるP6は東西76×南北58×床面から深さ26cm。P7も入口施設かもしれないもので、床面からの深さ30cm。P6を貯蔵穴と考えた場合は、複数の貯蔵穴を持つことになる。SG10区ではSI-6などが複数貯蔵穴を持つ。

P8～P12は東部と南西部の床面で確認した。P9～P11は補助的な柱穴と思われる。P8とP12は、SI-40より新しい遺構の疑いもある。床面からの深さは、P8=29cm、P9=32cm、P10=22cm、P11=20cm、P12=48cm。

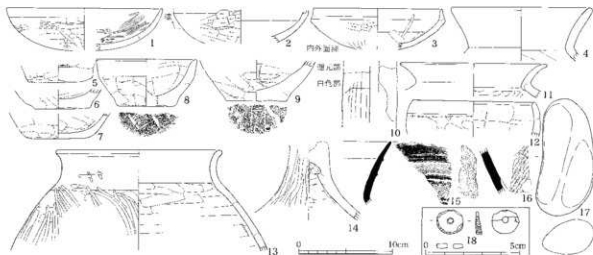
壁溝D1は深さ1～8cmで、北西隅では床面が高くなり溝が消失する。間仕切溝D2は北西主柱穴P2の南にあり、床面では認識できず、貼床除去後に確認した。D2は幅26～33cm、深さ約17cm。掘方の底面は南西部で4～8cm低く、北西部で3～5cm高くなる部分があり、平面図に破線で示した。

【カマド】北壁中央より少し西寄りにある。両袖幅90cm、煙道先端から袖先端まで127cm。東袖を作る灰色粘土のカマド5層は、竪穴壁の南約20cm付近よりも南側で明瞭に認められた。竪穴の掘方を貼床（カマド8層）で埋め戻した後に西袖を作るが、東袖は地山ローム層の上に袖を作っている。煙道部の広い掘方をカマド5層・7層で埋める構築方法（断面図C-C'）がSI-35と類似している。カマド5層のうち焼土が多い5b層は補修時に貼った土かと考えられた。煙道の先端寄り20cmで灰色粘土の4層（断面図B-B'）がよく確認された範囲を、平面図に破線で示した。

【覆土】自然埋没と思われる。覆土の各層に含む白色粒はテフラの可能性もある。

【遺物出土状況】竪穴全体で出土し、北部にやや多い。カマド掘方図に示したように、煙道部西側の掘方埋戻土中で土師器壺甕類の胴部片が出土した。粘板岩製白玉（18）はSI-40の北壁部で採集されたので、遺構北側から流入した疑いがある。SI-10他と同一個体の可能性がある古墳中期の須恵器甕が1片、混入している（16）。

【出土遺物】漆仕上げの他に内面炭素吸着仕上げの杯もある（1）。3の内面はSI-34aなどにある「米」字状ヘラミガキかもしれない。小形粗製土器が目立つ（5～9）。13のように白色針状物質を含む搬入品の土師器はSG10区SI-23などにある。14・16は古墳中期の混入遺物で、16はSI-10他出土の須恵器甕と同個体の可能性がある。専用羽口が1片あり（10）、東側のSI-34a（古墳後期末）にある小形鍛冶滓2片と関連するか、または北方の古墳中期鍛冶遺構SI-36から混入したことが考えられる。この羽口は『東谷・中島地区遺跡群』10で権現山遺跡の鍛冶関連遺物全体を報告後に確認したため、同書pp.490-498に掲載されて



第72図 権現山遺跡 SG10区 SI-40(2) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

いない。粘板岩製の白玉は SI-20 などにある。ただし 18 は遺構北側から流入した疑いがある。石器では、やや硬質な流紋岩製砥石の小さな 1 片が出土した。

遺物の量は比較的多いが、建物の大きさに比べると少なめである。土師器裏と杯が多い。図示以外の土師器および焼粘土塊合計 368 片・3,885g の内訳は、杯 228 片・1,927g、高杯 19 片・251g、鉢 3 片・149g、壺蓋類 117 片・1,547g、焼粘土塊 1 点・11g。古い時期の混入遺物が多く見られ、床下にある SK-220 などから混入した遺物も含んでいるかもしれない。

第 40 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-40 出土遺物

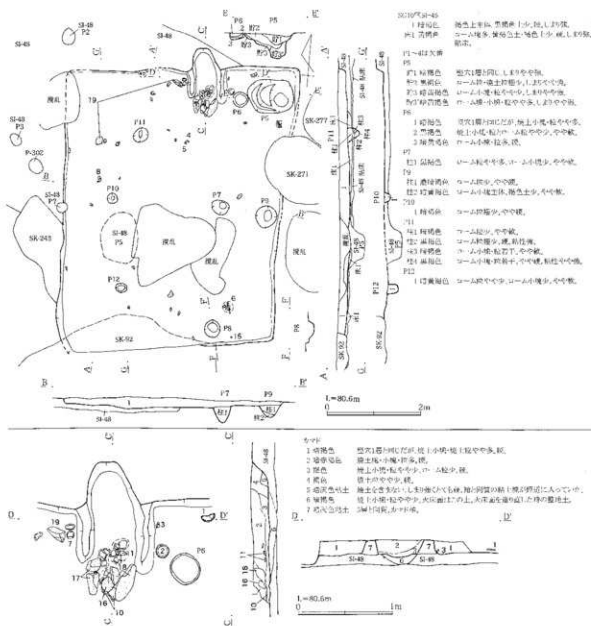
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 質土・組成 (または素材)	出土状態 保存状態 位置
1 土師器 杯	口 径 16.4 高 残 4.5	外面は体部ヘラケズリ後にヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ、土平に施らなヨコヘラミガキ。内面は底部に多方向と体部に横位の密なヘラミガキ。内面に、硬質な流紋岩製の破片化した後に焼熟したものを含む。 [1]断面径: 53、72、カマド。北東 1-2 層	7.5YR6/4 に近い黄 やや緑褐色 白・灰色粗～細粒 多、黒・透明細粒少 やや破質	中央北東床 1.9cm とカマ ド内床直上～床下 6cm が 接合。北東にも破片あり 口 1/4 層 注: 注は 1/3 層
2 土師器 杯	長 残 3.6 最大 径 14.2	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラナズリ。内面はヨコナデ。外面上下 と内面に施すヨコナデ。	5YR6/4 に近い赤褐 やや粗粒 黒・透明粗～細粒 多 やや破質	南東部掘削口 P12(調査 時の P7)内 体 1/6 層 P7
3 土師器 杯	口 径 13.6 高 残 4.3	外面は口縁部ヨコナデ。体部に横位と底部に多方向(7)のヘラケズリ。内面は 上下部ヨコナデと下部ナメヘラミガキの後に、ヘラ先で縦位の黒色土 1 本付 け。疎らな放射状ヘラミガキを意図したのかもしれない。残存する外面 全体を部注し上す。	10YR8/3 黄褐色 やや緑褐色 白・黒・赤細粒少 やや破質 透明細粒少 やや破質	南西床 1/6 cm 口 1/6 層 21
4 土師器 大形壺	口 径 14.0 高 残 5.5	内内面ともに口縁部ナデ後、口～頸部ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗粒 赤粗～細粒多、黒 粗粒と白・透明粗～細粒少 やや破質	中央東部床土 3cm 口 1/3 層 12
5 土師器 鉢	高 残 1.7 底 5.8	外底面は中央にある径約 2cm の凹部がナデ。外周部がナデと円筒方向ヘラナ ズリ。外面は体部タテヘラナズリと体部下端ヨコヘラナズリ。内面底部中央はや や密な多方向ヘラミガキ。	5YR6/8 橙 やや緑褐色 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや破質	中央東土 4cm で正位 底 3/4 層 35
6 土師器 鉢	高 残 2.0 底 5.8	外底面は軽くナデ。外面は体部に斜位と体部下端に横位のナデ。内面底部は 多方向ヘラナズリ。	5YR6/8 橙 やや緑褐色 赤粗～細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや破質	カマド東側直上で正位 底全層 1
7 土師器 鉢	高 残 2.7 底 5.7	外底面は 1 方向ナデ。外面体部はヨコヘラナズリ。内面は底部に 1 方向と体部 に横位のヘラナズリ。	7.5YR7/6 橙 やや粗粒 赤粗多、白・ 黒・半透明粗～細粒少 やや破質	中央東土 11cm で正位 底 7/12 層 36
8 土師器 小形土 器土	口 10.5 高 5.0 底 6.1	外底面はナデ後、丸棒を棒子状に垂ねた上に置いた可能性のある圧痕あり。 外面は体部に斜～横位のヘラナズリ。口縁部にヨコナデ。内面は横～斜位の ナデで、口縁部はむしろヨコナデも行う。	5YR6/8 橙 細粒 赤粗～細粒と白細粒と 透明細粒少 やや破質	中央東土 3cm で正位 口 1/6 層、底 5/12 層 37
9 土師器 小形土 器土	高 残 4.3 底 残 6.4	外底面は木炭層で葉の裏面圧痕を残す。外面体部は斜～横位ナデ。内面は多 方向のやや密なヘラナズリ。	5YR6/6 橙 やや粗粒 赤粗～細粒多、白 粗粒少 破質	北東 1-2 層 底 1/2 層 注東 1-2 層
10 土師器 専用口 孔	長 残 5.7 最大 径 5.7 底 残 2	口の先端部に近い部分の破片。孔は全長の 1/6 程度しか残っていないので、 正確には不明だが径約 2cm前後と推定される。残存する先端部は外面が黄色 元で灰色化し、それより基部側のやや多。溶融・浮出 した先端部は破損して残っていない。外面は長軸方向のヘラナズリ調整。孔は 丸棒状工具で成形・調整した可能性がある。縦向き産出物構成未知し。	10YR7/3 に近い黄褐色 やや粗粒 透明粗～細粒と白・ 赤・黒細粒と白細粒と白 粗粒少 やや破質 縦向き 1 文字と後、土計測	北東 1-2 層 6cm 層 口 5/12 層、底 1/3 層 10、33、54、71
11 土師器 裏	口 径 15.5 高 残 3.5	外面は口縁部と頸部に 1 層なヨコナデ。内面は縦部に横～斜位のナデおよび ナメヘラケズリ、内面ヨコナデ。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや粗粒 白粗～細粒多、 黒・透明粗～細粒やや多、白 粗と赤細粒少 破質	北西床土 2 ～ 10cm 口 1/4 層、底 1/3 層 46、68
12 土師器 彫製鉢	口 径 12.7 高 残 3.8	外面は体部に施すナデで結構な面をよく残し、口縁部ヨコナデ。内面はヨコ ヘラナズリ後にヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 粗粒 赤粗～細粒と白細粒多、 黒・透明細粒少 やや破質	中央東土 7cm 口 1/6 層 27
13 土師器 大形壺	口 径 17.5 高 残 10.5	外面は頸部ナデ後に口～頸部ヨコナデ。頸部にナメヘラミガキ。内面は頸 部に横位と頸部に横～斜位のヘラナズリ、口～頸部ヨコナデ。破片化した後に 破片が付着したものをあ。	5YR6/6 橙 やや粗粒 白・透明粗～細粒 やや多、赤・黒細粒と白 粗粒やや多 破質	北西床土 17cm と南部中 央床土 11cm と中央東土 6cm 層 口 5/12 層、底 1/3 層 10、33、54、71
14 土師器 高杯	高 残 8.3	外面はタテヘラミガキ。内面は上端部ヨコナデ後に中位以下を付け足してヨ コヘラナズリ。内外面に破片がやや多付着する。古墳中期の遺物と考えら	5YR6/6 橙 やや粗粒 赤粗と白・ 黒・透明粗～細粒と白・ 黒・透明粗～細粒と白 粗粒やや多 破質	P3 上層・床下 3cm 跡柱全層 6cm 層 口 5/12 層、底 1/3 層 10、33、54、71
15 土師器 壺蓋	高 残 6.7	口は 12 ～ 14cm 位の可能性を持つ。頸部に断面三角形のやや低い突起 2 条 あり。左回転(反時計回り)の状態で、7 面の工具で器面に向かって右から左 方向へ磨蝕波状文を施す。内面全体と外面口縁部の回転ヨコナデも左右 転の状態。	5Y5/1 灰 褐色 白濁と白粗～細粒少 破質	中央東土 10cm 口 1/9 層 28、北東 1-2 層
16 土師器 裏	高 残 4.9	外面は木口平行の溝を持つ印形板で縦位の平行印形。内面は無文。外面に薄 く黒色自然磨が付着する。SI 10 等が出土した破片と同一個体の可能性あり。	N4/ 灰 やや粗粒 白細粒多、白粗～ 細粒少 破質	南東部掘削で北西～南 東方向へ入るトの東半部 掘削 71 片 A-A' セタ裏 破質
17 石器 燧石 厚	長 12.3 幅 5.8 厚 3.6	両の左側縁が少しくびれる縁状の自然磨をそのまま利用。加工・使用・焼熟 痕は見られない。重量 376.3g。	N6/ 灰 やや粗粒で破質安山岩	北西床直上 49
18 石製 砥石 白玉	長 12.0mm 幅 13.4mm 厚 3.03mm 重 0.61	表面は断面に磨いた割断面のままで磨削していない。側面は横方向(帯 孔と同じ方向)に横～斜位の磨削。帯孔径 2.75mm、帯孔距離が 1.2mm あり、長い玉に穿孔したから磨削に当たって分別した可能性がある。	7.5Y5/1 オリーブ黄 褐色で破質粘板岩	SI-40 の北側から流入し た可能性あり SI-40 付近 990029

SG10区 SI-45 (第73・74図、写真図版90・198)

【位置】SG10区中央部の20-17グリッド。同じく古墳後期の遺構は、南にSI-47、西にSI-35、北にSI-110、東にSI-51がある。古墳中期のSI-48の上部を切り(SI-48→SI-45→SK-243)、中世のSK-92と時期不明のSK-243・271に切られる。西側と東側に古墳時代のSK-46と時期不明のSK-277が隣接する。

【規模と形状】不整長方形で南・北壁に直交する方向を主軸とすると、主軸方位はGN-6°-W。主軸方向で測った規模は東西5.34×南北6.00m(計測軸の方位を変えた場合は東西幅5.04m)。残存壁高は1cm(東壁)～19cm(西壁南部)。南壁はSK-92に破壊されるが、残存する貼床土で平面形を把握できた。貼床を除去しても主柱穴は確認できず、主柱穴のために用意した番号P1～P4を欠番とした。P5は貯蔵穴。

補助柱穴P6～P12は床面で確認した。深さはP6=13cm、P7=33cm、P8=10cm、P9=23cm、P10=12cm、P11=23cm、P12=26cm。P6はカマドの項を参照。P7はやや深い主柱穴と考える程ではない。各柱穴の位置は不規則で、覆土も様々である。P7は覆土の黒味がやや強いのでSI-45より新しい可能性も



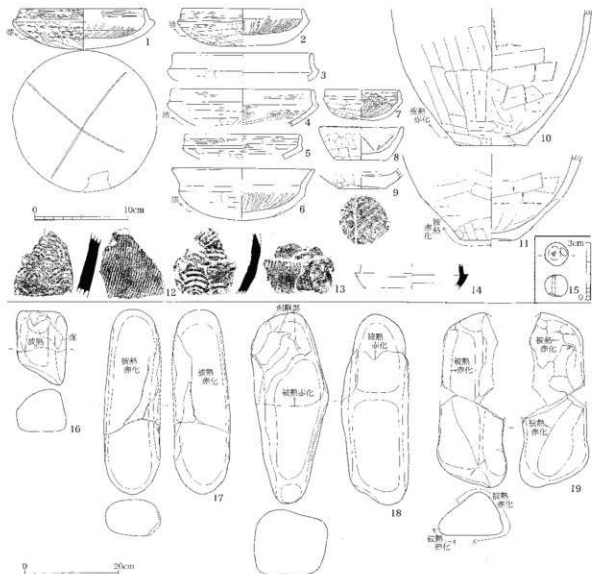
第73図 権現山遺跡 SG10区 SI-45 (1) 遺構

あるが、P7 上方の覆土断面 B-B' では確認できない。P8 は柱穴というより浅い窪みで、土層を記録しなかった (F-F')。P10 は下層の SI-48 覆土と区別しにくい (G-G')、SI-45 床面で確認したので SI-45 の柱穴と判断した。北東隅の貯蔵穴 P5 は東西 101 × 南北 70 × 深さ 50cm。入口施設は不明。壁溝や間仕切溝はない。

【カマド】北壁中央より少し東に寄る。両袖幅 83cm、煙道先端から袖先端まで 117cm。貼床上面を南北に長い溝状に窪ませた東西に暗灰色粘土の 7 層で袖を作る。カマド東側床にある深さ 13cm の P6 にはカマド周辺と同じ覆土や焼土小塊が流入する (E-E')。火床面下にある整地土のカマド 6 層も焼土を含むので、火床面を作り替えたことがわかる。6 層より下は SI-45 貼床として認識できず、先行する SI-48 覆土になる。流紋岩質の自然礫で焚口の両袖先端を補強する (17・18)。同質の棒状石材片が西袖西側と竪穴北西部にあり、接合した長さは 36.5cm で焚口天井材と推定できる (19)。16 は用途不明で、支脚かもしれない。

【覆土】単層で、テフラの層や粒はない。貯蔵穴 P5 は E-E' の貯 2 層にカマドから焼土粒が流入し、自然埋没状に堆積する。貼床はローム主体の床 1 層。カマド付近 (断面 A-A') や北西部では貼床の記録がない。下層の SI-48 覆土を挿って固めた土にロームをほとんど混ぜないので貼床として認識できないだろう。

【遺物出土状況】カマド東西の床付近に残存度の高い上向き土師器杯が目立つ (1・2・7)。燃焼部に土師器甕 (10・11) の破片が多い。3 もカマド東床面にあるが、下層の SI-48 と注記される破片と接合するので、



第74図 権現山遺跡 SG10 区 SI-45 (2) 遺物

SI-45 構築時の貼込に混入した遺物かもしれない。カマド構築材(16～19)の状況はカマドの項を参照。

〔出土遺物〕身模倣形が多く(1～5・7)、半球形杯もある。「×」の刻線を描く杯はSI-2にもある。土師器表は破片だけ出土した(10・11)。土玉は丸玉1点を示した(15)。洗浄中に誤って粉化した「模造品」1点の記録があり、土玉は計2点と考えられる。重複するSI-48などから古墳中期の遺物が多く混入している。14は古墳中期末の須恵器杯身片。図示以外の土師器は小破片ばかりで合計552片・3.856gの内訳は、杯251片・1.175g、高杯27片・432g、小形壺6片・26g、壺裏類267片・2.178g、小形土器1片・46g。図示以外の須恵器は高杯1片・9gと器種不明(杯?)1片・7g。16～19はカマドの項で説明した。

第41表 権現山遺跡 SG10 区 SI-45 出土遺物

番号 種類	大きさ (cm)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または表材)	出土状態 残存状態 目録
1 土師器 杯	口 13.2 高 4.3 最大 15.1 最大 9.6	外底面はほぼ1方向ヘラズリ後、外面体部ヨコヘラズリ後ヨコヘラミガキ。外面中央「×」の浅い噴成面彫刻あり。内外面口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部は放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面に漆仕仕上げ。外面体部10cm先の黒染あり。	7.5Y3/0/4 に近い黒 やや粗い 白・黒粒多、赤 黒粒少 やや硬質	カマド裏と脚縁の面で 正位の床土1cmが片 が接合 口3/6周 1、18
2 土師器 杯	口 12.6 高 3.9 最大 13.8 重 3.16	深く重い。外面は多方向ヘラズリ後、1方向ヘラズリ。外面体部ヨコナ デ後ヘラミガキ。内外面口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。 内面、外面部は多方向ヘラズリ後に放射状ヘラミガキ。外面中位 以上と内面全体漆仕仕上げ。	10Y3/5/3 に近い黄緑 やや粗い 黒粒・黒粒多、黒 黒と白黒・黒粒と灰色色粒多 5Y3/2	カマド裏床土3cmで正位 口1/2周、体・底残存 2、
3 土師器 杯	口 復 14.5 高 復 2.7 最大 復 16.0	外面体部にやや磨なナデの後、外面口縁部と内面をヨコナデ。破面も含めて 全体が黒色。漆仕仕上げは見られない。	5Y3/2 オリーブ黒 粗い、白粒多、灰色粗粒と 黒粒少 やや軟質	カマド東床直上。SI-48 器入1片が接合 口1/4周、体1/6周 47、SI-48 16
4 土師器 杯	口 復 15.1 高 復 4.1 最大 復 15.9	深く軽い。外面は体部ヨコヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ後にヨコヘラ ミガキ。内面、外面部は放射状および斜位のヘラミガキ。残存する内外面全体漆 仕仕上げ。	2.5Y7/4 浅黄 やや軟質 白・灰色粗粒多。 白・黒・透明黒粒少 やや硬質	北東1層の8片が中央 床土3cmの2片が接合 口1/12周、体1/4周 22、
5 土師器 杯	口 復 12.5 高 復 2.6	外面体部ヨコヘラズリ。内外面口縁部と内面体部にヨコナデ後ヨコヘラ ミガキ。漆仕仕上げは見られない。	7.5Y3/8 明褐色 やや粗質 白・透明黒粒多、 赤・黒粒少 硬質	北東床土5～6cmと南 北ベルト北平部1層 口1/3周 21、23、A北平1層
6 土師器 杯	口 復 15.0 高 5.5	外面体部はヘラズリと指定されるが磨削して不明。内外面口縁部ヨコナ デ後、内面口縁部を削いでいるかもしれないが磨削して不明。内面体部に放射 状ヘラミガキ。外面中位以上と内面に漆仕仕上げ。	7.5Y3/7/4 に近い黒 やや粗い 白・黒粒多、 黒粒・黒粒と赤黒粒多、 やや硬質	南東床直上4cm 口1/2周、体1/6周 39、東東丸、南東丸 やや硬質
7 土師器 小形土器	口 7.8 高 3.2 最大 8.4 重 69.9	外面は体部に傾位と底部に1方向のヘラズリ。体部下部にヨコヘラズリ。 口縁部はヨコナデ。外面はヨコナデ後、上平部に傾位と下平部に放射状ヘラ ミガキ。根付は漆仕仕上げ認められない。 [注]北東1層、北東1層カマド裏	10Y3/7/4 に近い黄緑 やや粗質 灰色・透明粗粒と 黒粒多、白粒・黒粒少 やや硬質	カマド西床土2cmで正位。 北東1層の2片が接合 口1/12周、体1/4周 注記は左欄
8 土師器 小形土器	口 復 8.8 高 3.5 最大 復 5.1	外底面はナデで平直仕上げ。外面体部エッジオエ。内面ヨコヘラナデ。	5Y6/0 緑 やや軟質 赤黒・黒粒と白・ 黒粒少 硬質	中央内床土10cm 口1/3周、底1/2周 30
9 土師器 鉢	口 高 2.1 底 5.2	外底面は木炭灰面より粗が向きを覚えて2回または3回付く。外面体部タテ ヘラナデ。内面底部多方向ヘラナデ。	7.5Y3/6 灰 やや粗質 黒粒・黒粒少 やや硬質	南西ベルト南側の東平部 口1/2周、南東Bトレ 底全周 南東Bトレ
10 土師器 表	口 復 14.3 高 復 7.0	外底面は1方向ヘラズリ。外面は製部を傾位。製下部を傾位のヘラズリ。 内面は底面に多方向と製部に傾位のヘラズリ後、製下部にヨコヘラズリ。 外面製部が焼熱劣化する。	10Y3/5/3 に近い黄緑 粗い 白・透明黒・黒粒多 軟質	製口床土1cm 製口1/4周、底1/3周 8、D中平1層
11 土師器 表	口 高 9.1 底 5.8～6.0 最大 復 18.8	外底面は多方向ヘラズリで、ごくわずかに凹状。外面傾位は上と斜位の ヘラズリ。内面は底面に多方向と製部に傾位のヘラズリ。残存する外面全体 がよく焼熱して赤色化している。	2.5Y3/6/0 明赤黒 粗い 白粒・黒粒多、白・灰 色粒と黒・透明黒粒少 軟質	カマド東床直上4～5 cmの10片に北東1層と 南東1片が接合 製1/2周、底1/12周 47、南東区、北東1層
12 須恵器 表	口 高 6.9	外面は傾位の平行半円。取手側の木目直線と斜行して開示した木目の水平 方向になる可能性もつが不明。内面は同心円状木目直線が内外の方向へ通 行する。ただし、取手の端は逆の可能性もある。破面は暗赤色。	10Y1/4 灰 やや粗質 白粒・黒粒多、白 硬少	北西平部、白 製口1片 北西1層
13 須恵器 表	口 高 6.5	外面は木目直線の溝を持つ叩き板で傾位の平行半円。内面は同心円状木目直 線。開示した木目直線。 [注]北東1層、北東1層、Bベルト1層	2.5Y7/4 浅黄 やや粗質 透明黒粒多、白・ 灰色粗粒少 白・黒粒少 やや軟質	製口部 注記は左欄
14 須恵器 杯	口 高 2.6	内外面造型時のロコロ回転方向は不明。蓋を被せて焼成した破片が受部の上 面に残る。古墳中期末の製物が個人。	5Y4/1 灰 粗質 白粒・黒粒少 硬質	南北ベルト北平部1層 体1/8周 A北平1層
15 土師器 瓦	径 11.35～ 12.34 瓦玉 高 11.13	表面は1方向ナデで破成面に穿孔し、孔徑は上面1.20～1.57mm、下面0.87 ～1.26mm。表面に炭素を吸着して黒色化する。漆仕仕上げは見られない。残存 重量1.5kg。	N2/ 白 粗質 白粒少 硬質	南東床直上6cm 破片 38
16 カマド 構築材?	長 15.1 幅 10.7 厚 8.8	加工のない自然石。開示部分の4側面と上面が焼熱劣化し、表面が強く割断 した箇所もある。また、燻も少し付着している。重量2.39kg。	N6/ 灰 粗質で硬質な流紋岩	製口床土4cm 製口径周 12
17 カマド 構築材	長 38.8 幅 11.7 厚 7.5	加工のない自然石。割断した面も含めて全面が焼熱劣化している。残存重量 5100g。	10B6/2 灰赤 粗質で硬質な流紋岩	製口床直上～床土2cmが 接合、西枕端に立てた 石1 一部欠 14、15
18 カマド 構築材	長 40.2 幅 15.4 厚 13.8	加工のない自然石。4側面とも約半分が焼熱劣化している。重量12.1kg。	N6/ 黒 粗質で硬質な流紋岩	製口床土3～4cmが接合 。東端先端に立てた石 が傾位した石の 一部欠 11、13
19 カマド 構築材	長 復 36.5 幅 復 14.1 厚 9.0	断面が不整な自然石。斜角で、縁状に長い加工のない自然石。片側縁を中心と して焼熱劣化し、中央で斜角に割れた破面も表面と同様に劣化している。残存重量 5900g。	N7/ 灰白 粗質で硬質な流紋岩	カマド西床土2cmと中央 西面床直上が接合 一部欠 16、43

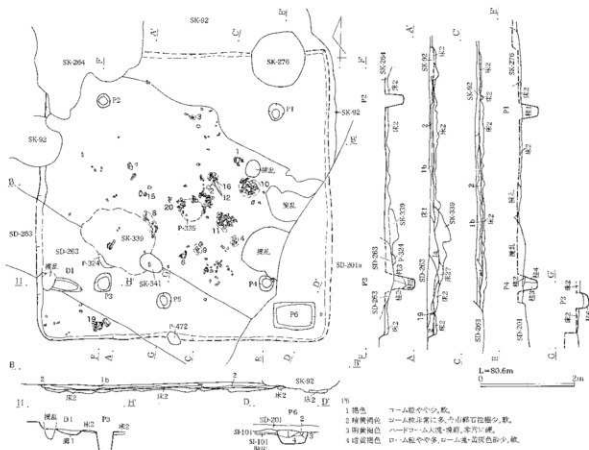
SG10 区 SI-47 (第 75・76 図、写真図版 90・91・173・198)

【位置】 SG10 区中央部の 18-17 および 19-17 グリッドにある。同じく古墳後期の遺構は、北に SI-45、西に SI-34・39、南に SI-34・40・東に SI-51 がある。

古墳中期の SI-101 (断面 D-D') と、古墳時代の SK-339・P-335 を切る。南辺中央で古墳時代の P-472 と重複し、SI-47 が P-472 を切る可能性がある。時期不明柱穴 P-324 とは新旧不明で、P-324 が SI-47 に伴う可能性もある。中世の SK-92 と時期不明の SK-264・276 に北部を切られ (SI-47 → SK-276 → SK-92 → SK-264)、近世の SD-201a と中～近世の SD-263 に南部を切られる (SI-101 → SI-47 → SD-263 → SD-201a)。時期不明の SK-341 に切られると見られるがやや不明確。旧名称 S-98 を SI-47 の P6 に改称した。

【規模と形状】 方形で主軸方位は GN-1°-W。東西 6.36 × 南北 6.08m、残存壁高は南壁西部で 22cm、西壁中央部で 8cm。北・東壁は残らないが、貼床除去後に確認した掘方によって壁位置を確定した。貼床はローム塊主体の床 1 層と、褐色土も多い床 2 層がある。下部にある古い土坑 SK-339 埋没土の上を覆うように床 1 層を貼る (断面 A-A')。主柱穴 4 本と貯蔵穴下部は地山ローム層下の灰黄色砂層中に掘り込む。

主柱穴 4 本は南北柱間 3.60m (東側) ～ 3.88m (西側)、東西柱間 3.47m (南側) ～ 3.68m (北側)。床からの深さは P1=41cm、P2=36cm、P3=63cm、P4=35cm で、南西の P3 が深い。P3 の柱 2 層は柱直径 18cm 前後。P2 覆土は記録不備のため不明だが、最下部に残っていた土質は柱 1 層に近い。入口施設と考えられる P5 は床から深さ 30cm。南東隅の貯蔵穴 P6 (調査時名称 S-98) は東西 90 × 南北 60 × 深さ



- SG10区SI-47
- 1a 緑褐色 ローム塊がやや多、ロームが白色からアツク、やや硬。
 - 1b 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 2 緑褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 3 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 4 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 5 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 6 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 7 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 8 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 9 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 10 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 11 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 12 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 13 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 14 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 15 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 16 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 17 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 18 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 19 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 20 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 21 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 22 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 23 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 24 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 25 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 26 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 27 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 28 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 29 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 30 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 31 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 32 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 33 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 34 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 35 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 36 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 37 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 38 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 39 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 40 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 41 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 42 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 43 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 44 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 45 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 46 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 47 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 48 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 49 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 50 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 51 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 52 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 53 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 54 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 55 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 56 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 57 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 58 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 59 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 60 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 61 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 62 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 63 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 64 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 65 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 66 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 67 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 68 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 69 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 70 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 71 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 72 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 73 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 74 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 75 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 76 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 77 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 78 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 79 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 80 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 81 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 82 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 83 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 84 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 85 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 86 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 87 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 88 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 89 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 90 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 91 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 92 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 93 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 94 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 95 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 96 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 97 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 98 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 99 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。
 - 100 赤褐色 ロームがやや多、ロームがやや硬、アツク。

第 75 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-47 (1) 遺構

35cm。壁溝はない。南西主柱P3の西側に1本ある間仕切溝D1は幅27×深さ16cm(断面H-H')。

【カマド】不明である。後期中葉の建物なので、東壁または北壁にあったカマドがSD-201やSK-92に破壊されたと想定できる。砥石(19)はカマド構築材を転用したものかもしれない。

【覆土】2層や、貯蔵穴P6内は自然埋没状堆積。テフラの可能性のある白色粒をの1a層と2層に含む。

【遺物出土状況】中央部に多く残る。竪穴の大半が10cmほどしか残らないので、どの遺物も床面に近い。

SK-92・264・276に破壊された北部は貼床しか残らないので遺物が不明。貯蔵穴P6内は遺物がない。

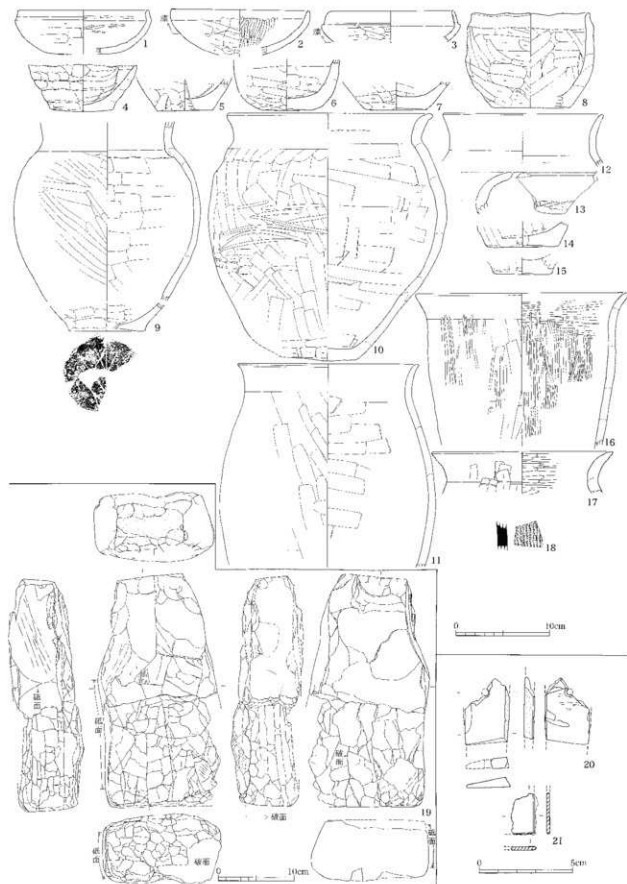
【出土遺物】遺物は多く、甕飯類主体で、杯・小形土器・鉢・高杯が少量。古墳後期後葉と考えられるが、内面をよく磨く深い杯(1・2)や橙色胎土の杯・鉢・甕が多く、甕がさど長胴でない点は後期中葉に近い。10は外面下に縄痕跡が僅かに残る。SG5区SI-29とSG10区SI-47・57・86や、宇都宮市成瀬寺遺跡第38号住居(篠原・杉浦他2000)・壬生町霞内西遺跡9号土坑(篠原2003)・足利市田島持舟遺跡629号住居(篠原・藤田2011,p.243)に縄正痕の土器甕がある。また、霞内西遺跡2号住居(前期)・那須烏山市北原遺跡SI-1000(安藤2008)・真岡市市ノ塚遺跡1区SI-201・355・685・952・954(藤田・片根2007・2008)などに籠目痕の甕があり、市ノ塚遺跡は甕・鉢も含む。9は金色雲母片が多い茨城県産の甕。雲母片を含む土器類はSG10区SI-12などにある。図示以外の土器類合計631片・4.597gの内訳は、杯226片・1.337g、高杯10片・134g、鉢18片・231g、甕飯類345片・2.053g、甕32片・842g。

18はSI-10他と同個体の可能性がある混入した古墳中期の須恵器甕小片。20は粘板岩製有孔刺片(退化した石製製造品)。粘板岩製製造品がSG5区SI-6やSG10区SI-59・64a・101他、滑石製有孔刺片はSG10区SK-621にある。19は外周4面中3面を平らに加工した軟質凝灰岩(カマド構築材?)で、長側面を砥石に転用する。21は板状鉄製品の隅部。被熱痕や加工痕がない径約3~9cmの円礫が10点ほどある。

第4表 権現山遺跡SG10区SI-47出土遺物

番号 種類	大きさ (mm)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復138 高 復47 最大 復144	外面は口縁部ヨコナデと体部ヨコヘラズリで、磨滅のためヘラミガキの有様は不明。内面はヨコナデ面にヨコヘラズリが、体部下半は磨滅している。口縁部の有無や方向が不明。現状で仕上げは見られない。[注記]154付添。74、Cトレ北、Dトレ東平	5YR6/8 橙 やや暗い、灰色胎土と赤、黒 粒・細粒多、白・透明細粒少 やや多 破片	中央部東土1 5cmと北東部トレンチ 口7/12周 注記は左欄
2 土師器 杯	口 復146 高 復47	内外面の口縁部ヨコナデ後、外面体部を横・斜位ヘラズリ。内面体部に放射状ヘラミガキ。外面上半と内面全体に仕上げ。	5YR7/6 橙 やや暗い、白・黒胎土多、透 明細粒少やや多 破片	中央部東土4-9cm 口1/4周 約、7/3
3 土師器 杯	口 復132 高 復32 最大 復146	外面は1層部ヨコナデ、体部ヨコヘラズリ。内面は口縁部ほとんど削滅しているが、おそく体部と同様にヨコナデでヘラミガキは行わない。残存する内外面に仕上げ。	7.5YR6/6 橙 鉄質 赤黒・細粒やや多、 黒・透明細粒少 破片	中央部東土1 1~4cm が接合 口1/36周、体1/6周 約、6/5
4 土師器 煎製杯	口 復115 高 復49 底 復66	外底面は縦い面でも方向にナデを行い、中央に径6×11mmの小さな凹みを持つ。外面体部は縦縞を現し、ユビオエと軽いナデ。内面は底面に多方向と体部に横位の強く磨いたヘラナデ。	2.5YR6/8 橙 やや暗黒 赤黒・細粒多、 白・黒・透明細粒少 やや破片	南東土1 2~4cm、南内 床土10cmの1片も接合 口1/4周、底4/5周 約、8/1、8/2
5 土師器 煎製杯	高 復33 底 復58	外底面は縦い面でも軽ナデ。外面体部は磨いた面でも粘土の地殻を多く残したまま。内面は横位の強いヘラナデ。	5YR6/8 橙 鉄質 白・黒・赤・透明細粒 少 破片	南東部遺構土上面 約、1/3周 南東上面
6 土師器 鉢	高 復5.4 底 復5.2	外底面は1~2方向のヘラナデでやや磨滅平ら面になる。外面体部ヨコヘラズリ。内面体部と底面はナデで、口縁部ヨコナデの下端付合が少し残存している。	10YR6/4 白・赤 やや暗黒 赤黒・細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや破片	中央部東土1 8cm 体1/3周、底全周 2/8
7 土師器 鉢	高 復3.0 底 復6.4	外周中央を1方向ナデ後、外周に薄く粘土を貼って1方向ヘラズリで中央凹みに仕上げ。外面体部ナデ後に体部下端ヨコヘラズリ。内面は底面ユビオエナデ、体部ヨコヘラズリ。	7.5YR7/3 紅い やや暗い、白・透明細粒と 黒胎土やや多、赤黒細粒少 破片	遺構土面 底1/3周 土面
8 土師器 鉢	口 12.4 高 10.1 底 復8.1 最大 13.6	外底面はおそく円形方向のヘラズリ。外面は口縁部ヨコナデ後に体部に斜位および横位のヘラズリ。内面は下部ヨコヘラズリ、胴上部ナメナデ。口縁部ヨコナデ。内面は焼成色(5YR4/1)。仕上げはしていない。[注記]112、13、30、80、82。上面、南内土上面、東平土上面、Cベルト南側面	5YR6/6 橙 やや暗い、赤黒・細粒多、赤 粒と白・透明細粒少 やや破片	中央部東土1 床土5cmの 12片に遺構土上の8片 が接合 口2/3周、底1/6周 約、7/5、東平土面
9 土師器 甕	高 復220 底 復8.1	外底面は縦い面でも中央部にカシラまたはトノノキの裏の裏面圧痕を残し、外周部ヘラズリ。外周部下端ナデ。胴部ナメナデ後に胴中位以下を短直ミガキ状のナメヘラズリ。内面胴部ヨコナデ。内面胴部はナメナデ面にヨコヘラズリ。被熱痕は不明。[注記]29、30、Cトレ南平、Dトレ西平、南中土上面、東平土上面	10YR5/2 灰黄 やや暗い、白・透明細粒と白 胎土多、全色目録一細粒や や多破片	中央部東土1 1~5cmの 2片と土1に南平部ト レンチの12片 体1/3周、底2/3周 約、7/5、東平土面
10 土師器 底	口 21.5 高 26.2 底 5.9 最大 29.0	厚く重い。外周部は縦い面・斜位ヘラズリで、中~下位は横位のヘラズリやヘラナデも見られる。底から高さ9cmの付合で横方向に縞(?)の圧痕がわずかにある。外底面は磨いた面でも方向にナデ。内面胴部ヨコヘラズリ。内外面に1層部ヨコナデ。被熱痕は見られない。	10YR7/6 黄褐色 暗い、白・黒・灰色胎土・細粒 多、赤黒粒と透明細粒少 破片	中央部東土1 7cm 口3/4周、胴一部位、 底2/3周 約、7/5、東平土面
11 土師器 甕	口 復192 高 復206	外底面は縦い面・斜位ヘラズリ後に口縁部ヨコナデ。内面胴部ヨコヘラズリ後に1層部ヨコナデ。外面口縁部が被熱灰化し、縦縞に被熱したものかもしれない。[注記]132、35、43~47、53、78~80、南東土上面、東平土上面、西平1層付合上面、80付合	10YR6/4 白・赤 やや暗い、白・透明細粒と 黒胎土多、灰色胎土と赤黒・細粒と黒 胎土やや多 やや破片	中央部東土1 5cmの接合 口1/12周、体1/3周 注記は左欄

第5章 権現山遺跡 SG10区



第76図 権現山遺跡 SG10区 SI-47(2) 遺物

12	土師器	口 残 16.8 高 残 5.1	内外面口縁部コナナ。胴部は破片が非常に少なく復原できないが、外面タテヘラナデ、内面ヨコヘラナデと思われる。赤色化はしていないが、焼熱して黒くなっていると考えられる。 1注記]32, 41, 43, 45, 46, 80付近、南東上面、南中上面、南南上面、東平上面	10YR7/3 に近い黄褐色や灰色、灰色相帯と赤相・黒相・緑相や多、白・黒相・緑相少 やや軟質	中央床土 4～10cmと南東部遺構土面口1/4程度、頂1/3周注記は左欄
13	土師器	口 復約20 高 残 4.4	内外面口縁部コナナ。胴部タテヘラナデ。内面は胴部がおそらくヨコヘラナデで、口縁部にコナナ。口縁が赤んでいると思われるので、正確な復原は不明。	7.5YR7/4 に近い橙や黄褐色、白・黒相・緑相と透明細粒や多 硬質	東平遺構土面口1/9程度、東平上面
14	土師器	高 残 2.7 底 残 7.6	外底面は1方角ヘラナデでほぼ平底状。外面胴部タテヘラナデ(またはヘラナデ)。内面は多方向ヘラナデ。	10YR7/3 に近い黄褐色、黒・灰色相・緑相少、白・黒相少 硬質	西平部1層付近土面口1/4程度、頂1/3周注記は左欄
15	土師器 密付底	高 残 1.8 底 残 6.1	外底面は1方角ヘラナデ。外面胴部は縦位のヘラナデまたはヘラナデと調整の下部部分が見える。底面の内面はヘラナデまたはナデ。	10YR3/1 黒相相帯、白相・緑相少、灰色帯と赤・黒・透明細粒や多 やや軟質	底1/2程度 15/2
16	土師器	口 残 22.4 高 残 16.4	外面胴部は中位タテヘラナデと上位タテヘラナデ後にタテヘラミガキ。内面は中位ヨコヘラナデ。内面は胴部コナナ。外底面は不明な復原である。 [注記]35, 40, 43, 46, 51, 52, 91, 114, 上面、東平上面、南中上面、北東上面、Cトシ南平	10YR6/4 に近い黄褐色や黄褐色、透明細粒や多、赤相帯と白・赤相・緑相と黒相少 軟質	中央床土 5～12cm 口1/12程度、頂1/2周注記は左欄
17	土師器	口 残 19.0 高 残 4.4	外面は口縁部コナナ後に胴部タテヘラナデ(胴部は部分的にタテヘラナデも行う)。内面は胴部コナナメナデ。口縁部コナナ残ヨコヘラミガキ。	2.5YR6/8 橙や黄褐色、透明細粒や多、白・灰色相帯少 硬質	東平部遺構土面口1/12程度、頂1/6程度、東平上面
18	土師器	高 残 3.0	外面は縦位の平形皿。内面はナデ消して無文。外面に灰黄色の自然釉がぶよぶよ。SI-10等で出土した破片と同一個体の可能性あり。古墳中期の遺物か疑入。	7.5Y4/1 灰緑褐色、白相少少 硬質	北東部トレンチン面 Dトシ東平
19	石部 砥石	長 30.4 幅 13.6 厚 7.4 重 残 3300	片側の長側面の約半分を砥面に使用して非常に平滑になり、残りの約半分は低い磨面がある。反対側の長側面と、小口のうち長いほうの1面はむしろ平中に加工するが表面は不明。小口のうちの短いほうの面は自然面と思われる。磨面の汚れが工具面に付着する。表面の広い平面面は2面とも磨きで仕上げられていると思われる。一部に凹痕はあるが側面のように平滑には仕上げない。中央で2つに折れた後にその1方が折れて破片化し、その大半は砥石の磨面に沿って縦に割れる。被熱して破片化したのかもしれないが、被熱痕は不明である。カマド製の構造物材を砥石に転用した可能性がある。	7.5YR6/8 橙褐色で軟質な緑色灰褐色	南内溝床土1cm 表面の約1/4は破面 98、上面
20	石製焼造品 有孔陶片	長 残 34.2cm 幅 23.3cm 厚 5.6cm 重 残 5.4	節理に沿って破片に割れた板石材に右側の面から穿孔し、初孔径3.25cm、終孔径3.10cm。右側の面にはわずかに磨面があるが、ほとんど磨削はしていない。両側の表面は自然面を残し、右側の面の境界部分を面取りするように工具で削っている。	7.5Y4/1 灰緑褐色で軟質な粘板質	中央床土 6cm 南溝底穴 30
21	鉄製品 板状品	長 残 2.2 幅 残 1.3 厚 0.2	平型な板状鉄製品の断片。残存長が短く沿って正確な厚みではおぼろげな部分が見えるが、その部分の鉄を丁寧に除去した結果、孔ではおぼろげな部分が見られる。右側面は不明でない。		鋼部残

SG10区 SI-48 (第77図、写真図版91)

【位置】SG10区中央部の20-17グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、西にSI-49、北にSI-50・106、東にSI-104がある。東部を古墳後期のSI-45に、南部を時期不明のSK-243に切り入れ、SI-48→SI-45→SK-243の順になる。南西部では古墳時代のP-303を切り、時期不明のP-302に切られる。

【規模と形状】方形で主軸方向はGN-26°-E。東西5.12×南北5.08m。残存壁高は北側で最大28cm、東部はSI-45に上部を切られ5～10cmだけ残る。主柱穴4本は南北柱間2.40m、東西柱間は南側が狭く2.55m、北側は2.74mで、南西主柱穴P3が少し東に寄る。底面形から柱径は10～12cm程と推定される。床からの深さはP1=43cm、P2・P3=50cm、P4=47cm。中央部西寄りにある補助柱穴P6は深さ36cm。入口施設と考えられるP7は床から深さ14cmで、床面覆土と同じ2層で埋まる。中央のP8は径18～20×深さ32cmで、貼床除去後に確認したので埋め戻した古期柱穴と見られ、SI-48より古いと考える余地も残る。

土手状の盛土が入口部を半環状に囲む範囲は東西158×南北107cmで、盛土の高さは床面から2～5cm、盛土帯の幅は28～43cm。貯蔵穴P5は南東隅にあり、東西80×南北101×深さ31cm。壁溝D1は西部以外に見られ、幅10～24cm×深さ2～6cm。間仕切溝はない。貼床はローム主体の土。北西隅部付近ではほとんど貼床がなく、地山の礫混じりローム層中にある礫が建物床面に顔を出している。

【炉】北部にあり、北側は径38×深さ5cm、南側は径46×深さ5cmで、長さ86cmの瓢箪形なので2時期の炉が重複したのかもしれないが、土層断面は同質の層で埋まり重複痕はなかった(断面F-F')。北側の炉は底面に接して細長い自然礫(5)があり、被熱痕は確認できないが、約半分の範囲に煤が明瞭に付着する。この瓢箪形の炉とは別に、その南東側で床面直上に径30～40cmの範囲で焼土がまとまっていた。

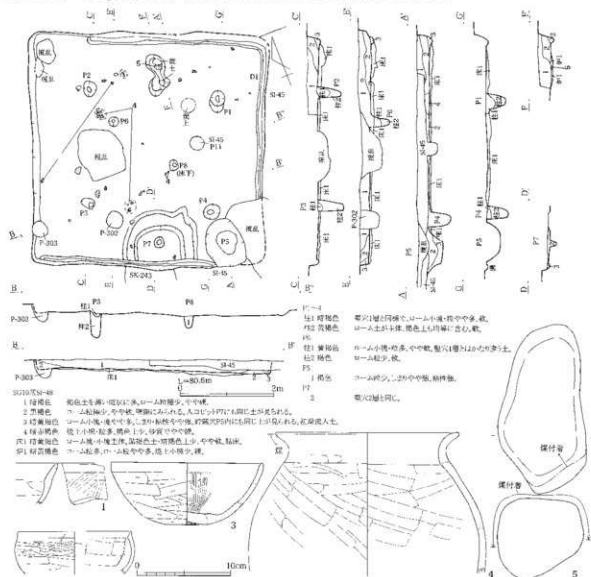
【覆土】テフラの層や粒はない。壁際と貯蔵穴P5内の初期流入土3層の状況から自然埋没と思われる。

【遺物出土状況】全域で少量出土した。床付近にある裏(4)は炉使用痕が明瞭で、SI-48に伴うであろう。

【出土遺物】1が口が外に開き気味で橙色胎土の中期後葉の杯。3は深身で内面をより磨く凹底の杯で、本遺跡北部のSG1区SI-8や4区SI-6・8、中島塚塚6号墳に例がある。4は外面に煤が多く、炉で使った痕

第5章 権現山遺跡 SG10 区

が明確。5 は好で使った煤付着跡。遺物は少なく土師器は甕が主体で、杯もやや多く、高杯は少ない。図示以外の土師器合計 191 片・1,293g の内訳は、杯 63 片・211g、高杯 9 片・101g、小形壺 6 片・45g、壺甕類 114 片・936g。縄文早期～前期頃かもしれない大形の割片が混入していた。



第 77 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-48 遺構・遺物

第 43 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-48 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ cm・g	特 徴	色調 胎土・胎色 (または素材)	出土状態 現状状態 注記
1 土師器 杯	口 径 12.0 高 径 4.4	薄く軽い単体製品。外面は口縁部ヨコナデ。体部下半に少し光沢のあるヨコヘラミガキ。内面は体部ヨコヘラミガキ。内面は体部ヨコヘラミガキ後口縁部ヨコナデ。	5YR6/8 糖 鉄質 赤・灰色粗～細粒と白 細粒少 硬質	北西 1 層 口 1/4 層 北西 1 層
2 土師器 杯	口 径 11～13 高 径 4.4	面の境は内面が明瞭で、外面は不明瞭。外面はおそろなナメハツの後に軽くナデを滑して口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/4 に近い細 粒質 赤・透明粗～細粒と黒 細粒少 中硬質	遺構跡面出土 口 1/12 層、頸 1/8 層 北西上面
3 土師器 杯	口 径 15.9 高 6.5 底 4.1	外底面は上げ底状で、外周を円筒方向に附った後に多方向ヘラミガキ。外周部ヨコヘラミガキ後に口縁部ヨコナデ。内面はヨコヘラミガキまたはヨコナデの後に全体を放射状ヘラミガキ。	5YR4/6 赤陶 粗い・白粒多、白・灰色細 と黒細粒少 やや軟質	北西味上 11cm と北部味 上 2cm、上面の 4 片と 接合 口 1/12 層、底全層 2、9、北中上、北西上面
4 土師器 甕	口 径 19.4 高 径 14.8 最大 径 25.1	内外面ともに胴部ナメヘラミガキ。口～頸部ヨコナデ。外面口縁部より下部の残存する全体に煤が多く付着する。 注記 14、5、6、13、北西上面、E ベルト北境見	10YR6/6 明黄陶 やや粗い 白・黒粗～細粒多、 赤・透明粗～細粒やや少 やや軟質	中央床直上～床土 2cm/接 合 口 1/4 層、頸 5/12 層 注記は左欄
5 礎	長 17.7 幅 9.5 厚 8.8	加工のない自然礎。縦割にした時のほぼ半分面に煤が明瞭に付着し、反対側には見られない。被熱水化痕は見られない。重量 1918.9g。	10Y6/1 灰 細質で少し軟質気味の安山岩	岩直面上 完形 25

SG10区 SI-49 (第78図、写真図版91・198)

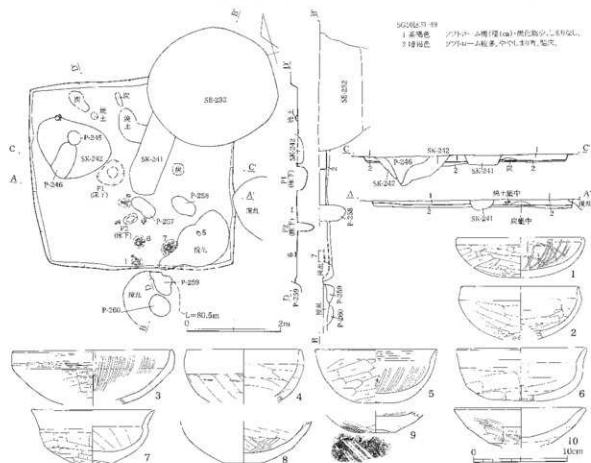
【位置】SG10区中央部の20-17グリッドにある。同じく古墳中期の遺構としては、西にSI-36、東にSI-48、北にSI-50がある。中世の井戸SE-232、時期不明の土坑SK-241・242と時期不明の柱穴状土坑P-245・246・258に切られる。また、時期不明のP-257にも切られる可能性がある。重複関係からみてSI-49→SK-242→P-245・246、およびSI-49→SK-241・SE-232の順になる(SK-241とSE-232との新旧は不明)。P-257とSI-49との重複関係が不明だが、P-257と258はよく似た二連状の穴なので、P-257もSI-49を切ると考えられる(SI-49→P-257・258)。

【規模と形状】方形の建物跡で軸方位はGN-14°-E。東西4.32×南北4.00mで東・北側が少し深く残り、もっとも高く残る東壁で残存壁高17cm、西南部は残りが悪く壁高4～6cm。主柱穴は認められない。貼床除去後に確認した柱穴が2本あり、床面から浅いので主柱穴とは考えにくい。短径×長径×床面からの深さは、P1が53×59×20cm、P2は19×31×16cm、2本の柱間は1.10m。入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝はない。南東隅部にある擾乱は床面から43cmの深さなので、これで貯蔵穴が消滅したという想定もできる。貼床はソフトローム質で、厚さ2～4cmほどの部分が多く、中央部で最大厚8cm。

【火処】確認されなかった。薪があったと想定した場合、後世の土坑などに破壊された可能性がある。中央部から北部にかけて、床から5～6cmの厚さで炭や焼土が分布する箇所がある。

【覆土】貼床以外は単層で、テフラの層や粒などは認められない。覆土中に焼土が多く、床面レベルに炭化物が多く見られる(断面図A-A'とC-C')。

【遺物出土状況】竪穴の残りが浅いので、出土した遺物はどれも床面に近いものである。南東部にやや多い。北西部を切る時期不明のSK-242や、南東部擾乱に流入した土師器もSI-49の遺物だったことが推定できる。



第78図 権現山遺跡SG10区 SI-49 遺構・遺物

【出土遺物】遺物は少なく、杯が主体で甕甕類も少しあり、高杯はほとんどない。図化したものを以外は小破片ばかりである。杯破片は平底が多いが、丸底も一定量あるので中期後葉と考えられる。1～4は初期の模倣杯。5・6・7は外桶口縁で、8・9とともに中期後葉から後期初めに見られる凹底状の杯である（安藤2001）。9は研磨具に転用している。10は杯部が脚部から割れ、接合法がよくわかる。図示以外の土師器合計136片・1169gの内訳は、杯59片・318g、甕甕類77片・851g。

第44表 権現山遺跡 SG10 区 SI-49 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ mm・cm	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.4 高 4.2	外面は体部上段ナデ後。底部に1～2方向と体部に横位のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部にヘラナデと口縁部ヨコナデ後。斜位および放射状のヘラミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐色 やや粗い 黒・透明細～粗粒 やや多。白・赤細粒少 やや破損	南端床土4cmの5片と 床土上の1片 口1/4直。底辺近全周 11。腹見西。底見
2 土師器 杯	口 復 12.4 高 残 5.6 最大 復 13.0	外面は底部ヘラケズリ。体部は横位のヘラケズリまたはヘラナデ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/6 暗 粗い。白・黒粗粒多。白・灰 色塵少 やや破損	南端見。南面床土4cm に1片 口1/6直。体1/4直 2。腹見西
3 土師器 杯	口 復 16.7 高 残 5.7 最大 復 17.2	外面は口縁部ヨコナデと体部ヨコヘラケズリ後。口へ体部上段をヨコヘラミガキ。内面は体部ヘラナデと口縁部ヨコナデ後。放射状ヘラミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐色 細密。白塵と白・灰色粗粒 やや多。黒・透明細粒少 やや破損	1層と西面腹見 口1/5直 1層。腹見西
4 土師器 杯	口 復 11.9 高 残 5.7	半球状で深身。外面体部はナメヘラケズリまたはヘラナデで、磨耗しているの不明瞭。内面体部はナメナデ。内外面口縁部ヨコナデ。断面に記入した最も下層の接合法ラインよりも下では底白色の粘土を使うので、それより上層とは異なっている。	2.5YR7/8 暗 やや粗密 赤・灰色粗粒と透 明細粒少 やや破損	1層と西面腹見 口1/5直 1層。腹見西
5 土師器 杯	口 復 12.8 高 5.7 底 3.5	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。外面口縁部ヨコナデ後に体部ナメヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後に放射状ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。	7.5YR6/6 暗 やや粗密 黒・透明細粒やや 多。白・赤粗～細粒少 やや破損	南面床土4cmの2片と 腹見や1層出土の7片 口1/4直。底辺3/4直 2。1層。1層見西
6 土師器 杯	口 復 13.7 高 5.5 底 5.2	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状にする。外面体部は下平ヨコヘラナデ。上平ヨコヘラナデまたはナデ。口縁部ヨコナデ。内面は底部が方向不明のツグ(内。体部ヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ。外底面に7mm程度の凹あり。	5YR6/8 暗 やや粗い 赤粗～粗粒多。白・ 黒・透明細粒少 やや破損	南面床土1cm 口1/2直。面全周。底 3/4直 3
7 土師器 杯	口 復 12.9 高 5.7 底 3.8	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。外面口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面体部ナメヘラナデ。口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/6 暗 やや粗密 赤粗粒と白・黒・ 透明細粒粗粒少 やや破損	南面床土1～4cm 口1/3直。面全周。底 全周 2。3。腹見西
8 土師器 杯	高 残 4.5 底 3.9 最大 復 13.9	外面は平底で、外面調整は磨滅しているの不明。内面は底部に多方向ヘラケズリ後、体部に1層の凹あり。	2.5YR6/6 暗 やや粗密 黒粗粒多。白・透 明細粒少 破損	1層と西面腹見の各4 片方接合 体3/4直。底全周 1層。腹見西
9 土師器 杯	高 残 2.2 底 4.2	外底面は凹底状で円筒方向のやや粗なナデ。外面体部ナメヘラナデ。内面底部に放射状ヘラミガキ。外面体部下端に斜位の深い平行刷状跡が焼成前後に生じ、転用研磨具の可能性が高い。	2.5YR5/8 明赤褐色 やや粗密 赤粗粒と白粗～粗 粒と黒粗粒少 やや破損	SE-232南端で床面上段 からセクシ床直上
10 土師器 高杯	口 復 13.9 高 残 3.9	厚手で深い。外面底部は杯部と脚部の接合面から割れている。接合面は厚さ6.4mmの円筒に割れた後、中央が低い平皿面になり1層のナデ。外面は口縁部ヨコナデとおそろく体部ヘラケズリの後にナメヘラミガキ。内面は磨滅しているため調整不明。	5YR7/6 暗 細密。赤粗～粗粒と黒・透明 細粒やや多。白粗粒少 破損	1層 口1/2直。杯底3/4 直 1層

SG10 区 SI-50 (第79～84図、写真図版92～94・174・198・199)

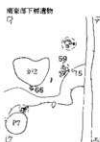
【位置】SG10区中央部の20-17および21-17グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、北にSI-60、南にSI-36・48・49、東にSI-106がある。北西部は重機による過去の採土工事で削平され、竪穴掘方の下部だけが残っていた。時期不明のSD-224に遺構覆土上部を切られている。

【規模と形状】方形の建物跡で主軸方位はGN-15°30' -W。東西8.60×南北8.72m、残存壁高は南で33～36cm、東で30～32cm、北辺中央部で21～24cm、西辺南部で16～24cm。主柱4本の柱間は南北5.28m×東西5.28mで、正確に配置された正方形。各辺中央に補助柱穴を1本ずつ配置する。ただし東辺中央柱穴P8は北東主柱穴P1の南2.76mの位置で、正確な東辺中央から少し南へ寄る。四隅の主柱穴は深く、床面からの深さはP1=54cm、P3=残存48cm(床面レベルから深さ64cm)、P5=56cm、P7=60cm。各辺中央の補助柱穴は浅く、P2=30cm、P4=36cm、P6=20cm、P8=32cm。北東主柱穴P1の柱径径22～24cmである。P1の柱裏込土はかなり堅い層で、東側に続く間仕切溝D1aの覆土と同質であった(断面図H-H')。P8の南東にある補助柱穴P9は貼床除去後に確認したもので、上面径39cm、床面レベルから深さ25cm。各柱穴の底面は地山ノードローム層中にある。

竪穴の床面は北東隅と南西隅でレベルが中央部よりも7～10cm低い。P1-P8-P7を結ぶラインの東側は床面に凹凸が目立つ。竪穴南部から南東部にかけては床面をローム質土で高く盛り上げ、南北194×東西



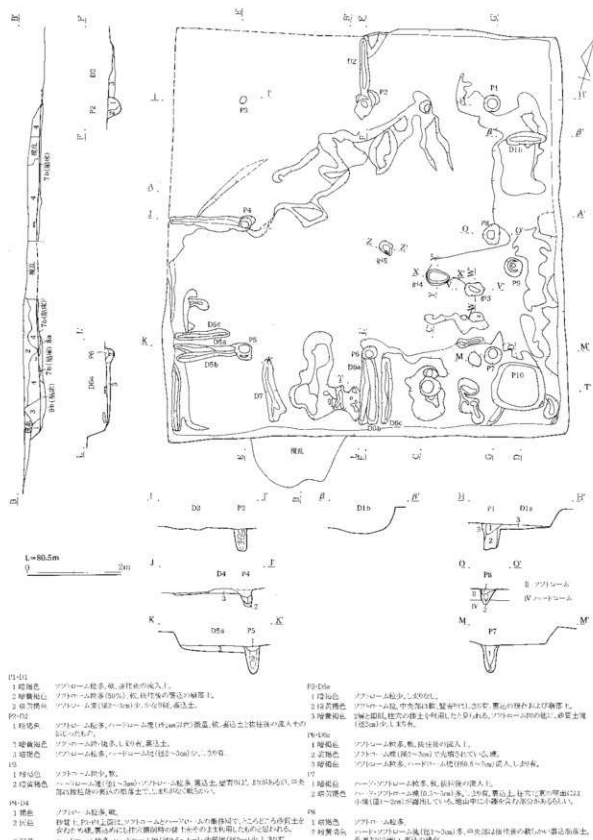
- P10
- 1 埋藏色 ソフトローム粘土、今内壁右の積層しよりなし。
 - 2 埋藏色 ソフトローム粘土(30%)、しよりなし、両面の赤黄土が、入土後欠けて。
 - 1 埋藏色 ソフトローム粘土(30%)、しよりなし、埋藏の赤黄土が、ソフトローム塊(厚1~5cm)少、両側の埋藏土と認められる。
 - 2



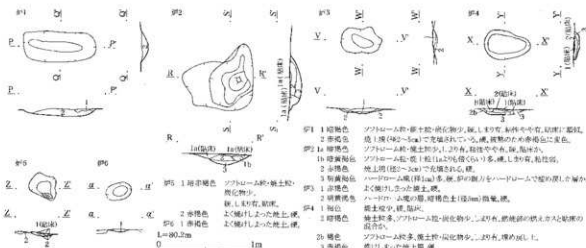
SG10 SI-50

- 1 埋藏色 ソフトローム粘土、概しよりなし。
- 2 埋藏色 ソフトローム粘土(白色粘土多、灰化中)今内壁右の積層しよりなし埋藏に弱。
- 3 埋藏色 ソフトローム粘土(白色粘土多、概)。
- 4 埋藏色 ソフトローム粘土(白色粘土多、概)。
- 5 埋藏色 ソフトローム粘土(白色粘土多、今内壁右の積層しよりなし、多数の上層を穿入土)。
- 6 埋藏色 ソフトローム粘土(白色粘土多、灰化中)今内壁右の積層しよりなし、多数の上層を穿入土。
- 7 埋藏色 ハードローム塊(厚4~5cm)長、小の塊、貯蔵穴の積層しよりなし。
- 7a 埋藏色 ハードローム塊(厚4~5cm)とハードロームソフトローム粘土多、しよりなし、貯蔵穴の積層しよりなし。
- 8a 埋藏色 ソフトローム塊(厚2~3cm)粘土多、しよりなし、貯蔵穴の積層しよりなし、貯蔵穴の積層しよりなし。
- 9a 埋藏色 ハードローム塊(厚2~3cm)ソフトローム粘土多、今内壁右の積層しよりなし、貯蔵穴の積層しよりなし。
- ハードローム塊(厚2~3cm)ソフトローム粘土多、しよりなし、貯蔵穴の積層しよりなし、貯蔵穴の積層しよりなし。
- ハードローム塊(厚2~3cm)ソフトローム粘土多、しよりなし、貯蔵穴の積層しよりなし、貯蔵穴の積層しよりなし。
- 10 埋藏色 ソフトローム粘土、しよりなし、概中層、右下にある、小(埋藏)切取P10-P10-D6の積層し。

第79図 椎根山遺跡 SG10区 SI-50(1)遺構



第 80 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-50 (2) 遺構



第81図 梅現山遺跡SG10区SI-50(3)遺構

361cmの範囲が他の床面より1~2cmほど高い。この部分に南東主柱穴P7と貯蔵穴がある。貯蔵穴P10は東西130×南北103×深さ36cmで、覆土下層はソフトロームの割合が多いので周堤が崩れて流入した層とも見られる(断面図D-D')。入口施設と考えられる方形の高まりが貯蔵穴の西側にあり、東西1.90×南北1.36~1.54m、床面からの高さ3~5cm。この高まりの中央は94×122cmの範囲が12~16cm窪んで、その北部は深さ30cmの柱穴状になる。壁溝は全周せず、貼床を除去した下部で西壁の南部が壁溝状に少しだけ窪むことが確認され、床面からの深さは3~7cm。

間仕切溝は東にD1(掘り直しを含めると2本)、北にD2、西にD3・D4・D5(D5の掘り直しを含めると5本)、南にD6・D7(D6の掘り直しを含めると4本)がある。D2~D4とD1a・D5a・D6aは床面で確認した最終期の溝で、D1b・D5b・D5c・D6b・D6c・D7は貼床除去後に確認した旧期の間仕切り溝である。深さはD1a=4~11cm、D1b=18~20cm、D2=11~15cm、D3は残存4cm(採土工事で床が削平)、D4=4~8cm、D5a=10~13cm、D5b=13~16cm、D5c=11~14cm、D6a=7~10cm、D6b=12~13cm、D6c=6~13cm、D7=12~15cm。北東主柱穴P1の柱裏込土と間仕切溝D1aの覆土が同質だといふ所見(断面図H-H')を尊重すると、最後に柱を立てた時には間仕切溝D1aも埋め戻したことになる。D4・D5a・D6aの埋土中に含まれる砂質土塊やハードローム塊は、柱穴を掘った時に掘削した地山土に由来すると考えられる(断面図JJ'-LL')。

貼床はローム質で、ソフトロームが多い8層の上にハードロームが多い7層が載っている理由は、柱穴や貯蔵穴を掘削する過程で出た土を盛土に利用したためと考えられた。炉1の東側で竪穴東壁部に粘土質の土が貼られていた。

【炉】南半部を中心として6箇所の炉があり、旧期(炉3・4・5)→新期(炉1・2)→最新期(炉6)の変遷が考えられる。貼床除去中に確認した炉3・4・5と、貼床除去前に確認した炉1・2・6があり、炉1・2も焼土層の上を薄いソフトロームが覆っていた。炉1は東西に長く78×35×深さ8cmの不整長楕円形で、炉2は東西74×南北70×深さ7cmの不整形。炉1・炉2ともに炉内中央部によく焼けた土があって、その上を薄く覆うソフトローム質土は貼床とよく似たしまりのある土であった。炉2と炉3の最下層は炉掘方の底部を埋め戻した土である。炉3はかなり浅い不整形円形で東西44×南北27×深さ4cm。炉4は深い不整形円形で48×31×深さ6cm、炉5は浅い不整形で27×30×深さ4cm。炉4・5の覆土上部は埋め戻した貼床土である。炉6は27×18×深さ2cm。

【覆土】自然埋没と思われる、1層以外にはテフラと見られる白色粒子を多く含む。東側から建物内に流入した5・6層の中に遺物が多い。貯蔵穴も自然埋没状である(断面図D-D')。

【遺物出土状況】東壁寄りの5・6層中に遺物が多く、北部中央にも多い。貯蔵穴内よりも、その北側にま

第5章 権現山遺跡 SG10 区

とまる。貯蔵穴周辺には壺甕類が多く、北東部には杯・高杯類が多い傾向がある。二重甕(68)は1片が床面で、もう1片は貼床除去中に床下で出土した。

【出土遺物】遺物が非常に多い。破片量は土師器壺甕類が最も多い。個体数は杯・高杯・小形壺のほうが多いと思われるが、攪乱や削平で破片を失って接合・復元できないものも多い。杯は口が広い内斜口縁杯が主体で、半球状杯もあり、図化品以外も含めた37個体の底部形状は凹底21・平底10・丸底6である。稲穂痕のある土師器(15)は、本遺跡南部ではSG2区SK-103・流路2・遺構外A区、SG15区流路2(TX16)、SG10区SI-30・50・53・55・64a・66・74・78・82・89a・113a・114とSD-43・304b・527とSK-46、北部ではSG1区SI-5などにある。また、SG10区SI-65・110の杯・甕に植物種子圧痕がある。19は内外面を赤彩する。蓋紐じわ(?)を持つ土器は21の他にSG10区SD-41・42(小破片)や遺跡北部のSG1区SI-1や4区SI-27、北方の砂田姥沼遺跡1区SI-6に有孔鉢があり、砂田遺跡25区SI-25に有孔杯がある(『東谷・中島地区遺跡群』10・11・15)。また、野木町清六三遺跡SI-120(上原他1998)と真岡市市ノ塚遺跡1区SI-1211・1230(藤田・片根2008)にも有孔鉢がある。壬生町霞内西遺跡2号住居跡の有孔鉢には籠の痕跡があり、蓋の材質を考えさせる(篠原2003)。高杯は小形で細い柱状脚が主体で、杯底部破片で数えると図化品以外を含め22個体程ある。23は中実状の脚上部、36は小さな杯体部のヨコナデ、37は脚上端の粘土塊充填が特徴的である。小形壺は中形品と小形品がある。43のように白色針状物質(骨針)を含む搬入品の土師器はSG10区SI-23などにある。44・46は厚い底部の内面調整が不十分で凹凸や亀裂がある。

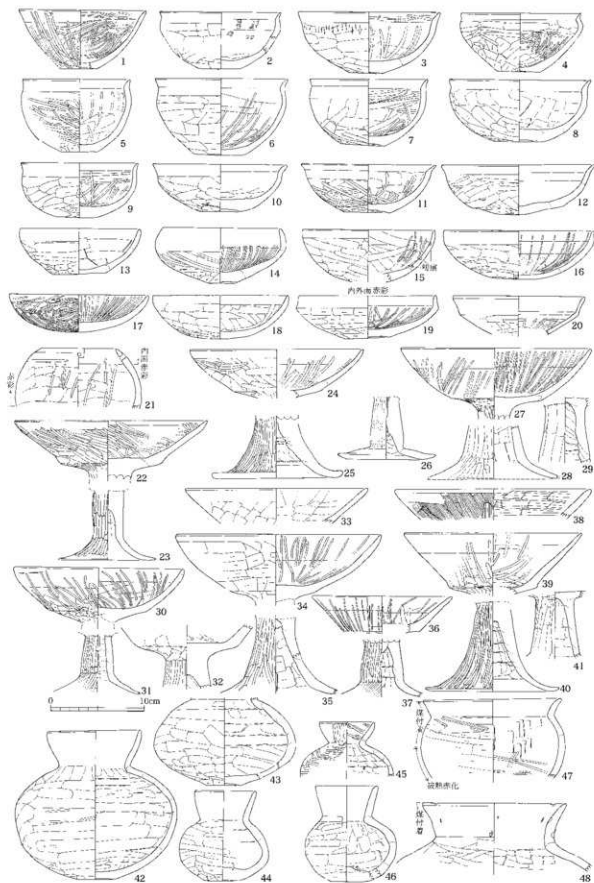
48のキズは小動物が噛んだ痕かもしれない。49はやや長胴の甕で、被熱痕がない。54は外面の煤と被熱痕が偏っている。50・54のような凸面底の甕はSG10区SI-16などにある。52は使用痕跡が明瞭な小形壺。受口状口縁の壺は、60・65以外に別個体の口縁部小片が1点ある。受口状口縁の壺はSG10区SI-19aなどにある。60は外面をよく磨く。貼付口縁の壺(66)はSG5区SI-100などに例がある。図示以外の土師器合計1,816片・18,336gの内訳は、杯585片・3,815g、高杯371片・4,251g、鉢1片・26g、小形壺57片・819g、壺甕類802片・9,425g。73は土師器甕の破片を転用した研磨具。

須志器二重甕(68)は、透窓が波状文を切る点で静岡県山ノ花遺跡・長野県金嶺山古墳例に似る(浜松市博物館1998,p.78;木下1992)。SG10区SI-64a、時期不明の土坑SG10区SK-254、近世の溝SD-201aにある二重甕の破片と同一個体の可能性も持つ。須志器甕胴部小片が1片あり(67)、SI-10などで出土している甕と同一個体の可能性がある。

含鉄の鉄滓(74)は、『東谷・中島地区遺跡群』10で権現山遺跡の鍛冶関連遺物全体を報告後に確認したため、同書pp.490-498の鍛冶関連遺物集成図に掲載されていない。編物石はなく、径10cm未満の厚手で三角・四角形状の自然礫が見られた。縄文早・前期と弥生中期の土器片(『東谷・中島地区遺跡群』10)第36～38図64・180・181・184、第42図60)や平安時代須志器(69)も少量混入していた。

第45表 権現山遺跡 SG10 区 SI-50 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ 内径・径・高	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 現状(状態) 注記
1 土師器 杯	口 径 13.4 高 6.2 底 径 3.8	外底面はナデで凹底状。外面は体部上位ナデ後に中位以下ナメヘラケズコと口縁部ヨコナデ。全体に縦位(一部は横位)のヘラミガキ。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ後、上下に横位と下下に縦位のヘラミガキ。	5YR/4/6 赤黒 やや硬質 白・透明微粒多。 白濁粒少。白微塵多 やや硬質	東西ベルト東平4層と 北東1期 口116周、底5/12周 A大東平4層、北東1期
2 土師器 杯	口 径 10.9 高 賢 5.4 底 径 4.3	外底面は多方向ヘラナデで平底状。外面体部はヨコヘラナデで少し光沢あり。内面は下半部ヘラナデ、体部上半部ヨコヘラ後ヨコナデ、口縁部ヨコナデ。 注記1159、304、330、5・6層北東区、北東1期、北東区2期	2.5YR/5/8 明赤黒 細砂 白・赤相・細粒と黒微塵 少 やや硬質	北東床土15～32mで 組合 口1/3周、底3/4周 注記は左欄
3 土師器 杯	口 径 14.8 高 6.5 底 径 3.5 最大 3.8 重 269.2	外底面はおそらくヘラケズリで凹底状にした後ナデ。外面体部は上位ナデ、中位ヘラナデ、下位ヘラケズリ。内外面口縁部はヨコナデ後内面ヨコヘラミガキ。内面体部ヘラナデ後に縦ならタテヘラミガキ。	5YR/6/6 緑 やや硬質 赤黒一粗粒多。白・黒・透明明・細粒中やや やや硬質	南東岡床土6mで定位 定形 231
4 土師器 杯	口 径 12.6 高 6.2 底 径 4.4 最大 13.0 重 238.8	外底面は多方向ヘラケズリでわずかに凹底状に仕上げた後ナデ。外面は口縁部ヘラナデと体部上半部ナメヘラケズリの後に体部上半部ヘラミガキ。口縁部内面ヨコナデ。内面体部は下半部に縦位と上半部に横位のヘラナデ後、縦および横位のヘラミガキ。	7.5YR/7/8 黄砂 細砂 白・透明明粒中やや多。 赤相粒と白・黒微塵少 やや硬質	貯蔵穴上1.66mで正位 は定形 口11/12周、底全周 379



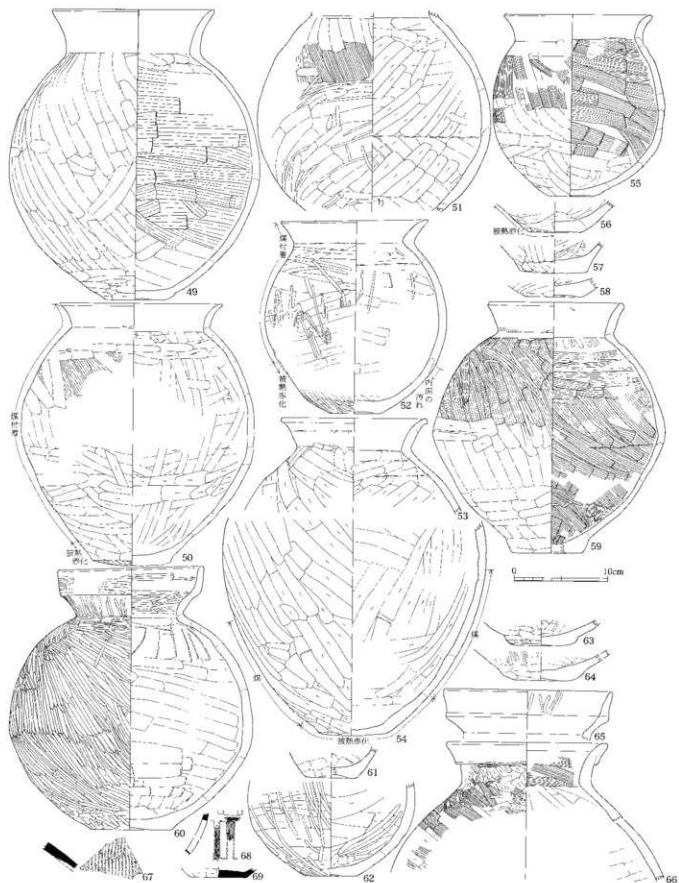
第82図 権現山遺跡 SG10区 SI-50(4) 遺物

第5章 権現山道跡 SG10区

5	土跡部 林	口 復 11.2 高 7.7 底 3.8 最大 復 11.6	外底面は1方向ヘラケズリで平底状。外面は体部ヨコヘラケズリおよびヨコヘラケズリの後に口縁部ヨコナデ。体部ナメヘラミガキ。内面は底部ヨコナデ。体部に斜へ放射状ヘラケズリ。口縁部ヨコナデの後に体部を縦らしたタテヘラミガキ。 [注記] 16、18、北東1層、北東区2層	5YR6/8 橙 やや暗黒・白・透明細～粗粒 やや少、赤・黒色調～粗粒少 やや硬質	中央床土 13～15cmの 2片に中央の2片が 合口1/6厚、底2/3厚 合口は左層
6	土跡部 林	口 復 13.9 高 8.1 底 5.0	やや薄。外底面は多方向ヘラケズリで弱い凹面状。外面は局部ナメヘラケズリ後に体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ後に縦～斜位ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや暗黒・白・透明細～粗粒 多、白・透明細と赤粗粒少 やや硬質	中央南部床土 1cm 口1/8厚、底全周 341
7	土跡部 林	口 12.3 高 7.0 底 4.5 重 残 2699	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。外底面は上半部にタテナデと下半部へ横～斜位ヘラケズリ。内面は体部は上位にヨコヘラケズリ。中位にヨコヘラケズリ。低位に多方向のヘラケズリと粗いヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。内底面に10m大の黒痕あり。	7.5YR6/6 暗 緑・赤・灰色粗粒と白・透明細～粗粒と黒粗粒少 透明細少	中央南部床土 3cmで斜位 ほぼ正位 体部凹小破損 306
8	土跡部 林	口 14.8 高 6.6 底 4.8 重 334.6	外底面は凹底状でナデと粗いヘラケズリ。外面体部ナデと下半部ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面は底部に1～2方向と体部に横位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	5YR6/6 明赤 やや暗黒・白・赤・透明粗粒 多、灰・灰色調～粗粒少 やや軟質	中央北部床土 8cmで正位 傾斜 353
9	土跡部 林	口 12.3 高 5.8 底 4.0 重 残 2139	外底面はやや緩な1方向ヘラケズリで平底状。外面口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリで。やや光沢を持つ。内面は口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラケズリ後に縦～斜位ヘラミガキ。外面体部に10m大の黒痕あり。	7.5YR7/6 暗 緑・白・赤粗～粗粒と黒・透明粗粒少 白・赤粗～粗粒と黒・透明粗粒少 やや硬質	南東部床土 4cmで正位 ほぼ正位 口11/12厚、底全周 254
10	土跡部 林	口 14.0 高 5.0 底 4.1 重 残 230.3	外底面は凹底状でナデ。外面体部は上位ナデと下位ヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリで。体部ナデは階層して調整が不詳。外面体部下位に横成面の浅い割れ「X」がある。	2.5YR6/8 橙 やや暗黒 赤粗粒と白・黒粗粒少 やや硬質	中央東部床土 3cmで正位 ほぼ正位 口11/12厚、 底全周 127
11	土跡部 林	口 復 14.4 高 5.2 底 4.4	外底面は凹面方向の緩なヘラケズリで凹凸のある凹底状。外面体部は下半部ヨコヘラケズリと上半部ヘラケズリで。内面は口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラケズリ後に体部多方向ヘラケズリ後にやや不規則的なナメヘラミガキ。	7.5YR6/6 暗 緑・透明粗粒多、 白・灰色粗粒少 やや硬質	中央北部床土 10cm 口1/3厚、底2/3厚
12	土跡部 林	口 16.2 高 5.3	外面体部はヘラケズリで。体部上半は少し光沢を持つように仕上げる。外面体部下位は凹面方向の緩なヘラケズリで凹凸が多い。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部は階層して調整不詳。	5YR6/8 明黄 粗い・白・黒・灰色・透明粗粒 粗多、白・灰色調少 やや硬質	東中央部床土 12cm 口1/7厚 134
13	土跡部 林	口 12.6 高 4.8 底 5.3	外底面は多方向ヘラケズリで平底状。外面は体部上位ヨコヘラケズリと下位ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後に体部のヨコヘラケズリをやや緩に直し、最後の仕上げ調整を省略したような状況。	2.5YR6/8 暗 緑・白～粗粒と灰色粗粒と 透明細少	南東部床土 9cmで横位 口5/6厚、底全周 91
14	土跡部 林	口 12.3 高 5.8 底 2.8 最大 13.7	口～体部境の凹面が強く内窪する。外底面はナデで少し凹底状。外面体部下位はナメヘラケズリと上半部ナメヘラケズリ後に口縁部ヨコナデ。外、内面口縁部にナメヘラミガキ。内面は口～体部ヨコナデ後に体部を放射状ヘラミガキ。	2.5YR5/8 明赤 やや暗黒 白～粗粒と白粗粒 やや多、灰色調と黒粗粒少 やや硬質	北東区 1cmで正位 口1/12厚、底全周 45
15	土跡部 林	口 復 13.8 高 残 5.5	外面体部はナメヘラケズリでやや光沢を持ち、口縁部ヨコナデ。内面は体部は上位にヨコヘラケズリと下位に多方向の緩なヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラケズリ後に体部を放射状ヘラミガキ。3箇所見られ、うち1箇所は部境の中心に埋没しているで、製作時の粘土に粘りが弱められたと考えられる。	5YR5/8 明赤 やや暗黒 白・黒・透明粗粒少 硬質	南東床土 14～30cmが 混合 口5/12厚 212、263、南東区、床 底南東区
16	土跡部 林	口 復 15.7 高 5.1	外面は体部上半ナデ後に下半部ヨコヘラケズリ。底部1方向ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面は体部ナメヘラケズリ後に口縁部ヨコナデ。全体に縦～斜位ヘラケズリ。 [注記] 60、84、132、263、南東区、床底南東区、北東区2層、A-A'東平2層、5-6層	2.5YR5/6 明赤 粗粒・白粗～粗粒と黒・透明粗粒少 やや硬質	南東床土 4～30cm 口1/12厚 注記は左層
17	土跡部 林	口 復 14.6 高 4.0	外面は下半部に多方向ヘラケズリ。上半部に横～斜位ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面は口～体部ヨコナデ。内面は底部にナデまたはヘラケズリと口～体部ヨコナデ。全面を放射状ヘラミガキ。	5YR5/6 明赤 やや暗黒 赤粗粒～少、白粗粒と白・黒・透明粗粒少 やや硬質	北東区 12～19cmが 混合 口1/3厚 42、149、北東1層
18	土跡部 林	口 14.2 高 4.6	外面の口～体部境に弱い横あり。外面は底部1方向ヘラケズリ。体部ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。内面は底部に多方向と体部に斜位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや暗黒・赤輝～粗粒多、白粗～粗粒と黒・透明粗粒少 硬質	中央東部床土 2cm 口2/3厚 278、A-A'東平2層
19	土跡部 林	口 復 14.3 高 4.5 底 4.5 最大 復 14.9	外底面は凹面方向のヘラケズリで凹底状。外底面は体部ヨコヘラケズリで上半と下半の滑る方向がある。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部ヘラケズリ後に、底部に凹面方向と体部に放射状のヘラミガキ。内外面全面を赤色塗料する。	2.5YR5/4 に近い赤 やや暗黒 白粗～粗粒やや少、黒・透明粗粒～粗粒少 硬質	南東部床土 2～6cm が混合 口1/2厚、底全周 242、243、311
20	土跡部 林	口 復 13.8 高 残 4.2	非常に薄い。外面は口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ナデと口縁部ヨコナデ後に体部を縦らした放射状ヘラミガキ。	7.5YR7/6 暗 やや暗黒 白・赤粗～粗粒と黒・透明粗粒少 硬質	中央東区上 7～9cmと 南東区 口1/6厚 383、401、着2層、南 東区床土、床底南東
21	土跡部 林	口 復 7.8 高 残 6.2 最大 復 13.3	内外面ともに体部ヨコナデ後に口縁部ヨコナデ。口～体部境に縦～斜位ヘラミガキ。横成面に外面から内面へ径4mmの孔を開ける。外面全面と内面口縁部を赤色塗料し、孔の内壁には赤色塗料が付着していない。 [注記] 1174、床底南東区、A-A'東	7.5YR5/4 に近い やや暗黒 白・灰色粗～粗粒少 硬質	中央東区上 17～26cmが混合 18cm1片と東平6/8と 東平1片が同一個体 口1/8厚、体1/6厚 注記は左層
22	土跡部 高林	口 復 20.3 高 残 6.2	外底面外面は外側ヨコヘラケズリ後に放射状ヘラミガキ。外底面外面はナメヘラケズリと口縁部ヨコナデ後にナメヘラミガキ。内面は外側より多方向ヘラケズリと口縁部ヨコナデの後に、底部多方向と体部斜位のヘラミガキ。	5YR7/6 橙 やや暗黒・赤粗～粗粒多、白粗～粗粒と黒・透明粗粒少 硬質	北東床土 1～1.5cmと 中央東部床土 2cmが混合 口1/4厚、底1/2厚 318、268、北東1層
23	土跡部 高林	高 残 7.2 脚壁 復 10.2	脚壁部下位が凹面になる。外面は脚壁多方向ヘラケズリと脚壁底部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。内面は脚壁部タテナデ、脚壁部ヨコヘラケズリ後にヨコナデ。	7.5YR7/6 暗 やや暗黒 粗粒と白・赤粗～粗粒と黒粗粒少 やや硬質	北東床土 2cm、北東1層の1片と混合 脚壁全周、脚壁1/4厚 32、北東1層
24	土跡部 高林	口 復 18.2 高 残 5.1	脚壁の外底面は横位および放射状のヘラケズリ。外面は体部ナメヘラケズリ後に口縁部ヨコナデと上半部ヨコヘラケズリ。内面は体部ナメヘラケズリ後に口縁部ヨコナデ。全体をタテヘラミガキ。	10YR7/6 明黄 粗粒・赤粗粒と白・黒・透明粗粒少 やや硬質	脚壁底土 29cmと中央東部床土 2cmが混合 口1/4厚、底1/2厚 98、268、北東1層
25	土跡部 高林	高 残 6.7 脚壁 13.8	脚壁は傾立状態で反時計回りに積み上げる。外面は脚壁部タテヘラケズリと脚壁底部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。内面は粘土組織も上げ飯を残したままユビオヤシ。脚壁部にヨコナデ。	10YR6/6 明黄 やや暗黒 白～粗粒と赤粗粒と黒・透明粗粒やや少 やや硬質	北東床土 7cm 脚壁3/4厚 367

第4節 古墳時代の竪穴建物跡

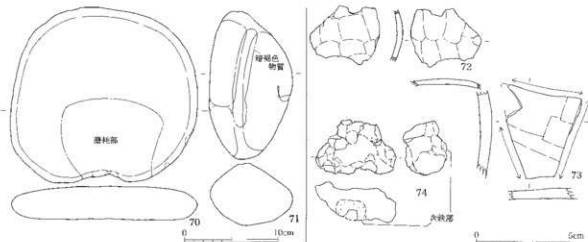
26	高 残 6.6 土跡 高 残 10.3	脚柱部外面タテヘラミガキ。脚柱部外面はヨコナデと見られるが、着滅して不明確。脚柱部内面は結構幅が広く、中央で脚柱をつぶしてその上下には粘土の敷層が生じる。脚柱下端面ヨコヘラズリ。脚柱部内面ヨコナデ。	7.5Y88/6 灰青緑 透明細 白粉+黒粒と赤・黒・赤 透明細少	北東床土 28cm 脚柱全周、脚柱1/4周 157, 北東1層
27	口 復 200 土跡 高 残 7.5	外面は脚柱部1道と床底面にタテヘラ後、杯底面にヨコヘラズリ。外面杯体部は横一帯のハケ着滅後にナデ出し口縁部をヨコナデし、杯体部はタテヘラミガキ。内面杯体部はヘラナデ後、口縁部をヨコナデし、杯体部はタテヘラミガキ。	5Y86/6 粉 やや暗黒 白・赤粒+黒粒 やや多、黒・透明細少 やや硬質	南東床土 8cm~20cmで 接合 口2/3周 106, 115, 215, 東壁 中央遺物集集中地点。東 壁下部土層
28	高 残 5.7 土跡 高 残 14.0	外面は1帯なタテヘラナデ。内面は脚柱部に横一斜位のヘラズリとヘラズリ。脚柱部ヨコナデ。 [注記]136, 北東区1層, 北東区2層, 北東隅	5Y85/8 明灰緑 やや暗黒 白・赤粒+黒粒 やや多 5Y86/6 粉 やや暗黒 赤粒と白・赤・灰 色粒+黒粒やや多、黒・透明 細少	東端床土 13cmの1片と 北東部5片が接合 脚柱下部全周 江記は左欄
29	高 残 6.9 土跡 高 残	外面脚柱部はタテヘラナデで、ミガキの有無は不明確。脚柱内面は倒立状態で反時計回りの組み上げ版をナメナデおよびヨコナデ。杯部内面はヘラナデ(?)で平坦している。	5Y86/6 粉 やや暗黒 赤粒と白・赤・灰 色粒+黒粒やや多、黒・透明 細少 やや硬質	北東床土 7cmの2片が 接合 脚柱1/2周 352, 371
30	口 17.8 土跡 高 残 5.8	外底面中央の脚柱跡を確認。中央部を前後に厚みだか、または高狭の脚柱を 杯底面に積み上げた版跡を示す。杯部外底面は放射状ヘラナデ後に外周ヨコ ヘラズリ。杯部外周はナメナデ後口縁部をヨコヘラズリ。脚柱部は横一帯の 色ヘラズリ。内面は杯体部ヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。底面に多方向と 杯部に斜位のヘラミガキ。	5Y86/8 粉 やや暗黒 白・黒粒+黒粒 と透明細少 やや多 5Y87/8 黄緑 中～暗黒 白・黒・透明細+黒粒やや多 赤粒少 やや軟質	北東床土 20cmで遺物 杯体部全周 160
31	高 残 6.2 土跡 高 残	外面は脚柱部ヨコナデ後、脚柱と脚柱にタテヘラミガキ。内面は粘土を積み 上げ版が、または粘土の組み上げた版跡を示す。杯部外底面は放射状ヘラナ デ後に外周ヨコヘラズリ。脚柱部は横一帯の色ヘラズリ。内面は杯体部ヘラ ナデ後に口縁部ヨコナデ。底面に多方向と杯部に斜位のヘラミガキ。	5Y86/6 粉 やや暗黒 白・黒粒+黒粒 と透明細少 やや多	北東床土 17cm 脚柱全周 160
32	高 残 6.8 土跡 高 残	外面は杯底面中央にナメナデ後、杯体部ヨコヘラナデと着滅され、脚柱部はタ テヘラミガキ。内面は脚柱部ナメナデ後、杯底-杯部に多方向ヘラナデ。	7.5Y87/8 黄緑 中～暗黒 白・黒・透明細+黒粒やや多 赤粒少 やや軟質	南東床土 17cm 杯底1/4周、脚柱全周 74
33	口 復 19.1 土跡 高 残 3.7	外面はナメナデ後口縁部ヨコナデ。内面はヨコヘラナデと思われる が残りが悪く不明確で、口縁部ヨコナデの有無も不明。	2.5Y85/6 明灰緑 やや暗黒 白・赤・透明細と白・ 黒粒+黒粒やや多 やや軟質	南東床土 27~35cm が接合 口1~4/5周 99, 236
34	口 復 21.5 土跡 高 残 6.9	外底面を放射状ヘラナデ。杯部上位ヘラナデと中～下位ヨコヘラズリ。口 縁部ヨコナデ。外周は中央以下タテヘラズリと上位ヨコナデの後に放射状ヘ ラミガキ。	5Y87/6 粉 やや暗黒 赤粒+黒粒多 白・赤微粒少 硬質	南東1層4片に北東の 2片が接合 口1/6周、杯底7/12周 161, 北東1層, 北東上層
35	高 残 8.4 土跡 高 残	外面はななタテヘラミガキ。内面は倒立状態でおそく反時計回りに組み上 げた版を現し、上部ナメナデと基部にヨコナデの後、中位にヨコヘラズリ。 [注記]221, 222, 253, 315, 381, 東壁中央遺物	5Y86/8 粉 暗黒 赤粒+黒粒と黒細粒 やや少、白・透明細少 やや軟質	新塚穴直上 5~25cmと 南東床直上~床土3cmが 接合 脚柱全周 江記は左欄
36	口 復 14.7 土跡 高 残 3.8	脚柱部外面はヨコヘラズリ。杯体部外面全体をヨコナデ後にタテヘラミガ キ。脚柱部内面全体をヨコナデ後にナメナデミガキ。	10Y83/3 に近い黄緑 中～暗黒 白・黒粒+黒粒 と透明細少 やや多、白粒粒と赤粒少 硬質	中央部床土 13cmと北 東1層が接合 口1/6周、杯底5/42周 25, 北東1層
37	高 残 6.1 土跡 高 残	杯底面内面はおそらくタテヘラズリ。脚柱部外面タテヘラミガキ。脚柱部内 面は倒立状態で粘土を積み上げた版をよそく残す程度のユビオサエと基部ヨコ ナデ。脚土端に粘土を充填して閉塞する。	2.5Y86/6 粉 暗黒 白・赤粒+黒粒と黒細 粒少 硬質	南東床土 24cm 脚柱4周 75
38	口 復 20.7 土跡 高 残 3.2	外面は8cm/8mのタテヘラ後、口縁部をヨコナデする範囲が狭い部分が多い。 内面は3~4本/4mのヨコヘラ後、口縁部のヨコナデは端部だけに行方。 [注記]172, 南東区、東壁中央遺物集集中地点, 北東1層, 床高南東区	7.5Y86/6 粉 やや暗黒 白・黒粒+黒粒 と透明細少 やや多 白・赤粒粒と透明細少 やや軟質	南東床土 17cm。他に 南東床土 4片、北東に1片 口5/12周 江記は左欄
39	口 復 18.7 土跡 高 残 6.5	外面杯底面は放射状放射状のヘラズリ。外面杯体部は、下端がやや直立す るところを始にして主に縦位ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。杯体部全体に 残るななタテヘラミガキ。内面は多方向ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。杯体部 に残るななタテヘラミガキ。	10Y87/4 に近い黄緑 中～暗黒 白・透明細 やや暗黒 白・黒粒+透明細 やや少、灰色粒粒と透明細少 やや軟質	新塚穴直上 20cmの2片 に南東部の1片が接合 口1/36周、杯底1/3周 394, 南東区
40	高 残 9.4 土跡 高 残 14.1	外面は脚柱部ナメナデ後に基部ヨコナデ。脚柱部全体をタテヘラミガキ。内面は 倒立状態で反時計回りの組み上げ版を現し、ユビオサエと基部ヨコナデ。	5Y86/8 粉 やや暗黒 白・赤粒+黒粒と 黒・透明細少 やや硬質	脚柱全周で横位 脚柱全周、脚柱1/2周 2
41	高 残 7.0 土跡 高 残 6.2	外面は脚柱部と杯底面をタテヘラズリ後、脚柱中～下位タテヘラナデ。脚 柱部内面は倒立状態で粘土を積み上げた版を現し、基部内面ヨコナ デ。杯底面内面は多方向ヘラナデ。	7.5Y86/3 に近い黄緑 中～暗黒 白・透明細+黒粒 やや多、赤粒と黒細粒少 やや硬質	北東床土 20cm が接合 口1/4周 107
42	口 9.8 土跡 高 残 15.7 小形 底 3.9 最大 17.0 重 583.3	外底面は閉間方向のヘラズリでわずかに凹状。外面脚柱部はヘラナデと下 端部ヨコヘラズリで、ヘラミガキも行うと見られるが、非常に不明確。 内面は底面に横位のヘラナデヘラズリ。基部ヨコナデ。基部は粘土を積み 上げ版を現す。内外両口-基部ヨコナデで、タテヘラミガキを必ずしも 行なわなければならない。	5Y86/6 粉 やや暗黒 黒・透明細+黒粒 と透明細少 やや多 白・赤粒粒と透明細少 やや軟質	南内床土 7cmで横位 ほぼ正円 口全周、底全周 1
43	高 残 9.3 土跡 高 残 3.6 小形 底 4.9	外底面は1方向ヘラズリで上げ底状。杯部外面は下位ヨコヘラズリ後 に上～中位をヨコヘラナデ。内面は底面に多方向と杯部下平に斜位のヘラナ デ。杯部下平位をユビオサエで粘土を積み上げた版を現す。外表面以外の 杯部全周と内底面間に酸化鉄の帯状によって赤く発色する。 [注記]128, 252, 390, 393, 脚柱一帯	5Y86/4 に近い 中～暗黒 黒・灰色粒+黒粒 と透明細少 やや多 白・赤粒粒と透明細少 やや軟質	南東床直上。床土 12cm の1片と2片が接合 口5/12周、杯底2/4周 566, 東壁4層 江記は左欄
44	口 6.4 土跡 高 残 9.5 小形 底 3.7 最大 32.7	外底面は閉間方向のヘラズリで平底状になっている。外面杯底面は下平部ヨコヘ ラズリと上平部ヨコヘラナデ。内面は杯底面にナメナデまたはヘラナデで、基部 は粘土を積み上げた版を現す。内外両口-基部ヨコナデ。杯体部が狭い ため杯底面に内面に亀裂が生じているが、外面まで貫通は していない。	7.5Y86/6 粉 やや暗黒 透明細+黒粒 やや多、白・黒粒+黒粒少 やや軟質	新塚穴直上で横位 完全 378
45	口 復 5.8 土跡 高 残 5.8 小形 底 9.7	外面は杯部上中に残るヘラミガキ。口-基部ヨコナデ後に開示した4本1層 のタテヘラミガキ。内面は杯部下平ナデ。上半は粘土を積み上げた版を現して ユビオサエ。口-基部ヨコナデ後にナメナデミガキ。	2.5Y86/8 粉 やや暗黒 赤粒+黒粒と黒細 粒少 やや硬質	中央部土 2cmと東内ベル ト中央部が接合 口5/12周、杯底3/4周 248, 北東1層
46	口 6.5 土跡 高 残 10.5 小形 底 3.4 最大 9.5	外底面と外周面は放射状ヘラズリで平底状になっている。外面杯底面~中位ヨコ ヘラナデ。内面は底面に小塊が盛り上がった凹凸状のまままで調整せず。 杯部下平部ヨコナデ。基部タテナデ。内外両口-基部ヨコナデ。	7.5Y86/6 粉 やや暗黒 黒・透明細+黒粒 と透明細少 やや多、赤粒少 硬質	南東床土 3cmで横位 口-基部全周、脚柱1/3周 93, 南東区



第83図 権現山遺跡 SG10区 SI-50 (5) 遺物

47	口 復14.6 高 残8.4 底 大 15.2	外周は製部ヨコハラズリと口一隅部ヨコナデ。竪部に縦ならヨコハラズリナシ。内面は製部ヨコハラズリ後に縦ならヨコハラズリナシ。口縁部はヨコハラズリ。外周は下下部が焼熟赤化。上下部は多量の炭が付着。内面は製部が汚れた境界が見られるが、汚れの多い部分もある。 [注記]121, 188, 229, 232, 305, 南東区、北東区2層、北東1層、南東南東区、大入口1層	10Y86/3 土赤い黄褐色 やや暗黒 赤黒～黒粒と白黒粒 多量、赤・透明細粒少 破瓦	南東床土0～22cmの4片と人口部床土2cmの5片 口1/3層、底1/2層 注記左欄
48	口 15.2 高 残7.2	竪部内外面ヨコハラズリ。口縁部内外面ヨコナデ。竪部内外面の表裏に対応する位置に2箇所ずつの深い刺突痕が横成面に付けられ、その位置の口縁部破れも少し深む。小動物の糞など痕も見られないが断定はできない。外周の残存部全体が炭が付着している。	10Y87/3 土赤い黄褐色 暗黒 白・黒粒細粒やや多量 白・赤・透明細粒少 破瓦	南東床土14cmで正位口2/3層。底全層94
49	口 16.9 高 30.7 底 6.4 底 大 26.3	外底面は1方向へラズリで平底。外面製部はナメハラズリで多少かハケメ痕の跡が見える。外面制下位をナデ後に制下層が少し外に出ている。中位部分ヨコハラズリ。内面製部は下位をナメハラズリで、中位以上は浅いヨコハラズリ。竪部をナメハラズリ。内外面の口一隅部をヨコナデ。焼熟赤化なく。制下外周は約1/3が大きな黒炭。	10Y86/4 土赤い黄褐色 やや暗黒 白・赤・透明細粒少 破瓦	南東床直上～床土14cmが接合 中位相い 赤黒～黒粒と白・黒粒多量 白・赤・透明細粒少 破瓦
50	口 復17.1 土 30.7 底 8.2 底 大 24.5	外底面は多方向へラズリで凸面状。外周は制下位に斜位の浅いハケハラズリで、制下平にナメハラズリ後。一部にヨコハラズリ。竪部ナデと口縁部ヨコナデ。内面は斜位と横位のハラズリ後に下位ヨコハラズリ。内外面に口縁部ヨコナデ。外周底部が焼熟し、口一隅部に腐付着。内面のコガは見られない。 [注記]163, 175, 176, 178, 180, 182, 185, 188, 201, 206, 207～209, 213, 215, 217, 257, 南東区、東野中央史跡集申地点	10Y86/6 明黄褐色 やや暗黒 白・赤・透明細粒少 赤・黒粒細粒少 破瓦	南東床土9～31cm 口2/3層、制一部欠。底全層 注記左欄
51	高 残211 土 復24.5	外底面は制下平に斜位のハラズリ後ハラズリで、ハラの角が当たった痕跡を多く見ている。中位以上に斜位のハケハラズリ。製部ヨコナデ。内面製部ヨコハラズリ後ナメハラズリ。製部ヨコナデ。外周が焼熟しているが見えないが明確。 [注記]106, 117, 171, 275, 405, 南東区、東野中央史跡集申地点	10Y86/3 土赤い黄褐色 やや暗い 白・赤・透明細粒少 赤・黒・透明細粒少 破瓦	南東床土10～25cm 西内面床中の1片も焼熟赤化 南1/2層、制1/3層 注記左欄
52	口 15.5 高 20.3 底 5.0 底 大 19.1 底 大 129.4	外底面は多方向へラズリ後。1方向へラズリして光沢を持つ。外周は製部に縦位と斜位と横位のナデ。中位以下にヨコハラズリ。制下位にナメハラズリ。内面はヨコハラズリ後に縦ならヨコハラズリで、中位以上は斜位して調整部が跡が見える。内外面に口縁部ヨコナデ。外周下位がよく焼熟して、中位以上に炭と吹きこぼれ痕が多量。内面下位が汚れている。 [注記]354～356, 358, 360, 361, 366, 368～370, 南東区、北東区1層	10Y87/6 明黄褐色 やや暗い 赤黒～黒粒と白・赤・透明細粒少 破瓦	北東床土4～10cmで接合 口2/3層、制一部欠 南1/2層、底全層 注記左欄
53	口 復15.4 土 30.7 底 10.0	外周は製部ナメハラズリ後に製部ナメハラズリ。内面は竪部ヨコハラズリナデおよびナデナメハラズリを横し、製部ナメハラズリ。内外外面の口縁部をヨコナデし、口縁部外周が少し厚くなる。外周底部に炭成時の黒炭を塊状平置所がある。	7.5Y87/8 黄褐色 やや暗い 赤黒～黒粒多量、赤・黒・透明細粒少 破瓦	北東床直上3～19cmで接合 口1/4層、制1/2層 290, 291, 297
54	高 残22.8 土 7.3	外底面は多方向へラズリで中心に向かってなだらかに突出。外面製部は斜位と下方向に下位にヨコハラズリ。内面製部はヨコハラズリ後にナメハラズリ。外周底部の焼熟痕と製部の炭が明確で残って見られる。内面の汚れは見られない。	10Y87/4 土赤い黄褐色 暗い 白・赤・透明細粒少 白・黒粒細粒少 破瓦	北東床土9cm 制部1/4層、底全層351
55	口 15.7 高 19.2 底 4.6 底 大 18.2	外底面は横位にナデで外周に粘土を塗して凹状にする。外面製部は中位ナメハラズリ後に下位ハラズリと上位を浅いタテハラ。内面製部は底部は多方向へラズリ後、1～中位にナメハラ。内外面に口縁部と外面竪部ヨコナデ。明確な焼熟・使用痕はない。	10Y87/4 土赤い黄褐色 やや暗い 白・透明細粒と黒粒細粒少 赤・黒粒少 破瓦	南東床土12～16cm 口2/3層、制1/4層、底全層 200, 204, 理土中、南東1層
56	高 残3.5 土 5.7	外底面は2方向程度の緩なハラズリ。外面製部下層は右方向。それより上は左方向のヨコハラズリ。内面は底部外周ヨコハラズリ。製部タテハラズリ。外周は焼熟赤化。	7.5Y84/6 暗褐色 白・透明細粒～黒粒多量、赤・黒粒細粒少 破瓦	南東床直上2cm 底全層 380
57	高 残3.5 底 7.2	外底面はごく深い凸面状で、おむね1方向のハラズリ。外面製部タテハラズリで制下位ナメハラズリ。内面は多方向ハラズリ。内外外面の口縁部は中位を平置するようにつまに腐す。外周が焼熟しているがもしもいないが不明確。	10Y84/1 粗灰 やや暗黒 白・赤黒～黒粒多量、透明細粒少 破瓦	南東床土2cm 底全層 265
58	高 残2.1 底 5.7	外底面は多方向ハラズリで凹状。ハラズリする前には本葉部が付いていた可能性がある。外面製部はナメハラズリ。内面底部は多方向の緩なハラズリ。外周が焼熟している可能性があるが、あまり明確ではない。	7.5Y86/6 暗褐色 やや暗い 白・透明細粒～黒粒少 赤・黒粒細粒少 破瓦	北東床土15cm 底全層 29
59	口 14.2 高 26.5	外底面は多方向ハラズリ後にナデ。外周は製部下位と中位の横み1方向に平置を施して変わり、縦がナデ。中位がタテハラズリ後ヨコハラズリ。上位がナメハラズリ後に縦ならハラズリ。内面はハケメで、製部下位の横み1方向に平置を施して変わり、縦がナデ。中位がタテハラズリ後ヨコハラズリ。内外面に口縁部と内外面ヨコナデ。焼熟・使用痕は見られない。	5Y85/6 明黄褐色 やや暗い 白粒～黒粒と黒粒多量、白粒と黒粒細粒と透明細粒少 破瓦	南東床土6～32cm 口～6層、制1/2層 176, 189, 190, 191, 192, 194, 197, 198, 200, 205, 209, 208, 209, 211, 214, 北東1層、南東区、東野中央史跡集申地点
60	口 15.4 高 27.6 底 8.6 底 大 25.5	二重口縁状で外周の口一隅部境の境が明確。外底面は多方向ハラズリで凸面状の中位が腐む。外面製部は下位ナデと中位に斜位のハラズリ後に斜位ハラズリ。内面は底部付近に縦位と斜位に横位のハラズリ。内外面の口一隅部はヨコナデ後ハラズリナシ。 [注記]119, 279, 61, 72, 170, 325, 349, 350, 350, 362, 372, 373, 北東区4層、北東区2層、A・B東平4層	7.5Y87/8 黄褐色 やや暗黒 白・赤黒粒と白・黒粒～黒粒と透明細粒少 破瓦	中央床土4～10cm、北東床土5cm、南東床土15cm、南東床土9cmが接合 口2/3層、底全層 注記左欄
61	高 残3.4 土 5.3	北東を持つドーナツ状の凹面で、中央部ナデ後に底部外周を円筒方向のハラズリ。外周は横位にナデ。内面はヨコハラズリ。	7.5Y86/6 暗褐色 赤黒～黒粒多量、白・赤・透明細粒少 破瓦	北東1層 底5/12層 北東1層
62	高 残10.0 底 5.3 底 大 17.5	外底面は多方向ハラズリでわずかに上り底状。外面製部ヨコハラズリ後にタテハラズリ。内面製部は横～斜位のハラズリ後に縦ならナメハラズリとナメハラズリ。焼熟・使用痕は見られない。	10Y87/4 土赤い黄褐色 やや暗い 白・赤・透明細粒多量、白・赤・透明細粒少 赤・黒粒と黒粒細粒少 破瓦	南東床直上～床土33cmが接合 中位相い 赤黒～黒粒と白・赤・透明細粒少 底2/3層、制2/3層 109, 110, 256
63	高 残2.7 底 6.2	外底面は多方向の暗いハラズリ。外面製部ナデ後に制下層ヨコハラズリ。内面は底部は多方向ハラズリ後、製部下位にヨコハラズリ。焼熟痕は見られない。	10Y87/6 明黄褐色 やや暗黒 白・赤黒～黒粒少 赤・黒・透明細粒少 破瓦	北東床土14cmと東西バルト東平6層が接合 底2/3層 142, A・A'東平4層

第5章 権現山遺跡 SG10区



第84図 権現山遺跡 SG10区 SI-50 (6) 遺物

64 土師器 大形甕	高 残 3.2 底 8.2	外底面は中央が凹み、ナデ。外面胴部下端ナデ後に胴部タテヘラズリとタテヘラミガキ。内面胴部ヨコヘラナデ。外面胴部外周がかなり磨耗して丸みを帯びている。	75SR6/6 釦 やや磨耗。白磁土と黒粒～細粒と透明粒やや多。赤粒～細粒少。やや微質。	南東隅床直上 底 3/4 層 233
65 土師器 大形甕	口 復 17.5 高 残 5.3	二重口縁状で外面ヨコナデ。内面はヨコナデ後に口縁部タテヘラミガキで調整は剥落して不明。保存状態は見られない。	10YR7/3 に近い黄褐色。白・黒・灰色細粒と黒粒・やや少。透明粒～細粒少。やや微質。	南東隅床上2cmで接合 口 1/3 層 223, 224
66 土師器 大形甕	口 残 12.5 高 残 13.2	外面は胴部と胴部にナメハケ後ナメハケズリ。口縁部はヨコハケ後に口縁部粘土帯を貼付けてヨコナデ。内面胴部はナメハケナデ。底部ヨコハケ。口縁部ヨコナデ。 [注] 143, 152, 168, 北東1層, 北東スミ, B室南, 21-17.5 表土	5YR6/8 赤粒～細粒と白粒～微粒多。赤粒少。やや微質。	北東床上9～23cm 口 1/6 層, 層 1/2 層 注記は左欄
67 遺灰 甕	高 残 4.0	外面は褐色の平行引き。内面は無文。SI-10等で出土した甕片と同一個体の可能性あり。	5P82/1 青灰 やや磨耗。白粒～細粒多。微質。	南東区1層 東部1層 南東区1層
68 遺灰 二重甕	高 残 4.3 最大 高 12 ～ 16	体部中に1mm幅の深い凹線を持ち、その下側に5箇の工具で右から左へ向かって磨削状文を回転施文する。体部上と下とにそれぞれ長方形の透窓が縦方向に並ぶ。透窓の長さは約4cmで幅は不明。2片が同一個体と考えられる。	5Y5/1 灰 細粒。白磁土微質。	床直上と南東隅床中に 各1片 体 1/24 層 403, 35層
69 遺灰 鉢	高 残 1.0 底 復 6.0	外底面は1方面ヘラズリで平底。外面体部下端に傾位の手持ちヘラズリ。内面は回転ヨコナデ。平安時代前半の茨城黒三郎窯跡等の製品が混入。	25C70/1 オリーブ灰 やや微質。白磁土少。微質。	南東隅床1.39cmで正位 底 5/2 層 105
70 石製 石皿	長 19.4 幅 19.6 厚 3.9 重 2345.3	両面が平頭で、厚さが均一な板状の自然石をそのまま加工。加上・被熱処理は見られない。片面の中央よりも片側に寄った部分が、標示した範囲で少し磨耗している。ただし、凹んだような状況は認められない。	25Y7/2 灰黄 細粒。白磁土微量。山笠山。	南中遺床土5cm 正位 39
71 漆	長 15.5 幅 8.8 厚 7.0	断面が不規則四角形で縁状の自然漆。加工・使用・被熱処理は見られない。腹中央に示した検視上は暗褐色の汚れが付着していて僅かもしれない。重量 994.6g。	25Y7/2 灰黄 細土で微質な淡黄灰。	伊 2付直床土1cm 元形 354
72 土師器 不明	厚さ 1.5～2.5mmの非常に薄い土断片。内外面ともにナデ調整。やや還元焼成。灰味で灰色味を帯びている。		25Y7/2 灰黄 やや微質。白磁土微質 やや微質。	入口施設内 入口P1層
73 土師器 研鉢具	長 残 4.9 幅 残 3.9 厚 0.7 重 残 12.3	土師器製の胴部破片を転用。長い3辺の破断面を研ぎに用いて平坦に磨耗している。土器としての上下方向は研の横方向で、内外面調整はヘラナデ。	10YR6/3 に近い黄褐色 やや微質。白・透明粒～細粒と黒粒細粒少。やや微質。	埋土中 正位 埋土中
74 粘土質の滑 石製小 （粘土） （粘土）	長 4.2 幅 2.9 厚 2.3 重 残 25.0	平面が傾切三角形形状の極小で器具の輪形磨治滑。上面は軽く凹み、一部に鉄色を生じる。下部中央が含鉄部で磁着が強く、鉄色が白くうつ。滑質は滑度が高く、上面の一部に少し気孔が見られる。顕微鏡下遺物構成6なし。	去 黄褐色 粘 褐色褐色 磁着度 4 メタル硬 未測定	ほぼ完全 南西区1層

SG10区 SI-51a (第85図、写真図版 94-95)

[名称] SI-51c → SI-51b → SI-51a の順に拡張した最終期の建物である。調査時には SI-51b・51c を「SI-109 新期・古期」、SI-51a を「SI-51」と呼称し、整理時に改称した。b・c 期より大きく西壁位置が異なる a 期を別の建物と考えて《(SI-51c → 拡張 → SI-51b) → 埋没 → SI-51a を新築》と理解できる可能性もある。

[位置] SG10 区中央部の 19-18 グリッド。SI-51b を北東側へ拡張建替したと考えられる。同じく古墳後期の建物は、西と北に SI-45・47・58、南に SI-34 がある。古墳中期の SI-53・104 と古墳時代の P-436・437 を切る。攪乱の可能性が高い SX-308 と、時期不明の SE-345 と P-429・432・433 に切られる。北東と南端にある時期不明の P-428・431・441 との新旧関係は不明確だが、これらに切られる可能性がある。

[規模と形状] 方形と推定され、南壁部と主柱穴 4 本と貯蔵穴を確認した。主軸方位は GN-0° 30' -W。主柱穴から四壁までの距離が一定だと仮定した場合、推定規模は東西 5.8 × 南北 7.1m に復元される。残存

第46表 権現山遺跡 SG10 区 SI-51a 出土遺物

高杯種類 高杯	大きさ [mm]・[g]	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 目録
1 土師器 高杯	口 復 15.0 高 残 5.5	外面は口縁部ヨココナデ後に杯体部ヨコヘラケズリ、口縁部に少しヘラミガキ、内面は杯体部上下に多方向と上下・口縁部に斜～縦位のヘラミガキ。	10YR8/4 浅黄褐色 やや粗い、白・透明釉～細粒 やや多、赤黒粒少 やや硬質	貯蔵穴或上 20～24cm が浅～単体 口 1/3 周 SI-51 1, 3
2 土師器 高杯	口 15.5 高 残 5.1	外面は体部上縁部後に口縁部ヨコナデ、体部の上縁に外をヨコヘラケズリ、口縁部に少しヘラミガキ、内面は口縁部ヨコナデ、杯体部にヨコヘラミガキ、3と同一個体の可能性あり。	5YR8/1 黄褐色 やや粗い、白・透明釉～細粒 やや多、白粒と赤黒粒と黒黒粒少 やや硬質	P4 上面の上 1cm 口 1/2 周 SI-51 10
3 土師器 高杯	高 残 3.6 脚 復 11.5	外面は脚柱部タテヘラケズリ、脚部には難ナデ後に軽いヨコナデ、内面は脚柱部ヨコヘラケナデ、脚部ヨコナデ。2と同一個体の可能性あり。	2.5Y7/3 浅黄 やや粗い、白・透明釉～細粒 やや多、白粒と赤・黒黒粒少 やや硬質	P4 上面床土 1cm 脚部 5/12 周 SI-51 10
4 土師器 甌	口 復 26.0 高 残 23.9	外面は口～頸部ヨコナデ後に頸部タテヘラナデ(または軽いタテヘラケズリ)、内面は頸部ヨコヘラナデと口～頸部ヨコナデ後に頸部タテヘラナデ、内外面のヘラナデは平滑でわずかに光沢を持つ。 [注記] 図51-2, 9、東部一括、SI-51・109一括、SE-345 10層	7.5YR7/6 橙 細密 赤黒粒と白・黒・透明 細粒少 やや硬質	貯蔵穴或上 29cmと南東 床土 3cmが接合。 SE-345 に 1片混入 口 1/4 周、側 1/6 周 目録は2層
5 土師器 甌	口 25.0 高 残 30.4	外面は口縁部ヨコナデ後に頸部タテヘラケズリ、内面は口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ、胴部に密なタテヘラミガキ。	2.5Y7/3 浅黄 やや粗密、白・透明釉～細粒 多、灰色粒と赤・黒黒粒少 やや硬質	北東床土 10cm 口 3/4 周 SI-51 12, S-308 東面、 SI-104 南西一括
6 石葺 甌形石?	長 18.9 幅 6.2 厚 4.7	断面が半椭圆形で輪状の自然の河原石をそのまま利用、ほぼ全面がよく焼附して赤～褐色に着色している。両の上縁部はあまり焼熟していない、加工・使用痕は見られない。重量 825.7g。	2.5Y5/2 暗灰黄 細密で硬質な陶磁器	中東床土 6cm 形状 SI-51 6

壁高は南西部で7cm、南東部で3cm。主柱穴はa期P1～P4で、柱間は南北3.50m、東西3.58m(北側)～3.80m(南側)。底面形からみて柱径は15～20cm程と推定され、床からの深さは南東のP4が30cm、北西のP2が45cm、P1とP3が40cm。北西P2から東側へ幅10cm程の溝状に床面が窪んでいたが、SX-308による掘乱と判断した。入口施設は不明。南東隅の貯蔵穴P6は東西118×南北85×深さ29cm。確実な間仕切溝や壁溝はない。貼床は暗褐色土で、貼床土としてはロームが少ない(断面の2・5層)。

【火処】不明である。古墳後期後半の建物なのでカマドを北壁に持っていたことを想定できるが、北壁付近はSX-308に破壊されている。

【覆土】1層だけが薄く南西部に残っている。a期貯蔵穴P6の堆積層は自然埋没と考えられる。テフラの層や粒などは認められない。2層(貼床)よりも下層にあるSI-51bの覆土がやや厚いので、同じ床面レベルのままで壁部を広げたのではなく、SI-51bの初期埋没土層の上に少し高い床面を作り直したと考えられる。SI-51b覆土層の全体をSI-51aの貼床土層と解釈することも可能である。

【遺物出土状況】覆土層が残っていたのは主に南東部なので、遺物も南東部を中心として出土した。南西部と北東部の床面がやや低いところに残った遺構覆土中に土師器が少量ある(1～4)。遺構の残りが浅いので、貯蔵穴埋土上方の遺物(1と4)以外は床面から10cm以内にある。残存度が大きい甌(5)は、拡張前のb期建物の貯蔵穴(SI-51bのP5)よりも上方にあり、SI-51aの床面から10cm大きい。

【出土遺物】遺物は少なく、甌・高杯が目立つが、それ以外の器種は杯体部や長胴甌の破片が僅かにある。高杯の杯部と脚部(2と3)は同一個体の可能性があり、杯部破片の1と2は同工品である。甌(5)は残存度が大きい。図示以外の土師器合計178片・1,429gの内訳は、杯30片・175g、高杯3片・25g、壺甕類142片・1,170g、甌3片・59g。須恵器は古墳中期の胴部小破片が1点混入していただけである。

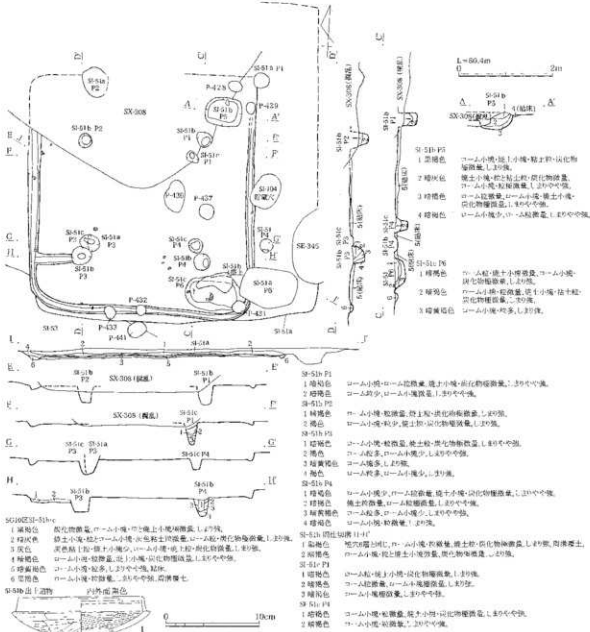
SG10区 SI-51b (第86図、写真図版94・95)

調査時の遺構名は「SI-109 新期」で、それに旧名称「SK-438」を加えて整理作業時にSI-51bと改称した。SI-51c→SI-51b→SI-51aの順に拡張した2時期目の建物である。

【位置】SG10区SI-51aと同じ範囲の南西部。SI-51cを拡張建替した建物と考えられる。古墳中期のSI-53・104を切る。SI-51c・51bの貼床除去後に確認したP-436・437は、SI-51b.cに切られる古墳時代柱穴である。掘乱の可能性が高い時期不明のSX-308に北部を切られる。SG10区中央部柱穴群に含まれる時期不明柱穴P-428・429・431・432・433との関係では、P-429に北東部を切られると推定され、P-431・432・433

に南端部を切られる。P-428 との新旧関係は、SX-308 に切られるため不明だが、P-428 が SI-51b・c を切る可能性を想定できる。調査時旧名称「SK-438」は SI-51b の南東主柱穴 P4 に改称した。

〔規模と形状〕 方形の建物跡で、主軸方位は GN-2°-E。東西 4.90 × 南北 5.16m で、南北に少し長い点は SI-51a と似る。壁の残存高は南東隅部で最も高く (9cm)、西部 (6cm) や北西部 (1cm) では低い。主柱穴は P1 ~ P4 の 4 本で、柱間は南北 256cm、東西 264cm。床面レベルからの深さは P1 が 40cm、P2 が 39cm、P3 が 27cm、P4 が 41cm。柱穴形状からみて柱径は 15cm 前後で、床面からの深さは南西の P3 が



第 86 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-51b・c 遺構・遺物

第 47 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-51b 出土遺物

遺物 種類 部類	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・胎成 (または原料)	出土状態 保存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 13.2 高 残 3.9 最大 径 14.6	外面に口縁部ヨコナデ、底部に 1 方向 (内) の後、体部に縦位のヘラクズリ。内 面は底部に 1 方向 (内) と体部に横位のヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後ヨコナ デミガキ。内外全面黒色で炭素吸着。その上に漆仕上げをしているかもしれない が不確定。	7.5YR2/1 黒 や中暗黒 粗粒と黒 細粒と黒 や中暗 や中暗	b 部縦断面 1.4cm 口 1/6 厚 SI-109 1/6

第5章 権現山遺跡 SG10 区

30cmで、他は38～40cm。北東隅にあるb期貯蔵穴P5は東西77×南北58×深さ25cmの長方形で、床面で確認できたことと、SI-51bと覆土が共通することから、b期の貯蔵穴と判断した。壁溝は深さ4～9cmで、東壁の北部では1～2cmまで浅くなって消滅する。間仕切溝は南西主柱穴P3の西側に1本あり、幅17～20cm・深さ7cm（断面図H-H'）。入口施設は見られない。

貼床はc期の項を参照。南東隅部には、c期貯蔵穴P6を埋め戻したb期床面に78×43×高さ3～6cmの高まりが認められた。

【火処】不明である。SX-308に破壊されている北壁にカマドを持っていたことを、覆土中の粘土・焼土粒から想定できる。

【覆土】焼土・炭・粘土粒を含む1～4層が薄く入り、水平状に堆積している。北壁部（カマド？）を取り壊した土もまぜながら人為的に埋め戻しているかもしれない。その上にa期（SI-51a）の床面を貼っている。テフラの層や粒などは認められない。

【遺物出土状況】b期貯蔵穴P5内に土師器壺甕類の頸部と長胴甕の胴部があり、c期貯蔵穴P6を埋め戻した位置の床面には土師器壺甕類の胴部破片多数があるが、いずれも図示できなかった。

【出土遺物】遺物はごく少量で、古墳中期の遺物も少量混入している。図示した杯（1）はb期貯蔵穴P5で出土したもので、炭素吸着と見られるが漆仕上げも行っているかもしれない。図示できなかった土師器甕破片には、やや球胴に近い長胴のものがある。図示以外の土師器合計96片・793gの内訳は、杯17片・80g、高杯1片・59g、鉢2片・21g、小形壺1片・7g、壺甕類75片・626g。

SG10 区 SI-51c（第86図、写真図版94・95）

調査時の遺構名はSI-109古期で、それにSI-51柱穴P3の一部とSK-430を加えて、整理作業時にSI-51cに改称した。

【位置】SG10区SI-51bに拡張建替する以前の建物である。貼床下で確認した古墳時代柱穴P-436とP-437を切る。南壁の位置がSI-51bと同じであれば、P-431・432・433に切られることになる。北東隅の位置がSI-51bと同じであれば、同様にP-429に切られると推定される。P-428とは新旧不明だが、P-428がSI-51b・cを切る可能性を想定できる。調査時旧名SK-430をこの建物の北東主柱穴と推定して「SI-51cのP1」に改称した。

【規模と形状】方形の建物跡で、主軸方位はSI-51bと同じくGN-2°-Eと思われるが、壁がわからないため不確定で、東側主柱穴の方向を基準にした場合はGN-0°-E・Wとなる。正確な規模は不明である。SI-51bに拡張する前なのでSI-51bより少し小さいか、あるいは南東部にある貯蔵穴からみて南東隅の位置があまり変わらないのでSI-51bとほぼ同規模の可能性もある。c期からb期の間で北側柱穴の移動が顕著なので、北壁はb期よりも南側にあったと見ることもできる。主柱穴は4本と考えられる。ただし、北西主柱穴P2を確認できなかった。南西主柱穴P3は2基が重なった形で、土層から新旧を判別できなかったが、配置からみて西半部をc期、東半部をa期（SI-51a）の柱穴と判断した。柱間は南北1.90×東西2.36m。柱穴形状からみて径は15cm前後で、床面からの深さは南側が浅く（P4=26cm、P3=27cm）、北側が深い（P1=41、P2=37cm）。南東隅にあるc期貯蔵穴P6（東西121×南北74×深さ26cm）は、貼床除去後に確認した。c期建物（SI-51c）の貯蔵穴をb期に埋め戻したと考えられる。貼床は2～4cmの薄さで、ローム小塊の多い暗黄褐色土を入れている。壁溝・入口施設・間仕切溝は認められない。

【火処】不明である。SX-308に破壊されている北壁にカマドを持っていたことを想定できる。

【覆土】SI-51bの項を参照。

【出土遺物】図示した遺物はない。出土遺物はc期貯蔵穴P6出土の土師器鉢1片・8gだけで、中期の混入遺物である。

SG10区 SI-53 (第87図、写真図版 95・199・200)

【位置】SG10区中央部の19-18グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、南にSI-101、北にSI-104がある。古墳後期のSI-51a～51cに北側を切られる。縄文時代土坑SK-443・265を切り、時期不明のP-467・468に切られる(SK-443→SK-265→SI-53→P-467・468)。北東部にある時期不明のP-441・442との前後関係は不明瞭だが、貼床除去前にこれらを確認しているため、SI-53が切られると考えられる(SI-53→P-441・442)。

【規模と形状】やや不整な方形の建物跡で、主軸方位はGN-26°Eだが、東壁の方が他より少し東へ振れている。東西4.10×南北4.16m、壁の残存する高さは最小5cm(北西部)、最大10cm(東壁南部)。支柱穴は4本で、南東支柱穴P4が不明確である。柱間は東西2.10×南北2.14m。床面からの深さはP1とP2が23cm、P3はやや深く30cm、P4は他の柱穴のように穴として確認できず、数cm程度くぼみだけである。柱痕跡の径は、P2で8～10cm、P3で約8cmである。入口施設と考えられるP5は床面からの深さ23cm。貯蔵穴・壁溝・間仕切溝はない。貼床土は南西部で厚く(14cm)、他は厚さ10cm未満で、貼床がほとんど認められない箇所もある。

【炉】北東支柱穴P1の西側にあり、東西29×南北33cm、床面からの深さ2cm、炉の埋土はローム粒が多く、焼土は少なかった。

【覆土】水平な堆積層で埋まっている。テフラの可能性のある白色粒などは認められなかった。

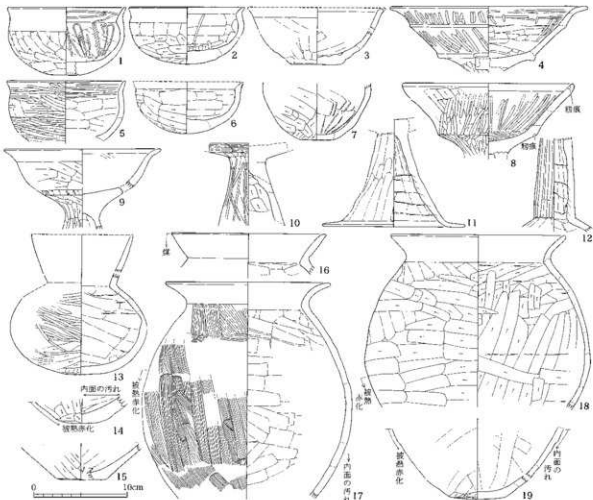
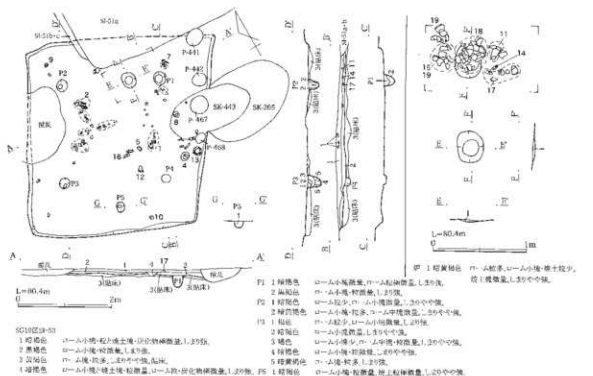
【遺物出土状況】床面より上へ3～7cm 浮いたレベルで、炉の上に土師器がまとまっている状況の拡大図を示した。土師器類は炉上方(18)とその東西(17・19)に1個ずつある。西側にある甕底部片15は図示していない高杯破片と混在し、15に接合する胴部破片は見られなかった。

南東部の床上2cmに小形壺(13)があり、床上4～5cmで高杯杯部が上を向いて出土した(4)。被熱痕と煤のある高杯(8)や、煤が付着した杯(2)が見られるが、火災建物のような炭化材や多量の焼土は認められていない。本建物を作る時期不明のP-467(調査時の名称はSK-443に包括)で出土した杯は、本建物からの混入遺物と考えられる(6)。

【出土遺物】土師器はSG10区でも古い特徴を持つ。4は有段状高杯の杯部が完形で、中央に孔があり、甕に転用することもできる。高杯底部に穿孔した類似は古墳時代居館の溝SG10区SD-221にもある。8は胎土中に混和したと思われる稲稈痕が2箇所ある。SG10区ではSI-50の杯などに稲稈痕がある。杯底部の製作痕を残す高杯は、接合面に刻み(9)や浅いハケ(10)を施している。甕類はハケ調整が目立ち、古い様相を持つ。凸面底の甕(14・19)はSG10区SI-16などにある。遺物は比較的多くて、高杯が多く、杯や甕類も一定量がある。図示以外の土師器合計277片・2.124gの内訳は、杯101片・288g、高杯42片・482g、小形壺4片・28g、甕類130片・1.326g。

第48表 椋見山遺跡 SG10区 SI-53 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ H×D φ	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.4 高 7.2 底 3.0	外底面はナデとヘラケズリで小さい上げ底状。外面は体部下平ナデ後に下平ナメヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面は体部ヘラナデ後にタテヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。	5YR5/8 明赤黒 やや粗い。赤黒～細粒と白濁 粒多。黒・透明粗～細粒少 やや硬質	中央床土 8cm 口5/6留。底1/2留 13、南東一括
2 土師器 杯	口 12.2 高 6.1 重 残253.8	底部が厚く重い。外面は体部上位ナデと底部1方向ヘラケズリ。体部下位ヨコヘラケズリ。内面は底部多方向ヘラケズリ。体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。口縁部が少し歪んでいる。外面口～体部と内面口縁部に多少割付。	2.5YR5/8 明赤黒 やや粗い。赤黒～細粒多。白・黒・透明粗～細粒少 やや硬質	中央床土 7cm 口11/12留。体全留 32、北西一括
3 土師器 杯	口 壺14.5 高 壺5～7 底 5.8	体部に接合点がないので器高は推定。外底面はナデ。外面は体部下端ユゼオヤシ。体部ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面は底部調整不明。体部ナメヘラナデ。口縁部ヨコナデ。	2.5YR6/8 橙 やや粗い。赤黒粒多。白・黒・透明粗粒少 やや硬質	南東部 第1/6留。底全留 南東一括
4 土師器 高杯	口 20.4 高 残6.9	脚との接合部は径約1cmの孔に粘土塊を入れて調整した部分が脱落して、孔が覗かれた状態になっている。外面は杯底部タテヘラナデ。口～杯体部ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面は杯部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ後に残る縦位と横位のヘラミガキ。杯部は完形なので、このままとして用いることも可能である。	10YR7/6 明黄黒 やや粗い。白濁と白・黒・透明粗～細粒少。赤黒粒少 やや硬質	南東床土5cmで正位 口全留。杯部全留1



第 87 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-53 遺構・遺物

5	土師器 杯	口 径12.4 底 径6.5	外面は底部上リタテナデ、下平ヨコヘラズリ、口縁部ヨコナデの後に全体をヨコウラミガシ、内面は体部ヨコヘラズリ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガシ。	7.5YR8/3 灰青緑 やや暗黒・赤黒粒と灰色・透 明細～細粒や中多、白～白 粗少 やや硬質	中央床土上7～8cmが接合 口5/6周、下平全周 17、18
6	土師器 杯	口 径11.5 底 径5.5	外底面はおおそく多方向ヘラズリで丸底にする。外面体部は上付ヨコウラミガシまたはナデの後に下付ヨコヘラズリ、内面体部ヨコヘラナデ、内外面口縁部ヨコナデ。	5YR5/1 明赤黒 粗少 赤黒～細粒多、白・黒 粗～細粒や中多、透明細粒少 やや硬質	SI-53を切るP407の底 土6～8cmが接合 底5/6周 SK-443.1、2
7	土師器 杯	高 径6.0	外面は底部に多方向と体部に斜位のヘラズリ、内面は底部に内傾方向、体部に横位のヘラズリを行い、ヘラを止めた箇所が深く残るやや硬な仕上げ。	7.5YR6/4 に赤い・暗 やや暗黒・白粗多、赤黒粒 と黒～透明細～細粒少 やや硬質	中央床面上6cm 径1/3周 北、北東～北、南東一 括
8	土師器 高杯	口 径17.7 高 径7.6 底 径4.4	外面は杯底部放射状ヘラズリ、口縁部ヨコナデ、杯体部は斜位のヘラズリ後ヘラミガシ。杯内面は杯底部1方向ヘラミガシ、杯体部タテヘラミガシ。脚内面上端部(杯底部)に施すナデ、外面が焼熟赤化した後に覆付。胎土中に塗布した灰の層が広く認められる。	7.5YR7/6 暗 やや暗黒 白・透明細～細粒 や中多、黒～赤黒粒、赤黒 粗少 やや硬質	南東床土上～床土6cm 口1/3周、杯底全周 6～9、48、南東一括、 一括
9	土師器 高杯	口 径16.5 高 径7.6	杯底部周囲の筒状体全面にヘラ状工具で斜目を入れた状況が割断面で確認できる(外面図に記入)。外面杯部に斜位と脚部に縦位のヘラズリ、口縁部ヨコナデ。杯内面は底部ヘラナデ、体部ナメハケ後ヨコナデ、口縁部ヨコナデ、脚柱部内面は施すナデ。	10YR8/4 浅青緑 やや暗黒 白・赤黒～細粒と 黒粗少 硬質	北東床上6cmと北東床上 5cm 口1/6周、杯底全周 34、36、37
10	土師器 高杯	高 径8.8	接合面が新露して、杯底部が円筒状に成形した部分が見られる。円筒状の外面無面は浅いヨコハラ(外面図に記入)。外面は杯底部に放射状ヘラズリ、脚部タテナデ後タテヘラミガシ。脚内面は傾立状態で同径計りに積み上げた後に斜ナメヘラズリする。杯内面の最終調整は不明で、円筒状部分の上面はナデ。	7.5YR6/6 暗 やや暗黒 赤黒粗多、 白・黒・透明細粒少 硬質	東平床土上2/4片が接合 杯底全周 12、21、北西一括
11	土師器 高杯	高 径10.4 脚部 径15.0	外面は縦位のヘラズリまたはヘラナデ後、底部内面ヨコヘラズリ、内面は斜位のヘラズリまたは下平傾立状態で同径計りに斜土積み上げ 施す。杯内面は底部はナデまたはヘラナデ。	5YR6/8 暗 やや暗黒 赤黒粗多、灰色 粗と白・黒・透明細粒少 やや硬質	北東土1.3m 口1/4周、脚部1/8周 39
12	土師器 高杯	高 径9.8 脚 径4.2	外面は脚部底部タテヘラナデ、脚柱部に密なタテヘラミガシ。内面は脚柱部に縦横みねを残す程度のタテナデ後斜つて縦横を生じる。内面脚部ヨコナデ。	7.5YR6/6 暗 やや暗黒 白・灰色粗～細粒 や中多、黒・透明細粒少 やや硬質	中央床土上3cm 脚柱全周 20
13	土師器 小形壺	口 径10.7 土師器 最大 径14.4	外面は底部多方向と体部下傾位のヘラズリ、体部中位以上ヨコヘラミガシ。内面は底部多方向と体部横位のヘラズリ。肩部ナデ。内外面の口縁部と頸部は滑潤して調整不詳。	10YR7/6 明赤黒 やや暗黒 赤黒～細粒多、 黒粗と黒粗粒少 軟質	南東床上直上。床土6～ 8cmに破片少 口1/12周、頸2/3周、 体下平全周 2、3、10、18、南東一括
14	土師器 壺	高 径2.8 底 径5.6	外底面は多方向ヘラズリで不整な凸面状。外面側下端ナメヘラズリ、内面は底部および斜位のヘラナデ。外面側～底部全体が弱く焼熟し、内面全体が黒色に汚れる。	10YR5/3 に赤い・黄緑 粗多 透明細～細粒と白・黒 粗粒少 硬質	北東床土1cm 径12/5周 41
15	土師器 壺	高 径3.8 底 径5.3	外底面は1方向(7)のヘラナデで平坦にする。外面側面に縦～斜位ヘラズリ、内面は底部に内傾方向と体部に斜位のヘラナデ。被熱軸や内面の汚れは認められない。	10YR6/3 に赤い・黄緑 粗多 白～透明細粒や中 多、白・黒粗粒少 やや硬質	中央東部床土5cm 口1/4周、頸1/3周 37、内面一括
16	土師器 壺	口 径16.3 高 径4.3	口縁輪面は広く水平に近い。肩部内面にナデ後、肩部外面と口縁部内外面にナデ。外面全体に灰が若干付着する。	10YR6/4 に赤い・黄緑 粗多 白粗粒と白・黒粗 粒や中多、赤黒粒少 硬質	中央床土11cm 口1/4周、頸1/3周 19
17	土師器 壺	口 径17.4 高 径22.9 最大 径22.1	外面は口縁部ヨコナデ後に頸部タテヘラ、肩部には部分のなヨコハラ。内面は頸部ヒソコエ後に頸部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。外面は頸部中位以下が焼熟している箇所と、それとは焼熟していない箇所がある。内面頸部下位に暗褐色の汚れがある。	7.5YR7/6 暗 やや暗黒 白・黒・赤・透 明細～細粒少 やや硬質	中央東部床土2～7cm が接合 口3/4周 27、37、38、40、42、46、 47、南東一括
18	土師器 壺	口 径18.5 高 径18.3 最大 径23.9	外面は口縁部ナメヘラナデ後にヨコヘラズリ、内面は頸部ヨコおよびタテヘラズリ、内外面に口縁部ヨコナデ。外面側下位焼熟赤化。煤の有無は不明。1.15記J37、38、42、北西一括、南西一括、SI-51・109一括	10YR5/2 灰青黒 やや暗黒 白細粒多、赤黒粒 と黒～透明細粒や中多、白粗 ～粗粒少 やや硬質	北東床土2～7cmと北 西部で接合 口1/3周、頸3/4周 12.5記左端
19	土師器 壺	高 径7.4 底 径6.1	外底面は多方向ヘラズリで軽い凸面状。外面側部ナメヘラナデと側部ナメヘラズリ、内面は縦位および斜位のヘラナデ。外面側～底部全体が焼熟赤化し、内面全体が黒色に汚れる。	10YR5/2 灰青黒 やや暗黒 赤・透明細粒や中 多、透明細粒と白粗粒少 硬質	北東床上土5～7cm と中央床土3cmが接合 底5/12周 36、37、南東一括

SG10区 SI-55 (第88-89図、写真図版95・96・200)

【位置】SG10区中央部の19-18グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、西にSI-53、北にSI-104、南にSI-33がある。近世と考えられるSD-204に中央部を切られる。南西にある古墳時代のSD-319と近接するが重複しないと考えられ、両遺構間には混乱がある。

【規模と形状】長方形の建物跡で、主軸方位はGN-19°-E、東西4.36×南北5.20m、残存壁高は最小10cm(南東部)～最大24cm(北西部)。主柱穴はP1・P2の2本で、柱間は1.83m。柱穴上部はSD-204に破壊されているが、床面レベルから計測した深さはP1=38cm、P2=39cmで、断面形からみて推定柱径は16cm前後。補助柱穴と判断したP3・P4が東側にある。南東補助柱穴P3は、形から見て2時期分が重複していると考えられる(P3西とP3東)。P3西は床面から深さ24cmで、断面形からみた推定柱径は10～15cm程度。P3東は床面から深さ25cm。P4は床面レベルから深さ25cm、断面形からみた推定柱径は10cm程度。

東半部のやや南寄りにある貯蔵穴P5は、東西88×南北74×深さ31cmの隅丸長方形で、竪穴と同様に自然埋没している(断面図H-H')。南東隅部にも貯蔵穴がある可能性を考えて貼床を断ち割ったが、隅部

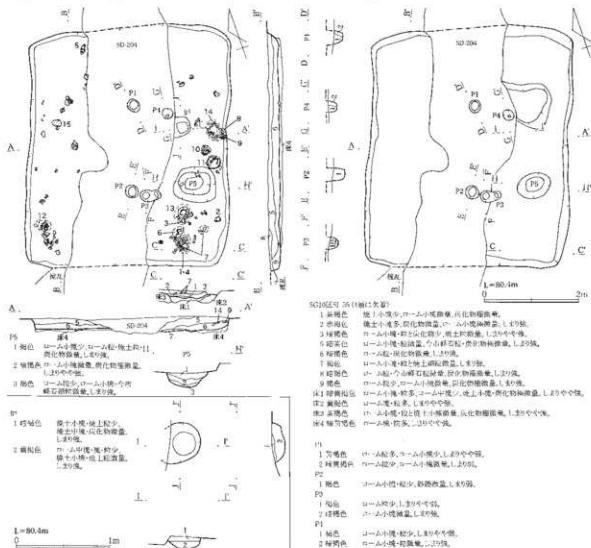
に貯蔵穴はないことが判明した（断面図 C-C'）。入口施設は不明。壁溝や間仕切溝は見られない。貼床は厚さ 2～10cm でローム土が主体であり、南東部では貼床土中に微量の焼土を含む部分もある（断面図 C-C'）。掘方の底面形を見ると、炉の北側の部分が周囲よりも 4～8cm 高くなっている。

【炉】中央部のやや北東寄りにある。大きさに対してかなり深く、炉覆土の下層に含まれる焼土は僅かである。東西残存 42cm × 南北 41cm × 深さ 13cm。

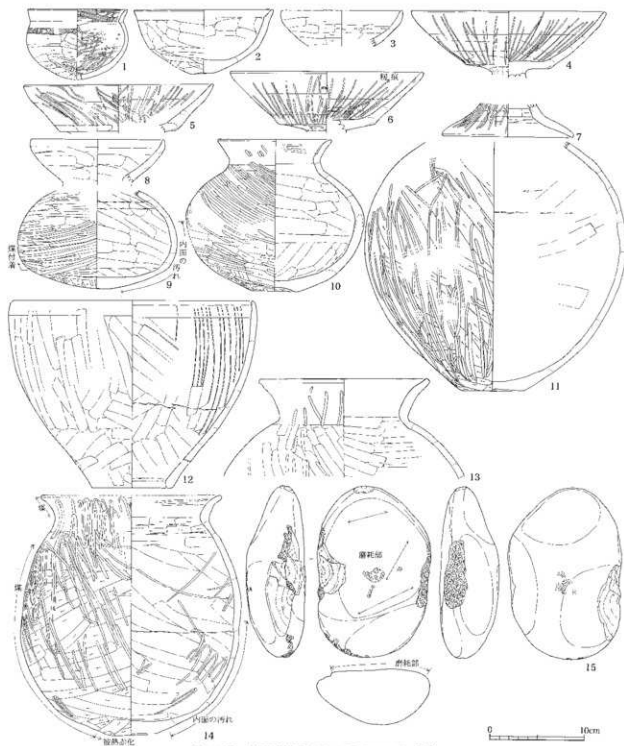
【覆土】貯蔵穴 P5（断面図 H-H'）と同じく堅穴部も自然埋没と思われる。テフラの層や粒などは、混入した縄文草創期の今市軽石だけが認められた。

【遺物出土状況】残存度の高い土器が、床面直上から床上数 cm までのレベルで、比較的多く出土した。東西両壁に近い位置の遺物は床面から 10cm 程度浮く傾向を持つ。東壁付近の土器は 9・10・14 のように、床から浮いていても残存度が高いものがある（断面図 A-A'）。

【出土遺物】SD-204 に壊されているにもかかわらず遺物が多い。初圧痕のある土師器（6）の事例は SG10 区 SI-50 などにある。9 は本来は火に掛けない小形壺だが、煮炊に使った痕がある。12 は器高が低い独特な大形甗で、内面を磨かない点も特徴的である。硬質緻密なホルンフェルスの砥石（15）は、SG10 区では SI-12 などにある。図示以外の土師器合計 289 片・2,591g の内訳は、杯 142 片・714g、高杯 14 片・178g、鉢 10 片・76g、小形壺 3 片・48g、壺甗類 121 片・1,575g。



第88図 権現山遺跡 SG10 区 SI-55 (1) 遺構



第89図 権現山遺跡 SG10区 SI-55(2) 遺物

第49表 権現山遺跡 SG10区 SI-55 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ mm・g	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 発見状態 注記
1 土師器 杯	口 径 10.5 高 残 7.4 最大 径 10.7	やや薄く軽い。外面体部上位タテハケ後に口縁部ヨコナデ。中位ヨコハラケズリ。底部周辺に多方向のヘラナデとヘラミガキでやや光沢あり。内面は体部ヘラナデ後に多方向ヘラミガキ。口縁部ヨコハラケ後に軽いヨコナデ。	7.5YR6/4 に近い やや緻密 白粗～細粒多、赤 粗～細粒と黒・透明細粒少 やや軟質	南東床土 5～8cmが挿 合 口～底 1/2 割 37、38
2 土師器 杯	口 径 14.5 高 6.8 底 2.3	外底面はヘラケズリでややいびつな平底状。外面体部ナデ後、下位をヨコハラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコハラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面体部下位は磨面が荒れていて、使用により磨耗した可能性がある。	10YR8/4 浅黄緑 やや緻密 赤粗～細粒やや多。 白濁と黒・透明細粒少 やや軟質	南東床直上 口1/4割、底全周 47

第5章 権現山遺跡 SG10区

3 土師 高杯	口 復 12.7 高 残 3.8	外面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラケナデ、口縁部ヨコナデ。内外両面は丁寧であるが、内面に粘土積み上げ痕を残す。	5YR6/6 橙 やや黄緑 白相～細粒と黒 粒やや多。灰色 土と透明細粒 少、やや硬質	南東床面上1cm 口5/12周 40、8、貼床一括
4 土師 高杯	口 20.5 高 残 7.0	外底面と胴部上端に放射状ヘラケナデ後、外周をヨコナデ。外面は杯部ヨコヘラケナデ口縁部ヨコナデ後に残るタテヘラミガキ。内面は縦～斜位ヘラケナデと口縁部ヨコナデ後に放射状のタテヘラミガキ。	2.5YR4/6 赤黒 やや黄緑 白相～細粒多、白 土と透明細粒と黒 粒少、やや硬質	南東床面上5cmで伏せた 浅皿 杯部は窪形 口全周 37
5 土師 高杯	口 復 19.9 高 残 4.7	外面体部ナメナデ後、外底面外周と外面杯部下端にナデ。内外面とも体部ナメナデまたはナメヘラケナデ後、口縁部ヨコナデ。内面に縦位、外面に斜位の残らなヘラケナデ。	10YR7/4 に近い黄緑 やや黄緑 白相～細粒やや多、 赤粒と白土、透明細粒少	北西側床面上 口1/3周、杯底1/4周 31
6 土師 高杯	口 復 20.3 高 残 6.4	杯部外面ナメナデ。外面は杯体部タテナデ後に口縁部から体部の大半までをヨコナデし、残るタテヘラミガキ。内面は杯体部多方向ヘラケナデ後に上半部をヨコナデし、残るタテヘラミガキ。裏面土に埋入した楕円皿痕が4箇所ある。	5YR5/6 明赤黒 やや黄緑 白相～細粒と黒 粒やや多。赤粒と 透明細粒少	南東床面上8cm 口5/12周、杯底1/3周 38
7 土師 高杯	高 残 3.5 脚痕 13.8	外面は胴部ナデと杯部ヨコナデ後にタテヘラミガキ。内面は胴部ナデ後に脚部ヨコヘラケズリ、基部ヨコナデ。	7.5YR4/3 黒 やや黄緑 白相～細粒やや多、 赤粒と白土、透明細粒少	南東床面上2～4cm 脚痕2/3周 35, 46
8 土師 小形壺	口 復 14.0 高 残 4.6	胴部は外面ナデ。内面ヘラケナデ。口縁部は内外面ヨコナデ。	10YR8/3 浅黄緑 やや黄緑 白土、透明細粒 やや多。灰色土と赤粒少	中央東側床土10～ 14cmで台合 口1/5周 58, 59
9 土師 小形壺	高 残 10.2 最大 16.7	外底面は2方向程度のヘラケズリ後ヘラミガキ。外面胴部はヨコヘラケナデ後ヘラミガキ。内面は胴部に多方向ヘラケナデ後、体部に縦～斜位ヘラケナデ。外表面の中心以上に傷が多。内面の中心～1位が汚れるので、火にかけて使用したと思われる。	5YR5/8 橙 やや黄緑 白土、黒粒細粒やや多、 赤粒と透明細粒少	中央東側床土10cm 側面上1/2周、下半全周 58, 59
10 土師 壺	口 復 12.0 高 残 16.0 底 4.6 最大 18.7	外底面はナデすけ上げ底状。外面胴部に横～斜位ヘラケズリ後、上半部はほとんどナメヘラミガキ。内面は底部は2～3方向と側面上半に横位のヘラケナデ。口縁部は内外面ヨコナデ後、外面に残るナメヘラミガキ。	2.5Y7/2 暗灰黄 やや黄緑 白相～細粒多、赤、透明細粒 多、白土、灰色土と黒粒 多、白土、灰色土と黒粒 多、白土、透明細粒 少、やや硬質	中央東側床土8cm 口1/4周、頸1/3周、 底全周 57
11 土師 壺	高 残 26.4 底 6.7 最大 復 27.5	外底面は1方向のヘラケズリ後ヘラミガキでやや上げ底状。外面胴部はナメヘラケズリ後にタテヘラミガキ。内面胴部はヨコナデと思われるが、脚痕・磨耗し不明瞭。焼熱痕や汚れは見られない。	5YR6/6 橙 やや黄緑 白相～細粒と黒 粒多、白土、灰色土と透明細 粒少、やや硬質	中央東側床土上 斜1/3周、底全周 55, 56、北東下、南東下、 磨成一括
12 土師 壺	口 復 25.8 高 残 8.0 最大 26.3	外面は下位ナメヘラケナデ後に中心以上を成形してタテおよびヨコヘラケナデ。内面は上半にナメヘラケナデ。上半にタテおよびナメヘラケナデ。内外面のヨコナデは胴部以下で底部少。注記11、4、7～10、12、13、15、37、AA'ベルト内、AA'サプトレ、BB'サプトレ一括、北東、北西、貼床一括	7.5YR6/4 に近い黄緑 やや黄緑 白土、黒土、透明細 粒多、灰色土と赤粒少	南西側床面上～床上12 cm 口1/3周、底1/4周 注記は左腕
13 土師 壺	口 復 18.0 高 残 10.6	外面は胴部タテヘラケナデと口縁部ヨコナデ後、残るタテヘラミガキ。内面は胴部ヨコヘラケナデ、口縁部ヨコナデ。	10YR8/6 黄緑 やや黄緑 赤、白土、透明細 粒と白土、黒粒少、 赤粒と透明細粒少	南東床土1cmで側 口全周、肩1周周 40、41、貼床一括
14 土師 壺	口 19.1 高 25.1～ 25.4 最大 23.2 底 4.7	外底面は多方向ヘラケズリでわずかに上げ底状。外面は胴部タテナデと胴部横～斜位ヘラケズリ後にタテヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面は胴部ナメヘラケナデ後にごく部分のヘラミガキで、中心に積み上げ体土痕を残す。内面底部ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。胴部が焼熱し、口縁部は僅か付着し、外面は胴下部分汚れる。	10YR4/3 に近い黄緑 やや黄緑 白相～細粒多、 赤粒と透明細粒少	東側床土5～10cm 口全周、頸2/3周、 底全周 58, 60、AA'ベルト内 58
15 土師 石器	長 18.0 幅 12.0 厚 6.2	片面の中央部を砥石面で使用し、かなり平滑に磨耗している。磨耗は不明瞭。側面の上下左右と両面の中央をそれぞれ縦方向に使用し、打痕と刺痕が着している。焼熱痕は見られない。重量 1839.8g。	2.5Y7/3 浅黄 褐色で非常に硬質な 珪石	中央西側床上 窪形 21

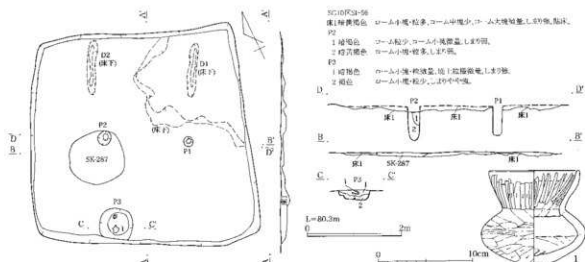
SG10区 SI-56 (第90図、写真図版 96・200)

【位置】 SG10区中央部の19-20 グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は北に SI-57、南西に SI-55 がある。時期不明の SK-287 に切られる。

【規模と形状】 方形の建物跡で、主軸方位は GN-27°-E (主柱穴 2 本を通る軸は GN-53°-W)。東西 4.92 × 南北 4.73m、壁の残存する高さはわずか 1～3cm。主柱穴は 2 本で、柱間は東西 1.75m。床面からの深さは 2 本とも同じく 62cm で、柱穴の底部形状から推定した柱径は 16cm 以下。間仕切溝は床面では確認できず、貼床除去後に確認した 2 本の間仕切溝 D1・D2 は幅 14～18cm、床面レベルからの深さは 9～13cm。貯蔵穴 P3 は南西部にあり、東西 70 × 南北 64 × 深さ 19cm。貯蔵穴 P3 の覆土には極微量の焼土粒を含む。入口施設は認められないが、同種の建物 (SI-106) からみて貯蔵穴の隣にあつたことを想定できる。壁溝は認められない。掘方は床面から深さ 6～18cm で、掘方底面の北東部が他の部分よりも 2～13cm 程度高いので、その範囲を破線で図示した。

【火処】 不明である。覆土がほとんどないので焼土の分布もあまり明瞭ではない。時期不明の SK-287 に壊された付近に焼土があり、SK-287 からは煤が付着した楕円形の自然礫が出土しているので、SK-287 の付近に SI-56 ののがあつたという想定もできる。

【覆土】 残っていたのはごく僅かなために詳細不明で、ほとんど貼床で堅穴の範囲を推定した程度である。テフラの層や粒の有無も不明。



第90図 権現山遺跡 SG10区 SI-56 遺構・遺物

第50表 権現山遺跡 SG10区 SI-56 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・地成 (または素材)	出土状況 保存状態 注記
1 土師器 小形壺	口 9.3 高 9.8 底 2.9 最大径 10.9 重 視 385.8	外底面は1方向ヘラケズリで浅い凹状。外面体部はナメヘラケズリ後に上平に削位。中位に横位のヘラナデ。外面1縁部ヨコナデ後に面部タテヘラケズリ。内面体部は下平ヨコヘラナデと上平ナデ。内面1縁部ヨコナデと面部ナデの後にナメヘラミガキ。外面下位に9cm次の凹あり。	7.5YR6/6 橙 やや緻密。白・透明～細粒 と黒細粒やや多。赤黒～細粒 少 破片	貯蔵穴底直上で横位 完形 2

【遺物出土状況】遺構覆土がほとんど残っていない状態なので、遺物は主に貯蔵穴から出土した。他に、本建物を切る時期不明のSK-287に混入していた土師器片と被熱した自然礫も、SI-56の遺物だったことが想定できる。

【出土遺物】1は貯蔵穴から出土した完形の小形壺。図示以外の土師器合計38片・101gの内訳は、杯3片・15g、壺類35片・86g。

SG10区 SI-57 (第91図、写真図版96・97・200)

【位置】SG10区中央部の20-19グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、南西にSI-56がある。重複する遺構はない。南西部と北東部は掘乱で壊されているが、北東部の遺構は竪穴掘方の底面が掘乱よりも下に残っていた。

【規模と形状】方形の建物跡で、主軸方位はGN-15°-E。東西4.68×南北4.36m。壁は北西隅で高く残り最大壁高15cm、南東部では低く4～6cm。主柱穴はP1とP2の2本で、柱間は東西2.23m。断面形から想定した柱径は10～15cm、床面からの深さはP1が75cm、P2が67cm。補助柱穴または入口施設と考えられるP5は床面からの深さ10cm。P5と対応する西側部にも補助柱穴があったかもしれないが、掘乱が入っているので不確実である。

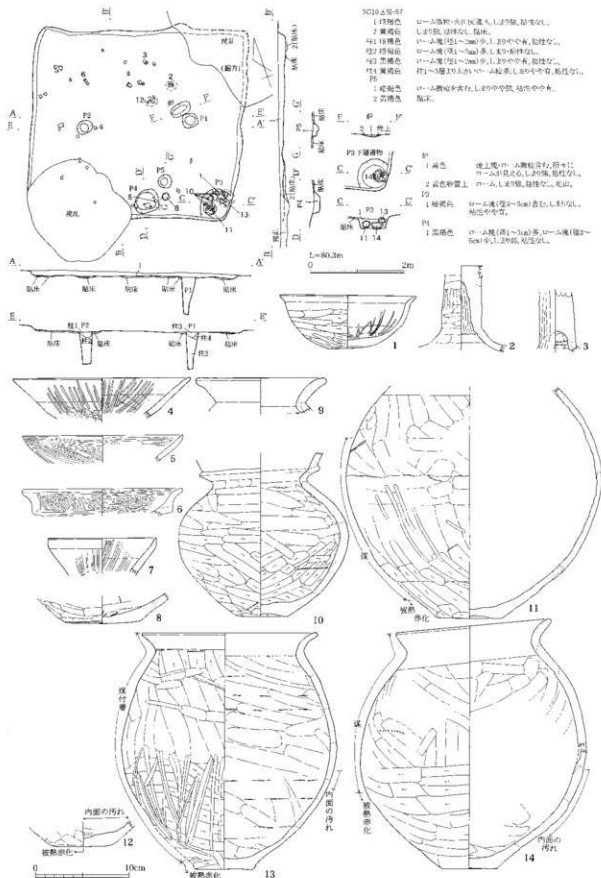
貯蔵穴P3は南東隅にあり、径65×深さ21cm。南部にあるP4は入口施設と考えられるもので、東西50×南北51×深さ15cm。壁溝・間仕切溝は見られない。

【炉】東側主柱穴P1の北西にあり、柱穴に近すぎるので炉と断定するには疑問もある。長い楕円形で東西45×南北25×床面からの深さ6cm。

【覆土】貼床を除くと覆土は単層である。火山灰の混入が記録されているのは、古墳中期遺構の覆土にしばしば認められる白色粒と見られ、古墳後期初頭に降下したHr-FAテフラ粒の可能性が高い。ただし、テフラ集中部を分離することができなかったため、少量が混入している程度と思われる。

【遺物出土状況】図示した遺物で出土位置がわかるものは、床から6cm以内の高さで出土したものと、貯蔵

第5章 権現山遺跡SG10区



第91図 権現山遺跡SG10区 SI-57 遺構・遺物

穴内に納められた遺物で、この建物の時期を示す。貯蔵穴内に残存度の高い甕3（11・13・14）、壺（10）、完形の杯（1）がある。

【出土遺物】遺物は比較的多い。口が広く開く杯（1）は、貯蔵穴内にあった完形品。3は脚上部が中実状。脚が大きく広がる高杯は見られず、柱状脚の高杯ばかりで、図示した以外に脚柱部でみて4個体分程度の高杯がある。2は白色針状物質を含む搬入品。SG10区SI-23などに白色針状物質を含む土師器がある。小形壺は7以外に中形品の破片が少量ある。形態の異なる二重口縁状の壺がいくつか見られる（6と10）。図示した6・9・10以外の壺口縁部片は二重口縁状1個体と単口縁6個体分がある。11の外面には縄圧痕が見られる。SG10区SI-47の土師器裏などにも縄圧痕がある。土師器裏には却で使用した痕跡がよく残る（11・13・14）。土師器は壺甕類が主体で、高杯もやや多く、杯は少ない。図示以外の土師器合計274片・2.347gの内訳は、杯57片・254g、高杯49片・525g、小形壺8片・198g、壺甕類160片・1.370g。

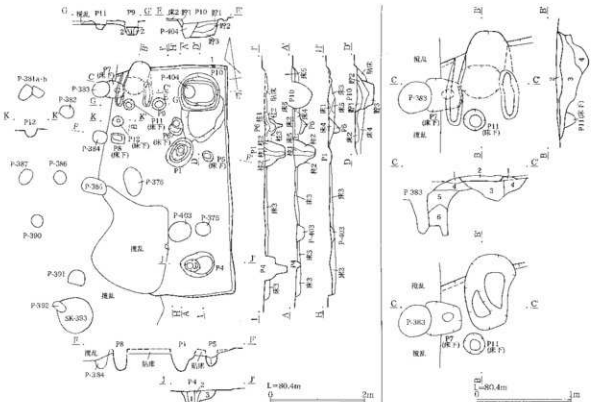
第51表 梅原山遺跡 SG10区 SI-57 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ mm・g	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.3 高 5.6 底重 3.8 重 199g	外底面中央部ナデで、周縁を少し高くするの上げ縁状。外面は口縁部ヨコナデ。内部は中位ナデ。下位ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。体部内面にやや緩らかなタテヘラミガキ。外面口-体部に9cm大の凹痕あり。	2.5YR5/8 明赤陶 やや硬質 白粒・細粒多。透明細粒少	貯蔵穴底上12cm ほぼ完形 2
2 土師器 高杯	高 残 9.0	脚外面タテヘラミガキ後に横位にナデ。内面は脚柱部に緩なタテナデ。縦にヨコナデ。杯底面内面にはやや密な放射状ヘラミガキ。	7.5YR4/1 明灰 やや硬質 白・赤粒～細粒と黒・透明細粒と白色針状物質少 やや硬質	中央東部床土4cm 脚柱・中位直存 33
3 土師器 高杯	高 残 6.6	外面は脚柱部にタテヘラナデ。脚柱部は中実で、脚内面をユビナデして積み上げ痕が少し残る。	2.5YR3 近い黄 やや硬質 白・赤粒～細粒やや多。白粒と黒・透明細粒少 硬質	中央北部床土6cm 脚柱直存 26
4 土師器 高杯	口 残 18.7 高 残 4.3	外面は脚柱部ナデ後に下位ナメヘラミガキと口縁部ヨコナデ。全体をナメヘラミガキ。内面は杯部ナデ後に口縁部ヨコナデ。全体を縦～斜位ヘラミガキ。	7.5YR5/6 明赤 やや硬質 白粒～細粒と黒・透明細粒やや多。白粒～細粒少 硬質	P2 西側床土6cm 口1/6直 16。北東Bトシ、西内Aトシ
5 土師器 高杯	口 残 16.9 高 残 2.9	外面は口縁部に横位と杯体部に斜位の緩なヘラミガキ。内面は口縁部ヨコヘラミガキ。体部は断面が割れて調整不明。	5YR3/8 明赤陶 やや硬質 白細粒やや少。灰色塵～粗粒と白粒と赤細粒少 やや硬質	P4 上層土4cm 口1/4直 37
6 土師器 壺	口 残 17.0 高 残 2.9	二重口縁状の1重を有り。頸部上は外面に横位。内面に横位と斜位のヘラミガキ。口縁部は外面に横位。内面に横位のヘラミガキ。	2.5YR5/0 明赤陶 やや硬質 白粒と白・赤粒～細粒やや少。黒細粒少 やや硬質	北西側直上。床土3cmに も1片あり 口1/3直 18, 23
7 土師器 小形壺	口 残 11.4 高 残 3.9	内外面ともに口縁部ヨコナデ後に口-頸部タテヘラミガキ。内外面に断面が黒色の部分があり、覆がれている可能性もある。	5YR6/8 暗 やや硬質 白粒～細粒と赤・黒細粒少 やや硬質	中央西部床土5cm 口1/24直。層1/6直 13
8 土師器 小形壺	高 残 3.2 底 残 8.2～8.5	外底面は2方向のヘラミガキで縦位・内面。外面側部下端ナメナデ。内面は円筒方向より横位のヘラナデ。被熱痕や汚れは見られない。	7.5YR6/4 近い黄 やや硬質 白・黒・灰色粒～細粒やや多。赤・透明細粒少 やや硬質	P4 直上2cmと東側床土10cm各1片 底全周 5, 7
9 土師器 壺	口 残 13.8 高 残 3.7	口縁部上平の外面を少し外へ曲げる。頸部内面に粘土混合層がよく残る。内外面の口-頸部にヨコナデ。	7.5YR6/6 暗 粗い。白粒～細粒と赤・灰色・透明細粒少 北西	北西部 口1/3直
10 土師器 壺	高 残 17.3 底 残 4.7 最大 47.8	外底面は1方向ヘラミガキで四底状。外面側部に光沢のある斜位ヘラナデ後、頸部下位の積み上げ体止部と頸部下端を横～斜位ヘラミガキ。口縁部上平を足知成状とヨコナデに二重口縁状。内面は側部下位を縦～横位ヘラミガキして積み上げ体止部を薄くし、上平はヨコヘラミガキ。縦部ユビナデ。口-頸部にヨコナデ。	7.5YR6/4 近い黄 やや硬質 灰色塵と白・灰色・透明細粒多。黒細粒少 硬質	貯蔵穴底上2cm 側5/6直。底全周 35
11 土師器 壺	高 残 24.4 底 残 6.6 最大 27.1	外底面中央部ナデと外側ヘラミガキで四底状。外面側部ナデと下位ナメヘラミガキ。中位に緩らかなヘラミガキ。頸部ヨコナデ。内面は側縁が著しく透明。外面側部が被熱し、脚柱部に覆がっている。内面は下平を中心として暗褐色に汚れていた痕が見られる。	7.5YR5/4 近い黄 粗い。白粒と白・黒・赤・透明細粒多 硬質	貯蔵穴底上2cm 側1～側2/3直。底全周1.34, 両内
12 土師器 壺	高 残 2.7 底 残 6.6	外底面は側部に多方向に斜位にナデ。内面は断面が少し磨けたように見られるので、正確な調整技法が不明。内面全体に暗褐色の汚れが付着する。外面は残存部全体が被熱石化。	7.5YR6/4 近い黄 粗い。灰色塵～細粒と赤・灰色・透明細粒少 硬質	中央直上6cm 底5/6直 32, 西側トシ。東ベルト
13 土師器 壺	口 残 18.4 高 残 25.0 底 残 6.0 最大 23.5	外面は1方向ヘラミガキで平直。外面は下平ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ。側部タテヘラミガキ後に斜上タテヘラミガキ後ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。内面は下平ヨコヘラミガキと上平ナデ。口縁部ヨコナデ。外底面が被熱石化し、そ以外の外面全体に覆が。内面下平に黒褐色の汚れが中間。	5Y3/1 オリーブ黒 粗い。白・赤粒～細粒と赤・透明細粒多 硬質	貯蔵穴底上16cm 口1/6直。側5/12直。底3/4直 1
14 土師器 壺	口 残 16.4 高 残 25.5 底 残 5.8 最大 23.9	外底面はおおそく多方向ヘラミガキで平坦に仕上げられる。外面は側部にヘラミガキ後、中位の積み上げ体止部付近にヨコヘラミガキ。内面側部ヘラミガキ。外面口-頸部ヨコナデ。外面の頸部に黄白色の土層が横位に盛り。製時時に土を1度用いていたと考えられる。頸は1段しの可能性がある。側下平は外面が被熱して内面に汚れが見られる。側上平は外面に覆が。	10YR6/6 明赤陶 やや硬質 白粒と白・黒細粒少 やや硬質	貯蔵穴底上3cm 口1/8直。側上平1/2直。底全周1.36。北東側直。北東、東ベルト、北ベルト

SG10区 SI-58 (第92図、写真図版97)

[位置] SG10区中央部の20-18グリッドにある。同じく古墳後期の遺構は、北にSI-59・110、南にSI-51がある。現代の掘乱(SX-308北側掘り込み)に西部を大きく削られている。時期不明の中央部柱穴群が周辺に多い。時期不明のP-375・376・383・403・404に切られる。時期不明のP-384・385と重複するが新旧関係は不明。時期不明のP-381a・381b・382・386・387・390・391はSI-58の推定範囲内にあるが、掘乱の底面で確認したので、SI-58との新旧関係や、SI-58に伴うかどうかは不明である。

[規模と形状] 方形の建物跡で、正方形または南北に長い長方形のどちらかを想定できる。主軸方位はGN-3°-E。東西残存長2.9m、南北長4.92m、残存壁高は北東隅で最大7cmで、南東部では2cm程しか残って



- SG10区 SI-58
- 1 埋褐色 白色粘土、黒土の混り、土が少し薄土。
 - 2 黄褐色 ソフトローム層、埋土穴周囲の腐土、腐土面跡の埋土層に相当。
 - 3 埋褐色 自由土多、黒土少し、ソフトローム層(約1-2cm)多、土が有、貯蔵六面刺の埋土上、貯蔵穴内側の黒土層に相当。
 - 4 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 5 埋褐色 ソフトローム粘土少し、土が有、黒土。
 - 6 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 7 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 8 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 9 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 10 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 11 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 12 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 13 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 14 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 15 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 16 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 17 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 18 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 19 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 20 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 21 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 22 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 23 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 24 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 25 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 26 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 27 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 28 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 29 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 30 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 31 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 32 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 33 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 34 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 35 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 36 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 37 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 38 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 39 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 40 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 41 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 42 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 43 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 44 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 45 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 46 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 47 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 48 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 49 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 50 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 51 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 52 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 53 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 54 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 55 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 56 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 57 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 58 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 59 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 60 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 61 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 62 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 63 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 64 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 65 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 66 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 67 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 68 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 69 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 70 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 71 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 72 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 73 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 74 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 75 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 76 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 77 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 78 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 79 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 80 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 81 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 82 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 83 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 84 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 85 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 86 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 87 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 88 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 89 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 90 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 91 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 92 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 93 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 94 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 95 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 96 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 97 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 98 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 99 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。
 - 100 埋褐色 ソフトローム多、土が有、黒土。

第92図 権現山遺跡 SG10区 SI-58 遺構・遺物

第52表 権現山遺跡 SG10 区 SI-58 出土遺物

番号 種類	大きさ 単位	特徴	色調 質土・焼成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土師器 杯	高 残 2.5 底 残 3.8	外底面は門前方向のヘラケズリで平底。外面体部は斜色のヘラナデ後ヘラケズリ。内面底面は多方向ヘラナデ。	7.5J86/6 緑 中～強い 灰色・透明細～細 粒や中多、白・赤點～細粒と 黒細粒少 硬質	北壁床土 2cm 底 5/12 直 2
2 土師器 杯	口 残 13~17 高 残 2.7	内面全体と外面口縁部をヨコナデ後、外面体部ヨコヘラケズリ。内外面を塗 仕上げしているかもしれないが不確定。	2.5Y4/1 黄灰 緻密 白・透明細粒少 硬質	貯蔵穴内 口 1/18 周 貯蔵穴
3 石器 砥石	長 残 3.5 幅 2.1~2.6 厚 残 1.1 重 残 9.0	1面を砥面に使用し、歯状の磨面がやや目立つ。左側面を使用したかどうかは 不明。右側面は図示したと深く明確な粗い溝状磨面が多いので、成形 時に粗く削った面と思われる。右側面は図の下部で内側に入っているので、 砥石の幅は下部が細くなる。	10Y8/3 浅黄緑 緻密でやや硬質な流紋岩質 灰岩	床直上 破片 床直上

いない。主柱穴は4本と推定され、東側のP1とP4を確認した。北西柱穴P2と南西柱穴P3を攪乱部に想定できるが、確実な遺構としては不明。時期不明の柱穴P-386・P-391をP2とP3に当てるのも一案だが、柱穴が南に寄りすぎて不自然とも考えられる。P1-P4の柱間は2.45m。2本とも同様に床面からの深さ46cm、柱径径約10cm。補助柱穴のうちP5～P9の5本は貼床除去後に床下で確認した。P7とP8は上部をローム塊で埋め戻された(カマド断面図の5・6層)、P7の上にカマド袖を作っている。床面からの深さはP5=35cm、P6=40cm、P7=60cm、P8=43cm、P9=30cm。貯蔵穴P10は北東隅にあり、東西88×南北79×深さ39cmで、時期不明のP-404に切られている(断面図E-E')。貯蔵穴の南側へ約70cmの範囲に、周囲の床面よりも1～4cm高い部分がある(断面図D-D'の床2層)。P11とP12は貼床除去後に確認した浅い小穴で、床面からの深さはP11=18cm、P12=17cm。入口施設・壁溝・間仕切溝はない。

【カマド】北壁の東寄りにある。両袖幅77cm、煙道先端から袖先端まで100cm。東西の袖は掘方を埋め戻した整地面に上に灰褐色土(カマド1層)で造られ、東袖の北部は残りが悪く崩壊・流出したと思われる。カマド下層の掘方は深く、その埋め戻し土であるカマド3層には焼土塊を少し含んでいるので、古い時期のカマドを壊した後に埋め戻した層と推定された。また、西袖は旧期の柱穴P7を埋め戻した上に造られている。この竪穴を正方形に復元した場合、北壁中央よりも東側に偏ってカマドが造られていることが、カマドの作り替えと関連するのかもしれない。

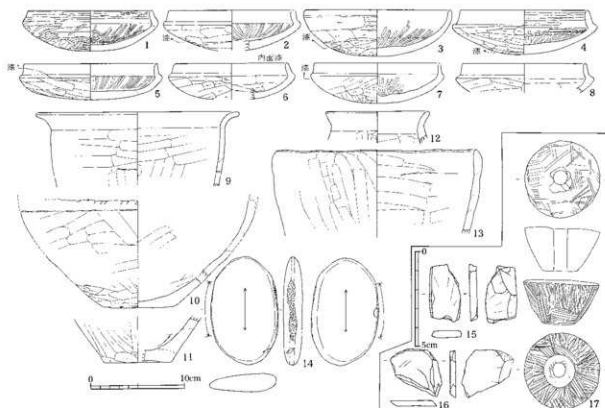
【覆土】竪穴の残りが悪いので覆土は1層だけ残っていた。貼床土の大半はソフトローム塊を主体とする床3層で、貯蔵穴南側の盛土層(床2層)や、古い柱穴P6の埋め戻し土(床4層、断面図I-I'のP6柱1層・柱2層)も認められた。

【遺物および出土状況】遺物は非常に少なく、小破片ばかりである。古墳中期と後期の杯の小破片を図示したうち、貯蔵穴で出土した後期の横椗杯口縁部破片がこの建物の時期を示していると判断した(2)。砥石(3)は比較的硬質。図示した以外に貯蔵穴覆土2層で出土した半球形杯片や大形破片も、この建物に伴う後期の遺物と考えられた。図示以外の土師器合計30片・227gの内訳は、杯11片・58g、壺・甕類18片・160g、甗1片・9g。

SG10 区 SI-59 (第93・94図、写真図版98・200)

【位置】SG10区中央部の20・18・19グリッドにある。同じく古墳後期の遺構は西にSI-110、南にSI-58がある。SI-59→SK-301→SK-300の順で、時期不明の円形土坑SK-300・301がカマド付近を切る(カマド断面H-H')。近世のSD-201と時期不明の不整形方形土坑SK-288・289・299に床面下10～20cmまで壊され、SI-59→SK-288・289→SD-201の順になる。土層の残りが薄いので、SI-59→SK-289の重複関係は推定を含む。攪乱・抜根で北部と西部を破壊されている。東壁部は削平されて不明だが、SD-201と同時期の近世溝SD-204がSI-59南東隅付近を切っていた可能性がある(SI-59→SD-201・204)。

【規模と形状】わずかに東西に長い方形と推定される建物跡で、主軸方位はGN-21°E。南北長は5.96m。東西両壁から主柱穴までの距離が同様と仮定した場合、推定東西長は6.2m。残存壁高は北壁カマド付近



第94図 権現山遺跡 SG10区 SI-59(2) 遺物

土粒が多い。煙道底から9～17cm 厚く裏底部片(11)はカマドを壊すSK-301内にあるが、原因の注記は燃焼部内(断面G-G'の6層)の遺物と記録している。燃焼部からSK-301への流入品と判断した。

【覆土】残りが薄いのでほとんど単層で、自然埋没と思われる。テフラの層や粒などは認められない。

【遺物出土状況】カマド周辺に最も多い。カマド内の遺物はカマドの項を参照。カマド西側では伏せた杯(3)の上に、口縁部が激しく磨耗した上向きの杯(2)が載り、その北側の床面では、壁に接して紡錘車(17)がある。カマド東側では杯(4)が床上5cmにある。北部を破壊しているSD-201に流入した裏破片もある(9)。南部では床面に砥石がある(14)。

【出土遺物】遺物は少ない。土師器杯は口縁部が内傾する身模倣杯が主体。6は少量の金色雲母細片を含む。雲母片を含む土師器はSG10区ではSI-12などにある。図示した他に、外傾口縁の模倣杯破片もある。12はきれいな胎土の小形甕。13は口縁部の仕上げナデを行わない特徴的な甕(または鉢)。図示しなかった土師器甕は長胴裏破片が見られ、高杯破片はごく少ない。図示以外の土師器合計241片・1.783gの内訳は、杯137片・558g、高杯9片・98g、小形甕5片・26g、壺壘類89片・1.088g、小形土器1片・13g。須恵器は器種不明(壺?)の小破片がある。紡錘車(17)は、粗い研磨や、泥岩の石材がやや特殊である。SG10区SI-36(鍛冶遺構)・SI-64a・75・SX-308やSG5区SI-4などに紡錘車があり、SG10区SI-36・75の紡錘車には刻線がある。緻密硬質なホルンフェルス製の砥石(14)は、SG10区ではSI-12などに例がある。退化した石製模造品か、またはその素材である粘板岩剥片は、図示した15と16の他に小破片が2点ある。粘板岩剥片はSG10区ではSI-47などに見られる。

第53表 権現山遺跡 SG10区 SI-59 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径13.1 高 残4.3 底大 径14.2	外面は体部ナデ後に底部1方向と体部に傾位のヘラケズリ。外面体部に多方向と口縁部に傾位のヘラミガキ。内面は体部に放射状ヘラミガキ。口縁部コナデア後ヨコヘラミガキ。仕上げは見られない。	2.5Y7/3 浅黄 やや暗赤 白・灰色・透明黒 ～細粒や中多。赤・黒粒 ～少 やや硬質	北東床上12cm。煎床の1片も接合 口1/2露。体2/3露 18。北西臥底

第5章 権現山遺跡 SG10 区

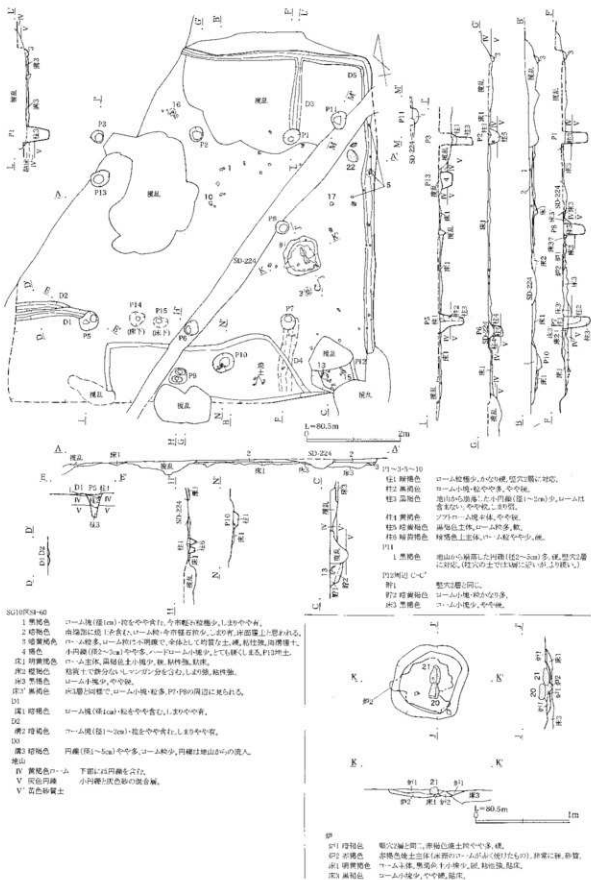
2	土師器 杯	口 13.3 高 残 4.3 最大 復 14.4	外面体部は横位のヘラケズリ後ヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部は密な放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面に漆仕上げ。口縁部と体部は透明釉。白・黒・透明釉ややや赤・灰色少	7.5YR6/6 橙 やや黒い。黒釉・細粒多。白・透明釉・細粒ややや赤・灰色少	カマド下床土 3cmで位置 口全周、底中央欠
3	土師器 杯	口 15.3 高 4.9 最大 15.6 重 残 350.5	外面は口縁部ヨコナデ後、底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は口縁部を軸近くヨコナデしただ後に、中～下位に密な放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面に漆仕上げ。	10YR3/1 黒黒 やや赤黒い。黒・透明釉・細粒ややや赤・灰色少	カマド下床土 3cmで位置 はほぼ完全
4	土師器 杯	口 13.6 高 4.7 最大 15.3 重 347.4	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面以下半部に放射状ヘラミガキ。外面の底部以外と内面に漆仕上げ。	5YR7/6 橙 やや赤黒い。黒・透明釉ややや赤・灰色少	カマド下床土 5cm 穴形 14
5	土師器 杯	口 復 14.0 高 残 3.8 最大 復 15.1	外面は底部多方向ヘラケズリ。体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。外面上段と内面に漆仕上げ。ただし、漆は残りが著しく不明瞭。	7.5YR6/3 に近い やや黒い。黒釉・細粒多。白・透明釉・細粒ややや赤・灰色少	北東部障土 8cm 口 1/3 周 17
6	土師器 杯	口 復 12.0 高 残 3.8 最大 復 13.3	外面口縁部ヨコナデ後、体部ヨコヘラケズリ。内面体部ヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面は全体を漆仕上げする。外面は漆仕上げの無が不明。	10YR6/3 に近い やや赤黒い。黒・透明釉ややや赤・灰色少	北東部障土 4cm 口 1/6 周、体 1/4 周 20
7	土師器 杯	口 復 15.2 高 残 4.3 最大 復 14.0	外面は底部に1方向と体部に横～斜位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部を密な放射状ヘラミガキ。外面上段と内面に漆仕上げ。口縁部がほとんど残っていないので底部形状は推定。	7.5YR6/6 橙 やや黒い。黒釉・細粒と透明釉・細粒少	南東部の12片が接合し、 南西部に2片あり 口 1/5 周、体 1/4 周 南東、南西
8	土師器 杯	口 復 12.9 高 残 2.9 最大 復 14.5	外面口縁部ヨコナデ後、体部ヨコヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラナデ。内面は全体を漆仕上げしている可能性もあるが不確実。	7.5YR5/4 に近い 細黒・白・黒細粒ややや赤・灰色少	口 1/6 周 15
9	土師器 土師器 土師器	口 復 21.4 高 残 7.8	内外面ともに胴上段に横位と中位以下に横位のヘラナデ。内外面口縁部にヨコナデ。	2.5Y7/3 浅黄 やや黒い。黒釉・細粒と白・黒細粒少	北東部からSD-201の底 1.7cm×8cm、南西部 の1片も接合 口 1/8 周、胴 1/6 周 15、南西
10	土師器 土師器	高 残 12.2 底 残 7.8 最大 復 24.8	外底面は本層底をナデ消している。外面胴部ナデ後、胴部下位ナメヘラケズリ。内面は底部に多方向と胴部に斜位のヘラケズリ。残存部の上端は積み上げ残し面に近い工具で後発焼成用の跡のみを入れた状態が見える。	10YR6/4 に近い やや黒い。白・黒・赤・透明釉ややや赤・赤黒少	南東床土 3～10cm 胴下平～底 1/2 周 24、25、27、南西、南東、南東Aトレ
11	土師器 甕	高 残 4.9 底 6.9	外底面は四人中央をナデ。外唇をヘラケズリ。外面は胴部に斜位と下段に横位のヘラケズリ。内面はヨコヘラナデ。	10YR5/4 に近い やや黒い。白・灰色細粒多。赤・灰色細粒と赤・黒・透明釉・細粒少	カマド障土からSK- 201へ拡大(床土17cm) 胴～底 1/3 周 3カマド
12	土師器 小片甕	口 復 11.0 高 残 3.4	胴部は外面タテヘラケズリ。内面ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。	10YR7/6 明黄 細黒・白・黒・透明釉ややや赤・灰色少	北東部 口 1/8 周、胴 1/4 周 15
13	土師器 甕	口 復 21.2 高 残 9.0	外面タテナデ後に縁ならタテヘラケズリ。内面ヨコヘラナデ。内面は積み上げ残しを残す。内外面ともに口縁部のヨコナデし仕上げを行わない。	10YR7/6 明黄 やや赤黒い。黒釉ややや赤・灰色少	カマド障土床土～床土 6 cmとP5 底 1.4cm 口 5/2 周 16、21、32等、北西南床
14	石製 砥石	長 11.3 幅 7.0 厚 2.0	扁平な自然産をそのまま利用。両方の平面と長側縁のうち片方を研削に使用し、平面面はかを少許削ぎ残す。長側縁のうちもう一方は、磨込に使用した痕を顕著に残す。重量 238.8g。	10Y5/1 灰 細黒で非常に微少なホルン ブルス	中央南面床土上 23
15	石製焼土 削片	長 3.0 幅 1.6 厚 4.0	両面とも断面に沿った割れ面で、外唇は折れ面。切削や研削の痕は認められない。重量 2.8g。	7.5Y6/1 灰 細黒で軟質な粘板岩	南西部 定形 南西
16	石製焼土 削片	長 2.5 幅 2.4 厚 0.3	両の上辺だけがやや変化した自然産で、他の側面と両面は断面に沿った割れ面。切削や研削の痕は認められない。重量 2.6g。	7.5Y7/1 灰白 細黒で軟質な粘板岩	南西部 定形 南西
17	石製巾 石製巾	径 3.94× 3.97 厚 2.23 重 38.2	側面は非常に細い縦方向の擦痕。上面は同様の擦痕を少し消したような浅い多方向擦痕があり、下面はほとんど消されわずかに残る。上面が孔径 7.6～7.8mm、下面が孔径 7.1～7.4mm。上面の孔周囲には穿孔跡が目立つので、下面から穿孔したと考えられる。	7.5Y4/1 灰 灰質	カマド内明燐床土上 定形 30

SG10 区 SI-60 (第 95-96 図、写真図版 98・99・200)

【位置】 SG10 区中央部の 20-17 グリッドおよび 21-17 グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、北に SI-64、東に SI-61、南に SI-50・106 がある。時期不明の SD-224 に切られている。西側は採土工事で破壊されている。後世の擾乱を床面レベルまで受けた部分が、中央部・北東部・南壁中央部・南東隅・貯蔵穴 P12 北側などにある。

【規模と形状】 方形の建物跡で、主軸方位は GN-10°-E。東西 7.68 × 南北 7.46m。壁の残存高は北部で最大 10cm あり、それ以外では 3～9cm しか残っていない部分が多い。北壁も、上部は擾乱されている。

主柱穴は P1～P8 の 8 本と推定されるが、西側中央の P4 だけは推定位置で柱穴を確認できず、欠番にした。柱間は、南北 3.82 (東側)～3.85m (西側)、東西 4.08 (北側)～4.12m (南側)。柱穴径は 20cm 前後 (16～22cm) で、推定柱径は 20cm 弱である。隅柱が深くで中間柱が浅く、床面からの深さは P1=55cm、P2=24cm、P3=70cm、P5=53cm、P6=31cm、P7=61cm、P8=40cm。各主柱穴の下半部は地山ローム層下にある砂礫層 (V層) に掘り込んでいる。P7 と P8 の周辺にある床 3' 層は、裏込土と考えられる。



第95図 権現山遺跡 SG10区 SI-60(1)遺構

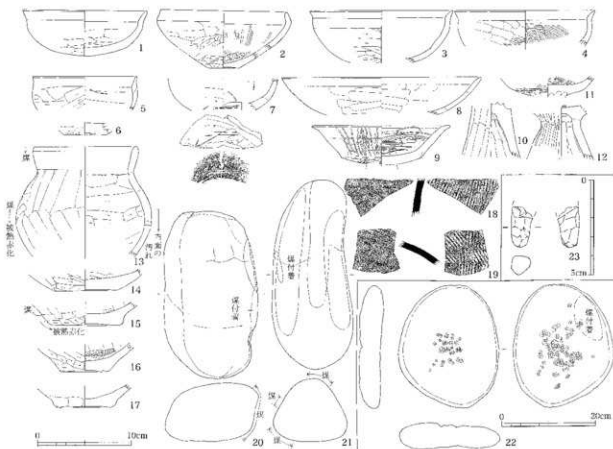
入口部が低くなる点が SI-25 に類似する。東西 4.3 × 南北 1.1 ~ 1.5m の範囲で、南壁寄りの床面が 3 ~ 8cm 低い範囲が入口施設と考えられる。この入口施設周囲に土手状盛土が巡っていたことを想定できるが、この付近では遺構確認面が竪穴床面とはほぼ同じなので土手を確認できなかった。入口ピット（梯子穴）の可能性を持つ P9 と P10 がこの範囲内にあり、周囲からの深さは P9 が 16 ~ 19cm、P10 が 12cm。他に、竪穴の北東部に補助柱穴 P11（径 36 × 深さ 18cm）、北西部で P13（径 33 × 43cm・深さ 30cm）がある。南西部で貼床除去後に浅い穴 P14（床面から深さ 5cm）と P15（深さ 14cm）が認められた。

南東隅にある貯蔵穴 P12 は東西 95 × 南北残存 64cm（推定 70 ~ 90cm）× 深さ 8cm。壁溝 D5 は北側と東側で認められ、深さ 14 ~ 18cm。P1・P5・P7 に間仕切溝 D1 ~ D4 が接続する。間仕切溝の幅は 20cm 前後（広くても 30cm 未満）で、床面からの深さは D3（P1 北側溝）が 9 ~ 11cm、D1 と D2（P5 西側溝）が 2 ~ 3cm、D4（P7 南側溝）が 11 ~ 13cm。P5 西側の間仕切溝は南溝 D1 が北溝 D2 を切り、D1・D2 の覆土は自然流入と判断された（断面図 D-D'）。P7 南側の間仕切溝 D4 は床面で確認できず貼床除去後に確認したもので、南端部は入口施設の一段低い部分の下部に入り込んでいる。貼床土中には自然礫が混じっていて、竪穴を掘削した地山 IV 層・V 層に混在している自然礫を貼床に混ぜたと考えられる。

【炉】南東部にあり、南北 78 × 東西 82cm の隅丸方形で、底面は中央部が周囲よりも少し深い。よく焼けた炉 2 層が底面に広がっている。長さ 18cm 前後の自然礫が 2 点、炉の覆土中に少し重なって置かれている（20・21）。

【覆土】覆土が薄いのであまり層を分けられなかったが、貯蔵穴 P12 の土層から見て自然埋没と思われる。古墳時代の白色テフラ粒などはなく、縄文草創期の今市軽石が少し混入していた程度である。

【遺物出土状況】遺構の残りが 10cm 以下なので、遺物はすべて床面に近い。東半部および貯蔵穴 P12 付近にやや遺物が多い。貯蔵穴覆土の上層には口を西に向けた完形に近い小形甕が横転している（13）。北東部



第96図 権現山遺跡 SG10 区 SI-60 (2) 遺物

の床面には台石が置かれていた(22)。

【出土遺物】7は外面を研磨具に転用した鋭い沈線状の痕跡が残る。やや薄く丁寧で口縁が外反する9や、密に磨く11は、通有の高杯と少し異なる。15のように白色針状物質(骨針)を含む土師器は搬入品で、SG10区SI-23などに見られる。内面を丁寧にナデ消して無文にした須恵器甕破片が2点あり(18・19)、SG10区SI-10などで出土した破片に少し似ているが、別物と判断した。土製品(23)は土製勾玉などの土玉破片かもしれない。土製勾玉はSG10区SI-6にある。台石(22)は床面に置かれていたので、縄文時代の石皿兼凹石を古墳時代に再利用した可能性がある。

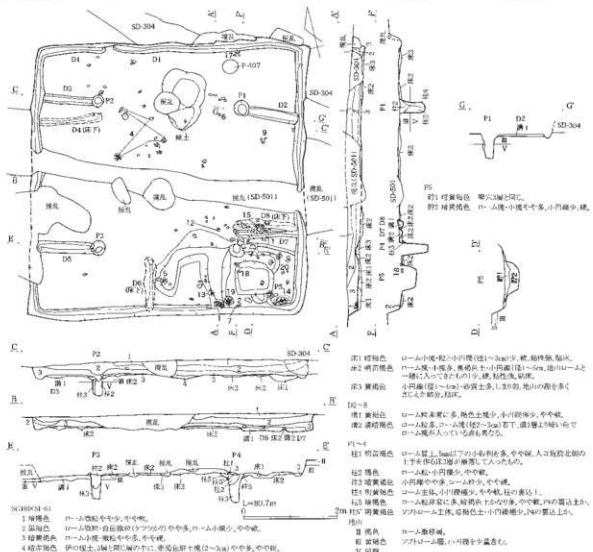
各器種ともに破片数は多いが、あまり接合できなかった。図示した以外の遺物量は少なめで、杯類口縁部は内斜口縁3点以上と半球状1点があり、初期模倣杯破片は図示したのだけである。高杯は脚柱部で数えて6点、壺甕類は図示以外に底部で数えて3点。図示以外の土師器合計449片・3.393gの内訳は、杯147片・656g、高杯64片・583g、小形壺5片・81g、壺甕類233片・2.073g。図示以外の須恵器は頸～甕の胴部小破片が3片ある。これらの他に平安時代の須恵器杯と思われる小破片1片がある。

第54表 権現山遺跡SG10区SI-60 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (mm)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径132 高 48	外面は底面に多方向ヘラナデ、口縁部に横位のナデ。内面は体部をヨコヘラナデし、口縁部をヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや粗い 赤褐色と白・黒・赤・透明細粒や少 やや破片	中央床土2mと遺構確認 面 口1/8周 55、北西隅見、上面
2 土師器 杯	口 径13.4 高 梗約6 底 径3.2 最大 径14.0	口縁部と底部破片の接合する箇所がないので器高は推定。外面は体部上位に磨かなナデ後、中位以下と外底面を主にヨコヘラナデして凹底にする。外面口縁部と内面ヨコナデ。内面体～底部に縦および斜位のヘラミガキ。	5YR5/6 明赤褐色 やや粗粒 透明粗～細粒と黒 細粒や少。灰色粗粒と白細粒 少・破片	野塚穴北側の視見 口1/6周。底1/3周 C・Bベルト視見。C東隅見
3 土師器 杯	口 径15.0 高 梗5.5	口～体部境のラインが内外面で比較的明瞭に屈曲する。外面は体部ヨコヘラナデり、口縁部ヨコナデ。内面はかなや磨耗しているので調整が不明。	7.5YR7/8 黄褐色 やや粗い 赤・黒・透明粗粒 や少。白粗～細粒少 やや破片	南東床直土上南東隅視 見 口1/6周 18、C西辺視見
4 土師器 杯	口 径14.7 高 梗3.8	口～体部境の線が内面で明瞭。外面は口縁部ヨコナデと体部ナメヘラナデの後に体部下位ヨコヘラミガキ。内面は口～頸部ヨコナデ後に体部を横一 位ヘラミガキ。	5YR5/8 明赤褐色 やや粗粒 白・赤粗～細粒と 黒・透明細粒少 やや破片	口1/4周 北東隅見
5 土師器 杯	口 径11.0 高 梗3.6	口～体部境の線は内面で明瞭。外面は体部ナデと口縁部ヨコナデの後に体部ナメヘラナデり。内面は体部に横位のヘラナデまたはナデの後に口縁部 ヨコナデ。	5YR6/6 橙 やや粗粒 赤・透明粗～細粒 多。白・灰色粗粒と白・黒細 粒少・やや破片	東部床土3mと壁直上 3～6cmが接合 面 口1/6周 38、40、42
6 土師器 杯	高 梗1.3 底 径4.4	外面は中央部ナデ。外側部は粘土貼付後に多方向のヘラナデ。外面の胴部 下縁はコヘラナデり。内底面は放射状ヘラミガキ。被熱面は見られない。	2.5YR5/8 明赤褐色 やや粗い 灰色粗粒と白粗～ 細粒や少。黒・透明粗粒少 破片	底全周 A・Bベルト西へ視見。北 東隅見
7 土師器 杯	高 梗3.4 最大 径11.6	外面は主に横位のナデ。内面は横～斜位のヘラナデ。研磨具に転用した鋭い 沈線状の痕跡が外側にある。	5YR6/6 橙 やや粗粒 赤粗～細粒多。白 粗～細粒と黒・透明粗粒や少 やや破片	中央～西側の視見 見 1/4周 A・Bベルト西隅見
8 土師器 高杯	口 径21.0 高 梗4.0	内外面ともに杯体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。ただし南側気味なので不明瞭な部分が多い。	5YR6/8 橙 やや粗い 白・黒細粒と灰色 細砂多。灰色赤と透明粗粒と 赤粗～細粒少 やや破片	北西側の視見部 口1/6周 1・6ベルト北隅見
9 土師器 高杯	口 径14.5 高 梗4.1	口縁部が外反する。外面は杯体部ナメヘラナデと下縁～底部ヨコヘラナ デり。口縁部ヨコナデ。全体をタテヘラミガキ。内面は杯体部ヨコヘラナデと 口縁部ヨコナデ後に全体をヨコヘラミガキ。杯底部外面中央に体を接合した 面が鋭がれている。	5YR6/6 橙 破片 黒・透明粗粒や少。赤 粗粒と白細粒少 やや破片	遺構確認面 口1/12周。杯底1/3 周 上面
10 土師器 高杯	高 梗5.8	外面はおそらくタテヘラナデり後にタテヘラナデで、ヘラミガキをしている かもしれないが南側気味なので不明。内面はタテナデ。	7.5YR8/6 黄褐色 やや粗い 赤・黒細粒多。白 粗～細粒少。灰色粗 粒少・やや破片	中央床直土上 脚柱全周 52
11 土師器 高杯	高 梗2.2	外面は杯底部を縦～斜位ヘラナデ。杯体部に横位と斜位の密なヘラミガキ。 内面は多方向の密なヘラミガキ。	5YR6/6 橙 縦面 灰色・透明粗粒と白・ 赤粗粒少	遺構確認面 杯底1/2周 上面
12 土師器 高杯	高 梗5.7	外面のタテヘラミガキは脚部がやや少で、杯底部がやや少に磨いている。 杯内面は杯底部に密な1方向ヘラミガキ。胴内面は横位後に縦位ナデ。	2.5YR6/6 橙 やや粗い 赤・黒細粒多。 黒・透明粗粒と白粗 粒少・やや破片	遺構確認面 脚柱全周 上面
13 土師器 小形壺	口 径10.7 高 梗11.6 最大 径14.2	外面は胴部ナメナデ後に口縁部ヨコナデ。内面は胴部に斜～横位ヘラナ デり斜部ナデ。口縁部ヨコナデ。外面中位を縦にして下が被熱赤化し、上 に厚層付。内面中下下に黒色の汚れが見え少られる。	10YR4/3 に近い黄褐色 やや粗い 白・透明粗～細粒 多。黒細粒と黒細粒少 やや破片	野塚穴直上10cm 口3/4周。胴2/3周 1
14 土師器 壺	高 梗2.3 底 径6.4	外底面は中央部1方向の後に外側部を削り、わずかに凹底状。外面胴部に横 ～斜位のヘラナデり。内底面はおおよそ1方向のヘラナデ。被熱面等は見 られない。	2.5Y4/1 黄灰 粗い 透明粗粒と白粗～ 細粒多。白・灰色赤や少。黒細 粒少・破片	底5/12周 B・ベルト北隅見

第5章 権現山遺跡 SG10区

15 土師器 土器	高 残 2.5 底 6.0 ~ 7.4	外底面は中央部に1方向と外周部に円周方向のヘラケズリ。外面側部に横切と縦位のヘラナデ。側下部にヨコラケズリ。内面は多方向ヘラナデ。外底面に縦が少量付着し、外底面が焼熟する。	10YR6/4 近い黄褐色。やや白い。白・透明細～細粒多。白粒胎と黒・灰色粗～細粒やや多。白輝と白色針状物少量。やや破質。	貯蔵穴底上5cm 底 3/4周 10
16 土師器 土器	高 残 3.0 底 復 5.0	外底面は中央部に1方向ヘラケズリ。外周に薄く粘土貼付後にヘラナデ。外面側下部ナメヘラケズリ。内面は多方向ヘラナデと底外周にヨコホ。外底面全体が焼熟している可能性あり。	7.5YR4/2 灰褐色。やや白い。白粒胎多。透明細～細粒と黒細粒やや多。破質。	北部床土5cm 底 1/4周 57
17 土師器 土器	高 残 2.4 底 復 5.8	外底面にやや磨なナデ。外面側部に横～斜位ナデ。内面は磨滅しているため調整不明。焼熟帯は見られない。	10YR6/4 近い黄褐色。やや白い。白・黒・透明細～細粒多。灰色輝～細粒と赤細粒少。やや破質。	南部床土2cm 底 1/3周 32
18 土師器 土器	高 残 4.0	外面は木目行の溝を帯った明き板で縦位の平行明き。内面は横位のナデで無文。19と同じ個体かもしれない。	G5Y1 灰褐色。白粒胎微量	遺構跡底面 側下部一部 上面
19 土師器 土器		外面は木目行の溝を帯った明き板で縦位の平行明き。内面は横位のナデで無文。外面に非常に薄く灰黄色に発色した自然釉がかかる。側部上平の破片。18と同じ個体かもしれない。	G5Y1 灰褐色。白粒胎微量。やや破質。	側上平一部 北東隅点
20 土師器 土器	長 17.4 幅 9.8 厚 6.2	断面が楕円形で棒状の自然の河原石。隅の右上部が薄く剥離破損して、右下部に縦が付着する。明確な焼熟帯は認められない。重量 1625.4g。	10YR7/4 近い黄褐色。比較的緻密で破質な安山岩。	伊底上4cm 底 1/4周 62
21 土師器 土器	長 19.9 幅 8.5 厚 6.6	断面が楕円三角形状で棒状の自然の河原石。側上平の縁に近い部分を中心として縦が付着する。明確な焼熟帯は認められない。重量 1565.0g。	10YR6/2 灰黄褐色。安山岩。	伊底上2cm 底 1/4周 63
22 土師器 土器	長 25.7 幅 21.2 厚 5.6 重 3478.0	断面の中央がごくわずかに凹む板状の石の両面を使用し、縦行によって「粒」の裏石に状になっている。最も深い凹みは深さ4～6mm程度。側面使用面は細粒胎は見られない。片面の隅示部に薄く縦が付着する。縄文時代の石面を古物時代に再利用した可能性もある。	G5Y1 青灰色。非常に多量で破質な安山岩。	北東床土2cm 底 1/4周 64
23 土師器 土製品	高 残 2.1 底 残 2.0	わずかにカーブする棒状製品の先端部で、全面をスピナデで丁寧に仕上げた。土製玉の可能性もある。孔や使布物は認められない。	10B6/8 赤褐色。白・黒粒胎微量。やや破質。	北西隅点



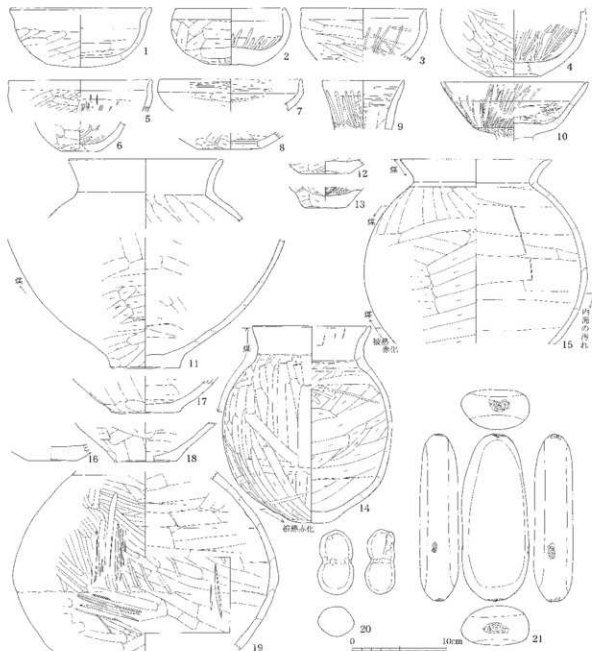
第97図 権現山遺跡 SG10区 SI-61 (1) 遺構

SG10区 SI-61 (第97-98図、写真図版99・100・200)

【位置】SG10区中央部の21-18グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は西にSI-60・64、東にSI-76がある。北東部を古墳中期末築ころのSD-304bと時期不明のP-407に切れ、SD-61→SD-304b→P-407の順序が考えられる。東西方向の攪乱溝(調査時名称SD-501)に中央部を切られる。

【規模と形状】方形の建物跡で、主軸方位はGN-16°30'E。東西5.94×南北6.00m、残存壁高は最小17cm(北西部)～最大36cm(南東部)。主柱穴は4本で、柱間は南北2.95m(東側)～3.15m(西側)、東西2.90m(南側)～3.05m(北側)。P1・P2の柱痕からみると柱径は約14cmで、床面からの深さはP1=52cm、P2=43cm、P3=52cm、P4=59cm。各柱穴の中位よりも下部は地山円礫層(V層)に掘り込んでいる。P4の上部外周に、竪穴の貼床施工前に柱裏込土を入れたことがわかる(柱5層と柱5'層)。

貯蔵穴P5は南東隅にあり、東西82×南北69×深さ35cm。P5の西側には入口施設と考えられる土手



第98図 権現山遺跡 SG10区 SI-61(2) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

状盛土がコ字形に巡り、規模は東西 163 × 南北 140 ~ 170cm、床面からの高さが 3 ~ 6cm。この土手は、地山に見られる円礫を多く含む土を貼って作られている（床 3 層）。貯蔵穴を掘る時に地山 III 層から掘り出した礫混じりローム土を、貯蔵穴と入口の周囲に積んだと考えられる。全周する壁溝 D1 は深さ 2 ~ 8cm。間仕切溝は D2 ~ D8 の 7 本があり、幅 20cm 前後。床面で確認した 4 本のうち D2・D3・D7 は床面から深さ 4 ~ 6cm で、南西柱穴 P3 に附属する D5 はやや深い（7 ~ 11cm）。貼床除去後に確認した間仕切溝 D4・D6・D8 は、床面レベルから溝底面までが 8 ~ 17cm の深い溝で、埋め戻された旧期溝の可能性もある。入口施設の西側にある D6 の北端部は床面下 18cm まで深くなる。

【炉】北側主柱穴の間付近にある。北部の幅が広い卵形で、東西 94 × 南北 130cm × 床面から深さ 7cm。炉の南半部では断面図 C-C' の 4 層に焼土が見られるのに対して、炉北半部の底面は焼土・炭・灰が全くみられず、炉北半部では火をあまり焚かなかったとも考えられる。北半部の炉底面に見える黒色土が床下まで続き、その下方で掘方底が床面下 24cm まで土坑状に深くなっていたので、古い時期に木根などで床面下まで掘乱された可能性も、調査時の所見で指摘されている。

【覆土】自然埋没と思われる。2 層に含んでいる白色微粒は古墳時代遺構の覆土によくみられるテフラ粒の可能性があり、分析は実施していないが古墳後期初頭に降下した Hr-FA に相当することが考えられる。

【遺物出土状況】貯蔵穴 P5 周辺以外では、遺物が少ない。貯蔵穴の南側では床面上数 cm のレベルに杯・壺・甕があり（2・14・19）、2 と 14 は貯蔵穴 P5 に転落流入した破片と接合した。貯蔵穴北側では D7 周辺の床付近に甕 11・15 がある。高杯（10）は竅穴の北西部で出土し、SD-304 にも破片が混入していた。平安時代の土坑 SK-235 で出土した須恵器大甕片と同一個体と見られる小片が 1 点ある。

【出土遺物】2 と 4 はかなり深い杯。体部境に稜を持ち、口縁部を横に磨く 7 は、須恵器杯の影響を受けた初期模倣杯と考えられる。甕は胴部が丸く、煤が目立つ（14・15）。14 はやや不明瞭な平底。19 は外面を研磨具に転用した大形甕。図示以外の土師器は小片ばかりで合計 332 片・3.049g あり、その内訳は杯 160 片・932g、高杯 11 片・80g、鉢 1 片・42g、小形壺 2 片・20g、壺甕類 157 片・1.960g、甕 1 片・15g。図示した以外の杯底部は 4 点（平底 1・丸底 3）、甕底部は 5 点ある。長さ 7 ~ 10cm くらいの小礫が約 10 点ある。縄文時代の田戸下層式土器片・打製石斧・敲石なども混入していた（『東谷・中島地区遺跡群 10』の第 36 図 47・49・56・58・68・81、第 37 図 91、第 48 図 44）。

第 55 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-61 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ *cm *g	特 徴	色調 質・組成 (または素材)	出土位置 現存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 15.0 高 残 6.3	外面は口縁部ヨコナデ、底部に 1 方向と体部に横位のヘラナデ。外面体部はヘラナデの前にヘラナデをしていて可能性はある。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ。口縁部ヨコナデ。	5YR6/6 糖 やや密質 白粗～細粒と黒・ 透明細粒やや多、赤・灰色 細粒少 軟質	南西側床土 5cm 口 1/2 周、底全周 36
2 土師器 杯	口 11.5 高 6.0 最大 12.9	底部が非常に厚く重い。外面は体部上位ナデ、底部に多方向と体部中～下位に横方向のヘラナデ。内面は底部にやや雑なナデと口～体部にヨコナデ後、体部に放射状ヘラミガキ。	7.5YR7/6 糖 やや密質 白粗～細粒と黒 細粒やや少、白・灰色調と赤 細粒と透明細粒少 やや硬質	南東床土 7 ~ 8cm と野 倉穴底 20cm 内接合 口 3/4 周 2, 32, 33, 北東
3 土師器 杯	口 復 13.2 高 残 5.6	外面体部上平にナデまたはヘラナデ後、中位以下ヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデと体部ヘラナデ後、縦ならぬおまけ斜位のヘラミガキ。外面全体に優存。	7.5YR7/6 糖 やや密質 白・黒・透明細粒 少 やや硬質	北西部の掘戻溝へ流入 口 1/6 周 北西側床 (SD-501)
4 土師器 杯	高 残 7.2 底 復 5.6 最大 復 15.4	下下部が厚く重い。外面は軽い多方向ヘラナデで凹底状。外面体部ナメヘラナデ。内面はヨコヘラナデ後にタテヘラミガキ。	10YR5/4 土赤・黄褐色 やや密質 黒・透明細粒やや多、 赤細粒と白細粒少 やや硬質	中央床直上～床土 2cm が 接合 底 1/2 周、体 2/3 周 46, 47, 61, 62, 66
5 土師器 杯	口 復 15.0 最大 復 15.3	外面は口縁部ヨコナデと体部縦～斜位ヘラナデ。内面は体部ヨコヘラナデ後にタテヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。	5YR6/8 糖 やや密質 白・灰色粗～細粒 と中細粒 少 やや硬質	南西床土 5cm 口 1/6 周 41
6 土師器 杯	高 残 2.5 底 復 4.0	外面は多方向ヘラナデで平底。外面体部ヨコヘラナデと体部下端ナメヘラナデ。内面はナメヘラナデ後ナメヘラナデ。	10YR5/4 土赤・黄褐色 やや密質 白粗～細粒やや多、 透明細粒と黒細粒少 やや硬質	北東床直上 底 5/12 周 72
7 土師器 杯	口 復 15.0 高 残 3.4	残存部分が少ないので、復原性は参考値。外面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。体部ヨコヘラナデ。内面は口縁部から体部までヨコナデ後ヨコヘラミガキで、体部のミガキは少し斜めに。	2.5YR4/8 赤黒 やや密質 白細粒多、赤細粒 と黒・透明細粒少 やや硬質	南東側床土 10cm 口 1/6 周 34, A・B・C 南端 3 層
8 土師器 甕	底 復 6.2 孔 復 5.6	小破片から復原しているので、復原性は正確ではなく参考値。外面ナメヘラナデ。孔縁部ヨコヘラナデ。内面割製ナメヘラナデ。	7.5YR6/3 土赤・黄褐色 やや密質 黒・透明細粒やや多、 白細粒少 少軟質	底 1/6 周 南西側床

9 土師器 小砂器	口 復8.6 底 残5.2	堀の接合部で破損した破片。外面はタテハラズリと頸ト端ナメハラズリ。口縁部ヨコナデ。全体を粗くタテハラミガキ。内面は頸部にヨコおよびナメハラズリ。口・頸部上平ヨコナデ後コハラミガキ。	7.5Y8/6 浅黄緑 やや軟質 赤磁粒と黒・透明 やや軟質	中央部床土9cm 口1/3周 12、北壁中央破片
10 土師器 高林	口 復15.0 底 残6.0	外面の扉底は厚割ヨコハラズリに類似したハラズリ。外面扉部ヘラナデ(白)と口縁部ヨコナデの間にナメハラミガキ。内面は扉底部多方向ハラズリ。扉部ナメハラズリ。口縁部ヨコナデの間に斜位ハラミガキ。 [注記]2.16-18.4、北西3層、SD-304 194、200、208、210、215	2.5Y8/3 明赤褐色 やや軟質 赤磁粒と白磁粒 粉多、白磁と透明期一細粒 粉多、白磁と黒・透明期一細粒 粉多 やや軟質	北西側の遺構跡部と3層が結合。SD-304に7片置入。口1/3周。扉底全周に結合部 南東床土→床土21cm 結合部 口1/3周。扉部へ下位1/3周。底3/4周 注記は左欄
11 土師器 甕	口 復16.4 高 残17.9 底 7.4	外底面は中央凹み。外壁は薄く粘土を貼ってナデ。外面頸部下端ナメハラズリ。頸部ヘラナデで下半コハラズリ。内面は頸部ヨコハラズリ。扉部ナメハラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。外面扉部は磨面が著しい調整不明磁。外面中に炭片着。 [注記]14、5、8～10、14、15、17、19、20、23、24、44、Bベルト東2層、Bベルト東3層、Bベルト西3層、Bベルト南3層、Bベルト南2層、南東、南東区1層、南東2層科、南西区、P5上面	2.5Y7/3 浅黄 やや軟質 赤磁粒と白磁 透明期やや軟質、白・灰色、 透明磁少 やや軟質	南東床土→床土21cm 結合部 口1/3周。扉部へ下位1/3周。底3/4周 注記は左欄
12 土師器	高 残1.1 底 5.5	外底面は外側に粘土を貼って多方向ハラズリ。中央が1段凹む。外面下端ヨコハラズリ。内面底面は1段凹むの跡ナデ。	5Y8/3 に近い赤褐色 やや軟質 白・灰色磁粒と白 白・透明期一細粒多、赤磁粒 と黒磁粒少 硬質	南東床土2cm 底全周 21
13 土師器 甕	高 残2.3 底 4.4	底面が厚く割面が深い。外底面は1方向ハラズリ。外面頸部下端にヨコハラズリ。内面は底面に多方向と頸部に横位のハケメ。外面の頸部から底面にかけて径6cm大の黒炭があるので、煮炊には使っていないと思われる。	7.5Y8/6 緑 やや軟質 白・灰色磁粒と赤 赤・透明期一細粒 硬質	南東床土4cm 底全周 38
14 土師器 甕	口 復12.6 高 25.7 底 3.5 最大 18.0	外底面は多方向ハラズリで、外壁が不明瞭な平磁。外面頸部はタテハラズリ。頸部に厚い炭片着。内面は頸部下端ナメハラズリ。頸中にナメハラズリ。肩部ナメハラズリ。口縁部ヨコナデ。外面の底面が少し黒炭。口・頸部に炭が若干着存。 [注記]11、2、27、28、32、100、南東区1層、南東1層	5Y8/2 灰褐色 やや軟質 透明磁粒と白・灰色 白磁粒と赤磁粒、白・灰色磁粒 と赤磁粒や赤磁粒や少 硬質	南東床土2cm。扉底の 径7～15cmと部底穴 底土10cmの破片と結合 口1/12周。頸1/2周。 底全周 注記は左欄
15 土師器 甕	口 復16.0 高 残19.4 最大 23.6	外面頸部ナメハラズリで後に頸中に以上ヨコハラズリおよびコハラズリ。内面頸部ヨコハラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。外面頸下が破損して頸中位と口縁部に炭が多量に付着。内面頸下に黒炭の汚れが付着。 [注記]16、10～13、57、Bベルト東2層	2.5Y8/3 に近い黄 やや軟質 白・黒、赤磁粒多 白磁と白・灰色、透明期一細 粒粉多 やや軟質	南東床土3～6cmで結合 口1/3周。北壁にも破片あり 口1/3周。頸1/2周。 頸1/6周 注記は左欄
16 土師器 大形甕	底 5.6	外底面は多方向にハラズリで中央がわずかに凹む。外面頸部ナデ。内面底面ハラズリまたはハラミガキで強い炭片着。	7.5Y8/4 に近い黄褐色 やや軟質 白磁粒多、赤磁粒 と黒・透明期一細粒 硬質	底1/2周 北西側瓦片
17 土師器 大形甕	高 残3.7 底 7.3	やや突出している外底面を1方向ハラズリ。中央がわずかに凹む。外面頸部タテナデ。頸部下端ナメハラズリ。内面は底面多方向ナデと頸部ヨコハラズリ。	7.5Y8/6 緑 やや硬質 白・透明期一細粒粉多、白 白と赤磁粒少 やや軟質	北壁厚床土直 底1/2周 76
18 土師器 大形甕	高 残4.2 底 残6.4	外底面は斜位、多方向のハラズリで少し凹む。外面頸部にナメハラズリと斜位ハラズリ。内面はヨコハラズリ。	2.5Y8/6 明赤褐色 硬質 白磁粒やや軟質、赤・黒 黒・透明期一細粒 硬質	南東床土28cm 底1/4周 31
19 土師器 大形甕	高 残18.0 最大 28.2	外面は頸下位に斜位のナデとハラズリ。中～上位にナメハラズリ後斜位ハラミガキ。頸部ヨコナデ。内面はヨコハラズリで、中位の積み上げ休止部より上は物陰の多い土質を従う。積層間に転用した平行割線状磁粒が外面に多い。不明瞭な炭が少量外面に付着する。 [注記]17、18、19、20、21、22、23、24、25、26、27、28、29、30、31、32、33、34、35、36、37、38、39、40、41、42、43、44、45、46、47、48、49、50、51、52、53、54、55、56、57、58、59、60、61、62、63、64、65、66、67、68、69、70、71、72、73、74、75、76、77、78、79、80、81、82、83、84、85、86、87、88、89、90、91、92、93、94、95、96、97、98、99、100、101、102、103、104、105、106、107、108、109、110、111、112、113、114、115、116、117、118、119、120、121、122、123、124、125、126、127、128、129、130、131、132、133、134、135、136、137、138、139、140、141、142、143、144、145、146、147、148、149、150、151、152、153、154、155、156、157、158、159、160、161、162、163、164、165、166、167、168、169、170、171、172、173、174、175、176、177、178、179、180、181、182、183、184、185、186、187、188、189、190、191、192、193、194、195、196、197、198、199、200、201、202、203、204、205、206、207、208、209、210、211、212、213、214、215、216、217、218、219、220、221、222、223、224、225、226、227、228、229、230、231、232、233、234、235、236、237、238、239、240、241、242、243、244、245、246、247、248、249、250、251、252、253、254、255、256、257、258、259、260、261、262、263、264、265、266、267、268、269、270、271、272、273、274、275、276、277、278、279、280、281、282、283、284、285、286、287、288、289、290、291、292、293、294、295、296、297、298、299、300、301、302、303、304、305、306、307、308、309、310、311、312、313、314、315、316、317、318、319、320、321、322、323、324、325、326、327、328、329、330、331、332、333、334、335、336、337、338、339、340、341、342、343、344、345、346、347、348、349、350、351、352、353、354、355、356、357、358、359、360、361、362、363、364、365、366、367、368、369、370、371、372、373、374、375、376、377、378、379、380、381、382、383、384、385、386、387、388、389、390、391、392、393、394、395、396、397、398、399、400、401、402、403、404、405、406、407、408、409、410、411、412、413、414、415、416、417、418、419、420、421、422、423、424、425、426、427、428、429、430、431、432、433、434、435、436、437、438、439、440、441、442、443、444、445、446、447、448、449、450、451、452、453、454、455、456、457、458、459、460、461、462、463、464、465、466、467、468、469、470、471、472、473、474、475、476、477、478、479、480、481、482、483、484、485、486、487、488、489、490、491、492、493、494、495、496、497、498、499、500、501、502、503、504、505、506、507、508、509、510、511、512、513、514、515、516、517、518、519、520、521、522、523、524、525、526、527、528、529、530、531、532、533、534、535、536、537、538、539、540、541、542、543、544、545、546、547、548、549、550、551、552、553、554、555、556、557、558、559、560、561、562、563、564、565、566、567、568、569、570、571、572、573、574、575、576、577、578、579、580、581、582、583、584、585、586、587、588、589、590、591、592、593、594、595、596、597、598、599、600、601、602、603、604、605、606、607、608、609、610、611、612、613、614、615、616、617、618、619、620、621、622、623、624、625、626、627、628、629、630、631、632、633、634、635、636、637、638、639、640、641、642、643、644、645、646、647、648、649、650、651、652、653、654、655、656、657、658、659、660、661、662、663、664、665、666、667、668、669、670、671、672、673、674、675、676、677、678、679、680、681、682、683、684、685、686、687、688、689、690、691、692、693、694、695、696、697、698、699、700、701、702、703、704、705、706、707、708、709、710、711、712、713、714、715、716、717、718、719、720、721、722、723、724、725、726、727、728、729、730、731、732、733、734、735、736、737、738、739、740、741、742、743、744、745、746、747、748、749、750、751、752、753、754、755、756、757、758、759、760、761、762、763、764、765、766、767、768、769、770、771、772、773、774、775、776、777、778、779、780、781、782、783、784、785、786、787、788、789、790、791、792、793、794、795、796、797、798、799、800、801、802、803、804、805、806、807、808、809、810、811、812、813、814、815、816、817、818、819、820、821、822、823、824、825、826、827、828、829、830、831、832、833、834、835、836、837、838、839、840、841、842、843、844、845、846、847、848、849、850、851、852、853、854、855、856、857、858、859、860、861、862、863、864、865、866、867、868、869、870、871、872、873、874、875、876、877、878、879、880、881、882、883、884、885、886、887、888、889、890、891、892、893、894、895、896、897、898、899、900、901、902、903、904、905、906、907、908、909、910、911、912、913、914、915、916、917、918、919、920、921、922、923、924、925、926、927、928、929、930、931、932、933、934、935、936、937、938、939、940、941、942、943、944、945、946、947、948、949、950、951、952、953、954、955、956、957、958、959、960、961、962、963、964、965、966、967、968、969、970、971、972、973、974、975、976、977、978、979、980、981、982、983、984、985、986、987、988、989、990、991、992、993、994、995、996、997、998、999、1000	5Y8/6 緑 やや軟質 白・透明期一細 粒粉多、白・黒磁粒多、白・黒 磁粒と赤磁粒多、赤・黒 黒・透明期一細粒 硬質	南東床土9cm 頸1/4周 35
20 石器 石斧 石鏃	長 6.8 幅 3.8 厚 3.1	自然磨滅でよれた形にみられることから見て、磨に使用した可能性もある。加工・使用痕は見られない。重量107.5g。	5G7/1 明オリーブ 緑褐色破片は緑色炭屑灰	南東床土18cm 完形 84
21 石器 石鏃	長 17.5 幅 7.1 厚 4.1	磨いた自然の河原石をそのまま利用。南小口面をやや強い磨打に使用。長軸面より左右1箇所ずつ少し磨打した痕がある。重量838.3g。	5Y6/2 灰オリーブ 緑褐色やや破片安山岩	西部→南西部の掘瓦 はび完形 Bベルト西掘瓦

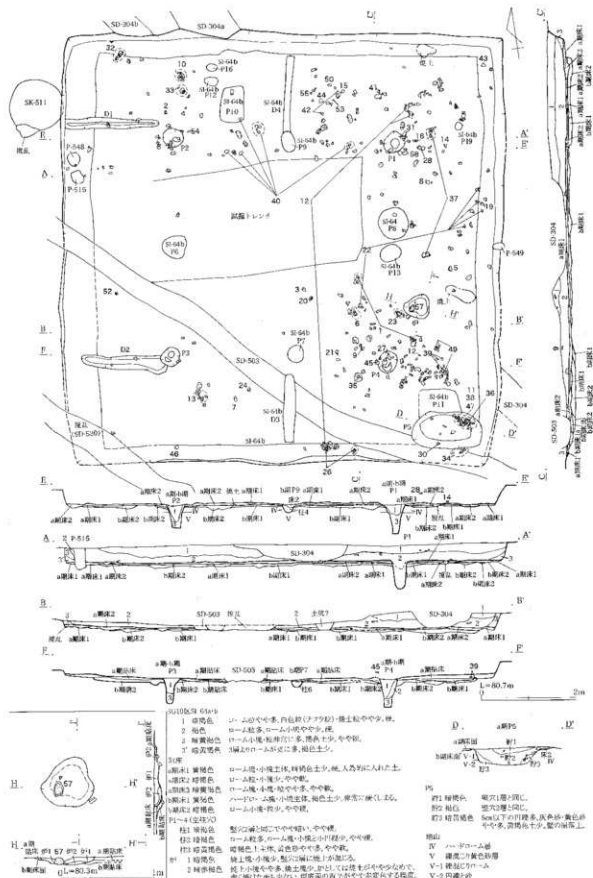
SG10区 SI-64a (第99～101図、写真図版100・101・200・201)

調査時名称はSI-64で、整理時にSI-64aに改称した。先行するb期(SI-64b)から拡張代替したa期建物である。b期竪穴内に自然堆積した土を踏み固めてa期貼床の下半(a期床2層・床3層)にしたと考えられるので、a期とb期の間に短い時間差、つまり建物跡をすぐに利用しなかった期間が考えられる。

【位置】SG10区北部の21・17・18と22・17・18グリッド。同じく古墳中期のSI-66、南にSI-60・61がある。探土と掘乱溝で南西隅は消滅。古墳中期末のSD-304a・304b、遺構のSD-503、時期不明のSK-511・P-515・P-548に切られる。時期不明のP-549と東壁部で重複するが、SI-64aとP-549の新旧は不明。掘乱溝(調査時名称SD-520)に南西隅を切られ、中央が確認調査トレンチに切られる。

【規模と形状】方形の建物跡で、主軸方位はGN-10°E。東西9.24×南北9.32m。壁残存高は北東部で高く(約38cm)、壁上部が消滅している南部では低い(4～6cm)。b期建物(SI-64b)の壁を外側へ掘り広げて拡張し、b期床面よりも2～4cm高い床面レベルまで薄く貼床を追加している。この人為的に追加したと見られる貼床土が硬いローム質のa期床1層である。a期床2・3層は、土質からみてb期建物に堆積した自然埋没土を踏み固めたもので、a期建物の貼床下半部に使われている。

主柱穴はP1～P4の4本で、SI-64bの主柱8本のうち隅4本を再使用したと考えられる。柱間は南北4.58m(西側)～4.68m(東側)、東西4.45m。床面からの深さはP1=58cm、P2=49cm、P3=52cm、P4=63cm。柱穴底面形から推定した柱径は12～14cm前後。南東隅にある貯蔵穴P5は東西149×南北



第99図 権現山遺跡 SG10区 SI-64a(1) 遺構

75×深さ33cmで、a期貯蔵穴P5がb期貯蔵穴P11の南半を切り、下半は地山礫層中に掘り込まれている(断面図D-D')。P5掘削時に出た地山礫を含むa期貼床土が、b期貯蔵穴P11の上を覆う(SI-64bの貯蔵穴断面図L-L')。入口施設や壁溝はない。間仕切溝はP2・P3の西側にそれぞれD1とD2があり、床面からの深さはD1が6～8cm、D2が4～6cm。

【炉】中央部から東へ寄った位置にある。東西56×南北51cm、深さ7～8cm。礫(57)が、図示した被熱面を下に向けて出土した。この礫の下の部分を中心として炉底面がやや焼けている。

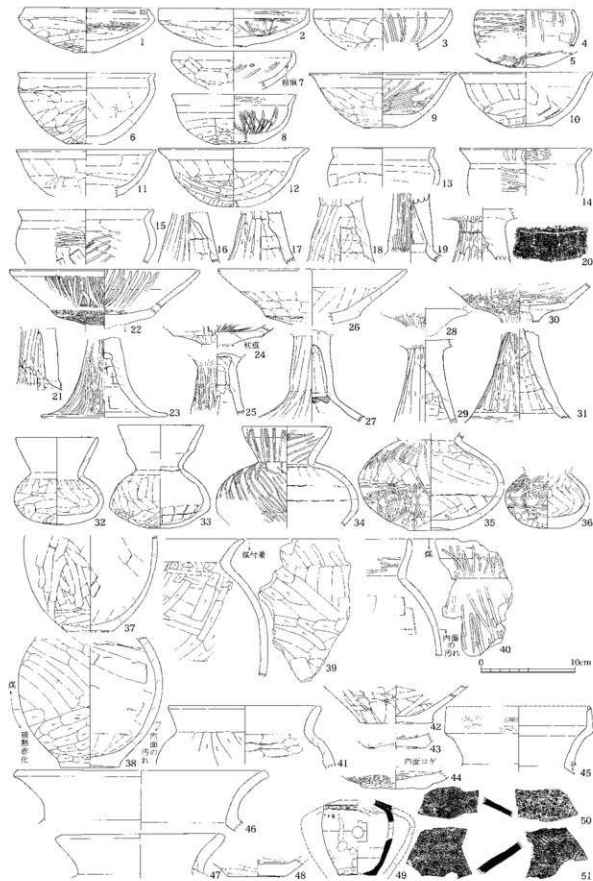
【覆土】竪穴部も貯蔵穴も自然埋没状。竪穴覆土上層(1層)にテフラと見られる白色粒を含む。

【遺物出土状況】東半部に多い。北東部に多い遺物は、北側から流入または廃棄されたようで、2層中位に最も多く、少量の遺物は床面近くまで見られる。南東部にも多く、高い位置から床面近くまでの各レベルで出土している。南壁近くの初期流入土3層中には伏せた状態の高杯杯部がある(26)。貯蔵穴P5内にまとまっている土師器破片群は底面から浮いているので、貯蔵穴外や推定木蓋上から落ち込んだものであろう。全周が残る高杯脚が南東柱穴P4の上部に入っていた(27)。南西部にある13はb期覆土上面とa期の各1片が接合したもので、b期遺物の可能性もある。北西部のほぼ床面に、完形に近い杯・小形壺と勾玉がある(10・33・54)。他の石製模造品は北部にある(53・55)。

【出土遺物】口が広く開く碗形杯が多い。初期模倣杯も多く(1～4・7)、4は非常に薄い。7は稲稈痕が1箇所、24は胎土に混ぜたと考えられる稲稈痕が3箇所以上ある。土師器の初痕はSG10区SI-50などにある。小形壺は丁寧な製品がある。34はよく磨き、33は口縁に段を持つ。38は外面に煤が目立つ。特大から中形まで各種の壺が多い。受口状口縁の壺(45)は、SG10区SI-19aなどにある。二重縁(49)はSI-50などに破片がある。紡錘車(52)はSG10区SI-59などにある。滑石製模造品の勾玉形と有孔円板が各1点ある。勾玉形はSG5区SI-100・SG10区SI-72・SG9区中央区南東部低地、有孔円板はSG5区SI-118とSG10区SI-72・101・110・111、SK-46とSD-41・42、時期不明のSG10区SK-226にある。他の滑石製模造品は有孔刺片が古墳時代土坑SK-621に、粘板岩製模造品?(55)はSG10区SI-47などに見られる。軽石質の砥石(56)はSG10区SI-16などにある。ただし56は使用痕がない。遺物量は多く、杯・小形壺・高杯が多い。図示以外の土師器合計960片・8,932gの内訳は、杯304片・1,812g、高杯254片・2,249g、小形壺51片・589g、壺瓿類349片・4,214g、甗2片・68g。図示した以外の杯は内斜口縁5点以上と半球状2点(他に後期の混入品3片)、壺底部は9個体分ある。楕円・棒状・卵形など各種の礫があり、10cm以下の小さなものが目立つ。被熱礫や煤付着礫は僅かである。b期の遺物は第103図に示す。

第56表 権現山遺跡SG10区SI-64a出土遺物

番号 種類 器種	大きさ cm/g	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 層位 注記
1 土師器 杯	口 復13.0 高 4.8 底 2.6 最大 復14.4	外底面は1方向ヘラケズリでわずかに凹状。外面は口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後に縦ならヨコヘラミガキ。体部に斜なヨコヘラミガキ。内面下位は剥落して調整不明。 1注記1284, 201, 199-1802類, 中東1～2層, B-ベルト, SD-304 X22 221	5YR6/6 緑 やや粗い 白・赤・灰色・透明 粗粒～細粒やや多。黒顔粒少 やや軟質	南東味上10～22cm(1層～2層), SD-304の1片も接合 口1/2層。底全周 注記は5層
2 土師器 杯	口 復15.8 高 4.0 底 2.8	外底面は1方向ヘラケズリで凹状。外面は口縁部ヨコナデ。体部上位ヨコヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。体部ヘラケズリ後に横～斜位ヘラミガキ。外面に10cm以上の凹部あり。 1注記222, 23, 北西1層, 北西2層, A-ベルト高1層, A-ベルト西2層	5YR5/6 明赤 やや粗い 白・透明細粒多。 白粗粒と赤・黒顔粒少 硬質	北西味上7～14cm(2層)が接合 口1/3層。底全周 注記は5層
3 土師器 杯	口 復14.4 高 4.1 最大 復14.7	外面の口～体部端に凹い線あり。外面体部は上位ナメヘラナデと下位ヨコヘラケズリ。内外は口縁部ヨコナデ。内面にやや斜位の放射状ヘラミガキ。	7.5YR6/4 に近い やや粗い 白・黒・赤粒～細粒 やや多 やや軟質	中央味上5cm(2層) 口1/6層 186
4 土師器 杯	口 復10.0 高 3.9 最大 復11.1	薄く軽い。外面は体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデの後に全体をヨコヘラミガキ。内面は強いヨコヘラナデの後にやや縦ならタテヘラミガキ。	10R4/8 赤 やや粗い 白・黒顔粒多。赤・灰色・透明面～細粒少 やや軟質	南部の試掘トレンチとP5が接合 口5/12層。底全周 注記は1層
5 土師器 杯	高 復1.6 底 3.4	外底面は凹状でナデ後に少しヘラミガキ。外面体部はやや斜なナデ後にナメヘラミガキ。内面はナメまたはヘラナデ後に放射状ヘラミガキ。	10YR6/3 に近い 粗粒 赤粗粒と白・黒・透明 細粒多 やや軟質	東部味上30cm(1層) 底全周 169
6 土師器 杯	口 復14.6 高 7.5 底 4.2	外面の縁が内面で明瞭。外底面は多方向ヘラケズリで平底状。外面は体部ナメヘラナデ後に下位ナメヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面は体部ナメヘラナデ後に口～口縁部ヨコナデ。内面下位～底部は使用により表面が剥れて調整不明。	10YR6/4 に近い やや粗い 透明面～細粒多。平透明・灰色粒と白・黒顔粒少 やや軟質	中央味上15cm(2層)と南東味上9～20cm(1層)が接合 口1/6層。体1/4層。底全周 180, 200, 241



第100図 権現山遺跡 SG10 区 SI-64a (2) 遺物

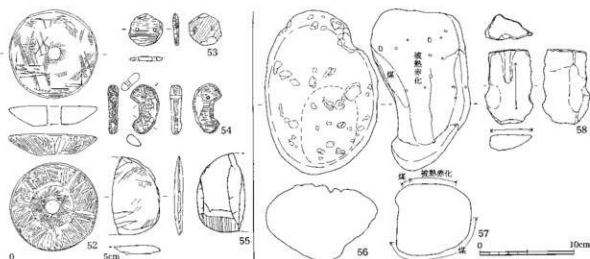
第4節 古墳時代の竪穴建物跡

7	土砂器 杯	口 12.8 高 残 4.1 最大 復 13.2	外面は口縁部ヨコナデと体部に横～斜位ヘラナデ。内面は磨滅して不明瞭だが、ナメヘラミガキを確らに施していると思われる。内面体部に幅約11cmあり。	10Y87/4 に示し、黄緑ややや白、赤黒と黒・透明細粒ややや多、白細粒ややや少	南西床土3～4cm(2層)が接合 口1/2層、体3/4層 56, 61
8	土砂器 杯	口 復 13.1 高 5.2 底 残 4.0	外底面はヘラナデで凹状。外面は体部ヨコヘラナデ、口～肩部ヨコナデ。内面は体部ヘラナデ後、縦～斜位ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。 現存状態 口1/6層、踵1/3層、底2/3層 注記 106～68, 144, 中東 2, SD-304パベルト	5Y85/8 明赤褐色 ややや白、赤・透明細粒や少 5Y85/8 明赤褐色 ややや白、赤・透明細粒や少 5Y85/8 明赤褐色 ややや白、赤・透明細粒や少	東部床土 23～32cm(1層)に東部床土19cm(1層)、SD-304にも個人残存状態・注記は左欄
9	土砂器 杯	口 復 15.6 高 5.8 底 3.9	外底面は磨滅した平アズリで凹状。外面は体部ヨコナデの下平部ヨコナデと上部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部に斜位と此部は多方向のヘラミガキ。	7.5Y86/6 橙 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少 5Y86/6 橙 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少 5Y86/6 橙 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少	南東床土14cm(2層)口1/2層、口～底1/4層、底5/12層 190, 191, Cベルト南2層、試掘トレンチ ほぼ全層
10	土砂器 杯	口 14.2 高 5.8 底 残 2.40	薄く軽い。外面は底面ヘラナズリで平底、体部ヘラナデ後下平ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は体部ナメヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。	10Y87/3 に示し、黄緑ややや多、白細粒や少 5Y86/6 橙 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少 5Y86/6 橙 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少	北西床土(2層)口全層、底2/3層5
11	土砂器 杯	口 14.8 高 残 5.1	口～体部端の輪が内面で明瞭。外面は体部上ナデ後に下平を横位後縦位のヘラナデ。内面は体部ヘラナデ後に口縁部ヨコナデ、内外面口縁部に10cm大の凹状あり。 注記 270, 函試掘トレ, P5 野 1層, 21.85-18.15	7.5Y86/6 橙 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少 5Y86/6 橙 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少 5Y86/6 橙 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少	野塚(北)土20cm(野1層)口1/2層、口～底1/2層 注記 は左欄
12	土砂器 杯	口 復 16.0 高 6.2	外面は体部ナメヘラナデ後に口縁部ヨコナデ、中位に斜位と下位に多方向のヘラナデ。内面は口～肩部ヨコナデ後に体部多方向ヘラナデ。	5Y86/6 橙 ややや白、白緑～黒細粒ややや多、赤・灰色粗粒と黒・透明細粒や少 5Y86/6 橙 ややや白、白緑～黒細粒ややや多、赤・灰色粗粒と黒・透明細粒や少 5Y86/6 橙 ややや白、白緑～黒細粒ややや多、赤・灰色粗粒と黒・透明細粒や少	北東床土1.4cm(1～2層)と南東床土7cm(3層)が接合 口1/2層、踵12.1, 267, 288
13	土砂器 杯	口 復 10.9 高 残 4.1 最大 11.9	外面は体部ヨコヘラナデ、口～肩部ヨコナデ。内面は体部ナデ。口縁部ヨコナデ。	2.5Y85/6 明赤褐色 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少 2.5Y85/6 明赤褐色 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少 2.5Y85/6 明赤褐色 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少	南西床土3cm(2層), S164bの南東理土面と接合 口1/2層、踵1/12層 55, S112.3
14	土砂器 杯	口 復 14.0 高 残 5.1	外面は体部ナメヘラナデと体部ヨコヘラナデ後にヨコヘラナズリとヨコヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面は体部ナメヘラナデ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	2.5Y85/6 橙 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少 10Y87/6 明赤褐色 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少 10Y87/6 明赤褐色 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少	北東床土5cm(2層)口1/12層、肩1.6層 12.8
15	土砂器 杯	口 復 14.4 高 残 5.7 最大 復 14.8	口～体部端の輪は内面で明瞭。外面は口縁部ヨコナデ、体部上位ヨコヘラナデと体部多方向ヘラナデ。内面は体部ナメヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。	10Y87/6 明赤褐色 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少 10Y87/6 明赤褐色 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少 10Y87/6 明赤褐色 やや黄緑 白・赤・透明細粒や少	北西部土23cm(1層)口1/12層、体1.76層 72
16	土砂器 高林	高 残 5.3	外面は密なタテヘラミガキ。内面は倒立状態で反時計回りに積み上げた粘土輪をよく残し、軽いつタテナデとユビオエナ。	2.5Y85/8 明赤褐色 白・灰色粗粒～細粒と黒・透明細粒や少 2.5Y85/8 明赤褐色 白・灰色粗粒～細粒と黒・透明細粒や少 2.5Y85/8 明赤褐色 白・灰色粗粒～細粒と黒・透明細粒や少	試掘トレンチ 試掘トレンチ 試掘トレンチ
17	土砂器 高林	高 残 5.7	外面は脚土層ナデ後に脚部タテヘラナズリ。内面は積み上げた粘土輪の面跡を残し、ユビオエと軽いタテナデ。	7.5Y86/6 橙 ややや白、白・透明細粒や少 5Y86/6 橙 ややや白、白・透明細粒や少 5Y86/6 橙 ややや白、白・透明細粒や少	試掘トレンチ 試掘トレンチ 試掘トレンチ
18	土砂器 高林	高 残 6.8	外面ナデ後にタテヘラナデで強い凹状を生じる。倒立状態で反時計回りに積み上げた輪を内面に残し、軽いつタテナデ。 注記 124, 426, 131, 138, 200, 試掘トレ, Cベルト南2層	2.5Y85/6 明赤褐色 やや黄緑 白・赤・透明細粒と白細粒や少 2.5Y85/6 明赤褐色 やや黄緑 白・赤・透明細粒と白細粒や少 2.5Y85/6 明赤褐色 やや黄緑 白・赤・透明細粒と白細粒や少	北東床土1～7cm(1～2層)に5層と7.4cm(1層)に1層 脚部3/4層 注記 は左欄
19	土砂器 高林	高 残 7.2	外面は密なタテヘラミガキ。内面は脚部土層を積って細くするために縦輪が生じる。脚部内面は磨滅しているが、おそくらす。	7.5Y87/8 黄緑 黄緑 黒細粒や少、白・赤・透明細粒や少 7.5Y87/8 黄緑 黄緑 黒細粒や少、白・赤・透明細粒や少 7.5Y87/8 黄緑 黄緑 黒細粒や少、白・赤・透明細粒や少	東部床土1m(2層)脚部全層 132
20	土砂器 高林	高 残 5.6	外面は脚部土層下ヘラナズリ、ヘラ先を当てた前が脚柱上に1層厚。杯部内面は1方向ヘラミガキ。脚柱部内面は粘土輪のみを残し、軽いつタテナデ。	10Y86/6 明赤褐色 ややや白、赤黒～細粒と黒・透明細粒や少 10Y87/4 に示し、黄緑や少、赤細粒や少 10Y87/4 に示し、黄緑や少、赤細粒や少	中央床土3cm(2層)脚柱全層 187
21	土砂器 高林	高 残 6.5	外面タテヘラナデ。内面は脚柱部タテナデ、脚部ヨコヘラナデ。	10Y87/4 に示し、黄緑や少、赤細粒や少 10Y87/4 に示し、黄緑や少、赤細粒や少 10Y87/4 に示し、黄緑や少、赤細粒や少	南東床土2cm(2層)脚柱全層 238
22	土砂器 高林	口 復 20.0 高 残 6.4	外面杯縁～底面間の輪が明瞭。外面全体タテヘラ後に杯体下部ヨコヘラと口縁部ヨコナデ。杯体部タテヘラミガキ。内面はナデまたはヘラナデ後口縁部ヨコナデ。杯体部タテヘラミガキ。外面に保が付着し、かなり多い部分も見られる。	10Y87/6 明赤褐色 ややや白、赤黒～細粒と黒・透明細粒や少 10Y87/6 明赤褐色 ややや白、赤黒～細粒と黒・透明細粒や少 10Y87/6 明赤褐色 ややや白、赤黒～細粒と黒・透明細粒や少	東部床土11～19cm(2層)と中央床土(2層)が接合 口5/12層、底1/3層 150, 151, 153, 156, 182
23	土砂器 高林	高 残 8.5 脚部 復 13.4	外面は脚部部ヨコナデ後、全体に密なタテヘラミガキ。内面は脚柱部に倒立状態で反時計回りに積み上げた前を残し、縦位の輪状が生じる。内面杯部はヨコヘラナデ後ヨコナデ。	7.5Y87/6 橙 やや黄緑 白・赤～細粒や少、白・赤・透明細粒や少 7.5Y87/6 橙 やや黄緑 白・赤～細粒や少、白・赤・透明細粒や少 7.5Y87/6 橙 やや黄緑 白・赤～細粒や少、白・赤・透明細粒や少	南東床土25cm(1層)脚柱全層、脚部1/36層 172
24	土砂器 高林	高 残 2.5	外面は杯底部タテヘラナデ後、杯体下部にヨコヘラナデとタテヘラミガキ。内面は杯体部から杯底面にかけて多方向ヘラナデ後に横位ヘラミガキ。粗粒版と見られるものが3箇所あるため、粘土に混和されていたと思われる。	5Y3/2 オリーブ黄 黄緑 白・赤・灰色粗粒と白細粒や少 5Y3/2 オリーブ黄 黄緑 白・赤・灰色粗粒と白細粒や少 5Y3/2 オリーブ黄 黄緑 白・赤・灰色粗粒と白細粒や少	南西床土7cm(2層)口～底14層 62
25	土砂器 高林	高 残 6.5	外面は密なタテヘラミガキ。脚内面は上部部に斜位と縦位のヘラナデおよびナデ後倒立状態で粘土輪を積み上げてヨコヘラナズリ。	7.5Y87/6 橙 ややや白、白・灰色粗粒～細粒や少、赤・透明細粒や少 2.5Y85/6 明赤褐色 やや黄緑 白細粒～黒細粒や少 7.5Y86/6 橙 ややや白、白・赤・透明細粒や少	試掘トレンチ 試掘トレンチ 試掘トレンチ
26	土砂器 高林	口 19.7 高 残 5.9	外面は杯底面に横～斜位ナデ。杯体部は上ナデナデで下は縦位にもナデを行い、口縁部ヨコナデ。内面は杯体部ナメヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。	2.5Y85/6 明赤褐色 やや黄緑 白細粒～黒細粒や少 7.5Y86/6 橙 ややや白、白・赤・透明細粒や少 7.5Y86/6 橙 ややや白、白・赤・透明細粒や少	南東床土2～7cm(3層)が接合 口5/6層 267, 277
27	土砂器 高林	高 残 9.7	外面はタテヘラナデ。内面は脚柱部タテナデ、脚部ヨコヘラナデおよび上部ヨコヘラナ。	7.5Y86/6 橙 黄緑 白・赤・透明細粒や少 7.5Y86/6 橙 黄緑 白・赤・透明細粒や少 7.5Y86/6 橙 黄緑 白・赤・透明細粒や少	東部主柱穴底土49cm脚柱全層 293
28	土砂器 高林	高 残 2.9	外面タテヘラナズリ。内底面は多方向ヘラナデ後ヘラミガキで、底面外周には脚部方向に溝。	5Y86/6 橙 やや黄緑 白緑～黒細粒や少、赤細粒と黒・透明細粒や少 5Y86/6 橙 やや黄緑 白緑～黒細粒や少、赤細粒と黒・透明細粒や少 5Y86/6 橙 やや黄緑 白緑～黒細粒や少、赤細粒と黒・透明細粒や少	北東床土22cm(1層)杯底1.6層 132
29	土砂器 高林	高 残 8.7	外面は脚部を下方へ、杯底面を上方向ヘラナズリ。杯部内面は磨滅して不明瞭だが、多方向ヘラナデの可能性あり。脚部内面は上部ナデ、中位にはナメヘラナズリ。	2.5Y85/6 橙 軽い、白細粒～黒細粒、灰色・透明細粒～黒細粒や少、白緑と黒細粒や少 2.5Y85/6 橙 軽い、白細粒～黒細粒、灰色・透明細粒～黒細粒や少、白緑と黒細粒や少 2.5Y85/6 橙 軽い、白細粒～黒細粒、灰色・透明細粒～黒細粒や少、白緑と黒細粒や少	試掘トレンチ 試掘トレンチ 試掘トレンチ

第5章 権現山道跡 SG10区

30	土俵高 高 残 4.2	外面はタテヘラウズリ後に残存部から体底部にかかる部分をヨコヘラミガキ、内面は底部に多方向に体部に斜～横位のヘラウズリ後、残存部にヨコヘラミガキ。脚柱部内面タテナデ。	5Y8/5/8 明赤帯 やや暗赤・白・黒・透明～ 黒粒やや多、白・黒・赤帯少 破瓦	野碓穴上 21m (2層) 残穴 1/3周 275. 南東穴
31	土俵高 高 残 9.6	外面は脚部タテナデとタテヘラウズリ後に残存部から体底部にかかる部分をヨコヘラミガキ。内面は斜上土俵の縁み上げ痕を残した状態で上部に露出するナデ。中位タテナデ、脚部ヨコナデ。 [注記]123、129、中東1層、Cベルト北1層、北西1層	10Y28/6 黄帯 やや暗赤・黒粒と黒細粒 やや多、赤・透明粒と白 細粒少、赤・透明	北東床 19～23m (1層) 斜位 1/4周 脚柱全周 注記は全周
32	土俵高 高 残 8.6 高 9.2 最大 9.4	外面は斜位に縦位の体部に縦位のナデ後、下部に横～斜位ヘラウズリ。外内面はナデで凹状。内面は底部に多方向と体部に斜位のナデ。内外面に脚部ヨコナデ。 [注記]1、3～5、北西1層、北西2層、中東2層、SD-304 293	7.5Y8/6/4 土に赤い黄帯 やや暗赤・赤粒と白・黒・ 透明粒少 やや暗赤	北西部床直上 1～床土 24 m (1～2層)、SD-304 の1枚を集合 1/12周、体3/4周、 底全周 注記は左周
33	土俵高 高 9.0 最大 10.7	外面は斜上平に縦～斜位ナデの後に斜下平全体をナメヘラウズリ。内面は斜下平ヘラウズリ。斜上平ナデ。内外面口～脚部ヨコナデ、口～面調整	5Y8/6/6 橙 細赤 白細粒少、白細粒量 少やや黄	北西部床直上 1m (2層) 斜位 一部欠
34	土俵高 高 残 9.4 高 残 10.2	外表面部は下部の縁み上げ後止面で検を付、外表面部はおそく横位に斜位のヘラウズリ後にナメヘラミガキ。外面口脚部ヨコナデ後に口～脚部タテヘラミガキ。内表面部は縁み上げ痕を残す程度のナデで、斜位はやや縦斜位になり、口脚部はヨコナデ後斜位ヘラミガキ。 [注記]276、2181～18、南調整トシ、中東2層、P5 南調整	2.5Y8/5/8 明赤帯 やや暗赤・白・透明細粒多、赤細 粒と黒細粒やや多 やや暗赤	南東部床直上 (3層) 21.85～18グリッドと試 掘トレンチの破片が接 合 1/14周、肩1/3周 注記は左周
35	土俵高 高 残 10.3 底 4.5 最大 15.3	外表面部は斜位ナデで凹状にして外表面部内面方向のヘラウズリ。外表面部は斜上ヘラウズリ後に中位ヨコヘラミガキ全体をタテヘラミガキ。中位以下ナメヘラウズリ。脚部タテナデ。	2.5Y8/5/8 明赤帯 細赤 白細～黒細と灰色・透 明細粒少 やや暗赤	南東床 1.6m (2層) 正 位 7/3周、底全周 脚部～底辺 257
36	土俵高 高 残 5.9 底 2.8 最大 8.9	外表面部は斜上ヘラウズリ後ヨコハケ、下部ヨコヘラウズリと底部ヘラウズリで、奥側の不明瞭な小さな底面を作る。体部全体にやや雑なヘラミガキ。内面は体部ナメヘラウズリ後に脚部ナメナデ。 [注記]269、南調整トシ、P5 第1層、SD-304 132	10Y8/3/3 土に赤い黄帯 細赤 白・赤・灰色・透明 細粒少 やや暗赤	野碓穴上 26m、試掘 トレンチとSD-304破 片が接合 破片5/12周、底全周 注記は左周
37	土俵高 高 残 10.2 底 4.7 最大 14.2	外表面部は1方ヘラウズリで凹状。外表面は体部下端に横位と体部に縦位のやや暗いヘラウズリ。内面は底部に多方向と体部に斜位のヘラウズリ。 [注記]1127、168、中東2層、北西2層	10Y8/6/4 土に赤い黄帯 やや暗赤・透明細粒多、灰色 透明細粒と白・黒細粒少 やや暗赤	北東床 29m (1層)と 東部床 1.7m (2層)が 接合 体1/6周、底全周 注記は左周
38	土俵高 高 残 14.1 底 6.2 最大 15.2	外表面部は多方向ヘラウズリでやや上げ底状。外面脚部上ナメヘラウズリ後に平全体を斜位ヘラウズリ。内面は底部に多方向と脚部下部に縦位のやや暗いヘラウズリ。中位以下ナメヘラウズリ。外表面は下部～底面が凹状で、上には足がかり、斜下使用くまど痕が存する。脚部ヨコナデ。 [注記]274、270、南調整トシ、南東穴上下、野碓穴上	5Y8/5/8 明赤帯 やや暗赤・白細～黒細多、灰 色・透明細粒と白・黒細粒少 やや暗赤	野碓穴上 23m (野1層) と南東部床 16m (2層)が接合 破片5/12周、底全周 注記は左周
39	土俵高 口 残 20～25 高 残 14.5	外面は口脚部ヨコナデ後に斜上ナメヘラウズリ。脚部は縦～斜位ヘラウズリ後ナメヘラウズリ。内面は脚部上部ヘラウズリ後ナメヘラウズリ。口脚部ヨコナデ。外面全体に縦赤帯。 [注記]207、208、295、南調整トシ、野碓穴上	7.5Y8/7/6 黄帯 細赤 透明細粒と白・黒細粒 少、白・灰色粒少 やや暗赤	南東部床 15～17m (2層)と試掘トレンチ 口1/12周、肩1/6周 注記は左周
40	土俵高 口 残 14～16 高 残 12.4	脚部縁み上げ後3片足がかり合位置が不揃い。外面は斜位ヘラウズリ後に縦～斜位ヘラウズリ。内面は斜位ヘラウズリと口脚部ヨコナデ後に縦～斜位ヘラウズリ。内面は斜位ヨコナデ後、脚部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面全体に縦赤帯。内面は内位以下に暗褐色の汚れ(コゲ)付着。	10Y8/7/4 土に赤い黄帯 やや暗赤 透明細粒～黒細粒 少、白細～黒細と黒細粒少 やや暗赤	北西部床直上 11～11m 破片が接合 口1/24周、肩1/6周 27.31、44.45、88.89
41	土俵高 口 残 15.8 高 残 6.8	外面は口脚部ヨコナデ後に脚部ナメヘラウズリ。内面は脚部に縁み上げ痕を残してコゲオオキ。口脚部ヨコナデ。	10Y25/4 土に赤い黄帯 やや暗赤・白・透明細粒 少、白細粒と赤・黒細粒 少 やや暗赤	北東部床直上 27m (1層) 口1/12周、肩1/6周 94
42	土俵高 高 残 3.8 底 7.8	外表面部は多方向ヘラウズリでわずかに凹状。外面脚部は土に縦方向のヘラウズリ。内面は多方向ヘラウズリ。	7.5Y8/2/1 赤 やや暗赤 白帯～黒細粒やや多、 赤・灰色細粒と黒・透明細粒 少 やや暗赤	北西部床直上 3m (2層) と試掘トレンチ 底全周 73.76、80、Cトレ南 1層
43	土俵高 高 残 1.6 底 6.0	外表面部は斜位ナデで凹状。外表面下部に斜～横位ヘラウズリ。内面は門部方向のヘラウズリ。外面が凹状している可能性があり、内面も汚れているように見えるが、どちらにも不確定。	10Y8/2/2 灰黄帯 やや暗赤 白・透明細粒～黒細 多、黒細粒少 やや暗赤	北東部床 17m (2層) 底 2/3周 109
44	土俵高 高 残 1.9 底 7.4 最大 残 11.2	外表面部縁面に厚く粘土を塗った後に底面を多方向にハケ調整し、外周がのみみ出したと見られる部分をヨコヘラウズリ。脚部縁面はコゲ付着タテナデ。内面は門部方向のナデ。内面全体にコゲ付着。	2.5Y5/2 暗灰帯 やや暗赤 白・透明細粒～黒細 多、黒細粒少 破瓦	北西部床 17m (2層) 底 7/12周 76
45	土俵高 口 残 15.2 高 残 7.1	口脚部は外表面明確な検を付って凹状になる。内面はヨコナデ後に口脚部ヨコヘラミガキ。内面は磨減しているため調整不明瞭。	5Y8/8/6 橙 やや暗赤・赤細～黒細と白細 粒多、白帯～黒粒と黒・透明 細粒少 破瓦	北西部床直上 11m (2層) 口1/6周 254
46	土俵高 口 残 27.1 高 残 6.4	頭～肩部縁の検が内面で明瞭。外面口～脚部ヨコナデ。内面脚部ナデ、脚部ヨコナデ。 [注記]160、試掘トレンチ、UTSG-X調査区南平土中	2.5Y8/6/4 土に赤い黄帯 やや暗赤 白・灰色粒と白・ 黒・透明細粒少 破瓦	南西部床直上 1m 口1/3周、肩1/4周 注記は左周
47	土俵高 口 残 18.0 土俵高 土俵高	残存部が少ないので復原性は参考値。頭部内面に補完粘土あり。内外面の口脚部ヨコナデ。	10Y8/7/3 土に赤い黄帯 やや暗赤 白細～黒細と黒・ 透明細粒少 赤細～黒細少 破瓦	野碓穴上 23m (野1層) 斜位 1/12周 口1/9周
48	土俵高 高 残 1.9 底 6.1	外表面部はヘラウズリ後ナデで少し凹状。外表面下部ナデ。内面多方向ヘラウズリ。外表面の外周が凹状によってかなり磨減している。	2.5Y8/3/3 土に赤い黄帯 やや暗赤 白帯と白・透明細 粒～黒粒少 赤・白・灰色粒と 赤細粒と黒細粒少 破瓦	試掘トレンチ TK22 埋 土中 底全周 試掘トレンチ
49	土俵高 高 残 7.9 最大 残 7.6	二重線の体部内側をヨロヨロ回転で成形し、体部下端ヨコヘラウズリ後に口脚部から外して底面は不調整。体部外表面に凹状調整あり。脚部内面にヘラウズリ痕あり。孔はは原厚12mmでかなり斜上方向へ向く。斜位で斜部～0～6mmの調整を有約1/3周の間は8～9箇所開けていた痕を残す。外面脚部に自然粒、足跡、第294、SD-201a出土層と同一層の可能性があります。	5Y8/1/1 灰 細赤 白細～黒細少 破瓦	南東床 7～17m (2層) 1/4周 肩1/3周、底5/12周 205、219
50	土俵高 高 残 7.9 最大 残 7.6	外面は縦位の平行打き。内面はナデ。外面に暗緑色の自然粒がやや多く付着。	5Y4/1 灰 細赤 灰色粒と白細粒少 破瓦	北西部床 31m (1層) 肩部 1片 70
51	土俵高 高 残 7.9 最大 残 7.6	外面はやや不定方向の平行打き後にヨコナデ。内面はナデ。内面にこぼし自然粒が付着。	2.5Y6/2 灰黄 細赤 白細粒少 破瓦	遺構確認 脚部または底面 1片 北西部上

52 石製物品 紡車車 軸	長さ 4.57 加径 4.55 厚 107 重 31.1	孔径は上面7.0mm、下面7.6～8.0mmで、下面から穿孔。上面は研砕して光沢を持ち、研砕面を少し残す。下面は中央部平坦面(径2.1cm)をよく研砕し光沢を持つ。側面の斜面は放射状に細狭く切削加工後に斜放射方向の磨痕を残して残し、光沢は弱い。上下面とも孔外周に接する斜放射状線跡が上面にはごく少なく、下面に多い。	10Y2/1 黒 縞帯でやや軟質な板状頁岩	内部床土2m(2層) 完形 49
53 石製製造品 有孔円板	径 1.65 幅 1.73 厚 0.28	両面をそれぞれ1方向に研砕し、細かい磨痕が残る。側面は穿孔と同じ方向に研砕し、形跡的の磨痕も少し残る。左側面から穿孔し、対面に穿孔斜線。穿孔径1.85mm、終孔径1.50mm、残存重量1.15g。	10Y4/1 灰 縞帯で軟質な滑石	北東部床土27m(1層) 完形 74
54 石製製造品 勾玉形	長さ 2.58 幅 1.47 厚 0.62	右側面から穿孔し、終孔径1.60mm、終孔径1.35mm。板状割片の外形を勾玉形に切削加工し、両面をほぼ1方向、側面を穿孔と同方向に磨き削いた磨痕を残す。ごく一部だけ強く放射状あり。重量3.10g。	5G3/1 暗オリーブ灰 縞帯で軟質な滑石	北西側直上(2層) 完形 34
55 石製物品 ?	径 4.01 幅 残2.50 厚 0.46	片面は鋭い凸面でも滑らかに研砕。反対面は粘板岩の節理に沿った割断面で、平行線状の痕跡を残す部分もあるが、研砕面ではなく割断時に生じたと思われる。側面加工はない。残存重量6.28g。	10Y4/1 灰 縞帯で軟質な粘板岩	北東部床土32m(1層) 一部欠 67
56 輝石	径 17.2 幅 12.0 厚 8.5	横断面が隅丸三角形の自然産。明確な最打や研砕の痕は見られない。開示した大きな西部の他に、細かい気孔状の孔も多い。水には浮かばない。重量11.464g。	10Y8/3 浅黄緑 多孔質でやや軟質な安山岩	北東部の南半 完形 22.10-18.15付近
57 輝石	径 16.8 幅 9.8 厚 7.5	自然の河原石。加工・使用痕はない。開示した面がよく被熱している。反対の面はあまり被熱していないが、膜が薄く広く付着している。重量1.698g。	10Y6/4 濃い黄緑 縞帯で比較的硬質な流紋岩	伊底面 完形 29.1
58 石製 砥石	長さ 7.7 幅 4.9 厚 2.6	横断面が三角形の石片を利用し、最も長い長側面を砥面として使用。縦方多孔質でやや軟質な安山岩の砕片で、水には浮かばない。重量58.7g。	N6/0 灰 多孔質でやや軟質な安山岩の 砕石	北東部床土16m(2層) 完形 125



第101図 権現山遺跡SG10区SI-64a(3)遺物

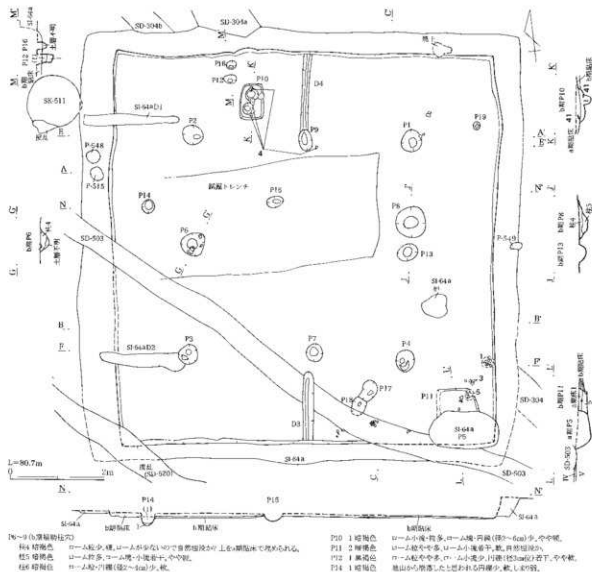
SG10区SI-64b(第102-103図、写真図版101)

調査時の遺構名はSI-112で、整理作業時にSI-64bに改称した。SI-64aに拡張する前の、b期(旧期)の建物である。a期貼床の下部はSI-64b竪穴内の自然堆積土を踏み固めたとみられる層なので(a期床2・3層)、b期竪穴をa期に建て替えるまで短い時間差が考えられる。

【位置】SI-64aと同じ位置の内側。古墳中期末葉ころのSD-304a・304bと近世のSD-503に浅く切られる。南西部は土採り工事と掘溝溝(調査時名称SD-520)に壊され、中央が確認調査時の試掘トレンチに重視した。

【規模と形状】方形で、主柱穴4本が共通するSI-64aと同じく主軸方位はGN-10°-E。竪穴四辺を重視した場合、SI-64aより西へ約2'掘れる。東西8.10×南北8.38m。床はa期(SI-64a)より2～4cmほど低く、a期床より明確に低いところと、余り低くない(a期貼床の上に厚く貼らない)ところがある。主柱穴は8本で、SI-64aと同じP1～P4の間に浅いP6～P9を配する。P7～P9の上をa期貼床が覆う。P6を覆うと推定されるa期貼床土は確認調査トレンチで失われている。床面レベルからの深さは、P1～P4はSI-64aよりa期貼床の厚さ約3cmだけ浅く、P6=16cm、P7=17cm、P8=17cm、P9=22cm。b期貼床除去後に確認した補助柱穴8本(P10とP12～P19)は埋め戻された可能性がある。P10は長方形の下部が円形に2箇所窪む。P8南側のP13は柱穴というよりも浅い穴状。床からの深さはP10=南部22～北部26cm、P12=23cm、P13=17cm、P14=20cm、P15=9cm、P16=27cm、P17=20cm、P18=18cm、P19=12cm。

貯蔵穴P11はSI-64aの貯蔵穴P5に南半部を切られ、自然流入と思われる黒色土で埋まった上にa期貼床が貼られていた。P11は東西幅90×南北残存長49cm、床面からの深さ17cmで、地山礫層中に掘り込



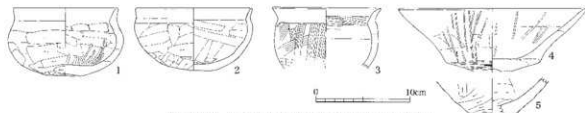
んでいる。入口施設や壁溝はない。間仕切溝はP7とP9に伴う位置で南北に1本ずつあり、床面からの深さ11～13cm。掘方底面は、四隅が深く、周辺部が浅くて中央部が深い傾向を持つ。

【炉】SI-64aと同様に炉があったことを想定できるが、確認できなかった。試掘トレンチ内に焼土がみられたので、試掘トレンチで炉が消滅した可能性がある。また、SI-64aの炉はSI-64bの床面よりも深いので、a期と同じ位置の竪穴南東部、b期にも炉を使っていたと考えることもできる。

【覆土】SI-64a貼床土の下層 (a期床2・3層) は、SI-64bに自然流入した初期埋設土を踏み固めた層と考えられる。テフラ粒は見られない。

【遺物出土状況】高杯 (4) はa・b期竪穴出土破片が接合し、SI-64b北西部のP10内に破片があるので、下層 (b期) の遺物破片がa期竪穴に混入したと推定した。ただし、4は破片の70%がSI-64aで出土し、SI-64a貼床下で出土したSI-64b出土破片は3点 (重量では15%) である。西側柱列中央の補助柱穴P6の覆土上層には、土師器高杯脚片や同一個体の内斜口縁片4が入っていた。

【出土遺物】b期に伴うことがわかる遺物はごく少なく図示以外は小片で、こなごなに割れたものもあり、建替え時に踏まれたのかもしれない。内斜口縁の椀形杯は丸底 (2) と凹底 (1) がある。図示以外の土師器合計62片・302gの内訳は、杯17片・78g、高杯3片・14g、小形壺1片・8g、壺裏類41片・202g。



第103図 権現山遺跡SG10区 SI-64b(2)遺物

第57表 権現山遺跡SG10区 SI-64b 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 履11.0 高 6.9 底 履3.8 最大 履12.1	外底面は1方向ヘラズリで不明瞭な平底または凹底状。外面体部ヨコヘラズリ。内外面体部ヨコヘラズリ後に放射状ヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。外底面に70度の裏面あり。	2.SY8/8 緑 やや濃い 赤胎—細粒と白磁 粒多。透明釉—細粒と黒磁粒 少。やや硬質	南東床直上(2層) 口1/2以上。底1/2埋 SI-112.10
2 土師器 杯	口 12.1 高 6.6 最大 12.4	外面は上平ナメヘラナデ後。下平をヨコヘラズリと底部を1方向ヘラズリ。内面は上部ナメヘラナデ。底部多方向ヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。	7.SY8/4 濃い やや暗黒 白・赤・透明釉— 細粒や多。灰包磁粒と黒磁 粒少。やや硬質	西部補助柱穴P6 口1/3埋。肩1/2埋 SI-64.50。G-C 南平 土
3 土師器 杯	口 履11.4 高 残6.5	細部内の輪が明確。外面体部タテヘラ後に口縁部ヨコナデ。再び体部タテヘラ。外面下位ヨコヘラズリ。内面体部ヨコナデ。頸部ヨコハテ。口縁部ヨコナデ。外面体部が焼熟した可能性あり。	10.Y8/2 灰黄緑 やや暗黒 白・赤磁粒少 やや硬質	南東床1.5cm 口1/18埋。肩1/6埋 SI-112.16
4 土師器 高杯	口 履19.8 高 6.7	外底面はおそらく多方向のヘラズリ後ヨコヘラミガキ。外面杯体部は斜位に環状のナデ後。内外面口縁部にヨコナデ。内外面体部下位は断面が円れて調整不詳。 注記 SI-64.24 ~ 26, 46, 北西1期、北西2期、南西区、北西区、中東1期、中東2期、南東1期、南東貯穴、Aヘルト西1期、南証跡1上、P1内、19.5-18、SI-412.12、13、SD-304.375、376、378付送	2.SY8/8 赤胎 やや暗黒 白胎—細粒や多。少 白磁と黒磁粒少 やや硬質	北部床1.1mとP10底 1.8cm。肩のうち7 期はSI-64北西部出土。 SD-304にも混入 口1/3埋 注記は5層
5 土師器 盃	高 残3.9 底 履4.8	外面がかなり高直・垂直しているのでは疑念は多考。外底面はおそらく多方向ヘラズリで鋭い凸面状。外面側下位ナメヘラズリ。内面は多方向ヘラナデ。外面の残存部全体が焼熟している。	7.SY8/2 黒胎 やや濃い 白・透明釉—細粒 多。やや硬質	南東床1.2cm 底1/4埋 SI-112.9、P11

SG10区 SI-65 (第104・105図、写真図版101・102・201)

【位置】SG10区北部の22-17グリッド。近くと同じ古墳後期の遺構がなく、北に離れてSI-69・70がある。SI-65→SD-503・SK-517の順で、北東部を近世のSD-503に切られ、時期不明のSK-517に浅く切られる。SD-503とSK-517の新旧関係は不詳。南西側1/2が採土工事で削平され、南半は確認調査時の試掘トレンチで床下まで削平される。規尺溝(調査時名称SD-520)により中央を斜めに切られる。

【規模と形状】方形の建物跡。東壁と北壁が必ずしも直交方位をなさないが、両者から推定した平均的な主軸方位はGN-2°-W。カマドを北壁中央と仮定した場合の推定東西長は6.2m前後(6.0~6.4m)、残存長は東西5.06×南北5.52m。残存壁高は北壁で5~12cm、東壁は最大12cmだが東壁南部は試掘トレンチで破壊され貼床だけが残る。主柱穴は4本想定され、北東柱穴P1が残る。北壁からP1まで(推定約2m)が、東壁からP1まで(1.5m)より長い。P1は床からの深さ47cmで、底面形状からみて推定径は16~20cm。貼床除去後に確認した小土坑P2は床から深さ19cm、掘方底面から深さ11cm。P1に砥石とカマド構築石材片、P2に土師器裏片がある。入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝は不明。

【カマド】北壁にある。両袖推定幅102cm、煙道先端から袖先端まで82cm。東袖の粘土は焼土粒を含む7層、西袖上半の粘土は焼土を含まない6層。西袖は西へ、東袖先端は南へ崩れて流出し(2層)、西袖の西側は木根で攪乱されている。破片化した土師器裏(6)がカマドから西へ崩れるように出土し、その中には別個体の裏底部片(7)も含む。焚口前面の東半に遺物が多く、赤く被熱した川原石がある(C-C'とD2-D2'の交点)。東袖先端付近では、同一個体の杯破片の内面を上に向けて2枚重ねる(1)。袖と貼床を除去した掘方には、地山を1~6cm掘り残した低い高まりが2箇所あり、袖の位置より少し東側にずれる。貼床下にある深さ13cmの小穴に、長さ13cmの川原石が1個入れている(C-C'とD2-D2'の交点の北西側)。

【覆土】自然埋没と思われる。テフラの層や粒は認められない。

【遺物出土状況】カマド周辺の遺物はカマドの項で説明した。カマドの南東側に遺物が多い。編物石がカマド南方の床面に3点(12・13・14)、東壁付近の床面に1点ある(11)。11は被熱しているのでカマド支脚に使ったものかもしれない。北東主柱穴P1内の中部には砥石(16)、下部にはカマド構築材の可能性が

第5章 権現山遺跡 SG10 区



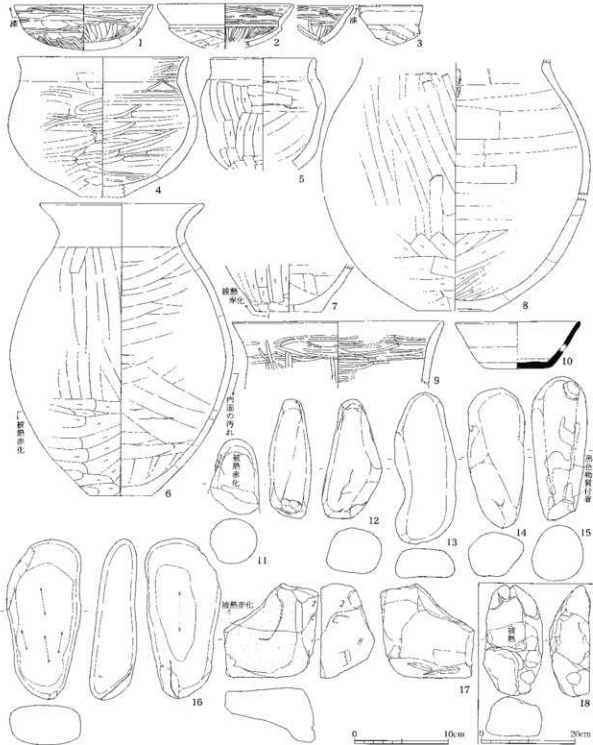
第 104 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-65 (1) 遺構

ある被熱凝灰岩破片 (18) が重なって入る。P1 内下部の被熱凝灰岩は 18 の他に 1 個体分程度の破片があるが、接合・復原できない。床下にある小穴 P2 内の上半には土師器表胴部が 6 片あり、P2 下半には同一個体の土師器表胴部 8 片が入っていた。

[出土遺物] 外傾口縁・外反口縁の杯が目立ち、身模倣形杯は小破片しかない。内面赤彩の杯片もある。1・3 は漆仕上げ杯の古い事例。1 は種子か昆虫 (?) の圧痕または混和痕が器壁中にある。6 はカマドで使用痕が明確な長胴甕。8 は丸甕で、被熱痕は不明確だが、カマド南東側で出土した底部片の外面に焼土が着く。硬質緻密なホルンフェルスの砥石 (16) は周辺各遺跡に比較的多く、SG10 区では SI-12 などにある。カマド構築材の可能性を持つ被熱凝灰岩は、大きな 2 点が P1 内 (うち 1 点が 18)、小さな 17 が遺構確認で出土した。図示以外の土師器と焼粘土塊合計 287 片・2.179g の内訳は、杯 110 片・487g、高杯 18 片・117g、壺甕類 158 片・1.564g、焼粘土塊 1 点・11g。平安時代初めの須恵器杯が混入している (10)。

第 58 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-65 出土遺物

高杯種類	大きさ (縦×径)	特徴	色調 胎土・構成	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.6 高 4.8	外面は体部ナメハラナデ後に横位と縦位のヘラミガキ。口縁部内外面ココナデ後にヨコヘラミガキ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。外面口縁部に粘土・赤彩を 2 枚重ねた甕。内面全体に塗仕上げと思われる褐色付着物が薄く残る。胎土中に混入した粘土または提出 (7) の 8mm 程度の片あり。断面図に記入した。	5YR6/6 粘質 胎土・赤彩～細粒と黒細 少 中や硬質	カマド壁口縁上 4cm で破片を 2 枚重ねた甕 口 7/12 層 4
2 土師器 杯	口 14.4 高 4.6	薄く軽い。内面口縁部が丸く肥厚する。外面は口縁部ココナデ、体部ナメハラナデ。内面は口縁部ココナデ後ヨコヘラミガキ。体部に密な放射状ヘラミガキ。塗仕上げは見られない。	2.5YR4/8 赤相 粘質 白細粒やや多、赤彩～ 細粒と黒細粒少 硬質	カマド 4 層 (床土 3cm) と北部屋土 3cm が接合 口 1/3 層 19、28 ノド、K 東床面



第105図 権現山遺跡 SG10区 SI-65(2) 遺物

3 土師器 杯	口 復 12~14 高 残 4.2	外面は体部ヘラズリ後ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ 底ヨコヘラミガキ。体部ナメヘラナデ後放射状ヘラミガキ。外面口縁部と 内面全面塗仕上げ。	5YR5/6 明黄緑 やや磁質 白・赤・透明黒 - 細粒と黒粒少 硬質	北部床 上 2m 口 1/6 残 38
4 土師器 大形鉢	口 復 18.0 高 14.8 底 復 4.6 最大 復 20.6	外面胴部ヨコヘラナデ後、上平を中心としてヨコヘラミガキ。内外面口縁部 ヨコナデ。内面全体ヨコヘラミガキ。外面中位に9cm大の黒斑があり、被熱 赤はない。	2.5YR5/8 暗 磁質 赤黒~細粒と白・黒・ 透明黒粒少 硬質	北部床 上 2~5cmが接 合 口 1/8 残。底 1/12 残 29, 34
5 土師器 小形鉢	口 復 10.8 高 残 11.8 最大 復 13.2	外面胴部タテヘラズリ後に底付近と肩部をヘラナデ。内面胴部に横~斜位 ヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。底部外面が被熱赤化した破片もあるが、 破片化した後に被熱したものである。	10YR7/6 明黄緑 やや磁質 白黒~細粒と黒・ 透明黒粒少 やや硬質	北部床 上 4cm。カマ下内 側の 1片も接合 口 1/6 残 1, 34

第5章 権現山遺跡 SG10 区

6 土師 甕	口 径 17.4 高 残 30.9 底 径 6.6 最大 径 23.1	外底面は円筒方向のヘラナデで平削。外面割部タテヘラナデ後に下位をヨコヘラナデする。内面は割部ナメヘラナデ後に割下位の縁のみ上浮け面を強いナデ。割下～中位はヨコヘラナデで非常に浅く削いたヘラナデのようにも見られる。内外面口縁部がコナデ。割下位～底面の外面が焼熱赤化し、内面は暗褐色のコガ飯あり。	10YR7/4 に近い黄褐色の白～黒粒と透明細粒多。黒粒～細粒やや多。軟質	カマド内側床土上～床土9cm 口全周、割2/3周、底2/3周 1・64、1ノド、黒面2層
7 土師 甕	高 残 5.1 底 径 6.9	外底面は1方向ヘラナデり。外面割下端ヨコヘラナデと割部タテヘラナデり。内面多方向ヘラナデり。外面割部と底面外面が焼熱赤化。内面底面が暗褐色色飯。	2.5Y7/2 暗黄褐色の白・灰色粗粒と透明細粒～細粒やや多。灰色微少 やや軟質	カマド内側床土上～床土9cm 底1/3周 1
8 土師 甕	高 残 26.5 底 径 8.0 最大 径 28.4	外底面は1方向ヘラナデりで円底状。外面割部タテヘラナデ後に下位を斜削ヘラナデする。内面は底面に1方向と割下位に斜削のヘラナデり、中位は上ヨコヘラナデり、頂面はコナデり。外面下位は強い焼熱赤化もしれないが不明瞭で、少し焼土が付着する。 1口径記: 3, 8, 11～13, 23～25, 32, 33, 42, 67, 12ノド, 33ノ高下, K7キーン, K南面上部, K南面上部, 北西区1層, 北西区2層, Bへルト帯, K, 低地帯乱	10YR7/3 に近い黄褐色の白・透明細粒多。赤・黒細粒少 やや軟質	カマド南東床土5～8cmと北部床土上～床土4cmが接合 直1/4層, 底1/2周 注記は左欄
9 土師 甕	口 径 22.4 高 残 7.1	内外面口縁部と内面割部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面割部タテヘラミガキ。割部破片もあるが、量が不足して接合できない 1口径記: 14, 31, 36, 41, 42, K南面上部, SK-517	5YR7/6 暗褐色 赤黒～細粒やや多。黒細粒少 やや軟質	北部床土2～7cmとカマド内床土1cm, SK-517の2層が接合 口1/2周 注記は左欄
10 湯 瓶	口 径 13.1 高 残 5.0 底 径 6.7	体中部が接合できない。外面底面はヘラ切り難し後に斜削ナデ。ロクロナデ時へラ切り難し時モロクロは右回し(時計回り)。益子窯跡産。平気時代初期の遺物が入る。	7.5Y6/1 灰黄色の白・灰色粗粒と白～灰色粗粒と白細粒少 硬質	口1/18周, 底1/6周
11 石 磁 甕	長 残 7.8 幅 残 5.2 厚 残 4.6	断面が円形で棒状の自然礫を利用。全体がやや軟熟して亀裂が入り、肉の割で折損している。カマド支脚の可能性もある。使用痕は不明。残存重量212.7g。	5Y7/1 灰白細粒と硬質安山岩	東野付直床土直上 口1/2周 47
12 石 磁 甕	長 12.5 幅 6.3 厚 4.5	断面が隅丸形で棒状の自然礫をそのまま利用。図示した側面に1箇所だけ割面がある。これ以外には加工・使用痕は見られない。重量443.3g。	10YR7/3 灰白わずかに多孔質気味で硬質安山岩	北部床土直上 完形 21
13 石 磁 甕	長 15.9 幅 6.6 厚 3.0	細長く上下面が平かな自然礫をそのまま利用。加工・使用・焼熱痕は見られない。重量487.3g。	2.5Y6/3 に近い黄褐色で硬質安山岩	北部床土2cm 口全周 20
14 石 磁 甕	長 14.6 幅 5.9 厚 4.8	断面が不整多角形で棒状の自然礫をそのまま利用。全面が褐色気味だが、焼熱しているかどうかは不明。加工・使用痕は見られない。重量578.6g。	10YR7/4 に近い黄褐色で硬質安山岩	北部床土直上 完形 22
15 石 磁 甕	長 15.1 幅 5.9 厚 6.4	肉の上部が薄く下部が厚くなる棒状の自然礫を利用。図下端は自然の折損と見られる。図上端に鋭い稜がある。土に露出した面にターム状の凹凸や付着。下端の折れ面にも及ぶ。重量762.3g。	7.5Y6/1 灰褐色で硬質安山岩	P1直上30cm 一部欠 48
16 石 磁 甕	長 16.7 幅 7.9 厚 5.0	断面が長方形の自然礫をそのまま利用。両面の中央部を縦位の研削に使用して、細かい稜線とわずかなツヤが認められる。割面が1面だけあり、人工的なものかどうかは不明。重量902.8g。	10YR5/3 に近い黄褐色で硬質安山岩 ニス	P1直上30cm 一部欠 49
17 カマ ド 構築 材?	長 残 9.9 幅 残 9.9 厚 残 5.4 重 残 363.9	平面や断面形状がやや不整なので破片と見られるが、図示した焼熱部が全面に及ぶので破片の状態でカマド構築材に使用したと推定される。焼土は自然面で見えながら、本来は直方体状に加工していたであろう。図の側面と下面(右図下)に工具の跡による加工痕がある。焼熱してやや褐色気味に全面が赤化する。	2.5Y7/2 灰黄褐色で硬質安山岩	カマド付近横溝縁面 破片? 上面

SG10区 SI-66 (第106・107図、写真図版102・103・173・201・202)

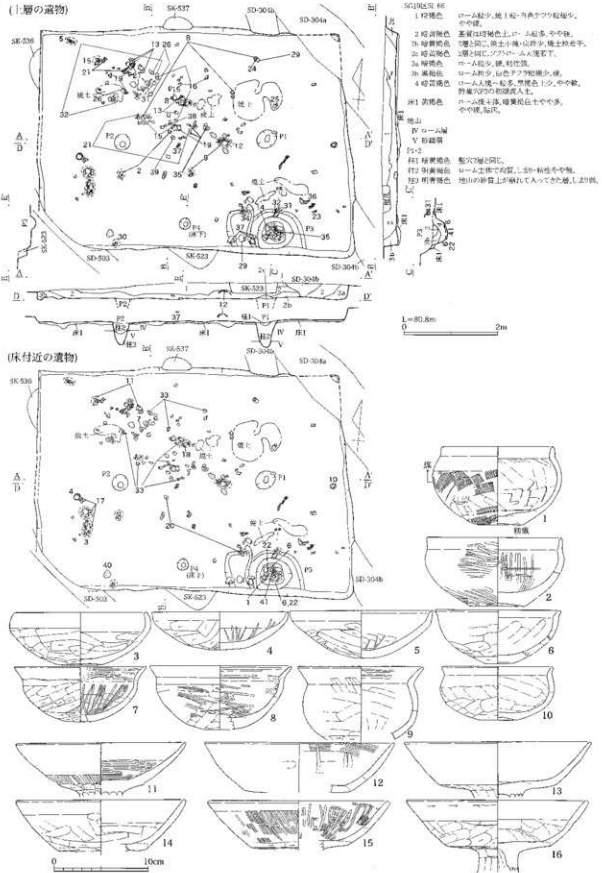
【位置】 SG10区北部の22-7グリッド。同じく古墳中期の遺構は、西にSI-67、南にSI-64がある。古墳中期後～末葉のSD-304a・304bに北東隅と東部を、近世のSD-503に西南隅を切られる。時期不明のSK-523・524・536・537が覆土上部を切る。SK-523・524は南東部でSI-66→SK-524→SK-523の順に重複し、SK-536・537は北西部にある。P1の東側で、先行する倒木痕をSI-66が切る。

【規模と形状】 長方形で主軸方位はGN-3°-W。東西6.78×南北4.54m、残存する壁は東半で高く最大33cm、西壁は残りが悪く12～16cm。主柱穴2本の柱間隔は東西3.08m。底面形から推定した柱径は10～14cmで、床からの深さはP1=51cm、P2=44cm。P1・P2の下部は、地山IV層(ローム層)を掘り抜いた下のV層(青灰色砂と円礫の混合層)にある。P1の大半とP2上半はほとんどがローム質土の柱2層で埋まり、柱穴を確認しにくかった。P2下半は、地山から崩れた砂質土の柱3層で埋まっている。

南東部にある貯蔵穴P3は南北88×南北67×深さ26cmで、貼床土を盛った幅2層20～30cmの周堤がめぐる。P3の西にある窪みは南北88×東西56×床から深さ約10cmで、貼床除去後に確認・図化した。入口施設の可能性のあるP4は貼床除去後に確認し、床面レベルから深さ9cm。壁溝・間仕切溝はない。

【火処】 不明である。炉やカマドは認められなかった。重複するSD-304bやSK-523・524・536・537はSI-66の床面に達していないので、これらが炉を破壊したとは考えられない。

【覆土】 自然埋没状に堆積しているが、壁際流入土(3層)の上に載る2層はロームが多い不自然な土質なので、2層で埋め戻した可能性もある。テフラと考えられる白色粒が1層と3b層に認められ、2層には白色粒がない。この建物は火災にあったと考えられる。北半と南東部に焼土のまとまりが複数あるが、いずれも床面



第106図 権現山遺跡 SG10区 SI-66(1) 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

から 10cm 前後の高さで覆土 2b 層や 2b 層にあるので炉ではない。南東部にある焼土の周囲 3 箇所に見られる炭化材も床から数 cm 浮く。火災建物は SG10 区 SI-66・74・84・104 や SG5 区 SI-11 がある。

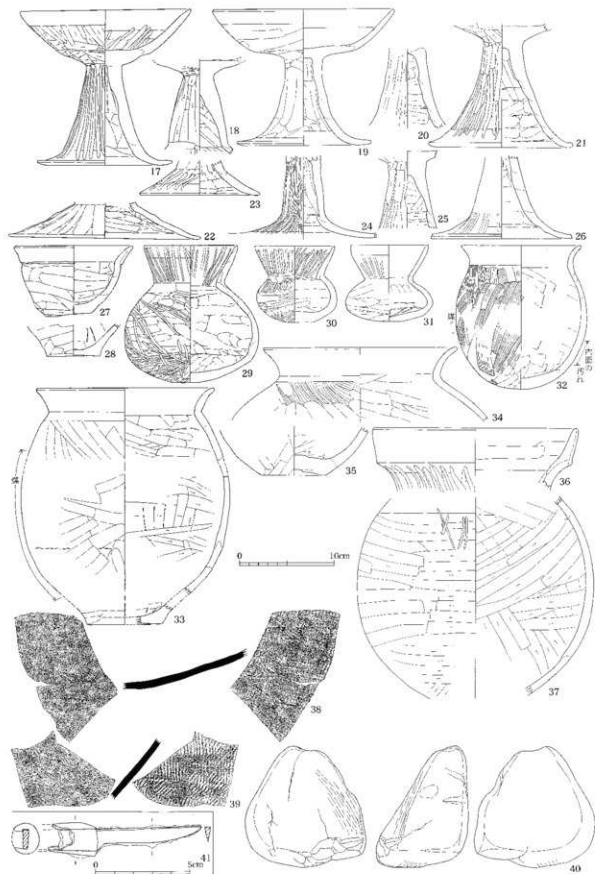
〔遺物出土状況〕 全域に多い。南壁際にある初期流入土 3b 層中に、遺棄品とみられる完形の土師器が多い。貯蔵穴 P3 の底付近で初期流入土 (C-C') の 4 層) に遺物が多い。北西部で 2・11・13・15・21 が 2 層上面に、7・18・33 はそれより下位にある。南西部では 3・4・17・20 が 2 層中で床面にある。SI-66 上層の破片 27 が、SI-25 床付近の遺物 36 と遺構間接合した。SI-25 の遺物片が 65m 離れた SI-66 上層に廃棄または流入したと言える。SD-503 の 22.5-17.2 グリッド出土遺物に、SI-66・67 からの流入品を含むとみられる。

〔出土遺物〕 粉痕のある土師器 (1) は、SG10 区 SI-50 などにある。内斜口縁杯が多い。7 は外面口縁部に粘土紐接合痕を意図的に残す。貼付面の鉢 (27) は SI-25 との遺構間接合品で、同工品が SI-25 にもう 1 点がある。高杯は比較的長い脚の内面下半に粘土紐痕を残し、上半に紐痕がないものが目立つ。小形甕は頭部が少し短くなっている。32 はハケ調整・丸底の特徴的な小形甕で、却て使ったような煤が薄く付着する。受口状口縁の壺 (36) は SG10 区 SI-19a などにある。須恵器甕片の 38 と 39 は同一個体で内面無文。刀子 (41) は本遺跡北半の SG1 区低地にもある (『東谷・中島地区遺跡群』10, p.469)。台石に擦痕がある (40)。

図示以外の土師器は小破片が多い。不掲載の杯類は内斜口縁 2 点と平底底部がある。壺甕類は底部で数えて 3 点、中形甕は 1 点、高杯脚上半部 5 点。合計 281 片・2.429g の内訳は、杯 109 片・650g、高杯 88 片・907g、甕甕類 84 片・872g。図示以外の須恵器は、外面平行明き・内面無文の甕胴部が 4 片・70g あり、38・39 と同一個体かどうかは不詳である。

第 59 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-66 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ 高さ・口径	特 徴	色調 胎土・色成 (または素焼)	出土状態 残存状態 注記
1 土師 杯	口 12.0 高 8.2 底 4.8 最大 13.6 重 331.4	外底面は浅なナデで、頸縁が少し高くなり、頸縁の圧痕が 1 箇所あり。外面は体部ナナメナデ後に口一帯をヨコナデし、内面は体部ナナメナデ。体部にヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。外面全周の口一帯部に多量の煤付存。体部下平角焼してあるかもしれないが不明。	7.5YR6/6 暗 緑褐色 赤褐色と白・透明釉 ～磁粒やや多。黒磁粒少	野塚区上 17m (3層) 穴底 4
2 土師 杯	口 14.0 高 7.2 底 5.5 最大 14.6	外底面は放射状のヘラズリで凹状。外面はおそらく体部ヘラズリ後に口一帯を密なヘラミガキ。内面は底部に多方向に体部に扇状の密なヘラミガキ。外底付近に 9cm 下の黒痕あり。 [注記] 101, 122, 130, 南東 1 層, B ベルト南 1 層	5YR6/6 暗 白・赤磁粒と白・透明 磁粒少 やや破質	中央床土 17m と南西床土 28cm (1層) と北西床土 18cm の接合 口 1/4 弱。底全周 注記 3 以上
3 土師 杯	口 14.1 高 5.5 底 4.0 最大 14.9	外底面は 1 方向ヘラズリで凹状。外面は口縁部ヨコナデ。体部上位ヨコヘラナデと下位ヨコヘラズリ。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ。内面底部は器面が割れ、使用痕と思われる。	7.5YR6/6 暗 やや粗い。白・透明釉～磁粒 と黒磁粒多。赤～黒磁粒少 破質	西部床土 (2層) 口 3/4 弱。底全周 136
4 土師 杯	口 14.1 高 4.1	外底面は 1 方向と体部に横～斜位のヘラズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部におそらくヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面全体に放射状ヘラミガキ。	7.5YR7/6 暗 やや粗密 白・赤磁粒と透明磁粒 やや多。黒磁粒少 やや破質	西部床直上 (2層) ほぼ完形 口 11/12 弱 133
5 土師 杯	口 15.0 高 5.0	外底面は丸底が強く多方向ヘラズリ。外面は口縁部ヨコナデと体部縦～斜位ヘラズリ。内面は口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラナデ。	5YR6/6 暗 粗い。赤磁粒～磁粒多。白・透 明釉～磁粒と黒磁粒やや多。 白・灰色磁粒少 やや軟質	北西部床土 8cm (2層) と遺構成造部 1 層が 接合 口 7/12 弱 89, 北西 1 層, 1 面
6 土師 杯	口 13.2 高 7.6 底 2.9	口一帯部縁の縁は内面で明色。外底面はヘラズリで凹状。外面は口縁部ヨコナデ。体部ヘラズリナデ。下部ヨコヘラズリ。内面は体部ナナメヘラズリ。口縁部ヨコナデ。口縁部内外面に煤が付着する箇所も見られる。	2.5YR6/8 暗 やや粗い。白・赤磁粒～磁粒 やや多。黒・透明磁粒少 やや破質	南東部 2 層 (野塚穴) 底面 口 1/2 弱。底 5cm が接合 口 1/2 弱。底 3/4 弱 やや破質
7 土師 杯	口 14.0 高 5.8	外面は口縁部下縁に細く紐接合痕を明瞭に残している。外底面はヘラズリで平底またはわずかに凹状。外面は口縁部ヨコナデ。体部下平ナデかつナデ。体部下平ヨコヘラズリ。内面は体部ヨコヘラナデ後にタテヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後に口ヘラミガキ。	2.5YR5/8 明赤 やや粗い。白・透明釉～磁粒 やや多。赤・黒磁粒少 破質	北西部床土 (直上) と 1 層 (床土 12cm) と 2 層 (床土 3～21cm) が接合 口 1/2 弱。体下部 3/4 弱 注記 3 以上
8 土師 杯	口 14.9 高 6.7	外面は体部下縁に斜位のヘラズリ後ヘラナデ。体部上位にヨコヘラナデ。体部ヨコヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラナデ後に横～斜位ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。 [注記] 146, 48, 65, 77, 113, 114, 150, 北東 2 層, 北西 2 層, 南東 2 層, A トムラ 2 層	7.5YR5/4 白～明 やや粗い。白・透明釉～磁粒 やや多。黒・透明磁粒少 やや破質	北東部 2 層 (床土 3～ 15cm) と北西部 1～2 層 (床土 3～21cm) が接合 口 1/2 弱。体下部 3/4 弱 注記 3 以上
9 土師 杯	口 13.2 高 7.7	外面は体部下縁に斜位のヘラズリ後に口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラナデ後に下位ヨコヘラズリ。内面は体部下平を横位のやや強いヘラズリ。口縁部ヨコナデ。焼熱前や内外面の汚れは見られない。	5YR6/6 暗 やや粗密。赤磁～磁粒多。 白・黒・透明磁粒やや多 やや破質	北東部 2 層 (床土 8～ 10cm が接合) 口 1/9 弱。体 1/4 弱 26, 28, 南東 2 層
10 土師 杯	口 11.8 高 5.8 底 3.6 最大 12.0	口一帯部縁の縁は内面で明色。外底面はナデで凹状。外面は口一帯部ヨコナデ。体部ナナメヘラズリ。下部ヨコヘラズリ。内面は底部に多方向に体部に横～斜位のヘラズリ。口縁部ヨコナデ。	5YR7/8 暗 やや粗密。赤磁～磁粒多。白 粗い。白・透明磁粒少 やや破質	西部床直上 (3層) 口 1/5 弱。底全周 42
11 土師 高杯	口 16.8 高 6.7	外面杯底面はナデ後に外周ヨコヘラズリ。外面体部タテハケと内面体部ヨコヘラ後に内外面口縁部ヨコナデ。内面杯底面はナデ。 [注記] 170, 89, 北西 2 層, B トムラ 2 層	2.5YR6/8 暗 やや粗密。赤磁～磁粒多。白 粗い～磁粒やや多。黒・透明 磁粒少 やや破質	北西部床土 13～21cm が接合 (2層) 口 1/2 弱。杯底 2/3 弱 注記 3 以上



第107図 権現山遺跡 SG10区 SI-66(2) 遺物 27番の遺物は第51図36を再現

第5章 権現山遺跡 SG10区

12	土師器 高杯	口 復 20.0 高 残 5.0	外面は磨滅して調整不明。内面は斜へ横位ハケ後にタテヘラムミガサ。	5YR7/8 橙・黒 やや磨滅 白・赤・黒・緑 粘りや中多。透明細粒少	中央部床土10cm(2層) 口1/2層、杯底1/2周
13	土師器 高杯	口 19.8 高 5.5	外面は磨滅しておそらくタテヘラケズリ。外面杯体部と内面は磨滅して調整不明。内面は平ナデナデ。外面口縁部に5cm大よりも広い黒帯あり。 [注記]59, 63, 66, 72, 145, B区トレンチ北1層	7.5YR6/6 橙 やや磨滅 赤・黒帯-細粒と 白・赤・黒-細粒と黒 粘りや中多。灰土色 少 軟質	北西部床上9~22cm(2層)と中央部床上2~21cm(1層)と 口1/4層 注記は左欄
14	土師器 高杯	口 復 18.0 高 残 5.2	外面は杯体部と杯底部を放射状または斜位にナデ後に杯体部下端と杯外縁をヨコヘラケズリ。内面は杯体部ヨコヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 磨滅 白・黒細粒やや少 少・透明細粒少	東部床上3~5cm(1層)が接合 口1/3層 5, 6
15	土師器 高杯	口 復 19.2 高 残 5.2	外面は杯底部タテヘラケタテヘラケズリ。杯体部ナメハケ口縁部ヨコナデ。杯体部下端と杯底部両方をヨコヘラケズリ。内面は杯体部ヨコナデ。杯体下部と杯底部は非常に強く、ハケを施してはほとんど消していないか。またはヨコナデ後にハケを施している。 [注記]54, 55, 80, 87, 89, 107, 109, 120, 150, 北東1層, 北東2層, 北西, Bトレンチ2層, Bベルト北1層, SM-525西平	7.5YR7/6 橙 やや磨滅 赤・黒帯-細粒と 白・赤・黒-細粒と黒 粘りや中多	東部床上1.3~13cm(2層)と中央部床上1.3~21cm(2層)と中央部床上4~8cm(1~2層)が接合 口3/4層, 脚板1/2周, 杯底7/12周 注記は左欄
16	土師器 高杯	口 復 19.2 高 残 7.7	外面は杯体部ナメハケナデと杯底部タテヘラケナデ。体下端から底外縁をタテヘラケズリ。脚板に磨滅と横位のナデ。内面杯体部ナメハケナデ。内外面の口縁部ヨコナデ。内面口縁部上端は磨滅状。 [注記]187, 50, 56, 76, 119, 北東1層, 北西2層, Bトレンチ1層, Bトレンチ2層, Aベルト西1層, Bベルト北1層	7.5YR6/6 橙 やや磨滅 赤・黒帯-細粒と 白・赤・黒-細粒と黒 粘りや中多	北東1~12~19cm(1~2層)と中央部床上7cm(2層)が接合 口3/4層, 脚板1/2周, 杯底7/12周 注記は左欄
17	土師器 高杯	口 18.0 高 16.1 底 14.2	外面は杯部下平ヨコヘラケズリと上平ナメハケズリ後ヘラケナデ。杯口縁部ヨコナデ。外面脚板はタテナデと脚部ヨコナデ後にタテヘラケミガサ。内面はヨコヘラケ後に口縁部ヨコナデと底-杯体部を放射状ハケミガサ。脚板内上部を斜して下平ナメナデ。脚部ヨコナデ。	2.5YR6/8 橙 やや磨滅 白・赤細-細粒と やや少。黒・透明細粒少 中や軟質	南西部床上12層 口2/3層, 脚板全周, 脚部7/12周, 杯底全周 134~136
18	土師器 高杯	口 復 10.0	脚板部が厚く重く、中程が外へ膨らむ。外面は脚部タテヘラケズリ後脚部柱面を下ナデ。杯底部ヨコヘラケズリ。杯底部内面はヘラケズリ後に2~3方向のヘラムミガサ。脚板部内面ナメハケズリ。脚板部内面ナメハケズリ。	5.5YR4/3 に近い黄 やや磨滅 白・赤・透明細 粒多。黒細粒やや多 硬質	中央部床上2(2層) 脚板全周
19	土師器 高杯	口 復 19.2 高 14.4 脚板 復 14.2	外面は磨滅して調整せず。おそろく磨滅と斜位のヘラケタテヘラケズリ。内外面の口縁部と脚板部にヨコナデ。脚板内面はタテナデと部分的なヨコナデで、上部に絞り目の線と下部に粘土積み上げ痕を残す。杯内面はヘラケナデと思われるが磨滅して不明。 [注記]95, 97, 121, 146, 上面, Aトレンチ	7.5YR7/6 橙 やや磨滅 白・赤・透明細粒 少 軟質	北西部床上3~13cm(1~2層)と中央部床上18cm(1層)が接合 口5/2層, 脚板1/2周, 脚部1/4周 注記は左欄
20	土師器 高杯	高 残 8.4	外面タテヘラケズリ。脚内面は上端を横にナデた後、中位以下を成形してヨコヘラケズリ。脚上端は杯底との接合部で割れたものかもしれない。	10YR8/4 黄褐色やや磨滅 赤細-細粒と透明細粒多 白・黒帯-細粒少 やや軟質	2層(中央部床直上と南東部床上8cm(接合)) 19, 131, 南東上平
21	土師器 高杯	高 残 13.0 脚板 15.2	外面は杯底-脚部タテヘラケズリ後に杯底外周ヨコヘラケズリと脚部ヨコナデ。脚部タテヘラケミガサ。脚内面は上平タテナデと下部斜へ横位ヨコナデ。脚部ヨコナデ。脚下部内面には倒立状態を右回り(時計回り)に線と粘土の層を残す。 [注記]67, 79, 90, 96, 98, 112, 129, 147	10YR6/4 灰色黄褐色 やや磨滅 赤・黒-細粒と 白・赤・黒-細粒と黒 粘りや中多。白濁と透明細粒 少や軟質	中央-北西部2層(床直上10cm)と1層(床直上16~24cm)が接合 杯底1/2周, 脚板7/12周 注記は左欄
22	土師器 高杯	高 残 3.7 最大 復 20.4	外面は脚板部をおそろくタテヘラケナデ。脚板部ヨコナデ後に放射状ヘラケナデ。内面は脚板部ナメハケナデ。脚板部ヨコナデ。脚板部長8cm以上の黒帯あり。	5YR7/8 橙 やや磨滅 黒・透明細粒と 白・黒細粒少 やや軟質	南東部床上1層(床直上3cm)が接合 脚板1/4周 5, 9, 157, 野方西平
23	土師器 高杯	高 残 3.7 脚板 復 12.7	外面は脚板部と脚板部ナメハケズリ後ナメハケナデ。脚板部ヨコナデ。脚部ヘラムミガサ。内面は脚板部を少し斜してタテナデ。脚板部の上平をタテナデと下平をヨコナデ。	7.5YR7/4 に近い黄 やや磨滅 白濁と透明細粒と 白・赤・黒細粒少 軟質	南東部床上18cm(2層) 脚板1/2周, 脚部1/36周 16, 南東区上面, 南東2層
24	土師器 高杯	高 残 8.7	外面は脚板部ナデと脚板部ヨコナデ後に全体をタテヘラムミガサ。内面は脚板部上平を斜り絞った後にタテナデし、底部を成形してヨコナデ。	5YR6/6 橙 磨滅 白・赤・透明細粒少 やや軟質	北東部床上3cm(2層) 脚板全周, 脚下部1/6周 49
25	土師器 高杯	高 残 8.1	外面は杯底-脚板部タテヘラケナデ後に脚板上平をタテヘラケズリ。脚内面は上平を斜り絞った後に中位以下を斜立状態で反時計回り(右)に積み上げタテナデおよびヨコヘラケズリ。杯内面は磨滅して調整不明。	5YR6/6 橙 やや磨滅 白・赤-細粒多。灰 色帯と赤・黒・透明細粒少 やや軟質	北東部床上6cm(2層) 脚板全周 40, 127
26	土師器 高杯	高 残 10.2 脚板 14.8	脚板の端は凹磨状で、端部内外面が強く磨滅する。外面はナデまたはヘラケズリ後に磨滅を付加して全体をタテヘラムミガサ。内面は上端に横位のタテナデ。下部にヨコヘラケズリ。脚部にヨコナデ。脚部が磨滅して調整不明の部分がある。 [注記]73, 82, 100, 108, 北東1層, 上西, Bベルト, 内北2層	5YR7/8 橙 磨滅 白・赤-細粒と黒細粒 少。白・透明細粒少 やや軟質	北西部床上7~21cm(1層)と中央部床上22cm(1層)が接合 脚板7/12周 注記は左欄
27	土師器 鉢	口 復 12.5 高 残 7.2 底 復 4.8	下部が厚くやや凸凹。外面は杯体部ナメハケ後に下部ヨコヘラケズリ。外面は面方ヘラケズリ。口縁部外面に粘土部を付加し斜り絞った後、内外両面をナデ。内面は杯体部と底部に多方向のヘラケズリ。S125の37と同一。S125出土土破片(口1/2層、底5/12周)とS166出土土破片(口1/3層、底1/12周)が接合。 [注記]52, 57, 388, 東コーナ-。貯蔵穴一基, S166Aベルト東1層	5YR5/6 明赤 やや磨滅 白・赤-細粒と黒 少。黒・透明細粒少 やや軟質	S125の南東部床上1cm(2層)でS166と同一。S166:60~69cm平面上に1層出土土破片が接合 口5/6周, 底1/2周 注記は左欄
28	土師器 鉢	高 残 3.4 底 復 5.6	外底面は多方向ヘラケズリでわずかに上へ膨らむ。外面部ナメハケナデ。内面は杯体部ナメハケナデ。	7.5YR6/6 橙 やや磨滅 白細-細粒と黒・ 透明細粒少 硬質	遺構跡直面 底1/4周 上面
29	土師器 小形甕	口 9.7 高 14.6 最大 14.1 重 復 582.3	体部は褐色。口へ肩帯は黄褐色の粘土で製作している。外面は杯体部ヨコナデと底部横-斜位ヘラケズリ。口-頸部ヨコナデ。全体を磨滅-斜位ヘラケズリ。内面は下平ヨコヘラケズリ。口-頸部ヨコヘラケズリ。	7.5YR7/6 橙 やや磨滅 赤・透明細-細粒 多。白・灰色帯と黒細粒 少 やや軟質	南東部床上7cm(3層)と北東部床上3cm(2層)が接合 注記は左欄, 口縁部1/2周欠 1, 46
30	土師器 小形甕	口 8.3 高 8.0 底 3.0 最大 8.4	外底面1方向ヘラケナデで平直。外面部ヘラケナデと下部ヨコヘラケズリ後に杯体部全体をナメハケミガサ。頸部下位タテヘラケズリと口縁部ヨコナデ後に杯体部ナメハケミガサ。内面はナデナデ後に口縁部ヨコナデ。頸部ナメハケミガサ。頸部外面に6cmの黒帯1箇所あり。	2.5YR5/8 明赤 やや磨滅 白細-細粒と中 多。黒・透明細粒少 やや軟質	南西部床上16cm(2層) 口1/4層, 底全周 112
31	土師器 小形甕	口 8.2 高 8.0 底 2.4	外底面はあまり磨けない平直で、底面と外面部下部はヘラケズリ後ナメハケナデ。外面部ナメハケミガサ。口縁部ヨコナデと頸部タテヘラムミガサ。外面部下部ヨコヘラケナデと上へ中位ナデ。口-頸部ヨコナデ。脚部が磨滅して調整不明。現存重量172.7g	10YR7/6 明黄赤 やや磨滅 白細-細粒と 赤・黒-細粒と透明細粒 少 やや軟質	南東部床上8cm(2層) 口11/12周, 底全周 13

32 土師器 小形甕	口 径12.6 高 残15.2 最大 径14.6	外底面に多方向の浅いヘラナデ後、外面側部に浅いタテハケ。内面は底部に多方向に側部に斜位のヘラナデ。内外面に黒曜石コナデ。外面平らと上縁部に少量の黒石。内面側部下位に暗褐色の薄い汚れが少量あり。外面の焼熟面は不明。 [注記] 71, 83, 94, 99, 147, 148, 156, 北東1層, 北西1層, 北西2層, 南東2層, 南西1層, 南西2, Bトレ北1層, Bトレ北2層	2.5Y6/3 に近い黄 ややや白・白細粒多、透明細 ～細粒と黒細粒少 ややや黄	北西床土3～14cm(2層) 北南床土10cmが 接合 口1/2層, 径1/2層 接合面 注記は左欄
33 土師器 甕	口 径18.8 高 残約25 最大 径22.2	外底面に1方向ヘラナズリ後ヘラナデでわずかに凹底。外面側部に横へラナズリ。内面側部コヘラナデで、胴下縁の縁のみ上縁体正面周辺はコヘラナズリ。口～頸部の内外面をコナデ。外面側部中～下位に保が多付く。高まる。 [注記] 49, 57, 60, 74, 78, 80, 84, 85, 101, 115, 118, 142, 144, 151, 153, 156, 南東1層, 北西2層, 北東1層, Aベルト東2層, Bベルト北1層, Bトレ北1層, Bトレ北2層	7.5YR7/6 橙 やや粗い・白細粒多、白・灰 色塵～粗粒と赤・透明細粒少 多、白粗粒少 散見	北西床土上～18cm(1～2層)と中央部床土3～18cm(1層)が接合 口1/2層, 径1/3層 注記は左欄
34 土師器 甕	口 径20.5 高 残7.8	外面は胴部ナメハケ後に側部に斜位(内)のナデ。口～頸部コナデ。胴部から頸部上端の間にナメハケがみられない。内面は胴部コナデ。口縁部コナデ。	2.5Y8/3 淡黄 やや粗い・白・黒・透明細粒 多、白粗粒少 散見	南東床土8cm(2層) 口1/4層, 径1/4層 18, 一層
35 土師器 甕	高 残5.1 底 6.6	外底面上げ状態で、外側に粘土を塗って更に黒に着色している。底面外周をヘラナズリ。胴下縁外面ナメハケナデ。内面は底部に多方向ヘラナデ。胴部に斜位のヘラナズリ。 [注記] 17, 25, 32, 128, 130, 南東1層, 南東2層, Aベルト東2層, Aベルト東2層, Aトレ東2層	7.5YR6/4 に近い橙 やや暗赤・赤粗粒やや多、白 粗～細粒と黒・透明細粒少 散見	中央部床土8～15cm(1～2層)と南東部床土3cm(4層) 径2/3層 注記は左欄
36 土師器 甕	口 21.2 高 残6.5 最大 21.6	口縁部の外面に粘土を塗って厚くする。口～頸部内外面コナデ後、頸部外面タテヘラミガキ。 [注記] 17, 20, 21, 30, 南東2層	5YR6/6 に近い黄 やや暗赤・黒細粒多、透明細 粒と白・赤粗～細粒やや多、 灰色塵少 少ややや黄	南東2層(床土3～15cm)が接合 口2/3層 注記は左欄
37 土師器 甕	最大 25.0	外面は全体を主に横にヘラナズリした後、同一側上縁をコナデ。内面は斜位のヘラナズリ後ヘラナズリ。外面側部に凹出した黒石層が5本あるが、凹出して黒いたものではないかもしれない。焼熟・使用面は見られない。 [注記] 2, 3, 5, 8, 143, 南東2層, 北東2層, Aトレ東2層, 野古西平	7.5YR6/6 橙 やや粗い・白塵～細粒多、灰 色・透明細～細粒と黒細粒少 ややや黄	南東3層(床土3～8cm)が接合 口1/6層 注記は左欄
38 土師器 大甕		外面は破片上部に横位、下部に横位の平行明き後に回転コナデ。内面は横位のナデで無文。39と同一個体。	5Y4/1 灰 緑帯や白・半透明細～細粒少 硬質	中央部床土19cm(1層) 底部付込の2片 117
39 土師器 大甕		外面は斜位～斜位の平行明き後に間隔を空けた横位のナデ。取き板は木目状に平行する溝を彫っている。内面は横位のナデで無文。38と同一個体。	7.5Y5/1 灰 緑帯・白・半透明細～粗粒少 硬質	中央部床土20cm(1層) 側部1片 124
40 石 器 台石	長 12.8 幅 12.7 厚 9.8	断面が三角形形状の自然産で、図に記入した2箇所はやや粗面で浅く掘り込みがある。全体の焼熟赤褐色。図の右側の角部は特によく焼熟して磨面がみられる。重量1743.0g	2.5Y6/2 灰黄 緑帯ややや暗赤や安山岩	南西部床土直上(3層) 完全 140
41 鉄製品 刀子	長 残7.6 刃幅 0.8 葉幅 1.2	刃部はよく使用して鋭さ減りしている。基部は刃側で厚さ0.21cm、棟側で厚さ0.28cm、棟厚さ0.30～0.34cm。木製の柄が土に表面近くで残っている。断面は長1～1.7cmの楕円形状。柄の表面に種菌等を塗っていた可能性がある。重量10.3g		野蔵穴底上3cm 基部下平穴 158

SG10区 SI-67 (第108図、写真版103・104・202)

【位置】SG10区北部の22-17グリッド。同じく古墳中期のSI-66が東にある。近世のSD-503と南西部の採土工事に破壊されている。

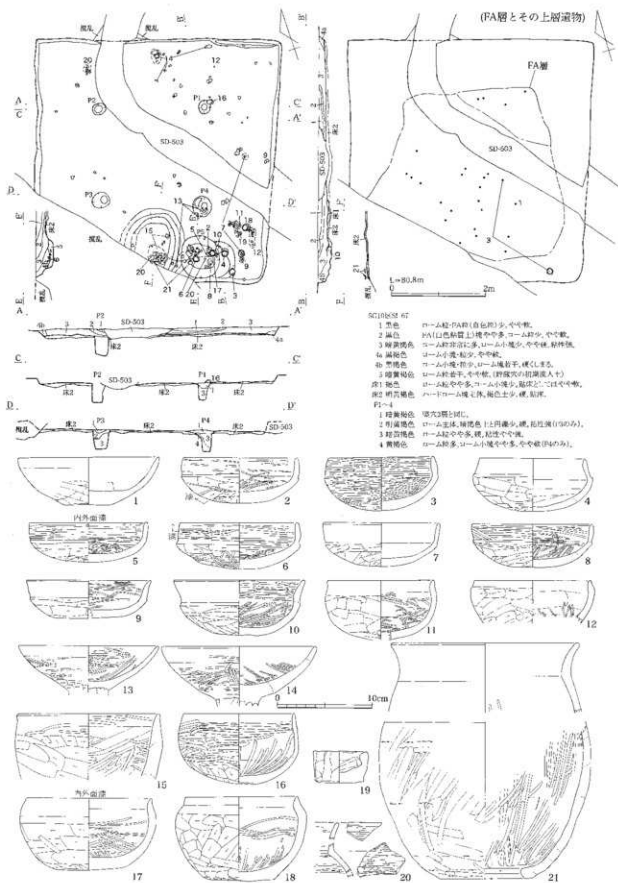
【規模と形状】方形で主軸方位はGN-16°-E、東西5.40×南北5.24m。残存壁高は西壁中央で最大28cm、南壁東部と東壁北部で17～18cm。主柱穴は4本で南西柱穴P3が少し内側にある。柱間は南北1.94(西側)～2.16m(東側)、東西2.12(南側)～2.24m(北側)。P3からの深さはP1=35cm、P2=39cm、P3=30cm、P4=41cm。柱穴断面形状から推定した柱径は15～20cm。不手際によりP2は土層の記録がない。

南中央にある入口関連のU字形土手状盛土は床から高さ2～7cmで、土手部の地山を少し掘り残した上に貼土を貼る(F-F'の床2層)。南東部の貯蔵穴P5は東西82×南北88×深さ21cmで、東側に蓋受けとも見られる浅い窪み(東西長32cm、床から深さ4～6cm)が付く。P5周囲には土手状盛土がない。壁溝は北壁東部だけで確認し、床から深さ1～6cm。間仕切溝はない。掘形下面はローム層下の円礫層中。

【火処】不明で、SD-503に破壊されたことが考えられる。カマドが一般化した古墳中期末の建物であるが、東壁や北壁にあったカマドが壊されたような焼土・粘土まじりの覆土は面的に認めできなかった。

【覆土】自然埋没で、埋没途中で降下したテフラ塊を含む覆土2層が把握されている。SI-67ではテフラを分析していないが、SG5区(第8章第2節)や北部のSG1区・2区・4区と、周辺遺跡(杉村遺跡北関東自動車道調査区、磯岡1区・3区、立野5区)のテフラ分析結果から、古墳後期初頭に降下したHr-FAと考えられる。テフラの量はやや少ない。断面A-A'とB-B'が通る位置より南西のP4西側付近でテフラのレベルが最も低く、床面を2層が覆う。テフラ降下よりも僅かにさかのぼる時期の建物と見られる。

【遺物出土状況】南東部の貯蔵穴周辺に遺物が多い。完形に復原できる古墳中期末の楕板杯が床面にある(4)。貯蔵穴内では、壁際の初期流入土4層より先に流入した5層中に土師器杯(5)などの破片が面的に広がる。



第108図 権現山遺跡 SG10区 SI-67 遺構・遺物

それより上の4b層に集中する残存度の高い杯や鉢は、貯蔵穴周囲や蓋上から落ちたものかもしれない(2・6・8・10・17)。北東部でほぼ完形の鉢が床面にある(16)。FA層の上層にも遺物があるので、火山灰および上層遺物の出土状況を示した(図右上の1・3)。FA下層(P5東側)の3に接合した小破片もFA層上にあり、本建物から周辺に廃棄した土器片が、FA降下後に竪穴内の窪地へ再流入したと推定される。

【出土遺物】土師器は橙色の胎土でよく磨くもので、3は特によく磨いている。古墳中期末ころの須恵器模倣杯が見られる。2・5・6・17は漆仕上げとしては古い時期の資料である。高杯は脚が太いので短脚とみられ、13は漆仕上げかもしれない。小形土器(19)は組織みではなく手捏成形。胴部上位に横位の沈線または段を持つ土師器大形甗(21)の事例は立野遺跡5区SI-46にある(『東谷・中島地区遺跡群』5)。

図示以外の土師器杯は身模倣形・直立口縁・外傾口縁が各1個分以上、小形土器は1個分、甗は1～2個分(大形甗と底部一孔の小形甗)がある。壺甗類は復原できない破片が多い。図示以外の土師器合計334片・3.399gの内訳は、杯158片・884g、高杯27片・231g、壺甗類89片・1.196g、甗55片・1.066g、小形土器5片・22g。このうちFA層より上層は小破片ばかりで計42片・364gあり、内訳は杯12片・62g、高杯1片・12g、甗10片・47g、壺甗類19片・243g。テフラの上下で器種や時期が大きく異なる状況はない。

第60表 梅現山遺跡SG10区SI-67 出土遺物

番号 器種	大きさ mm/φ	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.9 高 5.0 底 52	外底面は平底でナデ調整。内外面体部の調整は磨滅して不明瞭だが、おそろく横～斜位のヘラナデと口縁部ヨコナデ。	10R6/6 赤褐 磨面 白～細粒やや少、白 濁と赤・透明細～細粒少 やや破片	遺跡確認。南東部FA 上8cmの1片が接合 口1/2周、底全周 10、上1
2 土師器 杯	口 11.8 高 4.8 最大 12.5 重 現253g	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ後、体部に斜～直ヨコヘミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘミガキ。内面体部に斜～横位の密なヘラミガキ。外面の口～体部と内面全体に漆仕上げ。	5YR2/1 黒濁 やや磨面 白・黒・赤・透明 細～細粒やや少 やや破片	新設穴直上8cm(4層) 口3/4周、体全周 104
3 土師器 杯	口 11.1 高 5.7 底 2.0 最大 12.0	外底面は多方向ヘラケズリ。内外面の口縁部に密なヨコヘミガキ。内外面にそれぞれ6～9cm大の黒染あり。	5YR6/6 橙 やや磨面 白・赤濁～細粒と 黒・透明細粒少 やや破片	南東部床土5cm(4層) と敷板下底土5cm(5 層)。中央部FA上2cmの 1片が接合 口3/4周 26、101、116
4 土師器 杯	口 11.2 高 5.6 最大 12.6 重 216.1	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。	5YR2/8 橙 やや磨面 白・赤・透明細 ～細粒やや多。灰黄色～ 細粒少 破片	新設穴直上(4層) ほぼ全面 口全周 102
5 土師器 杯	口 12.5 高 4.2	外面の口～体部に磨滅1本。外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘミガキ。内面体部に斜～横位の密なヘラミガキ。内外全面漆仕上げ。	7.5YR3/3 暗褐 磨面 赤～細粒と白細粒や やや多。透明細粒少 破片	新設穴直上(5層) 口1/4周 108
6 土師器 杯	口 12.3 高 4.9 最大 13.0	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ後、多方向ヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘミガキ。内面体部に密なヨコヘミガキ。外面口縁部と内面全体に漆仕上げ。	5YR6/8 橙 磨面 白・黒・透明細粒や 少。白細粒と赤細粒少 破片	新設穴直上10cm(4層) 口3/4周、体全周 107
7 土師器 杯	口 12.3 高 4.6	薄く磨いた。外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面が磨耗しているので内面体部や内外面口縁部にヘラミガキを施しているかどうかは不明。外面体部に5～5cm大の黒染あり。	10YR6/4 に近い黄褐 磨面 赤～細粒と白・黒・ 透明細粒少 やや破片	南東部床土5cm(3～4 層)。東部床土4cm(3～ 4層)の1片も接合 口1/2周、体全周 50、125
8 土師器 杯	口 12.5 高 4.7 最大 12.8 重 現181.6	外面は底部に1方向と体部横位のヘラケズリ。体部に少量のヨコヘミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘミガキ。内面体部に斜～横位の密なヘラミガキ。内外全面漆仕上げかもしれないが不確実。	7.5YR6/8 橙 磨面 赤細粒と白・黒・透明 細粒少 破片	新設穴直上10cm(4層) 口1/2周 112
9 土師器 杯	口 13.2 高 4.0	口縁部を強く外へ磨いた。外面は口縁部ヨコナデ後、体部ヨコヘラケズリ。内面は全体にやや密なヨコヘミガキ。	2.5YR6/8 橙 やや磨面 赤～細粒やや多。 白・黒・透明細粒少 やや破片	東部床土2cmと南東部 床土9cm(3～4層) 口1/6周、体1/4周 49、123、Bへット4周 50、125
10 土師器 杯	口 13.8 高 5.9 底 3.7	外底面は1方向ヘラケズリで不明瞭な平底。外面の体部に斜～横位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面は下平ナデと上平ヨコナデの後、口縁部に横位。体部に斜位。底部に多方向のヘラミガキ。	5YR6/6 橙 やや磨面 透明細粒多、白～ 細粒と黒細粒少 破片	新設穴直上15cm(4層) 口2/3周、底全周 105
11 土師器 杯	口 11.2 高 現6.3 最大 現11.7	外面は口縁部ヨコナデ後体部ヨコヘラケズリ。底部ヨコヘラナデまたはヘラケズリ。内面は体部に多方向ヘラケズリ後ヨコヘミガキ。口縁部ヨコナデ。	5YR3/3 黄褐 やや磨面 赤細粒と白～細 粒少 破片	新設穴床土3～4cm(3 層) 口3/4周 32、33
12 土師器 杯	口 12.2 高 現4.5 最大 現13.0	外面は口縁部ヨコナデと体部ナデ。底付近ヨコヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラナデ後に斜～直タテヘラミガキ。	5YR4/4 に近い赤濁 赤～細粒やや多。白・ 黒・透明細粒少 やや破片	南東部床土3～8cm(3 ～4層)。北東部床土1 cmに6.1片あり 口5/12周、注記左欄
13 土師器 高杯	口 14.8 高 現4.7	やや磨く。胴部位に中央。外唇部は中位にナデ。下位ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。中位以下にヨコヘミガキ。杯内面は体部ヘラナデ(口)と口縁部ヨコナデの後、胴部に1方向と口～体部に横位のヘラミガキ。胴部上部内面の口縁部を密にナデ。内面に少量の黒染(黄)あり。漆仕上げの可能性もある。	7.5YR6/6 橙 やや磨面 白～細粒やや多。 白・黒・透明細粒少 やや破片	東部床土2cmと柱状底土 29～38cm(埋合 口)1/3周、杯底全周 36、37、40、45
14 土師器 高杯	口 16.3 高 現6.4	磨くで薄く。胴部位に中央。外面は杯底部ナデと胴部タテヘラナデ。杯体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ後にヨコヘミガキ。杯内面は底部に1方向と杯体部に横位の密なヘラミガキ。内外面に磨滅不規則に付着する。	5YR2/6 橙 やや磨面 赤～細粒多。 白・黒・透明細粒少 やや破片	北東部3～4層(床土上 ～床土3cm)の埋合 口5/12周、胴柱全周 56、59、61、62

第5章 権現山遺跡 SG10区

15 土師器 鉢	口 復 14.8 高 残 7.0 最大 復 15.0	厚く重い。外面は口縁部ヨコナデ後にやや斜らなヨコヘラミガキ。体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ナメナデと口縁部ヨコナデの後に全体をヨコヘラミガキ。[注記]38、42、43。上面、P3 西方臥流	25YR5/6 明赤褐色 細密 赤褐色 白細粒 や多。黒・透明細粒少 破質	南部3～4層(床直上)～ 床土2cm(結合) [口]5/12層 注記は左欄
16 土師器 鉢	口 11.7 高 7.2 底 2.3 最大 12.5	外底面は外面に粘土を敷って凹底。体部下位タテヘラケズリ。体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデの後にヨコヘラミガキ。内面は底部1周方向ナメナデと体部ヨコヘラケズリ後に口縁部ヨコナデ。体部タテヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。残存重量 296.5g	10B5/8 赤 細密 半透明細粒～細粒 や多。黒・透明細粒少 や破質	南東部直上(口～4層) ほぼ定形 [口]11/12層、底全周 69
17 土師器 鉢	口 13.2 高 7.7 最大 14.3 重 511.2	外底面多方向ヘラケズリ。外面口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面多方向と体部横位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。底部に1方向と体部横位のヘラミガキ。内外面全体部仕上げ。内面口縁が磨耗するで、磨を強くなびに染ったと考えられる。	10YR7/4 白～灰青 や破質 白・赤・透明細粒 や多。灰色細粒～細粒 少 破質	新緑(底上)9cm(4層) ほぼ定形 103
18 土師器 鉢	口 11.8 高 9.0 底 7.5 最大 13.8	外底面は多方向ヘラケズリ。外面は体部下端にナデと口縁部ヨコナデ後に体部を横～斜位ヘラケズリ。内面は体部にヘラナデと口縁部ヨコナデ後、底部に1方向と体部に横位のヘラミガキ。重量 535.2g。	10YR7/4 白～灰青 や破質 白・赤・透明細粒 や多。黒・透明細粒～細粒 少 破質	南東部床土2cm(3～4層) 定形 127
19 土師器 小形土器	口 5.5 高 3.4 底 5.0 最大 5.9	外底面は軽い多方向ナデ。外面体部にやや斜らなナメナデ。内面はおそらく手ねじ成形時の残な多方向コビナデ痕を残し、凹形が強い。重量 78.1g。	7.5YR6/4 白～灰 や破質 白・赤細粒多。黒 透明細粒少 や破質	南東部床土4cm(3～4層) 定形 28
20 土師器 壺	口 復 8～10	外面は体部ヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキ。外面口縁部と内面口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。亦部に「甲」に仕上げられている。[注記]42、43、75、116、118、トレ上層2～3層	2.5YR6/6 橙 細密 赤褐色と白細粒少 や破質	北西部床土5cmと入口部 床面～床土2cm(3～4層)、 若成(底土)5cm(5層)に も小穴1点 [口]1/8層 注記は左欄
21 土師器 壺	口 復 19.8 高 残 23.0 孔 残 7.0 最大 復 22.3	破片が不足し、胴部と口縁部を接合・復原できない。外面は胴部に斜～縦位ヘラケズリで、胴部上に残または段を際限に入れる。内面は丸端面ヨコヘラケズリ。胴部ヨコナデ後にはタテヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/8 橙 や破質 赤褐色と白細粒と 透明細粒少 や破質	新緑(底直上)(4層)と 床土9cm(3～4層)が 結合 [口]1/2層、底1/2層 42、43、51、111、120

SG10区 SI-69 (第109図、写真図版 104・105)

【位置】SG10区北部の23-17グリッド。同じく古墳後期の遺構は東にSI-70がある。時期不明のSK-68、中世のP-574、長方形掘乱坑に切られる。カマド南側床面で確認したP-580は覆土がSI-69と異なりP-574～578に近い形で、P-580がSI-69を切る可能性が高い。北東部には先行する覆土の倒木痕がある。

【規模と形状】5.60m四方の方形で主軸はGN-8°-E。残存壁高は東壁北半で高く、最大15～17cm。北～北西部は遺構確認面が低くて竅穴壁が残らず、中央～北西部は床面まで掘乱される。主柱穴4本の柱間は南北2.84m、東西2.86(南側)～3.04m(北側)。断面形から推定した柱径は10～12cm、床からP1=42cm、P2=34cm、P3=45cm、P4=50cmの深さで下部の地山はローム(IV層)より下層の砂礫まじりローム(IV'層)に達する。P1～4の2・3層はロームが多いので埋め戻したか、裏込土が崩れたのだろう。

入口に関わる土手状高まりは床から高さ1～2cmで、ごく低いので断面G-G'にうまく現れない。この土手で囲む内部にP5・P7、北側にP8があり、床からの深さはP5=8cm、P7=10cm、P8=10cm。P5・P7・P8の埋土は、竅穴1層と同質の黒褐色土。南東隅にある貯蔵穴P6は東西88×南北82×深さ42cmで、貼床除去後の掘り底面がP6の周囲で高い(図の破線部)。北東部にある壁溝は深さ3～7cm、間仕切溝はない。南西主柱穴P3の西側で貼床除去後の掘り底面が周囲より深い。溝状ではない。

【カマド】東壁に2基ある。南の古期カマドは両袖推定幅60cm(残存52cm)、東壁から袖の残る先端まで長さ42cm。北の新期カマドは両袖幅68cm、東壁から袖先端まで58cm。両カマドの下に掘方はほとんどなく、貼床面に袖を貼り燃焼部を浅く窪めた程度である。両カマドともに残存壁高の範囲内に煙道はなく、壁の残りが悪いので煙道部が消失したと想定される。両カマド内の遺物は僅少で、南カマド3層(焼土集中層)の上面レベルに径3～4mmの滑石製白玉が1点あるが、冬期の霜柱で紛失してしまった。北カマドは南袖残存部に土師器壺類の胴部1片、北袖北側で床土1cmに土師器壺類部が1片ある。

南カマド(古期)は袖の残りが悪い。南袖は床面スレスレに高さ1cm程の最下部がころうじて残り(5層)、それより上部は燃焼部から続く焼土塊層に覆われていた(2・3層)。北袖は先端部が残らず、壁に取り付く基部だけが残っていた。燃焼部は東壁へ向かって緩く下り、壁に当たるとまっすぐに立ち上がる。南カマド下部の貼床を断ち割ったところ、北袖の下部で地山が高まっていたが、袖内部まで地山が入ることはない。竅穴掘削時に南カマドの袖位置を計画していた(=北カマドより古い)ことを示している。

北カマド(新期)は両袖の基部付近が灰褐色粘質土(9層)で、それよりも先は灰色粘土(8層)を貼って作る。燃焼部の焼土塊がやや多い(7層)。北カマドの西方では掘乱で床面が低くなっている。

【覆土】残りが残っているので自然埋没が判断が難しい。テフラの層や粒はない。P6は自然埋没状(断面H-H')。

第 61 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-69 出土遺物

遺物種類	大きさ (寸法)	特 徴	色調 質土・構成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	高 残 2.8	口～体部境に段を持って口縁部が外折し、ヨコナデ調整。外面体部タナメハツケズリ。内面はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	25YR5/6 明赤褐色 細密 白・黒・透明輝粒少 やや硬質	南西部床中 Fベルト P4 東臥床
2 土師器 皿	口 残 25.4	外面は胴部タナヘラケズリと口縁部ヨコナデ。内面は胴部タナヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	10YR7/4 に近い黄褐色 細密 白・透明粗～細粒やや 多。赤・灰色輝粒少 やや軟質	南西部床上 2～10cm 口 1/2 程度 4～7、入口施設
3 石器 磨石	長 12.5 幅 8.5 厚 4.4	断面が隅丸三角形の自然磨。比較的平坦なほうの面の中央部がわずかに磨耗している。重量 598g。	5YR/2 灰オリーブ 細密だがわずかに多孔質気味 な安山岩	南西部床直上 完形 11

SG10 区 SI-70 (第 110・111 図、写真図版 105・106・174・202・203)

【位置】SG10 区北部の 23-17 グリッドにある。同じく古墳後期前葉の SI-69 が西にあるが、接近しているので同時存在とは考えにくい。後期前葉の SI-70・72・74 が東西に並び、北側の SI-78 とともに同時存在の可能性もある。中世の柱穴状土坑群 P-584・587・588・589・593 に南～東部と北部中央を切られる。P-584・588・589・593 は SG10 区北部柱穴群に含まれる (第 203 図)。

【規模と形状】方形の建物跡で、主軸方位は GN-13°-E。東西 5.20 × 南北 5.32m。残存壁高は南東部で高く (最大 29cm)、北壁で低い (最小 15cm)。

主柱穴は 4 本。竪穴のプランに対して、柱穴の配置が時計回りに振れている。東側の主柱穴 P1 と P4 は建て替えがあり、北側の深い柱穴が旧期、南側の浅い柱穴が新期である。P2 と P3 は建て替えによる柱抜取穴が上部で東側へ大きく広がり、新期柱の掘方になっている。裏込土の柱 3 層と柱 4 層もよく残る。P3 の柱の東西の裏込土はロームが主体で、柱 3 層に円礫多数や土師器 2 片を混ぜてあった。P4 の旧期柱穴はロームの塊と粒を主体とする黄褐色土で埋め戻されていたので、床面で確認することが難しかった。新期柱穴は明瞭に確認できた。旧期柱穴の柱間は、P1 旧-P4 旧の間で 2.90m。新期柱穴の柱間は南北 2.84m (東側)～3.13m (西側)、東西 2.94m (南側)～2.98m (北側)。旧期の断面形や、新期の土層からみて新旧両期の推定柱径は 12～14cm 程である。旧期柱穴のほうが新期よりも深く、P1 旧=52cm、P1 新=38cm、P2=46cm、P3=46cm、P4 旧=51cm、P4 新=35cm。新期柱穴は西側 (P2・P3) が東側 (P1 新・P4 新) よりも深いので、P2・P3 とともに旧期柱穴の深さを継承していることが推定できる。

貯蔵穴 P5 は南東隅にあり、東西 85 × 南北 58 × 深さ 37cm で、P5 の北西隅は柱穴 P4 を避けるように隅切形になっている。西側の主柱穴 P2 と P3 からそれぞれ西壁側へ伸びる間仕切溝 D2 と D3 は、貼床を除去した後に確認した。一方、P2 から北へ伸びる間仕切り溝 D1 は、P2 の柱 2 層と同質の覆土で埋まっていて、床面でやや明瞭に確認できた (断面図 H-H')。床面からの深さは D1=5cm、D2=7cm、D3=13cm。入口施設と壁溝は見られない。貼床除去後の掘方底面は、南～東部に比べて中央部が、段差を持たないでゆるやかに低くなる (平面図に記入した破線部)。

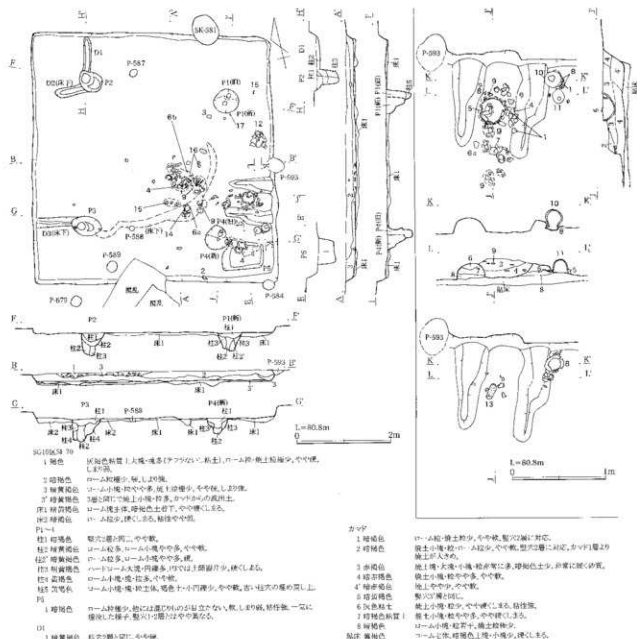
【カマド】東壁の南部にある。南袖幅 101cm、煙道先端から袖先端まで 114cm。両袖の下部には特別な掘方がなく、周囲の床と同じレベルで平らに貼床をした上に、カマドを作る。柱穴と同様に、カマドも竪穴の主軸より少し時計回り方向へ振れている。カマドの南袖が P4 に近いので、カマドを P4 から離すために角度をつけたとも考えられるが、そうであればカマドをもう少し北側に作ればよさそうに思える。カマドに掛けた土師器甕の胴部下半が残されていた (5)。南袖の南に接して土師器甕頸部を床に埋め込んだ転用器台がある (8)。器台の北半下部を南袖の粘土に埋め込んで据え付け、器台の上に倒立した小形甕 (10) が載っていた。そのさらに南側には倒立した小形甕が床面に置かれている (11)。燃焼部には支脚石がある (13)。カマド南袖内からも土師器片が出土した (断面図 L-L' およびカマド下図)。6 と 9 はカマド内と竪穴中央部床付近に破片が分かれている。

【覆土】自然埋没と思われる。1 層は紫色を帯びた灰色粘質土塊を多く含む層で、竪穴の西半部に分布する。火山灰ではなく、SI-73 で Hr-FA 火山灰層の下層に見られた粘土塊にむしろ類似している。カマド構築用な

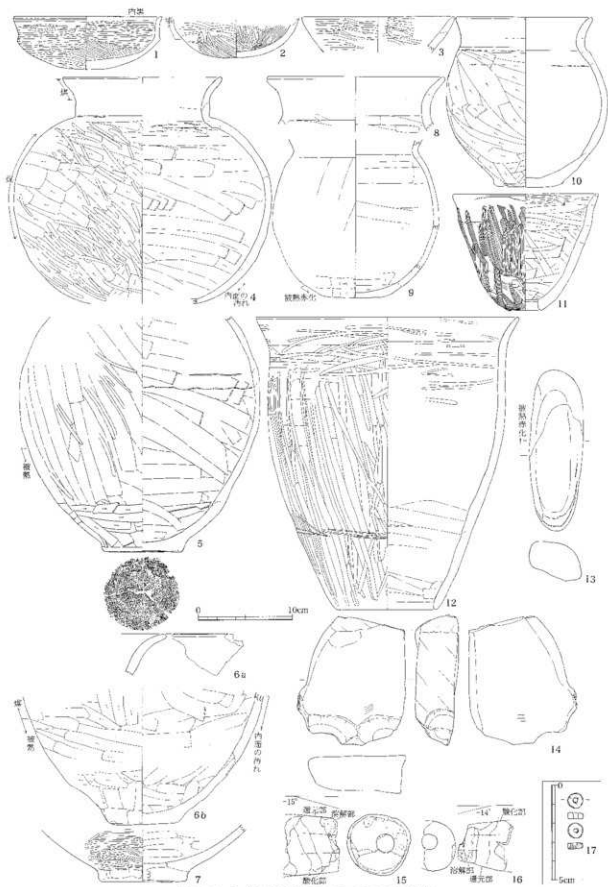
どの粘土が上層に廃棄されたのかも異なる。貯蔵穴は一気に埋没した様子の単層で(断面図E-E')、竪穴部の覆土1・2層と異なる。

【遺物出土状況】 中央部から南東部に遺物が多い。カマドの西側から北西側で、床面直上および2cm程浮いて専用羽口が計3片出土した(15・16)。周囲の床面をよく見ても鉄滓・炭・焼土集中などがなく、SI-70自体は鍛冶遺構ではないので、集落内でこの付近に存在していた鍛冶遺構から遺物が廃棄されたと考えられる。P1南側の床面に白玉がある(17)。カマド北側の床面には完形の甕が横転してある(12)。カマド内の遺物はカマドの項で述べて。

【出土遺物】 SI-70・72・74には類似した土器が見られる。1は炭素吸着による内面黒色処理で、SI-74・78に類似品がある。2はミガキ後漆仕上げの杯。カマドを持つ建物だが、4と6は好で使ったような煤が外面上部に見られ、特に4は煤が多い。甕・甕類と高杯は橙色の胎土が多い。5は甕の外底面に刻線「一」がある。7は底部が円盤状に突出する大形甕。10は被熱使用痕がなくて内面が割落している完形の小形甕。台石(14)



第110図 権現山遺跡SG10区 SI-70(1)遺構



第111図 権現山遺跡 SG10 区 SI-70(2) 遺物

は磁石にも使ったらしい。本遺跡の羽口で最も大形の専用羽口2点(15・16)は、『東谷・中島地区遺跡群』10で椋見山遺跡の竪穴関連遺物全体を報告後に確認したため、同書 pp.490-498に掲載されていない。粘板岩製白玉(17)の類例はSG10区SI-20などにある。遺物量は多く、甕・甕が主体で杯・鉢が少しある。明確な長胴甕は破片も見られない。図示以外の土師器および焼粘土塊合計204片・1.364gの内訳は、杯74片・417g、高杯9片・39g、小形甕1片・13g、壺甕類117片・834g、甕2片・52g、焼粘土塊1点・9g。

第62表 椋見山遺跡SG10区SI-70 出土遺物

番号 種類	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・模成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 15.5 高 5.6 最大 15.8	口縁部上端が外反する。外面は底部ヘラナデ。体部に密なヨコヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底部に多方向と口へ体部に稀なヘラミガキ。内面を黒褐色の黒色処理。	7.5YR7/6 粗 やや暗赤 透明細～細粒やや多 赤・黒・透明細粒と黒細粒少 やや破片	大床面上11～16cmと方 下高脚床土2cmで接合 口2/3留 5.14～16.27、北西2層
2 土師器 杯	高 残4.2	外面は底部に1方向と体部に横位の密なヘラミガキ。内面は底部に多方向と 体部に縦位の密なヘラミガキ。外面の上平に断面に漆仕上げ。外面底部全体 に大黒陶あり。	10YR8/4 に近い黄緑 粗～細 透明細と白細粒少 破片	高脚床直上。軀体の1片 目接合 片1/2留 63、甕床
3 土師器 高杯	口 寛16.1 高 残3.8	口縁部内外面ヨコナデ後に密なヨコヘラミガキ。外面口縁部上に縦が付着 する。	2.5YR6/6 粗 暗赤、赤黒～暗赤やや多。白 質・透明細粒少 やや破片	北東部床土4cm 口1/6留 39、底平1層、北東2層
4 土師器 甕	口 寛16.8 高 残23.8 最大 寛27.2	外面胴部はナガメヘラミガキで、下に密で上平に疎なナガメヘラミガキ。内 面は胴部ヨコナデで胴下部はヨコヘラミガキもいる。胴部ナデ。内 面胴口一環部ヨコナデ。外面の胴口には多量と口縁部に少量の横ミガキ。内面 胴下部に黒褐色の汚れ(コゲ)が明瞭。	10YR7/4 に近い黄緑 やや暗い 白・灰色細～細粒 やや多。赤・黒・透明細粒少 やや破片	甕破片直上38～43cm、 中央床土、甕口小片1 点あり 口1/3留。甕身1/2留 42、4.65、西東1層
5 土師器 甕	高 24.7 底 8.2	外底面は多方向ヘラミガキで、外周に薄く粘土を貼ってから円筒方向に外筒をヘラ ミガキし、筒底面の浅淵1本を描く。外周胴部は縦～斜位のヘラナデと中位 に棒状ノミで浅い斜線模様を入れる。内面胴部はヨコヘラナデで胴部下位と中 位上平に粘土を積み上げを残す。外周下平が焼熟しているかもしれないが不明瞭。	2.5YR4/4 に近い赤褐 やや暗い 白・灰色細～細粒 多、灰色細と透明細～細粒と 黒細粒少 破片	大床面上8cmで方下で 膠け付状況 口1/2留。底全周 13
6 土師器 土師甕	口 寛22～25 高 残13.8 底 7.6	外底面は多方向ヘラミガキで強く突出する平底。胴部下側ナデと胴口ナデ およびヨコヘラミガキ。体面上平ナデヘラミガキ。内面体部ヨコヘラナデ。内 外内面口縁部ヨコナデ。外周胴部は下位～底面が焼熟し、中位に少量。内 面胴部はやや薄く暗褐色の汚れがある。胴上平～胴部は破片が不足して後部 で不明瞭。	7.5YR6/6 粗 粗い 白・灰色・透明細～細 粒と黒・黒細粒少 破片	中央部床土2cm、中央部 床土4cmと大床面上14 cm(2層)に接合あり 口1/12留。底全周 注記はなし
7 土師器 大形甕	高 残6.0 底 9.0	外底面は無調製または焼ナデ。外面胴口縁部コナデ。胴部ヨコヘラミガ キ。内面ヨコヘラナデ。 注記131, 32, 51ノド、Aトレ南下平	10YR5/3 に近い黄緑 やや暗い 白・黒・透明細 粗・白・透明細粒少 やや破片	大床面の直上と上1cmが 接合 片1/2留 注記はなし
8 土師器 甕	口 18.8 高 残5.8	外面口一環部ヨコナデ後に胴部ヨコヘラナデ。内面胴部ヨコヘラナデ後に口 一環部ヨコナデ。	7.5YR6/4 に近い黄 粗 粗い 白・灰色細～細粒 やや多。赤・透明細～細粒と 黒細粒少 破片	方下高脚床面上向き で設置し、膠けは使 用 口5/6留。甕全周 27, 71
9 土師器 小形甕	外底面は丸味を持つ平底で、割落して調整不詳。外面体部下位ヨコヘラナデ またはヨコヘラミガキ。体面上平ナデヘラミガキ。内面体部ヨコヘラナデ。内 外内面口縁部ヨコナデ。外周胴部は焼熟あり。 注記11, 2, 4, 13, 24, 51, 52, 54, 方下西平。上面、北東2層。Aトレ南下平	10YR4/2 灰青 粗い 白・灰色・透明細～細 粒と黒・黒細粒少 破片	大床面上3～15cmと中 央床土1～2cmで接合 第1/4留。底全周 注記はなし	
10 土師器 小形甕	口 14.5 高 残17.9 底 5.0 最大 17.1	外底面は多方向ヘラミガキでやや凸凹状にする。外面口縁部ヨコナデ後に胴 部ナメヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデで、胴部は胴面が割落して調整 不詳。焼熟痕は見られない。重量983.9g。	5YR6/8 粗 粗い 赤黒粗と白・黒細 粒少 破片	方下高脚で甕頭部を転 用した跡付の上へ倒立 完形 26
11 土師器 小形甕	口 15.4 高 12.4 底 3.4 底 孔 2.8	外面は体部ナデと口縁部ヨコナデの後に体部ナデハケ(10ノド)。内面は口 縁部ヨコナデと口縁部ナデの後に体部ヨコヘラミガキ。	5YR6/8 赤粗 粗い 白・黒・透明細粒少 やや破片	方下高脚の床直上 に倒立 完形 28
12 土師器 小形甕	口 27.7 高 31.0 底 10.7 底 孔 9.3 重 残2661	外面は胴部ナデナデおよびヨコヘラナデ後タテヘラミガキ。口縁部ヨコナデ 1/3位焼熟の平がひらきとそれに付く範囲に貼けた粘土も少し残存す。 外周胴部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデの、胴口一環上にヨコヘラミガキ。内 外外面の半環部間に暗褐色の薄い付着物があり、覆または漆仕上げかもしれない が不明瞭。	7.5YR6/4 に近い黄 粗 粗い 白・灰色・透明細 粗と黒・黒細粒少 破片	高脚床直上 に成り 口5/6留。底全周 40
13 支脚	長 16.6 幅 5.9 厚 4.5	断面が不整形の自然礫をそのまま支脚として使用したとの。図の上部が約 1/3位焼熟の平がひらきとそれに付く範囲に貼けた粘土も少し残存す。 外周胴部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデの、胴口一環上にヨコヘラミガキ。内 外外面の半環部間に暗褐色の薄い付着物があり、覆または漆仕上げかもしれない が不明瞭。	N7/0 灰白 細密で破片を安山片 破片	大床面上直上 完形 78
14 石器	長 13.4 幅 11.3 厚 4.6	板状の自然石で、断面のうち1面は自然面のままで、最も突き出た部分で鋭 角を行った板状である。他の断面は割れ面である。両面に明瞭な使用痕が見ら れないが不明瞭。	2.5Y7/3 浅黄 大形の石英結晶が自立す 細密で破片を流液付 破片	中央床直上5cm 一部欠 完形
15 土師器 専用羽口 (竪穴)	長 残5.9 幅 残5.4 厚 1.6～2.2 重 残166.1	やや人形の専用羽口の先端破片。通風孔の径は先端部で1.9cm。基部寄りでは 2.2cm。九輪を基部側へ傾けて製作したと見られる。先端部全体が割れ て下方に突き出た形に覆われている。使用時の上方へ傾けていたはずの部分 は欠損して不明。径1.4cmの大礫も含むので、土師器の胎土とは異なる。竪 穴関連遺物構成なし。	10YR6/3 に近い黄粗 粗い 白・灰色・透明細 粗～細粒やや多。白質少 破片	北東部床土7cmと中央部 床土2cmで接合 先端2/3留 37, 59
16 土師器 専用羽口 (竪穴)	長 残5.8 幅 残5.3 厚 1.6～2.2 重 残65.5	先端部の測定羽口3.7mm程度まで先が細くなる専用羽口の先端破片。通風孔 の径(1.6cm)は基部寄りではかわからぬが、先端まで同様の大きさとは見 られず、基部寄りでは基部側へ傾けて製作したと見られる。先端部全体が割れ て下方に突き出た形に覆われている。使用時の上方へ傾けていたはずの部分 は欠損して不明。径1.4cmの大礫も含むので、土師器の胎土とは異なる。竪 穴関連遺物構成なし。	10YR6/4 に近い黄粗 粗い 白・灰色・透明細 粗～細粒やや多。3～12mmの大 白色小石少 破片 破片	中央床土2～3cmで接合 1/4～1/2留 48, 51, Bトレ南下平 測定あり
17 石製遺品 白玉	径8.0～8.1mm 厚2.2～3.5mm 重 0.25	下底面は即理面に沿って割ったきれいな平面で磨納なし。側面は縦方向(管 口と同じ)のやや粗い研削痕。断面図に示したように径は一方がわずかに 大きく、厚は2.6mm。穿孔距離が約1/4で、長い素材が 丸後に分割した可能性もある。	5Y4/1 灰 細密で破片を粘板岩 破片	北東部床直上 完形 36)

SG10 区 SI-72 (第 112・113 図、写真図版 106・203)

【位置】SG10 区北部の 22・23-18 グリッド。同じく古墳後期前葉の SI-70・72・74 が東西に並び、北の SI-78 も同時存在であろうか。時期不明の SK-582・583 (断面 B-B') と南西部の擾乱が SI-72 覆土を切る。

【規模と形状】南壁にカマドを持つ特徴的な方形建物で、主軸方位は GN-13°-E。東西 5.78 × 南北 5.48m (張出部を含め南北 6.50m)、残存壁高は最小 18 (北壁中央) ~ 最大 28cm (南西隅)。主柱穴 4 本の柱間は南北 3.56m、東西 3.40 (北側) ~ 3.64m (南側)。柱穴底面形から推定した柱径は 12 ~ 16cm 程で、床から P1=29cm、P2=40cm、P3=31cm、P4=45cm の深さ。P3 は形・深さが他の柱穴と異なり疑問が残るが、他に候補がない。南東柱穴は、開口部付近の外周に地山と同質の黄褐色ローム塊を入れる (P4 の 3 層)。

北側主柱穴 P1-P2 間にある P7 は径 13cm・床から深さ 11cm で、貼床除去後に確認した。入口施設の P6 も貼床除去後に確認し、床面から深さ 22cm。入口関連と見られる高さ 4 ~ 7cm の土手状の高まりが P6 の北側を半円形に囲む。この土手状施設は、貼床除去後の掘方形も高い (断面 B-B')。貯蔵穴は南壁中央にある張出ピット P5 で、南壁から幅 102 × 長さ 110cm で張り出した内部に東西 66 × 南北 102 × 深さ 39cm の穴がある。張出ピットは SG10 区 SI-72・75・110、SG5 区 SI-4 などにある。壁溝 D4 は貼床除去後に南東部以外で確認し、床からの深さが南・西壁で 3 ~ 5cm、北・東壁で 4 ~ 11cm。貼床除去後に確認した間仕切溝 3 本は P1・P2 の南に D1・D2、P3 の北に D3 があり、床からの深さは 5 ~ 9cm。

【カマド】南壁東部にある。南に張出ピットとカマドを持つ点は、権現山遺跡南西にある百目鬼遺跡 SI-063 に似る (谷中・大島編 2001)。南壁カマドは、磯岡遺跡の上三川町教委 1 次調査区 SI-30 にあるが (深谷・高野 2004)、権現山遺跡南壁・北部では他に例がない。SG10 区 SI-83 は東壁南部にカマドがある。

両袖幅 82cm、煙道先端から袖先端まで 86cm。支脚 (2) を埋めた貼床上に袖を造ったような断面だが、実際は袖構築後に貼床を掘って支脚を据えたのだろう。西袖の西は P5 を取り巻く土手状盛土があるので、床が少し高い (カマド断面 C-C')。この 6 層は貼床上部にも見えるが不明確である。カマド内に伏せた杯を 3 個重ね (上から順に 5・1・2)、下の 2 枚とよく似た杯 (3) が火床面上 7 ~ 8cm のカマド 4 層にある。

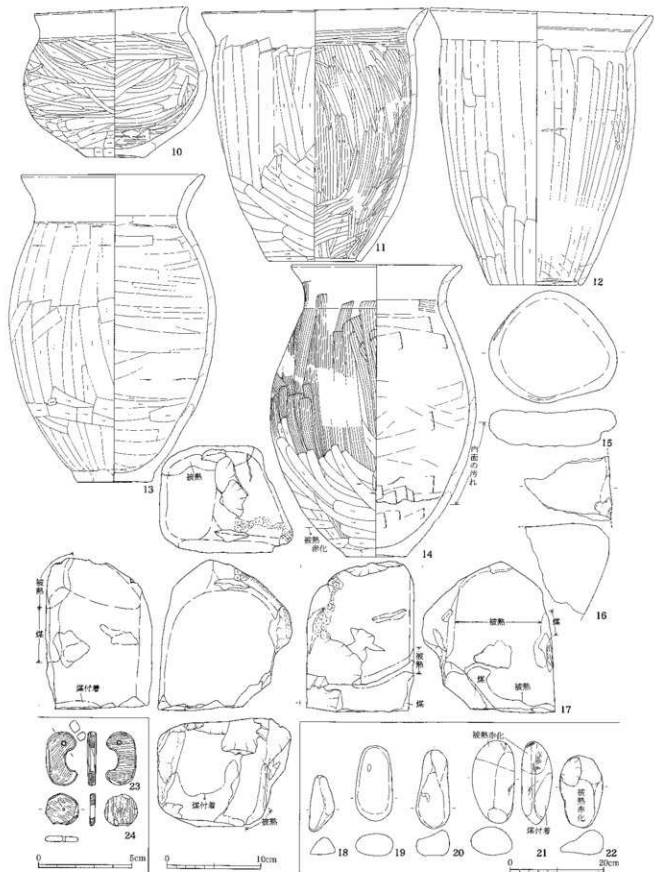
【覆土】張出ピットと一緒に自然埋没している。テフラの層や粒は認められない。北東・北西・南西部に多く見られた炭化物は、東西土層断面図の 3 層中で、床面から 4 ~ 10cm の高さまで分布していた。

【遺物出土状況】床面に遺棄した残存度の高い遺物が、南東部と北西部に多い。南東隅に完形の甕と小形甕 (10 ~ 12)、その北に大形甕 (9) がある。張出ピット北側の土手状盛土部分に土師器甕 2 個と杯 (4・13・14)、その北東の床面に被熱した台石 (17)、北西部床面には上面が窪む台石 (15) と伏せた完形の杯 (8) がある。口縁部が少し破損した杯を P2 の中位へ上向きで入れる (7)。

【出土遺物】SI-70・72・74 に似た土器がある。漆仕上げが厚い杯が多い。1 ~ 3 は同工品。4 は深身で内外を磨き、漆仕上げも行う。5 ~ 8 は口縁が薄く、白・金色雲母を含む。雲母を含む土器は SG10 区 SI-12 他や隣接する SI-73・74 にもある。SI-72 から SI-73 上層へ雲母を含む杯 (SI-73 の 13) を廃棄した可能性もある。10 は被熱痕がない小形甕。13 は煤や被熱粘土が不規則に着く。14 は使用痕が目立つハケ調整甕。17 は敲打・被熱・剝離のある台石で、金床石のような鍛造剥片や鉄分はない。石製模造品の勾玉と有孔円板は SG10 区 SI-64a にもある。遺物量が多いが、大半は甕・甕と口が外傾する杯で、図示以外の土器は少ない。古い時期の混入品 (?) の高杯が極少量ある。図示以外の合計 180 片・1.110g の内訳は、杯 61 片・252g、高杯 7 片・64g、鉢 3 片・34g、小形甕 2 片・16g、甕甕類 103 片・708g、甕 4 片・36g。

第 63 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-72 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (mm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.8 高 4.5 重 208.1	外面の口一休部端に強い稜あり。外面は底部に 1 方向へウケズリと休部ヨコウケズリの間に浅いなびウケミガキ。内外面の口縁部にコナテ後ヨコウケミガキ。内面休部に密着放射線ウケミガキ。外面上平と内面全面を漆仕上げ。2 と同工品。	2.5Y3/1 黒黒 やや黄味 赤黒粒多、白粒~ 細粒と透明面粒少 やや硬質	カマド火床上 17cm。伏せて 3 枚重ねた杯の 2 枚目 完形 1K、カマド 2



第113図 権現山遺跡 SG10区 SI-72(2) 遺物

2	土師器 杯	口 15.6 高 4.6 重 250.1	外面の口部一帯に傾角あり。外面は底部1方向へラケズリ、体部ナデ後にヨコヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデヨコヘラミガキ。内外面体部ナデ後に密な放射状ヘラミガキ。内外面を漆仕上げしている可能性もあるが不確実。1と同一品。	2.5Y8/8 橙 緑赤 赤黒黄や赤・白・黒・透明細粒少 やや破片	カマド火床土16cm。伏せて3枚重ねた杯の3枚目 完全品
3	土師器 杯	口 14.7 高 4.2	杯面の口部一帯に傾角あり。外面は底部に多方向と体部に傾位のラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデヨコヘラミガキ。内外面体部ナデ後に密な放射状ヘラミガキ。内外面を漆仕上げしている可能性もあるが不確実。1と2類似する。外面から強い匂いが加わって底部が破損している。	2.5Y8/7 赤 やや破片 白・黒・透明細粒少 やや破片	カマド内土床土7～8cm 口4枚目 口3枚目 4枚、カマド、カマドF
4	土師器 杯	口 復13.0 高 復4.2 最大 復13.4	外面は口縁部にヨコナデヨコヘラミガキ。体部はヨコヘラズリでやや黄赤色を持つ仕上げ。内外面口縁部に密な放射状と口縁部に傾位のラケズリ。内面中位以上と内面全体に漆仕上げ。	2.5Y8/5 6 明赤黄 やや破片 白・黒・透明細粒多 やや破片	南部床土4cm 口11/12貫、体1.6/貫 34
5	土師器 杯	口 12.2 高 4.6 最大 13.5	外面は口縁部に1方向と体部に傾・斜位のラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外面体部に密な放射状ヘラミガキ。内外全面に漆仕上げ。	2.5Y8/4 に近い橙 やや破片 白・黒・透明細粒少 やや破片	カマド床土19cm。伏せて3枚重ねた杯の1枚目 口1/2貫、体3/4貫 18
6	土師器 杯	口 復12.6 高 復4.4 最大 復14.0	外面体部ヨコヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外面体部に密な放射状ヘラミガキ。現状存する内面全体に漆仕上げ。	10Y8/6 4 に近い黄赤 やや破片 白・灰色黄帯や赤 やや破片	南部床土1 口11/12貫、体1/4貫 15、内面
7	土師器 杯	口 12.8 高 5.6 重 復188.0	薄く、外面口部一帯の段が明瞭。外面は底部に多方向と体部に傾位のラケズリ。内外面口縁部にヨコナデ後、密なヨコヘラミガキ。内面は漆・底部に1方向へラミガキ後、底部に黄赤色の線あり。内外全面に漆仕上げ。	2.5Y8/3 に近い黄 やや破片 白・黒・透明細粒多 やや破片	北西土柱P2 成面土 17cmで土向き ほぼ完成品 口11/12貫 30P2
8	土師器 杯	口 13.2 重 198.8	外面は底部に多方向と体部に傾位のラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後、密なヨコヘラミガキ。内外面全体に漆仕上げ。	5Y8/6 白明赤 やや破片 白・透明や赤少・白・透明 細粒と細砂少	北西部床直土に伏つ存 品
9	土師器 大形甕	高 復14.2 底 6.5 最大 復26.9	外底面は多方向へラケズリで凹成状。外面製部は主に斜位のラケズリで、中～下位部分中心してナメヘラミガキ。内面は底部に多方向と製部に傾位のラケズリ。	10Y8/6 4 に近い黄赤 やや破片 白・透明細粒多 黒細粒少 やや破片	南部床土2cmと東壁跡 床土15cmが接合 製中位1/3貫、成全貫 27、35、駒込
10	土師器 小形甕	口 16.2 高 15.5 底 6.0 最大 19.3 重 1199.8	外底面は1方向へラケズリで少し凹成。外面は1位ヨコヘラズリ。上～中位はむらなくナメヘラミガキの後にヨコヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ。内面製部は底部ナメヘラナデと製部ヨコヘラナデ後にヨコヘラミガキ。使用・焼熱痕はない。外口中位に10cm大の黒炭あり。	2.5Y7/8 橙 やや破片 白・黒・透明細粒多 黒細粒少 やや破片	南部床土直土に傾成 ほぼ完成品 口11/12貫 31
11	土師器 甕	口 23.8 高 28.5 底 9.8 口径 8.8 重 復1932	外面は口縁部ヨコナデ後に製部を傾位と下部を斜位のラケズリ。内面は口部ヨコヘラミガキと乳輪部ヨコヘラナデの後に製部全体をタテヘラミガキ。製部ヨコヘラミガキ。	2.5Y7/2 灰黄 やや破片 白・灰色緑と白・赤・透明細粒少 やや破片	南部床直土 口5/6貫、製中位 口全貫、製上位5/6貫、成全貫 32
12	土師器 甕	口 復23.5 高 28.8 底 9.7 口径 8.9	外面は製部タテヘラズリと口縁部ヨコナデ。内面は製部ナメヘラナデと口縁部ヨコナデの後に製部タテヘラズリ。乳輪部ヨコヘラズリ。外口に幅10cm・高さ24cmの大黒炭あり。	7.5Y8/7 8 黄橙 細砂 白・黒・透明細粒と赤 粗粒少 やや破片	南部床直土上で東壁に 伏せて製中 口1/2貫、成全貫 33、Bトレンチ南、南部 表壁
13	土師器 甕	口 19.4 高 32.6 底 7.6 最大 21.8 重 復2274	外底面は1方向ナデで平底状。外面製部の上位と下位にタテヘラナデ。中位はヨコヘラズリ。中～下位の成面内面はヨコヘラズリ。口縁部内外面ヨコナテ。製部内面ヨコヘラナデ。外面全体に不規則な黄や焼熱跡と向角着する。	10Y8/6 4 に近い黄赤 やや破片 白・透明細粒多 赤・白・灰色黄帯や赤・黒細粒少 やや破片	南部土手状黄よりま 口5/6貫、製中位 ほぼ完成品 口11/12貫、成全貫 30、南東
14	土師器 甕	口 復18.0 高 復30.8 底 6.3 最大 復21.6	外底面は1方向へラケズリで平底。外面製部タテヘラ後に上下ナメヘラケズリ。口縁部ヨコナテ。内面製部ヨコヘラナデ後に製部ヨコヘラナデ消し。口縁部ヨコナテ。外面製部下位～成面が焼熱赤。内面中位下平に暗褐色の汚れあり。	10Y8/5 3 に近い黄赤 やや破片 白・黒・透明細粒多 赤・黒・透明細粒や赤少、灰色黄帯 少 やや破片	南部床直土 口5/6貫、製中全貫、成全貫 29、カマド
15	石 石 石	長 11.9 幅 13.5 厚 3.7	扁平な自然磨きを利用し、上面が緩く凹む。明確な磨面や磨痕は石材が多孔質なので不明。石面のような用途が想定できる。重量819.6g。	5Y5/3 灰オリーブ 多孔隙な灰岩片	北西部床直土 完成形
16	石 石 石	長 復6.6 幅 復8.8 厚 9.5	断面が三角形に近い自然磨片で、上下が破面。自然磨を残す二面の磨り面を敲打して使用し、断面が四の字から鈍角を受けている。隣面が磨かれたような状況ではない。重量574.2g。	2.5C7/1 明オリーブ灰 破面が破綻した灰岩片	西部床直土 完成形 5
17	石 石 石	長 15.9 幅 14.1 厚 11.3 重 3818.1g	断面が隅丸方形の自然磨。右側面に敲打使用痕。下側面は大平が破面で、人工的に削った面も凸凹と見られる。裏面四の中央付近を中心として焼熱赤化する。その周囲部には厚が分厚い。断面にも焼熱痕と腐を露出できる。磨化部分や磨痕面片は認められない。	2.5Y6/2 灰黄 5mm大の黒点が白く織成で破片 黄赤な灰岩片	南部床直土 完成形 16
18	石 石 石	長 11.7 幅 5.4 厚 3.5	断面が三角形の自然磨。加工・使用・焼熱痕は見られない。重量233.5g。	2.5Y5/2 暗灰黄 緑赤で破綻した石英岩片	東部床直土 完成形 26
19	石 石 石	長 15.8 幅 7.8 厚 4.6	細長い自然磨をそのまま利用。焼熱・加工痕や付着物は見られない。重量869.3g。	7.5Y6/1 灰 やや破片で破綻した灰岩片	東部床直土 完成形 37 駒込
20	石 石 石	長 16.5 幅 6.9 厚 5.9	細長い自然磨をそのまま利用。加工・使用痕は見られない。表面がむずかしく赤色味を帯びるようで、弱く焼熱しているかもしれない。重量794.8g。	2.5Y7/3 浅黄 緑赤で破綻した灰岩片	南西部床土6cm 完成形 12
21	土師 器	長 17.3 幅 9.8 厚 5.0	細長い自然の河原石。側面に平行線状の磨痕あり。四の字端が弱く焼熱赤化する。下位で1面だけが付付。四角や側面に黄赤を中心として深い磨面あり。重量1235.8g。	10Y8/6 2 灰黄赤 やや破片で破綻した灰岩片	カマド床土3cm 口5/6貫、製中位 カマドF
22	土師 器	長 15.2 幅 9.0 厚 6.2	周角平円な厚なる自然の河原石。全面が焼熱して赤色になり、細かな亀裂が少なくなっている。四の字左上と左側縁部の破綻面もおそろく焼熱はしているもので、破面もよく赤色化している。重量733.8g。	7.5Y6/4 に近い黄 5～16mm大の補綴岩を多く含む 石英岩片	南部床土16cm 一部欠 4
23	石 石製玉品 勾玉形	長 1.7 幅 1.59 厚 0.45 重 3.18	断面は穿孔と同じ方向(縦方向)に細かく研削し、製部は縦方向の切削痕のみままで、首部側にも長さ16mmの大きな側面調整(割れ痕)を残す。両面はそれぞれ1方向に研削し、細かな磨痕を残す。左側の面から穿孔して、対面に穿孔の磨痕を生じる。初孔径1.78mm、終孔径1.60mm。	5B4/1 暗青灰 滑石	北西部床土10cm 完成形 11
24	石製玉品 石丸形板	長 1.4 幅 1.64 厚 0.31 重 1.60	断面は穿孔と同じ方向(縦方向)に細かく研削し、外側の約半分は側面調整のみ。両面はそれぞれ1方向に研削し、細かな磨痕を残す。左側の面から穿孔して、表面に穿孔の磨痕を生じる。初孔径と終孔径ともに1.40mm。	7.5C6/5 1 緑灰 滑石	北西部床直土 完成形 9

SG10 区 SI-73 (第 114 図、写真図版 107・203)

【位置】 SG10 区北部の 22-18 グリッドにある。同じく古墳中期後葉の SI-113a・113b が北にある。時期不明の溝 SD-560 と重複するが新旧関係は不明。SI-73 と SD-560 の新旧について調査時点の記録に矛盾があり、SD-560 東端が僅かに重複する程度なので確実な新旧関係を把握できなかったと考えられる。南東隅に長方形掘乱 (近代以降の農業関連土坑) があり、南西部に古い時代の倒木痕がある。

【規模と形状】 方形の建物跡で、主軸方位は GN-24° E。東西 5.26 × 南北 5.26m。残存壁高は北隅で最大 36cm あり、残存高が低い南西部では 19 ~ 22cm。主柱穴は 4 本で、柱間は南北 2.04m (西側) ~ 2.22m (東側)、東西 2.50m (北側) ~ 2.70m (南側)。南東柱穴 P4 が少し南東に寄る。P1・P2 の底面形から推定した柱径は 14 ~ 16cm 程度で、床面からの深さは P1=36cm、P2=46cm、P3=31cm、P4=46cm。柱穴覆土の下層は東込の崩壊土である。南中央にある逆 U 字形の土手状高まりは床面からの高さ 2 ~ 5cm で、入口関連施設と考えられる。貼床除去後の掘方底面でもこの高まりをよく確認できるので、掘方を掘る段階で高まり部分の地山ロームを削り残したことがわかる。貯蔵穴 P5 は南東隅にあり、東西 76 × 南北 76 × 深さ 40 ~ 44cm。壁溝や間仕切溝はない。

【カマド】 東壁の南部にある。両袖幅 87cm、煙道先端から袖先端まで 122cm。貼床層の上に、火床面を作るための整地土がある (カマド 16 層)。倒立して支脚に用いた高杯 (4) の下側では地山が高く、貼床層とカマド整地土がない。カマド内の遺物は破片化した後に被熱しているものが多いので、支脚の高さ調節などに土器片を用いたのかもしいない。カマド北袖の北側には小形甕の胴下部がある (9)。袖の内部から出土した土器器表破片 (11 と 12) は、カマド南側の床上 2 ~ 10cm にもあるので、袖構築土に混ぜた土器器表破片が袖崩壊により南側へ流出した可能性がある。

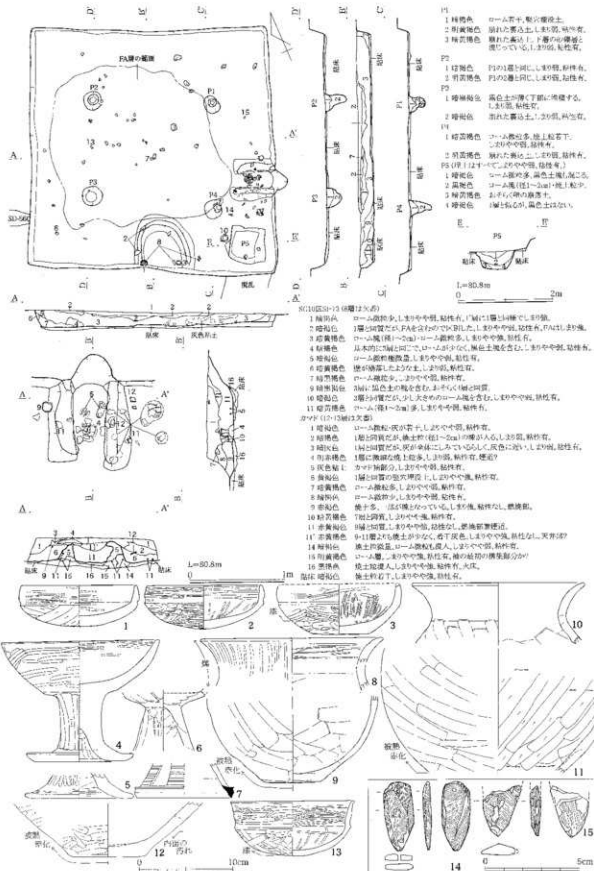
【覆土】 自然埋没で、古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラを 2 層に多く含む。3 層中に灰色粘土塊を含む部分があるので、断面図 A-A' に図示した。SI-70 の最上層で確認した灰色粘土塊と同種の粘土かもしれない。

【遺物出土状況】 Hr-FA テフラ (2 層) より上にも小破片の遺物が少量ある。テフラより下層でも覆土中の遺物は小片が多い。貯蔵穴西側の床上 2cm レベルで全周する土器器表頸部が口縁部を下に向けて置かれ、転用器台の可能性がある (10)。南部では入口施設周辺に残存度の高い遺物があり、南壁に近いものは高い位置にあるので初期流入土 (10・11 層) の後に入った遺物である。竅穴中央部から北東部にかけての遺物はやや深く床面に近いレベルにある。

【出土遺物】 口縁部外面下端を凹線状にする厚い杯 (1 ~ 3) があり、3 は削って平底にする。口縁部が全周する甕 (10) は、口縁端が細かく破損している、器台に転用したのであろう。7 は TK-23 ~ 47 型式の高杯。剣形石製模造品は SG10 区では SI-2 などにある。図示以外の土器器および焼粘土塊は小片ばかりで合計 306 片・2,590g あり、内訳は杯 149 片・778g、高杯 18 片・164g、鉢 10 片・156g、甕類 127 片・1,472g、甕 1 片・11g、焼粘土塊 1 点・9g。13 は雲母細片を含む搬入品の薄い杯。雲母を含む土器器は SG10 区では SI-12 などにあり、隣接する SI-72 に多いので、SI-72 から SI-73 覆土上層に廃棄された古墳後期遺物と考えられる。

第 64 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-73 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ [cm・g]	特 徴	色調 胎土・構成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.0 高 4.4 最大 復 12.7	外面の口縁部下端が凹線状に凹む。外面は底部に 1 ~ 2 方向と体部に横位のヘラケズリで丁寧に平滑に仕上げられる。口縁部内外面ヨコナテ後ヨコヘラミガキ。内面の体部もヨコヘラミガキで底部は剥落してミガキの方向が不詳。滑仕上げの可能性もあるが不確定。	7.5YR8/6 浅黄緑 黒・黒・赤紅～細粒と白・透明細粒少 中や軟質	南部床上 21cm 口 1/3 弱、体 2/3 弱 23
2 土師器 杯	口 11.8 高 4.6 最大 12.7 重 残 250	外面の口縁部下端が広い凹線状に凹む。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリと口縁部ヨコナテ後に全面をヨコヘラミガキ。外面体部に 7cm 以下の痕あり。	7.5YR6/6 橙 細黒 赤・黒紅～細粒と白・透明細粒少 中や軟質	南部床上 8cm ほぼ完形 口 5/6 弱 24
3 土師器 杯	口 差 12.5 高 差 5.3 底 5.5 最大 復 13.1	外面の口縁部端に浅い段あり。外底面は 1 方向ヘラケズリで平滑。外面側 7.5YR4/2 灰黒 部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナテ後に中位以上をヨコヘラミガキ。内面は体部を放射状と口縁部に横位のヘラミガキ。口縁端は欠失しているのどけ。黒・透明細粒や中多 と器高は推定。外面上平と内面に磨仕上げが見られ、外面下平と底面まで滑 仕上げの可能性もある。	7.5YR4/2 灰黒 中や軟質、白・赤紅～細粒多 黒・透明細粒や中多 中や軟質	南部床上 3cm 器 4/4 弱、底全周 25



第114図 権現山遺跡 SG10区 SI-73 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10区

4 土師器 高杯	口 16.6 高 12.7 厚 残 11.2 重 残 707g	厚く重い。外面は脚柱部タテヘラケズリ、脚柱部ヨコナデ、杯部ヨコヘラミガキ。杯内面は1縁部がヨコヘラミガキで、中位以下は器面が荒れて調整本と黒粒多。赤透明細～細粒少。中や軟質。	5YR6/6 橙 中や軟質 白・透明細～細粒少 中や軟質	カマド火床面に倒立口全体、脚柱2/3周 6K
5 土師器 高杯	口 11.4	外面脚柱部タテヘラミガキ。内外面の脚柱部にヨコヘラミガキ。内面脚柱部タテメナデ。	2.5YR5/8 暗赤褐色 細密 赤黒～黒粒多、白・黒・透明細粒少 中や軟質	カマド火床土2～3cmが接合 脚柱7/12周 2K, 3K
6 土師器 高杯	高 残 6.3	外面は杯底部にやや曲ったナメヘラナデ、脚柱部に丁寧なタテヘラナデ。脚柱部内面はタナデと粘土組織を繰り返している。	5YR6/6 橙 細密 赤黒～黒粒多、白・黒・透明細粒少 中や軟質	南内面中央上9cm 脚1位5/6周 2D, 南西
7 須置器 高杯	高 残 3.7 脚柱 残 10.0	外面は飾文方向不明のナメケの後に、透窓を下から上へ切って3方に開け、曲取りはしない。脚柱部外面の上寄りに鋭い突縁1本あり。透窓の下辺幅がわかる破片はない。脚柱部内面との関係から下辺幅1.8cm程が想定される。	5Y6/1 灰 細密 白粒較少 中や軟質	中央床土4cm 脚柱1/4周 2D、北BトレンチFA上層
8 土師器 大形鉢	口 復 19.2 高 5.4	外面は臼脚部ヨコナデ後に5～10cm間隔のタテヘラミガキ。内面は1縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。製部上端はナメナデをしてた部分がわずかに残る。外面に壁が多く付着する。 11.7.25.26, 26, 47, 22.3.18.9 イモテ	5YR6/6 橙 細密 白粒較少 中や軟質	南面床土3～21cmが接合 口1.6周 注記は左欄
9 土師器 大形鉢	高 残 9.1 底 5.7 最大 復 18.0	脚部が深い。外底面の外縁に粘土を貼り足して強く上げ底状にする。外面部がナメヘラナデ。内面も底部の外縁に粘土を貼り足して1方向ヘラナデし、内面側部は斜一横位のヘラナデ。外面全体が焼熟赤化する。	7.5YR6/6 橙 中や軟質 白・黒・透明細粒少 中や白、赤と灰色粗粒少 中や軟質	カマド火床土5cmとカマド北側床土6cmが接合 底全周 1K, 5K, 南西
10 土師器 甕	口 復 18.1 高 残 6.7	1縁部内外面ヨコナデ後、脚部内外面をナメヘラナデ。1縁部上端に小さな突起や凹痕が多く生じている。11と同一個体の可能性あり。	10YR7/6 明褐色 中や軟質 白粒～細粒と透明細多 白粒～粗粒少 中や軟質	南東部床土2cmに倒立 一床土2cmが接合 44
11 土師器 甕	高 残 13.2	外面ナメヘラナデ。内面ナメヘラケズリ。外面が少し焼熟している。10と同一個体の可能性あり。 11.7.25.26, 26, 47, 10K, 11K, 13K, 14K, 15K	10YR8/3 成筒質 中や粗粒 白粒～細粒と黒粒多、白・灰色粗粒少 中や軟質	カマド南袖内と火床土5cmとカマド南側床土上～一床土2cmが接合 側下平1/3周 注記は左欄
12 土師器 甕	高 残 5.6 底 復 8.2	外底面は多方向ヘラケズリ。外面側部は下端ナデ後にヨコヘラケズリ。内面はナデと認められるが調整してほとんど調整が不明。外面が焼熟赤化し、内面側部に暗褐色の汚れあり。	2.5Y6/3 にぶい青 中や粗粒 白粒～細粒と黒・軟質 黒粒～粗粒多	カマド南袖内、カマド南側床土5cmの1.1周も接合 底 3/4周 5K, 9K, 13K
13 土師器 杯	口 復 13.0 高 復 5.8	薄く軽い。口縁端を外へ折る。外面は口～体部端の縁が明瞭。外面底部から体部までのヘラケズリは底面が1方向、体部が側位で少し光沢を持つ。内面は口縁部にヨコナデ後にヨコヘラミガキ。内面体部は中や粗粒い。裏面が中や粗粒。外面底付近を軽く内外全面に磨き上げ、SI-72から磨棄された可能性あり。	2.5Y6/3 にぶい青 中や粗粒 白粒～粗粒多、白粒較少 中や軟質	遺構壁面とFA層上方の各1.5gが接合 口11.4周、体1/3周 北BトレンチFA上、SI-73から7.4上面
14 石製焼土 彫形	長 3.60 幅 1.55 厚 0.36 重 3.08	表面は5面をそれぞれ1方向に研削し、裏面は全体を1方向に研削する。研削はどれも中や粗い。隅の裏面に穿孔孔として表面に穿孔孔網を生じ、穿孔径1.65cm、網径径1.50cm。	10Y2/1 黒黒 滑石	南東部床土15cm 埋石 43.
15 石製焼土 彫形	長 残 2.68 長 1.95 厚 0.59 重 残 2.79	表面中央の縁を半円にして、左側と右側をそれぞれ1方向に研削し、裏面は1方向に研削する。側面は縦方向に研削する。研削はどれも中や粗い。	10C7/1 暗緑灰 滑石	東部床土15cm 跡部分の破片 39

SG10区 SI-74 (第115・116図、写真図版107・108・204)

【位置】SG10区北部の22・18・19グリッド。同じく古墳後期のSI-72が北西にある。後期前葉のSI-70・72・74が東西に並び、北側のSI-78とともに同時存在の可能性もある。古墳中期末のSI-113a・113bを切り、SI-113b→SI-113a→SI-74の順になる。時期不明の柱穴P-700が北西に近接する。

【規模と形状】方形で主軸方位はGN-20°E。東西4.02×南北3.90m、残存壁高は0.25～0.38m。主柱穴4本は床面からP1=33cm、P2=40cm、P3=41cm、P4=38cmの深さ。東西・南北の柱間1.90mで均一だが、東側のP1-P4間は2.08mで少し長く、P4をカマドから南へ遠ざけたことがわかる。柱の抜取痕を反映する土層が各柱穴にあり、推定柱径は10～15cm。

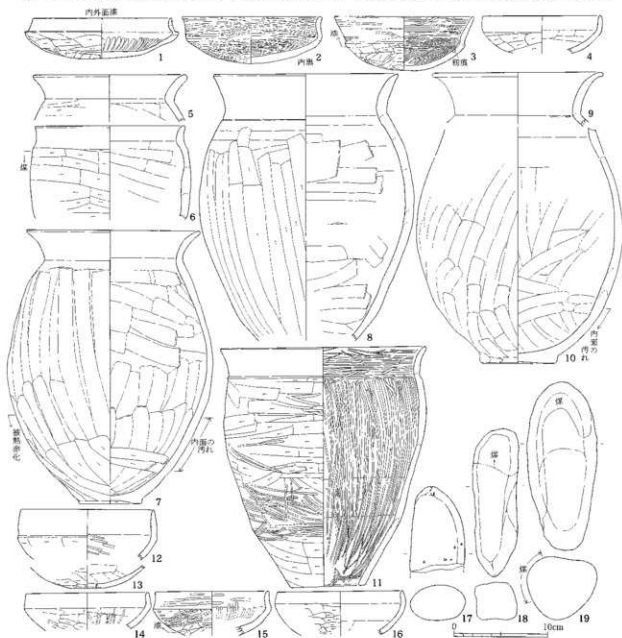
南中央の入口施設と考えられるU字状盛土は東西1.70×南北1.04m×床から高さ4～9cm(断面A-A'とD-D')の6層。南東隅の貯蔵穴P5は東西に長い方形(東西73×南北69×深さ44cm)で、自然埋没状で最下層以外にカマドから焼土粒が流入する(断面E-E')。壁溝や間仕切溝はない。貼床は厚さ4～14cmで、掘方底は南半が3～10cm、北東部が2～6cm、北中央部が2～11cm深くなるように一段下がる。

【カマド】東壁南部にある。カマドの周囲は床面が2～5cmほど高く盛り上がる。盛土上にカマドを作る例は北側の立野遺跡3区SI-9と5区SI-9・24・64にある(『東谷・中島地区遺跡群』5)。盛土は堅穴の貼床と一連で、その上面で両袖下部を少し高くした後に、灰色粘土で袖を作る。煙道は東壁から少し外へ出る。両袖幅170cm、煙道先端から袖先端まで183cm。自然礫の支脚が燃焼部底面に倒れ(18)、上に掛けた土師器甕(10)が落ち込んで、10の上に甕(11)の破片が上下逆位で被っていた。南袖先端の西側にも傾いた土師器甕(7)がある。これらの土器は、カマド廃絶時に人為的に配置した状況と思われる。

〔覆土〕 竪穴部と貯蔵穴 P5 内は自然埋没状で、テフラの塊や粒は見られない。中央～南西部と北部の低いレベルに炭化材と焼土があり、火災建物とも考えられる。SG10 区では SI-66 などが火災建物である。

〔遺物出土状況〕 東半に多い。カマド内の遺物はカマドの項で述べた。貯蔵穴 P5 内には遺物がなく、P5 の上方に甕(8)の大破片がある。8 の小破片はカマド西方まで広がる。完形の土師器杯が竪穴南部で上を向き(1・2)、竪穴北部で伏せられていた(3)。1 は床上 14cm、西部では被熱礫か編物石が床上 26cm にある(19)。古墳中期末の SI-75 に、後期の SI-74 から混入したと思われる同一個体の土器片がみられた。

〔出土遺物〕 SI-70・72・74 に似た土器がある。外傾・直立・内傾口縁の杯があり、外反口縁の杯はない。1・3・15 は漆仕上げ。ただし 15 は SI-113a から流入した破片であろう。2 は炭素吸着による内面黒色処理で、SI-70・78 に類似品がある。床面から 14cm 浮いていた 1 は他の杯より新しく見えるが、完形品なので混入と考えるかどうかは難しい。3 は金色雲母細片を含む搬入品の薄い杯。雲母を含む土師器は SG10 区 SI-12 などにあり、隣接する SI-72 に多い。4 も薄い異質な杯で、他地域産かもしれない。6 は煮炊具ふうではな



第 116 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-74(2) 遺物

い緻密な胎土だが、外面に煤が多い。糊状痕のある土師器(3)は、SG10区SI-50などに事例がある。12～16は古墳中期後葉の模倣杯小片で、SI-113a・bから流入した可能性が高い。図示以外の土師器合計297片・2.099gの内訳は、杯155片・784g、高杯4片・43g、甕蓋類118片・857g、轆20片・415g。

第65表 権現山遺跡SG10区SI-74出土遺物

番号 種別 図録	大きさ [cm]・[g]	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 14.0 高 4.3 最大 16.2	外面体部ナデ後、底部に1方向と体部に横位のヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内外面部ヘラナデ後に放射状ヘラミガキ。内外面全体に漆仕上げ。	2.5Y3/2 黒濁 黒帯 白細～細粒と黒・透明 細粒少・やや硬質	南部床土14cm 完形 7
2 土師器 杯	口 14.7 高 5.1	外面は底部1方向ヘラズリ。体部ヨコヘラズリ後ヨコヘラミガキ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面に炭素残の黒色処理。	10Y86/4 に近い やや暗赤 白・透明～細粒 と黒細粒やや多。赤細粒少 やや硬質	南部床直上 口4.5周、体1周 6
3 土師器 杯	口 14.6 高 5.7 重 223.5	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面底部に1方向と体部に縦位のヘラミガキ。外面上半と内面に透明な黄褐色が1箇所あり、胎土中に混入されていた可能性がある。	褐色 金色白濁多。白・ 透明～細粒と黒細粒少 やや硬質	北内部床土5cm 完形 44
4 土師器 片	口 復12.1 高 復3.9	薄く軽い。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラズリ。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ。	7.5Y86/6 暗 やや暗赤 赤細粒と白・黒・ 透明細粒少・やや硬質	北東部 口1/4周 完形
5 土師器 小形甕	口 復15.6 高 復4.9 最大 復16.2	外面は胴部ナデとヨコヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面胴部ナメナデ。	5Y84/8 赤濁 やや暗い 白細～細粒多。赤 細粒と黒・灰色・透明～細粒多 硬質	カマド火床土6cm 口1/6周 58
6 土師器 小形甕	口 15.8	内外面口縁部をヨコナデ後、外面胴部ヨコヘラズリ。内面胴部ヨコヘラナデ。外面胴部に煤が非常に多い。 [注記]4、28、33、36、39、北東、北西	5Y86/6 暗 やや暗赤 赤細～細粒と黒細 粒やや少。白・透明細粒少 やや硬質	南部床直上と東部床 土10～20cmと北東部床 土3cmが接合 口1/8周、胴1/6周 注記は左欄
7 土師器 甕	口 18.2 高 28.9 底 6.6 最大 21.6 重 復1685	外底面は多方向ヘラズリで凹状。外面は胴部タテヘラナデ後に側下位ナメヘラズリ。内面は口縁部ヨコナデ。内面胴部下位タテヘラナデ後に横み上げ休止部と並む付着をヨコヘラズリで薄くし、胴上部はヨコヘラナデ。胴全体に黒色の外面が焼熱赤化して内面に汚れが付く。胴部の1/3箇所特に顕著で、それ以外の部分はあまり目立たない。	2.5Y87/4 浅汚 やや暗い 白・透明～細粒 と黒細粒多。白濁と赤細粒少 硬質	カマド火床直上。南 東部土14cmの小破片 1点が接合 口1/4周、胴1周。底 全周。 3、32、K間辺
8 土師器 甕	口 復19.4 高 復28.2 最大 復22.6	胴部は外面多方向タテヘラズリ。内面ヨコヘラナデ。口縁部は内外面ヨコナデ。残存する破片では焼熱色が認められず。外面胴中位と内面胴下半に黒長の黒帯が残る。	10Y87/4 に近い 暗い 白・灰色細～細粒と透 明細～細粒多。黒細粒やや多 軟質	南部床土14cm(甕底 直上4.8cm) 口1/4周、胴1/2周 3、南東、北西、K間辺
9 土師器 甕	口 復18.0 高 復5.7	口～胴部の内外面をヨコナデ。	10Y86/3 に近い やや暗赤 白・灰色細～細粒 多。赤・透明～細粒と黒細 粒少 硬質	中央部床土4cm 口1/18周、胴1/6周 19
10 甕	高 重25 底 7.8～8.1	外底面はナデや弱い凹状。外面胴部タテヘラナデ。側下位の横み上げ休止部が厚い部分を強くヨコナデして周囲の厚さに合わせている。内面胴部ヨコナデ。全面が焼熱して劣化している。内面胴下位～底部に黒色の汚れが付着。	10Y87/4 に近い やや暗赤 白・透明～細粒 と黒細粒多。赤・灰色細～細粒 少 軟質	カマド火床土10cm 胴1/6周。底全周 54
11 土師器 甕	口 21.6 高 25.2 底 7.9 孔 6.6 重 復1504	外面は口縁部ヨコナデ。胴部ヨコヘラズリ後に側下位の横み上げ休止部を中心とするヨコヘラミガキ。内面は横み上げ体部にヨコヘラズリ後、胴部タテヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。孔縁部はおそらくヨコヘラズリ。胴部下位の横み上げ休止部より下は黒褐色。上は褐色で、粘土の結核を途中で見える。 [注記]53、54、K間辺、南東	5Y86/8 暗 やや暗い 白・黒・透明～ 細粒多。赤・灰色細～細粒少 やや硬質	カマド火床土10～29 cmが接合。カマド内の 土師器甕の土にかぶる 口全周、胴全周。底3/4 周 注記は左欄
12 土師器 杯	口 復14.1 高 復5.3 最大 復14.7	外面の口～体部境に浅い段あり。外面体部ヨコヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内外面部ナデ後ヨコヘラミガキ。内外面口縁部や外面体部も磨いていたかと思われるが、現状では確認できない。古墳中期後葉の遺物が認めらる。	5Y85/6 明赤濁 やや暗い 赤細粒と白・黒・ 透明細粒少 やや硬質	北西部土12cm 口1/6周 40、北西
13 土師器 杯	高 復4 底 復3.6	外底面は円筒方向のヘラズリで1方向底状。外面体部ヨコヘラズリ。内面はナメヘラナデ。古墳中期後葉の遺物が認めらる。	7.5Y86/6 暗 やや暗い 赤細粒やや多。 白・灰色細～細粒と黒・透明 細粒少 やや硬質	船中 底2/3周 床下
14 土師器 杯	口 復12.8 高 復3.9 最大 復13.4	外面は体部上半無調整で、下半ヨコヘラズリ。口縁部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ後に体部タテヘラミガキ。古墳中期後葉の遺物が認めらる。	2.5Y84/4 に近い やや暗赤 白細～細粒多。白 濁と灰色細粒と透明細粒少 硬質	南部床土20cm 口1/6周 8
15 土師器 杯	口 復12.0 高 復4.6 最大 復12.3	外面体部ヨコヘラズリ後に上半を中心としてヨコヘラミガキ。内外面の口縁部をヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部ヨコナデ後に放射状ヘラミガキ。外面口縁以上と内面に漆仕上げ。古墳中期後葉の遺物が認めらる。	5Y86/6 暗 やや暗赤 赤細～細粒やや多。 白・透明細粒少 やや硬質	南部床土16cm 口1/6周、体1/3周 11
16 土師器 杯	口 復13.2 高 復4.7 最大 復13.8	薄く軽い。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラズリ。内面は底部に多方向か1方向のナデまたはヘラナデ。口～体部ヨコナデ。古墳中期後葉の遺物が認めらる。	7.5Y86/4 に近い やや暗赤 白・灰色・透明 細粒やや多。黒細粒少 硬質	東部床土15cm 口1/6周 29
17 石 瓦 甕物石?	長 復8.8 幅 5.8 厚 3.7	縦長い自然産をそのまま利用。下部が割損している。加工・使用・焼熱は見られない。残存重量310.2g。	2.5Y6/3 に近い やや多孔質だが割損で硬質な 安山岩	中央部床土10cm 1/2次 47
18 文 卸	長 15.6 幅 4.9 厚 3.9	断面が四角形で縦長い自然産をそのまま利用。同の上縁部に煤が付着する。明確な焼熱赤化跡は見られない。重量436.1g。	N7/10 灰白 赤帯～硬質な燧石	カマド直上 完形 55
19 石 瓦 甕物石?	長 17.5 幅 7.4	頂上部分が厚く下方が薄い自然産を利用。加工・使用痕は見られない。煤が付着すること、煤が明確に付くこと、甕物石以外に用いた可能性も大きい。明確な焼熱赤化跡は見られない。重量865.9g。	2.5Y5/2 暗灰黄 やや暗黒で割れやすい花崗岩	内西部土26cm 完形 46

SG10 区 SI-75 (第 117 図、写真図版 109・204)

【位置】 SG10 区北部の 22-19 および 23-19 グリッド。同じく古墳中期末の遺構は西に 73・SI-113a・113b がある。近世の SD-503 と時期不明の SK-545 に中央と北西部を、近代以降の長方形竪乱坑 (調査時名称 SK-530) に南東部を切られる。床面で確認した時期不明の柱穴状土坑 P-579 は SI-75 の貼床に覆われないので、SI-75 を切ると考えられる。調査時旧名称「SK-586」を SI-75 の張出ピット P5 として吸収した。

【規模と形状】 方形の建物跡で、主軸方位は GN-18°E。東西 5.78 × 南北 6.14m (張出部を含めると南北 6.55m)、残存壁高は北西部で最大 34cm、南西部で最小 14cm。主柱穴は 4 本で、柱間は南北 2.55m、東西 2.64m。底面形から推定した柱径は 10～14cm 程度。床面レベルからの深さは西側柱穴よりも東側柱穴が深く P1=55cm、P2=37cm、P3=35cm、P4=51cm。貯蔵穴は南壁中央に張出ピット P5 があり、東西 76 × 南北 117 × 床面レベルからの深さ 29cm。SG10 区では SI-72 などの建物が張出ピットを持つ。入口施設と考えられるピットや、壁溝・間仕切溝はない。

【火処】 不明である。カマド (または炉) が SD-503 に破壊されたと考えられる。

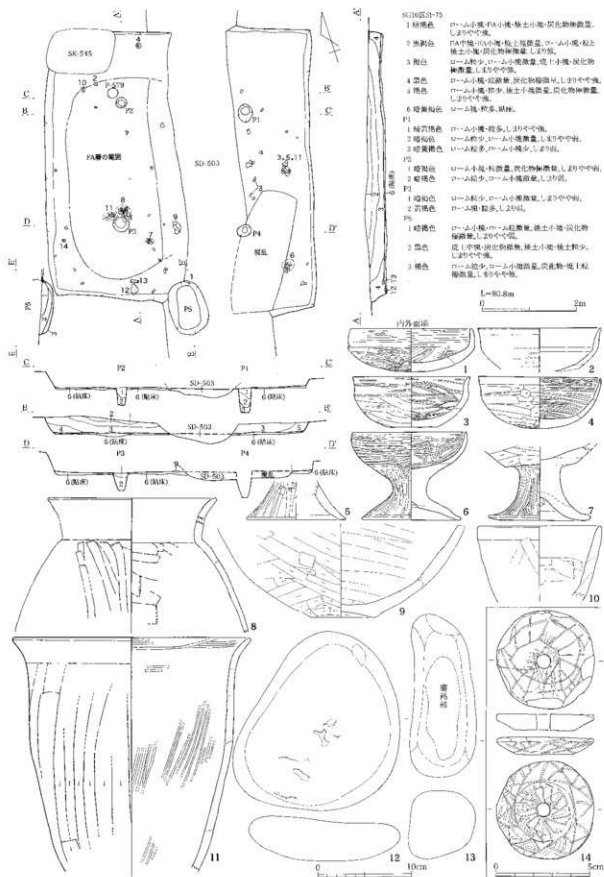
【覆土】 自然埋没状の堆積で、古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラのやや大きな塊が、西半部の覆土 2 層中にまとまって認められた。

【遺物出土状況】 南部の杯・高杯・壺 (1・6・7・9)、北部の杯と鉢 (2・4・10)、南壁近くの台石と磨石 (12・13) は床面付近にある。床から 10cm 以上浮いた破片もある (3 の一部破片と 5)。Hr-FA テフラ層より上でも遺物が出土した (8・11)。文様のある紡錘車 (14) は床面から大きく浮いていたが、FA 層よりは下位である。古墳後期の SI-74 から中期末の SI-75 跡地へ流入したと思われる同一個体の土器片がみられた。

【出土遺物】 橙色胎土の土器が多い。不掲載の破片も見ると内斜口縁の杯は少く、直立口縁 (1) と外傾口縁 (2・3・4) の古式な模倣杯が目立つ。よく磨く杯が多く、平底の杯もある (3)。短脚高杯もよく磨いている (5・6・7)。紡錘車は SG10 区 SI-59 などに、線刻紡錘車は SG10 区 SI-36 に例がある。台石と磨石は使用痕跡が不明瞭で、あまり使っていないようである (12・13)。図示した以外に杯類は直立口縁 1 点・内傾口縁 3 点・赤彩杯破片などがあり、甕は大形甕が 1 個体、壺類は底部が 3 点ある。図示以外の土師器は各器種ともにわずかで、合計 179 片・2.032g の内訳は、杯 58 片・342g、高杯 2 片・29g、鉢 11 片・120g、壺類 94 片・1.273g、甕 13 片・264g、小形土器 1 片・4g。混入した縄文土器も目立ち (『東谷・中島地区遺跡群』10 の第 36 図 38 と第 40 図の一部)、弥生土器もある (前期書の第 43 図 75)。南東部の竪乱坑 (旧名称 S-530) へ SI-75 から混入したと見られる不掲載土器が合計 19 片・183g あり、内訳は杯 4 片・27g、壺類 13 片・102g、甕 2 片・54g。

第 66 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-75 出土遺物

番号 種類	大きさ 縦・横・厚	特徴	色調 胎土・焼成 土質 (または裏材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.8 高 4.5 最大 13.4	外面の口へ体部端に浅い凹。外面は底部に多方向のヘラケズリ後ヘラミガキ。体部に横位のヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面の体部は斜へ横位ヘラミガキ。内外面全体に磨き上げ。	10YR7/4 に近い呉柳 細粒。黒細粒や赤多。赤黒 細粒と白・透明細粒少 やや軟質	南東部直上・ 口 1/4 周 23, SK-586 一括
2 土師器 杯	口 復 12.9 高 残 4.5	内外面の口縁部はヨコナデ。外面体部はヨコヘラケズリと思われる。内外面ともに磨滅しているのでミガキの有無は不詳。外面体部に大きな黒痕あり。	5YR6/8 橙 やや軟質 赤黒・細粒多。 白・黒・透明細粒少 やや軟質	北西部直上 3cm 口 1 体 1/5 周 43
3 土師器 杯	口 復 12.4 高 5.3 底 5.0	外底面は多方向ヘラケズリで平底。外面は口縁部ヨコナデと体部ヨコヘラケズリの後にヨコヘラミガキ。ただし、外面体部はミガキの有無が不詳な部分が多い。内面はヨコナデ後にヨコヘラミガキ。内底面中央は 1 方向ヘラミガキ。	2.5YR6/8 橙 やや軟質 赤黒・細粒や中多。 白・黒・透明細粒少 やや軟質	東部直上 2～13cm が接合 口 1/4 周、底全周 14, 16, 17
4 土師器 杯	口 12.8 高 5.4	内外面の口へ体部端に浅い凹あり。底が厚く体部は薄い。外面は口縁部ヨコナデ後に体部を 1 方向にヨコヘラケズリして光沢あり。内面は底部に 1 方向に体部に横位のヘラミガキ。	2.5YR5/8 明赤黒 やや軟質 白・灰色細粒と黒・ 透明細粒少 硬質	北西部直上 口 1/2 周 44
5 土師器 高杯	高 残 4.1 脚長 復 10.4	内外面をヨコナデ後、脚外面にタテヘラナデ。内面はヨコナデ。	5YR6/8 橙 やや軟質 白・黒粒と赤細粒 多・やや軟質	東部直上 13cm 脚長 1/6 周 14
6 土師器 高杯	口 11.8 高 9.2 脚長 10.3 最大 12.1	脚柱部は中実。外面は脚柱部から杯底部までタテヘラケズリと口縁部・脚柱部ヨコナデの後に杯部横位と脚部縦位の赤なヘラミガキ。内面は杯底・底部に多方向と口縁部に横位のヘラミガキ。脚柱部内面には斜め切浅い粘土層を脚柱部に貼り付けてヨコナデした痕を獲す。	5YR7/8 橙 細粒 赤黒粒と黒細粒少 やや軟質	南東部直上 3～4cm が接合 口 1/4 周、杯底全周、 脚長 1/2 周 19, 20, 東



第117図 権現山遺跡SG10区SI-75 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

7 土師器 高杯	高 残 7.7 底 10.8	外面は胴部タテヘラミガキ、杯底ヨコナデ、杯体部ヨコヘラズリ、杯内面は断面が荒れて調整不明。胴部は断面に縦線で記入したように付け足して成形し、内面ナデと脚部ヨコナデ。	7.5YR7/6 橙 やや密着 赤黒～黒粒と黒粒 粉やや多、白・透明黒粒少 やや軟質	南部床土2～3cmが埋 合 杯底全周、脚部1/2周 28、29
8 土師器 甕	口 径 17.9 高 残 14.2 最大 残 24.6	口～胴部の残存度が少ないので、復原は参考図解。外面胴部タテヘラナデ、内面胴部ヨコヘラナデ。内外面の口～胴部にヨコナデ。	10YR7/4 に近い黄粒 やや粗い、黒・透明黒粒やや 多、白粒粉少 やや軟質	南部床土上面より上 15～22cmが埋合 口1/8周、胴1/9周 1～4、南内、北西上面
9 土師器 杯	高 9.5 底 6.6	外表面は多方向ヘラズリで深い上底付。外面胴部ヨコヘラズリ。内面は底部多方向ヘラズリ、胴部ヨコヘラナデ。外面には破片化した足の下部部は数枚熱と硬質がある。内面は黒褐色変色。	7.5YR6/4 に近い黄 粒い、白・灰色・透明黒～黒 粒多、赤黒と黒粒少 硬質	南部床土2cm 底5.6周 32
10 土師器 鉢	口 径 12.8 高 残 8.0	やや厚く重い。外面は体部ナデと口縁部ヨコナデ。内面は体部に肩～横位ナデナデ、口縁部ヨコナデ。明確な漆仕は見られない。	5YR5/6 赤黒 密着 赤黒～黒粒と白・黒 粒少 軟質	北部床直上土 口1/4周、体3/4周 42
11 土師器 土甕	口 径 25.2 高 残 24.5	外面胴部タテヘラズリ、内外面口縁部ヨコナデ。内面は胴部に縦位と口縁部に横位のヘラミガキ。 [注記]1)、南内、北西上面、西部、S530一括	2.5Y6/3 に近い黄 粒 灰色・透明黒～黒 粒やや多、白粒～黒粒と黒粒 粉少 やや軟質	南部床土上面より上 17cm 口1/4周、胴1/3周 注記は左欄
12 石源 白石	長 18.8 幅 17.6 厚 4.8	扁平で片面の中央がわずかに凹む自然石をそのまま利用。凹んだ方の面に、深く刻痕した箇所が図示したように見られるが、使用によるものかどうかは不明。重量 202g。	2.5Y7/1 灰白 やや密着で硬質な安山岩	南部床直上土 定形 33
13 石源 磨石	長 17.1 幅 7.1 厚 7.2	楕円形で隅丸方形の自然石をそのまま利用。面の左上部が手前に少し盛り上がり、図示した範囲が少し磨耗して滑らかになっている。加工・焼熟痕は見られない。重量 1340g。	2.5Y7/2 灰黄 やや密着で硬質な安山岩	南部床直上土 定形 34
14 石製品 紡錘車	径 51.55～ 52.70mm 厚 8.65mm 重 35.53	筒状上面は鋭く磨削して突起を少し持ち、内外に二重の多角形状と放射状刻痕を掘り付けた後、使用に慣れる細かい突起の接線方向に生じる。筒下面中央部の平面は磨削して突起を少し、[注記]1)字部刻痕を14個掘った後に、使用に慣れる細かい突起の接線方向に生じる。筒下面外周部の断面は、放射状刻痕を掘り付けた後に星形に似た刻痕を掘り、筒の左～下部では更に細かい刻痕を追加して細く。孔径は上面7.15～7.30mm、下面7.15～7.25mmでほとんど変わらない。新磨痕が特に上面の外縁部で目立つ。	7.5Y3/1 オリーブ黒 密着でやや硬質な凝灰岩	南部床土23cm(FAより)は下位 38

SG10 区 SI-76 (第 118 図、写真図版 109・204)

[位置] SG10 区北部の 21-19 グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は西方に SI-61 がある。近世の SD-503 に南東部を破壊され、時期不明の土坑と溝 (SK-519 と SD-508・518) によって中央部・南東隅・北部の遺構上部を切られる。

[規模と形状] 長方形の建物跡で、主軸方位は GN-28°-W (東西軸方向は GN-62°-E)。東西 3.94 × 南北 3.28m、残存壁高は最大 25cm (北西隅)～最小 18cm (南西隅)。床面に確実な柱穴はない。断面図 A-A' の中央部で竪穴掘方にある窪みは、床面レベルから深さ 24cm あるので柱穴のようにも見えるが、現地調査時には掘方底面の窪みと判断されている。壁溝・間仕切溝はない。入口施設と推定される東西 83 × 南北 61 × 深さ 15cm のくぼみが南部中央にある。入口施設の窪みとしてはやや深さがあるが、貯蔵穴と見なすには浅すぎる。竪穴中央から少し南に寄った床面に、一点鎖線で示した径 60cm 弱の範囲で、硬い黒色土がまとまっている。東壁際中央の破綻で示した範囲は、掘方底面が周囲より 2～5cm 低い。

[火処] 不明である。東部にあったカマドまたは炉が SD-503 に破壊されたとも考えられる。中央部で床面が 2cm ほど窪んだところに焼土塊と暗褐色土が入るが (断面図 D-D')、炉の形状はとらえられず、現地調査時の記録でも炉と認定していない。

[覆土] 焼土が特に多い 4 層が床面にある。北部にある 1～3 層は自然埋没状の堆積である。不自然にロームの多い土が上部にまとまる 5 層は、西部にある 6 層とともに、人為的に埋め戻したか、土層根に由来することも考えられる。断面図 B-B' で 2 層が 6 層に載る状況も不自然である。1 層と 6 層の境界は、原因に未記入のため推定線で示した。SI-76 にテフラの層や粒などは認められなく、SI-76 を切る時期不明の SK-519 には火山灰の可能性のある白色粒子が記録されている。

[遺物出土状況] 中央部と東部に多い。床面付近や床面直上にある遺物が目立つ。特に 1 が北部中央の床面直上にまとまっている。入口施設の窪み内にある遺物も、底面から 5cm 以内のレベルにある。

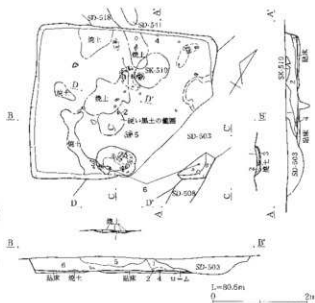
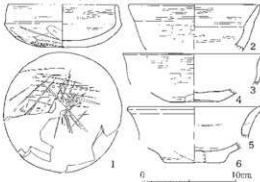
[出土遺物] 遺物はわずかで、大半は小破片である。明確に模倣杯と言えるものは、図示した 1 の他に破片 1 点だけみられた。1 は外面を研磨具に転用している。2 は古墳中期後葉に見られる内斜口縁の杯。図示していない裏胴部破片は、やや球胴気味である。図示以外の土師器合計 89 片・552g の内訳は、杯 42 片・174g、鉢 2 片・9g、壺頸類 42 片・329g、甕 3 片・40g。

SG10区SI-76

- 1 障壁色
1-1 障壁色多し、中や中強、粘粒有。
2 障壁褐色
障壁色多し、中や中強、粘粒有。
3 障壁色
障壁色多し、中や中強、粘粒有。
4 障壁褐色
障壁色多し、中や中強、粘粒有。
5 障壁褐色
障壁色多し、中や中強、粘粒有。
6 障壁色
障壁色多し、中や中強、粘粒有。

入口施設 (C)

- 1 障壁色
障壁色多し、中や中強、粘粒有。
2 障壁褐色
障壁色多し、中や中強、粘粒有。
3 障壁色
障壁色多し、中や中強、粘粒有。



出土集中期 (D-D')

1 障壁色 横上較多、ローム障壁色下、しりや中強、粘粒有。

第118図 権現山遺跡SG10区 SI-76 遺構・遺物

第67表 権現山遺跡SG10区 SI-76 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (単位: cm)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 (注記)
1 土師器 鉢	口 復11.7 高 4.5 最大 復12.5	外底面の中央が少し凹み、体部外面ヨコヘラズリ。口縁部内外面にヨコナデ後ヨコヘラズリが。体部内面も削れていると思われるが、磨滅して不明瞭。外面の体へ底面を研削剤に転用しているため、磨成後の鋭い平行研削が交差して数多く見られる。	5YR6/8 橙 やや暗い 白・黒・透明細粒少 赤・透明細粒少 灰質	南部床直上 口3/4割 8, 24, 24割残
2 土師器 鉢	口 復13.6 高 4.9	外面体部はヨコヘラズリで、その後削れている可能性もある。内外口縁部と内面体部はヨコナデ後にヨコヘラミガキ。全体の表面が暗褐色に汚れていて、磨白上げの痕も見残る。	10YR4/3 に近い黄褐色 暗赤 白・黒・透明細粒少 やや硬質	中央部床直上 口1/6割 4
3 土師器 鉢	口 復15.0 高 3.1	やや凹み、外面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、体部ヨコヘラズリ。内面はヨコナデで、ヘラミガキをしているかどうかは不詳。	5YR6/0 橙 やや暗い 赤粒～細粒やや少、 白・透明細粒少 やや硬質	入口部床直上 口1/6割 入口ピット
4 土師器 底	高 残1.3 底 残5.0	外底面は多方向ヘラズリで上げ残状。外面体部ヨコヘラズリ。内底面は多方向のハケム後少テリ。内面ハケムは様により見られないので、軒ではなくの可能性もある。	5YR6/8 橙 細赤 赤粒と黒細粒少 やや硬質	北部床直上 底1/3割 12
5 土師器 小形甕	口 復14.2 土師器 小形甕	口縁部内外面ヨコナデ。外面の口縁部直下に削り輪を持つ。	5YR6/0 橙 やや暗い 赤粒～細粒多、白 粒～細粒と黒細粒やや多、透 厚粗粒少 やや硬質	南部床直上 口1/4割 21割残
6 土師器 甕	高 残2.1 底 残6.2	突出する平底で、外底面はテデのようであるが磨滅して不明瞭。外面側下端ナデ。内面底部は多方向ナデ。	10YR6/3 に近い黄褐色 やや暗い 白・透明細粒～細粒 多、黒細粒少 やや硬質	南部床直上2cmと入口部 床直上3cmが組合 底1/2割 16, 4人口P

SG10区 SI-78 (第119・120図、写真図版110・204・205)

【位置】SG10区北部の23-18・19グリッドにある。同じく古墳後期前葉のSI-70・72・74が南に並び、東に後期末のSI-81がある。北東部で古墳中期のSI-79を切る。

【規模と形状】南北軸の方形で、主軸方位はGN-8°-E。東西4.66×南北5.34m、残存壁高は10～20cmのところが多く、最も低い南西部で3～5cm、最も高い北東隅部で30cm。主柱穴4本の柱間隔は南北3.24m、東西2.26m(南側)～2.42m(北側)。床からの深さは46～48cmでほぼ一定し、P1・P3・P4の柱直径は約10cm。北東柱穴P1は貯蔵穴周囲の土手状盛土に周囲を囲まれ、北側はP5の斜面につながる(断面E-E')。貯蔵穴P5は北東隅にあり、東西78×南北66×深さ35cm。P5の周囲には、床から2～4cmの高さで幅30～40cmの広い土手状盛土(6層)がめぐる。間仕切溝は西側主柱穴P2・3に連結する位置で各1本を貼床除去後に確認し、幅20～27cm、床から深さ16～18cm。入口施設や壁溝はない。

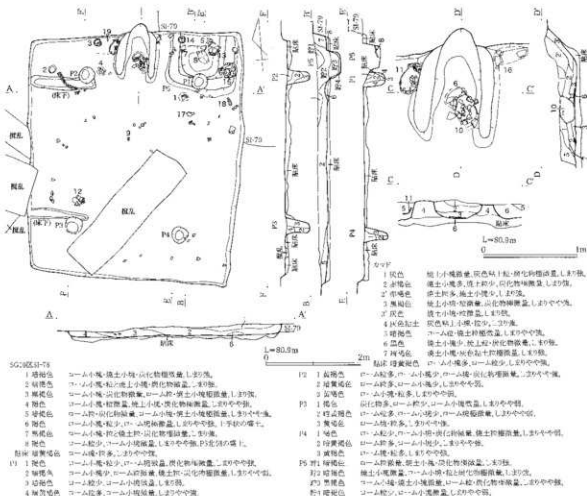
【カマド】北壁の中央にあり、両袖幅94cm、煙道先端から袖先端まで125cm。煙道の奥壁にも貼床土を施している。灰色粘土のカマド4層で貼床上に袖を作る。燃焼部の火床面には脚裾部を失い倒立した高杯(6)

を支脚にし、その上に掛けた土師器甕(10)が南側へ倒れて出土した。これらと一緒に高杯(5)の杯部・脚裾部破片も出土している。カマド西袖の西側には土師器甕(11)が1個倒れている。

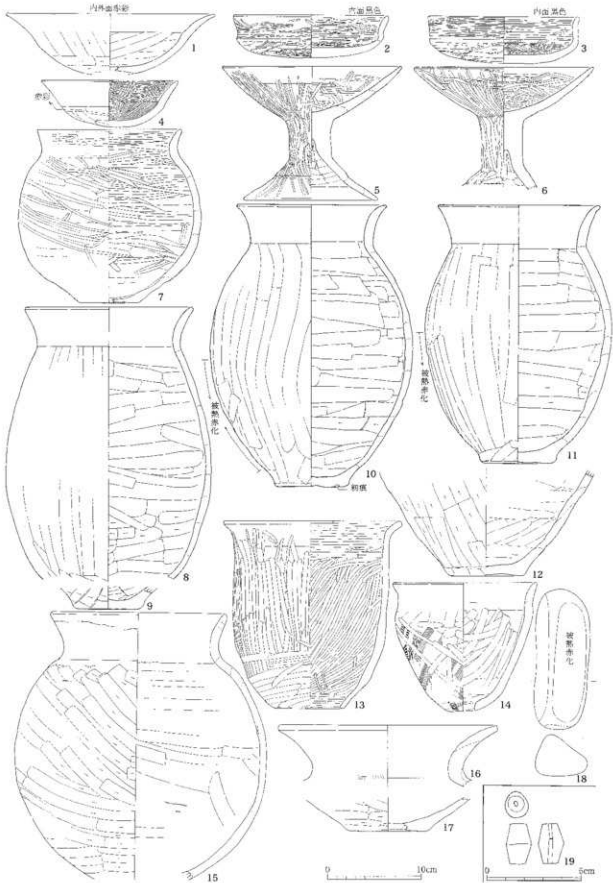
[覆土]自然埋没と思われる。貯蔵穴の部分はかなり遅くまで窪地として残っていたことが土層断面でわかる。各層に焼土と炭を少しずつ含む。テフラの層や粒などは認められない。

[遺物出土状況]カマドの項で説明した遺物以外ではP5周辺に遺物が多い。P5内に完形に近い甕(8)と甕(13)、P5東側床面に壺(15)、P5北西の床に倒立した小形瓶(14)がある。北東主柱穴P1の南にある1・17は床面からかなり深く。北西部で床から1cm以内のレベルに完形の杯が正位である(2・3)。P2の西では床上10cm以内で炭化材が1本出土した。P3の北では床上7cmに甕片がある(12)。

[出土遺物]甕以外の土師器は橙色胎土が目立つ。大形(1)と通常(4)の赤彩杯があり、1は高杯の可能性もある。2と3は内面黒色処理の同工品で、口縁を意図的に同程度欠いたのかもしれない。南のSI-70・74などに似た内面黒色処理の杯がある。漆仕上げの杯は直立口縁と外傾口縁の小片が数点だけ見られた。5・6は中期末より少し長脚化している。図示以外の杯・高杯・甕は小破片だけである。土師器甕はいずれも半周前後の破片から図上復元したもので、胴径が口径より大きい。初圧痕のある土師器(10)は、SG10区SI-50などに例がある。13は外面まで密に磨く大形甕。16は厚く重い大形甕。図示以外の土師器合計347片・3.325gの内訳は、杯94片・564g、高杯18片・175g、壺甕類233片・2,546g、甕2片・40g、甕破片がやや多く、口縁部でみると図示以外に4個体分ほどある。埋木製の甕玉(19)は、古墳後期に出現する畿内系の玉と考えられている(大賀2002,pp.313,320)。SG10区SI-20に土製甕玉がある。



第119図 権現山遺跡 SG10 区 SI-78(1)遺構



第120図 権現山遺跡SG10区SI-78(2)遺物

第68表 権現山遺跡 SG10区 SI-78 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (mm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師 杯	口 径 22.0 高 残 6.4	外面は体部に縦位と底部に横位のヘラズリ。内面体部ヨコヘラナズリ。内外面口縁部にヨコナズリ。内面全面赤褐色。 [注記]44, 45, 北東, SI-78-79 上面	7.5YR7/4 に近い黄褐色 胎土・黒・透明釉～細粒と白・赤褐色 少 やや破毀	北東部床上 7～14cm が 残存は左欄
2 土師 杯	口 径 16.0 高 4.5 最大 16.3 重 残 29.25	外面の口～体部に縦位あり。内外面口縁部ヨコナズリ後ヨコヘラミナギ。外面は底部に多方向と体部に横位のヘラミナギ。内面は底部に1方向または多方向と体部に横位のヘラミナギ。内面に灰黒褐色の黒色焼成。土と同上品。	10YR5/1 赤灰 中や破毀 白・透明釉～細粒 少 や破毀	北西部床直上 口 5.6 周 2
3 土師 高 杯	口 径 15.6 高 5.0 最大 15.9 重 残 31.51	外面の口～体部に縦位あり。内外面口縁部ヨコナズリ後ヨコヘラミナギ。外面は底部に1方向と体部に横位のヘラズリ後、多方向ヘラミナギ。内面は底部のヘラミナギが使用により磨耗して消え、体部にヨコヘラミナギ。内面に灰黒褐色の黒色焼成。土と同上品。	10YR7/4 に近い黄褐色 中や破毀 白・透明釉～細粒 少 や破毀	北東部土 1cm 口 3/4 周 1
4 土師 杯	口 径 14.5 高 4.9	外面は底部～体部に多方向と体部上面に横位のヘラズリ後、口縁部ヨコナズリ。内面は体部に放射状と口縁部に横位の密なヘラミナギ。外面上半と内面全体赤褐色。[注記]3, 58, 北西, 南東	5YR6/6 橙 細密 赤相～細粒と黒・透明 釉 少 や破毀	北東部床上。カマド下 床土 3cmの1片も接合 口 3/4 周 注記は左欄
5 土師 高 杯	口 径 18.8 高 14.2 脚部 底 14.2	外面は脚部と脚部の間に段を持ち、腹部はヨコナズリ後タテヘラミナギ。脚部はタテヘラミナギ後に密なタテヘラミナギ。杯部ナズリと口縁部ヨコナズリ後タテヘラミナギ。杯部内面は口縁部ヨコナズリ後に杯部全体を中心として横位および多方向のヘラミナギ。脚部内面に中や強いヨコヘラミナギと放射状ヨコナズリ。 [注記]10, 54, 59, 60, K, 南東, 南西, 南東	5YR6/8 橙 細密 赤相～細粒やや多 白・黒・透明細粒少 破毀	野塚穴直上 4cmの脚部 部とカマド下床土 3～ 11cmの杯部・脚部は、 北西部床上 4cmの1片も 接合 口 1/3 周, 脚部 5/12 周, 脚部全周 注記は左欄
6 土師 高 杯	口 径 18.9 高 残 13.1	外面脚部と脚部の間に段になり脚部と口縁部ヨコナズリ。杯～脚部に密なタテヘラミナギと口縁部に少しヨコヘラミナギ。脚部下にナメヘラミナギ。杯内面底部に多方向と杯体部に横位のヘラミナギ。脚内面は脚部縦位の丸い内面にタテナズリ。脚部底ヨコナズリ。	10YR7/4 に近い黄褐色 中や破毀 赤相～細粒やや多 白・黒・透明細粒少 や破毀	カマド下床土 3cmに倒立 して支脚に使用 口～脚部全周 50
7 土師 小 形 甕	口 径 15.3 高 18.3 最大 19.4	外表面はほぼ正方形で、縦横比が約1.5倍程度に仕上げられ、内外面ともに脚部ヨコナズリと口縁部ヨコナズリが認められる。脚部上位の内外面は黒色面が割れて調整不詳。確実な焼成温度は認められない。	2.5YR6/8 橙 細密 赤相～細粒やや少 白・黒・透明細粒少 や破毀	野塚穴北平外周の床面直上 口 1/5 周, 底 1/2 周 48, 50, 51
8 土師 甕	口 径 17.8 高 残 28.8 最大 21.7	外面は脚部タテヘラナズリと側下端ナメナズリ。内面は脚部ヨコヘラナズリと、側下位の横位上げ体部が厚い部分にヨコヘラズリ。内外面の口～頸部にヨコナズリ。外面の全体が焼成して黒色。	10YR7/4 に近い黄褐色 中や破毀 白・黒・透明釉～ 細粒 少 や破毀	北東部野塚穴直上 11cm 口 1/3 周 56, 57, 78-79 上面
9 土師 甕	口 径 21.5 底 残 6.8	外表面は多方向のヘラズリで平底状。外面脚部ナメヘラズリ。内面は口縁に多方向のヘラズリ。焼成・使用前は不明。	7.5YR6/6 橙 中や破毀 黒・透明細粒やや多 白・赤細粒少 破毀	南西部床上 8cmと中央部 床土 7cmの赤 1片が接合 口 1/2 周 底 14, 24
10 土師 甕	口 径 15.7 高 29.7 最大 29.7	外表面は正方形で、縦横比が約1.5倍程度に仕上げられ、内外面ともに脚部ヨコナズリと口縁部ヨコナズリが認められる。脚部下位にヨコヘラミナギと斜位ナズリも認められる。外面脚部下位が焼成赤化し、中や破毀して表面が割れている。	10YR6/4 に近い黄褐色 粗い 黒・透明細粒～細粒と 白・黒・透明細粒～細粒 多 破毀	カマド下 11cm 口 1/2 周, 底 3/4 周 60, 79, 上面
11 土師 甕	口 径 17.0 高 27.3 最大 19.6	外表面はほぼ正方形で、縦横比が約1.5倍程度に仕上げられ、内外面ともに脚部ヨコナズリと口縁部ヨコナズリが認められる。脚部下位にヨコヘラミナギと斜位ナズリも認められる。外面脚部下位が焼成赤化し、中や破毀して表面が割れている。	7.5YR6/4 に近い黄褐色 粗い 黒・透明細粒～細粒と 白細粒やや多 破毀	カマド下床土 3cm, 北東 部床直上とカマド下床土 1.9cmの赤 1片も接合 口 3/5 周, 底 3/4 周 注記は左欄
12 土師 甕	口 径 11.4 底 7.6	外表面は1方向ヘラズリで円底状。外面脚部タテヘラズリ。内面は側部に横位～斜位ヘラズリ後、横位上げ体部が厚くなった部分にヨコナズリ。それよりも上方をヨコヘラナズリ。焼成・使用前は明確には認められない。	5YR5/6 明赤相 粗い 赤・灰色焼成～細粒と白・黒・透明釉～細粒やや多 白・赤少 や破毀	南西部床上 8～9cm 底全周 13, 14
13 土師 甕	口 径 18.8 高 19.7 最大 19.7 重 残 1001	外面は口縁部に横位。側部に縦位と下部に横位の密なヘラミナギ。内面は口縁部と下部部に横位。側部に斜位の密なヘラミナギ。内面全体が少し黒褐色気味で、使用により汚れたものかもしれない。	5YR6/8 橙 細密 赤相～細粒やや多 白・黒・透明細粒少 中や破毀	野塚穴直上 16～22cm, 北西部床の破片と接合 は左欄 口 11/12 周, 底 6/6 周 53, 54, 55
14 土師 小 形 甕	口 径 15.2 高 13.7 最大 23.8 口 径 2.7 重 残 537.0	外面は体部にナメヘラ後ヘラナズリ。口縁部ヨコナズリ。内面は口縁部ナズリ。体部に中や強い縦～斜位ヘラズリ。口縁部ヨコナズリ。	5YR6/8 橙 細密 赤相～細粒多、白・ 赤質 少 破毀	北東部床直上に倒立。 床面～床土 11cmの破片 が接合 口 2/3 周, 底全周 48, 50, 54, 56, 野
15 土師 甕	口 径 18.6 高 残 28.2 最大 26.5	外面側部に横～斜位ヘラズリ。内面側部ヨコヘラナズリ。内外面の口縁部にヨコナズリ。焼成・使用前は認められない。	5YR7/8 橙 中や破毀 赤相～細粒やや多 白・黒・透明細粒少 や破毀	P5 床直上。P5 北西 部の床直上に小片 2点 が接合 口 11/12 周, 底全周 50, 52, 北東, 野
16 土師 大 形 甕	口 径 23.0 高 残 6.5	厚く重い。外面側部タテヘラ後、口縁部内外面ヨコナズリ。側部に粘土を貼り足して補強しながら製作している。焼成化して少量の煤が付着する。	10YR6/4 に近い黄褐色 中や破毀 白・透明釉～細粒 少 や破毀	カマド下床土 12cm, 北 西部床土 8cmの赤 1片も 接合 口 17/12 周 6, 61, K, 野
17 土師 甕	口 径 3.5 底 残 9.0	円板状に突出した底面をヘラズリして円形に仕上げる。外面側部ヨコヘラズリ。内面は底面に調整不詳。	2.5YR6/3 に近い黄褐色 粗い 白・黒相～細粒多、灰 色 少 破毀	北東部床上 4～15cm 底 1/6 周 29, 30
18 石製品 瓦	長 15.8 幅 5.8 厚 4.4	断面が隅丸三角形の細長い自然礫をそのまま利用。全面が焼成し、特に縦位の縁に沿って中や強い縦～斜位ヘラズリが認められる。加工・使用前は認められない。重量 286.6g。	2.5Y7/1 灰白 細密で破毀質安山岩	北東部床上直上 完形 40
19 石製品 重玉	長 2.12 幅 1.31 重 5.1 小径 0.86～0.88	最大径部分に明顯な縦線を持つ。表面に木目縞を現し、縦面に光沢のある黒褐色。内面は0.4～0.20cmの中心部から2.5cm程度に縦方向に割れている。穿孔の状況がよく観察できる。重量 2.55g。	2.5Y2/1 黒期 埋木製	カマド下床直上 は注記参照

SG10区 SI-79 (第121図、写真図版110-111)

【位置】 SG10区北部の23-18・19グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は北・東にSI-80・82、南にSI-114がある。南西部を古墳後期のSI-78に切られる。東端部の床面で確認した時期不明のP-702はSI-79の貼床に覆われていないので、P-702がSI-79を切ると推定される。

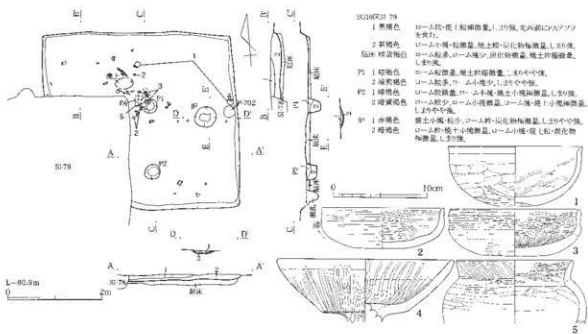
【規模と形状】 少し東西に長い方形の建物跡。柱穴方位を主軸方位とすると、GN-4°Eである。東西4.17×南北3.78m、残存壁高は西壁の北半部で最大23cmあるが、ほとんどの壁は高さ8～10cmしか残っていない。主柱穴は2本で、柱間は南北1.40m。柱穴の形状から推定した柱径はP1が14cm程、P2が20cm程で、床面からの深さはP1=26cm、P2=22cm。入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝はない。貼床は厚さ5cm前後の部分が多く、中央から南東部ではやや厚くなり最大10cm程度である。

【炉】 東部にあり、円形で東西46×南北42cm、床面からの深さ6cm。

【覆土】 自然埋没と思われる。古墳後期初めに降下したHr-FAと見られるテフラが、北主柱穴P1北西で、床から約20cm浮いて覆土上面にまとまって認められた(1層)。竪穴埋没途中の窪地に堆積したテフラ層の最も深い部分が、遺構確認面レベルに少しだけ残ったものであろう。これよりさらに北西では、床面より上へ3～4cmレベルで焼土が見られた。

【遺物出土状況】 中央部で覆土中位以上に遺物がまとまっている。2と3はこの付近に確認されたHr-FAテフラ上面とほぼ同じレベル、5はFA上面よりも僅かに低いレベルにある。床面に近いレベルの遺物は北西部・南東部・東壁部に少量ずつ見られ、1と4が床面上6～10cmで出土した。南北に隣接するSI-79(床付近遺物)とSI-80(残存壁高20cm)に、同個体の大形壺破片があるので、同時に埋没したと考えられる。

【出土遺物】 杯や鉢は橙色の胎土を使い(1・2・3)、上層のFA付近で出土した2と3はよく磨く。2の漆仕上げは、早い時期の事例である。下層出土の1と4を重視すれば古墳中期後葉までさかのぼる可能性もある。遺物はわずかで、図示以外の土師器は小破片ばかりで合計68片・1,074gある。内訳は、杯18片・78g、高杯5片・84g、小形壺5片・100g、壺・甕・甔類40片・812g。超大形壺と見られる厚手の破片が10片ほどあり、北に隣接するSI-80出土破片と同一個体と見られる破片を含む。また、受口状口縁の壺の口縁部片がある。甔破片は少ない。



第121図 権現山遺跡 SG10区 SI-79 遺構・遺物

第69表 権現山遺跡 SG10区 SI-79 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ [cm]・ [g]	特 徴	色調 胎土・焼成 残存素材 (または裏材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 復 14.2 高 6.3 底 3.8	外面部と外面下部はヨコヘラズリで内面に施す。外面口縁部ヨコナデと体部上下ヨコヘラズリ。内面体部はタテ後ヨコヘラズリ後に施す。一部位のヘラミガキ。	5YR6/8 赤赤黒 やや暗黒・白・灰色・透眼 ～細粒やや多、黒細粒少 破片	中央部上 10cm、裏部上 6cmの小片1点も検出 口1.6cm、底全周 4、21
2 土師器 杯	口 復 12.0 高 復 4.3	外面は底部に1方向(内)と体部に横位のヘラズリ。口縁部は内外面にヨコナデ後ヨコヘラズリ。内面体部はタテ後ヨコヘラズリ。外面上下と内面内面に溝を上げ。	2.5YR6/6 暗 やや暗黒・赤黒粒やや多、 白・黒粒～細粒少 破片	中央部上 13～16cm と底部上 14cmの検出 口1.4cm、高 7、12、19
3 土師器 杯	口 復 13.6 高 5.0 最大 復 14.0	外面は体部に横位と底部に1方向のヘラズリと思われるが、磨滅して不明。外面体部と底部にヘラミガキも行った可能性があり、底部に少し認められる。内外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラズリ。内面は体部に放射状と底部に1方向の滑らかなヘラズリ。	5YR6/8 暗 やや暗黒・白・黒・透明～ 細粒少 やや破片	中央部上 17～18cm が検出 口1.4cm、杯底1/3周 13、15
4 土師器 高杯	口 復 18.5 高 残 6.6	外面は杯体部ナデと口縁部ヨコナデ後にタテヘラズリ。杯底部タテヘラズリ。内面は杯体部下部から底面にかけてタテヘラズリ後に、口縁部までタテヘラズリ。杯底面は開放して成形した後に粘土を充填している可能性あり。	7.5YR7/6 暗 やや暗黒・赤黒～細粒やや多、 白・灰色～細粒と黒・透明 細粒少 やや破片	裏部上 6cm 口1.26cm、杯底1/2周 4
5 土師器 鉢	口 復 12.2 高 残 6.9 最大 復 15.1	外面は体部ヨコナデ、口縁部ヨコナデ後ナメヘラミガキと面下端ヨコヘラミガキ。内面は体部ヨコナデ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。使用・焼熱は見られない。口縁部内面に暗褐色灰味に少し汚れる。	2.5YR6/6 暗 細黒・赤黒～細粒と白・黒 細粒少 やや破片	中央部上 14cm 口1.6cm、高1/3周 9

SG10区 SI-80 (第122図、写真図版111・205)

[位置] SG10区北部の23・18・19グリッドと24・18・19グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は北東にSI-86や円筒形土坑SK-550、南にSI-79・82がある。北東の上部を時期不明のSK-555に切られる。

[規模と形状] 小形の長方形建物で、貯蔵穴だけでなく南東部にある点が通常と異なる。主軸方位はGN-5°-E。東西3.48×南北3.82m、残存壁高20～25cm。主柱穴はP1とP2で、穴の平面形は東西軸の隅丸長方形。柱間は1.26m、床面からの深さはP1が35cm、P2が43cm。裏込土が残り、柱痕径は約10cm。

北側にあるP3(98×100cm)とP4(82×74cm)は、どちらも方形の掘り込みで床面から深さ10cmしかないので、貯蔵穴と考えるのは疑問である。南東部にある貯蔵穴P5は東西68×南北64×深さ13～17cm。P5の西側にあるP6は床面からの深さ15cm。P6の南側には土手状の盛土があり(断面図F-1)の2層、幅27～40cm・床面からの高さ5～8cmで、平面図の破線(P5南側からP7に向かうライン)よりも東側は地山ローム層を掘り残して作っている。P7は西から東側に向かってオーバーハングするように掘り込まれている柱穴状土坑で、床面からの深さは21cm。

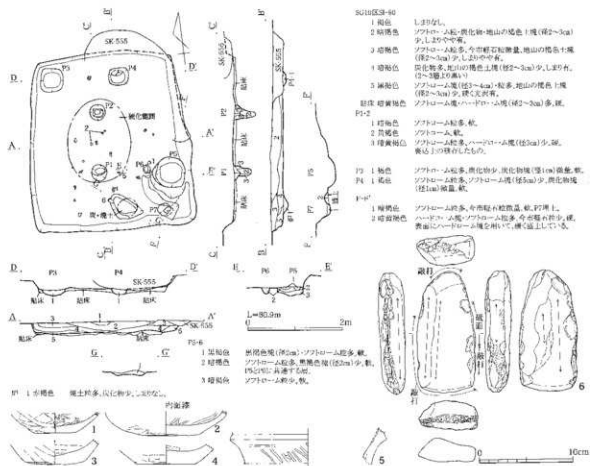
掘方はやや深さに差があって底面に緩い凹凸を持ち、暗黄褐色のロームで厚さ約10cm以内の貼床を行う。主柱穴2本の中間部と周囲で床面のローム土が非常に硬くなっている。壁溝や間仕切溝はない。

[河] 南壁際の東部にあり、東西74×南北44cm、床面からの深さ3～4cm。

[覆土] 自然埋没状である。古墳後期初めに降下したHr-FAと見られるテフラが、竅穴の中央部で覆土上面に少量まとまって見られた。竅穴埋没途中の窪地に堆積したテフラ層の最も深い部分が、1層より上の遺構確認面レベルに少しだけ残ったものであろう。床面直上よりも少し上方の4層に炭化物を多く含む。他に炭化物がP3とP4、焼土がP7の覆土に含まれている。縄文草創期に降下した今市軽石が3層に混入している。

[遺物出土状況] 西部で床からやや高いレベルに、中央部ではやや低い位置に遺物がある。南北に隣接するSI-79(床付近遺物)とSI-80(残存壁高20cm)に同個体の大形壺破片があるので、同時に埋没したと考えられる。南東にあるSI-82と遺構間接合する土器があり、SI-80出土破片が高いレベルにあるので、わずかに先行するSI-82の遺物がSI-80の覆土に流入したと考えられる(SI-82の遺物2などを参照)。古墳時代の円筒形土坑SK-550と遺構間接合した土師器(杯・小形壺)が南東部と南西部に計3例あるので、SI-80とSK-550は同時に埋没した可能性がある。遺構間で接合した土師器杯は、破片の大半を出土したSK-550の遺物として図示した。

[出土遺物] 遺物は少なく、小破片ばかりである。壺甕類が多く杯鉢類もあり、高杯や甕はない。内面を



第122図 権現山遺跡 SG10 区 SI-80 遺構・遺物

第70表 権現山遺跡 SG10 区 SI-80 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高 残2.2 底 復4.4	外底面は円筒方向のヘラズリで平底状。外面体部に横～斜位の強いヘラナズリで、中央ヘラズリに近い。内面は底面に多方向と斜位のヘラミガキ。出土レベルの記録だけがあり、平面図や土質調査は不詳。	7.5YR6/6 橙 鉄質・白・黒・透明細粒少 硬質	南東部床土23cm 底1/3間 20
2 土師器 杯	高 残2.5 底 15.4	外底面は1方向円ヘラズリで、中央が狭く凹む。外面体部に横～斜位ヘラナズリ。内底面は多方向ヘラナズリ後ヘラミガキ。内面が弱色で漆仕上げと思われる。 1注記 14、6、23、A-A'ベルト西端、B-B'ベルト、トレンチ西半分、北西区	5YR6/8 橙 やや軟質 赤黒～細粒やや少 白・黒・透明細粒少 やや軟質	中央部床土14～19cm が接合 底全周 注記は左欄
3 土師器 瓶	高 残2.7 底 復4.4	外底面は多方向ヘラズリで凸面状。外面側下位ナメヘラナズリ。内面はヨココヘラナズリ。	7.5YR6/4 土赤～暗 紅・白・透明細粒やや 多、白濁少 やや硬質	西平部中央 底1/3間 A-A'トレンチ西半分
4 土師器 壺	高 残2.1 底 復6.2	外底面はおそらくヘラズリで平底。外面側下位ヨコヘラズリ。内面側下位ヨコヘラナズリ。全体が焼熟して黒く、外面は黒く保たまたは炭素分が完全に見られる。	5Y6/1 灰 やや粗い 白・透明細粒～細粒 と黒細粒やや多 軟質	南東部 底1/3間 2～4層、A-A、A-A' トレンチ
5 土師器 大形壺	高 残3.9	口～頸部間の外面を袋帯状に隆起させて、その上を受口状口縁にしていたと考えられる。頸部外ヨコナズリ後ナメヘラミガキ。内面はナズリと考えられるが、剥落して調整不詳部分が多い。	7.5YR7/6 橙 鉄質 灰褐色胎土と白・黒・赤 細粒少 やや硬質	南東部 底11cm 底1/3間 12
6 石器 砥石 砥石 砥石	長 12.6 幅 6.2 厚 2.9 重 335.7	隅丸長方形の扁平な自然礫の外周面の多くを砥打に使用し、そのうち一部だけは砥打の後に砥面に使用している。砥打に伴って両平面に割傷が生じている。左側の平面の左半部と右側面、右側の平面の中央部と右縁部を研削によく利用して平滑化している。	2.5Y3/1 灰 鉄質で非常に硬質なホルンフェルス	南東部 底1.6m 完形 17

よく磨く橙色の杯(1・2)からみて、中期後葉～中期末ころの可能性がある。2は漆仕上げとしては早い時期の事例。5のような受口状口縁の壺は、SG10区ではSI-19aなどにある。図示以外の土師器合計51片・441gの内訳は、杯13片・44g、壺類38片・397g。硬質緻密なホルンフェルス製の砥石(6)は、SG10区ではSI-12などにある。5～10cm大の自然礫が少量ある。縄文中期の加曾利E式土器片も混入していた(『東谷・中島地区遺跡群』10, p.83の228)。

SG10 区 SI-81 (第 123 図、写真図版 112・205)

〔位置〕 SG10 区北部の 23-19 グリッドにある。同じく古墳後期の遺構としては、北に SI-84、西に SI-78 がある。時期不明の SK-613 に西側を切られ、近世の SD-503 に東端を切られる。

〔規模と形状〕 方形で、主軸方位は GN-10°-E。東西 4.46 × 南北 4.57m。残存壁高がかなり高く、最大 50cm (北西隅付近)、最小 33cm (南壁東部)。主柱穴 2 本の柱間差は東西 2.03m。柱径 10 ~ 15cm、床面からの深さは P1=11cm、P2=16cm で、柱穴としては非常に浅い。入口施設と考えられる P3 は 2 個が連結した形で南北 60 × 東西 34cm の浅い穴が同時に埋没し、床からの深さは P3 北が 23cm、P3 南が 15cm。貯蔵穴はない。壁溝の深さは 1 ~ 5cm で、北半部は貼床除去後に掘り方で確認したが、本来はすべて床面から掘られていたものという現地調査の所見がある。間仕切溝はない。カマド東袖の南東に接する部分の床面が周囲よりも約 5cm 高い。掘り底面は、周囲よりも北西隅部が 3 ~ 5cm 低く、南西隅部が 4 ~ 8cm 低くなる。

〔カマド〕 北壁の東部にある。両袖幅 97cm、煙道先端から袖先端まで 111cm。暗灰色土で構築した袖の基部が、壁面から北側へ掘った掘り内まで入り込み (カマド断面 A-A')、この箇所では竈穴貼床土やカマド整地土 (5 層) が見られない。カマド構築材と考えられる被熱した河原石 3 点が南方で出土した (15 ~ 17)。

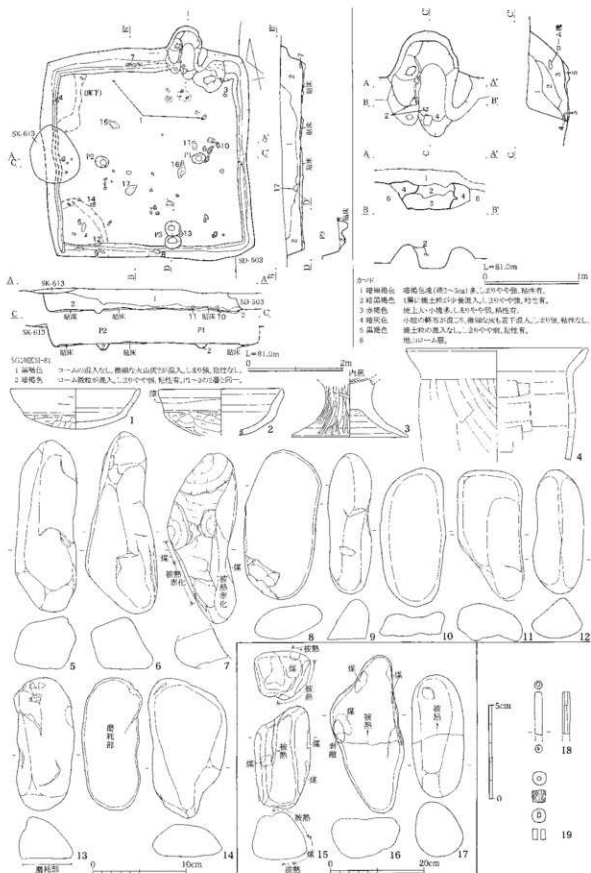
〔覆土〕 自然埋没状。上層に含む微細なテフラは、古墳時代テフラが二次的に流入したテフラ粒であろう。

〔遺物出土状況〕 北西部は遺物が少ない。西半では床からかなり浮いたレベルに、東半では比較的低いレベルに、遺物が多い傾向がある。床面の遺物はごく少ない。カマド南側の床上 8 ~ 22cm に残存度の高い杯 1・2 がある。茨城県産の甕 (4) は、カマド床付近と北西部床上 40cm で各 1 片、北西部で 8 片出土した。自然石のカマド構築材 15 ~ 17 は中央部の床上 5 ~ 11cm にある。編物石は床上 10cm 以内が多いが、9 と 12 はやや浮く。玉 18 と 19 は出土地点不詳で、竈穴覆土を掘り上げた 2000 年 2 月 7・8・10 日のうち 8 日にカマド西側で白玉、10 日に出土位置不明の管玉が出土したので、竈穴中 ~ 下位の遺物であろう。

〔出土遺物〕 内罎口縁杯 (1・2) の出現期である。炭素吸着で内面を黒色処理する高杯 (3) の脚がまだ長いので古墳後期末頃。4 は金色に発色する雲母が多い茨城県産の甕。雲母片を含む土師器は SG10 区 SI-12 他にある。図示以外の土師器合計 1,337 片・7,707g の内訳は、杯 475・1,960g、鉢 1 片・21g、壺 866 片・5,714g、甕 1 片・12g。滑石製白玉と両面穿孔の碧玉製管玉は、古墳中期の混入品か伝世品であろう (18・19)。滑石製白玉・管玉は SG10 区 SI-30 他にある。編物石らしい自然礫が多い。13・14 は砥石や台石に使ったらしい。長さ 21 ~ 33cm の 15 ~ 17 はカマド構築材と推定される。

第 71 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-81 出土遺物

番号 種類 図種	大きさ (mm・g)	特 徴	色調 胎土・顔料 (または素材)	出土状態 残存状況 注記
1 土師器 杯	口 13.7 高 4.2	外面は口縁部ヨコナデ後に底部 1 ~ 2 方向と体部横位のヘラケズリ。内面は底面に多方向ナデ。口一内部にヨコナデ。透仕上げは見られない。 [注記] 16、南東、北(ベルト)	10YR8/3 浅黄褐色 やや暗紺 白磁~細粒と黒炭 粉や少多、赤紺~細粒と透明 細粒少 空や軟質	北部床上 22cm と北東部 床上 8cm が報告 口 3.4 片 注記は左欄
2 土師器 杯	口 覆 13.0 高 覆 5.0	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は口~体部ヨコナデ。 外面と内面全面に透仕上げ。 [注記] 12 カマド、南東、南西、北東、表裡	10YR6/4 に近い黄褐色 細粒 黒炭少	カマド床上 20cm 口 7/2 片 注記は左欄
3 土師器 高杯	高 残 6.2 脚長 12.4	外面は脚部タテヘラケズリと脚部ヨコナデ後、全体をタテヘラミガキ。杯内面は多方向の細なヘラケズリ。脚内面は斜一横位ナデの後に脚部ヨコナデ。杯底内面に炭素吸着の黒色処理。	2.5YR6/4 に近い黄褐色 細粒 白磁粒と白・黒・透明 細粒少 硬質	カマド床上 16cm 脚部全長、脚部 1/2 両 58、北西、北東
4 土師器 甕	口 覆 19.0 高 覆 12.0	やや浮く。外面胴部に縦~斜位ヘラナデ、内面胴部にヨコヘラナデ。内外両面ヨコナデ。茨城県産。 [注記] 2、(カマド)、カマド一括、北西、北東、北(ベルト)、東(ベルト)	5YR 4/6 赤褐色 粗粒・白磁粒と金色雲母粒~ 細粒多、透明細粒と白・黒炭 粉少 空や軟質	北西部床上 40cm とカマド 床土 5cm が同個体 口 1/3 片、蓋 1/6 片 注記は左欄
5 石器 編物石	長 18.1 幅 6.5 厚 3.5	断面が扇形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 811.8g。	5Y8/2 オリーブ灰 空や粗粒で硬質な波紋状	南部床上 5cm 完形 17
6 石器 編物石	長 19.2 幅 7.7 厚 6.8	断面が扇形四方の自然礫をそのまま利用。因の上部が厚く、下部は厚さ約 3cm まで薄くなる。加工・使用・被熱痕は見られない。重量 918.5g。	5Y8/2 灰白 細粒で硬質な安山岩	東部床上 4cm 完形 52
7 石器 編物石	長 17.8 幅 7.4 厚 残 4.6 重 残 498.0	く、の字部に曲った縁状の自然礫をそのまま利用。同示した面に広く割れ面があり、因にリングを入れた 3 面は打撃により剥離している。この対面も全長の約 1/2 厚が割れ面。割れ面も含めて全体が被熱劣化し、僅ち少量ずつ各所に見られる。使用痕は不明。	5G7/1 明オリーブ灰 細粒で硬質な安山岩	北部床上 2cm 一部欠 6
8 石器 編物石	長 15.7 幅 8.2 厚 3.5	扁平な自然礫を荷用。因の上下部分が剥離し、因の反対面には剥離がない。人字の字部に曲った縁状の自然礫をそのまま利用。加工・使用・被熱痕はない。扇形に薄く 2 割に割れた状態で出土。重量 662.2g。	5Y6/1 灰 わずかに多角気味で硬質な安山岩	南部床上土 3cm 以上 33



第123図 権現山遺跡SG10区 SI-81 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

9 石源 燼物石	長 14.8 幅 4.6 厚 4.2	断面が小等三角形で中央が少くびれる自然礫をそのまま利用。面の反対面は、断面図に示したように原理に沿った平坦な割れ面。加工・使用・焼熱面は見られない。重量 374.7g。	25Y6/3 に赤い黄緑色の破質な流紋岩	南部床上 22cm 完形 22
10 石源 燼物石	長 14.6 幅 6.9 厚 3.8	厚さ約 2～4cm の扁平な自然礫をそのまま利用。両面はかなり凹凸を持つ。加工・使用・焼熱面は見られない。重量 369.9g。	25Y6/2 灰黄破質で破質な流紋岩	南部床上 1cm 完形 53
11 石源 燼物石	長 13.6 幅 6.9 厚 4.5	断面が小等多角形の自然礫をそのまま利用。面の下部端は少し削削している。これ以外に加工・使用・焼熱面は見られない。残存重量 468.2g。	25Y6/2 灰黄破質で破質な流紋岩	南部床上 1cm 完形 55
12 石源 燼物石	長 13.1 幅 5.3 厚 4.5	断面が扇形の自然礫をそのまま利用。加工・使用・焼熱面は見られない。重量 377.4g。	25Y6/2 灰黄破質で石質黒色の目立つ流紋岩	南部床上 17cm 完形 21
13 石源 燼物石 または 磁石	長 14.0 幅 6.4 厚 4.3 重 470.6	断面が扇状三角形で、片面が非常に平らな形の自然礫を利用。平坦な面は全体を研磨を利用して明瞭な光沢を持ち、石材が硬いので磨痕は見えない。加工・焼熱面は見られない。	25Y5/4 黄褐色破質でやや軟質な流紋岩	南部床上 9cm 完形 44
14 石源 燼物石 または 白石	長 14.7 幅 8.2 厚 3.8 重 560.7	厚さ約 2～4cm の扁平な自然礫をそのまま利用。加工・使用・焼熱面は見られない。燼物石と考えるには重心が一端に偏っていて扁平なので、白石と考えたほうがよいのかもしれない。	5Y7/2 灰白流紋岩でやや軟質な流紋岩質凝灰岩	南部床上 9cm 完形 19
15 方マド 燼物石	長 21.5 幅 11.8 厚 10.2 重 354.9	断面が扇状三角形で、厚さ 9～10cm の自然石をそのまま利用。長側面全体の約半端部分がやや明瞭に焼熱面化し、赤化範囲の所々に僅も見られる。残存重量は赤化していないので、方マド燼物石に覆われたか、または次の当らない側に向いていたと考えられる。	25Y7/2 灰黄緑色の破質な流紋岩	北西部床上 11cm ほぼ完形 8
16 方マド 燼物石	長 33.2 幅 15.5 厚 9.6 重 580.0	断面が扇状長方形で、厚さ約 7～10cm 前後の自然石をそのまま利用。赤化部分が明確で、全周にわたって同様に見られる。石の半分ほどには見られる。従って各所に散見される。下半部を埋めて焚口の補石に用いたことが想定される。	25Y6/3 に赤い黄緑色の破質な流紋岩	南部床上 8cm 完形 41
17 方マド 燼物石	長 25.8 幅 10.9 厚 11.8 重 440.0	断面が扇形で面の半前縁が厚くなる形の自然石をそのまま利用。全周にわたって面の上半部がやや明瞭に焼熱面化し、赤化範囲の所々に僅も見られる。下半部を埋めて焚口の補石に用いたことが想定される。	25Y6/3 に赤い黄緑色の破質な流紋岩	南部床上 5cm 完形 31
18 菅玉	長 22.04mm 径 3.78 ～ 3.86mm	断面と小口を丁寧に削いて光沢を持つ。両面から穿孔する。小口が残っている側で孔径 1.75mm、反対側の折れ面で孔径 1.48mm。残存重量 0.49g。	5G5/1 緑灰緑色の良質な碧玉	片端折損、断面に納磨痕 000210
19 石製燼物品 白玉	長 6.00mm 径 7.20 ～ 7.35mm 重 0.56	両小口面は平滑に研磨してほとんど磨痕を残さない。断面は穿孔と同じ方向に斜に研磨を残す。片面から穿孔して両面に穿孔跡を生じる。孔径は断面と小口径ともに 1.90mm。	10Y4/1 灰緑色の破質な滑石	完形 000208

SG10 区 SI-82 (第 124 図、写真図版 112)

【位置】SG10 区北部の 23-19 グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は北に SI-80・84・86、西に SI-79 がある。重複する遺構はない。西半が大きく削平され、西壁推定位置付近に方形掘戻坑がある。

【規模と形状】西半部はほとんど削平されているので不明瞭だが、方形の建物跡と推定した。主軸方位は GN-9°-E。東西は残存 3.6m 以上、南北 3.62m。壁の残存高は北東部で最大 10cm あり、南東部では 5cm しかない。柱穴・入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝はない。

【火処】不明である。

【覆土】残存する覆土が薄い南西部を避けて、竪穴中央よりも北部と東部に土層断面観察ベルトを設けた (A-A' と B-B')。上下 2 層が薄く残る。北部と東部の堆積は自然埋没状である。テフラの層や粒などは認められない。

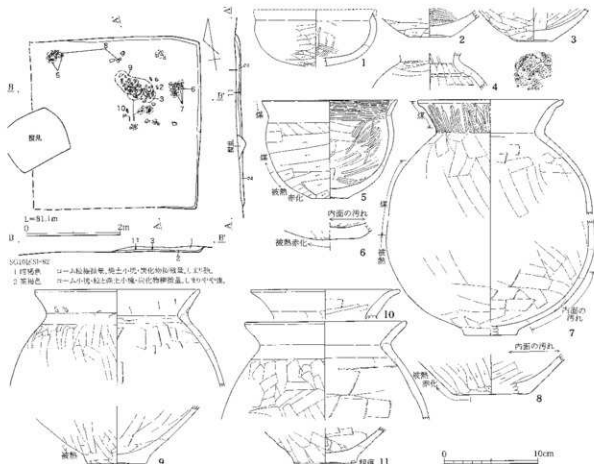
【遺物出土状況】竪穴の残りが浅いので、遺物はすべて床に近いレベルにある。北東部に多い。東部では床から数 cm 浮いたレベル (6・7)。西部ではより低いレベルに遺物がある (5・8)。2 は SI-80 の床上 19cm 出土破片と SI-82 の床上 5cm 出土破片が接合したもので、SI-82 の遺物が SI-80 に混入したと考えられる。

【出土遺物】丸底でやや浅い杯 (1) と、凹底でやや深くなりそうな杯 (2・3) がある。7 と 9 は好で使用した痕跡のある土師器甕。糊圧痕のある土師器 (11) の類例は、SG10 区 SI-50 などにある。図示以外の土師器合計 181 片・1.959g の内訳は、杯 61 片・268g、壺蓋類 120 片・1.691g。

第 72 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-82 出土遺物

番号 種類	大きさ (mm・g)	特 徴	色調 肌土・施成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高 径 5.7 最大 径 12.8	外面は丸縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラナデ、底外縁ヨコヘラナデ。外底面に平行線状の凹線 2 本あり。内面は体部ヨコヘラナデに疎なタテヘラミガキ。底部多方向ヘラミガキ。	5YR6/8 赤 やや軟質 白・黒細粒や或少 赤・透明細粒～細粒少 やや破質	南東、南西上 部 1/8 周、体 1/6 ～ 1/12 周 上面、南東一括、南西一 括
2 土師器 杯	底 4.3	外底面は鋭い凹状で 1 方向ヘラナデ。外面体部ヨコヘラナデ。内面はヨコヘラナデに底面 1 方向、体部斜角の密なヘラミガキ。 [注記] SI-80 19、SI-82 5	7.5YR6/4 に近い やや軟質 白・黒・透明細粒 や赤多、白・赤・透明細粒少 やや破質	SI-82 北東部床上 5cm と SI-80 の P5 西成 1.15cm が接合 底 1/2 周 注記は左欄

3 土師器 杯	高 残3.5 底 3.8	外底面は雑なナデまたはハケメで凹状。外面体部ナメハラナデ後に下底ヨコヘラズリ。内面はタテハラナデで、狭くヘラズリ状に施すものが多い。	5YR5/4 に近い赤褐色 やや粗い。白練と白・赤 彩～細粒少 やや軟質	北東部床上3～5cmが 接合 底5/6周 21～23
4 土師器 小形甕	高 残4.0 底 6.3	外面は前部ヨコヘラナデ後、頭部タテハラミガキが頸下端に当たった 細線と並ぶ状態が見られる。内面は前部に粘土織み上げ面を現してコ ビヤエニ、頸部ナデ後タテハラミガキ。	7.5YR5/8 明褐色 やや粗い。白・黒・透明細粒 やや多。白・透明細粒と赤細 粒少 やや軟質	表縁3片と遺構確認面 の1片が同一個体 頸2/3周 上面、表縁
5 土師器 鉢	口 14.2 高 10.4 底 3.8	外底面は雑な多方向ヘラズリ。外面体部斜位ナデ後、中位以下ヨコヘラズ リ、体部下底斜位ヘラズリ。内面体部斜位ヘラズリ後、不規則にままと する斜位ヘラミガキを複数箇所に行う。内外面口縁部ヨコナデ。外面下位が 焼熱赤化し、中位以上は黒付着する。	5YR6/4 に近い暗 やや粗い。白練～細粒と黒・ 透明細粒少 硬質	北西部床直上 口1/2周、底全周 56, 59
6 土師器 甕	高 残1.8 底 5.2	外底面は多方向ヘラズリで平底。外面胴部は縦位のヘラズリまたはヘラ ナデで、磨光効果のため磨整が不明瞭。内面は底部外周に沿って円周方向 のヨコヘラズリ。外面全体が焼熱赤化し、内面に黒褐色の汚れあり。	7.5YR6/6 暗 やや粗い。白・赤彩～細粒や やや多。黒・透明粗～細粒少 やや軟質	北東部床上6cm 底5/6周 60
7 土師器 甕	口 復15.4 高 推約25 底 復5.4 最大 復22.0	外底面は多方向ヘラズリで平底。外面は胴部に縦～斜位ヘラナデ。内外面 口縁部はヨコナデ後に外面タテハラミガキ。内面胴部に横～斜位ヘラナデ。 外面は底面から頸下まで焼熱赤化し、胴部と口縁部に黒が多付着。内面 胴部下位に暗褐色のコゲ積。 [注記]7～9, 60, 上面、表縁、北西一拵、北西一拵、北西一拵、南西一拵	5YR6/4 赤褐色 粗い。白細粒多、白練と白・ 灰色細粒やや多。黒・透明粗 ～細粒少 やや軟質	北東部床上6～8cm 口1/2周、底1/3周 注記は左腰
8 土師器 甕	高 残4.2 底 7.9	外底面は多方向ナデ。外面胴部タテヘラズリ。内面胴～底部ナメハラズ リ。外面は焼熱赤化し、内面はコゲ層に由来すると思われる黒色。	7.5YR5/4 に近い、暗 やや粗い。黒・透明粗～細粒 やや多。赤細粒と白細粒少 軟質	北西部床直上北内部床 上7cmが接合 底1/2周 54, 58
9 土師器 甕	口 復17.6 高 残16.4 底 6.4 最大 残22.8	外底面は突出する平底で、多方向ヘラナデ。外面胴部タテヘラナデ後に口 縁部ヨコナデ。胴部外周に開示した2箇所の深い明交角あり。内面は底部に 多方向に斜位縦位のヘラズリ。外口～前部に黒付着。外底面が強く焼熱し た可能性が高い。[注記]25, 29, 30, 32, 33, 35～ 40, 42, 44, 45, 64, 66, 67, 表縁、北西一拵、北西一拵、南西一拵	10YR6/3 に近い黄褐色 やや粗い。白練～細粒多 やや軟質	北東部床直上～床上5cm が接合 口2/3周、頸3/4周、 底2/3周 注記は左腰
10 土師器 甕	口 復15.7 高 残3.1	外面は胴部タテヘラズリ後に口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後に 頸部ナメハラナデ。	7.5YR7/4 に近い暗 やや粗い。赤・黒明粗と白・ 透明明粗やや多。灰色練少 やや軟質	中央部床直上 口1/6周、頸1/3周 51, 床付近、表縁
11 土師器 甕	口 復16.8 高 残14.2 底 6.6	外底面は多方向ヘラナデで中央がわずかに凹む。外面胴部に縦～斜位ヘラナ デ後、口～頸部ヨコナデ。内面はヨコヘラナデ後に口～頸部ヨコナデ。外底 面に焼熱圧痕(白)が1箇所ある。焼熱・使用面や痕は見られない。 [注記]14, 20, 24～28, 31～33, 36, 62, 北東、南西一拵、北西一拵、 北東一拵、南西一拵、南東一拵	10YR6/4 に近い黄褐色 細密。灰色練と白練～細粒や やや少。黒・透明明粗少 硬質	北東部床直上～床上4cm 口2/3周、頸3/4周、 底全周 注記は左腰



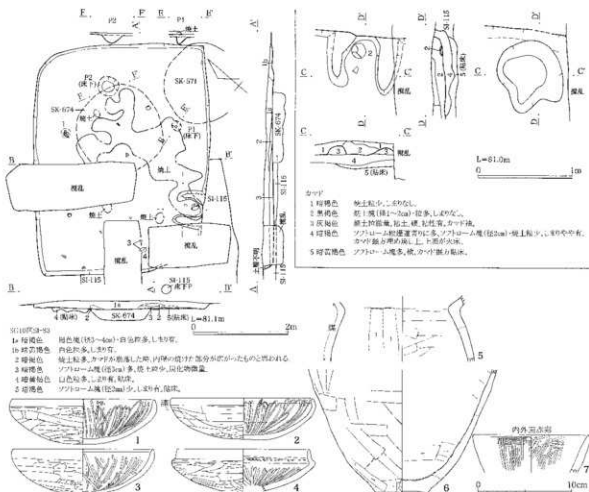
第124図 権現山遺跡SG10区 SI-82 遺構・遺物

SG10 区 SI-83 (第 125 図、写真図版 112・113・205)

【位置】 SG10 区北部の 23-19 および 24-19 グリッド。同じく古墳後期の遺構は、南に SI-81 がある。古墳時代(中期?)の SI-115 を床面近くまで切り、古墳中期の円筒形土坑 SK-571・674 の上部を切る。SK-674 と SI-115 の新旧関係は不明である(断面図 A-A')。長方形複乱坑(近現代の農業関連土坑)に切られる。西隣部で SI-83 より古い倒木痕を切る。

【規模と形状】 北隅がやや丸くなる長方形で、東壁南部にカマドを持つ変わった建物。主軸方位は GN-49°-E。東西 3.76 × 南北 4.91m。残存壁高は 8cm(北隅)～15cm(西隅)。床面で確認できなかった柱穴 P1 と P2 が貼床除去で認められ、いずれも浅いので主柱穴とはみられない。P1 は直径 20cm × 床面からの深さ 16cm、P2 は直径 41～43cm × 床面からの深さ 16cm。柱穴の土層断面は記録されていない。入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝はない。入口施設と貯蔵穴は南部の長方形複乱坑に破壊されたことも考えられる(断面図 A-A')。床面はおおそよ平坦であるが、北壁から約 50cm の範囲が一段高い平坦面になる。断面図 A-A' の北端部を地山まで断ち割って調査した結果、この部分に貼床を高く貼ったのではなくて地山を掘り残していることが判明した。

【カマド】 東壁の南部にある。両軸幅は推定 80cm。煙道先端から袖先端まで 62cm。灰褐色粘土(カマド 3 層)を貼床上に貼って袖を作る。火床整地土(カマド 4 層)で煙道先端部のカマド掘方を埋め戻し。完成した煙道は東壁の外へ突出しない。煙道部の火床面に伏せた状態の土師器杯がある(2)。南側にカマドを持つ建物は、SG10 区 SI-72 にある。



第 125 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-83 遺構・遺物

【覆土】自然埋没と思われる。覆土1層中の白色粒は古墳時代テフラの可能性もある。カマドから流出したとみられる焼土が中央部から東部の床面に広がっている(2層)。

【遺物出土状況】遺物は全域で少量ずつ認められた。残存度の高い杯を伏せた状態のものが、床から数cm浮いた状態で、南西部(4)とカマド内(2)にある。遺構間で接合した古墳中期の混入遺物として、SI-81覆土中の小片と接合した赤彩小形壺片(7)や、西側にあるSK-621の須恵器脚付壺と接合した破片がある。

【出土遺物】遺物は少ない。土師器は杯・甕片が多い。浅い身模倣形杯(4)と深い半球形杯(1~3)が中心で、漆仕上げ(2)はごく少なく、大半の杯破片はミガキ調整である。土師器裏は長胴と見られるが、全形は復元できない(6)。図示以外の土師器合計242片・2.155gの内訳は、杯99片・722g、鉢2片・13g、壺甕類141片・1.420g。古墳中期の混入遺物もあり(7)、先行する時期の重複遺構(SI-115やSK-571・674)や周辺遺構(SI-81など)からの流入品と見られる。北西に隣接する古墳中期の円筒形土坑SK-621および古墳中期土坑SK-553aと同一個体の須恵器脚付壺がSI-83の遺構確認にも1片あるが、混入品であろう(第180図15)。

第73表 権現山遺跡SG10区SI-83 出土遺物

番号 種類 部材	大きさ [cm]・[g]	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径15.0 高 5.8 最大 復15.6	外面は口縁部ヨコナデ。底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ。全体に放射状ヘラミガキ。漆仕上げは現状では認められない。	5YR5/6 緑 やや暗黒 黒・透明釉～細粒 やや多。白・灰系粒～細粒 やや少 やや硬質	北西部と3mとカマド 周辺および1層の破片が 接合 口1/2層 13, A本カマド周辺, B 層1層
2 土師器 杯	口 径14.8 高 4.4 最大 15.4 重 218.7	外面は口縁部ヨコナデ。底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は中位以上に丁寧なヨコナデ。全体に放射状ヘラミガキ。外面上平と内面全体を漆仕上げ。	10YR5/3 に近い黄緑 緑褐色 黒・透明釉～細粒 やや多。灰系粗粒と白細粒 少 破片	カマド火床土6cm 以上 16
3 土師器 杯	口 径14.8 高 4.8 最大 復15.2	外面は口縁部ヨコナデ後。底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は上平部をヨコナデし、口縁部に浅い明な線を作る。内面全体を放射状ヘラミガキ。漆仕上げは現状では認められない。	10YR5/4 に近い黄緑 やや暗黒 黒・透明釉～細粒 やや多。灰系粗粒と白・赤 粒 少 やや硬質	南西部直上～床土3mが 接合 口2/3層 6, 8, イモ穴、イモ穴 2層上
4 土師器 杯	口 径13.8 高 4.4 最大 復15.2	外面は口縁部ヨコナデ後に底部1方向と体部横位のヘラケズリ。内面は口縁部ヨコナデ後に体部を放射状ヘラミガキし、そのヘラが1層部下位に当たった痕跡のある付着をヨコヘラミガキしているが、あまり除去できていない。漆仕上げは現状では認められない。	10YR5/4 に近い黄緑 やや暗黒 白・黒細粒多。透 明釉～細粒 やや多 やや硬質	南西部1.8m 口5/12周 透
5 土師器 小形甕	高 残17.0 径 復12.1	外面側部タテヘラケズリ。内面側部ヨコヘラナデ。外面は割傷が激しく、残った部分には痕が見られる。	5YR5/4 に近い赤黒 粗い。灰系・透明釉～細粒多。 白粒～細粒と黒細粒少 やや硬質	遺構確認面 口5/12周 上面
6 土師器 甕	高 残13.0 径 残 5.5	外表面にはほぼ1方向ヘラケズリで割成。外面側部に横～斜位ヘラナデ後。側下縁に横～斜位ヘラケズリ。内面が割成して調整不評の部分が多いが、上位で斜位ヘラケズリと上位で横～斜位ヘラケズリを確認できる。外面に不明な色粒の付着するところもある。	10YR5/3 に近い黄緑 粗い。白細粒多。白粗粒と黒 明釉～細粒 やや多。赤細粒 少 やや硬質	北西側且坑と東平部 割1/4周。底全周 イモ穴3。北東部。東 平
7 土師器 小形甕	口 径12.2 高 残 4.0	内外面ともに口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。口～側部タテヘラミガキ。明に磨いて丁寧に仕上げる。内外全面を赤彩する。古墳中期後葉の遺物が混入。1注記はAカマド周辺, SI-81	10R4/4 赤黒 やや暗黒 赤黒～細粒多。白 細粒少 やや硬質	カマド周辺, SI-81 出土 の破片1点と接合 口1/6層 注記は左欄

SG10区SI-84 (第126図、写真図版113・114・205)

【位置】SG10区北部の24-19グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は西にSI-86、南西にSE-552がある。SK-550・551・561などの古墳時代の円筒形土坑が周囲に多い。近世のSD-503に切られる。

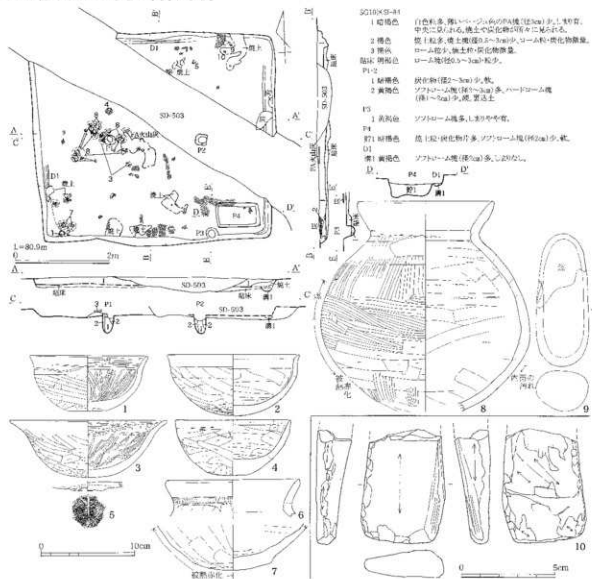
【規模と形状】長方形の建物跡。南に入口施設を確認したわけではないが、主軸を南北方向と考えた場合の主軸方位はGN-2°-E。主柱穴2本を通る東西ラインはGN-88°-W。東西5.26×南北4.52m、残存壁高は南西部で最大25cm、南東隅部で最小5cm。主柱穴は2本の柱間は東西1.96m。柱痕から推定した柱径は16～18cm、床面レベルからの深さは42cm(西側のP1)～46cm(東側のP2)。床面から深さ9cmの浅い柱穴P3は、南壁に接する部分の土が掘り足らなかったために床面では確認できず、貼床除去後に確認した。同様に床面では確認できなかった貯蔵穴P4は南東隅にあり、東西93×南北52×深さ34cmの整った長方形。壁溝D1は床面では確認できなかったが、貼床を除去した後に、貯蔵穴の東側(断面図D-D')や、北辺・東辺の中央部と南東・南西隅部付近で部分的に確認された。壁溝D1の深さは1～10cm。入口施設は不明で、P3を入口の梯子穴と考えるには壁や貯蔵穴に近すぎるであろう。間仕切溝は見られない。

【火処】確認されなかった。中央部に炉（あるいは東壁にカマド）を持っていたのが、SD-503に破壊されたと想定することもできる。

【覆土】炭化材と焼土が覆土中に多く、火災建物と考えられる。SG10区ではSI-66などが火災建物である。覆土は大半が1層で、東・南壁付近が自然埋没状堆積。古墳後期初頭に降下したHr-FAテフラ塊が1層中にあり、中央部に多くまとまる範囲を断面B-B'と平面に示した。西側のSI-86にもHr-FAテフラが多い。

【遺物出土状況】中央部の西半に遺物が多い。北東部・南西部にも見られる。中央部では低いレベル、西部ではやや高いレベルの遺物が多い。南西隅付近の床面で、2点重ねた杯が少し傾いて出土した(1・2)。南壁際にある炭化材は、現地の見所によると断面円形か半円形で、柱材が炭化したものと見られている。ただし、取り上げて現存している炭片を見ると、板状の可能性もある。

【出土遺物】遺物は少ない。残存度が高い遺物(1・3・8)には口が開く内斜口縁杯を含み、図示以外の破片を含めてみると丸底と平底が同数程度で、古墳中期後葉と考えられる。甕(8)は、炉で使ったような使用痕がある。図示以外の土師器合計72片・654gの内訳は、杯23片・135g、高杯3片・14g、小形壺1片・9g、壺甕類45片・496g。杯と壺甕類が主体で高杯が少ない。砥石(10)は緻密硬質なホルンフェルス製で、SG10区ではSI-12などに事例がある。



第126図 権現山遺跡 SG10 区 SI-84 遺構・遺物

第74表 権現山遺跡 SG10区 SI-84 出土遺物

番号 種別 種類	大きさ m ² /g	特徴	色調 胎土・焼成 または素材	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 12.6 高 5.9 底 3.5 重 204.3	外底面は円筒状のヘラズリで凹状。外周下位ナメヘラズリと中位ココヘラズリ。口縁部ココナデと縁ならぬミガキ。内面は体部下部に段状のヘラミガキ。口縁部ココナデ後ココヘラミガキ。外周口縁部に不規則な段が見られる。火災によるものかと考えられる。	5Y80/8 橙 やや暗赤 赤黒粒と白・黒 粒多。灰・赤・透明 黒粒少 やや軟質	南西面床土上に上向き の杯を2枚重ねたうち の1枚はほぼ正立 口5.6前 上
2 土師器 杯	口 13.8 高 6.5 底 2.30	外底面は上位斜行ノデで組み上げ筋を残す。外底面一部にナメヘラズリ。内面は体部ナメヘラズリ。内外面に不規則な段が見られる。火災によるものかと考えられる。	7.5Y80/6 橙 やや暗赤 赤黒粒と白・赤 黒粒多。黒・透明 黒粒少 やや軟質	南西面床土上に上向き の杯を2枚重ねたうち の1枚は正立 形式 2
3 土師器 杯	口 16.8 高 6.0	口～体部境の内面は中や中明。外底面は多方向ヘラズリで丸状。外周下位ココヘラズリと中位ナメヘラズリ。口縁部にやや緩なココナデ。内面は体部下部にナメヘラミガキ。口縁部ココナデ後ココヘラミガキ。内外面に段や焼痕が見られる。火災によるものかと考えられる。	2.5Y85/8 明赤 やや暗赤 白粒・黒粒多。灰 色・透明粒・黒粒と黒細粒少 やや軟質	南西面床土12cmと中央 部床土7cmが接合 口11.7前、重5.6前 口3.19
4 土師器 杯	口 12.1 高 5.8 底 4.3	中や中重。外底面は多方向ヘラズリで、やや丸味を持つ平底。外底面ココヘラズリと口縁部ココナデ。外面上位に横一方向のヘラズリ後、ヘラ先で横一方向の段を全周に入れる。内面はココヘラズリ。内外面に少くも段が見られる。	2.5Y4/1 黄灰 やや暗赤 白・赤・透明 黒粒多。白・赤黒粒と黒細粒少 やや軟質	北西面床土4cm 口11/12.1、重1/2前 21.北西面、SD-503
5 土師器 小形壺	高 9.9 底 3.2	外底面が少し突出して木炭がやや残付く。内面は体部ナメヘラズリ。内面～底部は1方向多方向ヘラズリ。	7.5Y85/4 灰 やや暗 透明黒粒多。白・ 黒・赤黒粒と黒細粒少 やや軟質	北面床土13cm 底全周 39
6 土師器 小形壺	口 径14.2 高 残3.3	外底面は頸部タテハケ後に口縁部ココナデ。肩部タテヘラズリ。内面は肩～胴部を少し窪にした後に口縁部ココナデ。	5Y80/6 橙 やや暗赤 白・黒・透明 黒粒やや少。白粒と赤黒粒と 黒細粒少 やや軟質	土層 口14.1前 土層
7 土師器 杯	高 8.1 底 4.9	外底面は少し突出する凸面状で多方向ヘラズリ。胴外周ナメヘラズリ。内面は底部に1方向または多方向と頸部に横位のヘラズリ。外周が焼熱して艶硬化している。	7.5Y80/6 橙 やや暗赤 白粒・黒粒と黒 透明黒粒多。白粒と灰色 黒粒少 やや軟質	南西面床土14～15cm が接合 口17.2前 3.5
8 土師器 甕	口 14.4 高 残22.2 最大 22.1	外周側1段は緩なココヘラズリ後にタテハケ。胴上位タテハケ後に中位ココヘラズリ。胴下位ココヘラズリ。口～胴部ココナデ。ハケは5～6本/2cmで粗い。内面は胴部ココナデと口縁部ココナデ。外周側下位に焼痕と中位に段がやや立ち立。胴下位へ不規則に付く段もある。内面下位に付く段が付く。 [注記]14, 16, 18, 22～24, 26～30, 41～44, 56, 1層	2.5Y7/2 灰黄 やや暗い 灰色粒と白・灰色 黒粒少や中多。赤・黒・透 明黒粒少 やや軟質	中央部床土7mと西面床 土1～13cmが接合 口5.6前。側はほぼ正立 注記5左
9 礎石	長 14.0 幅 5.5 厚 4.3	断面が扇形の細長い自然産をそのまま利用。一端の1/3位の範囲に段が付着する。別の左側縁部に小形破砕が1箇所見られ、腐付痕後に生じている。 残存重量 512.2g	2.5Y6/3 灰青 緑帯に硬質な安山岩	北東面床直上 ほぼ正立 38
10 石碇 石碇	長 残6.0 幅 4.2 厚 残1.5 重 残55.3	表裏と両側縁の計4面を砥面として使い、平滑に磨削している。縦溝などの磨削面は平滑。裏面の右辺りだけは研削面に粗い平行縦溝の形を明かにしている。各砥面の外周部や裏面の主に下部は、砥面に使う以前の割れ面や粗面が残っている。	5Y6/2 灰青リズ 縦溝で硬質な灰泥産のホル ンフェルス	北東面床土8cm 破片 37

SG10区 SI-85 (第127・128図、写真図版114)

【位置】SG10区南部の台地平坦面、17-16グリッド所在。同じく古墳後期の建物はSI-14が北にあり、東に後期のSI-6と近世のSD-201a・201bがある。古墳中期のSI-13を切る。古墳中期の建物は北にSI-19a・19bがある。

【規模と形状】ほぼ方形で、中軸線はN-18°-E。東西4.29×南北4.52m。残存壁高は0.04～0.05mで、南壁以外はろうじて壁が確認できた。壁が失われた南壁部分も掘方の存在から規模・形状がわかる。カマドの東西両側部分では、先行するSI-13覆土中に掘り込まれたSI-85の北壁をうまく確認できなかった。

柱穴の内、西部と中央部のP15・16はSI-85の貼土を除去した後に確認したもので、埋め戻した古い柱穴か、またはSI-85よりも古い遺構の可能性もある。P15の周囲で掘方底面が深くなることは、P15がSI-85に伴うことを示しているのかもしれない(断面図P-P')。床面レベルからの深さはP15が37cm、P16が28cm。

P15とP16以外の柱穴8本は、SI-85の床面で確認したもので(P6～P12とP14)、SI-85よりも新しい穴を含むかもしれない。深さに違いがあり配置もそろわないので、SI-85の主柱穴を明確に指摘することは難しい。P7・P10・P12の3本は、柱間寸法が2.1mで一定し、建物主軸ともそろっている。しかし、これらに対応する南西主柱穴が確認できず、P12はかなり浅い。P10とP11は柱を建て替えているのかもしれないが、そう考えるにはP11がやや浅いようである。P9が入口ピットと思われる。床面から柱穴底までの深さはP6=41cm、P7=37cm、P8=43cm、P9=24cm、P10=48cm、P11=30cm、P12=18cm、P14=36cm。なお、P1からP5までが欠番の理由は、重複するSI-13の柱穴と現地調査時に区別するための措置である。

北東にある貯蔵穴P13は東西73×南北52×床面から深さ43cm(西側から深さ40cm、東側から

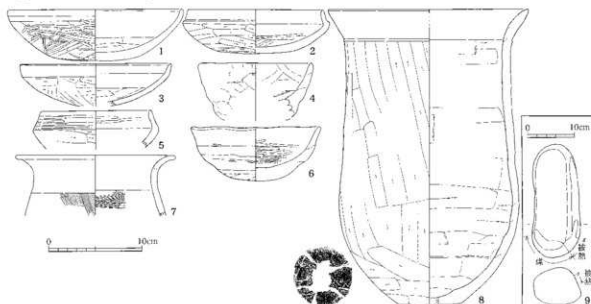
46cm)の楕円形で、覆土は自然埋没状に堆積する。竪穴の掘方底面には細かな凹凸があり、ロームの塊と粒が主体の土層で残存部全体を貼床する。

【カマド】北壁にカマドを持つ。両袖幅76cm、焚口から煙道までの長さは約86cm。燃焼部内堆積土の最下層(カマド4層)は、焼土の混入量がやや少ない。この点から、燃焼部内を人為的に埋めて火床面を高くした層で、カマド火床面の整地土層だと現地調査時に判断されている。しかし、煙道部分やカマド両袖との連続性からみると、当初の火床面はカマド4層下面であった可能性が高い。カマド4層が整地土ならば、最初の火床面に4層を加えて、火床面と煙道底面を高く改造したと解釈できる。カマド燃焼部の最上層に土師器長胴甕(8)があり、カマドに掛けた甕であろう。カマド構築材の可能性のある被熱した石(9)は、「SI-13カマド」の注記があるので、SI-13とSI-85の表土除去時にカマド付近で出土したと考えられる(SI-13にはカマドがない)。

【覆土】カマド部分は覆土が比較的残っているが、それ以外の大半は貼床土しか残っていない。貯蔵穴P13は自然埋没状である(K・K')。

【遺物出土状況】主に北半部と南東部で出土した。北東部では貯蔵穴上面に粗製の杯の破片(6)があり、カマド内に土師器甕(8)と杯(3)がある。これ以外の遺物は、覆土の残りが浅いので、床面近くで出土した。カマド西側に杯(1)、北西部に杯と小形土器(2・4)がある。

【出土遺物】覆土があまり残っていないので、遺物も少ない。杯と甕がほとんどで、粗製土器も2点ある(4・6)。1は白雲母細片を少量だけ含み、茨城県産の可能性もある。雲母を含む土師器はSG10区SI-12などにある。古墳後期末に多いハケ調整甕はふつう粗いハケを使うが、7は細かいハケを使う。8は木葉底。図示以外の土師器合計72片・549gの内訳は、杯34片・138g、高杯5片・42g、鉢1片・27g、小形壺2片・20g、甕甕類30片・322g。SI-13や周辺遺構から混入したと考えられる古墳中期の土師器もある(5・6)。



第128図 権現山遺跡SG10区SI-85(2)遺物

第75表 権現山遺跡SG10区SI-85 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・構成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径17.8 高 5.4	外面は体部ナデ後に底部多方向へウケズリ、口縁部ヨコナデ。体部横～斜位へウミガキ。内面は体～底部ナデと上半部ヨコナデ。内外全面が黒色気味の部分が多く、更に内面は漆仕上げ(?)の可能性もあるが不明確。甕の類は少ない。	2.5Y5/3 黄褐色 白・透明細～粗粒 やや多。灰色粗粒と黒粗粒と 白雲母細片少。軟質	カマド西側床土2cm 口1/3周 1カマド
2 土師器 杯	口 径14.0 高 4.6 最大 径15.3	外面は口縁部ヨコナデ後、体～底部ヨコヘウケズリ。内面は口～体部上半部ヨコナデ、下位～底部多方向ナデ。瓶状で漆仕上げは認められない。	10YR7/4 に近い黄褐色 白・黒・赤・透明粗粒 極少 やや軟質	北西部床土2cm。北部床土5cmにも1片あり 口1/3周 14、18、床下一括、A-A'北1層

第5章 権現山遺跡 SG10 区

3	土師 杯	口 復 16.0 高 残 4.5	やや薄く軽い。外面は口縁部ヨコナデ後、体部下位に多方向と上位に横方向のヘラズリ。内面は体部多方向ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。現状で修正上げは認められない。	75SR6/6 紺 細線 白・透明細粒と白・黒 細粒少 やや軟質	カマド火床土 12cmで黄 銅片と一緒 口 1/8周 4 カマド
4	土師 小皿 土師 最大 小皿 最大	口 復 11.6 高 残 5.8 最大 復 12.2	外面は顔面をユビサエナデで、底面は織み上げ顔とヒビを明確に残す。内面はナメナデで、やはり織み上げ顔を下位に残す。	5SR6/6 紺 やや軟質 赤相・細粒と白・ 透明細粒少 やや軟質	カマド土 1.2cm 口 1/8周 18
5	土師 杯	口 復 11.6 高 残 4.0 最大 復 13.2	外面は体部ヨコヘラズリ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面はヨコナデ後に口縁部中心をヨコヘラミガキ。外面全体に保存好。古墳中期末の遺物が混入。	10YR6/4 濃い黄緑 細線 白・黒細粒やや多。 赤・黒細粒少 やや軟質	北西部床土上 口 1/2周、体 1/6周 17
6	土師 杯	口 復 13.7 高 5.8	厚く重い。外面体部ヨコナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部ヨコヘラミガキ。口縁部のヨコナデが雑なもので、口があまり水平でない。古墳中期末の遺物が混入。	10YR5/2 灰黄緑 やや軟質 赤相粒と白・赤・ 透明細粒やや多 やや軟質	北西部貯蔵穴土 21cm 口 1/4周、底 1/3周 13
7	土師 土師 蓋	口 復 16.8 高 残 6.4	残存部が少ないので復原性は参考程度。外面は胴部に 16.5/2cmの細い縦一列位ハウ調整後、白一頭部にヨコナデ。内面は胴部に同様の細い縦ハウ調整後、白一頭部ヨコナデ。	5SR6/6 紺 細線 白・透明細粒やや少。 赤・黒細粒少 硬質	南東部床土上 口 1/2周 19
8	土師 土師 蓋	口 21.0 高 31.3 底 6.3	外底面は本葉面で、葉の裏面は直の可能性がある。外面は胴部タテヘラズリ後に下位を斜へ横位ヘラズリと下端ヨコヘラナデ。内面はヨコヘラナデで、胴下位の織み上げ体上部にはやや強いヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面胴部に広く縦が付き、下部に目立つ。裏面は不評で、狭い外底面には縦が弱い。	25YR6/2 灰黄 粗い 白・赤・灰色線一細粒 赤・白・透明細粒やや多 軟質	カマド火床 12cm 口 1/3周、底 3/4周 4 カマド、SI-13 カマド
9	自然石	長 23.8 幅 10.1 厚 8.1	断面が楕円形の自然の河原石。全面がやや平滑だが、特定の面を砥面等に使用したと見えるような面はない。一端部が焼熱赤化して腐も見られる。重量 2895.3g。	25YR1/1 黄灰 やや軟質で硬質な安山岩	カマド 元形 SI-13 カマド

SG10 区 SI-86 (第 129-130 図、写真図版 114・115・205・206)

【位置】 SG10 区北部の台地平坦面、24-19 グリッド所在。古墳中期の建物は南に SI-80・82、東に SI-84、南東に SE-552 がある。SK-550・621 などの円筒形土坑が周囲に多い。時期不明の SK-564 に東部を床面まで少し達するように切られ、近世の SD-503 に北西部を切られる。北壁中央部を浅く掘乱に壊されている。

【規模と形状】 長方形の建物跡。東西 4.94 × 南北 3.60m、壁の残存高は最小 17cm (北西部)、最大 27cm (南東部)。入口部を通る南北ラインの主軸方位は GN-13°-W。東西の柱穴軸線 (GN-44°-E) は、縦穴長軸 (GN-47°-E) よりも少し西に振れている。主柱穴は 2 本で、東柱穴 P2 (床面から深さ 48cm) が西柱穴 P1 (83cm) よりもかなり浅い。柱間 2.10m、柱穴底面の径からみて柱径は 16 ~ 18cm 程。入口施設の可能性がある P4 は径 18 × 25cm、床面からの深さ 16cm。

貯蔵穴 P3 は南側中央から少し東に寄り、東西 69 × 南北 72 × 深さ 38cm。南西部の P5 と南東部の P6 は貼床除去後に確認した旧期貯蔵穴。P5 は径 39 × 47cm、床面からの深さ 19cm。P6 は径 38 ~ 42cm、床面からの深さ 19cm で、埋め戻した上に炉 2 が載っている。P6 の埋土中には炉の焼土が入らない。複数貯蔵穴を持つ建物は、SG10 区では SI-6 などがある。間仕切溝は D1 ~ D5 の 5 本で、すべて貼床を除去した後に確認した。D3 の上を貼床で埋めた状況が断面 B-B' でわかる。ただし D3 埋土の特徴は記録不備により不明である。北側 2 本 (D1 と D2) は幅 17 × 深さ 3 ~ 8cm、西側の D3 は幅 9 ~ 14 × 深さ 12cm、南側の D4 は幅 9 ~ 14 × 深さ 10cm、東側の D5 は幅 12 ~ 16 × 深さ 16cm。D5 を埋めた後に炉 1 が作られている (断面図 G-G')。壁溝はない。

【炉】 南東部に 2 箇所ある。北側の炉 1 は東西に長い (71 × 28cm、床面から深さ 4 ~ 11cm)。南側の炉 2 (東西約 40 × 南北 62cm × 床面から深さ 2 ~ 3cm) は、明確な下端ラインを持たない浅い凹みにおいて火を焚いた状態で、周囲の床面に焼土が広がる。旧期貯蔵穴 P6 を埋め戻した上に炉 2 が載る。複数の炉を持つ建物は権現山遺跡北部の SG1 区 SI-1 などにある。

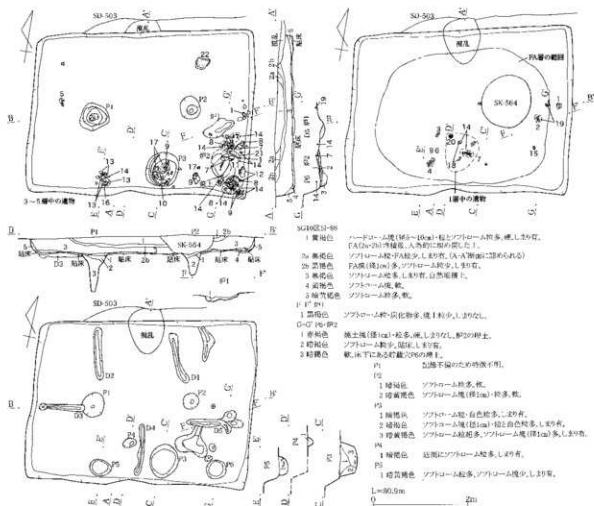
【覆土】 下部は自然埋没で、古墳後期初めに降下した Hr-FA が覆土上部の 2b 層に入る。調査時の所見によると、1 層は人為的に埋め戻されていた。遺構確認プランでは、円形に Hr-FA 層があり、その内側 (上層) がローム質土で人為的に埋められて、後に時期不明の土坑 SK-564 が掘られている。東側にある SI-84 にも Hr-FA テフラが多い。

【遺物出土状況】 Hr-FA 層の上 (18・20) と、FA 層中 (19) にも遺物が少量ある。FA より下層の遺物は貯蔵穴 P3 と南東隅に多い。南東隅部床面の遺物は、P6 を埋め戻した床面とその上方にある。杯・鉢・高杯 (1・7・8) と壺 (9・11) と甕 (12・14・17) と砥石 (21) が南東部にあり、甕 (17) の破片は貯蔵穴 P3 内にもある。7 と 14 に接合する破片は上層にも少し分布している。埋め戻された旧期貯蔵穴 P5 中には甕 (13・

16)、北東部の床面に大きな自然石(22)がある。

【出土遺物】遺物は比較的多い。土師器壺甕類と杯が多く、高杯は少ない。これ以外の器種は見られない。覆土中のHr-FA層より上層の遺物は古墳中期末ころ、下層の遺物は中期後葉頃に相当する。

口が外へ広く開く杯(1・6)と古式の模倣杯(2・3・5とFA上層の18)が多い。18は早い時期の漆仕上げ杯。8は深い鉢状。外面のヨコナデ範囲が広い高杯(19)の例は、SG10区SI-50の遺物No.36にもある。土師器甕類はがでを使った痕跡が明瞭である。縄圧痕のある土師器甕(9)の事例はSG10区SI-47などにある。12は壺の器形だが、甕のように煮炊きした痕跡がある。図示以外の土師器合計169片・1.381gの内訳は、杯43片・314g、高杯3片・26g、壺甕類123片・1.041g。は、SG10区SI-12などにある。ホルンフェルス製の砥石(21)はSG10区ではSI-12などにある。22は自然石。

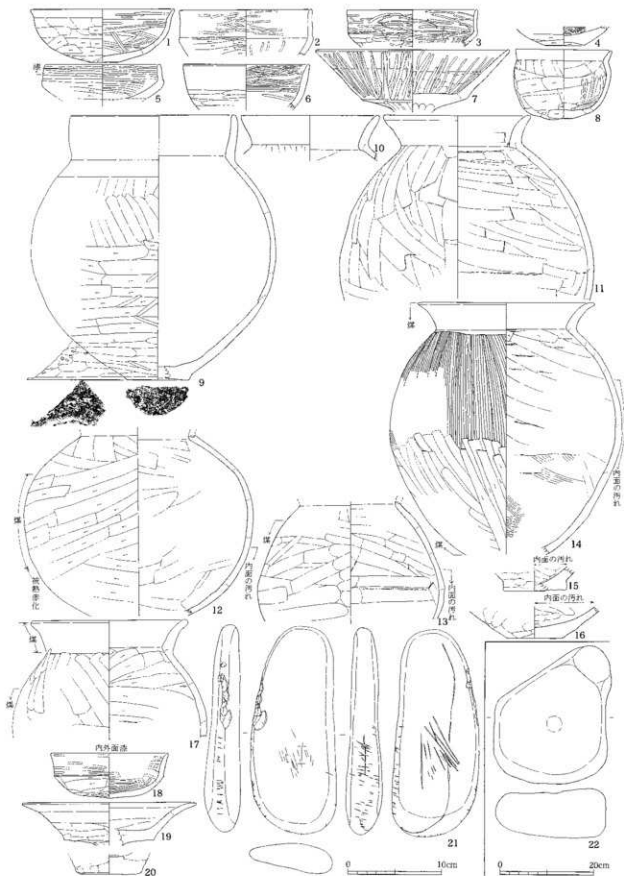


第129図 権現山遺跡SG10区SI-86(1)遺構

第76表 権現山遺跡SG10区SI-86出土遺物

番号	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態 注記
1 土師器 杯	口 15.2 高 5.6 底 2.9 重 2.58.0	口~体部端の輪が内面で明瞭。外面は上半部ナデ後に下半部ヨコハラズリ、 底面1方向ヘラケズリ。内面体部ヘラナデ後に内外口縁部ヨコナデ。内面 全体に輪~斜位のヘラミガキ。	5YR5/0 明赤系 中や粗粒 白・灰色粒~細粒多。赤粒 と黒・透明細粒少 硬質	南東部床上1~2cmと 東部床面上が接合 ほぼ定形 口5片有。 底全割 注記は無題

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第130図 権現山遺跡 SG10 区 SI-86 (2) 遺物

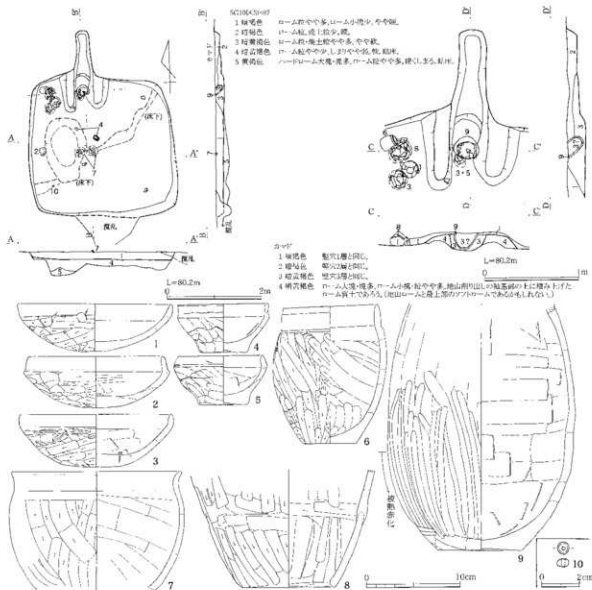
2	土師器 杯	口 縦140 高 49.9 最大 縦142	大きさは比べて薄い。外面体部ヨコヘラケリ後に体部上端付近をヨコヘラミガキ、内外外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外面体部ヨコヘラミガキに纏らなタテヘラミガキ。疎実な漆仕上げは見られないが、口縁下に短期色の部分が見えるのでその可能性もある。	25Y85/8 明赤 顔赤 赤黒～やや少、白黒顔 少や破	東面床土 24cm 口1/6周 9
3	土師器 高 縦136 最大 縦40 最大 縦137	外外面体部ヨコヘラケリ、内外外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外面体部ヨコヘラミガキと横の後に横位のヘラミガキ。疎実な漆仕上げは見られないが、外面の口縁部上半に短期色の部分が見えるのでその可能性もある。	25Y85/8 明赤 顔赤 白・黒・透明顔粒少 破	東面床土 19cm 口1/4周 15	
4	土師器 杯	高 縦20 底 4.4	外外面は口内側のヘラケリで凹状。外外面体部ヨコヘラケリ。内面に底部におよそその方向と体部に横位の密なヘラミガキ。	25Y86/6 橙 透明顔粒 白・赤黒～顔粒と黒・ 透明顔粒少 やや破	南面床土 27cm 底全周 12
5	土師器 杯	高 縦120 高 39.6 最大 縦128	外外面体部ヨコヘラケリ、内外外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外面体部ヨコヘラミガキ。外面口縁部上半に漆仕上げらしい短期色がある。内面も漆仕上げしている可能性があるが、体部にはあまり現っていない。 [注記]116、21、北西区3、B5ベトナム	5Y86/6 橙 やや破 白・赤黒～顔粒と黒・ 透明顔粒少 やや破	西面床土 18～22cmが 混合 口1/2周 注記は左欄
6	土師器 杯	口 縦134 高 49.8	口～体部端の面に近い。外外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケリ。内面は密なヨコヘラミガキ。	25Y84/8 赤黒 顔赤 白・黒～顔粒と赤黒～顔 粒少 破	南面床土 24cm 口1/6周、口～体1/6周 14
7	土師器 高 杯	口 20.4 高 49.6	外外面は杯前面を各方へ向かって放射状にヘラナデした後、底外周ヨコヘラケリ。内外外面杯前面と口縁部ヨコナデの後にタテヘラミガキ。内面は底部多方向ヘラナデ。体部ヨコヘラナデ(または浅いヨコヘラケリ)の後に体部タテヘラミガキ。	5Y85/8 明赤 やや破 白黒～顔粒多、赤 黒～顔粒 白・黒、灰色顔～顔粒少 や破	南面床土上 1～19cmが 混合 口11/12周、杯底全周 11、29、34、35、42
8	土師器 鉢	口 10.0 高 7.3 底 2.4 最大 10.3 重 49.172	外外面は小さい平底で軽いヘラナデ。外外面部タテヘラ後に口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラケリ。内外面部に横～斜位ヘラナデ後、やや密な縦～斜位ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。	10Y83/3 浅黄 やや破 白・黒顔粒少 や破	南面床土上1～床土10cmが混合 口5/6周、底全周 33、40、47、60、72、 76、78、南東区4層
9	土師器 甕	口 縦172 高 28.0 底 7.0 最大 縦258	外外面は多方向ヘラケリで凹状。内面側下位はナデとヘラナデ後に横位。面あり。壁土をタテヘラナデ後に横位をヨコヘラケリ。内外外面口縁部ヨコナデ。内面側部はヨコヘラナデと思われるが大がかり脱落して不詳。蒸気使用痕はない。 [注記]37、48、62～66、69～71、73、84、南東区壺4層	10Y86/4 に赤い黄 やや破 白・赤黒～顔粒と 黒顔粒多、白・赤顔少 や破	南面床土直上 14.7cm と数層の床土1.6cmが混合 口1/3周、口～体1/3周 、底1/2周 注記は左欄
10	土師器 甕	口 縦143 高 49.8	外外面は杯部タテヘラケリ後に口縁部ヨコナデ。内面は杯部ナデヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。	10Y87/4 に赤い黄 やや破 白黒～顔粒と黒・ 透明顔粒やや少、赤黒顔粒少 破	南面床土直上17cm 口1/8周、壁1/5周 91
11	土師器 甕	口 15.6 高 49.6 最大 縦26.8	外外面は製部タテヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。内面は製部タテヘラナデ、口～頸部ヨコヘラケリ。内面中に横み上げ漆仕上げあり。	75Y86/6 橙 やや破 白・黒、灰色・透 明顔～顔粒やや多、白・灰色 顔と赤黒顔少 破	南面床土直上 口全周、筒全周、口～ 頸部中に横み上げ漆 68、南東区壺4層
12	土師器 甕	高 49.2 最大 24.2	外外面は杯部ナメヘラナデ後に口以下を横～斜位ヘラケリ。内面は横～斜位ヘラナデで、密着して不明な部分がある。内面中に縦が少量あり、下位が脱落している可能性がある。内面下に短期色の汚れあり。	5Y85/8 明赤 やや破 白黒～顔粒多、赤 黒～顔粒と灰色・透明顔粒少 や破	南面床土10cmとP3 層半が混合 制1/2～下半1/3周 500、口P3層半分
13	土師器 甕	高 49.6 最大 縦196	外外面は製部ヨコナデと頸部タテヘラナデ。内面は頸部に斜位と頸部に横位のヘラナデ。外外面部に縦が多く、内面中位以下に短期色の汚れあり。 [注記]100、103、104、106、108、110、112、113、117～120、P5層半分、南西区3層、南東区3	75Y88/4 に赤い黄 やや破 白・赤、透明顔粒 多、白顔～顔粒少 や破	P5層面～底土11cmが 混合 制2/3周 注記は左欄
14	土師器 甕	口 縦186 高 26.6 最大 縦24.4	外外面側上位タテヘラ後に下位ナメヘラケリ。内面側部下位ナメヘラケリ。上～中位ナメヘラナデ。内外外面口縁部ヨコナデ。外外面の残存部分に横位を多量付着。内面中位以下に短期色の汚れが明瞭に付着する。 [注記]14、6、23、25～28、30～33、40、44、49～51、53、61、63、64、67～69、76、78、80、116、P5西半分、9号、北東区、南東区3層、南東区壺4層、南東区壺上4層、A5～5上3層、B5～ベトナム3層	75Y86/6 橙 やや破 白黒～顔粒と透明 顔粒多、黒顔～顔粒やや多 や破	南面床面～床土15cmと南 東区壺面～床土1.5cmが 混合 口1/3周、頸2/3周 注記は左欄
15	土師器 甕	高 29.5 底 6.6	突出する平底で、外外面は密なヘラケリ。内面側下位ナメヘラナデ。内面は密なコゲ長の汚れが付着する。	10Y85/3 に赤い黄 やや破 白・灰色・透明 顔～顔粒少 やや破	南面床土 25cm 制下端～底部1/3周 10
16	土師器 甕	口 縦15.7 高 3.4 底 6.0	外外面は丁型ヘラナデで平底。外外面部はナメヘラナデ、内面底部は横～斜位ヘラナデ。内面に黒色のコゲ状の汚れが付着する。	10Y86/4 に赤い黄 やや破 赤黒顔と白・透明 顔～顔粒と黒顔粒少 破	P5底土4cm 底1/2周 111
17	土師器 甕	口 縦166 高 12.5 最大 縦20.5	頸部は外外面ナメヘラナデ、内面ナメヘラケリ。口縁部内外外面ヨコナデ。 [注記]20、32、82、84、89、92～96、98、99	10Y86/3 に赤い黄 やや破 白・黒・赤・透明顔粒 多、白・赤・赤・透明顔粒少 や破	南面床土上1～11cmと 東区壺底土3～6cmが 混合 口3/4周、頸2/3周 注記は左欄
18	土師器 杯	口 12.4 高 4.8	外外面は頸部に1方向と体部に横位のヘラケリ。内外外面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外面部に斜～横位の密なヘラミガキ。PA降下後の製品。	10Y85/6 赤 やや破 赤黒～顔粒やや少、 白・黒顔粒少 や破	南面PA上層～PA上 10cmが混合 口1/2周、体3/4周 5、6、11、南東区 壺中)
19	土師器 高 杯	口 縦184 高 4.6	外外面は杯底部タテヘラ後に内周ヨコナデ、杯体部ヨコナデ。内外面杯前面を斜～横位ナデ後に内外外面口縁部ヨコナデ。PA降下後の製品。	75Y86/6 橙 やや破 白・赤黒～顔粒と 白・透明顔粒少 破	南面床土 20～24cm(外 周中) 口1/6周、杯底1/3周 8、9、南東区PA中)
20	土師器 鉢	高 49.8 底 6.4 最大 縦8.2	外外面は多方向ヘラケリで軽い凹面状。外外面体部下端に密なナデ。内面は丁型な多方向ヘラミガキ。PA降下後の製品。	10Y86/4 に赤い黄 やや破 白黒～顔粒と黒・ 透明顔粒少 破	中央部PA層上 口全周 7
21	石 石 石	長 21.8 幅 9.1 厚 4.0 重 1035.6	扁平な自然礫をそのまま利用。両面と外周縁に傷むよう擦磨を生じ、また両面と長軸縁のうち1方が両面に付いた結果として平滑になっている。平滑していない箇所は長軸縁には、主に片側面からの打撃で割磨を生じているので、磨打に用いたと考えられる。	5Y77/2 灰白 井原土に織着で硬質なホルン ペラ	南面床土 2cm 完形 45
22	自然石	長 27.8 幅 24.1 厚 10.7 重 117.8	断面が丸みを帯びた扁平な自然石。台石として使用したことが考えられる。礫石と自然石の境目がよく確認できず、使用・擦磨痕や付着物も認められない。自然石なので実測図だけを作成し、磨物は取納・保存しない。	5Y87/1 オリーブ灰 礫石・硬質で表面の灰質が堅 固した凹面がやや見られる 流紋岩	中央部直上土 面 24cm 完形

SG10区 SI-87 (第131図、写真図版115・116・206)

[位置] SG10区南端の16-18グリッドにある。同じく古墳後期の建物は、北西にSI-6がある。重複する遺構はない。東壁中央に浅い大きな擾乱、南壁に土坑状擾乱がある(断面図A-A'とB-B')。

[規模と形状] 煙道が長い、小さな建物である。方形で、主軸方位はGN-1°-W、南北3.15m(煙道を含めると3.99m)×東西3.32m。残存壁高は14~17cmで、北東隅で最も高い。床下を最大約30cmの深さまで掘って、ローム混じりの粘土土で埋め戻している(断面図A-A')。柱穴・入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝はない。

[カマド] 北壁中央の西寄りにある。両袖幅84cm、煙道先端から袖先端まで168cm。長くて傾斜が少ない煙道を持つ。煙道の南端から北端までの長さ約90cmに対して、煙道底面の高低差は2~3cmしかない。カマドには粘土層などが残っていない。カマド袖は地山ローム層を掘り残して、上にローム質土を積んだと考えられる。ただし、このカマド4層は地山ソフトロームの可能性もある。燃焼部に掛けた糞(9)が、南へ傾いた状態で残る。火床面には、カマド北側の杯(3)に接合する小破片2点と、残存度の高い小形粗製杯1点(5)がある。



第131図 権現山遺跡 SG10区 SI-87 遺構・遺物

第77表 権現山遺跡 SG10区 SI-87 出土遺物

番号 種類	大きさ mm/φ	特 徴	色調 胎土・焼成 (主な素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 16.1 高 5.2 最大 16.5 重 331.8	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリで、体部上位に粘土積み上げ筋を残す。内面体部をおそらくヘラケズリ後に内外面口縁部ヨコナデ。漆仕上は見られない。	5YR6/8 緑 鉄質 赤黒～黒粒少 白・黒・透明細粒少 やや軟質	北西側床土3cm ほぼ定形 口11/12 周13
2 土師器 杯	口 14.2 高 5.5 最大 15.4 重 297.2	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面は体部ミナナデで少しヘラミギキを施している。胎土をきれいに不確定。体部下位だけだけの色の胎土を使うので、縞縞の痕跡が明瞭にわかる。漆仕上は見られない。	5YR6/8 緑 鉄質 赤黒～黒粒多 白・黒・透明細粒少 やや軟質	内面床土13cm ほぼ定形 口11/12 周1
3 土師器 杯	口 15.9 高 5.5 最大 16.4 重 337.6	外面は底部に多方向と体部下平に横位のヘラケズリ。体部下平ナデ後に粘土積み上げ筋を残そうとするためのヨコヘラミギキ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部上位に焼成前の胎土を生じた部分をおそらく手で磨削しているが、焼成後は幅1.5mmの亀裂になってしまっている(断面図参照)。漆仕上は見られない。	5YR6/8 緑 鉄質 赤黒～黒粒少 白・黒・透明細粒少 やや軟質	北西側床土3cm。カマド大床直上の小破片2点 が接合 ほぼ定形 口全周 12、15、Bトレ北
4 土師器 小形土器 底	口 9.6 高 5.1 底 4.8 最大 9.7	外底面は中央凹み。外周に緩なナデ。外面体部はコビヤエナデで、粘土積み上げ筋を残す。内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。主に外面が被熱した可能性が高い。残存重量137.5g。	10YR6/0 明赤色 鉄質 白粒～黒粒と黒・透明 細粒少 やや軟質	中央部床土1～8cmが 接合 口5/6周、底全周 2、3
5 土師器 小形土器 底	口 8.8 高 5.2 最大 9.9	外底面は中央凹み。外周に緩なナデまたは緩な庄筋あり。外面体部はコビヤエナデで、粘土積み上げ筋を残す。内面体部ヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。不明に被熱した可能性がある。残存重量124.6g。	7.5YR7/6 碧 鉄質 白粒～透明細粒少 やや軟質	カマド大床直上 ほぼ定形 口11/12 周、底全周 15
6 土師器 鉢	口 10.0 高 14.6 底 5.6 最大 12.0	外底面は多方向のJ形なヘラケズリで平底。外面体部は上平と下平を上向きと下向きにヘラケズリ。内面体部ナメナデ。内外面口縁部はヨコナデで、外面上平位に浅い段を持つ。残存重量482.1g。	10YR2/1 黒 やや軟質 白粒～黒粒多、灰 色縞と赤黒粒と黒細粒少 やや軟質	北西側床土 ほぼ定形 口11/12 周、底5/6周 10、Bトレ北
7 土師器 鉢	口 復 18.0 高 復 13.5 最大 復 18.6	外面側面タテヘラケズリ。内面側面ナメナデナデ。内外面口～頸部ヨコナデ。外面上平位に少量の段があるが、火にかけて使用した跡ではないと考えられる。	10YR6/4 に近い黒粒 やや軟質 白・灰色・透明細 粒少 やや軟質	中央部床土15～17cm が接合 口5/12 周 4.5点以上、北東1周
8 土師器 甕	高 残 11.8 底 9.7	外面はヨコヘラナデ後にタテヘラケズリ。内面はタテヘラナデ後に粘土積み上げ筋を残す。厚い部分と上端の孔縁部にヨコヘラケズリ。	2.5YR7/8 緑 鉄質 赤黒～黒粒多、白粒～ 黒粒と黒・透明細粒少 やや軟質	北西側床直土 底5/6周 11
9 土師器 甕	高 残 26.0 底 20.1	外面は側面タテヘラケズリと側下端ヨコヘラナデ後に上下部をタテヘラミギキ。内面は底部に多方向と側面に横位のヘラケズリ。外面側面から外底面までが被熱赤化するが、火が強い箇所は下位は被熱が少ない。	10YR4/2 灰黄緑 やや軟質 白粒～黒粒と透明 粗～細粒多、灰色縞～黒粒 と黒細粒少 やや軟質	カマド大床土4cm 底11/12 周 14、Bトレ北
10 土師器 小玉	長 0.65 厚 0.37 重 0.18	おそらく焼成中に穿孔する。孔径は1.60mmで一定し、穿孔方向が不明。孔内を除く全面に黒褐色の漆を塗布し、筒・丸沢を持つ。	10YR3/1 黒粒 鉄質 黒和材が見られない やや軟質	南西側床直土 完形 19

【覆土】 竪穴部分の大半は単層である。カマド南側部分の堆積状況からみて自然埋没と思われる。テフラの層や粒などは認められない。

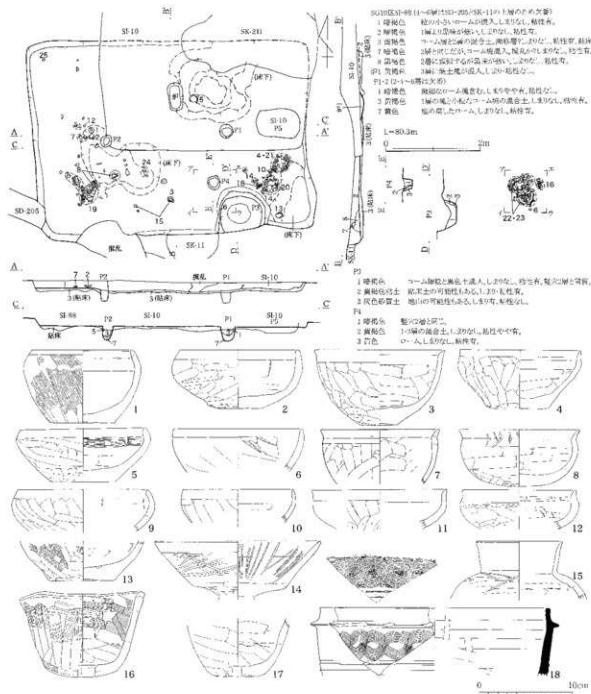
【遺物出土状況】 カマド内の遺物はカマドの項で説明した。カマド西側で床面にまとまる土器群は、甕の底部(8)と長い鉢(6)が北側に、上向き杯2点(1・3)が南側にある。甕から南へ離れた遺物は床面より上方にあり、中央部の小形粗製鉢(4)は床土8cm、西部の杯(2)は床土13cm。

【出土遺物】 遺物量はわずかだが、完形に近いものが多い。復原可能な土師器以外は小破片ばかりである。杯・小形粗製土器・甕・甕があり、甕と甕はほとんど長胴である。小形粗製土器2点は同工品で、ともに被熱していると考えられる(4・5)。鉢2点のうち1点は長い筒形で外面を浅い有段口縁にする(6)。8は全くミガキを行わない甕。9は幅広いヘラナデに近い独特な調整で胴部外面下半を磨き、常総型甕のような雲母は含まない。図示以外の土師器合計40片・291gの内訳は、杯22片・61g、高杯2片・11g、壺甕類15片・159g、甕1片・60g。土玉が1点あり、漆塗の小玉である(10)。

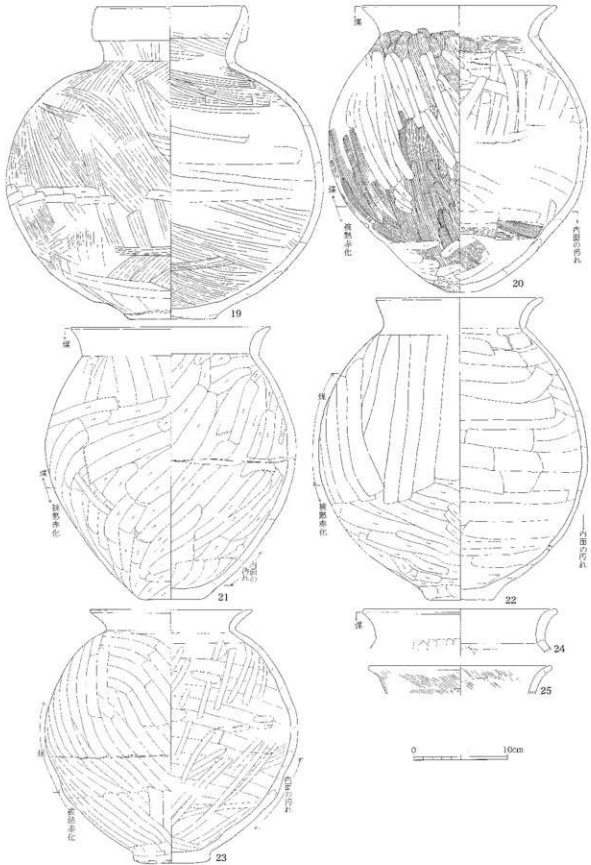
SG10区 SI-88 (第132・133図、写真図版116・206)

【位置】 SG10区南部の18-17グリッド。同じく古墳中期の遺構は南にSI-9、北東にSI-33がある。北と北東に古墳後期のSI-12とSI-32がある。古墳中期のSK-11→SI-88→古墳後期のSK-211→古墳後期のSI-10→時期不明(中世?)のSE-352という順に重複する。南部で古墳時代中期のSK-11を切り、北部が古墳後期のSK-211とSI-10に切られ、南西部が時期不明のSD-205に切られる。床面はSI-88よりSI-10が少し高いが、SI-10の掘方がSI-88の床面を破壊した部分もある。SI-10の覆土・貼床がSI-88の覆土と区別しにくいために重複部でSI-10床面を明瞭に捉えられなかったので、南北方向の土層断面B-B'でSI-10の掘方だけがSI-88床面を壊している状況はやや不明確である。

【規模と形状】東西軸の長方形で、東西 5.92m、南北 4.28m。南壁中央に入口施設を想定し、主軸を南北方向と考えた場合の主軸方位は N-4°-30'-E。主柱穴 2 本を通る東西ラインは N-85°-30'-E。壁は外傾し、残存壁高は最大 20cm。掘方は床面から深さ 3～12cm で、北東部と西南部が少し浅く、南東隅は深い。地山のローム漸移層に似た貼床土で掘方を埋め戻している。主柱穴は P1 と P2 の 2 本で径 20～30cm・床面からの深さ 37～41cm で、東柱穴のほうが少し深く、柱間は 2.57m。主柱穴 P1 と P2 の最下層 (C-C' の 7 層) は埋め戻したロームであると観察されているので、柱の裏込土が崩れたものであろう。南東部にある貯蔵穴 P3 は、東西 96×南北 74×深さ 30cm の断面逆台形で、竪穴部と同質の土で自然埋没している。貯蔵穴の周囲は床面が 1～3cm ほど土状に高くなる。貯蔵穴 P3 の北西にある P4 は径 28×30cm・柱



第 132 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-88 (1) 遺構・遺物



第133図 権現山遺跡 SG10区 SI-88(2) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

痕径 13cm・床面からの深さ 20cm で、柱痕部の覆土は堅穴と同質である（現地名称「P8」を整理作業時に P4へ改称した）。入口は P3 の西側と考えられるが、具体的な施設痕は不明である。周溝や間仕切溝は見られない。

【炉】北部中央にあり、径 60 × 31 × 深さ 4cm。埋土は、粘土土と似た土質の中に焼土塊が混じる（好 1 層）。

【覆土】ほぼ全体が同じ暗褐色土で埋まる。南部では少し異質な埋土も混在する。重複している SI-10 の埋土との区別が難しかった。

【遺物出土状況】貯蔵穴の周囲で床から 10cm 以内のレベルに横転した甕が 4 個つぶれている（20～23）。初期須恵器壺破片（18）は貯蔵穴の北東側で床面から 12cm 浮くので、堅穴内に流入してきた可能性もある。この他の遺物は西半部でやや多く、床面付近から床上 10cm までの範囲に多い。ただし大形壺（19）は床上 13cm にある。ほぼ完形品の杯 3 点は西半部の床面にある（1～3）。後期の SI-10 に切られているので、SI-10 へ流入・混入した遺物もある。5 は SI-10 のほぼ床面レベルに混入していたほぼ完形の杯である。

【出土遺物】遺物はやや多く、土師器のほとんどは甕と杯で、高杯・壺・甗は少ない。土師器杯は内斜口縁杯と半球状杯だけが見られた。

18 は断続する S 字形の波状文を組み合わせて変形した組紐文を描く須恵器有蓋壺で、TK-73 号窯よりも一段階古く、ON-231 号窯段階（西口 1994）に相当する。SG10 区では SI-23 などに須恵器長頸壺がある。土師器杯のうち 3・4・7 は口縁部の屈折が弱い内斜口縁状で深身。8・11・12 は浅い。1・2・5・6・9・10 は口縁部がやや強く内彎する平底の杯。類似した粗製小形甗が 2 点あり、16 は口縁部ヨコナデを行わない。15 は口径に対して口縁部が短い小型壺。19 は受口状口縁にやや近い形の貼付口縁壺。受口状口縁壺は、SG10 区では SI-19a などにある。20 は尖底状の甗。凸面底の甗は SG10 区 SI-16 などにある。23 の甗も底面がわずかに凸面状である。凸化した遺物以外は小破片ばかりである。高杯は不掲載の破片もごく少ない。壺類では、薄手でやや大形のハケ調整破片が少量ある。図示以外の土師器合計 160 片・1,764g の内訳は、杯 71 片・399g、高杯 8 片・95g、小形壺 5 片・35g、壺甗類 76 片・1,235g。

第 78 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-88 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ mm・g	特 徴	色調 胎土・顔成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 10.0 高 7.7 底 6.7 最大 12.4 重 32.4g	外底面は主に 1 方向のナデ。外面は非常に浅いハケ調整で、体部下ナメナメハケ、体部上半ナメハケとナメナメ。体部ヨコヘラナデ。内面体部は裏面が荒れて調整不詳。内外面口縁部ヨコナデ。	7.5YR7/6 暗 粗い・赤黒～細粒と白細粒 やや多。白・灰色粗粒と黒・透明細粒少 やや軟質	西部床直上伏せた状態 口 1/8 周 41
2 土師器 杯	口 12.4 高 6.2 底 5.8 最大 13.8	外底面は主に 1 方向のヘラナデで緩い凸面状。外面は体部にナデと横～斜位ヘラナデ。内面は体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にやや弱いヨコナデ。外底面に 8mm 程度の黒痕あり。残存重量 33.17g。	10YR6/6 明黄緑 粗い・赤黒～細粒と白細粒多 白・赤・灰色粗粒と透明～細粒少 やや軟質	西部床直上で正立 ほぼ完形 口 1/5 周。底全周 40
3 土師器 杯	口 13.8 高 8.0 底 3.8	体部は薄手だが底面は厚みがある。外底面はほぼ 1 方向ヘラナデで凹状。外面体部は上位ナメナデ。中位ヨコヘラナデ。下位ヨコヘラナデ。内面はヨコヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面の約半分は黒痕。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや硬質 白・赤・灰色粗粒 粗粒と黒・透明細粒少 やや軟質	南部床直上 ほぼ完形 口 1/12 周。底全周 17
4 土師器 杯	口 12.8 高 6.2 底 6.6 最大 13.1	わずかに内斜口縁状。外底面は多方向。外面体部は縦位のヘラナデまたは浅いハケメ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。残存重量 209.7g。	5YR6/6 暗 やや硬質 白・赤・灰色粗粒 粗粒と黒・透明細粒少 やや軟質	東部床直上 口 2/3 周。底全周 1
5 土師器 杯	口 13.3 高 5.6 底 6.7 最大 14.2	外底面は 1～2 方向のヘラナデで平底状。外面体部は夕方後ヨコヘラナデ。内面は体部ヨコヘラナデと口～体部端に浅いヨコハケ。内外面口縁部ヨコナデ。外面体部に約 10cm 程度の縦が不規則に付着する。残存重量 344.0g。	7.5YR6/6 暗 粗い・赤黒～細粒と白細粒多 白・赤・灰色粗粒と黒細粒少 やや軟質	SI-10 の南部に混入 ほぼ完形 口 11/12 周 SI-10 125
6 土師器 杯	口 13.6 高 9.4 底 4.5	外面は裏面が荒れて調整が不明だが、おそらく体部ナメヘラナデの後に口縁部ヨコナデ。内面は体部ナメヘラナデ調整時の凸凹を多く残し、口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/6 暗 粗い・赤黒～細粒と白細粒多 白・赤・灰色粗粒と黒細粒少 やや軟質	東部床直上 7cm 口 1/8 周 16
7 土師器 杯	口 12.6 高 9.8	外面体部は主に縦位のヘラナデ。内面体部は横～斜位ヘラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。口～体部端の縦が外面では弱く、内面ではやや軟質。	7.5YR7/6 暗 粗い・赤黒～細粒と白細粒多 灰色・透明細粒と黒細粒少 やや軟質	西部床直上 4cm 口 1/4 周 39
8 土師器 杯	口 12.8 高 6.0	外面は上半ナデと下半ヨコヘラナデの境に底部を多方向ヘラナデ。内面は体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面底部はおそらく使用により裏面が荒れて調整不明。	5YR6/6 暗 やや硬質 白・赤黒～細粒多 黒・透明細粒やや多。白細粒少 やや軟質	南部床直上 5～13cm。 SI-10 混入破片も掲載 口 1/4 周。体 1/3 周 26, 31, 33, SI-10 南 西
9 土師器 杯	口 13.8 高 9.4 最大 15.1	外面は体部上半ナメナデと下半ナメヘラナデの後に口縁部ヨコナデ。内面は割削して不明な部分が多く、体部ヨコヘラナデ後に口縁部ヨコナデと黒定される。	7.5YR7/6 暗 粗い・赤黒～細粒多 やや多。灰色粗粒と黒・透明細粒少 軟質	西部床直上 口 1/3 周 貯蔵穴

10	土師器 杯	口 復11.6 高 残3.6 最大 復12.1	外面体部ナメナドと内面体部ヨコヘラナドの後、内外面口縁部ヨコナド。	10Y87/4 に近い黄緑 褐色・白・透明細粒と黒・透 明細粒少 やや硬質	南東部床土11cm 口1/3弱、 2、南東
11	土師器 杯	口 復14.2 高 残4.1	外面体部ナド後に下位をナメヘラズリ、口縁部ヨコナド。内面は体部が 断滅して調整不明で、口縁部にヨコナド。	10Y87/4 に近い黄緑 やや硬質 灰色粒と白・黒・ 透明細粒少 硬質	南西部 口1/8弱 南西
12	土師器 杯	口 復11.8 高 残4.1 最大 復12.6	外面は体部ナド後に体部上端ヨコヘラナド。体部下位ヨコヘラズリ。内外 面口縁部ヨコナド。内面は体部にヨコヘラナド、口〜体部にヨコヘラズ リ。	2.5Y86/4 黒・細粒やや多 白・黒・赤・透明細粒やや少 硬質	西部床土4cm 口1/6弱 42
13	土師器 杯	高 残4.3 底 6.5	外底面は非常に浅い1方向にハケ調整で、少し凹みになる。外面体部は非常 に浅い層位のハケナドナリ。内面は底部の断面が厚くて調整不詳で、体部ヨコ ヘラナド。断面図に記入した植物種子(①)の正層が内面底部に1箇所ある。	7.5Y86/6 粗 やや硬質 白・赤・透明細 粒やや多・黒・透明細少 硬質	南東部床土5cm 底全周 9
14	土師器 高杯	口 17.6 高 残5.9	外底面は放射状ヘラナド後に外縁ヨコナド。杯体部内外面はおそらくヘラナ ド後に、外面は線状なヨコヘラミナシ。内外面口縁部ヨコナド。内面は少し 粗なやへら上層部。 [注記]14、7、SI-107、126、163、164、南東Aトレ	5Y86/8 粗 やや硬質 白・黒・透明細粒 少 やや硬質	南東部床直上〜3cmが接 合 口3/4弱 注記は左欄
15	土師器 小壺	口 復9.1 高 残6.0	外面体部ヨコヘラナド後、横〜斜位の縁ならへラミナシ。内面体部コビオサ エトナド。内内面口縁部ヨコナド。 [注記]19、21、南西、SI-10南東、南東Bトレ、南西、北西	7.5Y87/6 粗 やや硬質 白・赤細〜細粒と 黒・透明細少 やや硬質	南西部床土8〜16cmが 接合、南平中央にも5 片、口5/2弱、肩5/6 弱、注記は左欄
16	土師器 小壺	口 13.2 高 9.0 底 7.6 最大 復1.5	外底面は多方向のやや硬質なナド。外面体部に非常に浅いハケ調整。内面は下 位を門前方向にビナド。上〜中位をやや浅いヨコハケ。内外面の口縁部ヨコ ナドをほとんど行わずに、底部に1孔を掘った時の土の盛り上がりから、孔 の内外面にのみ見られる。	5Y85/4 に近い赤褐 やや粗い 白・赤細〜細粒多 白・赤細と黒・透明細粒少 やや硬質	南東部床直上8〜10cm の3片と接合 口3/4弱、底全周 1/2弱、底1/3弱、 SI-10南東
17	土師器 小壺	高 残6.2 底 4.2 最大 復1.1	外底面から体部下端に門前方向のヘラズリ。外面体部ナメヘラナド。内 面は底部に多方向と体部に横位のヘラナド。底部の孔断面をタナナドして孔 の内側に粘土が盛り上がる。	7.5Y86/6 粗 粗い 白・赤硬粒〜細粒多 白・赤硬と黒・透明細粒少 やや硬質	南西部 底1/3弱 SI-10南西
18	土師器 有蓋壺	口 復24.0 高 残7.2 最大 復25.9	内外面ともに丁寧な回転ヨコナドで、口縁部断面が平坦。口縁部に長い縦受 けと断面に2段以上の低い縦受縁部を持つ。9〜10箇所の工具で有から左へ順 続的に断面縁部をなぞき繞って細粒文に併せている。ヨコナド時と無文時の ロウは左回りに(反時計回り)。破片の下部にも交錯がわずかに残る。	7.5Y87/1 灰 褐色 透明細粒少 硬質	南東部床土12cm 口1/6弱 5
19	土師器 大形壺	口 復15.6 高 33.0 底 8.3 最大 復35.0	受口状にやや浅い形の扁口壺。外底面は外面に粘土を帯てやや硬質なナド。 外面は頸部ナメナドと中位ヘラズリ、下位ナド。頸部タテハ後口縁部 を帯り付けてヨコナド。内面は下位ヨコハケ、中位ヨコヘラナド、肩〜頸 部ヨコハケ、口縁部ヨコナド。ハケは非常に粗く、5本/2cm。	5Y86/8 粗 やや硬質 黒・透明細粒多 白細〜細粒やや多、赤細〜細 粒少	南西部床土13cm 口1/12弱、肩1/3弱、 底全周 32、南西、南西Aトレ 硬質
20	土師器 費	口 復20.6 高 30.3 最大 27.3	外面はタテハ後に残るタテヘラズリ。外底面はヨコヘラズリで尖状 縁。内面は下位ハケ後に中位以上を成形してヘラナド。肩部ヨコハケ。内外 面の口〜頸部ヨコナド。外面中位以上に縦が多。下位は外面が粗熟して内 面にコガ面。	10Y84/2 灰黄褐 白・透明細〜細粒と黒細粒多 やや硬質	南東部床土13cm 口1/4弱、底全周 SI-10南東、北東
21	土師器 費	口 復21.0 高 28.7 底 6.7 最大 26.4	外底面は多方向のヘラズリで平坦。外面は肩部タテヘラナドと中位以上で尖状 縁ヘラズリ。内面はナメヘラナド後にナメヘラズリで、胸中位の横 み上げ粘土層付にナド。内外面の口〜頸部ヨコナド。外面下位が粗熟赤化 して上〜中位は僅かな調整。内面頸部下位にコガ面の残りが残る。	10Y87/3 に近い黄緑 やや粗い 白・灰色粒と黒 透明細粒と赤・透 明細粒少 やや硬質	南東部床直上10cm 口上平1/4弱、下平 〜底全周 SI-10南東
22	土師器 費	口 17.7 高 31.9 底 6.9 最大 28.4	外底面はナドで平坦。外面頸部は下位ナメヘラズリと上〜中位タテヘ ラナド。胴下粗いナド。内面頸部はヨコヘラナド。内外面の口〜頸部ヨコナド。 外面は下位に縦が付され、下位〜底面が粗熟赤化する。内面は下位にコガ付 面。 [注記]11〜14、南西、SI-10南東	2.5Y7/8 粗 粗い 白細〜細粒と黒・透明 細粒やや多 やや硬質	南西部土12cm、2〜14 cmの破片も少量接合 口1/2弱、底全周、胴 下位1/2欠 注記は左欄
23	土師器 費	口 17.2 高 26.6 底 8.0 最大 25.8	外底面はほぼ1方向ヘラズリで、斜い凸状。外面頸部はナメヘラナド 後に下粗を付しヨコヘラナド。内面頸部は横の4層位のヘラナド。内外面 の口〜頸部ヨコナド。下位の外面が粗熟赤化して内面にコガ面が付る。外面中 位に縦が多い。	10Y86/3 に近い黄緑 粗い 白・灰色・透明細粒〜細 粒多、赤細粒と黒細粒少 やや硬質	南西部土2〜10cmが接 合 口全周、胴下位1/2弱、 底全周 11、12、14、貯蔵穴
24	土師器 費	口 復20.5 高 残4.8	外面は頸部タテヘラナド。内面は胴部ヨコヘラナド。内外面口縁部ヨコナド。 外面は下位に縦が付る。	10Y86/3 に近い黄緑 粗い 灰色硬と白・透明細 粒と黒細粒やや多 やや硬質	中央部床土5cm 口1/4弱 20
25	土師器 費	口 復19.4 高 残3.0	口縁部内外面ともにナメヘラ後、斜いコナドでハケミを軽く削している が、ハケが薄く見える。口縁部断面の調整面をなぞって磨いているので、やや 斜いコナドでナメヘラ強いヨコナドの順に調整したと考えられる。	7.5Y86/4 に近い赤 やや粗い 白・灰色硬粒〜細 粒と黒・透明細〜細粒やや多 やや硬質	北西部床土10cm 口1/3弱 17付込、48、南西

SG10区 SI-89a (第134-135図、写真図版117・118・206・207)

[位置] SG10区南半中央部、東側低地向かう台地平坦面の17-17グリッド所在地。同じく古墳中の建物は南にSI-2、北にSI-9がある。SI-89bを拡張した建物かSI-89aである。古墳中期のSI-30、後期のSI-6、平安時代のSK-235に切られる。SI-89b→(拡張)→SI-89a→SI-30→SI-6(→)SK-235の順序で重複し、SK-235はSI-6ではなくてSI-30を切る。

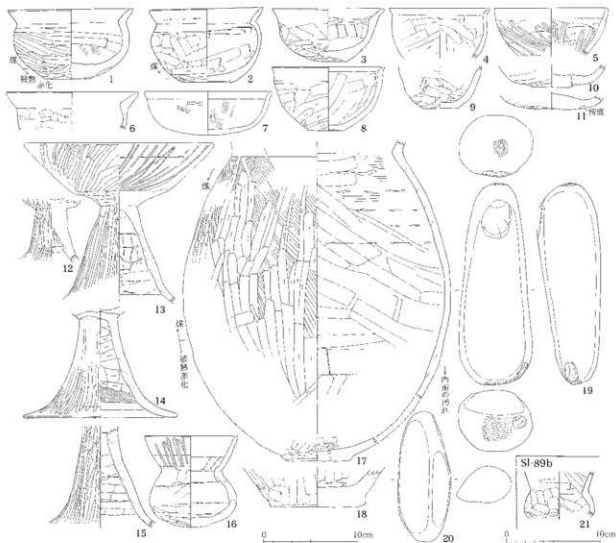
[規模と形状] 柱穴の状況からみて、拡張建て替えを行っている。旧期をSI-89b、新时期をSI-89aと呼ぶ。

SI-89aは方形で、主軸方位はGN-21°W、規模は東西5.70m、南北5.94m。残存壁高は北壁西半と南壁西半で最大38cmあり、西壁中央や東壁はSI-6・30に切られてほとんど残っていない。床面は、北西部隅にある最新時期の貯蔵穴P6a周辺が3〜8cm高く、その他は平坦である。掘方は四隅が床面からの深さ4〜8cmでやや深い。それ以外の部分では貼床がごく薄く、掘形底面がそのまま床面になるところがほとんどである。

入口施設と考えられるピット P7a が、a 期建物では南部中央からやや東に寄って確認された(断面図 F-F')。P7a の底面は南半が一段高く、床面からの深さは北部で 20cm、南部で 18cm。b 期建物の入口施設ピットは見られない。a 期建物の貯蔵穴には、P5a (a 期旧貯蔵穴) と P6a (a 期新貯蔵穴) の 2 時期がある。SI-89a に伴うと考えられる貯蔵穴 P5a 内部に竪穴覆土 3 層が流入しないで、P5a 埋土の上を粘土土が覆うので、P5a を人為的に埋め戻したことがわかる(断面図 A-A')。複数の貯蔵穴を持つ建物跡は SG10 区 SI-6 などがあり、SI-89a・104 のように作り替えて複数になった事例も含むであろう。貯蔵穴 P5a は南東隅にあり、東西 105 × 南北 69 × 深さ 47cm。貯蔵穴 P6a は北西隅にあり、東西 61 × 南北 52 × 深さ 50cm。

床面から深さ 3 ~ 6cm の壁溝 D6 は、東壁際で粘土除去後に確認し、床面調査時に見落としたと考えられる。間仕切溝は 6 本ある (D1 ~ D5・D7)。間仕切溝 D1 ~ D5 は柱穴や壁との関係からみて a 期建物に伴うことが確実で、床面からの深さは 7 ~ 11cm。南東部の間仕切溝 D5 は b 期貯蔵穴を切ると考えられる(断面図 D-D') の P11b)。床面で見落として粘土床下で確認した北東部の間仕切溝 D7 は、短くて P1a まで連結しないが、P1a に向かう位置なので a 期と考えられ、床面からの深さは 6cm。

【炉】a 期建物の北部中央で瓢箪形の炉が 1 箇所確認した。南北長 69cm、東西幅 17cm(南部) ~ 25cm(北部)、床面からの深さ 2cm(南部) ~ 4cm(北部)。b 期の炉がないので、この炉を b 期から a 期まで使ったと考えられる。南半部が b 期からの炉で、b 期柱穴 P8b に近い北半を a 期に付け足した可能性もある。



第 135 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-89a・b(2) 遺物

【覆土】覆土が残る北西部をみると、自然埋没であろう。ただし a 期の旧貯蔵穴 P5a は埋め戻されたと考えられる。

【遺物出土状況】先行する b 期の遺物は貯蔵穴 P11b や b 期柱穴から出土したもので (21)、それ以外は SI-89a の遺物として扱う。ただし a 期貯蔵穴 (南東の P5a と北西の P6a) のうち埋め戻された P5a 内の遺物は、SI-89a の遺物としては古い時期のものと考えられる。a 期旧貯蔵穴 P5a に 1・2・3・7・13・14・16・17、a 期新貯蔵穴 P6a に 6・8・10 がある。北西部では床面よりやや上に高杯・叢石・編物石がある (12・19・20)。南東主柱穴 P4a に杯底部がある (9)。

【出土遺物】遺物は少なめだが、一定量がある。杯・高杯・小形壺・壺甕類が主体で、特に杯が多い。薄い小形の杯 (4・5・8・9) と、少し大きめで火に掛けたような痕のある杯 (1・2) がある。7 は薄く、軟質の明褐色胎土が他の土器とかなり異なる。10 は焼成前に亀裂が生じた可能性があり、内面には達していないので失敗作ではない。不良品の土師器は、SG10 区では SI-6 などにある。11 のように糊痕がある土師器は、SG10 区 SI-50 などにある。14 は支脚に転用したかのような高杯脚部だが、この建物にはカマダがない。17 は粗いハケ調整で、古墳中期の甕としては胴部が長い。図示以外の土師器および焼粘土塊合計 251 片・1.772g の内訳は、杯 124 片・646g、高杯 20 片・297g、小形壺 4 片・34g、壺甕類 101 片・778g、小形土器 1 片・10g、焼粘土塊 1 点・7g。

SG10 区 SI-89b (第 134 図・第 135 図右下、写真図版 117・118)

SI-89b は SI-89a と同じく方形で、主軸方位は CN-24°-W。推定規模は東西約 4.7m、南北約 4.4m。この推定値は、南東主柱穴 P10b から東壁まで 1.4m、南壁まで 1.2m の距離を (貯蔵穴 P11b の位置から) 推定し、柱間の規模に壁までの距離を加えて算出した。床面レベルや残存壁高は SI-89a とほぼ同じと考えられる。b 期の主柱穴は 4 本 (P2b・P8b・P9b・P10b)。柱間は南北 1.96m、東西 1.90m。断面形状から推定した柱径は 14～16cm、床面からの深さは P2b=44cm(?), P8b=58cm, P9b=50cm, P10b=41cm。北西の P2b は拡張後の柱穴 P2a として再利用され、P2b の西端部だけが残る。他の 3 本は人為的に埋め戻されていた (P8b・9b・10b)。南東隅にある貯蔵穴 P11b は東西 63×南北 61×深さ 38cm で、a 期の南東柱穴 P4a に切られている。b 期建物には入口施設・壁溝・間仕切溝がない。

【炉】a 期で説明した炉の南半部 (東西幅 17×深さ 2cm) を、b 期から a 期まで使い続けた可能性がある。炉の北半部は b 期の柱穴 P11b に近すぎるので、a 期に付け足した部分であろう。

【遺物および出土状況】旧建物である SI-89b の遺物は、貯蔵穴 P11b や b 期主柱穴で少量だけ出土した。図示できたのは P11b 出土の小形壺である (第 135 図右下の 21)。図示以外の土師器は鉢 2 片・22g のみである。

第 79 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-89a-b 出土遺物

1～20 は SI-89a, 21 は SI-89b の遺物

番号 種類 器種	大きさ 径・高	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.2 高 7.3 底 5.2	口一底部端の縁が内面で明瞭。外面は体部におそらく斜位ヘラケズリ後に斜一横位ヘラミガキ。口一頸部ヨコナデ。内面は体部ヨコヘラナデ後に下平部斜位ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。外面底部が焼熱して内外面の底部がひとしく鈍直し、外面口一体部に凹凸がある。	2.5YR5/6 明赤褐色 やや軟質 白・赤黒・細粒やや多 赤・黒・透明細粒やや少 やや硬質	a 期旧貯蔵穴 P5a 底上 33～35cm 層結合 口 1/2 周 12, 15, 67
2 土師器 杯	口 12.1 高 7.8 底 5.5 重 268.5	外底面は 1 方向ヘラナデ後に外周に薄く胎土を付け足して斜一横位。外面体部ナデ後に下位ヨコヘラケズリと口一頸部ヨコナデ。内面は体部と底部に斜位と横位のヘラナデ。口縁部ヨコナデ。外面は底部以外の口一体部に凹凸が多い。外底面が焼熱している可能性もあるが不確定。	2.5YR5/8 明赤褐色 やや軟質 白黒・細粒やや多 赤・黒・透明細粒と白・灰色 減少 硬質	a 期旧貯蔵穴 P5a 底上 7 ～37cm 層結合 ほぼ完形 口 5/6 周、底全周 4, 5, 65
3 土師器 杯	口 11.7 高 3.5 底 3.4 重 162.3	口一底部端の縁が内面で明瞭。外底面は円筒方向のヘラケズリで円底状。外面は上平ナデ後に下平ヨコヘラケズリ。内外面に口縁部ヨコナデ。内面体部ヨコヘラナデ後に、体部上ヨコヘラミガキ。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや軟質 白・赤黒粒と白黒 粒やや多、黒黒粒と赤・透明 細粒少 軟質	a 期旧貯蔵穴 P5a 底上 12cm で伏せた状態 完形 69

4	土師器 杯	口 復10.6 高 残 5.3	薄く軽い。外面上位をナメナドおよびナメハラナド後、下位ナメハラナド後、内面体部ナメナド後ナド。内外面口縁部ヨコナド。	5YR5/6 明赤期 白・灰色粗～細粒やや少 黒・透明細粒少 破変	a 駒前西内床土13cm 口1/5周 24
5	土師器 杯	口 復11.9 高 残 5.0	内外面の口縁部隙間に浅い段あり。外面ヨコハラナド。内面ヨコハラナド後には下位ヨコハラナド。内外面口縁部ヨコナド。外面の外面に斜位と内面に縦位のヘラミガキ。断面は7cm程度の黒厚あり。	7.5YR7/6 暗 やや暗黒 赤粗～細粒と白・ 透明細粒少 やや破変	a 駒前西内床土8cm 口1/4周 25
6	土師器 杯	口 復14.0 高 残 4.0	外面は底部に斜位ナメナドで、粘土積み上げ痕を少し残す。内外面口縁部ヨコナド。内面口縁部は調整不明。	7.5YR7/6 暗 細赤 赤粗～細粒やや多 白・黒・透明細粒少	a 駒前西内床土P6a底土 22cm 口1/6周、底1/4周 26
7	土師器 杯	口 復13.4 高 4.6	薄く軽い。口縁部隙間の縁は内外面ともにやや不明。内外面の口縁部ヨコナド後、体部は外面に斜位～縦位と内面に縦位のヘラミガキ。体部全面が剥落しているため、観察できる部分が少ない。	2.5YR6/8 暗 細赤 白・黒・赤・透明細粒少 破変	a 駒前西内床土P6a底土 33～36cm程度 口1/2周、底1/3周 11, 12, 67
8	土師器 杯	口 11.9 高 6.7 底 3.5	薄く軽い。外面は斜位ナメナドで平底状。外面上下を横～斜位ハラナド後に下位をナメハラナド。内外面口縁部ヨコナド。内面体部はナメハラナド。	5YR5/6 明赤期 やや暗い 白・灰色・透明粗 ～細粒やや少。黒面粒少 破変	a 駒前西内床土P6a底土 17cm 口1/2周、底1/3周 37, 72
9	土師器 杯	高 残 4.5 底 残 3.8	小形で薄く軽い。外面は1～2方向のヘラミガキで平底状。外面体部は下位ナドと中位ヨコハラナド。下端ヨコハラナド。内面はヘラミガキ。外面は6cmの黒厚あり。	5YR6/8 暗 細赤 赤粗～細粒と白粗 粒少 破変	南東部の駒前土柱P4 底14-151
10	土師器 杯	高 残 2.5 底 4.0	やや突出する平底で、底部が厚いために変態・變形に亀裂が生じた可能性がある。外底はやや丁寧にナドしているが、突出する底部の外周は整えられていない。外面体部ナド。内面はヘラミガキを行っていた可能性が高いが、水平が割断して不明。	7.5YR6/6 暗 細赤 赤粗～細粒やや多 白・黒・透明細粒少 破変	a 駒前西内床土P6a底土 10cm 底全周 39
11	土師器 杯	高 残 1.7	外底面は多方向のヘラミガキで縦い縦底位に仕上げ。縦横の印痕を残す。外面体部ナド。内面底部は円筒方向のナド。	2.5YR2/2 灰黄 細赤 白・赤粗～細粒やや少 白粒と黒・透明細粒少 破変	a 駒前西内床土32cm 底全周 28
12	土師器 高杯	高 残 6.7	口縁上位は中実状。外面は脚部と杯底部をタテハラナド後、杯底部と脚部をタテハラミガキ。杯内面は調整不明。脚部内面は上下に段り目状の跡が多く、下平をナドす。	7.5YR6/6 暗 細赤 白・赤粗～細粒と黒・ 透明細粒少 破変	a 駒前西内床土13cm 杯底1/2周、脚柱全周 32
13	土師器 高杯	口 復20.0 高 残 16.4	外面は脚部タテハラミガキ。杯底部ヨコハラミガキ。杯底部に幅広いナメハラミガキ。杯内面は口縁部に横位と全体に斜位のヘラミガキ。 [注記]7, 14, 68, SI30-6, 東南1a層, C-ベルト東2層	7.5YR7/6 暗 細赤 赤粗 破変	a 駒前西内床土P5a底土 32～41cm, SI30 説入 破片も4片拾得 口1/3周、脚柱全周 注記5は左層
14	土師器 高杯	高 残 11.2 脚部 16.4 最大 16.4	外面はタテハラミガキ後に縦部ヨコナド。全体をタテハラミガキ。脚内面は上下～中位ナドと下位ナメハラノの後にヨコハラミガキ。脚部ヨコナド。口縁はすり減っており、この状態で使用された可能性あり。	10YR6/6 明黄期 やや暗い 白・黒・赤粗粒と 白・黒・透明細粒多。白粒少 破変	a 駒前西内床土P5a底土 35cm 脚部全周 39
15	土師器 高杯	高 残 10.7	外面はタテハラミガキ後にタテハラミガキ。内面はヨコハラミガキで、粘土の積み上げ痕を残す。	5YR6/8 暗 やや暗黒 赤粗～細粒多 白・透明粗～細粒と黒粗粒少 破変	a 駒前西内床土13cm 脚柱全周 22
16	土師器 小形壺	口 9.8 高 9.6	外面は体部ナド後に底部を多方向の斜いハラナド。頸部タテナド後に口縁部ヨコハラミガキ。杯内面は調整不明。脚部内面は上下に段り目状の跡を残し、脚部ヨコハラミガキ。口縁部ヨコナド。	5YR5/6 明赤期 細赤 白粗～細粒と黒・透明 細粒やや多。白粒と赤粗粒少 やや破変	a 駒前西内床土P5a底土 38cm 口1/2周、体全周 6
17	土師器 甕	高 残 30.1 底 7.0 最大 復 28.3	外底面は多方向のヘラミガキで斜い凸面状。外面脚部ナメハラミガキ後にタテハラミガキ。口縁部ヨコナド。内面は底部に多方向のヘラミガキ。脚部ナメハラミガキ。胴部ヨコハラミガキ。口縁部ヨコナド。胴下部の積み上げ痕は下部部分が多い。下位の外面が黒熱赤化して内面はヨコハラミガキ。中位以上の外面に縦位あり。 [注記]10, 13, 17, 20, 52, 66, 111, P5下層, 西南, Cトレ南, Cトレ南, G-6北下北下3層, SI30-32, 34, 85, 東南2～3層, 東南3層, 東南16層, 東中2層, Aトレ中1c層, Aトレ中1b層, Cトレ中, Cトレ東, Cトレ東奥層, Dトレ西	7.5YR5/4 に近い、暗 やや暗い 白・赤・透明粗～ 細粒と黒粗粒多。白・赤粒少 やや破変	a 駒前底土2～46cm程度 口1/6周、底1/2周 注記5は左層
18	土師器 大形壺	高 残 4.2 底 9.3	厚く重い。外底面はほぼ1方向のハラナドで平底状。外面脚部は縦および斜位のハラナドで、底部が円板状にやや出る。内面は底部に1方向と斜部に縦位のハラナド。	7.5YR5/6 明期 やや暗黒 透明粗～細粒と白 細粒やや多。白・灰色色少 破変	a 駒前西内床土28cm 底全周 29
19	土師器 甕行	径 21.2 高 7.8 厚 6.6	厚さ・幅に於ける自然変態をそのまま利用。上下両端面に縦行筋が集中する。因に記入した小約縦径が2箇所にある。重量1561.8g。	N7/ 灰白 やや暗黒で破変安山岩片	a 駒前西内床土19cm 完形 63
20	土師器 甕行	径 13.7 高 5.6 厚 4.0	不整な筒円形と棒状の自然変態をそのまま利用。加工・使用・焼熱痕は見られない。重量414.0g。	7.5YR6/1 灰 細密でやや破変安山岩片	a 駒前西内床土27cm 完形 62
21	土師器 小形壺	高 残 4.8	外面は体部ナドと頸部ヨコナド。体部下位ヨコハラミガキ。内面は体部ヨコナド。頸部ヨコナドとナメハラミガキ。	10YR6/2 灰黄期 細赤 白・黒・透明細粒と赤 粗～細粒少 やや破変	b 駒前西内床P11底土32 cm 口1/6周 57

SG10区 SI-100 (第2分冊の第329図、写真図版40)

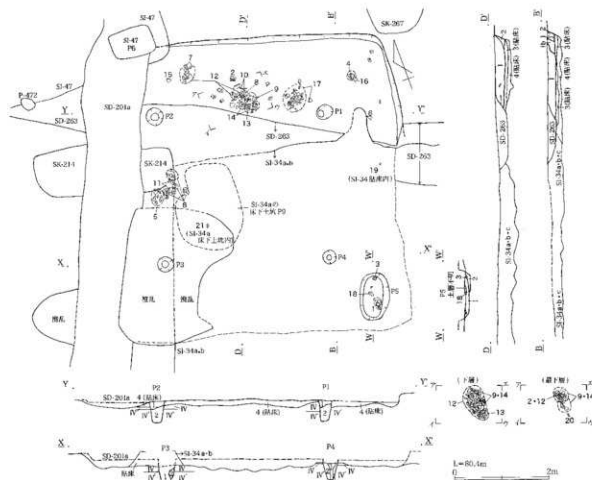
【位置】SG10区南西端部の台地平坦面、16.5-16.5グリッド所在。SG5区 SI-100と同一の古墳中期の建物である。大半をSG5区で調査した。SG10区で調査した範囲は建物の東北隅だけなので、遺構図および説明はSG5区 SI-100の項にまともして掲載した。SG10区内では重複する遺構はない。

【出土遺物】SG10区の範囲から出土した遺物は土師器合計7片・81gしかない。内訳は、小形壺3片・18gと、壺頸環4片・63gである。図示した遺物はない。

SG10 区 SI-101 (第 136・137 図、写真図版 119・207)

【位置】 SG10 区中央部の 19・17・18 グリッド所在。同じく古墳中期の建物は北に SI-53、南に SI-33 がある。SI-101 の南部は古墳後期の SI-34a・b・c に掘方まで破壊され、残っていた SI-101 の柱穴 P4 と貯蔵穴 P5 を SI-34a の貼床除去後に確認した。古墳後期の SI-47 に北西隅部を切られる (SI-101 → SI-47 → SD-201a)。時期不明の土坑 SK-214 と、近世の溝 SD-201a・263 に切られる。SI-101 → SI-34 (c 期 → b 期 → a 期)・SI-47 → SD-263 → SD-201a → SK-214 の順序になる。

【規模と形状】 方形の建物跡で、主軸方位は CN-18° E。主柱穴 4 本から各壁までの距離を (P1 から東・北壁までの長さと同じく) 1.70m として規模を復原すると、東西推定 6.9 × 南北推定 6.5m 程度になる。現状は破壊されているので、東西残存 6.20 × 南北残存 6.30m である。中央より南側は SD-263 と SI-34 に大半が破壊されている。SI-101 掘方がわかる範囲 (SI-34 掘方よりも凹凸が激しくて凹部が深い傾向がある範囲) を、破線で平面図に示した。残存壁高は北壁で 10 ~ 23cm、東壁北部で 4 ~ 17cm。主柱穴は 4 本で、柱間は南北 3.04m (東側) ~ 3.14m (西側)、東西 3.48m (南側) ~ 3.52m (北側)。P3・P4 の柱痕反映土層 (1 層) や底面形からみて推定柱径は 6 ~ 12cm 前後。床面レベルからの深さは P1=39cm、P2=42cm (残存



SG10(区)SI-101

- 1 埋積色 ソフトローム状多し、土質なし。北壁近く上部に石灰化物(塊)粒がみられる。
- 1b 埋積色 ソフトローム状、石灰化物多し、土質なし。
- 2 埋積褐色 ソフトローム状(厚2~3cm)多、中層、下部、北壁の積層土。
- 3 埋積褐色 ソフトローム状多、ソフトローム塊(厚2~3cm)で充填されている。底、前部。
- 4 埋積褐色 ソフトローム塊(厚1~10cm)多、ソフトローム多し、土質有、硬、基層。

P1~2

- 1 埋積褐色 ソフトローム状多し、土質有中。
- 2 埋積褐色 ソフトローム塊(厚2cm)少、ソフトローム粒少し、土質有中。

P3-4

- 1 埋積褐色 ソフトローム状、石灰化物少、軟。
- 2 埋積褐色 ソフトローム塊(厚2cm)多し、土質有中。

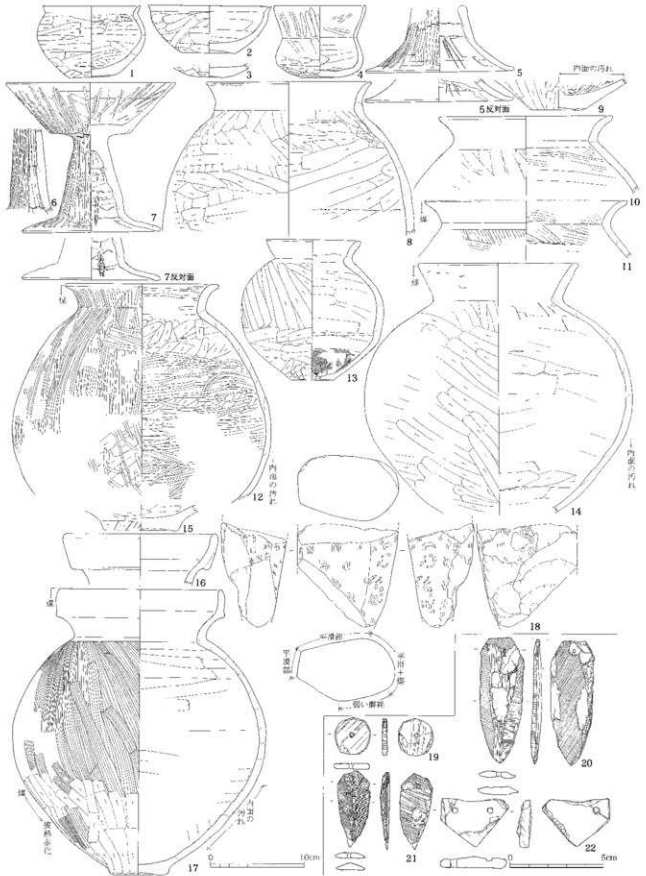
15

- 1 基層褐色 粘質土塊(厚3cm)、ソフトローム粒少し、土質なし。
- 2 埋積褐色 ソフトローム状多、砂質土塊(厚1cm)少、軟。

地山

- IV ハードローム
- 2V 粘質塊状ローム

第 136 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-101 (1) 遺構



第137図 権現山遺跡 SG10区 SI-101(2) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

40cm)、P3=50cm(残存37cm)、P4=40cm(残存32cm)。P2とP4は上部をそれぞれSD-263とSI-34掘方で壊され、P3は上部に擾乱を受けているので、それぞれの深さは復元値である。各柱穴の下部は、地山ローム(IV層)よりも下層の砂質泥じりローム(IV'層)中にある。南東隅にある貯蔵穴P5は、上部をSI-34に壊されて下部が残り、隅丸長方形で東西62×南北100×残存する深さ9cm、推定床面レベルからの深さは20cm。入口施設ピットなどの補助柱穴や、壁溝・間仕切溝はない。

【火処】不明である。SI-34a・b・cやSD-263に破壊された床面に灰が存在していたことが想定される。

【覆土】北壁際の2層や貯蔵穴P5内の堆積から自然埋没と思われる。テフラの層や粒などは見られない。

【遺物出土状況】SD-263破壊部よりも北側に遺物集中地区が残っていた。東半では二重口縁の大形壺(17)が床上3~18cmで潰れている。西半では床上4cmに単口縁の大形壺(12)と甕(10)、その南東で床上1cmに剣形模造品(20)がある。10と12の上には大形の甕(14)が載り、模造品(20)の上には壺(13)が載る。14の北西にも別個体の壺模類破片が床上5~15cmのレベルで散在している。北西部では完形の高杯(7)が床上7~10cmで倒れていた。石製模造品の剣と有孔円板(19・21)はSI-34貼床とSI-34a床下土坑で出土したので、SI-101の古墳中期遺物がSI-34の貼床に混入したと考えられる。

【出土遺物】4は薄くて頸部が広い小形壺。5と7は高杯脚内面に縦位の沈線がある。全周が残る高杯脚柱部(6)には、羽口に転用したような溶解・還元痕は見られない。受口状口縁の大形壺(16・17)はSG10区SI-19aなどに例があり、16は外面が貼付口縁状。12と17は頸径が狭い器形なので壺に分類されるが、甕と同様に火に掛けて使っている。ホルンフェルス製の砥石(18)は、SG10区ではSI-12などに例がある。石製模造品の剣形品はSG10区SI-2など、有孔円板はSG10区SI-64aなどにある。剣形品(20)は片面に鋸を持ち、SI-101から重複するSI-34へ混入した剣形品(21)と類似する。この剣形品2点は三波川帯の滑石片岩製品である。19は白雲母細片が非常に多い絹雲母片岩で、SG10区SD-42・201aに各1点あるが、この地域で一般的な石材ではない。篠原祐一氏の御教示によれば、砂田遺跡4区の石製模造品工房跡(津野・篠原・今平2007)で同種の石材が少し含まれる。2孔の内1個が貫通していない粘板岩製模造品(22)は、古墳後期以降の遺物が混入した可能性が高い。粘板岩製品の例はSG10区SI-47などにある。

遺物が多い。土師器は壺模類と小形壺が主体で、杯・高杯も少し見られる。壺と分類した破片の中には小形壺もまだ含まれているであろう。図示以外の土師器合計149片・1.768gの内訳は、杯15片・80g、高杯23片・240g、小形壺15片・161g、壺模類96片・1.287g。

第80表 権現山遺跡 SG10 区 SI-101 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 粘土・釉薬 (または素材)	出土状況 保存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 10.2 高 7.6 底 径 4.5 最大 径 11.4	内側口縁。外面は口縁部ヨコナデ後体部ナズリ。底部はナズリで平底。底面はほぼ円形だが、ナズリによる凹凸が目立つ。内面は口縁部ヨコナデ。体部上部はナズリで、体部上端に顔面を現し、体部下平ヨコナデナズリ。	7.5YR7/6 橙 やや黄緑 白・赤・灰色釉～ 緑釉と透明顔料少 やや黄緑	貯蔵穴上2cm 口5/12周、胴1/2周、 底全面
2 土師器 杯	口 径 13.0 高 5.0 最大 径 5.4	内側口縁。外面は口縁部に軽いヨコナデ。体一部下と底面は軽いヘラナズリで上げ残し。内面は体部が丁寧なヨコナデナズリ、口縁部ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや黄緑 赤釉乾少やや多、白 黒・赤顔料少 やや黄緑	北東部或上～床土5cmの 口1/4周、底1/3周 67, 73A, 74A
3 土師器 杯	高 残 1.4 底 径 4.2	外底面は1方向のヘラナズリで、中央がわずかに凹む。外面体部下端ヨコナデナズリ。内面は体部に多方向のミガキ。	7.5YR6/6 橙 小や軽い 赤 釉と白・赤釉～緑多、黒・ 透明顔料少 やや黄緑	貯蔵穴上6cm 底全面 68
4 土師器 小形壺	口 径 9.6 高 7.7 底 径 3.6	小形で薄く、胴部が広い。表面が磨滅する部分が多い。外面は口縁部上端ヨコナデ後縁方向の疎らな顔面のミガキ。体部上半の頸部に近い部分にヘラナズリ後残ナズリで、部分的に粘土の艶が残る。体部下平～底部ナズリ。底部はナズリのみによって作られており、形状はほぼ円形で浅く凹む。内面は口縁部ヨコナデ後残ナズリヘラナズリナズリ。体～底部は軽いヘラナズリで凹凸が目立つ。	7.5YR7/4 に近い橙 緑釉 白・赤顔料と白・黒・ 赤・透明顔料少 軟質	北東部或上9～12cmが 接合 口1/3周、胴1/2周、 底全面 5, 57
5 土師器 高杯	高 残 7.0 脚部 15.8	外面は脚部ヨコナデと脚部中～下位にタテヘラナズリ残ミガキ。ミガキは中位では密に、下位では疎らで、中位にはミガキに伴うヘラナズリ残の当たりが残る。また、顔面が確認できる。内面は脚部中位ナズリで、組織が面が粗い。下平はヘラナズリ後残部ヨコナデ。下平には足端の鋸ぎ用具による鋸痕が別個が最も長いところ、4.8cmあり、左右から持ち始めてジグザグに一気に進んでいる。脚部内面の相対する位置にも同様の鋸痕があるが、下平のみで破片であるため、全体の傾向はつかぬ。	7.5YR6/6 橙 やや黄緑 白・赤釉～緑釉少 やや黄緑	内面床土9cm 脚部5.6周 73, SD-201 19-17.5
6 土師器 高杯	高 残 8.9	外面脚柱部は縦方向の密なミガキ。内面は脚柱部上半は斜り目顔面で、下平はタナナズリ、脚部残ヨコナデナズリ。	10YR6/4 に近い黄緑 密 白・灰色顔料やや多、 黒・透明顔料少 破質	北東部或上9cm 底全面 1

7 土師器 高杯	口 17.9 高 15.9 脚径 14.6	外面は杯口部・胴部ヨコナデ後、口一帯部に縦方向の線らなミガキ。杯部外面の調整は目く、結構な凹凸が明瞭。杯底面はケズリ。胴部下端はヨコナデ後、胴部上端はミガキ。胴部上部は密に。胴部下半は縦らに施される。杯口は杯口一帯部にヨコナデ後、縦なし斜方向の線らなミガキ。杯底面は1方向の線らなミガキ。胴部上半の内面はナデで、縦線も凹凸が明瞭に現れ、下半には相対する2箇所を縦一棒状の工具を使用したと見られる条線が引かれる。条線は1方は1本、他方は5本引かれる。胴部底はヘラナデ後ヨコナデ。	7.5Y87/6 橙 やや暗黒 やや赤、白・赤線～細粒少 やや硬質	北西側床土7～10cmが 接合 ほぼ定形 口5/6周、脚柱全周、 脚径1/2周、 53、54
8 土師器 最大 甕 26.5	口 復14.74 高 復15.3 最大 甕 26.5	外面は胴部底～斜傾ヘラナデ後、横み上げ後に密に調整するための斜傾ヘラナズリ。内面は胴部中央ナメヘラナズリ。胴上ナデ後ナズリナメヘラナズリ。内面下部はヨコナデ。外面胴部底にヨコナデ。外面胴部底に20cm以上の深い [注]記175、76、80、82、83、北区中央部他にSI-34-SD-263-SK-214	10Y85/3 に赤い黄褐色 やや暗黒 白・灰色線～細粒多 白・灰緑線と黒・透明細粒少 やや硬質	西部床直上～床土 14cmとSI-34-SD- 263-SK-214の境界付近 口17/12周、胴2/3 周 注記は左欄
9 土師器 甕	高 甕 3.5 底 5.1	外底面は多方ヘラナズリ後に外面に粘土を貼って凹状にする。外面は胴部タテヘラナズリ。内面はヨコナデ後に放射状のヘラナズリ。内面全体にコブ黒と密に施される黒色の汚れが付着する。	10Y85/3 に赤い黄褐色 暗黒い・白・灰色線～粗粒と白 細粒多、透明細粒と黒線少 硬質	西部床土2～7cmが接 合 成体個 77, 81
10 土師器 甕	口 復18.4 高 甕 8.2	口一帯部底が内面で明瞭。外面胴部ナメヘラナズリ。内面胴部にこぼれ 口ヨコナデまたはヘラナズの後に内外口胴部ヨコナデ。	7.5Y86/6 橙 やや暗黒 白粒～粗粒と黒・ 透明細粒多、透明細粒と赤粒 ～細粒少 やや硬質	北部床土4～9cmが接 合 口5/12周 61、62、64、67、北 区中央、D-D 北部
11 土師器 甕	口 復21.4 高 甕 6.1	外面は胴部底～斜傾ナメヘラ。内面は同様のヘラナズリ後に斜傾ナズリ。内外口胴部底はヨコナデで、胴部はナズリ後にハケメを施していた痕が見える。外面に泥が多く付着する。	10Y86/4 に赤い黄褐色 やや暗黒 透明細粒と黒粒～ 細粒多、白・透明細粒少 やや硬質	北部床土18cm 口1/3周、胴1/4周 30
12 土師器 大形甕	口 復16.2 高 甕 23.0 最大 甕 27.4	胴部底面に横み上げ粘土部がある付近の内面が割れ、内外面をおおそくナ ズリ。外面では内面中心～胴部上1/4位に、ナメヘラナズリとヘラナズリ。内 面は胴部上1/4ナズリ。胴部下半は7本1cmのハケ後胴部中央ヘラナズリ。内面は やや線らなヨコナデナズリ。外面全体に密に。内面下部にコブの汚れが付着する。	7.5Y84/2 灰褐色 やや暗黒 白粒～粗粒と黒・ 透明細粒多、白粒～粗粒と赤粒 ～細粒少 やや硬質	北部床土4～10cm 口11/12周、胴11/12 周、脚3/4周、 32、46、61、62、67、D D 北部
13 土師器 甕	口 9.0 高 14.8 底 4.6 最大 15.1	内外面の口胴部にヨコナデ。外面は胴部下ケズリ後胴部下半に斜傾ナズリ。胴 部下半にある横み上げ粘土部より1/4位に、ナメヘラナズリとヘラナズリ。内 面は胴部上1/4ナズリ。胴部下半は7本1cmのハケ後胴部中央ヘラナズリ。内面は 外底面を密に調整して薄く塗らる。内面口一帯部にクレータース状の跡が残る。内 外面の胴部下半～底面は凹状にも変化する。	5Y85/6 明赤色 やや暗黒い・白・赤粒～細粒多、赤・灰 色・透明細粒～粗粒と黒線少 やや硬質	北部床直上～床土9cmが 接合 口17/12周、胴3/4周、 成体個 36、60、D-D 北部、北 区中央部
14 土師器 大形甕	口 復17.0 高 甕 26.3 最大 甕 28.4	外面は胴部底～斜傾ナメヘラナズリ。内面は胴部ヨコナデ後に横み 上げ粘土部を密に調整して凹状にする。外面は横おほ斜傾のヘ ラナズリ。内面は底面に多方向に胴部底に横傾のヘラナズリ。	10Y87/3 に赤い黄褐色 やや暗黒 白・赤・灰色線～粗粒多、 黒・透明細粒～粗粒少 やや硬質	北部床土4～15cmが接 合 口1/2周、胴5/6周、 成体個 注記は左欄
15 土師器 大形甕	高 甕 2.7 底 甕 7.9	外底面はナズリ後に中央を残して凹状にする。外面は横おほ斜傾のヘ ラナズリ。内面は底面に多方向に胴部底に横傾のヘラナズリ。	10Y87/4 に赤い黄褐色 やや暗黒 白・赤・灰色線～ 粗粒多、半透明細粒と黒 線粒少 硬質	北部床直上19cm 底1/3周
16 土師器 大形甕	口 16.4	外面口胴部に横み上げ粘土部を密に調整して凹状にする。その下縁は少し整っていない。それ以外は内外面全体に1等なヨコナデ。	5Y85/6 明赤色 やや暗黒い・白・灰色線～粗粒 と黒・透明細粒～粗粒と赤 線少 硬質	北西部床土9cm 口1/6周 53
17 土師器 大形甕	口 復17.2 高 甕 30.2 底 6.0 最大 甕 26.7	外底面は外周に薄く粘土を貼って凹状にする。外面は胴部タテヘラナズリ後胴部 下縁と底土8cm付近を中心にタテヘラナズリ。内面は胴部ヨコナデナズリ。内 外面の口一帯部はヨコナデで受口状にする。外面中央位以上に泥が多く付着する。 内面は外周部が縦熱状になり、内面にコブ黒の汚れが付着する。 [注]記16、8～20、22～24、26、28、58、59、64、北区中央部、北 区D-D	10Y86/4 に赤い黄褐色 暗黒い・白・赤・透明細粒～粗粒 と黒線多、白・赤線少 軟質	北部床土3～18cmが接 合 口1/12周、胴5/6周、 成体個 注記は左欄
18 石器 碇石	長 甕 10.9 幅 甕 10.6 厚 甕 6.9 重 甕 763.0	自然露出した全周を砥面に利用する。石材が硬質なので研磨痕は不明瞭。研磨面 周に足らぬように、よく磨耗して平滑になっている部分と、それに加えて 磨いたような面が目の部分と、あまり磨耗していない部分がある。周の 下縁が粗粒状で、その磨面の外周が少し丸くなっている。研磨後 にも研磨に使っていたと考えられる。被熱面や付着物は見られない。	5Y5/1 暗褐色 研磨面は硬質なホルンフ ェルス	新築6底土4cm 両端部欠 70
19 土師器 有孔円板	長 2.0 幅 1.8 厚 0.29 重 2.1	表面両面ともに1方向に研磨されており、やや強い磨痕が見られる。縁部底 には形研時のものと見られる新磨面が残る。側面は穿孔孔と同方向に研磨され ており、細かな磨痕がある。表面からの穿孔孔と見られ、初孔径1.77mm、終孔 径1.61mmで、裏側の孔外縁には穿孔孔の磨面がある。裏側表面は裏面の石片 を使用。	2.5C57/1 オリーブ灰 研磨面は硬質な粘石片質	東部の縦方底土9cm (SI- 34 床内) 完形 65
20 土師器 大形甕	長 6.53 幅 2.31 厚 9.9	断面方形。大半はやや強い研磨面を残す。表面の左右縁は縦に粗粒状の研 磨面と見られる。表側中央と裏側右縁辺に形研時の新磨面が残る。側面は部 分的に穿孔孔と同方向に研磨されており、先端部が最も人志。穿孔孔は表側からと見られ、 初孔径1.64mm、終孔径1.51mmで、裏側の孔の周囲は穿孔孔にわずかに 丸磨している。	5G3/1 暗褐色 研磨面は滑石片質	北部床土1cm 完形 65
21 土師器 大形甕	長 甕 3.77 幅 甕 1.68 厚 甕 0.45 重 甕 3.03	表側のL字状が明瞭で、表面ともほぼ1方向に研磨され、細かな磨痕が見 られる。裏側の研磨面および上縁には形研時の新磨面が残る。側面は基部 を中心に、穿と同方向に部分的に研磨される。穿孔孔は表側からと見られ、 初孔径1.64mm、終孔径1.51mmで、裏側の孔の周囲は穿孔孔にわずかに 丸磨している。	N3/0 暗褐色 研磨面は滑石片質	SI-34aの粘床土の土塊 P9 内 先端部欠 70、SI-34b
22 土師器 有孔石片	長 2.48 幅 0.73 重 6.88	平面三角形で、やや強い研磨面を残す。表面は全体に磨耗した痕が 付着しており、磨面から形研したものと思われる。左縁縁に工具による切 痕がある。側面は形研時の新磨面と工具による切痕が明瞭で、黒色物質が 付着した2箇所あり、右縁は3.0mmで磨耗して凹状になっている。左縁は 2.5mmで、右縁は磨耗して凹状になっている。穿孔孔は表側からと見られ、 初孔径3.10mm、終孔径2.30mmで、裏側の孔の周囲はわずかに丸磨している。	2.5C57/1 オリーブ灰 研磨面は軟質粘石片質	完形

SG10区 SI-04 (第138図、写真図版119-120)

【位置】SG10区中央部の19-18グリッドにある。同じく古墳中期の建物は南にSI-53・55、東にSI-56・57がある。古墳後期のSI-51a・b・cと、視覧の可能性が高いSX-308と、時期不明のSE-345(中世?)

と P-429 に切られる。時期不明の P-428 に切られる可能性がある (SI-104 → SI-51abc → P-428?・429・SE-345)。時期不明の SK-328・329 が SI-104 を切る。北西部の掘り込みは砂利が多く入り、SI-104 に伴う土坑ではなくて擾乱の可能性が高い (断面 E-E')。南壁付近の上部は SI-51b (旧名称 SI-109) に破壊され消滅しているが、SI-51b の下層に SI-104 掘方の下部がわずかに残る (断面 E-E')。

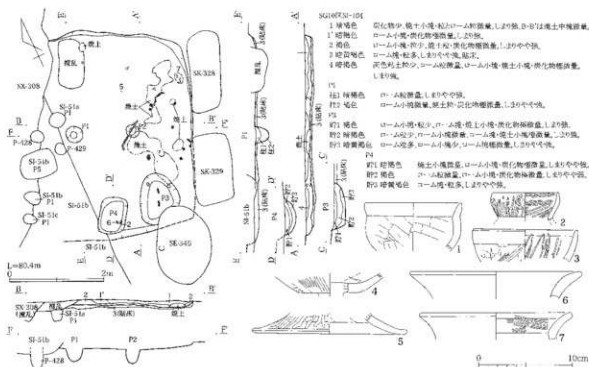
【規模と形状】 長方形の建物跡で、主軸方位は GN-24°-E、主柱穴 P1 と P2 を結ぶ方位は GN-66°-W。東西残長 3.14 × 南北 4.46m で、東西の復原長は 3.80m (P2-東壁間の距離 1.27m が、P1-西壁間の距離と同じ場合)。残存壁高は南壁で最小 6cm、北東隅で最大 12cm。主柱穴は 2 本で、P1-P2 の柱間は東西 1.26m。底面形から推定した柱径は 12 ~ 14cm 程度で、床面からの深さは P1=28cm、P2=34cm。梯子穴などの入口施設は見られない。貯蔵穴は南東隅の P3 と南中央の P4 がある。SG10 区では SI-6 などに複数貯蔵穴がある。P3 は不整形円形で東西 84 × 南北 108 × 深さ 21cm。P4 は隅丸長方形で東西 56 × 南北 76 × 深さ 23cm。P3 は貯蔵穴としては少し不整形で、遺物もなく、埋め戻して上に貼床をしたように見える。SI-84a のように P3 から P4 へ作り替えたとも考えられる。壁溝・間仕切溝はない。

【火処】 確認されなかった。建物の時期から考えると炉を持っていた可能性がある。

【覆土】 自然埋没と思われる。テフラの層や粒などは認められない。焼土と炭化材が多いので、火災建物の可能性がある。SG10 区の火災建物は SI-66 などがある。

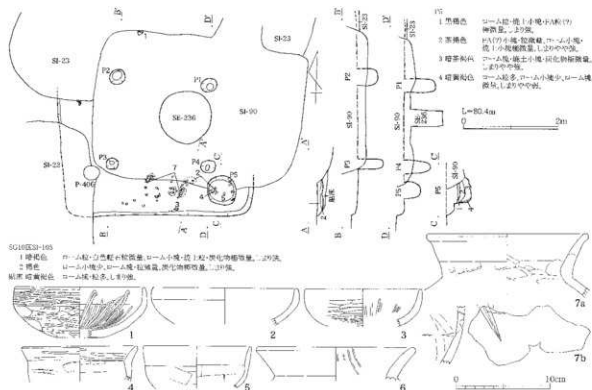
【遺物出土状況】 東半部の床面付近や貯蔵穴 P4 の底面上 17 ~ 20cm で、少量の土師器小破片が出土した。重複する時期不明 (中世?) の SE-345 内で残存度の高い土師器壺が出土し、SI-104 から流入した可能性がある (第 221 図)。

【出土遺物】 遺物はごく少ない。小形壺 (2) の口縁部が短縮化しているので、古墳中期後葉とみられる。土師器は壺甕類が主体で杯・高杯・小形壺も混じる。重複する SI-51a ~ c から混入した古墳後期の遺物もある。SE-345 で出土した古墳中期の遺物は SI-104 から流入した可能性が大きい。図示以外の土師器合計 89 片・693g の内訳は、杯 70 片・381g、高杯 2 片・22g、小形壺 1 片・12g、壺甕類 16 片・278g。



第81表 権現山遺跡 SG10区 SI-104 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ [cm] ² ・ [g]	特 徴	色調 胎土・底成 (または素材)	出土状態 残存状況 注記
1 土師器 杯	口 復 10.3 高 残 5.1	口~体部境の縁は内面でやや明瞭。外面は体部ナデ後ナメヘラズリ。内面は体部ナメヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。破片が小さいので復原性は参考値。	5YR5/4 に近い黄緑 中や粗い 白・黒・灰白色粒と黒・透明 細粒やや多 軟質	口 1/12 周。胴 1/6 周 一括
2 土師器 小形壺	口 復 6.9 高 残 3.0 胴径 復 7.4	内脣する短い口縁部の内外面にナメナデ後ヨコナデして、外面に縦位と内面に横位のヘラミガキ。	10YR7/4 に近い黄緑 中や粗い 褐色 白・黒・赤黒粒中やや 少 軟質	野塚穴 P4 直上 17cm 口 1/4 周 11
3 土師器 小形壺?	口 復 11.2 高 残 3.4	外面は斜ヘナデで粘土のヒビを少し残し、口縁部ヨコナデ後に施らるナメヘラミガキ。内面はおそらくヨコナデ後に口縁部ヨコナデ。全体をタテヘラミガキ。小形壺の口縁部と見られるが、杯の可能性もある。	10YR6/4 に近い黄緑 中や粗粒 白黒粒 少 軟質	口 1/6 周 一括
4 土師器 高杯	高 残 1.7	外面は杯底部を横~斜位ナデ後に杯体部ナメハケ。内面は縦~斜位のヘラナデ。	7.5YR5/8 暗 褐色 白・黒・透明細粒少 中や硬質	杯底 1/4 周 一括
5 土師器 高杯	高 2.2 脚部 復 16.4	外面は脚部ナデ後に脚部をヨコナデして全体をタテヘラミガキ。内面は脚部ナメナデ後に基部ヨコナデ。	10YR4/6 暗 中や密着 白と白・黒・赤・ 透明細粒少 中や硬質	基部直上 2cm 脚部 1/8 周 2
6 土師器 蓋	口 復 18.2 高 残 2.9	口縁部内外面ヨコナデ。	10YR6/4 に近い黄緑 中や粗い 透明粗~細粒多。 白・赤黒粒中やや多。赤黒粒少 中や軟質	野塚穴 P4 床 上 20cm 口 1/6 周 12
7 土師器 蓋	口 復 16.2 高 2.9	内面口~頸部境に横あり。内面口縁部ヨコナデ後に内面上端と外面口縁部をヨコナデ。	7.5YR6/4 に近い暗 中や粗い 白と白・透明粗 粒多。白・黒・透明細粒少 硬質	基部床直上 口 1/3 周 7



第139図 権現山遺跡 SG10区 SI-105 遺構・遺物

SG10区 SI-105 (第139図、写真図版 120・207)

【位置】 SG10区南部の 18-16・17 グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、北に SI-25・28・30 がある。古墳後期の SI-22・23、平安時代の SI-90、時期不明(中世?)の SE-236 に切られる(SI-105 → SI-22、SI-105 → SI-23 → SI-90 → SE-236)。時期不明の P-406 が SI-105 と SI-22 を切るかと推定される。新旧関係は不明。現地調査時に SK-279・280・281・282 と呼称した柱穴を、この SI-105 の主柱穴 P1 ~ P4 に改称した。

【規模と形状】 方形で主軸方位は GN-2°・E。東西 4.20m、南北残存長 2.46m 以上。残存壁高は西壁中央で最小 3cm、南東部で最大 14cm。主柱穴 4 本の柱間は南北 1.75m (東側) ~ 1.90m (西側)、東西 1.95m (北

第 82 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-105 出土遺物

番号 種類 形状	大きさ (縦×横×厚)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態 位置
1 土師器 土師杯	口 13.9 高 5.2 底 3.3	外底面は円筒方向のヘラケズリで凹底状。外面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。体部ヨコヘラケズリ後に縦ならなヨコヘラミガキ。内面はヨコナデ後にナメヘラミガキ。	25YR6/6 橙 やや暗黒 白・赤黒粒やや多 白・黒黒粒少 やや軟質	北西部の SI-23 に流入 (床土 1cm) 口 1/3 周、底 1/2 周 SI-23 173
2 土師器 杯	口 復 15.4 高 復 3.9 最大 復 15.8	断面が磨耗して調整が不明。外面体部は小さくやや難なケズリまたはナデで。外面口縁部と内面は丁寧に調整されていた可能性がある。ミガキの痕跡は不明。 [注記] 12、13、胎床一筋、SI-90 2	7.5YR7/6 橙 やや暗黒 赤黒粒やや少。白 黒粒と灰色粒 少 軟質	南東部床土と貯蔵穴 直上 15cm の複合 口 1/4 周 注記は左欄
3 土師器 杯	口 復 12.2 高 復 4.0	特に内面で表面が磨耗しており、調整が不明瞭な部分がある。外面は口縁部ヨコナデ。体部ナデ後にヨコヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデと体部ナデ後縦ならな調整のミガキ。	10YR6/6 明黄緑 やや暗黒 赤黒粒と数箇白粒 粒やや多。灰色粒と黒・透 明細砂少 やや硬質	南東部直上 口 1/2 周、体 1/6 周 21
4 土師器 杯	口 復 12.0 高 復 3.7	口一帯部境の後に内面で明瞭。内外面ともに体部ヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。	7.5YR5/6 明黄 やや暗黒 赤黒粒やや少。 白・黒・赤・透明細砂少 やや軟質	貯蔵穴直上 26cm 口 1/4 周 11、一筋
5 土師器 杯	口 復 11.5 高 4.6	口一帯部境の内面に稜を持つ。断面が磨耗して調整が不明瞭だが、内外面の体部はヨコヘラナデの可能性あり。口縁部はヨコナデで、ヘラミガキをしているかどうかは不明。	7.5YR7/6 橙 やや暗黒 赤黒粒多。黒 黒粒少 軟質	貯蔵穴直上 口 1/8 周 5
6 土師器 壺	口 復 16.2 高 復 3.6	内外面ヨコナデ。内面口縁部に浅い凹状稜の痕が焼成前に付いている。	5YR5/6 明赤 やや暗い 白・黒・細粒と黒・ 透明細砂やや多。灰色粒少 軟質	口 5/12 周 一筋
7a 土師器 大形壺	口 復 16.8 高 6.7	外面は頸部ナメヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面は肩部ナデ。口縁部ヨコナデ後に頸部ナメヘラナデ。7b と同一個体の可能性あり。	5YR6/6 橙 やや暗い 白・黒・灰色粒 ・細粒多。白粒と赤・透明細砂 少 軟質	口 周土 13cm 口 1/4 周、頸 1/3 周 34、一筋、一筋ペルト面
7b 土師器 大形壺	高 復 6.6 最大 復約 25	外面はナデまたはヘラナデと見られるが、磨耗して不明瞭で、断面 V 字の加工が焼成後に行われている。土器片を研磨機に転用したものかもしれない。内面はナメヘラナデで、粘土土の積み上げ面を残す。7a と同一個体の可能性あり。	7.5YR6/6 橙 やや暗い 白・黒粒・細粒と 赤・透明細砂やや多 軟質	南東部上 3cm 頸 1/6 周 19、一筋

側) ~ 2.03m (南側)。柱穴の土層断面記録がない。柱穴底面形からみた推定柱径は 10 ~ 15cm。推定床面レベルからの深さは P1=68cm、P2=46cm、P3=60cm、P4=58cm で、北東の P1 と南西の P3 がやや深い。貯蔵穴 P5 は南東隅にあり、東西 60 × 南北 62 × 深さ 33cm。入口施設・壁溝・間仕切溝はない。

【火処】不明である。古墳中期後葉なので炉を持っていた可能性があり、SI-90 などに破壊されたと考えられる。
【覆土】南壁部および貯蔵穴の土層からみて自然埋没と思われる。古墳後期初めに降下した Hr-FA テフラの可能性を持つ白色塊や粒が、竪穴覆土 1 層や貯蔵穴 P5 の 1・2 層に見られる。

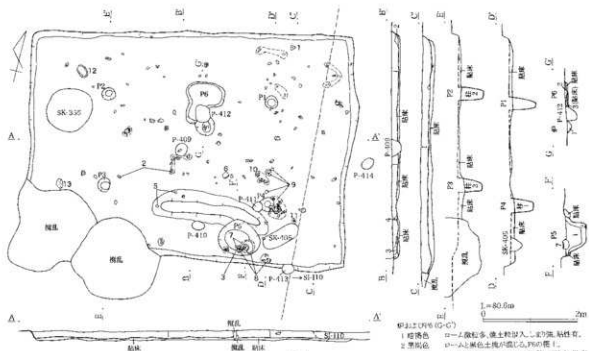
【遺物出土状況】わずかに残っていた竪穴南端と貯蔵穴に破片がやや多く、柱穴には遺物がない。残存度の高い遺物はない。1 は重複する古墳後期の SI-23 に流入していた。重複する古墳後期の SI-22 に混入する古墳中期の土師器高杯と須恵器甕も、SI-105 から流入したのかもかもしれない (SI-22 の遺物番号 11・12)。

【出土遺物】遺物は少なく、小破片がほとんどで、大きな破片がない。本来は遺物が多かっただろうが、他の建物に大半が壊されて減ったと考えられる。土師器は杯と壺が多く、小形壺と甕が次ぐ。杯は内斜口縁の 4・5 と半球状の 1 ~ 3 があり、口縁部を横方向によく磨き (4)、深い (1 ~ 3)。鉢形に口が開く杯は見られない。凹底 (1) の横椀杯からみて古墳中期後葉である。図示以外の土師器および焼粘土塊合計 183 片・1.566g の内訳は、杯 53 片・286g、高杯 4 片・24g、壺甕類 121 片・1.221g、焼粘土塊 5 点・25g。

SG10 区 SI-106 (第 140 図、写真図版 120・121・173・174・207・208)

【位置】SG10 区北部の 20-17・18 グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、北に SI-60、西に SI-50、南に SI-48 がある。古墳後期の SI-110 に東端部を切られ、その下層に SI-106 の掘方が残る (断面図 A-A')。時期不明の SK-355・405 と P-412・413 に切られる。中央部~南部の床面で確認した時期不明の P-409・410・411 は、SI-106 の貼床に覆われていないので SI-106 を切る可能性が高い。P-411・413 は SG10 区中央部柱穴群 (第 204 図) に含まれ、P-409・410・412 も同様の性格が考えられる。SG10 区中央部柱穴群は時期不明の柱穴群で、一定数の中世柱穴を含む。

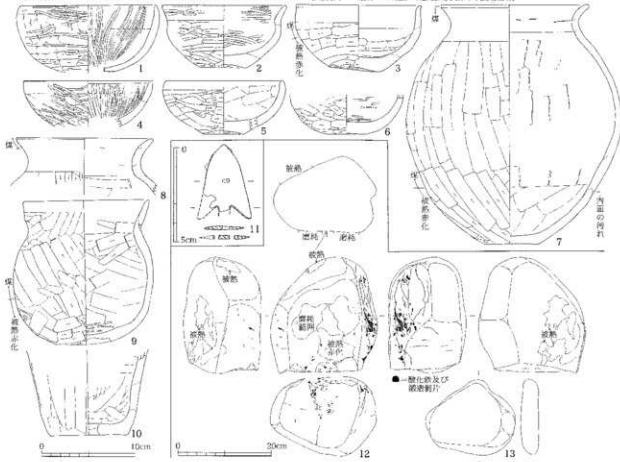
【規模と形状】長方形で、主軸方位は GN-10°-W (建物の長軸は GN-80°-E)。東西 6.84 × 南北 5.00m。残存壁高は 12 ~ 18cm。主柱穴 4 本の柱間隔は南北 1.94 (西側) ~ 2.14m (東側)、東西 3.46m。柱穴底面形



SG10503-106
 1 掘溝内
 2 溝底色
 3 溝底色
 4 掘溝溝底
 5 溝底色
 6 溝底色
 7 溝底色
 8 溝底色
 9 溝底色
 10 溝底色

10-1 掘溝内
 10-2 掘溝底
 10-3 掘溝底
 10-4 掘溝底
 10-5 掘溝底
 10-6 掘溝底
 10-7 掘溝底
 10-8 掘溝底
 10-9 掘溝底
 10-10 掘溝底

10-11 掘溝底
 10-12 掘溝底
 10-13 掘溝底
 10-14 掘溝底
 10-15 掘溝底
 10-16 掘溝底
 10-17 掘溝底
 10-18 掘溝底
 10-19 掘溝底
 10-20 掘溝底



第140図 権現山遺跡SG10区 SI-106 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10区

から推定した柱径は13～18cm程で、床からの深さはP1=48cm、P2=48cm、P3=41cm、P4=43cm。

南東部の貯蔵穴P5は楕円形で東西88×南北72×床面からの深さ43cm。P5の北にある土手状高まりは東西長252cmで、入口と貯蔵穴を「コ」や「ヨ」字形に囲む施設だった可能性が高い。この土手状施設の中心が、地山ロームを掘り残して作られていることは珍しい(断面B-B'とF-F')。平坦な貼床土にローム質土を貼って土手状施設を作る場合が一般的である。炉の北側にあるP6は東西幅46cm(南部)～84cm(北部)、南北長92cm、床面からの深さ2～4cmで、焼土を含まない。壁溝・間仕切溝はない。

【炉】中央部の少し北にある。東西40×南北残存40×床から深さ4～10cmで浅く、焼土粒を含むがその量は少ない。炉の北側にあるP6と連続する部分の状況は後世のP-412に切られて不詳(断面G-G')。

【覆土】壁際の堆積状況からみて自然埋没と思われる(断面B-B')。テフラの層や粒などは見られない。

【遺物出土状況】南東部に多い。南東柱穴P4の北東側ではほぼ床面に土師器小形甕がある(9)。貯蔵穴P5の埋土中には、正立した土師器甕1個(7)と、別個体の甕の口～胴部破片(8)がある。西部の床面に大きな金床石(12)と台石(13)がある。貼床中にも遺物が少しあり、北東隅付近に目立つ。

【出土遺物】古墳中期後葉の、口が開く杯(2)や内外面を磨く初期横俵杯(1・4)がある。10は珍しい円筒形の小形甕。7・8・9は炉で使った痕跡がわかる甕で、7はほぼ完形。

遺物は多いが小片が大半で、形を復元できるものは少ない。古墳後期のSI-110に切られるので、SI-110からの混入品を含む可能性がある。破片は壺甕類が最も多い。杯も破片数が多く、図示した以外に3個体分はある。内斜口縁杯より半球形杯が多く、ほとんど平底である。内斜口縁杯の口縁部が開くので古墳中期後葉と考えられる。図示以外に二重口縁状の壺破片や、9に似た小形甕がある。高杯・小形壺・甕は破片が少なく、小形甕(10)以外は接合・図示できなかった。図示以外の土師器合計493片・3.439gの内訳は、杯173片・732g、高杯27片・221g、小形壺7片・111g、壺甕類284片・2,313g、甕2片・62g。

11は有孔の短柄甕で、SG10区SD-527にも破片があり、中島笹塚12号墳や野平塚14号墳にもある(『東谷・中島地区遺跡群』4・9)。金床石(12)は、『東谷・中島地区遺跡群』10で権現山遺跡の鍛冶関連遺物全体を報告後に確認したため、同書pp.490-498には掲載していない。他に鍛冶関連遺物がないので、周辺の鍛冶関連遺構から金床石をSI-106に廃棄したと考えられる。甕も出土したが、小さめで形も統一性がない。河川礫でなく地山礫層に由来する礫を含むと想定される。中世の土師質小皿(かわらけ)が混入していて、P-411・413を含むSG10区中央部柱穴群(中世の可能性)との関連が考えられる。

第83表 権現山遺跡 SG10区 SI-106 出土遺物

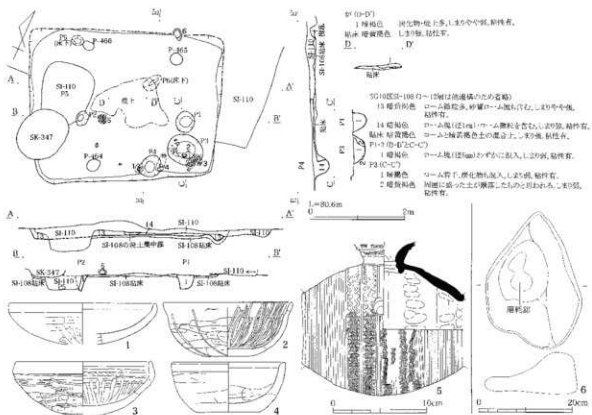
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 散土・色成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 14.4 高 残 7.0 底 径 15.2	外面は口縁部ヨコナデと体部に斜いナデで、口～体部に縦ならミガキ。体部には粘土の翹が残る。体部下平はケズリで、ミガキが施された可能性もある。内・外面は口縁部ヨコナデと体部に斜いナデで、口縁部は放射状ヘラミガキ。	10YR7/4 土に近い黄褐色 やや軟弱 赤黒粒と白・黒・透明細粒少 やや軟弱	北東部床面上 口1/6周 22
2 土師器 杯	口 径 13.0 高 6.6 底 径 4.5	外底面は多方向ヘラズリで凹底。外面は口縁部ヨコナデ後に体部にヨコヘラズリ。内面は口縁部ヨコナデ後に多方向のやや縦ならミガキ。底面は放射状ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。	2.5YR5/8 明赤褐色 やや軟弱 赤黒粒と白細粒多 赤・赤・透明細粒少 やや軟弱	南西部床面上 口1/6周、底1/2周 69、南西
3 土師器 杯	口 径 13.3 高 6.8 底 径 5.3	外底面は多方向のナデで凹底。外面は上位ナデ後に中～下位ヨコヘラズリ。内底面は1～2方向の斜いヘラズリと内面体部ヨコヘラズリ。内外面は口縁部ヨコナデ。外面に炭黒痕と靨が見られる。	7.5YR6/6 暗 やや軟弱 白・赤・灰色粗粒 粗粒やや多。黒・透明細粒少 やや軟弱	貯蔵穴底上40cm 口1/3周、底全周 P5-1991025
4 土師器 杯	口 径 13.8 高 残 4.8	外面は口縁部斜いヨコナデと体部上半に斜いナデ。体部下平ケズリ後口～体部に縦ならミガキ。外面は口縁部ヨコナデと体部に斜いナデで、口縁部には放射状ヘラミガキ。外面の口縁部には靨が付着する。	5YR6/6 暗 やや軟弱 白・赤粗粒 少。灰色粗粒と黒・透明細粒少 やや軟弱	北西部と片と北東部1片と 敷成内5片 口1/6周 北西、船庫内、北東ト レンチ
5 土師器 杯	口 径 12.2 高 5.7 底 径 4.3 最大 底 13.0	外底面は多方向ヘラズリで凹底。外面は口縁部ヨコナデ後に体部にヨコヘラズリ。内面は口縁部ヨコナデ後に多方向のやや縦ならミガキ。底面は放射状ヘラミガキ。底面は放射状ヘラミガキ。底面は放射状ヘラミガキ。底面は放射状ヘラミガキ。	7.5YR8/4 浅黄褐色 やや軟弱 白・透明細粒少 赤・黒粗粒少 やや軟弱	南部床面上～床上5cmが 接合 口1/3周、底5/12周 径、103、高内、船庫内
6 土師器 杯	高 残 4.2	外面は体部に縦一斜いヘラナデ。下位～底面を土とするヨコヘラズリ。内面は底面に多方向ヘラナデ。体部ヨコヘラズリ後にヘラミガキ。底面が滑く黄褐色粘土を使い、体部には明赤黒色粘土を使う。	5YR5/6 明赤褐色 やや軟弱 白粒と白・黒粗粒 粗粒やや多。赤・透明細粒少 やや軟弱	中央部床面上10cm 底全周 84
7 土師器 甕	口 径 14.8 高 23.2 底 径 5.7 最大 22.8 重 残 1960.5	上り下方の斜いナデ。外面は縦ならヘラナデ。横み上げ休止部の中心部より下方の斜いナデをナメヘラズリ。内面は下位をナメナデ後に中位に白をヨコヘラズリ。内外面は口縁部ヨコナデ。胴下位の外面が炭黒で内面に汚れが付く。中位以上の外面に靨がやや付着する。	7.5YR6/4 土に近い黄褐色 やや軟弱 白・透明細粒粗粒多。 灰色粗粒と白・赤・透明細粒少 やや軟弱	貯蔵穴底上20cm ほぼ完形 口1/3周、底5/12周 径、P1-2、P5-1991022。 覆トシ、南

8	土師器	口 径 14.5 高 残 6.0	胴部に外面タテヘラズリと内面ヨコヘラナデ。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部上位の外周に少量の泥が付着する。胴部は破片数が少ないため、接合・復原ができない。 [注記] P90、P1-2、P1一括、P5-1991022。南、南東、船床内	7.5YR4/6 周 粗い、白輝～細粒多、灰色・透明質～細粒と黒細粒少 やや硬質	南部床土 3cmと貯蔵穴床土 40cmが接合 口1/4周、口1/3周注記は左欄
9	土師器 小形甕	口 径 13.4 高 15.2 最大 14.9	外面は下位ヨコヘラズリ、中位ナメヘラズリ、胴部ナメナデ、内面はヨコナメヘラズリ後に胴部ヘラズリと底付近に寡なヘラミガキ、内面は内面ヨコナデナデ。	5YR5/6 粗 やや粗い、白・赤・灰色調と白・黒細粒多、やや軟質	南部床直土 一帯穴 50、53、54、94、南
10	土師器 小形甕	高 残 9.0 底 残 8.0 最大 11.5	外底面は多方向のナデ。外面胴部はタテヘラナデ。内面は底面に円筒方向と体部に斜位のヘラナデ。底面中央に1孔を持ち、孔縁部もナデ。	10YR5/8 黄褐色 やや軟質、白・黒・赤・透明 細粒少、やや硬質	南部床土 8cm 直土 1/6周 55
11	鉄製品 鉄線	長 3.9 幅 2.9 厚 0.2	短剣形鉄器部正身部。縦 2mm×横 3mm程度の孔を1孔持つことが顕著で観察され、その孔の左右半分が錆で見えない状況。胴身部や柄筋部に本質の付着物はない。残存重量 3.4g。		南部床土 8cm 片方の逆側長 49
12	石器 金床石	長 24.6 幅 22.6 厚 16.2 重 12.2kg	岡の下部が大きく欠けていて自然石を用いた金床石。岡の正面と右側面を打面に利用している。正面は赤化岩片が顕著であるが、鑑定切片や鉄銹の付着はほとんど多く付着するが、被熱面は不明。これ以外の外面にも被熱面と鉄銹がそれぞれ付着している。鑑定用遺物標成無し。	2.5Y7/3 浅黄 鑑定用被熱面炭灰質 硬度 2 不計測	北西部床直土 定形 77
13	石器 石臼	長 19.0 幅 16.0 厚 3.8	扁平な自然礫をそのまま利用。図示した面は平坦で、裏面には縦方向の溝が少しある。加工・使用跡や付着物は見られない。重量 1619.0g。	7.5Y6/1 灰 鑑定用被熱面安山岩	南西部床直土で図示した面を上に向ける 定形 75

SG10区 SI-108 (第141図、写真図版 121・122・208)

【位置】 SG10区北部の20-18グリッド。古墳後期のSI-110と時期不明のSK-347に切られる。SI-108の貼床除去後に古墳時代のP-464・465・466を確認したが、SI-108とP-464～466の前後関係は不明瞭で、この3基がSI-108より新しい可能性もある。SI-108とP-465～466→SI-110→SK-347の順序になる。P-465・466の上にSI-110の遺物が載るので、SI-110よりもP-465・466が古いことは間違いないと思われる。

【規模と形状】 長方形で、南側に建物入口を想定した場合の南北主軸方位はGN-21°-W（東西軸の方向はN-69°-E）。東西4.08×南北3.30mで、北壁上部が不明確なので南北長は推定値。残存壁高は南西部で最大14cm。主柱穴はP1とP2の2本で、柱間は東西2.24m。P1の断面形状から推定すると柱径は12～15cm程度で、床面からの深さはP1=30cm、P2=39cm。貼床除去後に確認した小穴2基は、P5が径26cm・床面からの深さ12cm、P6が径43×26cm・床面からの深さ17cm。



第141図 権現山遺跡SG10区 SI-108 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

貯蔵穴を2箇所持つ、南東隅にある貯蔵穴 P3 は東西 75 × 南北 62 × 深さ 25cm で、P3 の覆土 2 層は周圍に設けた土手状盛土が崩れて北側から流入した可能性が現地記録されている。貯蔵穴 P4 は東西 49 × 南北 42cm × 床から深さ 31cm で、建物の貼土と同質の土が北壁部にも貼られている（断面図 E-E'）。P4 は壁穴と同じ覆土 14 層と一緒に埋没している。P4 を入口施設の梯子穴と考える余地もあるが、やや深く大きいので貯蔵穴と判断した。貯蔵穴が複数ある建物跡は、SG10 区では SI-6 などがある。床面東端に窪んだ部分がある（断面図 A-A'）。壁溝・間仕切溝はない。

【灰】明確な掘り込みを持たないが、床面中央部を仮に使用したと考えられる。中央部床面で東西 168 × 南北 109cm の範囲に広く焼土と炭化物粒があり、断面図 D-D' の部分に焼土が最も多い。

【覆土】ほとんどが暗黄褐色の 13 層だが、中央部から南部にかけては土質が少し異なる（14 層）。テフラの層や粒などは認められない。SI-108 の覆土上部が SI-110 に切られるところでは、SI-108 覆土と SI-110 貼床土の区別が困難であった。

【遺物出土状況】床直上に埴形甕がある（5）。南東部に遺物が多い。貯蔵穴 P3 の上部から南側床面直上にかけて土師器杯が多い（2・3）。貯蔵穴 P4 内の上にも杯がある（1・4）。台石（6）は、壁穴床レベルの約 10cm 下まで床面を掘り窪めて据えていた。ここは北壁が不明確な位置で、北壁も外側へ掘り広げていた可能性がある。

【出土遺物】遺物は少ない。1・3 のように白色針状物質（骨針）を含む搬入品の土師器は SG10 区 SI-23 などにある。TK-208 型式の須恵器埴形甕は、口縁端と体部両端が欠損したために遺棄された土器であろう。埴形甕は磯岡北 1・3 号墳にある（『東谷・中島地区遺跡群』7）。土師器は壺甕類と杯類が中心で、それ以外の器種は僅少である。図示以外の土師器合計 34 片・345g の内訳は、杯 10 片・55g、高杯 2 片・5g、小形壺 1 片・3g、壺甕類 21 片・282g。台石（6）は、窪んだ部分が少し磨耗するので、石皿つまり製粉具のような用途が想定される。

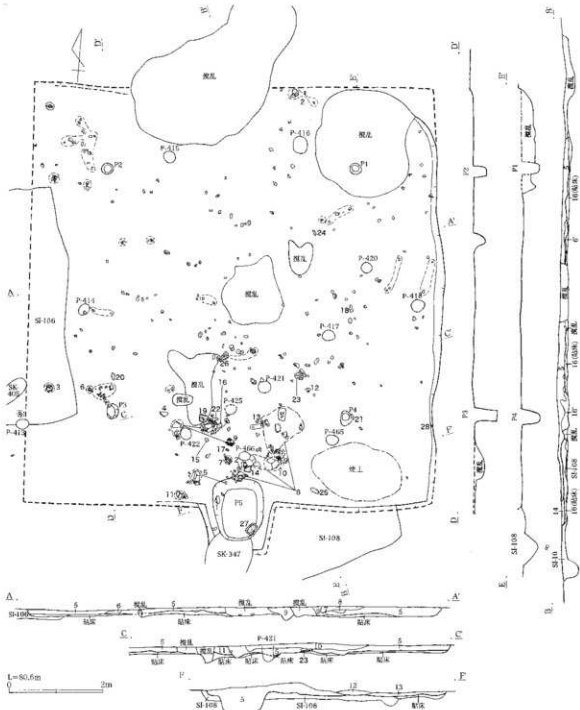
第 84 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-108 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ [cm・g]	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態 注記
1 土師器 杯	口 覆 15.4 高 覆 4.3 最大 覆 15.9	外底面に縦位と外面体部に横位のヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部は磨耗して調整不詳で、放射状へラミガキしていた可能性もある。	2.5YR5/6 明赤黒 やや微細 白・黒・赤・ 灰色・透明細粒やや多、白色 針状物質少 やや微質	南東部床 2cm 口 1/6 周 5
2 土師器 杯	口 覆 13.7 高 5.7 底 4.4	口一側部端の縁は、内面が明瞭で外面には縁がない。外底面ナデと口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラズリ。外面全体に疎な放射状へラミガキ。内面は口一側部にヨコナデ後、密な放射状へラミガキ。	5YR6/8 暗 やや微細 赤黒～細粒やや多、 白黒～細粒と黒・透明細粒少 やや微質	南東部 P3 底上 7～25 cm が接合 口 2/3 周、底全周 P3-1 中央部、P3-4
3 土師器 杯	口 14.2 高 5.8 最大 15.0	外面は底部に多方向と体部中位に縦方向のヘラズリ。口縁部はヨコナデで、外面体部上位が凹む。外面体部中位と内面上平をヨコヘラミガキ。内面体部に斜放射状のへラミガキ。	5YR5/6 明赤黒 やや微細 白・黒・透明細 ～細粒やや多、赤・灰色細粒と 白色針状物質少 やや微質	P3 底上 24cm 口 2/3 周 P3-1
4 土師器 鉢	口 覆 11.8 高 5.3 底 6.6 最大 覆 12.2	外底面はナデで平底。内外面は体部ナデ後に口縁部ヨコナデと見られるが、磨滅して不明瞭。	10YR5/4 浅黄緑 やや微細 白・透明細粒少、 赤黒～細粒と黒細粒少 微質	南東部床 1.5cm と P4 底 上 3.3cm、SI-110 に小円 1 点散入 口 1/36 周、底 11/12 周 6、SI-110 南東トレンチ
5 須恵器 埴形甕	高 覆 16.2 口径 覆 17.0 口径 14.3 孔径 1.3 重 覆 1185.6	体部縁を土上に向けた状態で、縦位の平行溝を調整後にカキメ。体部の中央・右の 3 箇所に建線を入れて体部を 4 分割し、左平に 2～3 周、右平に 1 周の磨滅状況。工具は 5～9 番で、磨文方向は左平が円の下→上方向、右平が上→下方向。円の右端面は体部成形後に磨滅した板が外れる。頸部は 4 層工具で右→左方向へ波状文を口縁部と頸に施す。体部内面は縦い筋をヨコナデとよませる工面。頸部内面はわずかに斜り目状。全体の上下部に縦位の白点磨滅。	7.5YR4/1 灰 細密・白濁～細粒と黒色消出 粒少	中央部床直上 左端外周・右端面・口 縁部中央 2
6 石器 台石	長 28.6 幅 20.0 厚 9.5	片割が厚い自然石をそのまま利用。円形の割みを持ち、その内側の中央が磨耗している。加工痕や付着物は見られない。重量 6200g。	7.5Y7/2 灰白 緻密な浮岩	北東部床下 10cm 弱く窪 み内 底面 1

SG10 区 SI-110 (第 142～144 図、写真図版 121・122・208)

【位置】SG10 区北部の 20-18 および 21-18 グリッド。同じく古墳後期の遺構は、南に SI-45・58 がある。SI-106 と重複する SI-110 西壁の平面形を確認できなかったが、古墳中期の SI-106 を古墳後期の SI-110 が切ると考えられる。南部では古墳中期の SI-108 と古墳時代の P-465・466 を切る。P-465・466 の上に SI-110 の遺物が載るので、SI-110 で P-465・466 が古いことは確かである。SI-108 と P-464・465・466

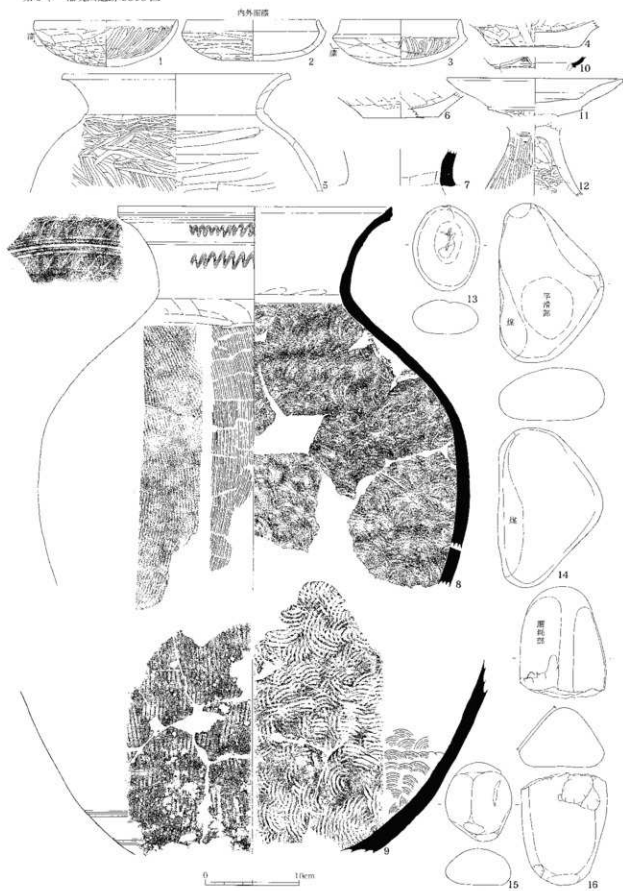
の新旧関係は不確実である。中世のP-425と時期不明のSK-347に南部を切られる。ピット3基 (P-464～466) とSI-108→SI-110→SK-347とP-425の順になる。時期不明の柱穴状土坑8基 (P-414～418・420～422)に切られる可能性がある。SI-110床面で確認したP-414～418はSI-110を切る可能性が高い。



SG10区SI-110 (1-4-15層土層)

- | | |
|---|---------------------------------------|
| 5 灰褐色
ローム層の崩れ上、土砂状、地層不連続。 | 10 黒褐色
5層と類似し、250個の穴、柱状なし。覆土の可能性大。 |
| 6 貯蔵褐色
ローム層の崩れ上、土砂状、地層不連続。 | 11 貯蔵褐色
5層にローム層の崩れ上、土砂状、地層不連続。貯蔵性。 |
| 7 貯蔵褐色
ローム層の崩れ上、土砂状、地層不連続。 | 12 貯蔵褐色
ローム層の崩れ上、土砂状、地層不連続。貯蔵性。 |
| 8 貯蔵褐色
若干の石灰にみちみちた貯蔵土、土砂状、地層不連続。覆土の可能性大。 | 13 貯蔵褐色
ローム層の崩れ上、土砂状、地層不連続。貯蔵性。 |
| 9 貯蔵褐色
ローム層の崩れ上、土砂状、地層不連続。覆土の可能性大。 | 14 貯蔵褐色
ローム層の崩れ上、土砂状、地層不連続。貯蔵性。 |
| | 15 貯蔵褐色
ローム層の崩れ上、土砂状、地層不連続。貯蔵性。 |
| | 16 貯蔵褐色
ローム層の崩れ上、土砂状、地層不連続。貯蔵性。 |
| | 17 貯蔵褐色
ローム層の崩れ上、土砂状、地層不連続。貯蔵性。 |

第142図 権現山遺跡SG10区SI-110(1)遺構



第143図 権現山遺跡 SG10 区 SI-110(2) 遺物

P-420～422はSI-110との新旧関係が不明確である。抜根時の攪乱坑が多い。SI-110が大形建物であることを把握するまでに時間を要したので、調査途中ではSI-110の北部を「SI-107」と呼称した。

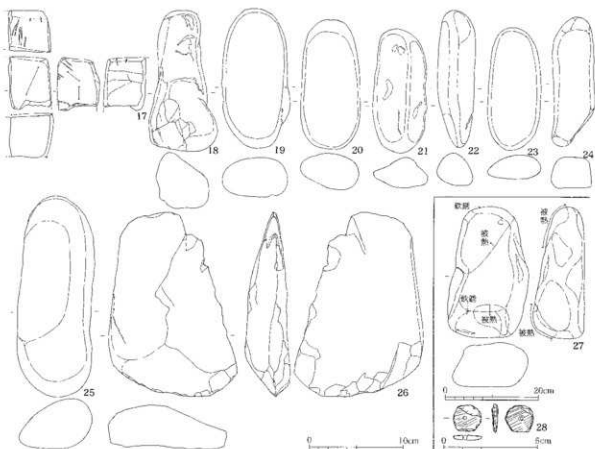
【規模と形状】 方形で、南北方向の中軸線はN-S⁺-Wである。東西長推定8.8m、南北長推定9.0m。壁の残りが残、残存壁高は最大13cm（東壁中央部）。東壁は確認できたが、北・西壁の大半と南壁西半は、削平されて消滅している。主柱穴は4本で、柱間は南北5.56m（東側）～5.28m（西側）、東西4.96m（南側）～5.22m（北側）。柱径は14～20cm、床面からの深さはP1=38cm、P2=30cm、P3=48cm、P4=38cm。入口施設は不明。南辺中央にある張出ビット（貯蔵穴）は、東西108×南北130×深さ41cm。張出ビットを持つ建物はSG10区SI-72などがある。壁溝・間仕切溝はない。

【カマド】 不明である。古墳後期の建物なので、北側にカマドがあったことを想定できる。カマドを壊した痕跡と断定するほどではないが、北壁中央の攪乱部分に極少量の焼土粒が混じていた。

【覆土】 東半部に残った覆土5層の堆積状況からみて自然埋没と思われる。テフラの層や粒は認められない。床面から高さ7cm程度の焼土が南東部で見られた（F-F'の12層）。7～10層と16'層は攪乱層の可能性はある。

【遺物出土状況】 竪穴の残りが悪く、特に西半部が浅いにもかかわらず、全域に遺物がみられる。残存壁高が低いので、どの遺物も床面に近いレベルにある。張出ビットに近い南部に多い傾向がある。目立つのは須恵器甕の破片で（8・9）、遺構上部が残っていればこの甕破片がさらに多く出土したであろう。形や大きさに統一性がない自然の礫・石が多く、10cm未満の小礫から、カマド構築材のような被熱・剥離痕のある大石（27）まで含む。大きな石は竪穴南部に多い。

【出土遺物】 遺物量は多いが、完形に近く残存する遺物は土師器杯3点だけである。体部内面をよく磨く深い杯を含む（1・3）。4は外底面に植物種子圧痕がある。イネ糊圧痕の事例はSG10区SI-50などにある。



第144図 権現山遺跡SG10区SI-110(3)遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

図示した以外にも各器種があるが、復原図化できるような破片は少ない。7は焼成が甘くて積み上げ痕を少し残す須恵器。須恵器大甕は2個体で、8および9とそれぞれ同一個体の須恵器製破片が多い。石器類は編物石(18～25)の他に、磨石(13～16)と砥石(17)と敲石(26)がある。カマド構築材の可能性のある被熱石(27)は、鉄錆もわずかに付着しているが敲打・剥離痕や鍛造剥片がないので、SG10区 SI-36・106のような金床石とは考えにくい。

図示以外の土師器合計 822片・5.938gの内訳は、杯 186片・717g、高杯 45片・481g、鉢 12片・139g、小形壺 4片・56g、壺甕類 571片・4.475g、甗 3片・65g、小形土器 1片・5g、内頰口縁杯 1・鉢 1・壺甕類底部 10・大形甗底部 1や、SI-106や 108から混入した可能性のある古墳中期後～末葉の土師器杯(内頰口縁杯 3個体・初期模倣杯 1個体分)・高杯(杯部で1個体分)・小形壺(1個体分)も含む。図示した遺物中では須恵器甕(10)・高杯(11・12)・滑石製模倣品(28)が中期の混入品である。滑石製有孔円板はSG10区 SI-64aなどに例がある。

第85表 権現山遺跡 SG10 区 SI-110 出土遺物

番号 器種 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・顔料 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師 杯	口 15.1 高 5.0 最大 15.3 重 317.1	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。外面口縁部と内面ヨコナデ後に、内面体部を密に放射状ヘラミガキ。外面の中位以上と内面に漆仕上げ。	10YR6/4 にぶい黄褐色 やや粗い 白粒多、黒・透 明釉・細粒少、赤・灰色 粗粒少 少中散質	南部床土 15cm 完形 貯蔵穴 1
2 土師 杯	口 14.0 高 4.4 最大 15.2	外面は体部ナデ後に上ヨコヘラナデ。外底部に1方向と体部下平に横位のヘラケズリ。内面は丁寧なヨコナデ。内外全面に漆仕上げ。	2.5Y7/3 浅黄 やや粗い 白粒～細粒少、赤・透明 釉・細粒多、黒・灰色粗粒と黒 粗粒少 少中散質	北部床土 3cm 1/2 筒、体 5/6 筒 102
3 土師 杯	口 径 12.5 高 4.9 最大 直径 14.2	外面の体一底面全体に、ほぼ1方向のヘラケズリ。内面体部に多方向へラケズリ・ヨコナデ放射状ヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面上平と内面に漆仕上げ。	10YR6/4 にぶい黄褐色 やや粗い 白・黒・透明釉～ 細粒多、赤・灰色粗粒～細粒少 少中散質	南部床土 1cm 口 1/3 筒、体 1/2 筒 136
4 土師 大形甗	高 残 2.8 底 残 9.2	大形。外面は頸部下側に粗いケズリ状一帯ナデ。外底部はナデで、外側面がローナツバ状にわずかにナデ。内面が中央部一帯一帯は丁寧なナデ。斜縁部と縁部ナデの仕上がり外底部に1箇所あり、断面図に記入した。外面に9cmの穴の痕あり。	10YR7/4 にぶい黄褐色 やや粗い 白・透明釉～細粒 多、黒・灰色粗粒と黒粗粒少 中散質	南部床土 10cm 口 1/3 筒、 5/2 筒
5 土師 大形甗	口 径 24.2 高 残 12.5	大形品であるが頸部はやや薄い。口縁部の内外面にヨコナデ。胴部外面に密なヨコヘラミガキ。胴部内面にヨコヘラナデ。	10YR7/4 にぶい黄褐色 やや粗い 白・透明釉～細粒 多、黒・灰色粗粒と黒粗粒少 少中散質	南部床土 6～9cmが接合 口 1/3 筒、頸 1/3 筒 22, 38
6 土師 大形甗	高 残 2.7 底 残 8.0	外面頸部ヨコヘラケズリ。外底部は中央部がやや薄くなデで、外側面がローナツバ状にわずかに高く丁寧なナデ。内面は多方向ヘラナデ。	5YR5/6 明赤黒 やや粗い 白・黒・透明釉～ 細粒多 少中散質	南部床土 7cm 口 1/3 筒 68
7 須恵 器	高 11.0 高 残 9.9	頸部の上に頸部を載せた接合面で見られる。頸部は下部は粗粒みみを残す。外面はわずかに高く丁寧なナデ。内面はおそろくヨコヘラナデ。断面が割裂れて調整が不明瞭。	2.5Y7/2 灰黄 やや粗い 白・灰色粗粒多、 白粒と灰色粗粒少 散質	南部床土 11cm 頸全筒 24
8 須恵 器	口 径 28.7 高 残 39.7 最大 直径 45.4	本目平行の溝を持つ明き板で、腹～斜位の平行明きを施して、頭に接する部分にナツ。頸部中央の凹縁より上と下にそれぞれ6箇の工具で右から左へ順に削り出す。破片は中位の底面を削り出しからへら進行する。内面と外面と中央部は灰色で、その間に褐色の部分にサンドイッチ状で、2枚挟み入っている。1注記 11, 6, 7, 16, 17, 27, 34, 36, 41, 48, 49, 54, 160, 161	5Y4/1 灰 やや粗い 白粒多、白・透 明釉粗粒少、白粒少 中散質	南部床土 10～17cmが 接合 口 1/3 筒、頸 5/12 筒 2, 5, 7～9, 11～14, 17, 34, 125, 一括
9 須恵 器 大甕	高 残 20.2 最大 直径 49.2	外面は本目平行の溝を削った明き板で、縦位の平行明き後に5本1組の工具で縦線を2周削り、内面は同心円状で削り出し、破片上端部では右へら進行する。破片が厚い。破片は中位の底面を削り出しからへら進行する。内面と外面と中央部は灰色で、その間に褐色の部分にサンドイッチ状で、2枚挟み入っている。1注記 11, 6, 7, 16, 17, 27, 34, 36, 41, 48, 49, 54, 160, 161	5Y5/1 灰 やや粗い 白・赤・透明釉粗 粒多、黒・灰色粗粒少 少中散質	南部床土 1～19cmと中央 部床土 6cmが接合 頸 1/2 筒、頸 5/12 筒 2, 5, 7～9, 11～14, 17, 34, 125, 一括 注記は28
10 須恵 器	高 残 1.2	頸部の上縁が高い。丁寧に回転ヨコナデを行う。7箇以上の工具で右から左方向へ縁部破片状を剥離し削り出す。内面には暗褐色の白粒粗粒がやや粗く残存する。縦面の心室はわずかに灰褐色～赤灰色染み。古墳中葉末葉の遺物かと思われる。	N5/0 灰 粗粒 白粒少 散質	南部床土 15cm 頸上端 1/8 筒 2
11 土師 高杯	口 径 18.7 高 残 4.1	厚く重い。外面はヨコナデする口縁部と、上部に横位ヘラケズリする杯底部との間に、高さ2～3mmの明瞭な段を持つ。胴部は接合面を外れてしまっている。内面は中央部を多方向ナデ後、底外周をヨコナデで囲ませ、口縁部もヨコナデ。	10YR6/4 にぶい黄褐色 やや粗い 白・赤粒～細粒と 赤・灰色粗粒少 少中散質	南部床土 9cm 口 1/3 筒、体 5/12 筒 60
12 土師 高杯	高 残 7.3	外面は頸部をタテヘラケズリ後にタテヘラミガキ。内面は外底部に多方向ヘラミガキ。胴内面は上部にナメナデ。中央に横位～斜位ヘラミガキ。	5YR6/6 橙 やや粗い 赤・黒粒～細粒多、 白・透明釉～細粒少、白 粒少 少中散質	南部床土 5cm 頸全筒 222
13 石 磨 石	長 8.9 幅 7.0 厚 3.5	平面型上断面部が楕円形の自然磨きをそのまま利用。表面全体が磨耗している。破片は中央が浅く凹んでいるが、多くは人為的な加工ではないと考えられる。重量 301.1g。	2.5YR2 灰黄 やや粗い黄味味で硬質な火山 石	南部床土 7cm 完形 30
14 石 磨 石	長 16.8 幅 11.1 厚 3.6	磨石に使った可能性があるが断定できない。図中の破断で凹んだ部分は他より薄らかであるが、これも使用によるものかどうかは不明。図に記入した破断は破断部は灰色。重量 144.7g。	5Y6/1 灰 粗粒 白粒少 中散質	南部床土 9cm 完形 115
15 石 磨 石	長 8.2 幅 7.0 厚 3.9	図示した面に丸味を持ち、反対面は丸味が少ない。表面全体が磨耗している。破片の右上部には割れ面があるが、人為的に加工したものでかどうかは不明。重量 32.3g。	N7/ 灰白 粗粒でやや硬質な火山岩	南部床土 9cm 完形 43
16 石 磨 石	長 残 11.8 幅 9.0 厚 6.3	断面が鋭角三角形の自然石を利用。断面図の左下に示した範囲が磨耗する。破片の中央より使用しているものと思われる。図中の破片は上部に全面が磨耗して赤褐色化。残存重量 879.4g。	7.5YR5/3 にぶい黄 褐色で非均質に硬質な火山岩	南部床土 6cm 破片 1/2 筒 37

17	長 石 残 5.6 幅 残 4.4 厚 4.4 重 残 167.8g	6面のうち2面は破面。残存する4面のうち2面が破面で、残る2面は線状の浅い加工痕を一部に残す。破面はかなり平滑に磨耗して、こわすかな磨損から磨損方向を推定して隅に記入した。破面以外は表面の表面から2-5mmの深さまでが褐色になっていて、灰分などが同定されたかまたは焼熱による変色と見られる。	7.5YS/4 に近い間 継密でやや破質な砂岩	南東部上1cm 焼面跡 25
18	長 14.9 石 幅 7.2 幅物石 厚 6.0	縦長く下の平が厚い自然産をそのまま利用。隅の左下部に破損があるが、使用の結末として生じたかどうかは不明。加工・焼熱痕や付着物は見られない。重量6718g。	10Y4/1 灰 砂岩(産源不明)で破質なホル ンブルス	東部床土10cm 一部欠 126
19	長 14.8 石 幅 7.2 幅物石 厚 4.4	棒状で扁平な自然産をそのまま利用。加工・使用痕は見られない。表面全体が弱く焼熱して、薄く褐色を帯びている。重量5187.7g。	2.5YS/2 暗灰黄 やや多孔質で破質な安山岩	南東部上5cm 完形 41
20	長 13.6 石 幅 6.2 幅物石 厚 4.0	棒状でやや扁平な縦長い自然産をそのまま利用。加工・使用・焼熱痕は見られない。重量443.9g。	2.5YS/1 黄灰 多孔質で破質な安山岩質完形	南西部床土6cm 完形 70
21	長 13.1 石 幅 5.8 幅物石 厚 3.2	断面が扁平で隅丸四角形の縦長い自然産をそのまま利用。加工・使用・焼熱痕は見られない。重量312.1g。	10Y4/7 4 に近い黄緑 継密で破質な灰砂岩	南東部床直土 完形 1
22	長 14.5 石 幅 4.0 幅物石 厚 4.2	断面が隅丸三角形の縦長い自然産をそのまま利用。加工・使用・焼熱痕は見られない。重量333.7g。	7.5Y/1 灰白 継密でやや多孔質な安山岩	南東部上7cm 完形 42
23	長 12.9 石 幅 5.6 幅物石 厚 3.0	薄く棒状の自然産をそのまま利用。加工・使用・焼熱痕は見られない。重量303.0g。	2.5C/8/1 灰白 継密で破質な安山岩	中央部床土14cm 完形 112
24	長 13.6 石 幅 4.7 幅物石 厚 3.7	断面が方形で縦長い自然産をそのまま利用。加工・使用・焼熱痕は見られない。重量357.4g。	5Y7/3 浅黄 継密・破質で石英質が目立 つ流紋岩	長東部床土6cm 完形 194
25	長 21.3 石 幅 7.8 幅物石 厚 5.2	塊の上部で左側が薄くなる棒状の自然産。表面が少し磨耗している可能性もあるが不明確。加工・焼熱痕は見られない。重量1418.9g。	10Y6/1 灰 継密でやや多孔質な安山岩	南東部上3cm 完形 214
26	長 19.4 石 幅 13.7 石 幅物石 厚 4.9	扁平な割石で、人為的に割断した割片ではない。隅のト平が厚く重畳感があり、下部には線状によって生じた割痕が連続して生じている。重量1378.9g。	7.5Y/2 灰オリーブ 継密で非常に破質なホルン ブルス	中央部床土8cm 完形 92
27	長 27.7 かま岩 幅 16.1 構築材? 厚 10.9 重 7400	上下面に広い平坦面を持ち、断面が隅丸方形の自然石をそのまま利用。隅上部の広い範囲と隅下部の狭い範囲が焼熱して薄く変色する。表面に鉄錆が少量だけ付着するところがあるが、線状割痕や製造割片は見られないので、全床石とは考えにくい。	7.5Y/2 灰オリーブ 硬質	南東部上9cm 完形 66
28	長径 1.45 有孔円板 短径 1.39 厚 0.25 重 0.73	即座に削って割った素材の両面をそれぞれ1方向に研削した断面がよく残る。断面は穿孔と同じ方向に研削した痕が強く残る。左側の面から穿孔して反対面に穿孔跡を生じる。孔径は1.75mmで、初孔と終孔の差はほとんどない。反対側は削り残りの遺物が残る。	5G3/1 暗緑灰 磨削の発達した磨面な石片	南東部床直土 完形 225

SG10 区 SI-111 (第145-146 図、写真図版122～124:208)

【位置】 SG10 区東部の 18-18・19 グリッドに所在する。古墳時代集落の中心地から、低地近くへ降りた地点にある。重複する遺構はない。

【規模と形状】 長方形の建物跡で、主軸方位は GN-8°-W (主柱穴を結ぶ方位は GN-92°-E)。東西 4.11 × 南北 3.44m、残存壁高は西壁中央 (27cm) と北壁中央 (29cm) が高く、南東部が浅い (20cm)。主柱穴は 2 本で、柱間は東西 1.58m。柱径は 10cm 前後、床面からの深さは P1=37cm、P2=40cm。東柱 P1 の柱痕は西へ傾き、西柱 P2 の柱痕は東へ傾いて見えるので、2 本の主柱穴を建物中央部側へ傾けるようにして抜き取ったことが推定された。入口施設と考えられる P4 は貯蔵穴 P3 の北側にあり、径 18 × 床面からの深さ 27cm。

貯蔵穴は、南壁中央の P3 と南東隅の P5 がある。P3 は東西 54 × 南北 42cm × 床面からの深さ 26cm で、P3 西側にある土手状の高まりは床面から 5 ～ 10cm の高さを持つ。P5 は東西 47 × 南北 33 × 深さ 12cm。P3 は単層で、P5 は自然埋没状。SG10 区では SI-6 などに複数の貯蔵穴がある。

壁溝は、板材を埋めに立てた痕跡と見られる幅 3cm ほどの細い溝で、西辺溝底面では竪穴床面からの深さに 2 ～ 5cm のバツキが認められた。横幅 20cm 前後 (10 ～ 27cm) で下端が隅切方形の板材を壁面に沿って埋め、溝底部で板材の下端面を支えたところが深くなっていると考えられた。間仕切溝はない。

低地近くに立地するために地山が通常のローム層ではなく、上から黄色砂質ローム層・褐色粘土層・七木桜軽石層・赤褐色鉄分集積層・黄色層、の順で地山層が見られる。掘方底面は褐色粘土層中にある部分が多い。東端部付近では掘方底面が他より 3 ～ 5cm 深いので、下にある七木桜軽石層まで達している。砂質ロームと七木桜軽石が混在する硬い貼床土で埋め戻して床面が作られていた (8 層 と 8b 層)。

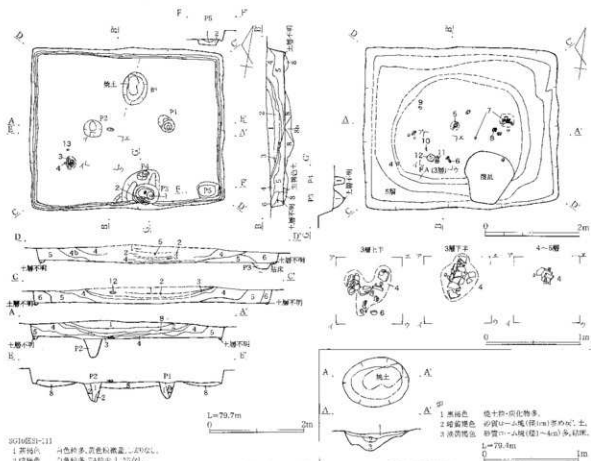
【炉】 北部中央にある。東西 41 × 南北 59cm。床面から深さ 12cm まで貼床 (炉断面図の 3 層) を掘り下げた後に、下部を炉 2 層で埋め戻して炉底面を構築し、床面から炉底面までの深さは 8cm。炉底面には焼土と炭化物がみられた。

〔覆土〕 自然埋没と思われる。上層部を掘り下げると、自然堆積による椀形の窪地に Hr-FA テフラ塊を多く含む3層が堆積している状況を明瞭に把握できた。壁際にはローム塊を含む5層が目立つ。

〔遺物出土状況〕 古墳後期初頭に降下した FA テフラが覆土中に入る。FA 層より上層の遺物 (5 ~ 12) は、竪穴中央部にまとまって出土した。FA 層より下層の遺物 (1 ~ 4) では、脚が欠けて杯部が完存する高杯 (3) が床面にあり、残存度の高い甕 (4) も床面近くにある。また、貯蔵穴 P3 内の上部に伏せた杯 (1)、P3 よりも上方に杯片 (2) がある。

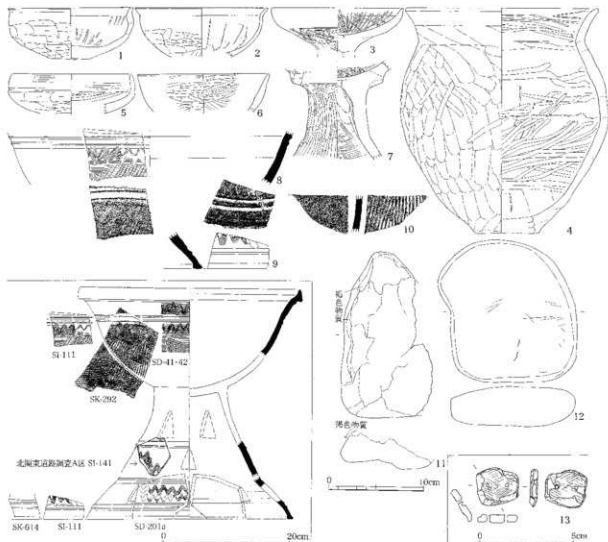
〔出土遺物〕 遺物は比較的多いが、小破片が多いので、実際の個体数は少ないであろう。土師器類または甕類の破片が最も多く、高杯もやや目立つ。杯類はやや少ない。甕 (4) と高杯 (7) は意図的に割ったようにも見られる。

図示以外の土師器合計 118 片・1.023g の内訳は、杯 12 片・79g、高杯 35 片・198g、甕類 71 片・746g。土師器杯類は口が広い中期後葉の内斜口縁杯がある (1・2)。短脚だったとも考えられる 3 は、焼成前に杯底部内面に生じた亀裂をヘラミガキで補修した可能性がある。補修痕のある土師器は SG10 区 SI-6 などにある。4 は甕のようにきれいな胎土で煮炊痕のない甕。13 は穿孔がうまく行かず、反対面から穿孔しなおした石製横造品。有孔円板は SG10 区 SI-64a などに例がある。



第 145 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-111 (1) 遺構

FA層をはさんだ上層には新しい模倣杯もみられる(5)。橙色胎土で密に磨く7は後期の長脚高杯で、器形はSG10区SI-114の高杯によく似るが胎土は全く異なる。同一個体の可能性が高い須恵器器台がSI-111の上層に2片ある(8・9)。SI-111の南西10mのSD-41・42出土口縁部片、古墳時代のSK-292出土杯部片、時期不明土坑SK-614と近世溝SD-201aと北関東自動車道調査A区SI-141の脚部片と同一個体の可能性が高い。SK-614は北方に108mも離れている。脚部が内彎しはじめのIV式である(高橋・小林1990)。別個体の器台破片がSG5区低地包含層(第357図)や本遺跡北部SG1区居館SD-95周辺にある。



第146図 権現山遺跡SG10区SI-111(2)遺物

第86表 権現山遺跡SG10区SI-111出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・絵成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 13.3 高 5.4 底 4.0 重 248.6 残 248.6	外底面はナデまたはケズリで中央がわずかに凹む。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は、口縁部ヨコナデと体部ナデまたはヘラナデの後に放射状ヘラミガキ。焼熟した可能性あり。外面に保と内面体部表面の網線痕が目立つ。	7.5YR5/4 に5.1~7.0 やや粗い 白・赤黒~細粒や やや多。黒・透明細粒少 やや乾質	P3 底上 21cmで伏在した 口 5/6 埋。体全周 52
2 土師器 杯	口 幅 13.0 高 残 5.2	厚く軽。外面口一係部ヨコナデ後に中位以下ヨコヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	10YR7/4 に5.1~7.0 やや密 白・黒。透明粒~ 細粒や少 乾質	P3 底上 26cm (P3 覆土 上方の層(7層)) 口 1/3 埋。21、南西(区 1)
3 土師器 高杯	口 13.9 高 残 4.5	脚内面の頂部がわずかに残るので、脚部が中央ではなく中央になることがある。外面は口縁部ヨコナデ。体部ナデナメヘラケズリ後ヘラミガキ。脚部ナデナメヘラケズリ後わずかにヘラミガキ。外面の口一係体部縁に浅い段を打つ。内面は口縁部ヨコナデ後に体部ナデナメヘラケズリと縦~斜位ヘラミガキ。内面底部に、焼成前の亀裂が生じてヘラミガキで補修した可能性あり。脚が欠けた状態で作風に用いたと考えられることもある。	7.5YR5/3 に5.1~7.0 やや粗い 白・赤黒~細粒や やや多。黒・透明細粒少 やや乾質	南西部5層(床直上) 口全周 32、A~F、H、南西(区 5層)

第5章 権現山遺跡 SG10 区

4 土師器 甕	口 20.4 高 23.6 底 残 6.7 最大 22.1 重約 1840g	外底面は雑なナデ。外面は底部で下平にタテヘラナデ。胴部上平にカナメナデ(またはナナメヘラナデ)。胴部ナメナデ。口縁部ヨコナデ。内面は胴部直上斜一横位ヘラナデ後、胴中に斜一横位ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後でコシヘラミガキ。胎土は混和材が少なく、胎に類似する。襷釉面や灰は見られない。内面胴下の部分に欠けられている。 [注記]11, 12, 35 ~ 51, 53A, 53B, 54, 54A ~ 54D, 54F ~ 54H, 55, 55A ~ 55D, 56, 56A, 56B, A A ベルト東3層, B ベルト, B ベルト南3層, 北, 南	5YR6/6 糖 黒赤 白・赤紅～細粒やや多 赤・透明細粒少 やや硬質	中央部床1.2 ~ 27cm, 上部は3層(床中, 下部は4層直上)口5.6直上, 胴上平全周, 底1.3直上記は左欄
5 土師器 杯	口 残 12.6 高 4.2 最大 復 13.4	外面は体部ヨコヘラナデ。口縁部は下端が少し凹むようにコシナデしてコシヘラミガキ。内面は口縁部直上斜一横位ヘラミガキ。[注記]16, 北東部, 区1-2層, A A ベルト直上, A A ベルト	10Y5/6/4 白～黄赤 中～細粒 赤・赤紅中～赤多 赤・透明細粒少 軟質	中央部床1層 (FA上9cm) 口1.3直上記は左欄
6 土師器 杯	口 残 14.0 高 残 4.0	口縁部直上は外面に稜を持つ。内面に縦く浅い段を持つ。内外面ともにコシナデ後、密なヨコヘラミガキ。底部破片は接合できないが、外面はヨコヘラナデで内面は多方向ヘラミガキ。[注記]7, 33, B ベルト南, B ベルト南1層, B ベルト南直上, B ベルト直上	5YR5/5 赤赤紅 細赤 赤赤紅と透明細粒少 硬質	南西部1・2層 (FA上) 口1・3層 (FA中) 同一一体体 口1.8直上記は左欄
7 土師器 高杯	高 残 10.3 最大 残 9.6	厚く、外面は杯底部に縦部と縦部に縦位のヘラナデ後、密なヘラミガキ。杯底部下端の外面はヨコヘラナデ後に残るヨコヘラミガキ。杯底部下端の外面は多方向ヘラミガキ。脚柱部内面に強いタテナデ後、脚柱下平内面に主に横位のハテ調整。	5YR5/6 赤赤紅 中～細粒 赤・赤紅～細粒やや多, 赤細粒少 やや硬質	東部2層 (FA直上) 杯1・23cm) 杯底1/3直上, 脚柱2/3直上 8, 25 ~ 31
8 土師器 甕台	口 残 34.6 高 残 5.6	本口直上の溝を穿った明き板で、杯部下位に覆椀形子明きの後、カネメと突板面があって、褐色付着物色の組織で除去されている。その他の付着物色に濃緑色および黄色の自然釉がかかる。9および5D-41・42・201a・SK-292の6枚出土破片と同一個体。	N5/0 灰 細赤 白粒～細粒少 軟質	東部2層 (FA上13cm) 体11/2直上 24
9 土師器 甕台	高 残 3.7 脚柱 復約 33	低い突縁2条で区画した上側に、11 以上の縦線状文を右から左へ書く。8および5D-41・42・201a・SK-292・614出土破片と同一個体。	N6/0 灰 細赤 白粒～細粒少 硬質	北西部1層 (FA上15cm) 脚柱1/18直上 10
10 土師器 甕	高 残 3.8	本口直上の平滑を穿った明き板で外面を包む。木目の浮き出しが弱いので明確な覆椀形子底にならず、ほとんど平滑と同じように仕上がっている。内面は無文で、無文当具を使ったかまたはスリケン。縦面の芯部は赤灰色。	N4/0 灰 細赤 半透明細～細粒と白細粒やや多, 赤細粒少 硬質	西部FA直上 1 5
11 甕	長 17.4 幅 9.7 厚 3.7	開口した面の上下へ中に褐色土質の付着物が両端、中央へ右平部に大きな部分が多く、磨削している部分は穿孔と同じ方向に研削する場合が主体である。加工・襷釉は見られない。重量 640.5g。	5Y6/2 灰ナリープ 5cm以上の商品が多く、やや細粒で破片石灰質多	南西部2層 (FA上23cm) 一部 19
12 石器 片	長 14.0 幅 14.7 厚 4.2	扁平な自然石をそのまま利用。開口面の中央から右平に、浅い溝が少し認められる。また、この面全体がわずかに磨削して、裏面に比べて少し平滑になる。加工・襷釉は見られない。重量 1386.1g。	5Y0/1 灰 細赤で破片質安山岩	南西部2層 (FA上20cm) 完形 20
13 石製物品 有孔石片 皿	長 2.22 幅 1.96 厚 0.40 重 3.02	両面をそれぞれ2方向に研削する。外縁は工具で切削または削いたままの部分が多く、磨削している部分は穿孔と同じ方向に研削する場合が主体である。左側の面から2孔を穿孔しているが、左側の孔は対面まで貫通しないので、再度反対方向から穿孔し直した孔が貫通に成功している。それぞれ貫通時に穿孔距離を対面に生じている。孔径は初孔径 1.65 ~ 1.70mm, 終孔径 1.60mm。	10Y3/2/2 オリーブ黒 細赤で磨削の発達した滑石片質	内部床直上 完形 13

SG10 区 SI-113a (第 147 図, 写真図版 107・124・125)

【位置】SG10 区北部の 22・18・19 グリッドにある。同じく古墳中期後葉の遺構として、南に SI-73、東に SI-75、北に SI-114 がある。

【重複関係】現地調査時の旧名称「SI-113」から「SI-113a」に改称した。先行する SI-113b から拡張建替したか、または 113b の上部を切る建物である。古墳後期の SI-74 に切られ (SI-113b → SI-113a → SI-74)、また時期不明の SK-562・563・682 に切られる (SI-113b → SI-113a → SK-562・563・682)。時期不明の柱穴 P-700・701 は SI-113b よりも新しい可能性を持つが、SI-113a との新旧関係は不明である。SI-113a の床面では P-700・701 を確認できなかったが、見落としたことも考えられる。

【規模と形状】方形の建物跡で、主軸方位は GN-1°-W (主柱穴の南北方向軸)。東西 5.60 × 南北 5.63m、残存壁高は南壁で最小 5cm、東壁で最大 21cm。

主柱穴 4 本の柱間隔は東西 2.61m・南北 2.78m で南北に少し長い。柱痕を反映する土層は無い。柱穴下部径 (約 18cm) より少し細いであろう。入口施設は不明。南東隅にある貯蔵穴 P5 は東西 82 × 南北 72 × 深さ 50cm。壁溝はない。北西部にある間仕切溝 D1 は幅 16 ~ 18cm、床から深さ 4 ~ 10cm。床面は南壁付近が少し深い (断面 A-A' の 5 層北半)、それ以外は標高 80.4 ~ 80.5m 前後でほぼ平坦である。通常の貯蔵穴建物にあるような貼床はなく、ローム主体ではない褐色土の貼床が一部に見られただけである。SI-113b の床面中央部を SI-74 が破壊する。SI-74 の掘形底が SI-113a 掘形底まで壊している部分が多い。

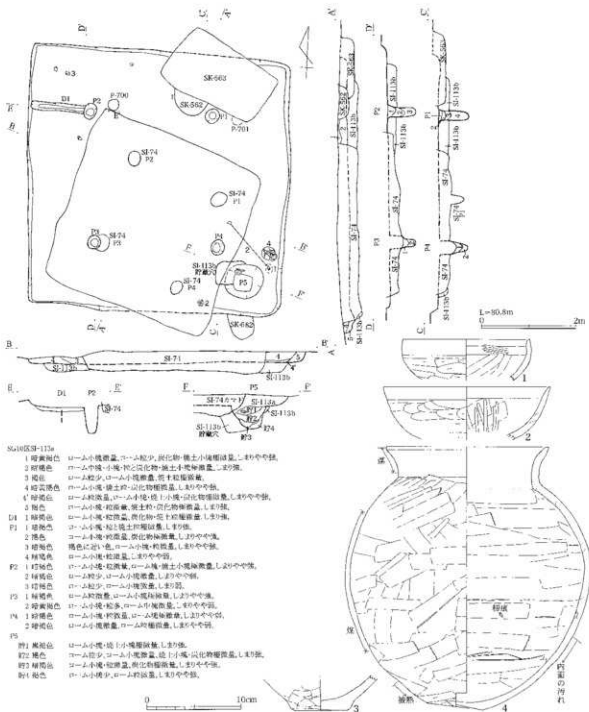
【火処】確認できなかった。

【覆土】遺構確認面の北部で、覆土 1 層中のローム粒がやや不自然に多く認められた。ただし、3 ~ 5 層の堆積状態から、埋め戻しではなくて自然埋没と推定される。

【遺物出土状況】南東部の東壁際では床上 8cm のレベルで完形の土師器甕があり (4)、その南に杯 (1・2) がある。貯蔵穴内では底上 4 ~ 5cm に土師器杯体部片と甕 (?) 胴部片があり、貯蔵穴 1 層中に自然礫 (13.8 × 11.7 × 5.8cm・重さ 1445.4g) がある。北西部では土師器杯・壺片と、混入した縄文後期土器片が床か

ら数 cm 浮いて出土した。重複する古墳後期の SI-74 に古墳中期の杯類がいくつかあり、SI-113a・b の遺物が混入している可能性が高い。

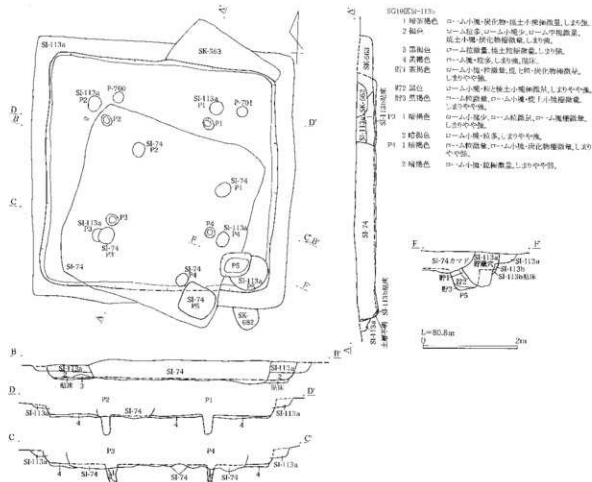
【出土遺物】遺物は少なく、土師器甕(4)以外は全体形を復原できるものがない。古墳中期後葉～末葉の初期模倣椀があり、1からみて中期末葉的とみられる。ただし甕(4)はあまり長胴化しない中期中葉的な形状で、カマドでなく炉で用いた痕跡がある。この甕のように初痕のある土師器はSG10区SI-50などにある。図示以外の土師器合計71片・512gの内訳は、杯47片・409g、壺甕類24片・103g。縄文後期の土器片も混入していた(『東谷・中島地区遺跡群10』p.84の262・272番)。



第147図 権現山遺跡SG10区SI-113a 遺構・遺物

第 87 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-113a 出土遺物

番号 種類 部類	大きさ 単位・材	特 徴	色調 質上・組成 (または素材)	出土状態 残存状態 位置
1 土師器 杯	口 径 13.3 高 残 4.2 最大 径 13.8	外面の口一休部端にわずかな凹みあり。外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ナメヘラナデ、口縁部上半ヨコナデと下半ヨコヘラケズリ後に下半ヨコヘラミガキ。	5YR5/6 明赤期 やや暗い 赤黒粒やや少、白 濁と黒、透明細粒少 やや軟質	南東部床上 10cm 口 1/6 周 SI-113 B、2
2 土師器 杯	口 径 17.6 高 残 5.6	内面の口一休部端にわずかな凹みあり。外面は体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ナメヘラナデと内外面口縁部ヨコナデ後に体部タテヘラミガキ。 [注記] IS 113-2、南東部東平、SI 74 L、31	7.5YR5/4 に近い明 やや暗い 白濁と白・灰色粗 ～細粒やや多、赤黒粒と黒、 透明細粒少 硬質	南東部床上 10cm、SI 74 出土の2片が同一休 口 1/4 周 注記は左欄
3 土師器 壺	高 残 3.7 底 径 6.0 最大 径 12.0	底部分が円錐状に突出して、外底面は多方向ヘラケズリでわずかに凹状。内 面はナデまたはヘラナデと見られるが、部 が腐れて詳細不明。	5YR5/6 明赤期 やや暗い 白・灰色粗～細粒 やや多、赤黒粒と黒、透明細 粒少 硬質	北西部床上 8cm 底 1/3 周 SI-113 D
4 土師器 甕	口 径 17.2 高 27.7 底 径 5.9 最大 径 25.4 重 残 2288.1	外底面は1方向ヘラケズリで凹状にし、底面の器厚は3～4cm。外面側部 ナメヘラナデ、側下部ヨコヘラケズリ。内面側部ヨコヘラナデ、内外面口 縁部ヨコナデ。内面側中位に細粒層が1箇所あり、胎土中に混ぜたものか と見られる。側下部の外表面が焼熟して内面に黒褐色のコゲ面。外面側中位から 口縁部にかけて曇が多い。	10YR5/4 に近い黄期 やや暗い 白・灰色粗～細粒 と黒粒多、白濁と赤、透明 粗～細粒少 やや硬質	南東部床上 8cm ほぼ定形 底 1/6 周欠 SI-113 A～1C やや硬質



第 148 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-113b 遺構

SG10 区 SI-113b (第 148 図、写真図版 107・125)

[位置] SG10 区北部の 22・18・19 グリッドにある。同じく古墳中期後葉の遺構として、南に SI-73、東に SI-75、北に SI-114 がある。

[重複関係] 現地調査時の旧名称「SI-116」から「SI-113b」に改称した。SI-113b から SI-113aへ拡張建替したが、または 113a が SI-113b の上部を切る。その後古墳後期の SI-74 に切られ (SI-113b → SI-113a → SI-74)、

また時期不明のSK-562・563・682に切られる（SI-113b→SI-113a→SK-562・563・682）。床面で確認した時期不明の柱穴P-700・701は埋土・形状が類似した詳細不明の柱穴状土坑で、SI-113bに伴うと考えられる余地もあるが床面から浅い点が不自然なので、P-700・701がSI-113bを切る可能性がある。

【規模と形状】方形の建物跡で主軸方位はGN-0°30′-W。東西5.02×南北4.96mで、上部がSI-113aで失われているので、残存壁高は10～16cmまで浅くなっている。主柱穴は4本で、柱間は東西2.12m（南側）～2.16m（北側）、南北2.12m（西側）～2.30m（東側）。南西主柱穴P3には裏込土を反映する土層が残り、柱径10cm前後と推定できる。床面からの深さは北側のP1・P2がやや浅く（41～42cm）、南側のP3・P4がやや深い（46cm）。入口施設は不明。貯蔵穴は南東隅にあり、東西62×南北51×床面からの深さ42cm。壁溝や間仕切溝はない。

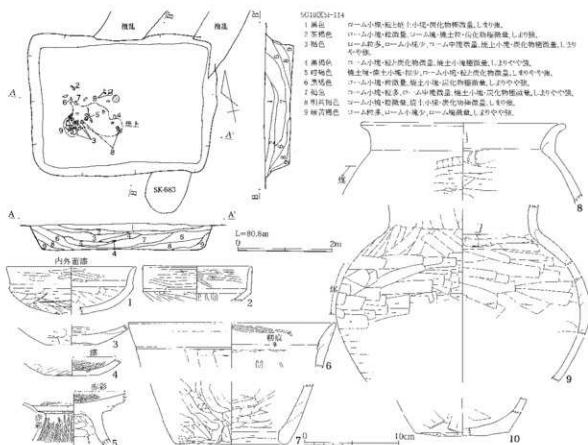
【火処】確認できなかった。カマドは確認できない。

【覆土】北側が1層（断面図A-A'）、東側と西側は主に2層で埋まる（断面図B-B'）。

【遺物および出土状況】貼床中から少量の土師器片と混入縄文土器片が出土しただけである。図示した遺物はない。土師器合計17片・68gの内訳は、杯16片・59g、小形壺1片・9g。縄文後期の土器片も混入していた（『東谷・中島地区遺跡群10』p.84の255）。遺物がごく少ないので時期を特定しにくい。SI-113bから113aへ拡張したと考えられ、拡張後の建物SI-113aと近い時期でわずかに先行する建物ということになるので、中期末葉の時間幅の中でSI-113bからSI-113aへ建て替えた可能性がある。

SG10区SI-114（第149図、写真図版125）

【位置】SG10区北部の23-18・19グリッド。同じく古墳中期の遺構は南にSI-113a・bとSI-75がある。古墳時代のSK-683を切る。2基の長方形掘乱坑に北壁を切られる。



第5章 権現山遺跡 SG10 区

〔規模と形状〕 長方形の小さい建物跡。南に入口施設を確認したわけではないが、主軸を南北方向と考えた場合の主軸方位は CN-9°-E。東西 3.98 × 南北 3.09m、残存壁高は東壁北部で最大 52cm、南東隅で最小 43cm。柱穴・入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝はない。貼床も見られない。

〔火処〕 不明である。西半部の焼土は床から浮いているので、これを炉とは考えにくい。いっぽう、カマドもみられない。

〔覆土〕 自然埋没と思われる。覆土中位の 2・3 層にローム塊・粒がやや多く、焼土も含む。テフラの層や粒は認められない。床上 11 ~ 18cm のレベルで南西部の覆土下層中に焼土が見られた (5 層)。調査時の層番号を極力変えない方針により、6・7 層の数字が堆積順と一致しない。

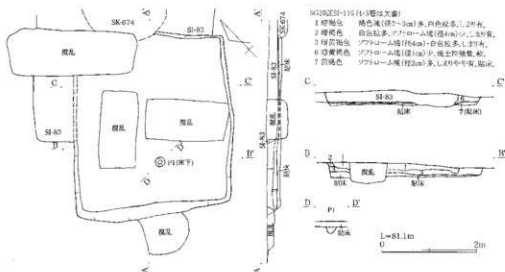
〔遺物出土状況〕 西半部で床面から 10 ~ 20cm 浮いたレベルに遺物が多い。床面から 30cm 以上浮く破片もある (2・3・9)。床面直上の遺物はほとんどない。5 層の焼土よりも上方に遺物がある。遺物の多くは流入品かと見られる。

〔出土遺物〕 遺物はわずかで、壺甕類と杯が多く、甕・高杯もある。ミガキを行う模倣杯が多く、漆仕上げの杯 (1) も含む。掲載した以外に、内斜口縁状の杯小破片もわずかにある。遺物は床から浮いた流入品ばかりと思われるが、時期の異なるものは少ないように見える。

1 は後期初めころの漆仕上げ杯。3 と 4 は平底模倣杯 (安藤 2001) の破片。黒雲母や白雲母を含む茨城産土師器は SG10 区 SI-12 などにもあり、5 に白雲母細片が多い。5 の器形は SG10 区 SI-111 の高杯によく似るが、胎土は全く異なる。6 のように粉痕がある土師器は、SG10 区 SI-50 などにある。8 は炉で使ったような煤が付く甕。図示以外の土師器合計 101 片・986g の内訳は、杯 28 片・166g、高杯 4 片・98g、壺甕類 60 片・575g、甕 9 片・147g。

第 88 表 権現山遺跡 SG10 区 SI-114 出土遺物

番号 種類	大きさ (cm・形)	特 徴	色調 胎土・成材 (または組成)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.7 高 残 5.1	内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面は底部に 1 方向と上部に縦位のヘラケズリ。内面底部は縦一斜位のヘラナデ。内外全面に漆仕上げ。	10YR7/6 明黄緑 細密 赤黒一細粒やや多、白・黒・透明細粒少 中やや微質	西部床土 19cm 口 1/6 周、体 1/3 周 6
2 土師器 杯	口 復 11.4 高 残 3.8 最大 復 11.6	中やや薄。口縁部内外面ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面底部ヨコヘラケズリ。内面底部ナデ後タテヘラミガキ。	7.5YR6/6 暗 細密 赤黒粒やや多、白・黒・赤・透明細粒少 中やや微質	北西部床土 30cm 口 1/8 周、体 1/4 周 14
3 土師器 杯	高 残 2.1 底 5.1	外底面は 1 方向ヘラケズリでわずかに上げ砥状にする。外面底部ヨコヘラケズリ。内底面は多方向ヘラナデ後に不方向の縁ならヘラミガキ。	5YR4/4 に深い赤黒 細密 赤黒粒やや多、白・黒・赤・透明細粒少 中やや微質	南西部床土 14 ~ 36cm が接合 底 7/12 周 1, 3, 4, 西一括
4 土師器 杯	高 残 1.8 底 5.6 最大 復 10.4	外面の底~底部端に横を付。外底面は斜い円筒形で斜放射状のヘラケズリ。内面底部は横一斜位のヘラケズリ。内面底部は多方向ヘラミガキで、内面を漆仕上げする。断面の内面に示した凹みは粉痕かもしれないが不確実。	10YR4/3 に深い黄緑 細密 白・灰色細粒と白・透明細粒少 中やや微質	中央部床土 18cm 底 2/3 周 21
5 土師器 高杯	高 残 5.6	外面はナデ後、脚部に縦位。杯底部に斜位のヘラミガキをして赤彩。杯内面は 1 方向ヘラミガキ後に赤彩。脚部内面はナデナメナデ。乳脚状形成。	5YR6/6 暗 中やや微密 赤黒粒と白雲母細粒多、白・赤・透明細粒少 中やや微質	南西部床土 10cm 杯底一脚柱全周 5
6 土師器 甕	口 復 21.8 高 残 4.8	外面の口一側脚端が浅い段になる。外面側面タテヘラナデ。内面側面はナデかヘラナデの後に、おそらくタテヘラミガキ。内外面口縁部をヨコナデした後に内面口縁部ヨコヘラミガキ。内面の口一側脚部に縁粒止痕あり。	7.5YR4/3 暗 細密 赤黒一細粒やや多、白・黒・赤・透明細粒少 中やや微質	西部床土 27cm 口 1/8 周 12
7 土師器 甕	高 残 6.4 底 復 11.2 孔 復 9.8	外面は斜位のヘラナデ後ヘラケズリ。内面はヨコヘラナデ。乳脚部とそれに接する内外面下部に面取り状のヨコヘラケズリ。	7.5YR5/6 明細 細密 赤黒一細粒やや多、白・黒・透明細粒少 中やや微質	西部床土 19cm 底 1/6 周 10
8 土師器 甕	口 復 21.6 高 残 8.5	破片が小さいので復原性は参考値。外面は肩部に斜いタテハケ後ヨコヘラケズリ。内面は肩部ヘラナデ後に少しヨコヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面肩部に泥多量あり。	2.5Y7/3 浅黄 中やや微密 白粒一細粒多、灰色・透明細粒と黒面粒少 中やや微質	南西部床土 14cm と中央 床土 21 ~ 22cm と南部 床土 18cm が接合 口 1/2 周、頸 1/6 周 4, 16, 18, 24, 東一括
9 土師器 甕	高 残 18.8 最大 復 26.8	胴下段が薄くなる。外面は肩部と肩部を縦一斜位ヘラナデ後。胴中位を縦に多量。胴下位は残存部が少ないので不明確だが、被熱している可能性が表れる。	5YR6/6 暗 中やや微密 白・赤黒一細粒多、中やや微質	南西部床土 36cm 頸 1/12 周、肩 1/3 周 1
10 土師器 甕	高 残 4.1 底 復 10.0	外底面が深く突出して、体部との境の境が強い。外底面の外面は門面方向ラケズリ。外面側面タテヘラケズリ。内面底部に多方向のヘラナデ。外面が少し被熱している可能性もあるが不確実。	2.5Y5/2 明灰黄 粗い 白・灰色・透明細一細粒多、白・灰色細少	南西部床土 17 ~ 20cm 口同一側面 底 1/2 周 27



第150図 権現山遺跡 SG10区 SI-115 遺構

SG10区 SI-115 (第150図、写真図版125)

【位置】 SG10区北部の23-19および24-19グリッド。同じく古墳中期の遺構は、西にSI-82・86、北にSE-552がある。古墳後期中葉のSI-83がSI-115覆土を床面近くまで切る。長方形攪乱土坑(近現代の農業関連土坑)に切られる。北壁が古墳中期の円筒形土坑SK-674と重複するが、重複関係を示す図や記録がなく、新旧関係は不明である。カマドを持たない古墳中期のSI-115を、中期末のSK-674が切れることも想定できるが、不確実である。

【規模と形状】 SI-83調査との関係でSI-115の形状把握が遅れて平面図が作成できなかったため、掘方平面図だけを掲載した。方形の小さな建物で、建物長軸を主軸とみた場合の主軸方位はGN-43°E。東西3.64×南北3.99m。壁は西隅で最もよく残り(掘方底までの残存高26cm)、南隅の残りが悪い(掘方底まで12cm)。床面までの深さは土層断面図からみて22~24cm。柱穴は径20cmの1本だけを貼床除去後に確認し、深さは掘方底から16cm、床面推定レベルから24cmである。SI-83のカマド土層断面図などからみてSI-115の床面は標高80.75m前後かと考えられる。入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝は見られない。

記録不備のため、貼床層の土質・特徴が不詳である。3層は貼床土の可能性もあることが調査時の土層図に記載されているが、遺構覆土下層と判断した。床面の状況を図化・レベル計測した図面が所在不明のため、この点が不明確である。

【火処】 確認されなかった。カマドを持たない可能性がある。

【覆土】 自然埋没と思われる。1~3層に多い白色粒は、古墳前期のAs-Cや後期初めのHr-FAなどのテフラが二次的に流入した可能性が考えられる。

【遺物および出土遺物】 遺物は僅少で、土師器は合計2片・21gしかなく、内訳は杯1片・9gと壺頸類1片・12gである。図示できる遺物はない。他に安山岩剥片2点と弥生中期末頃の土器7片が混入していた。この建物が弥生時代と考えられるわけではなく、SG10区北東部の古墳時代遺構(SI-74・81とSD-527)や、近世のSD-503などにある中期後半の弥生土器片と同様の流入品であろう。これらは、『東谷・中島地区遺跡群』10で報告した権現山遺跡出土土器の第6群1類(SI-74出土例)および第7群1・3類(SD-527出土例)に相当する。

第5節 古墳時代の竪穴鍛冶遺構

SG10区 SI-36 (第151・152図、写真図版87・173・174・197)

【位置】 SG10区中央部西端の20-17グリッドにある。同じく古墳中期の遺構は、北にSI-50、東にSI-49がある。中央よりも北西側は重機による現代の採土工事で破壊されている。重複する遺構はない。

北側のSI-50とSI-106はSI-36と同じ中期後葉(権現山編年3段階)で、それぞれ鉄滓と金床石(第153図下段)を出土したので、この鍛冶遺構と関係を持つ建物であろうか。東方にある時期不明のSK-317にも鉄滓がある(第237図)。南側のSI-34・SI-40にも鉄滓(第64図64・65)や羽口(第153図左上)があるが、SI-34・40は後期末(7段階)なので、SI-36との関係を考える必要はないかもしれない。

【規模と形状】 方形建物の南東部が残り、他は消滅している。主軸方位はGN-16°-W。東西残長2.38×南北残長4.35m、残存壁高13～20cm。P1は22×27×深さ22cmで床面に開口していた。4本柱穴の南東主柱穴か、または2本柱穴の南主柱穴が残ったものかもしれない。金床石(52)と鍛造剥片が床面にあるので、北西の消滅部に鍛冶炉が存在したと推定できる。現存する部分には、炉・入口施設・貯蔵穴・間仕切溝は見られない。東壁寄りにある周溝状の細長い窪みD1は、床面レベルからの深さ4～9cm。残存する狭い床面を精査した時には確認できず、貼床除去後に確認したので、D1は掘方に伴う窪みと考えられる。掘方底面は東部と南部が低くなる傾向があり、9～15cm大の窪み(掘削工具痕?)も見られた。

【覆土】 単層で、自然埋没と思われる。テフラの可能性のある白色粒を含んでいる。

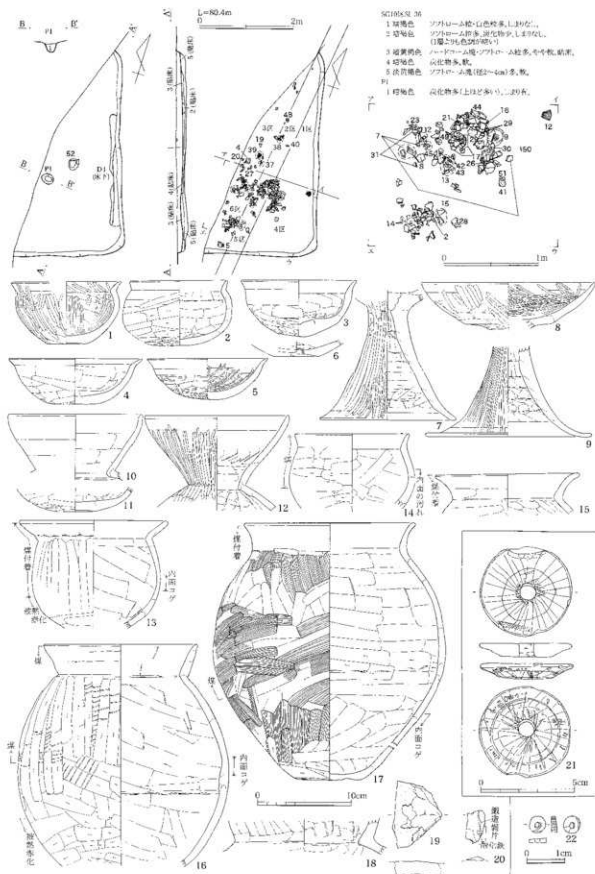
【遺物出土状況】 残存した南東部の中央床面に金床石がある(52)。その南側に襖類など多くの土師器がままとり、鉄滓や羽口も土師器と一緒にある。滑石製白玉は飾い掛け作業でP1内から発見した(22)。紡錘車(21)は床上13cmで、土器上ではなく覆土中にある。南北方向の土層観察ベルトを中央に挟んで、東側と西側をそれぞれ南北の2区画に分け、北東部・北中部・北西部をそれぞれ1・2・3区、南東部・南中部・南西部をそれぞれ4・5・6区と呼称した。床面覆土および貼床土を採取して水洗しながら飾いに掛けた後に乾燥させ、全区画から一定量の鍛造剥片を、3・4・6区とP1から少量の粒状滓を検出した。

【生活関連遺物】 建物の大半が消滅していたのに、土師器の出土量は多い。1は内斜口縁の椀形杯の内外面を縦方向に磨く点が多い。3は内面に焼成前か焼成時の亀裂があり、外面下半分が黒斑になるので、やや不良品の椀形杯。不良品の土師器はSG10区ではSI-6などにある。10・12は非常に丁寧に製作した小形壺。高杯(8)も丁寧である。13～17は外面の煤や内面の汚れが明瞭な襖類で、紡錘車とともに、この鍛冶遺構が生活の場でもあったことを示す。土師器は杯・高杯・小形壺・襖の破片が同じくらい量出土した。大破片や残存度の高い杯類が多い。図示以外の土師器合計157片・1.684gの内訳は、杯26片・178g、高杯48片・345g、小形壺8片・86g、壺襖類75片・1.075g。

権現山遺跡南部ではSG10区SI-59やSG5区SI-4などに紡錘車がある。緑灰色の蛇紋岩製で表裏面に線刻のある紡錘車(21)はSG10区SI-75にもある。本遺跡4区に紡錘車が多く、線刻紡錘車は4区SI-1・24・28や周辺遺跡に比較的多い。他に、上三川町殿山遺跡KT-36・75(大川他1995)、那須烏山市北原遺跡SI-834(安藤2008)、真岡市市ノ塚遺跡1区SI-158(藤田・片根2007)・同市曲田遺跡SI-26(藤田・仲山2009)などに線刻紡錘車がある。滑石製白玉は非常に小形で薄い(22)。滑石製玉はSG10区SI-30などにある。

第89表 権現山遺跡SG10区 SI-36床面採取土と鍛造剥片・粒状滓の量

	1区	2区	3区	4区	5区	6区	P1
採取土の乾燥前重量(g)	2,420	2,170	3,960	5,210	1,520	2,980	3,560
水洗・乾燥後の土量(g)	574	1,364	2,541	2,708	351	1,980	1,626
鍛造剥片の出土重量(g)	計測不可	計測不可	0.30	0.15	0.28	2.01	0.42
鍛造剥片の出土点数	1	13	65	30	56	347	110
鍛造剥片の密度(点/乾燥土1kg)	2	10	26	11	160	175	68
粒状滓の出土点数	0	0	2	1	0	7	3
粒状滓の密度(点/乾燥土1kg)	0	0	0.8	0.4	0	3.5	1.8



第151図 権現山遺跡 SG10 区 SI-36(1) 遺構・遺物

第90表 権現山遺跡 SG10 区 SI-36 出土遺物

番号 種類 図録	大きさ (cm/φ)	特 徴	色調 胎土・底成 (参考法目)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 11.7 高 6.6 底 4.2	外面は底部と腰部をナデ後に口縁部ヨコナデ。腰部全体と口縁部の一部はナデヘラミガキ。内面は腰部ナデナメナデ後にタテヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後にナメヘラミガキ。	10YR8/4 浅褐色 やや粗い。赤・黒粒～細粒やや多。白粒～細粒少 軟質	南東隅中央 口2/3周、底全周 一括、南東隅片
2 土師器 杯	口 径 10.2 高 6.8 最大 11.4	外面は頸部ナデ後に口縁部ヨコナデ。底部に多方向と腰部に横位のヘラズケリ。内成腰部多方向と腰部に横位のやや粗いナデ。胴部ヨコヘラズケリ。口縁部ヨコナデ。 [注記] 5, 6, 8, 11, 13, 19, 土層一括	2.5YR7/8 黄緑 やや粗い。赤粒～細粒多。白粒と白～透明細粒少 やや硬質	南東床土 1～9cmの間 口5/12周、体7/12周 注記は左欄
3 土師器 杯	口 径 12.1 高 6.1 底 2.8～3.5	底部が厚く重く、外面は底部ナデと腰部ナメナデの後に口～胴部ヨコナデ。外面は丸味のあるヘラまたは器具口で腰部をヨコヘラズケリ。底面中央部で押す。内面口縁部はヨコナデ。底成または底成前に内面底成または上り塗りが長さ6cmあり目立つ。外面の下半部全体に黒染あり。	2.5YR4/ 黄赤 やや粗い。赤・黒粒～細粒と透明細粒少 やや硬質	口1/4周、底全周
4 土師器 杯	口 14.1 高 4.8	外面は底部に多方向ヘラズケリ。腰部にナデ。口縁部ヨコナデ。口縁位のナデまたはヘラナデ。口縁部ヨコナデ。	2.5YR7/6 橙 やや粗い。赤・黒粒～細粒多。黒染と白～透明細粒少 やや硬質	南東床土7～8cm 32, 63, 土層一括, 1部西欠
5 土師器 杯	口 径 12.7 高 4.3	外面は底～腰部に多方向ナデの後、主に横位のヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。内面は底部に多方向と腰部に横位のヘラズケリ後。口縁部ヨコナデ。腰部に斜放射状ヘラミガキ。	5YR6/6 橙 やや粗い。赤粒～細粒と白・黒・透明細粒少 硬質	南東隅中央7cm 口1/4周、底1/3周 一括
6 土師器 杯	高 残 1.7 底 残 4.4	外表面は多方向ヘラズケリで凹状。外面腰部はなおそろくヨコヘラズケリの後に全体をヨコヘラズケリ。内面は多方向ヘラナデ。	10R5/8 赤 やや粗い。灰色粒～細粒多。赤・黒・透明細粒少 硬質	内成及中 底1/2周 内成残
7 土師器 高杯	高 残 13.4 脚座 14.3	外面は脚座部タテヘラズケリと脚座部ヨコナデの後に中位以下をタテヘラズケリ。内面は残りが悪く調整不明。脚内面は上位に粘土織みと白粉を塗り、残り目状になる。中位ヨコヘラズケリ。下位ヨコヘラズケリ。脚座部ヨコナデ。	10YR6/4 白～赤 やや粗い。白～赤粒～細粒多。赤・黒・透明細粒少 硬質	南東床土1～床土11cm の間 脚柱3/4周、脚座1/4周 一括
8 土師器 高杯	口 径 18.2 高 残 4.9	外表面の下部に横状あり。外面は横位または斜位ヘラナデ後に口縁部をヨコナデし、外表面全体にもう一度ナメヘラズケリを行う。内面は口縁部ヨコナデ後にナメヘラミガキ。杯体部下半に密なヨコヘラミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや粗い。白・黒・透明細粒 やや多。赤粒少 口5/12周 17, 19, 23, 83, A-A	
9 土師器 高杯	高 残 9.5 脚座 17.5	外面は頸部にヨコナデ後、脚座全体にタテヘラミガキ。内面は上～中位に粘土織みと白粉を塗り、上位は密く絞った縦状で、中位にユボオサ。上位にナメナデ。底部にヨコナデ。	2.5YR5/8 明赤褐 やや粗い。赤粒～細粒と黒粒 やや多。白粒少 やや軟質	南東床土5cmで正位 脚柱1/2周、脚座3/4周 110, 127
10 土師器 小形皿	口 径 14.2 高 残 7.0	外面は頸部におそろくナメナデの後、口縁部から頸部・胴部までの全体をヨコナデ。内面は外周と同様で、口縁部から胴部までの全体をヨコナデ。非常に丁寧な製品。	2.5YR5/4 白～赤 やや粗い。白粒～細粒多。灰色粒と黒粒少 やや硬質	口～底1/4周 一括
11 土師器 小形皿	高 残 2.6 底 4.0	外表面は斜放射状の丁寧なヘラナデで凹状になる。外面腰部ヨコヘラナデ。内面底～腰部に多方向ヘラナデ。	2.5YR4/8 赤褐 細密。白細粒多。赤粒と黒粒。透明細粒少 やや硬質	南東隅中央 底全周 一括、南東隅片
12 土師器 小形皿	口 径 15.2 高 残 10.1	外面は口縁部ヨコナデ後に頸部タテヘラミガキ。胴部タテヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデ後に上り絞った縦位の縦帯が入る。内面頸部は下位ヨコヘラズケリ。中位タテヘラズケリ。口縁部ヨコナデ。非常に丁寧な製品。	5YR5/6 明赤褐 細密。赤粒～細粒と白・透明細粒少 やや硬質	南東隅脚柱土13cmと南東床土1～6cm 口1/8周、脚1/3周 26, 68, 89, 一括
13 土師器 小形皿	口 径 15.6 高 残 11.3	外面は腰部下位にある積み上げ休止部よりも下方がヨコヘラナデ。それよりも上方がタテヘラズケリ。内面は腰部ナメヘラズケリ。内外面口縁部はヨコナデで、外周は上り積み上げ休止部を貫いているで閉じた外周になる。外面の上位が粗粒赤土。上～中位に縦が多少付着。内面は中位にコグ少量付着。	10YR7/4 に近い黄褐 やや粗い。赤細粒多。赤粒と白・黒・透明細粒少 硬質	南東床土4～9cm 口5/6周、脚1/3周 20, 21, 46, 120, 123 一括。底欠
14 土師器 小形皿	口 径 12.0 高 残 7.9 最大 高 13.2	外面は腰部ヨコヘラズケリの後にヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面は腰部下部ヨコヘラズケリと上位ナメヘラズケリ。口縁部ヨコナデ。外面上半に縦帯1本あり。内面中～下位に暗褐色の汚れが付着する。	10YR6/3 に近い黄褐 細密。白細粒やや多。赤・黒粒と透明細粒少 硬質	南東隅床土7cmと南東1 ～6cm 口1/8周、脚1/3周 注記は左欄
15 土師器 高	口 径 15.1 高 残 4.3	外面は頸部に斜～横位ナデ。口縁部ヨコナデ後に頸部をやや粗いヨコナデする。内面は斜ナメナデ。口縁部ヨコナデ。外面全体に厚付着。 [注記] 5, 9, 12, 19, 87, 土層一括, 1層西	10YR7/4 に近い黄褐 やや粗い。白・透明細粒と白・黒粒～細粒少 やや硬質	南東床土1～4cm 口3/4周、底11/12周 注記は左欄
16 土師器 高	口 径 16.3 高 残 23.3 最大 22.8	外面は口中位ヘラズケリとヨコヘラズケリ後に下位ヨコヘラズケリと上位タテヘラズケリ。口縁部ヨコナデ。内面は頸部～腰部に多方向ヘラナデ後に中位以下を積み上げて上り休止部を貫いている。口縁部ヨコヘラズケリ後にヨコナデ。外面上半に縦帯1本。内面中にごく少量のコグが付着。	10YR7/4 に近い黄褐 やや粗い。白・灰色粒～細粒多。赤・黒・透明細粒～細粒少 硬質	南東床土4～14cm 口1～脚1位は完成形。脚下半1/3周 13, 24, 44, 46, 99, 101 ～107, 112～123, 125, 一括。土層一括
17 土師器 土師皿	口 径 18.0 高 27.3 底 6.8 最大 底 24.4	外面は頸部タテヘラズケリ。頸中位ヨコナデと下位タテヘラズケリに脚座と底面をヨコヘラズケリ。内面は下位に斜位ヘラズケリと上～中位にヨコヘラズケリ。中位・中位の積み上げ休止部が厚く付着。内外面口縁部はヨコナデ。外面上～中位の腹と内面下位のコグが明顯に残る。外面の腹熱褐色は不明。 [注記] 12, 13, 33, 34, 35, 37, 38, 40, 42, 43, 44, 74, 75, 76, 77, 85, 97, 98, 108, 109, 129, 土層一括, A-A	10YR7/6 明黄褐 やや粗い。白・赤粒～細粒やや多。赤・黒・透明細粒少 やや硬質	南東床土1～16cm 口5/12周、底7/12周、底全周 注記は左欄
18 土師器 土師皿	高 残 3.8	外面は頸部ナメヘラズケリ後に頸～胴部を横位ナデ。内面胴部～不定方向のナデとヘラナデの後、胴部ヨコヘラナデ。	2.5YR6/2 灰黄 やや粗い。白細粒多。白粒と赤・黒・透明細粒少 硬質	内成脚座及中 底1/4周 内成残
19 石函 金床石 破片	長 残 7.0 幅 残 5.0 厚 残 1.4	より厚く大きな石が割出した厚手の破片。表面には1～2mm程度の浅い割傷が縦向きに付着している。また、表面全体が粗粒で灰色を帯びている。底や割傷部の付着は認められない。残存重量 75.6g。割付関連遺物構成品。	5YR3/1 灰 細密で破片に淡緑色 帯びる 2 メタル度 未測定	中央床土と3cm 提示した面以外は破面 62
20 石函 金床石 破片	長 残 3.3 幅 残 1.9 厚 残 4.0	石の表面が割出した小片。表面の中央にある縦位の割傷を挿んで、右側と左側の面にそれぞれ縦位の破片が付着する。特に右半部の面で厚く付着し、ここに長さ約6cmの縦帯が約1箇所認められる。残存重量 3.6g。割付関連遺物構成品。	2.5YR1/ 黄灰 細密で破片に安山岩 帯びる 2 メタル度 未測定	中央床土5cm 提示した面以外は破面 64

21 石室跡 結核跡 白土	長径 47.64m 短径 48.59m 厚 767mm 重 24.3	穿孔後に孔の内面を工具でヨココウヘクズりするので穿孔方向不明で、孔径は上面から15～8.35m、下面8.14～8.45m。掘上面から外周側面は研削痕をわずかに残して残片を持つ。掘上面は製作時の研削面を土具で削って段差を少なくした面が見られる。放射状肌理の板石 20×20cmの厚形板を備く。掘下面は平らな面をより研削し完成を持つ。外面は板石状に仕上げた長さ3.4～35mの段を間置き、内側方向に研削し孔径は狭い。上下面とも孔の内面に施す斜状板状残痕があり、使用後の可能性が高い。	75CV5/1 縦穴 縦断面でやや軟質な板状石	南東長13m、平らな面を上に向けて斜位 完成 81
22 石室跡 結核跡	径 4.56m 厚 1.26m 重 0.03	外面は研削面のままで研削なし。側面は穿孔と同じ掘削方向1段階(横方向)の細かな凹溝を残す。片面から穿孔し、反対面に穿孔跡を生じる。孔径112～121mm。	5Y5/2 灰オリーブ 縦断面板石	P1 内 面 P1
23 土師器 (甕掛付、 押付き)	長 残3.8 幅 残3.8 厚 1.3 重 残8.3	内面が部分的に赤色となった甕掛付の押付内面破片。側面破面の内面寄りは発色し、外面には褐色に発熱した平土が露出する。実測部分8.3gの破片に径1点4.8gあり。竪穴関連遺物検出No.29。	縦断面1 メタル度 なし	南東長径上 全周が破面 88
24 土師器 転用羽口	長 残3.6 幅 残2.1 厚 残0.8 重 残5.3	高杯の脚部を使用した1土師器転用羽口先端部小破片。最大長が3.6cm程度の破片で、外面の土手側が薄皮状に硬化して発色している。土手側にかけては表面より灰色からくすんだ紫褐色、さらには褐色と熟変色している。内面の逆側面は縦状肌理が現れている。土手側の羽口先端部はぼぼ生きている。内面の発色状況が鋭く、羽口の厚厚は約7mmを測る。高杯の脚部としては、体部が比較的縦状肌理を基部のラッパ状に際して形部を想定できる。土手は土師器のもので、キメが細かくわずかな軽石と赤色の微細な混入物を含んでいる。色調は表面が褐色の通りで、地は淡赤褐色から灰褐色となる。分析資料No.6。竪穴関連遺物検出No.30。	5YR7/4 に近い 縦断面 赤褐色 赤・透明細砂 少 白・軟質 縦断面 1 メタル度 なし	南東長1.3m 破面3.8 60 1層西区
25 土師器 転用(羽口)	口 残4.7 長 残3.7 幅 残29.56 厚 合計	全体に灰色に発熱して土手側部外面がわずかに発色する(土器)転用羽口。厚手の高杯の脚部上端部より破片で、外側には掘削方向のキズがある。内面は縦状肌理が確認される。同一袋中には他に4片あり。竪穴関連遺物検出No.31。	5B5/1 赤灰 赤・赤褐色 赤・黒 透明細砂少 白・軟質 縦断面 1 メタル度 なし	南東長1.3～6cmが 破片 1/3期(先端1片、途中 4片) 20、26、111、1層西 区
26 土師器 転用(羽口)	高 残5.2 幅 残7.5 厚 残17.7	外面は脚部タテハ、腹部ナメハク。内面はナデで粘土積み上げ層を覆い、高杯のタテハ、薄皮の厚杯脚部破片、8片が接合する。口と口しての発色は褐色に発熱した平土が露出しているが、SE-36は転用羽口が突出していることから構成に追加した。竪穴関連遺物検出No.32。	7YR30/6 粗 赤・赤褐色 赤・白・黒 細砂少 赤褐色 白・軟質 縦断面 1 メタル度 なし	南東長1.12～1.3m 破1/6周 36、77、一括
27 土師器 転用羽口	口 2.8 長 残4.7 幅 残5.2 厚 残24.1	外面が灰色に発熱して土手側部が強く発色する(土器)転用羽口破片。羽口としてはいくつかの破片にあり、厚厚は8mm前後を測る。外面は縦方向のキズで、内面には縦状肌理が若干ありして認められる。高杯としてはいくつかの破片が断面に際して形部を想定できる。竪穴関連遺物検出No.33。	7YR7/6 粗 赤・赤褐色 赤・白 透明細砂多 白・軟質 縦断面 1 メタル度 なし	南東長1.7～9cm 破1/2周 66、67
28 土師器 転用羽口	高 残7.1 幅 残15.7 厚 残56.0	外面は発色のナデ後ヘラミガキ。内面はナデで粘土積み上げ層を残す。内外面の脚部間にコナナシ。基部に向かってラッパ状に際して形部の(土器)転用羽口破片。外面は縦方向のナデが丁寧に敷かれ、基部はコナナシによる。土手側部外面の一部が灰色に発熱して羽口であることを示す。内面には4段の縦状肌理が現れている。竪穴関連遺物検出No.34。	2YR30/6 粗 赤・赤褐色 赤・黒 細砂多、白 ・軟質 縦断面 1 メタル度 なし	南東長1.2m 破1/6周 127
29 土師器 転用羽口	高 残4.9 幅 残8.0 厚 残33.6	外面は脚部コナナシの後、脚部コナナシで、基部に向かってラッパ状に際して形部の(土器)転用羽口破片。厚の1/4が残り、本遺跡としては唯一の先端部から基部が現れる転用羽口である。外面の8期以上が灰色に発熱して、先端部寄りでは強く発色する。内面は4本の縦状肌理が確認される。先端部寄りの2本の縦状肌理が灰色に発熱し、端部には小範囲で浮き出す。竪穴関連遺物検出No.35。	7YR7/6 粗 赤・赤褐色 赤・黒 細砂少、赤 ・透明細砂 少 白・軟質 縦断面 1 メタル度 なし	南東長1.2～7cm 破5/12周 115、132、133、134
30 土師器 転用羽口	高 6.6 幅 残16.1 厚 残80.1	外面は脚部コナナシの後、脚部コナナシで、基部に向かってラッパ状に際して形部の(土器)転用羽口破片。厚の1/4が残り、本遺跡としては唯一の先端部から基部が現れる転用羽口である。外面の8期以上が灰色に発熱して、先端部寄りでは強く発色する。内面は4本の縦状肌理が確認される。先端部寄りの2本の縦状肌理が灰色に発熱し、端部には小範囲で浮き出す。竪穴関連遺物検出No.37。	10YR5/4 に近い 赤褐色 赤・黒 細砂多、白 ・軟質 縦断面 2 メタル度 なし	南東長1.2m 破下11/13期 100、西タ、1層西 区
31 土師器 転用羽口	高 残6.4 幅 残6.7 厚 残43.9	内外面に発色のため観察不明。内外面が強く発熱して全体に灰色基調となっている(土器)転用羽口破片。外面の右土手側は発色が強い。また土手側部には褐色の浮きが出る。厚厚は50mm前後を測る。高杯脚部の部としてはいくつかの破片にあり、厚厚は8mm前後を測る。かなり長期間使用された可能性が高い。竪穴関連遺物検出No.36。	5Y5/1 灰 赤褐色 赤・白 透明細砂 少 白・軟質 縦断面 1 メタル度 なし	南東長1.3～1.1m 上部1/2周 18、28
32 土師器 転用羽口	高 残6.5 幅 残9.8 厚 残113.9	外面はタテハラキズリとタテナデ後にタテハラミガキ。内面はナデで、粘土積み上げ層を少し残し、基部コナナシ。先端部と基部を欠く(土器)転用羽口破片。外面は縦方向のラッパ状に際して形部の(土器)転用羽口破片。厚の1/4が残り、本遺跡としては唯一の先端部から基部が現れる転用羽口である。外面の8期以上が灰色に発熱して、先端部寄りでは強く発色する。内面には3単位の縦状肌理が残り、先端部寄りでは強く発色している。竪穴関連遺物検出No.38。	10YR7/6 明黄 赤・赤褐色 赤・黒 細砂多、白 ・軟質 縦断面 1 メタル度 なし	南東長径中 部上平全周 破1/4周
33 土師器 (甕掛付) 押付き	長 残1.8 幅 残2.1 厚 0.6 重 残3.4	内面下土手側から端部に薄皮状の浮きが付いている(土器)転用羽口または他の破片の小破片。厚厚は4mmが破面でも土手側がわずかに反り返る。また全体が灰色に発熱する。竪穴関連遺物検出No.39。	5Y6/1 灰 縦断面 白 赤褐色 赤・透明細砂 少 白・軟質 縦断面 1 メタル度 なし	縦面4面
34 土師器 転用(羽口)	長 残2.5 幅 残5.2 厚 残6.2	内面に厚さ4mm程度の甕掛付が固着する(土器)転用羽口破片。厚厚は5mm程度の高杯脚部上端部破片と推定される。全体が灰色に発熱して表面が発色している。竪穴関連遺物検出No.40。	7.5Y6/1 灰 赤褐色 白・微細砂少 赤褐色 縦断面 1 メタル度 なし	南西部 1/6周 西内

第5章 権現山遺跡 SC10区

35 土師器 転用土器片 (板土面片)	長 残 3.6 幅 残 4.4 厚 1.0 重 残 12.2	焼熱により潤が不明だが、外面がナメ、内面が絞り目およびスピオサセと推定される。内外面が褐色から灰褐色で右側部の破面が強く発露する(土器)転用土器片。土器としては側部4面が破面で土手側破面が破れた形態となっている。それに応じて内外面が小さく反り返る。元の土器は厚さ1.2cm程度あり、底面には裏面の底面から口縁部にかけての境界の可能性を持っている。その意味では板土器片のほうが正確な評価をとれるかもしれない。5世紀前後の(土器)転用土器片を用いる的的にしばしばこうした板土器片が用いられており、土器片を転用治の単位より用いる場合も想定できよう。総合関連遺物構成No.41。	25Y5/2 黄灰黄 やや肌合い 白・褐色點-細粒やや多 破面 磁器度 1 メタル度 なし	北東床上 15cm 破面 4 53
36 土師器 転用土器片 (転用、先端部、浮化)	長 残 1.8 幅 残 4.6 厚 残 1.8 重 残 9.9	内内面が黄灰色の浮に覆われて(土器)転用土器片先端部。土器としては縁部部が破面であったり、欠け落ちた転用治に落下したもので、底面が2片が同一袋中であり。図示した1片の重量は9.9g、3片合計では13.4g。総合関連遺物構成No.42。	5Y4/2 灰オリーブ 地 灰色 やや肌合い白濁少 磁器度 3メタル度 なし	南東床上 4cm 先端部 残 59
37 転用治 (小、工具 付付き)	長 残 3.4 幅 残 4.3 厚 2.6 重 残 40.0	下面に短軸方向に向かう幅1.5cm程の工具痕を残す小形の板形器片。縁部大厚味は2.3cm程度で縁部は磨損。上面はかすかに木炭痕を残す平明灰味となる。総合関連遺物構成No.43。	地 黄褐色 地 灰褐色 面磁度 2 メタル度 なし	中央東床上 16cm 破面 3面 57
38 板形器片 (小、灰味 土付き)	長 残 8.0 幅 残 6.3 厚 残 2.9 重 残 109.6	左下側の側部が連続する3面の破面となった小形の板形器片。厚さ平穴品。土器に匹敵。凹凸を生じている。下面は浅い板形で全体に磨損の跡がみられる。厚部は中心の気孔が乱雑に残る状態となっている。下面下側部が部分的に黄褐色を呈す。総合関連遺物構成No.44。	地 灰褐色 地 黄褐色 磁器度 4 メタル度 なし	北東床上 直上 破面 3面 71
39 板形器片 (小、含鉄 灰味土付 き)	長 残 10.2 幅 残 7.2 厚 2.8 重 残 179.3	短軸3/4の短軸となった小形の板形器片。全体に扁平で短軸方向に伸びており、左の側部の中間部がくびれている。上面は浅い木炭痕を残す平明灰味で部分的に灰褐色に焼熱した跡が確認される。また、浮の中心部が赤土と突露する。板形器片としては、下に浮が形成された後に土師器に含鉄の浮が形成された形で存在している。図示した個体の重量は179.3g。小片を含めると合計180.0g。総合関連遺物構成No.45。	地 黄褐色 地 灰褐色 面磁度 3 メタル度 顕化(△)	中央東床上 16cm 破面 3面 55
40 板形器片 (小、含鉄)	長 残 5.1 幅 残 6.6 厚 残 2.5 重 残 103.8	上下面と下側の側部の一部が生きている。厚さ2.5cmほどの小形の板形器片。土師器に匹敵。左側部が破面で、現状に達する右側の側部は全周が細く、破面がみられる。上面の中央部から含鉄部が見えているため、灰褐色の浮がみられる。厚部は中心部が赤土と突露する。上面は全体に平明灰味で、短軸部に沿って木炭痕と浮の突出部が菊花状に広がる。下面は浅い板形で全体が灰味土の跡面となっており、2箇所に径1.3mm大の粒状の浮が顕出する。浮部は中層を中心に磨損で、上下面に引いた部分ではやや灰味が目立つ。土器片下側の側部は赤土中に埋め込まれており、磨損が認められる。また、土師器の側部の窪みに木炭痕が認められる。色調は表面の酸化土が茶色で、浮部は濃茶褐色、地は濃茶褐色から黒褐色となる。分析資料No.7。総合関連遺物構成No.46。	表 黄褐色-濃茶褐色 地 濃茶褐色 磁器度 3 メタル度 顕化(△)	南東床上 7cm 破面 4面 61
41 板形器片 (極小)	長 残 1.7 幅 残 2.1 厚 残 1.2 重 残 5.4	厚さ1.2cm程の極小の板形器片の背面破片。上下面と下側の側部が生きている。残る側部3面が破面となっており、浮部は磨損。総合関連遺物構成No.47。	表 黄褐色 地 灰褐色 磁器度 1 メタル度 なし	破面 3面
42 板形器片 (極小)	長 残 3.8 幅 残 2.9 厚 1.8 重 残 13.6	左側部が破面となる極小の板形器片の背面破片。上面は平明灰味で下面は浅い板形となる。生きている側部の発露で、母体となる板形器片の厚部は1.5cm程度で、図示した1片の重量は13.6g。小片2点を含めると合計15.0g。総合関連遺物構成No.48。	表 灰褐色 地 灰褐色 面磁度 2 メタル度 なし	南東床上 2cm 破面 1面 78
43 板形器片 (極小、含鉄)	長 残 3.8 幅 残 2.9 厚 2.1 重 残 17.1	左側部が破面となった極小の板形器片の背面破片。上面中央部には浮が突出し、下の浮は一部分が露出している。含鉄部が下の浮の中核部と推定される。浮部は気孔が疎らで密度はやや肌合い、浅い粒状の下面には粉状気孔が細く、磨損の跡面を呈す。総合関連遺物構成No.49。	表 明褐色 地 灰褐色 磁器度 3 メタル度 顕化(△)	南東床上 1cm 破面 1面 78
44 板形器片 (極小、含鉄)	長 残 4.1 幅 残 3.9 厚 残 1.7 重 残 27.2	平明、平明多量を生じた含鉄の極小の板形器片。左上側の側部が小塊状となり、上面が磨けた欠けとなっている。含鉄部はこの部分と、右側の小塊状の部分の2箇所に分かれている。そのため、全体の2/3の部分が含鉄部で、一見、側部から下面が露出する板形片になっているが、実際は厚さ2cm程度の厚部が表面・縁と濃茶褐色から黒褐色となっている。分析資料No.8。総合関連遺物構成No.50。	表 黄褐色-濃茶褐色 地 濃茶褐色 面磁度 3 メタル度 顕化(△)	南東床上 15cm 破面 1面 82
45 板形器片 (極小、含鉄)	長 4.4 幅 5.6 厚 1.4 重 残 25.0	左側部が破面となった扁平でやや特異な形状の極小の板形器片。左側の反り部から右側部が3cm程の範囲で顕出する。上面はツラツラとした感じの平坦で左下側部から上に上に広がる凹みが生じている。下面は浅い板形で、側部半分が灰味土に埋まっている。上面には気孔が多量、含鉄部は右側の突出部と推定される。図示した個体の重量は25.0g。小片2点を含めると28.8g。総合関連遺物構成No.51。	表 褐色 地 黄褐色 磁器度 3 メタル度 顕化(△)	南東床上 6cm 破面 1面 80
46 板形器片 (極小、含鉄)	長 残 2.9 幅 残 2.2 厚 残 1.9 重 残 7.2	右側部が小破面となった磨損がまたは極小の板形器片の背面破片。上面は浅い板形で、側部や下面は木炭痕により不規則な凹凸状態となる。総合関連遺物構成No.52。	表 黄褐色 地 黄褐色 面磁度 2 メタル度 なし	南東床上 直上 破面 1面 131
47 板形器片 (極小、含鉄)	長 残 3.3 幅 残 3.5 厚 残 1.7 重 残 15.4	左側部が破面となった平面・正三角形をした磨損の板形器片。右側に向かう際、右側の反り部は口部の側部の可能性の高い粘土質の破面が現れている。現状では磨損の跡面となっているが、本来は極小の板形器片であることが推定される。総合関連遺物構成No.53。	表 黄褐色 地 オリーブ黒色 磁器度 1 メタル度 なし	南東床上 15cm 破面 1面 82
48 板形器片 (極小、含鉄)	長 6.2 幅 7.3 厚 2.7 重 残 48.5	一見、板形器片の背面破片。浅い板形の浮で土師器の浮と異なる。浮部の厚部は黄褐色、内部に黒褐色を生じている。磨損の跡面に近い資料といえるが、浮部は土師器の浮と推定され、図示した個体の重量は48.5g。小片を含めると52.2g。総合関連遺物構成No.54。	表 灰褐色 地 灰褐色 磁器度 2 メタル度 顕化(△)	北東床上 17cm 破面 1面 52

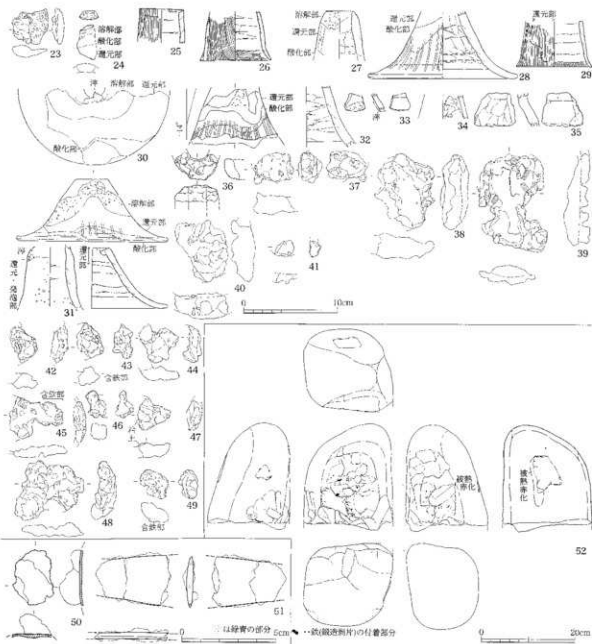
49 観治滓 (玄鉄)	長 3.0 幅 3.0 厚 2.1 重 17.1	形は丸腰型の観治滓。下面の中央部のみが小さな丸形を示し、側部や上面は本丸腰のみより変形が見られている。舌状部は下面寄りの芯部と見られ、顔色も白く、観治滓素材の選層品の可能性もあり。観治関連遺物構成No.55。	表 黄褐色 地 黒灰色 縦着度 2 メタル度 観化(△)	南東床直上 完形 90
50 鉄製品 (観治品)	長 残 2.9 幅 残 2.1 厚 残 0.1 重 残 6.8	1.平の平ブツの突出部が踏ぶくれている鉄製品表面破片。下面全体が踏ぶくりかたが異なる状態の鉄製品が母体と見られる。構成No.57の鉄製品類の鉄製品が同一遺構からの出土品で、この資料の表面破片の一部である可能性を持っているが、直後の接合はしない別個扱いとした。観治関連遺物構成No.56。	表 黒褐色 地 黒色 縦着度 6 メタル度 観化(△)	南東床 1.6cm 表面破片 60
51 鉄製品 (鉄地銅張)	長 残 3.9 幅 2.7 厚 0.4 重 残 11.6	最大幅が2.7cmを有する扁平な鉄製品破片。2片が接合しており、左右両端が顔色に異なっている。見かけには酸化土粒のため8mm程度の凹凸を持つが、一部の鉄製品のみは3.5mm程度と見られる。破面の端部に3箇所、緑青が吹いた部分から確認でき、加えて右側の破面上で手側の緑青に接して、深い赤褐色の金属製の疑いを持つ観治滓の発色部がある。表面面とも踏ぶくりや酸化土粒により凹凸が生じているが、本体は上面の中央部がわずかに窪み上がった形の薄板状の金属製品である可能性が高い。破面の一部に黒褐色の酸化土が附着している。透過X線像では腐食の観治面がほとんど確認できず、観化の程度が異なる状態の炭素量の低い鉄板状である。色調は表面の酸化土粒が茶褐色で、底面は黒褐色から黒色。さらに端部部分の顔色は緑青色となる。分析資料No.9。観治関連遺物構成No.57。	表 茶褐色～黒褐色～緑青 地 黒褐色～黒褐色～緑青 縦着度 6 メタル度 観化(△)	南東床直上 2の2片が接合 破面 2面 72, 73
52 石器 金床石	長 残 22.6 幅 残 18.7 厚 残 17.4 重 残 10.8kg (10.8kg)	下手側の側部が大きな窪状に欠けている金床石の平穴品。転石を母材としたもので、側部4面のいずれもが打面として用いられている。左側面が最も広範囲に用いられており、表面は磨耗が生じて点々と黒褐色の顔色をした凹部が附着している。古いで使用頻度の高いのは上面の打面で、残る2面については使用頻度が低い。奈良・平安時代の観治遺跡から出土する金床石に比べて打面の赤化が強く、古墳時代の観治の特色を持っている。石質は安山岩。観治関連遺物構成No.60。	10Y6/1 灰 安山岩 縦着度 1 メタル度 なし	南東床直上 下部穴 58
観治破片		方形の扉付住居址の隅の部分に長さ4.3m・幅2.7mの三角形に現った調査範囲から出土した資料である。観治関連遺物が多量に出土することから、中央に幅30cmの南北方向の土手を残し、その右と西北を6区に分した上で、北面側の土を採取して水洗した。観治関連の微細遺物としては転石・観治破片のいずれもが出土しているが、転石詳細の資料はきわめて少なく、またいびつだったり磨耗しない粘土質の滓が確認されている。分析資料としては構成No.60としたが、この転石を用いた金床石の南面に位置する1として位置する。おまじ3区からの出土である。資料化に際しては水洗された観治関連の微細遺物を転石の滓と観治破片に分けた後に、分析資料の選択時に磁着の強弱でさらに二分した中から代表化している。観治破片は9区とも比較的出土数が多く、おまじも種々であることから、磁着面内で二分した上で代表的な厚み資料を合計6点選択している。分析資料No.11。観治関連遺物構成No.58。	メタル度 なし	
転石滓		方形の扉付住居址の隅の部分に長さ4.3m・幅2.7mの三角形に現った調査範囲から出土した資料である。発掘調査の前に覆土中から観治関連遺物が多量に出土した上で、北面側の土を採取して水洗した。観治関連の微細遺物としては転石・観治破片のいずれもが出土しているが、転石詳細の資料はきわめて少なく、またいびつだったり磨耗しない粘土質の滓が確認されている。分析資料としては構成No.60としたが、この転石を用いた金床石の南面に位置する1として位置する。おまじ3区からの出土である。資料化に際しては水洗された観治関連の微細遺物を転石の滓と観治破片に分けた後に、分析資料の選択時に磁着の強弱でさらに二分した中から代表化している。転石滓は母体の資料数が限られるため、2点を選択した。分析資料No.10。観治関連遺物構成No.58。	メタル度 なし	

〔観治関連遺物〕 観治関連遺物は、他遺構の資料とともに「東谷・中島地区遺跡群10」で一度報告したものである(23～52)。金床石破片2点を、今回追加掲載した(19・20)。

羽口には高杯転用品と専用品がある。「転用羽口」としたうちの25・26・29・34は、非常に薄くて外面をハケ調整する独特な製品で、このような在地の土師器高杯が見られないので、専用羽口の可能性もある。しかし器厚が薄くて溶けやすい点は、専用羽口と考えるには不自然で、観治関連遺物を観察した穴沢義功氏の見解では高杯転用品と判断された。他に類例の少ない独特な羽口である。これに対して24・27・28・30・31・32・36は通常の高杯転用羽口である。33と35は転用羽口というよりも被熱した土師器(壺?)の破片と思われる。

鉄製品は2点出土した。51(分析資料9)は緑青を一部に生じている含銅鉄製品で、鉄地銅張(鉄地金銅張)の製品や再生素材に由来する可能性を持つ(『東谷・中島地区遺跡群10』, p.513)。50は鉄製品から表面が剥離した破片。金床石は、前回報告にも図示した完形品があり、4面を使用している(52)。この他に、別個体と思われる金床石破片を2点確認したので、今回追加報告した(19・20)。また、北6mと北東15mにある同時期の建物跡SI-50とSI-106の鉄滓と金床石もSI-36の観治作業に関わって持ち込まれた遺物の可能性があるため、今回追加報告した(第153図下段)。

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第 152 図 権現山遺跡 SG10 区 SI-36 (2) 遺物

羽口 (24)、鍛冶滓 (40・44)、銅粒を内部に含む鉄製品 (51) および粒状滓・鍛造剥片の金属学的調査結果は、大澤正己 2010『権現山遺跡・杉村遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査』(『東谷・中島地区遺跡群 10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』)で権現山遺跡北部の資料とともに報告された。始発原料が鉄鉱石の鍛錬鍛冶滓で、故鉄使用の可能性はある。羽口 (24) からは低温操業が指摘された(大澤前掲, p.511)。

また、第 152 図 40 と 51 (GON-7・9) の中性子放射線分析結果を、権現山遺跡北部の SG1 区 SI-33・71 出土資料 (GON-2・5) とともに、本章次節の 5.6.3. 項で報告する。この分析結果によると、As/Sb 濃度比 (アンチモンに対するヒ素の比率) は 1 以上であるが、As (ヒ素) と W (タングステン) が高濃度であることから、朝鮮半島から船載された鉄を原料に用いていることが考えられている。

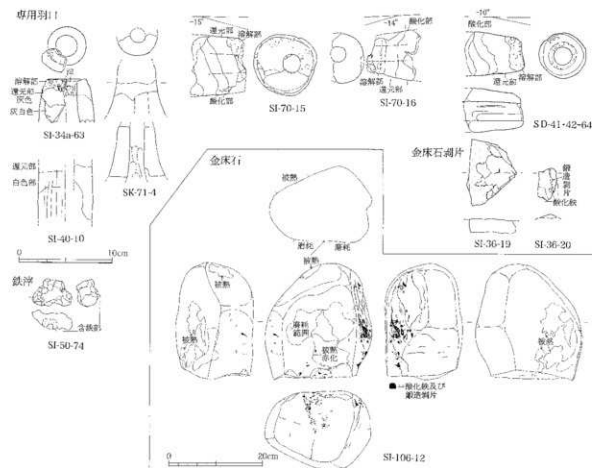
第6節 権現山遺跡の鉄関連遺物と自然科学分析

5.6.1. 鉄関連遺物の追加報告

権現山遺跡の南部と北部から出土した鉄関連遺物は、北部の報告書である『東谷・中島地区遺跡群』10のpp.490-498にまとめて掲載し、構成番号1～81を与えた。大澤正己氏による金属学的分析結果も同報告書に掲載してある。SG10区SE-569から出土した椀形鍛冶滓1点（第200図12）だけは中世の遺物であるが、それ以外はすべて古墳時代中期および後期の鍛冶関連遺物である。

ここでは、前回の報告書『東谷・中島地区遺跡群10』に掲載後に確認したため、同書に掲載されていない鉄関連遺物を第153図に示す。すべて古墳時代中期および後期と考えられる。SG10区SI-34aの63番・SI-40の10番・SI-70の15・16番（専用羽口合計4点）、SG10区SI-50の74番（椀形鍛冶滓1点）、SG10区SI-36の19・20番（金床石剥片2点）、SG10区SI-106の12番（金床石）、SG10区SD-41・42の64番（専用羽口）、SG10区SK-71の4番（近世土坑に混入した古墳時代の専用羽口）の合計10点である。この他に権現山遺跡SG9区7.5-22.5グリッドの確認調査トレンチに鉄滓類似品があるが、鉄滓ではなく低地に集積した酸化鉄分の可能性が高い。

SG10区SI-34aは古墳後期末（7段階）、SG10区SI-36は古墳中期中頃～後葉（2段階新相～3段階古相）、SG10区SI-40は古墳後期末（7段階）、SG10区SI-50は古墳中期後葉（3段階）、SG10区SI-70は古墳後期前葉（5段階）、SG10区SI-106は古墳中期後葉（3段階）の建物である。また、SG10区SD-41・



第153図 権現山遺跡南部の鉄関連遺物（追加報告分）

42 は、古墳中期末葉（4 段階）の SD-42 を後期後葉（6 段階）の SD-41 が掘り直した溝状遺構である。2 段階は TK73 ～ TK216 型式期、3 段階は TK208 型式期、4 段階は TK23 ～ TK47 型式期、5 段階は MT15 ～ TK10 型式期、6 段階は TK43 型式期、7 段階は TK209 型式期にそれぞれ相当する。

古墳中期は高杯転用羽口が主体で、古墳後期には転用羽口が消滅して専用羽口になる（SI-34a・40・70 と SD-41・42）。古墳中期末に短脚化した土師器高杯は羽口に転用することが難しくなり、古墳後期には高杯が再び長脚化するが器種組成における高杯の数量が少なくなることが背景にある。また、土師器を転用した羽口よりも専用羽口の方が厚いので耐火度も高いことが考えられる。

5.6.2. 中性子放射化分析および自然科学分析結果の概要と考古学的評価

権現山遺跡の鍛冶関連遺物を分析し、結果として朝鮮半島産の原料を使用していることが推定された。分析対象は、今回報告する SG10 区 SI-36（古墳中期中葉～後葉、2 段階新相～3 段階古相）と、北半部の報告書「東谷・中島地区遺跡群」10 で既に報告した古墳中期の鍛冶遺構（SG1 区 SI-33、古墳中期中葉、2 段階）および古墳後期の鍛冶関連遺物出土遺構 SG1 区 SI-71（後期中葉、5 段階新相）の出土遺物である。分析方法は、中性子放射化分析および顕微鏡観察・EPMA 調査を実施した。目的は、元素の種類と含有量を定量して、鉄の原産地を推定することである。分析作業と結果の解析、報告書作成は東京都市大学工学部原子力安全工学科の平井昭司氏に依頼した。

平井昭司氏は国立歴史民俗博物館の共同研究「日本・韓国の鉄生産技術」において製鉄・鍛冶関連遺物の中性子放射化分析結果から原料の違いや産地を議論している。栃木県域では小山市西裏遺跡および壬生町新郭遺跡で古墳時代中期の鍛冶関連遺物に中性子放射化分析を実施し、朝鮮半島の鉄原料が使用されていることを明らかにした（平井 1996・1998）。これらの中性子放射化分析結果においては、ヒ素とアンチモンの濃度比（As/Sb）が 1 以下であることから、朝鮮半島の鉄原料が使用されたことを推定している。

今回の権現山遺跡の分析結果では、As/Sb 比がいずれも 1 以上の値となった。しかし、ヒ素（As）およびタングステン（W）の濃度が高いことから、朝鮮半島産の原料を使用していることが推定されている。6 世紀以前の韓国出土鉄器にも As/Sb が 1 以上で、As が数 100 $\mu\text{g/g}$ 、W の濃度が数 10～数 100 $\mu\text{g/g}$ のものがあるということである。

As/Sb が 1 以上なので、平井他（1994b）の分類では「高 As・低 Sb の系列」に属すると思われる。加耶・新羅地域の古墳出土鉄器に対比すると、福泉洞・七山洞・鶴果台・礪溪堤・玉田・蓮山洞古墳群の鉄器と同じ群に入り、蔚山下空・金海乳安里古墳群の鉄器では別群に属するものが多い（平井他 1994b, p.315）。As/Sb が 1 以上で、As が数 100 $\mu\text{g/g}$ 、W の濃度が数 10～数 100 $\mu\text{g/g}$ の鉄器を拾い出すと、釜山市七山洞古墳群 1A・1B（铸造斧形品）、釜山市福泉洞 21 号墳 1（鍛造鉄斧）、陝川礪溪堤外 A 号墳 5（鏡板）、釜山市蓮山洞 8 号墳 3（挂甲小札）が該当する（平井他 1994b）。同様な原料を用いた鉄器が釜山市域の古墳に多いことがわかるが、慶尚南道陝川地域にも認められる。現時点では資料数に限界があるので、韓国で釜山・陝川以外の地域に同種の鉄が分布するかどうかを明らかにできない。

〔註〕

平井昭司 1994a「中性子放射化分析法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 58 集 日本・韓国の鉄生産技術（調査編 1）国立歴史民俗博物館 佐倉, pp.29-31.

平井昭司他 1994b「韓国出土鉄器の分析科学的特徴」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 59 集 日本・韓国の鉄生産技術（調査編 2）国立歴史民俗博物館 佐倉, pp.314-325.

平井昭司 1996「西裏遺跡から出土の製鉄関連遺物の中性子放射化分析」『西裏遺跡 栃木県埋蔵文化財調査報告第 180 集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 宇都宮, pp.265-272.

平井昭司 1998「新郭遺跡から出土の製鉄関連遺物の中性子放射化分析」1998『新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡 栃木県埋蔵文化財調査報告第 214 集 栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団 宇都宮, pp.529-538.

5.6.3. 権現山遺跡から出土の鍛冶関連遺物及び鉄製品の自然科学的分析

平井昭司(東京都市大学)

1. はじめに

権現山遺跡は、栃木県宇都宮市東谷町に所在する5～6世紀(古墳時代中期～後期)の巨大集落で、このうち区画整理事業関連調査で94,000㎡を発掘して、古墳時代の竪穴住居跡207棟の調査を行った。そのうち、SG1区SI-33とSG10区SI-36からは古墳時代中期後葉(5世紀中葉～後葉)に比定される竪穴鍛冶遺構が見いだされ、そこからは鉄滓や鉄製品が出土した。また、SG1区SI-71からは古墳時代後期中葉(6世紀中葉)に比定される鍛冶遺構ではない遺構からも鉄滓が出土している。

2. 分析試料

分析に供した試料は4点で、それぞれの写真を第154図の図1、図2、図3及び図4に示す。図中にある直線は、金属組織観察のための埋め込み用試料の採取箇所、ダイヤモンド刃の自動切断器(BUEHLER社製: Isomet LOW SPEED SAW、潤滑・冷却液: エチルアルコール)とハンディー用のカッター((株)ミスター製: M25H)を用いて行った。丸印は放射化分析のために切断した箇所である。特に、分析試料の採取においては、あらかじめ一般に使われている磁石を使用し、反応を感覚により着磁力を調べ、できるだけ着磁性が強いところを分析に供した。

分析した試料4点は、椀形鍛冶滓と鉄製品と分類されているが、それらの試料番号は、GON-2、GON-5、GON-7及びGON-9である。それぞれの外観の概略を以下に示す。

GON-2は、薄板状の鉄製品の破片で表面は褐色な錆に覆われている。切断した内部は黒色であり、層状になっていることが観察される。磁石による着磁性は強い。

GON-5は、椀形鍛冶滓で無数の小さい空孔がみられ、表面は灰色部分と褐色部とになっている。試料の大きさとしては、軽かつ硬い。切断した面では黒く細かい空孔が密になっている。磁石による着磁性は弱かった。

GON-7は、椀形鍛冶滓で表面には細かい空孔が多数みられ、全体的にこげ茶色になっている。重量感はあるが、硬くはない。切断面は黒く光沢があり、大小の空孔が観察される。磁石による着磁性は強い。

GON-9は、板状の鉄製品の破片で表面は褐色の錆に覆われ、脆くなっている。切断した内部は黒色で、層状になっている。

分析した試料の資料重量及び出土位置を第91表上段に、また、中性子放射化分析用に供した試料重量を第91表下段に示す。

第91表 分析試料一覧

	GON-2	GON-5	GON-7	GON-9
	鉄製品	椀形鍛冶滓	椀形鍛冶滓	鉄製品
資料重量(g)	20.7	85.0	103.8	11.6
出土位置	SG1区SI-33	SG1区SI-71	SG10区SI-36	SG10区SI-36
放射化分析用試料重量(g)	0.0901	0.0525	0.0508	0.0621

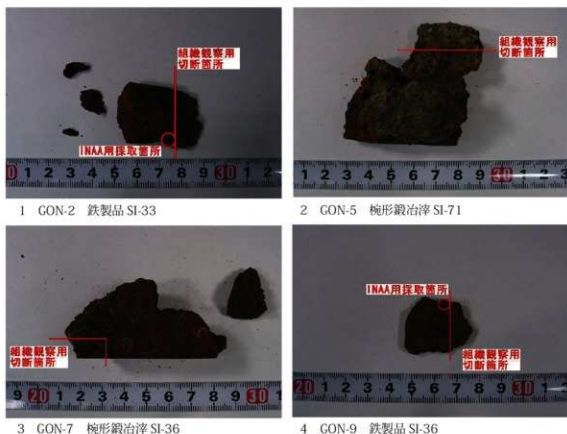
3. 自然科学的分析方法

3-1 光学顕微鏡法による組織観察

切断採取した試料を直径1インチの大きさの型に入れ、ウッドメタル(Bi-Pb-Sn-Cd合金)で埋め込み、硬化させた後に研磨を行い、顕微鏡観察を行った。観察には倒立型金属顕微鏡(Nikon製: EPIPHOT300)を使用し、拡大倍率100倍で行った。

3-2 EPMAによる元素分布調査

電子プローブマイクロアナライザ(日本電子製: JXA-8200)を使用してEPMA分析を行った。顕微鏡観察を終えた試料をEPMA分析のために、再度試料表面の研磨を行い、非導電体による帯電の影響を防ぐため、分析面にAuの蒸着を行った。測定は、加速電圧: 15kV、照射電流: 1.3×10^{-7} A、ビーム径: $1 \mu\text{m}$



第154図 権現山遺跡の放射化分析・自然科学分析試料 (SG10区 SI-33・36・71)

φの条件で行い、計15元素(C, O, Na, Al, Si, P, S, Cl, Ca, Ti, Fe, Co, Cu, As, Sb)のマッピングの画像を解析した。マッピングの条件は、測定視野: $400 \times 400 \mu\text{m}$ 、画素サイズ: $1 \mu\text{m}$ 、画素数: 16万 pixel、計測時間: 10msec/1pixelである。マップング像の明るさは、測定視野内で最も高い強度(count)を最高値とし、0(count)を最低値として各元素の分布と存在量を示した。

3-3 中性子放射化分析法による元素分析

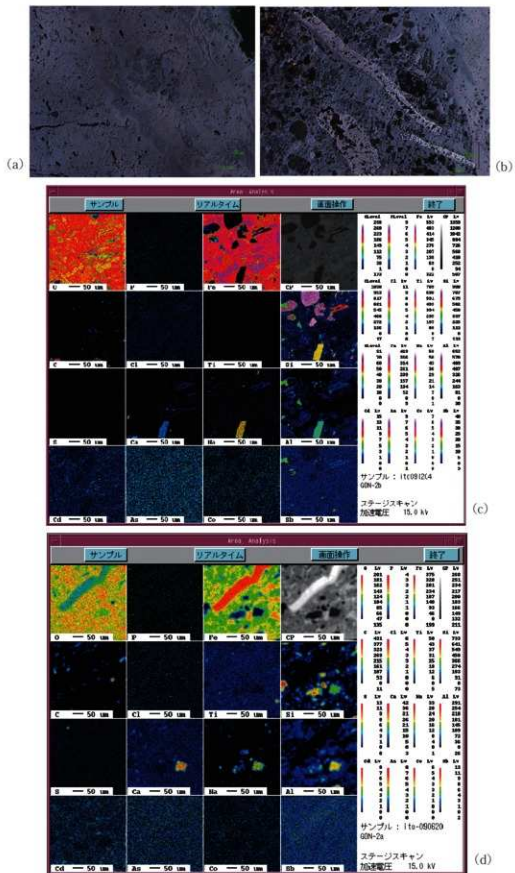
ダイヤモンドカッターにより切片を削りだした50~90mgをそれぞれ秤量してポリエチレン袋に二重詰めたものを照射・分析試料用とした。定量のためにはAu線を同時に照射し、Auの放射化量から他の元素の放射化量を見積もるk0法により元素量を算出した。分析試料の中性子照射には日本原子力研究開発機構の研究用原子炉: JRR-3(出力: 20MW)のPN-1照射設備を使用した。放射化した試料のγ線測定は、高純度Ge検出器と4096

第93表 測定に使用した核データ

元素	核種	半減期	γ線エネルギー(keV)
Na	²⁴ Na	14.9 h	1368.6
K	⁴² K	12.36 h	1524.7
Sc	⁴⁶ Sc	83.8 d	889.3
Cr	⁵¹ Cr	27.7 d	320.1
Fe	⁵⁹ Fe	44.6 d	1099.3, 1291.6
Co	⁶⁰ Co	5.271y	1173.2, 1332.5
As	⁷⁶ As	26.3 h	559.1
Rb	⁹⁷ Rb	2.88 d	215.7
Sb	¹²² Sb	2.7 d	564.2
La	¹⁴⁰ La	40.27 h	1596.2
Ce	¹⁴¹ Ce	32.5 d	145.4
Sm	¹⁵³ Sm	46.7 h	103.2
Eu	¹⁵² Eu	13.3 y	1408
Tb	¹⁶⁰ Tb	72.3 d	298.6
Yb	¹⁷⁵ Yb	4.19 d	396.3
Lu	¹⁷⁷ Lu	6.71 d	208.4
Hf	¹⁸¹ Hf	42.39 d	482.2
W	¹⁸⁷ W	23.9 h	685.7
Th	²³³ Pa	27 d	311.9

第92表 中性子照射条件及びγ線測定条件

中性子束密度 (原子が、照射設備)	照射時間	冷却時間	測定時間
$2 \times 10^{17} \text{ m}^{-2} \text{ s}^{-1}$ (JRR-3炉, PN-1)	10m	1回目 2-4d 2回目 9-16d	1回目 1500s 2回目 3000s



第155図 GON-2鉄製品の光学顕微鏡観察像(a)、(b)及びEPMA解析像(c)、(d)

チャンネル波高分析器からなるγ線スペクトロメトリーにより行った。放射化するための中性子照射条件及びγ線測定するための条件を表2に示し、元素定量のため着目する放射性核種及びγ線エネルギー等の核データを表3に示す。分析の原理は、定量すべき元素が構成する安定核種を原子核からの中性子により、主に(n, γ)の核反応を起こさせ、質量数が1多い放射性核種を生成させる。この放射性核種の放射能を測定することで、元素含有量を定量することができる。この核反応が起きるとき、ときに(n, p)反応や(n, α)反応も起き、これが(n, γ)反応から生成する核種と同一なものもを生成し、定量において妨害反応となる。妨害反応の一例として、 ^{27}Al (n, α) ^{24}Na 、 ^{46}Ti (n, p) ^{46}Sc 、 ^{56}Fe (n, p) ^{56}Mn 、 ^{54}Fe (n, α) ^{51}Cr 、 ^{60}Ni (n, p) ^{60}Co 、 ^{63}Cu (n, α) ^{60}Co などがあり、過去の分析結果からFeの値100%に対してCrの値は35ppm、Mnの値は21ppm高い値になることが知られている。今回、中性子放射化分析の照射とγ線測定に関し、住重試験検査株式会社に委託しており、これらの元素の妨害反応の影響の補正を行っていない。

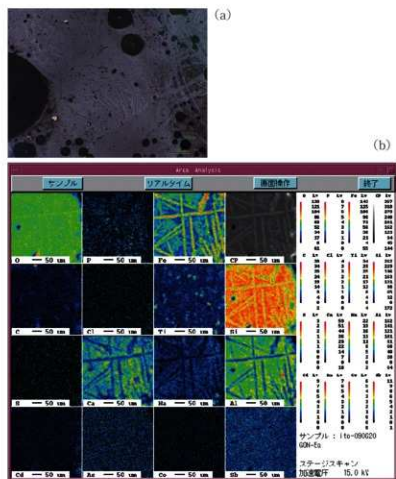
また、今回定量した元素は、放射化して生成する放射性核種が短寿命(数分~数時間)核種は分析できないので、分析対象から除外している。

4-1 光学顕微鏡観察像及びEPMA解析像

1インチの型枠の中に埋め込んだそれぞれの試料の複数箇所を光学顕微鏡及びEPMAで観察を行った。本報告では代表的な1~2箇所の光学顕微鏡観察像及びEPMA解析像を示す。

* GON-2 鉄製品

第155図にGON-2鉄製品の光学顕微鏡観察像及びEPMA解析像を示す。図の(a)と(b)は光学顕微鏡観察像であり、(c)と(d)はEPMA解析像である。



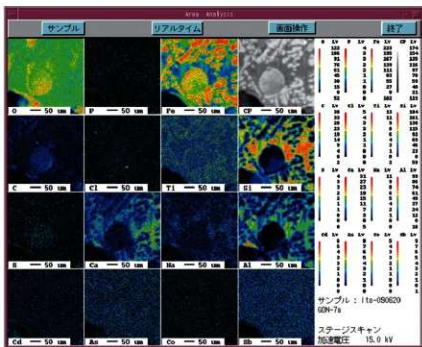
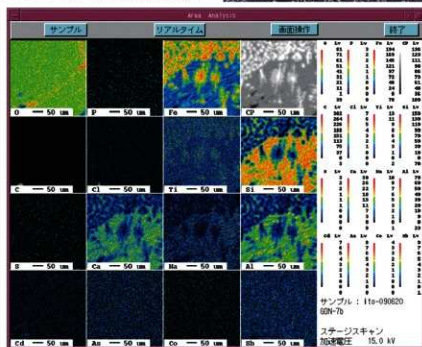
図の(a)と(b)の光学顕微鏡観察像より層状になっていることがわかれるとともに、3種類の相からできていることがわかる。(c)と(d)のEPMA解析像からは視野全体がFeの酸化相となっているが、場所によりその程度が異なっている。さらに、その酸化相の中に錆化が進んでいない鉄金属部が残存している((d)図参照)。

また、これらのFe酸化相の中には角ばったガラス質(SiO₂, Al₂O₃, Na₂O, CaO)の非金属介在物が不純物として存在しているのがわかる。このような非金属介在物が角ばって混入していることは、鉄加工時にはさほど高温になっていないことが推察される。

* GON-5 梶形鍛冶滓

第156図にGON-5梶形鍛冶滓

第156図 GON-5 梶形鍛冶滓の光学顕微鏡観察像(a)及びEPMA解析像(b)

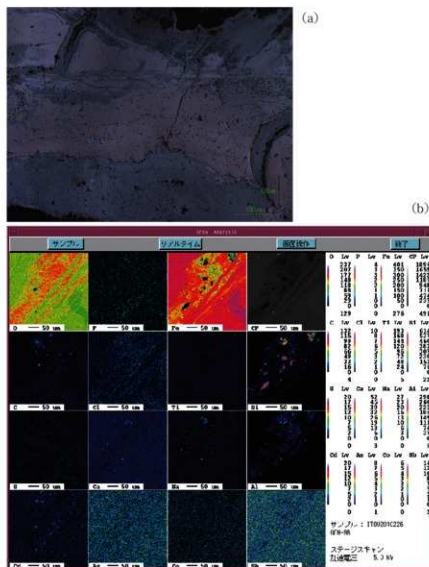


第157図 GON-7 椀形鍛冶滓の光学顕微鏡観察像 (a)、(b) 及びEPMA解析像 (c)、(d)

の光学顕微鏡観察像及び EPMA 解析像を示す。図の (a) は光学顕微鏡観察像であり、(b) は EPMA 解析像である。観察像をみると全体的に灰色のところに白い線状の結晶がみれる。黒いところは空孔である。灰色のところは Si、O、Al、Ca が多く検出されていることからガラス質 (SiO₂、Al₂O₃、CaO) と推察される。また、白い線状部分は、Fe、O、Si からなるファイヤライト (Fe₂SiO₄) と思われる。

＊ GON-7 椀形鍛冶滓

第 157 図に GON-7 椀形鍛冶滓の光学顕微鏡観察像及び EPMA 解析像を示す。図の (a) と (b) は光学顕微鏡観察像であり、(c) と (d) は EPMA 解析像である。観察像をみると灰色の背景の中に多少白っぽい灰色の帯状の部分と、白色の樹枝状部分と菌状部分が観察された。解析像をみると灰色部分は主に SiO₂ であり、白っぽい灰色の帯状部分は、SiO₂、Al₂O₃、CaO からなるガラス質成分と推察される。また、白色の樹枝状部分と菌状部分はウスタイト (FeO) とが観察され、本試料が鍛冶に関連した滓であることがわかる。さらに、これらの滓の中に微小な鉄粒が錆化したもの ((d) やファイヤライト (Fe₂SiO₄) も観察された。



第 158 図 GON-9 鉄製品の光学顕微鏡観察像 (a) 及び EPMA 解析像 (b)

＊ GON-9 鉄製品

第 158 図に GON-9 椀形鍛冶滓の光学顕微鏡観察像及び EPMA 解析像を示す。図の (a) は光学顕微鏡観察像であり、(b) は EPMA 解析像である。観察像をみると層状になっていることが明らかになるとともに、表面部は錆化していることがわかる。その様子が解析像にも表れている。このことは、解析像の O の個所について全体的に検出されていることによる。Fe の錆化部であるが、ところどころ Si が検出されているところがある。これらは鉄づくりにおいて残存した非金属 inclusion であり、それぞれの大きさからすると鍛冶過程においてこれらをあまり多く除去されなかった表れと思われる。

4-2 中性子放射化分析

4 試料の中性子放射化分析した結果を第94表に示す。表中のFeは(%)で、その他の元素は、($\mu\text{g/g}$)の単位で濃度を表示している。元素記号に*が付いているのは、妨害反応の影響を補正していないので、高めの値になっている。表中の最下段にはAs/Sb濃度比をも示している。また、本法の真度を確かめるために日本鉄鋼連盟が作製した標準鉄鉱石JSS 805-1を同時に定量した値を第95表に参考で示す。同一試料を二つ(A、B)作り、分析した結果が表に示されている。表中に示されている文献値は、以前われわれが中性子放射化分析したときの値(鈴木章悟・平井昭司:「機器中性子放射化分析法による高純度鉄及び鉄鉱石標準物質中の微量元素の定量」、分析化学、44巻、p633-644(1995))である。妨害反応の影響の補正を行わなかった元素は、文献値より高いことが分かるが、それ以外の元素は概ね10~20%以内で一致していることが明らかである。

この知見をもとに、第94表の分析値をみたとき、Feの濃度はGON-5の試料を除いて60~70%とFeが錆化あるいは酸化していることを示している。GON-5は鍛冶滓であるが、Fe濃度が非常に低いことを考えると、試料の採取時に鉄滓部ではなく粘土の焼結部を切り取って分析してしまったものと思われる。Fe金属が錆化あるいは酸化した場合、Feは Fe_3O_4 、 Fe_2O_3 、 FeOOH 等のように変化し、Fe濃度は、100%から72%、70%、63%と減少してくる。さらに不純物として他の成分が含有してくると、Fe

第94表 中性子放射化分析の結果

	$\mu\text{g/g}$			
	GON-2 鉄製品	GON-5 椀形鍛冶滓	GON-7 椀形鍛冶滓	GON-9 鉄製品
Na*	140	20000	1300	93
K	190	28000	9700	<330
Sc*	0.64	17	5.7	0.21
Cr*	13	20	10	11
Fe(%)	64	6.3	59	70
Co*	65	22	62	110
As	730	5.6	43	480
Rb	<24	180	37	<25
Sb	61	0.32	20	4.5
La	0.35	26	3.6	<0.44
Ce	1.4	48	7.7	<1.2
Sm	0.13	3.7	0.64	<0.11
Eu	<0.10	0.58	0.13	<0.071
Tb	<0.28	0.78	<0.30	<0.28
Yb	<0.30	2.4	0.51	<0.36
Lu	<0.067	0.63	0.13	<0.073
HF	<0.43	4.7	0.90	<0.44
W	170	<8.7	21	31
Th	<0.33	13	1.3	<0.33
As/Sb	12	17	2.1	107

* 妨害核反応による補正なし

第95表 標準鉄鉱石における分析値と文献値との比較

	JSS805-1 *	JSS805-1 *	平均値	文献値	平均値/文献値
	A	B			
Na	93.6	91.5	92.6	31	2.99
K	<610	<610		43	
Sc	2.12	2.17	2.15	1.4	1.57
Cr	84.6	60.2	72.4	24	3.02
Fe(%)	73.1	75.5	74.3	69	1.08
Co	15.0	15.2	15.1	9.6	1.57
As	12.7	13.8	13.3	11.5	1.15
Rb	<30	<24		<3	
Sb	3.66	3.45	3.56	3.8	0.94
La	5.84	5.89	5.87	6.0	0.98
Ce	13.9	12.8	13.35	12.2	1.09
Sm	1.54	1.54	1.54	1.68	0.92
Eu	0.358	0.344	0.351	0.44	0.80
Tb	0.322	0.304	0.313	0.34	0.92
Yb	0.794	0.739	0.767	0.67	1.14
Lu	0.221	0.263	0.242	0.15	1.57
HF	<0.42	<0.39		0.156	
W	48.5	48.7	48.6	43	1.13
Th	0.507	0.481	0.494	0.35	1.41

*MBR赤鉄鉱

妨害核反応の影響

Na: ^{27}Al (n, α) ^{24}Na Sc: ^{46}Ti (n, p) ^{46}Sc Cr: ^{54}Fe (n, α) ^{51}Cr Co: ^{60}Ni (n, p) ^{60}Co , ^{63}Cu (n, α) ^{60}Co

濃度はこれらの値よりもさらに低くなっていく。このような観点で、GON-2 と GON-9 の鉄製品をみると、微量の分析試料に限定されるが、GON-9 のほうが Fe_3O_4 に近い形で錆化しているものと思われ、逆に GON-2 は FeOOH に近い形で錆化しているものと思われる。

今回定量した元素のうち、Fe、Co、As、Sb、W の元素は、鉄原料からの製鉄過程で金属 (Fe) 中に濃集する元素であり、また、Fe が錆化することで一緒に濃度が減少する元素である。一方、鉄滓では鉄原料のときの濃度よりは低くなることが知られている。このような視点で GON-5 を除く 3 試料をみると、As 濃度が数 $100 \mu\text{g/g}$ とかなり高濃度であることは一つの特徴となる。また、W 濃度も比較的高濃度であると思われる。このように As や W 濃度が高い鉄原料は、砂鉄よりは鉄鉱石であることが推測できる。

さらに、これらの試料の産地を推定するとき、As/Sb 濃度比は有力な指標となる。この値が 1 以下であれば、朝鮮半島の鉄原料が使用された試料であることが明らかとなるが、第 94 表の値をみるといずれも 1 以上の値となっている。しかしながら、6 世紀以前の韓国での鉄器には、As/Sb 濃度比が 1 以上で、As 濃度が数 $100 \mu\text{g/g}$ であり、さらに W 濃度が数 $10 \sim$ 数 $100 \mu\text{g/g}$ の鉄器が出土している (日本・韓国の鉄生産技術〈調査編〉補遺：藤尾慎一郎・斎藤努、「国立歴史民俗博物館研究報告第 66 集」、1996 年)。なお、我が国においても同時代には同様な成分をもつ鉄器が出土しているが、舶載品として評価されている。また、我が国独自の鉄鉱石を利用した鉄器であれば As 及び W がこのように高濃度になることはないと推論できる。以上のことから、これら 3 試料は韓半島からの舶載品と考えるのが妥当と思われる。

5. おわりに

GON-2 鉄製品、GON-5 椀形鍛冶滓、GON-7 椀形鍛冶滓及び GON-9 鉄製品を自然科学的分析法で観察と分析を行った。椀形鍛冶滓の 2 試料では、ウスタイト (FeO)、ファイヤライト (Fe_2SiO_4)、ガラス質成分 (SiO_2 、 Al_2O_3 、 Na_2O 、 CaO) を観察することができた。鉄製品の 2 試料では層状になっている錆化した Fe を観察するとともに、非金属介在物として角ばったガラス質成分 (SiO_2 、 Al_2O_3 、 Na_2O 、 CaO) や錆化が進んでいない Fe の金属片を観察できた。

中性子放射化分析の結果、鉄製品はすべて錆化し、Fe 濃度が $60 \sim 70\%$ であった。GON-5 の試料では切削箇所を粘土焼結箇所としてしまったので、元素濃度から鍛冶滓の特徴を把握することができなかった。鉄製品の 2 試料と GON-7 の試料から、As と W 濃度が特徴的に高濃度であるとともに、As/Sb 濃度比がいずれも 1 以上であった。高濃度な As と W であることから、鉄製品の鉄原料は鉄鉱石であり、また、韓半島からの舶載品であることが示唆された。

第7節 古墳時代の居館外郭の溝状遺構

SG10区 SD-43 (第159・160図、写真図版126・208・209)

【位置】SG10区南部の16-16・17グリッドにあり、西はSG5区へ続く。古墳中期中～後葉のSI-100を切り、ほぼ平行する古墳後期のSD-44に南側を切られる。約3.6mの間(陸橋?)をあけて、東側に隣接するSG10区SD-221と対応する。この溝が権現山遺跡南部居館(SG5区SA-151方形柵列遺構)の北側を区画し、SD-43とSD-221の間の陸橋部が出入口と考えられる。

【規模と形状】長さはSG10区で15.2m、SG10区を含めると30.3mで、さらに西へ延びる。断面形は浅い皿状で、底面は平坦な部分が多いが、図示したような凹凸もあり、A-A'の東側は10cmほど底面が高くなる。SG10区では溝幅1.7～2.5m、底面幅は1.2～2.1m、残存する深さは10～45cmで東側が僅かに深い傾向があり、底面標高はSG10区西端で79.55m、東端の最深部で79.41m。

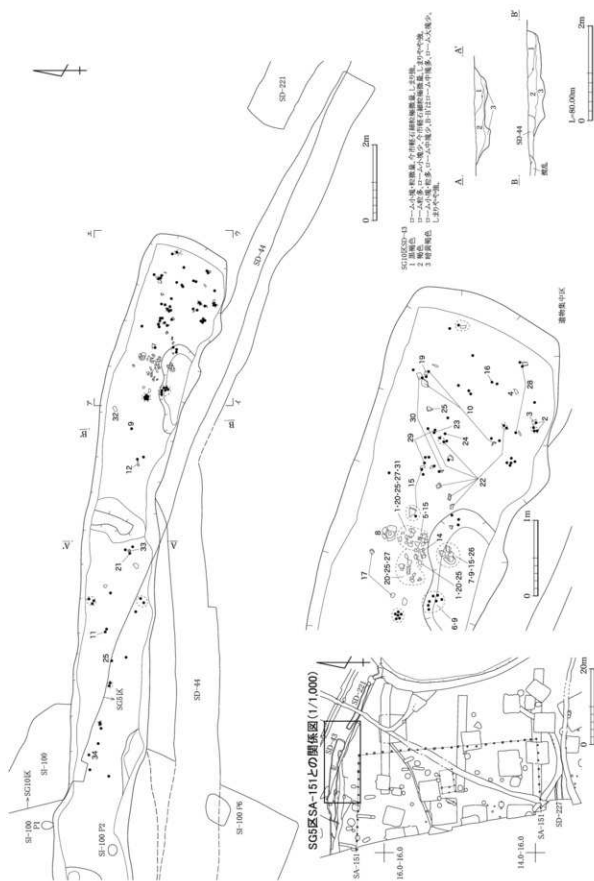
【覆土】自然堆積である。西側に続くSG5区では最上層に白色粒子(火山灰か)を多く含むことが記録されている。SG5区のテフラ検出分析結果から、上層部で確認された白色軽石が古墳後期初頭の榛名二ツ岳活川テフラ(Hr-FA)である可能性が高い(第8章第2節)。

【遺物出土状況】東部ほど遺物が多くなるので、SD-221との間で廃棄行為が多く行われたと考えるならば、そこを通路と考える推定を支持するかもしれない。SI-100から古墳中期中葉～後葉の遺物が混入した可能性もある。

【出土遺物】SG5区で調査した時の遺物と同様で、初期模倣杯と、口が外へ開く平底・凹底の内斜口縁杯から、古墳中期後葉とみられる。高杯は脚が少し低く(9・10)、小形壺は口縁部が少し短くなっている(19・20)。脚中位が膨らむ中期中葉の高杯(12)はSI-100から混入したか、そうでなければSD-43の上限が中期中葉の新相でSI-100が中期中葉の古相と考えることになる。粉痕のある土師器(2)の事例は、SG10区SI-50などにある。12のように白色針状物質(骨針)を含む搬入品の土師器は、SG10区ではSI-23などにあり、東側のSD-221にもある。土師器壺(18)は、権現山遺跡南部ではSG5区SX-118・SD-227とSG9区西区遺構外にあり、権現山南部居館の北辺溝SG10区SD-43と南辺溝SG5区SD-227で各1点出土したことになる。他に北関東自動車道A区SD-225(権現山北部居館の南辺溝)・B区4号墳・SG1区SI-6にも土師器壺がある。21は弱い受口状口縁の壺で、SI-19aなどの事例とは形が異なる。貼付口縁の壺(22・23)のうち、22は頸が広くて煮炊痕があるので甗と呼んだ方がよいかもしれない。34は小形甗としては古い時代の例。小片で図示していないが、SG5区SI-22等と同一個体の陶質土器壺がSG10区SD-43にも1片ある。図示以外の土師器合計277片・4.034gの内訳は、杯62片・284g、高杯35片・547g、小形壺3片・33g、壺甗類172片・2,967g、甗5片・203g。

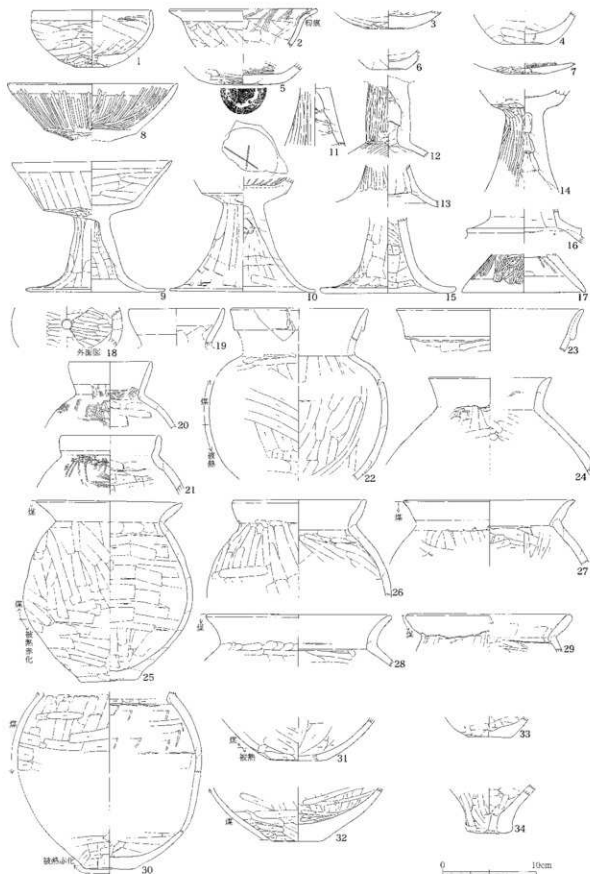
第96表 権現山遺跡SG10区SD-43出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (mm/g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復128 高 残6.0 底 39 最大 復13.0	外面は体部にナデおよびヘラナデ後ヨコヘラズリ。口縁部ヨコナデ。外面はナデ後外縁を削り足して凹底状。内面は口縁部ヨコナデ。底部に1方向と体部に斜位のヘラナデ。	7.5YR5/4 灰白色 やや暗黒 赤黒～細粒と白・黒・透明細粒少 やや軟質	底上29～32cmが接合 口1/2部。底1/2部 67, 69, 70, 一抜
2 土師器 杯	口 復158 高 残4.0	内外面に強い稜を持って口縁部が外へ折れる。外面は体部ナデ後ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面は体部にやや適なナメヘラナデと口縁部ヨコナデ後、口～体部に斜の肌・管輪。胎土中に混じっていた船形彫が口縁部内面に1箇所残っている。内外面全体に不規則な型が付着し、底面にも及んでいる。	2.5Y2/3 暗オリーブ灰 やや暗黒 赤黒粒やや多。 白・黒・赤・透明細粒少 やや軟質	底上10～15cmが接合 口1/3部 9, 87B
3 土師器 杯	高 残1.9 底 4.8	外底面はおおよそ1方向のヘラズリで凹底状。外面体部はヨコヘラズリ。内面底面は多方向ヘラズリ。	5YR7/6 橙 やや暗黒 赤黒～細粒やや多。 白・黒・透明細粒少 やや軟質	底上30cm 底1/3部 8
4 土師器 杯	高 残3.5 底 復4.8	外底面はヘラズリにより凹底状にする。外面体部は1方向のナデ。内面底面はおおよそ1方向のナデ。	5YR7/8 橙 やや暗黒 白・赤黒～細粒 やや多。透明細粒少 やや軟質	底上32cm 底1/3部 10



第159図 権現山遺跡SG10区SD-43(1)遺構

5	土師器 杯	高 残 2.4 底 4.8	外底面中央に径3.3cmの丸い凹みを持つ平底で、四面の中央は中高状に下へ陥らむ。体部と底部の境が不明。外底面に斜にナメ、外面体部ヨコヘラズリとヨコヘラズリ。内面は底部に多方向と体部に斜一横位のヘラミガキ。	2.5YR5/8 赤褐色 やや暗黒 白・黒・赤黒一横 位と透明細粒少 硬質	底上13～32cmが接合 面 58, 66
6	土師器 杯	高 残 2.1 底 3.6	外底面はおそろくヘラズリで凹底状にした後ナメ。内外面の体部に斜一横位のナメ。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや暗黒 赤黒粒多、白細粒 と黒・透明細粒少 軟質	底上25cm 底7/12周 84
7	土師器 杯	高 残 1.2 底 4.0	外底面はヘラズリで凹底状。外面体部に斜一横位のヘラズリ。内面体部はヘラズリまたはヘラズリの後に放射状ヘラミガキ。杯部外周は広いので、輪郭形はよく不明瞭。	5YR4/6 赤褐色 暗黒 白・赤黒一横粒と黒・ 透明細粒少 中硬質	底上22cm 底5/12周 68
8	土師器 高杯	口 17.9 高 残 6.2	杯部外底面は放射状ヘラズリ後に外周をナメヘラミガキ。杯部外周はナメまたはヘラズリ後に口縁部ヨコナメと杯体部タテヘラミガキ。杯内面は底部に上方ヘラミガキ、口縁部ヨコナメ後に杯体部タテヘラミガキ。内外面の杯体部に縦がかり。火災に遭っているかもしれない。	7.5YR7/6 暗 赤褐色 白・黒・透明一 横粒と赤黒粒やや多 軟質	底上18cm 口全周 杯部存 64
9	土師器 高杯	口 17.0 高 13.8 脚厚 14.8 重 579.7	外面杯体部と脚部にタテヘラズリ(非常に浅い)タテハケの可能性もある。杯底部はナメヘラズリ。脚部と杯口縁にヨコナメ。杯内面は底部に多方向と体部に斜位のヘラズリ。口縁部ヨコナメ。脚内面は脚柱部にやや斜なナメ後タテヘラズリ。脚部ヨコナメ。	5YR5/6 明赤褐色 やや暗黒 白・灰色一横 粒と白細粒やや多、黒・透明一 横粒少 中硬質	底上9～25cmが接合 口3/4周、杯底3/4周 杯底1/3周、脚底3/4周 28, 29, 35
10	土師器 高杯	高 残 12.1 脚厚 15.3	外面は脚部と杯底部をタテヘラズリ後に、杯体部の組織も成形と脚部部をヨコナメ。外面杯体部はナメヘラズリ後、現存部が少なくまたはヘラズリ。杯部内面はナメもしくはヘラミガキ。脚底面の組織も。あり、脚内面は上位のヘラズリ。中位に組織も縦を貫くタテナメ。脚部ヨコナメ。脚柱部は直立状態で反時計回り。内面は組織も成形。	7.5YR6/6 暗 赤褐色 白・赤黒一横粒少 やや硬質	底上14～20cmが接合 杯底1/3周、脚底3/4周 28, 29, 35
11	土師器 高杯	高 残 6.2	外面は密なタテヘラミガキ。内面は粘土組織も上げ組織を貫く、斜にタテナメ。	10YR5/4 に近い黄褐色 やや暗黒 白・透明細粒少 赤黒一横粒少 やや硬質	底上5cm 脚部全周 89
12	土師器 高杯	高 残 8.6	外面は脚柱部タテヘラミガキ。杯部ナメヘラミガキ。脚柱部の内面は組織状の組織も縦を貫く残しユボサエ。杯部の内面はヨコヘラズリ。	7.5YR7/6 暗 赤褐色 赤黒粒と白・黒・ 透明細粒少、白色針状物質極 少 硬質	底直上 脚部全周 77
13	土師器 高杯	高 残 4.5	脚部が大きいに対して薄い。外面は脚柱部タテヘラミガキで、脚部部はおそろくナメ。内面は脚柱部タテナメの後に脚部部を成形してナメおよびヨコナメ。	5YR5/6 明赤褐色 やや暗黒 白・透明細粒 と黒細粒少 中硬質	脚部5/12周 一拵
14	土師器 高杯	高 残 10.6 最大 復 9.6	脚部は巻き上げでなく輪桶状に成形する。外面は脚部に密なタテヘラミガキ。杯体部と杯底部にナメヘラズリ後、杯体部下位ヨコヘラズリまたはヘラズリ。杯部内面はナメもしくはヘラミガキ。大下が不明瞭で不詳。脚内は組織も上げ組織も縦を貫く。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや暗黒 白・黒細粒中やや多、 白・赤・透明細粒少 中硬質	底上19cm 脚部全周 65
15	土師器 高杯	口 復 14.4 高 残 8.0	外面は脚柱から脚部までタテヘラズリ。内面は脚部ヨコナメと脚上体部ナメナメ。脚下部はヨコヘラズリ。	10YR7/3 に近い黄褐色 やや暗黒 赤黒一横粒多、 黒・灰色粗粒と白細粒少 中硬質	底上10～32cmが接合 脚部11/12周、脚厚 1/3周 28, 47, 55, 57, 66, 68
16	土師器 高杯	高 残 3.6	脚部部は有段状になる。外面はヨコナメとミガキの有無は不明。内面は脚部にやや斜なナメと縦を貫く足して成形し、杯部ヨコナメとヨコヘラズリ。	7.5YR7/6 暗 赤褐色 赤黒一横粒少 白・黒・透明一横粒少 軟質	底上36cm 脚部1/5周 11
17	土師器 高杯	高 残 4.1 底 復 13.0	直線的に開く形の脚部で、接地面の調整から見て口ではなく高杯の脚で成形したナメ。内面は脚部ヨコナメ後に下部ヨコヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナメ。外面は同下位が放射状。脚部に縦を貫く。	5YR6/6 暗 赤褐色 白・黒・赤・透明 一横粒と白細粒少 硬質	底上13～22cmが接合 面 1/6周、脚1/6周 63, 71, 一拵
18	土師器 造	高 残 4.2 最大 復 11.8	外面は密なヨコヘラミガキ。内面はヨコナメ。焼成前に開けた孔は復原厚約1.1cm。孔の右側が壊れているので、中輪郭の右側に外面を再現している。	10YR5/8 黄褐色 暗黒 赤黒一横粒と白・黒細 粒少 中硬質	断面AAより東の北下 部表土 体1/8周 16.5-16.5土土
19	土師器 小形器	口 復 10.1 高 残 3.8	外面は口～肩部をヨコナメ。内面は頸部に斜一横位ヘラズリと口縁部ヨコナメ。	7.5YR6/6 暗 赤褐色 赤黒一横粒と白・ 黒・透明細粒少 中硬質	底上25cm 口1/4周 34
20	土師器 小形器	口 復 8.8 高 残 7.1	外面は第一肩部に4～5本/cmの浅いタテハケ後に肩部を少しヘラミガキ。内面は頸部にヨコヘラズリ。頸部に浅い横一斜位ハケとヨコナメ。内外面の口縁部にヨコナメ。	2.5YR5/3 に近い暗 赤褐色 白・透明一横粒 多、赤黒粒と黒細粒少 中硬質	底上25～32cmが接合 口1/6周、脚3/4周 67, 69, 70, 84, 一拵 中硬質
21	土師器 造	口 復 10.4 高 残 6.2 最大 復 15.6	口縁部はわずかに受口状で脚部が少し狭い。外面は肩部ナメ後に多方向ヘラズリ。内面は肩部ナメ後に下部ヨコヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナメ。外面は近い赤褐色(2.5YR5/3)。	5YR4/1 黄褐色 やや暗黒 赤黒一横粒と白細 粒多、黒・透明細粒少 中硬質	底上18cm 口1/6周、脚1/6周 82
22	土師器 造	口 復 14.2 最大 復 19.0	外面は脚部ナメヘラズリと肩部ナメ。脚下部の厚い部分を横位ヘラズリ(口縁部斜位付帯と脚部をヨコナメ。内面は脚部に斜一横位ヘラズリ。口縁部ヨコナメ。外面は同下位が放射状。脚部に縦を貫く。 [注]底13, 17, 18, 22, 25, 30, 50, 53, 56, 57, 86R, 16.5-17.5, 一拵	7.5YR5/6 明赤 褐色 白・赤黒一横粒 粒と白・赤・灰色細粒少	底上10～30cm 口1/12周、脚1/6周、 脚底1/3周 注記左参照
23	土師器 大形器	口 復 19.8 高 残 15.5	脚部ナメ。口縁部は浅い付帯をヨコナメし、胎付口縁部の下縁はやや窄っていない。内面はヨコナメと部定されるが、胎面全体が細かく割れて不詳。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや暗黒 白・透明一横粒 少、赤・灰色細粒少 硬質	底上15cm 口1/24周、脚1/5周 83B
24	土師器 大形器	口 復 13.0 高 残 10.3	胎があまり大きく開かない。外面は口縁部ヨコナメ後に肩部タテヘラズリおよび横位の斜一横位ナメ。内面は肩部にナメナメ。口縁部ヨコナメ。	7.5YR7/6 暗 赤褐色 赤黒一横粒多、 白・黒・透明細粒少 中硬質	底上32cm 口1/6周、脚1/4周 10, 一拵
25	土師器 小形器	口 15.5 高 19.1 底 6.0 最大 復 17.8 重 861.8	外底面は外周部に薄く粘土を垂らし、多方向ヘラズリで凹底状。外面脚部は下ナメヘラズリ後に上ナメヘラズリ。内面脚部は下ナメヘラズリ後に上ナメヘラズリ。杯内面は口縁部にヨコナメ。外面は下位が放射状。中位から口縁部まで縦がかりする。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや暗黒 白・灰色一横粒 と白・黒・透明細粒多 中硬質	底上8～32cmが接合 口11/12周、脚全周 底7/12周 36, 67, 69, 90
26	土師器 甕	口 14.2 高 残 10.3 最大 復 19.5	口縁がわずかに内彎する。外面は脚部にとして低位のヘラズリ後、口縁部ヨコナメ。内面は脚部にナメナメ後、口縁部ヨコナメ。	10YR6/4 に近い黄褐色 粒と白・赤一横粒中やや多 赤・透明一横粒中やや多 中硬質	底上22cm 口～肩全周 68



第160図 権現山遺跡 SG10区 SD-43(2) 遺物

27	口 幅 18.3 土師器 高 残 7.0	外面は肩部ナメヘラナデの後に口縁部ヨコナデ。内面は肩部ヨコヘラナデとナメヘラナズリの後に口縁部ヨコナデで、肩部に接合痕の低い段を残す。外面の口縁部と肩部に段がやや多く付着する。	10YR6/4 に赤い黄褐色 やや粗い。白粒～細粒多、灰色・透明細粒と黒細粒やや多 やや硬質	底上 29～31cm が接合 口 1/6 周、頸 1/4 周 67、70、一法
28	口 幅 19.4 土師器 高 残 5.5	外面は肩部にタテヘラナデと頸基部にヨコナデ、口縁部ヨコナデ。内面は肩部にヨコヘラナデ、口～頸部ヨコナデ。	10YR7/3 に赤い黄褐色 粗い。白粒～細粒やや多、黒・透明細粒少。硬質	底上 21～37cm が接合 口 1/4 周、頸 1/3 周 5、14
29	口 幅 17.6 土師器 高 残 4.0	外面は口～頸部に細なタテヘラナデ後、口縁部をヨコナデし、口～頸部間の接合痕を消さな程度でやめている。内面は肩部ナメヘラナデ、口縁部ヨコヘラナデ後ヨコナデ。外面に段付着。 [1]記 139、46、74、UT-SG-V-SD-44	10YR5/3 に赤い黄褐色 粗い。白・透明細～細粒やや多、赤・黒粒～細粒少 硬質	SD-43の底上 7～17cm、 SG5区 SD-44の 1片も 接合 口 5/6 周 注記は左欄
30	高 残 4.2 土師器 最大 幅 14.6	外表面は強く凹む中央部とドーナツ状に高い外周部のそれぞれをヘラケズリ。外面は側下位を縦～斜位にヘラケズリ。胴上位をタテヘラナデ後ヨコヘラケズリ。内面は底部多方向ヘラケズリ。胴部ヨコヘラケズリで、肩部は特に強いヘラケズリ。胴部ヨコナデと下頸部ヨコヘラケズリ。外面の胴上位と底部が被熱赤化し、胴上位に段が多付着する。胴中位と口縁部の破片がない。	10YR5/3 に赤い黄褐色 粗い。白粒～細粒と赤・透明細粒少 硬質	底上 17～21cm 断面 AA' 以下の表土に 2片あり 頸 1/5 周、底 2/3 周 32、52、16.5-17.5 表土
31	高 残 4.6 土師器 底 6.2	やや薄く軽い。外表面は多方向ヘラケズリ。外面側下位はナメヘラケズリ。内面は胴部と体部の境目が不明瞭で主に斜位のヘラケズリ。外表面側面が被熱赤化し、外面側下位の一部に段付着。	7.5YR4/3 弱 粗い。白・透明細～細粒多、赤・黒・灰黒粒～細粒少 やや硬質	底上 31cm 底全周 67
32	高 残 5.7 土師器 底 5.3	外表面は多方向ヘラケズリで弱い丸味を持つ平砥。外面胴部は主に横位のヘラケズリで、胴下端は特に底面外周を小さくするように磨る。内面は底部に多方向、胴部に縦位の後に横位のヘラケズリ。外面胴部に段が多く、しかも磨いた底面の被熱赤化不明瞭。	10YR7/3 に赤い黄褐色 粗い。白・透明細～細粒多、灰色粒粒と黒細粒少 やや硬質	底上 17cm 底全周 74
33	高 残 2.2 土師器 底 4.5	外表面は軽い 1 方向ナデ。外面は胴下端ナデ後にヨコヘラナデ。内面は底部中央が磨先で押したように深く凹み、その周囲は多方向ヘラケズリ。外面が被熱している可能性もある。	10YR6/4 に赤い黄褐色 やや密。白・赤粒～細粒と黒・透明細粒少 硬質	底上 11cm 底全周 81
34	高 残 5.2 土師器 底 5.0 小形甕 孔 0.8～0.9	底部が厚く丸い。外表面は被さなナデ。外面体部タテナデ。内面ナメナデ。形成前に丸林状工具で内面から外面へ孔を開ける。	5YR4/8 赤 細密。白・赤粒～細粒と黒・透明細粒少。やや硬質	底上 8cm 底全周 93

SG10 区 SD-221 (第 161 図、写真図版 126・127・209)

【位置】 SG10 区南部の 16-17 および 16-18 グリッドにあり、SG5 区の方角柵列遺構（居館跡）SA-151 の外郭施設の可能性を持つ。SA-151 の北側に SG5 区 SD-43 から SG10 区 SD-43 へ続いた溝がいったん途切れて、約 3.6m の間をあけて東側に SG10 区 SD-221 がある。SD-43 と SD-221 が居館北側の区画溝で、その中間を掘り残して陸橋（通路）にしている可能性がある。SG10 区 SD-221 の東端はごくわずかに調査区外へ伸びるが、SG10 区の東側は低地へ下る斜面なので、SD-221 が台地東端斜面に開口して終わると考えられる。古墳時代後期の SD-41・中期の SD-42 に切られる。

【規模と形状】 幅 92～148cm で、おおむね直線的に伸び、調査区東端の台地斜面へ取り付く部分は少し屈曲する。溝西端から台地東端までの溝の長さは 18.5m。遺構確認面からの残存する深さは 10～31cm。遺構確認面より上方の地山がよく残る部分が記録された断面図 A-A' の位置で測ると最大深さ 58cm である。底面標高は SD-41・42 よりも西側で 79.57～79.62m、東側では 79.59～79.73m、SD-41・42 に切られる付近で底面標高 79.57～79.59m まで低くなり、調査区東端の台地斜面に取り付く部分で再び底面標高が低くなる（79.53～79.56m）。

【覆土】 自然埋没状で、古墳時代のテフラはみられない。縄文草創期に降下した今市軽石の細粒が地山層から僅かに流入している。

【遺物および出土状況】 西部ほど遺物が多くなるので、SD-43 との間が通路として使われて廃棄品も多かったことを示唆するとも考えられる。

【出土遺物】 口が開く古墳中期後葉の内斜口縁杯がある(1)。穿孔した高杯杯部(6)は SG10 区 SI-53 にも事例がある。折損した脚が残る部分の下端面を削ったようにみられる。甕のように使用したものかもしれない。7 のように白色針状物質(骨針)を含む搬入品の土師器は、SG10 区では SI-23 などにあり、西側の SD-43 にもある。図示以外の土師器合計 47 片・681g の内訳は、杯 8 片・89g、高杯 4 片・69g、壺甕類 35 片・523g。

第97表 権現山遺跡 SG10 区 SD-221 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (mm・g)	特 徴	色調 胎土・構成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 12.4 高 残 4.8	外面は杯体ナメナメテ後、口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後に杯体ナメヘラナテ。	10YR8/4 浅黄緑 褐色・赤褐色と白・透明陶土・ 細粒と黒細粒や やや軟質	底上 5～12cm が接合 口 1/4 周、 12、18
2 土師器 杯	高 残 2.0 底 残 4.2	外底面は平底で磨滅しているので調整不詳。外面杯部に横～斜位ヘラナテ。内面は底部に多方向ヘラナテ。	5YR6/6 緑 やや軟質 赤相～細粒多、 白・黒・透明陶土やや少、灰 色細粒少 やや軟質	底上 3cm 底 5/12 周 13
3 土師器 高杯	口 復 19.8 高 残 5.0	外面は杯底部放射状ヘラナテ。杯体部ナデと口縁部ヨコナデ後にナメヘラミガキ。内面は杯体部ヘラナテ(白)の後に口縁部ヨコナデ。全体をナメミガキ方向のヘラミガキ。外面の残存部全体に傷が多く、内面に傷はない。	2.5YR6/8 緑 やや軟質 赤相～細粒やや多、 白・透明陶土細粒少 軟質	底上 16cm 口 1/3 周、底 1/6 周 17
4 土師器 高杯	高 残 3.3	外面は杯底部タテヘラナテと杯体部下端ヨコヘラナテの後にタテヘラミガキ。杯体内面は多方向ヘラミガキ。杯体部下端はナメヘラミガキ。胴部内面はナデで、杯底部上端に狭い凹みを持つ。	10YR7/4 に近い黄緑 やや粗い 赤相～細粒多、 白・透明陶土細粒やや多、灰 色細粒と黒細粒少 やや軟質	底上 3cm 底 全周 10
5 土師器 高杯	高 残 7.1	脚外面は密なタテヘラミガキ。杯底部内面は 1 方向の密なヘラミガキ。胴内面には割立状態で反時計回りに巻き絡みした痕をそのまま残し、軽いコビヤエ。胴内面の最上層はおそらくコビヤエ。	5YR7/6 緑 褐色 白・赤相～細粒と黒・ 透明陶土少 硬質	底上 16cm 脚 全周 15
6 土師器 高杯	高 残 2.2	外面は杯底部タテヘラナテまたはヘラナテ。杯底部に横位のナデ。内面は杯底部ナテ後に放射状ヘラミガキ。脚の削れた下端面を研磨する。杯底部に内側から穿孔し、初孔径 11.3mm・終孔径 6.9mm。瓶のような用途に利用したと考えられる。煎磨痕と考えるにはやや可能性が大きい。	5YR6/6 緑 褐色 白・黒・赤・透明陶土・ 細粒少 硬質	脚上端 1/2 周 一拵
7 土師器 壺?	高 残 2.7 底 3.8	外底面は 1～2 方向のヘラナテで凹底状。外面は杯体下部に幅の狭いヘラナテ。内面底部に多方向のやや軟なヘラナテ。内面全体に暗褐色物質が薄い膜状に付着し、漆の可能性もあるが不確定。	10YR4/1 灰褐 粗い 白・赤相～細粒多、 黒・透明陶土細粒やや多、白 色針状物極少 軟質	底上 6cm 底 全周 11
8 土師器 大形壺	高 残 2.2 底 8.0	厚く重いので大形品と考えられる。外底面は外側に粘土を貼り足して中央に水盤形の凹みを少し残し、全体をヘラナテ。内底面は底部中央を支点にして回転する方向のヨコヘラナテ。内面胴部にタテおよびヨコヘラナテ。	5YR7/6 緑 やや粗い 白・黒・赤・透明 陶土細粒やや多 軟質	底全周 一拵
9 土師器 壺	口 復 13～14 高 残 3.7	外面は頸～肩部ヨコナテ。内面は肩部ヨコヘラナテ後に環を形成して 12 本の線が引くヨコハケ後、口～胴部ヨコナテ。	5YR6/6 緑 やや粗い 白・黒・赤・透明 陶土細粒やや多 軟質	頸 5/6 周 一拵
10 土師器 壺	高 残 14.3 底 8.8 最大 底 25.7	外底面の外側に薄く粘土を貼り足してから平坦にナデ。外面胴部タテナデ。内面は底部に多方向ヘラナテ。胴下部ナメヘラナテとヨコハケ後に胴中位を形成してヨコヘラナテ。煎熟度や付着物は見られない。	10YR7/3 に近い黄緑 やや粗い 白・黒・透明陶土・ 細粒やや多、赤・灰色細粒少 やや軟質	底上 24cm 頸 1/6 周、底 1/2 周 7

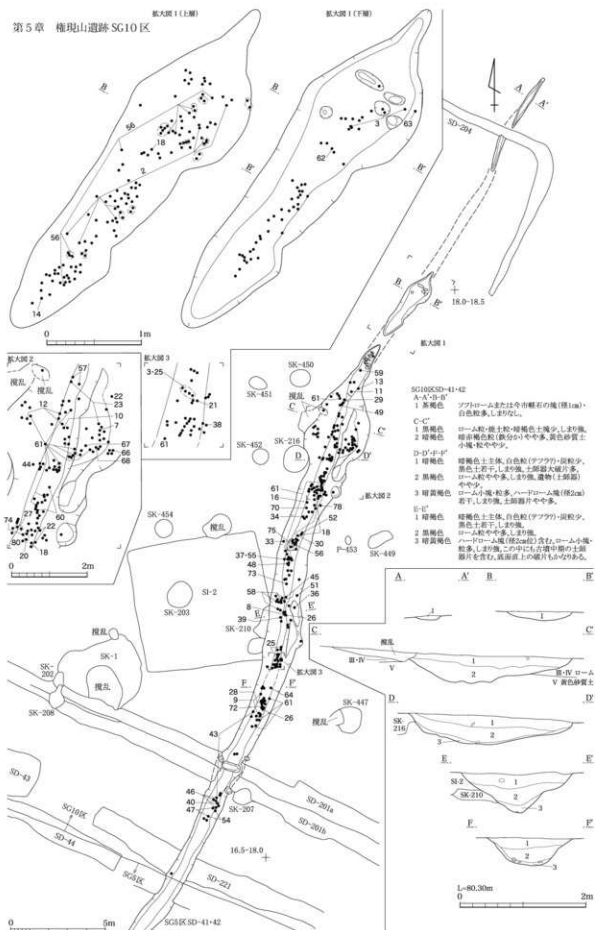
第8節 古墳時代の溝状遺構

SG10 区 SD-41・42 (第 162～164 図、写真図版 127・128・173・174・209・210)

【位置】 SG10 区南部の 16-17・18、17-18、18-18 グリッドにまたがる。南側の SG5 区 SD-41・42へ続く溝なので、名称を統一して SG10 区 SD-41・42 とした(調査時の旧名称は SG10 区 SD-42)。古墳中期末葉の溝 SD-42 の北部を、古墳後期後葉に SD-41 として掘り直したことが SG5 区の調査結果から分かっているので、SG10 区 SD-41・42 と総称する。古墳中期後葉の SI-2・SD-221(居館の外郭溝)と古墳中期の SK-210・216 を切り、近世の SD-201ab・SD-204 に切られる。第 11 図の全体図等高線からわかるように、断面図 C-C' の位置付近よりも北側は低地へ降りた位置にある。

【規模と形状】 最も広い C-C' 付近で幅 320cm、最も狭い北端部付近で幅 20～35cm。幅 100～180cm の部分が多い。先行する SI-2 と円筒形土坑 SK-210 を壊して掘った部分(E-E' の南側)も、溝幅が少し広い。残存する深さは、低地にあり周囲が低い A-A' から B-B' 付近で 10～20cm、台地上にある C-C' から E-E' 付近で 40～60cm、それよりも南側では 20～40cm 程度である。溝底面は傾斜しないので、底面標高には大きな差がなく、北端(A-A' 付近)で 79.47～79.59m、拡大図 1 付近で 79.48～79.59m、拡大図 2 付近で 79.35～79.67m、E-E' から拡大図 3 付近で 79.49～79.64m、南端で 79.56～79.66m。SG10 区南部の SD-201a と重複する部分で、SD-41・42 の底面に長方形土坑状の落ち込みがある(102×41×溝底面から深さ 1～5cm)。これは SD-41・42 の溝底面に付属する落ち込みで、あるいは先行する別の土坑と考える余地も残るが、後世の遺構や攪乱ではない。北部の溝底面(拡大図 1 およびその南側)にみられる凹凸は掘削時の工具痕跡と観察され、この中にも土師器片が見られた。

【覆土】 埋土は自然埋没状で、上層部に含む白色粒はテフラの可能性を持つ。縄文草創期に降下した今市軽



第162図 権現山遺跡 SG10区 SD-41・42(1) 遺構

石塊も流入しているので、同じく草創期の七本桜軽石粒や、古墳後期初めの Hr-FA テフラ粒が二次的に流入したと考えられる。Hr-FA テフラの層状堆積が見られないことは、古墳中期末葉の SD-42 を後期後葉の SD-41 に掘り直したという所見と整合する。

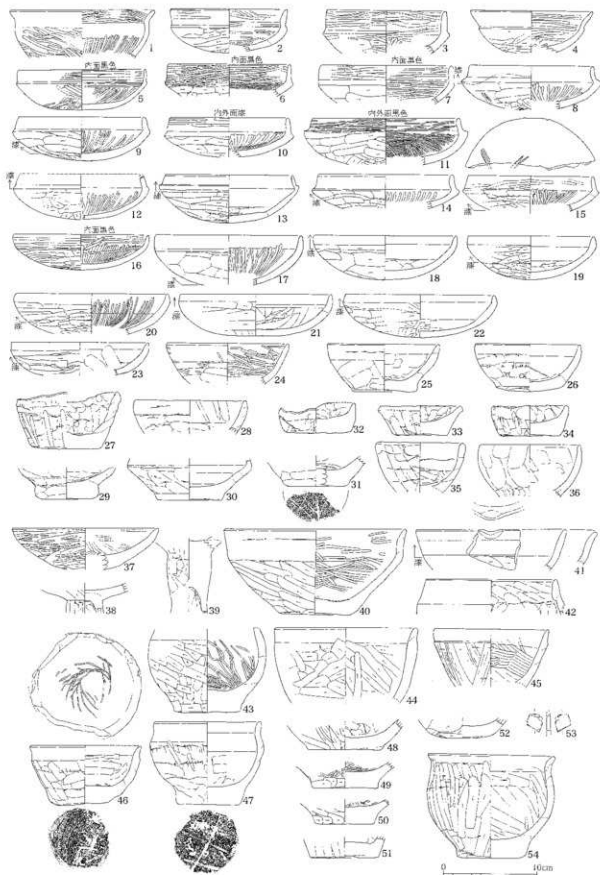
【遺物出土状況】 溝の各所で出土した土器は小破片が多く、特に拡大図 1 の範囲は小破片ばかりである。遺物は全域で多く、古墳中～後期の土師器がある。重複する SI-2 や SK-210 から古墳中期の土師器も流入したと考えられるが、SI-2 の遺物が少ないのに対して SD-41・42 には遺物が多く、SI-2 と重複しない南部でも古墳中期末葉の土師器がやや多いので、中期の土師器をすべて SI-2 からの混入品とみることが難しい。この溝で中期の遺物が移動した例として、中期末の 3 や 61 は同個体の破片が離れた位置にあり、中期の須恵器器台（拡大図 1 の 63）は同一個体を出土した SG10 区 SI-111 から約 10m 離れている。古墳後期後葉の杯 8～11 が溝底面にあるので、後期に溝 SD-41 として掘り直したという SG5 区の見解と一致する。SG10 区南端付近には、残存度の高い鉢や小形甕が多い（40・43・46・47・54）。

【出土遺物】 漆仕上げおよび炭素吸着を行う後期の模倣杯が多く、中期の土師器杯は少ない。古墳中期末から後期前葉までの遺物が掘り直す前の SD-42 に由来し、後期後葉以後の遺物が掘り直した SD-41 に伴うと考えられる。古墳中期後葉の遺物が少量あるのは、重複する SG10 区 SI-2 や SG5 区 SI-11 に由来する可能性がある。大形の鉢（40）は、本遺跡北部にある中期末～後期初頭の 4 区 SI-7 出土例に類似する（『東谷・中島地区遺跡群』10）。有孔鉢（53）は SG10 区 SI-50 等に例がある。粗製杯や小形土器が多い。須恵器甕破片（62）は内面を磨り消す古墳中期の遺物であるが、古墳後期の SG10 区 SI-10 などで出土した破片と類似し、同一個体かもしれない。須恵器器台（63）は、SG10 区 SI-111 などで出土した破片と同一個体である。有孔砥石（65）は SG10 区 SI-37 など例がある。

鉄関連遺物では、専用羽口 1 点と焼形鍛冶滓 3 点がある（64・66～68）。また、南側に続く SG5 区 SD-41・42 にも鉄滓が 1 点ある。専用羽口（64）は、鍛冶関連遺物を『東谷・中島地区遺跡群 10』で報告後に確認したため、同書 pp.490-498 に掲載されていない。SG10 区では後期の SI-34a・40・70 に専用羽口がある。また、本遺跡北部 SG1 区 SI-71 と 4 区 SI-18（『東谷・中島地区遺跡群』10）や、砂田遺跡 12 区 SI-6（『同前』13）にも古墳後期前葉～中葉の専用羽口がある。64 も転用羽口が衰退した古墳後期の遺物かもしれない。石製模造品は滑石製（71・73）と雲母片岩製（72）と粘板岩製（74～76）がある。有孔円板（有孔方板）は、SG10 区 SI-64a などに例がある。土器片製円板（77）は縄文時代にもみられる遺物で、古墳時代遺構外遺物（第 191 図）にもあるが、事例は多くない。形や大きさに統一性がない礫がやや多く出土した。図示した 78～80 には鍛造剥片などが見られないので、鉄鍛冶関連遺物とは言いにくい。遺物は土師器杯と壺甕類が主体で、粗製杯・鉢・小形甕もあり、高杯・甕・須恵器甕・石製模造品は僅かである。図示以外の土師器合計 3,600 片・26,724g の内訳は、杯 1,604 片・9,330g、高杯 80 片・888g、鉢 35 片・665g、小形甕 17 片・153g、壺甕類 1,788 片・14,224g、甕 71 片・1,364g、小形土器 5 片・100g。

第 98 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-41・42 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ [図]・[g]	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 15.4 高 径 5.1	外面は体部ナデと口～頸部ヨコナデに体部をナメハラミガキ。内面は体部ナデと体部ナデ～口縁部ヨコナデ後に、体部を履位と口縁部を横位のハラミガキ。古染付陶。 [注記] SD-42-82、82、13.9・18.0 下層	5YR5/6 明赤帯 やや暗赤 白磁粒多、赤磁粒と黒～透明磁粒少 硬質	北部 3 層（底上 2～3cm）、16.0・18.0 グリッド内側の 3 片と接合口 1/3 片、体 1/4 周 注記は左層
2 土師器 杯	口 径 12.2 高 径 4.6 最大 径 12.3	外面は底部に 1 方向と体部に横位のハラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ焼ヨコハラミガキ。内面はハラミガキ。体部に多方向と体部に横位のハラミガキ。部仕上げは行わない。古染付陶末。 [注記] SD-42-300、331、374、386、451、463、482、489、E・F 面、E・F 面トレンチ、E・ベルト底面	2.5YR5/8 明赤帯 やや暗赤 赤磁～細粒やや多、白～透明磁粒少 やや軟質	北部底直上～底上 2cm、断面図 B-B' 付足の 3 片も接合口 1/3 片、体 1/2 周 注記は左層
3 土師器 杯	口 径 12.8 高 径 4.5 最大 径 13.4	外面口～体部間に高い縁あり。外面体部ヨコハラケズリ後に縁ならぬヨコハラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ焼ヨコハラミガキ。内面体部は若くならぬハラミガキの間に横位と斜射線のハラミガキ。部仕上げは行わない。古染付陶末。 [注記] SD-42-22、325、426、459、486、E・F 面、E・F ベルト 1 層	2.5YR6/8 暗赤 やや暗い 白磁～細粒多、赤磁～細粒と黒～透明磁粒少 やや軟質	北部底直上～底上 1cm が接合。断面図 B 大図 3 の底直上にも 1 片あり口 1/3 片、体 1/2 周 注記は左層



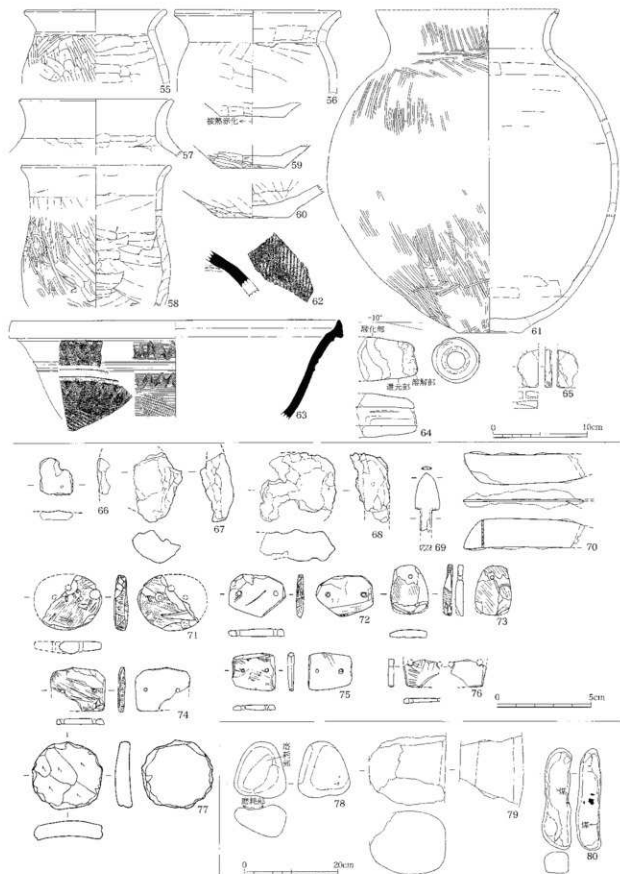
第163図 権現山遺跡 SG10区 SD-41・42(2) 遺物

4	土師器 杯	口 縦130 高 残4.4	外面は体部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、内面は口縁部ヨコナデと体部におおそくヘラナゲの残、口〜体部に横位と体部に多方向のヘラミガキ。漆仕上げは行わない。古墳後期初め。 [注記]SD-42 B-ベルト1層、17.5〜18.0、17.55〜17.65	5YR5/6 明赤 縦帯 白・赤・透明細粒少 やや硬質	X17.5〜18.0間と断面 図D-Dの1層の各2片が 接合 口1/6間、体1/5周 注記は左欄
5	土師器 杯	口 縦134 高 4.3 最大 縦13.9	外面は底部に1方向ヘラケズリ、体部ヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキ。内外面の口縁部ヨコナデに密なヨコヘラミガキ。内面体部を1〜2方向の密なヘラミガキ。内面は炭素吸着で黒色処理。古墳後期。 [注記]SD-42 16.9-18.0下層、X17.2〜17.3	7.5YR7/6 暗 やや暗青 白・赤・透明細 粒と白・黒・透明細粒や多 やや硬質	16.9-18.0グロッド下層 とX17.2〜17.3間13 片が同一個体 口1/4間、体5/12周 注記は左欄
6	土師器 杯	口 縦130 高 残3.4 最大 縦13.6	外面は体部ヨコヘラケズリ、外面口縁部と内面全体に密なヨコヘラミガキ。内面は炭素吸着で黒色処理し、外面口縁部も少し炭素を吸着している。古墳後期。 内面は炭素吸着で黒色処理。古墳後期。	10YR6/6 明黄緑 やや暗赤 赤黒〜細粒と白・ 黒・透明細粒少 硬質	X17 ランク比 口1/4間、体1/4周 SD-42 X17.0
7	土師器 杯	口 縦138 高 残4.0 最大 縦14.4	外面体部ヨコヘラケズリ、外面口縁部と内面全体にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。 [注記]SD-42 201、X17.55〜17.65	2.5YR3/3 暗オリーブ灰 やや暗青 白・黒・透明細粒 少 やや硬質	中央直上11cmと X17.55〜17.65間が接 合 口1/6間、体1/4周 注記は左欄
8	土師器 杯	口 縦130 高 残4.6 最大 縦14.8	外面は体部ヨコナデと中位以下に多方向ヘラケズリ、内外面の口縁部にヨコナデ、内面体部に放射状ヘラミガキ。外面中位以上「く」を施したのかもかもしれない。外面口縁部と内面全体に漆仕上げ。古墳後期。	10YR5/3 白・赤・透明 細粒と黒細粒や多・黒・灰色細 粒少 やや硬質	中央部直上1 口1/3周 SD-42 98、トレンチ 注記は左欄
9	土師器 杯	口 13.4 高 4.6 最大 14.6	外面は底部に1〜2方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面体部はナメナゲまたはヘラナゲ後に放射状ヘラミガキ。外面中位以上「く」を施す。古墳後期。 [注記]SD-42 39、50、16.5-18.0	7.5YR6/6 暗 やや暗赤 黒細〜細粒や中・多 白・透明細〜細粒や中・少 やや硬質	北部3層(直上)と1 層(直上17cm)が接合 口5/12周 注記は左欄
10	土師器 杯	口 縦126 高 残4.1 最大 縦13.8	外面は体部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後に口縁上平ヨコヘラミガキ。内面はヨコナデ後、体部に密な放射状ヘラミガキ。内外全面に漆仕上げ。古墳後期。[注記]SD-42 211、16.3〜16.52層、X17.4〜17.52〜3層、16.8-17.9下層	2.5Y3/2 黒 やや暗赤 赤黒細と白・黒細 粒少 やや硬質	中央直上1、X16.3〜 17.5間の出土片と接合 口5/12周 注記は左欄
11	土師器 杯	口 縦156 高 残4.9 最大 縦17.4	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部は上部にヨコヘラミガキ、下部はナメナゲヘラミガキ。ヘラミガキは内外面ともに密に行っている。内外の全面を炭素吸着で黒色処理。古墳後期。	10YR6/4 白・赤・透明 細粒と白・黒細〜細粒 や中・多 やや硬質	中央部直上1 口1/4間、体1/3周 SD-42 234
12	土師器 杯	口 縦13 高 4.8 最大 14.4	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部ヨコナデ、内面体部に密な放射状ヘラミガキ。外面口縁部と内面全体に漆仕上げ。古墳後期。 [注記]SD-42 209、210、217、X17.5	10YR7/3 白・赤・透明 細粒や中・多 やや硬質	中央部直上2〜11cmが 接合X17.55付近で2 片出土 体7/12周 注記は左欄
13	土師器 杯	口 縦134 高 5.4	外面は口縁部ヨコナデ後に底部を1方向と体部を横位のヘラケズリ。内面は底部に口縁部ヨコナデ、体部上平と口縁部にヨコナデ。外面上位と内面全体に漆仕上げ。外面体部に9cm以上の厚炭あり。古墳後期。[注記]SD-42 235、17.5〜18、17.6〜17.72層、17.25〜17.30層、B-ベルト	7.5YR7/4 白・赤・透明 細粒少 やや硬質	中央部直上1、X17.25 〜18.0間に赤黒あり 口1/3間、体1/4周 注記は左欄
14	土師器 杯	口 縦142 高 残3.6 最大 縦15.6	外面は体部上平ナゲと下平ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面はヨコナデ後に体部を放射状ヘラミガキ。外面上下内面を漆仕上げ。古墳後期。	10YR2/2 黒 やや暗青 白・黒・透明細 粒少 やや硬質	北部直上4cm 口1/6間、体1/4周 SD-42 417
15	土師器 杯	口 縦125 高 残3.4 最大 縦13.4	外面の外部上位はナゲで粘土積み上げ痕を少し見、体部上位はヨコヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。残存する内面全体に漆仕上げ。古墳後期。 [注記]SD-42 A-ベルト2層、16.9-18.0下層	2.5YR7/6 暗 縦帯 赤・黒細〜細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	17.1-18.0グロッドで 断面E-Eの2層、16.9- 18.0下層にも1片あり 口1/9間、体1/4周 注記は左欄
16	土師器 杯	口 縦144 高 3.8	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に密な放射状ヘラミガキ。内面は炭素吸着で黒色処理。古墳後期。	7.5YR6/6 暗 やや暗青 白細〜細粒と赤・ 黒・透明細〜細粒や中・多 やや硬質	中央部直上4cm 口1/12間、体1/2周 SD-42 127
17	土師器 杯	口 縦154 高 残5.3 最大 縦15.8	外面はおおそくヘラケズリ後にヨコヘラナゲ。内外面の口縁部をヨコナデ、内面は底部ヘラナゲと体部ヨコナデの後に放射状ヘラミガキ。内外の残存する全面に漆仕上げ。古墳後期。	2.5Y3/1 黒 やや暗青 白・黒・透明細 粒や中・多 やや硬質	断面図E-E付近 口1/24間、体1/3周 SD-42 A-ベルト2層、 17.3〜17.43層
18	土師器 杯	口 縦150 高 4.7	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は底部ナメナゲナゲ、口〜体部ヨコナデ。外面上位と内面全体に漆仕上げ。 [注記]SD-42 96、123、143、347、X17.4-17.5、16.8〜17.9下層、16.9〜18.0下層、17.0-18.03層、B-ベルト2層	10YR4/2 灰黄緑 縦帯 白・黒細粒少 軟質	北部・中央部直上と 北部直上4cm、X16.8〜 18.0間に赤黒あり 口1/12周、体1/4周 注記は左欄
19	土師器 杯	口 縦132 高 4.6	外面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。内面は底部ヘラナゲ。口〜体部ヨコナデ。外面上平と内面全体に漆仕上げ。	10YR6/3 白・赤・透明 細粒と黒細粒や中・多 やや硬質	X16.38〜17.0間 口1/8間、体1/6周 SD-42 168〜17
20	土師器 杯	口 縦162 高 残4.3 最大 縦16.6	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は口縁部から体部上平までをヨコナゲし、全面を放射状ヘラミガキ。外面上平と内面全体に漆仕上げ。古墳後期。	10YR6/3 白・赤・透明 細粒と黒細粒や中・多 やや硬質	中央部直上3cm 口1/6間、体1/5周 SD-42 247b99621
21	土師器 杯	口 縦160 高 4.4 最大 縦16.3	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ、内面体〜底部に多方向のヘラケズリ。外面上位と内面全体に漆仕上げ。外面中位以下は漆仕上げの有無が不明。古墳後期。 [注記]SD-42 95、A-ベルト2層、X17.4〜17.5、X17.0〜、B-ベルト	10YR6/3 白・赤・透明 細粒と黒細粒や中・多 やや硬質	断面図E-Eの直上4 cm、X17〜18間および 断面C-CとD-D付近に 破片あり 口1/4周 注記は左欄
22	土師器 杯	口 縦156 高 4.1 最大 縦16.4	外面は体部ヨコヘラケズリと口縁部ヨコナデ。内面は底部に口縁部ヨコナデまたはヘラナゲ、口〜体部ヨコナデ。外面上位と内面全体に漆仕上げ。 [注記]SD-42 120、144、149、227、17.0-18.0〜18.1、C-ベルト2層	5YR7/6 暗 縦帯 赤・黒・透明細粒少 軟質	中央部直上1〜直上4cm、 X17.0-18.0〜18.1グ ロッドと断面C-C2層 の各1片も接合 口1/12周、体5/12周 注記は左欄
23	土師器 杯	口 縦146 高 残3.4	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面はヨコナデと一部にナメナゲ。外面上平と内面全体に漆仕上げ。古墳後期。 [注記]SD-42 2047、225、252、17.2-18.01層、17.25〜17.30層、17.4〜17.5	7.5YR7/6 暗 縦帯 赤・黒細粒少 軟質	中央部直上1〜直上24cm、 X17.2〜18.0間に破片 あり 口1/10周 注記は左欄

第5章 権現山道路 SG10 区

24 土師高 杯	口 復 13.0 高 残 4.3	外面は体部に斜いナデと口縁部にココナデ後、全体に疎らなヨコヘラミガキ。内面は口縁部ヨコナデ後疎らなヨコヘラミガキ。体部に密なヨコヘラミガキ。 [注記]SD-42 222, 16.9-18.0 下層	10Y87/4 白・黄緑 赤黒粒多、白・黒 細粒少 やや硬質	中央底上。16.9-18.0 グリッド下部の1片が 集合 口1/3層 注記は左欄
25 土師高 瓶型杯	口 11.8 高 5.0 底 6.7	突出する平底で、外面は無調整。外面は体部に横～斜位ナデ後、口縁部ココナデ。内面は底部多方向の強いヘラナデで凹凸が目立ち、体部ココヘラナデ、口縁部ココナデ。古墳後期。 [注記]SD-42 16, 22, 41, 42, 52, Aベルト2層、17.0-18	7.5Y85/4 白・明 赤黒・細粒や や少、黒・透 明細粒少 やや硬質	南部底上～底上14cm。 17.0-18.0 グリッドに 1片とE面側面付近に2 片あり 口1/4層、底全層 注記は左欄
26 土師高 瓶型杯	口 11.0 高 5.0 底 7.2 最大 11.3	凸面状の底部で外周に疎なヘラケズリ。外面は体部に横～斜位ナデで粘土の塊積を多く残し、口縁部ココナデ。内面は底部に多方向と体部に横～斜位のヘラナデ、口縁部ココナデ。古墳後期。 [注記]SD-42 250, Aベルト2層, 17.2～18.0 3層	5Y85/4 白・赤黒 赤黒・細粒や や多、黒・透 明細粒少 やや硬質	中央底上4cmとE面 断面の2層と17.0～ 18.0グリッドの2～3 層が集合 口5/6層、底全層 注記は左欄
27 土師高 瓶型杯	口 10.6 高 6.1 底 7.2 最大 11.1	外底面はナデで中央が少し高い。外面の体部はユビオサエで集合面をよく残し、凹面を受けたタナナデ。内面もユビオサエで集合面を非常によく残し、凹面を受けたタナナデ。 [注記]SD-42 133, 17.4-18.1 1層, X17.4～17.5 1層	10Y86/4 白・赤黒 赤黒・細粒や や少、黒・透 明細粒少 硬質	中央底上29cm, X17.4 ～17.5間の1層出た2 層と集合 口1/2層、底2/3層 注記は左欄
28 土師高 瓶型杯	口 復 11.7 高 残 3.6 底 大 復 12.1	外面は体部に斜いナデで粘土積み上げ層を少し残す。内外面の口縁部にココナデと内面ナメナデ。内面体部にナメヘラナデ。 [注記]SD-42 46, 86, 17.0-18.0～18.1	5Y87/8 白・透明 赤黒・細粒多 やや硬質	南部底上～底上3cm。 X17.0～Y18.0～18.1 グリッドの1片と集合 口1/3層 注記は左欄
29 土師高 瓶型杯	高 残 3.3 底 6.5	外面は凹状状に突出する平底で底面に疎なナデ。外面体部は斜いナデで粘土塊積み上げ層を残す。内面は底部に凹面状で、体部に横位のナデ。古墳後期。	7.5Y86/4 白・明 赤黒・細粒と白・黒・ 透明細粒多 やや硬質	中央底上3.6cm 底1/2層 SD-42 222
30 土師高 瓶型杯	高 残 4.4 底 6.7 最大 13.1	厚く重い。外面は外周に疎粘土を粘り足してナデを行い、斜いナデおよび浅い圧痕(草本植物)あり。外面は体部ナデで粘土集合面を少し残し、口縁部ココナデ。内面は底部に2方向。体部に横～斜位のナデ、口縁部ココナデ。逆置の杯の外周ヘラナデを省略したのかもかもしれない。古墳後期。	2.5Y85/6 赤黒 赤黒・細粒と黒・ 透明細粒少 硬質	中央底上3cm 体1/4層、底全層 SD-42 122
31 土師高 瓶型杯	高 残 3.3 底 6.8 最大 復 10.4	外面は本重量量の圧痕が少し残しながら2層付いている。内外面の体部に横位のナデ。古墳後期。 [注記]SD-42 17.4-18.1 1層	10Y86/4 白・黄緑 赤黒と黒・透明細 粒少 やや硬質	17.4-18.1 グリッド1層 口1/3層 注記は左欄
32 土師高 小形土 師	口 8.0 高 2.4～3.4 底 6.8 最大 復 8.1	外底面は疎なナデで、草本植物の葉のような圧痕もある。外面体部は横～斜位の疎なナデ。内面は非常に疎な放射状タナナデで体部～底部に筋先を残す。厚さ約12.5cm。 [注記]SD-42 17.4-18.1 1層	7.5Y87/3 白・明 赤黒・細粒やや多、 白・透 明細粒少 やや硬質	17.4-18.1 グリッド1層 口1/3層、底3/4層 注記は左欄
33 土師高 小形土 師	口 復 8.5 高 残 3.1 底 5.9 最大 復 9.0	手取凹面。外底面はナデで、ごく浅い棒状(?)の圧痕あり。外面体部はナメナデ。内面は筋先～体部を放射状残す。口縁部はココナデ仕上げをしていないので凹凸が見られる。古墳後期。残存重量12.5g。	10Y87/4 白・赤黒 赤黒と透明 細粒少 硬質	中央底上7cm 口1/6層、体全層 SD-42 113
34 土師高 小形土 師	高 残 3.2 底 復 6.2 最大 復 8.2	外底面はほぼ平明で斜いナデ。外面体部と口縁部に横位ユビナデ後、筋の疎らなナデ。内面は底部に斜位ユビナデ。古墳後期。	10Y85/2 灰黄緑 赤黒・細粒やや多、 白・透 明細粒少 やや硬質	中央底上27cm 口1/3層、底2/3層 SD-42 125
35 土師高 瓶型小形土 師	口 復 9.1 高 残 5.3 底 大 復 10.6	外面はナメナデで全体に粘土積み上げ層をよく残す。内面は下ナメナデで粘土積み上げ層を残す。 [注記]SD-42 17.2-18.0 1層, ドレン	10Y87/4 白・透明 赤黒・細粒やや多、 黒・透 明細粒少 やや硬質	17.2-18.0 グリッドの1層 口5/12層 注記は左欄
36 土師高 小形壺	口 復 10.4 高 残 5.5 底 大 復 11.0	頸部下端の外側面を傾斜するように粘土を粘り足している。外面は底部下位ヨコヘラナデ後に口～頸部ナデ。内面は簡単なナデまたはヘラナデ。古墳中期。 [注記]SD-42 11, 17.0-18.0～18.1	10Y87/4 白・黄緑 赤黒・細粒やや多、 白・透 明細粒少 やや硬質	中央底上21cm。 X17.0～Y18.0～18.1 グリッドの1片と集合 口1/4層、底1/3層 注記は左欄
37 土師高 高杯	口 復 15.6 高 残 4.4	平底が明い。外面は口縁部ココナデと杯体～底部ヨコヘラケズリの後口ヨコヘラミガキ。内面は底部に1～2方向と杯体～口縁部に横位の密なヘラナデ。内外面の断面が扇形で、底または仕上げの可能性もある。古墳前期。	5Y86/6 赤黒 赤黒・細粒と白・赤・ 透明細粒少 やや硬質	中央底上34cm 口1/6層、体1/3層 SD-42 106
38 土師高 高杯	高 残 3.2	外面は杯底部ナメヘラケズリ。頸部ナデタヘケズリ。杯内面はおそらく多方向ヘラナデが磨滅して不詳。頸内面は疎なヘラナデ。古墳中期。	5Y86/6 赤黒 赤黒・白・赤・灰色細 粒と黒・透 明細粒少 やや硬質	南部底上33cm(1層) 杯底1/3層、頸柱全層 SD-42 30
39 土師高 高杯	高 7.5	外面はナメナデ仕上げヘラナデ後に斜いナデ。杯底部内面は多方向ナデ。頸部内面はタナナデ。古墳中期。	7.5Y86/4 白・赤黒 赤黒・細粒と黒・ 透明細粒やや少硬質	中央底上1層(底上41cm) 頸柱全層 SD-42 12
40 土師高 鉢	口 19.1 高 9.0 底 7.6 重 736.5	外底面は外周部少し高く、主に外周部に疎なナデおよび疎なヘラケズリ。外面は口縁部ココナデ。体部ナメヘラケズリ。内面は体部にナデ後密なヨコヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後疎らなヨコヘラミガキ。内面の底部外周部・凹面が磨滅し浅い凹面が不明瞭。内面に14cmの黒塊あり。古墳前期の初期。	5Y86/6 赤黒 赤黒・細粒やや多、 白・赤黒粒と黒・透 明細粒少 やや硬質	南部底上16cm、16.6 17.0グリッドの1片も 集合 口11/12層、底全層 SD-42 70, 16.6-17.0
41 土師高 鉢	口 復 15.6 高 残 4.2	外面の口～体部端と口縁部の色に浅い段を持つようにココナデを行い、体部はヨコヘラケズリ。内面の口～体部にココナデ。口縁部の1箇所を片口状に凹面している。外周部端と内面全体に塗仕上げ。古墳後期。	7.5Y84/2 灰黄 赤黒・細粒やや多、 白・赤黒粒と黒細 粒少	断面Eと北側の1層 口1/2層、体1/8層 SD-42 17.4-18.1 1層
42 土師高 鉢	口 復 13.8 高 残 3.7	外面は口～頸部ココナデ。内面は底部にタナナデとヨコヘラナデ。口縁部ナメナデココナデで、口～頸部の間に粘土積み上げ層を明瞭に残す。古墳中期。	5Y86/6 赤黒 赤黒・細粒やや多、 白・黒・透 明細粒少 やや硬質	断面Eと南側面平部の 1層 口1/3層 SD-42 17.2-18.1 1層
43 土師高 鉢	高 残 8.9 底 7.0 最大 復 14.4	厚く重い。外底面は1～2方向のヘラケズリ。外面の体部にタナナデナメナデ仕上げヘラナデ。口縁部ココナデ。内面は仕上げまたはヘラナデと上位ココナデの間にナメヘラミガキ。古墳後期。 [注記]SD-42 57, 67, 10.6-17.4, 17.2-18.0 1層, X16.6～17.8 上層	5Y86/6 赤黒 赤黒・細粒と白・赤黒粒と 黒・透 明細粒やや多 やや硬質	南部底上1.6cm(3層)～ 17cm(1層)とX16.6～ 17.2間の集合 層1/6層、底全層 注記は左欄

44	土師器 鉢	口 覆14.8 高 8.0 最大 径15.2	内外面は口縁部ヨコナデ。外面は体部ナメヘラズリ。内面は体部ナデ後に上部をナメヘラズリ。古墳後期。	7.5YR5/4 土に灰 やや硬質 白・透明細粒少 やや軟質	中央部直上7cm 口1/12径。体1/4周 SD-42 171
45	土師器 鉢	口 覆12.2 高 6.1	内外面は口縁部下段に段がある。体部はナメヘラズリまたは木目が見えるもの。口縁部はナメヘラズリ。内面は体部下位ナデ。中～上位に3本/1周の細いナメヘラ。内外面の口縁部にヨコナデ。古墳後期。	5YR7/6 緑 やや硬質 白・黒・赤・透明 細粒少 2.5YR5/8 明赤褐 やや硬質 白・赤・黒 透明細粒少 硬質	中央部直上25cmの4片が 揃った口1/3径。体1/2周 SD-42 4, 8
46	土師器 粗頸瓶	口 覆11.5 高 6.1 最大 径5.6	外底面はおおそく木炭灰がかった痕をナデと1方向ヘラズリで繕に消す。外面は体部がナデで粘土層仕上げ痕を明瞭に残し、軽いなデ。口縁部ヨコナデ後体部に強いヘラズリを食う。内面は体部ヨコヘラナデと口縁部ヨコナデ。内面底部に放射状筋の非筋に織ミガナ。古墳後期。	2.5YR5/8 明赤褐 やや硬質 白・赤・黒 透明細粒少 硬質	南面直上8～21cmが揃 合 口1/2径。体2/3周。 底全周 SD-42 67～69, 74
47	土師器 鉢	口 11.4 高 8.8 底 6.4 最大 径12.1	外底面はナデと思われる文状状態で、2mm以下の丸粒の残った痕が2本ある。外面は体部がナデで粘土層仕上げ痕を明瞭に残し、軽いなデ。口縁部外面から体部上内面までヨコナデ。内面体部ヨコヘラナデ。古墳後期。重量	7.5YR7/6 緑 やや硬質 白・赤・黒細粒と 黒・透明細粒少 硬質	南面直上8～11cmが揃 合 口1/2径。底1/3周 SD-42 73～75
48	土師器 鉢	高 9.2 底 7.7	外底面は外側に粘土を薄く塗り足した後に1方向ヘラズリ。外面上端部に縦位と斜位のヘラズリ。内面は底部に多方向と体部に横～斜位のヘラズリ。外面の大半が黒色。古墳後期。	5YR7/6 緑 やや硬質 白・赤・透明細 粒やや多。黒細粒少 やや硬質	中央部直上27cm SD-42 248096021
49	土師器 鉢	高 9.2 底 7.0	外底面は1方向のヘラズリ後ヘラミガナ。外面は下部ヨコヘラズリとヘラミガナ。内面は底部は多方向ヘラミガナ。外面の大半に黒色あり。古墳後期。	5YR3/4 暗赤褐 やや硬質 白・赤・灰色細 粒と黒・透明細粒やや多 硬質	中央部直上8cm 底1/25周に1片あり SD-42 231
50	土師器 鉢	高 9.2 底 6.2	外底面は1方向ヘラズリ。外面体部はナメナデとナメヘラナデの後に下部部をヨコナデナデ。内面は底部に1方向の強い無調整の凹面とヘラミガナ。古墳後期。	5YR4/6 赤褐 やや硬質 赤・透明細粒と 白細粒少 やや硬質	SD-221の北側 底5/12周 SD-42 166, 178
51	土師器 鉢	高 9.2 底 7.2	外底面は外側に粘土を貼り足して平坦にし、中央は無調整の凹面として残す。外面は体部下段に横～斜位ヘラズリ。内面は底部は多方向のやや硬質なナデ。古墳後期。	5YR6/6 緑 硬質 白・透明細粒～細粒少 赤・灰色細粒と黒細粒少 硬質	中央部直上7cm SD-42 240
52	土師器 鉢	高 9.2 底 4.0	厚く重い。外底面は外側に薄く粘土を貼り足して凹状にし、外周をヘラズリ。外面体部は横～斜位ヘラズリ。内面はおおそく丁寧なヘラズリ。古墳後期。 [注記] SD-42 124, X17.55～17.65	5YR5/6 明赤褐 やや硬質 白・赤・黒細粒と 黒・透明細粒やや多 硬質	中央部直上。X17.55 ～17.65間に1片あり 底2/3周 注記は左欄
53	土師器 有孔鉢(白)	高 9.7	薄い小破片なので、口縁部付近に筒状前穿孔がある有孔鉢かと思われる。内外面ナデ。古墳中期。 [注記] SD-42 125～126ト1層	2.5YR5/8 明赤褐 やや硬質 白・赤・黒細粒少 やや硬質	断面四B+B'付近1層 小破片1点 注記は左欄
54	土師器 小頸瓶	口 13.4 高 10.9 底 7.1 最大 径13.5 重 9.7	内外面はほぼ作りで重く、外底面は細い凹面に1方向ヘラズリ。外面口縁部はヨコナデ後に残るなデナデ。体部タテヘラズリ。内面は体部に横～斜位ヘラズリ。底面に1方向ヘラズリ。口縁部ヨコナデ。使用後表面は見られない。古墳後期。 [注記] SD-42 74, 75, 16.6-17.8	5YR5/6 明赤褐 やや硬質 赤・黒細粒やや多 白・黒・透明細粒少 やや硬質	南面直上10～11cm。 16.6-17.8グッドの1 片も揃合 口3/4周。底全周 SD-42 106
55	土師器 鉢	口 覆15.2 高 9.9 最大 径15.7	外底面は外部に段を持ち、口縁部ヨコナデ後に頸部タテヘラズリと頸の残ったヘラズリを食う。内面は頸部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。古墳後期。	10YR6/4 土に黄褐色 やや硬質 白・赤・黒細粒と 黒・透明細粒やや多 硬質	中央部直上34m。X17.3 ～17.4間に1片あり 口1/6周。頸1/3周 SD-42 106, 17.3～ 17.4 1層
56	土師器 甕	口 18.5 高 9.8 底 6.8	外面は頸部に1帯のナメナデ。頸～口縁部ヨコナデ。内面は頸部にナメヘラズリ。頸部ヨコナデ後頸～口縁部ヨコナデ。接合できぬ1帯部は焼物赤化する。古墳中期? [注記] SD-42 251, 305, 320, 321, 351, 360, 400, 401, 433, 487, Aト1層ナデ。E, G, H, Eト1層。グッド少(数字不明)	7.5YR3/3 暗褐 やや硬質 白・赤・黒細粒～細粒 やや多。赤・黒細粒少 やや硬質	南面直上～直上4cmと 断面四B+B'層が揃合 口1/18周。頸1/6周。 底1/4周 SD-42 224, 226
57	土師器 小頸瓶	口 覆16.4 高 6.2	外面直上に斜～横位ナデ。内面頸部に縦位ナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。古墳後期。	10YR7/3 土に黄褐色 硬質 白・赤・灰色細粒～細粒 多 硬質	中央部直上12cm 口1/3周 SD-42 224, 226
58	土師器 小頸瓶	口 覆16.0 高 15.0 最大 径15.8	外面は頸部に横～斜位ヘラズリの後にタテヘラミガナ。内面は頸部ヨコヘラズリで、粘土層仕上げ痕がよく残す。内外面の口～頸部にヨコナデ。口縁部・頸部・胴部・肩部分の間に接合点がないので、器形復原はやや不確実な部分を持つ。古墳中期。 [注記] SD-42 2, 4, 5, 101, 17.2-18.0 1層, 17.2-18.1, 17.2-18.1 1層	2.5Y7/3 浅黄 硬質 赤褐～細粒と白・黒・透明細粒多 やや硬質	中央部直上25～42cm と17.2-18.1グッド 頸部1層が揃合 口1/9周。頸1/3周 注記は左欄
59	土師器 甕	高 9.4 底 6.8	外底面は凹状で1方向ヘラミガナ。外面下部ヨコヘラズリ後に少しナメヘラミガナ。内面は底面が荒れて調整不明。古墳中期?	7.5YR6/4 土に灰 やや硬質 白褐色と白・黒・赤・透明細粒少 やや硬質	中央部直上5cm 底全周 SD-42 237
60	土師器 大形甕	口 覆15.0 高 9.3 底 8.4	外底面はおおそくヘラズリ後にヘラナデ。外面の側下部をナメヘラナデ。内面は底部に多方向と頸部に斜～横位のヘラズリ。外底面は大きな凹面。古墳後期。 [注記] SD-42 17.55～17.65, 17.55不明。Bベルト1層	10YR7/2 土に黄褐色 やや硬質 白・赤・透明細 粒やや多。白褐色と赤細粒少 やや軟質	X17.55～17.65間。断面四D/D'層にも破片あり 底5/8周 注記は左欄
61	土師器 甕	高 9.3 底 3.0 最大 径30.9	外底面は中央に1方向に削って凹状にし、外周も同方向のヘラズリ。外面頸部はヘラズリとヨコヘラズリの後に密なタテヘラミガナ。外面頸部ヨコヘラミガナ。口縁部ヨコナデ後タテヘラミガナ。内面は頸部ヨコヘラミガナ。口縁部ヨコナデ。胴下部外面は底面が均一に付着しているが、人為的な変色はほとんど見られない。古墳中期。 [注記] SD-42 40, 50, 62, 81, 111, 148, 176, 180～183, 191, 206, 213, 218, 220, 255, 259, 263, 247a996157, 248a99615), 16.5-17.5, 17.5-18.1, 17.0-18.0-18.1, 17.3-17.4, 17.4-17.52 3層, X17.25 3層, X17.55-17.65 1層, X17.55-17.65 2層, X17.55-17.65 3層, Aベルト2層, Bベルト, Cベルト2層	10YR7/4 土に黄褐色 やや硬質 白・赤・透明細粒と 黒細粒多。赤細粒少 やや硬質	南面3層(直上1～1層 底直上30cm)と中央 部直上14cmの接合 点あり。底全周 注記は左欄
62	土師器 甕	高 9.7	外面は方平明きで、灰緑色の自然釉が薄くかかるため胴部は不明瞭。内面はスリケンによる無文で、粘土接合面を反映する凹みが縦に伸びる。5G10区S10等の境と同一個体の可能性あり。古墳中期。	N5/0 灰 硬質 白～細粒と透明細粒 やや多 硬質	北部直上 胴部 SD-42 437
63	土師器 甕	口 覆13.6 高 10.5	外面は方平明きで下段11～12層と上段14～15層の薄層状文状を右から左に、口縁部ヨコナデ。胴下部外面は底面が均一に付着しているが、人為的な変色はほとんど見られない。古墳中期。 [注記] SK-292-SK 614出土個体と同一個体。古墳中期。	5Y5/3 黄 硬質 白～細粒少 硬質	北部直上2cmとX18少 インは直上の各1片 が揃合 口1/24周。体1/2周 SD-42 425, Eト北トレン チ



第164図 権現山遺跡SG10区 SD-41-42(3) 遺物

64 土師質 專用頂口 (縦割)	長 Ⅷ.6.5 孔 17.7～19.8 最大 Ⅷ.4.7 重 Ⅷ.89.4	専用頂口の先端部破片。通横孔は正円形の直孔で径1.7～1.9cmあり、軸を引ずいて成形した痕がある。先端部はやや斜めに溶着してガラス質の層に覆われ、5mm以上のコブ状突起も見られる。乳孔の厚さは0.6～1.5cmで、先端部が異なる。側面の還元部(灰色部)と酸化部(明褐色部)の境界がかなり明確である。顕微鏡観察構成No.65。古墳後期前。	10YR5/4 に近い黄褐色 やや暗黒。黒・透明な繊維 やや多。溶融層ややや 多や変質 硬硬度 3 メタ化度 未計測	南部直上(3層) 全周 X17.55～17.65 縦割 SD-42 36
65 石質 砥石?	長 Ⅷ.4.0 幅 Ⅷ.2.3 厚 0.85 重 Ⅷ.8.0	断面は直割って割った板状の石で、両面の研磨面は不明瞭。直角に交わる側面2面のうち、長辺は研磨して平坦になる。径3.5mm程度と推定できる孔が1/3程程度残っている。有孔砥石の破片と認められるが、還元した石製破片(有孔破片)の可能性もある。古墳前期。	2.5Y/2 灰黄 縞縞で軟質な黄泥岩	X17.55～17.65 縦割の2層 破片 SD-42 X17.55～17.65 2層
66 横形鏡治 (横小)	長 Ⅷ.1.9 幅 Ⅷ.1.8 厚 Ⅷ.0.7 重 Ⅷ.1.4	厚さ7mm程度の横小の横形鏡治の表面破片。内側には乳孔が1口あり、側部は面とも破面とされている。66～68は同一個体の可能性も持っているが、取り上げ単位が割で接合できなかったため別扱いとした。同示した個体は厚さ1.4g、小破面を含まないと計2.9g。顕微鏡観察構成No.68。	表 Ⅷ.灰色 地 灰褐色 硬硬度 1 メタ化度 なし	直上10cm 表面の小破片 SD-42 196
67 横形鏡治 (横小)	長 Ⅷ.3.7 幅 Ⅷ.2.6 厚 Ⅷ.1.8 重 Ⅷ.9.3	厚さ1.8cm程度の横小の横形鏡治の縦部破片。上下面と右側面が生きており、乳孔が1口立つ。顕微鏡観察構成No.69。	2.5Y/3 黄褐色 硬硬度 1 メタ化度 なし	直上33cm 破面3面 SD-42 189
68 横形鏡治 (横小)	長 Ⅷ.3.7 幅 Ⅷ.4.1 厚 Ⅷ.2.1 重 Ⅷ.19.9	厚さ1.8cm程度の横小の横形鏡治の厚部破片。上下面と右側面の一部が生きており、小破面が点状する。上面は木炭塊を残す平坦面と横形の下面の一部に灰色に被熱した乳孔が残留する。同示した破片は19.9g、他の3片を含めると合計21.4g。顕微鏡観察構成No.70。	表 Ⅷ.黄褐色 地 灰褐色 硬硬度 2 メタ化度 なし	直上34cm 9片中6片接合・約半 周が破面 SD-42 190
69 鉄製品 鏡	長 Ⅷ.3.06 幅 Ⅷ.1.3 厚 0.3 重 Ⅷ.1.76	断面が幅6.2×厚さ3.0mmで薄くことから見て、古墳後期の長鏡と見られる。鏡身の跡が残っているため断定ではないが、鏡の表面の平坦度が高いので、片乳孔になる可能性あり。残存する断面は隠れるように破断しているので、断面形は想定復元。		北部直上34cm 先端部 SD-42 175
70 鉄製品 小丸鎌 または 刀子	長 Ⅷ.6.4 幅 Ⅷ.1.6 厚 0.1 小丸鎌 または 刀子 重 Ⅷ.7.13	厚さが約1cm近い鉄製品。刀子や小丸鎌の鎌よりは、ミニチュアの鎌形品の可能性もある。両側とも不明瞭な刃部には見られず、ただし、厚い縁のためには刃部の有無がよくわからぬ部位がある。刃の右端部が曲がっているが、破断によるものか、鎌の新刃部を表現したものであるかは不明。有孔は見られない。古墳中～後期。		北部直上32m 破面4 SD-42 126
71 有孔内板	長 Ⅷ.3.2 幅 Ⅷ.2.93 厚 0.74 重 Ⅷ.8.02	厚さそれぞれ2方向の粗い研磨面。側面は縦方向(穿孔と同方向)の粗い研磨面。両の上部は原石に破損の痕があるので、両面および側面に研磨面があると想定。同の下部は粗い研磨面が観察される。乳は2孔が乳孔として残り、推定3孔。全体が残る方の乳は径1.9cm、終孔径1.90cmで表面に穿孔網を生じる。中間が残る方の乳は径2.55cmで、表面から孔を開けて表面に穿孔網を生じる。古墳中期。	10YR7/4 に近い黄褐色 縞縞で軟質な黄泥岩	X17.4～17.5 縦割 1/2層 SD-42 X17.4～17.5
72 石製模造品 有孔内板	長 Ⅷ.2.98 幅 Ⅷ.2.25 厚 0.48 重 4.39	両面は木材の断面に直割って割った面。右側の下部をやや薄くしている以外はわずかしこ研磨をしない。外側の側面は縦方向(穿孔と同方向)の粗い研磨面。ただし、側面に同示した下平は、縦方向の粗い研磨面。左側の面から穿孔し、左乳は初乳径2.45cm・終乳径2.06cm、右乳は初乳径2.01cm・終乳径1.71cm。古墳中期。	7.5Y/4 灰 縞縞で軟質な雲母片岩	南部直上 下部 SD-42 51
73 石製模造品 有孔内板(仿)	長 Ⅷ.2.6 幅 Ⅷ.2.0 厚 0.4 重 Ⅷ.3.51	隅丸形状で1孔だけを持つ。両面をそれぞれ1方向に粗く研磨する。断面に直割って割った面も多く残る。側面は縦方向(穿孔と同方向)にやや粗く研磨する。同の下部は粗い研磨面が観察される。乳は2孔が乳孔として残り、推定3孔。全体が残る方の乳は径2.05cm、穿孔径1.65cm。古墳後期前。	10Y4/1 灰 縞縞で軟質な黄泥岩	中央部直上 下部 SD-42 102
74 石製模造品 有孔方板	長 2.9 幅 2.28 厚 0.3 重 2.24	断面に直割って割った破片の片面に斜位方向の粗い研磨面。反対面は研磨しない。側面を全面に縦方向(穿孔と同方向)に粗く研磨して方形に成形。左側の面から穿孔し、左乳は初乳径2.20cm・終乳径1.95cm、右乳は初乳径2.40cm・終乳径2.05cm、穿孔径1.70cmの対面側に穿孔網を生じる。左側の右上面と左下部に破損あり。古墳後期前。	5Y4/1 灰 縞縞で軟質な粘板岩	中央部直上17m 一部 SD-42 141
75 石製模造品 有孔方板	長 2.31 幅 1.98 厚 0.35 重 2.24	断面に直割って割った破片の片面に浅い研磨面を残す。反対面は研磨していない。側面の全面には破面がないが、工具で切削または研磨して方形に成形する。左側の面から穿孔し、左乳は初乳径1.85cm・終乳径1.70cmで対面に穿孔網あり。右乳は初乳径1.90cm・終乳径1.65cm。古墳後期前。	5G4/1 暗オリーブ灰 縞縞で軟質な粘板岩	中央部直上40cm 先形 SD-42 116
76 石製模造品 有孔方板	長 Ⅷ.1.94 幅 Ⅷ.1.39 厚 0.31 重 Ⅷ.1.04	断面に直割って割った破片の片面にやや粗く見て、研磨面あり。反対面は研磨しない。側面には破面がないが、工具で切削または研磨して方形に成形したと見られる。左側の面から穿孔し、乳径は1.6～1.7mmで2箇所残存する。古墳後期前。	5Y5/1 灰 縞縞で軟質な粘板岩	隅部を含む2側面が現 SD-42
77 土師質 土師質 円盤	長 3.67 幅 0.8 厚 0.8 重 11.2	断面(左側)はナメメケツズリ、内面はヘラナツ。上面は断面側の断面部のみが現存している円形に成形している。研磨面は見られない。古墳中～後期。[注]長SD-42 17.2-18.0層	7.5YR6/4 赤黒 やや暗黒。赤黒～暗黒と白・黒・透明層減少 やや変質	17.2-18.0ケツツの1層 先形 注記は左側
78 鐵	長 11.9 幅 11.1 厚 7.2	厚い楕円形で、断面が丸味を帯びた三角形の自然鑄。加工・被熱痕は見られない。断面に同示したように凹部が磨耗している。重量117.0g。	5Y6/1 灰 縞縞で軟質なデザート	中央部直上10cm 先形 SD-42 162
79 鐵	長 16.4 幅 14.4 厚 13.6	横状大形鐵が切り取られたような大形鐵で、断面は厚い円形。水的作用で付着したと思われる褐色色の鉄跡が全面に多い。加工・使用・被熱痕はない。政庁や鏡と破片等もなし。重量490.0g。	2.5G/6 1 オリーブ灰 縞縞で軟質な安山岩	中央部直上5m SD-42 241
80 鐵	長 21.5 幅 6.3 厚 5.4	横状で断面が四角形に近い自然鑄。加工・被熱痕はないが、全周の面のうち半分程の断面に付着する。同中の黒染部分には炭化物が貼り付いている。重量1039.8g。	2.5Y7/2 灰黄 縞縞で軟質な黄泥岩	中央部直上35cm 先形 SD-42 161

SG10 区 SD-43 → 古墳時代の居館関連溝（前節）を参照

SG10 区 SD-44（第2分冊の第342図、写真図版43・44）

【位置】SG10 区南端部の 16-17 グリッドでごく一部分を調査した。古墳時代後期の溝で、大半を SG5 区で調査した（SG5 区 SD-44）。

【規模・形状・覆土】SG10 区で調査した範囲は東端部北半の一部だけなので、SG10 区 SD-44 の平面図と土層断面図は SG5 区 SD-44 の項にまとめて掲載した。古墳中期の遺構（SI-100 と居館北側区画溝 SD-43）を切る。【出土遺物】図示できる遺物はない。古墳時代後期末の溝であるが、SG10 区の範囲で出土した土師器 35 片は古墳中期後葉で、後期のものはなく、重複する SG10 区 SD-43 から混入したものと考えられる。

SG10 区 SD-221 → 古墳時代の居館関連溝（前節）を参照

SG10 区 SD-304a・304b（第165～168図、写真図版128・129・210）

【位置】SG10 区北部から中央部北端の X=20～23 間、Y=17～20 間にある。SD-304a を掘り直した溝が SD-304b なので、調査した部分の大半は SD-304b である。北半部の X22～X23 間では、SD-304b の東側に旧期の SD-304a が残っている（断面図 C-C'）。SD-304a が古墳中期後葉の SI-64a・64b・66 を切る（SI-64a・64b・66 → SD-304a → SD-304b）。また、時期不明の SK-526 を切る（SK-526 → SD-304a → SD-304b → SK-525・566）。

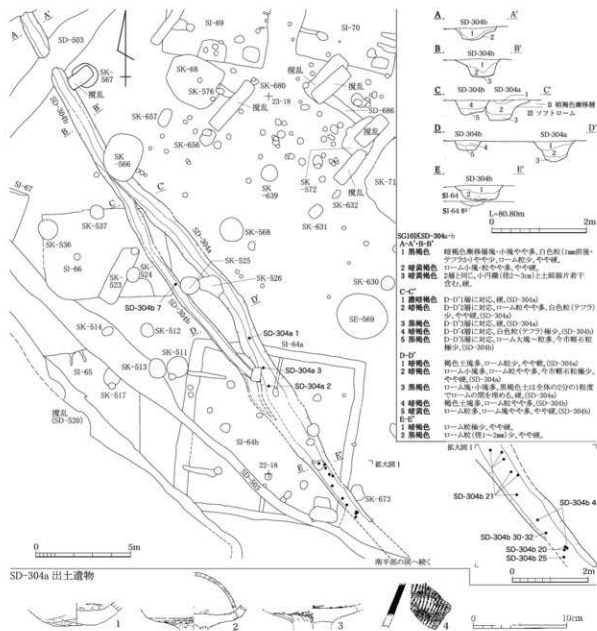
SD-304b の重複関係は非常に多い。竪穴建物跡では、縄文晩期の SI-63 と、古墳中期後葉の SI-61・64a・64b・66 を SD-304b が切る。近世の SD-204・503 に SD-304b が切られ、また攪乱溝 SD-501 にも切られる（SD-304b → SD-204・501・503）。南端付近で合流するような位置関係にある古墳時代の SD-305 とは、確実な新旧関係が不明だが、溝のあり方から SD-304b と SD-305 が同時存在の可能性がある。土坑や柱穴との関係では、北半部にある時期不明の SK-525・566 が SD-304b を切る（SK-526 → SD-304a → SD-304b → SK-525・566）。北半部の南端にある時期不明の SK-673 を SD-304b が切る可能性がある（SD-304b を掘った後に SK-673 の所在を確認した）。南半部にある時期不明の P-407 と SD-304b の重複関係は不確定だが、SD-304b が P-407 に切られることが推定される（SI-61 → SD-304b → P-407）。

【規模と形状】SD-304a は SI-64・66 と重複する付近で長さ約 15m の範囲で確認できた。SD-304a・b が合流する部分に関しては、SD-304a の方が SD-304b 底面よりも 8～18cm ほど深い傾向がある。幅 80～118cm、残存する深さ 33～49cm で、底面はわずかに北へ傾斜し、底面の標高は南端で 80.30m、北端で 80.24m。

SD-304b は北半部で幅 50～150cm・残存する深さ 18～39cm、南半部で幅 50～120cm・残存する深さ 10～30cm、底面はあまり高低差を持たないが、南端部が低地側へ向かって少し低くなる。底面の標高は北端で 80.2～80.3m、SD-304a の西側付近では 80.3～80.4m、北半部の南端付近では 80.2～80.3m、南半部の北端付近では 80.2～80.3m、SI-63 と重複する付近では 80.2m 前後、南端で 80.1～80.2m。

【覆土】SD-304a・b の埋土はともに自然埋没で、SD-304b の上部にテフラとみられる白色粒を含む。断面図 C-C' の 2 層では、SD-304a にも白色粒を含む。

【SD-304a 出土遺物】（第165図下段）SD-304a が残る部分が少ないので、遺物も少ない。高杯破片と凹底の杯破片、内面無文の須恵器甕破片からみて古墳中期で、SD-304b と同様の時期と考えられる。図示以外の土師器合計 133 片・1.016g の内訳は、杯 55 片・305g、高杯 8 片・68g、小形壺 2 片・18g、壺甕類 68 片・625g。

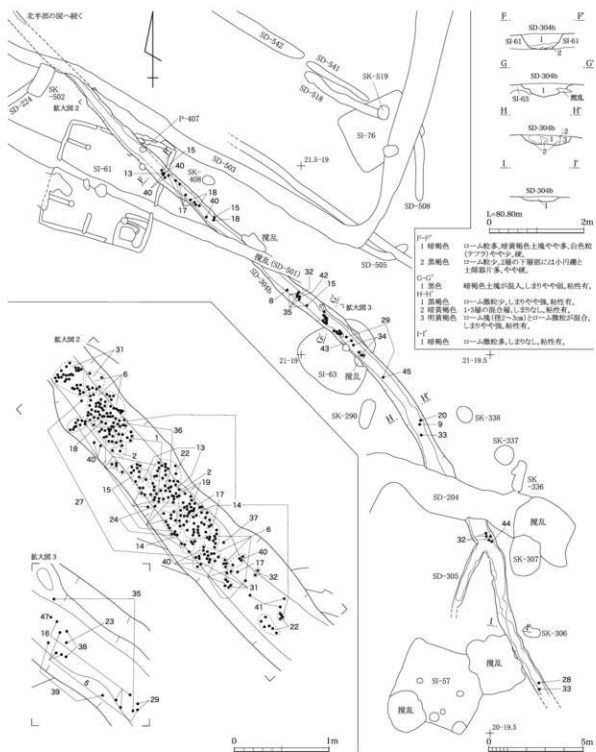


第165図 権現山遺跡SG10区 SD-304a 遺構・遺物 SD-304b (1) 北半部遺構

第99表 権現山遺跡SG10区 SD-304a 出土遺物

番号 種類 部材	大きさ (m・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または原料)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高 残 2.4 底 3.4 最大 復 9.9	外底面は円形の凹状域にし、ナデ仕上げ。外面体部は横一斜位ヘラケズリ、内面は底部に多方向または放射状、体部に横位のヘラミガキと見られるが、磨滅して不明確。古墳中期。	7.5Y8/4 中に、暗 やや暗赤 白・黒・赤・透明 細粒や中多、白・灰色細粒少 硬質	北半部1層(底上33cm) 体下部1層-完全周 377
2 土師器 高杯	高 残 2.6	杯底一体部端の境合部で割れている。径約9cmの杯底部円板の外周側面に横位の帯状を1~2mm間隔で入れてから杯体部を成型したことと分かる。外面は杯底部に放射状ヘラナデ。杯底外周から杯体部にヨコヘラナデ。内面は杯底部にヘラナデ。杯体部はヘラミガキかもしれないが不明確。内面脚柱上端ナデ。古墳中期。	5Y7/8 粗 細粒 白粒と黒・透明 細粒少 やや硬質	北半部3層ほぼ底面(底上1m) 杯底1/2周 373
3 土師器 高杯	高 残 1.9 最大 復 9.5	外面は杯底部を放射状ヘラケズリ後に繰らなヨコヘラミガキ。杯内面はおそらくヘラケズリとヘラナデで平らに整えられた後多方向のやや暗赤ヘラミガキ。古墳中期。	7.5Y8/6 粗 やや暗赤 白・黒・透明 細粒や中多、灰色色一細粒少 硬質	北半部3層ほぼ底面(底上1m) 杯底1/3周 374
4 土師器 甕	高 残 4.9	おそらく木目平行の溝を彫った印敷板で外面を平行行直後、間隔を空けたヨココナデによる幅1cm前後の無文帯が2本見られる。内面は多方向の了りなナデで無文。古墳中期。	5Y4/1 灰 硬赤 白粒-細粒少 硬質	断面図C.Cの1層(SI-60の北東側) Hライン上1層

第5章 権現山遺跡 SG10区



第166図 権現山遺跡 SG10区 SD-304b(2) 南半部遺構

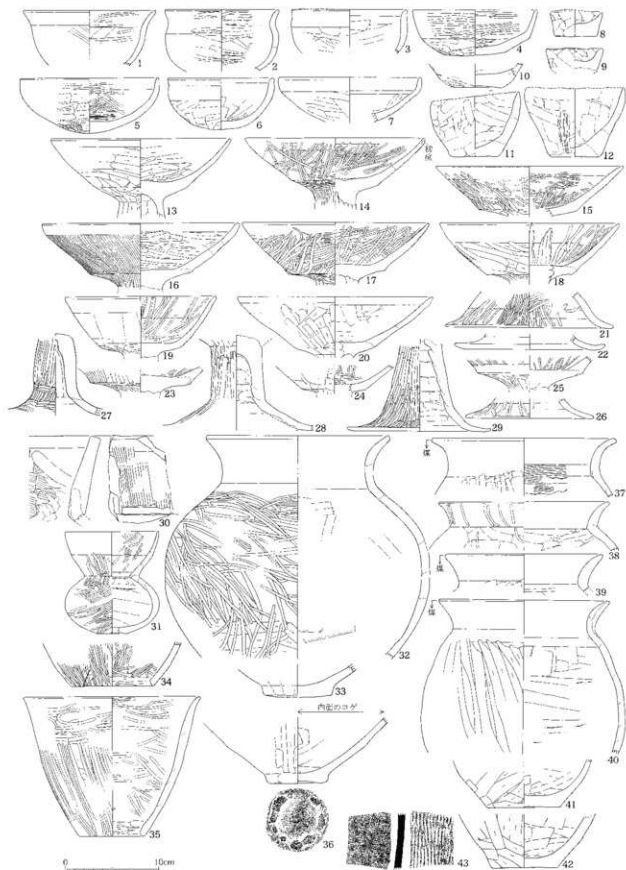
[SD-304b 出土遺物] (第167・168図) 遺物量が非常に多い。特に多いのはSI-64b南東付近(第165図の拡大図1)とSI-61付近(拡大図2およびその東側)であり、ここでは溝下層の下半部(つまり底面近く)で土師器の中小破片と円礫がびっしりと密接して出土した。地山中の円礫混じりローム層がSD-304b底面に露出している箇所がSD-501・503の中間付近にあるので、そうした円礫を土師器中小破片と一緒に溝底に捨てたものと推定される。溝底面に接して円礫が載り、その上に土器片が載る場合が多い。重複するSI-

64b や SI-61 よりもはるかに遺物の密度が高く、溝底面から浮いた遺物がありませんので、重複する建物から混入・流入した遺物は少ないと考えられる。断面図 H-F の北側から SI-63 に重複する位置までの間では、粗製の鉢および小形土器（いわゆる「手捏ね土器」）がやや目立つ。

古墳中期後葉の溝で、古墳後期の土器は混入と考えられる程度の量である（44～47）。中期後葉の複数の建物を作るので、それよりも新しい。遺物は中期末よりも中期後葉のものが目立つ。中期末の指標となる、模倣杯（4・5）や短脚化を始めた高杯（27・28）は少ない。重複する竪穴建物から溝内へ入ってきた遺物も含むではあろうが、中期後葉の新段階には機能していた溝と考えられる。33 のように白色針状物質（骨針）を含む土器類は SG10 区 SI-23 などに、14 のような稲粒痕は SG10 区 SI-50 などにある。43 が、SI-10 などで出土した須恵器裏片と同一個体かどうかは不明確。44 は SK-264・275・SD-263 の須恵器裏破片と類似する。図示以外の土器器合計 2,192 片・18,802g の内訳は、杯 282 片・4,624g、高杯 213 片・2,136g、鉢 5 片・82g、小形土器 29 片・182g、壺類 1,589 片・11,060g、甗 24 片・431g、小形土器 50 片・287g。混入した縄文土器があり（『東谷・中島地区遺跡群』10 の第 36～41 図 45・67・72・78・85・87・90・155・279・280・286）、そのうち晩期土器は重複する SI-63 から流入した可能性がある。弥生中期土器も混入していた（前掲書第 42 図 25～27）。

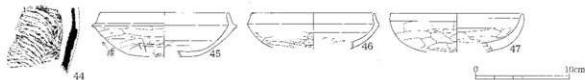
第 100 表 梅原山遺跡 SG10 区 SD-304b 出土遺物

番号 分類 器種	大きさ cm ³ 形	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 復 13.8 高 残 5.8 最大 復 14.0	口へ体部端には内外面ともに稜を持たない。外面は体部にヘラケズリ(7)の残 ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。内面は体部にナメヘラナデと口縁部にヨコ コナデの残。全体をやや滑らかなヨコヘラミガキ。外面に広く稜が付着する。古墳 中期後葉。	7.5YR6/4 ぶい-肌 やや軟弱 赤・黒・透明細粒 中や少。灰白色と白細粒少 201, 215	南平部直上 2m の 2 片 が接合 口 1/9 周。底全周 22.4, 17.8 上面
2 土師器 杯	口 復 12.0 高 残 6.5	外面の縦へ体部端と外面の縁部に近い。外面は体部に前位のヘラケズリ少し ヘラミガキ。内外面口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部はヘラ ナデ(7)後ヨコヘラミガキ。古墳中期後葉。	2.5YR5/6 明赤弱 鉄黒 白・黒・赤黒-細粒と 透明細粒少 やや硬質	南平部直上直上 2 cm が接合 口 1/4 周 194, 200, 208 付着。222
3 土師器 杯	口 復 12.2 高 残 4.6 最大 復 12.3	外面は体部中位ナデと下位ヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面体 部にナメヘラナデ。外面に稜付着。古墳中期後葉。	10YR6/3 白・黒・赤黒-細粒 赤黒 赤黒と黒・透明細粒 少 硬質	北平部 SI-64-66 間の遺 跡 口 1/6 周 22.4, 17.8 上面
4 土師器 杯	口 復 13.2 高 4.8 最大 4.3	外面体部は多方向ヘラケズリで、縦へ体部端がやや不明確。外面体部上平ヨ コヘラケズリ。内外面口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部ヨコヘ ラナデ後ヨコヘラミガキ。底部多方向ヘラミガキ。古墳中期末。	10YR6/4 ぶい-肌弱 透明細粒 赤黒-細粒と白・黒・ 赤黒 透明細粒少 硬質	北平部直上 2cm 口 1/6 周。底全周 264, 290, 220-18
5 土師器 杯	口 復 14.7 高 5.8	外面は底部に多方向へ体部に横位のヘラケズリ後ヘラミガキ(または光沢の あるヘラナデ)。内外面の口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラミガキ。古墳中期後葉末。	5.2YR6/6 暗 鉄黒 赤黒と白・黒・赤・ 透明細粒少 やや硬質	南平部直上 2～3cm が 接合 口 1/8 周。底全周 82, 95, 100, 101, 103, 105
6 土師器 杯	口 11.1 高 5.4 最大 11.3 重 残 197.0	外面は体部にヘラナデおよびナデの後に上位ヨコナデと底部多方向ヘラケズ リ。内面はヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ。古墳中期中葉または後葉。 [注記]168, 182, 185, 189, 190, 222, 226, 2155-1850 高梨岡	5YR5/6 明赤弱 やや軟弱 白・透明細粒と 白・黒・赤・透明細粒少 やや硬質	南平部直上直上 2cm が接合 は球状 注記は左側
7 土師器 杯	口 復 14.8 高 残 4.7 最大 復 15.2	内外面ともに体部は横位または斜位ヘラナデの後にヘラミガキしている可能性 があるが、断面が磨耗して不明確。内外面の口縁部にヨコナデ。古墳中期 後葉。	2.5YR6/8 暗 鉄黒 白・黒・透明細粒少 やや硬質	北平部直上 9cm 口 1/3 周 1, X224
8 土師器 小形土器	口 5.5 高 2.8 最大 5.5	縦横欠け不足なく、手捏ね成形。外面体部は下位ヘラケズリで縦い凸面状。内外 面ともに上平ムシビナデ。外面の体部から底部にかけて刺刺痕跡があり、 縦成肉の痕跡も上れない。古墳中-後期。	5YR7/6 暗 鉄黒 白・黒細粒少 やや硬質	南平部直上 10cm 口 1/4 周。底 2/3 周 79
9 土師器 小形土器	口 6.0 高 残 2.3	縦横欠け不足なく、手捏ね成形。内外面ともにナメコピナデ。外面は面的に 刺刺痕跡に残って残っている。胎土が磨耗なので、縦成時に底部が刺刺した ものかもしれない。古墳中-後期。	7.5YR6/8 暗 鉄黒 赤黒と黒細粒少 やや硬質	南平部直上 4cm 口 5/6 周 33
10 土師器 粗製鉢	高 残 2.5 底 5.5	外表面は多方向ナデで中央部縮く凹む。外面体部ナメナデ。内面は底部か ら体部にかけ四方向ナデのナデ。古墳中-後期。	2.5YR6/8 暗 鉄黒 赤黒と白-細粒と白細 粒中や少。黒・透明細粒少 やや硬質	南平部で SI-63 南側と SD-204 北側の 6 片が接 合 底 2/3 周 (4), (5)
11 土師器 粗製鉢	口 9.5 高 5.9～6.8 底 5.0	2～3 段の粘土層を積み上げて成形する。外表面は滑らかな多方向ナデで凹が ややある。外表面は軽く滑らかなナメナデ。口縁部内外面のヨコナデはむら ない。内面は底部に多方向。体部に横へ斜位の滑らかなナデ。外面体部の弱 平肌が磨耗。古墳中-後期。	7.5YR5/4 ぶい-肌 やや軟弱 赤・黒・透明細粒中 や少。白・黒・透明細粒少 やや硬質	南平部で SI-63 南側と SD-204 北側 口 1/3 周。底全周 (4), (5)
12 土師器 粗製鉢	口 復 10.6 高 7.3 底 5.0	外表面は滑らかなナデで少し凸凹あり。外面体部は滑らかなナデと滑らかなハムメ(7)。 内外面の口縁部にヨコナデを行わない。内面体部はやや滑らかなナメヘラナデ。 古墳中-後期。	7.5YR5/4 ぶい-肌 やや軟弱 赤黒と白・黒・ 透明細粒中や少 やや硬質	南平部で SI-63 南側と SD-204 北側 口 1/12 周。底 1/6 周 (4), (5)
13 土師器 高杯	口 復 18.9 高 残 8.4	外面は杯底-縁部ナデヘラケズリ。杯底縁部と杯体部ヨコヘラケズリ。内面 は杯底縁部に多方向と杯体部前位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。 脚内面ナデ。古墳中期。	7.5YR8/4 浅黄弱 鉄黒 赤黒と白-細粒と白細 粒中や少。白・黒細粒-細粒少 やや硬質	南平部直上直上-底上 3cm が接合 口 1/12 周。杯底 1/12 周 注記は左側
14 土師器 高杯	口 18.8 高 残 7.4	外面は縁部を横位のヘラケズリ後ヘラミガキ。杯底縁部ナデヘラケズリ後ヨコ ヘラミガキ。杯体部はナメヘラケズリと口縁部ヨコナデ後に全体をナメヘラミガ キ。内面はナメヘラケズリと口縁部ヨコナデ後に全体をナメヘラミガキ。 内面の杯底縁部は刺刺して調整不明。外面の口縁部に刺刺痕が 1箇所ある。古 墳中期。	7.5YR6/4 ぶい-肌弱 やや軟弱 赤黒-細粒中や多 白・黒細粒少 やや硬質	南平部直上直上-底上 3cm が接合 口 5/12 周。脚柱全周 158, 188, 193, 197, 208 付着。211, 220, 254



第167図 権現山遺跡 SG10区 SD-304b (3) 遺物

15	土師器 高杯	口 19.5 高 残 5.3	外面は杯底部の半に放射状ヘラウズリ。杯底部ココヘラウズリと口縁部ココナデの間にナメヘラミガキ。内面は口縁部ココナデ。杯底・底部に密なタテおよびココヘラミガキ。古墳中期。 [注記] 175, 106, 133, 167, 190, 194, 197, 208, (6), 210, 218-186 複写	5Y8/8 橙 白・赤黒・細粒多 透明細・細粒と黒細粒や少 や中硬質	南平部直上1~底上3cm が接合 口5/12周, 杯底1/3 周に接合 注記は左欄
16	土師器 高杯	口 20.6 高 残 7.0 最大 20.9	外面は杯体一側部に6~8本/cmのタテヘラ。口縁部ココナデ。内面は杯底に1方向。杯体部に3~4本/cmの横位の粗いヘラウズリ。口縁部のココナデは軽くナデする粒。古墳中期。	5Y8/6 橙 白・赤黒・細粒 や中硬質 黒・透明細や少、灰色細	南平部直上4~5cmが 接合 口5/12周, 杯底(周 6), 63, 93, (4)~6 が接合 南平部直上1~底上3cm が接合 口2/周, 杯底全周 注記は左欄
17	土師器 高杯	口 19.4 高 残 6.9 最大 19.7	外面は杯底一側部ココヘラウズリ後に杯底部ココナデヘラミガキ。杯底部ココヘラウズリと口縁部ココナデの間にナメヘラミガキ。内面は杯底に密なタテと杯体部多方向および肩位のヘラウズリと口縁部ココナデの間に、横・斜位ヘラミガキ。古墳中期。 [注記] 113, 114, 119, 121, 125, 132, 138, 178, 180, 189, 206, 244, 255, (6), 215-187	5Y8/6 橙 透明細粒少 や中硬質	南平部直上1~9cmが 口1/2周, 杯底5/12周 107, 112, 117, 212, 216 が接合
18	土師器 高杯	口 18.7 高 残 6.5 最大 18.9	外面は杯底部を放射状ヘラウズリ。杯底部ココヘラウズリ後に24コヘラウズリ。口縁部ココナデ。内面は杯底部に斜位のヘラウズリ(または非常に浅いウケム)の後に、口縁部をココナデして杯体部をタテヘラミガキ。古墳中期。	10Y8/6 明黄緑 や中硬質 白・赤黒・細粒や多 白・白濁と黒・透明細・細粒 や少	南平部直上1~9cmが 口1/2周, 杯底5/12周 107, 112, 117, 212, 216 が接合
19	土師器 高杯	口 復 15.8 高 残 6.2	外面は杯底部ナデ。口縁部ココナデ。杯底部ココヘラウズリ後に外周ココヘラウズリ。内面は杯底部に多方向と杯体部に斜位のヘラウズリおよびヘラウズリ後、口縁部ココナデ全体にナメヘラミガキ。古墳中期。 [注記] 138 復写, 176, 195, 200, 205, 206, 208, 222	7.5Y8/6 白・赤黒・細粒多 や中硬質 黒・透明細・細粒や多 や中硬質	南平部直上1~底上3cm が接合 口1/4周, 杯底3/4周 注記は左欄
20	土師器 高杯	口 復 20.4 高 残 6.4	外面は杯底部にヘラウズリまたはヘラウズリ。杯体部をタテヘラウズリ後タテヘラウズリ。口縁部ココナデ。内面は斜位および横位のヘラウズリ。口縁部ココナデ。古墳中期。	7.5Y7/8 橙 や中硬質 黒・透明細・細粒 や多。白・赤黒・細粒や少 軟質	南平部直上2~10cm が接合 口1/4周, 杯底1/3周 33, 265
21	土師器 高杯	口 残 3.8 脚部 復 17.8	内外面の脚部をココナデ後、外面タテヘラミガキ。内面は履および斜位ヘラミガキ。古墳中期。 [注記] 306, 317, 321, 333, 341, 343, 353	7.5Y8/7 橙 白・灰色細・細粒 と赤・黒・透明細少 軟質	北平部直上1~3cmが 脚部5/12周 注記は左欄
22	土師器 高杯	口 残 1.6 脚部 復 16.0	外面の脚部をナデ後に内外面の脚部をココナデ。古墳中期。	2.5Y7/4 浅黄 緑多 白・黒・赤細粒少 や中硬質	南平部直上1~底上2cm が接合 脚部1/3周 158, 161, 193, 205
23	土師器 高杯	口 残 2.8	外面杯底部に放射状および外周横位のヘラウズリ後、放射状ヘラミガキ。外面杯底部ナメヘラウズリ後タテヘラミガキ。内面は底部におおむね1方向と杯体部・肩位のヘラミガキ。古墳中期。	10Y8/7 にごい・黄緑 緑多 白黒・透明細と黒・透明 細粒少 硬質	南平部直上1.4cm が接合 脚部全周 98, (9)
24	土師器 高杯	口 残 3.1	外面は杯底部を中央へラウズリ。杯底部ココヘラウズリ。内面は密な多方向ヘラミガキ。古墳中期。	7.5Y8/4 にごい・橙 緑多 白・黒・赤細粒少 や中硬質	南平部直上1~底上2cm が接合 杯底1/2周, 221
25	土師器 高杯	口 残 3.5	杯底部中央に陥上を充填して成形した可能性がある。外面は杯底部に浅く不明瞭なウケ(ナデしたハケと思われる)。杯体部ナデ。杯底・底部の境目付近をココナデ。杯体部に粗いナメヘラミガキ。内面は杯底に密な多方向と杯体部に斜位の粗いウケミガキ。古墳中期。	7.5Y8/6 橙 緑多 白・透明細・細粒や少 赤・黒細粒少 や中硬質	北平部直上1 杯底1/4周 204
26	土師器 高杯	口 残 2.1 脚部 復 13.6	外面は脚部をココナデ後白と脚部をココナデ後にタテヘラミガキ。内面は脚部ココナデと脚部ココナデ。 [注記] 2135 18.75×9.75, 2155 18.50 複写見取	7.5Y8/6 橙 や中硬質 透明細・細粒や多 多。白・赤黒・細粒や少 軟質	南平部で51.61 重覆部と 杯底間に接合 脚部1.6周 注記は左欄
27	土師器 高杯	口 残 8.5	細い柱状脚の脚中位が少し陥む。脚部外面はおそらくタテヘラウズリ後密なタテヘラミガキ。内面は上端部を深く刻ってから脚部部をココナデ後、脚部ココナデ。古墳中期後葉。	2.5Y8/4 赤黒 緑多 白濁・粗粒と白・黒・赤細粒少 硬質	南平部直上1cmが接合 脚部全周 185, 225
28	土師器 高杯	口 残 9.9	外面は脚部ナデおよび杯底部ココヘラウズリ。脚部一側部をタテヘラミガキ。内面はココナデで脚部部に輪縁状の横溝を浅く彫る。脚部部はココナデ後ココヘラミガキ。古墳中期後~末葉。	5Y8/6 橙 緑多 白・赤黒・細粒と黒・透明 細粒少 や中硬質	南平部直上1~12cmが 接合 脚上全周。 脚下半1/6周 3
29	土師器 高杯	口 残 9.6 脚部 復 15.1	側立状部で反時計回りに構み上げる手順を繰り返して成形する。外面は脚部部ココナデ。脚部全体を密なタテヘラミガキ。内面は脚部部ココナデ。脚部部ココナデ後ココナデ。古墳中期。 [注記] 144, 54, 56, 82, 192, 205	10Y8/7/4 にごい・黄緑 緑多 赤黒と白・黒細粒少 や中硬質	南平部直上1.4cm が接合 脚部全周。脚部5/6周 注記は左欄
30	土師器 大甕	口 復約 25 高 残 9.2	非常に丸形で厚い。外面は頸部下端に接合面を残し、口~頸部ココナデ後に4~5本/cmの浅いウケ。内面は口縁部ココナデと頸部ナメヘラ。ハケ調の陥上。口に赤い・紅色の陥上を内面の陥下に付足して密なナメナデをしていいる。古墳中期。	2.5Y8/2 灰黄 や中硬質 白・黒・透明細 や少。赤細粒と白・灰色細 少 中や中硬質	北平部直上1 口1/18周 174, 175, 287
31	土師器 小甕	口 残 10.0 高 残 10.7 最大 復 2.8	杯底面はナデで小さく凹型残。外面は杯部ナメヘラ後に斜・履位ヘラミガキ。口縁部ココナデ。頸部下後タテヘラミガキ。内面は杯部ナデで肩位に粗く土層積み面を残す。内面底部ナデ。口縁部ナメヘラウズリ後ココナデ。口~頸部ナメヘラミガキ。外面の頸部が密な。古墳中期前半。 [注記] 181, 185, 194, 208, 221, 222, 224 付記, 228, 2153 18.50 複写見取	7.5Y8/4 にごい・橙 緑多 白・赤黒と黒・透明 細粒少 や中硬質	南平部直上1~底上3cm が接合 口1/6周, 頸5/12周, 底3周 注記は左欄
32	土師器 甕	口 残 19.2 高 残 23.4 最大 復 28.0	外面側部ヘラウズリと頸部下位ココヘラウズリ後に頸部全体をヘラミガキ。内面は側部ヘラウズリで下位は浅く、上位は深く行く。内外面の口~頸部ココナデ。頸部中位が窪む。古墳中期。 [注記] 11~3, 106, 166, 194, 226, 331, (出), (図), 22.0 18.05, 22.0 18.05 1面, 22.0 18.12 2面, X22~22.1 1面	7.5Y8/4 にごい・橙 や中硬質 白・赤黒・細粒や多 や中硬質	北平部直上2~8cm 口1/18周, 頸5/12周 注記は左欄
33	土師器 高杯	口 残 3.5 底 残 7.0	杯底面は丁束ヘラウズリで面状にする。外面部下端に斜・履位ヘラウズリ。内面は脚部全周が削決して調整不能だが、ナデがヘラウズリと思われる。	5Y8/6 明赤黒 緑多 白・透明細・細粒多 灰色細・細粒少、白色針状物 多	南平部直上1cm 底全周 26, (1)
34	土師器 甕	口 残 4.6 底 残 8.7	外面は脚部にナメまたはヘラウズリと頸部一端へラウズリ後に密なタテヘラミガキ。内面は側部にナメまたはココヘラウズリ後に密な履・斜位ヘラミガキ。内面脚部下端から底面の丸縁部にかけてココヘラウズリ。古墳中期後葉~末。	10Y8/7 にごい・黄緑 緑多 白・透明細・細粒や多 多。赤・灰色細・細粒と黒細 粒少 中や中硬質	南平部直上3~10cmが 接合 口1/3周, 底7/12周 54, 57, 72, 75, 77, 78, 84, 86, (6)
35	土師器 小甕	口 残 17.2 高 残 14.6 底 残 5.4	外面は脚部下位ナデと頸部上位ココヘラウズリ後にタテヘラミガキ。口縁部ココナデ後にココヘラミガキ。内面は脚部ココヘラウズリ後にナメヘラミガキ。頸下部から底面までココヘラウズリ。口縁部ココナデ後ココヘラミガキ。古墳中期後半。	5Y8/6 明赤黒 緑多 白黒・細粒や多 赤・黒細粒少 や中硬質	南平部直上1~底上5cm が接合 口1/3周, 底7/12周 54, 57, 72, 75, 77, 78, 84, 86, (6)



第168図 権現山遺跡 SG10 区 SD-304b (4) 古墳後期の遺物

36 土師器 甕	高 残 6.9 底 残 6.5	外底面はナデ面割の凹状で、底面外周に粘土塊が斜めに付着している。外面製部タテヘラケズリ。内面は底部に多方向と側面に横～斜位のヘラケズリ。内面全体に明確なコゲが付着する。古墳中期。	10YR6/4 に近い青褐色 透明釉と黒釉やや多。白磁粒少 やや軟質	南半部直上～底上 3cm が接合 底全周 202, 220
37 土師器 甕	口 復 19.6 高 残 6.2	外面は口縁部ヨコナデ後に製部タテヘラケズリ。内面は製部ヨコハケ後ナデ。頸部ヨコハケ。口縁部ヨコナデ。外面に傷付着。古墳中期。	7.5YR5/6 明期 やや硬質 赤・透明釉～細粒 と白・黒磁粒少 やや軟質	南半部直上 1cm 口 1/8 周 245
38 土師器 甕	口 復 18.0 高 残 5.2	外面は製部ヨコヘラケナデと口縁部ヨコナデの後に深らなタテヘラミガト。内面は製部中央や強いヨコヘラケナデ。口縁部ヨコナデ。像や被熱痕等は見られない。古墳中期。	10YR7/4 に近い青褐色 やや粗い。赤粒～細粒やや多。 白・黒・透明細粒やや少 やや軟質	南半部直上 1～3cm が 接合 口 1/12 周、頸 1/4 周 94, 99
39 土師器 甕	口 復 16.3 高 残 4.1 最大 復 16.7	外面は製部タテヘラケナデ。口縁部ヨコナデ。内面は製部ヨコヘラケナデ。口縁部ヨコナデ。外面に傷付着。古墳中期。	10YR8/4 灰褐色 やや粗い。白・黒粒～細粒やや多。 灰色粒～粗粒と透明細粒少 軟質	南半部直上と底上 8cm に各 1 片 口 1/4 周 64, 70
40 土師器 甕	口 復 18.0 高 残 16.2 最大 残 21.6	外面は口～頸部ヨコナデ後に製部タテヘラケズリ。ヘラケズリの工具に凹みがあり、粗いケメに似た仕上げになっている。内面は製部ヨコヘラケナデで、粘土接合面を少し見し、口～頸部ヨコナデ。外面全体に傷が多付着する。内面は製部中央以下が少し明褐色に汚れている可能性あり。古墳中期。 [注記]109, 126, 128, 173, 178, 181, 185, 190, 192, 194 付添, 195, 200, 201, 205, 206, 208 付添, 214, 217～219, 223, 224, 242, 243, 211 添 18.50 短見取	7.5YR5/4 に近い明 やや硬質 白粒～細粒多。白・赤・灰色粗粒少 やや軟質	南半部直上～底上 6cm 口 1/2 周、頸 3/4 周 112 周は左端
41 土師器 甕	高 残 5.0 底 残 7.5	外底面は 1 方向ヘラケズリで平底にする。外面製部タテヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラケズリ。外面の被熱痕は不明。底面には濃い褐色 (5YR7/4)。 [注記]1160, 239, 240, (3), 31, 35?	7.5YR5/4 に近い明 やや硬質 白粒・透明細粒多。白・赤・灰色粗粒少 やや軟質	南半部直上～底上 1cm が接合 底全周 製部 注記は左端
42 土師器 甕	高 残 5.7 底 残 7.1	外底面は 1 方向ナデで平底。外面製部タテヘラケズリ。内面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラケズリ。外面の被熱痕は不明。内面製部の一部分が少し明褐色に汚れている。	2.5YR3/3 に近い青 やや粗い。白・透明細粒～細粒 やや多。灰色粗粒～細粒少 硬質	南半部直上 3～23cm が 接合 底 2/3 周 70, 85, (4)
43 甕 蓋	高 残 6.0	おそろく木口と交互する溝を削った明き帯で縦の平行明きを外面に施す。内面は当具面を磨り消しか、又は無文当具面を使っている。SI-10 等の蓋取部裏面と同じ一個体かどうかは不明。古墳中期。	7.5Y2/1 黒 やや硬質 白粒～細粒多。白 磁少 硬質	南半部直上 12cm 製部 51
44 甕 蓋	高 残 7.0	外面は高が不明。内面は同心円明文当具面。当具の本質は同心円状では必ず平行線状に木目が走る可能性がある。被面は灰オリーブ色と濃い褐色の互層状の色調。古墳時代の SK-275 と時期不明の SK-264 と中央部 (SD-263 出土) 破片とやや類似する。古墳後期。	2.5Y2/1 灰オリーブ やや粗い。白・黒・赤・透明 細粒少 硬質 やや軟質	南半部直上 製部 7
45 土師器 杯	口 復 13.6 高 残 4.6 最大 復 15.3	外面は体部上ナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内外面の口縁部と内面上半ヨコナデ。内面上半はナデまたはヘラケズリ。外面の中央以下と内面に捺仕上げ。古墳後期～古墳末。	10YR7/3 に近い青褐色 細粒～細粒と赤・黒磁粒少 硬質	南半部直上 2cm 口 5/12 周 44, 113, (5)
46 土師器 杯	口 復 12.9 高 残 3.8 最大 復 14.0	残存する口縁部が小さいので復原図は参考値。外面体部上ナデ。中央ヨコヘラケズリ。内外面の口縁部と内面体部上ナデヨコナデ。捺仕上げはない。古墳終末期前。	10YR6/4 に近い青褐色 細粒・白・透明細粒多。白・赤粒と黒磁粒少 硬質	南半部 (SI-6.3 の裏側) 口 1/12 周、頸 1/12 周 (5)
47 土師器 杯	口 復 13.9 高 残 4.1 最大 復 14.1	外面は口縁部ヨコナデ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラケナデに口縁部ヨコナデ。捺仕上げは見られない。古墳後期末。	7.5YR6/6 暗 褐色 白・透明細粒やや少。 赤・黒磁粒少 やや軟質	南半部直上 2cm 口 1/6 周 71, (5)

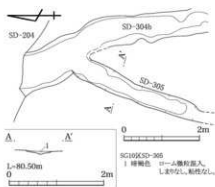
SG10 区 SD-305 (第169図、写真図版 129)

【位置】SG10 区中央部の 20-19 グリッドにある。北側は古墳中期の SD-304b に合流する状況だが、同時存在か、SD-304b に切られるのかを確定できなかった。両溝の底面に段差がなく連続することや、SD-304b の北東側に SD-305 がいないことを重視すると、SD-304b に合流する同時存在の溝である可能性が考えられる。南端は低地部の斜面に入ると浅くなり確認できなくなる。

【規模と形状】幅 42～64cm で、南端部は幅 28cm。残存する深さは 3～10cm。底面は中央部がやや高く (標高 80.24m)、北端 (80.19m) と南端 (80.19～80.22m) がわずかに低くなる。

【覆土】単層で、テフラの層や粒は見られない。

【出土遺物】図示した遺物はない。遺物は土師器壺裏腹 1 片・7g だけで、時期を判断することはできない。SD-304b に合流する可能性から見て、古墳中期後葉の溝であろうか。



第169図 権現山遺跡 SG10 区 SD-305 遺構

SG10区 SD-319 (第170図、写真図版130・210)

【位置】SG10区南部の19-18グリッド。古墳中期のSI-55と重複する可能性もあるが、両遺構間に掘乱とSD-204があるので前後関係は不明。東側を近世のSD-204が切り、その東は地形が下がるためSD-319が確認できない。西端には時期不明の土坑SK-372が重複し、SD-319の上部を中～近世のSD-263が切る。SK-372はSD-319・SD-263との新旧が不明で、SD-319西半部底面が明確に確認できず、その下にSK-372があることが判明した。SK-372と重複するSD-319西端部は推定形を示した。覆土の軟らかいSK-372が新しいと仮定すると、SD-319とSD-263を切ることも想定できる。

【規模と形状】幅117～170cm。残存する深さ13～20cm。底面は特定方向に傾斜しないが、西端部底面の狭い範囲が20cmほど一段深く、最深部は確認面から40cm(ただし、SD-319西端をSK-372が壊していた場合は、SK-372埋没途中の状況をSD-319底面と誤認したことになる)。SD-204に切られる付近の底面2箇所がピット状に深く、溝底からの深さは北側穴が41cm、南側穴が28cm。断面C-C'では南側の溝上端が不明瞭で、覆土7層と同質の土が遺構外まで続く。

【覆土】自然埋没状で、テフラと見られる白色粒を含む層が多い。遺物は、全域からやや多く出土している。

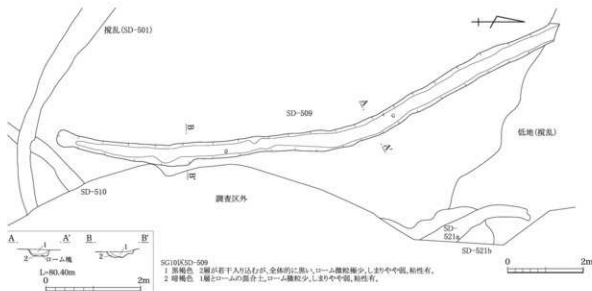
【遺物および出土状況】古墳中期後葉の初現的な模倣杯がある(2)。残存度が高い2と3の遺物出土状況は北側が高いので、北から流れ込んだ覆土3層の上に流入した可能性がある。図示以外の土師器合計48片・354gの内訳は、杯13片・88g、高杯11片・15g、甕類24片・251g。SI-34から混入したとみられる土師器長胴裏破片も少量ある。また、縄文早期の条痕文系土器片(「東谷・中島地区遺跡群10」の第37図113・121・122)や、磨製石斧未製品(本書の第10図12)も混入していた。



第170図 権現山遺跡 SG10区 SD-319 遺構・遺物

第101表 権現山遺跡 SG10区 SD-319 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鉢	口 12.0 高 7.0 最大 14.7	外面は筒部ココヘラナデ後に体部ココヘラケズリ。口縁部ココナデ後に頸部ココヘラミガキ。内面は体部ココヘラナデ。口縁部ココナデ後にココヘラミガキ。胎面胎土色と不明瞭な範囲で混入付着。	7.5YR/6 暗 今や暗褐色 赤相～細粒やや多。白・黒・ 透明相～細粒少 軟質	底上11～15cmが接合 口5/12周。胴全周 1, 2, 7
2 土師器 杯	口 13.3 高 5.9 底 4.5 最大 14.4 重 337.2	外底面は中央が凹んだ状態で外周をヘラケズリし、底面の範囲は不明瞭。外周部体部ナデ。内外面口縁部ココナデ。内面は底面に円筒方向のヘラナデ。体部ナデ。口縁部ココナデ。	7.5YR/4・10YR/8/3 浅褐色 やや粗粒 赤相と黒・透明 相～細粒と白細粒やや多。 白・灰色粗粒少 やや軟質	底上6cm 完全 4
3 土師器 小形甕	口 11.4 高 10.6 底 6.0 最大 13.3 重 残 486.3	外底面ナデ後、出ての部分だけを軽くヘラケズリし、中央がわずかに凹む。外面は口～筒部ココナデ後に体部ココヘラケズリ。内面は体部ココヘラナデと口縁部ココナデの後に、底部多方向・体部縦位・筒部横位のヘラミガキ。外面上位に層が付着し、中位以下が焼熱している可能性が高い。内面は暗褐色で、使用による汚れがどうかは不詳。	10YR/6/4 紅・赤褐色 やや粗粒 白相～細粒多。 黒・透明相～細粒少 やや軟質	底上5～15cmが接合 口11/12周。胴全周。 底2/3周 2, 8



第 171 図 権現山遺跡 SG10 区 SD-509 遺構

SG10 区 SD-509 (第 171 図、写真図版 130)

【位置】 SG10 区北部の 20-20 と 21-19・20 グリッドにまたがる。溝の北端部は、東側から湧入してきた低地部へ入り、その先が確認できなくなる。この低地部に下りる通路として古墳時代の SD-534・535 が取り付けられている。低地の北側にある古墳中期の SD-527 と関連する可能性や、南側で時期不明の SD-510 と合流していた可能性もある。重複する遺構はない。

【規模と形状】 幅 34～59cm、残存する深さは 4～12cm。底面は中央部が高く北端と南端へ向かって傾斜し、底面標高は中央部で 80.12m、北端で 80.05m、南端で 79.99m。

【覆土】 自然埋没状で、テフラの層や粒は見られない。

【出土遺物】 図示できる遺物はない。出土した土師器合計 39 片・232g の内訳は、杯 16 片・54g、高杯 3 片・11g、壺甕類 20 片・167g。古墳後期になりそうな遺物はなく、古墳中期の遺物であるように見られる。他に、縄文早期土器『東谷・中島地区遺跡群 10』の第 36 図 79) や縄文時代石器も混入していた。

SG10 区 SD-527 (第 172・173 図、写真図版 130・131・173・210・211)

【位置】 SG10 区北部の 21-19 から 24-20 グリッドまで延びる。Hr-FA テフラ降下前の古墳中期に、集落東端を区画した溝の可能性を持つ。

SD-527 の北端は、調査区のすぐ外で、低地へ向かって落ちる斜面まで掘り抜いていたと考えられる。SD-527 の南端部は、東側から湧入してきた低地部へ入る。この低地部に下りる通路として、古墳時代(後期?) の SD-535 と古墳中期末の SD-540 がある。この SD-535・540 が SD-527 の南部を切る。SD-540 との関係は、SD-527 (途中まで埋没した状態) → SD-540 → Hr-FA テフラ降下 → SD-540 底部掘り直し、という順になる。SD-527・540 の最終埋没期は、Hr-FA テフラ降下後の古墳後期前半であろう。SD-535 や低地よりも南側では、古墳時代の SD-509 が SD-527 と連続する可能性もある。

縄文時代の SK-697・699 を SD-527 が切り、SD-527 が古墳時代の SD-696・SD-711 と近世の SD-503 (断面 D-D') に切られる。SK-697 (縄文時代) → SD-527 → SD-711 → Hr-FA テフラ降下、の順で SD-711 が SD-527 の覆土下部を切り、SD-711 と SD-527 の覆土上部は FA テフラを含む同種の層で埋没している。

【規模と形状】 溝幅は約 70～140cm (北部で幅 100～120cm、中央部 120～140cm、南部 70～100cm、南端部 40～70cm)。遺構確認面標高が高い北部で深く、残存する深さは北端部で約 50cm、南端部で約 20～25cm。底面は特定方向に傾斜を持たず、底面標高は南端で 80.07m、中央部で 80m 前後 (X24

第5章 権現山遺跡 SG10 区

付近=79.93m、X23 付近=80.01m、X22 付近=80.06m)、北端で 80.03m。

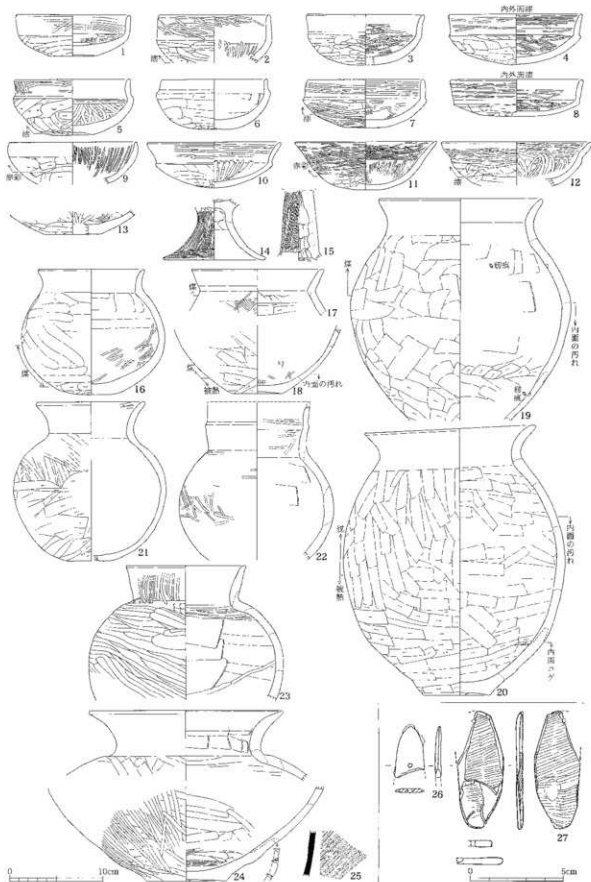
〔覆土〕埋土は自然埋没である。中央部（D-D'の北側付近）と北部（断面図A-A'の2層とC-C'の1層）では、古墳後期初頭に降下した Hr-FA テフラが最上部に入る。テフラ塊がまとまって入る状況で、遺構確認面付近でよく認められた。遺物の大半は FA よりも下層にある。ただし、7・18・24 は FA 混在層、8～12 と 17 は FA 混在層よりも上で出土した。

〔遺物出土状況〕4・20・21 は残存度の高い遺物が底面上 40～50cm レベルに廃棄されている。北部では溝底面より上 70cm レベルに遺物 8～12 がまとまる。ただし、8・10 に接合する破片は底上 30cm レベルにもある。南部では、断面 D-D' 付近で底面上 30～40cm に遺物がややまとまり、自然礫も多く含むが 7 のように残存度の高い土師器もある。これらの他にも、全域に遺物がある。残存度の高い遺物が廃棄されたようなものが目立つ。

〔出土遺物〕溝としては遺物が多く、中期末の土師器が主体である。2・4・5・7・8・12 は漆仕上げの杯として早い時期の例。後期前半の赤彩杯（9・11）や浅い杯（8・10）も少し含む。高杯は短脚化しつつある（14・15）。24 は胴部の接合面に刻みを入れている。稲稈圧痕のある土師器（19）は、SG10 区 SI-50 などに例がある。石製模造品の剣形品（27）は SG10 区 SI-2 などに例がある。有孔の鉄鏝（26）は、SG10 区 SI-106 と同種の短柄鏝か、または無柄鏝の破片。25 は南方へ遠く離れた平安時代の SK-235 などにある須恵器甕と同一個体で、後世の混入遺物。図示以外の土師器合計 288 片・2.861g の内訳は、杯 67 片・328g、高杯 13 片・94g、壺甕類 194 片・2.219g、瓶 14 片・220g。縄文早～後期と弥生中期の土器も混入していた（『東谷・中島地区遺跡群 10』第 36～40 図 41・118・119・137・156・186・193・197・199・213・224・245・252、第 42 図 38・43・49・71）。

第 102 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-527 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・構成 (または素材)	出土状態 残存状況 (または注記)
1 土師器 杯	口 12.0 高 4.4 底 5.0	外底面に 1 方向へラズリで少し凹底状。外面体部ヨコヘラナデ。外面口縁部と内面はナデ後にヨコヘラミガキ。 〔注記〕21、225・23・195、225.23・195-5、235.7(以下不明)	5YR5/8 明赤褐 やや磁質 赤紅～黒緑やや多。 白・透明顆粒少 やや破質	南部底上 35cm 口 1/2 周、底全周 注記は左欄
2 土師器 杯	口 復 11.6 高 残 5.1 最大 復 12.2	外面は体部にヘラズリ後、軸の広いヨコヘラミガキ。内外面の口縁部はヨコナデ後、内面上半と外面をヨコヘラミガキ。内面の体部はナデまたはヘラナデ後に縦へ斜位のナミガキ。内外面全体に黒色付着物があり、漆仕上げと見られる。	5YR5/8 暗 磁質 白・透明顆粒少 やや破質	中央部 C-C' と D-D' の間 口 1/4 周、体 1/3 周 22.5-19.5-一括、22.5・23・19.5-一括
3 土師器 杯	口 復 12.3 高 残 5.4 最大 復 12.6	外面は体部ナデ後ヨコヘラズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体一部をナデまたはヘラナデ、口縁部ヨコナデ。底部に 1 方向と口へ体部に横位のヘラミガキ。 〔注記〕32、33、225・23・195-一括	2.5YR5/8 明赤褐 磁質 赤紅～黒緑と白・黒顆粒少 やや破質	北部底上 42～50cm が接合 口 1/2 周、体 1/3 周 注記は左欄
4 土師器 杯	口 14.0 高 5.3 最大 14.2 重 257.2	外面は底面に 1 方向と体部に横位のヘラズリ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底面に 1 方向または多方向、体部に横位の密なヘラミガキ。内外面全体に黒色付着物があり、漆仕上げと見られる。	5YR5/6 明赤褐 やや磁質 赤紅～黒緑やや多。 白・黒・透明顆粒少 やや破質	南部底上 37cm 口 1/2 周 25
5 土師器 杯	口 復 12.2 高 5.9 底 4.0 最大 12.7	外底面はヘラズリで抉って凹底にする。外面体部は磁粒と斜位のヘラズリ。内外面口縁部はヨコナデ後、外面に少しヘラミガキ。内面は体部に斜位の体部上部に横位の密なヘラミガキ。外面体部以上と内面全体に漆仕上げ。	2.5YR5/6 明赤褐 やや磁質 赤紅～黒緑やや多。 白・黒・透明顆粒少 やや破質	南部底上 36cm 口 1/3 周、体 1/2 周、底全周 27
6 土師器 杯	口 11.2 高 5.3 最大 12.1	外底面はナデまたはエボクサエでわずかに凹む。外面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラズリ。内面は体部ヨコヘラナデ。内外面が磨き気味で不明瞭。	5YR5/8 暗 やや磁質 赤紅～黒緑多。白・黒・透明顆粒少 やや破質	南部底上 42cm 口 1/3 周、体全周 22.5・19.5(以下不明)
7 土師器 杯	口 12.2 高 3.1 底 4.1 最大 13.1	外底面は内側多方向へラズリで、体部との境は深い。外面体部はヨコヘラズリ後に密なヨコヘラミガキ。内外面口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内外面全体に漆仕上げ。思われ、暗褐色が外側に残っている。	10YR6/4 明黄褐 やや磁質 白・赤・赤・透明顆粒少 やや破質	南部底上 45cm (FA 層在り) 口全周、底 1/2 周 49
8 土師器 杯	口 復 13.9 高 3.9 最大 復 14.1	外面は底面に多方向と体部に横位のヘラズリ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキで、外面は密に磨く。内面は体部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。 〔注記〕39、41、235・200-一括	2.5Y5/2 暗灰黄 やや磁質 白・透明顆粒～黒緑と黒顆粒少 やや破質	北部底上 30cm の 2 片と底上 6.7cm (FA 上) の 2 片が接合 口 1/3 周 注記は左欄
9 土師器 杯	口 復 13.6 高 残 4.4 最大 復 13.8	外面体部は上半ナデと下半ヘラズリ。内外面口縁部ヨコナデ。内面体部は放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面全体を赤彩。	10YR6/4 に近い黄褐 やや磁質 白～黒～透明顆粒少 赤・灰色・透明顆粒少 やや破質	北部底上 69～72cm が接合 (FA 上) 口 5/6 周 42、44、47、235・20.0-一括
10 土師器 杯	口 復 14.2 高 4.8	外面は底部ヘラズリと体部ナデ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。 〔注記〕40、235・20 (FA 上)	5YR5/6 明赤褐 磁質 黒緑と白・黒・透明顆粒少 やや破質	北部底上 31cm の 1 片と FA より上層の 6 片が接合 口 1/4 周 注記は左欄



第173図 権現山遺跡 SG10区 SD-527(2) 遺物

第5章 権現山道跡 SG10 区

11	土師器 杯	口 15.0 底 5.2	外底面は多方向と外表面は傾位のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後に外面半ヨコヘラミギギ。内面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミギギ。底部は放射状ヘラミギギ。ヘラミギギの単位がやや細かい。外面中位以上と内面全体を占める。	25YR4/8 赤黒 やや透明～白細粒多、灰色粗粒多・赤・透明細粒少 やや軟質	北部底上 69cm (FA 上) 口全周、底 1/2 周 10、22.5-20.0一拵 やや軟質
12	高 残 15.8 高 残 4.6 最大 復 16.0	外面は体部下部後ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後口一箇所上にヨコヘラミギギ。内面は口縁部ヨコヘラミギギ半後に底部を放射状ヘラミギギ。外面中位以上と内面全体に漆仕上げ。	7.5YR6/6 橙 細粒 赤黒粒～白・黒・赤黒粒少 やや軟質	北部底上 67cm (FA 上) 口 17/12 周 43、23.5-20.0FA 上、 23.5-20.0一拵 やや軟質	
13	高 残 2.5 底 復 6.0	外底面は口一方向ヘラケズリで平直にする。外表面部ヨコヘラケズリ。内面は斜線→横位タテヘラケズリ後にタテヘラミギギ。	5YR4/6 赤黒 細粒 赤黒～細粒と白・透明細粒少 やや軟質	南部底上 39cm 底 1/3 周 10、22.5-23.19.5一拵、 23.7以下不明)	
14	高 残 6.2 脚盤 10.8	外面は脚柱部タテヘラケズリ後タテヘラミギギ。脚盤部ヨコナデ後ヨコヘラミギギ。内面は脚柱部平直、脚中位ヨコヘラケズリ後、脚内面全体をヨコナデ、林道部内面は1方向の漆仕ヘラミギギ。	10YR2/4 に近い黄褐 細粒 白・黒・透明細粒やや多、白・黒・赤黒粒少 やや軟質	北部底上 51cm 脚盤全周、脚盤 5/9 周 37	
15	高 残 7.3	外面は 8～9cm 間の細かいたテラミギギ上から下へ漆し、脚柱部に多少漆したテラヘラケズリ。内面は粘土紐を輪組み状に織り込んでから絞ったために腐蝕が多く生じる。脚盤内面はヨコナケ。	7.5YR6/6 橙 細粒 白・灰色粗粒多 やや軟質	南部底上 38cm 脚盤全周 4	
16	口 11.2 高 残 13.3 底 4.4 最大 15.2	外面は体部下部後ヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラケズリ後、口一箇所をナメヘラケズリ。内外面口一縁部をヨコナデ。外面の体部口一縁部がやや多。底面の腐蝕痕が不明。 [注記] 17、18、22.5-23.19.5一拵、22.60-19.60一拵	5YR5/6 明赤 やや粗粒 白・黒・赤・透明細粒～細粒やや多 やや軟質	南部底上 39～44cmと 遺構縁部 17.2 周、底全周 23.7は左隣	
17	口 復 14.0 高 残 5.0 最大 復 14.9	外面は斜線ナメヘラケズリとナメヘラケズリ、口一箇所ヨコナデ。内面は斜線ナメヘラケズリとヨコヘラケズリ、口一箇所ヨコナデ。外面口縁部は多少の漆仕付。 [注記] 23.5-24.20.0FA 上、24.0-20.0FA 上一拵、23.5-24.20.0以下不明)	7.5YR6/4 に近い黄 やや粗粒 白・黒・赤・透明細粒少 やや軟質	SD 696 東部付近近以 上で FA 層より上 口 1/3 周 10以下不明)	
18	高 残 7.2 底 5.2 最大 復 17.5	横 4 軸で、成形面が外面全体を用いていると見られる。外底面は傾斜状でヘラケズリまたはヘラミギギ。外面脚部ヘラケズリと下端ヘラケズリ。内面はヘラケズリ後ヘラミギギと思われるが、網状が細かいので不明確。底部の外面が腐蝕して内面に黒褐色の汚れが見られ、脚部の外面に僅か付着する。	10YR7/3 に近い黄褐 やや粗粒 白・黒・透明細粒～細粒少、赤黒粒多 やや軟質	南部底上 42cm (FA 置在層) 底全周 50、22-19	
19	口 17.1 高 残 23.5 最大 23.3	外面は下位ナメヘラケズリ、脚部ヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラケズリ。体部口一箇所をナメヘラケズリ。内外面口一縁部ヨコナデ。内面の底面と中位と下位 1箇所と腐蝕痕があり、胎土中に混和されていたと見られる。外面口一縁部がやや多。内面下部が暗褐色に汚れる。 [注記] 17、22.60-19.60一拵、22.19以下不明)	7.5YR6/4 に近い黄 粗粒 白・黒・透明細粒～細粒多、赤黒粒少 やや軟質	南部底上 30cm、22.6 19.6 グリッド遺構縁部 面 口 1/2 周、底 1/2 周 10以下不明)	
20	口 18.1 高 28.1 底 7.0 最大 23.6	外底面は多方向ヘラケズリで凹底状。内外面の脚部はヘラケズリで、脚中位の横位と上止面付近をヨコヘラケズリで漆する。外面脚部下端ヘラケズリ。内外面の口一縁部ヨコナデ。外面上下に漆付着。外面下部に腐蝕痕あり。内面トビ色。内面中に暗褐色の汚れ。 [注記] 16、17、22.60-19.60一拵、23.5-24.20.0FA以下不明)	7.5YR8/6 浅黄緑 粗粒 白・黒・透明細粒～細粒多、白細少 やや軟質	南部底上 39～40cm、 22.6-19.6 グリッド遺構 縁部底面 口 5/6 周、底全周 10以下不明)	
21	口 11.6 高 16.8 底 16.2 重 846.1	外底面は多方向ヘラケズリで平直。外面は脚部上下ナメヘラケズリ後に中位以上と下位ナメヘラケズリ。口縁部は外面と内面にヨコナデ。内面はヨコナデヨコナデ半をしている可能性あり。内面全体の表面が剥落して調整が不明。	7.5YR7/6 橙 細粒 白細～細粒やや少、赤・透明細粒～細粒と黒粗粒少 やや軟質	北部底上 48cm 口 2/3 周、底全周 36、22.5-19.5一拵 やや軟質	
22	高 残 16.2 最大 復 16.4	外面中部位に段と内面脚一箇所縁部の境が明確。外面は脚部に横一前位のナメヘラケズリ。口一箇所ヨコナデ。内面は脚部ヨコヘラケズリ、口一箇所ヨコナデ。口縁部は多少の漆仕付。口縁部は多少の漆仕付。内外面の表面が腐蝕して調整が不明確。	5YR6/6 橙 やや粗粒 白細粒多、赤黒粒と白・黒・透明細粒少 やや軟質	南部底上 39～42cmが 複合 面全周、脚 1/3 周 17、28、一拵、22.5-23 19.5一拵	
23	口 復 12.6 高 残 14.2	外面は脚部に横一前位の輪位のヘラミギギ。口一箇所ヨコナデ後タテヘラミギギ。内面は体部ヨコヘラケズリと主に脚部をヨコヘラミギギ。内面の口一箇所にミギギを行っているかどうかは表面が見れているので不明。	5YR5/6 明赤 細粒 白・赤黒粒と白・黒・赤黒粒少 やや軟質	SK-697 東部付近より北側 口 2/3 周、底 1/2 周 24.0-20.0 漆仕層付近一拵	
24	口 復 20.1 高 残 17.4 底 8.4 最大 復 29.2	脚盤破片が非常に少なく、肩～底面までの間は復原できない。脚部下部横位上げ後止面中央で窪みを入れた後に上部を成形している。外底面は多方向ヘラケズリで中央が少く凹む。外面は脚部下位にナメヘラケズリ後ヘラケズリとミギギ。脚部ナメヘラケズリ、口一箇所ヨコナデ。内面は脚部下位をヨコナデおよびヨコヘラケズリ、肩～脚部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面の口縁部わずかに上り出るが、場所によっては不明確。 [注記] 22.0-19.5、24.0-20.0 漆仕層付近一拵、23.9 付近土中、23.9 付近上層、SK-697)	2.5YR2/2 灰黄 やや粗粒 白・黒・透明細粒～細粒多、白・赤黒粒少 やや軟質	底上 66cm (FA 置在層)、X22～24 間にて同一傾度 口 1/12 周、底全周、底 2/3 周 10 注記は左隣	
25	高 残 4.4	外面は木目平直の漆を塗った肌を叩きで履位または灰色の平直面とする。同一傾度。平安時代の遺物が見える。	2.5Y3/1 黄緑 細粒 白細～細粒と赤・黒色濁出粒少 やや軟質	北部底上 30cm 48	
26	長 残 2.7 幅 残 1.6 厚 0.23 重 2.2	傾斜した面に比べて反対面の丸味が少ないので、やや片丸形になる。丸は1箇所あり、X線写真を観察した厚は2.0～2.5mm。有機質の腐蝕痕と認められない。無銘類(無銘類)または知銘類(知銘類)の破片。	SG17/7 緑黒 細粒で管理が発達した緑片 質	南部底上 32cm (橋頭部付近) 10	
27	長 6.2 幅 残 2.4 厚 3.5 孔 1.7mm 重 8.55	平面を保持できない。両面ともそれぞれ1方向に磨削する。断面調整は、傾斜した面の中央と斜方向の磨削。左下の側面では縦方向の磨削を確認できる。他は側面が不明か、または切削工具で成形したままの状態。孔は1.50mmの1孔だけで、左側の面から穿孔し、裏面に小さな穿孔孔痕を生じる。		SK-697 より北側で FA より下層の 2 片が複合 層の表面下と左隣 縁が剥離破片 24.0-20.0FA 上	

SG10 区 SD-533 (第174図、写真図版 131)

[位置] SG10 区北部の 21-19 グリッド。東側にある古墳時代の SD-534 と連続していた可能性がある。

[規模と形状] 幅 26～37cm、残存する深さは 4～5cm で、底面標高は 80.3m。

[覆土] 単層で、ロームと黒色の混合土なので人為的に埋め戻した可能性もあるが、残っている深さが非常に浅いので断定はできない。SD-540 のようなテフラは見られない。

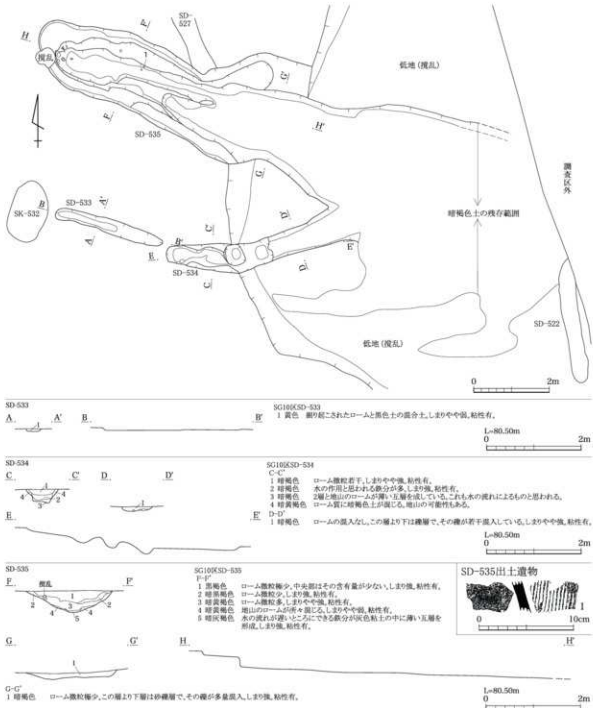
[出土遺物と性格] 遺物はない。SD-534 に連続する可能性から、古墳時代の溝と考える。

SG10区 SD-534 (第174図、写真図版131・132)

【位置】 SG10区北部の21.5-19.5グリッド所在。東側低地部で古墳時代のSD-535へ合流する。また、西にある古墳時代のSD-533と連続していた可能性がある。

【規模と形状】 底面が凹凸状になりながら、東側の低地へ向かって下る溝。低地部に降りる通路として作られた可能性が高い。北側のSD-535・540・594と形状が似る。幅41～92cm、残存する深さは6～46cm。底面標高は、西端部で80.26m、東端にある最も深い窪みの底で79.77m。

【覆土】 地山の可能性がある南北両側の4層を除く外、自然埋没状である。下半は鉄分を含む水成堆積



第174図 権現山遺跡 SG10区 SD-533・534・535 遺構 SD-535 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

と考えられる。SD-540のようなテフラは認められない。SD-534・535の東端部を埋める暗褐色土(B-B'の1層)が東側の低地部まで広がっている範囲を図に示した。

【出土遺物と性格】 遺物は無い。SD-540・594などと類似するので、これも古墳時代(中期?)の遺構と推定した。

SG10 区 SD-535 (第174図、写真図版132)

【位置】 SG10 区北部の21-19 グリッド。東側低地部で古墳時代のSD-534と合流する。古墳中期末のSD-527の南端部を切る。調査区東端の低地部にある時期不明の溝SD-522との新旧関係は不明。

【規模と形状】 南側のSD-534や、北側のSD-540・594と形状が似る。ただし底面が凹凸面にならない点、これらの溝と異なる。低地部に降りる通路として作られた可能性が高い。西部では幅170～190cmで、東部では幅2.8mまで広がり、SG10 区の東側から湾入する低地部へ続く。残存する深さは西部で32cm、東部で54cmまで深くなり、底面が東へ傾斜する。底面標高は西部で80.05m、東部で79.80～79.84m。平面図に示したように弱い段状に見えるが、土層断面(A-A')では溝を掘り返した状況は認められなかった。

【覆土】 自然埋没状態で、最下層は鉄分を含む水成層。SD-540のようなテフラは認められない。SD-534・535の東端部を埋める暗褐色土(G-G'の1層)が、東側の低地部まで広がる範囲を図に示した。

【出土遺物】 遺物はごく少ない。図示した須恵器破片(1)は内面の当具痕跡を磨り消していると考えられ、古墳時代中期の遺物である。SD-594に比べて遺物が少ないのは、上部を削平されたためかもしれない。図示以外の土器合計27片・145gの内訳は、杯13片・40g、壺甕類14片・105g。

第103表 権現山遺跡 SG10 区 SD-535 出土遺物

高野 種類 図種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 日記
1 須恵器 破	高 残 3.2	外面は木目平行の溝を彫った叩き版で深い平行叩き。内面は褐色のナデで当具痕跡は確認できない。	黒/黄 灰 中/中硬質 白釉-黒粒や或少 黒色焼出粒少 焼肌	底上38cm 1

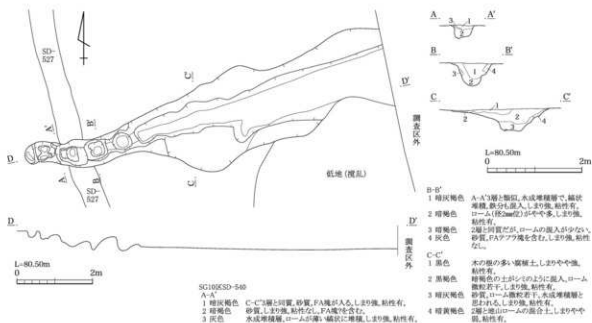
SG10 区 SD-540 (第175図、写真図版132・133)

【位置】 SG10 区北部の22-19 グリッド。古墳中期末のSD-527の南部を切る。先行するSD-527の覆土上部にも古墳後期初頭に降下したHr-FAと考えられるテフラが堆積していて、SD-527(途中まで埋没した状態)→SD-540→テフラ降下→SD-540(底部掘り直し)の順になる。

【規模と形状】 南側のSD-534・535や北側のSD-594と形状が似る。低地部に降りる通路として作られた可能性が高い。幅55～210cmで、溝の西部では底面に凹凸があり、西端部では凹凸の高低差が小さく(9～14cm)、東へ行くとき高低差が大きくなる(22～38cm)。残存する深さは、西部では底面の窪みを除くと8～9cm(窪みを含めると22～47cm)で、東部では30～41cm。凹凸のある西部は東の低地へ降りてゆく(D-D'図左半)。東へ降りた後は凹凸や傾斜がなくなり、その底面は地山の礫混じり層になる(D-D'図右半)。底面標高は西部の窪み底面で79.82～80.18m、中央部で79.85m、調査区東端で79.95m。

【覆土】 自然埋没状態で、流水の影響による細かい砂を含む水成層。古墳後期初頭に降下したHr-FAと考えられるテフラ塊が断面図A-A'上層およびB-B'にみられ、C-C'付近より東側では認められなくなる。南北両側縁にテフラ塊が多く(B-B'の4層)、溝中央の深い部分にテフラがない。テフラ降下後にSD-540の凹凸状底面を掘り返して、中央部のテフラ堆積層が失われたのだろう。古墳後期初めにHr-FAテフラが降下した後もSD-540がしばらく機能していたと考えられる。

【出土遺物】 図示した遺物はない。SD-594のFAテフラ上で出土した内外面赤彩の杯(SD-594の10)に接合する体部片と、内外面を磨く杯体部片がある。出土した土器合計25片・166gの内訳は、杯8片・42g、高杯1片・5g、壺甕類16片・119g。



第175図 梅現山遺跡 SG10区 SD-540 遺構

SG10区 SD-594 (第176図、写真図版133・211)

【位置】 SG10区北部の22-19・20グリッドにあり、東側は調査区外まで伸びる。古墳時代中期の同種遺構として、南にSD-534・535・540がある。SD-594と同様にHr-FAテフラが入る古墳中期のSD-527が北側から西側に曲がって延びるので、SD-527の配置がSD-594を避けたか、あるいは同時に計画されたと考えられることもできる。

【規模と形状】 南側のSD-534・535・540と形状が似る。底面に凹凸面があるので、低地部に降りる通路として作られた可能性が高い。幅約100～340cm。溝の西部では底面に凹部が3箇所あり、西側の2箇所は凹凸の高低差が10～19cmで、東端の1箇所は高低差が61cm。残存する深さは、西部では底面の窪みを除くと12～18cm(窪みを含めると15～58cm)で、東部では51cm。底面が東へ傾斜し、凹凸のある西部は東の低地へ降りてゆく(C-C'図左半)。東へ降りた後は凹凸や傾斜が緩くなり、底面に地山の礫層が少し見える。底面標高は西端の窪み底面で80.25m、中央部で79.90m、調査区東端で79.79m。

【覆土】 自然埋没状で、下部は砂礫を含む水成堆積。古墳後期初頭に降下したHr-FAの可能性が高い灰白色テフラ塊が、平面図に記入した範囲で、遺構確認付近に認められた(断面図A-A')。遺物10がFA層より上にあり、それ以外で出土位置のわかる遺物はFA層上面よりも下のレベルにある。

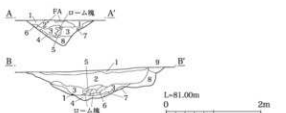
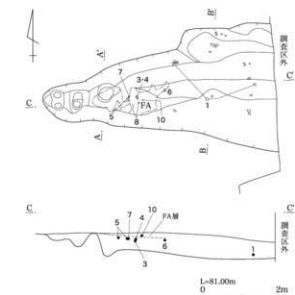
【出土遺物】 この種の溝(SD-534・535・540・594)のうちでは最も遺物が多い。FA層より上で出土した10は赤彩する後期初めの杯で、SD-540出土破片と接合した。これ以外は、内外面をよく磨く古式の模倣杯がある。1の内面をケズリ調整しているのは異例である。図示以外の土師器合計250片・1.469gの内訳は、杯113片・382g、高杯9片・29g、壺甕類125片・1.011g、甕4片・47g。他に、縄文早・中・後期土器片も混入していた(『東谷・中島地区遺跡群』10の第37～40図120・202・261・265)。

第104表 梅現山遺跡 SG10区 SD-594 出土遺物

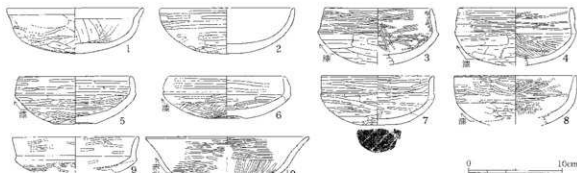
番号 種類 器種	大きさ [cm]・[g]	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径14.6 高 4.8	外面は口縁部下位にナデと上位にヨコナデ。底面に1方向と体部に傾位のヘラケズリ。内面は体・底部を放射状ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	2.5YR5/8 明赤褐色 やや粗い 赤黒～黒粒多、透明期～細粒白・黒細砂少 やや軟質	底上3～15cmが挿合 口1/4割 12、14、28
2 土師器 杯	口 径14.2 高 4.8	外面は底面に1方向と体部に傾位のヘラケズリ。口縁部ヨコナデ後ヨコハラミガキ。内面は磨耗して調整不詳。	5YR6/0 緑 やや粗い 灰・透明細砂少 やや軟質	口5/12割

第5章 権現山遺跡 SG10区

3 土師器 杯	口 11.4 高 残 5.9 最大 12.8	外面は底部に1方向(?)と体部に横位のヘラケズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコハマミガキ。内面の体部に多方向ヘラミガキ。外面上半に暗褐色気味のような光沢を呈す。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコハマミガキ。内面の体部に斜放射状を横方向のヘラミガキ。外面中位以上と内面を漆仕上げ。	5YR5/6 明赤褐 やや黄味 赤黒粒多、白・黒・透明細粒やや多 やや軟質	底上30cm (FA下) 口5/6周 6
4 土師器 杯	口 12.2 高 残 6.1 最大 13.0	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリで、体部上位は少しヘラミガキをしたような光沢を呈す。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコハマミガキ。内面の体部に斜放射状を横方向のヘラミガキ。外面中位以上と内面を漆仕上げ。	5YR5/6 暗 やや軟質 赤黒粒多、白・黒・透明細粒やや多 やや軟質	底上27~30cm (FA下) 口3/4周 6, 8
5 土師器 杯	口 12.0 高 5.0 底 4.4 最大 12.9	外底面は1方向の密なヘラミガキ。外面体部はヨコハマナデ後ヨコハマミガキ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコハマミガキ。内面の底部に1方向と体部に横位のヘラミガキ。外面上半と内面を漆仕上げ。残存重量 241.7g。	7.5YR5/6 明赤 やや黄味 白・赤黒粒と白・黒・透明細粒少 やや軟質	底上28~31cmが接合 (FA下) 口1/12周、底全周 1, 3, 一括
6 土師器 杯	口 覆 12.2 高 4.4 底 覆 4.0 最大 13.6	外面体部は明らかな凹面で、弧状のヘラミガキ。外面は体部に斜一横位のヘラケズリ後ヘラミガキ。内外面の口縁部をヨコナデ後ヨコハマミガキ。内面の底部に多方向と体部に横位のヘラミガキ。外面上半と内面を漆仕上げ。	5YR6/6 暗 やや軟質 白・黒・赤・透明細粒 やや軟質	底上36cm (FA下) 口1/4周、体5/12周 底5/6周 10
7 土師器 杯	口 11.8 高 5.2 底 4.5 最大 覆 12.1	外面底部は不明瞭な平底で、平行する線状の圧痕(木炭面の炭層跡)が見える。外面体部はヨコハマナデ後ヨコハマミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコハマミガキ。内面体部はヨコハマミガキと見られるが、磨耗しているのて詳細は不明。内外面の口縁部が暗褐色になるところが少しあり、漆仕上げをしてきたのかもしれない。	5YR5/6 明赤褐 やや黄味 赤黒粒多、白 黒・透明細粒少 やや軟質	底上29cm (FA下) 口1/3周、底1/2周 9, 一括
8 土師器 杯	口 覆 12.8 高 残 5.1	外面体部ヨコハマケズリ。内外面の口縁部をヨコナデ後ヨコハマミガキ。内面体部は上部ヨコハマミガキ、下部放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面全体を漆仕上げ。	10YR5/2 灰青褐 やや黄味 白・透明細粒少 やや軟質	底上27~28cm (FA下) 口1/3周 3, 7, 一括
9 土師器 杯	口 覆 13.2 高 残 3.8 最大 覆 13.5	外面体部はおそらくヨコハマケズリ後に密なヨコハマミガキ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコハマミガキ。内面体部は明瞭と密に平行する不明瞭なヨコハマミガキを呈しているように見られる。	2.5YR5/8 明赤褐 やや黄味 赤黒粒と白・黒・透明細粒 やや軟質	口5/6周
10 土師器 杯	口 覆 17.3 高 残 4.2	焼片がささいので復原性は参考程度。内外面ともに口一全体部に横を付けた。外面体部ヨコハマケズリ後にヨコハマミガキ。内外面の口縁部をヨコナデ後ヨコハマミガキ。内面の体部はヘラナデ(?)後に放射状ヘラミガキ。外面中位以上と内面全体を赤色塗彩する。	10R5/6 赤 細密 白濁と白・黒・透明細粒少 硬質	底上44cm (FA上)。SD540 のC4付足2層上下の1片と接合 口1/12周 底5, SD540-3



- SG1053D-594
- A-A'
- 1 暗褐色 ローム層状少, しまりやや強, 粘性質。
 - 2 黒褐色 ローム層状少, 1層より, 形味が強いので区分した, しまりやや強, 粘性質。一部にローム(径3~3mm)がまぎれて入るが, ロームの混入ほとんどなし, しまりやや弱, 粘性質。
 - 3 暗褐色 ロームと暗褐色土の混合上, しまりやや強, 粘性質。
 - 4 暗褐色 2層と類似, しまりやや強, 粘性質。
 - 5 暗褐色 4層と類似, しまりやや強, 粘性質。
 - 6 暗褐色 4層と類似, 暗褐色土が多いため, 暗く見える, しまりやや強, 粘性質。
 - 7 暗褐色 水成の硬殻層で質, 暗褐色の薄い層が層理し, 平表面にはローム塊が薄く層理している, しまり強, 粘性質。
- B-B'
- 1 褐色 餅作土, しまりやや弱, 粘性質。
 - 2 暗褐色 向面と背中のローム混入が見られるが, ほんだロームの混入なし, しまりやや弱, 粘性質。
 - 3 暗褐色 径2~3mmのロームやや多, 一部に水成硬殻層が見られる, しまりやや強, 粘性質。
 - 4 暗褐色 水成硬殻層, ロームも見られる, 水成層には質, しまり強, 粘性質。
 - 5 暗褐色 3層と類似しているが, シシ位のローム層で3層より, 黄色味が強, しまりやや強, 粘性質。
 - 6 暗褐色 暗褐色土とロームの混合上, しまりやや強, 粘性質。
 - 7 暗褐色 ローム混入の多い層状, しまり強, 粘性質。
 - 8 暗褐色 ロームの混入なし, しまりやや強, 粘性質。
 - 9 暗褐色 ローム混入若干, しまりやや強, 粘性質。



第176図 権現山遺跡 SG10区 SD-594 遺構・遺物

SG10 区 SD-696 (第 177 図右上、写真図版 133)

【位置】SG10 区北部の 23-20 グリッドにあり、東側は調査区外まで伸びる。古墳中期の SD-527 の上部を切る。
 【規模と形状】調査区東端に接する北東部は調査できなかった部分がある。幅 45～74cm、残存する深さは 25～41cm で、底面が東へ傾斜し、底面標高は西端で 80.41m、中央部で 80.31m、調査区東端で 80.18m。

【覆土】自然埋没状の堆積で、古墳後期初頭に降下した Hr-FA の可能性が高い灰白色テフラの粒や塊が覆土各層に認められた。先行する SD-527 の上部にも同種のテフラが見られるので、SD-527 を切る SD-696 に二次流入した可能性がある。また 1 層に白色軽石粒が含まれると記録され、FA 粒とは記載されていないので、縄文草創期の七本桜軽石などが地山から二次的に流入したことが考えられる。

【出土遺物】図示できる遺物はない。出土した土師器は、甕 1 片・16g のみ。

SG10 区 SD-711 (第 177 図中段、写真図版 134)

【位置】SG10 区北部の 23.5-20.0 グリッドにあり、東側は調査区外まで伸びる。縄文時代の SK-697 と、古墳中期の SD-527 の覆土下部を切る。SK-697→SD-527→SD-711 の順序になる。SD-711 と SD-527 の覆土上部は同種の層で埋没している。古墳後期初めの Hr-FA テフラが覆土中位に降下しているため、SD-527 と 711 は古墳中期後葉の溝と推定される。

【規模と形状】中央部は SD-527 を先に掘り下げてしまったので、平面図は東側と西端だけしか図化できていない。溝の西先端がトンネル状に横へ 22cm 掘り進んで終わっていることや、途中まで埋まりかけた SD-527 を横切って掘られている点から見て、SD-711 を東側低地へ降りる通路状遺構と考えることは難しい。西側は幅 10～47cm、東側は幅 37～42cm、残存する深さは西側で 44cm、東側で 29cm (東端部は低地に近いために遺構確認面が低いので、計測値が浅くなる)。底面標高は東側で 80.16～80.25m、西側で 80.22～80.25m。

【覆土】自然埋没状で、SD-711 と SD-527 の覆土上部は同種の層で埋没している(断面図 A-A' の 2 層と 4 層)。古墳後期初めに降下した Hr-FA テフラの塊や粒が中位以上に認められる(断面 A-A' の 4 層以上、断面 B-B' の 3 層以上)。テフラが降下した層準は A-A' の 4 層と考えられる。

【出土遺物】図示できる遺物はない。出土遺物は、土師器高杯 1 片・29g と椀形杯または鉢 1 片・4g の計 2 片・6g のみである。

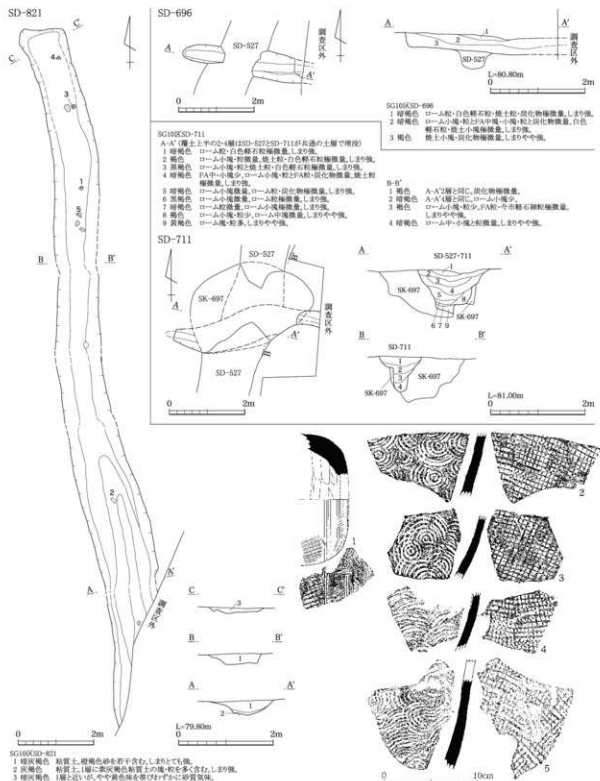
SG10 区 SD-821 (第 177 図、写真図版 134・211)

【位置】SG10 区中央部東半の低地部、19-20 グリッドにあり、南東は調査区外まで伸びる。重複する遺構はない。

【規模と形状】調査区内の長さは 18m 以上。溝幅 99～160cm、残存する深さは 16～20cm で南部でやや深く、北部では浅くなって消滅する。底面が南へ傾斜し、底面標高は南端で 79.24m、北端で 79.40m。

【覆土】砂を含む粘質土で自然埋没状に堆積しており、水成堆積の可能性もある。溝を掘り込んでいる地山も、低地の粘質土層(紫灰褐色粘質土)である。

【出土遺物】I は須恵器瓶類で、提瓶か横瓶、または平底瓶の可能性もある。古墳後期末～終末期の在産須恵器である真格子叩き調整甕の破片は同一個体である(2～5)。図示以外の土師器合計 106・666g の内訳は、杯 57 片・197g、高杯 13 片・96g、壺甕類 36 片・373g。



第 177 図 権現山遺跡 SG10 区 SD-696-711 遺構 SD-821 遺構・遺物

第 105 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-821 出土遺物

発見の種類	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須曲 磁器?	高 残 5.1 底 復 10.1	非常に厚いので、横断の端部や平底部の底部になることも考えられる。木目に直交する平行溝を彫った甲殻で製成が明か。断面には凹溝を空けたかキズ、内面は滑度の深い字デ。端の破損部は底土層閉塞が外れた状態かもしれない。	7.5Y5/2 灰オリーブ 細密、白相・細粒中・少、白 硬質 破片	底土 7cm 底土 16 層 3
2~5 須曲 皿		4 片が同一個体。外面は縦横に溝を彫った甲殻で真格子甲殻。内面は同心円文当具。裏面は灰色になるが、全体としては淡黄色~黄灰色の軟質焼成で、二重底座の可能性もある。	2.5Y8/3 淡黄 N4/O 灰 中・細密 白・透明細粒中・少、黒細粒少 軟質	底土 11~22cm 割部 4 片 1, 2, 4, 6

第9節 古墳時代の井戸

SG10区 SE-552 (第178図、写真図版134)

【位置】SG10区北端部の24-19.5グリッド。古墳中期のSK-553bとSK-553aが西側へ並んで重複し、SK-553bに切られる(SE-552・SK-553a→SK-553bの順)。周辺に井戸跡はない。古墳中期の建物としてはSI-84・86が近接し、SI-115も古墳中期かもしれない。

【規模と形状】断ち割らないで、底面まで手掘りで調査をおこなった。確認面で東西0.92m、南北0.67mの不整五角形で、深さ1.10m。底面標高は79.69m。確認面から南側で深さ0.6～0.7mまでは傾斜をもって断面形が漏斗状に少し細くなり、それ以下は急傾斜で筒状になる。底面は若干鍋底状の平底である。底面は長径38～40cm、短径20cmの楕円形である。

【覆土】古墳時代テフラの可能性のある白色粒子が各層に多い。また縄文草創期の今市軽石粒も地山からわずかに流入している。大半を占める2層は一気に埋まったような暗褐色土で締まりがある。3層にローム塊を含む。地下水位が低い1月下旬にこの遺構を調査したにもかかわらず、2層の下部は水分を含んで軟らかい状態であった。

【性格】遺物は出土しなかった。古墳時代集落内で中期の建物が多いSG10区北端部にあり、古墳時代(中期後葉以後)の土坑であるSK-553bに切られるので、SE-552も古墳時代の遺構と判断した。



第178図 権現山遺跡 SG10区 SE-552 遺構

第10節 古墳時代の円筒形土坑 (第179・180図、写真図版135・136)

栃木・茨城・福島県域で古墳中期～後期にみられる、貯蔵穴と考えられている土坑である。周辺の杉村・立野・磯岡・磯岡北・砂田・中島塚塚遺跡でも確認されている(『東谷・中島地区遺跡群』5～10・13)。

SK-210・216・217・550・551・561・571・621・674の9基が円筒形土坑と考えられ、SG10区の北端部に多い。古墳時代土坑のうちSK-211・553a・553b・600も円筒形土坑と類似した貯蔵用土坑と見られるが、平面が円形でないので円筒形土坑には含めない。SK-211は、円筒形土坑SK-210・216・217とともにSG10区南部にある。SK-553a・553b・600は、SG10区北端部の円筒形土坑群SK-550・551・561・571・621・674と同じ地区にある。各遺構の詳細は下の第106表にまとめた。

遺物が豊富なのはSK-621である。この土坑の底面上31～59cmで出土した須恵器脚付壺は、古墳時代土坑SK-553a(底面上2～11cm)およびSI-83遺構確認面出土破片と遺構間接合した。古墳後期のSI-83にとっては混入品と考えられるが、SK-621とSK-553aは同時期に埋没した可能性もある。類例としてはSG10区SI-23に古墳後期の脚付壺、SI-88に須恵器初現期の有蓋壺がある。SK-621の模倣杯は平底杯が多く(5・7・8)、高杯(13)が短脚化していて、古墳中期末と考えられる。滑石製有孔剥片もある(16)。SK-550の土師器片も中期末葉であろう。他の円筒形土坑も遺物やFAテフラとの関係から考えて古墳中期の可能性が高い。

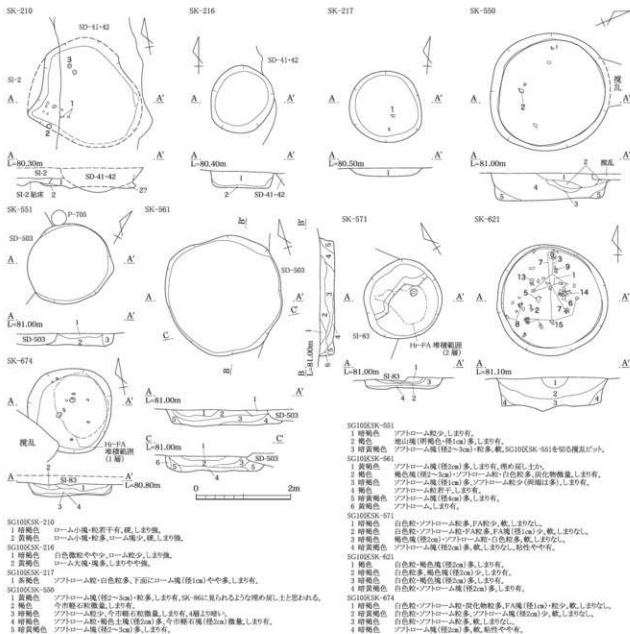
第106表 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の円筒形土坑

遺構名	グリッド	平面形	形状	直径(m)	壁厚(m)	高さ(m)	中軸	遺土
SK-210	170-18.0	円筒形	SK-25D-41・42より古	2.45	2.32	0.52	N90°E	自然埋没

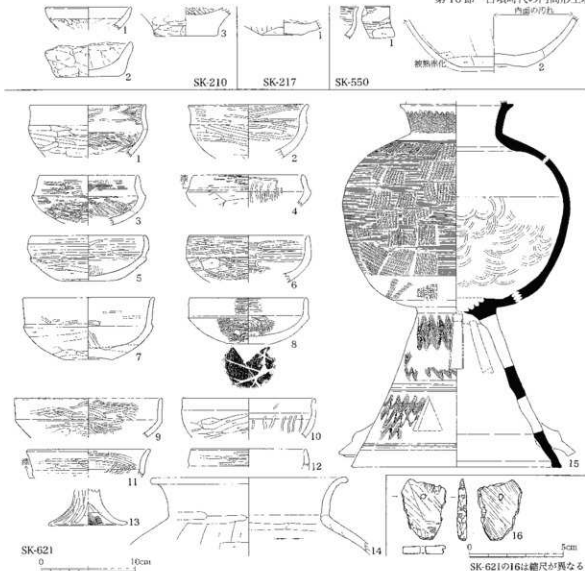
古墳中期のS2と古墳中～後期のSD-41・42に切られる。東壁の下端部がオーバーハングする。南西部で完形の粗製小形土器が土を向いて出土した。遺物は古墳後期のSD-41・42から盗入した疑いもある。

第5章 権現山遺跡 SG10 区

SK-216	17.5-18.0	円筒形	SD-41-42より古	1.44	1.35	0.36	N-40°-E	自然円形	白色粒あり
古墳中～後期のSD-41-42に切られる。図示できる遺物はなし。土器群が・高杯・小形皿・遊樂器の小破片から見て、古墳中期の土坑と推定される。									
SK-217	19.0-17.0	円筒形	重版なし	1.62	1.52	0.20	N-75°-W	半壁	白色粒あり
時期不明の墳上 SK-218 と同一平面上にある。古墳中期の検出層の底部破片が出土。									
SK-550	24.0 19.5-24.0 20.0	円筒形	長方形覆瓦坑と重版	2.70	2.54	0.58	N-40.5°-W	1層は埋め戻し状	
Hr-FA 覆瓦なし。西方にある中間のSK-80と遺構間接合する。土器群が3個あるので、同時に埋没したと見られる。古墳中期後半の土器群材あり。土器群は内に縄文中期土器も数人。									
SK-551	24.0 19.5	円筒形	SD-503-P-705より古	1.84	1.70	0.30	N-66°-E		
近郊のSD-503に切られる。時期不明のP-705にわずかに切られる。遺構が円筒形であることから時期を古墳時代と推定した。遺物は土器群遊樂器の小破片3点だけ出土。									
SK-561	24.0 19.5	円筒形	SD-503より古	2.63	2.53	0.38	N-58°-W	1層は埋め戻し状	白色粒あり
近郊のSD-503に切られる。壁が内傾する大きな円形土坑。大きさはSK-550や621に近く、これらの円筒形土坑と近き時期かと見られるので古墳時代と推定した。遺物は土器群遊樂器4片しななし。									
SK-571	23.5-19.5	円筒形	SK-83より古	1.70	1.67	0.26	N-41°-E	自然円形	FA覆と白色粒あり
古墳前期のSK-83に切られる。4層以上の覆瓦にHr-FAテフラの塊と粒が入る。2層にFAが集中するので古墳中期後半～末の遺構。遺物は土器群土器2片だけで時期不詳。縄文土器も2片出土。									
SK-621	24.0 19.0	円筒形	重版なし	2.40	2.33	0.73	N-49°-W	自然円形	白色粒あり
重版なし。土器群材がSK-552a北1層と遺構間接合。SK-553aと同一楕圓体の前遺構群(伴)出土。遺物が多く、内径1.6mの直立1層の土器群材が主体で、鉢・遊樂器もある。									
SK-674	23.5-19.5-24.0 19.5	円筒形	SK-83より古	1.90	1.68	0.30	N-52°-W		
古墳前期のSK-83の床下であり、SK-83に上部を切られる。古墳中期のSK-115と重版するが前後関係は不明。覆瓦の上部にHr-FAテフラ層が入るので古墳中期後半～末の遺構。遺物は土器群遊樂器の破片が少く見だしななし。他に縄文土器4片あり。									



第 179 図 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の円筒形土坑 (1) 遺構



第180図 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の円筒形土坑(2) 遺物

第107表 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の円筒形土坑 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ cm・g	特 徴	色調 胎土・施成 (または素材)	出土状態 埋存状態 注記
SG10区 SK-210				
1 土師器 小皿土器	口 径9.2 高 残2.4	外面に粘土の繕み上げ痕を残し、外面体部ナデ後に口縁部内外面ヨコナデ。	7.5YR5/4 に近い明 やや磁質 赤黒粒と白・黒・ 透明細粒やや多 やや軟質	底直上～底上3cmが接合 口5/12周 3, 4, Bベルト
2 土師器 小皿土器	口 8.2～ 9.1 高 3.6 底 6.9	繕みを行った後合面が見えないので、手捏ねで成形した可能性もある。外底面は丁寧ナデ、外面体部は雑ナデ。内面は横～斜位の雑なヘラナデと上部に軽いナデ。最大径9.3cm、重厚151.7g。	7.5YR5/4 に近い明 やや磁質 白・透明細粒やや 多、赤・黒細粒少 やや軟質	底上3cm 完全形
3 土師器 鉢	高 残3.0 底 6.8	円板状に突出する厚く垂い平底で、底面はおおよそ1方向のヘラズリ。外面ヨコヘラズリ、内面底面はおおよそ1方向の滑なヘラミガキ。	10YR8/4 淺黄緑 磁質 白・黒・赤細粒少 やや軟質	北底直上15cm 底完全形
SG10区 SK-217				
1 土師器 鉢	高 残1.6 底 4.6	外底面は多方向ヘラズリで滑い上げ底球。外面体部下端にタテおよびナデヘラズリ。内面底面は多方向ヘラナデ。	7.5YR6/4 に近い明 やや磁質 赤・黒粒～細粒中 やや多、白・透明細粒～細粒少 やや軟質	中央底上5cm 底3/4周 1
SG10区 SK-550				
1 土師器 鉢	口 径11～13 高 残3.4	口～体部端に縦を持たないで外反する。外面は口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、体部ヨコヘラズリ後に上唇をヨコヘラミガキ。内面はヨコナデ後に口縁部ヨコヘラミガキ。 [注記] SK-550 2・3割、西半分下平、S180 南東区	7.5YR6/6 暗 磁質 赤黒粒と白・黒・赤細 粒少 やや軟質	西半下部の4片と2・3 割の1片、S180 南東区 の1片も同個体 口1/6周 注記は左欄
2 土師器 甕	高 残5.4 底 6.7	外底面は中央を深く開いて凹底状にし、外周を円周方向のヘラズリ。外面胴部はむせらぐタテヘラナデと下底面ヨコヘラズリ。内面胴部は不明瞭でむせらぐヨコヘラナデ。外面全体が焼熱赤化し、内面全体に暗褐色の汚れが付着する。	7.5YR5/4 に近い明 やや磁質 白・透明細粒～細粒 多、白粒と赤・黒粒～細粒少 やや軟質	底上35cm 底3/4周 SK-550 1, 4割、西半 分、西半分下平、東半 分、トレンチ

第5章 権現山遺跡 SG10区

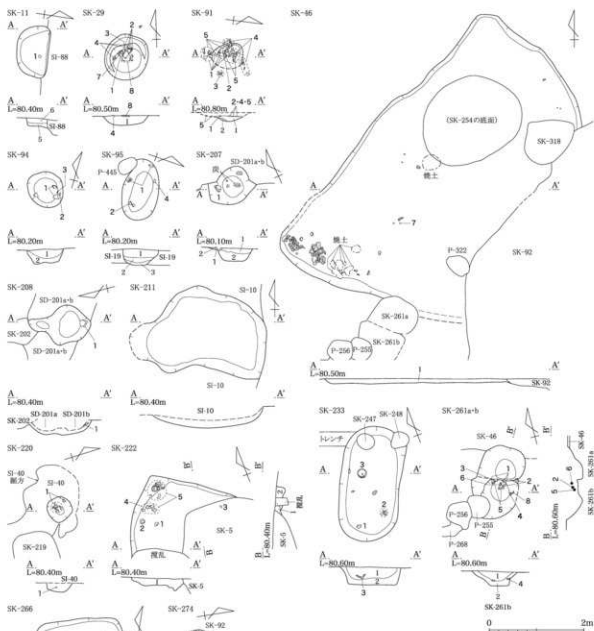
SG10区SK621

1 土師器 鉢	口 葺 12.4 高 残 5.5 最大 葺 12.8	外面は体部にナデと下位ヨコヘラズリ後にヨコヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、内面は体部にナデと口縁部にヨコナデ後、全体に横～斜位ヘラミガキ。	5YR4/6 赤黒 やや磁質 赤黒粒と白顔粒少 やや破質	底上 23 ~ 43cm と北平 2層の1片が接合 口1.3cm 11、26、北平2層
2 土師器 杯	口 葺 12.4 高 残 5.7	外面は体部ヨコヘラズリ後にヘラミガキ、内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ、内面は体部ヨコヘラズリ後にヨコヘラミガキ。	5YR5/6 明赤黒 やや磁質 赤黒粒と白・黒・ 赤顔粒少 破質	底上 24cm 口1.6cm 28、サブトレー一括
3 土師器 高 残 5.3 最大 葺 12.0	口 葺 10.5 高 残 5.3 最大 葺 12.0	内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。外面は体部ヨコヘラズリ後にヨコヘラミガキ、内面は体部にナデまたはヘラズリ後、体部に横～斜位と断面に多方向ヘラミガキ。	10YR5/6 黄黒 やや磁質 白顔～顔粒やや多 量・透明顔粒少 やや破質	底上 1 ~ 51cm、北平2 層と上層残片が接合 口1.2cm、体2/3層 注記は左欄
4 土師器 杯	口 葺 11.6 高 残 3.4 最大 葺 13.2	外面体部ヨコヘラズリ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は体部タテヘラミガキ、口縁部ヨコナデ後に横および斜位のヘラミガキ。外面口縁部と内面に盛り上げをしている可能性が高い。	7.5YR7/6 橙 やや磁質 白顔～顔粒やや多 灰黄色と赤黒粒と黒・透明顔 粒少 やや破質	北平2層 口1.6cm 北平2層
5 土師器 杯	口 葺 12.0 高 残 4.8 最大 葺 12.0	外底面は1方向ヘラズリで平坦に近く仕上げ。外面体部ヨコヘラズリ後にヨコヘラミガキ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は底面に1方向と体部に横位のヘラミガキ。	7.5YR5/6 明赤 顔粒 白・透明顔粒～顔粒やや 少、黒・赤顔粒少 やや破質	底上 58cm 口1.6cm、体5/12層 27
6 土師器 杯	口 葺 12.6 高 残 5.0 最大 葺 13.2	外面の口～体部端に明瞭だが浅い段あり。外面体部はヨコヘラズリ後にヨコヘラミガキ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面の体部はヨコヘラミガキ後上位ヨコヘラミガキ。	10YR7/4 赤い黄橙 やや磁質 赤黒～顔粒やや多 量～顔粒と黒・透明顔粒少 やや破質	底上 30cm 口1.5cm 15
7 土師器 杯	口 葺 14.0 高 残 6.5 底 5.2	口縁部が薄く、口～体部境の外面に明瞭な段がある。外底面は1方向ヘラズリで平坦。外面体部ヨコヘラズリ、内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面の体部をヘラズリし、底面に多方向と体部に斜位のヘラミガキ。後面面に入った割線・破線が顕著。内外面の口縁部に盛り上げをしているかもしれないが不確実。	10YR6/6 明黄黒 やや磁質 赤黒～顔粒多、白 顔粒と黒・透明顔粒少 やや破質	底上 9 ~ 47cm、北平2 層と上層残片の1片が 接合 口1.7cm、底2/3層 注記は左欄
8 土師器 杯	口 葺 12.4 高 残 4.9 底 4.6 最大 葺 12.8	外面の口～体部端に明瞭だが浅い段あり。外底面は本底面で、カシワまたはトナリの表面に粗。外面体部ヨコヘラズリ後に茶色横～斜位ヘラミガキ。内外面の口縁部はヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部に多方向のタテヘラミガキ。	5YR6/6 橙 やや磁質 赤黒～顔粒やや多 量～顔粒と黒・透明顔粒少 やや破質	底上 32 ~ 57cm 口1.14cm、底3/4層 6、31、2-3層部分、 南平、上の焼見、サブ トレー一括
9 土師器 杯	口 葺 15.5 高 残 4.2 底 4.6 最大 葺 15.7	外面の口～体部端にわずかな段あり。外面体部ヨコヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は体部にナデまたはヘラズリ後にヨコヘラミガキ。	2.5YR6/8 橙 顔粒 白顔粒やや少、赤黒～ 顔粒と黒・透明顔粒少 破質	底上 25cm 口1.2cm 19
10 土師器 杯	口 葺 14.0 高 残 4.2	外面の口～体部端に弱く緩やかな段あり。内外面の口縁部にヨコナデ。外面体部ヨコヘラズリ。内面体部はナデまたはヘラズリ後に載らなタテヘラミガキ。	5YR6/8 橙 顔粒 赤黒と白・黒・透明 顔粒少 やや破質	北平2層 口1.6cm 北平2層
11 土師器 杯	口 葺 12.8 高 残 3.0	外面は体部ヨコヘラズリ、内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面は体部ナデまたはヘラズリ。残存する内外面に盛り上げ。	5YR3/3 暗赤黒 顔粒 赤黒～顔粒と白・黒・ 透明顔粒少 やや破質	北平2層2 ~ 3層が接合 口1.6cm 北平2層、北平3層
12 土師器 杯	口 葺 12.0 高 残 1.9	口縁部ヨコナデ後ヨコヘラミガキ。ただし内面のミガキは無無不明。	5YR5/6 明赤黒 やや磁質 黒顔粒やや少、白・ 赤・透明顔粒少 やや破質	北平1層とSK-553aの 各1片が接合 口1.8cm 北平1層、SK-553A
13 土師器 高 残 3.3 最大 葺 22.0	口 葺 20.9 高 残 8.3	外面は頸部にヨコナデと頸部タテヘラズリ後にタテヘラミガキ。内面は頸部下ナメハケ後に腹面ヨコナデ。	5YR6/6 橙 顔粒 白・赤顔粒少 やや破質	底上 49cm 脚板11/12層 25、サブトレ 一括
14 土師器 高 残 3.3 最大 葺 22.0	口 葺 20.9 高 残 8.3	外面は頸部に縦位のヘラズリおよびヘラズリ後、部分的にヨコヘラズリ。内面は頸部にヨコヘラズリ。内外面の口～頸部にヨコナデ。外面に少量の段が付き。	7.5YR4/3 暗 やや磁質 透明顔粒～顔粒多、 白顔粒と赤・黒顔粒少 やや破質	底上 31 ~ 32cmが接合 口1.14cm、底5/12層 13、33
15 土師器 高 残 38.8 最大 葺 24.0	口 葺 20.9 高 残 8.3	外面は頸部に16個以上の段状文。頸部に履帯子印き後、カキメと底付近を同様にヨコナデ。脚板は2本1組の低い突脚で上部・下部・腹面に区分して、上部と下部に16個以上の段状文を2周または3周誇らす。脚の透窓は3方向の半円状で上段が長方形、中段が三角形。内面は頸部と胴の文と当鼠の彫にかなりナデが施している。内面脚板はロケロケ。外面全体と内面底面に暗緑色の自然釉が多い。釉の状況から見て焼成時に蓋を被せていない。破面は赤灰色。	N6/10 灰 顔粒 黒色赤出粒多、白顔粒～ 顔粒やや少 破質	底上 31 ~ 50cm、SK- 553aの3片(底上2 ~ 11cm)とSI-83上面の1 片も接合 厚1.6cm、肩5/12層、 脚板1/24層 注記は左欄
16 土師器 高 残 3.27 最大 葺 2.31 厚 0.51 底 5.44	口 葺 20.9 高 残 8.3	外面は2-3方向、対面は1方向に粗く研削した磨面を残す。断面は全周で工具で磨き切った痕が顕著および切刃痕跡状になっている。研削はしていない。左面の面から穿孔し、初孔径2.37mm、終孔径2.19mm。	5Y7/1 灰白 顔粒 軟質赤滑石片質	南平2層と 底平 南平2層

第11節 古墳時代の土坑 (第181 ~ 187図、写真図版137 ~ 141・211・212)

SG10区における古墳時代の土坑は46基を確認した。この他に古墳時代の円筒形土坑が9基ある。各遺構の詳細は下記の表にまとめた。SK-553a・553bとSK-600は平面形が方形、SK-211は平面形が不整形で、平坦な底面と垂直な壁面を持つ点で円筒形土坑と類似した貯蔵用土坑と見られる。

SK-46の7のような古墳中期の滑石製有孔円板は、SG10区SI-64aなどに出土例がある。SK-94の3は群馬・埼玉県域に見られる土師器杯である。SK-261bにある貼付口縁の鉢(5)は、SG10区SI-25に類例がある。SK-292で出土した須恵器器台の杯部破片(3)は、東方のSI-111やSD-41・42などに同一個体の破片があり、SI-111の第146図で復原図を示した。SK-346の小形壺(4)は、藁を敷いて焼成した痕跡が外底面にあるので、



SG10KSK-11 (1)→4層は植遺物のため省略)

- 5 黄褐色 ロームに火山灰混入の黄褐色土と暗褐色土が混じり、しまりなし、粘性有。
6 暗褐色 粘の小さいローム混入、しまりなし、粘性有。

SG10KSK-29

- 1 暗褐色 ソフトローム粘・白粘と下面にソフトローム塊(厚1cm)多、しまり有。

SG10KSK-96

- 1 暗褐色 炭状の薄褐色土塊多、ローム粒少、硬。

SG10KSK-91

- 1 暗褐色 白色粘・堆山褐色土塊(厚1cm)少、軟。
2 暗褐色 白色粘・堆山褐色土塊(厚1cm)多、軟。

SG10KSK-94

- 1 黒色 粘土小塊微量、ローム粘・炭化物微量、しまり強。
2 黒褐色 ローム小塊・炭微量、しまりやや中強。

SG10KSK-95

- 1 黒色 粘土小塊微量、ローム小塊・粘と炭化物微量、しまり強。

SG10KSK-207

- 1 暗褐色 ローム粘・炭化物微量、ローム小塊微量、しまりやや中強。
2 暗褐色 ローム粘・炭化物微量、粘土小塊・炭化物微量、しまりやや中強。

SG10KSK-222

- 1 暗褐色 炭化物・炭粒やや多、ローム小塊・粘若干、しまりやや中強。
2 暗褐色 ローム小塊・塊多、ローム大塊少、しまりやや中強。

SG10KSK-233

- 1 暗褐色 白色粘多、ソフトローム塊(厚1cm)少、しまりなし。
2 暗褐色 ソフトローム塊(厚1cm)粒多、軟、粘性有。

SG10KSK-261b

- 1 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、しまりやや中強。
2 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、しまりやや中強。
3 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、しまりやや中強。
4 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、しまりやや中強。

SG10KSK-274

- 1 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。
2 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。
3 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。
4 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。

SG10KSK-224

- 1 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。
2 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。
3 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。
4 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。

SG10KSK-224

- 1 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。
2 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。
3 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。
4 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。

SG10KSK-224

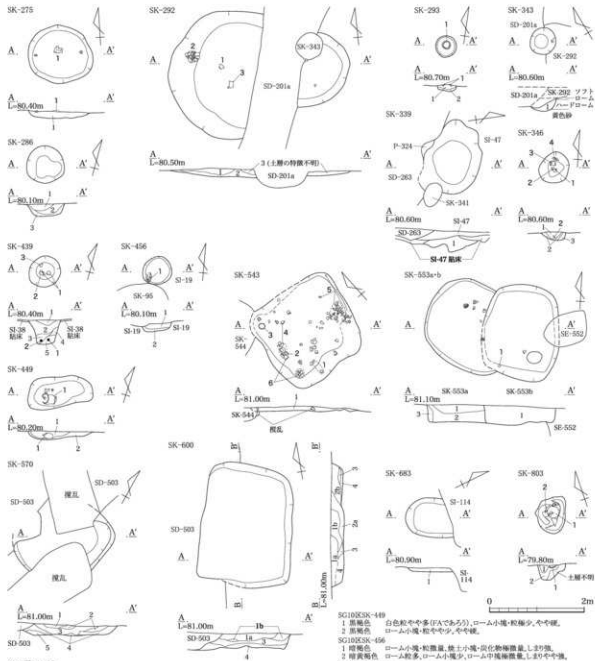
- 1 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。
2 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。
3 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。
4 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。

SG10KSK-224

- 1 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。
2 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。
3 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。
4 暗褐色 ローム粘・粘と炭化物微量、白色粘は見られない。

第181図 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑(1) 2構

第5章 権現山遺跡 SG10区



- SG10SK-275
1 埴輪色 ローム粒多、ローム塊・小塊少、七本板石小塊極少、硬。
- SG10SK-286
1 黒褐色 ローム小塊・粒少量、炭化物極微量、しまり硬。
2 埴輪色 ローム粒少、ローム小塊微量、しまり硬。
3 褐色 ローム粒多、ローム小塊少、しまり中硬。
- SG10SK-292
1 埴輪褐色 暗褐色土多、ローム塊・小塊や中多、ローム粒少、や中硬。
2 褐色 ローム粒微量、しまり硬。
- SG10SK-293
1 埴輪色 黒山(褐色)の塊(径)1cm多、白色粒少、軟、しまりなし。
白色粒少、黒山塊の径(厚)1cm以下、しまりなし。
- SG10SK-339
1 埴輪褐色 暗褐色土多、ローム塊・小塊や中多、ローム粒少、や中硬。
2 褐色 1~1.5cmのローム粒少、角質でよくしまる、や中硬。
- SG10SK-343
1 黒褐色 黒山(褐色)の塊(径)1cm多、白色粒少、軟、しまりなし。
白色粒少、黒山塊の径(厚)1cm以下、しまりなし。
- SG10SK-346
1 黒褐色 今右様石粒極少、しまり有。
2 黒褐色 ソフトローム粒多、しまり有。
3 褐色 ソフトロームと黒褐色土の混合、基本はソフトロームと思われ。
- SG10SK-439
1 黒褐色 ローム粒・炭化物極微量、しまり硬。
2 埴輪色 ローム小塊・粒少、炭土小塊・炭化物極微量、しまり硬。
3 埴輪色 ローム小塊・粒少量、炭化物極微量、しまり中硬。
4 褐色 ローム粒多、ローム小塊少、しまりや中硬。
5 埴輪褐色 ローム小塊・粒多、しまりや中硬。

- SG10SK-449
1 黒褐色 白色粒や中多(径2~3cm)、ローム小塊・粒極少、や中硬。
2 黒褐色 ローム小塊・粒や中少、や中硬。
- SG10SK-456
1 埴輪色 ローム塊・粒少量、炭土小塊・炭化物極微量、しまり硬。
2 埴輪色 ローム粒多、ソフトローム塊(径1~3cm)少、しまり有。
3 埴輪褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)多、FA粒極微量、しまり有。
- SG10SK-543
1 埴輪褐色 ローム粒極微量。
- SG10SK-553a
1 埴輪色 白色粒・褐色塊(径2~3cm)多、しまり有。
2 埴輪色 白色粒多、褐色塊(径1cm)少、しまり有。
3 埴輪褐色 白色粒多、ソフトローム塊(径1~3cm)少、しまり有。
4 埴輪褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)多、FA粒極微量(4層以下)少、しまり有。
- SG10SK-553b
1a 埴輪色 ソフトローム塊(径3~4cm)少、ソフトローム塊(径2~3cm)しまり有。
1b 埴輪褐色 ハードローム粒・ソフトローム粒(径2~3cm)少。
2a 黒褐色 ソフトローム粒少、硬。
2b 黒褐色 ソフトローム粒多、今右様石粒微量、硬。
3 黒褐色 FA塊(径1cm)・ソフトローム粒少、今右様石粒微量、硬。
4 埴輪褐色 ソフトローム塊(径2~3cm)多、軟。
- SG10SK-553c
1 黒褐色 ローム粒微量、ローム小塊・粒土粒極微量、しまり硬。
- SG10SK-603
1 埴輪褐色 ソフトローム粒下平に少、硬。
2 茶褐色 ソフトローム塊(径1~2cm)少、軟。

第182図 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑(2) 遺構

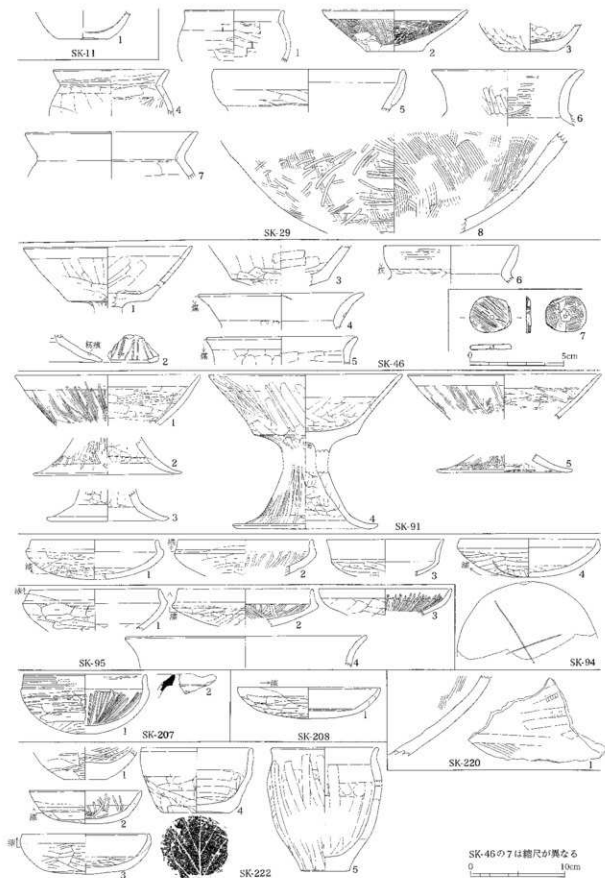
第5章 権現山遺跡 SG10 区

SK-208	16.5-17.0	不整形	SK-208→SD-201a+b→SK-202	1.33	0.82	0.62	N54°E	土層の特徴不明
近所のSD-201a+b、前期不明のSK-202との土層断面はないが、SD-201a+bとSK-202に切り入れられる可能性が高い。古墳時代の土層の大部分あり。								
SK-211	18.0-17.5-18.5-17.5	不整形	SK-88→SK-211→S10	2.70	1.82	0.54	N76°W	土層の特徴不明
古墳中期のSK-88を切り、古墳期のS10に上部を切り下り下が浅い。平面形状はS10の延長とほぼ同様の形状をとり、SK-211を覆う下り下した。S10と接合する土層部分があるとの、これら土層の出入でなければ、S10をSK-211が切っていた可能性もある。SK-211の時期を示す遺物は無い。写真はSK-10-88を参照。								
SK-220	19.0-17.5	円形	S10より古	0.56	0.53	0.16		土層の特徴不明
古墳中期のSK-40内であり、上部をSK-40に切り入れ、SK-40の形成と覆土中に古墳中期の土層部分が多く重なるのは、SK-220から掘入れたものを含むと考えられる。SK-220の周囲でSK-40の範囲が不明確に広がっている。SK-220の一部がかもしれない。								
SK-222	18.0-18.0	方形	SK-6より古	2.54	1.40	0.25		
底面があまり平坦でない。掘戻りおよび不明のSK-5に切り入れ。遺物がやや多く、柱・跡ばかりで遺構がない。古墳後期末に内側1層が出現する例。								
SK-233	20.0-17.5	楕円形	P-247+248より古	2.45	1.26	0.38	N41°E	自然埋没状況 白色土あり
時期不明のP-247+248に切り入れ。古墳中期後半の高塚上土。巻物もあるが小範囲しかない。								
SK-261a	19.5-17.5	不整形方形	SK-46より新?	0.71	0.91	0.49	N48°E	
SK-261bと同時存在の可能性もあり。古墳中期のSK-46を切る可能性が高い。北側の深い部分をSK-261aとする。								
SK-261b	19.5-17.5	不整形方形	P-255より古	1.00	0.82	0.37	N48°E	
SK-261aと同時存在の可能性もあり。時期不明のP-255に切り入れ。南部の浅い部分をSK-261bとする。遺物が多い。古墳中期中央の土層部分あり。中～近所のSD-263 出土層の断面に接合する。小範囲も出している。								
SK-266	19.5-18.0	長方形	SK-62より新	2.04	1.40	0.24	N62°W	自然埋没状況 戻灰あり
重なりなし。古墳中期後半の土層部群あり。								
SK-274	19.5-17.5-19.5-18.0	楕円形	SK-62より古	0.73	0.60	0.30	N70°W	自然埋没状況 白灰なし
中身のSK-92に土面が削られていた可能性がある。古墳中期後半の残存層が上部土層部分に。他に小範囲の小型土器・漆・鉄・銅製物が13点あり。								
SK-275	19.5-18.0	楕円形	重なりなし	1.40	1.22	0.17	N77°W	中層
遺物は古墳後期または終末期と見られる須賀郡産の土器片1点だけが出土。他に埋没物あり。								
SK-286	18.0-16.5	円形	S10より古	0.81	0.78	0.48	N55°E	戻灰あり
古墳後期のSK-20跡下で確認。S10に切り入れ。古墳時代以前の可能性がある。								
SK-292	18.0-17.0-18.0-17.5	不整形	SK-343→SK-292→SD-201a	3.86	2.70	0.14	N82°E	白色土あり
近所のSD-201a+cに切り入れ。SK-343を切るものとも見られる。ただし、SK-343がSK-292の下に埋蔵されていた可能性もある。底面の中央が低く、外周部が高い。出土層は断面図表向きに瓦片と判断したため特徴が認識されていないが、遺構全体を覆った土層部分と東平土層部分と見られていることが判明。								
SK-293	21.5-15.0	円形	重なりなし	0.48	0.45	0.15		自然埋没状況 白色土あり
古墳中期に見られる土層部群の南した1層部が被土層中に入れられている。前部部も少しあり。製型以外は確認できず土層部分のみ不明。								
SK-339	19.5-17.5	不整形円形	SK-47/SK-341/SD-263/P-324より古	1.58	1.20	0.38	N74°W	自然埋没状況?
古墳後期のSK-47、中～近所のSD-263、時期不明のSK-341/P-324に切り入れ。古墳後期のSK-47よりも古いことから、古墳時代土層と考えた。遺物は出土しなかった。								
SK-343	18.0-17.5	円形	SK-343→SK-292→SD-201a	0.58	0.53	0.27		中層
SD-201aに切り入れ。古墳時代のSK-292に切り入れられるものも見られる。ただし、SK-343がSK-292の下に埋蔵された可能性もある。遺物は土層部群の断面1片だけ。								
SK-346	18.0-16.5	円形	重なりなし	0.67	0.60	0.19		自然埋没状況
円形土器。遺物は少ないが、開示した他に体の上部や中部の土器片があり、大きめの破片が少し見られる。土層群は古墳中期後半の浅くなくなった内側1層が見られる。								
SK-439	19.5-16.5	円形	S138と同時期か少し以降	0.72	0.65	0.53		自然埋没状況 戻灰あり
古墳中期のSK-138内にある。遺物はSK-138より少し古く見られる。SK-138の周縁に覆われているので、SK-138と同時期か少し新しい。調査時にSK-138の破滅の可能性も考えられている。浅く埋没。								
SK-449	17.0-18.0	不整形	重なりなし	1.40	0.64	0.20	N59°E	自然埋没状況 白灰やや多
西平土層にHe-FAと見られる白色土あり。西平土層の底面より少し浮いたレベルに土層部群の土層部分が入っている。								
SK-456	17.5-16.5	円形	S119aより新	0.66	0.60	0.18		自然埋没状況 戻灰あり
古墳中期のS119a+b内であり、S119aを切る。古墳中期のSK-95と近接する。下部は円形だが上部の形状は少し方形化している。出土した様から見て古墳中期後半。								
SK-543	22.0-19.0	不整形方形	SK-544より新	1.98	1.94	0.12	N60°E	
現地調査時は、外平時代のSK-544に切り入れると考えられていた。ごく浅い土坑で、覆土の土層に土層部の大・小破片が多い。土層部群と考えるとすることもできる。古墳中期後半の群の小部群を含む。								
SK-553a	24.0-19.0-24.0-19.5	楕円方形	SK-553bより古	現200	1.80	0.36	N5°S	自然埋没状況 白色土あり
古墳中期のSK-553bに切り入れ。覆土方形。断面形状は円形土層と似ている。古墳時代の円形土層 SK-621と同一体の須賀郡産土器あり。土層群が古墳時代の円形土層 SK-621と連続関係。縄文中期土層も最大あり。								
SK-553b	24.5-19.5	楕円方形	SK-553a/SE-552より新	1.99	1.68	0.42	N5°W	中層 白色土あり
古墳中期のSK-553a/SE-552を切る。覆土方形。断面形状は円形土層と似ている。古墳中期後半以降。彩色の粘土の粗製土層と巻物群が9片出土。縄文中期の加賀利E式も出土。								
SK-570	23.5-19.5	楕円方形	SK-503より古	2.92	2.35	0.38	N58°W	自然埋没状況 白色土多
He-FAテラコッタあり。近所のSD-503と近代改修の農業関連土層2層(イネ5、期地調査時名称S-546+547)に切り入れ。土層部群は3片と縄文中層2片出土。								
SK-600	23.5-19.5-24.0-19.5	方形	SK-503より古	2.60	1.96	0.38	N11°E	自然埋没状況 白粉テラコッタあり
近所のSD-503に切り入れ。He-FAテラコッタが中に入る。方形土層だが、円形土層と断面が深く似ている。古墳中期の平塚区外村区民団地高塚の巻物と巻物群が少し出土。								
SK-683	23.0-19.0	不整形	SK-114より古	0.92	0.83	0.08	N17°E	中層 土層あり
古墳中期のSK-114に切り入れ。遺物は土層群1片だけ。写真で見ると古墳時代の円形土層にやや類似している。								
SK-801	17.5-18.5-17.5-19.0	不明	重なりなし	不明	不明	不明	不明	不明
現地調査にあつたが、遺構確認の作業時に掘削したので遺構の形は不明。浅い土坑だったと考えられる。遺物は折り畳み・枚分の糞・高・杯・形、赤い。18.0-19.0から南4.6mの所で、SK-803と804の中間。SK-803と接合する遺物があるので、同時に埋没した土坑か、またはSK-803の東平土層の埋没の切り取りと考えられる。								
SK-803	17.5-18.5-17.5-19.0	不整形	重なりなし	0.82	0.63	0.33	N20°E	自然埋没状況
現地調査に所在。一段掘り込み。詳細調査上、SK-801と接合する遺物があるので、同時に埋没したと考えられる。								
SK-819	17.0-19.5	楕円形	SK-818と重なり	1.26	1.00	0.30	N26°E	自然埋没状況 白色土あり
現地調査に所在。時期不明のSD-818と重なりするが詳細不明。SK-820aまたはbと接合する遺物があるので、同時に埋没したと考えられる。								
SK-820a	17.0-19.5	楕円形	SK-820bより新	1.68	現1.38	0.42	N62°E	自然埋没状況 白色土あり
現地調査に所在。SK-820bの北西面を切る。SK-819を参照。								
SK-820b	17.0-19.5	楕円形	SK-820aより古	現1.82	1.38	0.44	N12°W	自然埋没状況 白色土あり
現地調査に所在。SK-820aに切り入れ。SK-819を参照。								
SK-901	19.5-20.0	不明	重なりなし	0.45	0.41	0.37		白色土あり
現地調査。遺物堆積土層にある小土坑。土坑の上を覆う1層は、SK-902、Fトレンチ、Bトレンチの1層と連続する層でFA粒が多い。								
SK-902	20.0-20.0	楕円形	重なりなし	0.75	0.58	0.27	N23°W	白色土あり
現地調査。遺物堆積土層にある。土坑の上を覆う1層は、SK-901、Fトレンチ、Bトレンチの1層と連続する層でFA粒が多い。								
SK-903	20.0-20.0	楕円形	SK-904と重なり	0.85	0.65	0.16	N26°E	白色土あり
現地調査。遺物堆積土層にある。SK-904と重なり。中層以降は重なりなし。古墳中期後半の土層部群が非常に多く、埋没の白灰土層と接合する物が見立つ。								

SK-904	20.0-20.0	円形	SK-903と重複?	0.94	0.83	0.20	白色灰あり
東側低地、遺物集中部存在。底面が横断面の小坑。SK-903の項目を参照。古墳中期後葉～末期の上層部。高杯形片あり。提示した以外にやや浅めの内径1層片も2片ある。							
SK-906	20.0-20.0	円形	重複なし	径0.33	0.28	0.28	白色灰あり
東側低地、遺物集中部存在。ビット状だが、遺物集中部としてまとまりを構成する遺構の一つで、柱穴とも限定できないため。土坑として扱う。遺物は上層部黒燐灰5片と高杯形5片あり、古墳中期と見られる。							
SK-908	20.0-20.0	楕円形	重複なし	1.40	0.60	0.32	N60°-W 単層 白色灰あり
東側低地、遺物集中部存在。プランは不明確で、土坑と認定するが透さうな浅い坑のみ。遺物は上層部4片のみで、上層の上層部と上部がほとんど見えない。							
SK-909	19.5-20.0	楕円形	重複なし	0.52	0.35	0.24	N15°-W 白色灰あり
東側低地、遺物集中部存在。楕円形の小さい土坑で、断面の中央が少し高い。平面図を作成した遺構線図が低いので、断面図よりも平面図のほうが一回り小さく図化されている。遺物は出土しなかった。							
SK-910	20.0-20.0	円形	重複なし	径0.53	径0.45	0.50	
東側低地、遺物集中部存在。ビット状だが、遺物集中部としてまとまりを構成する遺構の一つで、柱穴とも限定できないため。土坑として扱う。遺物は出土しなかった。							
SK-911	19.5-17.5	楕円形	SK-28より新	0.86	0.73	0.25	N70°-W
古墳中期のSK-28内にあたり、その入口付近とされた遺構。SK-28を切るかと考えられたので整理作業時にSK-911の名称を与えた。遺物は柱穴1点あり古墳中期末。							

第109表 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ [cm] 径	特 徴	色調 胎土・構成 物(または素材)	出土状態 残存状態 注記
SG10区 SK-11				
1 土師器 鉢	高 残3.1 底 5.1	外底面は丸味を持ち、弱い上げ底状で多方向ヘラナデ。外面体部ナデ。内面体～底部はナデまたはヘラナデで、断面が鋭く剥離しているため詳細不明。	7.5YR5/4 に近い黄 や中黄褐色 白・黒・赤・透明 細粒～細粒少 やや軟質	中央底上14cm 底1/2層1
SG10区 SK-29				
1 土師器 杯	口 径 10.5 高 残5.5 最大 復11.9	口～体縁部は外面でほとんどなく、内面ではやや明確。外面体部ヨコヘラナデ。内面体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面に少量の靨が付着している。	10YR6/3 に近い黄褐色 や中黄褐色 白・赤・灰色細 粒口1/2層、底全層 細粒やや多、黒・透明細粒 少 やや軟質	中央底上3cm 口1/6層 10
2 土師器 杯	口 径 15.4 高 残4.3 底 6.0	外底面は1段さなデ。外面体部タテハケと下層ナデ。内面全体に多方向のハケ。内外面ともにハケは浅く不明確。内外面の口縁部にヨコナデ。	7.5YR7/6 褐色 や中黄褐色 白・赤・灰色細 粒少 やや軟質	中央底上1～3cmが埋 口1/2層、底全層 10, 14
3 土師器 杯	高 残3.0 底 5.4	外底面はナデ後に1～2方向の軽いズリで、少し上げ底状。外面体部に斜位と横位のナデ。内面はやや強い多方向のヘラナデ。	10YR8/4 浅黄褐色 や中黄褐色 白・赤・透明細 粒少 やや軟質	中央底上10cm 底5/6層 2
4 土師器 小鉢	口 径 12.2 高 残4.9 最大 復13.2	薄く軽い。外面は側部ナメナデと中心ヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデと斜位ナデ。内面は側部ヨコヘラナデ後に少しヘラミナデ。口縁部ヨコナデに軽いヨコヘラミナデ。靨や剝離使用痕は見られない。	7.5YR6/4 に近い黄 や中黄褐色 白・赤・透明細 粒少 やや軟質	西部底上19cmと中央底 上1cmが埋合 口1/6層 4, 14
5 土師器 大形壺	口 径 20.6 高 残4.5	外面側部ナデ後、口縁部外面に粘土帯を張り付けて下ナメナデ。上半ヨコナデ。内面はヨコナデと見られるが、断面が鋭く剥離しているので詳細不明。	7.5YR5/4 に近い黄 や中黄褐色 白・黒・赤・透明 細粒少 やや軟質	遺構線図 口1/8層 1 990609
6 土師器 壺	口 径 16.2 高 残6.0	残存する円筒がわずかなので、复原図は参考値。外面は側部ナメヘラナデ。口～側部ヨコナデ後に側部ナメヘラナデズリ。内面は側部ヨコヘラナデ。口～側部ヨコナデ後にヨコヘラミナデ。	10YR6/4 に近い黄褐色 や中黄褐色 白・透明細 粒少 灰色細粒少 やや軟質	遺構線図 口1/12層 1 990609
7 土師器 壺	口 径 18.4 高 残5.0	外面は側部が剥離して調整不明で、内面は側部に横位のナデ後、頸部以上を靨み上げている。内外面の口縁部にヨコナデ。外面は黒色を帯びるが、靨ではなく黒染の可能性が高い。	10YR6/4 に近い黄褐色 や中黄褐色 白・赤・透明細 粒多、黒染～細粒やや多 やや軟質	中央底上5cm 口1/8層、頸1/6層 6
8 土師器 大形壺	高 残 10.7	3本/1cmの軽いハケを使う。外面はタテハケ後にその大半を横～斜位のナデで滑してから、やや強い横～斜位ヘラミナデ。内面はナメヘラ。	10YR7/4 に近い黄褐色 や中黄褐色 白・黒・赤・透明 細粒多、黒染～細粒やや多 やや軟質	西部底上20cm 頸1/6層 1 990614
SG10区 SK-46				
1 土師器 高杯	口 径 18.0 高 残6.4	外面は杯底に放射状および外周部横位ヘラナデ。外面体部は上半タテヘラナデと下ナメヘラナデズリ。口縁部ヨコナデ。内面は底面に多方向と体部に斜位ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。接合できない箇所があるので、杯部の深さは確定できない。外面に靨が付着する破片と付着しない破片がある。	10YR6/4 に近い黄褐色 や中黄褐色 赤・黒～細粒と白・ 黒・透明細粒少 軟質	南西部上面と1層 口1/6層、杯底1/3層 南西部上面、杯底1層
2 土師器 高杯	高 残2.9 底 残12～14	外面は側部ヨコナデ後にやや軟らかなタテヘラミナデ。内面は側部ヨコナデ。側部ヨコヘラナデズリ。胎土に混入された細粒の圧痕が、断面がはじけた結果として外面に現れている。	7.5YR5/4 に近い黄 褐色 白～透明細粒やや多、黒 ・透明細粒少 硬質	南西部の遺構線図 断面1/12層 南西部上面
3 土師器 高杯	高 残4.7	外面は杯底部を放射状ヘラナデズリ。杯体部タテヘラナデ後に下層ヨコヘラナデ。内面は杯体部ヨコヘラナデ。	5YR6/6 褐色 や中黄褐色 赤・黒染～細粒 やや多、白・透明細粒少 やや軟質	南西部上面と10.9- 17.1Eと17.2E 杯底2/3層 南西部上面、19.9-17.1E 10
4 土師器 壺	口 径 17.6 高 残3.8	外面は側部タテヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面は側部ナデ後に口縁部ヨコナデ。外面下部に口内面に混入破片があるが、細粒がどうかは不明。内面土位に黄褐色の浅い縦紋あり。外面に靨がやや多い。	10YR6/4 に近い黄褐色 や中黄褐色 赤・黒染～細粒 やや多、灰色細粒と赤細粒少 硬質	西部底上の遺構線図 口1/6層 杯底付近下層
5 土師器 壺	口 径 15.7 高 残3.0	外面は側部タテヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ後に側部ヨコヘラナデ。外面に少量の靨が付着する。	7.5YR4/6 褐色 や中黄褐色 赤・黒染～細粒 やや多、白・透明細粒少 硬質	南西部の表土 口1/6層 南西部土上
6 土師器 壺	高 残14.2 底 残4.0	外面は肩～頸部に縦～斜位のヘラナデ後、口縁部ヨコナデおよびヨコヘラミナデ。内面は断面が高れて調整不詳。外面に靨が少量付着する。	7.5YR5/6 褐色 や中黄褐色 白・赤・透明細 粒少 やや軟質	南西部の遺構線図 口1/8層、頸1/6層 南西部上面
7 石製埴土 瓦	長 21.9cm 幅 18.5cm 厚 2.4cm 重 1.86	右側の上面に、側面調整時のやや大きな切崩れを残す。それ以外は穿孔とほぼ同様に焼製し、2段に分けて置く箇所もある。表面のみにはほぼ1方向に磨かれた細かな凹痕を残す。左側の面から穿孔して背面に大きな穿孔刺痕を生じる。孔径1.60cm、終孔径1.55cm。	10Y4/1 灰 褐色やや中黄褐色変色片石質	中央底上7cm 完形 10



第184図 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑(4) 遺物

SG10 区 SK-01

1	土師器 高林	口 19.8 高 残 5.4	外面は杯体部タテヘラズリと口縁部ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面は杯体部ヨコナデと口縁部ヨコナデで、ヨコヘラズリは少し突起を持つヘラズリも入っている。内外面に5~10cm大の黒斑が目立つ。	10YR5/4 に近い黄褐色 やや磁器 赤黒粒多、白粒～ 透明磁器 少、透明磁器少 やや磁質	1層土面上と床土3cmが接合 口3/4周 1, 3, 7, 8, 15
2	土師器 高林	高 残 3.9 脚部 残 15.8	外面はタテヘラズリと裾部ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面は粘土組織仕上げを施してユビオサエと上部ヨコヘラズリ、裾部ヨコナデ。	2.5YR5/8 明赤黒 やや磁器 赤黒～黒粒多、白粒～ 赤黒～黒粒と黒・透明磁器少 やや磁質	1層土面上 脚部5/12周 1, 2
3	土師器 高林	高 残 3.3 脚部 残 12.9	脚部部上へ斜し折り上げる。脚部部の内外面にタテヘラズリ後、脚部部の内外面にヨコナデ。	5YR4/8 赤黒 やや磁器 赤・透明磁器～黒粒 多、黒・灰色磁器少 やや磁質	1層土面上 脚部1/6周 4
4	土師器 高林	口 残 20.4 高 残 16.3 脚部 残 15.3	外面は底部部に横位と杯体部に斜位のヘラズリ。口縁部にヨコナデ。外面脚部は脚部タテヘラズリと裾部ヨコナデ後に全体をタテヘラミガキ。杯部内面は多方向ヘラズリ後に口縁部ヨコナデ。脚部内面は脚部にヘラ先の粗が残り、脚部ヨコナデと裾部ヨコナデ。	5YR5/6 明赤黒 やや磁器 赤黒～黒粒やや多、 白・黒・透明磁器少 やや磁質	1層土面上と床土4~5cm が接合 口2/3周、脚部1/6周 1, 2, 5, 11, 13, 16, 17
5	土師器 高林	口 残 20.6 高 残部 残 4.8 脚部 残 2.0 脚部 残 14.4	粗片が不足して杯部と脚部が接合できない。杯部は外面タテヘラズリと口縁部ヨコナデ後にタテヘラミガキ。内面ヨコヘラズリと口縁部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。脚部は外面タテヘラズリと裾部ヨコナデ後にタテヘラミガキ、内面ヨコヘラズリと裾部ヨコナデ後にヨコヘラミガキ。	10YR6/6 明黄褐色 やや磁器 赤黒粒やや多、白粒～ 赤黒～黒粒と黒・透明磁器少 やや磁質	1層土面上 口2/2周、脚部1/4周 1~3, 7, 9, 10, 14

SG10 区 SK-04

1	土師器 杯	口 13.3 高 残 4.2 最大 残 14.7	外面は底部多方向と杯体部ヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面は底部に多方向ナデと杯部ヨコナデ。外面中位以上と内面全面に塗仕上げ。	10YR5/2 灰黄褐色 磁器 白・黒・透明磁器少 磁器少	北東部底土14cm 2.3
2	土師器 杯	口 残 14.2 高 残 3.8 最大 残 15.0	外面は杯部ナデ後に横～斜位ヘラズリ。外面口縁部と内面全面ヨコナデ後、内面体部に放射状ヘラミガキ。外面口縁部と内面に塗仕上げ。	2.5Y4/2 暗灰黄 磁器 白粒～ 黒粒やや多、透明磁器と 黒粒少 やや磁質	底土8cm 口1/3周 5, 脚部穴四週一括
3	土師器 杯	口 残 12.4 高 残 3.9	かなり薄く軽い。外面は口縁部下端の段より下をヨコヘラズリして、口縁部ヨコナデ。内面は全面ヨコナデ。高内側部地域からの職人品。 [注記]4, 野城穴四週一括。	7.5YR7/6 赭 やや磁器 白・黒～黒粒やや多、 黒・透明磁器少 やや磁質	底土8cm 口5/12周 注記5左欄
4	土師器 杯	口 残 14.8 高 4.1 最大 残 15.2	外面の口～体部端に傾きあり。外面は底部に1方向と杯体部に横位のヘラズリ。内面底部に多方向ナデ。外面口縁部と内面口～体部にヨコナデ。外面中位以上と内面全面に塗仕上げ。外面底部を中心として体部に「x」の浅い刻痕を施成後に塗している。	10YR8/3 灰黄褐色 磁器 白・黒・透明磁器少 やや磁質	口5/12周 野城穴四週一括

SG10 区 SK-05

1	土師器 杯	口 残 14.0 高 残 4.4 最大 残 15.4	外面は口縁部ヨコナデ後に杯体部ヨコヘラズリ。内面は口～体部上半にヨコナデ。外面下部にナメヘラズリが少し見られる。外面口縁部と内面全面に塗仕上げ。	10YR6/2 灰黄褐色 磁器 白粒と白・透明磁器～黒 粒少 やや磁質	内面全面と18cmと南部底土 2.2cmが接合 口5/12周 SG95 1, 3
2	土師器 杯	口 残 16.1 高 残 4.0 最大 残 15.4	外面は杯部ナメヘラズリ。口縁部ヨコナデ。内面はおそらく杯体部ヘラズリと放射状1方向と口縁部ヨコナデ。内面体部に放射状ヘラミガキ。外面上半と内面全面に塗仕上げ。	5YR6/4 に近い白 やや磁器 白・透明磁器やや多、 白・灰色磁器と白・透明磁 器少 やや磁質	北西部底土31cm 口1/12周、体1/6周 SG95 5, 野城穴四週一括
3	土師器 杯	口 残 14.2 高 残 2.8	外面は杯部ナメヘラズリ(一部ヘラズリ)、口縁部ヨコナデ。内面は杯部ナメナデと口縁部ヨコナデの境、放射状ヘラミガキ。塗仕上げの有無は不詳。	2.5Y4/2 暗灰黄 やや磁器 白粒～黒粒やや多、 黒・透明磁器少 やや磁質	口1/3周 SG95 野城穴四週一括
4	土師器 杯	口 残 25.6 高 残 3.3	薄く軽い。口縁部は内外面ともにおそらくヨコナデで、器面が割れているのでミガキの有無が不明瞭。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや磁器 白・透明磁器やや多、 灰色・透明磁器少 やや磁質	北西部底土6cm 口1/6周 SG95 2, 野城穴四週一括

SG10 区 SK-207

1	土師器 杯	口 12.9 高 6.3	外面は底部に1方向と杯体部に横位のヘラズリ後、杯部ヨコヘラミガキ。内・外面の口縁部ヨコナデ後ヘラミガキし、内面のヨコヘラミガキは少ない。内面体部はヨコナデ後に放射状ヘラミガキ。主に外面側に粗片が付着する。	2.5YR6/8 赭 やや磁器 透明磁器～黒粒と 黒粒やや多、白・灰色磁器～黒 粒少 やや磁質	内面全面と20cm 口1/2周、体7/12周
2	土師器 蓋?	口 残 25~30 高 残 2.1	外面は外面は断面が三角形に厚化して、その外面側の下端が見える縁を持つ。内部の残存下部に磨蝕状文の上端部が3本だけわずかに見える。	5Y6/1 灰 磁器 白・黒・透明磁器少 やや磁質	口1/4周 1/2周

SG10 区 SK-208

1	土師器 杯	口 残 15.1 高 3.3	外面は口縁部ヨコナデ後に体～底部ヨコヘラズリ。内面は底部に多方向と口～体部に横位のナデ。外面上位と内面に塗仕上げ。底部は内外面とも面に磨面が施されている。	7.5YR6/4 に近い白 やや磁器 白・赤黒粒と白・ 黒・透明磁器少 やや磁質	南部底土11cm 口5/12周、底全周 1
---	----------	-------------------	---	--	-----------------------------

SG10 区 SK-220

土師器 大形器	高 残 9.0	厚く重い大形器の破片。外面はタテヘラズリにヨコヘラズリ。内面は大平が割割して磨蝕状粗片が、タテヘラズリ認められる。 [注記]1~7, SG40 13, 16, 19, 20, 73 南西筋床, 74 北西筋床, 北西筋1~2周、南西筋5~8, 南西筋2周, D-D線を北, カマド、野一括。	7.5YR6/3 に近い やや磁器 白・赤黒粒～黒粒 多、黒粒やや多、赤黒粒～ 黒粒少 やや磁質	底土上～底土12cm SG40にも19片が混入 脚部片多数 やや磁質
------------	---------	--	---	---

SG10 区 SK-222

1	土師器 杯	高 残 3.4 底 4.4	厚く重い。外底面は円筒方向のヘラズリ。外面体部ヨコヘラズリ後に粗いヨコヘラミガキ。内面はナデ後、底部に多方向と杯体部に横位のやや密なヘラミガキ。	5YR5/6 明赤黒 やや磁器 白・赤黒粒と白・ 黒・透明磁器少 やや磁質	底土18cm 底2/3周 1
2	土師器 杯	口 12.1 高 3.5 最大 残 16.3	口縁部がく内傾し、外面の口～体部端にわずかな段あり。外面は底部に多方向と杯体部に横位のヘラズリ、口縁部ヨコナデ。内面は杯部多方向ヘラズリと口縁部ヨコナデ後に横ならぬナメヘラミガキ。外面上半と内面に塗仕上げ。	10YR6/3 に近い黄褐色 やや磁器 白・赤黒粒～黒粒 と黒・透明磁器～黒粒やや多 磁質	底土22cm ほぼ定形 3
3	土師器 杯	口 残 13.4 高 4.3 最大 残 13.9	外底面に1方向と杯体部に横位のヘラズリ。内面底部に多方向ナデ。内外面の口縁部ヨコナデ。外面口縁部と内面全面に塗仕上げ。	7.5YR6/6 赭 やや磁器 黒・透明磁器少 やや磁質	SK 5 上と下のSK 222 層中、底土24.7cm 口1/6周、体1/4周、底 全周 注記5左欄
4	土師器 粗形鉢	口 残 11.6 高 6.9 脚部 残 6.9	厚く重い。外面面にシラフの裏面の木炭痕。外面体部に着なす。内面に丁寧なナデ。内外面に口縁部にヨコナデ。	7.5YR6/6 赭 磁器 白・黒・赤黒粒～黒粒 多、黒・透明磁器少 やや磁質	底土17cm、SK 5にも小 片1点混入 口1/3周、底全周 6, SK 5に2周
5	土師器 鉢	口 残 11.4 高 13.1 底 5.1 最大 残 12.2	外底面は横なナデで、木炭痕を消した可能性あり。外面脚部は主にタテ(一部ヨコ)ヘラズリ、口縁部ヨコナデ～脚部タテヘラズリ。内面脚部タテナデと脚部ユビオサエ後、口～脚部ヨコナデ。	7.5YR7/6 赭 やや磁器 白・黒・透明磁器～ 黒粒少 やや磁質	底土17~25cmが接合 口2/3周、脚1/2周、 底2/3周 5, 6

第5章 権現山遺跡 SG10区

SG10区 SK-233

1 土師器 鉢	高 残 3.2 底 底 5.4	外底面は1方向ヘラケズリで平底状。外面はタナナメ後段に下端をヨコヘラケズリ。内面ヨコヘラケズリ。	5YR4/3 にぶい赤褐色 やや白。白・赤褐色と白・黒・赤・透明細粒少 破質	底上 23cm 底 3/4 周 6
2 土師器 高杯	高 残 8.0	外面はタナナメ後タテヘラミガキ。内面は横一斜位ナデで、粘土結塊も上縁をやや覆っている。	10YR6/4 にぶい黄褐色 細粒 白・赤褐色と赤・黒・透明細粒少 やや破質	底上 31cm 即中位全周
3 土師器 高杯	高 残 9.6 脚厚 18.4 重 残 598.7	脚が中まで残っている。脚柱部は外面タテヘラケズリ。内面上半ナデと下半ナメヘラケズリ。内面上半の接合部が明瞭。脚柱部は内外面ヨコナデ。	5YR6/8 暗赤褐色 白・赤褐色と白・黒・透明細粒やや多 やや破質	底上 14cm 即脚全周 1

SG10区 SK-261b

1 土師器 杯	口 11.8 高 残 6.1 最大 12.6	外面は底部に1方向または多方向と体部に斜位のヘラケズリ。内面は体部ヨコヘラケズリ。底部は多方向ヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面の全体に優りが付する。 [注記] SK-261 6覆土、8覆土、24覆土、Dレト990728、Dベルト上層、北平1層	7.5YR6/6 暗赤褐色 白・赤褐色と白・透明細粒やや多 やや破質	底上 15 ~ 21cm が接合 口 2/3 周、肩 1/2 周 注記は左層
2 土師器 杯	高 残 4.0 底 底 4.4	薄く軽い。外底面は多方向ヘラケズリ。外面体部ヨコヘラケズリ後に体部下端ナメヘラケズリ。内面にヨコヘラケズリ。	10YR6/4 にぶい黄褐色 やや赤褐色 白・赤褐色と黒・赤・透明細粒少 破質	底上 11 ~ 25cm 体 1/3 周、底 5/6 周 SK-261 14覆土、16覆土 土師上層
3 土師器 高杯	口 底 22.0 高 残 4.3	外面は杯体部ナデと口縁部ヨコナデ後、杯体部ナメヘラケズリでわずかに内面を出している。内面は杯体部ヘラケズリと口縁部ヨコナデ後、全体をヨコヘラケズリ。 [注記] SK-261 5覆土、22覆土、Dレト990728、北平1層、Dベルト2層	7.5YR6/6 暗赤褐色 白・赤褐色と赤・黒・透明細粒少 破質	底上 27cm と SK-261b の 北平1 ~ 2層が接合 口 1/3 周 注記は左層
4 土師器 高杯	高 残 4.1	外面の杯体へ端境域にヒコナデを付している。杯体部ナメヘラケズリ後に体部ヨコヘラケズリ。内面は横位のやや強いヘラケズリ。杯体部タテヘラミガキ。	2.5YR5/6 明赤褐色 やや白。白・赤褐色と赤・黒・透明細粒少 破質	底上 14cm、北平1層 に同一個体が1片 残底 1/3 周 SK-261 11覆土、Dベルト上層
5 土師器 鉢	口 底 13.3 高 残 9.1	外面は体部にナメヘラケズリ。肩部を中心としてナメヘラミガキ。口縁部は粘土貼り付け面を残してユビオサセ後、弱いヨコナデ。外底面外側ナメヘラケズリ。内面は肩前ハケメ後に体部ヨコヘラケズリ、口縁部ヨコヘラケズリ後、口ヨコナデ。外面下部は無地。	10YR6/4 にぶい黄褐色 やや赤褐色 白・赤褐色と赤・黒・透明細粒少 破質	底上 8 ~ 11cm 口 1/3 周、底 1/8 周 SK-261 20覆土、26覆土 土師上層
6 土師器 鉢	口 底 11.2 高 残 5.0 最大 14.4	外面は体部に斜一横位のナデと口縁部にヨコナデ。内面は無地。外面は肩前ナメヘラケズリ後に体部ナメヘラケズリと口縁部ヨコナデ。内面は無地。	10YR7/4 にぶい黄褐色 やや赤褐色 透明細粒やや多、白・黒細粒少 破質	底上 13cm 口 1/6 周 SK-261 7覆土、北平1層
7 土師器 鉢	口 底 14.8 高 残 3.4	口・体部間の縁は内面で明瞭。外面で不明瞭。外面は肩部にやや強いタテヘラケズリ後に口縁部ヨコナデ。内面は肩部にナメヘラケズリ後に口縁部ヨコナデ。内面肩部のヘラケズリは、非常に弱いヒコナデも付する。	10YR7/6 明赤褐色 やや白。白・赤褐色と白・黒・透明細粒やや多 破質	南平上層 口 1/6 周 SK-261 南平上層
8 土師器 蓋	口 底 18 ~ 22 高 残 4.2	口一側部縁の内面はやや明瞭。内面頸部ヨコヘラケズリの後に内外面の口一縁部をヨコナデ。外面に優りが付する。	2.5YR7/3 にぶい黄褐色 やや白。白・赤褐色と黒・透明細粒やや多 破質	底上 14cm 口 1/2 周 SK-261 12覆土

SG10区 SK-266

1 土師器 小形皿	口 高 残 7.3 底 底 4.4	外面は肩部に12本/cmの細かいタテハケ後に残らなタナナメ。外面肩部はおそろくナデ。内面肩部はナメヘラケズリ後に粘土結塊を残し、肩部ナデ。	5YR5/6 明赤褐色 やや白。白・赤褐色と赤・透明細粒少 破質	底上 20cm 肩 1/5 周 7
2 土師器 鉢	口 12.0 高 残 5.8 底 底 3.1 重 残 218.6	口・体部間の縁は内面で明瞭。外底面はナデで、非常に弱い凹底状。外面体部ヨコヘラケズリ後ヨコヘラケズリで少し突起を付す。外面口縁部ヨコナデ後、口一肩部にヨコヘラケズリ。内面は底部に1方向と体部に横一斜位のヘラケズリ。底部に横一斜位ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ後ヨコヘラケズリ。	10YR7/4 にぶい黄褐色 やや赤褐色 黒・透明細粒少、赤褐色と白・透明細粒少 破質	底上 12cm 口 3/4 周、体全周 10

SG10区 SK-274

1 土師器 杯	口 14.5 高 残 6.4	口・体部間の縁は、内面で明瞭で外面で弱い。外面は底部に円筒方向と体部に横位のヘラケズリ。口縁部はヨコヘラケズリ後ヨコナデ後ヨコヘラケズリ。内面は底部に多方向と体部に縦位のヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後に密なヨコヘラミガキ。	2.5YR5/6 赤褐色 やや白。灰褐色と白・透明細粒と黒・赤褐色と白・透明細粒少 破質	底上 9cm 口 7/12 周、体 5/6 周 1、西平 原層
---------------	-------------------	--	---	--

SG10区 SK-275

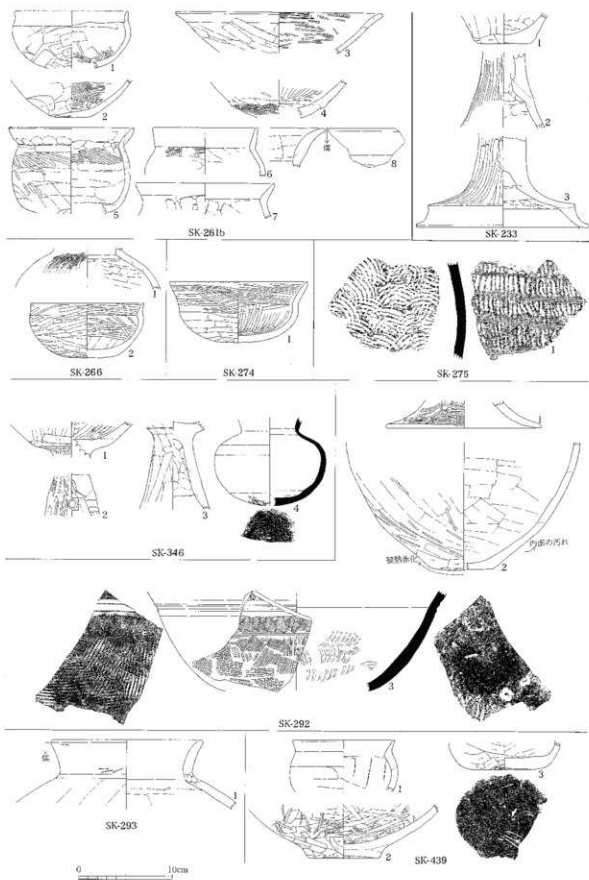
1 須恵器 蓋	高 残 10.3	外面は褐色の平打ち磨き後に8本1組の櫛状工具で彫刻による平行波線4周を入れている。内面は同心円文と直線が下方へ進行する。ただし、縦片の断面は差の可能性もある。外面は灰褐色で内面は灰色。表面は褐色と灰色のウツイイテ状。初期中期のSK-264に同一個体の磨片があり、古墳時代のSD-304bと中～近世のSD-263出土破片ともやや類似する。	5YR6/2 灰褐色 やや白。白細粒やや少、白・透明細粒少 破質	底上 13cm 製部 1
---------------	----------	--	-------------------------------------	-----------------

SG10区 SK-292

1 土師器 高杯	高 残 2.9 脚厚 底 16.4	脚柱部の断面がわずかに肥厚気味。脚柱部の内外面をヨコナデ後、外面に横なヨコヘラミガキ。脚柱上段はタテヘラミガキも付す。非常に簡単な製品。	2.5YR5/8 明赤褐色 細粒 白・透明細粒と白・透明細粒少 破質	底直上 脚厚 6/6 周 2
2 土師器 高杯	高 残 13.5 底 底 6.4	外底面は1方向ヘラケズリで弱い凸面状。外面は肩部ナメヘラケズリ後に少しくツギミガキ。脚柱部ヨコナデ。内面は横一斜位のヘラケズリ。脚柱部の外面が少し被熱赤化し、底部付近を除く内面に暗褐色の汚れが少し付する。	2.5YR7/2 暗灰褐色 やや白。白・赤褐色と黒・赤褐色と白・透明細粒少 破質	底直上 脚上端 3/4 周 1
3 土師器 蓋台	高 残 10.6	外面はカキメ後に下段波状文→中位突線2条→上段波状文の順に施される。波状文は右から左へ施さず、下段波状文は16周以上の工具を使うが、11 ~ 12本しか断面にわたらないところが残る。杯部下段の磨片を付すは白化大塊。内面下部は同心円文と直線。内面に暗褐色の自然釉がかなり。S1111 地で出土した破片と同一個体。	5Y4/2 灰オリーブ褐色 細粒 白・赤褐色と白・赤褐色と黒・透明細粒少 破質	底直上 杯部中位 1/12 周 4

SG10区 SK-293

1 土師器 蓋	口 16.2 高 残 7.4	外面は肩部ナメヘラケズリ後に口一肩部ヨコナデで、肩部にヘラの当たった痕を残す。内面は肩部ヨコヘラケズリ後に粘土塊も上縁を覆っている。口一肩部ヨコナデ。外面に優りが少し付する。	10YR6/4 にぶい黄褐色 粗い 白・赤褐色多、半透明細粒と透明細粒少 破質	1層土 口全周 1、土面一括
---------------	-------------------	---	--	----------------------



第 185 図 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑 (5) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10区

SG10区SK-346

1 土師器 高杯	高 残 3.8	外面は全体をタテハラナデ後、杯部下端ヨコハラケズリ、脚部タテハラケズリ、杯底外面はナメハラ後ナメハラナデ後ナメハラミガキ。杯底内面はおそくナデ。	7.5YR4/6 周 やや黄緑 白・赤・灰色相～ 細粒と黒・透明細粒少 やや軟質	底上9cm 脚底1/4周 6
2 土師器 高杯	高 残 4.4	外面はタテハラケズリ後にタテハラミガキ。内面は細粒面をそのまま押しユビオサエ。径7mmの孔を横筋前に穿孔する。残存する孔は1個だけで、3方向に孔を持つ可能性は低く、2方向に持っていることが考えられるが、断面が破損しているので断定にとどまる。	7.5YR6/6 體 やや粗い 赤相～細粒多、白 や軟質 白・黒・透明細粒少 やや硬質	底上8cm 脚底全周 5
3 土師器 高杯	高 残 9.3 最大 残 7.5	外面は杯底～脚部にタテハラナデまたはタテハラナデ。杯底部外面に縦位のやや粗いヘラナデ。杯内面はナデで、外周に土接合痕を有す。脚内面は縦立凸部や反時計方向に細粒みした面をよく残し、斜一傾斜ユビナデと一部にヨコハラナデ。	10YR6/4 に近い黄緑 やや粗い 白～赤相～細粒少 白・灰色相～細粒と黒・透明 細粒少 硬質	底上7cm 脚底全周 2
4 遺物類 または 陶器土器 小形壺	高 残 9.4 最大 残 11.8	左回転(反時計回り)のロクロで内外面を回転成形コナデ。内面の体一部脚部に強い傾きがあり、対応する外面が平直状で作られていたことを示すかもしれない。外面は斜線的に丸底に仕上げている。外面底部は丁寧な多方向ナデで、ヘラケズリ等の細を穿すなど、外表面には意図的放射状に重ねた上には中程度の稜が鋭角により明瞭に残されている。稜面は灰色で、外面の断面は黒味が強い。	N5/10 灰 粗粒 白・透明～細粒やや 多 硬質	底上4cm 脚1/4周、体1/2周 3、一破

SG10区SK-430

1 土師器 杯	口 復 10.8 高 残 5.5 最大 残 11.4	外面は体部ヨコハラナデ、口～頸部ヨコナデ。内面は体部ヨコハラナデでヘラの粗をやや強く残し、口縁部ヨコナデ。外面全体に稜が多く、内面に多少に丸みがある。	10YR7/3 に近い黄緑 やや粗い 白・赤相～細粒少 やや軟質	底直上～底上13cmが場合 口1/3周、体1/3周 SK-38 2、3
2 土師器 大形壺	高 残 5.7 底 残 7.4	外表面は多方向ヘラケズリで凹面状にする。胴外面を斜一傾ヘラケズリ後に丸くならミガキ。内面は多方向ヘラナデ。	10YR5/3 に近い黄緑 やや粗い 白～細粒と透明 粗～細粒やや多、赤相～細粒 と黒細粒少 硬質	底直上 底3/4周 SK-38 2
3 土師器 壺	高 残 3.1 底 残 6.4	底が厚く重い。外表面は多方向ナデ。外面の体一部脚部に円筒方向のヘラケズリ、外表面底部に横一斜位のヘラケズリ。拓本を示した短い平行(浅彫)が外表面の外頸部に横筋前に施されている。	10YR7/3 に近い黄緑 やや粗い 白～細粒と赤相 ～細粒と黒・透明細粒やや多 やや軟質	底上6cm 底全周 SK-38 1

SG10区SK-440

1 土師器 甕	口 復 18.8 高 残 16.0 最大 残 26.7	外面は脚部に縦位後横～斜位のヘラナデで、胴中位の接合休止部付近をヨコハラケズリ。内面は脚部ヨコハラナデ後、胴中～上位をヨコハラケズリ。内色・透明～細粒やや多、赤・黒相～細粒少 やや軟質	2.5Y4/2 灰黄 粗粒 白・透明～細粒多、灰 色・透明～細粒やや多、赤・ 黒相～細粒少 やや軟質	底上3cm 口1/4周
---------------	-----------------------------------	---	--	----------------

SG10区SK-456

1 土師器 杯	口 復 13.9 高 4.5 最大 残 14.8	外面は底部に1方向と体部に横位のヘラケズリ。内外面口縁部はヨコナデ後に残らぬヨコハマミガキ。内面底部はヨコナデ後に密な放射状ヘラミガキ。脚部に粗粒状の黒色包埋。 注)記IS19.66、SI.95貯蔵所周辺	10YR6/3 に近い黄緑 やや粗い 白・赤・灰色相粗 粒と白・黒・透明細粒やや多 やや軟質	底上7cm、前に近接する SK.95周辺出土の1片も 場合 口5/12周 注)記は左欄
2 土師器 甕	高 残 3.3 底 残 6.2	凹面状で薄い。外表面は円筒方向のヘラケズリ。外面脚部はやや強いナメハラナデ。内面脚部はヨコハラナデ。外面全体が焼熟赤化。	7.5YR8/6 浅黄 粗い 白・透明細粒と白・黒・ 赤・透明細粒多 軟質	底上12周 一破

SG10区SK-543

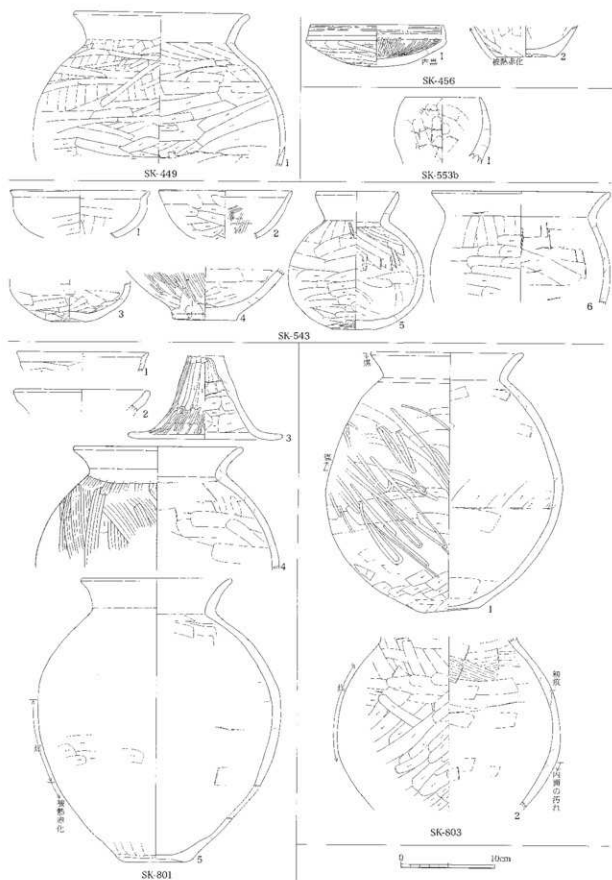
1 土師器 杯	口 復 14.9 高 残 5.0	口～体部の縁が明瞭。外面は上半部ヨコナデ、下半部にヨコハラケズリ。内面は下半部に1方向ヘラナデ。上半部ヨコナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	5YR4/4 に近い黄緑 やや粗い 白～細粒多、赤・ 黒・透明～細粒少 硬質	底上13cm 口1/3周 8
2 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 5.1	外面は体部ヨコハラケズリ、口縁部ヨコナデとユビオサエ。内面は口縁部ヨコナデ、体部ヨコハラナデ後に縦一傾ヘラミガキ。	5YR6/6 體 やや粗い 灰色調と白・黒・ 赤・透明細粒少 軟質	底上11cm 口1/2周、体1/6周 2
3 土師器 小形壺	高 残 4.4	外表面は円筒方向のヘラケズリで凹面状。外面体部ヨコハラケズリ。内面は円筒方向および横一斜位のヘラナデ。	5YR6/4 に近い粗 粗い 白・赤・灰色・透明粗 ～細粒多、黒・透明細粒少 やや軟質	底上9cm 底全周 19
4 土師器 小形壺	高 残 5.6 底 残 6.8	外表面は多方向ヘラケズリ。外面は脚部にナメハラナデ後タテハラミガキ。胴下部に傾斜の斜ナデ。内面は底部に多方向と胴部に横位のヘラナデ。外面の胴下部全体に稜が見られるが、底部は熟熱はない。	10YR7/3 に近い黄 粗粒 白・赤・透明細粒少 軟質	底上9～11cmが場合 底全周 18、24
5 土師器 小形壺	口 復 8.6 高 残 4.4 最大 残 14.3	外表面は円筒方向のヘラケズリで平直状。外表面は上半部にタテハラナメハラナデ、下半部ヨコハラケズリ。口～胴部内外面はヨコナデで、口外側に強い傾きがあり、外面の脚部に縦位の強い傾斜を有する傾きがある。内面は体部と下半部多方向および横位ヘラナデ。上半部に強いナメハラナデ。内面下半部の断面は滑しく削削している。	7.5YR5/6 明緑 やや粗い 白～細粒多、黒・ 赤・透明細粒少 やや軟質	底上6cm、底上11cmの 1片も場合 口1/2周、胴1/3周、 底5/6周 30、35
6 土師器 甕	口 復 19.0 高 残 11.9 最大 残 19.2	外面は脚部タテハラナデ後ヨコハラケズリ。内外面の口縁部ヨコナデ。内面は脚部ヨコハラナデ。胴部外面に不規則な稜熱赤化痕が見られる。	10YR6/6 體 やや粗い 白・灰色・透明粗 ～細粒多、黒・透明細粒と黒 細粒やや多 やや軟質	底上6～9cmが場合 口1/8周、胴1/5周 4、5

SG10区SK-553b

1 土師器 小形土器	口 復 7.9 高 残 7.1	外面は斜一傾ユビオサエとナデで、粘土組織面をよく残す。内面はそれよりもやや丁寧なナデとヘラナデで、粘土組織面は残していない。全体の調整が粗雑。	2.5YR6/8 體 粗粒 赤相～細粒やや多、白・ 黒・透明細粒少 やや軟質	底上13cm 口1/2周、体1/3周 2.000203。上半部、ト ピンチ
------------------	--------------------	---	---	--

SG10区SK-801

1 土師器 杯	口 復 14.0 高 残 2.0	外面全体は上位にヨコハラナデ、中位にヨコハラケズリ。外面口縁部と内面にヨコナデ。	10YR4/2 灰黄 粗粒 白～細粒多、白・赤 粗粒と黒・透明細粒少 やや軟質	口1/6周
2 土師器 壺	口 復 14.6 高 残 2.3	口縁部上半が強く内彎する。内外面ヨコナデ。	10YR5/4 に近い黄緑 やや粗い 白～細粒やや多、赤・ 黒・透明細粒少 やや軟質	口1/6周
3 土師器 高杯	高 残 8.9 脚底 残 16.4	外面はタテハラケズリと脚部ヨコナデ後に下位を中心としてタテハラミガキ。内面は粘土層の3段重ねた面をよく残して上部タテハラナデ、下部ヨコハラケズリ、脚部ヨコナデ。	10YR6/4 に近い黄緑 やや粗い 白・灰色調～細粒 と透明～細粒やや多、黒細 粒少 やや軟質	脚底全周、脚底1/4周



第 186 図 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の土坑 (6) 遺物

第5章 権現山遺跡 SG10区

4 土師器 甕	口 高 18.0 底 残 13.0 最大 復 25.6	外面は胴部タテハラケズリに口~胴部ヨコナデ。内面は胴部ナデ、胴部ヨコハラナデ、口縁部ヨコナデ。	10Y87/3 ぶい~黄緑 釉・赤黒~細粒多、白・黒・透明釉~細粒やや多 破損	口14片、胴2/3周
5 土師器 甕	口 16.0 高 30.0 底 残 6.2 最大 復 25.6	外底面中央はゆるやかにヘラケズリで凹底状にする。外面胴部タテハラナデにヨコハラケズリ、内面胴部ヨコナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。下位の外面が焼鈍し、中に黒が少量混入される。	5Y86/6 橙 やや粗い・赤黒粒と白・透明 釉~細粒やや多、黒細粒 やや軟質	大半はSK801出土。SK 803の底上5cmにも1 片あり 口2/3周、胴3/4周、 底1/2周 SK-803.9
SG10区SK-803				
1 土師器 甕	口 16.2 高 27.2 底 5.9 最大 25.1 底 残 23.36	外底面は1方向ヘラケズリで少し凹底状。外面胴部はナメハラナデ後に中位と下位をヘラケズリし、中にナメハラミギキ。内面胴部はハラナデ後に中位の縞み上げ体土部が厚くなった部分をナメハラケズリ。内外面の口~胴部ヨコナデ。外面の胴部上位から口縁部に黒が付着する。焼鈍痕は不明。	7Y58/8 黄緑 釉・白・黒・透明釉~細粒 多、赤・灰色細粒やや多 やや軟質	SK803の底上6~19 cm。破りのうちの半数 はSK801で出土 はほぼ完全 口1/5周、底全周 1~4、SK801
2 土師器 甕	口 高 18.4 最大 復 23.6	外面は上位にハラナデとナデの後、中位以下をナメハラケズリ。内面はヨコハラナデで、胴部には縞みハケも用いる。外面に細粒粗面が1箇所あり、縞上に黒がのこされていたものが表面調整で脱けたものと見られる。外面の中位に黒が多く、内面の上位に暗褐色の汚れが明確に付着する。	7.5Y86/4 ぶい~橙 やや粗い・白・透明釉~細粒 多、赤黒~細粒やや多、平透 面細粒少 やや軟質	底上13~14cmの2片 が接合 胴1/3~1/4周 10、11
SG10区SK-819				
1 土師器 甕	口 高 15.8 底 残 6.4	外面は口縁部ヨコナデ後に胴部ナメハラナデ。内面は胴部ヨコハラナデ、口縁部ヨコナデ。 [注記]一筋、SK-820 17.40-19.60 上面	7.5Y86/6 橙 やや粗い・赤黒~細粒多、白・ 黒細粒少 軟質	SK-820の遺構確認面出 土の1片がSK819の3 片と接合 口1/12周、胴1/6周 注記左欄
SG10区SK-820a+b				
1 土師器 彫形鉢	口 高 10.8 底 残 4.7 最大 復 6.5	口縁部の小片が1点あるが、接合できないので器高は不明。外底面は木炭の黒い面。外面体部は非常に薄くユビサエとナデ。内面底部はやや滑りな方向ユビナデ。内面体部ははやや難位ナデ。	5Y82/6 明赤釉 やや粗い・赤黒粒やや多、底全周 ~破損	底全周 一括
SG10区SK-901				
1 土師器 小形甕	口 高 3.7 底 残 5.8 最大 復 12.4	外底面は門扉方向にヘラケズリして平底にする。外面体部ヨコハラケズリ、内面底部はおそらく多方向ヘラナデ。内面体部ヨコハラナデ。	10Y36/4 ぶい~黄緑 やや粗い・黒・透明釉~細 粒やや多、赤黒粒と白細粒少 軟質	底上10cm 底1/6周 1
SG10区SK-902				
1 土師器 高杯	口 高 18.0 底 残 5.8	外面は杯底部ナメハラケズリ、杯体部ナデと口縁部ヨコナデ後にタテハラミギキ。内面はナメハラケズリと口縁部ヨコナデ後に杯体部タテハラミギキ。 [注記]2か3、4、西平1層、2層、2層下平	2.5Y86/8 橙 細面・白練~細粒と黒・透明 釉少、やや軟質	底上9~28cm、西平1 層と2層、2層下平の3 層の6周 口1/4周、杯底1/3周 注記左欄
SG10区SK-903				
1 土師器 杯	口 高 1.8 底 残 4.4	外底面はナデでやや上げ底状。外面体部ヨコハラケズリ。内面は門扉方向の黒なヘラミギキ。内面は割落して調整が不明。	2.5Y86/8 明赤釉 やや粗い・白・灰色練と白練 ~細粒と黒細粒少 やや軟質	高平部1層 底2/3周 西平1層
2 土師器 杯	口 高 13.0 底 残 4.1 最大 復 13.2	口~体部端の縁が内面で調整。外面体部ナデ、内面体部ヨコハラナデ。内外面口縁部ヨコナデ。外面に7cm大の黒痕あり。 [注記]24、20.0-20.31層、Bトレ	10Y87/3 ぶい~黄緑 釉・赤黒~細粒多、白・黒・透明 釉~細粒少 やや軟質	底上7cm、20.0-20.3 グリップの1層とBトレ 片1片が接合 口1/4周 注記左欄
3 土師器 高杯	口 高 17.2 底 残 4.7	外面は口縁部ヨコナデ後に杯体部ナデ、内面は杯体部ヨコハラナデと口縁部ヨコナデ後にタテハラミギキ。 [注記]2層、高平1層、S907 1、S907 20.0-20.31層、3層、20.1-20.31層	5Y82/6 明赤釉 やや粗密・赤黒粒と白練~細 粒多、黒・透明細粒少 やや軟質	1~2層、20.0-20.3 グリップ周辺の1~3層 の5片が接合 口5/12周、杯底2/3 周 注記左欄
4 土師器 高杯	口 高 残 2.5	高杯でない可能性もある。やや厚く重い。外面はタテハラミギキ、杯部外底面は放射状ケズリ後に体部下端の隅部を削い、内面は多方向ヘラナデ。	7.5Y88/4 浅黄緑 釉・透明釉・赤黒~細粒多、白 粒~細粒少 やや軟質	底上11cmと20.1-20.3 グリップ周辺の1層の 高1片が接合 口1/3周、杯底2/3周 1、20.1-20.3上面
5 土師器 高杯	口 高 残 8.8	外面は胴部ヨコナデと頸部タテハラケズリ。内面は割立状態で反斜汁回りの粗上縞み上げ縞を明確な段として現し、また縞を細く段つた縞線が縦着。 [注記]1高平1層、S907 20.0-20.3、20.0-20.31層、Bトレ、20.1-20.31層	5Y86/6 橙 粗い・赤黒~細粒多、白・黒・ 透明細粒少 やや軟質	高平1層、20.0-20.3 グリップ周辺のBトレン 高1層・2層の接合 頸部3/4周 注記左欄
6 土師器 高杯	口 高 残 7.5	外面は胴部ヨコナデと頸部タテハラケズリ。内面は割立状態で反斜汁回りの粗上縞み上げ縞を明確な段として現し、縞を段つた縞線と斜いタテハラミギキがよく現れている。内面胴部はヨコナデ。	7.5Y86/6 橙 やや粗い・赤黒~細粒多、白 粒~細粒と黒・透明細粒少 やや軟質	底上6cm、1層下平の2 片が接合 胴は上下1/6周、下平全 周 23、1層下平
7 土師器 高杯	口 高 残 10.7 最大 復 18.1 底 残 0.69	胴部に垂直3方向の円形透が2箇所残存する。外面は胴部タテハラミギキ、杯体部ヨコハラナデ。杯体部に縞~斜付ヘラケズリ後ヨコハラミギキ半状で先光沢面を調整を少し行う。頸内面は上部が絞りの目状で下部がナメナデ。杯内面は底面に多方向のヘラケズリ後ハラミギキ。杯体部はヨコハラナデで、ハラミギキ半状に光沢を持つ調整を少し行う。 [注記]10、S907 20.0-20.31層、3層、20.1-20.31層	2.5Y86/6 橙 やや粗い・白練~細粒多、赤・ 黒・透明釉~細粒やや多 破損	底上15cm、20.0-20.3 周辺の1~4層の9片 が接合 杯底3/4周、頸部1/2周 注記左欄
8 土師器 甕	口 高 23.0 底 残 約 22 底 残 4.0 最大 復 24.2	破片が少ないので、器高と底部径は推定複製。外面は下平ナデと上平ナメハラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は下平から口縁部にかけてヨコハラケズリ。胴部に斜付のヘラケズリ後ハラミギキ。口縁部ヨコナデ。口縁部の仕上げケズリを最後に十分行わない状態で外面に見られる。外面全体に黒がやや多量に付着する。 [注記]16、1層下平、2層、3層、高平1層、SK-902.1、SK-906.2上面、19.8-20.6、19.9-20.3Aトレ、20.0-20.21層、20.0-20.31層、Bトレ、上面、20.1-20.31層、3層、上面、S907 4、北平2層、S907 20.1-20.31層、3層下平	10Y85/4 ぶい~黄緑 釉・白・赤黒~細粒と黒・ 黒・透明細粒やや多 やや軟質	底上3~17cmと1層下 平~2層、SK-902-906 の各1片や20.0-20.3 グリップ周辺の1~3 層の約60片と接合 口2/4周、底1/8周 注記左欄

SG10区 SK-904

1 土師器 杯	口 径13.6 高 残2.8 最大 径13.9	外面は体部ヨコヘラズリ。内面は体部ヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。	10Y86/2 灰黄緑 やや粗い・黒・透明細粒 やや多。灰色塵と赤黒粒と白 細粒少。やや硬質	底上2cm 口1/6 残 6
2 土師器 高杯	高 残1.9 脚底 径15.8	内外面の腹部をヨコナデ後、外面にタテヘラミガキ。 出土状況 下部2層と20.0-20.3グリッド1～2層が接合。19.9-20.2グリッドの3層にも破片あり [注記] 下部2層、19.9-20.2 Aトレ3層、Cトレ、20.0-20.3 Bトレ、S907 20.0-20.3 1層	7.5Y86/6 碧 細密 白粒～細粒やや少、赤 黒・透明細粒少	高杯5/12層 出土状況および注記は 左欄
3 土師器 高杯	高 残4.7	脚底部が中央でやや歪い。外面はナデ後にタテヘラミガキ。内面は上部タテナデ後に下部ヨコナデ。	5Y86/6 碧 やや細密 灰色細粒多、赤・ 透明細粒～細粒と白・黒細粒 やや硬質	高杯1層 脚底中央全周 高杯1層
4 土師器 小形甕	高 残5.5 底 径4.6 底 径2.2	底部が厚く歪い。外底面は雑なナデで、草本植物の草らしい圧痕も少し見られる。外面体部に斜一横筋ヘラナデ。内面は孔縁部ヨコヘラナデ(または斜一横筋ヘラナデ)。 [注記] 下部2層、19.9-20.3 1層上面、20.1-20.3 1層、S907 20.1-20.3 1層	5Y86/6 碧 やや硬質 赤黒粒やや多、白・ 黒粒～細粒少 軟質	下部2層の1片が周辺 を含むの3片と接合 底全周 注記は左欄

SG10区 SK-906

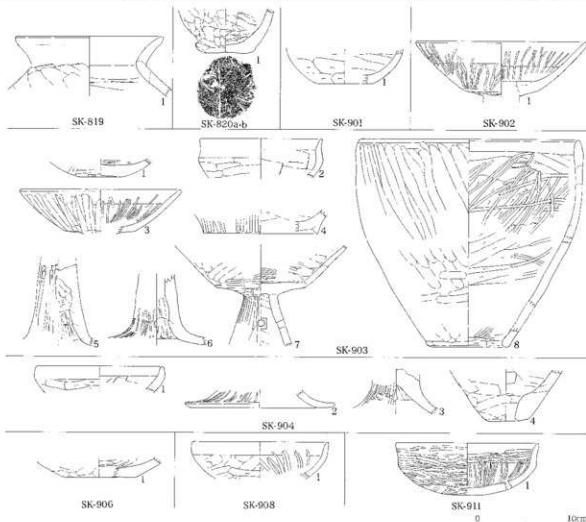
1 土師器 大形甕	高 残2.1 底 径8.0	外底面は内周方向のヘラズリで中央部がわずかに凹む。外面側下部にやや強いナメヘラナデ。内面底面に多方向のヘラナデ。	10Y86/2 灰黄緑 粗い・灰色・透明細粒多、 白・黒細粒少 硬質	2層 底1/4 残 2層000314
-----------------	------------------	--	--	--------------------------

SG10区 SK-908

1 土師器 杯	口 径14.4 高 残3.9	やや薄い。外面体部は上平ナメナデと下平ヘラズリ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面体部はヨコナデ後に斜射状のヘラミガキ。	5Y85/6 明赤緑 細密 白粒～細粒と黒・透明 細粒少 やや硬質	底上11cm、20.0-20.2 グリッド1層の1片が 接合 口1/6 残 4、20.0-20.2 1層
---------------	-------------------	--	--	--

SG10区 SK-911

1 土師器 杯	口 径15.2 高 残5.5	底部片と体部の接点がないので、器高は同上層形による。外面は底部に1方向ヘラズリ、体部ヨコヘラナデ後ヨコヘラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ後ヨコヘラミガキ。内面体部はナデ後に斜射状ヘラミガキ。外底面に9cm大の黒痕あり。	10Y86/4 に近い黄緑 細密 白・黒・赤・透明細粒 やや硬質	S1-28の入口ピットと当 器考えられた土坑内 口5/12 残、底1/3 残 S1-28 入口P、B-B
---------------	-------------------	--	--	---



第187図 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の土坑(7) 遺物

第12節 古墳時代の低地遺物包含層 (第188・189図、写真図版212)

【位置】SG10区中央部西半の19.5-20グリッドから20-20グリッドの、集落から東に下った低地部分で土師器片を含む層を調査し、古墳中期を中心とする土師器と小土坑8基(SK-901～904・906・908～910)を確認した。最初は土師器の散布範囲に幅30cmのAトレンチ～Fトレンチを設定して掘り下げた。その後、北半部のEからFトレンチまでの間と、南半部のBからCトレンチまでの間で遺物包含層を平面的に掘り下げた。D・Eトレンチ付近は遺物が少ない。遺物はAトレンチよりも北側に多く、特に遺物が多いBとCトレンチの間では一般的な竪穴建物跡と同程度の密度で土師器片が出土した。

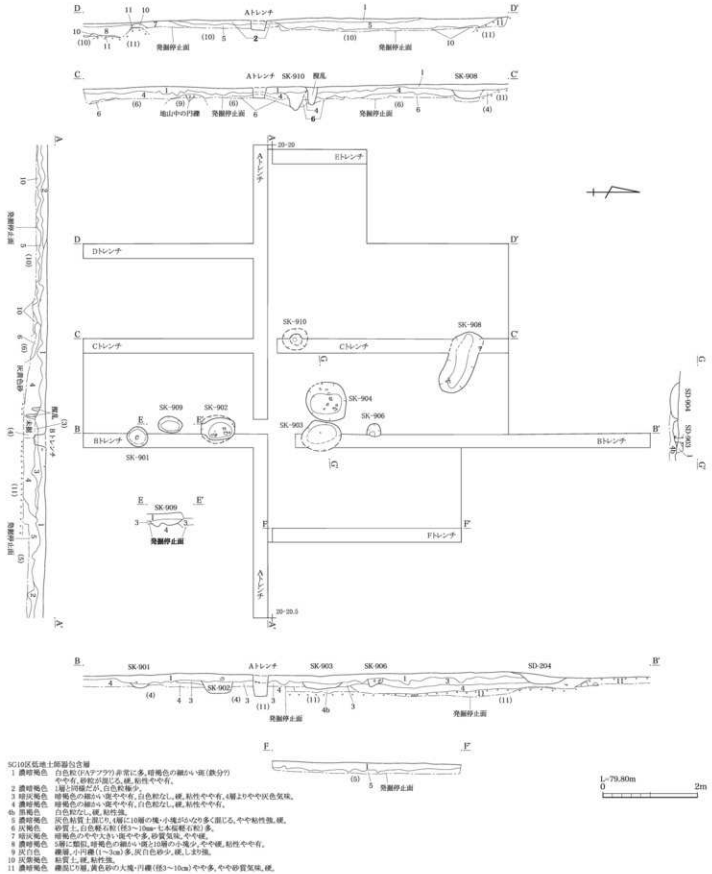
【覆土】遺物を含む黒褐色の1層は厚さ20cm程で古墳後期初頭のHr-FAと見られる白色粒が非常に多い。3・4層に少量の遺物があり、中期前半と見られる棒状脚気味の高杯を含む(31)。下の5・6・8層は無遺物で、灰色粘土塊や縄文草創期の男体・七本椀軽石粗粒を含む。深く掘り下げたAトレンチで確認した基盤層は、水成堆積の灰紫褐色粘質土(10層)と礫混じり層(9・11層)で、東へ低く傾斜する傾向がある。

【小土坑】小土坑は、上を1層が覆うので古墳中期頃の土坑である。詳細は第108表で説明した。SK-908は土坑と認定するか迷う浅いくぼみである。SK-904の南側は現地調査時に「S-905」と仮称したが、1層下部が少し深い部分で、土坑ではない。SK-906東側も遺物が多いので「S-907」と仮称したが、土坑は存在しなかった。古墳時代の遺物を使用・遺棄・廃棄し、浅い土坑を設ける地区であったと考えられる。

【出土遺物】古墳中期中葉(1・3・24)・後葉(2・37)の土師器が多く、中期末葉もあるが(34・35)、後期の遺物は僅かである(7・8)。高杯が多く、脚を絞ったタテジマが脚内面に目立つ。内外面赤彩の杯部(17)と外面赤彩の脚(18)は同個体かもしれない。24は脚がやや薄く、推定3方の円形透孔を持つ。透孔を持つ土師器高杯はSG10区SI-25などにある。35は黄灰色胎土の薄く軽い短脚高杯で、他地域産の疑いがある。44は白色針状物質(骨針)を含む搬入品でSG10区SI-23などに例がある。47は二重口縁状。

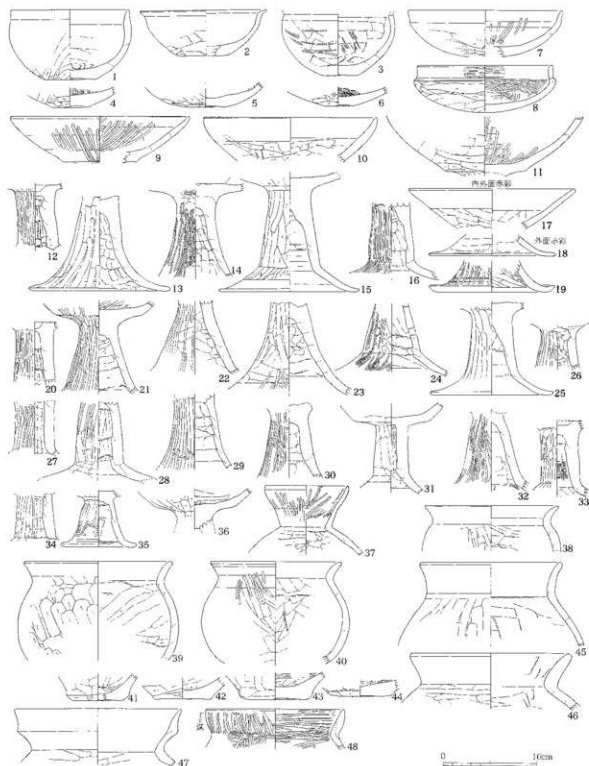
第110表 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の低地遺物包含層 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ [cm・g]	特 徴	色調 胎土・顔彩 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 覆12.6 高 残7.4 底 5.3 最大 高13.0	外底面は軽く窪にナデただけでほとんど無調整の弱い凹底状。外面体部ナメナデ後にトコナメヘラケズリ、口縁部ココナデ。内面は底部に円筒方向のヘラナデ、体部にはココナデまたはココヘラナデ、口縁部ココナデ。	5YR5/6 明赤褐色 やや微黄 赤粗粒と透明細粒多。 灰色胎粒と白・黒粗粒少 やや微黄	口1/8残。底全周 20.0・20.3 1層、20.1・ 20.3 1層、S-907 20.0・ 20.3 1層
2 土師器 杯	口 覆13.4 高 4.8 底 覆5.2	口縁部破片が小さいので復原口径は参考値。外底面と外面体部にヘラナデ、口一層部ココナデ。内面は体部ヘラナデと口縁部ココナデ。	5YR6/6 暗 やや微黄 赤粗粒多、白・ 黒・透明細粒少 やや微黄	口1/40残。底1/18周、 底7/12周 20.0・20.1 1層
3 土師器 杯	高 残6.5 底 3.5 最大 高12.0	外底面は軽いなデ。外面体部はナメヘラナデ後にココヘラミガキ。口一層部ココナデ。内面は底部に多方向と体部に横位のヘラナデ後、体部に縦ならぬナメヘラミガキ。 [注記]19.8・20.3 1層、20.0・20.3 1層、20.1・20.3 1層、S-907 20.0・20.3 1層、20.1・20.3 1層	10YR6/4 に近い黄褐色 やや微黄 白粗粒多、白・灰 色胎粒と赤・透明細粒少 やや微黄	底1/2残。底1/6周 注記は左欄
4 土師器 杯	高 残2.1 底 3.5	外底面は凹底状でナデ。外面体部ココヘラケズリ。内面は多方向または斜角射状の密なヘラミガキ。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや微黄 白・透明細粒多、 白・灰色胎土と白粗粒少 やや微黄	底全周 20.1・20.2 1層 20.1・20.2・X20.2
5 土師器 杯	高 残2.4 底 3.8	外底面はナデで少し凹底状。外面体部に顔彩と斜位のヘラケズリ。内面はヘラミガキしていたかもしれないが、大半が脱落しているので調整不明。	2.5YR5/6 明赤褐色 やや微黄 白・赤粗一細粒多、 黒粗粒少 やや微黄	底全周 20.1・20.2 X20.1・ベルト 1層
6 土師器 杯	高 残2.0 底 3.0	外底面は凹底状で、丁寧なナデの後に軽くヘラミガキを施らる。外面体部ココヘラケズリ。内面は多方向のヘラミガキ。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや微黄 白粗一細粒と透明 細粒やや多、灰色胎粒と黒粗 粒少 やや微黄	底全周 20.1・20.1 1層
7 土師器 杯	口 覆16.1 高 残4.9 最大 高16.4	外面体部はトコナメヘラケズリ。上層ヘラケズリかヘラナデ。口縁部ココナデ。内面底部多方向ヘラケズリ後に体部ナデまたはヘラナデと口縁部ココナデ。体部微黄杖ヘラミガキ。胎面が磨耗して調整がやや不明瞭。履状で注記は左欄。 [注記]20.0・20.3 1層、S-907 20.0・20.3 1層、20.1・20.3 1層、北平2層	10YR8/4 浅黄褐色 やや微黄 白・黒粗一細粒少 やや多、赤・透明粗一細粒少 やや微黄	口1/12残。底1/8周 注記は左欄
8 土師器 杯	口 覆14.0 高 5.0 最大 高15.1	外面は底部に多方向と体部に横位に斜位のヘラケズリ。内外面の口縁部にココナデ後ココヘラミガキ。内面の体部に斜位と横位。底部に多方向のヘラミガキを密に行う。履状で注記は左欄。 [注記]19.8・20.2 1層、19.8・20.3 8トレ、19.9・20.2 1層、19.9・20.2 2トレ、20.0・20.2 2トレ、20.1・20.3 1層	10YR5/3 に近い黄褐色 やや微黄 白・黒・透明細粒少 やや微黄	口1/24残。底5/12周 注記は左欄



第 188 図 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の低地遺物包含層調査区と SK-901~910

第5章 権現山遺跡 SG10 区



第 189 図 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の低地遺物包含層 遺物

9 土師器 高林	口 19.0 高 残 4.9	外面は杯底部を放射状ヘラケズリ、杯体部ナデ後に中位以上をヨコナデして杯体部タテヘラミガキ。内面は杯底部ヘラケズリ、杯体部ナメナデ。口縁部ヨコナデ後、杯体部ナメヘラミガキ。 1 注記 119.9.20.2C ベルト、20.0-20.1 1 層、20.0-20.1C ベルト一簇、20.0-20.2 1 層	SYR6/6 縞 やや密赤相～細粒多、 白・黒相～細粒やや多、透明 細粒少 やや密青	口 1/3 層 注記は左欄
10 土師器 高林	口 18.3 高 残 4.6	外面はナデ後に体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面は体部に横～斜位ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	SYR6/6 縞 やや密赤相～細粒多、 白・黒・透明細粒少 やや密青	口 1/5 層 20.0-20.3 1 層、S-007 北平 2 層

11	高 残 6.3 最大 残 20.8	外面に白磁部ヨコナデが見えないので、高さ1～2cmの高さが推定される。外面は裾底部を放射状ヘラケズリ。杯部内はヨコナデと下位ヨコナデ。内面は横位ナデの後、横位ヘラケズリ。 注記 20.0-20.3 1層、20.1-20.3 1層、S.907 北2層	10YR7/3 に近い黄緑 やや濃い 赤黒～黒粒多、 白・黒・透明黒粒少 やや軟質	杯底 7/12 周 注記左欄
12	高 残 7.1 脚柱 3.9	外面は脚柱部タテヘラケズリ後タテヘラミガキ。杯部内は放射状ヘラケズリ。杯内面は斜壁して調整不整。脚内面は粘土結核を多く含む。脚柱を絞って細くしたために縦皺が多い。	5YR4/6 赤黒 やや軟質 白・赤・灰色粒多 白・黒黒粒少 破質	脚柱全周 20.1-20.2 1面
13	高 残 10.0 脚柱 復 15.0	外面は脚柱部タテヘラケズリ。裾部ヨコナデ後タテヘラミガキ。内面は上部オサエトやや軟質ナデ。下位ヨコナデと裾部ヨコナデ。 注記 20.0-20.3 1層、20.1-20.3 1層、S.907 20.0-20.3 1層	10YR7/3 に近い黄緑 やや軟質 白・赤黒～黒粒と 透明黒粒多、黒黒粒少 破質	脚上半 1/2 周、脚柱 1/4 周 20.1-20.3 1面
14	高 残 9.8	外面は脚柱部に密なタテヘラミガキ。脚上部と裾部ナデ後に杯底部を少しヘラミガキ。杯内面は底面はおそろくヘラミガキ。脚部内面はタテナデで粘土結核が少し残る。	5YR5/6 明赤黒 やや軟質 赤黒～黒粒多、白 粒～黒粒やや多、黒・透明 黒粒少 破質	脚柱全周 20.0-20.2 ベルト1層、 20.1-20.3 1層
15	高 残 12.7 脚柱 復 14.8	外面は全体をタテヘラケズリして脚上部ナデ。脚部ヨコナデ。杯内面は磨耗して調整不整。脚内面は脚柱部ヨコナデ。脚部ナデとヨコナデ。 注記 20.1-20.3 1層、20.1-20.3B トレド下、S.907 20.1-20.3 1層、20.2-20.3 1層	5YR5/6 赤 やや濃い 白・赤・透明～ 黒粒多、黒黒～黒粒少 やや軟質	脚柱全周、脚柱 1/12 周 注記左欄
16	高 残 8.2 脚柱 4.0	外面はナメナデとタテナデの後に密なタテヘラミガキ。脚内面はタテナデで、頂部がやや軟質だが中位以下は丁寧にナデている。脚部内面はヨコナデ。	2.5YR5/8 赤黒 やや軟質 赤黒粒と白・黒・ 赤・透明黒粒少 やや軟質	脚柱全周 20.0-20.1 5層、20.0- 20.2A ベルト
17	口 復 17.6 高 残 4.2	内外面ともに杯底部を斜位ヘラケズリ後、白磁部ヨコナデ。内外面全体を赤粉する。18と同一個体の可能性あり。 注記 19.3-20.4 1面、20.0-20.3 1層、20.0-20.3F ベルト、20.1-20.3 1層、20.1-20.4 上1層、S.907 北2層	2.5YR5/4 に近い赤 やや軟質 白・黒・透明 黒粒とやや多、灰黒と黒・透明 黒粒少 破質	口 7/12 周 注記左欄
18	高 残 23 脚柱 復 13.6	内外面ともに脚部ヨコナデ。脚柱部ヨコナデまたはヨコナデ。外面は口赤粉。外面のナメナデは赤色塗料時に生じた痕かもしれない。17と同一個体の可能性あり。	10YR5/4 赤黒 やや軟質 白・黒・透明 黒粒やや多 やや軟質	脚柱 1/4 周 20.1-20.3 1層、 S.907 20.1-20.3 1層
19	高 残 3.3 脚柱 復 11.4	内外面ともに脚部ナデ後に裾部ヨコナデ。外面の裾部ヨコナデは浅い2本の凹線を生じていて、ヨコナデの後にタテヘラミガキ。	5YR5/6 明赤黒 やや軟質 赤黒～白粒と白 磁粒やや多、黒・透明黒粒少 やや軟質	脚柱 1/6 周 20.0 2.0 1面
20	高 残 6.6	外面は脚柱部タテヘラケズリ後にタテヘラミガキ。杯部の内底面は磨いてあるかもしれないが不確実。脚部内面は粘土結核を多く含む。杯内面に、絞って細くしたために縦皺が多く生じている。	5YR5/6 明赤黒 やや軟質 白・灰色粒～黒粒と 透明黒粒多、赤黒～黒粒少 破質	脚柱全周 20.1-20.1 11面
21	高 残 9.8	外面は脚柱部と杯底部をタテヘラケズリ後タテヘラミガキ。杯底部タテヘラミガキ。杯内面は底面に多方向と体部に斜位のヘラミガキ。脚柱部内面は一部ナデ。中位ヨコナデ。 注記 20.0-20.1 1層、20.0-20.1 1面、20.1-20.1 1面	7.5YR4/6 赤黒 やや軟質 白・透明黒～黒粒 やや多、赤・黒黒粒少 やや軟質	杯底 1/4 周 注記左欄
22	高 残 7.9	外面は口赤粉およびナメナデナデ。密なタテヘラミガキ。脚内面はヨコナデで、粘土結核1層が少し残る。	5YR5/4 に近い赤黒 やや軟質 白・赤黒～黒粒と 黒黒粒やや多、透明黒粒少 やや軟質	脚上半 3/4 周 19.9-20.1D トレ
23	高 残 9.9	外面は口赤粉およびヨコナデ後に裾部ヨコナデ。下位にタテヘラミガキを施しているが、中位以下は不明。内面は上部ナデ、中位ヘラケズリ、下位ヨコナデ。	7.5YR5/3 に近い黄 やや軟質 白・黒・赤～黒粒 多、灰色粒と黒黒粒少 破質	脚上半全周 20.0-20.3 1層、 S.907 20.0-20.3 1層
24	高 残 7.7	やや薄く軽い。径7～8mmの孔を3方に持っていたうちの2方向が残る。外面は脚柱部タテヘラケズリと脚部ナデの後、全体をタテヘラミガキ。内面は脚柱部が密なナメナデで、下に結核を多く含む。脚部は斜位ヘラケズリ後に裾部ヨコナデ。 注記 19.9-20.1 1面、20.0-20.3 1層、20.0-20.3B トレ	2.5YR4/6 赤黒 やや軟質 白粒～黒粒多、赤・ 黒・透明黒粒少 やや軟質	脚上半 1/2 周、脚下半 1/3 周 注記左欄
25	高 残 9.8 脚柱 復 13.0	外面は脚柱部タテヘラケズリ。杯底部ナメナデケズリ。杯部内はヨコナデと推定されるが、磨耗して不明確。杯内面はミガキの有無が磨耗して不詳。脚内面は一部ナメナデ後上部を形成して下位ヨコナデ。裾部ヨコナデ。 注記 20.0-20.3 1層、S.907 20.0-20.3 1層、20.1-20.3 1層	2.5Y3/8 明赤黒 やや濃い 白・透明黒～黒粒 多、黒黒～黒粒と赤黒粒少 やや軟質	脚上半全周、脚柱 1/6 周 注記左欄
26	高 残 4.8 脚柱 3.8	外面は裾部ヨコナデケズリ。脚部に密なタテヘラミガキ。脚内面はやや密なタテナデとヨコナデ。 注記 20.0-20.1A ベルト、20.0-20.2 1層	2.5YR5/6 明赤黒 やや軟質 白・灰色塵～黒粒と 黒黒粒少	杯体一底一部、脚上半 1/2 周 注記左欄
27	高 残 5.7 脚柱 4.2	外面は密なタテヘラミガキ。内面は横位のユビナデ後に脚柱を絞って細くしたと見られる縦皺の絞り目を生じている。内面の脚部はナデ。	2.5Y3/6 明赤黒 やや軟質 白・赤・灰色粒～ 黒粒やや多、黒黒粒少 破質	脚柱全周 S.907 20.0-20.3 1層
28	高 残 8.3	外面はタテヘラケズリで、脚柱部はタテヘラミガキも行う。脚部内面は絞って細くしたために縦皺が生じ、粘土結核を多量に残す。内面裾部ヨコナデ。	7.5YR6/6 橙 やや軟質 白・黒・赤・透明 黒粒やや多、白磁粒少 やや軟質	脚柱全周、下半 1/2 周 20.1-20.2 ベルト1層 20.1-20.2 1面
29	高 残 8.1	やや薄い。外面は密なタテヘラミガキ。内面は粘土結核。単位ごとにユビオサエと軽いつけを行ない、積み上げ後は仕上げ調整を行わない。	7.5YR4/3 黒 やや軟質 白粒～黒粒やや多、 赤黒粒と透明黒粒少 やや軟質	脚上半全周 赤黒粒と透明黒粒少、 S.907 20.0-20.3 1層
30	高 残 7.6	外面に密なタテヘラミガキ。脚内面にユビナデ。内面の粘土結核は多く残されている。	5YR5/6 明赤黒 やや軟質 白・赤黒～黒粒と 黒黒粒やや多、透明黒粒少 破質	脚上半全周 19.5-20.3 1面
31	高 残 9.6	杯底一部は赤黒色。杯底部は黄灰色の粘土を使う。外面は脚柱部タテナデと裾部ヨコナデ。外面杯部はおそろくナデで、杯底と杯底部の間に接合面を多く残す。杯部の内面は磨いて調整不整。脚部内面は磨いて細くしたために縦皺が多く生じ、脚部はナデと下位にヨコナデ。	2.5Y3/5 明赤黒 やや軟質 赤黒～黒粒やや多、 白・黒・透明黒粒少 やや軟質	脚柱全周 20.0 2.0、 20.1-20.2 1層、20.1- 20.2 3層
32	高 残 8.1 最大 残 7.8	脚外周はタテナデ後にやや密なタテヘラミガキ。脚柱部内面はやや密なヘラケズリまたはヘラケズリで、少し尻尻を持つ。脚部内面はヨコナデ。	2.5Y3/4/6 赤黒 やや軟質 赤黒～黒粒多、白 粒～黒粒と黒黒粒やや多、透 明黒粒少 破質	脚上半一部欠 20.0-20.3 1層、20.1- 20.3B トレ

第5章 権現山遺跡 SG10区

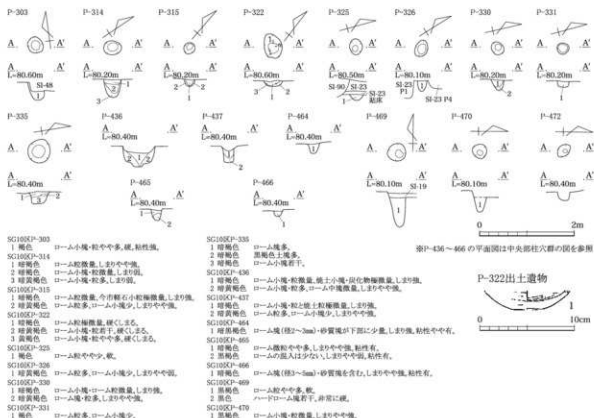
33 土師器 高杯	高 残 8.1 脚径 4.1	外面は胴部ナメヘラナデ後にタテヘラミガキを下平から基部にかけて平になるように削り、脚上端ヨコヘラミガキ。基部内底面に多方向ヘラミガキ。胴部内面はヨコヘラミガキ後に絞って細くしたために縦線が生じ、胴部にナメヘラナデ。	2.5YR5/6 明赤陶 やや粗い 白・赤黒～ 縦線多、黒・透明細粒少 やや破質	脚径全周 20.0.20.3 4層Aへルト
34 土師器 高杯	高 残 4.8	外面は脚なく丁寧なタテヘラナデ。内面は粘土土層積み面をヨコナデでおおよそ滑してから胴部を細く絞ったために縦線状の絞りが生じている。	5YR5/6 緑 やや粗い 白・赤黒～ 縦線やや多、黒・透明細粒少 破質	脚径全周 5.907.20.0.20.3 1層
35 土師器 高杯	高 残 6.0 脚径 残 7.0	薄く軽い。外面は胴部タテナデと基部ヨコナデの後に残るなタテおよびヨコヘラミガキ。内面は胴部ヨコヘラナデと基部ヨコナデ。	10YR5/4 に近い黄褐色 やや粗い 赤黒～縦線と白・ 透明細粒少	脚径全周、脚径 1/2周 20.1.20.2 1層
36 高 残 4.4 最大 残 12.0	外面は胴部タテヘラナデ。杯体～底部までタテヘラナデで、杯～胴部は端の縁が削り、胴内面と端は削り足形。杯体部内面はヨコヘラナデ。 [注記]20.1.20.1層、20.1.20.3 1層、20.1.20.3Bトレ、20.2.20.3 上面	2.5YR5/6 明赤陶 やや粗い 白・赤・透明細粒 やや多、白線と黒・灰色粒～ 縦線少 中々破質	杯径 1/2 周、脚径 1/2 周 注記は左欄	
37 土師器 小形甕	口 寛 9.0 高 残 7.3 最大 残 12.1	外面は胴部ヨコヘラナデ後に体部ヨコヘラナデ、頸部タテヘラナデ後に口縁部ヨコナデとタテヘラミガキ。内面は胴部ユビオサエとナデ。口～胴部ヨコナデとナメヘラミガキ。 [注記]19.8.20.4 4層、19.8.20.4 土師器包含層、19.9.20.2Aトレ、19.9.20.4Cトレ	5YR5/6 明赤陶 やや粗い 白・灰色粒と白黒・ 赤・透明細粒やや少 やや破質	口 1/3 周、頸 1/4 周 注記は左欄
38 土師器 小形甕	口 寛 14.1 高 残 4.8	外面は胴部タテヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。内面は胴部ヨコヘラナデで、粘土土層削り面をやや滑し、口縁部と頸部の境を待つようにヨコナデ。	10YR5/2 灰黄陶 やや粗い 白・灰色・透明細 粒少 縦線と黒黒 粒少 やや破質	口 1/2 1周、頸 1/6 周 5.907.20.1.20.3 1層
39 土師器 小形甕	口 寛 15.4 高 残 10.4	外面は胴部ナメヘラナデ後に胴部タテヘラナデと口縁部ヨコナデ。内面は胴部を軽くヨコヘラナデしただけ。胴部ナメヘラナデ、口縁部ヨコナデ、胴部外面が熟している可能性もあるが不確定。	2.5YR4/4 に近い赤黒 やや粗い 白・赤黒～縦線と 黒・透明細粒と黒黒粒やや多、 赤黒～縦線少 面質	口 1/2 1周、頸 1/6 周 20.0.20.3 1層、20.0- 20.3.4 層
40 土師器 小形甕	口 寛 13.8 高 残 10.8 最大 残 15.7	外面は体部ナメヘラナデ後に口～頸部をヨコナデし、胴部に斜位のヘラミガキまたは抉いいうナデ。内面は胴部ナメヘラナデ後に口縁部ヨコナデ。 [注記]20.0.20.3 1層、20.0.20.3 上面、5.907.20.0.20.3 1層	2.5YR5/6 明赤陶 やや粗い 白～赤黒～縦線多、 灰色・透明細粒と黒黒粒やや多、 赤黒～縦線少 面質	口 1/8 周、頸 1/6 周 20.1.20.2 上面、20.1- 20.3 層
41 土師器 小形甕	高 残 2.9 底 残 5.3	外面は1方向ナデと外面体部ナメヘラナデの後に体部下端ヨコヘラナデ。内面は多方向の軽なヘラナデ。縦線の有無は不明だが、内面が滑なので小形甕と判断した。	7.5YR5/6 明赤 やや粗い 白・透明細粒～縦線 やや多、灰色粒と赤・黒黒 粒少 破質	底 5/12 周 20.1.20.2 上面、20.1- 20.3 層
42 土師器 甕	高 残 2.3 底 残 6.0	外底面は多方向ヘラナデで平底にする。外面胴部下端ナメヘラナデ。内面は多方向の軽なヘラナデ。外面が熟している可能性あり。	7.5YR5/4 に近い明 赤やや粗い 白・赤黒～ 多、赤・灰色粒少	底 1/2 周 5.907.20.0.20.3 2層、20.0- 20.3 1層
43 土師器 甕	高 残 2.9 底 残 7.6	厚く重い。外底面は1方向ナデ。外面胴部タテヘラナデ。内面は底部を多方向ヘラナデ後、胴部に抉いヨコナデ。外面の割～底部に7cm以上の黒黒が有り、縦線使用量は見られない。	5YR6/6 緑 やや粗い 白・赤黒～縦線少 やや多、白・灰色粒と黒・透明 細粒～縦線少 中々破質	底全周 19.8.20.4
44 土師器 甕	高 残 1.8 底 残 6.4 最大 残 8.8	外底面は外周割り高い部分を削って平底に近づけている。外面体部下端をヨコヘラナデ。内面は底部に多方向ヘラナデ。外面が熟しているようにも見えるが不確定。	10YR5/3 に近い黄褐色 やや粗い 白・黒・透明細粒 多、赤黒～縦線少 破質	底全周 5.907.8
45 土師器 甕	口 寛 14.7 高 残 8.9	外面は胴部タテヘラナデ後に口～頸部をヨコナデし、胴部に再度タテヘラナデを行う箇所もある。内面は胴部に強い斜位のヘラナデ。口～頸部はナデ。破はない。 [注記]20.0.20.3 1層、20.1.20.3 1層、5.907.20.1.20.3 1層、北平2層	10YR4/2 灰黄陶 やや粗い 白～赤黒～透明 細粒多、赤黒～縦線少 破質	口 1/2 1周、頸 5/12 周 注記は左欄
46 土師器 甕	口 19.2 高 残 6.0	厚く重い。外面胴部ナメヘラナデ後ヨコナデ。口縁部は内面ヨコヘラナデ後に内外面ヨコナデ。内面胴部にユビオサエヨコヘラナデ。口縁部外面に黒が付着するが、量が少なく範囲も狭い。 [注記]20.0.20.3 1層、5.907.20.0.20.3 1層、20.1.20.3 1層	10YR5/3 に近い黄褐色 やや粗い 白・黒・透明細粒～ 縦線多、赤黒粒少	口 11/12 周、頸全周 注記は左欄
47 土師器 甕	口 寛 17.6 高 残 6.1	内外面ともに胴部ヨコヘラナデ。口～頸部ヨコナデ。	10YR6/2 灰黄陶 やや粗い 白・黒・透明細 粒やや多、赤黒粒少 やや破質	口 1/36 周、頸 1/3 周 5.907.20.0.20.3 1層
48 土師器 甕	口 寛 14.4 高 残 4.2	外面は胴部に縦線後傾位のヘラミガキ。口縁部ヨコナデ後、外面に縦線と縦面に傾位のヘラミガキ。内面のミガキは常に胴部まで磨いている。外面に黒が多くと付着する。	2.5YR5/6 明赤陶 やや粗い 赤黒～縦線と白・ 黒・透明細粒少 やや破質	底 1/4 周 20.0.20.3 1層、 5.907.20.1.20.3 1層

第13節 古墳時代の柱穴状土坑 (第190図)

SG10区における古墳時代の柱穴状土坑は17基を確認した。P-465・466は古墳後期のSI-110に切られ、同様にP-436・437は古墳後期のSI-51(a～c期)に切られるので、古墳時代柱穴と考えられた。P-436・437・464・465・466の5基が分布する「中央部柱穴群」の範囲内には、中世の柱穴P-425も含む(平面図は第204・205図)。P-425(中世)とP-436・437・464・465・466(古墳時代)を除く残りの中央部柱穴群は時期を確定できないので、時期不明の柱穴状土坑として扱った。各遺構の詳細は第112表にまとめた。図示できる遺物はP-322の1点だけである。

第111表 権現山遺跡 SG10区 古墳時代の柱穴状土坑 P-322 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ H×φ 寸法	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態 注記
1 土師器 杯	高 残 2.0 底 残 3.2 最大 残 8.8	内外底部は器面が荒れて調整不詳だが円底状。外面体部ヨコヘラナデ。内面底部は1方向多方向のやや密なヘラミガキ。	5YR5/6 明赤陶 やや粗い 白・黒・透明細粒 多、白線少 やや破質	底上16cm 底全周 SK-322.1



第190図 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の柱穴状土坑 遺構・遺物

第112表 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の柱穴状土坑

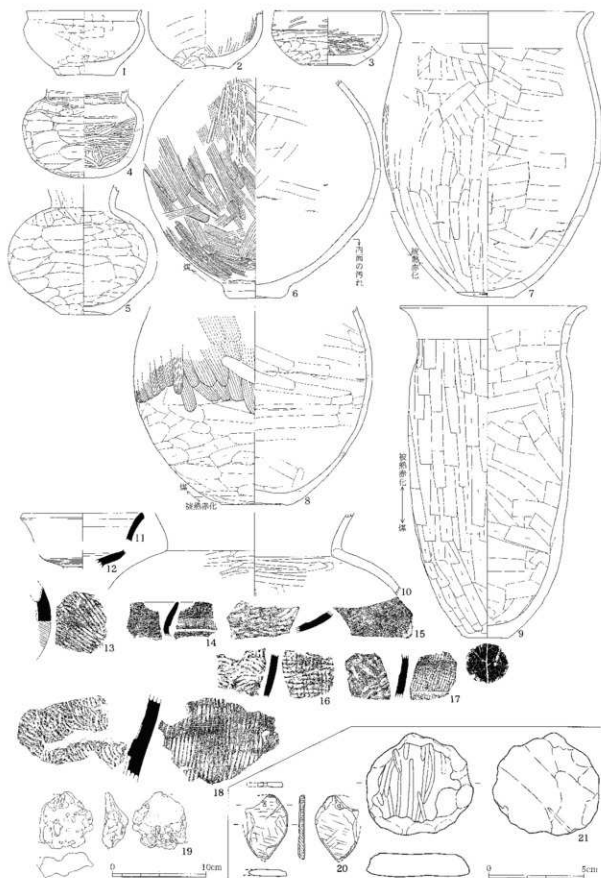
遺構名	グリッド	平面形	遺構	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	層上	
古墳前期の S148 と切り合われる。古墳中期以前。古墳時代の可能性あり。遺物なし。	P-303	S10-17.5	円形	S148 より古	0.36	0.34	0.38	単層
古墳前期の S123・24 との範囲は不明。掘削のピットの状況から古墳時代の可能性がある。古墳時代の P313-325-326-330-331 と近い時期と思われる。遺物なし。	P-314	S15-16.5	円形	S123 と重なる	0.38	0.31	0.40	
古墳前期の S123・24 との範囲は不明。掘削のピットの状況から古墳時代の可能性がある。古墳時代の P313-325-326-330-331 と近い時期と思われる。遺物なし。	P-315	S15-16.5	円形	S123 と重なる	0.26	0.24	0.18	
古墳前期の S123 との範囲は不明。掘削のピットの状況から古墳時代の可能性がある。古墳時代の P314-325-326-330-331 と近い時期と思われる。遺物なし。	P-322	S15-17.5	不整形	SK 46 より古	0.54	0.38	0.13	
古墳前期の SK 46 を避けてから確認したため、SK 46 より古い可能性もある。古墳時代の可能性もあるが、本の範囲の範囲が不明。古墳中～後期の土層群 4 片出土。	P-325	S15-17.0	円形	S123 より古	0.31	0.28	0.34	
古墳前期の S123 範囲内で確認。S123 に切り合われる。古墳時代の可能性あり。古墳前期の S124 との範囲は不明。遺物なし。P314 を参照。	P-326	S15-17.0	円形	S123 より古	0.37	0.26	0.34	単層
古墳前期の S123 内。土層断面はないが、上面に S123 との範囲があることなどから見て、S123 より古い。古墳時代の可能性あり。古墳前期の S124 との範囲は不明。遺物なし。P314 を参照。	P-330	S15-16.5	円形	S123 より古	0.30	0.24	0.24	層上石の入り方が P331 と同様。
古墳前期の S123 に切り合われる。S123 範囲内で確認。古墳時代の可能性あり。古墳前期の S124 との範囲は不明。遺物なし。P314 を参照。	P-331	S15-16.5	円形	S123 より古	0.26	0.24	0.15	層上石の入り方が P330 と同様。
古墳前期の S123 に切り合われる。S123 範囲内で確認。古墳時代の可能性あり。古墳前期の S124 との範囲は不明。遺物なし。P314 を参照。	P-335	S15-17.5	円形	S147 より古	0.52	0.47	0.27	
古墳前期の S147 に切り合われる。古墳時代の可能性あり。遺物なし。中央部群の分布域に所在。	P-436	S10-18.0	不整形	S151b より古	0.60	0.43	0.44	層上・土あり
古墳前期の S151b (調査時名称 S109) の床下で確認。南北長い。土層群の調整部 2 片出土。中央部群の分布域に所在。	P-437	S10-18.0	円形	S151b より古	0.34	0.30	0.38	層上あり
古墳前期の S151b (調査時名称 S109) の床下で確認。土層群の調整部 2 片と調整部 1 片出土。中央部群の分布域に所在。	P-464	S10-18.0	円形	S108 より新	0.48	0.44	0.45	単層
古墳中期の S108 範囲除去後に確認したが、S108 より新しい可能性もある。遺物なし。中央部群の分布域に所在。	P-465	S10-18.0	円形	S108P → P-465 → S110	0.40	0.45	0.46	
古墳中期の S108 範囲除去後に確認したが、S108 より新しい可能性もある。古墳前期の S110 と重なる。S110 の遺物が土層上にあることから見て、S110 より古い。古墳時代の可能性あり。遺物なし。中央部群の分布域に所在。	P-466	S10-18.0	円形	S108P → P-466 → S110	0.44	0.40	0.15	単層
古墳中期の S108 範囲除去後に確認したが、S108 より新しい可能性もある。古墳前期の S110 と重なる。S110 の遺物が土層上にあることから見て、S110 より古い。古墳時代の可能性あり。遺物なし。中央部群の分布域に所在。	P-469	S10-18.0	円形	S110b より古	0.40	0.37	0.76	単層
古墳中期の S110b と切り合われる。深くしっかりしたピットで、古い遺物の柱穴状と見られる。遺物なし。調整作業時に発生。	P-470	S10-18.0	円形	S110b より古	0.32	0.30	0.46	単層
古墳中期の S110b を避けてから確認したので、S110b に切り合われると見られる。遺物なし。調整作業時に発生。	P-472	S10-17.5	円形	P-472 → S147 → SD-263(7)	0.33	0.24	0.22	土層の状況なし
古墳前期の S147 より古い可能性もある。中央部群の SD-263 と重なる。おそらく SD-263 より古い。調整作業時に発生。	P-474	S10-17.5	円形	P-474 → S147 → SD-263(7)	0.33	0.24	0.22	土層の状況なし

第14節 古墳時代の遺構外遺物 (第191図、写真図版174・212)

1 は大きな平底面を持つ内斜口縁杯。2・3 中中期の杯で、やはり底面が大きい。3・4・5 は残存度の大きな3個が試掘トレンチで一緒に出土し、古墳中期末葉の SD-527・540 などに関わる遺物かもしれない。6・8 は杯で用いた煤が付着する裏、7・9 はカマドで用いた裏。12 は脚柱部までカキメがある後期の高杯で、琴塚塚 8 号墳に類例がある(『東谷・中島地区遺跡群』4)。13 は提瓶か横瓶の閉塞門板。15 と 17 はおそらく古墳中期の須恵器、14 は後期の在地(関東)産須恵器であろう。16 は真格子叩き調整を行う古墳終末期の在地製品で、三鑫窯産の胎土に近い。18 は灰色と酸化焼成の橙色が互層状になる裏で、古墳時代溝 SD-304b 出土破片に似る。19 は椀形鍛冶滓。土器片製門板(21)は縄文時代にもみられる遺物で、古墳時代の SD-41・42 にもあるが、事例は多くない。剣形石製模造品(20)は SG10 区 SI-2 などにある。

第113表 権現山遺跡 SG10 区 古墳時代の遺構外出土遺物

番号 種類 図版	大きさ mm・形	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 寛 12.2 高 6.8 底 6.1 最大 底 12.8	外底面は多方向ヘラナデ。外面は体部ヨコヘラナデ、口縁部ヨコナデ。内面は底部に1方向、体部に横位のヘラナデ。内面口縁部ヨコヘラナデ後ヨコナデ。	7.5YR7/4 白・赤黒-細粒と黒・透明細粒やや多。 やや硬質	SG10 区南東部地帯 SK-803 ~ 806 周辺 口1/12 残。第1/6 貝、底全周 17.5-19.0 表土
2 土師器 杯	高 残 6.2 最大 残 12.1	外底面はヘラズリ状に伏せて上げ底状にする。外面は体部下端ナメヘラズリ。体部はおそらくヨコヘラナデ。内面は底部に1方向と体部に横位のヘラズリ。	10YR5/4 白・赤黒-細粒と黒・透明細粒やや多。 やや硬質	SI-32 ~ 34 付近 底全周 18.5-18.0 表土
3 土師器 杯	口 11.6 高 5.8 底 5.6 最大 12.3	外底面は四隅方向のヘラズリで凹底状。外面口縁部ヨコナデ後に残る底コヘラミガキ。外面体部に充分のあるヨコヘラナデ。内面はヨコナデ後に底部に1方向と体部に横位のヘラミガキ。	10YR7/6 明赤黒 やや硬質 赤黒-細粒と白・黒・透明細粒少 やや硬質	22-19 グリッド試掘トレンチ 口3/4 貝、底全周 UT-TN-SG TX22-19 2
4 土師器 遊かけ鉢	高 残 9.4 底 2.4 最大 底 12.8	外底面は多方向ヘラズリで丸底にする。外面は胴部タテヘラナデ後に中下位ヨコヘラズリ。胴部ヨコナデと胴-胴部ヨコヘラミガキ。内面は下位タテヘラミガキと中位ヨコヘラミガキ。胴-胴部タテ後に頸部ヨコヘラミガキ。内面胴部に接合痕がよく残っている。内面をよく磨いていることから見て、口縁部が削り込まれた品と推定できる。	5YR5/6 明赤黒 やや硬質 白・黒・透明細粒少 やや硬質 赤黒-細粒少 やや硬質	22-19 グリッド試掘トレンチ 口5/6 貝、底全周 UT-TN-SG TX22-19 1
5 土師器 小皿	高 残 13.8 底 5.1 最大 15.8	外底面は1方向ヘラズリで凹底状。外面は胴-胴部ナメヘラズリ後に体部の中位ヨコヘラナデと下位ヨコヘラズリ。内面は底部に1方向と体部に横位のヘラナデ。胴部エッジとエッジサエ。胴部ヨコナデ。外面下位に 8 × 11mm 位の黒斑あり。	7.5YR7/6 橙 やや硬質 赤黒細多、透明細粒と白・黒・透明細粒やや多 やや硬質	22-19 グリッド試掘トレンチ 口2 貝。底全周 UT-TN-SG TX22-19 3
6 土師器 甕	高 残 23.1 底 5.0 最大 25.1	外底面は中央が平で凹底状。外面が無調整。胴外面側-胴口ハケ後下位ナメハケ。上位タテウミガキ。胴外面ナメヘラナデ。底以外外面に煤が密着に多い。内面上位が暗褐色に汚れる。	7.5YR6/6 橙 やや硬質 白・透明細粒少 黒多。黒細粒少 平やや硬質	SI-9-88 付近 第3/4 貝、底全周 18.0-17.5 溝の東表土
7 土師器 甕	口 寛 21.5 高 30.2 底 5.8 最大 底 23.2	外底面は1方向ヘラズリで低い凸面。外面は胴部タテヘラナデ後に下位ヘラズリ。内面はヨコヘラナデ。内外面の口縁部にヨコナデ。外面の胴下部が焼熟赤色。	10YR6/4 白・赤黒 やや硬質 白黒と白・赤・透明細粒-細粒少 やや硬質	SI-34-40 付近の SD-201a 表土 口1/12 貝。第1/6 貝、底3/4 周 19.0-17.5 溝表土
8 土師器 甕	高 残 20.9 底 7.0 最大 25.3	外底面は狭な1方向ヘラズリで中央が凹む。外面下位は横-斜位ナデ後に膝み上げ休止面の厚い部分をヨコヘラズリ。外面上平に浅いタテハケ。内面は底部に1方向ナデ。胴部にヨコヘラナデ。	2.5Y5/2 暗灰黄 粗い 白・灰色細-細粒多、赤・透明細粒-黒細粒やや多 平やや硬質	SI-55 付近の SD-201a 表土 胴下平と底全周 19.0-18.5 溝表土
9 土師器 鉢	口 19.7 高 35.0 底 4.5	外底面は裏の裏面による木蓋面で、おそろいカンワの痕。外面は胴部タテヘラズリで胴下位だた下向きに削る。内外面の口縁部をヨコナデ。内面は胴部ヨコナデで、胴部下位のヨコヘラズリは粘土組織み上げ休止面の所いたるころを薄くするために行っている。胴部下位の縦と胴部上-中位の旋焼部が全面的均分分平に削り明確な形で、カマド構築材に用いたものと推定される。	10YR7/4 白・赤黒 やや硬質 白・赤・灰色細-細粒と黒・透明細粒多 軟質	SI-34-40 付近の SD-201a 表土 口1/6 貝、底3/4 貝、胴-底全周
10 土師器 大形壺	高 残 8.8 最大 残 31.0	胴-胴部は破れが不揃いで接合できない。外面は胴部ヨコヘラナデ。内面は胴部ヨコヘラズリ後に胴部ヨコヘラナデ。内外面の胴部にヨコナデ。	7.5YR6/4 白・赤黒 やや硬質 白・黒・透明細粒少 やや硬質 赤黒細少 やや硬質	SD-41-42-221 が重畳する付近の表土 第1/6 貝 16.5-17.7 表土 平やや硬質
11 土師器 壺	口 寛 12.6 高 残 3.0 最大 底 13.2	内外面ともに回転コナデで、口縁は右回転(時計回り)かもしれないが不確か。	2.5Y5/1 赤灰 やや硬質 白細粒少 やや硬質	SD-41-42 北端付近 口1/8 貝 18.5-18.5 表土
12 土師器 高杯	高 残 1.9 最大 残 9.2	内外面ともに口ヨコナデの後に外面底部-胴柱部にカキメ。内面ナデナデ。削りして外面カメシメ文時ともに口縁は右回転(時計回り)。	7.5Y5/1 灰 やや硬質 白粗-細粒少 やや硬質	SI-14 ~ 16-19 ~ 21 付近 底1/4 貝 18.0-16.5 表土
13 土師器 提瓶?	高 残 1.5	閉塞門板が外れたもの。外面は本日平行の溝を削った形を板で平行叩き。内面はやや緩なユビオサエ。	5P7/1 明灰黒 細黒 白粗-細粒やや多、半透明細粒少 破質	SD-814-821-823 付近 19.5-20.5 表土
14 土師器 高	口 寛 10 ~ 12 高 残 3.6	外面は胴部に凹線1条。口縁部下平に上面の工具で右から左へへら削り流状文。内面は胴部ヨコナデで、口縁は右回転(時計回り)かもしれない。内面胴部は凹凸があり、口縁部をききとんとしていないようである。	5Y4/1 灰 やや硬質 白細粒と黒色消出 粒少 やや硬質	SG10 区南東部で現地に近い位置 口1/12 貝 17.3-18.7
15 土師器 甕		外面はナデ。内面は浅い同心円的文具。外面に黒色の自然熱が明顯にかかっている。破面は暗赤灰色。	N5/0 灰 やや硬質 白粗-細粒やや多 硬質	SG10 区南端の隣接地帯 第1/6 貝 16.5-18.0 貝の南



第191図 権現山遺跡SG10区 古墳時代の遺構外出土遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

16 須恵器 蓋	高 残 4.8	縦楕に溝を削った叩き板で外面に真格子目き目。内面は同心円文当具風。	25Y7/4 浅黄 緑青 白磁粉少 やや軟質	SI-58-59・110(付近)の遺 構確認 製部1片 20.2-20.4 上面
17 須恵器 甕	高 残 4.6	外面は縦格子目きの浅い横位の凹線。内面は浅い同心円文当具風。外面 に黒色の自然釉が明瞭で、上部は釉が黄色味を帯びる。裏面は暗赤灰色。	A3.0 暗灰 やや軟質。白釉～細粒やや多。 透明粗粒少	SG10区南東部で低地に 近い遺構 製部1片 17.2-18.8 表土
18 須恵器 甕	高 残 9.2	本目平の溝を削った叩き板で外面に平行叩き跡。5～6本以上の工具で 横位の方本。内面は同心円文当具風。外面は灰褐色(SYR5/2)に発色し、裏 面は浅黄褐色(3.5YR8/4)と灰白色のサンドイッチ状。	10YR8/1 灰白 やや軟質 白・赤粒～細粒と 黒・透明粗粒少	製部1片 去表20-18
19 輪形磨治 滓(小)	長 6.0 幅 5.7 厚 2.7 重 99.7	左側部が破面となった小形の輪形磨治滓。上面は平滑で右側の肩部が傾斜す る。下面は上手側部が平床土に接しており、下手側は1cm大前後の木炭灰 に覆われる。浮質は磨面で気孔はやや也大気味。磨治滓連通物構成No.73。	磁器度 2 メタル度 なし	23-18 グリッドの確認 調査トレンチ 破面1面 UT-38-SG-D23-18
20 石製磨治 滓(厚)	長 残 3.4 幅 残 2.3 厚 0.34 重 残 3.69	裏面は磨理に当たって割った面で、2方向程度の磨理を残す。外面は横位 および斜位の粗い磨理面がよく残る。孔は左側の面から穿孔し、右側の面に 穿孔磨理を生じる。孔径は1.35～1.40mmで、初孔径と終孔径に明確な大き さの違いは見られない。	10Y4/2 オリーブ 緑色の発達した磨面で軟質な 滑石片質	SG10区西平の割平部分 約1/4 20.8-16.3
21 土師器 土器片 瓦板	高 5.5 厚 1.2	外面はヘラツギが軽ヘラツギ。内面は1方向のヘラツギまで、皮革を吸 着し黒色になるが、意図的なものかどうかは断片が小さいので不詳。破片の カーブがあまりないで、裏のような大きめの磨理と思われる。外面を折り 取って凹面に加工している。	5YR6/6 緑 やや軟質 白・黒・赤・透明 粗～細粒少 やや軟質	SD-201a 南西隅付近 製部1片 17.3-17.0

第15節 平安時代の竈穴建物跡

SG10区 SI-90 (第192図、写真図版142・143・212)

【位置】SG10区南部の18-16・17グリッドにある。同じく平安時代の遺構としては、南東に22m離れてSK-235がある。北西約40mにある古代道路遺構SG1区SD-301は東山道と推定され、『東谷・中島地区遺跡群』3)、この道路遺構が北方のSG10区SD-250a・b(本章第17節)へ続く。古墳時代のSI-23・105をSI-90が北部と南部で切り、時期不明のSE-236に切られる(SI-105→SI-23→SI-90→SE-236)。貼床下にSI-105のP1～P4がある(断面図B-B')。古墳後期のSI-22と時期不明のP-406が南西に近接し、古墳時代のP-325がすぐ北にある。

【規模と形状】長方形の建物跡で、主軸方位はGN-4°-E。東西4.48×南北3.20m。最も高く残る南東隅付近で残存壁高29cm。柱穴・入口施設・貯蔵穴・壁溝・間仕切溝が床面に認められない。

【カマド】北壁の東寄りにある。カマドの主要部分は北に張り出した掘方の中に入り込んで作られている。ただし、周囲にある古墳時代のSI-23をSI-90カマドよりも先に掘り下げたために、写真ではカマドが高く残されているように見える。東西土層断面(カマドAA')によると、煙道に入り込んだ部分のカマド袖粘土であるカマド5層は、掘方の下部に少し確認できる程度である。この層はカマド袖を焼したか又は崩れた残土層であろう。このように袖粘土や焼土が少なかったため、SI-90カマド袖の南半をSI-23調査時のトレンチで切断してしまい、袖の推定形を平面図に破線で示した。両袖幅は推定112cm、煙道先端から袖先端まで推定114～120cm。煙道底面より上10cmのカマド4層中に須恵器杯(3)破片がある。

【覆土】自然埋没と思われる。1層中にごく少量含む白色軽石粒は、SI-105覆土から流入した古墳時代テフラ粒であろうか。2層には縄文草創期の今市軽石粒(Nt-1)が地山から流入している。

【遺物出土状況】全域で少量ずつ出土した。北壁ぎわの床面付近に残存度の高い杯がある(1と4)。カマド南側の床面に支脚の可能性のある石(6)と編物石(5)がある。

【出土遺物】遺物は少ない。須恵器杯と土師器杯がほとんどで、土師器甕(あるいは鉢?)の破片が少し混在する程度である。図示した須恵器杯は4が三義窯産である。他の杯1～3は雲母が少ない新治窯製品かもしれない。図示以外の土師器合計172片・1.625gの内訳は、杯71片・391g、高杯15片・210g、壺甕類86片・1,024g。須恵器は杯4片・29gと甕1片・8g。このうち須恵器杯は益子窯産で同一個体。須恵器甕1片は古墳時代須恵器甕片の混入と思われる、SI-10-12他にある須恵器甕片と同一個体の可能性もある。重複する古墳時代建物から混入したと考えられる古い遺物が多く見られる。

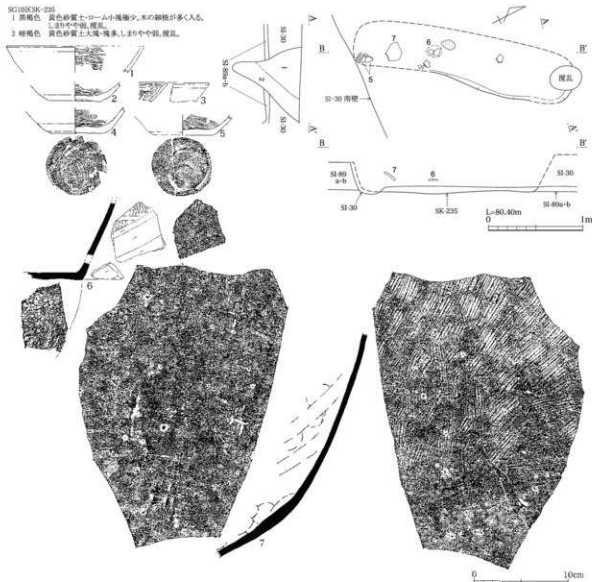
第 16 節 平安時代の土坑

SG10 区 SK-235 (第 193 図、写真図版 143)

SG10 区南部の 17.5-17.5 グリッド。同じく平安時代の遺構は、北西に 22m 離れて SI-90 がある。古墳時代の建物跡 SI-30・89a・89b を切り、SI-89 (a・b) → SI-30 → SK-235 の順に重複する。

SI-30 の床面近くでかろうじて把握した平面形は長楕円形で推定長径 2.40 × 短径 0.54m、中軸は N-51°-E。遺構確認面からの深さは 33 ~ 38cm で、周囲にある SI-30 床面より 2 ~ 3cm 深い。SI-30 の土層ベルトで断面 A-A' を観察した部分は木根痕? が重複し、本来の遺構断面形が不明である。断面 A-A' では遺構確認面から深さ 73cm だが、この値は攪乱で深くなっている。断面図の 1・2 層も攪乱されしまりが弱い。

SI-30 覆土中に掘り込まれた SK-235 の遺構を把握することが遅かったので、SK-235 の遺物と同時期や同個体の平安時代遺物が SI-30 の遺物として取り上げられている。SK-235 の 6 と同一個体の須恵器平底甕片が、SK-235 から北西へ 3m 離れた位置で、SI-30 の竪穴西端付近の覆土下位にもあるので、SK-235 に関連する別の平安時代遺構が SI-30 覆土中に掘り込まれていたと考える余地も残る。



第 193 図 権現山遺跡 SG10 区 SK-235 遺構・遺物

第 115 表 権現山遺跡 SG10 区 SK-235 出土遺物

番号 種類 名称	大きさ (mm・g)	特 徴	色調 胎土・産成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 14.6 高 残 2.8	内外面を回転ヨコナデ後、内面を横位のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。	10Y86/4 に5~黒粒 やや織質 黒・透明細粒少 やや硬質	SI-30 西端部の 1c 層 口 1/6 現 SI-30 西面 1c 層
2 土師器 杯	高 残 2.1 底 5.7	内外面に回転ヨコナデ。外底面は回転糸切りで、切り離し時のロクロは右回転。内面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。 [注記] SI-30 南東 3 層、P3 南 1c 層、C-ベルト西 3 層	7.5Y86/6 暗 やや織質 赤黒～細粒と白・ 黒・透明細粒少 やや硬質	SI-30 南面と南西部で SK-235 付近の 4 片が撮 合。 底 1/3 層 注記は左欄
3 土師器 杯	口 径 13~15 高 残 2.1	内外面を回転ヨコナデ後、内面を横位のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。	10Y86/6 明青 織質 白・黒・透明細粒少 やや硬質	SI-30 口 1/12 現 SI-30
4 土師器 杯	高 残 2.6 底 5.7	内外面に回転ヨコナデ。外底面は回転糸切りで、切り離し時のロクロは右回転。内面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。 [注記] SI-30 南東 3 層、P3 南 1c 層、C-ト東西平	7.5Y85/3 に白 織質 赤黒～細粒と白・黒・ 透明細粒少 やや硬質	SI-30 の南面が SK-235 付近の 7 片が撮合 底 11/12 層 注記は左欄
5 土師器 杯	高 残 2.2 底 6.1	内外面に回転ヨコナデ。外底面は回転糸切りで、切り離し時のロクロは右回転。内面は底部に 1 方向と体部に横位のヘラミガキ。内面に炭素吸着の黒色処理。	5Y85/6 明赤 織質 赤黒～細粒と白・黒 粒少 硬質	南面底上 8~9cm、SI- 30 東面 1c 層の小破 片が撮合 底全周 3、9、SI-30 東面 1c 層
6 須恵器 蓋	高 残 8.1 底 径 20~30	外底面は平底で不規則な凹凸が多い。外面側部に横位の平行叩き後に斜いヨコナデを少し垂し、割下端を横～斜位ヘラミガキ。内面は横位のナデと見られ、割直して調整不明の部分が多い。土質質に近い色調。	5Y85/6 明赤 やや粗い、白雲母粒～細片多 白・赤・灰色、透明細粒 少 やや硬質	SI-30 の南面が 底上 1.6m にも 1 片あり 底 1/24 層 6、SI-30 56
7 須恵器 蓋		胴径 50cm 以上と思われる大形品。外面は木目平行の溝を彫った叩きで、胴部に縦～斜位の平行叩き。底部に回転を利用しないナメナデ。内面は無文。当製直後に部分的な斜いナメナデ。外面底部に当製後の凹凸が目立つ。外面上平と内面底近くは暗灰色～黄灰色の自然釉が薄く付着する。	7.5Y5/1 灰 織質 白練と赤・黒・透明粒 粒少 硬質	底上 2cm 割下平 1/8 層 4

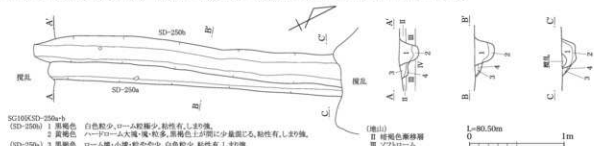
平安時代（9世紀中葉～後葉）のロクロ成形土師器杯や須恵器裏片がある。1片だけ出土した須恵器裏大破片（7）と同一個体の小破片が広域に見られる。その分布は、重複する SI-30、遠く離れた古墳時代の SI-61（北へ 75m）と SD-527（北へ 145m）および時期不明の SX-308、北東 50m の中世井戸 SE-252 にあり、北 48m の時期不明土坑 SK-254 にも 2cm 大の小片がある。遺構は希薄だが、SG10 区を平安時代に利用したことがわかる。図示以外に古墳時代土師器片が少量あり、SI-30 などから流入・混入したと見られる。

第 17 節 古代の道路跡

『東谷・中島地区遺跡群 3』で「推定東山道」として報告した道路側溝に続く一部を、SG10 区で調査した。ただし、古代の溝であることを確認できるような出土遺物はない。隣接する権現山遺跡 SG1 区および杉村遺跡 SG1 区で調査した古代道路側溝との位置関係を、SG10 区全体図に示す（第 11 図左上）。『東谷・中島地区遺跡群 3』（藤田 2003, pp.32,35）で報告した、推定東山道左側溝である杉村遺跡 SG1 区 SD-300 の延長線にあることがわかる。周囲は現代の重機による採土工事で遺構が消滅している。SD-250 のある付近だけは送電線用鉄塔の直下だったので削平を免れたものである。土層断面からみて掘り直しを行っているので、幅の広い旧期溝を SG10 区 SD-250a、幅の狭い新期溝を SD-250b とした。

SG10 区 SD-250a・b（第 194 図、写真図版 143）

SG10 区北西部の 21-15 グリッドにあり、南北両端は土探り工事の擾乱で消滅する。重複する遺構はない。埋土は自然埋没状で、広い旧期溝→狭く深い新期溝への掘り直しを 1 回確認できる。



第 194 図 権現山遺跡 SG10 区 SD-250a・b 遺構

新期 (SD-250b) は溝幅 56 ～ 62cm、残存する深さは 30 ～ 43cm。旧期 (SD-250a) は溝幅 96 ～ 112cm、残存する深さは 16 ～ 21cm。溝底面は特定方向へ傾斜しない。旧期・新期ともに覆土中に少量みられる白色粒子は、テフラの可能性もある。新期溝と旧期溝の覆土が類似しているため、同様な条件下で埋没したと考えられる。旧期溝の埋没後、それほど長い時間をおかないで溝を掘り直したことがわかる。

新期の SD-250b からは土師器合計 15 片・103g (杯 7 片・39g、甕類 8 片・64g) だけが出土し、旧期の SD-250a からは土師器合計 5 片・66g (杯 3 片・34g、甕類 2 片・32g) が出土した。どれも少量の破片で、古墳時代集落から古墳中期と後期の遺物が混入したものと見られる。図示した遺物はない。

第 18 節 中世の井戸

遺物から中世であることを確定できた井戸は 6 本である。この他に時期不明の井戸 5 本 (SE-236・316・345・352・455) が中世の井戸を含む可能性もある。各井戸は最下部または上層までの埋土を 1mm メッシュのふるいで水洗して遺物を検出した。木の小片・細片が若干出土した程度で、何も検出できなかった井戸も多い。SE-569 は木製遺物が豊富で、木の細片もやや多い。

SG10 区 SE-232 (第 195 図、写真図版 144)

[位置] SG10 区中央部の 20.0・17.0・17.5 グリッド。古墳中期後葉の SI-49 を切る。時期不明の土坑 SK-241 と重複するが、新旧関係は不明である。

[規模と形状] 確認面で東西 2.73m、南北 2.52m の円形で、深さ 3.18m。途中で径 110cm 程度まで狭くなり、その下部は壁面砂層の崩壊で広がる。下部の平面形が楕円形状になるのも、壁面崩壊の変形による部分が大いといと推測される。底面標高は 77.28m。

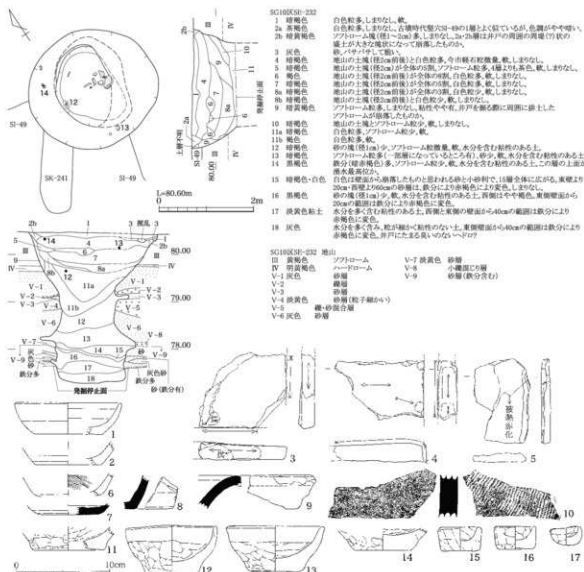
[覆土および地山層] 夏季の 7 月下旬には標高 79.6m 付近で湧水したので、ここまでを手掘りで調査した (断面図 B-B')。10 ～ 15cm 大の丸石が入らない点で、時期不明の SE-236 や中世の SE-237 に似ると観察されている。地下水位が低くなる冬季に、標高 77.6m 付近まで南西部を重機で断ち割った。上部には白色粒子の多い層が認められる (1 ～ 11 層)。下半部は水分の多い粘質土層が主体である。鉄分が多い 14 層の最上部が湧水位かと思われた。地山の鉄分は 16 層に対応する壁面の砂層に多い。最下層である 18 層は井戸底に堆積した粘性の弱い層で、臭くないへドロという印象を受けた。

周囲の地山を見ると、礫層よりも砂層がずっと厚い点が、SE-569 や SE-377 の地山と異なる。西方 10m 付近の削土掘乱部底面で観察できる地山も、礫層よりも砂層になっている。

[出土遺物] 井戸底面から 10 ～ 20cm 浮いた位置で、平面図中央部に記入してある自然籾・炭片・径 1cm ほどの木枝が出土した。遺物量は少ない。土師質土器 (1・2) や砥石 (3・4・5) がこの遺構に伴う中世遺物と考えられる。奈良時代後半から平安時代の須恵器・土師器 (6 ～ 9) と、古墳時代の須恵器・土師器・粗製小形土器 (10 ～ 17) もあるが、小破片であり、12 ～ 14 の出土位置をみても混入品とみられる。重複する古墳中期の SI-49 から流入した遺物が多いと考えられる。

第 116 表 権現山遺跡 SG10 区 SE-232 出土遺物

番号 種類	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 質土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師質 杯	口 径 11.2 高 3.3 底 径 7.2	内外面は回転ヨコナデ。外底面は不明瞭で、回転系切り磨しの可能性がある。散らかめの礫化炭灰層。	7YR7/4 に近い暗褐色 縞縞 黒縞粒や多 少や軟質	北平部 16 層 口 1/8 層、底 1/12 層 北平 16 層
2 土師質 杯	高 残 2.5 底 径 6.8	内外面は回転ヨコナデ。外底面はナデおよび乾燥時に付いた平行線状の圧痕。散らかめの礫化炭灰層。	10YR7/2 に近い黄褐色 縞縞 白・黒・灰色縞粒少 軟質	北平部 13 層 底 1/8 層 北平 13 層
3 石磨 砥石	長 残 9.1 幅 残 8.0 厚 1.9 重 残 174.1	瓶状石臼の 2 個目を破面に使用して、やや平面に磨耗している。破面以外の側縁と両面に薄く炭が見られ、図示した部分に多くまとまっている。破面も含めて礫化炭分が埋没中に付着している。	5Y4/1 灰 砥石の磨理を持つ粗粒の硬砂岩	北平部 3 層 2 個目残 北平 3 層
4 石磨 砥石	長 残 9.5 幅 残 2.0 厚 2.0 重 残 167.9	瓶状石臼の 1 面を 1 個目を破面に使用して、かなり平面に磨耗している。図示した面の裏面は少し凹凸のある破面で、突出した高い部分だけがくわ平に磨耗しているため、砥石に使うと誤った程度の使用面と思われる。	5Y5/1 灰 砥石の磨理を持つ粗粒の硬砂岩	北平部 14 層 1 個目残 北平 14 層



第195図 権現山遺跡SG10区 SE-232 遺構・遺物

5	石 5 底 9.0	瓶状の破片で、破面は残っていない。焼熟して表面が黒化し、更に輪縁が融解したような状況が認められる。残存重量 65.2g。	25Y6/3 に近い 瓶状の頸部を持つ顆粒の硬砂	51-49の1層とSE 232 南西区の各1片が組合全埋欠層
6	土 2 底 2.3	外底面は回転軸を切り離し、外面体部は回転コナナデ。内面はヨコハマガキ牛乳に炭素吸着の黒色陶器。平安時代前期の遺物が混入。	5Y8/4 に近い赤褐色 白・黒・灰色細粒少 やや硬質	注記は凡層 北平層16層 底176層 北平16層
7	土 1 底 1.3	平底の外周に少し腰を持つ。内外面体部に回転コナナデ。外底面はへら切り離し後に斜にナデ。へら切り離し時にロク左回転の可能性もあるが不確実。	7.5Y5/1 灰 やや硬質 白粒～細粒少	出土不明(注記部除く) 底148層 北平*** 北平の11a層
8	土 3 底 3.4	外底面は蓮華ナデ。内外面体部は回転コナナデ。平底露の可能性もある。奈良～平安時代の混入遺物。	5Y5/2 灰褐 細密 白・透明細粒少	底124層 北平11a層
9	土 20~40 底 3.5	口の縁部としてはやや薄いので、小形の甕と考えられる。奈良～平安時代の混入遺物。益子型鉢部製品の可能性あり。	N5/9 灰 細密 白細多、白砂少	北平12層 口124層 北平12層
10	土 5 底 5.5	外面はほぼすべて木目平の溝を彫った印巻板で平行印巻。内面は無文当目煎およびナデ削り。厚手なのでかなり大型。古墳時代(中前期)の遺物が混入。	N5/9 灰 やや粗い 白粒～細粒多、白砂やや多	A-A断面 割製 SK 232 D D'セウ
11	土 2 底 2.4	外底面は1方向へラケズリでやや凹凸のある平底状。外面側下層コナナデナリ。内面底面は多方向へラナデ。焼熟赤化度が見られないので甕の可能性もある。古墳時代の遺物が混入。	10Y87/3 に近い黄褐色 粗い 白・灰色粗～細粒多、赤・透明粗粒と黒砂少	南西区 底12層 底176層 SK 232 南西区
12	土 9.4 底 5.1	外底面はやや丁寧なナデ。ナデ以前は木炭層があったかもしれないが不詳。外面体部はエトオサエと内面体部ナデの後に内外面口縁部コナナデ。古墳時代の遺物が混入。	10Y87/4 に近い黄褐色 粗い 白・黒・透明細粒少	11a層(底土236cm)。4層にも小片あり 口512層。底712層 2.4層。SK 232 南西区
13	土 100 底 4.8	外底面はやや丁寧なナデ。外面体部はエトオサエと内面体部ナデの後に内外面口縁部コナナデ。古墳時代の遺物が混入。	5Y8/6 粗 やや粗い 白・黒・透明細粒少 やや硬質	4層1層土283cm 口176層。底173層 5

第5章 権現山遺跡 SG10区

14 土師器 小形土器	高 残 2.4 底 残 6.0	外底面はやや緩やかなデ。外面体部ユビオサエ。内面多方向ナデ。古墳時代の遺物が混入。	5YR5/6 明赤褐 織密 白・黒・透明細粒やや 多、赤粒少 硬質	4層(底上350cm) 底1/2層、 中3
15 土師器 小形土器	口 残 4.6 高 残 2.5 底 残 4.2 重 残 31.0	外底面は緩やかなデで、素材の粘土質の境界が瞭然と見える。体部はおそらく1段だけ粘土を積んで、外面ナメスビナデ。内面は横～斜位のユビナデ。古墳時代の遺物が混入。	5YR6/6 緑 やや粗い・重粒～細粒やや多、 赤粒～細粒と白細粒少 やや硬質	北平部 12層 口1/4層、底全層 北平12層
16 土師器 小形土器	口 残 4.4 高 残 2.4 底 残 3.0 重 残 36.6	外底面は丁寧なナデ。外面体部ユビオサエ。内面ナメスビナデ。粘土結を積み上げないで、手ねりで成形していると考えられる。古墳時代の遺物が混入。	10YR5/2 灰黄褐 織密 白・黒・赤細粒少 やや硬質	北平部 11a層 口1/3層、底2/3層 北平11a層
17 土師器 小形土器	口 3.3 高 1.8 底 2.2 重 残 15.5	外底面は丁寧なナデ。内外面体部ユビオサエ。粘土結を積み上げないで手ねりで成形している。古墳時代の遺物が混入。	7.5YR6/4 にぶい 織密 白・赤・透明細粒少 やや硬質	口1/2層、底全層 SK-232B-E

SG10区 SE-237 (第196図、写真図版144・212)

【位置】SG10区南部の18.5-17.0グリッド。時期不明の土坑SK-353を切る。西側に時期不明の井戸SE-236がある。

【規模と形状】確認面で東西2.65m、南北2.27mの円形で、深さ3.16m。底面標高は77.12m。途中で径130cm程度まで狭くなり、下部は壁面崩落によって再び広がる。

【覆土】現地調査時の所見では、最上層中に10～15cm大の丸石が多い点が時期不明のSE-236に似ると観察されている。東側から大量の土を入れて埋め戻した様子が読み取れる。標高79.2m付近までを手掘りで調査した後、標高77.2m付近まで重機で南半部を断ち割った。

【出土遺物】この遺構の時期を示す遺物は、出土層不明の常滑産陶器裏1片だけである(1)。還元焼成ではあるが焼成がやや軟質なので、中世でも後半期になるかもしれない。他に、周囲の古墳時代遺構などから混入したとみられる古墳中期の土師器片が多い。2も古墳中期の須恵器裏片で、SI-10・12出土破片と同一個体であろう。植物性遺物では棒状の木片が3点あり、そのうち変形の少ない1点を図化した。人為的に加工しているかどうかは不明である(3)。他に木片、笹類の枝片、植物の枝・茎の小片を主にフルイで検出した。また、片面に煤が付着した自然礫が2点、1層中から出土している。

第117表 権現山遺跡 SG10区 SE-237 出土遺物

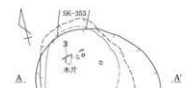
番号 種類 器種	大きさ 縦×横×高	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態 注記
1 陶器 裏	高 残 9.3	外面は褐色のナデで、下部はナデが弱いので成形時の凹凸を少し残す。内面は破片の中～下位にナメスビナデの後、上位にヨコナデ。内外面の器面には明細粒少 やや軟質。	7.5YR5/4 にぶい 織密 白・灰褐色～細粒と透 明細粒少 やや軟質	胴下平1片
2 皿底 裏	高 残 7.5	甲き板には木目直交の溝を彫っているが、木目の浮き出しが非常に弱い。内面は当貝版スリキ。古墳時代の遺物が混入。	N4/ 灰 やや粗い・白・透明粗粒～細粒 と茶色細粒やや多 硬質	胴部1片 1層
3 木片 棒状品	長 残 7.4 径 0.7	棒状の木片で、加工の有無は不明。地熱痕や付着物は見られない。長さ約9cmの同様な銅片が他に2片あるが、変形が著しいため図示できない。	10YR6/4 にぶい 黄橙	底上14cm 両端欠 5

SG10区 SE-252 (第197図、写真図版145・212)

【位置】SG10区中央部の19.5-18.5グリッド。西方に時期不明の井戸SE-345がある。すぐ西にある近世区画溝SD-204と、東側低地との間にある。北西9mに中世の井戸SE-344がある。重複する遺構はない。

【規模と形状】確認面で東西1.70m、南北1.76mの円形で、深さ2.36m。底面標高は77.62m。途中で径60～80cm程度まで狭くなり、その下側は地山砂礫層の壁面崩落によって少し広がる。地山のうちV層(砂と礫の互層)は上半のV-6層までが砂層で、V-7からV-12までは礫が多い砂礫層である。

【覆土】上面から8層までの埋土は暗褐色～黒褐色土にロームが少し混じる。ローム塊・粒が多くて焼土・炭も含む5層は人為的に入れた土であろう。8層以下に礫を含み、下部ほど礫が多くなる傾向がある。標高79.24m付近までを手掘りで調査した1999年8月9日の段階で、このレベルまで湧水してきたので、掘り下げをいったん中止した。その後、地下水位が低い3月上旬に標高77.6～77.7m付近まで重機で南半部を断ち割った。

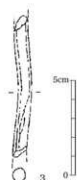
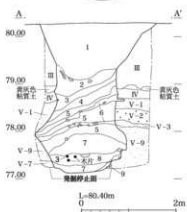


SG10KS-237

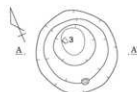
- 1 黒色 大(15~20cm)・小(5~10cm)様々な礫入り,しまり強,粘性やや有。
- 2 暗茶褐色 黒色土・ローム礫入り,しまり強,粘性有。
- 3 暗茶褐色 黄色粘質土やや多,灰白色砂若干,しまりやや弱,粘性有。
- 4 暗褐色 黄色粘質土,しまりやや弱,粘性有。
- 5 暗茶褐色 黄色粘質土・灰白色砂の混入,しまり弱,粘性有。
- 6 黒褐色 黄色粘質土・灰白色砂の混入,しまり弱,粘性有。
- 7 暗灰色 黄色土・灰色砂が凝結した塊,とろろの塊が入る,しまり弱,粘性有。
- 8 暗茶褐色 全体暗茶褐色の砂質だが,粘質もゆるい,しまり弱,粘性有。
- 9 暗褐色

SG10KS-237 地山

- III アウトローム
IV ハードローム
V-1 明茶褐色 戸隠山の砂質土層,SI-569/V-1と同質。
V-2 灰白色 砂質土の戸隠層,SI-569/V-2と同質。
V-3 灰色 戸隠山の砂質土層,SI-569/V-3と同質。
V-7 灰白色 戸隠山の砂質土層,SI-569/V-7と同質。
V-9 暗褐色 戸隠山の砂質土層,SI-569/V-9と同質。



第 196 図 梅現山遺跡 SG10 区 SE-237 遺構・遺物



SG10KS-252

- 1 黒褐色 ローム・灰白色粘石・今古礫石・細粒粘土,炭化物極微量,しまり強。
- 2 黒褐色 ローム・粘土・粘質土,しまりやや弱。
- 3 暗茶褐色 ローム・粘土・粘質土,しまりやや弱。
- 4 暗褐色 ローム・粘土・粘質土,今古礫石・細粒粘土,しまりやや弱。
- 5 黄色土 粘土・粘質土,ローム・粘土・粘質土,炭化物極微量,しまりやや弱。
- 6 暗褐色 ローム・粘土・粘質土,炭化物極微量,しまりやや弱。
- 7 黒褐色 ローム・粘土・粘質土・粘質土,炭化物極微量,しまり弱。
- 8 暗褐色 ローム・粘土・粘質土・粘質土,炭化物極微量,しまり弱。
- 9 灰白色 砂粒多,ローム・粘土・粘質土・粘質土(5cm程度)微量,しまりやや弱。
- 10 暗褐色 ローム・粘土・粘質土,砂粒・粘土(5cm程度)少,しまりやや弱。

SG10KS-252 地山

- III アウトローム
IV ハードローム
V-1 灰色 砂粒(粘石が主体),砂粒多,礫(3cm程度)微量,しまり強。
V-2 灰色 砂粒,砂粒多,礫(粘石が主体)微量,しまり強。
V-3 灰色 砂粒,砂粒(赤土に細砂)多,礫(1cm程度)微量,しまり強。
V-4 灰色 砂粒,砂粒(V-3より細)多,礫(1cm程度)微量,黒石粘土細粒微量,しまり強。
V-5 灰白色 砂粒,砂粒多,しまり強。
V-6 灰色 砂粒,砂粒多,礫(1~5cm程度)微量,しまり強。
V-7 暗褐色 砂粒,砂粒多,礫(1~5cm程度)微量,しまり強。
V-9 黒褐色 砂粒,砂粒多,礫(1~5cm程度)微量,しまり強。
V-10 灰色 砂粒,砂粒・礫(10cm程度まで)多,礫は半分以下が大きく,しまり強。
V-11 灰色 砂粒,砂粒・礫(10cm程度まで)多,しまり強。
V-12 褐色 砂粒,砂粒・礫(10cm程度まで)多,しまり強。



第 197 図 梅現山遺跡 SG10 区 SE-252 遺構・遺物

〔出土遺物〕遺構の配置からみて中世と考えられるが、その時期を示す遺物は出土していない。覆土中位で出土している須恵器杯(1)は9世紀前半の益子窯跡群産と見られるもので、外面に墨書がある。古墳中期を主体とする土師器や、平安時代の可能性がある内面無文の須恵器裏の同一個体の破片(2~4)が混入し、最下層でも出土している(3)。これらと同一個体とみられる須恵器裏片は、9世紀中~後葉とみられる平安時代土坑SK-235や古墳中期のSI-30(第57図33)など複数の遺構に入っていて、広範囲に分布する。

第 118 表 権現山遺跡 SG10 区 SE-252 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ 縦×横×高 cm	特 徴	色調 胎土・装成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 鉢	口 縦 12.6 高 3.8 底 横 6.6	内外面回転ナ字時のロケロは右回転(時計回り)。外底面は回転糸切り難し後無調整。体部外面に判読できない印書有り。「口見」かもしれない。曇子産。	N5/ 灰 やや緻密 白磁～細粒やや少 白磁少 中や破片	6層 口1/24周、底5/12周 6層
2 須恵器 皿	高 残 3.9	3・4と同一個体で、特徴も同じ。	5Y3/1 暗赤灰 やや緻密 赤・黒色濁出粒多 白磁～細粒やや多 破片	10層 胴部1片 10層
3 須恵器 皿	高 残 9.7	外面は木目平の溝を重った明き板で平打明き。内面は無文で、無文当具の可能性もある。2・4と同一個体。平安時代の遺物が混入。	N5/0(灰) やや緻密 赤・黒色濁出粒多 白磁～細粒やや多 破片	10層(底土12cm) 胴部1片 1
4 須恵器 皿	高 残 8.5	2・3と同一個体で、特徴も同じ。	2.5Y5/1 黄灰 やや緻密 赤・黒色濁出粒多 白磁～細粒やや多 破片	8層と出土位置不明の各 1片が接合 胴部2片 8層、一積

SG10 区 SE-344 (第 198 図、写真図版 145・212)

【位置】SG10 区中央部の 20.0-18.0 グリッド。SX-308 (擾乱と考えられる掘り込み) に上部を切られる。近世の区画溝 SD-204 の東西にそれぞれ SE-252 と SE-344 がある。

【規模と形状】確認面で東西 1.82m、南北 1.70m の不整形円で、深さ 2.40m。底面標高は 77.49m。

【覆土】埋土の最上層に礫が多い。それより下部は、黒色～黄褐色の互層になる。標高 79m 付近までを手掘りで調査した後、重機で東半部を断ち割った。その際に、中位以下の土層断面は崩落してしまったので断面図を作成できなかった。井戸底部付近は礫を少し含む黒褐色・黒色土層であることを記録できた。最下層からまとまって出土した礫は、持ち込まれたものではなくて、ほとんどが地山の礫層から混入したものと考えられる。遺物検出のためのふるいかけ作業で回収した礫は径 1～2mm 大から 40mm 大くらいまであり、石質はホルンフェルス(チャート起源・砂岩起源・泥岩起源)と安山岩・礫岩・流紋岩が認められた。地山の土層の詳細は、記録不備のため不明である。

【出土遺物】常滑産鉢片(1)は、西方 15m の SK-46・92 に同一個体が各 1 片ある。古墳時代土坑 SK-46 表土で出土した小破片が SE-344 出土破片と接合し、中世土坑 SK-92 に同一個体の体部小破片がある。SK-92 から SK-46 表土へ混入したものであろう。常滑産鉢からみて 14 世紀後半頃の井戸と考えられる。古墳時代の須恵器提瓶(2)や土器片も混入している。植物性遺物では、平面図・断面図に記入した長 48cm・径 3.3cm の枝または棒が 1 点と、木材・葉の小片が下層部で出土した。

第 119 表 権現山遺跡 SG10 区 SE-344 出土遺物

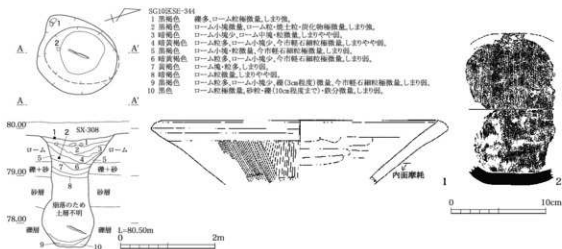
番号 種類 器種	大きさ 縦×横×高 cm	特 徴	色調 胎土・装成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 中世陶器 こぶね	口 縦 31.0 高 残 6.8	外面は浅いタテハケ状調整後の後に口縁部ヨコナデ。内面はヨコヘナナデ状。福島の地にヨコナデ。内面土位は色用により磨滅。常滑産。古墳時代土坑 SK-46 出土破片と接合。中世土坑 SK-92 出土破片と同一個体。	やや粗い 白磁多、白・灰色、透明肌 白磁やや少 破片	1層上面(底土228cm)、 SK-46・92にも破片あり 口1/6周 1、SK-46 東西表土
2 須恵器 瓶		提瓶の胴部片の可能性もある。外面胴部方キメ。内面はヨコナデで、口の左端付近の凸凹は磨滅部が近いことを示しているかもしれない。古墳後期の遺物が混入。	2.5Y5/1 灰 やや粗い 白磁～細粒多 破片	5層(底土189cm) 胴1/4周 3

SG10 区 SE-377 (第 199 図、写真図版 145・146・212)

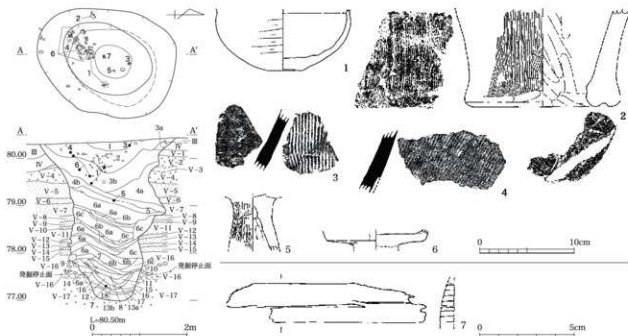
【位置】SG10 区中央部の 21.0-18.0 グリッド。重複する遺構はない。古墳時代の SI-60 に近接する。

【規模と形状】確認面で東西 2.24m、南北 2.96m の楕円形で、深さ 3.35m。確認面から下へ約 1m の付近で径 2.00 × 1.38m 位まで狭くなる。この部分は地山が堅くて崩れにくい礫層なので、本来の直径に近い規模を保っているとも考えられる。底面標高は 76.98m。井戸底面は赤橙褐色の砂礫層で、SG10 区の他の井戸に比べると帯水層にやや深く掘り込んでおり、調査した 3 月上旬でも井戸底面より 10cm 上に水面が来るほど湧水していた。

【覆土】上部の埋土は礫や丸石を多く含む。標高 79.0m 付近までを手掘りで調査した後、標高 77.6m 付近まで重機で東半部を断ち割った。埋土上部は礫混じりの埋め戻し土が主体で、5 層は混入した古墳時代土器



第198図 権現山遺跡 SG10区 SE-344 遺構・遺物



第199図 権現山遺跡 SG10区 SE-377 遺構・遺物

- SG10KSE-377
- 1 暗褐色 ローム微細・赤色粘(粘土)ではなく今市粘土粒が少く硬。
 - 2 褐色 丸石(10cm以下)が非常に多。粘土のローム層が厚く土質粘。粘土や硬。
 - 3 暗黄褐色 ローム小塊・粘やや多。小円礫(3cm以下)少。や中硬。
 - 4 暗黄褐色 3cm前後及びそれ以下の今市粘土粒と小塊少。小円礫(1~5cm)若干。や中硬。
 - 5 暗褐色 黄褐色砂・ローム小塊多。暗褐色土や砂。や中硬。
 - 6 暗褐色 黄褐色砂・ローム小塊多。暗褐色土や砂。や中硬。
 - 7 黄褐色 ローム塊・粘やや多。ローム粒少。
 - 8 明褐色 ローム塊・粘やや多。黄褐色砂・小円礫(2cm以下)やや多。や中硬。
 - 9 暗褐色 ローム小塊・粘やや多。灰色粘・小円礫(2cm以下)少。や中硬。
 - 10 灰白色 礫が少。砂が主体で2~4cm次の円礫やや多。今中硬。
 - 11 赤褐色 礫が少。砂が主体で2~4cm次の円礫やや多。今中硬。粘土。暗褐色土。暗褐色土。粘。粘土や中。6層に部分が定着した土層。
 - 12 暗褐色 礫が少。砂が主体で2~4cm次の円礫やや多。今中硬。粘土。暗褐色土。暗褐色土。粘。粘土や中。6層に部分が定着した土層。
 - 13 暗褐色 礫が少。砂が主体で2~4cm次の円礫やや多。今中硬。粘土。暗褐色土。暗褐色土。粘。粘土や中。6層に部分が定着した土層。
 - 14 黄褐色 明黄褐色粘土と暗褐色土が混在し粘土層が混じった層。
 - 15 灰白色 小円礫(1~5cm)少。や中硬。土質粘。
 - 16 暗褐色 粘土。大きな丸石(20~30cm)若干。非常に粘。水分多。木片(植物)含む。
 - 17 暗褐色 粘土。黄褐色粘土。砂少。非常に粘。水分多。
 - 18 暗褐色 16層と同じだが丸石はほぼ含まない。

- SG10KSE-377 地山
- III
IV
V
- ソフトローム
ハードローム
円礫と粘の互層
円礫が少砂質土。SE-5697V-12同質。
砂質。SE-5697V-22同質。
砂質。SE-5697V-3と同質。
砂質。SE-5697V-4と同質。
砂質。SE-5697V-5と同質。
砂質。SE-5697V-6と同質。
砂質。SE-5697V-7と同質。
砂質。SE-5697V-8と同質。
砂質。SE-5697V-9と同質。
砂質。SE-5697V-10と同質。
砂質。SE-5697V-11と同質。
砂質。SE-5697V-12と同質。
砂質。SE-5697V-13と同質。
砂質。SE-5697V-14と同質。
砂質。SE-5697V-15と同質。
砂質。SE-5697V-16と同質。
砂質。SE-5697V-17と同質。
砂質。SE-5697V-18と同質。
砂質。SE-5697V-19と同質。
砂質。SE-5697V-20と同質。
砂質。SE-5697V-21と同質。
砂質。SE-5697V-22と同質。
砂質。SE-5697V-23と同質。
砂質。SE-5697V-24と同質。
砂質。SE-5697V-25と同質。
砂質。SE-5697V-26と同質。
砂質。SE-5697V-27と同質。
砂質。SE-5697V-28と同質。
砂質。SE-5697V-29と同質。
砂質。SE-5697V-30と同質。
砂質。SE-5697V-31と同質。
砂質。SE-5697V-32と同質。
砂質。SE-5697V-33と同質。
砂質。SE-5697V-34と同質。
砂質。SE-5697V-35と同質。
砂質。SE-5697V-36と同質。
砂質。SE-5697V-37と同質。
砂質。SE-5697V-38と同質。
砂質。SE-5697V-39と同質。
砂質。SE-5697V-40と同質。
砂質。SE-5697V-41と同質。
砂質。SE-5697V-42と同質。
砂質。SE-5697V-43と同質。
砂質。SE-5697V-44と同質。
砂質。SE-5697V-45と同質。
砂質。SE-5697V-46と同質。
砂質。SE-5697V-47と同質。
砂質。SE-5697V-48と同質。
砂質。SE-5697V-49と同質。
砂質。SE-5697V-50と同質。
砂質。SE-5697V-51と同質。
砂質。SE-5697V-52と同質。
砂質。SE-5697V-53と同質。
砂質。SE-5697V-54と同質。
砂質。SE-5697V-55と同質。
砂質。SE-5697V-56と同質。
砂質。SE-5697V-57と同質。
砂質。SE-5697V-58と同質。
砂質。SE-5697V-59と同質。
砂質。SE-5697V-60と同質。
砂質。SE-5697V-61と同質。
砂質。SE-5697V-62と同質。
砂質。SE-5697V-63と同質。
砂質。SE-5697V-64と同質。
砂質。SE-5697V-65と同質。
砂質。SE-5697V-66と同質。
砂質。SE-5697V-67と同質。
砂質。SE-5697V-68と同質。
砂質。SE-5697V-69と同質。
砂質。SE-5697V-70と同質。
砂質。SE-5697V-71と同質。
砂質。SE-5697V-72と同質。
砂質。SE-5697V-73と同質。
砂質。SE-5697V-74と同質。
砂質。SE-5697V-75と同質。
砂質。SE-5697V-76と同質。
砂質。SE-5697V-77と同質。
砂質。SE-5697V-78と同質。
砂質。SE-5697V-79と同質。
砂質。SE-5697V-80と同質。
砂質。SE-5697V-81と同質。
砂質。SE-5697V-82と同質。
砂質。SE-5697V-83と同質。
砂質。SE-5697V-84と同質。
砂質。SE-5697V-85と同質。
砂質。SE-5697V-86と同質。
砂質。SE-5697V-87と同質。
砂質。SE-5697V-88と同質。
砂質。SE-5697V-89と同質。
砂質。SE-5697V-90と同質。
砂質。SE-5697V-91と同質。
砂質。SE-5697V-92と同質。
砂質。SE-5697V-93と同質。
砂質。SE-5697V-94と同質。
砂質。SE-5697V-95と同質。
砂質。SE-5697V-96と同質。
砂質。SE-5697V-97と同質。
砂質。SE-5697V-98と同質。
砂質。SE-5697V-99と同質。
砂質。SE-5697V-100と同質。

第5章 権現山遺跡 SG10 区

片などがやや多い。埋土中は礫の多い層とローム塊の多い層とが交互に入る状況で、壁面のローム層や礫層が崩れた土と見られる。埋土下部の8層付近より下位は自然流入土の可能性がある。最下部の16～18層は水分の多い粘質土で、木片を含む。

[遺物出土状況] 確認面から下へ10～90cmの範囲で土器片を含み、主に混入・流入品の古墳時代土師器・須恵器・円筒埴輪破片である(1～6)。SE-569で出土した中世陶器こね鉢に接合する破片も含む。底付近では、長径20～30cm・厚さ10～15cmの大きな石が16層中に複数ある。この16層から18層までの井戸底面覆土(暗灰褐色粘質土)に木片を含み、その量はSE-569よりはるかに少ない。木片は現地でも2点を観察したが1点は不手際により紛失し、もう1点は3点に割れて出土した。ふるいで検出した木片もごく少量である。

[出土遺物] SE-569最上層出土こね鉢(第200図9)と接合する常滑産の陶器こね鉢破片が1片出土したので、埋没時期が近いと考えられ、どちらも中世の井戸と考えられる。植物性遺物では板状木製品破片がある(7)。混入遺物として、古墳中期の土器片を中心に古墳後期土器、縄文土器、埴輪片などが出土した。埴輪(2)や須恵器甕(3・4)は古墳中期の混入品。外面下端に横位の工具擦痕を残す埴輪は、近辺では琴平塚1号墳と磯北古墳群(『東谷・中島地区遺跡群』4・7)や東谷塚塚古墳(宇都宮市教委2012・今平2012)に類似がある。権現山遺跡南部や北部の古墳時代集落で埴輪が出土した事例がないので、中世の人々が埴輪破片を持ち込んだことが考えられる。

第120表 権現山遺跡 SG10 区 SE-377 出土遺物

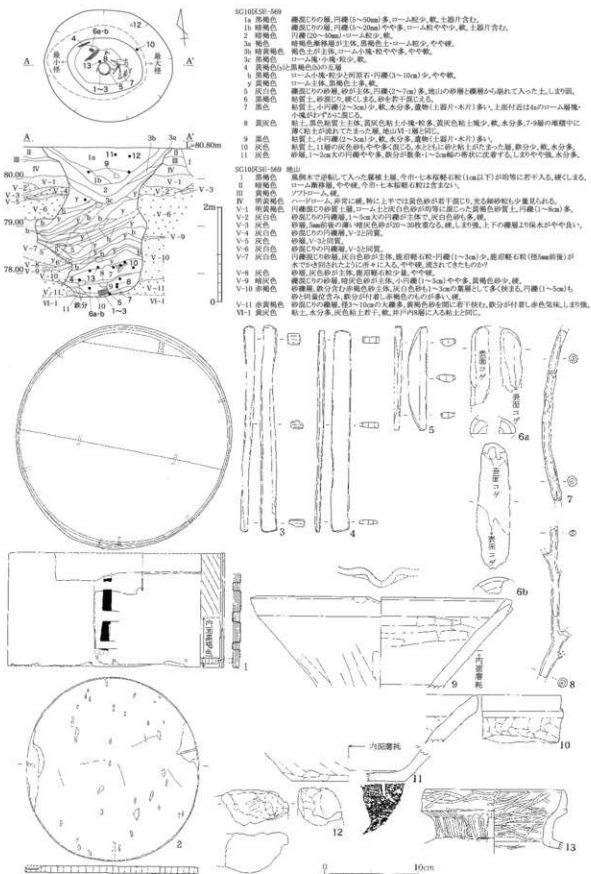
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	高 残 6.4 底 3.6 最大 残 14.1	内外面の断面が磨滅して調整が不明瞭。外面の体部と底部はおそらくヘラナデで、外面はわずかに凹凸状。内面はナデまたはヘラナデの可能性が高い。古墳中期の遺物が混入。 [注記] 2, 3, 4, 12, 東平3層, 東上平	5YR5/6 明赤帯 やや濃い、赤黒帯やや多。 白・赤帯と白・黒帯～細粒少 やや破片	2層(底上281cm)と 3b層(底上248cm)が 混合 層1/36周、底全周 注記は左欄
2 円筒埴輪	高 残 10.3 底 残 16.2	外面タテハケ後。最下段外面下端に横方向のナデまたは工具擦痕。内面ナデ・スビナデ。底面はすずしと思われる輪状印で円筒状に深く凹む。ハケタは11cm/2cm。古墳中期の遺物が混入。	10YR7/4 に近い黄褐色 やや暗い、白帯～細粒多、白 帯と灰色・透明細粒やや少。 黒細粒少 少々破片	2層(底上326cm) 底1/6周 20
3 須恵器 甕	高 残 6.4	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で平行叩き。内面はナデによる無文。古墳中期の遺物が混入。	10Y6/1 灰 やや微細 白細粒少 破片	2層(底上328cm) 甕部1片 1
4 須恵器 甕	高 残 6.6	外面は木目平行の溝を彫った叩き板で平行叩き。内面は全体が剥落して調整不明。古墳中期の遺物が混入。	7.5Y5/1 灰 やや濃い、白帯～細粒多、透 明帯～細粒やや多、赤黒帯と 赤・黒細粒少 破片	2層(底上313cm) 甕部1片 18
5 土師器 高杯	高 残 6.0	外面は脚柱部タテナデ後タテヘラミガキ。内面は脚柱部上端から下がったところが一旦狭くなって、そこから下に縦位のスビナデとヘラナデ。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや微細 白・灰色・透明細 粒～細粒やや多、黒細粒少 破片	5層(底上212cm) 脚柱全周 3
6 土師器 高杯	高 残 2.1	外面杯体～杯底部コナテ後。杯底部に放射状ヘラミガキを行う可能性あり。内面は杯底部を1方向と杯体部と横位のナデ。古墳中期の遺物が混入。 [注記] 19, 27, 34, 東平3層	10YR7/4 に近い黄褐色 微細 白・赤・透明細粒少 破片	2層(底上312cm)と 3b層(底上258～273 cm)が混合 層底上2層 注記は左欄
7 木製品 板状品	長 残 10.3 残 2.0 厚 残 0.4～ 0.7	片断へ向かって厚さが薄くなる製品の破片。片断は両側とも年に輪に沿った形を残し、縦方向に割れが生じていて、両端も欠損している。炭灰類・付着物・節等等は認められない。同一個体と思われる小破片が2点あり、最下層(暗灰褐色)出土の破片2点も同一個体の可能性が高い。	7.5YR4/3 黒	16層(底上277cm) 全層を欠損 42

SG10 区 SE-569 (第200図・写真図版 146・213・214)

[位置] SG10 区北部の22.0-18.0グリッド。重複する遺構はない。

[規模と形状] 円形で大形の井戸。確認面で東西2.74m、南北2.35mの楕円形で、深さ3.15m。底面標高は77.5m。砂・礫層が崩れた部分の壁面がオーバーハングする。井戸底面は黄灰色粘土層(VI-1層)である。

[覆土および地層] 上部の埋土1層と2層には礫が多く、土師器片も含む。4層から6層までは壁面のローム塊と砂・礫が崩れて埋まった層である。標高79.2m付近までを手掘りで調査した後、標高78.0m付近まで重機で南半部を断ち割った。標高77.6～78.3m付近は井戸使用時に堆積したような黒色粘質土(7層と9層)、中間に薄い粘土をはさまむが(8層)、短い時期に水成堆積したとみられる。この黒色粘質土中で小形の木片・木屑や中世こね鉢片を含み、古墳時代土師器片も混入している。この下が埋土最下層の灰色粘質



第200図 権現山遺跡 SG10区 SE-569 遺構・遺物

第5章 権現山遺跡 SG10 区

土層（10層）で、井戸底面と同じ黄灰色粘土も含んでいる。

地山の礫層を断ち割って観察すると、井戸よりも東側では真っ赤になるほど鉄分が付着しているのに対して、西側には鉄分がまったくない。この井戸を作ったことが原因となって、両側の礫層における鉄分のあり方に違いが生じたものであろう。

〔遺物出土状況〕最上層にも遺構の時期を示すこね鉢片を含む（9）。7層以下に木製遺物が多いが、古墳時代集落から流入した13などの土器片も少し混在している。井戸底面から曲物などの木製品がまとまって出土し、井戸の廃棄に伴う儀礼行為を示すものかもしれない。曲物桶（1）は、最下層の灰色粘質土層の上に載り、上向きで出土した。桶（1）の内部に入っていた棒（3）は、割れそうな桶底板を補強するために支持材として入れたものかもしれない。この桶の裏側（つまり底板の下側）には、ひとまわり小さい別個体の曲物底板（2）が接している。さらにその下でD字状の木製品（5）が出土した。

〔出土遺物〕陶器鉢などからみて中世の井戸と考えられる。常滑産こね鉢（9）は、SE-377で出土した1片がSE-569の3片と接合したので、SE-377・569の埋没時期が近いと考えられる。在地産こね鉢（10・11）は比較的軟質な焼成。13はSI-19aなどにある受口状口縁壺で、古墳中期の混入遺物。

曲物桶（1）は側板内面下半と底板内面に黒褐色の付着物があり、漆の容器に使用していたことがわかる。この桶の底板は、板2枚を木釘2本で接合している。さらに厚さが異なる転用材の補充底板（図の手前側）を底板に付け足して、この補充板だけは内面の漆が付着していないので、修理後は漆容器以外に用途を変更したとも考えられる。この補充板は、図示した溝を片面に持つことからみても転用材である。側面図の右上部で、最外周の側板が割れてきただけ部分を截断して処理した可能性があること、補強用の支持棒？（3）を中に入れていたことからみて、かなり使い込んだことがわかる。2は別個体の曲物底板で、1の底板を補強するために下面に付け足した可能性もある。ただし、桶底板の下に別の板を取り付けた方法が不明なので、別個体として扱う。他の木製品は、別個体の曲物桶底板の部品と見られるD字状木製品1点（5）と、板状品（4）と棒状品（7・8）がある。焦げた棒状品（6）は折れた杭の破片かもしれない。

SE-569から出土した遺物のうち、完形の曲物桶1点の各部品（第122表11・14・15）およびその補充材？（第122表13）と、別個体の曲物桶底板2点（第122表の12・16）について、樹種同定を実施した。また、完形の曲物桶の内部下半に付着していた黒褐色物質が漆であることを確認するために断面観察を実施した（第122表の14漆）。パリオ・サーヴェイ株式会社から提出された分析結果を次節に掲載する。

第121表 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 出土遺物

番号 種類	大きさ mm・cm	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状態 保存状態 注記
1 木製品 曲物桶	口 23.3 高 12.1 底板径 21.0	厚さ約2mmのヒノキの薄板を曲げて二重にする。縦合わせ部だけは三重に張り、幅9mmの榫か板の榫で組む。榫皮の上下端の処理方法は不詳。縦じ部の右側では最も外側の板が縦位に切り込まれていて、破断部を切断する処理が行われたとも考えられる。側板の内面上部に斜平行線状のケズキを入れている。底板は2枚を2本の木釘で接合した厚さ6mmのヒノキだが、端部は長さ11×幅2cm×厚さ0.9mmの半月形のスチ材板で補充している。この補充板は幅4.5mm、深さ2.0mmの溝が片面に彫られていて、側板と結合する釘孔も見られないので、転用材の可能性が高い。2.5～14mmの間隔で木釘を6箇所に行ったり板を止める。側板内面下半と底板の内面は黒褐色で、側板内面の下半まで黒色になっているので、漆を保護した容器と考えられる。底板のうちスチ材の補充板には黒褐色の付着物がないので、底板を補修した後は用途が変わったと見られる。	樹種 ヒノキ 底板の補充板はスチ	底1.4m 口3/4周、底全周 15
2 木製品 曲物底板	短径 18.3 長径 19.4 厚 0.7～0.8 木釘径 0.25	曲物桶の底板で、外周の四方に木釘孔がある。両端が削れている2箇所は本体に釘で結合されていた部分に方が加わって破損した可能性がある。残る2箇所は釘孔に行き止まった木釘が残っている。図示した面に幅が約4mmと幅が狭い。桶に使った時に生じた傷か、あるいは他用途の品から転用したことを示す。図示した面をもつ1個体の曲物桶の底面側に施した状態で出土したので、他の曲物桶の底板を補強するために、箱等で固定していたのかもしれない。	樹種 ヒノキ	10層(底1.2m)。1の 底板のすぐ下について 出土 完形 15
3 木製品 棒状品	長 20 幅 1.0 厚 0.6	断面が不整方形の角棒状。曲物桶の底板の内面に使っていたので、底板に傷が入った曲物桶を補強するために内面に使ったものかもしれない。ただし、桶に固定するための乳や紐等はない。	樹種 エノキ属	10層(底1.2m)。曲物 桶底板の内面に載って 出土 完形 15

第 19 節 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 で出土した曲物桶の材質と付着物

4	木製品 板状品	長 21.4 幅 1.9 厚 0.5 ~ 0.8	長方形の薄い板状。厚さは一端がやや厚く、他端がやや薄くなる。微などの使用痕や付着物は見られない。		9 層(底上 30cm) 底面 24
5	木製品 D 字状品	長 11.0 幅 2.0 厚 0.8	細長い「D」字形。露出した面は中央が厚く、左右両側縁が少し薄くなる。両側の面は中央が平直になる。曲物桶底板の部品と考えられる。	磨研 エノキ属	10 層(底上 1cm)。曲物桶の D 字で出土 底面 27
6a	木製品 不明品	長 残 8.4 幅 約 5 ~ 6 厚 残 1.6	本葉は幅 5 ~ 6cm × 長さ 10cm 程度の薄片 1 片であったが 2 片に割れる。表面や外形も破損が著しい。もとは厚 5 ~ 6cm の厚みがあった可能性があり、残存する表面に貼っている。腐食防止のために表面を焼いた炭等の端部かもしれない。6b と同一個体。		9 層(底上 18cm) 破片 2 底面 23
6b	木製品 不明品	長 残 13.4 幅 3.6 厚 残 1.7	本葉は幅 7 ~ 8cm × 長さ 30cm の長い木製品であったが、破片が進行して前面部を占めていない。表面が残る部分の形状から見て、本葉は丸棒状だった可能性がある。残存する表面が焼け焦げた部分が目立つ。腐食防止のために表面を焼いた炭等の破片かもしれない。6a と同一個体。		9 層(底上 38cm) 破片 13 点 底面 22
7	木製品 棒状品	長 残 18.1 幅 0.8 ~ 1.1	木製の細棒を除去し、その痕を軽く削っているかと思われる。両端を人為的に切断した可能性もあるが不確定。		7 層(底上 30cm) 両端部欠 18
8	木製品 棒状品	長 残 16.0 幅 0.7 ~ 1.0	自然木の枝。分かれる小枝がそれぞれ切断され、または折り取られている。頂上端部で左に出る小枝と頂下端の木口部は、それぞれ切断した面と見られる。		9 層(底上 27cm) 両端部欠 26
9	陶器 土師器 こね鉢	口 寛 27.6 高 残 9.7	外面体部タテナデ、内面体部ナデ後ヨコナデ、内外口縁部ヨコナデ。口縁部に片口を持ち、その両端は部腹を内側へ押し出している。内面体部には使用によって多少磨損している。常産品。	5YR5/3 に近い赤褐色。白・半透明～細粒中。灰色色粒やや多。破質	SE-377 の 2 層(1 片)と SE-569 の 1a 層(3 片)が結合 口 1/5 割、底 1/3 割 1. 3. 5. SE-377 13
10	中世土器 こね鉢	口 寛約 25 高 残 5.2	還元炭成の黄褐色土器。外面体部はヨコナデ後に不定方向のナデおよびコピキナデ。内面体部はナメナデ。内外面口縁部ヨコナデ。11 と同一個体の可能性もある。	2.5Y7/2 灰黄 やや微細。灰色・透明細～粗粒と白・黒微細少 やや破質	7 層(底上 62cm) 口 1/12 割 底面 10
11	中世土器 こね鉢	口 寛 3.5 高 残 12.1	還元炭成の黄褐色土器。外面体部はヨコナデ後に下端部ヨコヘラナデ。外底面は断面垂直に離し削りナデ。内面ヨコナデ。10 と同一個体の可能性もある。	N7/0 灰白 微細。灰色粒と白・黒微細少 やや破質	1a 層(底上 302cm) 底 1/6 割 2
12	極細磨削片 (極小、工具類行き)	長 残 3.8 幅 残 7.2 厚 残 4.7 重 180.7	厚さ 4mm 前後で密度の高・中形の極細磨削片。左側部と下手側部がシャープな稜角となっており、上手側部は急峻に立ち上がる稜角となっている。上面はほぼ平坦で一部に木炭痕あり。上手側部は中程に凹みを生じ、上下が独立した様なきれいな輪郭をなす。表面には砂埃土の圧痕が全面に残されている。破面の気孔は外周部にやや目立つが、芯部では極めて少ない。本器具を出した遺構は中世の井戸で、他の中世期の遺構と関連するとは時が全く異なるが、内外的に破損中に含まれている。磨削関連遺物種別 7b。	灰白色 地。黒微細 硬高硬度 3 メタル面 なし。	底上 260cm 破面 2 面 4
13	土師器 壺	口 寛 14.5 高 残 6.3 最大 幅 15.4	口縁部受口型で、外面はタテナデナデ、頸部タテナデ後タテヘラヨコナデ、口縁部ヨコナデ後ヨコヘラヨコナデ。内面は肩部ナデ、口～頸部ヨコナデ後ヨコヘラヨコナデ。古墳中期の遺物が認められる。	7.5YR6/4 に近い暗 やや微細。白濁～粗粒と黒・透明微細やや多。赤黒～粗粒少 破質	4a 層(底上 62cm)と横高 78cm 付近(7 層)が結合 口 1/2 割、頸 7/12 割 7. 1.78.0m 付近足點割

第 19 節 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 で出土した曲物桶の材質と付着物

パリオ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

権現山遺跡 SG10 区で検出された、中世の井戸跡 (SE-569) からは、曲物桶が出土している。1 点が底板、側板、補強材の各部位が出土し、これとは別個体の底板が他に 2 点ある。このうち、底板、側板、補強材が出土した曲物桶は、下半部内面に黒色付着物が見られ、漆を入れた容器の可能性が推定されている。

今回の分析調査では、井戸跡から出土した曲物桶の樹種同定を行い、木材利用を推定する。また、黒色付着物の薄片作製・鑑定を行い、付着物の由来を推定する。

2. 木製品の樹種

(1) 試料

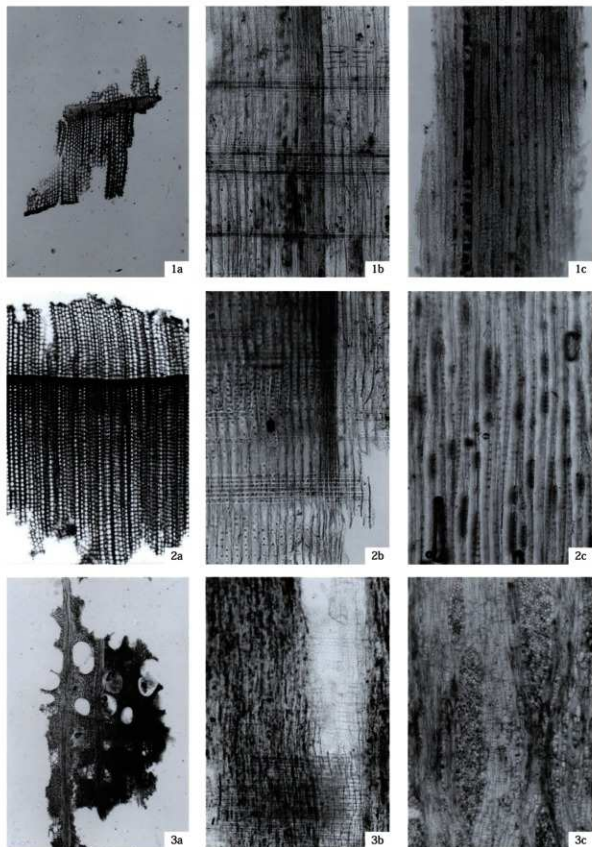
試料は、中世の井戸跡 (SE-569) から出土した曲物桶の部材 6 点 (試料番号 11 ~ 16) である。このうち、試料番号 11, 13, 14, 15 が同一製品 (曲物 15) の部材で、試料番号 12, 16 はそれぞれ別個体の底板である。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の徒手切片を作製し、ガ

第 122 表 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 分析対象資料一覧

番号	遺跡・地区	遺構	注記	遺物の種類・部位	分析資料に対するコメント
11	権現山遺跡 SG10 区	SE-569	No.15	曲物桶の側板	中世の井戸の底、曲物 15 の部品。下半部内面に漆?付着。図の 1 番。
12	権現山遺跡 SG10 区	SE-569	No.15	曲物桶の底板 2	曲物 15 の直下で出土した別個体の底板。図の 2 番。
13	権現山遺跡 SG10 区	SE-569	No.15	曲物桶の補強材?	曲物 15 の桶の中にいれた支持棒か。図の 3 番。
14	権現山遺跡 SG10 区	SE-569	No.15	曲物桶の底板 1a	曲物 15 の部品。1b と結合して使用。内面に漆?図 1 番の手前。同上の内面の裏付部分。断面観察を試みる。
15	権現山遺跡 SG10 区	SE-569	No.15	曲物桶の底板 1b	同上。1a と結合して使用。片面に漆(他品を加工用材)。図 1 番の上端。
16	権現山遺跡 SG10 区	SE-569	No.27	曲物桶の底板 3	中世の井戸の底。No.15 とは別個体。図の 5 番。



1. スギ (試料番号 15)
2. ヒノキ (試料番号 11)
3. エノキ属 (試料番号 13)

a: 木口, b: 柀目, c: 板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

第 201 図 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 曲物桶の底板・側板・補強材の組織

第123表 権現山遺跡 SG10区 SE-569 樹種同定結果

番号	遺構	位置	時期	遺物番号	種類	樹種
11	SE-569 (井戸跡)	井戸底	中世	No.15	曲物桶 (曲物 15) の側板	ヒノキ
12	SE-569 (井戸跡)	井戸底	中世	No.15	曲物桶 (曲物 15 とは別個体) の底板 2	ヒノキ
13	SE-569 (井戸跡)	井戸底	中世	No.15	曲物桶 (曲物 15) の補強材? (支持棒?)	エノキ属
14	SE-569 (井戸跡)	井戸底	中世	No.15	曲物桶 (曲物 15) の底板 1a	ヒノキ
15	SE-569 (井戸跡)	井戸底	中世	No.15	曲物桶 (曲物 15) の底板 1b (転用品?)	スギ
16	SE-569 (井戸跡)	井戸底	中世	No.27	曲物桶 (曲物 15 とは別個体) の底板 3	エノキ属

ム・クロラール (抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液) で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を第123表に示す。木製品は、針葉樹2種類 (スギ・ヒノキ) と広葉樹1種類 (エノキ属) に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

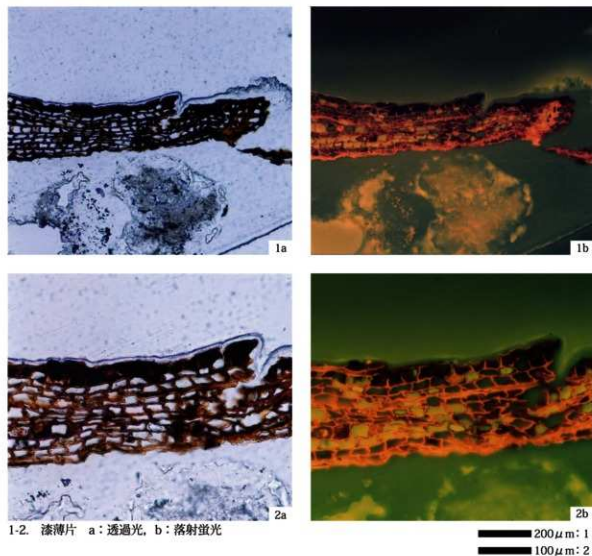
環孔材で孔眼部は1～3列、孔眼外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、孔眼は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～15細胞幅、1～50細胞高で鞘細胞が認められる。

(4) 考察

曲物 15 は、底板の一部に別材が使用され、内部の下半部には黒色の付着物がみられる。側板と底板の大きな方の部材がヒノキ、底板の小さな部材がスギ、内部の補強材? がエノキ属であった。ヒノキの使用は、西刑部西原遺跡3区の結果とも一致しており、古代と同様に耐水性や殺菌性を考慮した用材選択が推定される。一方、底板の小さな部材はスギであり、他の底板・側板とは種類が異なる。この部材は、表面に黒色の付着物が見られず、片面には溝もみられることから、修理の際に他品を転用した可能性がある。スギも耐水性や殺菌性を有することから、元々使用しているヒノキに近い材質を有する種類が選択された可能性がある。ヒノキが用いらなかった背景には、周囲に転用可能なヒノキ製品が無かったこと等が考えられる。

補強材は広葉樹のエノキ属であった。1点のみ広葉樹材が使用され、他の部材と傾向が異なる。この背景には、容器の本体である底板や側板に比較して、耐水性などはあまり考慮されず、補強のための強度等が考慮されたこと等が考えられる。エノキ属は、関東地方の河道沿いなどに普通に見られる種類であることから、周辺で入手可能な木材を使用した可能性もある。

曲物 15 とは別個体の曲物桶底は、底板2がヒノキ、底板3がエノキ属であった。底板2の結果は、曲物 15 と一致しており、同様の木材利用が推定される。一方、曲物底板に広葉樹材が使用される例は、福島県御山千軒遺跡のケヤキの例(船倉, 1983)等が知られているが、全般的にヒノキなどの針葉樹材の利用が多く、広葉樹材の利用例はほとんどない(島地・伊東, 1988)。しかし、薄い板が制作可能で、曲げた時の強度も重要な側板に比較すれば、円形の板の製作が可能で耐水性等があればどのような木材でも利用可能と考えられ、側板よりも利用できる木材の幅は広がった可能性がある。



1-2. 漆薄片 a: 透過光, b: 落射蛍光

第 202 図 権現山遺跡 SG10 区 SE-569 曲物桶底板の漆塗膜

3. 黒色付着物の同定

(1) 試料

試料は、曲物桶（曲物 15）の底板（試料番号 14）に付着していた黒色物質 1 点である。木質と共に黒色部分を薄く削いで試料とした。

(2) 方法

試料を樹脂で包埋し、固化させた後、黒色物質の断面が出るように切断する。切断面を研磨したのち、スライドガラスに接着し、もう一方も切断し、厚さが 0.03mm ～ 0.4mm になるように研磨してプレパラートとする。

生物顕微鏡、落射蛍光顕微鏡、反射顕微鏡等を用いて断面を観察する。

(3) 結果

黒色物質は、木質の表面に薄く認められる。残存している場所は、ほとんどが仮道管の壁が壊れて窪みができている部分等である。透過光観察では、かろうじて光が透過して茶褐色を呈する部分と、光を透過せず不透明となる部分とがある。落射蛍光による観察では、黒色部分は茶褐色を呈する。

これらの特徴から、混和剤を含まない漆の酸化した層の可能性がある。

(4) 考察

漆は、湿度の高い環境で乾燥する物質であり、一度固まってしまうと再利用することは不可能なため、保管時には湿度の低い環境を維持する必要がある。曲物はヒノキで作られており、耐水性の高い容器に漆を入れて保管していたことが推定される。

4. まとめ

東谷・中鳥地区遺跡群の西側部西原遺跡3区(※)、権現山遺跡SG1区(※)および10区から出土した木材は、曲物の部材が多く、他に櫛や用途不明の加工木、加工痕の認められない木材が各1～2点あった。曲物の部材についてみると、ヒノキの利用が多く見られる。この結果は、ヒノキの耐水性や殺菌性などの材質を考慮した木材利用と考えられ、古代・中世を通して同様の利用が行われたことが推定される。

ヒノキは、関東地方では、山地の尾根筋などに生育しており、平野部には生育していない。したがって、これらの曲物は、木材または曲物として持ち込まれた可能性がある。曲物については、これまで行われた樹種同定結果で、地域に関わらずヒノキが多い傾向が見られる。このことから、用途と用材が確立しており、周辺で木材を入手したのではなく、木材あるいは製品として地域間を移動していたことも想定される。

※(報告書編者註)報告の原文は西側部西原遺跡3区の井戸(SE-23・75)および権現山遺跡SG1区の井戸(SE-169)出土遺物と一緒に報告になっているため、「まとめ」ではこれらの木材を含めた記述になっている。

引用文献

船倉巳三郎(1983) 御山千軒遺跡から出土した木質遺物。「福島県文化財調査報告書第109集 東北新幹線開通遺跡発掘調査報告VI 御山千軒遺跡」, p.9-30, 福島県教育委員会・日本国有鉄道。
島地 謙・伊東隆夫編(1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 296p., 雄山閣。

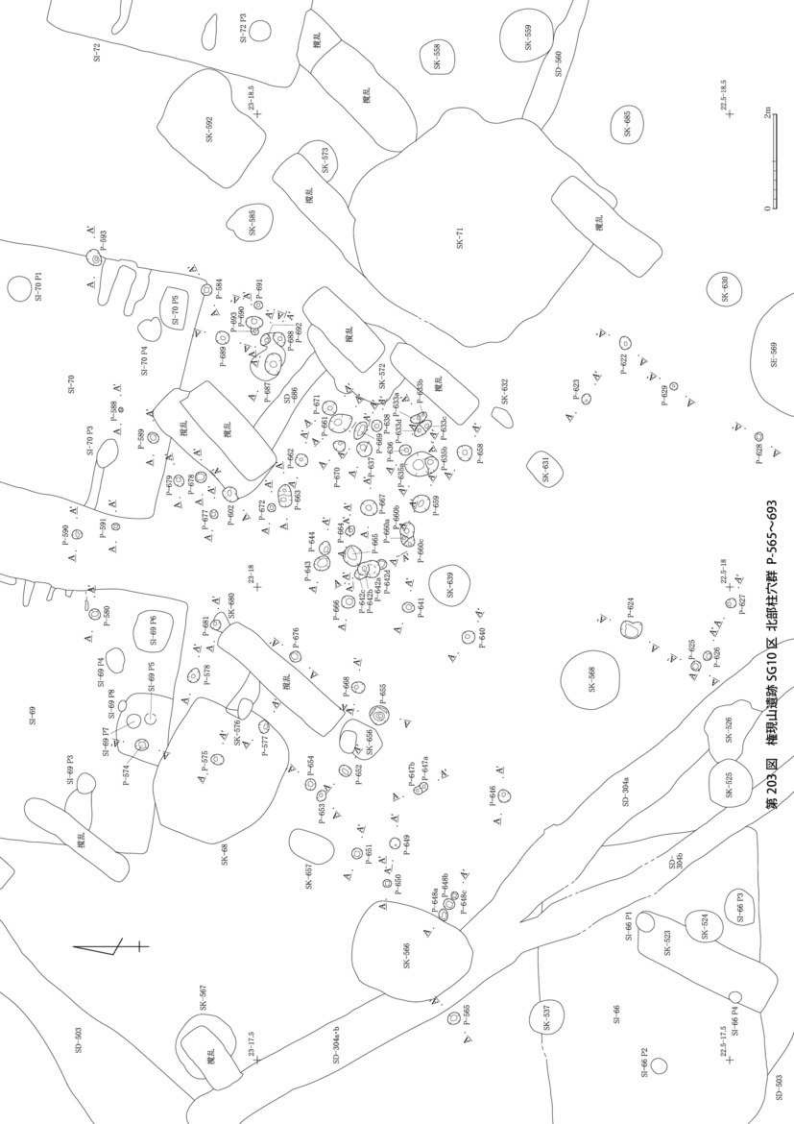
第20節 中世の柱穴状土坑と中央部・北部柱穴群(第203～208図、写真図版173・214)

中世と推定される柱穴状土坑82基をここで報告する。このうち、中世の遺構であることを遺物で確定できた柱穴状土坑は3本である(P-425・627・640)。P-627・640の周辺に群生している北部柱穴群は、大半が中世の遺構である可能性が高いと判断し、ここで扱う(第203図)。北部柱穴群の中には、遺物や重複関係からみて古墳時代集落に伴うものが認められない。P-425周辺に分布する中央部柱穴群(第204・205図)の中にも中世の柱穴が多く含まれていると推定できる。しかし、中央部柱穴群の場合は、古墳時代の柱穴状土坑(P-464・465・466)も分布しているため、そのすべてを中世と見ることはできない。各遺構の詳細は下記の表にまとめた。また、中央部柱穴群の多くは時期不明の柱穴状土坑なので、本章第29節で報告する。

中世の遺物を出土した遺構は、P-425・627・640がある。P-425の青磁破片(1)は龍泉窯系青磁碗1-5b類で、13世紀後半に多いものである(山本1995,p.480)。P-627では皇宋通寶(1039年初鑄)と「□元□寶」(銭名不詳の破片)が出土した。P-640には還元炎焼成の山茶碗系鉢破片があり(1a)、古墳時代竪穴SI-114に混入していた同一個体とみられる破片(1b)とともに図示した。

第124表 権現山遺跡SG10区 中世の柱穴状土坑

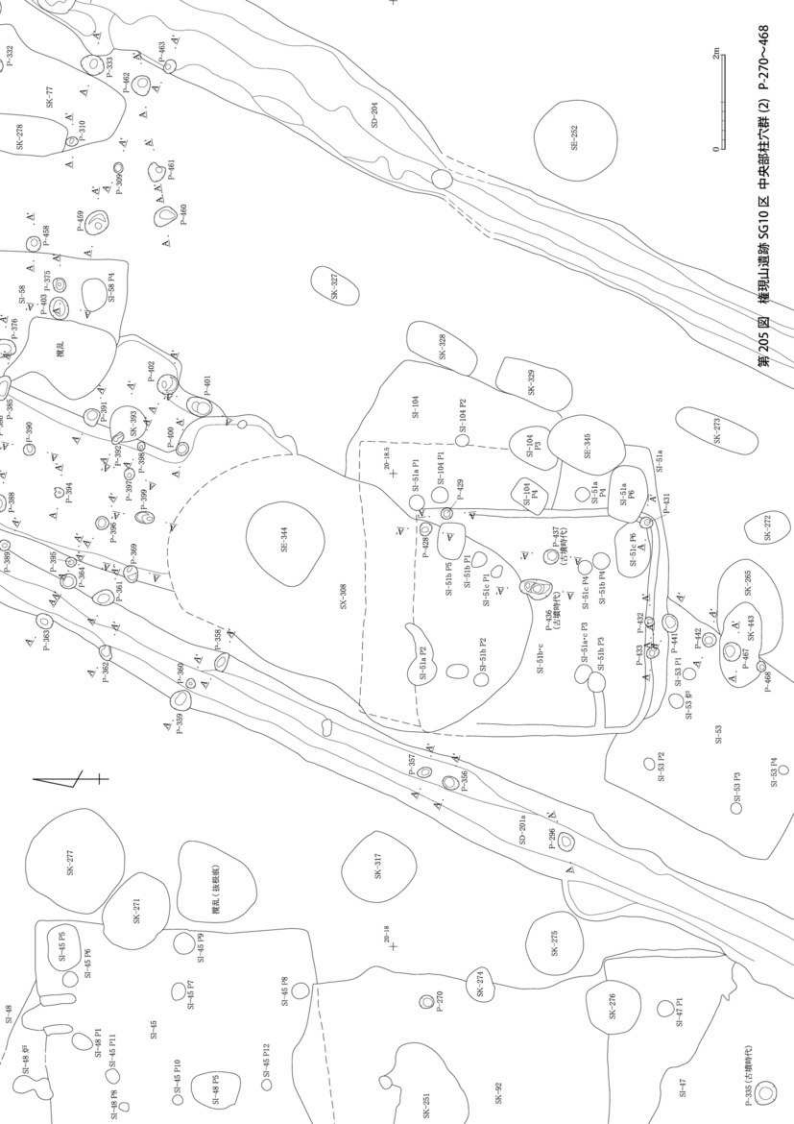
遺構名	グリッド	平面形	形状	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備注
P-425	205-180	円形	SI-110より新	0.24	0.22	0.38	中世
古墳時代のSI-110を切る。中世(13～15世紀)の龍泉窯系青磁碗が出土。中央部柱穴群の分布域に所在し、周辺の柱穴群に中世の柱穴を含むと考えられる。							
P-565	225-175	円形	未検出し	0.28	0.24	0.18	
時期不明のSK-566の南東にあり。遺物なし。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-574	230-175	円形	SI-69より新	0.28	0.24	0.26	中世
古墳時代のSI-69を切る。遺物なし。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-575	230-175	円形	SK-68より新	0.27	0.22	0.56	中世
時期不明のSK-68を切る。遺物なし。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-577	225-175	円形	SK-68より新	0.28	0.23	0.50	上層にローム層が多い
掘削方法が、P-574と同様のため時期不明のSK-68を切る上推定する。遺物なし。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-578	230-175	円形	未検出し	0.32	0.23	0.39	中世
遺物なし。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-580		円形	SI-69より新	0.24	0.22	0.23	中世
古墳時代のSI-69床面を破壊。床はSI-69のものとは異なりP-574～578に近いので、SI-69を切る可能性が高い。遺物なし。北部柱穴群の分布域に所在。							
P-584	230-180	円形	SI-70より新	0.24	0.22	0.25	中世
古墳時代のSI-70を切る。遺物なし。北部柱穴群の分布域に所在。							



第203图 棒现山遗址SG10区 北部柱穴群 P-565-693

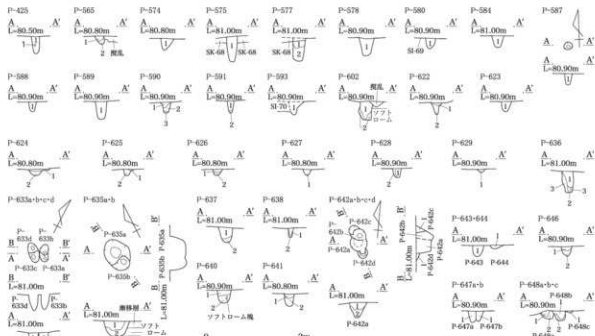


第204図 権現山遺跡 SG10区 中央部柱穴群 (1) P-309~466



第205图 横现山遗址 SG10 区 中央部柱穴群 (2) P-270~468

第5章 権現山遺跡 SG10区



※P-425の平面図は中央部柱穴群の図を参照
※P-587は北部柱穴群上列、北部でS-70と重複する位置に所在
他の平面図は北部柱穴群の図を参照

- SG10SP-425
1 埋填色 ローム状暗褐色の面土上、土砂中、粘り性有。
- SG10SP-565
1 黒褐色 混入物がなく均質、硬、しまり粘性強。
2 暗褐色 ローム小塊・粘り多、黒褐色土少。
- SG10SP-574
1 黒褐色 ローム小塊・粘り少、やや軟。
- SG10SP-575
1 黒褐色 ローム小塊・粘りやや多、やや軟。
- SG10SP-577
1 黒褐色 ローム塊・小塊・粘りやや多、やや硬。
2 暗褐色 ローム粘り少、やや硬。
- SG10SP-578
1 黒褐色 ローム塊・小塊・粘り多、やや硬。
2 暗褐色 ローム塊・小塊・粘りやや多。
- SG10SP-584
1 黒褐色 ローム粘り暗褐色土塊・小塊少、軟、しまり弱(照先ですぐへこむ)。
- SG10SP-587
1 黒褐色 ローム小塊・粘り少、軟、しまり弱(照先ですぐへこむ)。
- SG10SP-588
1 黒褐色 ローム粘り少、軟、しまりやや弱(照先ですぐへこむ)。
- SG10SP-589
1 黒褐色 ローム粘り少、軟、しまりやや弱(照先ですぐへこむ)。
- SG10SP-590
1 黒褐色 ローム小塊・粘り少、やや硬。
2 黄褐色 ローム小塊・粘り多、黒褐色土やや多、やや軟。
3 黒褐色 混入物が目立つ均質、非常に硬。
- SG10SP-591
1 黒褐色 ローム小塊・粘り少、やや軟。
2 暗褐色 ローム粘り中やや多、やや軟。
- SG10SP-593
1 黒褐色 ローム小塊・粘りやや多、土小塊極少、やや軟(照先で強く押すとこむ)。
- SG10SP-602
1 暗褐色 ローム粘り多、ローム小塊極少、軟。
2 暗褐色 ローム小塊・粘りやや多、やや硬。
- SG10SP-622
1 暗褐色 堆山暗褐色土(黒膠層)・塊・小塊が主体、混入物があがり目立つ、やや軟。
2 黒褐色 ローム小塊・粘り中やや多、やや軟。
- SG10SP-623
1 黒褐色 P-628の1層とほとんど同じ。
- SG10SP-624
1 黒褐色 ローム小塊やや多、やや軟。
2 暗褐色 ツブツブが主体、黒褐色土塊やや多、軟。
- SG10SP-625
1 黒褐色 ローム粘り少、やや軟。
2 黒褐色 ローム粘り多、軟。
- SG10SP-626
1 黄褐色 ツブツブ大塊・塊主体、黒褐色土少、やや軟。
2 暗褐色 ローム粘り多、堆山暗褐色土(黒膠層)が混入した土上土、軟。
- SG10SP-627
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-628
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-629
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-630
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-631
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-632
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-633
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-634
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-635
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-636
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-637
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-638
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-639
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-640
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-641
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-642
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-643
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-644
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-645
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-646
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-647
1 黒褐色 ツブツブローム塊。
- SG10SP-648
1 暗褐色 ローム粘り多、やや硬。

- SG10SP-628
1 暗褐色 ローム粘り少、硬、しまり中やや多、均質で混入物が目立つない、粒感有。
2 暗褐色 堆山暗褐色土(黒膠層)に似る、黒褐色土塊若干、硬、しまりやや軟。
- SG10SP-629
1 黒褐色 ローム粘り少、やや軟。
- SG10SP-633a
1 暗褐色 ローム小塊・堆山暗褐色土(黒膠層)小塊多、黒褐色土少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム塊中やや多、ローム粘り少、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム塊中やや多、ローム粘り少、やや軟。
- SG10SP-636
1 黒褐色 ローム粘り多、ローム小塊・塊やや多、硬。
2 暗褐色 ローム粘り少、軟。
3 暗褐色 褐色土が主体、ローム塊・小塊・粘り多、やや軟、裏込土。
- SG10SP-637
1 暗褐色 ローム小塊・粘り少、やや硬。
2 暗褐色 ローム小塊・粘り中やや多、硬。
- SG10SP-638
1 暗褐色 ローム粘り少、やや軟。
2 黒褐色 ローム小塊・粘り中やや多、硬。
- SG10SP-640
1 暗褐色 ローム塊・粘り中、やや軟。
2 黒褐色 ローム粘り中、ツブツブローム塊、やや軟。
- SG10SP-641
1 暗褐色 ローム粘り中やや多、やや硬。
2 暗褐色 ローム粘り中、やや軟。
- SG10SP-642a
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642b
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642c
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642d
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642e
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642f
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642g
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642h
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642i
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642j
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642k
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642l
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642m
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642n
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642o
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642p
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642q
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642r
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642s
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642t
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642u
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642v
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642w
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642x
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642y
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。
- SG10SP-642z
1 暗褐色 ツブツブローム小塊少、やや硬。
2 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや軟。
3 暗褐色 ツブツブローム小塊中、やや硬。

第206図 権現山遺跡 SG10区 中世の柱穴状土坑(1)遺構

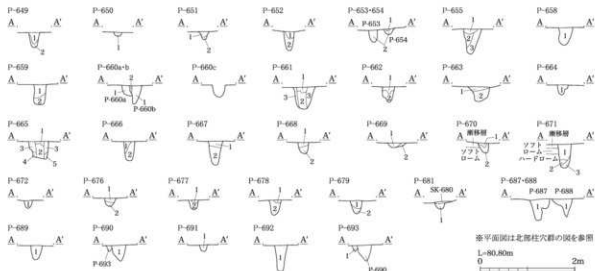
P-653	22.5-17.5	円形	非腐なし	0.24	0.18	0.32	単層 P-654の下層と同質
土層断層部1片が出し、混入と見られる。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-654	22.5-17.5	円形	非腐なし	0.24	0.22	0.16	下層はP-653と同質
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-655	22.5-17.5	円形	非腐なし	0.40	0.40	0.54	
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-658	22.5-18.0	円形	非腐なし	0.32	0.30	0.38	単層
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-659	22.5-18.0	円形	非腐なし	0.38	0.36	0.44	
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-660a	22.5-18.0	円形	非腐なし	0.20	0.16	0.23	単層
P-660bと重複するが割目不明。P-660cの端を参照。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-660b	22.5-18.0	円形	P-660c?→660a→660b	0.33	0.30	0.40	
P-660aと重複。P-660cと重複するが割目不明。P-660cの端を参照。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-660c	22.5-18.0	円形	P-660c?→660a→660b	0.22	0.16	0.26	土層の定層成し
P-660aと重複。P-660bと重複するが割目不明。P-660cの端を参照。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-661	22.5-18.0	円形	非腐なし	0.53	0.39	0.48	柱脚と裏込土あり
しかりした穴で、裏込土あり。土層断層部1片が出し、混入と見られる。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-662	22.5-18.0	円形	非腐なし	0.26	0.26	0.33	
土層断層部1片が出し、混入と見られる。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-663	22.5-18.0	円形	非腐なし	0.47	0.28	0.35	
土層断層部1片が出し、混入と見られる。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-664	22.5-18.0	円形	非腐なし	0.36	0.20	0.21	単層
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-665	22.5-18.0	円形	非腐なし	0.44	0.38	0.38	柱脚と裏込土あり
しかりした穴で、裏込土あり。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-666	22.5-17.5	円形	非腐なし	0.28	0.26	0.42	人為埋戻し
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-667	22.5-18.0	円形	非腐なし	0.34	0.32	0.52	
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-668	22.5-17.5	円形	非腐なし	0.29	0.24	0.25	
溝2つの割目1点が混入。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-669	22.5-18.0	円形	非腐なし	0.42	0.23	0.10	
底面に「土坑」と記載あり。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-670	22.5-18.0	円形	非腐なし	0.26	0.20	0.26	
土層断層部1片が出し、混入と見られる。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-671	22.5-18.0	円形	非腐なし	0.30	0.30	0.52	
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-672	22.5-18.0	円形	非腐なし	0.17	0.16	0.18	単層
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-676	22.5-17.5	円形	非腐なし	0.24	0.23	0.20	単層
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-677	23.0-18.0	円形	非腐なし	0.18	0.17	0.22	
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-678	23.0-18.0	円形	非腐なし	0.24	0.24	0.62	
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-679	23.0-18.0	円形	非腐なし	0.24	0.22	0.30	
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-681	23.0-17.9	円形	SK-680より古	0.21	0.22	0.21	単層
特約形跡のSK-680に土を注ぎ切られる。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-687	22.5-18.0	円形	非腐なし	1.07	0.50	0.46	単層 P-688と同質
P-687→683は1箇所集中している。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-688	22.5-18.0	円形	P-692と重複	0.32	0.22	0.38	単層 P-687と同質
P-688と重複するが割目不明。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-689	23.0-18.0	円形	非腐なし	0.28	0.26	0.30	単層
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-690	22.5-18.0	円形	P-693より新	0.33	0.26	0.36	単層
P-693を参照。土層断層部2片が出し、混入と見られる。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-691	22.5-18.0	円形	非腐なし	0.18	0.18	0.14	単層
遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-692	22.5-18.0	円形	P-688と重複	0.26	0.20	0.57	単層
P-688と重複するが割目不明。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							
P-693	22.5-18.0	円形	P-690より古	0.16	0.13	0.14	単層
P-690に切られる。遺物なし。P-640と同じ群なので中世の柱穴として扱う。北部柱穴の分布域に所在。							

© P-425-587 以下は北部柱穴群に所在。

第125表 権現山遺跡 SG10区 中世の柱穴状土坑 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ mm・g	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 数量 目録
SG10区 P-425				
1 青磁 皿	口 径 14～16 高 残 3.4	口縁部はごく浅く反折する。外面に筋線付文。気泡が多く厚い輪を外内面に 集す。外面に貫入がやや見られる。	5Y5/3 灰オリーブ 焼成 黒緑彩極少	底径 1.5cm 口径 1.18cm SK-425 1
SG10区 P-627				
1 瀬灰 皿		笠文遺覆(1030年前築)。筒径は縦 25.04×横 25.00mm。外縁内径は縦 20.63×横 20.74mm。筒厚は1.26～1.40mm。器底は2.92g。		遺物確認済
2 瀬灰 皿		残高不詳(口元二重)。筒径は24.00mm。外縁の幅は2.76～3.18mm。筒厚は1.20 ～1.32mm。器底は残存重量 1.81g。		遺物確認済
SG10区 P-640				
1a-1b 高 残 鉢	高 残 3.2	山茶碗系の鉢。体部が内彎し、口縁部が内面側へ丸く肥厚する。口縁部の内 外面が互換でわずかに先立を持つ。使用による磨損痕の有無は不明。北東 へ23mm離れた古銅時代式の遺物SK-114に、同一個体の可能性がある口縁部端 片が1点混入している(図の1b)。	7.5Y4/1 灰 やや粗い 白緑～粗粒多。白 磁土と黒色陶土混出	確認済 P.20cm。SI-114 にも1片あり SK-60, SI-114 25

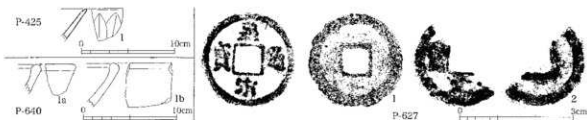
第5章 権現山遺跡 SG10区



- SG10SP-649
1 黒褐色 ローム粒稀少, やや軟。
2 暗褐色 ローム小塊若干, やや軟。
- SG10SP-650
1 暗褐色 地山暗褐色土(腐植層)塊が主体, 黒褐色土少, 軟。
- SG10SP-651
1 黒褐色 ローム粒少, 硬。
2 暗褐色 フツロローム小塊若干, 硬。
- SG10SP-652
1 暗褐色 ローム粒やや多, やや軟。
2 黒褐色 ローム小塊・粒若干, やや軟。
3 暗褐色 ローム小塊・粒若干, やや軟。
- SG10SP-653-654
1 褐色 地山暗褐色土(腐植層)同質, やや軟。
2 黒褐色 ローム粒稀少, やや硬。
- SG10SP-655
1 暗褐色 ローム小塊・今市緑石粒稀少, やや軟。
2 暗褐色 ローム小塊やや多, やや軟。
3 暗褐色 ローム小塊・粒若干, やや軟。
- SG10SP-656
1 暗褐色 ローム粒をごくわずかに含む, やや軟, しまり面。
- SG10SP-659
1 黒褐色 地山暗褐色土(腐植層)小塊少, ローム粒稀少, やや硬。
2 暗褐色 ローム小塊・粒若干, 軟, しまり面。
- SG10SP-660a
1 褐色 黒褐色土・ローム小塊少, やや軟。
2 暗褐色 ハードローム土塊・硬, 裏込土。
- SG10SP-661
1 褐色 ローム粒少, ローム小塊若干, やや軟。
2 暗褐色 ローム小塊・粒やや多, 軟。
3 暗褐色 ローム小塊・粒非常に多, 黒褐色土少, やや軟。
- SG10SP-662
1 黒褐色 ローム粒少, 粘性付。
2 暗褐色 黒褐色土が主体, ローム小塊やや多。
- SG10SP-663
1 暗褐色 ローム粒若干, やや軟。
2 黒褐色 ローム粒やや多, ローム塊少, やや軟。
- SG10SP-664
1 暗褐色 地山暗褐色土(腐植層)塊・小塊やや多, ローム粒若干, やや軟。
2 暗褐色 ローム小塊・粒多, やや硬, 柱礎。
3 暗褐色 ローム小塊・粒多, やや硬, 柱礎。
4 暗褐色 ローム小塊・粒多, 黒褐色土若干, 軟, 裏込土。
5 黄褐色 ローム土塊・硬, 裏込土。

- SG10SP-668
1 暗褐色 地山暗褐色土(腐植層)塊やや多, ローム粒・黒褐色土少, 硬, 人為埋め戻し。
2 暗褐色 ハードローム塊・小塊非常に多, 黒褐色土小塊やや少, 暗褐色土若干, 硬, 人為埋め戻し。
- SG10SP-667
1 暗褐色 地山暗褐色土(腐植層)同質, ローム粒稀少, 黒褐色土, 裏込土, やや硬。
2 黒褐色 ローム小塊稀少, やや軟。
- SG10SP-668
1 暗褐色 ローム粒やや少, 今市緑石粒稀少, 硬。
2 暗褐色 ローム小塊やや多, 黒褐色土少, 硬, しまり。
- SG10SP-669
1 褐色 今市緑石粒稀少, 今市緑石同質, 暗褐色土少, やや硬。
2 暗褐色 地山暗褐色土(腐植層)同質, 暗褐色土少, やや硬。
- SG10SP-670
1 暗褐色 ローム粒稀少, やや硬。
2 暗褐色 混入物が目立たない均質な土, 非常に硬, 粘性付。
- SG10SP-671
1 褐色 ローム小塊・粒若干, やや軟。
2 暗褐色 フツロローム塊, 褐色土少, やや軟。
3 暗褐色 ローム小塊やや多, ローム粒やや多, 硬。
- SG10SP-672
1 暗褐色 ローム粒少, やや硬。
- SG10SP-676
1 暗褐色 ローム粒・小塊少, 硬。
2 暗褐色 ローム粒・小塊・粒稀少, やや硬。
- SG10SP-677
1 暗褐色 地山暗褐色土(腐植層)同質が主体, 黒褐色土少, ローム粒少, やや硬。
2 暗褐色 混入物が目立たない, やや硬。(1層より少し軟)
- SG10SP-678
1 暗褐色 ローム小塊・小塊多, ローム粒少, やや硬。
2 暗褐色 ローム粒稀少, やや硬。
- SG10SP-679
1 暗褐色 ローム粒多, ローム小塊少, やや軟。
2 暗褐色 ローム小塊・粒多, 軟, しまり面。
- SG10SP-681
1 暗褐色 ローム粒やや多, ローム小塊少, やや軟。
- SG10SP-687-688
1 暗褐色 ローム土塊(径1~2cm)・ローム粒・黒色土塊・暗褐色土が混在, しまりや中塊, 粘性有。
2 暗褐色 ローム土塊・暗褐色土が混在, ローム粒粒少量, しまりや中塊, 粘性なし。
- SG10SP-689
1 暗褐色 ローム土塊粒少量, P-693の1層と同質するがローム塊の混入有, しまりや中塊, 粘性有。
- SG10SP-691
1 暗褐色 ロームの混入なし, しまり面, 粘性有。
- SG10SP-692
1 暗褐色 ローム土塊(径1~2cm)・ローム粒・黒色土塊・暗褐色土が混在, しまりや中塊, 粘性有。
2 暗褐色 ローム土塊粒少量, 混化物若干, しまりや中塊, 粘性有。

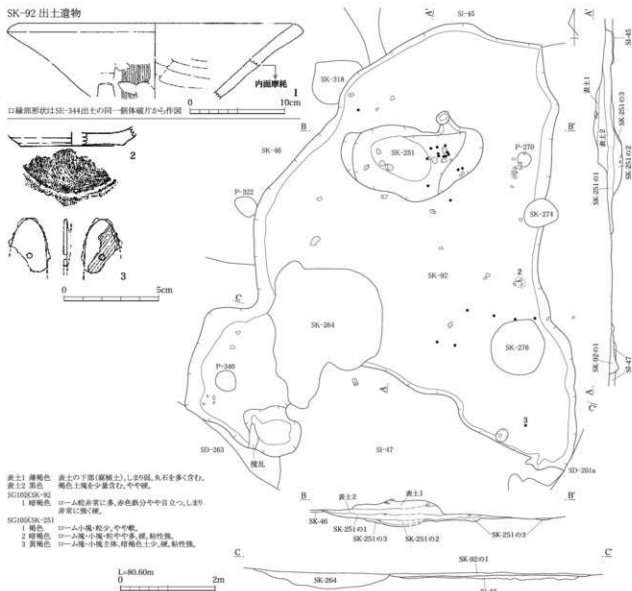
第207図 権現山遺跡 SG10区 中世の柱穴状土坑(2) 遺構



第208図 権現山遺跡 SG10区 中世の柱穴状土坑(3) 遺物

第21節 中世の土坑

中世の土坑は2基ある。SK-251はSK-92に付属する同時存在の土坑で、この両土坑が一連の土層で同時に埋没している。



表土1 黄褐色 土質の下部(腐植土)、土質硬、灰石を多く含む。
表土2 黒色 褐色土塊を少量含む、やや硬。

SG105SK-92
1 緑褐色 ローム状赤黄に多、赤色鉄分や中目立つ、しどろ赤黄に硬。

SG105SK-251
1 褐色 ローム小塊、粒少、やや硬。
2 緑褐色 ローム小塊、粒やや多、硬、粘性强。
3 黄褐色 ローム小塊主体、粘褐色土少、粘、粘性强。

第209図 梅現山遺跡SG10区 SK-92・251 遺構・遺物

第126表 梅現山遺跡SG10区 SK-92 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 土質・構成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 中世陶器 こも鉢	高 残4.2 最大 径31.0	外面はごく浅いタテハケ状調整痕で、下唇にやや強いタテナデ。内面はヨコハナツナデ状調整痕で、内面土位が使用により割断。常滑変色。古墳時代土坑SK-46および中世片がSE-344出土破片と同一体。口縁部形状はSE-344出土破片により作図。	5YR4/3 濃い赤褐色 やや粗い 白濁と白・灰色・透明肌~細粒やや多	南平部の遺構縁部面 体1/8程度 南平上面
2 土師器 小皿	高 残0.7 底 径5.4	内外面ともに体部をロクロナデ。外面底部は回転糸切り痕し。	10YR8/4 浅黄褐色 やや粗滑 白・黒・赤・透明 細粒少、白色雲母細片極少 軟質	東部底直上 残1/3程度 17
3 鉄製品 不明	長 残2.9 幅 残1.8 厚 0.2 重 残2.52	均一な厚さの鉄板で、刃部は持たない。径2.5~3.0mmの孔が1箇所ある。片面に錆および錆跡じり付着土を介して木質が付着する。この他に、接合できない10~17mm大の破片が2片あり、それを加えた残存重量は3.72g。		南部底直上 端部残 37

SG10 区 SK-92 (第 209 図、写真図版 146・173・214)

SG10 区中央部の 19-17 グリッド。不整形の広い土坑で、北部に同時存在の少し深い土坑 SK-251 が付属する。北と南にある古墳後期の SI-45・47 と、西にある古墳中期の SK-46 と、南東部にある時期不明の SK-276 を切る。中世～近世の SD-263 と時期不明の SK-264・297 に南西部を切られる。古墳時代の SK-274 および時期不明の P-270・340 との前後関係は不詳だが、この 3 基を SK-92 が切る可能性がある。

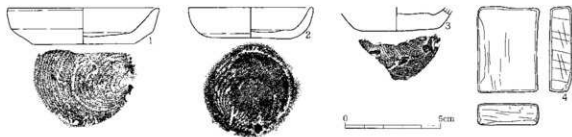
不整形で南北 950 × 東西 830cm、残存する深さ 15 ～ 20cm。SK-92 と SK-251 が連続する層で一緒に埋没し、中世遺構としては埋土が硬い。確実なテフラはない。常滑産こね鉢 (1) は中世の SE-344 と古墳時代の SK-46 表土に同個体破片があり、14 世紀後半頃。土師質小皿 (2) は金色に発色する雲母細片をごく少量含む。重複する時期不明の SK-264 にある小皿 (かわらけ) も SK-92 から混入した可能性があろう。

SG10 区 SK-251 (第 209 図、写真図版 146)

SG10 区中央部の 19-17 グリッド。中世土坑 SK-92 の底面に付属する同時存在の土坑。SK-92 の付属施設で、重複関係も SK-92 と同じである。土層断面図に表土が示されているのは、礫を含むので、表土除去時にこの部分を高く残していたためである。平面は不整形で、北に付き出す部分がビット状に深く、土坑中央部底面より約 5cm 深い。不整形で南北 194 × 東西 300cm、底径 133 × 80cm、残存する深さは 1 層上面から計測して 23cm。SK-92 と同じ土層と一緒に埋没し、テフラの層や粒はない。SK-251 には中世遺物がなく、SK-92 と同じく中世遺構である。古墳中期を主として後期までの土師器・須恵器片がやや多く、古墳時代土坑 SK-46 などから SK-92 を経て流入した破片が多いと見られる。平安時代頃の須恵器杯小破片も含む。

第 22 節 遺構外出土の中世遺物 (第 210 図、写真図版 214)

SG10 区で中世以外の各遺構から出土した中世遺物を報告する。古墳時代の竪穴建物跡に混入しているのが、古墳時代遺構の覆土中に中世の土坑・柱穴のような小遺構が見つられていたのかもしれない。1・2 は土師質の小皿 (かわらけ)。2 は滑石製品で、関東地方で産出する三波川帯の滑石とは石質が異なる。中世の石鍋 (高田 2001) を転用加工した可能性もある。用途は温石・砥石・鉢などが想定できるが、温石には



第 210 図 権現山遺跡 SG10 区 中世の遺構外出土遺物

第 127 表 権現山遺跡 SG10 区 中世の遺構外出土遺物

番号 種類 図版	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 肌子・組成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師質 小皿	口 7.9 高 1.9 底 5.3	内外面ともに回転コナデ。底部は回転糸切り難しで、切り難し時のロクロは右回転 (時計回り)。	7.5YR8/3 浅黄緑 細密 赤・黒細粒やや少、白 粗粒と透明細粒少 軟質	古墳時代の竪穴建物に 混入 口 1/2 割、底 7/12 割 SI-15.4
2 土師質 小皿	口 6.7 高 1.6 底 4.5	内外面ともに回転コナデ。内面の底部中央に斜め 1 方向ナデ。底部は回転糸切り難しで、切り難し時のロクロは右回転 (時計回り)。	10YR8/2 灰白 細密 黒・赤・透明細粒やや少、 黒粗粒と白粗粒少 軟質	古墳時代の竪穴建物に 混入 口 5/6 割、底全割 SI-106.14
3 土師質 小皿	高 残 1.2 底 残 3.8	内外面ともに回転コナデ。底部は回転糸切り難しで、切り難し時のロクロは右回転 (時計回り)。	7.5YR6/6 暗 細密 白・黒・赤・透明細粒少 やや軟質	SD-304・501 と SI-61 付近 底 1/4 割 SI-40.18.65 覆瓦状
4 石製品 不明品	長 4.5 幅 3.2 厚 1.2 重 残 40.3	直方体に加工して各面を平明に仕上げている。長側面では対面を持つ工具で長軸方向に切削加工した後に、軽く研削した痕がわかる。砥石に使ったような曲面はない。全体が黄褐色を帯びているので、被熱したとも考えられる。	2.5YR7/1 明赤灰 細密で軟質な滑石	古墳時代の竪穴を切る 長方形磨丸 完形 SI-72.69 西瓦瓦

やや小さく、砥石のように磨耗した曲面はない。この滑石製品は古墳時代竪穴 SI-72 の南西部の攪乱から出土した。SI-72 から南西へ6mにある時期不明土坑 SK-572 は調査時に「蠟石」が出土して近代以後の土坑と判断した記録があり、この「蠟石」も同種の遺物だったのかもしれない。

第23節 中世～近世の溝状遺構

SG10区 SD-263 (第211・212図、第213図左上部、写真図版147・173)

【位置】 SG10区南半部の19-17と19-18グリッドにある。時期不明のSK-297を切る。SK-297が南側に残る状況はSD-263の南側ラインと位置がそろうので、SK-297がSD-263の一部分(SD-263を掘り返す以前の古い覆土)である可能性を持つが、現地調査時の判断に従い、SK-297は別遺構として扱っている。土層断面B-B'の観察所見ではSK-297とSD-263の覆土がよく似ているので、SK-297とSD-263の時期は接近している。

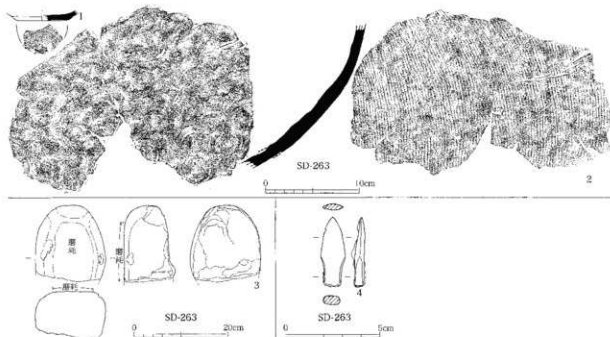
近世のSD-201aに切られるので、SD-263はそれ以前の溝である。古墳時代の各遺構(SI-34a・34b・35・47・101、SK-339、SD-319、P-472)を切り、SK-339→SI-47→SD-263の順序になる(断面図C-C')。中世のSK-92と時期不明のSK-297とP-324を切る。同じく時期不明のSK-341を切ると考えられる。時期不明のSK-214・298に切れ、SI-101→SD-263→SD-201a→SK-214の順序になる。時期不明のSK-321とP-291・320は、SD-263の底面で確認したので、SD-263より古い可能性がある。時期不明のSK-372との新旧関係は不明で、覆土が軟らかいSK-372のほうが新しいと想定することもできる。

【規模と形状】 西半部では溝幅70～140cm、残存する深さは12～16cmの部分が多く、深い部分では24cm。底面は西へ傾斜し、標高は西端で80.25m、中央部で80.10m。南側に幅100～210cm・深さ3～5cmの浅い段状掘り込み部が付帯する。段状掘り込み部の底面は平坦で、東側はSK-297に連続するように見えるが、SK-297は少し深くてSD-263に切られるので別遺構である。東半部では溝幅90～170cm、残存する深さは14～17cm、底面標高はほぼ一定で80.06～80.12cm。埋土は自然埋没で、混入した縄文草創期の今市軽石粒の他にも、テフラの可能性のある白色粒を含む。

【出土遺物】 遺物は大きなものから小さな破片まで古墳時代土師器少量や須恵器裏破片があるが、ほとんどが周辺の古墳時代集落からの流入品と思われる。礫も多い。須恵器裏片(2)は、古墳時代土坑SK-275などで出土した破片と類似し、また古墳時代のSK-261bで出土した小破片と接合している。糸切りの平安時代須恵器杯(1)や、時期不明の工具?(4)もある。台石(3)はよく被熱しているが、鍛造剥片や鉄鏽はないので、金床石の可能性は低い。図示以外の土師器および焼粘土塊合計335片・3.856gの内訳は、杯



第211図 権現山遺跡SG10区SD-201a・201b・204・263(1)SD-263平面図



第 212 図 権現山遺跡 SG10 区 SD-263 遺物

第 128 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-263 出土遺物

番号 種類 数量	大きさ 縦×横	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵町 杯	高 残 1.1 底 径 5.4	回転コブナズおよび底部回転糸切り磨し時のロケロは右回転(時計回り)。三貴集産の平安時代遺物。残存する底部外形が糸切り磨し時に少し入っているため、復原図は参考程度。	2.5Y7/1 灰白 緻密 白・灰色胎～細粒と黒 細粒少軟質	断面E-Fの西側 2mの 範囲 底 1.6 貫 19-18D～B
2 須恵町 大甕		外面はおそらく木目平行の溝を形作った叩き板で縦位の平行叩き。内面は同心円文当具跡で、当具の凹凸はよくわかるが同心円の溝がやや浅くて不明瞭。後面は暗赤色～暗緑色のサンドイッチ状。白磁中～後期の遺物が混入。 [注記] 加, 14, 16, 19.5-17.0, 19.6-17.5, SK 261 D トレ 990728	5G4/1 暗緑灰 やや粗い 白粒～細粒多。白 磁と須恵町磁ややや少 やや硬質	西平部中央の破直上～ 底上 8cm, SK 261b の 小破片 1片も残存
3 石器 打石	長 残 16.1 幅 15.0 厚 残 10.0 重 残 3811.7	厚い楕円形の自然石を利用。平坦な1面を作業面に使って良く磨耗して、その表面はやや凹凸がある破面。同の下端も破面で、作業面を使った後に破面したと見られる。各面も滑めて平面が強く磨耗して赤色化している。破面割内や裂片が全く見られないので、金床の可能性は低い。	10YR7/6 明褐色 粗粒で硬質な花崗岩	注記は左欄 西平部中央の破上 18cm 端部欠 36
4 鉄製品 工具?	長 3.64 幅 1.24 厚 約 0.5 重 4.27	先端は鎌や鋤(やりかんな)のように刃部を持って尖る。刃部は基部に比べて薄く、横断面は両側の裏面が扁平で表面のほうが丸味が強い。基部は断面が楕円方形。X線写真でも孔は認められない。木目等の有機質も見られない。		SK 37.2の西側で SI-34a より上層 定形 EE より 30cm西 3層

112片・781g、高杯 23片・777g、鉢 2片・95g、小形壺 1片・28g、壺甕類 192片・2,128g、小形土器 1片・35g、焼粘土塊 4点・12g。また、現地調査時に「SI-34・SD-263 上面」出土遺物として取り上げた土器器合計 88 片・773g の内訳は、杯 22 片・143g、高杯 14 片・97g、鉢 1 片・23g、壺甕類 50 片・423g、小形土器 1 片・87g。

第 24 節 近世の溝状遺構

SG10 区 SD-201a・201b (第 213～215 図、写真図版 147・214)

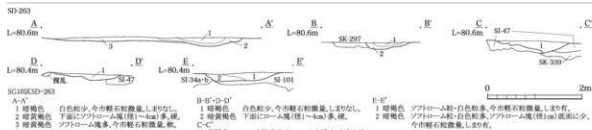
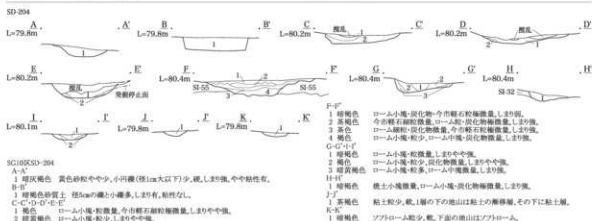
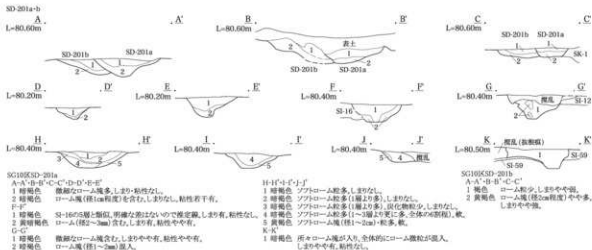
[位置] SG10 区南半部の全域を巡り、X16～X21 間、Y17～Y21 間に所在する。調査前の地表面の窪みとして方形区画を確認できた。南辺溝の東側は調査区外まで伸びるが、すぐ東側の台地東端斜面で溝が終了すると思われる。北辺溝の東端部で連結する SG10 区 SD-204 と同時に機能した区画溝である。SD-201a と SD-204 の間に中央部柱穴群 (第 204・205 図) が多く、中世の井戸 SE-252・344 や時期不明の井戸 SE-345 が区画内にある。ただし中央部柱穴群や井戸のすべてが中世かどうかは不明で、時期不明の遺構もある。SD-201a の土器と近世磁器 (1・2) および連結する SD-204 からみて、近世の溝と考えられる。

SD-201b を掘り直した新时期の溝が SD-201a である。SD-201a は古墳時代整穴 SI-12・13・16・40・47・



第213図 権現山遺跡SG10区 SD-201a・201b・204・263(2) 平面図

第5章 権現山遺跡 SG10区



第214図 権現山遺跡 SG10区 SD-201a・201b・204・263(3) 断面図

59・101を切る。古墳時代のSK-208・292・343、古墳時代の溝SD-41・42、中世の土坑SK-92、中世～近世の溝SD-263、時期不明の土坑SK-1・288・289を切る。時期不明のSK-202とSK-214に南辺と西辺をそれぞれ切られる。P-296・356～366・368・389と重複し、新旧関係は不明だが、SD-201に伴う柱穴土坑かもしれない。SD-201bの重複関係はSD-201aとほぼ同様であり、それに加えて南辺でSD-201bがSK-207を切り、SD-201aにSD-201bが切られる(SK-207→SD-201b→SD-201a)。

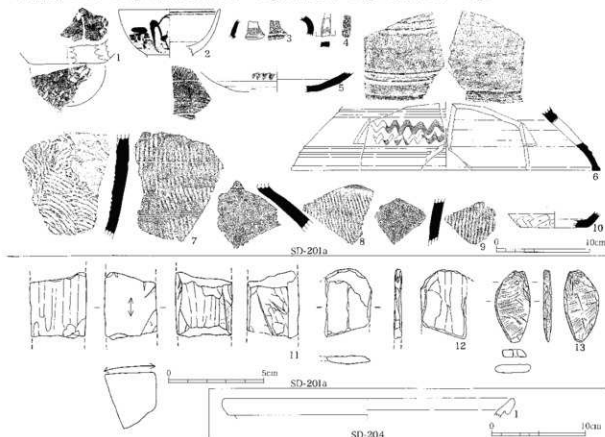
【規模と形状】方形の区画溝で、内部の規模は南北82×東西38m。北半部では平行するSD-204との東西方向の間隔が10～11m。

SD-201aは西辺溝幅130～210cm、北辺溝幅55～60cm、南辺溝幅29～34cm。残存する深さは南辺で14～26cm、西辺で35～60cm、北辺で23～33cm。南辺では断面図B-B'からC-C'までの付近が深く、底面も低くなる。西辺は底面が南へ少し傾斜する傾向があり、またX19ライン付近では西辺溝底面が少し深いので7月の降雨後に雨水がたまっていた。北辺では底面に傾斜がほとんどない。底面標高は、西辺溝が北端で標高79.95m、南端で79.53m。南辺溝は標高79.58～79.82m。北辺溝は標高79.98～80.02m。

埋土は自然埋没で、テフラの層や粒はみられない。

南辺のSD-201bはSD-201aの南に接して残る。SD-201bの北・西辺はSD-201aに掘り直されたと考えられる。南辺の幅68～90cm、残存する深さ9～15cmで、断面B-B'を見ると本来は30cm以上の深さであろう。底面標高は79.57～79.78mで、D-D'付近で最も低い。自然埋没で、テフラはみられない。

【出土遺物】SD-201aに伴う遺物は、山水文の染付碗がある(2)。軟質の土器(1)と砥石(11)も近世の可能性がある。古墳時代集落から流入した土師器・須恵器(二重甕・甕・器台・高杯片)と石製模造品、平安時代の須恵器(10)もある。須恵器器台(6)は、東にあるSG10区SI-111や重複するSK-292などの破片と同一個体である。二重甕(4)の破片はSI-50・64aやSK-254などに、剣形石製模造品(13)はSI-2などに事例がある。絹雲母片岩(12)は、SG10区SI-101とSD-42の石製模造品に例があるが、この地域で一般的な石材ではない。SD-201a・201bの判別ができない土師器の合計148片・396gの内訳は、杯56片・255g、高杯5片・41g、小形甕5片・18g、壺甕類82片・865g、SG10区SD-201aの図示以外の土師器合計3片・86gの内訳は、杯1片・17g、壺甕類2片・69g。SG10区SD-201bは図示した遺物はなく、土師器合計11片・133gの内訳は、杯6片・64g、高杯2片・20g、壺甕類3片・49g。



第215図 権現山遺跡SG10区SD-201a・204 遺物

第129表 権現山遺跡SG10区SD-201a 出土遺物

番号 種別 形状	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または原料)	出土状態 残存状態 注記
1 中・近世 土器 甕?	高 残1.0 底 残8～9	厚く重みがある。外底面は雑なナデで、乾燥時に置いた場所の凹凸面が残る。内底面は雑なコビナデの後に焼成前の片割1本。	7.5Y8/6 浅黄褐色 やや磁質 白・透明細粒多。 白相粒少 やや軟質	西辺の中央 底1/6 残 419-17.5
2 福原 碗	口 残10.8 高 残5.1	染付丸碗。外面文様は供須により雪で山水文を描く。内面に供須で模範を口縁部に2本、見込みに1本。染付文様はいずれも手描き。	白 磁質 硬質	西辺の中央 口1/8 残、体1/6 残 19-17.5
3 須恵器 器	高 残2.1	外面は6本の條文具で右から左へ波状文を描く。口縁部下端は強い凸輪状。古墳時代中期の遺物が混入。	7.5Y5/1 灰 緻密 白・黒細粒少 やや硬質	北西隅 口1/12 残 20.5-18.5 北コーナー

第5章 権現山遺跡 SG10 区

4	須虫器 重葺	高 残 1.7	外側は透窓の下端部。5面の工具で右から左へ向かって磨蝕状文を回転刻文する。外面下部に自然蝕。SI50・64a、SK-254出土破片と同一個体の可能性あり。古墳時代中期の遺物が混入。	5Y4/1 灰 やや緻密 白細粒積層	周辺の東部 製部のスリット部分の 小破片 16.0-18.0
5	須虫器 高杯	高 残 3.1	頸部部分が少ないので復原図は参考用。外面は杯底部に回転コナヘラズリ杯体部にくっついて痕で区画した後、7面以上の磨蝕状文で1箇所だけ残る。杯底部には頸部に透窓を開けた時のへら先で浅い波線が(よんじょう)状に生じている。古墳時代中期末の遺物が混入。	N5/0n 灰 やや緻密 白粗～細粒やや多 白硬少	北西端 杯体 1.8 ～ 1/12 間 20.5-18.5 北コーナ 部
6	須虫器 器台	高 残 6.7 脚版 版 32.6	低い穴部 2条ずつで区画した内部に、11～12 箇前後の磨蝕状文具で右から左へ磨蝕状文を施す。おそらく三角形の透窓の磨蝕部が1箇所だけ残る。穴の縦径の大きさをみて、透窓は各方向以内と考えられる。磨蝕部跡の回転コナヘラは、波状文を描く方向と逆の可能性がある。外面全体に黄緑色～灰色の自然蝕がかかる。SI-111 他出土破片と同一個体の古墳中期の遺物が混入。	2.5Y6/1 灰 細粒 白粗～細粒少	周辺の中央道上 11m 脚版 1/18 間 18.5-17.5
7	須虫器 器	高 残 11.0	外面は木目平行の溝を彫った明き板で縦位の平行明き器器部。9面以上の工具で磨蝕の平行波線(ナデ)。内面は同様の杖当具部。外面の破片は上部部明内面に層状に薄く剥落する。表面は底面にぶい層(7.5YR7/4)、底面付近は土に灰白(7.5YR8/1)になる反層状。古墳時代(後期)の遺物が混入。	色調は左藤を参照 やや粗い。白～赤粗～細粒 やや多。透明粗～細粒 少	周辺の中央 部部 11.9-17.5
8	須虫器 器	高 残 5.0	木目平行の溝を彫った明き板で肩部に平行明き板。肩部の下側に軽いコナヘラ。内面は縦位のナデで、当具部は磨り直したかまたは最初から無文。古墳時代中期の遺物が混入。	5G4/1 暗オリーブ灰 やや緻密 白粗と黒粗 粒少 硬質	周辺の中央 部部 19.75-18.0
9	須虫器 器	高 残 5.0	外面は木目平行の溝を彫った明き板で平行明き。内面はナデで無文。古墳時代中期の遺物が混入。	5B4/1 暗緑灰 やや緻密 白粗～細粒少 硬質	周辺の中央 部部 19.1-17.5
10	須虫器 折	高 残 1.7 底 残 7.2	外底面は1方向の手持ちヘラズリを軽く行う。回転コナヘラ後、外面の下部を手持ちヘラズリ。平文時代の遺物が混入(新治産産)。	5Y5/1 灰 やや緻密 白・透明粗～細粒少 白粗細粒混少 中や硬質	周辺の東平 端部 16.5-18
11	須虫器 石 器	長 残 3.6 幅 残 3.0 厚 残 3.0 重 残 37.3	細面 4面のうち1面だけを縦面に使い、平滑に磨ける。表面には工具等の刃部によると見られる微凸切刃がある。表面以外の3側面は刃部が刃方向または斜方向に切刃加工して、刃部の微凸に由来する平行条線が生成している。上下両面の磨面に比べて4側面は暗褐色を帯びている。	2.5Y5/3 黄褐色 細密でやや硬質な微粒状質層 灰質	周辺の東平 端部 16.5-18
12	須虫器 新片	長 残 3.6 幅 残 2.4 厚 残 0.38 重 残 5.36	磨面に沿って磨蝕した薄い石片で、外面に残存する部分は磨面を研磨してある。破面でも磨蝕とされている箇所が左側の右下隅に見られる。石製製造品の可能性もあるが、石材が質質なので断定できない。	5G4/1 暗緑灰 細密で軟質な滑石片質 粗面層付片	周辺の南部 部部 17.5-17.0
13	須虫器 彫形品	長 3.71 幅 1.82 厚 0.41 重 4.76	両面ともに2～3方向に研磨して磨蝕な表面を残す。孔径は両面とも1.86～1.86mmで、右側の面は孔が少し斜めに開口しているで孔の長径だけが2.10mmになる。このことから見て、右側の面に穿孔したと考えられる。磨面は縦方向(穿孔と同じ方向)に研磨して、縦方向に2面程度に分別して磨いている。	10B3/1 暗青灰 細密で軟質な滑石片質	周辺の東平 端部 16.5-18

第130表 権現山遺跡 SG10 区 SD-204 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 質・量成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 陶器 須虫器	口 版 30.6 高 残 2.2 最大版 31.0	両面擦鉢の可能性あり。外面は口縁部を「磨り直し」にしている。内面は口縁部跡に磨蝕を施す。内外全面に施蝕。磨り部分は残っていない。 [注記] JA-A 南一筋、SI-55セク	7.5YR(4) 褐 やや緻密 白・黒粗粒少 やや硬質	中央部 SI-55 重複地点 口1/2 区 注記は左欄

SG10 区 SD-204 (第 213 ～ 215 図、写真図版 147・148)

[位置] SG10 区南半部の X18 ～ 21 間、Y17 ～ 21 間にあり、南は低地部分で浅くなって消滅する。北辺溝は SG10 区 SD-201a・b の北辺と連結し、同時に機能した区画溝と考えられる。古墳時代の各遺構 (SI-32・33・55、SD-41・42・304a・304b・319) を切る。縄文時代の SK-307 および時期不明の SD-506 と重複する部分には抜根の擾乱があり、これらの重複関係は不明である。時期不明の SK-336 および SD-510 の南端部に少し重複するが、新旧関係は不明。

[規模と形状] 北辺溝は幅 90 ～ 210cm で、西端が狭く(幅 120cm)、東端が低地に降りた部分も狭い(幅 90cm)。北辺溝は残存する深さ 20 ～ 30cm で、底面が東へ傾斜し、底面標高は西端で 79.77m、東端で 79.27m。西辺溝は幅 110 ～ 260cm、残存する深さ 10 ～ 30cm で、底面が僅かに南へ傾斜し、底面標高は北端で 79.77m、南端で 79.63m。南端部は平面形がクランク状に屈曲して低地部分に下り、溝底面標高も 79.44m 前後まで低くなる。南端部は溝幅 60 ～ 120cm で、最南端は周囲よりも浅くなり、溝が確認できなくなる。埋土は自然埋没で、テフラは縄文草創期の今市軽石粒が混入しているだけである。

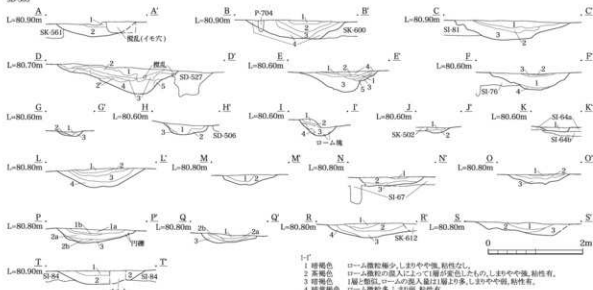
[出土遺物] 近世の遺物として、鉄軸擦鉢かと思われる陶器が1片ある(第215図下段右)。図示以外の土師器合計 95 片・917g は古墳時代集落からの混入品と見られ、内訳は杯 7 片・48g、高杯 10 片・117g、小形壺 1 片・54g、壺蓋類 74 片・654g、小形土器 3 片・44g。



第216図 権現山遺跡SG10区 SD-503(1) 平面図

第5章 権現山遺跡 SG10区

SD-503

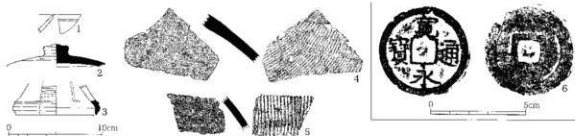


SG10区SD-503

- A-A'
- 1 埋褐色 地山層(褐色土+砂2cm)と灰化物少,しまり有。
 - 2 埋褐色 ソフトローム層(砂+赤土)と灰化物多,しまり有。
- B-B'
- 1 埋褐色 ソフトローム層少,しまり有。
 - 2 埋褐色 灰化物多,ソフトローム層,しまり有。
 - 3 埋褐色 ソフトローム層少,今赤粒石粒少量,しまり有。
 - 4 埋褐色 ソフトローム層多,しまり有。
- C-C'
- 1 埋褐色 ソフトローム層少,今赤粒石粒少量,しまり有。
 - 2 埋褐色 灰化物多,しまり有。
 - 3 埋褐色 ソフトローム層多,今赤粒石粒少量,しまり有。
- D-D'
- 1 褐色 ロームを含む土質が多,しまりや中硬,粘性なし,難作土。
 - 2 埋褐色 ローム粒状多,しまり有,粘性有。
 - 3 埋褐色 2層と類似,しまりや中硬,粘性有。
 - 4 埋褐色 ロームの2層と類似,しまりや中硬,粘性有。
 - 5 埋褐色 ローム粒状少,しまりや中硬,粘性有。
 - 6 埋褐色 ローム粒状多(層上り多),しまりや中硬,粘性有。
- E-E'
- 1 埋黄褐色 ローム粒状多,しまり有,粘性有。この層より上部には赤褐色土が薄く堆積する,しまりや中硬,粘性有。
 - 2 埋褐色 ローム粒状中多,下部には現代の埋褐色土が入り,しまり有,粘性有。
 - 3 埋褐色 ローム粒状少,しまりや中硬,粘性有。
 - 4 埋褐色 ローム粒状少,しまりや中硬,粘性有。
- F-F'
- 1 埋褐色 ローム粒状少,しまりや中硬,粘性有。E-G'の層と対比。
 - 2 埋褐色 基本部に1と同質だが灰化物が若干入り,しまりや中硬,粘性有。
 - 3 埋黄褐色 2層の灰化物の影響で層上り多,若干不揃い,しまりや中硬,粘性有。近隣多量土の物も多。
- G-G'
- 1 埋褐色 ローム粒状少,しまりや中硬,粘性有。
 - 2 埋褐色 1層とロームの混合土,しまりや中硬,粘性有。
- H-H'
- 1 埋褐色 ローム(厚1~3cm)少,しまり有,粘性有。
 - 2 埋黄褐色 ローム(厚1~3cm)少,しまり有,粘性有。
 - 3 埋黄褐色 2層と同質と思われるが,ロームの量が多い,しまり有,粘性有。

- I-I'
- 1 埋褐色 ローム粒状少,しまりや中硬,粘性なし。
 - 2 埋褐色 ローム粒状の侵入によって1層が灰色化したもの,しまりや中硬,粘性有。
 - 3 埋褐色 1層と同質,ロームの侵入量は1層より多,しまりや中硬,粘性有。
 - 4 埋黄褐色 ローム粒状多,しまり有,粘性有。
- J-J'
- 1 褐色 ローム粒少,や中硬。
 - 2 埋黄褐色 ローム粒+小粒や中多,や中硬。
- K-K'
- 1 埋黄褐色 ソフトローム層(灰化でばりやるとする)や中硬,や中硬。
- L-L'
- 1 埋褐色 ローム粒少,や中硬。
 - 2 埋褐色 埋褐色や中多,ローム粒少,や中硬。
 - 3 埋褐色 埋土や中多,ローム粒少,や中硬。
 - 4 埋黄褐色 ローム小塊+粒や中多,や中硬。
- M-M'
- 1 埋褐色 ローム粒少,細,しまり有。
 - 2 埋黄褐色 ソフトローム小塊+粒多,ソフトローム大塊若干,硬,しまり有。
- N-N'
- 1 褐色 M-M'の層と同質。
 - 2 埋褐色 灰化でばりやりの少ない,ローム粒少,軟(S-D'の層土から侵入した層)
 - 3 埋黄褐色 M-M'の2層と同質,地山(ローム)の崩れた土がやや多い層
- O-O'
- 1 褐色 灰化(厚1~5cm)や中多,砂(厚2cm程度)少,硬。
 - 2 埋黄褐色 ローム粒や中多,や中硬,粘性有。
 - 3 埋黄褐色 ローム小塊+粒+砂少,硬。
- P-P'
- 1a 褐色 ローム粒少,粘性強,硬。
 - 1b 褐色 1aと同じだがローム粒+粒や中多,O-O'の層と対応。
 - 2a 埋褐色 ローム粒多,灰化中,粘土層少,や中硬。
 - 2b 埋褐色 2aと同じだが~3cm土の灰片多。
 - 3 埋黄褐色 ローム小塊+ローム粒多,埋土や中硬は少ない。
- Q-Q'
- 1 褐色 ローム粒少,や中硬,粘性強,埋土または見られない。
 - 2a/2b P-P'の2層と同質。
 - 3 埋黄褐色 ローム粒多,ローム小塊少,や中硬,灰化中または見られない。
- R-R'・S-S'
- 1 埋褐色 灰化物少,しまり有。
 - 2 埋褐色 ソフトローム層多,しまり有。
 - 3 埋褐色 ソフトローム層多,ソフトローム層(厚1cm)少,しまり有。
 - 4 埋褐色 ソフトローム層(厚1cm)粒多,しまり有,粘性有。
- T-T'
- 1 埋褐色 灰化物多,しまり有。
 - 2 埋褐色 ソフトローム層少,灰化物少,しまり有。

第 217 図 権現山遺跡 SG10 区 SD-503 (2) 断面図



第 218 図 権現山遺跡 SG10 区 SD-503 (3) 遺物

SG10区 SD-503 (第216~218図、写真図版149・150・173)

[位置] SG10区北部に広く展開する環状の溝。X21~X25間、Y17~Y20間を三角形に巡る。古墳時代建物SI-64a・64b・65・66・67・75・76・81・84・86を切る。古墳時代溝SD-304a・304b・527と

第131表 権現山遺跡 SG10 区 SD-503 出土遺物

番号 種類 品名	大きさ mm・g	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 高脚 杓	口 径約 13 ～15 高 残 1.9	外面は白塗の透明釉。内面は少し厚い緑色釉。	外-10YR7/1 灰白 内-10Y5/2 オリーブ灰 緑色 混和材なし 硬質	東辺北端、SK-561の東 口1/12間 B-B1m北
2 遺虫 蓋	高 残 2.5 脚径 2.7 脚高 1.3	外面は中央部を回転へラウズリした後に轆轤を貼り付けて回転ヨコナデ。へラウズリ時のワケは左回転(反時計回り)。内面は回転ヨコナデ後に中央部を不定方向の削ナデ。外面を上に向けて蓋部・調整した時のワケは右回転(時計回り)。胎土赤色の平文時代遺物が混入。	10Y4/1 灰 やや粗い 白釉・黒細粒やや多 硬質	東辺北端、S1-81・83の 東側 大井1/2間、蓋2/3間 1.23.5-19.5
3 遺虫 高杯	高 残 3.2 脚径 径 8.5 最大 径 9.3	脚部外面の下位に脚突縁を持ち、その上はカキメを備えていたと見られるが、緑黄色の自然釉に覆われているので、当面観察できない部分が多い。長方形と想定される透窓の右側縁部を確認できる。透窓が3方向か4方向かは不明。古墳時代中期の遺物がS1-75から混入。	5Y7/1 灰白 緑色 白・黒細粒 やや硬質	東辺中央部、S1-75の北 側 脚1/6間、脚径1/12 間 23.0-19.5一透
4 遺虫 蓋	高 残 7.0	脚部の破片。外面は脚位の平行明き後に脚部下部をヨコナデ。内面は無文でわずかにヨコナデが認められるので、当面胎土をナデ消した可能性はある。破面の芯部は暗赤灰色を帯びる。古墳時代中期の遺物が混入。	5B5/1 青灰 白釉・黒細粒やや多、白 緑少 硬質	東辺北平、S1-81の北東 側 脚部片 3
5 遺虫 蓋	高 残 3.5	外面は本日平行の溝を彫った明き板で脚位の平行明き。内面は無文で、当面胎土をナデ消した可能性はある。破面の芯部は暗赤灰色。古墳時代中期の遺物が混入。	7.5Y5/1 灰 緑色 白輝・黒細粒と黒色濁出 粒多 硬質	東辺北平、S1-81の北東 側 脚部片 2
6 編織 甕土 遺物	重 172	甕土通貫の一文瓦。残存は縦23.97mm×横23.96mm、外縁内径は縦19.79mm×横19.73mm、残厚は1.02×1.23mm、厚目は1.72g。		東辺南端(S1-76周辺) 遺物編織土 完全 21.5-19上側

古墳時代土坑 SK-551・561・570・600 を西部と北東部で切る。時期不明溝 SD-505・506・508・510・518 を切る。ただし、SD-505・506・510・518 と重複する状況の土層断面図はない。SD-503 の底面で確認した時期不明土坑 SK-514 を切る可能性が高い。時期不明土坑 SK-502・513・612 と、時期不明の柱状土坑 P-704・709 に切られる。時期不明土坑 SK-517 との新旧関係は不明だが、SK-517 に切られるかもしれない。時期不明建物 SB-603 の北西柱穴と重複するが、新旧関係は不明である。

【規模と形状】 三角形形状に一辺する平面形。溝幅は、東辺で 80～300cm、北辺で 90～220cm、南辺で 40～190cm。残存する深さは、東辺で深く 44～47cm、南辺ではやや浅く 25～39cm。東辺の南端部と北辺では浅く、北辺が 10～35cm、東辺の南端部が 25～36cm。底面の標高は北東隅が高く、南東隅が低い。北辺では東側が高く、東端で標高 40.42m、西端で 80.26m。東辺では北側が高く、北端で標高 40.42m、南端で 80.06m。南辺では西側が高く、西端で標高 80.28m、東端で 80.06m。

【覆土】 埋土は自然埋没で、縄文草創期に降下した今市軽石が B・B' と C・C' に地山から混入している以外には、テフラの層や粒はほとんど見られない。近世の区画溝と考えられる。

【出土遺物】 遺物は僅かで、古墳時代中期を主体とする土師器片が主で須恵器片もあり、縄文早期～後期と弥生中期の土器片も少量ある(『東谷・中島地区遺跡群 10』の第 36～40 図 75・222・240・250・257・264 と第 42 図 46)。SD-503 の時期を示す遺物は陶器片(1)と寛永通宝(6)がある。図示以外の土師器合計 460 片・3.502g は古墳時代集落から混入したもので、内訳は杯 181 片・861g、高杯 18 片・278g、小形壺 2 片・9g、壺甕類 251 片・2.272g、甗 5 片・58g、小形土器 3 片・24g。

第25節 近世の土坑

SG10 区 SK-71 (第219図、写真図版147・174)

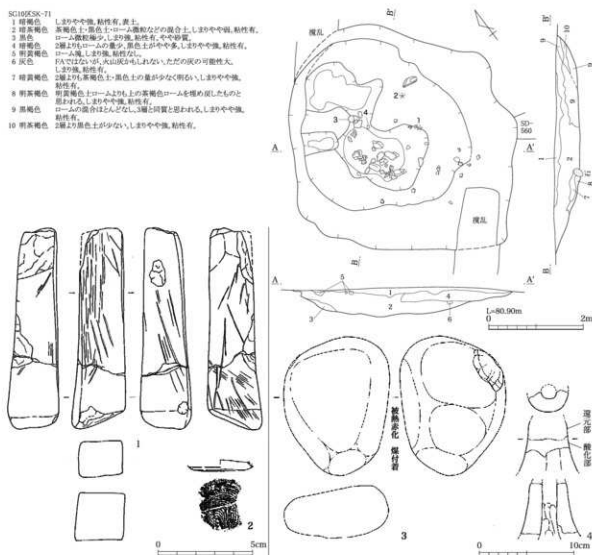
SG10 区北部の 22-18 グリッドにある、大形の深い土坑。時期不明の溝 SD-560 を切る。西壁上端が土層断面にかかる部分は少しオーバーハング状だが、土坑全体がそうになっているわけではない。不整楕円形で口径は南北 567×東西 505cm、土坑中央部における確認面から底面までの残存する深さは 62cm。埋土は 1 層(表土の下部)を除くと人為的に埋め戻した可能性があり、確実なテフラは見られないが 6 層の灰色粘質土は現地調査時にテフラの可能性も考えられている。キメの細かい胎土で底径が小さな 2 は、中世ではなく近世の土師質小皿(かわらけ)であろう。専用羽口は、『東谷・中島地区遺跡群』10 で権現山遺跡の叢

第5章 権現山遺跡 SG10 区

治関連遺物全体を報告後に確認したため、同書 pp.490-498 に掲載されていない。近世の土坑に古墳時代集落から羽口などが混入したものであろう。

SG10区SK-71

- 1 埴輪色 しまりや中強、粘性有、黄土。
- 2 埴輪褐色 赤褐色土・黒色土・ローム混在の混合土・しまりや中強、粘性有。
- 3 黒色 ローム混在量減少、中強、粘性有、やや砂質。
- 4 埴輪色 2層よりロームの量少、黒色土がやや多、しまりや中強、粘性有。
- 5 埴輪褐色 ローム混、しまり強、粘性有。
- 6 赤色 19Aでびびりが、大石混入も少ない、ただの泥の可能性大、しまり強、粘性有。
- 7 埴輪褐色 2層より、赤褐色土・黒色土の量が少なくて固い、しまりや中強、粘性有。
- 8 埴輪褐色 埴輪褐色土・ロームより、上の赤褐色土を覆ったものと想われる、しまりや中強、粘性有。
- 9 黒褐色 ロームの割合はほとんどない、細粒と質と思われ、しまりや中強、粘性有。
- 10 赤褐色 2層より黒色土が少ない、しまりや中強、粘性有。



第 219 図 権現山遺跡 SG10 区 SK-71 遺構・遺物

第 132 表 権現山遺跡 SG10 区 SK-71 出土遺物

番号 種別 器種	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 管土・組成 (または土素材)	出土状態 現在の状態 目録
1 石器 砥石	長 10.6 幅 2.8 厚 2.7 重 既 97.8	断面が四角形の長方形砥石。4 側面を使用して、いずれもおおむね縦方向に使用した断面を少し現しながら平面に磨耗している。やや深い凹状の磨痕も含む。上下両端の小口面は砥面に使っていない。	2.5Y7/2 灰黄 やや密着で軟質な波紋状質黄 灰岩	中央底上 33cm ほぼ完成 4
2 土師器 小皿	高 既 0.6 底 2.4	内外面をロクロナデ。底部は回転糸で切り離し。	10Y8/5/2 灰黄褐 細密 白・透明細粒少 やや軟質	東部底直上 底 2/3 周 1
3 埴輪 燻土	長 14.5 幅 11.1 厚 5.0	やや薄い楕円形の自然罫で、1 箇所にだけ割離あり。全体が焼熟赤化した後に、タール状の硬が明瞭に全体を覆っている。重量 1077.8g。	2.5Y4/2 暗灰黄 細密で硬質な油紋岩	中央底上 2cm 完成 13
4 土師器 專用土坑 (観治)	径 5.4 孔 径 1.6 深 2.0	先端に近い部分の破片。先端側も基部側も破面となっている。道風部は整った円形で、基部側が少し広がる。頸口の厚さは 0.0 - 2.0cm で、基部が厚くなる。側面の中間は灰白色に変色し、それよりも先端側は灰色に還元して少量の滑と酸化土砂が付着する。内外面ともに縦方向のナデ調整で、内面はその痕をよく残す。古墳時代の遺物が混入。観治関連遺物構成もなし。	2.5Y8/2 灰白 やや密着 白・黒・透明細粒 やや多、白砂少 やや軟質 磁器産 1 メタル産 未計測	中央底上 8cm 脚上 1.1/2 周 17

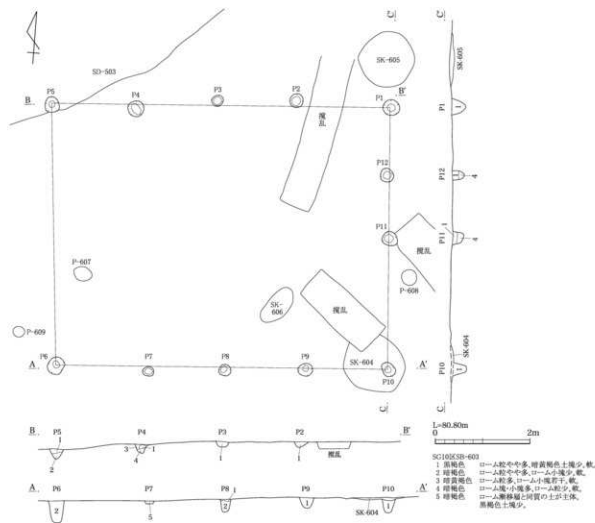
第26章 時期不明の掘立柱建物跡

SG10区 SB-603 (第220図、写真図版150)

【位置】SG10区北部の23-18グリッド。北西柱穴が近世の溝SD-503と重複するが、両遺構の新旧関係は不明である。SD-503よりも埋土が軟らかいSB-603のほうが新しい可能性も調査日誌に記載されているが、確定はできない。南東隅柱穴P10が時期不明のSK-604に切られる。

【規模と形状】東西棟で4間×3間の側柱建物である。ただし西辺は中間の柱穴が認められない。桁行総長は7.06m(南辺)～7.20m(北辺)で、桁行の柱間は1.58～2.00mのパラツキがある。梁行総長は5.52mで、梁行方向の柱間は北二間分が1.40mで、南一間分が2.70m。柱筋はよく通り、P2・3・4・7・12が少しだけずれる。主軸方位はGN-86°30'-E。柱穴の掘形形状は円形で径20～37cmである。北西隅(P5)以外の隅柱(P1・6・10)が深くなる傾向があり、遺構確認面からの深さはP1=30cm、P2=10cm、P3=8cm、P4=20cm、P5=20cm、P6=46cm、P7=6cm、P8=25cm、P9=21cm、P10=推定30cm、P11=24cm、P12=25cm。

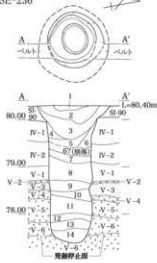
【覆土と時期】柱痕跡や、確実な抜き取り穴は見られない。P1にだけ焼土粒が少量認められた。P4の上層部には黒褐色土(1層)が12cm大の塊状になって入るので、柱を抜いた後に人為的に埋め戻したと考えられる。1～4層が軟らかいので、中世以降の建物であろう。近世のSD-503との新旧関係が分からないこと



第220図 権現山遺跡SG10区 SB-603 遺構

第5章 権現山遺跡 SG10 区

SE-236



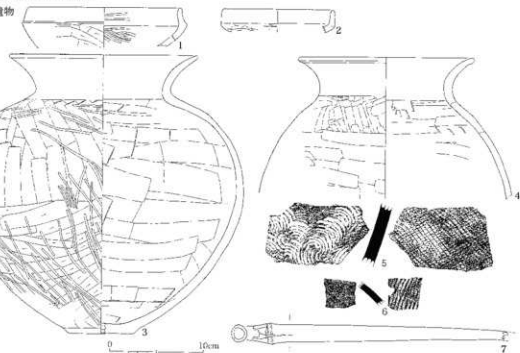
SG10XSE-236

- 1 暗褐色 ローム小塊少量、土20%や中塊。
- 2 褐色 ローム小塊・粘少、礫(5cm程度まで)少量、粘土小塊・炭化物塊少量、土20%や中塊。
- 3 暗褐色 礫(10cm程度)少、ローム小塊少量、土20%。
- 4 褐色 ローム小塊・ローム中塊少量、土20%。
- 5 暗褐色 ローム小塊・礫(5cm程度まで)少量、土20%。
- 6 暗褐色 ローム小塊・粘多、土20%。
- 7 褐色 ローム小塊・粘少、礫(5cm程度まで)少量、土20%や中塊。
- 8 暗褐色 ローム小塊・粘少、礫(5cm程度まで)少量、土20%や中塊、オランダ色少量、1層に散在。
- 9 暗褐色 ローム小塊・粘中・粘多(5cm程度まで)少量、土20%や中塊、オランダ色少量、粘土塊・粘中、ローム小塊・粘少量、粘土粒・炭化物(1cm)塊少量、土20%や中塊、オランダ色少量。
- 10 褐色 ローム小塊・粘中・粘多(5cm程度まで)少量、土20%や中塊、オランダ色少量、水分含む。
- 11 明褐色 ローム小塊・粘中・粘多(5cm程度まで)・鉄分少量、土20%や中塊。
- 12 褐色 ローム小塊・粘中・粘多(5cm程度まで)少量、今市粘石層粘塊少量、鉄分多、土20%。
- 13 褐色 ローム小塊・粘中・粘多(5cm程度まで)少量、今市粘石層粘塊少量、土20%、水分含む。
- 14 褐色 礫(10cm程度まで)少、鉄分少量、ローム小塊・粘塊少量、土20%、水分含む。

SG10XSE-236 地山

- Ⅲ 灰褐色 ハードローム。
- Ⅳ-1 明褐色 ハードローム(粘凝結)・ローム塊多、砂粒少量。
- Ⅳ-2 黄褐色 粘中塊・粘中、砂粒少量。
- V-1 灰褐色 砂粒・礫(1cm)多。
- V-2 灰褐色 砂粒多、礫(1cm)多。
- V-3 灰褐色 砂粒・礫(5cm)多、オランダ色の色層を帯びる。
- V-4 灰褐色 砂粒・礫(5cm)多、オランダ色の色層を帯びる。
- V-5 灰褐色 砂粒・礫(5cm)多。
- V-6 褐色 砂粒・礫(10cm)多、鉄分含む。

SE-345 出土遺物



第 221 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の井戸 (1) SE-236・316・345 遺構 SE-345 遺物

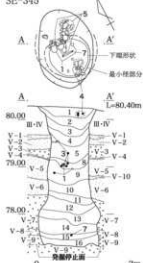
SE-316



SG10XSE-316

- I 暗褐色 水分が非常に多、粘含む。
- SG10XSE-316 地山
- Ⅰ 黄褐色 礫(1~5cm)とソフトロームが混在、硬。
- Ⅱ 灰褐色 砂粒・礫(5~8cm)が混在、硬。
- Ⅲ 灰褐色 砂粒(凝結)は、黄褐色の砂層と粘が混在、硬。
- Ⅳ 暗褐色 砂層に粘褐色砂と黄褐色の粘が凝結し、硬。
- V 褐色色 今市粘石層を帯びる、砂の粒が2分細かい、硬。

SE-345



SG10XSE-345 (6-7層は欠番)

- 1 黄褐色 ローム小塊・粘土粒・炭化物塊少量、土20%。
- 2 暗褐色 ローム小塊・粘土粒・炭化物塊少量、土20%。
- 3 暗褐色 ローム小塊・粘土粒・炭化物塊少量、土20%や中塊。
- 4 褐色 ローム小塊・粘土小塊・炭化物塊少量、土20%や中塊。
- 5 褐色 ローム小塊・炭化物塊少量、土20%や中塊。
- 6 暗褐色 粘土小塊・粘少量、ローム粘粒・炭化物塊少量、土20%や中塊。
- 7 暗褐色 粘土塊少量、ローム小塊・粘土小塊・炭化物塊少量、土20%。
- 8 暗褐色 粘土小塊・粘土小塊・粘中・粘中(炭化物塊少量)、土20%や中塊。
- 9 褐色 粘土小塊・粘土小塊・粘中・粘中(炭化物塊少量)、土20%や中塊。
- 10 暗褐色 粘土小塊・粘土小塊・粘中・粘中(炭化物塊少量)、土20%や中塊。
- 11 黄褐色 粘土小塊・粘土小塊・粘中・粘中(炭化物塊少量)、土20%や中塊。
- 12 暗褐色 粘土小塊・粘土小塊・粘中・粘中(炭化物塊少量)、土20%や中塊。
- 13 暗褐色 粘土小塊・粘土小塊・粘中・粘中(炭化物塊少量)、土20%や中塊。
- 14 褐色 炭化鉄分少量、ローム粘・粘土小塊塊少量、土20%。
- 15 暗褐色 ローム粘・炭化鉄分(5cm程度)・黄灰色粘土(少)、黄灰色粘土粘塊少量、ローム小塊塊少量、土20%。
- 16 褐色 炭化鉄分(5cm程度)少量、ローム粘塊少量、土20%。

SG10XSE-345 出土

- V-1 灰白色 砂凝塊、砂粒多、礫(5cm程度)少。
- V-2 灰白色 砂粒、砂粒多。
- V-3 灰白色 砂凝塊、砂粒・礫(1cm)多。
- V-4 灰白色 砂凝塊と粘が混在。砂粒多、黄褐色粘石層少。
- V-5 灰白色 砂凝塊、砂粒多、礫(5cm)多。
- V-6 暗褐色 砂凝塊、砂粒多、礫(5cm)多。
- V-7 灰白色 砂凝塊、砂粒(粘)・礫(5cm程度まで)多。下に粘はほとんどなく。
- V-8 灰白色 砂凝塊、砂粒(粘)・礫(10cm)程度まで。
- V-9 褐色 砂凝塊、砂粒・礫(5cm程度まで)・鉄分多。
- V-16 暗褐色色 粘土粒と粘が混在。砂粒多、黄褐色粘石層少。

が残念だが、SD-503より覆土が軟らかいことを重視すれば、近世または近代の建物かもしれない。

【出土遺物】この建物に伴うと判断できる遺物はない。P1に土師器破片（甕口縁部と内外面赤彩杯）、P10に凹底状の土師器杯底部片がある。いずれも周囲の古墳時代集落から混入した古墳中期後葉から末葉の遺物であろう。

第27節 時期不明の井戸

SG10区では、時代を特定することができない時期不明の井戸を5本調査した。SG10区内には中世の井戸がSE-232・237・252・344・377・569の6本ある。他時代の井戸としては古墳時代のSE-552があり、小形である点が他時代の井戸とは異なる。時期不明の井戸にも中世の井戸を含むことが考えられる。また、SE-316は古墳時代の可能性もある。SE-316以外は下部を重機で断ち割って調査し、最下部または上層までの埋土を1mmメッシュのふるいで水洗した。木の小片・細片や竹(SE-345)が若干出土した程度で、何も検出できなかった井戸も多い。

SG10区 SE-236 (第221図左、写真図版158)

【位置】SG10区南部の18.5-17.0グリッド。9世紀のSI-90を切り、古墳中期(SI-105)→古墳後期(SI-23)→平安時代(SI-90)→SE-236の順に重複する。東側に中世の井戸SE-237がある。

【規模と形状】SI-90に設けた土層観察用ベルトの上面で見ると、径1.48mの円形である。ただし、ベルト部分以外はSI-90の床面まで掘り下げた結果として、径1.2mの規模になってしまった部分が多い。確認面から深さ20cm付近までは、最上部が漏斗状に開く。深さ2.83m。底面標高は77.46m。

【覆土】現地調査時の所見では、10～15cm大の丸石が3層中に多い点が、東側にある中世のSE-237に似ていることが観察されている。標高79.4m付近までを手掘りで調査した後、標高77.6m付近まで重機で西半部を断ち割った。断面図は反転して掲載した。下部を調査した3月上旬の時点では、最下部の3枚の層に鉄分・水分が多い。底面は砂礫層(V-6層)の中にある。地山のV-6層に鉄分が見られる。

【出土遺物】この井戸の時期を示す遺物はない。主に古墳時代と考えられる土師器片がいくつか出土しているが、SI-23やSI-105などから流入したと考えられる。

SG10区 SE-316 (第221図中央、写真図版158)

【位置】SG10区南部の18.5-18.0グリッド。古墳中期のSI-33の貼床を切るのので、SI-33より新しい。

【規模と形状】確認面で東西0.52m、南北0.47mの円形で、深さ1.20m。底面標高は78.66m。断面は径約40cmの細い筒状で、壁面はほぼ垂直である。小規模で浅い点がSE-552に似るので、古墳時代の可能性もある。SG5区の低地にある古墳中期土坑群の中にも似た遺構があり、それよりもさらに細い。

【覆土】暗褐色土の単層。南半部を手掘りで断ち割り、底面まで調査を行った。10月上旬の地下水位では標高79.2m前後で湧水し、12月上旬には湧水しないで底面まで掘り下げることが出来た。底面は地山暗灰色砂層(V層)の中にある。

【出土遺物】この井戸の時期を示す遺物はない。土師器5片(高杯杯部と脚部、杯、鉢2片)が出土した。おそらくSI-33から混入した古墳時代遺物と見られる。

SG10区 SE-345 (第221図右、写真図版158・159)

【位置】SG10区中央部の19.5-18.5グリッド。東方と北西に、中世の井戸SE-252とSE-344がある。中世のSE-252・344、時期不明のSE-455、近世の区画溝SD-204が付近にあることを参考にすれば、中世または近世の可能性もある。古墳後期のSI-51aと古墳中期のSI-104を切り、SI-104→SI-51a→SE-345の順序になる。

第5章 権現山遺跡 SG10 区

【規模と形状】確認面で東西 1.14m、南北 1.66m の円形で、深さ 2.97m。底面標高は 77.28m。径 80～90cm 前後まで一度細くなり、それより下部は壁面礫層の崩落によりやや広がっている。標高 78.7m 付近までを手掘りで調査した後、標高 77.34m 付近まで重機で北半部を断ち割った。断面図は反転して掲載した。

【覆土】焼土を少し含む覆土層が目立つ。下部を調査した 3 月上旬の時点では、最下部の 3 枚の層に酸化鉄分と水分が多く、下から 2 層目のレベルにある標高 77.6m 前後で湧水した。底面は地山の褐色礫層 (V-9 層) の中にある。

【出土遺物】確認面から 130cm くらいまでの深さに土器片が多い。植物性遺物では竹が 3 片と草類の茎が 1 片あるが、人為的な加工などは見られない。竹のうち最大の 1 点を図示した (7)。中世の可能性もあるが、確定できる遺物はない。古墳中期を主として古墳後期までの土師器・須恵器が多く、上下に重なって出土したので、SI-51 や SI-104 から流入したことが考えられる。特に破片が大きな 3・4 などは、SI-104 からの流入品であろう。土師器は壺・甕類破片が主体で、杯・甕も含み、高杯はほとんどない。須恵器は甕片がある。

第 133 表 権現山遺跡 SG10 区 SE-345 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ H×Φ×D	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 16.0 高 残 4.3 最大 径 17.4	外面は口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラケズリ。内面は体部に斜位と口縁部に傾位のヘラミガキ。内面に炭素残存の黒色処理をしているかもしれないが不明確。古墳後期の遺物が混入。	2.5Y3/1 灰黒 細密 白・透明細粒やや多 微質	8層(底上 170cm)と 9層(底上 156～164cm)が同一個体 口 1/6 残、体 1/3 残 8、25、26、16 層
2 土師器 杯	口 径 11.6 高 残 2.4 最大 径 12.0	外面体部ナデ後に下位ヨコヘラケズリ。外面口縁部と内面口縁部ヨコナデ。	5YR7/6 白 細密 白・透明細粒やや少、黒・透明細粒少 微質	10層 口 1/4 残 10 層、一基
3 土師器 甕	口 径 20.0 底 径 29.4 底 径 6.8 最大 径 30.0	外底面は 1 方向ヘラケズリ。外面は下半部ナメヘラケズリと上半部縦線斜位ヘラナデの間にナメヘラミガキ。内面はヨコヘラナデ。内外面に口部ヨコナデ。SI-104 から混入した可能性が高い。 [注記] 1、3～6、20、24、一基	10YR6/3 に近い黄褐色 やや粗粒 灰色・透明細粒～粗粒多、灰色粗粒と黒細粒少 やや微質	4層(底上 224cm)と 5層(底上 198cm)と 8層(底上 171～177cm)が混合 口 3/4 残、面全残、底 5/12 残 注記は方壺
4 土師器 甕	口 径 18.6 高 残 14.9 最大 径 26.8	外面は肩部タテヘラナデ後に頸部ヨコヘラナデ。内面は肩～頸部ヨコヘラナデ。内外面の口部ヨコナデ。SI-104 から混入した可能性が高い。	10YR6/4 に近い黄褐色 やや粗粒 灰色・透明細粒～粗粒と白・黒細粒少 やや微質	1層(底上 279～282cm)の 4 片が混合 口 1/6 残、面 1/4 残 10、12、13
5 須恵器 甕	高 残 6.7	外面は木目直交の溝を彫った明き板で覆われた形状の明き。内面は同心円文当具板。古墳中～後期の遺物が混入。	N4.0 灰 やや粗粒 白～透明細粒やや多 微質	16層 胴部 1 片 16 層
6 須恵器 甕	高 残 2.5	外面は木目平行の溝を彫った明き板で覆われた形状の明き。内面は木目斜交のナデにより無文。古墳中期の遺物が混入。	5Y5/1 灰 細密 白～透明細粒少 微質	胴部 2 片 一基
7 竹	長 残 27.1 径 2.2	自然遺物。図の反折面は縦位に割れて約 1/3 周が欠損する。人為的な加工・切断・焼熱面は見られない。同および計測値は乾燥した現状のもの、同様の竹破片が 14 個と 16 個から 1 点ずつ出土している。	2.5Y6/2 灰黄	底上 24cm 両端欠、2/3 残 29

SG10 区 SE-352 (第 222 図上、写真図版 159)

【位置】SG10 区南部の 18.5-17.5 グリッド。古墳後期の SI-10 を切る。

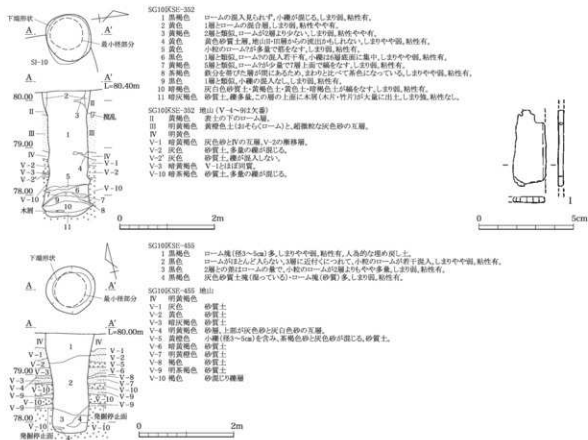
【規模と形状】確認面で東西 0.98m、南北 0.92m の円形で、深さ 2.66m。円筒状で、最下部は地山砂礫層の壁面が崩れているために少し外へ広がる。底面標高は 77.54m。

【覆土】上部の埋土は黒褐色土の単層で、一気に埋まったようである。標高 79.1m 付近までを手掘りで調査した後、重機で東半部を標高 77.8m 付近まで断ち割った。最下層の上面に木片・竹片が多い。

【出土遺物】植物性遺物として、板状木製品破片がある(図の右端)。他に小さな木片・竹片と炭化材片がごく少量ある。古墳時代の土師器・須恵器も少し混入している。須恵器甕片は SI-10 出土破片と同一個体で、SI-10 から流入したものであろう。

第 134 表 権現山遺跡 SG10 区 SE-352 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ H×Φ×D	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 木製品 板状品	長 残 4.0 幅 残 1.7 厚 0.3	薄い板状の製品が割れた小破片。厚さが均一で、残存する個縁が直線的なので人為的に加工していると考えられる。被熱面・付着物・溝等などは認められない。同一個体の可能性がある小片が他に 5 点あり。	7.5YR5/4 白～灰	1 割断残、両端欠り 9 層より出土 000308



第222図 権現山遺跡 SG10区 時期不明の井戸(2) SE-352 遺構・遺物 SE-455 遺構

SG10区 SE-455 (第222図下、写真図版159)

【位置】 SG10区中央部東端の20.5-20.0グリッド。重複する遺構はない。中世のSE-252・344、時期不明のSE-345、近世の区画溝SD-204が分布することを参考にすれば、中世または近世の可能性もある。

【規模と形状】 確認面で東西1.05m、南北1.03m、深さ2.12mの円形。壁面の砂・礫層が崩れないで円筒状を保っている。底面は径70cmの正円形で、底面標高は77.76m。

【覆土】 最上層はローム塊が多い人為的な埋土である。遺構確認面から約1.5m付近まで手掘りで調査した後、重機で北半部を断ち割った。断面図は反転して掲載した。下部を調査した3月上旬の時点では、4層付近よりも下位に水分を含んでいた。

【出土遺物】 この遺構の時期を示す遺物はない。最上層に縄文時代の銅網形打製石斧1点や古墳時代の土師器小片21点が混入していた。打製石斧は砥石などとして後世に転用した擦痕が顕著だが(『東谷・中島地区遺跡群10 権現山遺跡北部・杉村遺跡』のpp.104-105)、古墳時代の土師器と一緒に最上層から出土した混入品で、SE-455との関係は薄いと思われる。覆土下部をふるいで水洗した結果、植物質遺物は木の根のような小片が1点だけ認められた。

第 28 節 時期不明の溝状遺構

時期不明の溝状遺構は 22 条を調査した。平面図を第 223 図、断面図は第 224 図にまとめて示す。

SG10 区 SD-205 (第 223 図左下・第 224 図、写真図版 151)

〔位置〕SG10 区南部の 18-17 グリッド。古墳中期の SI-88 を切り、時期不明の SK-5 に切られる。西端は攪乱で破壊されているが、近世の溝 SD-201 に連結するか、または SD-201 の東側で終わっていた可能性がある。そうであれば、SD-201 と関連する近世の溝と考えることもできる。東端は時期不明の SK-5 に切られる付近で低地部に入り、その東側では確認できなくなる。古墳時代後期の SK-222 との前後関係は、間に攪乱が入るので不明である。

〔規模と形状〕幅 42～60cm、残存する深さは 9～16cm。底面標高はほぼ一定で、80.0～80.1m。

〔覆土〕単層で、火山灰の混入が記録され、白色テフラ粒を含んでいたと考えられる。Hr-FA テフラであれば古墳時代溝の可能性もあるが、12 世紀の浅間 B テフラや、縄文草創期の七木板軽石粒(地山から流入)も考えられる。

〔出土遺物〕図示した遺物はない。重複する SI-88 など古墳時代の集落から混入したとみられる土師器が合計 28 片・198g ある(杯 13 片・53g、壺甕類 15 片・145g)。

SG10 区 SD-224 (第 223 図左上・第 224・225 図、写真図版 151)

〔位置〕SG10 区中央部の 21-17・18 グリッドにまたがる。北東は近世溝 SD-503 の南側に接する位置で長方形攪乱坑に切られる。SD-503 に切られていたか、または合流していたことが想定できる。南西は、SI-50 の西部で土取り工事によって消滅している。古墳中期の SI-50 と SI-60 を切ることが遺構確認で明確に認められた。攪乱溝(SD-501)に北部を切られる。

〔規模と形状〕SI-50 調査前に SD-224 を掘り下げた所見では、攪乱溝の可能性が高いと判断されている。幅 36～54cm、残存する深さは 5～14cm。底面は北東部と南西部で高く(標高 80.25m 前後)、攪乱溝 SD-501 に切られる付近で低い(80.15m)。SD-501 の北東側では、地山に含まれる礫層が溝の底面と法面に露出していた。

〔覆土〕自然埋没状の堆積で、テフラの層や粒はみられない。

〔出土遺物〕SI-60 を切っている付近の覆土 1 層中に、溝底面から 7～11cm ほど浮いた状態でまとまって礫が入っている。また、下層(2層)に入る礫もある。焼けて割れた礫も含まれていた。図示した遺物は砥石 1 点だけである(第 225 図左)。他に、SI-50 や SI-60 から混入した古墳中期土師器片や、古墳時代集落から混入したと思われる古墳後期の遺物がある。図示以外の土師器合計 20 片・179g の内訳は、杯 9 片・38g、鉢 1 片・8g、壺甕類 10 片・133g。

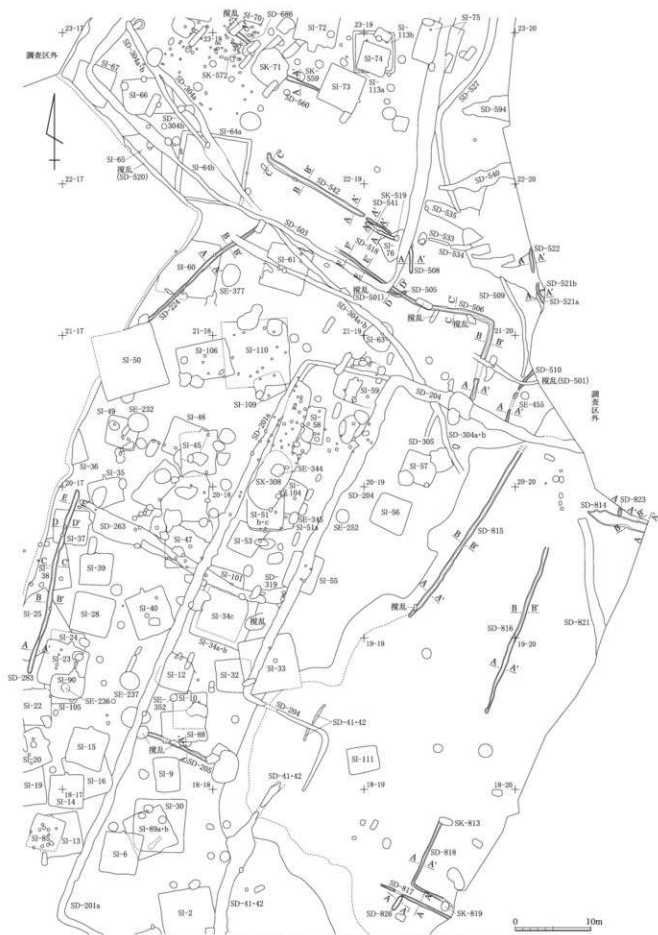
第 135 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-224 出土遺物

番号 種類 面積	大きさ 縦・横・厚	特 徴	色調 粘土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 石 砥石	長 残 8.2 幅 4.4 厚 2.2 重 残 98.2	表面と側面の 4 面を砥面を利用し、かなり平直に磨耗する。1 面だけは深い溝状の研磨面が 2 条。主軸に対して斜めに付けられている。この面がやや凹色(5/5/1)になるので、視が薄く付着したのかもかもしれない。中央部の断面には視が見られない。	2.5Y8/3 淡黄 細密で軟質な流紋岩質凝灰岩	21.5-18.0 粒の南西 1.2m 底直上(SI-60 より 1層) 約 1/2 欠 7

SG10 区 SD-283 (第 223 図左端中央・第 224 図、写真図版 151・152)

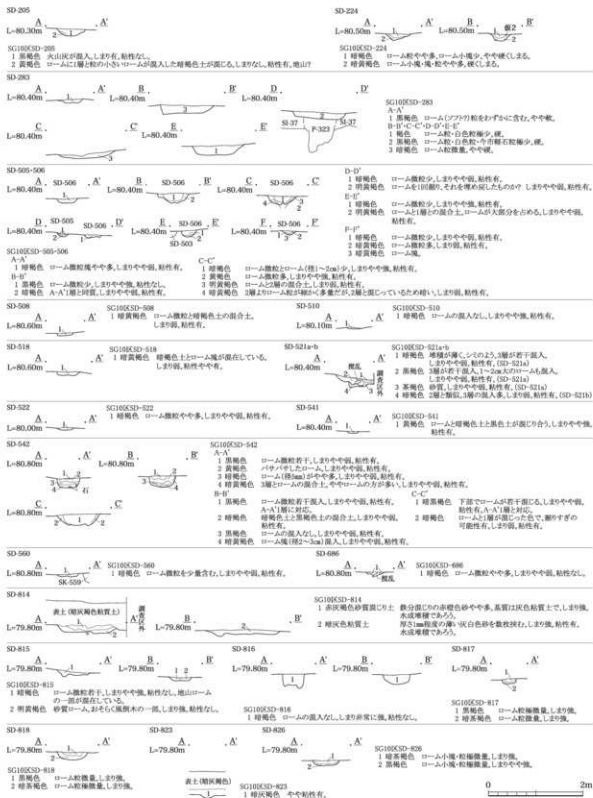
〔位置〕SG10 区南部の 18-16 および 19-16・17 グリッドにまたがる。古墳時代の SI-25・37・38 と時期不明の P-323 を切り、SI-37 → P-323 → SD-283 の順序である。

〔規模と形状〕南北長約 25m、幅 44～74cm、残存する深さは 3～15cm で、深さ 10cm 前後の部分が深い。底面標高は北端でやや高く(80.26m)、それ以外は 80.11～80.25m で特定方向への傾斜はみられず、



第 223 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構 (1) 平面図

第5章 権現山遺跡 SG10区



第 224 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の溝状遺構 (2) 断面図

南端で 80.11m。

【覆土】 単層で、テフラの可能性のある白色粒も見られる。

【出土遺物】 図示した遺物はない。土師器や礫が出土したが、重複する各遺構から流入した遺物ばかりで、

この溝に伴うものはないと考えられる。土師器合計 149 片・1.110g の内訳は、杯 95 片・415g、高杯 9 片・121g、小形壺 5 片・33g、壺甕類 42 片・541g。

SG10 区 SD-505 (第 223 図中央上部・第 224 図、写真図版 152)

【位置】SG10 区北部の 21-19 グリッド。西側は近世溝 SD-503 に切られるので近世以前の溝であることがわかる。時期不明の SD-506 の上部を切る。

【規模と形状】幅 26～39cm、残存する深さは 4～10cm で、底面標高は 80.22m でほぼ一定している。

【覆土】調査時の所見によると、ローム質の土で埋め戻した可能性が指摘されている。テフラの層や粒はない。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SG10 区 SD-506 (第 223 図中央上部・第 224・225 図、写真図版 152・153)

【位置】SG10 区北部の 21-18・19 および 20-19 グリッドにあり、北西端で確認面より浅くなって終わる。南端は近世の SD-204 と重複する可能性があるが、重複位置付近が攪乱されているので、SD-204 との前後関係は不明である。近世の SD-503 に切られることから、近世以前の溝であることがわかる。時期不明の SD-505 に上部を切られ、攪乱溝 (SD-501) に切られる。

【規模と形状】幅 34～76cm、残存する深さは北西部で 7～15cm、中央部から L 字形に曲がる位置付近で 5～17cm、南端部で 7～16cm。底面標高は北西部で 80.13～80.22m、中央部で 80.03～80.23m、南端部で 80.10～80.11m。

【覆土】自然埋没状で、テフラの層や粒はみられない。

【出土遺物】遺物はごくわずかで、ほとんどは周囲の古墳時代集落から混入したものとみられる。土師器は古墳中期が主体で、模倣杯や長胴甕は見られない。古墳中期の石製模造品を図示した (第 225 図中央上)。剣形品は、SG10 区 SI-2 などに例がある。図示以外の土師器合計 41 片・247g の内訳は、杯 14 片・55g、小形壺 1 片・39g、壺甕類 26 片・153g。

第 136 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-506 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ cm・g	特 徴	色調 胎土・硝成 (または素材)	出土状態 現存状態 注記
1 石製模造品 剣形品	長 残 2.50 幅 残 1.56 厚 0.34 重 残 1.88	両面ともに平坦で、おおよそ 1 方向に研磨して細かい微面を残す。形割時の剥離面も両面に少く残る。側面は図示したように縦方向に 2 面ほどに分削してそれぞれ横方向に研磨する。古墳時代中期の遺物が混入。	N3/O 塩沢 凝密で軟質な滑石	底上 18cm 約 1/2 残 2

SG10 区 SD-508 (第 223 図中央上部・第 224 図、写真図版 153)

【位置】SG10 区北部の 21-19 グリッドにあり、北側は近世の SD-503 に切られることから、近世以前の溝であることがわかる。古墳中期の SI-76 を切る。西側の SD-541・542 に続く可能性もある。

【規模と形状】幅 34～50cm、残存する深さは 2～9cm。底面標高は南端で 80.28m・北端で 80.26m で大きな差はないが、僅かに北側が低い。

【覆土】覆土は単層で、テフラの層や粒はみられない。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SG10 区 SD-510 (第 223 図中央右・第 224・225 図、写真図版 153)

【位置】SG10 区北部の 20-19・20 グリッドにあり、北側は調査区の外まで伸びる。南側は近世の SD-204 と重複するが、両者の新旧関係は不明である。攪乱溝 SD-501 に切られる。中央部では、確認面よりも浅くなって確認できない部分がある。古墳時代 (中期?) の SD-509 と近接する状況からみて、古墳時代溝の可能性もある。

【規模と形状】北部では幅 26～45cm、南部では幅 28～33cm。残存する深さは北部 3～12cm・南部

第5章 権現山遺跡 SG10 区

5cm。底面標高は北部で 79.9 ～ 80.0m、南部では 79.9m。

〔覆土〕 覆土は単層で、テフラの層や粒は見られない。

〔出土遺物〕 古墳時代中期の土師器高杯の脚柱部 1 点だけが出土した（第 225 図右上）。この遺構の時期を示す遺物かどうかは不明である。これ以外の遺物はない。

第 137 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-510 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ mm・g	特 徴	色調 胎土・顔成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高杯	高 残 5.4 最大 5.0	中空の柱状器。脚柱外面はやや狭の狭いタテハラケズリで、少し光沢を持っている。倒立状態で見ると、左回り(反時計回り)方向に粘土粒を巻き上げている。内面は凹凸が目立ち、乾っているため縦位の継が多い。脚柱部は外面タテハラケズリ、内面ナデ。	7.5YR7/6 橙 やや粗い 白・黒・赤褐色 やや硬質	底直土 脚柱部全周 1

SG10 区 SD-518 (第 223 図中央上部・第 224 図、写真図版 153)

〔位置〕 SG10 区北部の 21-19 グリッドにあり、北側にある時期不明の SD-541 と並列する。古墳中期の SI-76 の覆土上部を切る。時期不明の SK-519 に東端付近を切られる。また、その東側がさらに SD-503 にも切られていたかもしれない。

〔規模と形状〕 残存長 4.6m、幅 32 ～ 59cm、残存する深さは 4 ～ 16cm で、底面が南東へ傾斜し、底面標高は北西端で 80.38 ～ 80.41m、南東端で 80.22m。

〔覆土〕 覆土は単層で、テフラの層や粒は見られない。しまりが弱いので、それほど古い時期の遺構ではないとも考えられる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

SG10 区 SD-521a・521b (第 223 図右上・第 224・225 図、写真図版 154)

〔位置〕 SG10 区北部の 21-20 グリッドの低地部にある。東は調査区外まで伸びる。SD-521b → SD-521a の順序で切られる。上面は土取りで掘乱されている。周辺で古墳中期末ころの溝状遺構が多いので、これも古墳時代溝の可能性はある。SD-521a は北側の SD-522 に続く溝の可能性もある。

〔規模と形状〕 SD-521a は幅 28 ～ 54cm、残存する深さは 28cm で、底面に明確な傾斜を持たず、底面標高は 79.86 ～ 79.90m。SD-521b は幅 130cm 以上で東側が調査区外になり、残存する深さは 30cm で、底面標高は 79.93 ～ 79.95m。

〔覆土〕 自然埋没状態で、SD-521a の下層は砂質。テフラの層や粒は見られない。

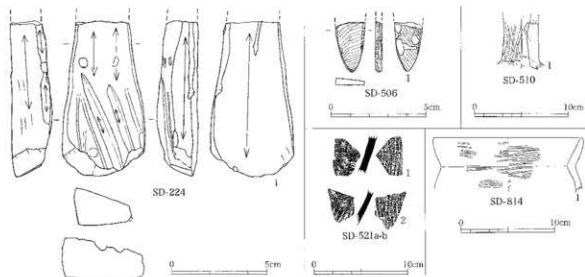
〔出土遺物〕 遺物は「SD-521」として取り上げたため、SD-521a・521b の判別ができない。ここでは SD-521b の可能性がある遺物も SD-521a として掲載し、掲載以外の遺物も SD-521a とする。土師器甕類 5 片・22g、須恵器甕 2 片、縄文土器 2 片のみである。須恵器甕（第 225 図中央下 1・2）のように古墳時代後期の遺物があるが、この溝の時期を示すかどうかは不明である。

第 138 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-521a 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ mm・g	特 徴	色調 胎土・顔成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1・2 須恵器 甕		2 片が同一個体。外面は木目直交の溝を彫った甲き板で縦長の覆輪子甲き。内面は少し浅めの同心円文が具現。	10Y5/1 灰 中～細粒 少 やや硬質	胴部 2 片 皿一括

SG10 区 SD-522 (第 223 図右上・第 224 図、写真図版 154)

〔位置〕 SG10 区北部の 21-20 グリッドの低地部にある。北東部は調査区外まで伸びる。SD-521a と SD-522 が続く溝の可能性もある。古墳時代の SD-535 東側に続く低地に SD-522 北端部が重複するが、SD-522 と SD-535 の新旧関係は不明。上面は土取りで掘乱されている。古墳中期末ころの溝状遺構が周辺に多いので、これも古墳時代溝の可能性はある。



第225図 権現山遺跡 SG10区 時期不明の溝状遺構(3) 遺物

【規模と形状】 幅40～44cm、残存する深さは3～10cmで、底面が北へ傾斜し、底面標高は南端で79.85m、北端で79.77m。

【覆土】 覆土は単層で、テフラの層や粒は見られない。

【出土遺物】 図示した遺物はない。土師器合計8片・41g（杯4片・20g、壺襖類4片・21g）と、縄文時代の剥片1点だけが出土した。土師器はすべて小破片で、内斜口縁の杯片を含み古墳中期の遺物に見えるが、この溝に伴う確証はない。

SG10区 SD-541（第223図中央上部・第224図、写真図版154）

【位置】 SG10区北部の21-19グリッドにあり、南側にある時期不明のSD-518と並列する。西側のSD-542や東側のSD-508に続く可能性がある。重複する遺構はない。東端が古墳時代のSI-76北壁まで10cmの位置にある。

【規模と形状】 幅25～29cm、残存する深さは2～5cmで、底面に明確な傾斜はなく、底面標高は80.34～80.37m。

【覆土】 覆土は単層で、テフラの層や粒は見られない。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

SG10区 SD-542（第223図中央上部・第224図、写真図版154・155）

【位置】 SG10区北部の21-19グリッド。東側のSD-541やSD-508に続く可能性がある。重複する遺構はない。

【規模と形状】 長さ15.2m、幅58～99cm、残存する深さは16～23cmで、底面が北西から南東へ傾斜し、底面標高は北西端で80.49m、南東端で80.18m。

【覆土】 覆土はやや不規則な堆積状態で、テフラの層や粒は見られない。

【出土遺物】 図示した遺物はない。SI-64a・64bなどの周辺遺構から混入したと思われる古墳中期主体の土師器が6片・141g出土し、内訳は杯2片・32g、高杯2片・73g、壺襖類2片・36g。

SG10区 SD-560（第223図中央上部・第224図、写真図版155）

【位置】 SG10区北部の22-18グリッド。近世のSK-71に西端を切られるので、それ以前の溝である。東端が古墳時代のSI-73とも重複するが新旧関係は不明。SI-73とSD-560の新旧について調査時点の遺構台帳の記載が矛盾し、SI-73の土層断面図にSD-560が登場しないので、新旧を確定できない。SK-572・71を

第5章 権現山遺跡 SG10 区

はさんで北西にある SD-686 と同一遺構かもしれない。SK-559 と近接するが、重複はしていない。

【規模と形状】東西方向の浅い溝で幅 19 ～ 58cm、残存する深さは西半部が 8 ～ 13cm・東半部が 1 ～ 9cm で、東半部の方が浅い。底面は東端と西端で高く中央が低く、底面標高は西端で 80.65m、中央で 80.57m、東端で 80.59m。

【覆土】覆土は単層で、テフラの層や粒は見られない。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SG10 区 SD-686 (第 223 図左上・第 224 図、写真図版 155)

【位置】SG10 区北部の 22-18 グリッドにあり、東側は SK-572 と重複するが新旧関係は不明。SK-572・71 をはさんで南東にある SD-560 と同一遺構かもしれない。西端は長方形掘乱土坑に切れ、それより西側では確認されていない。

【規模と形状】幅 46 ～ 58cm、残存する深さは 3 ～ 6cm で、底面標高はほぼ一定で 80.66 ～ 80.69m。

【覆土】単層で、テフラの層や粒はみられない。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SG10 区 SD-814 (第 223 図右端中央・第 224・225 図、写真図版 155・156)

【位置】SG10 区南部東端の 19-20 グリッドの低地部にあり、東は調査区外まで伸びる。時期不明の SD-823 と重複するが前後関係は不明。

【規模と形状】浅くてやや幅広い溝で、西端は浅くなって消滅する。調査区内の長さは約 7m 以上。幅 110 ～ 174cm、残存する深さは 12 ～ 15cm で、底面が僅かに西へ傾斜し、底面標高は東端で 79.58m、西部で 79.50m。地山の土質が軟らかくて溝底面を把握するのが難しく、発掘調査時には溝底面を下の地山まで掘りすぎてしまっているので、上記の深さや底面標高値は断面図から計測した。

【覆土】単層で、テフラの層や粒はみられない。白色砂を挟む状況から水成堆積と思われる。この溝が掘り込んでいる地山も、水成堆積と考えられる砂混じり灰褐色土である。

【出土遺物】古墳中期を主体とする土師器破片がごく少量出土しているが、古墳時代集落からの混入品と考えられる。図示した古墳時代中期末の甕 1 点(第 225 図右下)以外の土師器は、合計 5 片・57g (小形壺 2 片・13g、壺甕類 3 片・44g) だけしかない。

第 139 表 権現山遺跡 SG10 区 SD-814 出土遺物

番号 種類 器種	大きさ ※「砂」	特 徴	色調 胎土・胎成 (または素材)	出土状況 現在状態 注記
1 土師器 甕	口 幅約 16 高 残 5.0 最大 幅 15.8	小片なので復原性は参考程度。内外面を密なヨコヘラミガキ。口～頸部の内面が丸味を持つ。	GYR6/8 糖赤釉～粗粒と白・黒・透明釉粉少・やや硬質	底直上 口 1/12 貫 1

SG10 区 SD-815 (第 223 図中央右側・第 224 図、写真図版 156)

【位置】SG10 区南部東半の低地部、19-19 および 20-19・20 グリッドにある。重複する遺構はない。溝の位置からすると、古墳時代中期～後期の SD-41・42 と同一遺構の可能性もある。

【規模と形状】ごく浅い溝で、南北両端は浅くなって確認できなくなる。幅 42 ～ 69cm、残存する深さは 4 ～ 16cm で、底面は中央が低くて(底面 79.43m)南北端部が浅い(南端標高 79.60m、北端標高 79.62m)。

【覆土】単層でしまりが強く、テフラの層や粒はみられない。

【出土遺物】図示した遺物はない。遺物は古墳中期を主体とする土師器片 31 片・209g (内訳は、杯 5 片・

34g、高杯5片・46g、小形壺1片・12g、壺甕類20片・117g)と、ほかに縄文土器も1片ある(『東谷・中島地区遺跡群10』の第38図159)。遺物はすべて小破片で、混入品と思われる。SD-41・42と連続する場合は、古墳中期～後期の遺構と考えることもできる。

SG10区SD-816 (第223図右下・第224図、写真図版156・157)

【位置】SG10区南部の東側低地、18-19と19-20グリッド。重複する遺構はない。南方にあるSD-818と連続する可能性もある。

【規模と形状】南端は急に立ち上がり、北端は浅くなって消滅する。幅28～63cm、残存する深さは14～30cmで、北部ほど浅くなる傾向がある。底面標高も南部ほど低く、南端で標高79.28m、北端で79.61m。

【覆土】覆土は単層で、しまりが強く、テフラの層や粒は見られない。この溝が掘られている地山は水成堆積と見られる灰白色砂質土である。

【出土遺物】図示した遺物はない。古墳中期ころと思われる土師器小破片9片・62g(内訳は杯2片・6g、壺甕類7片・56g)だけで、この溝の時期を示す遺物とはいえない。

SG10区SD-817 (第223図右下・第224図、写真図版157)

【位置】SG10区南部の東側低地の17-19グリッドにあり、東は調査区外まで伸びる。重複する遺構はない。SD-817・818は1.33～1.45mの間隔で平行しているので同時存在(例えば道の側溝)の可能性を持つ。SD-826もSD-817・818と覆土や溝形状が似ているので、相互に関連する区画溝などの性格が想定できる。

【規模と形状】幅18～43cmで、30～50cm幅部分が多い。残存する深さは7～10cmで、SD-826の北端に接する付近で底面が一度浅くなって途切れた後に、その西側で深さ2～4cmの浅い溝として再び確認できる。底面に明確な傾斜はなく、底面標高は西端で79.41m、東端で79.39m。

【覆土】自然埋没状で、テフラの層や粒は見られない。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SG10区SD-818 (第223図右下・第224図、写真図版157)

【位置】SG10区南部の東側低地の17-19グリッドにあり、東は調査区外まで伸びていたことが想定されるが、浅くなるので確認できない。北方にあるSD-816と連続する可能性もある。北端で時期不明のSK-813に切られる。SK-819と重複する位置であるが新旧関係は不明。SD-817・818は1.33～1.45mの間隔で平行しているので同時存在(例えば道の側溝)の可能性を持つ。SD-826もSD-817・818と覆土や溝形状が似ているので、相互に関連する区画溝などの性格が想定できる。

【規模と形状】平面形がL字状で、南辺は幅25～52cm、西辺は幅30～52cm。残存する深さは南辺が6～11cm、西辺が10～19cm。底面標高は南辺が79.47m前後で、西辺は北へ傾斜し底面標高は南端で79.46m、北端で79.35m。

【覆土】自然埋没状で、テフラの層や粒は見られない。

【出土遺物】図示した遺物はなく、古墳中期ころの土師器小破片が合計3片・34g(杯2片・29g、高杯1片・5g)だけでこの溝に伴うものではないと思われる。

SG10区SD-823 (第223図右端中央・第224図、写真図版157)

【位置】SG10区南部東端の19-20グリッドにあり、北は調査区外まで伸びる。時期不明のSD-814と重複するが前後関係は不明。低地土層の状況から、古墳時代よりは後の遺構かと推定される。

【規模と形状】浅く狭い溝で、幅36～41cm、残存する深さは8cmで、底面標高は79.64m。北部は溝底

第5章 権現山遺跡 SG10 区

面が高く、調査区北壁面では遺構確認面よりも高いところに溝底面がある。地山の土質が軟らかくて溝底面を把握するのが難しく、発掘調査時には溝底面を下の地山まで掘りすぎてしまっているため、上記の深さや底面標高値は断面図から計測した。

〔覆土〕 覆土は単層で、テフラの層や粒は見られない。覆土の土質が表土と似ているので、あまり古い時代の溝ではない。覆土の1層も、この溝の両側に広がっていて、古墳時代の溝状遺構を確認した面を覆っている。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

SG10 区 SD-826 (第223 図右下・第224 図、写真図版 157)

〔位置〕 SG10 区南部の東側低地、17-19 グリッドにある。重複する遺構はない。SD-817・818・826 は覆土や溝形状が似ているので、これらと関連する区画溝などの性格が想定できる。

〔規模と形状〕 長さ 217cm の土坑状の溝。幅 52 ～ 58cm、残存する深さは 2 ～ 9cm で、底面に大きな傾斜や凹凸は見られない。底面標高は 79.36 ～ 79.38m。

〔覆土〕 自然埋没状で、テフラの層や粒は見られない。

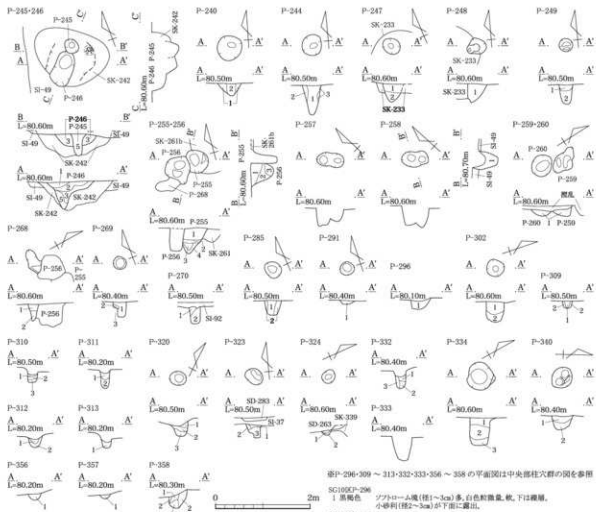
〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

第29 節 時期不明の柱穴状土坑 (第226 ～ 228 図)

SG10 区における時期不明の柱穴状土坑として 132 基をここで報告する。このうち中央部柱穴群とした一群には、中世であることが確実な P-425 を含む (第204・208 図)。しかし、古墳時代の柱穴状土坑 (P-464・465・466) もこの区域に分布している。したがって、P-425・464・465・466 の 4 基を除く残りの中央部柱穴群は時期を確定できないので、時期不明の柱穴状土坑としてここで扱った。同様に SG10 区で柱穴状土坑がまとまる北部柱穴群 (第203 図) の場合には、その大半が中世と推定された。中央部柱穴群の場合にも、中世柱穴の割合が高いことを想定できる。各遺構の詳細は下記の表にまとめた。

第140 表 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の柱穴状土坑

遺構名	グリッド	平面形	形状	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
P-240	18.5-17.0	円形	垂直なし	0.53	0.51	0.28	柱根あり
遺物は土層跡 (白) の床底 1 行のみで、遺構の時期を示すものでない。							
P-244	18.0-17.0	円形	垂直なし	0.45	0.41	0.65	
遺物なし。							
P-245	20.0-17.0	円形	SI-49 → SK-242 → P-246 → P-245	0.33	0.30	0.56	単層 (白)
古墳時代の SI-49 と時期不明の SK-242・P-246 を切る。遺物なし。							
P-246	20.0-17.0	円形	SI-49 → SK-242 → P-240 → P-245	1.10 (以上)	1.00 (以上)	0.56	自然埋没状 積土・灰あり
古墳時代の SI-49 と時期不明の SK-242 を切る。時期不明の P-245 に切られる。SK-242 の層土を切って盛り込んでいるので、上部の形状が不明確。SK-242 の遺物は P-246 に関わるとも見られるが、SI-49 から侵入した可能性が高い。P-246 と重複して作る遺物なし。							
P-247	20.0-17.5	円形	SK-233 より新	0.38	0.32	0.44	
古墳時代の SK-233 を切る。遺物なし。							
P-248	20.0-17.5	円形	SK-233 より新	0.42	0.33	0.42	単層
遺物なし。							
P-249	18.0-17.0	円形	垂直なし	0.29	0.27	0.43	
遺物なし。							
P-253	19.5-17.5	円形?	SK-261b より新、P-256 と重複	0.52	0.41	0.57	
古墳時代の SK-261b を切る。P-256 と重複し、同時存在かもしれない。時期不明の P-255-256-268-334 はまともな状態で、中～近世の SD-263 に付随する道路状遺構の可能性もある。土層跡 4 行があるが、SK-261b からの侵入と見られる。							
P-256	19.5-17.5	円形?	P-268 より古、P-255 と重複	0.59	0.54	0.50	
P-268 に切られる。P-255 と重複し、同時存在かもしれない。時期不明の P-255-256-268-334 はまともな状態で、中～近世の SD-263 に付随する道路状遺構の可能性もある。遺物なし。							
P-257	20.0-17.0	円形	SI-49 より新?	0.58	0.26	0.38	
2 連ドット。土層跡面はない。古墳中期の SI-49 と重複し、削り込み不明だが、時期不明の P-258 のように、おそらく SI-49 を切ると思われる。遺物なし。							
P-258	20.0-17.0	円形	SI-49 より新	0.58	0.32	0.47	
2 連ドット。古墳中期の SI-49 を切る。時期不明の P-257 に類似。遺物なし。							
P-259	20.0-17.0	円形	垂直なし	0.64	0.40	0.22	単層
古墳中期の SI-49 に近接。遺物なし。							
P-260	20.0-17.0	円形	垂直なし	0.50	0.44	0.23	単層
遺物なし。							
P-268	19.5-17.5		P-256 より新	0.54	0.30	0.40	
P-256 を切る。時期不明の P-255-256-268-334 はまともな状態で、中～近世の SD-263 に付随する道路状遺構の可能性もある。遺物なし。							



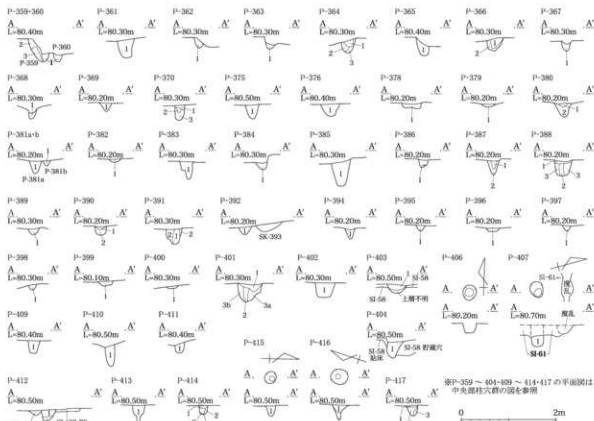
- SG105P-249
1 暗褐色 ロームの混入なし、粘性なし、粘性なし。
2 黄褐色 地山ロームと土層の混合土、しりや中や、粘性なし。
SG105P-244
1 暗褐色 ローム濃粒混入、しりや中や、粘性なし。
2 暗褐色 おそく出し、しりや中や、粘性なし。
3 黄褐色 ローム混(径3~5cm)混入、しりや中や、粘性有。
SG105P-245-246 (幅はSK-242のため省略)
1 高褐色 褐色土、粘土状土。
2 暗褐色 褐色土、粘土状土。
3 高褐色 ソフトローム粒が胸に近い部分に多、白色粘多、褐色土・炭化物少、軟。
4 暗褐色 下部にソフトローム混(径1cm)少、しりや中や。
SG105P-247 SK-233の1号と2号区画併用)
1 暗褐色 白色粘多、ソフトローム混(径1cm)少、しりや中や。
2 暗褐色 ソフトローム混(径1cm)多、軟、粘性有。
SG105P-248
1 暗褐色 ソフトローム粒多。
SG105P-249
1 暗褐色 ローム濃粒混入、しりや中や、粘性なし。
2 暗褐色 1層とロームの混合土、しりや中や、粘性なし。
SG105P-255-256
A-A' (P-255)
1 暗褐色 ローム小塊・粒中や多、やや硬。
2 暗褐色 ローム小塊・粒中や多、やや硬。
3 褐色 ローム小塊・粒中や多、やや硬。
4 黄褐色 ローム小塊・粒多、やや硬。
SG105P-258
1 暗褐色 ソフトローム粒多、軟。
SG105P-259-260
1 暗褐色 ソフトローム粒少、軟。
SG105P-268
1 高褐色 ローム粒少、やや硬。
2 黄褐色 ローム塊土、黒土、黒土、少、軟。
SG105P-269
1 暗褐色 若干土混入していると思われるが、ロームはない、しりや・粘性なし。
2 暗褐色 ローム混(混れもの少)、しりや中や、粘性有。
SG105P-270
1 暗褐色 ローム粒中や、やや硬。
2 暗褐色 ローム粒中や多、やや硬。
SG105P-285
1 高褐色 白色粘(ソフトローム)粒中や多、やや硬、炭化物または土質。
2 暗褐色 ローム粒多、硬、任意方向土。
SG105P-291
1 暗褐色 ソフトローム・白色粘・中や・粘粒少、しりやなし。

- 断面P-296-309 ~ 313-332-333-356 ~ 358の平面図に中央部柱穴群の関を参照
SG105P-296
1 高褐色 ソフトローム混(径1~3cm)多、白色粘粒多、軟、下は黒層。
小砂利(径2~3cm)が下層に露出。
SG105P-302
1 高褐色 暗褐色土若干、中や軟。
2 暗褐色 ローム小塊中や多、ローム塊少、中や軟。
SG105P-309
1 暗褐色 ローム粒混入、しりや中や。
2 高褐色 ローム塊・粒中や少、軟。
SG105P-310
1 暗褐色 ローム粒混入、しりや中や。
2 暗褐色 ローム粒多、ローム小塊少、しりや中や。
3 暗褐色 ローム粒多、ローム小塊少、しりや中や。
SG105P-311
1 暗褐色 ローム粒多、ローム小塊少、しりや中や。
2 暗褐色 ローム粒多、ローム小塊少、しりや中や。
SG105P-312
1 暗褐色 ローム小塊・粒混入、しりや中や。
2 暗褐色 ローム粒多、ローム小塊少、しりや中や。
SG105P-313
1 暗褐色 ローム塊・粒多、しりや中や。
SG105P-320
1 暗褐色 ローム小塊・粒中や少、硬、粘性有。
2 暗褐色 ローム粒多、ローム小塊中や多、中や軟、粘性有。
3 暗褐色 ローム小塊・粒中や少、軟、粘性有。
SG105P-323
1 暗褐色 ローム中・小塊中や多、ローム塊少、軟。
2 暗褐色 ローム中・小塊中や多、ローム塊少、軟。
3 褐色 ローム粒・黄白色粘粒少、硬。
SG105P-324
1 暗褐色 しりや中や。
2 暗褐色 ローム塊を伴い、中や軟。
SG105P-332
1 暗褐色 ローム小塊・粒中や、しりや中や。
2 暗褐色 ローム小塊・粒多、しりや中や。
3 黄褐色 ソフトローム小塊・粒多、しりや中や。
SG105P-334
1 暗褐色 ローム粒多、ローム中・小塊中や少、ローム塊・炭化物少の小塊少、硬。
2 暗褐色 ローム小塊・粒中や多、褐色土若干、中や軟。
3 高褐色 ローム粒・炭化物少の小塊少、軟、任意方向に粘粒有。
SG105P-340
SG105P-356
1 褐色 認識不能のため詳細不明。 1 暗褐色 ソフトローム混(径1cm)少、しりや・粘性なし。
SG105P-357
1 暗褐色 ソフトローム粒少、ソフトローム混(径1cm)少、しりや・粘性なし。
SG105P-358
1 暗褐色 ソフトローム混(径0.5cm)多、硬、しりや、裏面土上。
2 暗褐色 ソフトローム粒多、軟。

第226図 権現山遺跡 SG10区 時期不明の柱穴状土坑(1)遺構

第5章 権現山遺跡 SG10 区

P-269	18.5-17.5	円形	遺棄なし	0.29	0.28	0.34	テフラ(白炭)
古い遺構かとと思われる。遺棄なし。							
P-270	18.5-17.5		SK-92より古	0.30	0.28	0.38	
中世のSK-92内にあり、上面の遺構が、SK-92より古い。古墳時代の可能性あり。古墳時代の土層が大形直線部1片あり、中央部穴の分布域に所在。							
P-285	19.5-17.0	円形	遺棄なし	0.38	0.32	0.33	柱礎あり 白色粒あり
古墳時代のS137と重複し、不明瞭な柱礎あり。遺棄なし。							
P-291	19.5-17.0	円形	SD-263/S1-35と重複	0.31	0.29	0.10	白粒あり
中一近世のSD-263内にあり、SD-263より古い可能性あり。古墳時代のS1-35と重複するはずだが、新旧不明。遺棄なし。							
P-296	19.5-18.0	円形	SD-201と重複?	0.43	0.36	0.24	白粒あり
近世のSD-201程度で確認。新旧不明だが、SD-201に伴う可能性あり。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-302	20.0-17.5		S1-48より新	0.38	0.38	0.43	
古墳時代のS1-48を切る。土層部直線部の断面1片があるが、S1-48から読み取れた可能性が高い。							
P-309	20.0-18.5	円形	遺棄なし	0.22	0.20	0.16	柱礎あり
遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-310	20.0-18.5	円形	SK-77と重複	0.28	0.19	0.32	
柱礎形のSK-77と重複するが新旧不明。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-311	20.0-19.0	円形	SD-204と重複	0.26	0.22	0.40	
近世のSD-204内にあり新旧不明。P-311-313-332-333の4本で覆う柱建物になるように見える。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-312	20.0-19.0	円形	SD-204と重複	0.34	0.30	0.30	
近世のSD-204内にあり新旧不明。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-313	20.0-19.0	円形	SD-204と重複	0.29	0.26	0.33	白粒あり
近世のSD-204内にあり新旧不明。P-311-313-332-333の4本で覆う柱建物になるように見える。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-320	19.5-17.0	円形	SD-263より古?	0.34	0.30	0.40	
中一近世のSD-263内にある。遺棄時の状況から、SD-263に切られる可能性がある。遺棄なし。							
P-323	19.5-17.0	円形	S1-37(→P-323)とSD-283	0.40	0.30	0.30	
古墳時代のS1-37の範囲で確認。S1-37と同規模がそれだけで、仮説から見てS1-37より新しい可能性がある。時期不明。SD-283に切られる。遺棄なし。							
P-324	19.5-17.5	円形	SK-339→P-324→SD-263	0.30	0.26	0.40	
古墳時代のSK-339を切る。中一近世のSD-263を調査した後に確認したので、それよりも古いと見られる。古墳時代のS1-47とは新旧不明だがS1-47に伴う可能性もある。遺棄なし。							
P-332	20.0-18.5	円形	SK-77と重複	0.38	0.28	0.38	柱礎あり
柱礎形のSK-77内にあり、SK-77とは新旧不明。時期不明のP-311-313-332-333の4本で覆う柱建物になるように見える。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-333	20.0-18.5	円形	遺棄なし	0.51	0.42	0.53	不明
ポイントがあるが土層部不明。時期不明のP-311-313-332-333の4本で覆う柱建物になるように見える。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-334	19.5-17.5	円形	遺棄なし	0.58	0.57	0.66	
柱礎形のP-255-256-268-334はまともな状態で、中一近世のSD-263に付随する直線遺構の可能性もある。土層部直線部が1片以上。							
P-340	19.5-17.5	円形	SK-92より古?	0.50	0.42	0.31	土層の明確不明
中世のSK-92に切られる可能性あり。前面の低い壁が2箇所ある。土層部小片が5片あるが、読入の可能性もある。							
P-356	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.37	0.26	0.23	白粒あり
近世のSD-201程度で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-357	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.33	0.22	0.18	白粒あり
近世のSD-201程度で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-358	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.40	0.24	0.40	柱礎あり
近世のSD-201程度で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-359	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.56	0.45	0.49	柱礎あり P-360と同質
近世のSD-201程度で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-360	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.21	0.20	0.49	白粒あり P-359柱礎と同質
近世のSD-201程度で確認。SD-201との新旧は不明。深さはSD-201の浅からず深。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-361	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.19	0.32	0.44	白粒あり
近世のSD-201程度で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-362	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.30	0.25	0.22	白粒あり
近世のSD-201程度で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-363	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.37	0.30	0.26	白粒あり
近世のSD-201程度で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-364	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.34	0.34	0.32	白色粒あり
近世のSD-201程度で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-365	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.30	0.28	0.40	白粒あり
近世のSD-201程度で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-366	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.38	0.30	0.29	白色粒あり
近世のSD-201程度で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-367	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.24	0.18	0.22	白粒あり
SK-308北段1の北側張り込み(段内)内。近世のSD-201の範囲内にあるが新旧は不明で、SD-201に伴う可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-368	20.0-18.0	円形	SD-201と重複?	0.23	0.20	0.30	白粒あり
近世のSD-201程度で確認。SD-201との新旧は不明。SD-201に伴う可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-369	20.0-18.5	円形	SK-308北段より古	0.37	0.28	0.19	白粒あり
SK-308北段1の北側張り込み(段外)前面で確認。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-370	20.5-18.5	円形	SD-201と重複?	0.23	0.20	0.34	
SK-308北段1の北側張り込み(段内)内。近世のSD-201の範囲内にあるがSD-201との新旧は不明で、SD-201に伴う可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-373	20.0-18.5	円形	S1-58より新	0.30	0.28	0.32	白粒あり
古墳時代のS1-58後面で確認。S1-58を切る。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-376	20.0-18.5	円形	S1-58より新	0.60	0.38	0.28	白粒あり
古墳時代のS1-58後面で確認。S1-58を切る。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-378	20.5-18.5	不整形	SK-308北段より古	0.40	0.36	0.14	白粒あり
SK-308北段1の北側張り込み(段外)前面で確認。中世の可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-379	20.5-18.5	円形	SK-308北段より古	0.48	0.28	0.10	白粒あり
SK-308北段1の北側張り込み(段外)前面で確認。中世の可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-380	20.5-18.5	円形	SK-308北段より古	0.42	0.40	0.32	白色粒あり
SK-308北段1の北側張り込み(段外)前面で確認。中世の可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-381a	20.0-18.5	不整形	S1-58と重複?	0.34	0.26	0.32	白粒あり
SK-308北段1の北側張り込み(段外)前面で確認。古墳時代のS1-58の範囲内にあるが新旧は不明。中世穴の可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-381b	20.0-18.5	不整形	S1-58と重複?	0.24	0.18	0.16	白粒あり
SK-308北段1の北側張り込み(段外)前面で確認。古墳時代のS1-58の範囲内にあるが新旧は不明。中世穴の可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-382	20.0-18.5	円形	S1-58と重複?	0.29	0.26	0.09	白粒あり
SK-308北段1の北側張り込み(段外)前面で確認。古墳時代のS1-58の範囲内にあるが新旧は不明。中世穴の可能性もある。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							
P-383	20.0-18.5	円形	S1-58→P-383→SK-308北段	0.39	0.31	0.38	白粒あり
SK-308北段1の北側張り込み(段外)前面で確認。古墳時代のS1-58を切ると思われる。遺棄なし。中央部穴の分布域に所在。							



SG105P-359
1 暗褐色 ソフトローム状多,軟。
2 黄褐色 ソフトローム塊(径1～2cm)多,しり有り。
3 暗褐色

SG105P-361
1 暗褐色 ソフトローム塊・白色粒多,小礫(径2～3cm)・炭化物少,しりなし。
2 暗褐色

SG105P-362
1 褐色 白色粒多,炭化物少,しりなし。
2 暗褐色

SG105P-363
1 暗褐色 ソフトローム塊・白色粒多,小礫(径2～3cm)・炭化物少,しりなし。
2 暗褐色

SG105P-364
1 暗褐色 ソフトローム塊・白色粒多,しり有り。
2 暗褐色

SG105P-365
1 暗褐色 ソフトローム塊・白色粒多,ソフトローム塊(径1cm)・炭化物少,しり有り。
2 黄褐色 ソフトローム塊(径1cm)で充填されるしり有り。

SG105P-366
1 暗褐色 ソフトローム塊少,しりなし。
2 暗褐色

SG105P-367
1 暗褐色 ソフトローム塊・白色粒多,今市軽石粒・炭化物少,しり有り。
2 暗褐色

SG105P-368
1 暗褐色 ソフトローム塊多,ややしり有り。
2 暗褐色

SG105P-369
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)少,軟。
2 暗褐色

SG105P-370
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)・粘土状・炭化物少,硬。
2 暗褐色

SG105P-371
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)壁骨りに多,白色粒少,しりなし。
2 暗褐色

SG105P-372
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1～2cm)多,軟。
2 暗褐色

SG105P-373
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)少,軟。
2 暗褐色

SG105P-374
1 暗褐色 ソフトローム塊(径10～15cm)多,硬。柱穴の裏込め土と思われる。
2 黄褐色

SG105P-381a
1 暗褐色 ソフトローム塊多,ソフトお上びソフトローム塊(径1～2cm)少,しりなし。
2 暗褐色

SG105P-381b
1 暗褐色 ハードローム塊(径1～2cm)少,しりなし。
2 暗褐色

SG105P-382
1 褐色 ハードローム塊(径1cm)少,しりなし。
2 暗褐色

SG105P-383
1 黄褐色 ハードローム塊(径2～3cm)多,硬。
2 暗褐色

SG105P-384
1 暗褐色 ソフトローム塊(径0.5cm)少,硬。
2 暗褐色

SG105P-385
1 暗褐色 ソフトローム塊(径2cm)多,上面は硬,下面は軟。
2 暗褐色

SG105P-386
1 暗褐色 ハードローム塊多,ソフトローム塊(径1cm)少,今市軽石粒・炭化物多,硬。
2 暗褐色

SG105P-387
1 暗褐色 ソフトローム塊多,軟。
2 黄褐色

SG105P-388
1 暗褐色 ソフトローム塊多,軟。
2 暗褐色

SG105P-389
1 暗褐色 ソフトローム塊(径2cm)少,軟。
2 暗褐色

SG105P-390
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)多,硬。
2 暗褐色

SG105P-391
1 暗褐色 ハードローム塊少,軟。
2 暗褐色

SG105P-392
1 暗褐色 ソフトローム塊少,ややしり有り。
2 暗褐色

SG105P-393
1 暗褐色 ソフトローム塊・白色粒多,硬。
2 暗褐色

SG105P-394
1 黄褐色 ソフトローム塊多,硬。
2 暗褐色

SG105P-395
1 暗褐色 ソフトローム塊多,硬。
2 暗褐色

SG105P-396
1 暗褐色 白色粒多,軟。
2 暗褐色

SG105P-402
1 暗褐色 ソフトローム塊多,ソフトローム塊(径1～2cm)少,軟。
2 暗褐色

SG105P-403
1 暗褐色 ソフトローム塊(径1cm)・粘土状に多,白色粒多,今市軽石粒多,軟。
2 暗褐色

SG105P-404
1 暗褐色 ソフトローム塊多,とも硬。
2 暗褐色

SG105P-407
1 黒褐色 小円礫(径2～3cm)や今や,ローム粒少,軟。
2 暗褐色

SG105P-409
1 黒褐色 ローム(径1～2cm)・ローム粒少,しり有り,粘性有。
2 暗褐色

SG105P-410
1 暗褐色 ローム(径2～3cm)多,黒色土塊少,しり有り,粘性なし。
2 暗褐色

SG105P-411
1 暗褐色 ローム(径2～3cm)多,褐色土塊少,しり有り,粘性なし。
2 暗褐色

SG105P-412
1 暗褐色 ローム(径2～3cm)多,褐色土塊少,しり有り,粘性有。
2 暗褐色

SG105P-413
1 暗褐色 ローム(径2～3cm)多,褐色土塊少,しり有り,粘性有。
2 暗褐色

SG105P-414
1 黒褐色 ロームの混入なし,しり有り,粘性なし。
2 暗褐色

SG105P-415
1 暗褐色 1層とロームの混合土,ロームの方が多いしり有り,粘性有。
2 暗褐色

SG105P-416
1 暗褐色 1層とロームの混合土,しり有り,粘性有。
2 暗褐色

SG105P-417
1 暗褐色 ローム(径2cm)多,褐色土塊少,しり有り,粘性有。
2 暗褐色

SG105P-418
1 暗褐色 ローム(径2cm)多,褐色土塊少,しり有り,粘性有。
2 暗褐色

SG105P-419
1 暗褐色 ローム(径2cm)多,褐色土塊少,しり有り,粘性有。
2 暗褐色

SG105P-420
1 暗褐色 ローム(径2cm)多,褐色土塊少,しり有り,粘性有。
2 暗褐色

SG105P-421
1 暗褐色 ローム(径2cm)多,褐色土塊少,しり有り,粘性有。
2 暗褐色

SG105P-422
1 暗褐色 ローム(径2cm)多,褐色土塊少,しり有り,粘性有。
2 暗褐色

SG105P-423
1 暗褐色 ローム(径2cm)多,褐色土塊少,しり有り,粘性有。
2 暗褐色

SG105P-424
1 暗褐色 ローム(径2cm)多,褐色土塊少,しり有り,粘性有。
2 暗褐色

SG105P-425
1 暗褐色 ローム(径2cm)多,褐色土塊少,しり有り,粘性有。
2 暗褐色

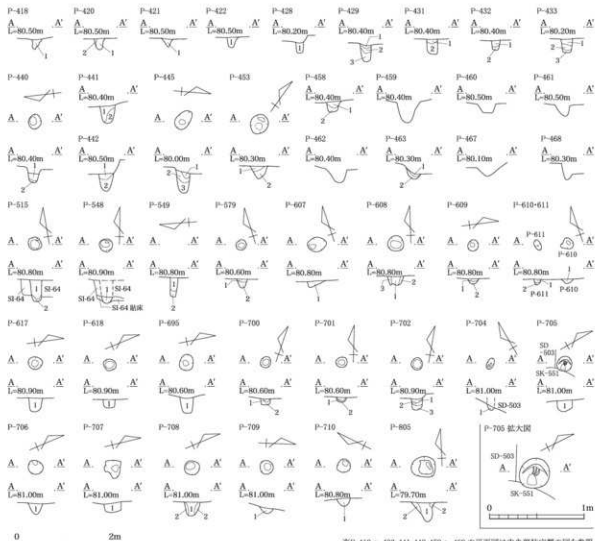
SG105P-426
1 暗褐色 ローム(径2cm)多,褐色土塊少,しり有り,粘性有。
2 暗褐色

SG105P-427
1 暗褐色 ローム(径2cm)多,褐色土塊少,しり有り,粘性有。
2 暗褐色

第227図 権現山遺跡 SG10区 時期不明の柱穴状土坑(2)遺構

第5章 権現山遺跡 SG10 区

P-384	200-18.5	円形	SJ-58 と重複?	0.28	0.26	0.32	単層
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。古墳後期の SJ-58 の範囲内にあるが銅貨は不明。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-385	200-18.5	円形	SJ-58 と重複?	0.52	0.32	0.61	単層
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。古墳後期の SJ-58 の範囲内にあるが銅貨は不明。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-386	200-18.5	円形	SJ-58 と重複?	0.29	0.27	0.19	単層
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。古墳後期の SJ-58 の範囲内にあるが銅貨は不明。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-387	200-18.5	円形	SJ-58 と重複?	0.35	0.26	0.34	単層
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。古墳後期の SJ-58 の範囲内にあるが銅貨は不明。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-388	200-18.5	円形	SX-308 北側掘り古	0.36	0.33	0.34	柱状あり
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-389	200-18.5	円形	SD-201 と重複	0.23	0.23	0.18	単層 白色あり
近所の SD-201 埋土層で確認。SD-201 との銅貨は不明。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-390	200-18.5	円形	SJ-58 と重複?	0.24	0.24	0.22	単層
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。古墳後期の SJ-58 の範囲内にあるが銅貨は不明。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-391	200-18.5	円形	SJ-58 と重複?	0.38	0.36	0.35	柱状あり
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。古墳後期の SJ-58 の範囲内にあるが銅貨は不明。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-392	200-18.5	円形	SX-308 北側掘り古	0.30	0.16	0.30	単層 白色あり
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。昭和初期の SK-393 と近接する。							
P-394	200-18.5	円形	SX-308 北側掘り古	0.21	0.17	0.24	単層
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-395	200-18.5	円形	SX-308 北側掘り古	0.22	0.20	0.14	単層
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 埋土層で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-396	200-18.5	円形	SX-308 北側掘り古	0.29	0.28	0.11	単層 白色あり
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-397	200-18.5	円形	SX-308 北側掘り古	0.24	0.21	0.15	単層 白色あり
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-398	200-18.5	円形	SX-308 北側掘り古	0.19	0.19	0.14	単層
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-399	200-18.5	円形	SX-308 北側掘り古	0.42	0.26	0.13	単層
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-400	200-18.5	円形	SX-308 北側掘り古	0.30	0.25	0.08	単層
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-401	200-18.5	円形	SX-308 北側掘り古	0.56	0.39	0.40	柱状あり
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-402	200-18.5	円形	SX-308 北側掘り古	0.43	0.42	0.32	単層
SX-308(Ⅰ) 北側掘り込み (鏡見) 直前で確認。中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-403	200-18.5	円形	SJ-58 より新	0.48	0.40	0.20	白色あり
古墳後期の SJ-58 直前で確認。SJ-58 を切る。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-404	200-18.5	円形	SJ-58 より新	0.36	0.34	0.35	単層
古墳後期の SJ-58 直前で確認。SJ-58 を切る。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-406	18.5-16.5	円形	SJ-105 → SJ-22 → P-406(7)	0.32	0.28	0.20	土層の区別なし
古墳後期の SJ-22 を切る上層で確認。遺物なし。							
P-407	21.5-18.5	円形	SJ-61 → SJ-304 → P-407(7)	0.34	0.28	0.24	単層?
古墳中期の SJ-61 を切る。古墳中期の SD-304 を切る上層で確認。遺物なし。							
P-409	20.5-17.5	円形	SJ-106 より新?	0.26	0.23	0.28	単層
古墳中期の SJ-106 直前で確認し、おそらく SJ-106 を切る。遺物なし。東方の P-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。中央部柱穴の北西方向に所在。							
P-410	20.5-17.5	円形	SJ-106 より新?	0.27	0.19	0.53	単層
古墳中期の SJ-106 直前で確認し、おそらく SJ-106 を切る。遺物なし。東方の P-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。中央部柱穴の北西方向に所在。							
P-411	20.5-18.0	円形	SJ-106 より新?	0.20	0.20	0.29	単層
古墳中期の SJ-106 直前で確認し、おそらく SJ-106 を切る。遺物なし。東方の P-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-412	20.5-17.5	円形	SJ-106 より新	0.58	0.32	0.28	単層
古墳中期の SJ-106 直前で確認し、SJ-106 を切る。遺物なし。東方の P-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。中央部柱穴の北西方向に所在。							
P-413	20.5-18.0	円形	SJ-106 より新?	0.24	0.20	0.53	単層
古墳中期の SJ-106 を切る。下部が傾くなり、柱石 8cm 程と考えられる。土層調査範囲が 4m 四方。SJ-106 と同一傾斜と見られる鏡片を含むので疑いがある。東方の P-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-414	20.5-18.0	円形	SJ-110 より新?	0.27	0.21	0.20	単層
古墳中期の SJ-110 直前で確認。P-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。礎 1 点出土。土層調査範囲が 1m 四方が SJ-110 から疑いがある。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-415	21.0-18.0	円形	SJ-110 より新?	0.25	0.24	0.24	単層
古墳中期の SJ-110 直前で確認。中世の P-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。土層調査範囲が 1m 四方あり。SJ-110 から疑いがある。中央部柱穴の北西方向に所在。							
P-416	21.0-18.0	円形	SJ-110 より新?	0.37	0.32	0.32	単層
古墳中期の SJ-110 直前で確認。中世の P-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。土層調査範囲が 1m 四方あり。SJ-110 から疑いがある。中央部柱穴の北西方向に所在。							
P-417	20.5-18.0	円形	SJ-110 より新?	0.28	0.23	0.23	単層
古墳中期の SJ-110 直前で確認。中世の P-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-418	20.5-18.0	円形	SJ-110 より新?	0.27	0.27	0.26	単層
古墳中期の SJ-110 直前で確認。中世の P-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-420	20.5-18.0	円形	SJ-110 より新?	0.23	0.23	0.24	柱状あり
古墳中期の SJ-110 セットレンチの地山ローム直前で確認。銅貨不明。中世の P-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-421	20.5-18.0	円形	SJ-110 より新?	0.31	0.26	0.19	単層
古墳中期の SJ-110 セットレンチの地山ローム直前で確認。銅貨不明。中世の P-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-422	20.5-18.0	円形	SJ-110 より新?	0.26	0.23	0.23	単層
古墳中期の SJ-110 セットレンチの地山ローム直前で確認。銅貨不明。中世の P-425 と関連する中世柱穴の可能性もある。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-428	19.5-18.0	円形	SJ-104(7) → P-428 → SJ-308	0.30	0.24	0.38	単層
SX-308(Ⅰ) 鏡見に切り入れ。古墳後期の SJ-51a+bc とは銅貨不明で、SJ-51a+bc には伴わないと見られる。古墳中期の SJ-104 を切る。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-429	19.5-18.0	円形	SJ-104 → SJ-51b → SJ-51a(7) → P-429	0.26	0.22	0.40	単層
古墳中期の SJ-51a の直前で確認。後期の SJ-51b(調査時名称 SJ-109)の直前で確認。SJ-51a も切る。中世の SJ-104 より新しい。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-431	19.5-18.0	円形	SJ-51b → SJ-51a → P-431(7)	0.26	0.24	0.32	単層
古墳中期の SJ-51a 直前で確認。後期の SJ-51b(調査時名称 SJ-109)の直前で確認。SJ-51a も切る。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							



第P-418～433-441-442-459～468の平面図は中央部柱穴群の図を参照

- SG100P-418
1 暗褐色
ローム層が若干沈下し入る。しまりやや弱。粘性有。
- SG100P-420
1 暗褐色
ローム-黒色腐-暗褐色土層の混合土。しまりやや弱。粘性有。
- SG100P-421
1 暗褐色
ローム土層の混合土。しまり弱。粘性なし。
- SG100P-422
1 暗褐色
ローム(径10cm)少。しまりやや弱。粘性有。
- SG100P-428
1 暗褐色
ローム小塊-粒少量。しまり弱。
- SG100P-429
1 暗褐色
ローム小塊-粒状灰化物層。しまりやや弱。
2 暗褐色
ローム小塊-粒少。灰化物層。しまりやや弱。
3 暗褐色
ローム小塊-粒少。ローム小塊層。しまりやや弱。
- SG100P-431
1 暗褐色
ローム小塊-粒状灰化物層。しまりやや弱。
2 暗褐色
ローム小塊層。ローム小塊層。しまりやや弱。
- SG100P-432
1 暗褐色
ローム小塊-粒少。ローム小塊層。しまり弱。
2 暗褐色
ローム小塊-粒少。ローム小塊層。しまり弱。
- SG100P-433
1 暗褐色
ローム小塊少。ローム小塊層。しまり弱。
2 暗褐色
ローム小塊-粒少量。しまり弱。
3 暗褐色
ローム小塊-粒少量。ローム小塊層。しまり弱。
- SG100P-440
1 暗褐色
ローム小塊-粒少量。土上ローム小塊層。しまり弱。
2 暗褐色
ローム小塊-粒少量。ローム小塊層。しまり弱。
- SG100P-441
1 暗褐色
ローム小塊-粒状土層。しまりやや弱。
2 暗褐色
ローム小塊-粒少。ローム小塊層。しまり弱。
- SG100P-442
1 暗褐色
ローム小塊-粒少量。土上小塊層。しまりやや弱。
2 暗褐色
ローム小塊-粒少量。土上小塊層。しまり弱。
- SG100P-445
1 暗褐色
ローム小塊-粒少量。しまりやや弱。
2 暗褐色
ローム小塊-粒少量。ローム小塊層。しまりやや弱。
3 暗褐色
ローム小塊-粒少量。しまりやや弱。

- SG100P-453
1 暗褐色
ローム小塊-粒少。硬。
2 暗褐色
ローム小塊-粒-粒やや多。やや硬。
- SG100P-458
1 暗褐色
ローム粒多。ローム小塊少。軟。
2 暗褐色
ローム小塊-粒やや多。やや硬。
- SG100P-463
1 暗褐色
灰褐色砂質土(地山)塊-小塊やや多。やや硬。
2 灰褐色
砂質土(地山)主体。やや硬。崩れてきたものだろう。
- SG100P-515
1 暗褐色
ローム粒やや多。ローム小塊少。
2 黄褐色
ローム土層。小円礫(径2cm)と暗褐色土少。
- SG100P-548
1 暗褐色
ローム粒多。ローム小塊やや多。やや硬。
- SG100P-549
1 暗褐色
ローム粒少。やや硬。
2 暗褐色
ローム小塊-粒やや多。
3 暗褐色
ローム小塊-粒やや多。やや硬。
- SG100P-579
1 暗褐色
ローム小塊層。しまりやや弱。
2 暗褐色
ローム小塊層。しまりやや弱。
3 暗褐色
ローム小塊層。しまりやや弱。
- SG100P-607
1 暗褐色
ローム小塊-粒やや多。硬。
2 暗褐色
ローム小塊少。やや硬。
3 暗褐色
ローム小塊-粒やや多。硬。
- SG100P-609
1 暗褐色
ローム小塊少。ローム粒若干。やや硬。
2 黄褐色
ゾロローム主体。非常に硬。
- SG100P-610
1 暗褐色
ローム小塊やや少。軟。
2 黄褐色
均質。しまり弱。
3 黄褐色
ローム層多。黒褐色土少。軟。
- SG100P-617
1 暗褐色
ロームの混入はあまり見られない。しまりやや弱。粘性有。
- SG100P-618
1 暗褐色
ロームの混入はあまり見られない。しまりやや弱。粘性有。

- SG100P-695
1 暗褐色
黒色土層と褐色土層が混在。ローム小塊多。しまりやや強。粘性有。
- SG100P-700
1 暗褐色
ローム小塊-粒状灰化物層。しまりやや弱。
2 暗褐色
ローム小塊-粒少量。しまりやや弱。
- SG100P-701
1 暗褐色
ローム小塊-粒状灰化物層。しまりやや弱。
2 暗褐色
ローム小塊-粒少量。しまり弱。
- SG100P-702
1 暗褐色
ローム小塊-粒と土上ローム-灰化物層。しまり弱。
2 暗褐色
ローム小塊-粒少量。土上小塊-灰化物層。しまり弱。
3 暗褐色
ローム小塊-粒少量。土上小塊層。しまりやや弱。
- SG100P-704
1 暗褐色
ゾロローム粒少。軟。
- SG100P-705
1 暗褐色
ゾロローム層(径2-3cm)多。軟。
2 暗褐色
ゾロローム粒少。軟。
3 暗褐色
ゾロローム粒少。軟。
- SG100P-707
1 暗褐色
ゾロローム層(径2-3cm)少。軟。
- SG100P-708
1 暗褐色
ゾロローム粒少。しまり有。
2 暗褐色
ゾロローム粒多。軟。裏込土の残存。
3 暗褐色
ゾロローム粒多。軟。
- SG100P-709
1 暗褐色
ゾロローム粒多。軟。
- SG100P-710
1 暗褐色
下層にゾロローム層(径1cm)多。しまり有。
2 暗褐色
混入物なし。水分を含む。軟。
3 暗褐色
地中の茶褐色粒少。しまり有。

第 228 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の柱穴状土坑 (3) 遺構

第5章 権現山遺跡 SG10 区

P-432	19.5-18.0	円形	SI 51b→SI 51a→P-432の	0.20	0.19	0.22	
古墳期のSI 51a南側の床面では見付かず、後期のSI 51b(調査時名称 SI 109)の床面を切る。SI 51a も切る と推定。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-433	19.5-18.0	円形	SI 53→SI 51b→SI 51a →P-433の?	0.27	0.22	0.33	礎土・灰化物あり
古墳期のSI 51a南側の床面では見付かず、後期のSI 51b(調査時名称 SI 109)の床面で確認。SI 51b と古墳中期のSI 53を切る。SI 51a も切る と推定。古墳後期以降。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-440	19.5-16.5	円形	SI 38 と重なり	0.32	0.28	0.36	
古墳中期のSI 38の床面に確認したが、鎌倉末期には不明。西半は削られる。位置から SI 38 には付かないと見られる。遺物なし。							
P-441	19.5-18.5	円形	SI 53→SI 51a→P-441の?	0.37	0.34	0.46	
古墳中期のSI 53床面で確認し、SI 53 を切るらしい。古墳後期のSI 51a との範囲は不明だが、おそらく SI 51a より新しい。遺物なし。P-442-467-468 と同様な性格か、中央部柱穴の分布域に所在。							
P-442	19.5-18.5	円形	SI 53 より新	0.32	0.28	0.68	
古墳中期のSI 53床面で確認し、SI 53 を切るらしい。遺物なし。P-441-467-468 と同様な性格か、中央部柱穴の分布域に所在。							
P-443	17.5-16.5	円形	SI 19 より新。SK 95 と重なり	0.45	0.29	0.56	
古墳中期のSI 19を切ると思われる。古墳時代のSK 95 と重なるが範囲不明。現地調査時には SK 95 が埋没状態で、P-445 が支那柱穴になるが埋没物の可能性を考えた。遺物なし。							
P-453	17.0-18.0	円形	重なりなし	0.44	0.38	0.68	
古墳時代のSK-449に近接。土師器鉢2片・黄銅製3片と東家銅鏡1片出土。							
P-458	20.0-18.5	円形	重なりなし	0.34	0.31	0.27	
土師器小片3点がわずかに出土したが、他遺物からの混入と見られる。中央柱穴の可能性もあり。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-459	20.0-18.5	円形	重なりなし	0.57	0.45	0.51	土師の記録なし
中央柱穴の可能性もあり。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-460	20.0-18.5	円形	重なりなし	0.49	0.35	0.22	土師の記録なし
中央柱穴の可能性もあり。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-461	20.0-18.5	円形	重なりなし	0.41	0.37	0.27	土師の記録なし
中央柱穴の可能性もあり。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-462	20.0-18.5	円形	重なりなし	0.43	0.39	0.36	土師の記録なし
中央柱穴の可能性もあり。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-463	20.0-18.5	円形	SD 204 と重なり	0.30	0.24	0.36	
近所のSD 204 範囲で確認したが範囲不明。SD-204 に伴う可能性もあり。遺物なし。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-467	19.5-18.0	円形	SK-443→SI 53→P-467	0.38	0.38	0.29	土師の記録なし
縄文時代のSK-443、古墳中期のSI 53 を切る。P-441-442-468 と同様な性格か。遺物土師器鉢2片があり、混合した。SI 53からの混入と見られる。整理作業時に発露。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-468	19.5-18.0	円形	SK-443→SI 53→P-468	0.22	0.20	0.36	土師の記録なし
縄文時代のSK-443、古墳中期のSI 53 を切る。P-441-442-467 と同様な性格か。遺物なし。整理作業時に発露。中央部柱穴の分布域に所在。							
P-515	22.0-17.5	円形	SI 64a より新	0.31	0.28	0.47	
古墳中期のSI 64a を切る。自然露が1点出た。北側にあるP-548 と時期が近いかもしれない。							
P-548	22.0-17.5	円形	SI 64a より新	0.28	0.27	0.50	
古墳中期のSI 64a 床面で確認し、SI 64a を切る。遺物あり。南側にあるP-515 と時期が近いかもしれない。							
P-549	22.0-18.0	円形	SI 64a と重なり	0.24	0.14	0.42	
古墳中期のSI 64a 壁面で確認したが範囲不明。遺物なし。							
P-579	23.0-19.0	円形	SI 75 より新?	0.22	0.22	0.20	
古墳中期のSI 75 床面で確認。SI 75 を切るものと推定する。遺物なし。							
P-607	23.5-18.0	円形	欄干部	0.40	0.31	0.16	単層
時期不明のSK-603 に近接。遺物なし。							
P-608	23.5-18.5	円形	重なりなし	0.34	0.32	0.20	柱痕あり
時期不明のSK-603 に近接。遺物なし。							
P-609	23.5-18.0	円形	重なりなし	0.24	0.22	0.14	
時期不明のSK-603 に近接。遺物なし。							
P-610	23.5-18.0	円形	重なりなし	0.28	0.24	0.12	単層
時期不明のSK-603 に近接。遺物なし。							
P-611	23.5-18.0	円形	重なりなし	0.24	0.13	0.16	
調査時の所見では、木の根の残りもある。時期不明のSK-603 に近接。遺物なし。							
P-617	22.5-18.5	円形	重なりなし	0.30	0.26	0.30	単層
時期不明のSK-620 と壁土の付着。遺物なし。							
P-618	22.5-18.5	円形	重なりなし	0.26	0.23	0.19	単層
時期不明のSK-619-620 とP-617 と近接する。遺物なし。							
P-695	22.0-19.5	円形	重なりなし	0.34	0.30	0.40	単層
南東側の基壇に向かう斜面に存在。遺物なし。							
P-700	23.0-19.0	円形	SI-113b より新?	0.24	0.22	0.17	灰化物あり
古墳中期のSI-113b(調査時名称 SI-116)の床面で確認。SI-113b に伴うか、それより新しい。ごく短いので、SI-113b に伴う柱穴とは考えにくい。他に SI-113b より新しければ、古墳中期のSI-113a と重なる可能性がある。遺物なし。							
P-701	23.0-19.0	円形	SI-113b より新?	0.24	0.22	0.12	灰化物あり
古墳中期のSI-113b(調査時名称 SI-116)の床面で確認。SI-113b に伴うか、それより新しい。ごく短いので、SI-113b に伴う柱穴とは考えにくい。他に SI-113b より新しければ、古墳中期のSI-113a と時期不明のSK-563 と重なる可能性がある。遺物なし。							
P-702	23.5-19.0	円形	SI-79 より新?	0.26	0.24	0.36	礎土・灰化物あり
古墳中期のSI-79 床面で確認。SI-79 を切ると思われるが不確実。遺物なし。							
P-704	23.5-19.5	円形	SD-503 より新	0.24	0.14	0.32	単層
近所のSD-503 を切る。SD-503 と重なる状況の土師製土師器の上部では遺物の根が広がって見られる。遺物なし。							
P-705	24.0-19.5	円形	SK-551 より新	0.33	0.31	0.28	単層
古墳時代の円筒形土師 SK-551 をわずかに切る。遺物なし。							
P-706	24.0-19.5	円形	重なりなし	0.31	0.29	0.24	単層
遺物なし。							
P-707	24.0-19.5	円形	重なりなし	0.38	0.34	0.26	単層
遺物なし。							
P-708	24.0-19.5	円形	重なりなし	0.31	0.30	0.32	柱痕あり
遺物なし。							
P-709	24.0-19.5	円形	SD-503 より新	0.29	0.28	0.22	単層
調査時の所見では、平面での観察により近所のSD-503 を切ることで確認されている。遺物なし。							
P-710	24.0-18.5	円形	重なりなし	0.30	0.28	0.18	単層
遺物なし。							
P-805	17.5-18.5	円形	重なりなし	0.51	0.44	0.42	柱痕あり
東側尾根にあるピット。遺物なし。							

第30節 時期不明の土坑 (第229～237図、写真図版160～166・174・214)

SG10区における時期不明の土坑として142基をここで報告する。SK-294・297・447・451は、白色土や白色粒が古墳時代のHr-FAテフラであれば、古墳時代土坑かもしれない。

第237図に遺物を示した。縄文土器は、SK-272で結節縄文を施す前期末～中期初めの1片(2片が接合)、SK-532で後期堀之内式土器が1片ある。縄文時代土坑かもしれないが、混入品の可能性もある。鉄関連遺物では、SK-77とSK-317で極小の碗形鍔治滓が1点ずつ出土している(「東谷・中島地区遺跡群10」の第289図から再度掲載した)。古墳時代集落に伴う鉄関連遺物が混入したと考えられる。SK-77には鉄滓以外に古墳中期中葉ころの土師器杯片(1)もあるので古墳時代土坑かもしれないが、出土土師器の注記は「SK-77か253」なので出土遺構が不確定であり、時期不明土坑とした。

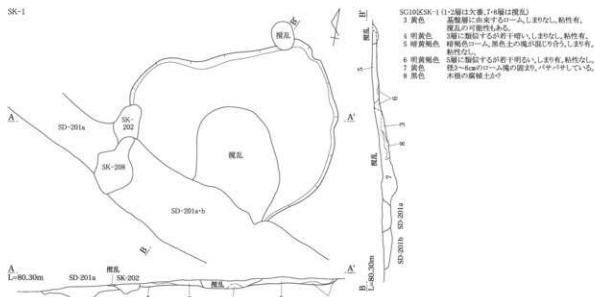
SK-226に混入している古墳中期の滑石製有孔円板は、SG10区SI-64aなどに出土例がある。SK-243の土師器大形壺底部片は、底面に生じた焼成前の亀裂をへらで補修した痕がある。亀裂は底面近くまで入り、液体を入れると少しずつ漏れたと考えられる。補修痕のある土師器はSG10区SI-6などにある。SK-243・264に同一個体の須恵器裏片を含む。SK-254の須恵器二重踵は古墳中期の稀少な遺物で、SG10区SI-50などに例がある。SK-264の土師質小皿(かわらけ)は、中世土坑SK-92から混入したことも考えられる。SK-264に混入した古墳時代の須恵器裏破片は古墳時代土坑SK-275と同一個体を含み、古墳時代溝SD-304bや中近世溝SD-263にも類似破片がある。SK-276の土師器は古墳後期のSK-47からの混入であろうか。SK-297の葎石も古墳時代堅瓦に類似があり、古墳時代集落から混入した品であろう。SK-405には煤が多量に付着した被熱礫2点(1・2)と台石?1点(3)があり、時期がわかる土器はない。SK-614の須恵器器台破片は、南方へ108m離れたSI-111やSD-41・42、南西へ110m離れたSK-292・SD-201aなどに同一個体がある。

第141表 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑

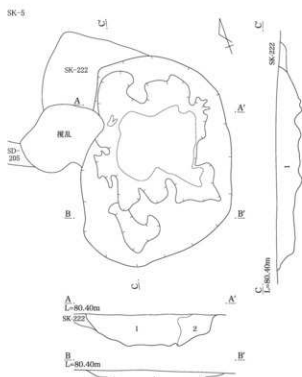
遺物名	グリッド	平面形	断面	長さ(m)	短径(m)	高さ(m)	中軸	出土
SK-1	17.0-17.5	不整形	SK-202・SD-201aより古	4.48	3.23	0.15	N 80° E	土師
大形の土坑。時期不明のSK-202、近所のSK-201a・bに切られる。中央に木の根の痕がある。古墳中・後期の土師器小皿片があるが、遺構に伴うものとは見られない。								
SK-5	18.0-18.0	楕円形	SK-222・SD-205より新	4.48	3.05	0.68	N 42° E	土師
古墳前期のSK-222を切る。時期不明のSD-205との間に根が入るため断面は重なり、調査時の所見ではSD-205を切る。大形不整形で底面は凸凹が激しい。古墳後期の土師器小皿片が少量あるが、遺構に伴うものとは見られない。								
SK-68	23.0-18.0	楕円方形	SI-69-SK-576-P-575・577と重なり	3.36	2.68	0.18	N 49° W	甲層
古墳後期のSI-69を切る。時期不明のSK-576、P-575に切られる。P-577との新旧不明だが、P-577に切られると推定する。少量の土師器片があり、SI-69などからの混入と見られる。								
SK-77	20.0-18.5	不整形	SK-278(旧)→SK-77→SK-253	3.85	2.15	0.18	N 29° E	土師
時期不明のSK-253に切られる。時期不明のSK-278を切る可能性がある。時期不明のP-310-332と重なり。新旧不明。中央部が約10cmほど楕円状に窪く。小形の権現山遺跡の1点と、古墳中期を主とする土師器片がある。遺物は少量で、既出の土師器杯はSK-77・253のどちらで出土したものか不明。土師器片がこの土坑に伴う縁起はないが、古墳時代土坑の可能性もある。								
SK-202	16.5-17.0-17.0-17.0	不整形	SK-10・SK-208・SD-201aより新	0.87	0.52	0.22	N 33° E	甲層
時期不明のSK-1、近所のSD-201aを切る。土層断面はないが、古墳時代のSK-208を切ると見られる。混入と見られる土師器小皿片が3点ある。								
SK-203	17.0-17.5	円形	SI-2より新	1.40	1.27	0.20	不明	白色粒あり
古墳中期のSI-2覆土中にあり、SI-2を切る。土師器小皿片があり、ほとんどはSI-2から混入したものと思われる。								
SK-209	19.5-17.0	楕円長方形	SI-30より新	2.32	1.00	0.16	N 10° E	甲層 白色粒あり
古墳中期のSI-30を切る。古墳後期のSI-30を主とする土師器片が少量あり。SI-30から混入したものが多いと思われる。								
SK-212	18.0-17.5	円形	SI-30より新	1.06	1.00	0.18	不明	甲層 白色粒あり
古墳中期のSI-30覆土中にあり、SI-30を切る。土師器片が少量あるが、SI-30からの混入と見られる。								
SK-213	18.0-17.5	円形	重なりなし	1.30	1.16	0.22	不明	甲層
古墳中期のSI-9に隣接する。古墳中期の土師器片があるので、その時期の土坑の可能性もある。								
SK-214	19.0-17.5	楕円長方形	SI-101・SD-201・263より新	2.97	1.07	0.38	N 20° W	土層の特異不明
調査時に南側のSD-201を切る部分を取り上げてしまった。古墳中期のSI-101、中～後期のSD-263と近所のSD-201を切る。土師器・甕・小形壺の破片があるが、SI-101からの混入と見られる。								
SK-215	18.5-18.0	円形	SI-32より新	0.72	0.63	0.16	不明	甲層
古墳中期のSI-32中にあり、SI-32の床面を切っただけでほとんどが土層なので、SI-32より新しいと見られる。遺物なし。								
SK-223	16.5-18.0	楕円形	重なりなし	1.18	0.80	0.08	N 5° E	甲層 炭粒あり
炭粒を多く含む。遺物なし。								
SK-225	18.0-16.5	円形	重なりなし	0.84	0.80	0.15	不明	自然埋没
遺物なし。								
SK-226	18.0-17.5	円形	SK-89→SI-30→SK-226	0.92	0.83	0.12	N 57° E	甲層
古墳中期のSI-30覆土と床面の一部を切る。古墳中期のSI-89→89bまでには達しない。石製須恵器小皿片と土師器少量があるが、SI-30からの混入と見られる。								
SK-229	18.5-17.5	長方形	SI-12・SK-229→SK-228	1.22	0.70	0.11	N 15° E	甲層
古墳中期のSI-12と時期不明のSK-229を切る。土師器・甕が少量あるが、SI-12からの混入と見られる。								
SK-229	18.5-17.5	長方形	SI-12・SK-229→SK-228	1.40	0.64	0.16	N 15° E	甲層
古墳中期のSI-12を切る。時期不明のSK-228に切られる。甕・甕片を主体とする土師器片があるが、SI-12と同一個体と認められる。混入と見られる。								

第5章 権現山遺跡 SG10区

SK-1



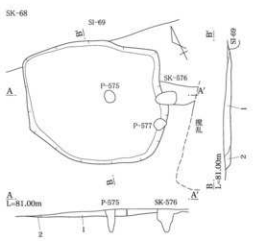
SK-5



SG10SK-5

- 1 黒褐色 ロームは含まない、しまり粘性やや有。
 2 黄褐色 灰色砂質土の上層、ローム塊と褐色土の混在土、黄色味が強い、しまりなし、粘性有。

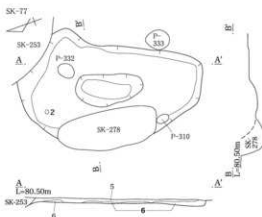
SK-68



SG10SK-68

- 1 黒褐色 暗褐色土小塊やや多、ローム粒少、やや硬。
 2 暗黄褐色 ローム小塊やや多、やや硬。

SK-77

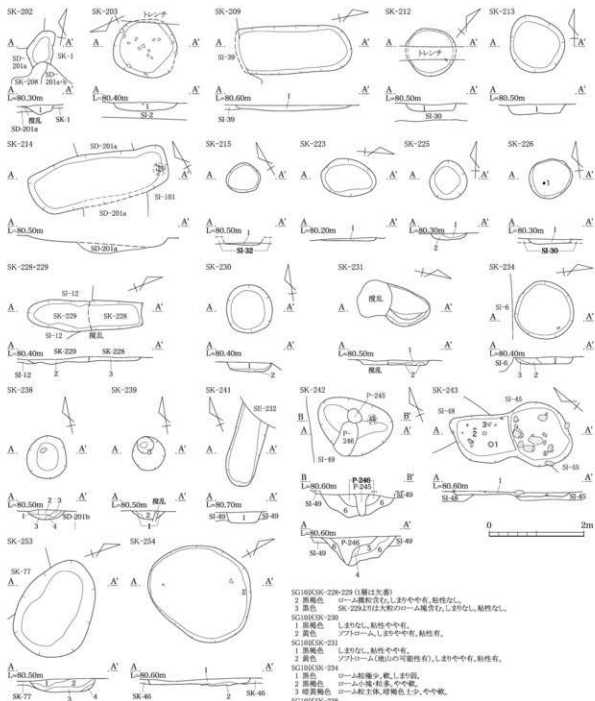


SG10SK-77 (1~4層はSK-253のため省略)

- 5 暗褐色 ローム粒少、ローム小塊散在、しまり強。
 6 暗黄褐色 ローム塊やや多、今古軽石細粒散在、しまりやや強。

0 2m

第229図 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑(1)遺構



SG105SK-202

1 暗褐色 炭粉ローム堆多, しまりなし, 粘性なし。

SG105SK-203

1 黒褐色 炭化物・炭屑の不明確な塊や少, 白色粒細少, やや軟。

SG105SK-209

1 暗褐色 白色粒多, フットローム塊(径1cm)少, 今市粘土粒微量。

SG105SK-212

1 黒褐色 ローム粒・塵土粒・白色粒少, 硬, しまり強。

SG105SK-213

1 暗褐色 取の跡付4ローム含む, しまり有, 粘性なし。

SG105SK-215

1 暗褐色 ローム小塊・粒少, しまりやや強。

SG105SK-223

1 黒褐色 炭化物小塊・炭粒多, ローム小塊・粒少, やや軟。

SG105SK-225

1 暗褐色 ローム粒微量, しまり強。

2 暗褐色 ローム粒多, ローム小塊微量, しまりやや弱。

SG105SK-226

1 褐色 ローム粒やや多, ローム小塊少, やや軟。

SG105SK-228 (1層は欠番)

2 黒褐色 ローム塊粒含む, しまりやや有, 粘性なし。

3 褐色 SK-229より大粒のローム塊含む, しまりなし, 粘性なし。

SG105SK-230

1 黒褐色 しまりなし, 粘性やや有。

2 黄色 フットローム, しまりやや有, 粘性有。

SG105SK-231

1 黒褐色 しまりなし, 粘性やや有。

2 黄色 フットローム(塵土の可能性有), しまりやや有, 粘性有。

SG105SK-234

1 黒色 ローム粒薄多, 軟, しまり弱。

2 暗褐色 ローム小塊・粒多, やや軟。

3 暗褐色 ローム小塊・粒多, やや軟。

4 黄褐色 ローム塊(径3~5cm)混入, しまり有, 粘性有。

SG105SK-238

1 暗褐色 微細なローム混入, しまりやや有, 粘性有。

2 暗褐色 腐敗土より若干混入, しまりやや有, 粘性有。

3 暗褐色 しまり大きくより大きなローム混入, しまりやや有, 粘性有。

4 黄褐色 ローム塊(径3~5cm)混入, しまり有, 粘性有。

SG105SK-239

1 暗褐色 塵土のフットロームと2の混合土, しまりやや有, 粘性有。

2 暗褐色 腐敗土, ロームの混入なし, しまりなし, 粘性なし。

SG105SK-241

1 白色 フットローム粒・白色粒多, 炭化物少, 軟。

SG105SK-242 (1~3層はP-246のみ有)

4 暗褐色 フットローム粒多, 軟。

5 暗褐色 下部にフットローム(径1cm)少, しまりやや有。

6 暗褐色 フットローム塊(径3~5cm)粒多, 今市粘土粒(径0.5mm)少, やや軟, 粘性有。

SG105SK-243

1 黒褐色 ローム粒薄少量, 濃い暗褐色粘質土上鉄分をやや多く含む, しまりやや有, 粘性強。

SG105SK-253

1 暗褐色 ローム小塊・粒微量, 今市粘土粒粒微量, しまり強。

2 暗褐色 ローム小塊・粒少, 炭化物微量, 今市粘土粒粒微量, しまり強。

3 暗褐色 ローム粒多, ローム小塊少, ローム中塊微量, しまりやや有。

4 黄褐色 ローム粒多, 今市粘土粒粒微量, しまりやや有。

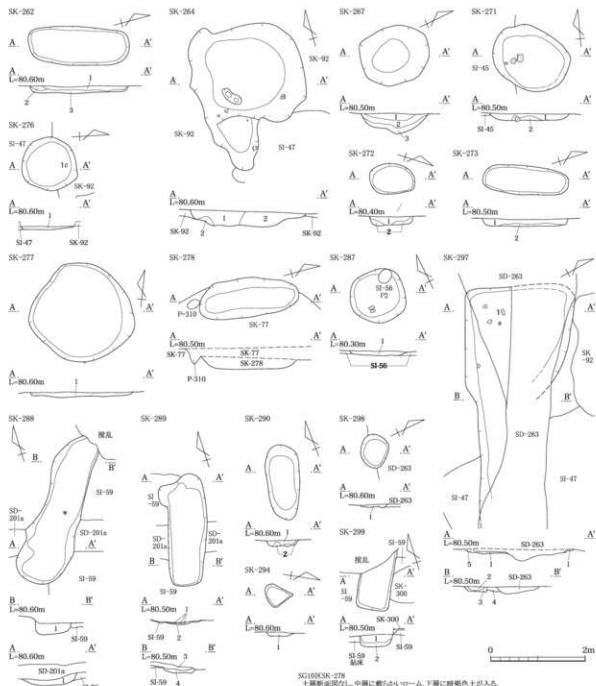
SG105SK-254

1 黒褐色 ローム小塊・粒少, 赤色塵土粒細少, やや軟。

2 褐色 ローム小塊・粒多, やや軟。

第230図 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑(2) 遺構

第5章 権現山遺跡 SG10区



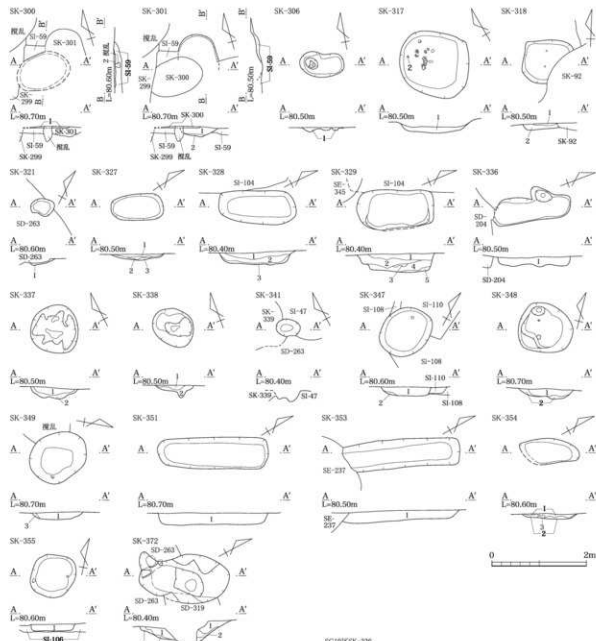
- SG10SK-262
 1 暗褐色 ローム小塊・粒少量, しまりや中。
 2 暗黄褐色 ローム小塊多, ローム小塊少, ローム中, 今市軽石・粘化物少量, しまりや中。
 3 黄褐色 ローム塊・粒多, 今市軽石・粘化物少量, しまりや中。
- SG10SK-264
 1 黒褐色 ローム小塊・粒少量, やや軟。
 2 暗黄褐色 ローム大塊・塊・小塊多, ローム粒やや少, やや軟。
- SG10SK-267
 1 暗褐色 ローム小塊・粒少量, 今市軽石・粘化物少量, しまりや中。
 2 暗褐色 ローム小塊少, ローム小塊・粒化物少量, しまりや中。
 3 暗黄褐色 ローム小塊・粒多, ローム中塊少量, しまりや中。
- SG10SK-271
 1 暗褐色 ローム粒少, やや硬くしまる。
 2 暗褐色 ローム塊・小塊やや少, 粘性強, 非常に硬くしまる。
- SG10SK-272
 1 暗褐色 ローム小塊・粒少量, 今市軽石・粘化物少量, しまりや中。
 2 暗褐色 ローム塊・粒多, しまりや中。
- SG10SK-273
 1 褐色 ローム小塊少, ローム粒少量, 今市軽石・粘化物少量, しまりや中。
 2 暗褐色 ローム小塊・粒少, しまりや中。
- SG10SK-276
 1 黒褐色 土層断面の浮遊状に認められ, しまり強, 粘性有。
 2 暗褐色 ローム小塊・粒やや多, しまりや中。

- SG10SK-278
 土層断面認められ, 中層に数分4ローム, 下層に暗褐色土が入る。
- SG10SK-287
 1 褐色 ローム小塊・粒少, ローム中塊少量, しまり強。
- SG10SK-288
 1 暗褐色 5cm程度のローム塊・ローム粒・3cmほどの黒色土層の混入土, しまりなし, 粘性有。
- SG10SK-289
 1 黒色 ローム土層上粒が混入し, しまりなし, 粘性有。
 2 暗黄褐色 畑山土層褐色土が混入し, しまりなし, 粘性有。
 3 暗褐色 ローム塊・粒少, ローム粒を含有した, しまりや中, 粘性有。
 4 黒褐色 暗褐色土層土の混入土, ローム粒粒を含む。
- SG10SK-290
 1 暗褐色 ローム粒少, しまりや中, 粘性なし。
 2 暗黄褐色 ローム土との混合層, しまりなし, 粘性有。
- SG10SK-294
 1 暗褐色 上面に粘土・炭化物少, フタローム粒・白色粒少, しまりなし。
- SG10SK-297
 1 暗黄褐色 フタローム粒多, 白色粒少, しまりなし。
 2 暗褐色 フタローム粒(径1cm以下)少, 硬。
 3 暗黄褐色 フタローム塊(径1~2cm)やや多, 硬。
 4 黄褐色 フタローム・炭化物より成る。
 5 暗褐色 フタローム塊(径1cm)白色粒少量, しまりなし。
- SG10SK-298
 1 暗褐色 フタローム粒・白色粒・今市軽石少量。
- SG10SK-299
 1 暗褐色 ローム層混入, 粘土層若干, しまりなし, 粘性有。
 2 暗褐色 ローム粒粒と黒色土層が混入し, しまりや中, 粘性有。

第231図 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑(3) 遺構

SK-230	18.0-18.0	円形	垂直なし	1.04	1.02	0.22		自然埋没状
古墳時代(中層)の土師器2片と縄文時代の須石1点があり、段入と見られる。								
SK-231	18.5-17.5	楕円形	垂直なし	1.10	0.78	0.12	N-32°E	
南半は地盤より掘り出される。古墳後期のSI-32に近接するが、垂直はしない。土師器・漆・釉の小破片があるが、SK-231に伴うとは断定できない。								
SK-234	17.5-17.0	円形	垂直なし	1.26	0.25	0.16		自然埋没状
甕土が散らかつて、かなり新しい時期の可能性もある。古墳時代と平安時代の土師器小破片が少量あり、古墳中期のSK-230や平安時代のSK-233から段入した可能性がある。								
SK-238	18.5-17.0	円形	垂直なし	0.94	0.88	0.22		自然埋没状?
遺物は丸い棒状の土師器(径15.4×7.6×7.4cm, 1.26kg)が1点出土した。								
SK-239	18.5-17.0	円形	垂直なし	0.73	0.70	0.19		自然埋没状?
小穴な円形で北半はピット状に深くなる部分あり、縄文時代の滑石が1点段入。								
SK-241	20.0-17.0	横長方形	SI-49より新	SK-232と垂直	1.53	0.66	0.24	N-32°E 単層 白化粧あり
古墳中期のSI-49を切る。中層のSK-232と垂直するが、斜目不明。遺物なし。								
SK-242	20.0-17.0	不整形	SI-49→SK-242→P-245-246	1.62	1.20	0.62	N-54°W	自然埋没状 白化粧あり
古墳中期のSI-49を切る。時期不明のP-245-246に切られる。底面が傾く。土師器・漆・炭破片が少量あるが、SI-49から段入した可能性が高い。遺物はP-246に埋入したのかもかもしれない。								
SK-243	20.0-17.5	不整形	SK-48→SI-45→SK-243	2.65	1.13	0.13	N-47°W	単層
古墳後期のSI-45、古墳中期のSI-48を切る。甕土が散らかつて、かなり新しい時期の可能性もある。土師器少量と須石磨盤3片があり、SI-45-48から段入した可能性が高い。使用・加工・焼結跡のない「自然河原石17点出土」。								
SK-253	20.0-18.5-20.0-19.0	楕円形	SK-276内→SK-77→SK-253	2.15	1.56	2.29	N-52°W	自然埋没状
時期不明のSK-77を切る。遺物は少量の土師器片でSK-77-253のどちらから出土したの不明。SK-77の遺物として土師器杯片が出土した。								
SK-254	20.0-17.0	円形	SK-46より新	2.32	1.88	0.16	N-60°E	甕土粒少量あり
古墳中期のSK-46を切る。円形でほぼ垂直。古墳時代(中層)土坑と推定される。古墳中期と見られる土師器・高杯・垂磨盤が中々多く、須石第二層目も含む。平安時代のSK-233と同一層目の底面は小破片1片あり、中～近世の可能性がある土師器小(かわらけ)も1片あり。								
SK-262	20.0-18.5-20.5-18.5	長方形	垂直なし	2.13	0.82	0.18	N-20°E	自然埋没状
浅い土坑。イモ六(近代以降の農業関連土坑)のようにも見え。遺物なし。								
SK-264	19.5-17.5	不整形	SK-47/SK-92より新	3.16	2.28	0.37	N-40°W	人為埋没状
古墳後期のSI-47、中層のSK-92を切る。調査時の所見では、ローム城が部分入する不整形土坑で、周辺の可能性がある。古墳中～後期の土師器・高破片と中世の土師器土甕(かわらけ)1点が少量あり、古墳後期のSI-47や中世のSK-92からの段入と見られる。								
SK-267	19.0-18.0	楕円形	垂直なし	1.52	1.26	0.44	N-42°W	自然埋没状 炭灰あり
古墳中期が主体と見られる土師器杯・垂・磨盤の小破片と縄文時代の須石があるが、この土坑に伴うものではないと思われる。								
SK-271	20.0-18.0	楕円形	SK-45より新	1.65	1.38	0.14	N-65°W	単層
古墳後期のSI-45を切る。周辺にある時期不明のSK-317-276-277や、古墳時代のSK-275に類似する。古墳中～後期の土師器小片があり、SI-45から段入したと思われる。								
SK-272	19.5-18.0	楕円形	垂直なし	1.00	0.68	0.21	N-12°E	自然埋没状
縄文期末～中世初期(総観測)の深黒炭部が1片あり、甕土のしまりが強い。縄文時代の土坑の可能性もある。								
SK-273	19.5-18.5	楕円形	垂直なし	1.83	0.62	0.15	N-30°W	炭灰あり
中～近世のSD-204と平行するで同時期の可能性もある。土師器小片3点があり、段入と見られる。								
SK-276	19.5-17.5	円形	SK-47→SK-276→SK-92	1.23	1.10	0.18		単層
古墳後期以降、中世以前の土坑。中世のSK-92に切られる。調査時の所見では古墳後期のSI-47の廃棄層で、SK-271の須石を穿る。古墳後期の土師器が少量あり、SI-47からの段入が多いと見られる。								
SK-277	20.0-18.0	円形	垂直なし	2.24	2.09	0.12		単層
SK-271の須石を穿る。古墳中～後期の土師器小片が少量あり、段入と見られる。								
SK-278	20.0-18.5	長方形	SK-276内→SK-77→SK-253	2.08	0.84	0.28	N-10°E	
土師器面はないが、中に散らかるローム。平部に短柱土がある。時期不明のSK-77の底面を確認した遺構なので、SK-77に切られる可能性がある。遺物なし。								
SK-287	19.5-19.0	円形	SK-56より新	1.23	1.17	0.11		単層
古墳中期のSI-56を切る。壁の付着した自然礫と古墳中期の土師器片5片あり、SI-56から段入したと見られる。								
SK-288	20.5-18.5	楕円形	SI-59→SK-288→SD-201a	残3.29	0.82	0.40	N-46°E	単層
古墳後期のSI-59を切る。近世のSD-201aに切られる。調査時の所見では、近代以降の農業関連土坑(イモ六)かとされている。SI-59からの段入と見られる土師器小片が少量ある。								
SK-289	20.5-19.0	楕円形	SI-59→SK-289→SD-201a	2.30	0.83	0.16	N-18°E	自然埋没状 甕土粒あり
近世のSD-201aに切られる。古墳後期のSI-59と近接し、おそらくSI-59を切る。土層が西側へ傾く(断面図の3層)。調査時の所見では、近代以降の農業関連土坑(イモ六)ではないらしい。時期不明のSK-290と同層部と想定される。古墳時代の土師器片少量・炭磨盤1片と平安時代の須石磨盤1個も1片出土。								
SK-290	20.5-19.0	楕円形	垂直なし	1.62	0.69	0.15	N-18°E	人為埋没状
時期不明のSK-289と同層部かと想定される。調査時の所見によると、堀根状に切られる。土師器小片3点出土。								
SK-294	22.0-15.5	不整形三角	垂直なし	0.62	0.46	0.10		単層 白化粧と甕土・炭あり
甕土に炭土を含む。遺物なし。								
SK-297	19.5-17.5	不整形長方形	SK-47内/SK-92→SK-297→SD-263	5.16	1.98	0.13	N-51°W	白化粧あり
中～近世のSD-263より古い。SD-263の一部(掘り直された土層)ではないかと見られる。古墳後期のSI-47と中世のSK-92を切るかと見られるが、土層断面図が不明確。土師器小片と縄文時代の炭石・須石がある。								
SK-298	19.5-17.5	円形	SK-263より新	0.74	0.60	0.08		単層 白化粧あり
中～近世のSD-263を切る。遺物なし。								
SK-299	19.5-18.5	長方形	SK-59より新	0.94	0.70	0.39	N-28°E	自然埋没状 炭土粒あり
古墳後期のSI-59を切る。SK-300との前後関係は不明。調査時の所見ではイモ六(近代以降の農業関連土坑)と考えられている。遺物なし。								
SK-300	20.5-18.5-20.5-19.0	楕円形	SI-59→SK-301→SK-300	残1.17	残0.77	0.06	N-70°E	単層
古墳後期のSI-59を切り、SI-59甕土を切る。時期不明のSK-301を切る。SK-299との前後関係は不明。土師器片が1片あり、SI-59からの段入かと見られる。								
SK-301	20.5-19.0	楕円形	SI-59→SK-301→SK-300	残0.88	0.86	0.26		甕土単層あり
古墳中期のSI-59や下を切る。時期不明のSK-300に切られる。土師器杯・須片があり、SI-59からの段入かと見られる。								
SK-306	20.0-19.5	楕円形	垂直なし	0.95	0.48	0.10	N-82°W	単層
周辺に関連しそうな土坑が見られない。古墳中期のSD-304bと甕土が類似するが、甕土のしまりは弱い。遺物なし。								
SK-317	19.5-18.0	円形	垂直なし	1.60	1.52	0.33		単層
古墳時代土坑の可能性あり。周辺にある時期不明のSK-271-276-277や古墳時代のSK-275と類似する。古墳中～後期の土師器・須石部小片少量、磨盤磨石片1点。自然埋没11点出土。								
SK-318	20.0-17.5	不整形円形	SK-46-92より古	1.20	0.70	0.15		自然埋没状
古墳時代土坑の可能性あり。古墳中期のSK-46を掘って確認したので、古墳中期以前と考えられるが、土層断面図はない。中世のSK-92に切られる。土師器面は楕円小片少量あり。								
SK-321	19.5-17.5	楕円形	SK-263より古?	0.52	0.37	0.14	N-60°E	単層
中～近世のSD-263内に入り、調査時の所見によるとSD-263に切られる可能性がある。遺物なし。								
SK-327	20.0-18.5	楕円形	垂直なし	1.00	0.56	0.15	N-33°E	自然埋没状
調査時の所見では、SK-328-329とともに近代以降の農業関連土坑(イモ六)の可能性もある。近世のSD-204と平行するで同時期の可能性もある。遺物なし。								
SK-328	19.5-18.5	楕円形	SK-104より新	1.62	0.70	0.32	N-26°E	自然埋没状 炭灰あり
土師器面はないが、調査時の所見では古墳中期のSI-104を切る。近世のSD-204と平行するで同時期の可能性もある。SI-104などからの段入かと見られる土師器2片あり、SK-327の須石参照。								

第5章 権現山遺跡 SG10区



- SG10SK-300
 1 黒褐色 微細の黒色土塊多,しまり有,粘性なし。
 2 黒褐色 黄土状のローム塊粒・微細な石灰が混入,しまり有,粘性なし。
- SG10SK-301
 1 黒褐色 ローム塊粒・黒色土が混入,脆土散り有。
 2 黄褐色 地山と土層との混合土,しまりなし,粘性有。
- SG10SK-306
 1 黒褐色 SK-306の穴縁と類似,ローム塊粒多,しまりなし,粘性なし。
- SG10SK-317
 1 暗褐色 ローム塊(径3cm)少,軟。
- SG10SK-318
 1 黒褐色 ローム粒少,やや硬。
 2 黄褐色 黒褐色土多,ローム小塊・粒やや多,やや硬。
- SG10SK-321
 1 黒褐色 ローム小塊・粒やや多,硬(しまり),粘性強。
- SG10SK-327
 1 暗褐色 ローム小塊・粒多量,今市層石層粒・炭化物層粒多,しまり強。
 2 褐色 ローム粒少,ローム小塊少量,今市層石層粒・炭化物層粒多,しまり強。
 3 黄褐色 ローム小塊・粒多,ローム中塊少量,今市層石層粒・炭化物層粒多,しまり強。
- SG10SK-328
 1 暗褐色 ローム小塊・粒多量,今市層石層粒・炭化物層粒多,しまり強。
 2 褐色 ローム粒少,ローム小塊少,ローム中塊少量,今市層石層粒・炭化物層粒多,しまり強。
 3 黄褐色 ローム小塊・粒多,ローム中塊多,炭化物・今市層石層粒・炭化物層粒多,しまり強。
 4 褐色 ローム小塊・ローム粒少,しまり強。

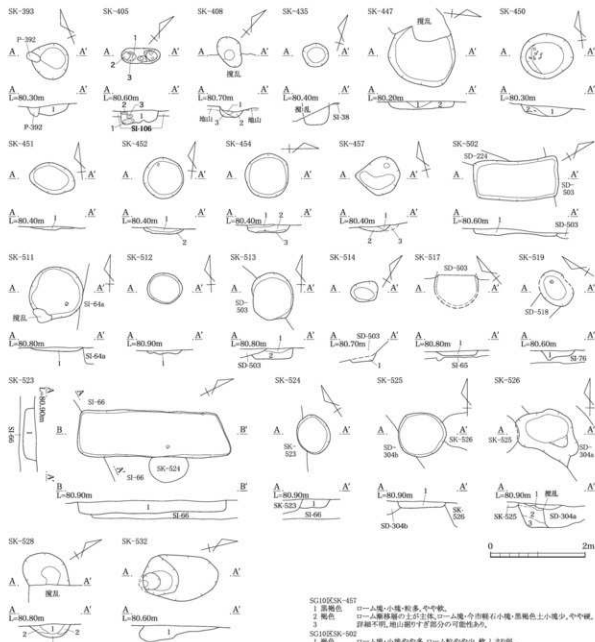
- SG10SK-336
 1 黒褐色 ローム塊粒多,ローム塊(径2~3cm)少,しまりやや有,粘性なし。
 2 黄褐色 ローム塊粒多,しまりやや有,粘性なし。
- SG10SK-337
 1 暗褐色 ローム塊粒多,しまりやや有,粘性なし。
 2 黄褐色 ローム塊(径2~3cm)が混入,しまりやや有,粘性有,脆りすの可能性がある。
- SG10SK-338
 1 暗褐色 ローム塊粒少,しまり弱,粘性有。
 2 黄褐色 1層とロームの混合土,しまり弱,粘性有。
- SG10SK-347
 1 黒褐色 ロームと黒色土の微粒少,しまり強,粘性なし。
 2 黄褐色 ロームと土層との混合土,しまりやや有,粘性やや有。
- SG10SK-348
 1 黒褐色 ロームと黒色土の微粒少,しまり強,粘性なし。
 2 黄褐色 ロームが大部分が,が硬(しまり),粘性なし。
- SG10SK-349 (正確は欠番)
 1 暗褐色 ローム塊粒少,しまりやや有,粘性なし。
 2 黄褐色 ロームが大部分が,が硬(しまり),粘性なし。
 3 黄褐色 1層とロームの混合土,しまり強,粘性有。
- SG10SK-351
 1 暗褐色 ロームと黒色土の微粒若干,しまりやや有,粘性なし。
- SG10SK-353
 1 暗褐色 ローム塊粒を含む,しまり強,粘性やや有。
- SG10SK-354
 1 暗褐色 2層と黒色土が大量混入,しまりやや有,粘性なし。
 2 暗褐色 ロームが若干混入し,若干硬(しまり),しまりやや有,粘性有。
 3 黄褐色 2層のロームが大量混入したため,しまりやや有,粘性有。
- SG10SK-355
 1 黒褐色 ローム塊粒・黒色土が混入,しまりやや有,粘性有。
 2 暗褐色 アフロローム塊(径2cm)やや多,軟,しまりなし。
 3 暗褐色 アフロローム塊(径2cm)多,軟。
 4 暗褐色 アフロローム粒少,軟,しまりなし。

第 232 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (4) 遺構

第30節 時期不明の土坑

SK-329	19.5-18.5	隅丸方形	SK-104より新	1.62	0.83	0.42	N28°E	自然埋没	痕跡あり
土坑前面傾斜がないが、SK-104の覆土から同一棟土壁じり土と土師器片が混入したと見られるので、古墳中期のSK-104を切るかと考えられる。近世のSD-204と平行するので同時期の可能性もある。SK-327の項も参照。									
SK-330	20.5-19.5	円形	SD-204と重なり	1.70	0.40	0.22	N12°E	単層	
南端が近世のSD-204と重なるかもしれないが不明確。調査時の所見では、近代以降の農業関連土坑(イモ穴)と考えられている。古墳中期土師の土師器小破片少量出土。									
SK-337	20.5-19.5	円形	重なりなし	1.06	1.03	0.26			下層は地中の可能性もある
底面に出るが、遺物なし。									
SK-338	20.5-19.0	不整形	重なりなし	0.92	0.77	0.27			自然埋没
底面に凹みあり。土師器赤雲梨が1片あるが、伴うものとは見られない。									
SK-341	19.5-17.5	楕円形	SK-339→SK-47→SK-341→SD-263	0.52	0.36	0.24	N5°W	土層断面の記録なし	
古墳前期のSK-47後面を確認したので、SK-47より新しいと見られる。古墳時代のSK-339を切る。中→近世のSD-263に切られると見られる。縄文時代の灰土層片1片出土。									
SK-347	20.5-18.0	円形	SK-108→SK-110→SK-347	1.20	0.98	0.18			
古墳中期のSK-108と古墳前期のSK-110を切る。土師器片が少量あり。SK-108-110などからの混入と見られる。									
SK-348	20.5-18.5-21.0-18.5	楕円形	重なりなし	1.19	1.12	0.24	N55°W	自然埋没	
時期不明のSK-349と近接し、近い時期の可能性もある。底面が北西部で約15cm低くビット状に凹む。土師器赤雲梨の土師器片と自然埋土1点出土。									
SK-349	20.5-18.5	楕円形	重なりなし	1.20	1.02	0.18	N5°W		
時期不明のSK-348と近接し、近い時期の可能性もある。土師器小破片が少量あるが、伴うものとは見られない。									
SK-351	21.0-18.5	長方形	重なりなし	2.33	0.66	0.27	N31°E	単層(人為埋没?)	
近代以降の農業関連土坑(イモ穴)に類似する。土師器赤雲梨の底面1片が底面から出土。									
SK-353	18.5-17.0	長方形	SK-237より古	2.50	0.60	0.28	N22°W	単層(人為埋没?)	
中世のSK-237に切られるので、中世以降。時期不明のSK-354と土師を隔てて並ぶので、近い時期の土坑かと推測される。古墳中期以降の土師器小破片が30片あり。周辺からの混入と見られる。									
SK-354	18.5-17.0-19.0-17.5	隅丸長方形	重なりなし	1.20	0.55	0.12	N28°W	人為埋没	
時期不明のSK-353と土師を隔てて並ぶので、近い時期の土坑かと推測される。遺物なし。									
SK-355	20.5-17.5	円形	SK-106より新	1.04	0.93	0.17			単層
古墳中期のSK-106を切るので古墳中期より新しい。土師器片・高杯・壺・餅の小破片が22片あり。大半はSK-106からの混入と見られる。									
SK-372	19.0-18.0	楕円形	SD-263-319と重なり	1.95	1.04	0.55	N30°E	自然埋没	
古墳時代のSK-319および中→近世のSD-263と重なるが新旧不明で、覆土が軟らかいSK-372が新しい可能性もある。古墳時代のSK-34の北側に隣接するビットと続くようにも見え、遺物なし。									
SK-393	20.0-18.5	円形	F-392より古	0.83	0.76	0.26			単層
覆土(SK-308北側入り込み)に上面が切られる。時期不明のF-392に切られる。									
SK-405	20.5-18.0	楕円形	SK-106より新	0.82	0.32	0.32	N5°E		
古墳中期のSK-106を切るので、古墳中期より新しい。SG10区中央部の穴状土坑群と関連する土坑かもしれない。壁や高脚のある礎が3点出土。									
SK-408	21.0-18.5	楕円形	重なりなし	0.70	0.48	0.17	N7°W		
覆土が古く見えるので、古代以前の可能性なし。南面の土層を覆層状に切られる。遺物なし。									
SK-435	19.5-16.5	円形	SK-38と重なり	0.55	0.50	0.45			土層断面の記録なし
古墳中期のSK-38内にいるが、土層を穿たれているので新旧不明。土師器が3片あり。SK-38や古墳時代のSK-439からの混入かと推測される。調査時の所見では、SK-435と439がSK-38の埋積の可能性も考えられる。									
SK-447	16.5-18.0	不整形	重なりなし	1.47	1.40	0.18			自然埋没 テラコッタと土師器あり
西側が木の根などによる崩壊を受ける。土面に暗灰色土塊(Acacia)灰方があるので、古墳時代の土坑の可能性あり。古墳中期の土師器5片と縄文土層1点出土。									
SK-450	17.5-18.0	楕円形	重なりなし	1.12	0.90	0.28	N78°E	自然埋没	土師器あり
古墳時代の土坑の可能性あり。浅い土坑。西中部のヒート下に古墳時代中→後期の土師器が11片まとまっているが、混入の可能性もある。									
SK-451	17.5-17.5	楕円形	重なりなし	0.98	0.64	0.08	N8°W	単層	白色あり
土面に白褐色(Acacia)灰方が多少見られるので、古墳時代の土坑の可能性あり。遺物なし。									
SK-452	17.5-17.0-17.5-18.0	円形	重なりなし	0.88	0.85	0.15			自然埋没
白色(テラコッタ)を少量含む。古墳時代の土坑の可能性あり。古墳中期(白)の土師器4片出土。									
SK-454	17.0-17.5	円形	重なりなし	0.97	0.93	0.18			人為埋没?
古墳時代のSK-2の北側に近接。浅い平底の土坑。土師器片1点出土。									
SK-457	20.5-18.5	不整形	重なりなし	0.95	0.80	0.20	N74°W		
底面の凹みや平や斜。土師器赤雲梨の痕跡1片出土。									
SK-502	21.5-18.0	長方形	SD-224+503より新	1.80	0.84	0.15	N31°W	単層	
近代以降の農業関連土坑(イモ穴)。時期不明のSD-224と近世のSD-503を切る。遺物なし。									
SK-511	22.0-17.5	円形	SK-64より新	1.18	1.13	0.10			
古墳時代のSK-64を切る。時期不明のSK-512-517-524と覆土や形状が似る。時期不明のSK-526-537とも類似する。一部ビット状の混入あり。土師器赤雲梨1片が混入。									
SK-512	22.0-17.5	円形	重なりなし	0.75	0.67	0.09			単層
SK-511の項を参照。遺物なし。									
SK-513	22.0-17.5	円形	SD-503より古	1.03	0.93	0.24			
近世のSD-503に切られる。覆土はSK-511と似るが、それよりも少し軟らかいので同時期ではないと見られる。土師器小破片7点あり。SK-64などからの混入と見られる。									
SK-514	22.0-17.5	楕円形	SD-503より古?	0.60	0.42	0.13	N33°E	単層	
近世のSD-503の底面を確認したので、それより古い可能性が高い。遺物なし。									
SK-517	22.0-17.5	円形	SK-65-SD-503(?)より新	0.93	0.76	0.10			単層
古墳前期のSK-65を切る。近世のSD-503を切るかもしれないが不明確。時期不明のSK-511-512-524-525と覆土や形状が似るので、同時期の可能性もある。古墳前期の土師器があり、SK-65からの混入と見られる。									
SK-519	21.5-19.0	楕円形	SK-76-SD-518より新	0.83	0.58	0.22	N21°E	単層	
古墳中期のSK-76と時期不明のSD-518を切る。灰土層の埋土1点出土。									
SK-523	22.5-17.5	長方形	SK-66→SK-524→SK-523	3.14	0.98	0.20	N25°E	人為埋没	白色あり
古墳時代のSK-66と時期不明のSK-524を切る。底面が平坦。かなり新しい時代の土と見られる。崩壊の可能性もあるが埋土が硬いので遺構として後。SK-66からの混入と見られる土師器少量あり。									
SK-524	22.5-17.5	円形	SK-66→SK-524→SK-523	0.84	0.70	0.20			単層
古墳中期のSK-66を切る。時期不明のSK-523に切られる。底面が平坦。SK-517の項を参照。遺物なし。									
SK-525	22.0-17.5-22.5-17.5	円形	SD-304b-SK-526より新	1.02	0.97	0.15			単層
時期不明のSK-526。古墳時代のSD-304bを切る。浅く底面が平坦。SK-517の項を参照。遺物なし。									
SK-526	22.5-18.0	長方形	SD-304a-SK-525より古	1.42	0.90	0.52	N7°W	自然埋没	今軒石痕あり
古墳中期以前のSK-526。時期を限定できない。時期不明のSK-525と古墳中期のSD-304aと見られる。やや深い。遺物なし。									
SK-528	22.5-19.5	楕円形?	現	1.08	0.70	0.29	N68°E	自然埋没	礎土あり
旧番号SK-531として近代以降の農業関連土坑(イモ穴)に重なり切られる。土師器赤雲梨1片があり、混入の可能性もある。									
SK-532	21.5-19.0	楕円形	重なりなし	1.62	1.00	0.36	N55°W	単層	
縄文後期土坑(堀内1式)の小穴が1片だけ出土した。縄文時代の土坑かもしれないが判定はできない。一端が極端に深い部分は埋土が厚く、深い部分はロームに近い色調。									

第5章 権現山遺跡 SG10区



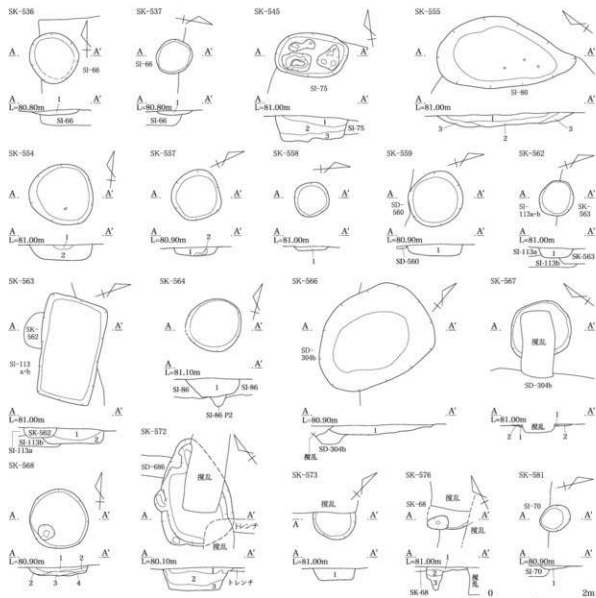
- SG10ESK-393
1 褐色 フタローム粒・白色粒多, 今市粒少量, しまり有。
SG10ESK-405
1 暗褐色 ローム(径3~5cm)・黒色土混入, しまりやや強, 粘性やや有。
SG10ESK-428
1 暗黄褐色 ローム粒・黄褐色の暗褐色土塊やや多, やや軟。
2 黒褐色 ローム粒・今市粒少量, やや軟。
3 暗褐色 ローム小塊やや少, 軟。
SG10ESK-435
埋土の構造は不明。
SG10ESK-447
1 黒褐色 ローム塊・ローム粒・粘り状土小塊(フツツ)の稀少, 塊土粒若干, やや硬。
2 黒褐色 ローム塊・ローム粒・粘り状土小塊, やや硬。
SG10ESK-450
1 黒褐色 ローム小塊・粘り状土多, 塊土粒稀少, やや硬。
2 暗褐色 ローム小塊・粘り状土多, ローム塊少, やや硬。
SG10ESK-451
1 黒褐色 粘り土, 堆山暗褐色土塊やや多, ローム小塊・粘り状土(フツツ)稀少, 硬。
SG10ESK-452
1 黒褐色 粘り土
2 暗褐色 ローム小塊・粘り状土少, 硬。
SG10ESK-454
1 褐色 ローム粒多, ローム小塊やや多, やや硬。
2 暗褐色 ローム粒やや多, ローム小塊少, やや硬。
3 暗黄褐色 フタローム小塊主体で暗褐色土少量は混在, やや軟。

- SG10ESK-457
1 黒褐色 ローム塊・小塊・粘り多, やや軟。
2 褐色 ローム小塊・粘り多, ローム塊・今市粒石小塊・黒褐色土小塊少, やや硬。
3 詳細不明, 堆山面より上部部分の可能性あり。
SG10ESK-502
1 褐色 ローム塊・小塊やや多, ローム粒やや少, 軟, しまり弱。
SG10ESK-511
1 黒褐色 暗褐色土塊多, ローム塊(1~3cm)少, しまり強, 粘性やや強。
SG10ESK-512
1 暗褐色 暗褐色土塊多, しまりやや強, 粘性やや強。
SG10ESK-513
1 黒褐色 ローム小塊・粘り少, 軟。
2 黒褐色 ローム塊・小塊やや多, ローム粒少, やや軟。
SG10ESK-514
1 暗黄褐色 ローム小塊・粘り多, やや硬, しまり強。
SG10ESK-517
1 黒褐色 ローム粒やや多, ローム小塊少, 軟。
SG10ESK-519
1 黒色 ローム塊粒少, 火山灰粒極微量, 暗褐色の塊も混入, しまりやや強, 粘性有。
SG10ESK-523
1 黒褐色 ローム小塊・粘りやや少, 白色粒(フツツ)稀少, やや軟, しまりやや強。
SG10ESK-524
1 暗褐色 褐色土塊やや多, ローム小塊稀少, やや硬。
SG10ESK-525
1 黒褐色 ローム粒少, ローム小塊稀少, やや軟。
SG10ESK-526
1 褐色 ローム粒やや多, やや硬。
2 暗黄褐色 暗褐色土塊やや多, ローム粒少, 今市粒石(径3cm)稀少, やや硬。
3 暗黄褐色 ローム塊主体, 暗褐色土少, やや硬。
SG10ESK-528
1 褐色 ローム粒やや多, やや硬。
2 暗黄褐色 暗褐色土塊やや多, ローム粒少, 今市粒石(径3cm)稀少, やや硬。
3 暗黄褐色 ローム塊主体, 暗褐色土少, やや硬。
SG10ESK-529
1 暗褐色 ローム小塊・粘り・小塊極微量, しまり強。
2 褐色 ローム粒少, ローム小塊微量, 粘り小塊極微量, しまりやや強。
3 暗黄褐色 ローム粒多, ローム小塊少, しまりやや強。
SG10ESK-532
1 暗褐色 暗褐色土とローム粒のしまり混在, しまりやや強, 粘性有。

第 233 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (5) 遺構

SK-536	22.5-17.0	円形	546より新	1.08	1.04	0.14	単層
古墳中期のSK-66を切る。時期不明のSK-511などと似た土坑。古墳時代(中期?)の上層部が5片あり、SK-68からの遺土と見られる。							
SK-537	22.5-17.5	円形	546より新	0.80	0.72	0.13	単層
古墳中期のSK-66を切る。時期不明のSK-511などと似た土坑。遺物なし。							
SK-545	23.0-19.0	楕円長方形	547より新	1.52	0.93	0.56	N 82° W 横土・縦溝あり
古墳中期のSK-75を切る。断面に凹凸が多い。上層部10片が出し上し。大半はSK-75からの遺土と見られる。							
SK-554	24.0-19.0	円形	縦溝なし	1.40	1.28	0.35	自然埋没状 横土・縦溝あり
古墳中期のSK-564と類似。古墳時代の円形土坑築成地帯にあり、古墳時代の可能性もあるが、縦溝が深い。古墳埋没前の土師器片と縄文土器の片が1片出上し。							
SK-555	24.0-18.5-24.0-19.0	楕円形	548より新	2.95	1.50	0.33	N 52° W 自然埋没状 縦穴あり
古墳中期のSK-80を切る。上層部4片が出し上し。SK-80からの遺土と見られる。							
SK-557	22.5-18.5	円形	縦溝なし	1.10	1.06	0.20	大平が単層
時期不明のSK-558-559と覆土が似る。上層部4片が出し上し。SK-559と同一個体と見られる1片を含む。遺物は数人と見られる。							
SK-558	22.5-18.5	円形	縦溝なし	0.68	0.76	0.10	単層
時期不明のSK-557-559と覆土が似る。上層部1片が出し上し。遺土と見られる。							
SK-559	22.5-18.5	円形	縦溝なし	1.23	1.12	0.25	単層
楕円形のSK-557-558と覆土が似る。時期不明のSK-560と能するが重なりはしない。上層部3片が出し上し。SK-557と同一個体と見られる1片を含む。遺物は数人と見られる。							
SK-562	22.5-19.0	楕円形	SK-113 → SK-563 → SK-562	0.81	0.70	0.23	N 54° W 単層
古墳中期のSK-113a-bと時期不明のSK-563を切る。上層部3片が出し上し。SK-113a-bから隣接するSK-74からの遺土と見られる。							
SK-563	22.5-19.0-23.0-19.0	長方形	SK-113 → SK-563 → SK-562	2.18	1.26	0.35	N 60° W 自然埋没状? 横土・縦溝あり
古墳中期のSK-113a-bに似る。時期不明のSK-562と似るが、上層が不明。P-701がSK-113bを切るならは重なり、P-701がSK-113aに切られるならは重ならないということになる。遺物の記録では「割取品が出た」とされるが確認できない。上層部小鏡片が2片、SK-113a-bからの遺土と見られる。							
SK-564	24.0-19.0	円形	548より新	1.21	1.12	0.41	単層
古墳中期のSK-86を切る。P-701より、SK-86を切る。遺物の状況では、時期不明のSK-554と似た土坑。古墳時代の円形土坑築成地帯にあり、古墳時代の可能性もあるが、縦溝が深い。上層部小鏡片が6片あり、SK-86からの遺土と見られる。							
SK-566	22.5-17.5	楕円形	SD-304a → SD-304b → SK-566	2.03	2.03	0.23	N 15° E 人為埋没
古墳中期のSD-304bを切る。古墳中期(内)の上層部5片と縄文土器1片出上し。上層部はSD-304bからの遺土と見られる。							
SK-567	23.0-17.5	円形	縦溝なし	1.38	0.30	0.07	自然埋没状?
近代以降の農業関連土坑(イモ穴)に中央を大きく切られる。上層部小鏡片が4点あるが、この土坑には伴わないと見られる。							
SK-568	22.5-17.5	円形	縦溝なし	1.32	1.25	0.24	人為埋没
SK-66よりやや傾斜を切る。遺物なし。							
SK-572	22.5-18.0	不整形	SD-686より新(白)	2.30	1.60	0.50	N 48° E
時期不明のSD-686を切る可能性が高い。近代以降の農業関連土坑(イモ穴)に切られる。遺物の記録では「磁石」が出たというところから近代の可能性もある。その他の遺物はない。							
SK-573	22.5-18.0	円形	縦溝なし	0.90	0.56	0.28	単層 人為埋没(内)
近代以降の農業関連土坑(イモ穴)に切られる。時期不明のSK-585-685と類似する。古墳中期(内)の上層部7片と磁土1点があるが、遺土と見られる。							
SK-576	23.0-17.5	楕円形	SK-68より新	1.02	0.41	0.50	N 70° W 人為埋没
径45cm × 28cmの円状の凹みを持つ土坑。時期不明のSK-68を切る。兼用を近代以降の農業関連土坑(イモ穴)に切られる。遺物なし。層上にロームが多いので埋没した可能性が高い。							
SK-581	23.0-18.0	楕円形	SK-70より新	0.66	0.55	0.10	N 2° E 単層
古墳中期のSK-70を切る。浅い楕円形土坑。遺物なし。							
SK-582	23.0-18.5	円形	SK-72より新	0.84	0.82	0.14	単層
古墳中期のSK-72層上中にあり、SK-72を切る。遺物なし。							
SK-583	23.0-18.5	円形	SK-72より新	0.93	0.90	0.11	単層
古墳中期のSK-72層上中にあり、SK-72を切る。遺物なし。							
SK-585	22.5-18.0-23.0-18.0	楕円形	縦溝なし	1.01	0.78	0.10	N 10° E 単層 人為埋没(内)
楕円形のSK-579-685と類似する。遺物なし。							
SK-592	23.0-18.0-23.0-18.5	楕円長方形	縦溝なし	2.22	1.52	0.19	N 44° E 単層
大きさに対して非常に浅い。上層部磁土が1片あるが、遺土と見られる。							
SK-595	22.5-19.0	円形	縦溝なし	0.98	0.92	0.13	単層 横土あり
時期不明のSK-596-597と類似。土師器磁土が2片あるが、両側の遺物などからの遺土と見られる。							
SK-596	22.5-19.0	円形	縦溝なし	1.06	1.00	0.12	単層 横土小鏡あり
時期不明のSK-595-597と類似。遺物なし。							
SK-597	22.5-19.0	楕円形	縦溝なし	0.83	0.74	0.21	N 76° W 単層 横土小鏡あり
時期不明のSK-595-596と類似。遺物なし。							
SK-604	23.5-18.5	円形	縦溝なし	1.36	1.20	0.08	N 73° W 単層
楕円形のSK-603の非直線状の凹み切る。近代以降の農業関連土坑(イモ穴)に切られる。時期不明のSK-605と類似する。浅い土坑。遺物なし。							
SK-605	23.5-18.5	円形	縦溝なし	1.20	1.18	0.15	単層
楕円形のSK-603と近接するもので、SK-603とは時期が異なるものと見られる。時期不明のSK-604と類似する。遺物なし。							
SK-606	23.5-18.5	楕円形	縦溝なし	0.93	0.45	0.10	N 43° E
時期不明のSK-603内にある浅い土坑。古墳中期後半の上層部小鏡片が1片あるが、遺土と見られる。							
SK-612	24.0-18.5	不整形(円形)	SD-503より新	1.72	1.25	0.26	N 37° E 自然埋没状 縦穴あり
近辺のSD-503を切るので近辺以降の土坑。傾斜の可能性もある。遺物なし。							
SK-613	23.5-19.0-23.5-19.5	楕円形	SK-81より新	1.24	0.99	0.12	N 31° W 単層 人為埋没(内) テフラあり
古墳中期のSK-81を切る。層上にローム塊を少量含む。時期不明のSK-614 ~ 616と類似し同時期か。古墳時代の土坑の可能性もある。遺物なし。							
SK-614	23.5-19.0	円形	縦溝なし	1.03	1.00	0.25	単層 人為埋没(内)
古墳時代の土坑の可能性もある。層上にローム塊を多く含む。SK-613の頃を参照。古墳中期(内)の上層部小鏡片10片と磁土器磁土1片出上し。磁土はSK-111等と同一個体。							
SK-615	23.5-19.0	円形	縦溝なし	0.88	0.80	0.09	単層
一辺傾斜あり。SK-613の頃を参照。古墳時代の土坑の可能性もある。遺物なし。							
SK-616	23.0-19.5	楕円形	縦溝なし	0.90	0.70	0.09	N 10° W 単層
層上の残りはわずかに、時期不明のSK-613 ~ 615と類似し同時期か。古墳時代の土坑の可能性もある。遺物なし。							
SK-619	22.5-18.5	楕円形	縦溝なし	1.04	0.86	0.12	N 50° W 単層
古墳中期のSK-73に近いが重なりはしない。遺物なし。							
SK-620	22.5-18.5	円形	縦溝なし	0.58	0.48	0.03	単層
径は小さいが、土坑周囲の地盤に土層傾斜が部分的に見られるため、本来は浅くてもっと大きいものだったと見られる。時期不明のP-617と層上が同様。遺物なし。							
SK-630	22.0-18.0	円形	縦溝なし	0.76	0.73	0.26	自然埋没状
遺古時の所見による。層上がやや傾斜している。層上より小さい土坑ではないかと考えられる。遺物なし。							
SK-631	22.5-18.5	長方形	縦溝なし	0.77	0.58	0.12	N 43° E 単層
遺古時の所見による。層上が傾斜している。中や新し土物類かと考えられる。遺物なし。							
SK-632	22.5-18.0	楕円形	縦溝なし	0.54	0.28	0.16	N 32° E 単層
層上がやや傾斜。遺物なし。							

第5章 権現山遺跡 SG10区



SG10SK-536

1 暗褐色 黒褐色土塊・ローム粒多、やや硬。

SG10SK-537

1 黒褐色 暗褐色土塊やや多、ローム粒少、やや軟。

SG10SK-545

1 黒色 ローム小塊・粒・粘土・粘土・粘質土、しまりやや強。
2 黒褐色 ローム小塊・粒・粘土・粘土・粘質土、しまりやや強。
3 暗褐色 ローム小塊・粒・粘土・粘土・粘質土、しまりやや強。

SG10SK-554

1 暗褐色 ソフトローム粒・炭化物粒多、粘土・粘土・粘質土、ややしまり有。
2 暗褐色 ソフトローム粒多、ソフトローム塊(径1~3cm)少、ややしまり有、粘性やや有。

SG10SK-555

1 暗褐色 ソフトローム粒・今市輝石粒少、ソフトローム塊(径1~3cm)・炭化物粒少量、硬。
2 暗褐色 ソフトローム粒・炭化物粒少量、硬。
3 暗褐色 ソフトローム粒多、ソフトローム塊(径1~3cm)少量、硬。

SG10SK-557

1 黒褐色 ロームあまり入らず暗褐色土と黒色土が混じり合った層に、しまりやや弱、粘性有。
2 黒色 ロームは粒状のみ、ややしまり有している、しまり強、粘性有。

SG10SK-558

1 黒褐色 SK-557の層と同じ。

SG10SK-559

1 黒褐色 SK-557の層と同じ、黒色土が少な。

SG10SK-562

1 黒褐色 ローム小塊・粘土・粘質土、しまり強。

SG10SK-563

1 黒褐色 ローム小塊・粘土・粘質土、しまり強。

SG10SK-564

2 黒褐色 ローム小塊・粘土・粘質土、しまりやや強。

SG10SK-564

1 暗褐色 ソフトローム塊(径1~10cm)粒多、今市輝石粒少量、やや硬。

SG10SK-566

1 黒褐色 暗褐色土塊多、黒褐色土塊に混じり、やや硬、人為的崩壊土少。

SG10SK-567

1 黒褐色 ローム粒多、ローム小塊やや多、硬。
2 暗褐色 ローム小塊・粒多、黒褐色土少、硬。

SG10SK-568

1 暗褐色 ローム塊・小塊・粒多、褐色土少、軟。
2 黒褐色 ローム小塊・粒少、軟。
3 黄褐色 ローム小塊・粒主体、黒褐色土少、硬。
4 黒褐色 土塊に硬。

SG10SK-572

1 暗褐色 表土、耕作された土と思われる、しまりやや強、粘性有。
2 黒褐色 ロームの塊のみ、しまりやや強、粘性有。

SG10SK-573

1 黒褐色 ローム塊・黒褐色土・黒色土などの覆土に、しまりやや強、粘性有。

SG10SK-576

1 暗褐色 暗褐色土塊やや多、ローム粒少、やや硬。

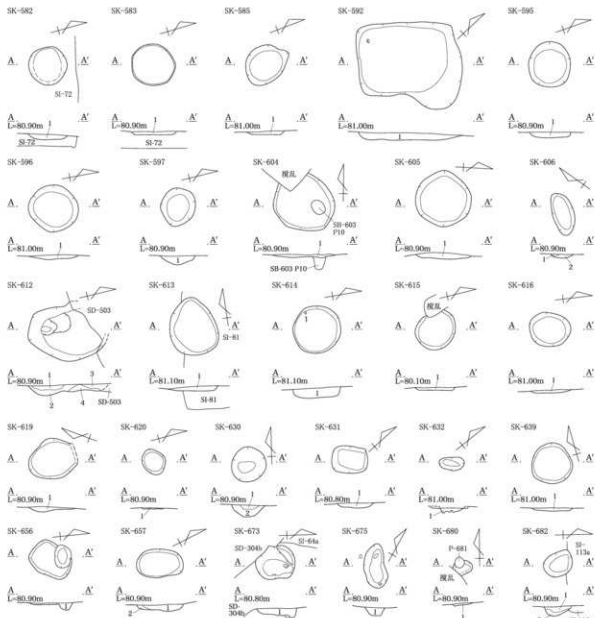
SG10SK-578

1 暗褐色 ローム小塊・粒少、やや硬。

SG10SK-581

1 暗褐色 ローム小塊・粒やや多、やや硬。

第 234 図 権現山遺跡 SG10 区 時期不明の土坑 (6) 遺構

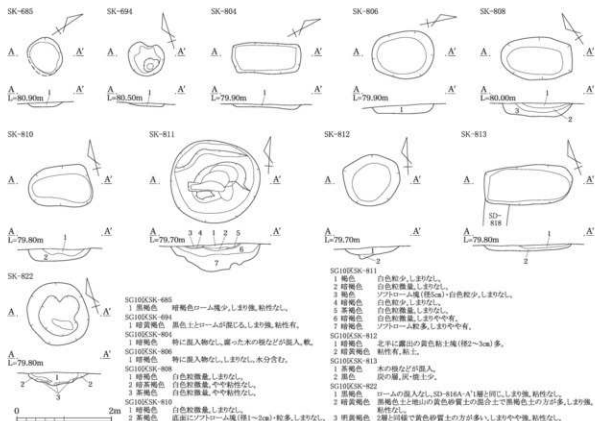


- SG105SK-582
1 黒褐色 ローム微粒・ローム塊(径5.5~6cm)多,しまりやや弱,粘性有。
- SG105SK-583
1 黒褐色 ローム微粒極少,しまりやや強,粘性有。
- SG105SK-585
1 黒褐色 堆山の黒褐色ロームが極少量,しまりやや強,粘性有。
- SG105SK-592
1 暗褐色 ローム塊(径1cm)・暗褐色土・原色土の埋土,しまりやや弱,粘性有。
- SG105SK-595
1 黒色 ローム小塊・粒土・粘土・粘粉微量,しまりやや強。
- SG105SK-596
1 黒色 ローム小塊・粒土・粘土・粘粉微量,しまりやや強。
- SG105SK-597
1 黒色 ローム小塊・粒土・粘土・粘粉微量,しまりやや強。
- SG105SK-604
1 暗褐色 暗褐色膠膜層の小塊若干,やや硬。
- SG105SK-605
1 暗褐色 ローム小塊・粒土・粘土・粘粉若干,やや硬。
- SG105SK-606
1 黒褐色 ローム小塊・少,ローム粒若干,やや硬。
- SG105SK-617
1 暗褐色 炭化微粒少,しまり弱。
2 暗黄褐色 フアローム塊(径1~2cm)多,しまり有,粘性有。
3 暗褐色 フアローム粒多,フアローム塊(径1cm)少,しまり有。
4 黄褐色 フアローム塊(径1cm)・粒多,しまり有,粘性有。
- SG105SK-613
1 暗褐色 若干のローム・火山灰などが混在する,しまり強,粘性なし。
- SG105SK-614
1 暗黄褐色 暗褐色土・ローム多,黒色土塊・暗褐色土塊少,しまりやや弱,粘性有。
- SG105SK-615
1 暗褐色 ローム微粒・暗黄褐色塊少,しまり強,粘性有。

- SG105SK-616
1 暗褐色 ローム微粒少,しまりやや弱,粘性有。
- SG105SK-619
1 暗褐色 ローム微粒少,しまり強,粘性有。
- SG105SK-630
1 暗褐色 P-611の層と同質,しまりやや弱,粘性有。
- SG105SK-631
1 暗褐色 ローム微粒少,しまりやや弱,粘性有。
- SG105SK-632
1 暗褐色 ローム粒少,硬くしまる。
2 暗黄褐色 ローム塊・小塊・暗褐色土(堆山膠膜層)塊多,硬くしまる。
- SG105SK-633
1 暗褐色 フアローム塊・小塊やや多,しまり弱,軟かつたので硬い暗褐色のもの。
- SG105SK-632
1 暗褐色 ローム粒・暗褐色土(堆山膠膜層)塊やや多,今市礫石粒極少,やや硬。
- SG105SK-639
1 黒褐色 粘質土,明瞭な黄色のフアローム塊若干,とても硬,しまり強。
- SG105SK-646
1 黒褐色 ローム小塊・小塊・粘粉等に多,やや硬,人為埋戻土。
- SG105SK-657
1 黒褐色 ローム小塊やや多,ローム土・今市礫石粒少,やや硬。
2 暗褐色 1層土(深さ約1m)・ローム(今市土)若干含む。
- SG105SK-673
1 黒褐色 ローム塊・小塊・粒少,やや硬。
- SG105SK-675
1 暗褐色 フアローム塊少,ローム粒極少,やや硬くしまる。
- SG105SK-680
1 暗褐色 暗褐色土(堆山膠膜層)塊多,硬くしまる。
- SG105SK-682
1 暗褐色 ローム小塊・粘土微量,しまりやや強。
2 暗黄褐色 ローム小塊・粒少,ローム中量微量,しまりやや弱。

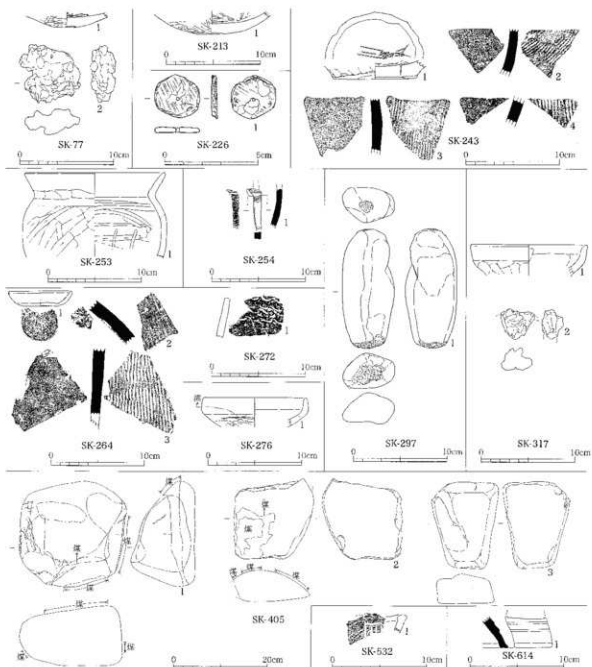
第235区 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑(7) 遺構

第5章 権現山遺跡 SG10区



第 236 図 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑 (8) 遺構

SK-639	22.5-18.0	円形	遺存なし	0.88	0.86	0.08	単層
浅い土坑。調査時の状況によると、周囲のピットとは土質が少し異なる。遺物なし。							
SK-656	22.5-17.5	楕円形	遺存なし?	0.93	0.70	0.18	N-29°-E 単層 人為埋没
周囲の存在ピット1つを伴うと観察されているが、本当に伴うかどうかは不明確。遺物なし。							
SK-657	22.5-17.5	楕円形	遺存なし	0.10	0.60	0.21	N-40°-E 人為埋没?
掘土にロープ遺存を含むので人為埋没の可能性もある。遺物なし。							
SK-673	21.5-18.0	不整形円形	SI-64・SD-30(4b)と重なり	0.84	0.66	0.23	単層
古墳中期のSI-64・SD-30(4a・30(4b))を削ってから確認したので、SI-64、SD-30(4b)より古いと考えられるが、古墳中期以前の土坑の可能性もある。縄文土層と隣が1点出たしたが、掘土がやや軽いためので縄文時代とは考えにくい。							
SK-675	22.0-18.0	楕円形	遺存なし	0.95	0.43	0.22	N-47°-W 単層
溝の一部になる可能性もある。縄文土層1片と土器部残片2片出土。							
SK-680	23.0-17.5	不整形円形	P-681より新	0.42	0.30	0.10	N-85°-E 単層
時期不明(または中世)のP-681の土層を浅く切る。南西部が近代以降の農業開墾跡(イモヅ)に切られる。浅い土坑。遺物なし。							
SK-682	22.5-19.0	不整形	SI-113aより新	0.66	0.54	0.23	N-10°-E 自然埋没状況
古墳中期のSI-113aを切るので古墳中期より新しい。遺物なし。							
SK-685	22.5-18.0/22.5-18.5	楕円形	遺存なし	0.82	0.72	0.12	N-83°-W 単層
古墳中期のSK-673・685と重なり、南東部を埋没し少し切られている。古墳中期(白)の土器部残片少量出土。							
SK-694	22.0-19.0	不整形円形	遺存なし	0.80	0.70	0.10	単層
縄文遺跡古墳のトレンチで土層が剥がれたと見られる。遺物なし。							
SK-804	17.5-19.0	長方形	遺存なし	1.40	0.64	0.12	N-29°-E 単層
東側傾地にある土坑。古墳中期を主体とする土器部小破片3片があるが、西側にある古墳時代のSK-801・803から進入したとも考えられ、この土坑に伴うとは断定できない。							
SK-806	17.5-19.0	楕円形	遺存なし	1.33	1.03	0.22	N-30°-W 単層
東側傾地にある土坑。古墳中期を主体とする土器部小破片が5点と縄文土層が1片あるが、この土坑に伴うとは断定できない。							
SK-808	17.5-19.5	楕円形	遺存なし	1.55	0.94	0.30	N-60°-W 自然埋没状況 白色和あり
東側傾地にある土坑。遺物なし。							
SK-810	17.5-19.5	楕円形	遺存なし	1.38	0.86	0.28	N-77°-W 自然埋没状況 白色和あり
東側傾地にある土坑。遺物なし。							
SK-811	18.0-19.5	円形	遺存なし	1.92	1.81	0.60	自然埋没状況 白色和あり
東側傾地にある深い土坑。古墳中期の土器部高杯2片と縄文土層1片がある。							
SK-812	18.0-19.0/18.0-19.5	円形	遺存なし	1.24	1.10	0.28	単層
東側傾地にある土坑。遺物なし。							
SK-813	17.5-19.5	長方形	SD-818より新	1.80	0.84	0.15	N-69°-W 掘土・埋・混あり
東側傾地にある土坑。平面観察により、時期不明のSD-818を切る。遺構内の下部に腐・灰・燼土がある。ごく新しいゴミ穴の可能性もある。遺物なし。							
SK-822	18.5-19.0	円形	遺存なし	1.40	1.28	0.27	単層
東側傾地にある土坑。東側に時期不明のSD-816と隣土が共通する。遺物なし。							



第237図 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑(9) 遺物

第142表 権現山遺跡 SG10区 時期不明の土坑 出土遺物

番号 種類 説明	大きさ (cm・g)	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
SG10区 SK-77				
1 土師器 鉢	高 1.5 底 1.6	外底面はナデで凹底状。外面体部ヨコヘラズリ。内面は多方向ヘラナデの後に多方向の中や線らなヘラミガキ。	5YR4/6 赤褐 や中緑黄 白・透明～細粒 や少多、灰色塵少 硬質	SK-77 または SK-253 出土 底全周 SK-77-SK-253一括
2 柳形銅泊洋 (柳小)	長 6.1 幅 6.4 厚 2.7 重 61.0	平面・正多角形をした柳小の柳形銅泊洋。定用品で左側部の一部から下面にかけてが木筒筒による凹凸を生じている。上面は中央部に向かいわずかに凹み。右側の肩部寄りから手状に盛り上がっている。側部から下面は出入りが激しく、全体的には浅い柳形となる。点々と伊吹土の磁粉を残す。上面左上手側がわずかに磁粉が強い。銅泊凹連遺物構成No.71。	赤 明褐色 緑 灰褐色 磁黄褐色 3 メタル度 なし	底上6cm 完形 1
SG10区 SK-213				
1 土師器 鉢	高 1.5 底 3.2	外底面は1方向ヘラズリで浅い凹底状にした後に少しヘラミガキする。外面体部下半はヨコヘラズリ後に繰らな多方向ヘラミガキ。内面は多方向ヘラナデ後に繰らなナナメヘラミガキ。古墳中期の遺物が疑人。	10YR7/4 明黄褐 や中緑 白・赤磁粉少 や中軟質	底全周

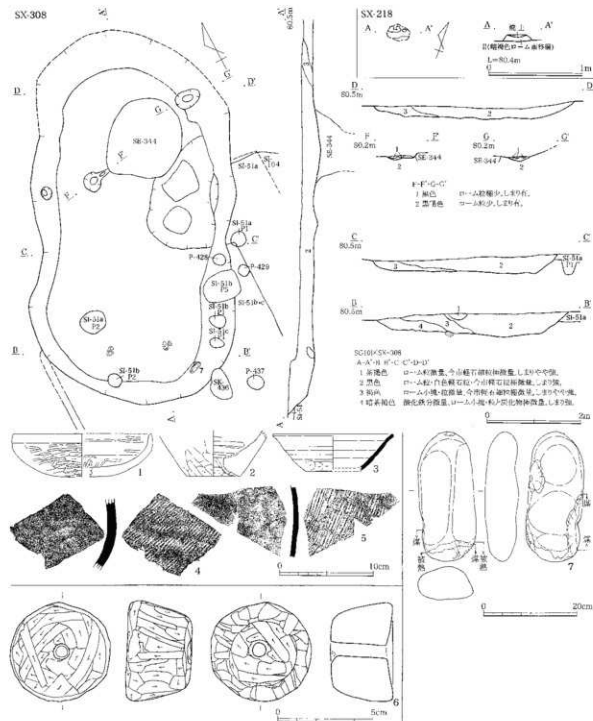
第5章 権現山遺跡 SG10区

SG10区SK-226					
1 石製竪穴	長 2.88 幅 2.37 厚 0.30 重 2.85	両端ともに1方向へ傾斜する。おそらく左側の面から穿孔し、約孔径1.55-1.60m、銃孔径1.40-1.55m、両端ともに孔の周辺が薄く広く開離している。側面の形削加工は刃部を持つ工具で切削した後、斜位の粗い磨削を行う。形削の切刃および磨削面を側面にそのまま残す部分も多い。古墳中期の遺物が入る。	SGY4/1 硝子や灰 部埋の発達した継ぎで軟質な 滑石片岩	中央底上5cm 完形 1	
SG10区SK-243					
1 土師器 直	高 残 1.9 底 8.8	厚く重い。外面と外面側面が平直で、底外側に粘土を貼り付けて平坦に仕上げたまたはヘラナデし凹状にする。内面は丁寧なナデで、底縁部の乾燥時に付いた亀裂帯をヘラ先でナデで補修しようとした痕跡がある。古墳中～後期の遺物の可能性が高い。	10YR6/4 土に近い黄褐色 やや粗い・黒・透明細粒～粗粒 やや少、白・赤褐色～粗粒少 硬質	西部底直上 底全周 10	
2-3 土師器 直		2と3は同一個体。本日平の溝を削った明き板で外面～斜位平明き 2は土師器の縁部。カークする木目が薄く見える。3は縁内の外面側面 中央が陥凹後に磨滅。古墳中期(白)の遺物が入る。	5B5/1 黄灰 やや粗粒・粗粒～粗粒やや多 硬質	北西部底上3cmの2片 が同一個体 削部一部 5, 6	
4 土師器 直		外面は縦位の平行明。内面は当該面を磨り消して無文。SK-264の磨削跡 と同一個体。古墳中期の遺物が入る。	10Y6/1 灰 継ぎ 白粒～粗粒少 硬質	北東部底中央 削部1 北東部土	
SG10区SK-253					
1 土師器 直	口 復 14.8 高 残 8.9 最大 15.4	外面は傾位に斜位のヘラナデと一部にヘラズリ。内外面の口～頸部にヨコナデ。内面は傾位に横位のヘラズリとヘラナデ。肩部にヨコウラミガキ。古墳中期の遺物が入る。	10YR6/3 土に近い黄褐色 やや粗い・黒粒と白・透明 粗粒～粗粒多、白・赤褐色 やや硬質	口1/6頂、頸1/4周 一括	
SG10区SK-254					
1 遺物部 二重底	高 残 3.9	体部中央に1mm幅の底突を1本持ち、その下側に5本の工具で右から左へ向かって縦向きに交互に彫文する。体部上半と下半に幅5mm以上の長方形の透窓が並ぶ。SI-50-64aとSD-201a出土破片と同一個体の可能性が高い。古墳中期の遺物が入る。	10Y4/1 灰 やや粗粒 白粗粒微量 やや硬質	SK-254周辺の遺構確認 削部 SK-254付近上面	
SG10区SK-264					
1 土師器 小皿	口 復 6.6 高 1.6 底 3.6	調整・切り磨し時とモロク右回転(時計回り)。回転系切り後、外面中央から平行線状の2本の主筋。系切りで浅く凹面になった底中央に着いた溝の痕跡を以て確認したと見られる。軸線の間に縦方向の痕跡と見られる。中心に凹SK-92から入った可能性あり。	10YR8/3 浅黄褐色 やや粗粒 やや硬質	北西部。SK-47中央に同一個体の小片1点 口1/6頂、底3/4周 SK-204北下、SK-47ドレ	
2 土師器 直	高 残 4.5	外面は本日平の溝を削った明き板で、浅い平行明きの後に8面以上の工具で縦位平行線を削くが、明線に見えるのは3本程。内面は同心円状の粗粒。縦面は灰色と土に近い褐色の互層状の色調。古墳時代土師SK-275と同一個体の破片あり。古墳時代のSD-304bと中～近頃のSD-263出土破片ともやや相違する。古墳後期の遺物が入る。	7.5YR5/3 土に近い明褐色 白・赤粒～粗粒やや多 灰色・透明粗粒と黒粗粒少 硬質	西部削部1片 西部削部1片	
3 土師器 直	高 残 8.7	外面は本日平の溝を削った明き板で、外面平行明き。破片の中心に縦方向の浅い溝が見える。明き板の端部を示すかもしれない。内面は横位のナデにより無文。SK-243の磨削跡と同一個体。古墳中期の遺物が入る。	N7/1 灰白 粗粒～粗粒少 硬質	北西部削部1片 北平	
SG10区SK-272					
1 縄文土器 深鉢	高 残 4.1	外面に横位の縦筋縄文が3段分そろって彫文されるので、同じ原料に3箇所以上の面をそれぞれに彫文したと見られる。軸線の間に縦方向の痕跡と見られる。凹みは傾位に彫文されたもので、2段1Rの可能性が高い。凹みは丁寧なナデナデ。	10YR5/4 土に近い黄褐色 粗粒・白・赤粒・透明粗粒～粗粒と灰色母粒片やや多、継ぎなし、やや硬質	一括	
SG10区SK-276					
1 土師器 杯	口 復 11.0 高 残 3.1 最大 11.3	外面体部は上位を斜ナデで磨滅み面を残し、下位をヨコウラミガキ。内外面の口縁部にヨコナデ。内面体部はヨコウラミガキでヨコナデ。外面上半と内面下半に溝を上げ、古墳後期のSK-47から入った可能性が高い。	10YR4/2 灰黄褐色 粗粒・黒・赤・透明粗粒少 硬質	北西部底上2cm 口1/6頂 1	
SG10区SK-297					
1 石製 磨石	長 12.5 幅 5.5 厚 3.7	縁部で断面が隅丸三角形形状の自然産物そのまま利用。両面に磨打痕があり、下側のほうがよく利用されて自然産物も見られる。焼熱痕や付着物は少ない。重量299.7g。	2.5Y7/2 灰黄 1～2mmの補修質が口立～端部で硬質な流紋岩	西部底上2cm 完形 1	
SG10区SK-317					
1 土師器 杯	口 復 12.2 高 残 3.2	厚くやや磨滅が難念のため、彫製の小形土器とも見られない。外面は体部に少ナデナデとナメナデ。口縁部ヨコナデ。内面は横位の傾位ナデまたはヘラナデによる凹差を少し残したままで口縁部にヨコナデ。古墳時代後期または後期末期の遺物が入る。	5YR5/8 橙 継ぎ 白・黒・赤・透明粗粒少 硬質	遺構確認面 口1/8頂、体1/6周 上面	
2 埴形磨石 厚 (極小)	長 残 3.2 幅 残 3.6 厚 2.4 重 17.3	上下面と下側面が平直で、縁部は細小の埴形磨石の肩部破片。下側の側面2面が破面となっている。上半部は粘土質の母土体で一部に焼熱した小塊を含有している。右側面はトランプ突出突。下面は浅い凹差となっている。磨石用途構成物No.72。	表 明褐色 地 黄灰色 継ぎ 3 メタ粒度 変し	破面2面	
SG10区SK-405					
1 直	長 22.7 幅 22.2 厚 12.7 重 8650.0	自然産物の表面全体に広く傷が痕状に付着。ただし、開示した面の表面には少なく、外周部だけに少し付く程度である。覆付部分に接する凹部は被焼して白くかた褐色色味。同小片上部が1箇所磨滅しているが、その痕跡はほとんど見られる。加工～使用履歴は見られない。	2.5Y6/1 黄灰 継ぎで硬質な流紋岩	底上1cm 完形 3	
2 直	長 17.0 幅 16.9 厚 6.6 重 2729.6	口部で中央部が厚い自然産物。外面の約半分程はおそらく地質によって磨滅。左側の面は全体に傷が付着してターブルにも見える。同じ上側の面にもこの傷が見え、同じ左側の面には傷が全くない。右側の面には傷がごくわずかにみられ見えない。	2.5Y5/1 黄灰 継ぎで硬質な安山岩	西部底上2.1cm 一部欠 1	
3 直 (行台)	長 18.3 幅 14.2 厚 6.2	扁平な自然産物で、特に右側の面は平坦面が見え、硬質な石片であるため使用面とほぼ見えない。加工痕や付着物も見られない。重量2611.4g。	10Y6/2 オリーブ 石製の珪晶石が口立～継ぎで硬質な流紋岩	西部底上15cm 完形 2	
SG10区SK-532					
1 縄文土器 深鉢	高 2.0	ごく緩やかな流紋1Rで、破頂部が想定2箇所もの山形。外面は横方向に断面を削ってから2段1Rの縦で横位に縄文を施し、やや深い沈降で縦線4本を縦線1本を斜め合わせて4支線を削く。内面口縁直下に横位の凹線。縄文は縦位の縦文2式で、異人形の可能性がある。	7.5YR5/3 土に近い明褐色 透明粗粒～粗粒と白・黒粗粒～やや多		
SG10区SK-614					
1 遺物部 直	高 残 3.3 幅 残 約 33	傾位～縦文2式で区画した上側に、底辺約4cmの透窓を外面側から切り込、開口部で覆っている。外面に暗緑色の自然産物が多い。SI-111等で出土した破片と同一個体。	5Y6/1 灰 継ぎ 白粒～粗粒少 硬質	西部底上9cm 削部1/24周 1	

第31節 時期・性格不明の遺構

SG10区 SX-218 (第238図右、写真図版150)

SG10区南部の19-17グリッドにある焼土遺構。重複する遺構はない。古墳時代竪穴建物SI-28とSI-40の中間で、北西には古墳時代の円筒形土坑SK-217がある。径17×24cm、厚さ2cmの範囲で遺構確認面に焼土がまとまっている。掘り込みの浅い遺構が耕作・攪乱で消滅し、その底面付近にある焼土が残ったものである。遺物はない。



第238図 権現山遺跡 SG10区 SX-218 遺構 SX-308 遺構・遺物

SG10 区 SX-308 (第 238 図上段)

SG10 区中央部の 19-18 および 20-18 グリッドにある。攪乱の可能性が高い、時期不明の掘り込みである。覆土の締まりが強いので、調査開始当初は大形の竪穴状遺構の可能性も考えた。しかし、底面レベルや覆土層が北側の攪乱(幅約 3m × 長さ約 10m の南北に長い攪乱で、ビニールやプラスチックを含む)へ連続しているため、攪乱と判断した。古墳時代の SI-51・SI-104・SK-436、中世井戸 SE-344、時期不明の P-428 の上部を切る。長楕円形で底面が比較的平らな掘り込みで、東西 4.36 × 南北 7.94m、深さは 20 ~ 30cm 程度で、壁の残りが高い南側では約 50cm。底面に浅いくぼみが複数見られる (F・F' と G・G')。覆土は不自然な土層なので人為的に埋め戻したとも考えられる。黒色土 (2 層) と褐色土 (3 層) の違いが明瞭で、南西部・西部・北西部に分布する褐色土 (3 層) を切って掘り返した後に黒色土 (2 層) で東部が埋没した可能性もある。白色テフラ粒や地山から混入した今市軽石粒を含み、2 層中の白色粒は周辺の古墳時代遺構覆土に由来するのかもしれない。出土遺物は周囲の古墳時代集落から混入した小片 (1・2・4・6) で、重複する SI-51a ~ c や SI-104 から流入したものが多く見られる。また、9 世紀頃の須恵器破片もわずかに含む (3・5)。5 は南方へ離れた SK-235 などと同一個体の平安時代須恵器土。土師製の紡錘車 (6) は古墳時代集落からの混入品と見られる。SG10 区 SI-59 などに石製紡錘車がある。図示以外の土師器合計 271 片・2,829g の内訳は、杯 85 片・411g、高杯 10 片・80g、鉢 23 片・231g、小形壺 6 片・91g、壺蓋類 144 片・1,958g、甕 3 片・58g。

第 143 表 権現山遺跡 SG10 区 SX-308 出土遺物

番号 種類 図録	大きさ 縦・横・厚	特 徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 径 14.6 高 径 4.5 最大 15.0	外面は底部に 1 方向と体部に横位ヨコヘラズリ、口縁部ヨコナデ、体部ヨコヘラズリ。内面は口縁部ヨコナデ後に稀らなヨコヘラズリ。体部は中位ヨコヘラズリ。下位タテヘラズリ。	7.5YR6/4 灰色の煙 やや軽い。灰色の胎土と白・赤 粒状やや多。白・黒・透明細 粒少。やや軟質	口 1 片 埋 5-308 6
2 土師器 小形甕	底 径 5.8 最大径 11.3 孔 径 1.5 ~ 2.0	底面が厚い。外面は体部ヘラナデ後に上端部ナメヘラズリ。内底面はヨコヘラズリ。孔縁面はナメヘラナデ。内面はヨコヘラナデ。古墳中～後期の遺物が混入。	7.5YR6/6 暗 やや軟質。白・赤粒～細粒や や多。黒・透明細粒少 破質	底 1/4 埋 5-308 一括
3 須恵器 杯	口 径 12.8 高 3.9	回転ヨコナデ時のロクロは右回転(時計回り)。外面の体部中位に強いロクロ目を意図的に残している。外面の体部下部に手持ちヨコヘラズリ。外底面の調整技法は不詳。平安時代の二和器製品が混入。	5Y5/1 灰 やや軟質。白粒～細粒やや多。 透明細粒少 やや軟質	B・B' と C・C' の間で A・A' より西 口 1 片 埋 5-308 西中面
4 須恵器 甕		外面は斜位の平行叩き後に間隔を空けたヨコナデ。内面は木製の無文当具痕が少しかだけ見られる。古墳時代(?) の遺物が混入。	NS/0 灰 やや軽い。白粒～細粒多。白 粒と透明細粒少 破質	胴上半一部 5-308 1
5 須恵器 甕		外面は木目平行の溝を彫った叩き板で斜位の平行叩き。内面は無文当具痕の後に軽いタテナデ。SK-235 品と同一個体の平安時代遺物が混入。 注記 IS-308 西北、SD-226 2	5Y3/1 オリーブ黒 細密。白粒粒と赤・黒色溝出 粒やや多 破質	実在しない溝(SD-226) と注記のある 1 片と組合 照合片。注記は左欄
6 土師器 紡錘車	上面 5.2 ~ 5.3 下面 3.4 ~ 3.6 厚 3.5	円筒台形の粘土塊から丸棒を引き抜いて孔を作り、全周をヘラズリ調整した後に焼成している。孔径は上面側で 7.2 ~ 7.6mm、下面側で 6.7 ~ 7.2mm。重さ 82.2g。	7.5YR7/6 橙 やや軟質。白・黒細粒多。赤 粒状と透明細粒少 破質	西半部の南面 完形 5-308 西南
7 甕	長 27.4 幅 11.6 厚 7.2 重 3513.4	断面形・平面形ともに楕円形の自然甕。2 箇所に大きな刺離面がある。この刺離面以前に因の手前縁部が鋭熟して、傷も多く見られる。また、この刺離面にも傷が明瞭に付着している。	2.5Y5/2 暗黄青 細密で硬質な流紋岩	底 1.4m 完形 5-308 5

報告書抄録

ふりがな	とうや・なかじまちくいせきぐん 14 ごんげんやまいせきなんふ・いそおかいせき
書名	東谷・中島地区遺跡群 14 権現山遺跡南部(SG2・SG5・SG9・SG10・SG15区)・磯岡遺跡(SG9区)
副書名	都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	14
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第360集
編著者名	内山敏行(編)、後藤信祐・塚原孝一・谷中隆・内山敏行・平井昭司・穴澤義功
編集機関	財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦 2013年3月28日(平成25年3月28日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯		東経		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
			°	'	°	'			
ごんげんやま 権現山	とちぎけん、うつのみやし、とうやまち 栃木県宇都宮市東谷町 あさしほの、あさすまむら 字下原・字杉村。 すなまきふもとひだ 砂田町字原田、 かわうちんぐみのかのかわまち 河内部上三川町 おのあざいそのかあざにしや 大字磯岡字西谷	09201	455	36度	139度	SG2区 19951204 ～ 19960318	7,000	東谷・中島 土地区画整 理事業に伴 う事前調査	
				28分	54分	SG5区 19980206 ～ 19990326	7,000		
				55秒	20秒	SG9区 19991214 ～ 20000324	4,800		
				(SG5区)	(SG5区)	SG10区 19990423 ～ 20000324	13,400		
				(世界測地系)	(世界測地系)	SG15区 20010208 ～ 20010323	900		
いそおか 磯岡	とちぎけん、かわうちんぐみ、かののかわまち 栃木県河内部上三川町 おのあざいそのかあざにしや 大字磯岡字西谷	09301	4360 (県番号)	36度 28分 49秒	139度 54分 26秒	SG9区 19991224 ～ 20000324	600		
				(SG9区)	(SG9区)	(世界測地系)			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
権現山 (SG2・SG5・ SG9・SG10・ SG15区)	集落	縄文	竪穴建物1(晩期)、土坑6(早・前 ～中期)	縄文土器、スタンプ形石器、礫器、石鏡、磨製石 斧、スライパー、磨石、石皿、石核	早・前～中・後・晩期土器
		弥生	土坑1(中期)	弥生土器・有製土器具(石鏡)	中期後半
		古墳	竪穴建物123(畿治遺構1を含む)、 円筒形土坑12、土坑117、井戸1、 柱穴状土坑17、溝20、遺物集中地点 1、性格不明遺構1	土師器、須恵器、陶質土器、焼粘土塊、石製品(硯 蓋品・管玉・白玉・黒玉・粘漆器・粘板石銅片)、 土玉(丸玉・勾玉・環玉)、耳環、鏝・鏝・刀子 ・キリガ、石鏡、銅物箱、砥石、台石、金床石、砥石、 磨石、刀子、鉄滓、杵型、カマド構築材	図録の周囲の集落
	区画	古墳	外郭溝3、横溝1	土師器、刀子	方形欄内の南と北に区画溝
	集落	奈良・平安	竪穴建物1、道路側溝2、土坑2	土師器、須恵器	道路遺構は推定東山道
		中世	井戸6、土坑2、柱穴状土坑82	土師質土器、青磁、陶器、常滑滑陶器、磨漆、曲 物箱、滑石製品	13～14世紀中心
	中～近世	土坑1、溝4	土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器		
	近世	土坑1、溝4	中～近世土器、陶器、銅器、青木通貨、煙管		
	時期不明	擬立柱建物跡4、横溝1、井戸9、溝 33、集石遺構1、土坑264、柱穴状 土坑206、性格不明遺構3			
磯岡 (SG9区)	集落	古墳	竪穴建物2	土師器、須恵器	
		奈良	溝2、土坑5、焼土集中地点1	須恵器	

要約	<p>田川の東岸で、開析谷をはさんだ西側に権現山遺跡、東側に磯岡遺跡が存在。権現山遺跡の縄文時代土坑6基は早期条痕文・燃系文・前期末～中期初・阿玉台Ⅲ～加曾利E式を出土するものを含む。大洞C2式期の竪穴建物1棟、弥生中期後半の土坑1基、古墳前期は少量の土器が低地部で出土。古墳中期後葉の居館は東辺長47.1mの方形欄列の東端部を調査し、南側と北側に区画溝を伴う。古墳中期～終末期の集落は、中期の畿治遺構2棟を含む207棟を調査し、今回は南半部の123棟(畿治遺構1棟を含む)や中期後葉の低地土坑群、中期末葉の円筒形土坑、中～後期の溝などを報告した。加耶陶質土器、初期須恵器、二重甕等が出土。古代の竪穴建物は単独の1棟だけがあり、また推定東山道側溝の一部分を調査。中世は13～14世紀頃の井戸6、土坑2、柱穴状土坑群があり、時期不明の井戸も中世の可能性を持つ。近世は方形区画溝がある。</p> <p>磯岡遺跡は、古墳時代中期竪穴2棟(1棟を建て替えたもの)を調査し、古墳中期後葉～終末期の集落(竪穴建物計160棟)の西端部にある。</p>
----	--

東谷・中島地区遺跡群埋蔵文化財調査報告書一覧

- | | | |
|---|-------------------|---------------|
| 1 「磯岡遺跡（1区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第229集 | 1999（平成11）年3月 |
| 2 「砂田遺跡（1区・2区・3区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第265集 | 2002（平成14）年3月 |
| 3 「推定東山道関連地区（権現山遺跡SG1区・杉村遺跡SG1区・磯岡北遺跡SG3区・SG4区・SG6区・SG7区・SG8区・SG11区・SG13区・SG14区・西刑部西原遺跡2区・6区・7区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第274集 | 2003（平成15）年3月 |
| 4 「琴平塚古墳群（西刑部西原遺跡1・2・6区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第283集 | 2004（平成16）年3月 |
| 5 「立野遺跡」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第290集 | 2005（平成17）年3月 |
| 6 「磯岡遺跡（2～7区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第292集 | 2005（平成17）年6月 |
| 7 「磯岡北古墳群（磯岡北遺跡SG12区・SG16～18区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第299集 | 2006（平成18）年9月 |
| 8 「砂田遺跡（4～6・18・19・23・24区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第305集 | 2007（平成19）年3月 |
| 9 「中島笹塚古墳群・中島笹塚遺跡（1～8区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第311集 | 2008（平成20）年3月 |
| 10 「権現山遺跡北部（2～4区・SG1区）・杉村遺跡（GN1区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第331集 | 2010（平成22）年3月 |
| 11 「砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第337集 | 2011（平成23）年3月 |
| 12 「西刑部西原遺跡（旧石器・縄文・弥生時代編）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第354集 | 2012（平成24）年3月 |
| 13 「砂田遺跡（10区・12区・13区・16区・27区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第355集 | 2012（平成24）年3月 |
| 14 「権現山遺跡南部（SG2・SG5・SG9・SG10・SG15区）・磯岡遺跡（SG9区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第360集 | 2013（平成25）年3月 |
| 15 「砂田遺跡（7・8・9・11・14・15・17・20～22・25・26・28～42区）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第361集 | 2013（平成25）年3月 |
| 16 「西刑部西原遺跡（古墳・奈良・平安時代編）」 | 栃木県埋蔵文化財調査報告第362集 | 2013（平成25）年3月 |

栃木県埋蔵文化財調査報告第360集

東谷・中島地区遺跡群14

権現山遺跡南部（SG2・SG5・SG9・SG10・SG15区）・

磯岡遺跡（SG9区）（第1分冊）

—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

発行 栃木県教育委員会

宇都宮市埴田1-1-20

TEL 028(623)3425

財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町1-8

TEL 028(643)1011

平成25年3月28日発行

編集 財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫474番地

TEL 0285(44)8441

印刷 株式会社 泰明グラフィクス
